
ポケットモンスター ～The Legend of Master～

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ～The Legend of Master～

【Nコード】

N63670

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

ポケモンと話す力を持つ少年——レイジは、数多くの仲間と出会って成長していく。

しかし、同時に彼は世界の……人間の醜さをも知っていく。

何が正しいのか、何が間違っているのか。

定める事などできないこの世の善悪を見つける為に、彼は歩む。

——その果てに、何が待っているようにも。

前書き及び注意点

はじめまして、今回こちらで小説を書かせてもらう事になりました、マイマイと申します。

私が子供の頃から好きで、今でも好きなポケモンの小説を書くことと決めたのですが……はっきり言って素人なのでどう頑張っても楽しめる小説が書けるかどうかわかりません。

ですが素人なりに精一杯頑張っていきたいと思いますので、感想等を書いていただけると嬉しく思います。

それと、この小説はなるべくオリジナルを目指していきますが、ゲームやアニメ沿いの展開になる可能性もあります、ご了承ください。

では、次の話から本編をスタートします。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです!!

第1話 く旅立ちの朝、レイジとカグヤく

「……………」

朝の日差しが目に入り、強制的に目が醒めてしまった。

まだまだ寝ていたい衝動に駆られたが、今日ばかりはそう言うてはいられない。

何故なら今日は特別な日、気合いを入れて起き上がりすぐさまパジャマを脱ぎ始める。

するとその音で目が覚めたのか、隣で眠っていた私のポケモンが身じろぎしながら目を醒ました。

「エネコ、おはよう！」

すっかり覚醒した私とは違い、エネコはまだ眠いのか「ミィ………」と一声泣いた後再び丸まってしまった。

「ダメだよエネコ、眠りたいのはわかるけどもう朝なんだから！」

それに、さっきも言ったが今日は特別な日なのだから。

着替えを終え、窓を開けると――外は快晴。

「……………うん。絶好の旅立ち日和！」

そんな日和があるかはわからないけど、天気がいいのは良いことだ。

鏡の前に座り、身だしなみチェック。

背中まで伸びる栗色の髪に櫛を通し、お気に入りの白いリボンを結ぶ。

紺のパーカーに、ピンクのスカートもちゃんと着れてるよね。

旅に向く格好かどうかは微妙だけど、お気に入りの服なのだから仕方ない。

「さてと……それじゃあエネコ、行くよ？」

転がりながらもベッドから抜け出し、私の横にトテトテと移動するエネコに声を掛け、私は部屋を出た。

——今日は特別な日

私——カグヤがポケモンマスターになる為の旅立ちの日だ。

……………。

「パパ、ママ、おはよう！」

二階にある自分の部屋からリビングに足を運ぶ栗色の髪の少女、カグヤは既に席に座っていた父であるゲンジと母であるルリコに挨拶を告げた。

それに気づいた2人も、笑顔を浮かべ、カグヤに朝の挨拶を返す。

既に自分の朝食が用意されていたので、カグヤは自分の席に座ろうとして……“彼”が居ない事に気がついた。

「レイジは？」

「まだ起きてきてないから、きっと部屋で寝てるんじゃないか？」

父の言葉を聞き、困ったように眉を潜めるカグヤ。

「もう……今日が何の日か忘れてるんじゃないかしら……」

起こしてくる、そう両親に告げすぐさま二階に戻る。

自分の部屋の右隣の部屋には「レイジ」と書かれた札が掛けられており、カグヤはノックもせずに部屋に入った。

「レイジ、朝だから起きてよ」

盛り上がった布団にああやっぱり、とぼやきながら強めに揺さぶる。

しかし、レイジと呼ばれた少年はそれに反応する事なくすやすやと寝入っている。

起きなさいっ、今度は力ずくで布団を剥ぎ取る。

するとさすがに効いたのか、ぼんやりと目を開けアクアブルーの瞳がカグヤを捉えた。

「……カグヤ？」

「いつまで寝ぼけてるのよ、今日が何の日か忘れたの？」

「……………」

暫し考えるレイジ。

たっぷり数十秒という時間を用いて、彼が出した答えは。

「……何だっけ？」

「っ、あのねえ……」

つんのめりながらも頭を抱えるカグヤ、それを不思議そうに見つめるレイジ。

——ああ、この人本気で忘れてる

どうしたらこんな事を忘れられるのか、小一時間くらい問いただしてやりたいと思ったが、時間の無駄なのでカグヤは簡潔に言ってしまった。

「今日は旅立つ日でしょ？昨日だって荷物の最終チェックと一緒にやったじゃない」

カグヤの言葉に短くああ、と今思い出したかのように呟くレイジに、カグヤはため息をつく。

相変わらず、私の幼なじみはどこか頭のネジが抜けている気がする。

そう思えずにはいられなかった。

……………。

再びリビングに戻るが、既に両親は出掛けており姿は見えない。

しかし仕方ない、あの2人はオーキド博士の助手なのだ、朝が早いのは当然である。

「ほら、朝ごはん食べたら研究所に行くよ？」

「ん……………」

まだ眠いらしいレイジを引っ張り、彼の席に座らせる。

次の瞬間、彼の膝に突然ポケモンが現れた。

「…………ああ。おはようティナ」

ティナと呼ばれたポケモンは♀のラルトス。

頭を撫でられ、くすぐったそうに身をよじるが嬉しそうだ。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

手を合わせ、用意してもらった朝食を口に運ぶ2人。

「レイジ、いよいよだね」

「うん……」

「私がポケモンマスターになる為の旅が始まるんだ……一体どんなポケモンに出会えるかな？」

これからの出来事や出会いに瞳を輝かせるカグヤだが、それとは対照的にレイジは眠そうな表情を崩さないままカグヤの話を黙って聞く。

彼女が自分の夢を話す時に何を言っても聞こえなくなる事がわかっているからだ。

結局、朝食が終わってもカグヤの話は続いてしまい、家が出るのが少し遅くなってしまった2人なのであった。

……………。

「——オーキド博士、おはようございます」

「おはようございます」

「おお、待っておったぞ2人とも」

少し急いで研究所に向かうと、ポケモン学の権威であるオーキド博士が2人を出迎えてくれた。

そんな傍らには彼の両親の姿も。

「ついに旅立ちか……月日が経つのは早いものじゃのう……。カグヤはポケモンマスターとして、レイジはそんな彼女の付き添い。」

2人とも、大変な旅になると思うが頑張るんじゃないぞ?」

「もちろんです。まずはカントーのポケモンリーグのチャンピオンになって、次はハウエン、シンオウのチャンピオンになってみせます!」

(……そんな簡単に行くわけないと思うけど)

しかしそんな野暮な事は口に出さない、たとえ事実だとしても燃えてるカグヤに言うべき言葉ではないからだ。

「はははっ、頼もしいなカグヤは」

そんな娘の様子に、ゲンジは笑う。

「レイジ、カグヤの事をお願いね?」

「はい」

「ママ、それどういう意味?むしろそれは私に言うべきじゃないの?」

「だってレイジの方があなたよりしっかりしてるじゃない。」

それよりカグヤ、あなたの方がお姉さんなんだからあまりレイジ

の迷惑になる事はしないでね？」

「むう……」

反論してやろうかとも思ったが、そんな事をすれば過去の事を蒸し返されて倍返しされるのが目に見えているからだ。

「まあまあ、2人がお互いを支え合えばきっと上手くいくさ。
ではレイジ、カグヤ、お前達にこれを渡そう」

そう言いながら、オーキドは2人にモンスターボールや傷薬等がま
とめて詰まっているバッグ、そして……。

「こ、これ……ポケモン図鑑!!」

そう、それはオーキドが作り出したトレーナーにとって憧れの一品、
ポケモン図鑑だった。

「旅を続けるなら色々なポケモンに出会うじやろう、これがあれば
お前達の助けになるじやろう」

「あ、ありがとうございます!! レイジ、やったね!？」

「うん」

相変わらず淡泊な態度だが、今のカグヤには気にならなかった。

「それと、ウツギくんから珍しいポケモンを譲り受けてな、もし良
かったら手持ちにしてみぬか？」

「珍しいポケモン？」

「うむ、チコリータじゃ」

言いながら、懷からモンスターボールを取り出し投げるオーキド。

するとボールが開かれ、中から元気よくポケモンが飛び出した。

「わぁ……可愛い!!」

愛くるしい見た目のチコリータを見て、瞳を輝かせながら抱き上げるカグヤ。

そんな彼女にびっくりした表情を浮かべたチコリータだが、すぐさま笑顔になり彼女に頬ずりをする。

「じゃあ、チコリータはカグヤの手持ちだね」

どうやらチコリータ自身もカグヤを気に入ったようだし。

「いいの？」

「もちろん」

「……チコリータもいい？」

そう訪ねると、チコリータはもちろんだと言わんばかりに一声鳴いた。

「では、レイジにはこれを渡しておこう」

「これは……？」

「ヒトカゲじゃ、バトルが好きなやつでな。ここにいるよりトレーナーと一緒にあった方が良いじゃろうて」

「……………」

オーキドからボールを受け取り、ヒトカゲを出す。

これまた愛くるしい姿ではあるが、その瞳に宿る力強さはその姿とは真逆だ。

「…………よろしくね？」

頭を撫でてみると、目を細め嬉しそうに鳴いた。

どうやら、レイジをトレーナーとして認めてくれたようだ。

「…………じゃあ、君はリオン。リオンだ」

リオンと名付けられたヒトカゲは、気に入ったのかその場で小躍りを始める。

そんなヒトカゲを見て、彼は優しい笑みを向けていた。

……………。

「――それじゃあ、行ってきます」

「気をつけてな」

「ちゃんと連絡をするのよ？」

「わかってる。私だってもう15なんだから心配しないで」

「レイジ、カグヤの事お願いね？」

（全然信用ない……）

そんなに自分はレイジと比べてしっかりしていないのか、そう考えると少しショックだ。

「レイジ」

「はい」

「……お主の力は、なるべく他人に知られぬようにな？」

「………はい」

「うむ。では気をつけて行ってくるとよい!!」

『はい!!』

力強く頷きを返し、2人はマサラタウンを後にする。

カグヤの左横にはエネコが、そしてレイジの頭にはティナが。

「……………」

「……寂しい？」

急に静かになったカグヤにレイジはそう訪ねるが、カグヤは、大丈夫と返事を返す。

「正直に言うとなんぱり寂しいよ。でも……それ以上にワクワクしてる。」

ずっと夢だった旅ができるんだもん」

それにね、視線をレイジに向けてカグヤは笑顔を浮かべ言葉を続けた。

「私の隣にはレイジがいるから、大丈夫だよ」

「……………そう」

少年と少女は故郷を旅立ち、数々の出会いに夢膨らませながら歩を進める。

この先に何があるのか、何が待っているのか、それはわからない。

しかし、きっと楽しい旅になりそうだと。

カグヤは、ワクワクする感情を抑えながら旅立っていった。

第2話 くトキワシティへ、初めてのポケモンバトル!! く

故郷であるマサラタウンから旅立ったレイジとカグヤ。

目指すはトキワシティ、なのだが……。

「ひゃああああっ!!?」

「……………はあ」

カグヤは叫び、レイジはため息をつきながら全速力で走っていた。

そしてそんな2人の後ろには、ポップとオニスズメの大群が怒りを露わにしながら彼等を追いかけていた。

一体何があったのか、事の発端は少し前に遡る。

……………。

「あっ、ポップだ!」

マサラタウンを後にしてから数時間、草むらに立ち寄ったカグヤは鳥ポケモンのポップを発見した。

今までポップを見かけた事など幾度となくあるし、実際に野生のポップとバトルした事はある。

しかし今の自分は一人前ではないがポケモントレーナーだ、モンスターボールだってある以上ゲットしたいと思ってしまう。

「エネコ、いけーっ！」

そうと決まればさっそくバトルだ、肩に乗っているエネコに命令を下す。

「スピードスター！！」

エネコが放ったスピードスターは、草むらで歩いているポッポに見事中。

バトルで野生のポケモンを弱らせてから、モンスターボールでゲットする。

ポケモントレーナーの常識であり、事実カグヤの行動は正しい、が……。

「更にとっしんよ！！」

「えっ？」

倒れたポッポに向かって更に攻撃を仕掛けるカグヤとエネコ。

「カグヤ、待って」

止めようと声を掛けるレイジだったが、時既に遅くエネコのとっしんはポッポを吹き飛ばした。

「あっ……」

そこでようやくやりすぎたと思ったカグヤであったが、今更である。

「……カグヤ、やりすぎ」

「あはは……」

「君のエネコは強いんだから、スピードスターだけで充分だったのに」

「うう……」

まったくもってその通りであり、うなだれるカグヤ。

エネコもそんな彼女に謝るように身体を擦り寄せている。

しかししょうがない、誰にだって失敗はあるのだから。

「……よし、次こそはゲットする!!」

「頑張って」

「うん!」

さっきまでの落ち込んだ顔はどこへやら、すぐさま笑顔になるカグヤにレイジは優しく微笑みを返す。

ほのぼのとした良い雰囲気、なのだが……。

〈パパ〉

頭の中に響く少女の声。

カグヤのものではない、ラルトス——ティナからのものだ。

テレパシーでレイジの頭の中に直接話しかけているのだが、その声色は少し焦りの色を見せていた。

「ティナ？」

〈早く逃げた方がいいと思う〉

テレパシーでそう告げながら、ティナは先程ポップが吹き飛ばされた場所を指差す。

その意味がわからず、レイジは首を傾げるが……次の瞬間、カグヤの手を掴み走り出した。

「ひゃっ!？ ど、どうしたのいきなり!？」

「ティナがここから逃げた方がいいってさ」

「はあ？」

レイジとしてその意味を理解しているわけではないが、第六感が優れたティナが何かを感じ取ったのだ、それにおとなしく従った方が身のためである。

そして——レイジの判断は正しいものになる。

「ええっ!!?」

悲鳴に近い驚きの声を上げるカグヤ。

その視線の先には……大量のポップとオニスズメ達自分達を睨んでいる姿が。

言うまでもなく、先程の恨みを晴らそうとしているらしく、その中にはカグヤのエネコが吹き飛ばしたポップの姿も。

「ひゃああああっ!!?」

「……………はぁ」

そして、話は冒頭へと戻る。

「そ、そんなに怒らなくたっていいじゃない!!」

「向こうからしたらいきなり痛めつけられたんだから、仕方ないと思うけど……」

「そうだけど、こんな集団で襲いかかるなんて大人気ないわよ!!」

「……とりあえず、今は逃げるしかないね」

またため息をつきつつ、レイジは更に走るスピードを速める。

こうして、端から見ると愉快な鬼ごっこは暫し続いたのだった……。

……。

「――し、死ぬ」

ゼエゼエと息をしながら、カグヤはポケモンセンター内にあるソファ―に倒れ込む。

はつきり言って他の人の邪魔なのだが、今のカグヤにはそんな配慮をする余裕などなかった。

なにせトキワシティに着く寸前まで走り続けたのだ、体力に自信があるカグヤとはいえ、もう一步も動きたくないと思ってしまうのは仕方ないと言える。

「……大丈夫？」

そんなだらしないカグヤに、レイジは持ってきた飲み物を手渡す。

ありがと、と呟きながら座り直し一気に貰ったジュースを飲み干すカグヤ。

「カグヤの手持ちもジョーイさんに渡したから」

「あ、ありがと……ごめんねレイジ」

別に、そう呟きながらカグヤの隣に座りジュースを口に運ぶ。

「予定より早くトキワに着けてよかったじゃない」

「ま、まあ確かに考えようによってはそうだけど……っ、疲れた」

もう動きたくないよ、と愚痴を零すカグヤだが、レイジが放った一言によってすぐさま元気を取り戻した。

「じゃあ、ジム戦はやめとく？」

「っ、そ、そうだった!!」

(……忘れてたの?)

そんなツツコミは野暮なのでやめておく。

「こうしちゃいられないわ。レイジ、今すぐトキワジムに行くわよ!!」

勇ましく立ち上がり走り出そうとするカグヤだが、レイジはそんな彼女の腕を掴んで引き留める。

「ポケモンを預けた状態でいくの？」

「……………」

そうだった、今自分のポケモン達はセンターに預けたままだったんだ。

途端に恥ずかしくなり、僅かに頬を赤く染めながらおとなしく座り込む。

「いてもたってもいられないのはわかるけど、もう少し落ち着いた方がいいよ。」

旅だってまだ始まったばかりなんだから」

「……ごめん」

しよぼーんという効果音が聞こえてくる程うなだれるカグヤ。

「別にそこまで落ち込まなくていいのに……」

「……ううん。違うの」

顔を俯かせながら、レイジの呟きに首を横に振るカグヤ。

「何が違うの？」

「……私、旅に出れたのが嬉しくて1人ではしゃいで……レイジに迷惑かけちゃったなあって思ってた……」

「別に、迷惑だなんて思っていないさ。」

それにさっきのだって初心者なら平気でやらかすようなミスだと思っし」

実際に自分も力加減を間違えてゲットし損なう可能性だって充分にあるのだ、基礎知識はあっても実戦経験はないに等しいのだから。

だから、カグヤが自分に対して申し訳なく思う意味などない。

「だからカグヤ、そんなに落ち込まないで。」

いつもみたいに勢いで行動するカグヤの方が僕は良いと思うから」

「……なんだか微妙にフォローになってない」

「そうかな？」

「でも……ありがと。レイジは優しいね。」

私、そんなレイジが大好きだよ」

「……ありがとう」

屈託なくそんな言葉を口にするカグヤに、少しだけ困ってしまう。

カグヤという少女は、自分の容姿がいか整っているのかがわかっていない。

美しい栗色の髪、くりくりとした可愛らしい瞳。

他の部位のパーツも素晴らしく整っており、事実マサラには彼女に想いを寄せる男は何人もいた。

そんな彼女に他意がないとはいえ、そんな言葉を投げかけられればどきりとするのは当然だ。

まあしかし、これもあまり珍しい光景ではないので、すぐさま冷静になるレイジだった。

——アナウンスが自分達のポケモンの治療が終わったと告げた。

「終わったみたいだね」

「よし、受け取ったら早速ジムに行くわよ！」

「はいはい」

適当に返事を返しつつ、カグヤと共に立ち上がるレイジ。

しかし、2人はすぐさまその場で動きを止めた。

「トキワジムなら今は閉まってるぞ」

横からいきなり自分達とそう年の変わらない少年が話しかけてきたからだ。

「閉まってる？」

「ああ。ずっと前から無人になってるんだよ。なんではわかんないけど」

「そんなあゝ……それじゃあバッチが貰えないじゃない」

（貰う事前提で話を進めてる……）

よほど自信があるのか、それとも単に何も考えてないのか。

後者だな、と心の中で暴言を吐くレイジ。

「いいじゃねえか。他の街でバッチを集めれば」

「何言ってるのよ。バッチを8つ集めなきゃポケモンリーグに行けないじゃない」

だからこうして肩を落としているというのに、カグヤは恨めしそうな視線で少年を睨む。

しかし、少年の次の言葉で彼女は間の抜けた表情を浮かべた。

「お前知らないのか？ バッチは4つ集めればポケモンリーグの出場権を手に入れられるんだぜ？」

「……………へ？」

「つい最近連盟の方で決めたらしいよ、リーグ出場権を得るために必要なバッチは8つじゃなくて4つでいいって」

あっけらかんと驚きもせずに、レイジが補足説明を告げる。

「……レイジ」

「何？」

「知ってたの？」

「うん」

「……………何で教えてくれなかったの？」

「訊かれなかったから」

身も蓋もない返答。

それに怒りを覚えおもわず握り拳を作ってしまうが、必死に自分で抑えながら怒りを鎮めていく。

……ここで怒ったらバカだと思ったからだ。

「そんな事も知らないなんて……ホントのド素人みたいだな。お前」

「な、なんですって!!?」

「だってそうだろ。トレーナーなら誰だって知ってる事を知らないんだから」

確かにそれは事実であり、同時にカグヤがまだトレーナーになったばかりの素人というのも事実だ。

だがしかし、カグヤの中ではそういう問題で収まってはくれない。

馬鹿にされた、そう思ったカグヤはキッと少年を睨みながら指を突きつけた。

「なら勝負よ。私はド素人じゃないって所を見せてやるんだから!」

「……素人なのは間違いないのに」

的確なレイジのツツコミも、今の彼女には届かない。

「いいぜ。なら外で勝負だ」

「望むところよ!!」

「……………はぁ」

バチバチと火花を散らし合う2人に、レイジはあからさまに疲れたようなため息をついたのだった。

……………。

「使用ポケモンは一体、正々堂々と勝負だ!!」

「いいわよ。今更謝ったって許さないんだから!」

〈……………パパ、どうしてカグヤはあんなに怒ってるの?〉

傍らでカグヤを見守っているレイジに抱きかかえられながら、ティナはテレパシーで彼に問い掛ける。

「ド素人だって言われたのが頭にきてるからじゃないかな?」

〈事実なの?〉

「事実でも言われると頭にくる事もあるって事さ」

〈ふーん…………〉

なんだかよくわからないが、事実だからといって無闇に口にするの

はよくない。

そう思いながら、ティナはおとなしくレイジに身体を預け彼と同じく観戦する事にした。

「いくぜ——出ろ、サンド!!」

高々とモンスターボールを投げる少年——ケン。

ボールが開かれ、中から出てきたのは地面タイプのポケモン、サンド。

（エネコを出すのかな……?）

そう思ったが、カグヤは肩に乗っているエネコには何も言わず、モンスターボールを取り出した。

「チコリータ、レディーゴー!!!!」

前方に投げ、エネコではなくチコリータで戦いに挑むカグヤ。

彼女にとって初めてのトレーナーとのポケモンバトルであり、チコリータにとっても初めての戦闘である。

「なんだそのポケモン、初めて見た……」

「だってこれはジョウト地方のポケモンだもん」

「へえ……だけど、俺のサンドの敵じゃないな」

「ふんだ。そんな事言ってられるのも今のうちなんだから!!」

「カグヤ、もう少し落ち着いてバトルをした方がいいよ」

「わかってる。レイジは私が華麗に勝つところを見逃さないでよ！」

（……だといいいけど）

カグヤの声が大きかったのか、他のトレーナーや街の人達もいつの間にかギャラリーを作って観戦していた。

それを見てカグヤは少しだけ緊張した面もちになるが、すぐさま気持ちを切り替えて前を見据える。

「チコリータ、たいあたり！！」

一声鳴き、カグヤの命でまっすぐサンドに向かっていくチコリータ。

「サンド、まるくなるだ！！」

対するサンドはその場から動かず、身体を丸めてチコリータの攻撃を弾き返した。

「っ、さすがサンド……防御は高いわね。

ならチコリータ、はっばカッター！！！！」

着地したチコリータに命じ、5つのはっばカッターがサンドの防御を崩し吹き飛ばす。

（よし、効果抜群！！）

地面タイプのサンドは草タイプの技に弱い。

このまま押し切ろうと、カグヤは再びチコリータに技を命じた。

「チコリータ、もう一度はっばカッター!!」

「サンド、あなをほる!!」

しかし、チコリータのはっばカッターは虚しく空を切り、サンドは地中の中へ。

「っ、どこに……」

「右から来るよ」

「え……?」

ぽつりとレイジが呟いた瞬間。

「サンド、ずつき!!」

勢いよく地面から飛び出したサンド、しかもレイジの言った通りチコリータの右側から。

慌てて対処しようとするチコリータだが、時既に遅い。

「チコリータ!!」

まともにサンドのずつきを受け、二、三度地面に転がるチコリータ。

立ち上がるが、やはりダメージが大きかったのか苦しそうだ。

「チコリータ、頑張って!!」

「サンド、ころがれ!!」

「くっ……」

身体を丸め、勢いよくチコリータに向かって転がってくるサンド。

「そう何度も当たってたまるもんですか……!
チコリータ、右に跳んで避けて!!」

間一髪、カグヤの命令で回避するチコリータだが。

「まだだよ、カグヤ」

またしても、警告するようなレイジの声が後ろから聞こえた。

瞬間——身体を弾き飛ばされるチコリータ。

「えっ、な、なんで……」

「『ころがる』は暫く持続する技だよ、しかも時間が経てば経つほどその威力を増す」

「っ……」

そうだった、忘れていた自分が情けない。

強化されたところがるを受け、チコリータはもう限界だ。

（とにかく、打開策が見つかるまで回避するしかない……！）

「……………」

（でも、真っ正面からぶつかっても勝ち目なんかないしどうすれば……）

考えろ、考えるんだ。

必死で勝利する為の方法を考えるカグヤだが、焦りばかりが大きくなっていくばかり。

負ける——そんな弱音がつい口に出ようとした時、後ろに居た少年がぽつりと呟いた。

「——サンドは“転がってるんだよ”」

「……………」

聞こえた、確かにレイジはそう言ったのだ。

意味のない呟きなどでは決してない、彼は情けない自分を見かねてヒントを出してくれたのだ。

周りに聞こえないように呟いたのは、自分の配慮だとすぐにわかる。
しかもそんな曖昧なヒントしか出さない辺り、彼らしい。

だが――その言葉で答えは見えた。

そして、勝利を導く為の答えを命じた。

「チコリータ、少し前の地面をはっぱカッターで“掘り起こして”
！！」

「な――」

驚愕は、ケンのもの。

チコリータはすぐさまはっぱカッターを連続で発射し、自分の少し
前の地面に穴を開けていく。

それはちょうどサンドくらいの小さなポケモンならすっぱり収まっ
てしまう程の穴となり――その場にいた誰もが彼女の意図にようや
く気がついた。

だが遅い、サンドは急に止まる事などできずにそのまま向かってい
き……。

チコリータによって作られた穴に、すっぽりと収まってしまった。

何事かと攻撃を中断するサンドだったが、既にチコリータはそんな
サンドにはっぱカッターを発射していた。

上からの奇襲、しかもいまだに自分の状況がわかっていないサンドに避ける術はなく、まともにチコリータの攻撃を受け吹き飛ばされてしまう。

「サンド!!?」

倒れたサンドは目を回し、戦闘不能であるのは誰が見ても明らかであり。

「サンド、戦闘不能!!チコリータの勝ち!!」

よってこの勝負、カグヤ選手の勝利!!」

審判が戦いを終わらせる言葉を告げ、カグヤの勝利という形で幕を降ろした。

.....。

「.....勝、った?」

「うん.....勝った」

いつの間にか隣に立っていたレイジが、「おめでとう」と賞賛の言葉を送ってくれた。

そこできやうやく、自分がトレーナー同士のポケモンバトルに初勝利する事ができたと理解し。

「~~~~っ、やったーーーーっ!!!!!!」

ちよっと大袈裟だと思えるくらい喜び、その場でピョンピョンと飛び跳ねてから勢いよくレイジに抱きついた。

「……抱きつく意味は？」

「だって嬉しいんだもん!! 初めてのバトルでしかも初勝利できるなんて思わなかったから……」

「わかったよ。わかったからまずは他にやる事があるんじゃない？」

言われて気づく。

そうだった、ちゃんと自分と戦ってくれたトレーナーに礼をしないと。

ポケモンバトルは礼に始まり礼に終わる。

別に決められた事ではないが、そう思っている以上はきちんとしなければ。

「ありがとう、すっごく楽しいバトルだったよ!」

ニコニコと笑みを浮かべながら、握手をしようと右手を差し出すカグヤ。

そこに嫌味の色など微塵もなく、純粹に楽しかったのだと伝わってくる清々しさがあった。

「……ああ。俺も楽しかった、またやろうな」

そうして握手を交わすと、周りからは拍手と賞賛の声。

……一部、カグヤの容姿だけを誉める輩もいるようだが、それは無視。

それに一部レイジを睨む輩もいるが、それも完全に無視する。

さて一度センターに戻るとしよう、そう思ったレイジはその場から踵を返すが……。

「あれ？レイジはバトルしていかないの？」

チコリータをボールに戻しながら、カグヤはいきなりそんな事を口走ってきた。

「……………」

嫌です、そんなオーラと視線をカグヤに向けるレイジ。

しかし、そんなもので動じるカグヤではない。

「いいじゃない。せっかくトレーナーの人達も集まってきたんだし。ねえ、誰かレイジと戦ってくれる人はいませんか？」

「ちょ………」

勝手に話を進めないでほしいのだが、カグヤはそんなレイジの心中など知ったこっちゃないとばかりに、周りにいるトレーナーに声を

掛ける。

〈相変わらずカグヤは強引だね、パパ〉

「はぁ……」

ティナの言葉に、ため息で返すレイジ。

「……それじゃあ、ボクが戦ってあげようか」

「あっ、ホントですか？」

（僕を置いて勝手に話だけが進められていく……）

カグヤはカグヤなりにバトルを楽しんでほしいと気を遣っているのはわかるのだが、レイジはポケモンバトルをしたいわけではない。

ポケモンは好きだ、けどだからってバトルがしたいわけじゃない。

「レイジ、この人がバトルしてくれるって！」

嬉しそうにカグヤは1人の男性を連れてくる。

なかなかに整った顔立ちの美形だ、キザなポーズもそれなりに絵にはなっている。

だが——レイジは本能的に悟った。

——この人は、僕じゃなくてカグヤが目的だ

と。

事実、この男は先程から自分ではなくカグヤを見ている。

（面倒事にならなければいいけど……）

とは思いつつも、バトルをしてくれると言っているのだから、必要最低限の礼儀は示さなくては。

「……宜しく願います」

ぺこりと一礼。

しかし男はそんなレイジを無視し、カグヤへとにやついた笑みを向け口を開いた。

「ねえカグヤ、彼と君は一体どんな関係なんだい？」

（……ああ、やっぱり）

こんな事、マサラに居た頃も飽きる程見てきた。

カグヤは基本的にレイジの傍にいる、だから彼女に好意を抱く人間は必ずと言っていいほどこんな風に自分達の関係を尋ねてくるのだ。

男の問い掛けに、カグヤは素直に答えた。

「レイジは私の幼なじみで旅の仲間家族で大好きな人ですよ」

（っ、最後のは余計だよ……）

彼女に他意はない、それは何度も聞いているからレイジにはわかる。だがしかし、彼女の事をよく知らない相手からすれば、誤解を招く言葉であるのは当然で……。

「……なるほど。そうかい」

予想通り、睨まれた。

予期していた事なので驚きはしないが、やはり憂鬱になってしまう。

（ああいう言い方は誤解を招くって何度も言ってるのに……）

軽くカグヤを恨みたくなったが、今更あーだこーだ言っても仕方ない、彼女に悪気はないのだから。

しかし、疲れるのは変わらないので文句を言わない代わりに盛大なため息をつくレイジだった。

「はぁ……………」

第3話 トキワシティへ、初めてのポケモンバトル!! (レイジ編)

「使用ポケモンはさっきと同じく一体ずつだ。」

まあ、これじゃああつという間に勝負がつきそうだから、君は二体使ってもいいよ」

(……………はあ)

どうしてこんな状況になったのか、わかってはいるがどうしてもため息をつかずにはいられない。

「レイジー、頑張って!!」

そんなレイジの心中など理解していないカグヤは、満面の笑みを浮かべながらレイジに向かって応援の言葉を贈る。

……シウの視線がまた鋭くなった。

「君みたいな男には、あの子は似合わないよ」

「……………別に、そんな関係じゃない」

カグヤの発言はあくまで家族としてだ、だから誤解はしないでほしい……………。

(……って言っても無駄だろうな……………)

仕方がない、もう逃げられないのならばバトルで黙らせるしかない。

不本意な展開ではあるものの、諦めというのも大事である。

「さあ……勝負!!」

「……………」

「ボクのポケモンはこいつだ!!」

そう声に出し、シュウが取り出したポケモンは……。

「——モココ」

カントーにはいないポケモン、メリープが進化したモココ。

「どうだい？珍しいポケモンだろう？」

「別に」

勝ち誇ったシュウの言葉にも、レイジは一刀両断で斬り捨てる。

てっきり羨ましがると思っていたからか、まともに顔を引きつらせるシュウ。

しかし仕方ない、レイジにとって本当に珍しくないからだ。

「——リオン、お願い」

モンスターボールを上 to 投げ、リオン——ヒトカゲを出す。

（ふーん、レイジはリオンで戦うんだ……）

リオンにとって野生を含めたポケモンバトルは初めて。

なるほど、レイジはリオンにバトルを慣らせたいから今回取り出したようだ。

「……なあ、あいつ強いのか？」

隣にきたケンがレイジを指差しながら問いかける。

「うーん……どうだろ、わかんないや」

少なくとも、彼がバトルをしている姿を見たのは数えるくらいである。

一応ティナとのコンビネーションはそれなりだったと記憶しているが……リオンと一緒に戦うのは初めてのはず。

「あいつも災難だな。あのシュウと戦う事になるなんてさ……」

「えっ、あの人強いのか？」

「一応このトキワではジムリーダーを除いて一番強いぜ」

「ウソッ!？」

まさかそんな相手を選んでしまったとは思わず、まずったかも……と表情を歪ませるカグヤ。

「しかもさ、悪い奴じゃないんだけどちょっと女の子に対してだら

しないっていうか……。

気に入った相手にはしつこいんだよな」

「……なるほど、だからさっきから私の事ジロジロ見てたのか……」

「更に、自分の気に入った女の子の傍に男が居たらさ、めちゃくちゃ敵対心を持つんだよアイツ……」

げんなりした表情を浮かべるケンに、カグヤはまたまた納得する。

（変な相手を連れて来ちゃったなあ……ごめん、レイジ）

後でちゃんと謝ろうと思いつながら、再び視線をレイジに向ける。

「あのモココもかなり強くてさ……レイジって言ったっけ？
たぶんアイツ……負けるぜ」

「……大丈夫だよ。レイジは負けない」

「えっ？」

「きっと私なんかより全然上手いやり方で勝利するよ。
だって、レイジは強いもん」

「おいおい、さっきはわかんないって……」

「単純な実力ならわからないけど……ポケモンの事ならレイジは強いよ」

「はあ？」

曖昧な言い方のカグヤにケンは首を傾げるが、彼女にはレイジが負ける結末など欠片も考えてないようだ。

「……随分愛されてる彼氏だな」

「へ？レイジは彼氏じゃないよ？」

「えっ……だ、だってあんなに仲良いし……」

「うん。だけど私とレイジは幼なじみで旅の仲間で家族だもん。」

レイジの事は大好きでずっと一緒に居たいと思ってるけど、彼氏じゃないよ」

「……………」

そこまではつきり言っておきながら彼氏ではないとはどういう事なのか。

「モココ、たいあたり！！」

シュウの声が響き、ケンも慌てて前を向く。

「リオン、右に」

言われた通り右に跳び、モココの攻撃を回避するリオン。

「なら、でんきショックだ！！」

モココの身体に電気が走り、そのエネルギーがリオンに向かってい

く。

しかし、レイジは慌てる事なくリオンに命令を下した。

「左に小ジャンプ、着地と同時にひのこ」

モココのでんきショックは虚しく地面に当たり、回避し着地した瞬間リオンは口から炎を吐き出す。

それは技を出したばかりのモココに見事命中し、その身体を吹き飛ばした。

「モココ!!?」

「リオン、とっしん」

一気に走り距離を縮め、リオンの強烈なとっしんが更にモココを吹き飛ばした。

「あ、あいつのポケモンつええ……」

(ウソ……リオンとレイジは今日出会ったばかりなのに、どうしてこんなに早く息が合った動きができるの……?)

まるで長年のパートナーのように、その動きは洗練されている。

優勢だと思っているのか、リオンはニヤリと余裕の笑みをシュウに見せる。

「っ、な、生意気なポケモンだ……!」

モココ、何をやっているんだ。早く立って反撃をしろ!!」

怒鳴るシュウに、モココはどうにか立ち上がる。

「よし、かみなりパンチだ!!」

右手に電気エネルギーを溜め、真っ正面からリオンに向かっていくモココ。

「かげぶんしん」

しかし、そんなリオンの姿が2つ3つと増えていき……モココを囲むようにリオンの分身が現れる。

「ど、どれが本物なんだ……?」

シュウもモココもリオンの姿を捉える事ができない。

「モココ、こうなったら手当たり次第に攻撃するんだ!!」

自棄になったのか、無茶な命令をモココに下すシュウ。

しかしモココもそれしか方法はないと思ったのか、はたまた主人の命に逆らう事ができないのか、自分の近くに居るリオンへと拳を繰り出した。

だがそれは当然ながら偽物であり、かみなりパンチは虚しく空を切って……この勝負は終わりを告げた。

「リオン、かえんほうしゃだ」

隙だらけになったモココに、特大のかえんほうしゃをお見舞いする
リオン。

当然ながらそれはモココへ命中し……目を回してダウンした。

「モココ、戦闘不能!! ヒトカゲの勝ち!!」

よってこの勝負、レイジ選手の勝利!!」

審判が判定を終えると同時に、周りからは先程とは段違いの拍手が
巻き起こる。

「リオン、お疲れ様。頑張ったね」

労いの言葉を掛けつつ、リオンの頭を優しく撫でるレイジ。

嬉しそうに目を細めながらも、まだ戦い足りないのか瞳には闘志が
宿ったままだ。

「駄目だよりオン、バトルは終わったんだから」

またお願いね、そう口にしてリオンをボールの中に戻した。

「レイジ、初勝利だね!」

まるで自分の事のように喜びながら、再びレイジに抱きつくカグヤ。
倒れそうになりながらも、足に力を込めて踏みとどまる。

「待ってカグヤ、まだ挨拶が終わってない」

「あつ、そっか」

カグヤを離し、シュウの元へ。

「いい勝負でした。ありがとうございます」

カグヤと同じように、右手を出して握手を求める。

……だが、シュウは睨むだけでレイジの握手に応じようとしな

い。そんな彼の態度に、カグヤはムツとした表情を浮かべながらシュウに詰め寄った。

「あの、どうしてレイジを睨むんですか？

ポケモンバトルに負けて悔しいのはわかりますけど、そんな態度はよくないと思います」

「別にいいよ。気にしてないから」

それに、ポケモンバトルに負けただけが理由ではないだろう。

恋敵（勝手に勘違いしているだけだが）に負けたのだ、男として悔しいと思ってもそれは仕方ないと言える。

だが、だからといっていちいち相手をする必要も意味もないので、レイジはそのままシュウから視線を逸らし、リオンを治療する為にセンターへと歩を進めた。

……。

「——もう、何なのよさっきの態度は」

ポケモンセンターにあるトレーナー用の宿泊施設。

部屋をとったカグヤは部屋に入るなり、ベッドに飛び込み愚痴を零した。

「別にカグヤが怒る必要ないんじゃない？」

「だって、ポケモンバトルは礼に始まり礼に終わる。
そんなのトレーナーとして常識じゃない」

（……そういう決まりがあるわけじゃないんだけど）

まあしかし、彼女の言い分の方が確かに正論ではあるから、余計な口出しはしないでおく。

……というか、それ以前にツツコミを入れなくてはいけない点が他にあるから、まずはそっちを片付ける事にしよう。

「あのさあ」

「何？」

「……何で、同じ部屋なの？」

今日は一泊して、明日ニビシティに向かおうという話になったのだ

が、何故か、カグヤが2人一緒の部屋をとってしまったのだ。

これにはさすがにツツコミを入れなくてはならない。

しかし、カグヤはキョトンとしながらも当たり前のようにこう口にした。

「だって、別々に分ける必要ないし」

と。

15歳の少女とは思えない発言に、レイジは頭を抱えなくなった。

「小さい頃はよく一緒に寝てたじゃない」

「それは小さい頃の話だよ……」

「むう……不満なの？」

「そういう問題じゃないよ、僕も君もあの時と違うんだから」

「むむう……」

頬を膨らませ、私怒ってますとアピールするカグヤに、そつため息を漏らすレイジ。

……ダメだ、一度こうなるとカグヤは納得してくれない。

昔から彼女と行動を共にしているからこそわかってしまうのだ、本当はわかりたくないのだが。

「わかった。わかったからそんな顔しないで……」

「やった！」

彼が折れると、さっきとは一変して笑顔になるのだから、女の子と
いうのはよく理解できないとレイジは思う。

結局、自分は彼女にはとことん甘くなってしまうようだ。

……………。

「……………っ、っっ」

寝苦しさを感じ、顔をしかめながらレイジはゆっくりと目を開ける。

食事を済ませ、ポケモンも回復や明日の準備等が終わり、今日は少
し早めに眠りに就いたレイジ達だったのだが……。

（……………何だ？この感覚……………何かが、叫んでる？）

頭に響く、僅かな声のような音。

ティナが発するテレパシーに似ているが、それよりもずっと禍々し
いというか……………負の感情を感じる。

「……………」

時刻は既に夜中。

当然ながら自分以外は全員眠っている。

(……確かめないと)

そんな脅迫概念に抱きながら、皆を起こさないように上着を羽織りセンターを飛び出した。

あちこちから虫ポケモンが鳴く声が聞こえるトキワシティは、時間の事もあり人の気配は感じられない。

(……声が、大きくなった)

相変わらず何を言っているのかはわからない。

だが、気のせいという可能性は消え、この声の主が怒りを抱いているというのも理解できた。

(一体誰が、何を伝えようと……)

ひたすら声の聞こえる方角へと歩を進める。

だんだんと大きくなる声に顔をしかめながらも、レイジはどうかその場所に辿り着いた。

「ここは……」

そこは、レイジにとって意外な場所。

——トキワシティのジムだった

無人だと言われているだけあり、当然ながら中の電気は消されたままだ。

人どころかポケモンの気配すら微塵も感じられない、外装が綺麗な廃墟のようで身体が少し震えた。

しかし——声の主は間違いなくここに居る。

頭に響く声が、頭痛へと変わった。

「っ、く……」

わけがわからない。

この声の主も、一体自分に何を伝えようとしているかも、何一つ理解できなかった。

（君は、誰……？ 僕に、一体何を伝えたいと思っているんだ？）

痛み続ける頭を押さえながら、必死に声を聞き取ろうと集中する。

……すると、ほんの少しだが何か言葉のようなものを聞き取れた。

——さ…、必……様達……し…や……

——貴様…のよ……人……い…か……

——……の、か…きは……必ず私……

「あ、ぐ……っ」

ところどころに凄まじいノイズが走り、結局その言葉の意味を理解する事ができない。

……やがて、声も聞こえなくなった。

「……………」

一体何だったのだろう、今の声は。

頭痛は消えたものの、額にびっしりと浮かんだ大粒の汗が、先程の現象が夢でなかった事を証明している。

「……は、あ……」

おもわずその場に座り込んでしまった。

相も変わらずジムは静寂に包まれており、やはり無人なのだと納得させられた。

(……………帰ろう)

明日も早い、このままここに居た所で何がわかるわけでもないのだ。自分自身にそう言い聞かせ納得させてから、レイジはゆっくりとその場を後にした。

——ノイズ混じりに聞こえた、憎悪に満ち溢れた声を思い返しながら

……。

「―――よし、トキワでバッジを手に入れられなかったのは残念だけど、4つ集めればいいってわかった以上はさっさとニビシティに行くわよ！」

朝っぱらから元気な声で高らかに叫ぶカグヤ。

それとは対照的に、レイジの表情は浮かないものだった。

（……結局、昨日の声が気になって眠れなかった……）

そのせいか、やはり瞼は重い。

へパパ、どうしたの？

「なんでもない。けど今日はボールに入ってくれないか？」

へ……うん、わかった

ありがとう、そう口にしながらティナをボールに戻す。

「……あつ」

トキワシティを後にしようとするカグヤ達だったが、見慣れた人物を視界に捉え立ち止まった。

「…………やあ」

その人物とは、昨日レイジとバトルを繰り広げたシュウ。

昨日の事を思い出したのか、カグヤの顔が不機嫌そうに変わる。

「……昨日は悪かったね、大人気なかったよ」

「……いえ、別に気にしないでください」

「ありがとう。そう言ってもらえると助かるよ。」

それより、君達はポケモンリーグを目指しているのかい？」

「カグヤはそうです、僕は……その付き添い」

「付き添いって……ポケモンリーグに出る気はないのかい？」

「ええ」

「……勿体ないな。君ほどの実力なら充分通用するのに……」

「……………」

そんな事言われても、興味がないので返答に困ってしまう。

「頑張ってるね。応援してるよ」

「は、はあ……ありがとうございます」

昨日とは態度が違うシュウに、なんともいえない微妙な表情を浮か

べてしまうカグヤ。

「それじゃあ、僕達はこれで失礼します」

「ああ、またね」

シュウに手を振りながら、トキワシティを後にする2人。

「——なんであんなに態度変わったのかな？」

「あれがあの人素なんじゃないの？」

「そんなに悪い人じゃないんだよ、きっと」

「……そうなのかもね」

釈然としなかったが、気にしない事にする。

「まっ、いつか。それよりニビシティのジムリーダーってどれくらい強いんだろ……！」

「その前にトキワの森だよ」

「うっ……そ、そうだったね」

途端にげんなりするカグヤ。

それもそのはず、彼女は虫ポケモンが苦手なのだから。

そんな彼女に苦笑を送りつつ、レイジはニビシティへと向けて歩を進めるのだった。

キャラクター紹介1

【名前】 レイジ

【性別】 男

【年齢】 14歳

【一人称】 僕

【身長】 165cm

【人物】

主人公。マサラタウンに住む少年。目も醒めるような青色の髪に瞳が特徴。

現在はマサラタウンに暮らしているが、物心つく前からある場所です。ポケモン達と一緒に暮らしてきた経緯を持ち、彼が5歳の時にカグヤの両親であるゲンジとルリコに保護され養子となる。

ポケモン達と自然の中で暮らしてきたせいか、身体能力は常人を遥かに超えており、またポケモン達の言葉を理解しまた会話をすることが持つ、しかし相手が強い怒りなどを抱いている時は会話をすることも言葉を理解することもできない。

またきのみ等を用いて100%自然の葉を作る事もできる。
好きなものは家族と呼べる人達、ポケモン。

嫌いなものは心ない人間、ポケモンを傷つける者。【性格】

おとなしく感情をあまり出さないが、無愛想というわけではなく心を開いた者には年相応の態度を見せる。

周りに流されやすく（主にカグヤ）巻き込まれ体質。

ポケモンに対する愛情は人一倍強く、その為かポケモンを助けるためならば簡単に自分を犠牲にする事も躊躇わない。

自分という存在を軽んじているが故の行動なので、その点に関してカグヤを始めとした他者から心配されている。

バトルでは冷静さを失わず、自分のポケモンの状態や相手、フィールド等を分析し確実に勝利を得るタイプ。

キャラクター紹介2

【名前】 カグヤ

【性別】 女

【年齢】 15歳

【一人称】 私

【身長】 162cm

【人物】

オーキド博士の助手であるゲンジとルリコの一人娘。背中まで伸びる栗色の髪とエメラルドグリーンの瞳、普段の髪型ははストリートだが、愛用している白いリボンを用いてポニーテールやツインテールにする事も。夢はポケモンマスター。

ポケモン研究者を両親に持ったためか、初心者ではあるがポケモンに対する知識は豊富。

だが後述の性格のせいか大抵うまく活用できない。

好きなものは両親、レイジ、ポケモン。

嫌いなものは悪い人。 【性格】

明るく活発で行動力に溢れている、だが溢れすぎて時折周りに迷惑を掛ける事も。

少し勝気で年上という事もあり、レイジを引っ張っていくが、大抵ヘマをして彼に悪気のない毒舌を受けてヘコむ。

熱くなりすぎる傾向にあり、そうなるレイジや周りの意見を聞かなくなる事もあるが、根が素直なので自分が悪い時はきちんと謝ったり反省したりするなど、一般的な常識は持ち合わせている。

基本的に人見知りはないので、男女共に友人を作るのがうまく、容姿も整った美少女なので、マサラや行く先々で彼女に想いを寄せる輩も少なくない。

しかし本能的に嫌な相手にはなかなか冷たい態度を崩したりせず、人によっては彼女に対する印象ががらりと変わる。

幼なじみであるレイジには絶大な信頼を寄せており、彼の事は「大好き」らしいが、それが家族や親友としてなのか異性としてなのかは彼女本人もわかっていない。

良くも悪くもトラブルメーカー、レイジを困らせるのは大抵彼女の役目である。

バトルでは前述の性格と元トレーナーである父の影響か、攻撃中心の突撃思考。

だがタイプや相性を考えていないわけではなく、レイジのヒントを得て戦いに勝利するなどの柔軟な思考は持っている。

レイジを誰よりも心配しており、彼の危うさを知っているため自らを省みずポケモンを助けようとする彼を守ろうと密かに誓いを立てた。

レイジのポケモン1

・ティナ

♀のラルトス。レイジがゲンジ達に保護される前、ティナがタマゴだった時から一緒に過ごし、更に彼が孵化させたので父親として強く慕っている。

普通のラルトスよりもサイコパワーが強く、テレパシーで人間の言葉を話す事ができるため、時折カグヤやポケモン達の翻訳家になる事も。

普段からレイジの傍に居たいがために、ボールの中に入らず彼の頭の上に乗っていたり抱き抱えられたりしているが、レイジに言われた時には素直にボールの中に入る。

一人称は「ティナ」で、レイジを「パパ」と呼び他は基本的に呼び捨てにしている。

産まれてからそれなりの時間が経ったが、まだまだ甘えたがりな性格であり、割と嫉妬深くカグヤがヘマをした時は容赦なく追い討ちを掛けるなど、いつも傍に居る彼女に嫉妬している。・リオン

♂のヒトカゲ。オーキド博士から譲り受けたポケモン。

戦う事が大好きな熱血漢で、強い相手との戦いを好む。

一度ボールから出るともう一度戻る時不満そうにするが、レイジのいうことはキチンときくなど割と素直な面も。

まだレイジのポケモンになって日も浅いが、既にかえんほうしやなどの強力な技が使えるため実力は高い。

レイジによると一人称は「俺」レイジの事は「ご主人」と呼び他は呼び捨てにしている。

カグヤのポケモン1

・エネコ

♀。カグヤが13歳の誕生日に両親からプレゼントされたポケモン。

カグヤに似て好戦的であり、彼女にとってポケモンというよりよく似た妹のような存在。

エネコもカグヤにとっても懐いており、ティナのように普段はボールに入らず彼女の肩や頭の上に乗っかっている。

よく周囲の野生のポケモン相手にバトルをしていたからか、その実力は高く素早い動きで攻撃を仕掛けるスピードタイプ。

一人称は「わち」で、みんなの事はちゃん付けで呼ぶ。・チコリータ

♀。オーキド博士が知り合いのウツギ博士から譲り受け、さらにカグヤが譲り受けたジョウト地方のポケモン。

まだ実戦経験は少ないが素質はあり、サンドとの初陣で見事勝利するなど実力もそれなり。

よくニコニコと笑みを浮かべ周りを和ませるムードメーカー。

一人称は「私」で基本的に全員をさん付けで呼ぶなど礼儀正しい性格。

第4話 くトキワの森、レイジの優しさく

「あはは……」

「……………」

「えっと……」

「……………」

「その……」

「……………」

「……ごめんなさい」

地面についてしまうんじゃないかと思えるほど、頭を下げるカグヤ。

「はぁ……まあ、予想していたし」

「うっ……」

「こんな事、今まで一度や二度じゃなかったし」

「ううっ……!」

悪気のない毒舌を受け、カグヤは胸に手を置いてうなり声を上げる。

——ここはトキワの森、トキワシティとニビシティの間にある森で

ある

バッジを手に入れるために、2人はニビシテイへと向けて旅をしているのだが……。

「早く通り抜けたいののはわかるけど、だからって一直線に走るのはおかしくない？」

なんてことはない、いつものようにカグヤが勝手に道を決めて進んだ結果、迷っただけである。

彼女に悪気がないのはレイジとわかっている、しかしそれとこれとは話が別だ。

「あう……」

すっかり落ち込んでしまったカグヤだったが、自業自得なのでフォローは入れない。

ため息をつきつつ、レイジはモンスターボールを取り出し上に投げた。

ボールが開き、中から出てきたのは……。

「ティナ、悪いけどお願いできる？」

〈うん〉

「？ ティナを出してどうするの？」

「ティナのサイコパワーで出口を探す」

「えっ、そんな事できるの？」

驚きの表情を向けると、心外だと言わんばかりの態度でティナはテレパシーを送った。

〈前にカグヤがパパを連れて迷子になった時も、ティナが道を探したのに……〉

「えっ……そ、そんな事あったっけ？」

「……君が9歳の時、冒険をしようって無理矢理誘って迷子になった時だよ。」

おまけに君は泣き疲れて眠っちゃうし」

「あ、あはは……」

ジト目で睨むレイジとティナから視線を逸らし、誤魔化すように笑った。

「……まあ、今に始まった事じゃないからいいけど」

〈パパ甘い、これじゃあカグヤがまたつけあがるよ？〉

「ちょっとティナ、それどういう意味よ」

〈そのままの意味〉

「なんですって!!」

「喧嘩しないの。それより早くこの森から出ないと野宿する羽目になっちゃうけど、君達はそれでもいいの？」

僕は別にそれでもいいけどね、そう言葉を付け加えるとカグヤもティナもおとなしくなった。

そんなティナを抱きかかえて、再び歩を進める。

「ティナ、どこに進めばいい？」

「うん、えっと――」

サイコパワーを展開し、正しい道を導き出そうとするティナだったが。

突如、耳をつんざくような音が森に響き、前方の空に黄色の雷が現れた。

「えっ……!？」

「――」

まだ耳が痛むほどの凄まじい轟音。

空は快晴、すなわち自然のものではない。

瞬間、レイジは雷が現れた場所へと走り出した。

「ちょ、レイジ!？」

驚いたようなカグヤの声には反応せず、ティナを頭に置いて更に走るスピードを速める。

——やがて、いつくもの羽音が聞こえてきた

聞き覚えのある音を頼りに、現場へと赴くと。

「————っ」

たくさんの羽音の正体、それは都合十数匹ものスピアーだった。

そして、その中央に存在するポケモン。

へピカチュウ………！

でんきねずみポケモンであるピカチュウが、スピアーの大群に囲まれていた。

だがしかし、両者共になんとか様子がおかしい。

スピアー達は誰が見てもわかるほど怒りに満ち溢れているし、ピカチュウは苦しそうに息を吐いている。

「レ、レイジ早い……ってスピアーがいっぱいいる……！？
しかもピカチュウまで……！」

——場に響くカグヤの声

それを聞き、一斉にスピアー達の視線がレイジ達へと向けられた。

「あっ……」

もしかしくなくても、また私余計な事しちゃった？

そんな視線をレイジに向けるカグヤだが、返ってきた視線は冷たいものだった。

だが――すぐさまレイジはカグヤの手を掴みスピアー達の元へと自ら突っ込んでいく。

「ちょ、ちょっとレイジ!？」

「ティナ、かなしばり!!」

「うん!!」

レイジがティナに命令を下した瞬間、スピアー達の動きが止まる。

ティナのかなしばりによって動きを止めているのだ、しかし――

「パパ……もうダメ……」

さすがにこれだけの数を全て止めるのは無茶な行為なのか、ティナの表情が苦しげなものに変わっていく。

程なくして、スピアー達が再び動き出す。

しかし、動き出す前にレイジはピカチュウを抱きかかえその場から逃げ出した。

「い、一体何がどうなってるの!!?」

「わからない。でも今は逃げるのが先だ!!」

後ろを見れば、完全に自分達を敵と認識したスピアー達が追いかけてきている。

「追ってくるー!!」

「くっ……」

「エネコ、スピードー」

「カグヤ、攻撃はしないで!!」

「ええっ!? でも追いかけてるし……」

「スピアー達が悪いわけじゃない、もちろんこのピカチュウだって悪いとは思えない。

だから今は逃げる事だけに専念して!!」

「そ、そんなぁ……」

ムチャクチャ過ぎて反論できない。

というより、そんな余裕など今のカグヤには存在していなかった。

なにせ引っ張られて走っているのだが、あまりに速くて半分足が宙に浮いた状態になっているのだ。

これでは転ばないようにするだけでも精一杯である。

へパパ、追いつかれちゃう!!」

すぐ後ろにまで迫るスピアー達に、ティナが声を荒げた。

「っ、カグヤ、しっかり掴まってて!!」

「へ? ……ひゃああああっ!!?」

ふわりと自分の身体が宙に浮いたと思った瞬間、カグヤはレイジによって抱きかかえられていた。

俗にいうお姫様だっこというやつで、ちなみにピカチュウは彼女のお腹の上に移動されている。

周りの木々に飛び移りながら、既に人間の身体能力を超えた動きでスピアー達を攪乱していくレイジ。

さすが幼少期はポケモンと暮らしていただけの事はある、素晴らしいというか凄まじい。

(というか……)

間近にレイジの真剣な表情があり、ちよつと落ち着かない。

普段の無表情ではなく、必死になっている男らしい顔。

……こんな時だというのに、頬を赤くしてしまった。

(……しばらく、このままでもいいかな?)

そんな邪な考えが頭によぎり、カグヤはまた赤くなった顔を隠すように、レイジの胸に顔を埋めて誤魔化した。

……。

走って走って走り続けたレイジ。

巨大な木の幹でできた大穴を見つけ、そこに隠れどうにかスピアー達から逃れる事ができた。

「ふう……」

すぐさまカグヤを地面から降ろし、彼女が抱いているピカチュウを抱きかかえる。

逃げる事はできたが、まだやるべき事は残っている。

先程から様子のおかしいピカチュウ、このポケモンの容態を確認しなければ。

「……………」

苦しそうに息を吐き、呼吸も落ち着きのないものだ。

それに、小さな右足が赤く染まっている。

(やっぱり怪我をしていたのか……)

深い傷ではないが、浅いわけでもない。

だが、これはスピアーによって付けられた傷ではないようだ。

……とにかく、今は誰に傷つけられたかを考えている場合じゃない。

モンスターボールを手に取り、リオンを外に出す。

「リオン、ティナ。赤い色をしたきのみと青色の葉っぱを持ってきて、両方とも近くの木々に生えてるはずだから」

〈うん〉

リオンもわかったと一声鳴き、穴から出ていく。

「レイジ、一体何をしようとしてるの？」

「ピカチュウの薬を作る材料を持ってきてもらおうとしてるんだ」

「え、でもキズぐすりがあるのに……」

自分達のバッグの中には、オーキド博士から貰い受けたキズぐすりが入っている。

それでピカチュウの怪我を治せばいいのではないのか、カグヤはそう思って口を開いたのだが、レイジはそんな彼女の言葉に首を横に振った。

「もちろんそれも悪くはないけど、できるだけ自然のものを使った薬で治してやりたい。」

ましてやこの子は野生のポケモンなんだ、人間の作った薬なんかを与えるわけにはいかない」

「そ、そっか……ごめん」

「別に謝る必要なんかないよ。ありがとうカグヤ」

「えへへ……」

感謝され、照れくさそうに笑いリボンを弄るカグヤ。

「パパ、持ってきたよ」

ちょうどその時、ティナ達が言われた通りのものを持って帰ってきた。

「ありがとう。カグヤ、僕のバッグから調合用の道具とポロツケースを持ってきて」

「う、うん!!」

レイジの大きなバッグに手を突っ込み、言われた通りの道具を彼に渡す。

——その後の彼は、カグヤにとって見慣れない姿だった

きのみと葉を細かくすり潰し、持っていたおいしい水でペースト状

にしていく。

おそらく塗り薬を作っているのだろう、それにしても手慣れている。

「……こんな事、いつ覚えたの？」

「僕がまだおじさんとおばさんに保護される前に、物知りのヨルノゾクが教えてくれたんだ。

尤もいくつかのポケモンに有効な薬を作れるくらいで、全て対象できるわけではないけどね」

（いや、充分すごいと思うよそれ……）

おそらく、このような薬を作れる人間など世界中探しても数える程度しかないだろう。

ポケモンと共に生きてきたからこそその知識に、ただただ舌を巻くばかり。

「できた……」

藍色の薬を見ながら、レイジはそう呟く。

「…………ピカ」

その時、苦しそうに鳴きながら先程まで意識がなかったピカチュウが目を開けた。

「……大丈夫だよ。すぐに治してあげるから」

安心させるように笑顔を見せるレイジ。

しかし、ピカチュウはレイジ達の姿を見るなり嫌悪感を露わにした鳴き声を発しながら暴れ始める。

しかし、思うように身体が動かせないのか、その動きはあまりに弱々しい。

「待つてピカチュウ、僕達は君を傷つけたりなんかしない。ただ君を助けようとしているだけだ」

必死に言葉を投げ掛けるが、聞く耳など持たないかのようにレイジ達を睨むピカチュウ。

否、正確にはレイジとカグヤだけを睨んでいた。

（この子……）

へおとなしくして。パパがあなたを助けてくれたんだよ？

ティナもピカチュウをおとなしくさせようと説得を試みるが、結果は変わらない。

「お願いだ。別に僕達を信用しなくてもいい、でもおとなしく治療を——っ！！」

右腕に走る痛み。

ピカチュウがレイジの右腕におもいきり噛みついたのだ。

「レイジ!!」

〈よくも……!!〉

ティナとリオンが今にも飛びかかろうと身構えるが。

「ティナ、リオン。やめて」

他ならぬレイジに止められ、動きを止める。

〈でも、パパ……〉

ご主人を傷つける奴は許さない、リオンもピカチュウを睨みながらレイジに告げる。

「それでもダメ。ピカチュウだって恐がってるんだから」

痛む右腕に少し顔をしかめながらも、ティナ達を落ち着かせるレイジ。

そう言われてしまうと何も言えず、ティナもリオンもすごすごと引き下がった。

「とりあえず今日はここで野宿するしかないね」

もうすぐ夕方となり、日が沈み夜が訪れる。

正規の道から随分外れてしまったようだし、このまま夜になって先程のスパイ達に追いかけられるのは御免だ。

「カグヤ、悪いけどティナ達の食事はお願い」

「それはもちろん構わないけど……レイジは？」

「僕はピカチュウの治療に専念しないといけないから」

言いながら、未だに右腕に噛みついていいるピカチュウの頭をそっと撫でる。

「チュウ……ピカ、チュウーッ！！！」

「ぐっ………！」

バリバリとレイジの身体に駆け巡っていく電撃。

しかしやはり弱っているせいか、その威力はたいした事はなくすぐに収まった。

「パパ………！」

「大丈夫だから、ティナ達は向こうでカグヤと一緒にごはんを食べてて。」

ピカチュウも周りに居られたら余計に休めないと思うから」

これは命令だよ、少し強引なレイジの言葉に、ティナとリオンは渋々ながらに従い彼から離れる。

「……それじゃあカグヤ、後はお願ひ」

「う、うん………わかった」

彼女も完全に納得したわけではないが、彼が一度こう言い出したら
きかないとわかってるので、おとなしく彼とピカチュウの元から
離れる事にした。

……。

木の内部はかなり広く、まるでちよつとした小部屋がいくつも存在
しているかのように入り組んでいる。

レイジから離れ、カグヤ達は彼を抜きにした夕食にしたのだが。

(………味気ない)

味付けを間違えたわけじゃない、自分が作った食事は今日もなかな
かに美味しい。

けれど、彼がいないとあまり美味しいと感じられなかった。

ポケモン達もそうなのか、いつもは食欲旺盛なエネコもポケモンフ
ーズを残している。

そんな時、リオンが呟くような声で口を開いた。

「ティナ、リオンは何だって？」

自分にはレイジのような能力はないので、テレパシーを使えるティ
ナに翻訳してもらう事に。

へ……パパの事、心配してる。

あのピカチュウと一緒にさせて大丈夫なのかって

「……………」

大丈夫に決まってる、そんな言葉が喉元まで上がってきたが、結局口にする事はできなかった。

——あのピカチュウは人間を嫌っている

どうして、とか、何故、という疑問はもちろん浮かぶが、そんなピカチュウと2人——1人と一匹だけにさせてよかったのかと思ってしまう。

もちろんレイジなら大丈夫と信じている、彼にはポケモンと会話できる能力があるし、それを抜きにしてもポケモンに対する気遣いや愛情などは限りなく深い。

「……ちよっと見てくるね。みんなはここで待ってて」

それでも、心配なものは心配だった。

立ち上がり、彼の元へと少し急ぎ足で向かう。

「レイジ」

「……静かにして。今ちようど寝た所だから」

「あっ、ごめん………」

口を押さえ、そそくさと彼の隣へ。

言った通りピカチュウは安らいだ寝顔を見せ、心地良さそうに眠っている。

「治療は終わり？」

「うん。後は一晩見張って何もなければ完治するよ」

疲れたのか、いつもの無表情さの中にも元気は見当たらない。

それにまた噛まれたのか、身体のあちこちに痕が残っている。

「…………ごめん、ね」

その姿に、いたたまれなくなってついそんな事を口にしていた。

「どうしてカグヤが謝るの？」

「だって、レイジがこんなにもポケモンの為に頑張ってるのに……私は何もできないから。」

私だってレイジと同じくらいポケモンが好きで大事なのに、それなのに何もできない自分が恥ずかしくて、悔しいの」

知識がない、そう言ってしまうえばそれまでかもしれない。

だがそれでも、苦しんでいるポケモンがいるのに何もできない。それが悔しい。

それに、なにより彼の。

レイジの力になれない事が、一番悔しかった。

「……別に、カグヤが気にする事じゃない。

それに、何もできないって言ったけど、それは違う」

「えっ……?」

「人には何かしらできる事がある、それが何なのかはわからないけど……きつとカグヤにもカグヤにしかできない事がある。

だから、自分には何もできないなんて思わない方がいい」

本当に何もできなくなるから、そう言って眠っているピカチュウの頭を優しく撫でるレイジ。

その顔は優しく、目が離せなくなった。

「……………そっか」

「そうだよ。それにそうやって悩んだりするのはカグヤらしくないし」

「何よそれー、それじゃあまるで私がいつも何も考えてないみたいじゃない」

「違うの?」

「当たり前でしょ。まったくもう……」

頬を膨らませるカグヤだが、すぐさま表情は笑顔に変わり……レイジの肩に頭を乗せた。

「……ありがとう」

「別に」

素っ気ない言葉も、嫌じゃない。

本当は抱きつきたいけど、ピカチュウが起きてしまうかもしれないから我慢する。

「……そろそろ寝た方がいいよ。明日も早いんだから」

「う、ん……」

だんだんと瞳の焦点が合わなくなっていく。

まだ夜になったばかりなのだが、予想以上に自分の身体は疲れているようだ。

「ほらカグヤ、寝袋を使わないと」

「………いい」

「は？」

「レイジの隣で寝るから……いい」

そう呟き、レイジに身体を預けるカグヤ。

抗議の声を返そうとしたが、その前に小さな寝息が聞こえてきた。

「……………はあ」

相変わらず、ため息をつかずにはいられない事ばかりしてくるようだ、この少女は。

まあしかし、不快とは思っていない辺り、自分も大概なので強く言えるはずもないのだが。

自分の膝にはピカチュウ、そして肩から全体にかけてはカグヤ。

両者の安らかな寝息を耳にしつつ、レイジは暫し瞳を閉じ1人と一匹の温もりを感じていた……。

……………。

「……………ん、う……………」

少し肌寒さを感じながら、カグヤは目を醒ました。

「おはよう、よく眠れた？」

「はれ……………？」

すぐ隣から聞こえるのはレイジの声。

はて、どうして自分はこんな体勢で寝ているのだろうか……。

「……………あっ」

思い出し、恐る恐るレイジの方へ視線を向けると。

「カグヤ、みんなを起こしてきて」

彼はいつも変わらぬ無表情で、いつも通り自分の名前を口にした。

（……………あれ？）

「どうしたの？」

てっきり嫌味の二つや三つや四つ辺りが飛んできると思ったのに……彼は怒った様子も呆れたわけでもなかった。

「あ、ううん……それじゃあみんなを起こしてくるね」

少し釈然としないながらも、気にせず彼から離れティナ達の元へと向かった。

——そうして、彼女がこの場からいなくなった後

「……………はああ」

安堵したような、疲れたようなため息をおもいつきり吐き出した。

（やっぱり一晩中くっつかれたままなのは困った……）

彼女の顔が間近で見えるというのは、あまり良いものではない。

自分とて男だ、なのでああいう事をされては自然と緊張してしまうのも仕方ないだろう。

(……もう少し考えてほしいんだけど……)

そう思いつつ、ピカチュウを起こさないように立ち上がる。

「っ……」

看病の為とはいえ一睡もしていないからか、足がふらつき視界がぼやける。

頭を振ってぼやけた視界を元に戻してから、レイジは皆の所へと向かったのだった。

…………。

朝食を食べ終えた頃。

「あっ……」

ピカチュウが目を醒まし、レイジと視線が合わさった。

「おはようピカチュウ、まだどこか痛い所はある?」

ふるふると首を横に振るピカチュウに、ほっとしたように息を吐く。

どうやら治療は成功したようだ、怪我也治ったし体力も元に戻っている。

「それじゃあ——もう森にお帰り」

「ピカ……!？」

「ええっ!？」

ピカチュウとカグヤの驚いたような声が重なる。

「どうして驚くの？」

「だ、だって……ゲットしないの？」

ピカチュウもカグヤと同じ疑問を抱いたのか、こくこくと彼女の問いかけに同意するように頷いている。

「別にそんなつもりなんか初めからなかったよ。

ピカチュウさえ元気になってくれれば充分だし、それに……ピカチュウは人間が嫌いでしょ？

そんなこの子をゲットするなんて、可哀想だよ」

「それは、そうかもしれないけど……」

では彼は、無償でピカチュウを救うつもりだったというのか。

ただ助けたいが故に、傷ついたりしたというのか。

……彼ならば充分にありえるかもしれない。

ポケモンに対してだと彼は人が変わる。

いつもは面倒事に関わろうとしないのに、ポケモンが関係していると自ら首を突っ込んでいく。

また——彼の危うい面が表に出てしまったようだ。

「さあ、そろそろ出発しないとまたこの森で野宿をする羽目になるよ。」

ティナ、道案内は宜しくね」

バッグを持ち、ティナを抱き上げる。

「カグヤ、どうしたの？」

「う、ううん……なんでもない」

まだ言い足りない事があったが、やめておいた。

彼が決めた事だ、いちいち自分が口出しする権利などない。

そう思い、カグヤもリュックを背負いエネコを肩に乗せ、外に出ようとした時だった。

「ピカ!! ピカピ、ピカチュウ!!」

必死に自分達を呼び止めようとするピカチュウの声が聞こえ、そちらに振り向く。

「……ピカチュウ？」

一体どうしたというのか、ピカチュウは必死に何かを伝えようとしているようだが……。

その言葉を理解したレイジは、おもわず目を見開いた。

「えっ……今なんて？」

「レイジ、ピカチュウは何て言ってるの？」

へ……自分も一緒に連れて行ってって言ってる

「えっ……」

ティナが伝えてくれたピカチュウの言葉は、カグヤにとっても驚きの内容だった。

初めはあれだけ自分達に敵対心を抱いていたのに、一体この一晩で何がピカチュウの心を変えたのか。

「……でもピカチュウ、僕達是否が応でも人間達が住む所に行かなければいけない時もある。

そうしたら、君はまた嫌な思いをしてしまうよ？」

「ピカ、ピカチュウ。ピーカ、チュウ!!」

「……今度はなんて言ってるの？」

へそれでもいい。あなたに恩返しをしたい。

傷つけてしまったあなたの、助けになりたい

「……ピカチュウ」

その申し出は、正直嬉しかった。

全てではないけれど、自分に心を開いてくれたのだ、嬉しくないわけがない。

しかしそれでも、ピカチュウの事を考えると承諾は……。

「レイジ、ピカチュウの気持ちを考えてあげなよ」

「えっ……?」

「ピカチュウは他ならないレイジと一緒に居たいって言ってるの。」

もちろんレイジの考えている事だってわかる、でもね……私がピカチュウだったら、そんな事は関係なしにレイジについていきたいって思うよ」

だからこそ、人間嫌いであるはずのピカチュウがそんな事を言っているのだ。

カグヤの言葉に、まだ少し迷いを見せるレイジ。

「チュウ……」

そんな彼に、ピカチュウは足に擦り寄ってきた。

大丈夫だから、そんな気持ちを彼に伝えるかのように。

「……………」

「ほらレイジ、ピカチュウの気持ちを汲み取ってあげなくちゃ」

その言葉で、ようやくレイジの心が折れた。

腰から空のモンスターボールを取り出し、ピカチュウに向ける。

するとピカチュウは鼻でボールの開閉スイッチを押し、自らボールの中に入ってしまった。

「ピ、ピカチュウ……」

「あははっ、よっぽどレイジが気に入ったみたいね」

「あはは……」

なんともいえない表情を浮かべながら、レイジはカグヤと一緒に外へと出る。

朝の日差しが木々の隙間から差し込み、おもわず手で瞳を覆った。

——その時、遠くからいくつもの羽音が聞こえてくる

確認しなくてもわかる、この音は……。

〈パパ……………！〉

「わかってる」

短くそう返し、スピアー達が来るのを待つ。

「つて、逃げないの!？」

「説得はしてみる。もしそれでもダメなら……悪いけど、強硬手段に出るしかない」

そんなやりとりをしていると、スピアー達はあつという間にレイジ達を囲むように展開した。

虫ポケモンが苦手なカグヤは表情に不安の色を滲ませながら、レイジに抱きつくように寄り添う。

「スピアー、僕達は君達に何かしようだなんて思っていない。
だから怒りを鎮めて巣に帰ってくれないか？」

精一杯の誠意を込めて、スピアー達を説得しようとするレイジ。

だが、そんな彼の言葉など聞く耳持たずとばかりにスピアー達は殺気立っていく。

「というか、何でスピアー達はこんなに怒ってるの!？」

「怪我をしたピカチュウが間違えてスピアー達の巣に入っちゃったんだ。」

ピカチュウも慌てて説明したんだけど、聞いてはくれなかったって」

「何よそれ。ピカチュウが悪気があったわけじゃないのに、頭が硬いスピアー達ね!!」

「仕方ないよ。スピアー達にとってはたまったものじゃないんだから。」

でも……僕の仲間、いや……家族を傷つけようとするなら、逃げるわけにはいかない」

瞬間、ボールの一つが勝手に開いた。

「ピカチュウ……」

「ピカ……」

バチバチと電気袋から放電しながら、既に臨戦態勢に入っているピカチュウ。

「……ごめんねピカチュウ、当てないように10万ボルト!!」

命令を聞き、凄まじい電撃が辺りに放出される。

もちろんレイジに言われた通り、スピアー達には当てないようにしながら。

しかし、この牽制は効果があったようで、スピアー達の間には動揺が生まれていた。

「次は当てる。痛い目に遭いたくなければこのまま帰ってくれ!!」

「ピカ!!!!」

レイジの言葉は本気だとわからせるように、スピアー達を睨むピカチュウ。

……やがて、スピアー達はすごすごとその場から少しずつ立ち去っていった。

（……………ごめんね）

自分の身勝手な願いを聞き入れてくれたスピアー達に対して、レイジは謝罪の言葉を心の中で口にした。

……………。

「——さあ、行こう」

再び静かになってから、気分を切り替えようとレイジは声を出し、歩き始める。

「ピカ！！」

「つと……」

すると、突然ピカチュウが自分の身体によじ登り頭に乗っかってきた。

「あつ、そこはティナの場所だよ！」

抱きかかえられているティナが抗議の声を上げるが、それを無視しピカチュウはレイジの頭に頬擦りを繰り返す。

へむ、パパから離れてよお!!」

「ちょ、ちよつとティナ、暴れないで」

「あはは。モテモテだねレイジ」

「……見てないで助けてよ」

と、いきなり歩を止めるレイジ。

「どうしたの？」

「……忘れてた。君の名前を付けてあげないとね」

「ピカ？」

「そうだな……君は女の子だし、ヒカリ……っていうのはどうかな？」

「……ピカ!!」

どうやら気に入ってくれたようで、満面の笑みを見せてくれるピカチュウ改めヒカリ。

「いいなー。よし、私もレイジに負けないようにポケモンゲット、頑張るぞー!!」

「フニヤーツ!!」

高らかに宣言するカグヤとエネコに、レイジ達は揃って苦笑を浮かべる。

——こうして、ピカチュウという新しい仲間を手に入れたレイジ

次はニビシテイでジムリーダーとのバトル。

(勝てればいいけどね……)

隣で楽しそうに笑みを浮かべているカグヤを見ながら、そっと彼女が勝てるようにエールを送ったのだった。

第5話 くニビシティ、いざジム戦へ！く

「たのもー!!」

扉を開き、元気良く叫ぶ少女、カグヤの後ろに立つレイジはため息をついた。

(いくらなんでも着いてすぐにジム戦は早すぎると思うけど……)

トキワの森を抜け、ニビシティへ着いたレイジとカグヤ。

まずはポケモンセンターに行こうか、そうレイジが提案しようとした瞬間。

「レイジ、さっそくニビジムに行くわよ!!」

そう言って、カグヤはレイジの手を握ってまっすぐニビシティのジムへと足を運んだのだった。

万全の状態で戦いに赴いた方がいいと思うのだが、今の彼女に何を言っても無駄というものである。

「元気がいい挑戦者だな」

中に入ると、男の声がレイジ達を迎え入れた。

奥から出てきたのは、自分達とそう年が変わらない少年。

「……目、細っ」

おもわずそう口にしてしまい、カグヤは慌てて口を塞ぐが既に遅し。しかし、少年は怒るところかカグヤに対して笑みを浮かべるだけ。

「ははっ、よく言われるから気にしないでくれ。それより、今日の挑戦者は2人かい？」

「いえ、僕はただの付き添いで、彼女があなたに挑戦したいそうです」

「そうか。オレはこのニビシティのジムリーダーであるタケシだ。君の名前はなんていうんだい？」

「私はカグヤです。マサラタウンから来ました」

「カグヤだね。では早速バトルになるが構わないかい？」

「もちろんです。こっちは早く挑戦したくてウズウズしてるんですから!!」

「はははっ、威勢のいい事だ。

だが、オレの岩ポケモンの硬い防御を貫けるかな？」

「勝負はやってみないとわかりませんが……必ず勝ちます!!」

モンスターボールを構え、高らかに勝利宣言を告げるカグヤ。

——場の雰囲気が一気に引き締まる

先程までの友好的な気配は微塵も無くなり、ジムリーダーとしての顔になるタケシ。

「——よく言った。ではバトルだ!!」

使用ポケモンは互いに二体、交代は挑戦者のみ認められる。

準備はいいか？」

「もちろんです!!」

審判も中央に立ち、地面が動き岩のフィールドが姿を表す。

……緊張が、少しだけカグヤの身体を固まらせる。

しかし、後ろから掛けられた声で彼女の緊張はすぐさま消えた。

「——落ち着いて。いつも通りに戦えばきっと勝てるよ」

「……レイジ」

「頑張って」

告げた言葉はただ一言。

しかし彼女にとって、何より力になる嬉しい応援。

「——うん!!」

力強く頷き、満面の笑みを浮かべるカグヤに、レイジも頷きを返し

た。

「――試合開始!!」

「でてこい、イシツブテ!!」

「チコリータ、レディーゴー!!!」

カグヤとタケシ、同時にお互いのポケモンをフィールドに出す。

タケシはイシツブテ、そしてカグヤはチコリータ。

相性ではカグヤが有利である、しかし勝敗などやってみるまではわからない。

「イシツブテ、たいあたりだ!」

「チコリータ、こっちもたいあたり!!」

チコリータとイシツブテ、両者共に自分の身体を使ったたいあたりで攻撃を仕掛ける。

ぶつかり合い、しかしパワー負けしたチコリータが後方に吹き飛ばされる。

（っ、やっぱりパワーじゃ負ける……!!）

「イシツブテ、いわおとしだ!!」

近くにある岩の砕き、自慢の腕で次々とチコリータへ岩を投げるイ

シツブテ。

「避けて!!」

しかしチコリータはそれらの軌道を読み、全て回避していく。

「はっばカッター!!」

着地した瞬間、はっばカッターでイシツブテを攻撃するチコリータ。回避する事ができず、まともにチコリータの攻撃を受け、イシツブテは吹き飛ばされた。

「やった!!」

岩タイプは草タイプに弱い、しかもまとも受けたのだ、ダメージは計り知れないはず……。

だが、そんなカグヤの期待とは裏腹に、イシツブテは立ち上がった。

「う、嘘……まともに受けたのに」

「仮にもジムリーダーを任せられているんだ、そう簡単にはやられない!

タイプが勝敗を決する訳じゃないって事を教えてやる。
イシツブテ、あなをほる!!」

地面を掘り、地上から姿を消すイシツブテ。

「チコリータ、落ち着いて!!」

そうだ、慌てたところで相手の思うつぼ、今はどこからイシツブテが出てくるか警戒しなくては。

しかし、このまま地面に立っていた所で攻撃を回避できるわけではない。

「チコリータ、あの岩に乗って!!」

所狭しと存在する岩の突起に移動するチコリータ。

少なくともこれで真下からの奇襲は――

「悪くない考えだ。だが甘い!!」

岩を砕く音と共に、チコリータの真後ろから土煙が上がる。

その中から出てきたのは、当然先程まで地面に居たイシツブテであり。

完璧な奇襲は見事成功して、隙だらけのチコリータをおもいきり吹き飛ばす。

「チコリータ!!」

カグヤの声を聞き立ち上がるチコリータだが、ダメージが大きいのか脚が震えている。

「トドメだイシツブテ、たいあたり!!」

決着をつけようと、イシツブテはチコリータへと向かっていく。

ダメージを受け立ち上がったチコリータに回避する術はなく、そのまま両者との決着は——意外な結末を迎えた。

「な、何——!!?」

驚愕の声はタケシから。

それもそのはず、有利だったはずのイシツブテがいきなり動きを鈍らせたからだ。

（攻撃を受けた？　しかしそんな様子は……）

それに、様子がおかしいのはイシツブテだけではない。

大きなダメージを負っていたはずのチコリータが、ピンピンしているのだ。

「……やどりぎのタネの威力、どうですか？」

不敵に笑うカグヤの言葉に、タケシはようやく状況を理解した。

「そうか、あの時のたいあたりで……」

「はい。吹き飛ばされる寸前にやどりぎのタネをイシツブテに植えたんです。

——正直、かなり危なかったですけど」

しかし、効果は絶大でありイシツブテから受けたダメージのほとん

どは回復した。

それと同時に、イシツブテが地面に転がり目を回す。

「イシツブテ、戦闘不能！チコリータの勝ち！」

〈……カグヤ、強くなったね〉

「カグヤは努力家だからね、トレーナーとしての才能もおじさん譲りだし」

〈でも、まだまだパパには適わないよ〉

（さて……それはどうだろう）

強くなりたい、その一心でカグヤはポケモン達と一緒に強くなっている。

バトルをするのはあくまでポケモンだ、しかし臨機応変に戦うにはトレーナーが必要である。

互いに互いを支え合い戦う事ができるからこそ、ポケモンバトルに終わりは無いのだから。

「――イシツブテ、よくやった」

イシツブテをボールに戻し、労いの言葉を掛けながら別のボールを取り出すタケシ。

そして中から出てきたのは。

「行け、イワーク!!」

「えっ……!!?」

地面から天井まで届くほどの巨体。

その姿に、チコリータはおもわず後退る。

「チコリータ、はっばカッター!!」

すぐさま攻撃を仕掛けるカグヤとチコリータだったが。

「えっ……!!?」

チコリータが放ったはっばカッターは、イワークの身体に当たった瞬間、いとも簡単に弾かれてしまった。

（あのイワーク、よく育てられてる……）

おそらくあれがタケシの切り札なのだろう、しかしはっばカッターを弾くとは凄い防御力だと素直に感嘆する。

しかし、カグヤは攻撃が通じない事に、思考を止められてしまった。

「イワーク、チコリータをしめつけろ!!」

「あっ——!!?」

それが圧倒的なまでの隙を生み、イワークの身体は瞬く間にチコリ

ータを捉えその硬い身体で締め上げる。

苦しそうに息をするチコリータに、カグヤは再び命を下す。

「チコリータ、つるのムチで攻撃して!!」

しかし、チコリータは攻撃を仕掛ける事ができず声を漏らすのみ。

「そんな……」

「オレのイワークを甘く見るな、もはやチコリータが脱出する術はない」

「……………」

悔しげに唇を噛み締め、カグヤはボールを翳しチコリータを戻す。

へ……パパ、カグヤ負けちゃう?」

「どうしてそう思うの?」

へだって、草タイプのチコリータがやられちゃったし……後はエネコしかないよ?」

確かに、エネコはノーマルタイプのポケモンであり、イワークに決定打を与えられるわけではない。

だが、それでもレイジはカグヤが負けるとは思えなかった。

「ティナ、さっきタケシが言ってたでしょ?」

タイプが勝敗を決する訳じゃないって」

〈だけど……〉

「答えはこのバトルが終わればわかるさ」

そう言って、再び2人のバトルに視線を向けるレイジ。

「エネコ、レディーゴー!!」

ボールから出したのは、やはりエネコ。

「エネコか……しかしイワークとは相性が良いわけじゃないぞ？」

「わかってるわ。でもね……私のエネコはそんじょそらのエネコとはデキが違うの!!」

「面白い。なら見せてみる!! イワーク、たいあたり!!」

雄叫びを上げながら、その巨体をまっすぐエネコに向かわせるイワーク。

エネコはその場から動かず、しかし既にカグヤはある命令を告げていた。

「むっ!？」

イワークに命中したはずのエネコが幻となって消える。

「かげぶんしんか!!」

「エネコ、スピードスター!!」

後ろから襲いかかるスピードスターは、イワークに見事命中。

しかし、それでもさしたるダメージは与えられていない。

「そんな攻撃で、オレのイワークが倒せると思うな!!」

「倒せるだなんて思ってないわよ!!」

今度は右横からのスピードスター。

続いて左側からも。

連続で受け、ほんの少しとはいえイワークの身体がぐらついた。

「今よエネコ、特訓の成果を見せて!!」

「ニャアーツ!!!!」

土煙に紛れ、エネコがイワークの後ろに回り込みそして――

「れいとうビーム!!」

「なっ――!!?」

「ええっ!!!?」

（へえ……）

三者三様の反応を受けながら、エネコの口から放たれたのは、氷タ
イプのれいとうビーム。

それはイワークの尾に命中し、だんだんと身体全体を凍り付かせて
いく。

苦しげな叫び声を上げるイワークだが、逃れる術などあるわけがな
い。

——やがて、氷漬けになったイワークが地面に倒れ込んだ

「イワーク、戦闘不能！エネコの勝ち！！」

よってこの勝負、マサラタウンのカグヤ選手の勝利！！」

瞬間、審判がイワークの戦闘不能を告げ……。

この死闘は、カグヤの勝利という形で幕を降ろす事になった。

……。

「……………」

静寂が、ジム内に漂う。

その場にいる誰もが口を開けず、勝者であるカグヤも信じられない
のかその場に立ち尽くしていた。

「ニヤー、ミヤア」

しかし嬉しそうに鳴くエネコを見て、ようやく自分が勝利できたと確信ができた。

「やっつたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「つ、ミヤアツ!？」

その場にいるエネコが驚くほどの大声を上げ、喜びのあまり何度の
その場で飛び跳ねた。

さるる……

「仕方ないさ」

ジムリーダーに勝てたのだ、その嬉しさは普通のバトルで勝てた時よりも遥かに大きいだろう。

そんなカグヤに苦笑しながら、タケシが何かを持って彼女に近づく。

「完敗だ。君のポケモンの力、確かに見せてもらったよ。」

ジムリーダーであるオレに勝てた証として、このグレーバッジを受け取ってくれ」

「……これが、ポケモンリーグの出場権になるバッジ……」

バッジを受け取り、感慨深そうにカグヤは暫しそれを見つめる。

「――ところで、君は挑戦しないのか？」

タケシの視線がレイジに向けられるが、彼は黙って首を横に振った。せっかくの申し出はありがたいが、自分はポケモンリーグに出るつもりなどはないのだ。

ただ彼女の旅についていき、様々なポケモン達に出会えれば充分なのだから。

「そうか……」

「タケシさん、楽しいバトルをありがとうございました!!」

「オレの方こそありがとう、やはりポケモンバトルは奥が深いな」

「そうですよね。でも私は絶対にポケモンリーグに出場して、チャンピオンになるっていう目標がありますから、これから先ももっとと強くなります!!」

「頑張ってくれ。応援してるよ」

「はい。ありがとうございます!!」

レイジ、とりあえずポケモンセンターに行こう!!」

「はいはい……」

先程からずっとニコニコと笑っているカグヤに少し呆れながら、タケシに一礼してジムを後にするレイジ。

(……おめでとう、カグヤ)

そんな彼女に、レイジは心の中で賛辞の言葉を送ったのだった。

……。

「——ふふ、ふふふっ」

「……気持ち悪いよ」

「失礼ね。言うに事欠いて気持ち悪いとは何よ」

「だって、さっきからずっと笑ってばっかだから」

ポケモンセンターに着き、いつものように同じ部屋を貸してもらったレイジ達。

しかし先程からカグヤがベッドの上でグレーバッジを見つめながら笑っているのは、正直どうにかしてほしい。

気持ちはわかる、ポケモンリーグを目指しているのだから、ジムリーダーに勝てて嬉しいというのはレイジとて理解できた。

だがしかし、それもずっと続くとなると気味が悪い。

(もしかして、バッジを手に入れる度にこうなるのか……?)

それはさすがに勘弁してほしい。

「嬉しいんだからしょうがないじゃない」

「限度ってものがある、さっきからずっとニヤニヤしてるよ?」

「えっ、そんなにニヤニヤしてた?」

（自覚なかったの?）

そう思いながら頷くと、さすがに恥ずかしいと思ったのか、カグヤの頬が赤く染まる。

「あはは……ごめん」

「別に謝る必要はないけどね……」

さて、ようやくカグヤの顔も元に戻ったのだ。

夜になったし、そろそろ次の予定を決めなくては。

「次はハナダシティだけど、明日すぐに出発する?」

「うーん……そこまで急がなくても私は構わないよ。」

レイジに何か用事があるなら、そっちを優先してもいいし」

バッジを貰って余裕が出たのか、あっさりとそんな言葉がカグヤから出てきたので、レイジは好都合とばかりに口を開いた。

「じゃあ、明日は自由行動でもいいかな?」

「えっ、別にいいけど……何処か寄りたい所でもあるの？」

「うん。博物館にね」

たしかこのニビシティには化石博物館があるはず。

実は前々から見てみたいと思っていたので、今回の旅で行ってみたいと思っていたのだ。

「うん、もちろん私は構わないよ。

あ、でも……もし自由行動なら、明日はトレーニングをしてもいいかな？」

「もちろん。一緒に行動する必要はないしね」

「……そう言われると微妙だけど、まあいいか」

「……………」

少し不満そうに唇を尖らせるカグヤだったが、すぐに表情が元に戻ったのでレイジは特に気にしない事にした。

「それじゃあ明日の予定も決まったし、ごはんでも食べに行こう？」

ベッドから降り、レイジの手を握って共に部屋を出るカグヤ。

（……楽しみだな）

珍しく口元を緩ませながら、レイジは明日の事を考えながらおとなしくカグヤに引っ張られ、食堂へと向かったのだった。

第6話　〈新たなる出会い！？　チャンピオンシロナ〉

「それじゃあレイジ、夕方頃になったらセンターに集合よ？」

「わかってる」

「それと、知らない女の子についていたりしたらダメだからね？」

「僕はそこまで子供じゃない……というか、普通女の子限定にはしないと思うけど……」

「……そういえばそうだね、何でだろ？」

僕に振られても困る、そう言わんばかりの表情を見せる。

「まあいいや。それじゃあみんな、頑張って強くなろうね？」

既にボールに出したエネコとチコリータに視線を向けてそう言うと、カグヤは街の外へと走って行ってしまった。

〈……カグヤ、凄く元気だね〉

「明るいのがカグヤの良いところだからね。」

それよりティナ、今日は博物館に行くからボールの中に入ってて」

〈はーい〉

おとなしくボールに戻るティナ。

それを確認してから、レイジはニビシティの博物館へと足を向けた。

…………。

入場料を払い、さっそく中に入る。

人はまばらで、混んではないようでほっと安堵のため息を漏らす。

化石や書物が飾られているショーケースに手を置き、中身を確認しようとするが、古代語なのか理解できない。

「……………」

この博物館には主に古代ポケモンの化石が展示されているが、カントー地方で見つかった古い書物や石版も少ないながらも展示されている。

だが——レイジはそんなものに興味があるわけではなく、ましてや考古学者を目指しているわけでもない。

では何故ここに来たのか、それは——自分の手がかりを得るため。

——ポケモンの言葉を理解し、会話する能力

オーキド博士などは、赤ん坊の頃に親の言葉を聞いて自然と言葉を覚えるのと同じ理由で、ポケモンの言葉を理解する事ができたのではないかと言っていた。

だが、レイジにはそれだけが理由ではないと思うのだ。

そもそも、それではあの場所に居たポケモン達以外のポケモンの言葉は理解できないという事になる。ポケモン毎に言語は違うのだから。

それはすなわち、この能力はオーキド博士の推測とは違う理由で得られたという事になる。

更に、普通の人間が得られる事など絶対にありえない能力であり、その為レイジは古代の石版や書物になればこの能力の手がかりが見つかると考えたのだ。

今までもオーキド博士の研究所に置いてある書物を読み漁ったり、自分のできる事はやってきた。

しかし手がかりはまったく掴めず、ニビシティの科学博物館ならばとは思ったのだが……。

やはり展示されている物には、そういった記述など何一つ載っていない。

資料室になればあるいはと思ったが、一般人が入る事はできないだろう。

——別に、今の自分に不満があるわけじゃない

自分を育ててくれたゲンジにルリコ、そして孫のように可愛がってくれるオーキド博士。

更に、自分の傍に居てくれたカグヤ。

自分の境遇は、決して悲観するものではなく、むしろ恵まれていると言っても過言ではない。

だが――知りたいたいのだ、“自分”という存在が何の為に在るのか。

この能力は何のために存在するのか、どうして自分にはこんな能力が備わっているのか。

それが、どうしても知りたかった。

「……………」

ふと、一枚の壁画が視界に入り、そちらに向かう。

（何だ、これ……）

その壁画には、二体の怪獣のような生物が対になって描かれていた。一体は身体の至る所に白いラインが走り、後頭部は結晶のように大きく突き出した形状をしている。

そしてもう一体は、両肩に真珠のような球体が埋め込まれ、対になった一体と同じように、身体にラインが走っており、背中には翼のような2対の鰭が生えている。

ポケモン、なのだろうか……壁画でありながらあまりに神々しい姿に、言葉を失ってしまう。

それに、何故だろうか。

自分は、この生き物を、何処かで……。

「ディア、ルガ……パル、キア……」

自然と、口が動いていた。

「え………」

どうして、そんな名前が自分の口から出てきたのか、わからない。

自分は知らない、このポケモンの名前など知るはずがないというのに――

「あったあった。……ふーん、本当にカントー地方で見つかったのね。

にわかには信じられないけど……これは歴史的発見かも」

「――」

背後から聞こえる若い女性の声。

ただそれだけ、おそらく彼女もただ博物館を見学している一般人の
はず。

だというのに、レイジは身体が凍りついてしまうほどの緊迫感に襲
われてしまう。

「——っ!」

無我夢中で飛び退き、おもわず睨むように後ろに居た女性と対峙した。

「……………」

対する女性は、当然ながらレイジの態度にキョトンとした表情を浮かべていた。

（気のせい……じゃない、この人……強い）

普通の人間にはない力強いオーラを感じ、どうしても構えを解く事ができない。

それにしても——目の前の女性はとんでもなく綺麗な女性だった。

きわめて端正な顔立ちはもちろん、長い金髪は見る者を否応なく魅了するほど美しい。

黒を基調とした暖かそうなコートも彼女によく似合っており、事実周りに居る人間は全員彼女に見惚れていた。

「えっと……私の顔に何かついてるかしら？」

「あ、いえ……すみません」

まずった、相手には敵意の欠片もないというのに睨んでしまうなど、失礼極まりない。

本当にすみませんでした、もう一度しっかりと謝ってから、急ぎその場を後にしようとするが。

「待つて」

女性に呼び止められ、おもわず足を止めてしまった。

「……なんででしょう？」

「貴方、今この壁画を見て言ってたわよね。

——ディアルガとパルキアの名を」

「っ、知ってるんですか!？」

「知ってるも何も、ディアルガとパルキアはシンオウ地方の神話に出てくる神と呼ばれるポケモンだもの。

大抵の人は知っているはずよ?」

「あ……………」

女性の言葉で、ようやく思い出した。

そうだ、あのポケモンはシンオウ地方に伝わる神話に出てくる時と空間を司るポケモン。

(……なんだ、忘れてただけか)

知らない名前が自分の口から飛び出したのだと勘違いした自分が恥ずかしい。

「カントーの人がディアルガとパルキアの名前を知っているから、少し驚いたの。」

もしかして、シンオウ地方の出身なの？」

「いえ。ただオーキド博士から聞いた事があったので……」

正確には今の今まで忘れていたのだが、それは黙っておく。

「オーキド博士……貴方、博士の知り合い？」

「いえ。僕の両親——育ててくれた人達が、オーキド博士の助手で、僕も博士に色々と教わったものですから……」

「なるほどね」

納得したような声を漏らし、女性は柔らかな笑みを浮かべる。

……まだ、警戒を解けない。

わかってはいる、しかしこの女性は今まで見た事がないほどの強いオーラを纏っている。

おそらくポケモントレーナーだろう、それも自分など比べる事すらできないほどの実力者。

「……そう警戒されると、私もどう接していいか困ってしまうわ」

「すみません……あの、あなたのオーラが今まで出会ってきたどの人よりも強いものですから、つい……」

「オーラ？」

「……わかるんです。トレーナーとしても人間としても強い人には総じてオーラ——上手く説明できませんけど、力のようなものを感じ取る事ができて……」

それで、あなたに特別強いオーラを感じ取ったものですから……」

「……不思議な事を言うのね、そんなことを言われたのは初めてよ。でも、ふふっ……そう言ってくれるのは凄く嬉しいな、ありがとう」

「えっ……？」

「だって、私をトレーナーとしても人間としても強いって褒めてくれたじゃない。

ポケモンの事で褒められたのはもちろん嬉しいけど、何より人として強いって言うてくれたのは、君が初めてだよ」

だから嬉しいの、本当に嬉しかったのか無邪気な笑みを浮かべながら女性は言った。

敵意も嫌味も威圧感もなく、自分の言葉に気味悪がるどころか感謝の言葉を口にした。

嬉しいと感じる反面、変わった人だという感想も抱いた。

「ごめんなさい。自己紹介もしないでペラペラ喋ったりして。私はシロナ。考古学者よ」

「……僕は、レイジです」

「レイジくん、ね。レイジくんも考古学に興味があるの？」

「えっと……まあ、そんなところですよ」

本当の事は言えず、とりあえず相槌を返す。

……それにしても、とレイジは目の前のシロナという女性を見つめる。

（シロナ……どこかで聞いた事があるような）

それにこれだけのオーラを感じ取れる事ができる人物だ、ジムリーダーどころかポケモンリーグの四天王クラスと言っても過言じゃ――

「あ」

「？　　どうかした？」

思い出した、というかこれだけの有名人を忘れる自分もどうかしてる。

彼女の正体、それは少なくともそこいらにいるような人物ではなく。

「――シンオウリーグのチャンピオン、シロナさん……」

四天王どころか、シンオウ地方での最強トレーナーだった。

「……あれー？ どうしてわかつちやったの？」

心底意外だったのか、目を見開いて驚きの声を上げるシロナ。

「いえ、オーキド博士が言っていましたから……」

「つて事は、ナナカマド博士がベラベラと余計な事を話したのね……」。

もう、私は極力目立ちたくないのにどうして私の名前を周りに言いふらすのかしら……」

ぶつぶつとナナカマド博士とやらの文句を告げるシロナ。

その様子は、とてもチャンピオンには見えず普通の女性そのもの。

雲の上の存在だと思っていたが、今の彼女を見るといい意味で期待を裏切られた。

「……ははっ」

「むっ、どうして私を見て笑うのかなー？」

「いえ、その……チャンピオンなのに、随分普通だなんて……」

「当たり前です。私だってチャンピオン以前に一人の人間なんだから」

「そうですね、すみません」

「いいのいいの。みんな私がチャンピオンだって知るとね、随分美

化させて見てくるんだけど、正直そうやって見られるのは嫌なの。
私はシロナっていう人間なんだから」

「……そうですね。ごめんなさいシロナさん、不快な思いをさせてしまっただけです」

「そんな事ないわ。……でも嬉しい、さっきの言葉といい今だって私をチャンピオンじゃなく私として見ようとしてくれているから」

「でも、シロナさんもそういう風に見られるのは嫌だって言ってしまったから……」

「それでもね。チャンピオンなんて肩書きがあるとみんな私を特別扱いしてくるの。」

仕方ないのはわかってる、でも私はただポケモンが大好きでひたすら強くなろうと努力して、いつの間にかチャンピオンになってただけだから。

特別でもない、それがわかってもらえないのはちょっと悲しいわね……」

「シロナさん……」

「でも、君みたいに私を私として見てくれる人がいるってわかったから、わざわざシンオウからカントーに来て良かった」

ニコリと、見とれてしまうような笑みを見せられ、おもわず視線を逸らしてしまう。

「そうだ。ねえレイジくん、この後何か予定はあるかしら？」

「いえ、別に……」

「なら、一緒にお昼ごはんでも食べない？」

せっかく出会う事ができたのだし、それに……私、なんだか君に興味が湧いたから」

「は、はあ……」

どうしようか迷ったが、特に断る理由もなかったのが、彼女の提案に頷きを返す。

すると、パアツと瞳を輝かせるシロナ。

「ありがとうございます。それじゃ早速行きましょう！」

「わっ……」

いきなり手を引っ張られ倒れそうになるが、どうにか堪える。

（……やっぱり、変わった人だな……）

大人の雰囲気を見せながらも、行動や言動はどこか子供っぽい。

もはやチャンピオンとして見ろと言われても無理な話だ。

尤も、彼女はそんな事を望んでいるわけではないので、好都合ではあるが。

……。

「――うーん」

「……………」

先程からメニューを見ながらうなり声を上げているシロナに、レイジはなんともいえない表情を浮かべるのみ。

シロナに連れられ、近くにあったレストランに足を運んだレイジ。

食事はそこそこ美味しく、カグヤに悪い事をしてしまったなと思いつつ、シロナと共に最後のデザートを決めようとしているのだが……。

（…………いつまで悩んでるんだ？）

自分の注文は決まった、だがシロナはさっきからメニューとにらめっこを続けるだけで、いまだにデザート一品決める事ができないでいた。

普通の食事では割とすぐに決めたというのに、何故かデザートはなかなか決められないようだ。

なんだかますますチャンピオンとしてのイメージが崩れ、今まで自分が抱いていたチャンピオン像は何だったんだーと言えなくもないが、彼にとっては今のような彼女の方が好ましい。

「…………ごめん。まだ決まらない」

「気にしないでください、ゆっくり決めてくれればいいですよ」

「レイジくんは優しいのね、ゴヨウやオーバには考えられないわ。私がデザートで悩んでると「早く決めろ」って煩いの」

（まあ、仕方ない感は否めないけどね……）

今までカグヤに振り回されてきたせいで、随分我慢強くなれたと思う。

「うーん……よし、決めた!!」

ようやく決まったようだ、ちなみにメニューを開いてから軽く一時間経過していた。

レイジはオーソドックスにバニラアイスだが、シロナが選んだのは……とてつもなく大きなパフェだった。

「……甘いもの、好きなんですわね」

「うん。だって甘いものを食べたら幸せな気持ちにならない？」

「僕にはいまいち理解できませんけど……それ、カグヤも言っていました」

「カグヤって、貴方の彼女？」

「いえ、幼なじみで一緒に旅をしてるんです。彼女の夢はポケモンマスターで、いつかはシロナさんを倒してチャンピオンになるそうですよ」

「あら、それは楽しみね。……けど、レイジくんはただの付き添い？」

「ええ、まあ」

「……なんだか勿体ないわね。貴方、トレーナーとして凄い才能を持ってるのに」

「……それ。カグヤや他の人からも言われましたけど、僕はそんなつもりなんてないんです。

ただ色々なポケモンが見たいだけだし、それに……戦うのは嫌だから」

「……戦うのが嫌？」

ほんの少し、眉を潜めながらシロナはレイジの言葉に反応する。

「僕は、たとえばポケモンバトルでもポケモンに傷ついてほしくないんです。

だから、極力バトルはしたくない」

リオンなどは不満に思っているようだが、バトルを好まないレイジにとってその不満は解消する事はできない。

「……その考えが間違いとは言わないわ。でも……貴方、どこかバトルをポケモンを傷つける悪いものと思っていない？」

「……………」

ピクリと、シロナの言葉に反応するレイジ。

やっぱり、心の中で彼の心中に対したため息をつきながら、シロナは言葉を続けた。

「レイジくん、確かにポケモンバトルでポケモンは傷ついてしまうわ、それは絶対に変わったりしないし事実よ。

でもね、バトルを通じてでしか成長できない所もあるの。

勝ちたいと思う心、もっとポケモン達と仲良くなりたいという想い、それはポケモンバトルの中で確実に芽生え成長していくものよ。——私もね、初めは君と同じくポケモンが傷つくポケモンバトルが嫌いだった」

その言葉に、レイジはおもわず顔を上げた。

あのシロナが、チャンピオンとして相当の実力者である彼女が、ポケモンバトルが嫌いだったなど一体誰が信じようか。

「でもね。みんなが心の底から戦いたいたいという思いを感じ取ってから、私は少しずつバトルを繰り返していった。

もちろん数え切れないほど負けたりしたし、ポケモン達が傷ついたのには心を痛めた事もあった。

それでも、前に進んだ結果——チャンピオンになっちゃったの」

いたずらっぽく笑うシロナに、レイジは何も言えなくなった。

……自分は、ただ前を見ずに逃げただけだったのだろうか。

ポケモンバトルを悪と決めつけ、目を背けていただけなのだろうか。そう思っていると、突然腰のモンスターボールからティナ達が姿を

現す。

へパパ、ティナ達はバトルするの楽しいよ。
それにバトルしてるパパ、すっごくかっこいいし、一緒に戦える
のも凄く嬉しい♡

「ティナ……」

自分達も同じ気持ちだと、リオンとヒカリも彼にそう伝える。

……傷つくのは嫌だ、でも傷つかなければ得られないものもある。

「……ありがとう、みんな」

へううん。ティナ達の方こそありがとうだよ。

優しいパパの傍に居させてくれて、ありがとう♡

ニッコリと笑顔になるティナの頭を優しく撫でる。

すると、自分達も撫でてくれとリオンとヒカリも彼に詰め寄ってきた。

「ふふっ、本当にポケモンに好かれているのね。」

それにそのラルトス……貴方の言った通り普通のラルトスよりず
っと強いわ。

将来、とても強くなれるわね」

へむっ、ティナはもう強いもん！♡

「ふふっ、ごめんなさい」

怒るティナに、笑いながら謝りレイジと同じように頭を撫でるシロナ。

「――ポケモンと会話する能力を持つ子供がいる。ナナカマド博士から聞いた時は半信半疑だったけど、まさかそれがレイジくんだったなんて……」

「……………」

「レイジくん、貴方のその力はとても尊いものよ。これからも大事にした方がいいわ」

「はい、わかってます」

その時、店員が2人のデザートを持ってきてくれた。

先程までの真剣な表情は消え、再び子供のように瞳を輝かせるシロナ。

（どれだけ甘いものが好きなんだろう……）

いやしかし、カグヤも今のシロナと同じような状態になった時もあった。

……女の人というのは総じてこうなのか。

「~~~~っ、美味しい!!　ねえ、レイジくんも食べてみる?」

チョコアイスを掬い、レイジの口元にまで運ぶシロナ。

しかし、これでは彼女との間接キスに……。

「どうしたの？」

「……いえ」

邪な事を考えた自分が恥ずかしくなった。

内心自己嫌悪に陥りつつも、おとなしく彼女から 差し出されたアイスを口に運ぶ。

「どう？」

「……甘いです」

「まあアイスだからね」

言いながら、次々とパフェを口に運んでいくシロナ。

（ああ……口元にクリームが）

食べ方も子供っぽい彼女に呆れながらも、紙ナプキンを取り出し彼女の口へ。

「……レイジくん？」

「えっ、あ……」

そこでようやく、自分のしている事に気づき慌ててシロナから離れ

る。

（な、何をしてるんだ僕は……カグヤのが癖になって……）

「……こんな事されたのは、初めてね。

——ちよっと、嬉しかったかも」

「えっ？」

「っ、い、いいえ……なんでもないから気にしないで」

「はあ……」

気にしないでと言われれば余計に気になるが、訊くのは野暮だろう
と思いやめた。

「そ、そうだレイジくん。戦う意志も芽生えたみたいだし、記念に
私とバトルしてみない？」

「無理です」

0コンマ一秒による即答、おもわず見事と言ってしまいそうなほど
早かった。

だがしかし、レイジの気持ちもわからないでもない。

何せ相手はシンオウ最強のトレーナーだ、最近ポケモントレーナー
になった自分が戦ったところで、無意味に決まって——

「……………」

そこまで考えて、シロナの言葉を思い出した。

——バトルを通じてでしか成長できない所がある

そうだ、勝ち負けなど関係なしに、彼女とのバトルは必ず意味のあるものになるはず。

「……わかりました、お願いします」

「……そう。じゃあさっそく……と言いたい所だけど」

「……………」

「パフェ、食べてからでもいい」

……………。

しっかりとパフェを食べ終え、外に出るレイジとシロナ。

「使用ポケモンは一体ずつ、それ以外は特に制限は無しよ」

「はい」

「私はこのポケモンを出すわ。——行きなさい、ガブリアス!!」

高らかと投げられたボールから飛び出したのは、マッハポケモンであるガブリアス。

「―――っ」

対峙するだけでもわかる、凄まじいまでの力とプレッシャー。

「……これが、シロナさんの切り札ですか？」

「ええ。貴方相手に手に抜きたくないから」

（もしかして、シロナさんっていじめっ子？）

初心者トレーナーである自分に対して切り札を出すなど、鬼畜にもほどがある。

まあ、今更あーだこーだ言っても仕方がないのだが。

「―――ティナ」

（うん）

名を呼んだだけでレイジの意志を理解したのか、ティナが地面に降りガブリアスと対峙する。

勝負は戦う前から着いている、ティナではたとえ何が起ころうともガブリアスには勝てない。

だが、このバトルは勝つのが目的ではなく、いわばバトルに対して間違った解釈をしていた自分と決別するため。

そして、彼女との戦いで何かを得るために戦うのだ。

「……いい目ね。貴方とのバトル、早く始めたくてウズウズしてたわ」

へ……勝てないまでも、ダメージは与えてみせる!!」

そう宣言し、ティナは懐から何か石のようなものを取り出し投げ捨てる。

その石を見て、レイジは驚愕の声を上げた。

「それは——“かわらずのいし”!？」

ポケモンの進化を止める不思議な石である『かわらずのいし』

へごめんねパパ、実はずっと前から持ってたの。

パパは戦いを望まなかったから、この姿のままでいいと思ってた、けど……このままじゃ何もできずに負けちゃうから」

ティナの身体が白い光に包まれていく。

——それは、“進化”が始まった兆候である

やがて光が収まり、ティナはラルトスからキルリアへと進化を遂げていた。

「ティナ……」

へお父さん、これならいい勝負ができるはずだよ。新しい私で、精一杯頑張ろう!!」

「うん、行くよティナ!!」

〈はい!!!〉

「いいわ……おもいつきりぶつかってきなさい!!」

シロナの声に応えるかのように、ガブリアスもけたたましい雄叫びを上げレイジ達を迎え入れた。

「ティナ、シャドーボールだ!!」

両手を合わせ、漆黒の光弾をガブリアスに向けて撃ち放つ。

しかしガブリアスはその場から一步も動かず、シャドーボールは迷う事なく命中した。

〈避けない……!?〉

「——いや、避ける必要がないだけだ」

レイジの呟くような言葉は、すぐさま現実のものとなる。

〈そんな……!?!〉

ティナのシャドーボールは確かに命中した。

だが——その攻撃はガブリアスにダメージを与える事ができなかったのだ。

（強い、なんてものじゃない……!!）

ケタが違う、まさしくその言葉が一番合っているだろう。

それほどまでに、実力差は明白だった。

「ガブリアス、じしん」

雄叫びを上げ、ガブリアスはその逞しい脚を地面に叩きつける。

「っ、上に跳んで!!」

レイジの命に応え上に跳んでじしん攻撃を回避するティナ。

だが、これで完全にガブリアスに対して無防備になる——!!

「はかいこうせん」

ガブリアスの口から放たれるはかいこうせん。

協力無比なこの攻撃を、ティナは避ける事ができずに……。

「サイコキネシスではかいこうせんを曲げて!!」

ガブリアスのはかいこうせんをあらぬ方向に無理矢理ねじ曲げる事で回避した。

(……素晴らしい!!)

トレーナーの命令もだが、なによりあのキルリアの力が凄い。

まさかガブリアスのはかいこうせんを曲げるほどのサイコパワーを持ち合わせているなど、楽しくて楽しくて仕方がない。

凄まじい強さ故に、今まで彼女に対して多くの挑戦者がやってきたが、心踊るような戦いはできなかった。

しかし、目の前の少年は違う。自分が心から楽しめる戦いを繰り広げてくれる。

そしてなにより嬉しかったのは――自分をチャンピオンシロナとしてではなく、ただのポケモントレーナーシロナとして戦ってくれている事がなによりも……。

「ティナ、れいとうパンチだ!!」

真っ正面からティナが向かってくる。

「――ガブリアス、“後ろに”ドラゴンクロ」

「なっ――!!?」

真っ正面から相手が向かってくるというのに、シロナは後ろに技を仕掛けろと命じた。

一見すると理解不能な行為だが――シロナにはわかっていたのだ。

「ティナ!!」

前から来るティナはかげぶんしんの一つで、後ろから奇襲を仕掛けてきたのが本物だという事に。

まともにドラゴンクローを受け、地面に転がり続けるティナ。

「ティナ、もう――」

もういい、そんな言葉が喉元までせり上がり……すぐに飲み込んだ。

違う、こんな言葉など彼女は望まない、彼女が望む言葉はこうだ。

「――頑張れティナ、まだやれるはずだ!!」

へ……う、う、ん……

たったの一撃でティナの身体には大きなダメージが負わされている。

次に攻撃を受ければ、間違いなくそこで終わりだ。

しかし、まだ立ち上がれる以上は諦めない。

「ガブリアス、トドメのドラゴンクローよ」

決着をつけようと、ガブリアスがこちらへと向かってくる。

(足止めをしないと、懐には入れない……でも、どうやって……?)

考えがまとまらない中、ガブリアスは容赦なくレイジ達に向かってくる。

おもわずティナをボールに戻そうとした瞬間、レイジは無我夢中で叫んだ。

「ティナ、“地面に”れいとうパンチだ!!」

「え———?」

地面に叩きつけられるティナのれいとうパンチ。

それは瞬く間に彼女の周りの地面を凍らせ、それに飽きたらずまるで氷の蔦のようにガブリアスに向かっていく。

「ガブリアス、じしん」

再び先程のように脚を地面に叩きつけ、じしんによって迫りくる氷の蔦は碎け散った。

「シャドーボール!!」

その隙を突き、ガブリアスの右脚にシャドーボールが命中。

しかし意味はなく、ガブリアスにダメージを与える所か傷一つ——

「消えた!!!?」

シャドーボールを放ったはずのティナの姿が見えない。

「ティナ——」

「甘いわね。ガブリアス、後ろにりゅうのいぶき」

しかし、そんな奇襲などシロナには通じない。

すぐさまティナの居場所を見つけ出し、今度こそ終わりにしよう。

「フルパワーでふぶきだあっ！！！」

「なっ——」

避けなさい、その命中がガブリアスに届くよりティナの攻撃の方が速い！

凄まじい氷の礫がガブリアスを襲う——！

「ガブリアス！！」

「っ、このまま押し切れ！！」

〈くううう……！！〉

これを逃せばもう終わりだ、ティナに力など残されていない。

だが、このまま行けばきつと——

「——げきりん」

「え——」

勝てる、そんな思考など瞬時に消え去った。

——何が起きたのか、わからない

だが、ふぶきをまともに受けているはずのガブリアスの身体が光ったと思った瞬間、ティナの身体は吹き飛ばされ……。

この勝負に、幕が降ろされたという事を理解させられた。

……。

「ティナ……」

〈……負けちゃった〉

本当に悔しそうに、ティナは唇を尖らせる。

(……悔しい)

生まれて初めてだ、こんなに悔しいと思ったのは。

勝てるわけがないとは思っていた、それは今だって変わらない。

だがそれでも、この勝負に負けて本当に悔しい。

「——驚いたわ。まさかふぶきまで使えるなんて……ティナは随分育てられているのね。」

それに、シャドーボールにれいとうパンチ……本当にキルリアと戦っていたのかと思ってしまったわ」

少し傷ついたガブリアスの身体を優しく撫でながら、シロナはレイジの元へ。

「楽しい勝負をありがとう、こんなにワクワクしたバトルは本当に久しぶりだった」

「シロナさん……」

「やっぱり貴方は素晴らしいトレーナーよ、きっといつか……そう遠くない未来、チャンピオンにだってなれるくらい」

「……チャンピオン」

そんな目標など、必要ないと思っていた。

——でも、今は

もう一度、シロナと戦いたいと思っている。

そして勝ちたいと、心が叫んでいる。

「——シロナさん」

「何かしら？」

「今度は、必ず勝ちます。もっともっと強くなって……必ず貴方に勝ってみせます!!」

それは、初めて彼が感情を爆発させた瞬間だった。

必ず勝つと、次は絶対に負けないという意志を持って、シロナに告げた。

「……ええ。私は待ってるわ、貴方が今よりもっと強くなって、私の所にまで辿り着く時を」

それを、優しい笑みで受け入れて、シロナはレイジを優しく抱きしめた。

「シロナさん……？」

「ふふっ……本当にカントーへ来て良かった。

貴方のような素晴らしいトレーナーに出会えたから……」

やがて身体を離し、ガブリアスの身体に乗るシロナ。

「それじゃあまたどこかで会いましょう、レイジくん」

「はい」

「……次にまたどこかであつたら、またアイスを食べに行きましようね？」

「はい、約束です」

約束よ、そう言い残しシロナはガブリアスと共に飛び立ち……やがて姿が見えなくなった。

「……凄かったね」

「うん。やっぱりチャンピオンは伊達じゃないよ。それはそうとテイナ……君が進化しなかったのはかわらずのいしを持っていたからだったんだね」

「ごめんなさい、隠すつもりはなかったんだけど……」

「別に怒ってるわけじゃないよ、ちょっと驚いただけだから。」

「——それじゃあ、センターに戻ろうか？」

「うん!!」

一度、シロナの飛び立っていった場所を見上げる。

（……次は、負けません）

自分でも随分と恐れ多い事を考えているな、そう思いつつ。

傷ついたテイナを抱きかかえ、レイジはポケモンセンターへと向かったのだった。

その後、カグヤに今日は何をしていたのか訊かれ、正直に話すと大層驚かれたり、2人で食事をした事に対して不機嫌になったりしたのは、また別の話……。

レイジのポケモン2

・ティナ(2)

ラルトスが進化してキルリアになった姿。シロナとのバトルの前に全力で初めて全力で戦うレイジの為にかかわらずのいしを投げ捨て進化した。

一人称が「私」になったり、レイジを「お父さん」と呼ぶなど性格が大人っぽくなったが、根本は変わっていない。

進化してラルトスでは使えなかった技を数多く習得し、レイジのメンバーでは実力はトップクラス。

・ヒカリ

♀のピカチュウ。トキワの森でレイジが助けた結果、恩返しをするために自らゲットされた。

元々はとあるトレーナーのポケモンだったが、彼女曰わく三流以下だった為逃げ出した経緯を持つ。

前のトレーナーの元で鍛え上げられたからか、10万ボルトを始めとした強力な電気技を操る実力者。

普段はボールの中に入っているが、よく抜け出してはレイジの頭に乗っかって頬擦りをしたりしている為、時折ティナと喧嘩するが仲は悪くない様子。

レイジやカグヤには心を開いているが、他の人間に対してはまず警戒心を抱くなど人間に対してあまりいい感情を抱いていない。

一人称は「ピカ」で、全員呼び捨てで呼んでいる。

第7話 くダブルバトル！ ハナダシティでの激闘（前書き）

この話から、紅さんという方がわざわざ考えてくださったオリキャラが登場します。お楽しみに！

紅さん、本当にありがとうございます。

第7話　くダブルバトル！　ハナダシティでの激闘く

「……んゝ、やっと着いたね」

大きく伸びをしながら、カグヤはふうと息を吐く。

――ここはハナダシティ、ハナダジム制覇を目指し、おつきみ山を3日掛けて越え、ようやく辿り着いたレイジ達

ちなみに、おつきみ山では特に何も起こらなかったので割愛させてもらう。

手抜きというなかれ、行く先々で何かが起こるほど世の中甘くない。

「さっそくジム戦、と言いたいけど……みんなを休ませないとね」

「うん。そうだね」

「そういえば、レイジもジムリーダーに挑戦するつもりなの？」

「そのつもりだけど……」

「……なんか、レイジ変わったね」

「えっ？」

「だって、前はそんな風にバトルを進んでやろうとしなかったじゃない」

「……まあ、ね」

けれど、自分のあの考え方は間違いだったと教えてくれた人がいた。そして再戦を約束した以上、今よりもずっと強くならなければ。

本気の彼女と渡り合えるくらい、強く……。

「……むう。なんか面白くないなあ」

「何がさ？」

「うーん……私もよくわからないけど、レイジからシロナさんの話が出るのは……なんか、やだ」

「???」

そんな事を言われても、レイジとしては困ってしまう。

「カグヤはシロナさんの事が嫌いなのか？」

「そういうわけじゃなくて、うーん……ごめん、上手く説明できないや」

「……………」

曖昧なカグヤの言葉に、レイジはただ首を傾げる事しかできない。けれどカグヤは気にしないで、と言って再び歩き始めたのでレイジとしても気にしない事にした。

へお父さん、ちょっと待って

ポケモンセンターの前まで辿り着いたレイジ達だったが、突然ティナの制止の声が掛かる。

「どうしたの？」

へ……………

「ティナ？」

へ…………ごめんなさい。気のせいだったみたい

「気のせいって……………どうかしたの？」

へうん。その…………ポケモンセンターの中から不思議な力を感じて…………

「不思議な力？」

へでもやっぱり気のせいだったみたい、ごめんなさい

「いいよティナ、別に謝らなくても。

それじゃあレイジ、入ろう？」

ティナの言葉にどこか引っかかりを覚えながら、カグヤに促されセンターに入る。

「……………」

すると入った瞬間、不思議な感覚に襲われた。

これは――共鳴、だろうか？

何かに呼ばれているような感覚に、レイジは暫しその場で立ち尽くしている。

「あつ、お前が持つてるのってキルリアか？」

突然横から声を掛けられてしまった。

「そうだけど……」

「へえ、ハウエンには行った事がないから初めて見たけど、なんか女の子みたいだな」

「みたいじゃなくて女の子だよ、ティナは」

「ティナっていうのか……って事は、お前ポケモントレーナーだよな？」

「えっ、あ、うん……」

「よし、それじゃあ俺とバトルしようぜ！」

「はぁ……?。」

なーないいいだろー、いきなり話しかけてきたと思った時には、既にバトルを申し込まれてしまった。

（何なんだ、この人は……）

歳は自分と同じくらいだろうか、少しボサボサの黒髪に吸い込まれそうな黒真珠のような瞳。

腰にはモンスターボールが備わっているので、彼もトレーナーだというのはわかるが……。

「俺はカイリ、シンオウ出身のポケモントレーナーだ。というわけで、さっそくバトルしようぜ！」

「どういうわけだよ。いきなりそんな事言われても――」

「困るに決まってるじゃない、そんな事もわからないほど子供なのあなたは？」

カイリと名乗る少年の後ろから、すなわちレイジの正面から今度は少女の声が聞こえた。

「あっ、ヒメカ。見てみろよ、キルリアだぜ？」

「それ以前にいきなりバトルを仕掛けようとする所を反省しなさい。ほら、この人だって困ってるじゃない」

「けどさ……」

「悪いって自覚、無いのかしら？」

ヒメカと呼ばれた少女が睨むと、カイリはあっという間におとなしくなった。

へまるでアーボックのへびにらみみたい

（たしかに……）

「わりい、珍しいポケモンだったからつい……」

「わたしの方からも謝らせてもらうわ、連れが迷惑を掛けてごめんなさい」

「別に気にしなくていいよ」

多少驚いただけで、別にバトルを申し込まれた事に対しては断るつもりなどなかった。

と、レイジはヒメカという少女をようやくまともに見る事ができた。

腰辺りまで伸びた、雪のように白く美しい髪、瞳の色は深い紫色。

少し童顔で、おそらく自分達と同じか少し下程度だろう。

しかし——なにより少女の身体付きを見て驚いた。

いわゆる出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる体格だが、少し出過ぎていると言っても過言ではない。

（シロナさん以上かもしれない……）

気恥ずかしくなって、つい少女から視線を逸らしてしまうレイジ。
すると、ポケモンの治療を終えたカグヤが何事かはこちらへとやってきた。

「どうしたの？」

「ああ、いや……」

「わぁ……」

どう説明しようか考えていると、ヒメカを見たカグヤが彼女を見ながら驚きの声を漏らした。

「な、なんですか？」

「……いいなあ。おっぱい大きくて」

「ぶっ!!!??」

「なっ——!?!?」

初対面の相手に何てことを言うのかこの娘御は。

「私も毎日マッサージとかしてるけど、全然大きくならないのよ。レイジ、どうしてだと思う?」

「僕に振らないで。えっと……ごめん、連れが失礼な事言って……」

「いいじゃねえか。ヒメカの胸がデカいのは本当なんだし——ぐえっ！！」

見事なボディブローがカイリの腹部に突き刺さり、そのまま崩れ落ちた。

それを見てレイジとカグヤの表情がともに引きつる。ヒメカはそんな彼等をキッと睨んできた。

「ご、ごめんなさい！！ 失礼な事言ったりして……」

「……別に、気にしてませんから」

嘘だ、おもいっきり気にしてる、だって顔とか凄く引きつっているから。

（はぁ……おつきみ山では面倒事に巻き込まれなかったからって油断してた……）

「よし、自己紹介も終えたしバトルするか」

「復活早っ」

「まあな。いつもヒメカにど突かれてるから」

（いつも……？）

「ちょっと、誤解を招く言い方をしないで。

それじゃあわたしが乱暴女みたいじゃない」

（違うの？）

そんなツツコミが喉元までせり上がってきた。

「なあ、いいだろ？」

「もっちゃん、ジム戦の前に準備運動しないと！」

「へっ、準備運動で済めばいいけどな」

「望む所よ。でもせっかく2対2だしダブルバトルでもしてみない？」

『はあ？』

レイジとヒメカの声が見事にハモった。

「おっ、それはいい考えだな！」

「レイジ、いいよね？」

期待を込めたカグヤの視線。

……仕方ない、そう言われてしまえばレイジとしても断るわけには
いかない。

「僕は構わないけど、君はどうなの？」

視線をヒメカに。

3対1という状況だからか、それとも説得しても無駄だと悟ったの

か。

「はぁ……わかったわよ」

疲れたようにため息をつき、仕方ないとばかりに承諾した。

……。

ハナダシティにある広場へと移動し、モンスターボールを構える4人。

「ヒメカ、完全勝利を目指そうぜ!!」

「はいはい、わかったわよ」

「私とレイジのコンビネーションを見せてやるんだから!!」

(さて……うまくいけばいいけどね)

油断などしない、全力でバトルをするだけだ。

周りのギャラリーがざわめく中——バトルが開始された。

「ツタージャ、いけえっ!!」

「ロール、出番よ!!」

まずポケモンをボールから出したのは、カイリとヒメカチーム。

カイリはツタージャ、ヒメカはミミロルを場に出す。

「ミミロルは知ってるけど……あのポケモン、初めて見た」

「それはそうだよ。イッシュ地方のポケモンだからね」

このカントーから遠く離れたイッシュ地方、そこに生息するポケモンはレイジも初めて見た。

「レイジ、あのツタージャって何タイプ？」

「草だよ」

「草かぁ……なら草には草よ。」

チコリータ、レディーゴー!!」

(れいとうビームが使えるエネコを出せばいいのに……)

しかし、彼女がどんなポケモンを出そうが彼女の自由だ。

そして、レイジが場に出したポケモンは……。

「リオン、お願い」

炎タイプのポケモン、ヒトカゲ——リオンを取り出した。

「ヒトカゲかぁ……けど、俺のツタージャには適わねえよ!!」

「さて……そいつはどうかな？」

リオンも臨戦態勢に入ったのか、ツタージャとロールを睨む。

「先手必勝!! ツタージャ、ヒトカゲにつるのムチだ!!」

「させない。チコリータ、こっちもつるのムチで迎え撃って!!」

リオンに向かっていくつるのムチを、チコリータのつるのムチで防ぐ。

……ツタージャはカグヤとチコリータに任せればよさそうだ。

「リオン、僕達はあのミミロールを倒すよ」

「悪いけど、こっちも負けるつもりなんてないから」

「僕もだ。リオン!!」

「ロール!!」

「かえんほうしゃ」

「れいとうビーム!!」

リオンのかえんほうしゃとロールのれいとうビームがぶつかり合い、水蒸気を発しながらも互いに譲らない。

「かげぶんしん」

「甘いわね。みやぶるからとっしん!!」

「っ」

かげぶんしんでリオンの分身が増えていくが、ロールは惑わされず分身達を無視し、リオンをとっしんで吹き飛ばす。

空中で体勢を立て直すリオンだが、その顔には僅かに驚きの色が見え隠れしている。

（上手い戦い方だ……結構慣れてるな）

トレーナーとしての腕はそれなりに高いらしい。

だが、こちらとて負けるつもりなど微塵もない。

「かえんほうしゃ」

「れいとうビーム!!」

再びぶつかり合うが、やはり互角なのか互いの技を相殺するのみ。

（こんな単調な攻撃しかしてこないの……?）

先程と同じ攻撃を仕掛ける相手に、ヒメカは眉を潜める。

それなりに高い実力のトレーナーかと思ったのだが、見込み違いか……?

「ロール、にどげりよ」

飛び上がり、リオン目掛けて蹴りを放つロール。

それを回避しようともせず、リオンは黙って見つめるのみ。

相手の意図がわからず、少し不気味に思った瞬間、ようやく相手が動いた。

「リオン、あなをほる」

「なっ——」

すぐさまリオンは地面に穴を掘り始め、ロールの攻撃は見事に空ぶってしまふ。

「ロール、気をつけて」

——どこから来る？

（右側？ それとも左から？）

だが出てきた瞬間、特大のれいとうビームを浴びせてやる。

しかし——いつまで待ってもリオンの姿は現れない。

どうして、そんな疑問が頭に浮かぶより早く。

「はっぱカッター!!」

「っ、避けて!!」

右側から迫り来るはっぱカッターをどうにか回避した。

しかしそれはチコリータに絶対的な隙を作らせ、背後からツタージヤの攻撃が迫る。

「もらった!!」

「どうかな？」

カイリの声と、レイジの声が重なった瞬間。

「しまっ——カイリ、逃げて!!」

ヒメカは、レイジ達の作戦に気がついた。

「へ……？」

勢いよく地面から飛び出してくるリオン。

——チコリータに攻撃を仕掛けようとして、隙だらけになったツタージヤの後ろから

「げっ!？」

今頃気づいたカイリとツタージヤだが、もう遅い。

「かえんほうしゃだ」

リオンのかえんほうしゃがツタージヤに見事命中し。

「チコリータ、とどめのたいあたり!!」

「っ、させない。ロール、きあいだま!」

「きあいだまにほのおのうず」

「っ!」

ロールの放ったきあいだまが、凄まじい炎によって包まれ消滅した。それと同時にチコリータの攻撃がツタージャにヒットし、目を回し倒れる。

「くっそー、戻れツタージャ!」

本当に悔しそうにツタージャを戻し、別のボールを取り出すカイリ。

「チコリータ、ありがとう。」

「エネコ、レディーゴー!」

カグヤもチコリータを戻し、代わりにエネコをフィールドに出す。

そして。

「モウカザル、頼んだぜ!」

カイリが出した二匹目のポケモンは――モウカザル。

（強い……!）

おそらくあれがカイリの切り札、エース級のポケモンだ。

「リオン、かえんほうしゃ」

「モウカザル、こっちもかえんほうしゃだ!!」

リオンとモウカザルのかえんほうしゃが激突する。

「互角……」

——ではない!

先程の戦闘で疲れたのか、リオンの炎が目に見えて弱くなっている。

「エネコ、リオンを援護して——」

「ロール、ピヨピヨパンチ!」

「くっ!?!」

援護しようとしたエネコに、ロールのピヨピヨパンチが放たれ間一髪それを回避する。

そして——モウカザルのかえんほうしゃがリオンのかえんほうしゃを打ち破り、凄まじいパワーでリオンを吹き飛ばした。

「リオン!!」

倒れ、目を回し戦闘不能に陥るリオン。

それをゆっくりボールに戻し、二匹目を取り出すレイジ。

「あのキルリアを出すのか？」

「いや……ヒカリ、お願い!!」

戦場に出したのはピカチュウ——ヒカリである。

「ピカチュウ……電気タイプのポケモンね」

「へへっ、そんな可愛いだけのポケモンで俺のモウカザルに勝てるかな？」

「ヒカリは強いよ。甘く見てると……おもわぬ痛手を負うかもね。ヒカリ、モウカザルに10万ボルト!!」

「じゃらくせえ、モウカザル、かえんほうしゃだ!!」

ヒカリの10万ボルトをモウカザルのかえんほうしゃが押し返す。

「かえんぐるま!!」

「でんこうせっか!!」

自身の身体を炎で包み、ヒカリに向かっていくモウカザル。

しかしヒカリはでんこうせっかでモウカザルの攻撃を回避する。

「モウカザル、あなを——」

「遅い、でんげきは!!」

モウカザルが地面に穴を開ける前に、ヒカリのでんげきはが見事命中。

致命傷にはならなかったものの、確実にダメージを与える事ができた。

「レイジ!!」

(頃合いか……!!)

カグヤの声に頷きを返し、ヒカリをエネコの隣に移動させる。

「——次の一撃で、決着つけてやるんだから!」

「おもしれえ……やってみやがれ!!」

モウカザルの炎が膨れ上がる、向こうもパワーを溜める気らしい。

対するこっちも、パワーを溜める為にその場で力を込める。

『————』

睨み合う4人。

暫し、時間が止まったかのような静寂が訪れたと思った瞬間。

「ヒカリ!!」

「エネコ!!」

「モウカザル!!」

「ロール!!」

『フルパワーで……』

4人の声が重なり、そして……。

「かみなりだ!!」

「ふぶきいっ!!」

「かえんほうしゃ!!」

「れいとうビーム!!」

自分のポケモンが放てる最強技を、その場に解き放つ——!!

凄まじい爆音と水蒸気がフィールドに溢れ、レイジ達どころか観客達まで包み込んでいく。

鼓膜が破れてしまったのではないかと錯覚してしまうほどの轟音に、レイジもカグヤも耳を押さえその場に跪く。

「っ、エネコ達は……?」

まだ痛む耳を気にしながら、勝敗の結果を確かめようと立ち上がるカグヤ。

だが、技のぶつかり合いで発生した水蒸気によってフィールドはまだ見えない。

「……………」

やがて、煙が晴れていきカイリ達の姿も確認できるようになった。

だが——勝負の結果は意外な結末を迎えてしまったようだ

「嘘……」

「……………まいったね。今回は“引き分け”だ」

仲良くフィールドに倒れている四匹のポケモン達。

それは、この勝負の終わりを告げるなによりの証となり。

そして……………引き分けてしまった結果を教えてくれたのだった。

……………。

「——へえ。お前等ポケモン図鑑持つてるんだ……………いいなあ」

「カイリ、口に食べ物を入れたまま喋らないで」

へーい、と気の抜けた返事を返しながら、カイリはレイジから見せてもらっているポケモン図鑑を興味深そうに覗き込んでいる。

——バトルも終わり、すっかり意気投合してしまったカグヤとカイリ
ポケモン達を休ませるため、ジム戦は明日にしようという事で、現
在は夕食と一緒に食べている最中だ。

「でもカイリ、どうしてわざわざカントーに来たの？
シンオウにだってポケモンリーグはあるじゃない」

「いや、俺も最初はそうしようとしたんだけどさ……シンオウのポ
ケモンリーグまであと2ヶ月しかないから、今回は諦めたんだよ」

「えっ、そうなの？」

「地方によって開催日は変わるからね。カントーはあと9ヶ月ほど
あるけど、シンオウはもう2ヶ月を切ったよ」

「へえ……レイジ、物知りだね」

「……ポケモンリーグを目指してるなら、知らないとおかしいと思
うけど」

「そうなの？」

ズレた返答を返すカグヤに、レイジはため息を返すばかり。

「けど、さっきはすげえ勝負だったな。

レイジもカグヤもなかなかやるじゃねえか」

「カイリだってなかなかだったよ、もっとも私の方が強かったけど」

「何だと？　じゃあもう一回勝負してみるか？」

「いいわよ。受けて立とうじゃない！！」

席から立ち上がり、睨み合う2人。

「はいはい、わかったから」

「2人とも、恥ずかしいから席に座りなさい」

そんな子供組を事も無げにおとなしくさせる大人組。

渋々座りながらも、まだ牽制し合うかのように睨み合う両者。

（……なんだか）

（お互いに、苦勞しているみたいね……）

『はぁ……』

そんな2人を見ながら、無意識のうちにお互いの気苦勞を感じ取ったレイジとヒメカは、同時にため息をつくのだった。

「――あつ、そういえばレイジ。

お前達もカントーのポケモンリーグを目指してるんだよね？」

「うん、まあ……」

「ならさ、一緒に俺達も連れてってくれないか？」

「えっ……」

「いいよー」

「ちょ、ちょっと待ちなさい!!」

レイジは驚き、カグヤは特に考えもせずに頷き、ヒメカは慌ててカ
イリを止める。

「カイリ、いきなり何を言うの？」

「だってさ。俺達カントー地方に詳しくないだろ？」

なら詳しいレイジ達と一緒に行動すれば迷う心配もないし、な
により楽しそうじゃなか!

「……あのねえ」

彼の言い分はわかる、それに一理あるのも確かだ。

だが、今日出会ったばかりだというのに、あまりにも図々し過ぎる
お願いだとは思わないのだろうか。

……思っていないだろう、のほほんとした表情を浮かべているカイ
リを見ればそれがすぐにわかる。

「私は別に構わないよ、旅は道連れ世は情けって言うし。
レイジもいいよね？」

「……まあ、断る理由はないかな」

彼等が悪い人間ではないというのはわかったし、いずれライバルになるとしてもカントー地方の事がわからない2人だけにしては、少し心配でもある。

「――正気？」

「そこまで言われる事じゃないと思うんだが」

「だって、今日バトルしたばっかなのにこんな……」

「楽しいバトルが終わった後は、勝ち負け関係なく友達だよ!!」

「そうそう、カグヤの言う通りだって！」

「……………」

「……もし嫌だったらはっきり言ってもいいんだよ？」

「僕は気にしないから」

「ううん、そういうわけじゃなくて……カイリみたいに脳天気な人が居るとは思わなくて……」

（悪かったね）

とはいえ、彼女の言葉に否定する事はできない。

出会ったのは今日、自己紹介を軽く済ませてバトルをしているだけ。だというのに、いきなり旅に同行させてくれと言ったらあっさりOKしたのだ、ヒメカがそう口にしてしまうのも無理からぬ事である。

「――それじゃあ2人とも、暫くよろしく」

「よろしくね、ヒメカ、カイリ」

「ああ、よろしくな！」

「よろしく……」

【カグヤside】

「ヒメカ、お風呂入りなよ」

「ありがとう」

バスタオルで髪を拭きながら、同室のヒメカに声を掛ける。

今日は私とヒメカ、レイジとカイリという部屋割りだ。

私はレイジと一緒にの部屋でもよかったんだけど、ヒメカがカイリと同じ部屋は嫌だっというものだから……。

「明日から4人で旅ができるね。なんだか楽しみ」

「……でも、本当によかったの？」

「何が？」

聞き返すと、何故かモジモジし出すヒメカ。

はて……一体どうしたというのか。

「だ、だから……その、レイジと2人だけで旅をしなくて……」

「? どうしてここでレイジが出てくるの?」

「カグヤ、あなた達ってその……つきあってないの?」

「付き合う……?」

どういう意味なのかさっぱりわからない。

オウム返しに訊くと、ヒメカはさつきより顔を赤くしながら言葉を続けた。

「あなた達って、こ、恋人同士じゃないのって事よ……」

「恋人同士? 私とレイジが?」

ううん、違うよ。私とレイジは幼なじみで家族だもん」

でも、端から見ると恋人同士に見えるのかな?

そんな事を考えていると、何故か信じられないといった表情を向けられてしまった。

「えっ、だ、だって……あんなに仲が良いのに……」

「もちろんレイジの事は大好きで一緒に居たいと思ってるよ? けど恋人同士じゃないし、それに……私じゃレイジには吊り合わ

ないよ」

レイジみたいな男の子には、私なんかよりもっとしっかりして大人の女性の方がいい。

たとえば……シロナさんとか。

「そういうヒメカはどうなの？ カイリの事が好きだから一緒に旅をしてるんじゃないの？」

「っ、ばっ、そ、そんなわけないじゃない！！」

わたしとあの人は単なる幼なじみ、それ以上でもそれ以下でもないわ！」

そんなに力強く否定しなくてもいいのに……カイリ泣いちゃうよ？

でも……きつと今の言葉は照れ隠しだ。

だって、なんだかんだ言いながらカイリのフォローはきちんとするし。

それになにより、ヒメカのカイリを見る瞳が凄く優しい色をしてた。

友達や家族としてじゃない、異性として彼を見ているってすぐにわかった。

けどヒメカって素直じゃないな、これが俗に言うツンデレってやつなのかな？

明日辺り、レイジにでも訊いてみよう。

「……はあ、なんだかカイリがもう1人増えた気分だわ」

なんで私の顔を見てそんな事言うの？

「まあ……不快ではないけど」

微笑を浮かべ、ベッドから立ち上がるヒメカ。

「お風呂に入ってくるわね」

「うん。……あ、ヒメカ」

いけないいけない、後でもいいんだけど先に訊きたい事があったんだ。

何、と振り返ったヒメカに、私は訊きたかった事を訪ねた。

「どうやったら、そんなにおっぱい大きくなるの？」

と。

だって同じ歳なのにこうまで違うっていうのは、悔しいというかなんというか……。

私もそれなりにあるけど、ヒメカに比べたら月とスッポンだ。

って、なんでずっとこけてるの？

「……あなたねえ」

あれ、なんだろう……なんだか冷や汗が。

何故かこの場から逃げ出そうとするのだが、身体が動かない。

——その後、何故かヒメカに説教されてしまった

やれ女の子の自覚を持てだの、そんな質問をするなだの。

……私、なんか変な事言ったかな？

第8話 くバッジ争奪、水面下のダブルバトル！（前編）く

『たのもー！』

ハナダシティのジム内で、元気な男女の声が響き渡る。

「……これは恒例なんだね」

「そうみたいね……」

そんな声に律儀にツツコミを入れるレイジとヒメカ。

「あら、挑戦者みたいだけど……今日はずいぶんと多いわね」

声を聞き、奥から1人の少女が現れた。

オレンジの髪に、何故か水着姿の少女に面食らってしまった。

「あのー、どうして水着姿なんですか？ ファンサービス？」

（ファンサービスって……）

（相変わらず、何を考えてるのかよくわからないわね……カグヤって）

「あのねえ……そんなわけないでしょうが。」

このジムにはプールがあるの、それに私は水ポケモンといつでも一緒に居られるようにこの姿なのよ」

「えっ……外出する時も？」

「またもピントのずれたカグヤの言葉に、少女は今度こそその場でコケた。」

「ダメだ、このままこの娘御を放っておいたら話が進まない。」

「すみません。この子の言っている事は気にしないでください」

「えー、どうしてそんな事言うのよー」

「いいから、カグヤはちょっと下がってなさい」

「力ずくでカグヤを後ろに追いやるヒメカ。」

「僕達全員挑戦したいんですけど、もし無理なら日を改めますが……」

「大丈夫よ。たった4人なら相手できるわ。」

「もちろん二回に分けてもらわないとさすがに無理だけどね」

「二回って……もしかして、ダブルバトル？」

「そうよ。私は1人で二体のポケモンを使ってあなた達は一体ずつ使ったのダブルバトル。」

「もちろんあなた達のどちらか1人が勝てば両者にバッジを渡すわ」

「……そんなルールがあるなんて」

「どのジムでもその方法で挑戦する事はできるみたいだよ。」

年々ポケモンリーグを目指すトレーナーが増えているから、連盟の方で新しくそう決めたらしい」

「お前物知りだな」

「……まあ、それでもポケモンリーグを目指してるトレーナーだからね」

むしろ、それを知らないのにポケモンリーグを目指しているという方がおかしい。

尤も、レイジも内心ではそんなルールが本当にあるのか半信半疑だったので、あまり強くは言えないのだが。

「よっしゃ、じゃあさっそくバトルだ!!」

「元気のいい挑戦者ね、いいわ……ついてきなさい」

言われた通り、少女についていくレイジ達。

「あっ、そういえば自己紹介もしてなかったわね。

私はカスミ、このハナダジムのジムリーダーよ」

「へえ、俺達より年下なのにジムリーダーなんて凄いんだな」

「歳は関係ないわ。私より年下でも凄いトレーナーはいるもの」

少女——カスミの言う通り、トレーナーに年齢は関係ない。

事実、この少女からもシロナほどではないものの強いオーラを感じ

る。

たとえ自信があり相性の上でも有利だとしても、こちらが勝つ事ができるかどうかはわからないだろう。

「すっげえ……」

「これが、ハナダジムのバトルフィールド……」

ぽつりと呟くヒメカの声にも、確かな驚きの色が混じっている。

ハナダジムのバトルフィールド、それは水が張られたプールだった。

水面の上にはいくつもの足場が浮かんでおり、どうやら水ポケモン以外はあそこで戦うしかないようだ。

「使用ポケモンは一体、私は1人だから二体使うわ。それで、誰から来るの？」

「もちろん私とレイジのコンビから!!」

「何言ってるんだ。俺とヒメカが先に決まってるだろ!!」

（どっちからでもいいじゃないか……）

別に相手は逃げないし時間はあるのだ、ちゃんと挑戦を受けてくれるのだからそんなにがつつかなくてもいいと思うのだが……。

しかし、この2人に正論など通じない。

「じゃあ、ジャンケンで決めればいいじゃない」

そんな中、ヒメカが助け舟を出す。

「よし……」

「負けないんだから……」

まるで負けられない戦いだとも言うように、闘志を燃やす2人。

そんな彼女達にため息をつきつつ、レイジとヒメカは事の成り行きを見つめる。

そして……。

「――よっしゃああっ!!!!」

「ガーン……ま、負けた」

カイリは飛び跳ねるくらい喜び、カグヤはこの世の終わりのような表情を浮かべ膝をつく。

（そんなに?）

（まったく、見てて恥ずかしくなるわね……）

「決まったの?」

「ああ。俺とヒメカのコンビからいかせてもらう!!」

立ち位置に移動し、モンスターボールを構えるカイリとヒメカ。

ウズウズした様子のカイリとは違い、ヒメカは冷静な表情を浮かべている。

対照的な2人だが、何故かそれが自然なように見えた。

……自分とカグヤも第三者から見たらそんな風に見えるのだろうか。

「じゃあ……そろそろ始めましょうか」

「……………」

場の空気が変わる。

ジムリーダーとしての顔に変わったカスミに、カイリの表情も引き締まった。

「……レイジ、カイリ達勝てるかな?」

「さて、ね……」

「あれー、冷めた反応だね」

「どうなるかわからないからね、どっちが勝ってもおかしくない。けど——きっと勝てるさ」

根拠はない、けれど勝ってほしいという願いがそんな言葉を放って

しまう。

だが、その願いは本物だ。

「……そだね」

そんなレイジに、カグヤも笑みを浮かべる。

「ツタージャ!!!」

「ハク、お願い!!!」

カイリは草タイプのツタージャを、そしてヒメカは……。

「あれ、ハクリュー？」

ドラゴンタイプのハクリューを、フィールドに出すヒメカ。

(……強いな。あのハクリュー)

あれがヒメカの切り札だろうか。

「——お父さん」

「っ、ティナ？」

突然勝手にモンスターボールから飛び出すティナ。

「お父さん、昨日感じた力を……また感じるよ」

「……昨日の力？」

へお父さんも違和感として感じたあの力だよ。
昨日よりはつきり感じられる、でも……」

「……………」

そこでもうやく、レイジも昨日感じた違和感が再び表に出ている事に気が付いた。

それだけではない、何故かその違和感を——カイリから感じ取れた。

（カイリ……？）

へ——お父さんと似てる力をカイリから感じられる」

「……………」

「……レイジ、どうしたの？」

様子のおかしいレイジに、心配そうな表情を浮かべるカグヤ。

だがレイジはすぐさまなんでもない、と返事を返し、カイリへと視線を向けた。

（なんだ、この感覚……カイリ、君は——）

「ツタージャ、スターミーにつるのムチ!!」

「スターミー、水中に潜って避けなさい。」

マリルリ、ハクリューにバブルこうせん!!」

ツタージャの攻撃をスターミーは水中に潜る事によって回避し、同時にカスミはマリルリに攻撃を命じる。

「ハク、アクアテール!」

しかしそんな程度ではやられない、ハクのアクアテールが迫るバブルこうせんをすべて叩き落とした。

「凄い……一度に二体のポケモンの戦況を把握して命令が出せるなんて」

だが、ジムリーダーならばそれくらいの芸当は充分に可能だ。

しかし——戦況はカスミが有利だ。

なんといっても水ポケモンに対して有利な水中のフィールドで戦っているのだ、ハクはともかくツタージャでは水中に攻撃を仕掛ける事など——

「ハク、水中にかみなりよ!!」

「っ、スターミー、出てきなさい!!」

水中に落ちるハクのかみなり。

しかし間一髪、スターミーは水中から飛び出し難を逃れるが……。

「グラスミキサー!!」

既に攻撃を仕掛けていたツタージャによって、カスミのすぐ傍にまで吹き飛ばされた。

「ハク、はかいこうせんよ!!」

「マリルリ、まもる！」

トドメとばかりに発射されたハクのはかいこうせんは、まっすぐスターミーへと向かっていくが、それをマリルリがまもるによって防御する。

「もらったぜ。ツタージャ、マリルリにつるのムチだ!!」

マリルリはまもるの動作が終わって隙だらけになっている。

狙うなら今だとカイリとツタージャは攻撃を仕掛けた。

「スターミー、こうそくスピン!!」

「え—————」

いつの間にマリルリの傍に居たのか、スターミーのこうそくスピンによってつるのムチが弾かれる。

「バカ、逃げなさいカイリ!!」

ハクは反動で動けず、そしてツタージャはつるのムチが弾かれた事によって隙が生まれ————

「スターミー、マリルリ、ツタージャにれいとうビームよ!!」

絶好の好機を逃すことなく、スターミーとマリルリのれいとうビームがツタージャに迫る——!

「——」

やられた、それはこの場にいる誰もが考えた未来だった。

避ける事はできず、あのままツタージャはれいとうビームを受けて
戦闘不能に——

『——っ』

——瞬間、レイジとティナは同時に息を呑んだ

(これ、は……!?)

ぐにやりと、空間そのもの。

否、時そのものがねじ曲がったかのような不快感。

それが、この場を支配していた。

「——ツタージャ、そのまま水の中に入れ。

3秒後に右斜めにつるのムチを使ってれいとうビームに作られた

氷の塊を使って足場に戻って、マリルリにグラスミキサ―。

スターミーがこうそくスピンを使ったら踏み込んでリーフブレードを叩き込め」

無機質な声が、カイリの口から放たれる。

瞬間、時が戻ったかのように不思議な感覚が消え去る。

「嘘っ!!?」

隣から響くカグヤの驚愕に満ちた声。

それを聞き慌てて視線をフィールドに向けると。

――ツタージャが、自分から水中に落ち間一髪でれいとうビームを回避した光景が

「――」

思考が、凍りついた。

空振りしたれいとうビームは水中に当たり、水を凍らせあつという間に氷の塊を作っていく。

続いて上がる水しぶき。

ツタージャが水中から飛び出したのだ。

――つるのムチで氷の塊を壁蹴りの要領で足場にしながら

着地し、放つ技はグラスミキサー。

それを――スターミーはこうそくスピンで弾き飛ばす。

「――踏み込む」

その眩きと、ツタージャがスターミー達に向けて走り出したのはほぼ同時だった。

「っ、マリルリ――」

慌ててマリルリに命令しようとしたカスミだが、時既に遅く。

ツタージャのリーフブレードが、マリルリに見事命中しそして……。

「ハク、まとめてかみなりよ！！！」

反動が消えたハクのかみなりが、スターミーとマリルリに叩き込まれた。

「……………」

終わった。

ハクのかみなり、そしてツタージャのリーフブレードによってマリルリは戦闘不能。

スターミーはまだ動けるようだが、これ以上戦う事はできないだろう。

「……………」

しかし、喜び飛び跳ねるとばかり思っていたのに、カイリは息を吐きながらその場に座り込んだ。

「あれ？　なんだか様子がおかしいね……」

すぐさま立ち上がり、急いでカイリの元へ急ぐレイジ。

着いた頃には、既にヒメカがカイリの身体を支えてくれていた。

「ちょっと、大丈夫？」

「あはは……ちょっと疲れただけだよ」

曖昧な笑みを浮かべるカイリ。

違う、疲れている事は間違いないが、その理由は……。

「ならいいけど……そうだ、私に勝利したんだからこれを渡さないとね」

そう言いながら、カスミはカイリとヒメカにブルーバッジを手渡す。

「……ありがとう」

「……サンキュー」

「しかしまさかあんな戦法を使ってくるなんてね……見かけによらず凄いじゃない」

「はは、まあね……」

「……ちょっと、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。それよか次はお前の版だぜ……レイジ」

「……………」

「俺達が勝ったんだから、引き分けたお前達が負けんじゃねーぞ？」

「……うん」

頷きを返し、ティナをボールに戻しながら視線をカグヤへと向ける。
すると彼女もレイジの心中を察したのか、すぐさまこちらへと来てくれた。

「そんじゃ、俺達は応援席で見させてもらうぜ」

「しっかり休んだ方がいいと思うけど……」

見た目からして、相当疲れているようだ。

……それが何を意味するのか、正直わからないが。

「大丈夫だって。これでも結構鍛えてんだ。
それより、今は自分達の事を考えろよ」

「……………わかった」

正直、今すぐにも問いただしてやりたい事はある。

だがこの問い掛けはあまり他人に聞かれるわけにはいかないと無意識のうちに思ったし、今はカイリの言う通りジム戦に集中しなければ。

そう思い、レイジは彼から背を向け立ち位置へと移動する。

「次はえっと……レイジにカグヤだっけ？」

「そうだよー」

「ジムリーダーとして二連敗っていうのは屈辱だからね。

——絶対に負けないんだから!!」

「……………」

先程の違和感は既に存在しない。

だが、この胸を占める不快感と懐かしさを混ぜたような不思議な感覚が消えてくれない。

「レイジ？」

「……大丈夫」

心配そうなカグヤに一言返し、ボールを構える。

……ちゃんと集中するんだ。

無理矢理思考を切り替えて、レイジはカスミに対峙するのだった。

第9話 くバッジ争奪、水面下のダブルバトル！（後編）く

「チコリータ、レディーゴー！！！」

「――ヒカリ、お願い！！」

「ギャラドス、ミロカロス、出てきなさい！！」

「ええっ！？」

カスミが出したポケモンに、カグヤだけでなく観客席に居るカイリも大声を張り上げた。

「うそ……さっきの二体とはえらい違いじゃない！」

「私のおっきよ、特にこのミロカロスはね」

「……………」

なるほど、すなわち彼女は本当の意味で本気を出すらしい。

こんな事なら先に戦えばよかった、そんな考えが頭によぎったが、今更だ。

「カグヤ、協力して戦えばきっと勝てる」

「う、うん……でも、私がレイジの足を引っ張るかも……」

「何言ってるのさ。いつものカグヤらしくないよ。」

突撃思考でなんとかなる、それが君の戦い方じゃなかった？」

信じている、言葉には出さずそんな視線を送るレイジ。

「——うん!!」

それだけで、カグヤの中から不安が全て消え去ってくれた。

「チコリータ、ミロカロスにはっぱカッター!」

「10万ボルトだ!!」

「ギャラドス、ハイドロポンプ!! ミロカロス、たつまき!!」

チコリータのはっぱカッターはギャラドスのハイドロポンプに。

ヒカリの10万ボルトはミロカロスのたつまきによって相殺される。

「なら……マジカルリーフ!!」

「ヒカリ、でんげきはだ!!」

絶対命中技のでんげきはとマジカルリーフがギャラドス達に襲いかかる。

避けられない、しかし。

「はかいこうせんよ!!」

「っ、水の中に逃げろ!」

無我夢中で叫び、いち早く反応したヒカリがチコリータごと水中へと潜る。

瞬間——ギャラドスとミロカロスのはかいこうせんが足場を焼き尽くした。

「ミロカロス、水の中に逃げたピカチュウ達を追って」

「くっ……」

水中の中では完全に不利だ、このまま中に居続けるのは拙い。

だが、この状況では逃げる事すら……。

「っ、カグヤ、チコリータ、ごめん!!」

「えっ……?」

突然の謝罪の言葉に、カグヤは面食らうが……すぐに彼の心中を理解し、水中から顔を出したチコリータに命令を告げた。

「ひかりのかべ!!」

「な——」

「レイジ、お願い!!」

「カグヤ……ありがとう! ヒカリ、“その場”でかみなりだ!!」

「なっ、ヤバ——!?!」

カスミもレイジの意図に気づいたようだが、もう遅い。

「ピカ……チャアアアアッ!!!!!!」

叫び声に近い声を上げ、フルパワーでフィールド全体に走るヒカリのかみなり。

それは四体全てにダメージを与えるが——ヒカリとチコリータはいち早く離脱し再び足場へと飛び乗った。

対するギャラドスとミロカロスは苦しそうな声を上げている。

「ひえー……むちゃくちゃすんなレイジの奴。

まさか自分達ごとかみなりでギャラドス達に攻撃するなんて」

試合を観戦しているカイリがげんなりした表情でそう呟くが、ヒメカは興味深そうに試合を見つめていた。

「でもあのまま水中にいたらミロカロスによって全滅させられてたわ。

それに、チコリータのひかりのかべがヒカリ達のダメージを最小限にしたようだし、おそらく向こうと違ってダメージはほとんどないでしょうね」

しかし、真に驚いたのはカグヤの機転の早さだ。

おそらくレイジもあの命令は、一か八かの賭けだったのだろう。

しかしカグヤが彼の心中を察したからこそ、一か八かの賭けは成功したばかりかチャンスへと繋がられた。

——あの2人のコンビネーションは素晴らしいの一言では表現できない

カグヤはレイジに対して揺るぎない信頼を寄せ、またレイジも同様にカグヤを信頼しているからこそ、あんな事が可能なのだ。

ふと、彼女が昨日言っていた事を思い出した。

『私っていつもレイジに迷惑掛けてるから、せめて役に立てる時は自分の全てを懸けてレイジを助けたいって思ってる』

(……なんだか、少しだけ羨ましいわね)

彼女のように素直になれる人というのは、素晴らしい事だと思う。

(私も、今より少しだけ素直になれたら……)

チラリと、子供みtainな無邪気な瞳で試合を観戦し応援しているカイリに視線を送る。

いつもの彼に、ヒメカは自分でも気づかない内に口元に笑みを浮かべていたのだった。

「っ、まだよ!! ギャラドス、かみつく攻撃!!」

かみつくどころか丸呑みしてしまいそうな勢いで、ヒカリ達に向かっていくギャラドス。

しかし身構えるヒカリとは違い、チコリータはギャラドスを見据えるだけで一步も動こうとしない。

「ヒカリ、でんこうせっかでギャラドスに飛び乗って!!」

ギャラドスが足場に到達しようとした瞬間、凄まじいスピードでヒカリはギャラドスの頭の上に移動した。

しかし、まだ下にはチコリータが残って――

「ソーラービーム!!」

光を撒き散らしながら、チコリータから発射されるソーラービーム。

それはギャラドスの顔に命中し、顔をしかめながらおもわずのた打ち回る。

「ミロカロス、りゅうのはどうでチコリータを攻撃して!!」

「くっ……!!」

フロローに回りたいが、まだギャラドスへの攻撃が終わっていない。

しかし、ソーラービームを放った事で限界を迎えたのか、チコリータはその場から動けなくなっていた。

「ヒカリ、すぐにチコリータを――」

「待って、レイジ」

「っ、カグヤ!?!」

助けようと命令しようとするが、他ならぬカグヤによって止められてしまった。

「チコリータはまだ戦ってる、勝つために諦めようとしてないの。だから——レイジとヒカリは自分達のやるべき事を集中して!!」

「——」

力強い眼差しに、何も言えなくなった。

——自分を信じてくれているのだ、彼女もチコリータも

なら、ここで助けるなどという選択肢などそもそも選択の中に入るわけがない——!!

「ヒカリ、10万ボルトだ!!」

「チコリータ、最後まで諦めないで!! フルパワーでエナジーボール!」

ヒカリの10万ボルトはギャラドスの全身に行き渡り——戦闘不能へと追いやった。

だが、次の瞬間——エナジーボールをやぶられたチコリータが……。

「チコリータ!!」

全身を傷だらけにしながら、フィールドの水中へと落ちていった――

「戻って!!」

すぐさまモンスターボールでチコリータを戻すカグヤ。

慈しむようにボールを撫で、よく頑張ったねと労いの言葉を贈った。

――これで、残るはヒカリとミロカロスのみ

だが、ヒカリは既に限界に近い。

既にフルパワーのかみなりと10万ボルトを数発放ったのだ、良くて大技が一回程度。

しかし、相手のミロカロスとてそれは同じ、後は気力の勝負だ。

「……………」

だが――そんな事レイジにとってどうでもよかった。

そしてヒカリにとっても、自分がボロボロであろうが相手がボロボロであろうがどうだってよかった。

ただ勝利する、その一心だけで戦いに望む。

自分達に道を作ってくれた、カグヤ達の為にも。

「この勝負は——負けられない!!!」

(っ、まだ戦えるの?)

もうミロカロスに限界だというのに、ヒカリには体力や気力以外の何か助けになっている。

「ミロカロス、れいとうビーム!!!」

「右の足場に避ける!!!」

言われた通り、れいとうビームを右の足場にジャンプして回避するヒカリ。

そして——レイジは誰もが驚く命令をヒカリに告げた。

「ヒカリ、“自分に”かみなりだ!!!」

『なっ——!!?!?』

その場にいる全員が、レイジの言葉に目を見開いて驚く。

しかしヒカリはその命令に少しの疑念も抱かず、自分に対して特大のかみなりを落とした。

眩い光に包まれるヒカリ。

だが、これは最大のチャンスだ。

レイジの意図は不明だが、ここでこちらも最大の技でヒカリを倒す。

「ミロカロス、トドメのはかいこうせん!!」

最後の力を振り絞り、先程よりも更に巨大なはいこうせんを発射するミロカロス。

——瞬間

レイジとヒカリは、己の勝利を確信しそして——ヒカリへ最後の技を繰り出すよう命令を告げた。

「ヒカリ——」

——ボルテッカーだあああっ!!!!」

「――」

息を呑む音が、すぐ隣から聞こえた。

「ピカーカーッ!!」

かみなりのエネルギーを吸収したことによって、全身が黄金色に輝くヒカリ。

そのまま、疾風のごとし勢いで“水面”を走っていく。

そして――ミロカロスのはかいこうせんから真っ向からぶつかり合う!!

「なっ!!!?」

驚きは、カスミの口から放たれる。

ミロカロスのはかいこうせんがヒカリに命中した瞬間――ボルテッカー状態のヒカリがはかいこうせんを文字通り弾いていくのだ。

いくら弱って威力が低くなったとはいえ、はかいこうせんを弾くなど自分は夢を見ているのではないかと錯覚させられた。

「ピカ……チュウウウウウツ!!」

裂帛の気合いを込めた叫び声。

瞬間、ボルテッカーがはかいこうせんを完全に弾き飛ばした。

そのままヒカリは勢いを止める事なくミロカロスへと向かい――
凄まじい電気エネルギーの塊を、ミロカロスへと叩きつけ……この
勝負の幕を降ろした。

……。

「――」

誰もが、暫く何も口にする事も動く事もできなかった。

ただわかる事は、この勝負――レイジ達が勝利したということ。

「っ、ヒカリ！！！」

突然上着を脱ぎ、水の中へと飛び込んでいくレイジ。

「っ、ちょ、レイジ！？」

それにいち早く気づいたカグヤが反応するが、レイジは凄まじいスピードでヒカリの元へと向かっていく。

ヒカリの状態を見て、ようやくレイジの行動の意味を理解した。

全ての力を出し切った挙げ句、ボルテッカーという強力すぎる大技を繰り出したのだ。

その結果、ヒカリはその場で倒れピクリとも反応していない。

「っは、ヒカリ!!」

足場になり、ヒカリを抱き起こす。

「…………ごめん。ごめんねヒカリ」

ボロボロのヒカリを目の辺りにして、レイジは悲痛な表情を浮かべる。

やはりボルテッカーを使うには早すぎた、自分の力だけでは展開できないので、かみなりを自分に当てる事で不足分を補ったが……。

今のヒカリにはあまりにも無茶な大技だったのだ。

「っ、くっ…………!!」

ヒカリをボールに戻し、急いで陸地へと着地するレイジ。

そして、そのままジムの外へと一直線に走って行ってしまった。

「えっ、おい!! バッジはいいのかよ!?!」

「そんな事言ってる場合じゃないよ!!」

私達もレイジを追わないと!!」

そうカイリに告げ、カグヤもジムから出ていく。

何だってんだ、そう叫びながらもカイリも彼女達の後を追う。

「……あいつ、一体どうしたの？」

完全に面食らった表情を浮かべるカスミに、ヒメカも説明する事ができない。

けれど、あの時の彼の表情。

鬼気迫る、なんて生易しいものではなかった。

まるで家族や恋人が危篤状態になってしまったかのように……。

「とりあえず、私達もいきましょ。

ちゃんとジムバッジを渡してあげないとね」

(……一体どうしたっていうの?)

彼の表情に疑問を抱きながらも、ヒメカはカスミと共にジムを後にした。

……。

「――レイジ」

ポケモンセンターのすぐ外。

ようやく追いついたカグヤは、そこでレイジを見つけ声を掛けるが……。

「……………」

静かに涙を流すレイジを見て、おもわずその場で立ち止まった。

……傷つけているのだ、彼は。

他ならぬ自分自身を、ヒカリに無理をさせた自分を責めているのだ。他ならぬ自分自身を、ヒカリに無理をさせた自分を責めているのだ。

ポケモンの傷ついた姿をなによりも嫌う彼が、自分で自分のポケモンを傷つけさせるような事をしてしまった。

もちろんあれはポケモンバトル、その結果怪我をしても仕方ない。

レイジとてそれは充分にわかってる、だがそれでも……彼は自分を責め立てなければ気が済まないのだ。

優しく脆いからこそ、怒りと後悔の捌け口を周りに向けないようにする為に必要以上に自分を責め立てる。

——そんな事、絶対に許さない

だってそんなのは間違ってる、レイジが自分を責める結果など自分を含め誰も望んでいないのだから。

「……ヒカリは、もうジョーイさんに預けたの？」

「……………」

口は開かず、力なく頷くレイジ。

「ポケモンバトルなんだから、怪我をするのはしょうがないよ。それにヒカリだってこうなるのを承知でレイジの言葉に頷いたんだよ？　ならレイジが気にしたらヒカリの気持ちが意味のないものになっちゃうじゃない」

「わかってる。わかってるけど……それでも、僕が途中で諦めたらヒカリはあそこまで傷つく事はなかった……」

〈お父さん、それは違うよ〉

ボールが開き、ティナとリオンがレイジの前に現れた。

へもしお父さんがあそこでヒカリの身体を気遣って諦めてたら、ヒカリはきつと怒ってた。

だってチコリータが必死に繋いでくれた道なのに、そこで自分達が諦めたら、チコリータの気持ちはどうなるの？

「……………」

唇を噛み締めるレイジに、リオンが優しく裾を引っ張った。

——ご主人は間違ってるんじゃない、ヒカリもそう思ってる

——だからこれ以上自分を責めないで、ご主人がそんなんじゃないヒカリも悲しむ

「……リオン」

そう告げるリオンに、冷めた心が暖かくなっていく。

「――ごめん。心配かけて」

へそんな事ないよ。私達はいつもお父さんに助けてもらってるから

「カグヤもごめん、また心配掛けて……」

「別にいいよ。私もティナ達と同じでいつもレイジに助けてもらってばかりで……」

だから、レイジの助けになれて凄く嬉しい！」

屈託のない笑みを見せるカグヤに、レイジもようやく笑みを見せた。

「……イチャイチャするのは構わないけど、私達にも迷惑掛けたって事、忘れないでよね」

視線を横に向けると、そこにはジト目でレイジとカグヤを睨むヒメカとカスミの姿が。

ちなみにカイリもその場にいるが、よくわかっていないのかポカンとした表情を浮かべている。

「……ごめん」

「まあいいけどね。それよりほら、ブルーバッジ忘れてるわよ」

ほら、とブルーバッジを2人に渡すカスミ。

「よし、これで私は後2つでレイジはあと3つね」

「うん……」

「やったな。レイジ、カグヤ」

「ありがとう、カイリ」

「俺達はあと3つ……まだまだ先はなげえなあ」

「ぼやかないの。それよりみんなをポケモンセンターに連れていかない」と

「そうね。……ミロカロスをセンターに連れてきたのも久しぶりね」
ぞろぞろとセンターに入っていく3人、カグヤも後に続こうとしたが。

「カグヤ」

後ろから声を掛けてきたレイジによって、その場で立ち止まり彼の方へ振り向いた。

「どうしたの？」

「……ありがとう。カグヤが心配してくれて……嬉しかった」

「そんな事気にしなくてもいいのに」

「それでも、ちゃんと御礼がしたかったから。
本当にありがとうカグヤ」

「————っ」

真剣な表情を向けられ、カグヤは自分の顔が熱くなるのを感じていた。

（あれー？　なんで顔が熱くなってるんだろ……それに、なんだかレイジの顔が見れない……）

「どうしたの？」

「うあ、な、なんでもない……そ、それより早くチコリータ達を休ませてあげないと！」

頭をぶんぶんと振り必死に誤魔化しながら、カグヤは逃げるようにセンターへと足を運んだ。

（顔、熱い……それに、胸がドキドキ……なんでかな？）

考えてみるが、さしたる原因が思いつかない。

結局、自分でも原因がわからないまま、カグヤは暫く熱くなった頬を押さえ続けるのだった。

第10話 く時の力、カイリの秘密く

「ブルーバッジもゲットしたし、次はどこに行く？」

朝食を口に運びながら、カイリは言う。

「クチバシティか、イワヤマトンネルを抜けてシオンタウンに出て、タマムシかセキチクに行くか……」

「そういえば、2人はクチバシティのジムには行かなかったの？」

クチバシティは港町だ、すなわちシンオウの2人が最初に訪れた街でもあるはず。

すると、ヒメカは皮肉たっぷりの口調でカイリを睨みながらカグヤの問いに答えた。

「失念してたのよ。この人」

「失念？」

「つまり、クチバシティにジムがある事を忘れてたってこと」

『……………』

冷めた視線をカイリに送る2人。

……こいつ、本当にポケモンリーグに出場する気があるのか？

「……じゃあ、次の目的地はクチバだね」

「港町かぁ……ねえレイジ、泳げるかな？」

「観光する為に行くわけじゃないよ。」

「まあ……泳げるか泳げないかでいえば、今の季節なら泳げるけど」

「ホント！？　ならクチバに着いたら一緒に海に行こうよ！」

「……考えとく」

適当に返事を返しながら、パンを口に運ぶレイジ。

「……なんだかんだで甘いわね」

「その言葉、そっくりそのまま返してあげる」

「……………」

睨まれた。

しかしどこ吹く風か、気にせず食事続けるレイジ。

「よし、それじゃあ朝メシ食ったらさっそく行くか！」

「却下」

「右に同じ」

「はいいつー！？」

せっかく気合いを入れて言ったのに、出鼻を挫かれその場でコケてしまう。

「そんなに急ぐ必要はないし、少し休んでからでも充分だよ」

「そうね。わたしももう少しちゃんとお風呂に入りたいし」

「あつ、じゃあまた一緒に入ろうね？」

「……いいけど、胸を触ってきたりしないでよ？」

「だってヒメカのおっぱい触ると気持ちいいんだもん」

「っ、あなた……それセクハラよ？」

「……なんかエロいな」

「何か言った!？」

「い、いや……なんでもねえ」

悪鬼の如し視線で睨まれ、おもわず小さくなるカイリ。

（まったく……）

自分の幼なじみがそんな事をしてとは……なんだか情けなくなっ
てしまったレイジであった。

…………。

「さーて、今日は何して過ごそうかな……」

レイジと共に部屋に戻り、カイリは今日の予定を考える。

カグヤはトレーニング、ヒメカは買い物。

自分もモウカザル達とトレーニングでもしようか、そう思っている
とレイジから声を掛けられた。

「ねえ、カイリ。今ちよつといいかな？」

「んあ？ 別にいいけどなんだよ？」

「……訊きたい事があるんだ」

「……………」

真剣な表情でそう言うてくるレイジに、カイリもベッドに座り姿勢
を正す。

「で、訊きたい事ってなんだ？」

訊くと、意を決したようにレイジは口を開いた。

「——カイリ、君は……ジム戦の時に何をやったんだ？」

「——」

呼吸が止まる。

レイジの問いかけを理解するのに数秒、そしてそれに対しての疑問が浮かぶのに更に数秒の時間を要した。

「お前、何を……」

「僕は人間にはない特殊な能力がある。

ポケモンの言葉を理解し、会話をする能力。

そして、普通じゃない能力を察知する事ができる能力を」

「……………」

「あの時、ツタージャがれいとうビームを受けようとした瞬間、僕は空間そのものがねじ曲がるような不快感に襲われた。

そして、まるで君が未来を読んだかのような言葉を放ち——それが現実のものになった」

あの時の感覚、あの時の光景は今でも鮮明に思い出せる。

それほどレイジにとって驚くべき事実であつたし、忘れてたくても忘れられない光景だったからだ。

俯き、僅かに身体を震わせるカイリ。

それが、自分の予想が確信に繋がると理解できる態度である事を感じ、再び口を開いた。

「あの力は何？ どうして君はあんな事ができるの？」

「……まいったな。ヒメカにだってバレてねえのに、まさかお前に知られるとは思わなかった」

震える声で、カイリは呟くように口を開く。

「察しの通りだ。俺は……少し先の未来を視る事ができる能力を持つてる」

だがそれは、正直すぐに信じられるような内容ではなかったが。

「未来を、視る……」

「いつからこんな力が自分にあったかは知らねえ。けど……気づいたら視る事ができてたんだ、短い間だけど……未来が」

なるほど、それならばあの戦いも納得ができた。

回避の方法も、敵の行動もあらかじめ読んでいたのも、未来を視たからか。

「けどやっぱ色々制限があつてな。1日に一回しか視れねえし、しかも必ず視れるとは限らない。」

おまけに成功しようが失敗しようが使った後はめっちゃくちゃ疲れちまう。

正直、あんまり良い能力じゃねえな」

「コントロールはできるの？」

「ああ。自分の意思で発動はできる、それでもあんま使った事はねえけどな」

「……君の両親は」

「知らねえよ。親父とお袋どころか幼なじみのヒメカも知らねえ。俺の力を知ってるのは俺自身と、レイジ……お前だけだ」

「……………」

「けど驚いたぜ。種類は違うけどお前も俺みたいに不思議な力があるなんてよ」

「……僕も、自分にどうしてこんな力があるのかわからないんだ。気が付いたらポケモンと会話できるようになっていたし、それに……両親も知らないから」

「えっ、両親を知らないって……」

「僕は孤児なんだ。5歳の時までポケモンに育てられてきた。だから——僕が旅をする目的の一つとして、自分を知りたいと思ってる」

「こりゃまた……へビーな話だな」

「別に。だって今の僕には家族がいる。

だから本当の両親に会ってどうこうしたいわけじゃない。

ただ知りたいんだ、自分の生まれた意味を……この力の意味を」

人は誰しも、この世の誰かに必要とされて生きている。

だからこそ、そんな意味が自分にもあるのか、それが知りたい。

「……お前は強いな。俺は自分の力を他人に話すのが恐くて、ヒメカにすら打ち明けられねえってのに」

「打ち明けるのが強さじゃない、でも……ヒメカならたとえ君の力を知っても受け入れてくれる。

それとも、君の知っている彼女は君の力を知って恐がるような人？」

「……いや。それどころか怒るだろうな。

「何でもっと早く言わなかった」って」

「だろうね」

容易に想像できてしまい、おもわず口元に笑みを浮かべてしまう。

「でも打ち明けるか隠すかは君の自由だ。

他の誰でもない、君自身の力なんだから」

「……サンキュー」

「それと、あまりその力を否定しないで。

きつと何かしらの意味を持ってその力は君に宿ったんだ。

それに……正しき事に力を使う事は、悪いことじゃないんだから」

だが、否定してしまえば何の為にその力は生まれてきたのかわからなくなる。

せめてその意味を、力の価値を見定めるまでは。

「……お前、本当に14か？ 年下には見えなくなったな」

「さてね。自分が何歳なのかも知らないんだ。

もしかしたら君よりもずっと年上かもよ？」

冗談めかしたような口調でそう言いながら、ベッドに寝転がる。

……我ながら感情を露わにし過ぎたかもしれない。

僕もまだまだ子供だな、そう思いながら少し眠ろうかと瞳を閉じた瞬間。

「レイジさん」

突然、部屋をノックする音が部に響き渡った。

「はい、今開けます」

扉を開くと、そこにはジョーイの姿が。

「どうしました？」

「レイジさん宛てに電話が来てますよ」

「電話……？」

オーキド博士だろうか、それともゲンジやルリコ？

しかし、電話の相手はレイジにとって意外すぎる人物だった。

「シロナさんという女性の方からですよ」

『……………は？』

レイジとカイリ、2人の声が見事に重なった。

……………。

『レイジくん、元気ー？』

「はあ、元気ですけど……いきなりどうしたんですか？
それ以前に、よくここがわかりましたね」

『勘よ勘。それにペース的に考えてこの辺だと思ってね』

「それで、何の用ですか？」

『……君の声が聞きたかったから』

「は？」

『な、なんでもない。そ、それより調子はどうかしら？』

「とりあえずハナダジムのバッジは手に入りました」

『良い調子みたいね。なんだか自分の事のように嬉しいわ』

本当に嬉しそうに笑顔を浮かべるシロナに、少し気恥ずかしくなつて顔を逸らした。

『いつか貴方と戦う日が来るのがますます楽しみになってきたわ』

「は、はあ……」

わざわざ自分の様子が気になって電話をしてくれたのは嬉しいが、チャンピオンの仕事などのいいのだろうか。

……なんか後ろから「シロナ、今日は仕事が沢山あるんだからさっさと電話切れ！」なんて声が聞こえる。

『後ろの声は気にしないでいいわよ、それより今日貴方に電話をしたのは……貴方にポケモンを一匹預けたいと思ったの』

「ポケモンを？」

『ええ。実は昨日タマゴから孵ったばかりのポケモンなのだけど、私は見ての通り動けないから貴方に譲りたいと思って』

「えっ……それは嬉しいですけど、僕なんかでいいんですか？」

『もちろん。貴方のようにポケモンを大事にしてくれる人にこそ譲りたいのよ』

「……………」

『どうかしら？ もちろん君が嫌なら……』

「いえ。是非お願いします」

『ありがとう、レーー』

『シロナー、早く電話切れっつーの！ 今日忙しいって言っただろーが!!』

突然シロナの横から現れた赤髪のアフロ男。

ここにいるという事や、シロナを呼び捨てにする辺り四天王の一人だろうか。

『いいじゃない。もう少し待ちなさいよ!!』

『そんな幸薄そうな子供と話したってしょうがねえだろ!!』

『なんですってえっ!?!』

『ごふうっ!!?!』

凄まじいボディーブローが突き刺さり、哀れその場に倒れ込むアフ

ロ男。

「……………」

『あ……オホホッ、いやだわ私ったら』

誤魔化そうと笑うシロナだが、2人は引きつった表情しか浮かべられない。

右端で倒れているアフロ男が哀愁を誘った。

『そ、それじゃあ送るわね……レイジくん、よろしく』

「は、はい……わかりました」

『あっ、そうだ。次はどこに行くつもりなの？』

「クチバシティに行くつもりです」

『クチバシティね……なるほどなるほど』

「……あの、それがなにか？」

『なんでもないわ、じゃあレイジくん、またねー』

手を振りながら電話を切るシロナ。

（そういえば、どんなポケモンか訊くの忘れてた……）

まあいいか、転送されればわかるのだから。

すると、すぐさま転送装置が動き出し……モンスターボールが現れた。

「これか……。チャンピオンのシロナさんが譲ってくれたポケモンだからな、もしかして伝説と呼ばれるポケモンだったりして」

「さすがにそんな事はないと思うけど……」

言いながら、モンスターボールを開くと……中から出てきたポケモンは、レイジ達の想像を超えたポケモンだった。

「これは……」

「――リオル」

モンスターボールから出てきたポケモンは、はもんポケモンと呼ばれるリオルだった。

リオルの姿を見た瞬間、レイジは不思議な感覚に覚える。

（これは……？）

似ている、シロナに感じられた力そのものに。

そんな事を考えていると、リオルは瞳を開きレイジに視線を合わせ口を開いた。

「あなたが、僕の新しい主ですか？」

「っ、君は……！？」

ティナと同じように、直接頭の中に響いてくる声。

間違いなく、リオルの声だ。

「僕は波導という力を感知する能力を持っています。
それを利用して会話をする事が可能なのです」

波導——目に見えない生命エネルギー、すなわち気やオーラに近いものだと考えればいい。

人は誰しもその波導という力を持つが、大小関係なくそれを解放する術は持たない。

波導を使えるのは波導使いと呼ばれる人間か、リオルやルカリオのような一部のポケモンのみ。

誰もが持っていて、けれど使いこなす事はできない力、それが波導だ。

「母上は自分以上の波導を持つ御方が新しい主だと仰っていました。
——そして、目の前のあなたの力はとてつもなく大きく、それでいて綺麗なものです。
つまり、あなたが僕の新しい主なのですね？」

「力があるかはわからない、でも……今日から君と一緒に戦い成長するパートナーは、僕だよ」

「パートナー？　僕とあなたがですか？」

「そうだよ。……もしかして、不満？　ならシロナさんの所に……」

へい、いえ……その、母上と同じ事を仰ってくださいだったので、驚いてしまつて……。

僕のような未熟者をパートナーと言ってくださるのは嬉しいのですが、今の僕ではあなたの力になれるとは……」

「そんな事関係ない。力になるからパートナーになってほしいって言つてるわけじゃないよ。

僕自身が君自身にパートナーになってほしいと願ったから言っているんだ。

それに僕だってまだまだ未熟者だよ、でも互いに努力して強くなつていけばいいだけだ」

そう、今はそれでいいと思う。

少しずつ、けれど確実にこれから強くなつていけばいい。

自分も、そして目の前にいるリオルも。

「だからリオル、これから一緒に強くなつていこう？

僕は、君と一緒に強くなつていきたい」

精一杯の誠意を込めて、レイジは告げる。

すると、リオルは呆気にとられた表情を彼に向けていた。

「どうしたの？」

へい、いえ……ただ、母上の言っていた以上に、あなたが素晴らし

いい人だと思い、感動していました……」

「そ、そう……ありがとう」

随分と大袈裟な事を言ってくるリオルに、レイジは苦笑を浮かべてしまう。

と、ここで一つ疑問が浮かんだ。

「ところでリオル、君が言ってる『母上』って誰のこと？」

普通に考えれば♀のルカリオ辺りかと考えるが、どうも違うらしい。

疑問を投げ掛けると、リオルはこう答えた。

「僕をタマゴから孵してくださったシロナさんの事です」

と。

ああ、なるほど……なんとなくリオルの言いたい事はわかった。

確かにシロナがリオルをタマゴから孵したのならば、彼女を母上と呼んでもおかしくはないだろう。

「それじゃあ、よろしくねリオル」

手を前に出し、握手を求めるレイジ。

「は、はい……宜しく願います」

そんな彼に少々面食らいながらも、リオルも手を出しレイジと握手を交わした。

「旅の仲間を紹介するよ、もう2人居るんだけど今は出掛けてて…この人はカイリ、僕の仲間の1人だ」

「お、おう……よろしく」

緊張しているのか、上擦った声を出すカイリ。

〈宜しく願います、カイリ〉

「ああ。……それより波導って凄いんだな、ポケモンと話せるなんて凄く嬉しいよ！」

本当に嬉しそうに無邪気な笑みを浮かべるカイリに、レイジも笑みを返した。

そうだ、みんなにもリオルを紹介しないと。

そう思い、レイジはモンスターボールを取り出しティナ達を表に出した。

「ティナ、リオン、ヒカリ、この子はリオル。
僕達の新しい仲間だよ」

へよ、宜しく願います……〈

——よろしくー

——ご主人と一緒に頑張ろうな

〈宜しくね、リオル〉

少し緊張した様子のリオルとは対照的に、ティナ達はすぐさま友好的な態度を見せてくれた。

これならば、みんなすぐに打ち解けてくれるだろう。

と、リオルに名前を付けるのを忘れていた。

(どんな名前にしようかな……)

暫し腕を組みながら考えて——割とすぐに思いついた。

「アクセル」

〈えっ?〉

「君の名前だよ。アクセルっていうのはどうかな?」

我ながら悪くは……ないと思いたい。

〈アクセル……それが、僕の名前〉

「嫌かな? もしそうなら考え直すけど……」

〈そんな事ありません! 凄く嬉しいです。

——父上、ありがとうございます!〉

どうやら気に入ってくれたようだ、アクセルの態度を見ればすぐにわかった。

(……………ん?)

ちょっと待て。

なんだか今、変な単語がアクセルの口から飛び出したような……。

「アクセル、今僕の事なんて呼んだの？」

〈父上と、お呼びしましたが……〉

それが何かと言わんばかりの表情を向けられ、レイジはどう反応を返せばいいのかわからなくなった。

とりあえず、どうしてそんな呼び方に変えたのか訊いてみる事に。

「どうして僕を『父上』だなんて呼ぶの？」

〈それは僕に名前をくださったからです。

それに父上から感じる波導は、とても暖かく安心できるので……
まるで父親のようだと思ひまして……〉

「……………」

あー、うん、とりあえずアクセルの言い分は理解した。

しかし、父上と呼ばれるのは正直微妙だ。

ティナからは『お父さん』と呼ばれているが、それは彼女がタマゴの中にいた頃から一緒に居るからであって……。

……やめよう、これ以上いちいち考えた所で無駄なだけだ。

それに嫌なわけでも不快なわけでもない、アクセルがそれでいいなら良しとしよう。レイジは自分を納得させた。

「レイジー!!」

「ん? ……うおっ!」

振り向いた瞬間、眼前に満面の笑みを浮かべたカグヤが迫っていたので、半ば無意識のうちに手を出して彼女を抱き留めた。

「な、なんだよ……?」

「やったの! チコリータがやってくれたの!」

「はあ?」

意味がわからないカグヤの言葉に、レイジは首を傾げるが。

「あ……」

いきなりモンスターボールを投げ、ポケモンを出した事によって、どういう意味かを理解できた。

「……ベイリーフに進化したんだ」

そこから出てきたのはチコリータではなく、その進化系であるベイリーフだった。

どうやらトレーニングの際に進化できたようだ。

「そうなの！　もう嬉しくって……あれ？」

アクセルの存在に気が付いたのか、視線をそちらに向けるカグヤ。

「この子……」

「僕の新しい仲間のアクセルだよ。

アクセル、この子は幼なじみのカグヤ。一緒に旅をしているんだ」

〈アクセルです。宜しくお願い致します〉

「っ、この子もテレパシーが使えるんだ……」

〈正確には波導ですが〉

「でもどうしたの？　リオルなんて珍しいし、それにこの辺じゃ見かけないよね？」

「シロナさんが譲ってくれたんだ、タマゴから生まれたばかりで一緒に戦ってほしいって」

「――――」

瞬間、カグヤは途端に不機嫌そうに唇を尖らせた。

誰が見ても「私、怒ってます」というのがわかるくらいあからさまだ。

「……カグヤ、なんで怒ってるの?」

「……わかんない。でもなんか今の話を聞いてすっごく気分が悪くなったの」

「はあ?」

なんともむちゃくちゃというか、まったくもって意味が分からない。

しかし、カグヤの中でも不思議な怒りとして認識しているため、自分が何故怒っているのかも説明できないのだ。

だが、カグヤとしても面白くないのは確かなので……。

「むうー……とりあえずレイジ、謝って」

そのよくわからないイライラを、レイジにぶつける事に。

「何でだよ」

「だって……モヤモヤする原因は明らかにレイジのせいでしょ?」

「知らないよ」

レイジとしてはそんな事言われてもたまったものではない。

へあの……もしかして僕が何か粗相を?」

「ああ、気にすんな。あれは……俺もよくわからん」

「よくわからないなら適当な事を言わないの」

後ろから響くヒメカのツツコミ。

（まったく……どうしてわからないのかしら、自分のイライラの原因が……）

子供を通り越してもはやわざとやっているようにしか思えないが、彼女は本気で自分の感情を理解していないのだ。

別に自分が困るわけではないが……見ていると呆ればかりが大きくなってしまう。

まあしかし、見ていて飽きないしなにより面白いので、暫くは教えないであげておこう。

それに……そうは言っても、自分もあまり人の事は言えないから。

チラリとカイリを見ると、アクセル達と同じく言い合っているレイジ達をよくわからないといった表情で眺めている。

（素直にならなきゃね……私も）

でもなかなか難しい、自分はカグヤと違って意地っ張りだから。

そう思いつつ、いい加減周りの迷惑になるので、ヒメカはレイジ達を止めようと2人の元へ歩み寄っていくのだった。

キャラクター紹介3

【名前】 カイリ

【性別】 男

【年齢】 15歳

【一人称】 俺

【身長】 166cm

【人物】

シンオウ地方出身のポケモントレーナー、黒髪と吸い込まれそうな黒い瞳が特徴の少年。

カグヤと同じく夢はポケモンマスターだが、彼女と違い「いつかなれればいい」程度の考えである。

シンオウ地方の人間だが、カントーのポケモンリーグに出場するために幼なじみのヒメカと共にカントーのジム巡りをしている際に、ハナダシティでレイジ達と出会った。

好きなものはバトル、苦手なものはヒメカのクールツツコミ。【

性格】

バトルが大好きでポケモントレーナーであるなら誰彼構わずバトルを申しこむ。

基本的に自由奔放でマイペースな部分があり、割と勢いとノリで生きているため配慮に欠ける点も。

ムードメーカーではあるが同時にトラブルメーカーでもあるため、ヒメカのため息の原因は大抵彼が関係している。

しかし幼なじみのヒメカの事はあれでも大事に想っており、彼女に迷惑を掛けたと自覚した時は素直に謝ったり、彼女の言葉にはきちんとうるさく傾けるなどの面も。

1日に一回限定で短い時間ながら未来を見る力を持っている、現在知っている他者はレイジのみ。

バトルではカグヤ以上に突撃思考で、攻撃で強引に押し切ろうとするタイプ。

キャラクター紹介4

【名前】 ヒメカ

【性別】 女

【年齢】 15歳

【一人称】 わたし

【身長】 157cm

【人物】

カイリの幼なじみで彼と同じくシンオウ出身のトレーナー。
雪のように美しい純白の髪を腰まで伸ばし、瞳の色は深い紫。好きなものはカイリ、ポケモン、両親。嫌いなものは自分に言い寄ってくる人、見かけで人を判断する者、ポケモンを道具として見る者。カイリの付き添いでカントーにやってきた彼のストッパー&ツッコミ役。

15歳とは思えない抜群のプロポーションの持ち主、ちなみにスリーサイズは上から88・58・85でカイリとカグヤ曰わく「おっぱいお化け」

本人の前で言ったら10分の9殺しにされるので注意。【性格】

クールで熱くなりやすいカイリをツッコミで黙らせる猛者（ちな

みに手も使う時もある)

大人びているが、実は寂しがりで屋で少々ツンデレで素直じゃない。カイリの事は呆れながらも彼の個性を尊重している良き理解者。

自分のスタイルにコンプレックスを抱いており、その事を言われると怒りを露わにして手が出るが、主にカイリにしか出さない。

バトルでは冷静に試合運びができるタイプではあるが少々火力不足であり、彼女の能力が最も生かされるのはカイリとのダブルバトルで発揮される。

カイリのポケモン1

・モウカザル

♂、カイリが初めて手持ちにした相棒。

リオンと同じく好戦的でカイリと同じくらい単純で、バトルスタイルは彼と同じ。

しかしパワーは素晴らしく高く、それだけならばリオンすら上回る。

一人称は「オレ」で全員呼び捨て。

・ツタージャ

♀、イッシュ地方に生息する珍しいポケモン。

カイリが両親とイッシュ地方へ旅行に行った際にゲットした。

カイリ曰わく、割とワガママでポケモンフーズやポロックの味にはうるさい。

一人称は「わたくし」全員呼び捨て。

ヒメカのポケモン1

・ロール

♀のミミロル。喜怒哀楽が激しいが大抵はニコニコしている明るく優しい性格。

ヒメカとのコンビ歴は長く、彼女に似て仲裁役になる事も。

一人称は「わっち」でレイジとヒメカのみさん付けで呼び、後は全員呼び捨て。

・ハク

♂のハクリュー。ヒメカの切り札でありドラゴンポケモンに相応しい力を持つ。

ドラゴンタイプだけではなく、でんき、みずなど様々なタイプのワザを使えるオールラウンダー。とてもレベルが高く、カイリューに進化できるほどであるはずだが、何故か進化できないでいる。一人称は「ボク」で、全員さん付けで呼ぶなど礼儀正しい性格。

レイジのポケモン3

・アクセル

♂のリオル。シロナがタマゴから孵し彼女からレイジへと渡った。とても真面目で努力家であり、まだまだ幼いが潜在能力は高くメンバーの中では一番の良識人でもある。

シロナの事を「母上」と呼び、レイジの事は「父上」と呼ぶ。

リオルでありながら波導の力を強くその身に宿しており、接近戦による肉弾戦を好む。

上述の通り真面目なのだが、真面目過ぎて融通がきかない時もあり、ティナからは頭でっかちと言われている。

一人称は「僕」でレイジの事は「父上」と呼び後は全員呼び捨て。

第11話 くちバでのバトル!? (ポケモンのじゃないよ) く

「……ねえ、カイリ」

「なんだ？」

「僕達、こんな所で何してるの？」

レイジの呟き、カイリはなんともいえない表情を浮かべるのみ。

「知るかよ……お前の幼なじみに訊け」

「そうだよね……僕もわかってるんだけどさ」

——現在レイジ達はクチバシティに居る

目的はもちろん、クチバジムのバッジを手に入れるためなのだが……。

何故か、彼等はクチバのビーチで水着を着て立ち尽くしていた。

傍らには浮き輪を始めとした、海で遊ぶ為の必須アイテムが置いてある。

というのも、カグヤがクチバシティに着いた瞬間。

「レイジ、海に行く約束忘れてないよね？」

と言い出したのが事の始まりである。

確かに、ハナダシティでカグヤはクチバに着いたら海に行きたいと言っていた。

その時は曖昧な返事しか返さなかったのだが……後になってきちんと反対するのを忘れていたのだ。

遊んでいる暇があるならジムに挑戦しないの、とは言ったのだが、その時には彼女によって身体を引っ張られていた最中なので、ロクな反論ができません。

更に反対するだろうと思われたヒメカは諦めたようにため息をつくだけで、カイリもそんなに嫌ではなかったのか特に何も言わなかった。

そして、話は冒頭へと繋がったわけである。

「別にいいじゃねえか、ジムは逃げねえしたまには息抜きしないと」

「君は年中息抜きしてるからいいじゃないか」

「……お前、結構酷い事言うな」

ちょっとヘコんでいるカイリを無視し、レイジは再びため息をつく。

だがまあ……彼の言い分も理解できるので、そこまで強い否定をするつもりはない。

それに、自分とはかくティナ達は喜んでいるようだし良しとしよう。

そう思いながら、レイジは自分の傍で海を眺めているティナ達を眺めていると。

「レイジ、カイリ、おまたせー」

「……………」

後ろからカグヤの声が聞こえてきた、どうやら着替えが終わったらしい。

「……………おお」

「……………」

カイリは感嘆の声を上げ、レイジはおもわず息を呑んだ。

2人の水着姿――両者ともにビキニなのだが、カグヤは青、ヒメカは白という違いがある。

「ヒメカがビキニ着るとエロいな」

「っ、他に言うべき事は無いの!？」

「ぐぼっ!？」

見事なボディブローが自業自得なカイリの腹部に突き刺さり、彼はその場に倒れ込んでしまった。

哀れカイリ、しかし自分が悪いので誰もフォローを入れたりしない。

「どう？ 変じゃないかな？」

「大丈夫だよ。変じゃない」

それを証拠に、先程から周りの男達のカグヤに視線を送り続けている。

いや、カグヤにだけではなくヒメカにも好色の目で見ている輩が多数。

（だから来たくなかったんだ……）

カグヤもヒメカも充分美少女だと豪語できる顔立ちだ。

だからこそ、こうやって人が沢山集まる場所には行きたくない。

「それじゃあレイジ、早速泳ぎにいき？」

すぐさまカグヤがレイジの手を掴み、一直線に海へと向かっていく。

やれやれ……そう言わんばかりの表情でレイジはため息をつくが、抵抗しても無駄なのでおとなしくついていく事に。

「……………」

途端にカイリと2人だけになってしまったヒメカ、ちなみに彼ははまだ砂浜に突っ伏している。

「……カイリ、起きなさい」

少しばかりやりすぎたかもしれないと思いつつ、カイリを起こすヒメカ。

「いってゝ……もうちょっと手加減しろよな」

「あんたがセクハラするからよ」

「いいじゃねえか、エロいのは確かだし」

「……もう一度、砂に沈められたいのかしら？」

「ごめんなさい」

その場で土下座するカイリに、ヒメカは呆れたようにため息をつく。しかし、それはどちらかといえば自分自身に向けたものだった。

カイリの物言いは恥ずかしくデリカシーに欠ける発言だが、だからといって手を出すのはよくない。

それに、暴力的な女では彼に……。

（……こういう時、素直なカグヤが羨ましい）

ただ単純に何も考えてないだけかもしれないが、それでも余計な感情に縛られず自然体の自分を表に出せる彼女を羨ましいと思った。

「ほら、そんなに痛むなら休みましょう？」

言いながら、レイジ達が用意してくれたパラソルの中にカイリを運ぶ。

「ヒメカ、お前は海で遊んでこいよ」

「いいわよ。別にどうしても遊びたいわけじゃないし、それに……少なからずわたしに原因があるから……」

「いや、少なからずも何も全部お前が――」

「何か言ったかしら、セクハラカイリ君？」

「い、いえ……俺が悪かったです」

涙みを効かせた視線により、押し黙るカイリ。

（はぁ……せつかく2人きりなのに……）

昔から彼は一言余計な事を言っては痛い目に遭っている。

だというのにちっとも反省しない辺り、バカなのかそれともこれが彼の個性なのか……。

そんな事を考えると、また口からため息が漏れた。

「あつ、そうだヒメカ」

「……………何よ」

ジト目で睨むと、彼は普段通りの無邪気な笑みを浮かべ。

「さっきは言いそびれたけどよ、その水着似合ってるぜ」

と、ヒメカにとって完全なる不意打ちとなる言葉を口にした。

「――」

思考が停止する。

彼が何を言っていたのかを全細胞で理解し、そして意味がわかった瞬間。

ヒメカの顔は、これでもかと言うくらい真っ赤に染まった。

それだけではない、鼓動は高鳴りまるでドラムのように速いリズムで脈打っている。

似合ってるぜ、その言葉が何度も頭の中で繰り返し再生され、彼女は口をパクパクと動かす事しかできなかった。

「ヒメカ、どうかしたのか？」

「っ、べ、別に……なんでもないわよ」

普段通りの強気な口調も、今ではすっかり萎みぼそぼそと呟くように小さなものに。

だが仕方ない、憎からず思っている相手に水着が似合ってるって言われたのだ、嬉しくないわけがない。

おまけに今は2人つきり、ムードしては申し分ない演出だ。

「あ、ありがとう……嬉しい、わよ」

だから、ヒメカ自身も少しだけ素直な反応を返した。

もう少し柔らかな言い方もあったかもしれないが、恥ずかしがり屋な彼女にとってはこれが精一杯。

しかしそれを気にするほどカイリは鋭くないので、「どういたしまして」と返事を返し柔らかな微笑をヒメカに向けた。

それがヒメカの顔を赤くする原因だと気づかず、ヒメカの顔はますます赤みを帯びていくばかり。

淡い恋心がまた大きくなり、おもわず想いを打ち明けてしまおうかと考えてしまうが、彼女は口を閉ざす。

まだ早い、彼は自分の事など異性として見ているわけではないのだ。

それに自分は自分でもわるくらい素直じゃない子供だ。

だから、せめてもう少し大人になってから。

この旅を通じて、少しでも大人になるまでは、この想いを隠しておく。

そう思い、ヒメカは少しだけ自分に素直になろうと、カイリの手に自分の手を重ねた。

照れくさくて、重ねたというより押し返すといった方が正しいが、それでも少女にとっては大きな第一歩。

「どうした？」

「す、少しだけでいいからじっとしてなさい」

「けど、手……」

「い、いいから！ 余計な詮索はしないの！！」

やっぱり素直になるのは難しい。

自分に呆れを抱きつつも、それでもこの時間を大切にしようと思ふ熱くなる頬を無視して、ヒメカは暫くカイリの手の温もりを感じているのだった。

……………。

「——っは！」

水面から勢いよく飛び出し、呼吸をするカグヤ。

「……まったく、元気なのはいいけどちょっとはしゃぎすぎだよ」

そんなカグヤにレイジは呆れながらも、しっかりとついてくる。

ちなみに、彼の頭にはティナとヒカリが無理矢理乗っかりながら喧

嘩している。

大好きなレイジの頭の上に乗る権利を独占したいのだろう、いつぶきや10万ボルトが飛び出すかわかったものじゃない。

「ずいぶん沖まで来ちゃったな……カグヤ、これ以上は危ないから戻るよ」

「大丈夫だよ。私達泳ぐの得意じゃない」

「そういう問題じゃないよ、僕達には水ポケモンもないし万が一の事があつたら危ないでしょ？」

正論を口にするレイジだが、カグヤは不満なのか唇を尖らせる。

しかし、彼の言う通り何かが起きてからでは遅いので、渋々陸地へと向けて泳ぎ始めた。

それに続きながら、近くでビニール製のボートに乗ってはしゃいでいるアクセル達を牽引する。

——わちはもう少し遊びたいニャー

——ピカもー

「ダメだよ。もう少し陸地に近い所で遊ばないと危ないから」

それに……あまり海に入っているとリオンが仲間外れにされて可哀想だ。

ヒトカゲはしつぽの炎が消えた時に命を落としてしまう。

そんな彼が海になど入ってしまったば……結果は目に見えている。

陸地に戻り、モンスターボールを取り出しリオンを表に出す。

……予想通り、不満全開の視線を向けられてしまった。

「ごめんねリオン、海に入れないのは残念だけど……代わりに砂遊びでもしよう？」

——ご主人、俺の事は気にしなくてもいいよ？

「そういうわけにはいかないよ、リオンだけ仲間外れにする事なんて僕にはできない。

ほら、一緒にお城でも作ろう？」

——うん

申し訳なさそうな表情を浮かべつつ、リオンは座り込み砂に手を伸ばす。

——ピカもやるー

〈父上、僕も宜しいですか？〉

〈私もやりたい！〉

「みんなでやろう」

皆で輪を作り、砂のお城を作ろうと砂を集め始めるレイジ達。

——ご主人、ありがとう

レイジの優しさに、リオンは笑みを浮かべて礼を告げる。

そんなリオンに、レイジは笑みを返すだけで何も言わなかった。

「よし。エネコ、私達も一緒にやろう！」

「ニャー！」

「なら、誰にも負けないくらい大きなものを作るのもいいかもね」

「そうだね。よし、頑張ろう！」

「頑張るのもいいけど、張り切り過ぎないようにね？」

「わかってるわかってる、レイジってばすぐそんな事——」

「……………え？」

今の台詞は、自分のものではない。

カグヤもそれに気づき、レイジと共に声のした方へと視線を送ると
……。

「あら、どうしたの？」

そこには、ある意味でとんでもない人物が何食わぬ顔でレイジ達の

前に姿を現していた。

「な、なんで!!?」

突然の事態に、さすがのレイジも素っ頓狂な声を上げてしまう。

何故なら、レイジ達の前に姿を現したのは……。

「な、なんであなたがここにいますか……」

——シロナさん!!」

「休暇よ、休暇」

驚いているレイジ達とは対照的に、シロナはあっけらかんと答える。

嘘だ、すぐさまそう思いレイジはため息をつきたくなった。

本当に、この人の考えている事はわからない。

一方、カグヤはシロナを見てなんともいえない表情を浮かべていた。

(……この人が、シンオウリーグチャンピオンのシロナさん……)

自分にとって目指すべき相手、そしていつか超えたいと思っている相手でもある。

けれど、何故だろうか。

よくはわからないが、なんだかあまり好きになれない。

レイジと彼女が話しているのを見ると、胸の奥が痛むのだ。

僅かな、けれど決して無視できない痛み。

その痛みが、カグヤのシロナに対する感情を良くないものへと変えていた。

「あなたがカグヤ？ レイジくんから聞いたわ。いつか私を倒すくらい強くなるんですって？」

「えっ……」

急に視線を向けられ、ちゃんとした反応を返せない。

「……なる程。たしかに瞳の奥に力強い何かを感じる。

あなた、いつか遠くない未来で私と肩を並べられるほど強くなるわ。

——また待つ楽しみが増えてくれた」

嬉しそうにそう告げるシロナの言葉には、お世辞も皮肉も嫌味すらも感じられない。

ただ本気でそう思い、そしてカグヤが強くなってくれるのを願っている。

それがわかり、カグヤは自分がシロナに対していい感情を抱いていない事に罪悪感を感じた。

（私、嫌な女の子だ……）

わかってる、シロナはただ自分達を心配し見守ってくれている事だ。だがそれでも、正体不明の痛みがどうしてもシロナという女性の存在を許容してくれない。

「で、でもシロナさん……本当にどうしてクチバに来たんですか？」

「だから休暇よ。チャンピオンの仕事も遺跡の探索も一区切りついたから」

「ならカイナに行った方がよかったんじゃない？」

たしかカイナシティはハウエン地方のリゾート地だったはず。

クチバにもこのような海はあるが、規模そのものが違う。

「いいのいいの。それにカイナシティは人気だから人が沢山居るし、それに……」

「それに？」

「……なんでもない。それより砂のお城、作らないの？」

ペタペタと砂を積み上げていくシロナ。

チャンピオンが砂遊び、なんだかまた彼女のイメージが変わってしまったかもしれない。

——それにしても、と

レイジは彼女の水着姿を見て、頬を赤らめてしまう。

あの独特な髪飾りはそのままに、彼女が身につけている水着は露出の高い黒のVネックライン。

ヒメカと同じくらい豊かな胸元が強調されたそのデザインは、正直目のやり場に困る。

「? どうしたの?」

おまけに彼女は、自分の心中など理解してくれないから余計に困る。おもむろに近づかれると、どうしていいのかわからなくなるというのに。

それに、周りの視線も気になって仕方ない。

シロナの登場により、余計に男性の視線がこちらに集中しているのだ。

だがそれも無理はない、それだけシロナが綺麗な女性という事なのだからだ。

〈母上、お久しぶりです〉

「久しぶりねリオル、と言ってもまだ4日くらいしか経っていないけど、レイジくんとは上手くやってる？」

〈はい。父上もみなさんもととても良くしてくれます〉

「…………父上？」

「細かいツツコミは無しにしてください」

またここでいちいち説明して、余計な事態を招くのは避けたい。

幸いにもシロナはレイジの言葉を聞き、それ以上詮索はしてこなかったものの、軽い口調で爆弾を投下した。

「なんだか私達、夫婦みたいね」

「……………は？」

「だって、リオルから父上、母上って呼ばれてるじゃない。だからなんだか夫婦みたいねって」

「ぼっ、な、何を言ってるんですか！！」

珍しく声を荒げるレイジに、シロナはちょこんと首を傾げる。

……今の発言がどんな誤解を生むのかわかっていないのだろうか。

「っ、レイジ!!」

「うわっ!? い、いきなりどうしたの？」

突如としてカグヤに身体を引っ張られ、そちらへと視線を向けるレイジ。

しかし、何故か彼女は頬を膨らませて不機嫌そうな表情を浮かべている。

「…………カグヤ？」

「……なんかよくわからないけど、レイジがデレデレしてるのが気に入らないから私に謝って」

「意味がわからないよそれ、それに何で君に謝らないといけないの？」

「私だって何で気に入らないのかわかんないよ!」

「逆ギレしないでよ……」

呆れたようにため息をつくレイジと、とりあえず彼が悪いという事で八つ当たりを始めるカグヤ。

その2人を見て、シロナはすぐさま納得した。

(ああ、なるほど……)

ようするにカグヤはヤキモチを妬いているのだ。

しかし、自分がヤキモチを妬いているのがわからないとは面白い。
ということは、彼女が彼に抱く想いにも気づいていないだろう。

（好都合、とは思っちゃいけないわね）

いまだにあーだこーだと口論をしている2人を、シロナは暖かな目で暫し見つめていたのだった。

.....。

「——なんだか喉が渴いたわね。レイジくん、カグヤ、何か飲み物を買ってくるけど、何がいい？」

立派な砂の城をみんなで作り終えた後、シロナは立ち上がり2人にそう告げる。

「いいですよ。僕が買ってきますから」

「なら2人で行きましょうか？」

そう言いながら、レイジの左腕に自分の腕を絡ませるシロナ。

いかんせん彼女の方が背が高いので、正直絵にならない光景である。

しかし、カグヤとしては面白くなく、すぐさまレイジの右腕に飛びついた。

「私とレイジが行きますから、シロナさんは休んでいていいですよ？」

「大丈夫よ。そんなに疲れてないから」

シロナは普段通りの笑顔だが、カグヤの表情は誰が見ても不機嫌さ全開だった。

（……なんか、2人の間に火花が散ってるような気がする……）

その理由が自分だと気づかないレイジは、ただただため息をつく事しかできなかった。

と。視線を横に向けると人だかりが生まれていたのが見える。

不思議に思い、近づいてみると……。

「ポケモンバトル大会……優勝賞品はおいしいみず、サイコソーダ、ミックスオレを各1ダース……」

でかでかと看板に書かれた文字を読む。

どうやらこれからとある大会が始まるらしく、人だかりは観客になるうとしている人達のようにだ。

「レイジ」

視線を右に向けると、自分と同じく気になったのか、カイリとヒメカがやってきた。

「カイリ、ヒメカ」

「見たか？　これ」

「うん」

「なら話は早い、出してみようぜ！」

予想通りの言葉に、レイジは苦笑する。

「……レイジ、カグヤ、こちらの方は？」

ヒメカがシロナの存在に気づいたのか、そう訪ねてきたのだが……正直、話せばいいか迷う。

ちらりと視線をシロナへと向けると、苦笑いしながら口を開いた。

——私の事、黙っててくれないかな？

声には出さず、口だけを動かしてそう伝えるシロナ。

「……この人、もしかして……」

「っ」

反射的にヒメカの口を塞ぐ。

「ヒメカ、たぶん気づいてると思うけど、この人はシンオウリーグチャンピオンのシロナさんだ。

でも彼女は極力目立ちたくないから、あまり声に出さないでくれ」

こくこくと頷き、レイジの願いを聞き入れるヒメカ。

それに安堵し、口から手を話すレイジだが……。

「あつ、誰かと思ったらチャンピ——ぐぼっ!!?」

何も考えずにカイリがシロナの正体を声高々に口にしようとしたので、レイジとヒメカは同時に腹にボディブローを打ち込み無理矢理黙らせる。

いつも二倍以上の威力に、変な声を出しカイリはその場に倒れ込んだ。

……少しやりすぎたかもしれない。

「大丈夫よ。ただ気絶してるだけだから」

(気絶してる時点で大丈夫とは言い難いような気がするけど……)

しかし、レイジもそれ以上は考えない事にする。

「レイジくん、この大会に出てみたらどう?」

「えっ?」

「いい勉強になると思うし、それに……久しぶりにあった君がどれくらい強くなったのか見てみたいの」

「……………」

「あつ、じゃあ私も出ます!!」

「あなたは応援でもしてなさい」

「えー……」

「じゃあ訊くけど、本気でレイジと戦えるの？
実戦とトレーニングは違うのよ？」

ヒメカにそう言われ、うなだれるカグヤ。

いや、それ以前にこちらの意志は無視されるのだろうか。

「頑張ってね、レイジくん」

「賞品には興味ないけど、頑張って」

「レイジ、私の分まで精一杯バトルしてね」

……どうやら、自分の意志など無関係のようだ。

1対3のこの状況ではレイジが勝てるわけもなく。

「……わかったよ」

渋々了承し、エントリーする為に受付へと向かったのだった。

（僕って、女の子には弱いのかな………？）

第12話 くちバビーチ、ポケモン大会！

クチバシテイに存在するクチバビーチでは、現在熱気に包まれていた。

暑いから、などというありきたりな理由ではない。

海だというのに、人々はその海には入らずある一点に集まっていた。

『さあ、クチバビーチ名物のポケモンバトル大会がいよいよ幕を開くぞ。』

みんな、燃えているか！？』

進行役の声が場に響き渡り、観客からの喝采も大きくなっていく。

その中で1人だけ、その空気とは真逆の冷めた空気を纏っていた。

彼の名はレイジ、マサラタウン出身のポケモントレーナーであり、この大会に参加している少年である。

何故彼はこのような空気を纏っているのか、答えは至極簡単、半ば強引に参加させられたからだ。

ポケモンバトル自体に否定的な考えは今持たない、しかし目立つ事が嫌いなレイジにとってこういう場は正直苦手である。

『じゃあさっそく始めようか！ 第1試合はレイジ選手対ソウスケ選手だ！！』

（さっそく僕からか……）

げんなりしながらフィールドに向かう。

周りからの拍手や視線が余計に精神的によろしくない。

相手は年上の男性、特にこれと言って言うべき特徴もないので割愛する事にする。

『ルールは3対3のシングルバトル、交代は三回までOKだ。

それじゃあ両選手、準備は良いかい！？』

無駄に騒がしい司会兼審判の言葉には応えず、両者共にモンスターボールを取り出す。

と。

「レイジ、ファイト」

「レイジくん、頑張ってねー！！」

観客席の一角からそんな声が聞こえた。

確認しなくてもわかる、カグヤとシロナだ。

はっきり言って恥ずかしい事この上ない、ヒメカに至っては完全に他人のフリをしている。

ちなみにカイリはいまだ気絶中、哀れである。

まあ応援してくれるのは嬉しい、頑張ろうという気持ちになるのは感謝している。

しかし、しかしである……何故2人は。

「……なんでチアガールのコスプレしてるの？」

もはやツツコミを入れる精神的余裕もなくなったレイジに代わり、ヒメカがツツコミを入れている声が聞こえた。

そう、2人は所謂チアガール姿になってレイジの事を応援しているのだ。

2人共長い髪はツインテールにし、へそ出しの露出の高い服装。

完全にコスプレですね、本当にありがとうございました。

浜辺でこんな格好をしている辺り、ふざけているのかそれともギャグでやっているのかわからない。

否、2人は本気なのだ、ただレイジを応援するが為にこんな格好をしているだけで、大マジなのだ。

……断言できる辺り、それはそれで凄まじいと思ってしまうのだが。

もしシロナがシンオウ地方最強のトレーナーだと気づいた人がいたら、おそらくある意味でトラウマものの光景かもしれない。

——周りの視線がレイジに突き刺さる

まいった、バトルをする前から疲れるとは思わなかった。

とは思いつつ、とりあえずバトルに集中することに。

『それでは第1試合……バトル、ゴー!!!!!!』

「アクセル、お願い！」

「いけ、ピジョン!!!」

レイジはアクセルを、ソウスケはピジョンをフィールドに出す。

(ピジョン、か……)

かくとうタイプであるアクセルには不利な相手。

だが、初陣としてはあえて不利な相手の方が勉強になる。

「アクセル、はじめての実戦だけど落ち着いて」

へはい、父上!<

拳を構え、身構えるアクセル。

「ピジョン、かぜおこしだ!!!」

翼を羽ばたかせ、突風を生み出すピジョン。

しかしその中でもアクセルは動じずに、不動のまま大地に脚を降ろしていた。

「つばさでうつー!!」

無駄だと悟ったのか、すぐさまこちらに向かってくるピジョン。

「――見切って」

短くそう一言指示を告げる。

だがアクセルは動かず、黙ってピジョンが向かってくるのを見つめるのみ。

そして、ピジョンの翼がアクセルに命中する瞬間。

ふわりと、そんな軽い音が聞こえそうなほどの小さな動きだけで、アクセルはピジョンの攻撃を完全に回避していた。

「なっ――!!?」

驚きは、対戦相手であるソウスケの口から放たれる。

すぐさま方向転換し、再び攻撃を仕掛けるピジョンだが……何度やってもアクセルには当たるところか掠りもしない。

『な、なんと! ソウスケ選手のピジョンの攻撃がまるでヒットしていません!!』

まるで羽根のように軽やかな動きで、レイジ選手のリオルは攻撃をかわしております!』

「……へえ」

おもわず応援用のポンポンを持ったまま、シロナは感嘆の声を漏らす。

（なるほど、アクセルの運動能力を重点に育てたみたいね……）

どうやら短所を補うより長所を伸ばす事に専念したようだ。

それは、自分のルカリオと同じ育て方。

無意識だというのはわかっているが、それでも嬉しいと感じてしまうシロナだった。

「くっ、ならこうそくいどうからのつばさでうつだ!!」

先程とは比べものにならない動きで、ピジョンはアクセルへと攻撃を仕掛ける。

だが、それでもレイジ達は慌てない。

「――脚を掴んでたたきつける」

こうそくいどうでスピードを上げたピジョンの攻撃を避け――瞬間、アクセルの右手がピジョンの脚を掴む。

突然身体を引っ張られたピジョンは驚くが、既にアクセルは勝負を決めていた。

〈は――っ!!〉

裂帛の気合いを込め、砂地へとピジョンを叩き付ける――！

爆撃めいた音と共に、砂が空へと舞い上がった。

目を回しながら、気絶しているピジョン。

『ピジョン、リオルのたたきつけるで戦闘不能だあつ――！』

実況の声で、観客席からは拍手が巻き起こる。

（まだ一匹目なんだけどね……）

〈父上、どうでしたでしょうか……？〉

レイジの元へ近づき、少し不安げにそう問うアクセル。

自分の戦い方に不備があったと思っているのか、そう思うとつい苦笑を浮かべてしまう。

「大丈夫だよ。よく頑張ったね」

だから、安心させるようにアクセルの頭を撫でながらそう口にするレイジ。

すると先程までの不安げな表情は消え、アクセルは嬉しそうに頬を綻ばせた。

「まだやれる？」

〈もちろんです、是非やらせてください――！〉

気合い充分のアクセルに頷きを返し、交換はせず再びフィールドへと向かわせる。

「いけ、ユンゲラー!!」

『おおっと、ソウスケ選手はユンゲラーをフィールドに出しました! またまたリオルにとって不利な相手となりましたが、レイジ選手はどう対処するのか!!』

エスパタイプユンゲラー、かくとうタイプのアクセルには不利だ。

しかしそれでも、レイジはアクセルで戦わせるつもりだ。

「アクセル、はどうだん」

「ユンゲラー、サイケこうせん!!」

はどうだんとサイケこうせんがぶつかり合い、互いに相殺される。

「踏み込んで」

「ユンゲラー、テレポート!!」

距離を縮めようとユンゲラーに踏み込むアクセルだが、テレポートによりその場から消え去ってしまう。

「後ろにまわしげり」

へっ、は———!>

右足を軸に、左足を使って後ろへと風切り音を響かせながら蹴りを放つアクセル。

しかし紙一重で回避され、再び両者の間合いが遠のいた。

（……おかしいな）

相手の動きに、レイジは違和感を覚える。

確かにユンゲラーは接近戦などできない、だからこそ距離をとって戦うそのやり方に間違いはないだろう。

しかし——攻撃が単調すぎるのだ、これならば簡単に回避できる。

これではまるで、時間を稼いでいるような——

（時間稼ぎ……?）

瞬間、敵の意図を理解したレイジはすぐさまアクセルに告げる。

「アクセル、みらいよちが来る!!」

〈え——ぐっ!!?〉

声はしっかりと届いたのだが、時既に遅くユンゲラーのみらいよちが命中し地面へと倒れ込むアクセル。

〈ぐ……っ!!!〉

迂闊だった。

相手の単調な攻撃に対して疑問を抱くべきだったのだ。

アクセルは己の未熟さに情けなさを覚える、こんな事では父上の役になど立てやしない。

「ユンゲラー、とどめのサイコカッターだ!!」

敵の攻撃が迫る、だがまだ立ち上がれ――

「みがわりだ!!」

「っ――!!」

レイジの声に反応し、すぐさま技を展開した。

それと同時にみがわりが代わりに攻撃を受け消えてしまうが、ユンゲラーに隙が生まれる。

へうおおおーっ!!!!<

「まわしげり」

アクセルのまわしげりがユンゲラーの顔に突き刺さる。

だが、まだ攻撃は終わらない――!!

「とびひざげり!!」

〈セイ——！〉

顎を打ち上げ、着地する前に次の構えを。

「はっけい！」

〈はっ——！〉

アクセルのはっけいをまともに受け、ユンゲラーが地面を転がっていく。

——これで、詰めだ

「アクセル、はどうだんだ！！！」

〈ハアアア……セヤアアアアッ！！！〉

特大のはどうだんを作り出し、それをユンゲラーに向けて撃ち込む。連続攻撃を受け、吹き飛ばされているユンゲラーに防ぐ手立てはなく。

はどうだんをまともに受け——戦闘不能に陥った。

『決まったー！！　なんと、ピンチになりながらも見事な連携でレイジ選手が2連勝を勝ち取りましたー！！』

場も盛り上がり、観客達の声援も先程より大きくなる。

「ハア…ハア…ハア」

「アクセル、お疲れ様。ゆっくり休んで」

へい、いえ……父上、僕はまだ」

「ダメだよ、無理をしても僕は喜ばない。

それに、君はよく戦ってくれた。最後の連携は特に良かったよ」

〈父上……〉

労いの言葉に、アクセルは口元に浮かぶ笑みを隠す事ができなかった。

大好きな父上に誉めてもらえた、その事実がアクセルにとってなによりの喜びに変わる。

「ありがとうアクセル、よく頑張ったね」

言いながら、アクセルをボールの中に戻す。

『さあ、ソウスケ選手はこれで追い込まれた。

次のポケモンで起死回生を狙えるのでしょうか!？』

「――いけ、ケンタロス!!」

ケンタロスが雄叫びを上げ、砂地のフィールドに現れる。

「…………ケンタロスか、レイジは何を出すと思います?」

ポンポンを振り上げながら、カグヤは隣にいるシロナへと問う。

「そうね……タイプだけで考えるとレイジくんの手持ちで不利になるポケモンはいない。

でもケンタロスはパワーがあるから、おもわぬ攻撃に遭ったらどうなるかわからないわね」

「だとすると、自分の手持ちで一番強いティナを出すんじゃないか？」

腹をさすりながら、いきなりカイリが会話へと入ってきた。

「あら、目が醒めたの？」

「……お前さ、まず一言言う事があるんじゃないかねえの？」

「あんたが余計な事を言おうとするからよ、自業自得だと思って諦めなさい」

「ひでえ……」

身も蓋もない言葉に、カイリはこれ以上何も言えずにうなだれる。

哀れカイリ、しかし半分は自分のせいなので諦めてくれ。

「でもカイリの言う通り、タイプの面で特にこだわる必要がないなら、ティナを出すのがセオリーかもしれないわね」

（もう俺の事はスルーかよ……）

そんな事を話している間に、レイジは次に出すパートナーを決めた

ようだ。

そして、レイジが二体目に決めたポケモンは。

「リオン、お願い!!」

炎タイプのヒトカゲ——リオンだった。

「あら意外。リオンを出してくるなんて」

「そういえばさ。リオンってレイジのポケモン達の中じゃどれくらい強いんだ？」

「どうだろ。レイジ自身あまり強さとかにはこだわらないから。

でも……間違いなく強いと思うよ、リオンは」

「へえ……」

迷いのないカグヤの声に、カイリはおもわず声を漏らす。

（なら、その实力を見せてもらおうかね）

前に戦った時と比べてどれくらい強くなっているのかを

「ケンタロス、とっしん!!」

「リオン、かえんほうしゃ」

まっすぐ向かってくるケンタロスに、リオンのかえんほうしゃが命中するが……。

炎をともに受けているというのに、ケンタロスは止まらずにリオンへと辿り着きその身体を叩き付けた。

吹き飛ばされ、地面に倒れながらも立ち上がるリオン。

（……やっぱり、パワーでも向こうが上か）

リオンの技は確かにパワーが高い。

しかしそれを操るリオンがケンタロスよりパワー不足なのは否めなかった。

「リオン、かげぶんしんだ」

命を聞き、すぐさま己の分身を作り上げていくリオン。

ケンタロスを囲むように展開し、惑わせる。

だが――

「ケンタロス、ふぶきだ!!」

ケンタロスの放った広範囲のふぶきが分身ごとリオンを捉え、容赦なくダメージを与えていく。

「っ」

先程の二体とはまた強さが違う、どうやら切り札は最後までとっておくタイプだったようだ。

「みずのはどう!!」

「避けて!!」

間一髪、ケンタロスから放たれたみずのはどうを回避するリオンだが、その後もみずのはどうを連発されて防戦一方。

（パワーもスピードも、今のリオンは完全に負けてる……）

それに、まだ“兆候”が見られないのは何故――

「ギャウツ!!?」

くぐもった悲鳴を上げ、遂にリオンがみずのはどうを受けてしまった。

「リオン!!」

まともに受け、どうにか立ち上がるがかなり辛そうだ。

「――リオン、よく頑張ったね」

だから、レイジはリオンを戻そうとボールを構えようとするが。

――ご主人、俺はまだ戦えるよ!!

他ならぬリオンによって、その動きを止められてしまう。

「リオン……」

——みんな強くなってるんだ、俺だって強くななきゃご主人の力にならない!!

瞳に宿すのは、確かな闘志の炎。

傷つきながらも、自分が不利だとわかりながらも、リオンは勝負を諦めていなかった。

「……わかったよ。リオン」

それを見せられて、一体どうして彼を戻せるというのか。

ボールを戻し、再び瞳を戦いの場に向ける。

——ご主人を勝利に導くのは俺だ、お前なんかには負けない!!

「その意気だよリオン、かえんほうしゃだ!!」

リオンのかえんほうしゃがケンタロスに直撃する。

効いていないわけではない、だがそれでもケンタロスの強靱な耐久力には届かなかった。

——こんな炎じゃダメだ!　こんなじゃ……ご主人を勝たせられない!!

もっと強い力を、リオンは心の中で何度もその言葉を繰り返す。

強き炎を、相手に負けないくらいの強い炎を。

——瞬間、リオンの身体に異変が

『こ、これは……！？』

身体が光に包まれる現象。

これは、トレーナーであるならば誰でも体験した事があるもの。

そう——“進化”の兆候である。

「う、嘘……バトル中に進化する事があるの！？」

「たしかに珍しいケースね、でも……ないわけじゃないわよ。

ポケモンが進化する理由は、大抵がよく育てられたり特定の石を使って進化するとかだけど、ポケモンの強き願いと想いがこんな進化をもたらす事もあるの」

ポケモンにはまだまだ謎が多い。

人と同じ心を持ち、その想いは時に人と同じく奇跡を起こす事だつてあるのだ。

今回はきつと、リオンのレイジに対する信頼と愛情が彼を進化へと導いたのかもしれない。

またそれも、ポケモントレーナーとして強き力を持っているからこそでもある。

（レイジくん、やっぱりあなたは凄い人よ）

……。

やがて光が収まり、リオンはヒトカゲからリザードへの進化を終えた。

「リオン……」

——レイジ、さっさと終わらせるぜ!!

進化して口調が荒っぽくなってしまったようだが、根本が変わっていないようで安心した。

『なんとなんと、レイジ選手のヒトカゲがリザードに進化したというハプニングがありました。これですます試合が楽しくなってきましたぞ!!』

「ケンタロス、みずのはどう!!」

再び弱点であるみずのはどうで攻撃を仕掛けてくるケンタロス。

だが、今のリオンは先程までの彼ではない。

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

みずのはどうに向かってかえんほうしゃを放つリオン。

両者の技が同時にぶつかり合い——みずのはどうが押し戻される!!

「なっ——!!?」

先程とはまるで違うパワーに、ソウスケの口からは驚愕の声が。

「かえんだん!!」

大人の握り拳大ほどの大きさの火球がいくつも生み出され、その全てがケンタロスに向かっていく。

「くっ、ケンタロス、はかいこうせんで薙ぎ払うんだ!!」

さすがに全てを回避する事は不可能だと悟ったのか、ケンタロスにはかいこうせんを命じるソウスケ。

それにより、かえんだんの全てが撃ち落とされ爆音が響く。

——だが遅い、既に彼等は次の行動に移っている。

「ほのおのパンチ!!」

煙に紛れて間合いを詰めていたリオンの右腕に炎が宿り、それをケンタロスに叩きつける。

「トドメだ、フルパワーでかえんほうしゃ!!」

大きく息を吸い、特大のかえんほうしゃを放出するリオン。それを防ぐ術をケンタロスが持ち合わせているはずもなく、炎に包まれていき——収まった時には、目を回し戦闘不能に陥っていた。

『決まった——!! 第1試合の勝者は、レイジ選手に決定だ——』

!!
』

ハイテンションでそう叫ぶ司会者に続き、周りからは割れんばかりの拍手が巻き起こった。

それを煩いと思いつつ、レイジは対戦相手の元へ。

「とても楽しいバトルでした、ありがとうございます」
ポケモンバトルは、礼に始まり礼に終わる。

それを忘れないように、レイジはソウスケに向かって手を差し出す。

「……こっちこそ、楽しかったよ」

ソウスケも笑顔を浮かべ、レイジの握手に応じてくれた。

（男と男の友情って、いいわね……）

（あつ、レイジってばちゃんと握手してる）

（なる程……レイジが強いのは、バトルの後でもトレーナーとして振る舞っているのも、一つの要因なのね）

（なんか腹減ったな……）

上からシロナ、カグヤ、ヒメカ、カイリとなっているが……若干一名、全然違う事を考えていた。

……………。

「レイジ、おめでとう！」

「まだ一回勝っただけだよ」

「それでもよ。また強くなったようね」

「ありがとうございます、でも……その格好は勘弁してください」

「えー……メイド服バージョンの方がよかった？」

「そういう問題じゃない……というか、何その変なバージョンは」

「他にもあるよ。ドレスとか巫女とかマニアックな所では体操着とか」

「……………」

もはやどこからツツコミを入れていいのかわからない。

……カグヤは昔からコスプレをするのが趣味だというのはわかっていたが、まさか旅先でも衣装を持ち歩いているとは。

そしてよくあったな、シロナのサイズが。

「結構楽しいわね、こういう服を着るのも」

まさかの発言に、カグヤを抜かしたレイジ達はおもわず顔を見合ってしまった。

もはやヒメカとカイリの2人も、既にシロナをチャンピオンとして見る事ができない。

「じゃあシロナさん、次は巫女服バージョンで応援しましょう！」

「いいわねそれ、でもどうやって着るのかわからないから教えてくれる？」

「もちろんです！」

（……どっちから説教してやろうか）

「……………」

「？ カイリ、どうしたの？」

「あー、いや……俺も服を着てきたいと思ってさ……」

既に服を着ているヒメカ達とは違い、自分は気絶していたのでまだ水着姿なのである。

別におかしいわけではないのだが、なんとなく仲間外れにされた気がするのでこのままではいただけない。

「なら着てくればいいじゃない、次の試合までまだ時間があるんだから」

「お、おう……サンキューな」

そそくさとその場から離れるカイリ。

その後ろ姿を見ながら、ヒメカは口元に笑みを浮かべた。

「次普通の服にしてくれなかったら本気で怒るからね？」

「えっ、レイジ巫女服は嫌いなのか？」

「……君の耳は一体どういう構造になっているのかなあ？」

さて、早くあのコスプレ娘を止めてあげねばレイジが可哀想だ。

ため息をつきつつ、ぷるぷると震え怒りを我慢しているレイジと、まるでわかっていないカグヤの元へと駆け寄るヒメカなのであった。

……。

「ふう……すっきりした」

いつもの服に着替え、ついでにトイレも済ませたカイリは、言葉通りすっきりした表情を浮かべながら、大会会場へと急ぐ。

「まったく、なんで会場はあんな端の方にあるんだよ……」

往復するのも面倒だなと思いつつ、少し歩くスピードを速める。

「……………?」

ふと、なにか違和感を感じその場で立ち止まった。

「――」

……気のせいかな、そう思い再び足を動かそうとした瞬間。

「っ、ぐ――!!?」

突然、感じた事のある痛みと共に“能力が勝手に解放された”

(な、に――!!?)

少し先の未来を視る事ができるカイリの能力。

しかし、このように突然勝手に発動する事などなかったというのに、
一体どうして――

「――」

頭の中で、映像が再生されていく。

見えるのは、砂浜と海。

このクチバビーチだろう、周りが岩に囲まれているので、おそらく
ビーチの中でも端に位置する場所のはずだ。

そこに、1人の少女が二人組の男女に追いかけている光景が広がっていた。

(こいつ、は……!?)

映像はそこで途切れ、続きを視ようにもそれは叶わない。

だが、あの映像が近い未来に起きる出来事だと理解した瞬間——カイリは会場とは真逆の方向へと走り出した。

レイジに説明すればわかってくれる、だがあの映像を視た限りではそんな悠長な事をしていられる余裕などはなかった。

だから危険だと頭では理解していても、カイリは誰にも自分が視た事は告げずに走り出した。

――運命の歯車が少しでも動き出すまで、あと少し

第13話 謎の少女と忍び寄る影

「レイジ、二回戦も勝ったね！」

「その調子よ、レイジくん」

「はい、ありがとうございます」

試合が終わり、カグヤ達から賞賛の声を掛けて貰っているレイジ。

しかし……彼の表情はどこか浮かないものになっていた。

「……レイジ、どうかしたの？」

「ああ、いや……カイリ、遅いなって」

「あ、そういえば」

第1試合が終わってから服を着るために戻っただけだというのに、カイリは未だに帰ってきていない。

「別に心配しなくても大丈夫よ、あの人だってそこまで子供じゃないんだから」

「……うん」

それはレイジにだってわかっている。

だが——感じたのだ。

たった一瞬、刹那の時間と呼べるくらい些細なものだったけれど。

違和感と呼べるべき、あの力の感覚を。

（本当に、気のせいだったのか……？）

一度そう思うと、もはや無視する事は難しくなってしまう。

そんな時、背後から彼に声を掛ける人物が。

「ヘイ、そのソルジャーボーイ！」

「……………」

後ろに振り向いてみると、そこには金髪の筋骨隆々の男性がにこやかに笑いながら、自分を見つめていた。

「ハジメマシテー、ミーの名前はマチスいいマース。

ボーイの戦いを拝見させてもらいましたが……なかなかやりますネー。

でも、そんな程度の腕ではミーには適いませんヨ」

「は、はあ……」

よくわからないが、ようするに自分は今この人に小馬鹿にされているのだろうか。

しかし、好感の持てる笑みのせいで全然そんな風には感じられない。

(この人……)

感じる、タケシやカスミと同じくらい強いオーラを。

それにマチスという名には、どこか聞き覚えがあるような……。

「ちょっと、いきなり失礼じゃないですか？」

レイジを馬鹿にされたと思ったのだろう、眉を潜めてマチスに食ってかかるカグヤ。

しかし当のマチスは肩を竦めるだけで、カグヤの言葉には眼中にないかのような態度を見せる。

「まあせいぜい頑張る事ですネー、このまま行けばボーイとミーは決勝で当たりますカラ。

少しは楽しませてくれれば嬉しいですケド、まあ……ボーイではそれも難しいデスネ」

豪快に笑いながら、言うだけ言ってマチスはその場を去っていく。

……結局何がしたかったのだろうか、あの男は。

「~~~~っ、なんなのよあの態度!!」

レイジが弱いみたいない方して!! 見てなさいよ……決勝ではギタギタのボコボコにしてやるんだから!!」

「あなたが戦うわけじゃないでしょ」

冷静なヒメカのツツコミにも反応せず、1人で勝手に怒りに震える

カグヤ。

レイジとしては、別に今のやりとりなどどうでもよかったのだが。

「……………」

そんな事よりも、やはりカイリの事が気になってしまう。いくらなんでも遅すぎる、たかだか着替えにそこまで時間が掛かるわけがないのに……。

「レイジくん、そろそろ試合が始まるわよ?」

シロナの声で我に帰り、一度この思考を中断させる。

考えすぎだ、そう自分に言い聞かせながら……。【カイリside】

「……たしか、この辺だったよな……」

先程の映像を頼りに、カイリは岩場へと向かって歩を進めていた。

もうレイジ達がいる会場からはだいぶ離れてしまっており、辺りには人どころかポケモンすらいない。

気のせいだと思いたかったが、あいにくと自分の力で視た未来が外れた事などない。

それに、この力が勝手に解放された理由も知らなければ。

全ての物事には何かしらの意味がある、親友であり自分の秘密を知っているレイジの言葉を反覆させながら、カイリは更に歩を進めた。

——そして、やはり自分が視た未来は現実だと思い知る事になる

（あれは……！？）

ここから前方に見える光景。

それは漆黒の服で全身を包んだ一組の男女が、ポケモンを出して1人の少女を追いかけている光景だった。

あきらかにおかしく、あきらかに異常だ。

少女を追いかけているのも異常だが、捕まえる為にわざわざポケモンを使うなど、一体何があったのだろうか。

（って、見てる場合じゃねえ！！）

すぐさま走り、少女と男女の間に割って入る。

「えっ……？」

「……………」

突然の登場に後ろから少女の驚きの声が聞こえたが、目の前の男女はカイリの登場に驚く事なく敵意を込めた瞳で睨みつけてきた。

「おいガキ、いきなり現れて何の用だ？」

低く威圧感のある声で、ダークブルーの髪と瞳の男がカイリに問う。殺意さえ込められている視線に内心震えながらも、カイリは男達に問うた。

「お前等こそ、2人がかりで女の子を追いかけて回すなんて、一体この子が何したっていうんだよ！」

「お前には関係ない、わかったらさっさとこの場から消えろ。さもないと……死ぬ事になるぞ？」

「――――」

心が、凍りついていく。

今まで敵意をこの身に受けた事ないのに。

否、ないからこそわかるのだ。

この男の言葉が偽りではなく、そしてこの殺意も決して気のせいなどという事ではないということも。

だが、人はここまで明確に殺気を放てるものだったのか――――

「別にわざわざそんな事を言わなくてもいいわよ、邪魔なら始末すればいいんだから」

片方のワインレッドの髪と瞳の女性が、更に物騒な言葉を口にする。

そこに一片の躊躇いもなく、その言葉通りカイリを始末するつもりだろう

男達のポケモン——ハブネークとゴルバットも、カイリを完全に始末する対象に変えてしまったようだ。

（くそ……っ）

相手は強い、それこそレイジに匹敵する程に。

おまけに2対1では、こちらに勝機など殆どないだろう。

足が震え、今すぐにその場で膝が折れてしまう程の恐怖にすら、あとどれくらい保たせられるかもわからない。

だから——カイリはすぐさま“力”を使う。

勝つ事ができないなら逃げるしかない、だが普通の方法ではとてもじゃないが逃げられない。

躊躇いなど消し、カイリはすぐさま力を解放しながら自分のポケモンをすべて場に出す。

「モウカザル、ゴルバットに向かってかえんほうしゃだ。

そうしたらハブネークがポイズンテールで防いでくる、すぐさまゴルバットが噛み付こうと向かってくるから、ツタージャはつるのムチでゴルバットの左の翼を狙え。

その後ゴルバットはバランスを崩すから、モウカザルはかえんぐるまでゴルバットをハブネークの所にぶっ飛ばすんだ。

ツタージヤはゴルバットに攻撃を当ててからソーラービームのチャージを。あのポケモン達がぶつかった瞬間にチャージが終わるから、後はあいつらの所に吹き飛ぶようにソーラービームを当ててくれ」

まるで演算装置のように素早く指示を出していくカイリ。

何故なら、こうでもしなければ力の反動によってカイリの身体が保たなくなるからだ。

「そうだな。ならさっさとこのガキを始末——」

「モウカザル、かえんほうしゃ——！」

先手必勝、ゴルバットに向けてかえんほうしゃを放つモウカザル。

「甘いわよ」

しかし、ハブネークがゴルバットの前に立ち、ポイズンテールでかえんほうしゃを散らしてしまった。

「ゴルバット、うるさいトレーナーを始末しろ」

命を聞き、ゴルバットがその鋭い牙を光らせながらこちらへと向かってくる。

しかし、その未来は既に見える、ツタージヤがつるのムチでゴルバットの左の翼を攻撃。

するとバランスを崩し、その場で急停止してしまうゴルバット。

「何———!?!」

驚愕の声は、男の方から放たれる。

まさか目の前のとるに足らない存在にこうまで邪魔されるとは思わなかったのか、しかしカイリ達にとっては好都合。

「モウカザル、かえんぐるま!!」

炎でその身を包み、ハブネークをゴルバットに向かって吹き飛ばすモウカザル。

空中でバランスを直そうとしていたゴルバットが避けられるはずもなく、互いに地面へと倒れ込んだ。

「ツタージャ、ソーラービームだ!!」

そして、ツタージャのソーラービームがまともにハブネーク達へと命中。

「うお———!?!」

「キャッ!!」

そのまま男達を下敷きにし、それを見届ける前にポケモン達をボールに戻し座り込んでいる少女の手を掴み走り出した。

「えっ!?!」

「バカ、さっさと逃げるんだよ!! それともあいつらに捕まりたいのか!？」

「あつ、えつと…い、いえ!」

「なら走るぞ!!」

このまま一直線に浜辺を走ってもいずれ追いつかれる。

そう考えたカイリは、近くに生い茂っている森の中で逃げながら、街を目指す事に。

(あー、くそ。一体何だってんだよ!!)

自分の浅はかさに呆れながらも、今更考えた所で無駄なので、カイリは少女と共に森へと逃げ込んでいった。

…………。

「はあ…はあ…はあ…」

「ふう…ふう…」

肩で大きく息をしながら、木の幹に身体を預ける2人。

「ま、まったく…何だってんだ」

「あ、あの…ありがとうございます。おかげで助かりました」

「……別にいいよ。気にすんな」
ちよっとぶつきらぼうにそう返事を返す。

そこで、ようやくカイリは少女の容姿を確認する事ができた。

少し暗めの赤髪を短く切りそろえ、また頭の左右にはまるで角のよう
に髪が伸びている。

歳は自分より少し下くらいか、だが身長はあまり変わらない。

「私、カノンっていいいます。あの……あなたのお名前は？」

「……カイリだ」

「カイリですね。……ありがとうございますカイリ、本当に助かり
ました」

「だからお礼なんていいよ。それよかなんでカノンは追いかけられ
てたんだ？」

「えっ、あ、そ、それは……」

途端に様子がおかしくなり、俯くカノン。

言いたくない理由があるのか、それとも言えない理由があるのか。

「……別に言えないならいいけどな」

だから、あまり気にしていない事を向こうにわからせる為に、カイ

りはそう口にした。

「えっ、でも……いいんですか？」

「言いたくないんだろ？なら別に言わなくてもいいよ、俺だってどうしても知りたいわけじゃないしな」

誰にだって、人に言えない秘密の一つや二つは持っている。

自分とて、ヒメカに隠し事をしているのだから……。

「……優しいんですね」

「別に。それよりさっさと街に戻るぞ、いつあいつらが追いついてくるとも限らないからな」

そう言って歩き出そうとした瞬間——視界がぼやけ頭痛が走った。

「っ——」

「だ、大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……ちよっとクラッとしただけだ」

やはりあの短時間でも、力の反動は確実にカイリの身体を蝕んでいる。

いつぞやの時のように支えられなければまともに動けないよりマシだが、それでも気分のいいものではない。

頭を振って、まだズキズキと痛む頭を無視しながら、カイリはカノンと名乗った少女と共に森の中を歩き始めた。

……………。

「へえ、ポケモントレーナーとして各地を旅しているんですか」

「ああ。夢はポケモンマスターになる事だからな。
と言っでものんびりやってるから、まだまだ道のりは長いけど」

「でも、カイリならきつとポケモンマスターになれますよ。
だって、こんなにもポケモン達に好かれているんですから」

ただ黙って歩き続けるのはあれなので、2人は他愛のない話で盛り上がった。上がった。

だが、カノンはカイリに質問するだけで、逆にカイリがカノンに質問しても適当に誤魔化されてしまう。

面白くはないが、言えない事情でもあるのだと無理矢理納得させた。

「でも、本当にいいんですか？」

「なにが？」

「いえ、その……私と一緒に居たら、また襲われますし……」

「んー……たしかにそうかもしれないけど、ここで「はいさようなら」なんてひどくないか？」

俺は別に気にしてないから、そんな事言うなよ」

一度関わったのだ、こうなればとことん付き合おうと決めた。

それに……彼女をこのまま放ってはおけないと思ったのだ。

「……ありがとうございます」

「んー、いや……別に気にすんなって」

「それでも、ありがとうございますです」

ふわりと柔らかい微笑を見せられ、おもわず頬が熱くなっていく。

それを誤魔化すようにカノンから視線を外し、彼女の手を握っている手の力を強めた。

（まったく……なんかヒメカやカグヤとは違うタイプだから、調子狂っちまうな……）

あまり女性に対して面識がないカイリにとって、こういう笑顔は正直困る。

それでも嫌な感じがしないのは、やはり彼女の優しさが全面に出ているからだろうか。

「っ、カイリ」

突然耳元で囁かれ、びっくりと身体が震える。

「ど、どうした？」

「……さっきの連中が、こちらに近づいてきます」

「――――」

おもわず、呼吸が止まってしまう。

額には汗が滲み、先程味わった恐怖と緊張が思い出されていく。

「――走るぞ！！」

追いつかれてはさっきみたいには逃げられない。

こうなれば、街まで休み無しで走って逃げ切るしかない。

そう思い、カイリはすぐさま足に力を入れ走ろうとするが。

「――あまり調子に乗らない方がいいわよ」

すぐ背後から、そんな事が聞こえたような気が、した。

そう思った時には、自分達に立ち塞がるように先程の連中が身構えていた。

「くっ……！！」

すぐさまモウカザルとツター ज्याを出し、身構えるカイリだが。

「ガキ、さっさとそのポケモンを渡せ。そうすれば命だけは助けてやる」

「ふざけんな。なんでお前達に俺のポケモンを」

そこまで言いかけ——違和感を覚える。

（——そのポケモンを、渡せ？）

おかしい、連中の狙いはカノンのはずだ。

だというのに、どうして自分のポケモンを渡せなどと言うのか……。

「……どうやら、坊やは盛大な勘違いをしているようね」

やれやれと呆れながら、女は肩を竦める。

勘違い……？

何を言っているのかわからず、おもわず呆けていると。

「ワタシ達が言ってるのは坊や、あなたの後ろにいるポケモン——」

——ラティアスのことを言ってるの」「……………」
「は？」

理解、できない。

ヤツが何を口に出しているのか、理解するのに思考が追いつかない。

——ラティアス

その名前ならば、トレーナーである自分でも知っている。

ハウエン地方に伝わる伝説のポケモン、その一匹がラティアス。

しかし、このカノンという少女がどうみても人間だ、ポケモンではない。

「そう見えているだけよ、ラティアスは光の屈折を利用して人間の姿に映しているだけ……まあ、そんな説明なんか必要ないわね。

さっさとそのラティアスを置いて消えなさい、でも面倒だから始末しちゃうかしら」

「……カノン、今のは……本当のことなのか？」

「……………」

震える声でそう問いかけても、カノンは口を閉ざし答えようとしな

い。

それが無言の肯定であるとわかり、カイリは混乱している自分の頭を整理していく。

つまり、このカノンという少女は人間ではなく、伝説のポケモンと呼ばれているラティアスで。

そんなラティアスを捕らえようと、この二人組は彼女を追っている。

「……そっか、よくわかったよ」

「理解が早くて助かるわ、じゃあさっさと――」

「ああ、さっさとお前達をぶっ飛ばしてやらねえとな!!」

「えっ……?」

「……………」

「俺は利口じゃねえけどよ、お前等がこいつを無理矢理自分達のものにしようっていうのはよくわかった。

なら、俺はそんなお前等からカノンを守る!」

「カイリ、でも……!」

「いいんだよ、俺が自分で決めたんだ。お前が気にする必要なんかない。

それによ……正義の味方気取りするつもりなんかねえけど、やっぱり見捨てるなんてカッコ悪いしそんなことしたくないんだ」

「――」

言葉が出ない。

カイリの優しさ、カイリの決意を背中越しから感じ取り、もはやカノンには彼に対する言葉を失ってしまった。

「――チッ、つまんねえ正義感ぶったガキはこれだから嫌いだ」

「いいじゃない。暇潰しにはなるみたいだし」

（暇潰しかよ……まあ、否定できねえけど）

相手は先程のハブネークとゴルバット、更にグラエナまで出してきた。

3対2、数の上でも単純な実力でも自分達は相手に負けている。

――使うしかない

決して1日に一回以上使わなかった時の力を使わなければ、カノンを守るどころか自分の命もここで尽きる。

相手はそれこそ道端に落ちている石ころを蹴るかのような無意識さで、自分の命を刈るだろう。

ならば、ここで使わなくてはどうしようもない。

この身に何が起ころうとも、どんなに苦しくても死ぬよりはマシだ。
そう自分に言い聞かせ、彼は力を解放し勝負を仕掛けた……………。

【カイリside】out——「————」

「？ レイジ、どうしたの？」

「————」

なんだ。

なんだ、これは。

なんなんだ、この胸騒ぎは。

不快感と違和感がごちゃ混ぜになった意味不明の感覚に、レイジはその場で膝をつく。

「レ、レイジ！？」

すぐ隣で聞こえるはずのカグヤの声も、上手く聞き取れない。

鼓動の音が直接脳に響き渡り、内なる自分が行けと命令する。

——目を背けるな

——目を背けるな

——目を背けるな

この感覚を感じ取り、正体を探る。

そして——前に感じたことのある違和感。

時そのものがねじ曲がるような、感覚、が。

「————っ」

瞬間、立ち上がりレイジは会場を抜け出す。

「ちょ、レイジ、どこに行くの!!?」

背後から聞こえる声にも反応せず、全速力で浜辺を走っていく。

〈お父さん、今の——〉

〈父上、悪しき波動を感じ取れました!!〉

モンスターボールから抜け出し、ティナとアクセルも走りながら（ティナは浮きながら）レイジへと言葉を掛ける。

「ああ。その近くにカイリもいる!!」

しかも、あの力を使った状態で、だ。

あれを使っている時点で、ただごとではないというのがわかる。

（くっ……やっぱり気のせいじゃなかったんだ……!!）

あの時、もっと自分がしっかりしていれば……そう思うとやりきれない気持ちでどうにかなってしまいそうだ。

「レイジくん!!」

「っ、シロナさん!!」

レイジと平行して飛んでいるガブリアスの上には、シロナ達の姿が。

「乗って!!」

「はい!!」

ガブリアスの足に掴まると、すぐさま上空へと舞い上がった。

「いきなりどうしたの？会場はレイジくんがなくて混乱してるわよ？」

「……感じたんです、嫌なオーラを」

へ母上、僕も悪しき波動を感じたのです

「私も、嫌な気配を感じ取ったの……」

「しかも、そこにはカイリもいる……」

「えっ……?」

レイジの言葉に、ヒメカの表情が固まった。

「急いでください。北北西にある森の中にいます!!」 「わかったわ。……ガブリアス、急いで!!」

一声鳴き、ガブリアスは全速力でレイジの指示した方向へと向かう。

（お願いだカイリ、無事でいてくれ……!!）

第14話　くラティアス攻防戦、放たれるデッドポケモンく

——深淵な森の中で、死闘が繰り広げられている

「ゴルバット、つばさでうつし！」

「グラエナ、かみつく。ハブネーク、ポイズンテール！！！」

「——ツタージャ、つるのムチでハブネークを弾いた後、グラエナの攻撃を右にかわせ。

モウカザルはかえんほうしゃでゴルバットを攻撃しろ、右に避けるからかえんぐるまで追撃するんだ」

一気に命令を出し、ツタージャはつるのムチでハブネークのポイズンテールを弾き、間一髪でグラエナの攻撃を回避する。

ゴルバットへと真正面からかえんほうしゃを放つモウカザル。

それを右に避けるゴルバットだが、それを完全に見抜いたモウカザルのかえんぐるまがゴルバットを吹き飛ばした。

「何だと……！！？　何をしているゴルバット、そんな雑魚になに手こずってんだ！！」

怒りの表情を露わにして自分のポケモンに罵倒の言葉を浴びせる男だが、それとは対象的に女は相手であるカイリを冷静に分析していた。

（おかしい……さっきからこちらの攻撃は避けられるか弾かれるば

かりなのに、相手の攻撃は確実に命令している)

一発だけならばたいした被害にはならないが、こうも連続で受ける
とさすがに拙い。

しかし、あの少年の読みは素晴らしいというより異常だ。

こうも的確に二手三手先に読むなど、少なくとも四天王やチャンピ
オンクラスの实力者でなければ不可能だ。

だが目の前の少年の实力は並よりは上なものの、自分達よりは下の
はず。

(どうやら、何かしらのカラクリがあるみたいね……)

それがどんなものかはわからないが、その正体を見破らなければこ
ちらの勝機が薄れる。

彼女の読みは正しい、このままならばカイリはこのような不利な状
況でも勝利できるだろう。

だが、それもまた不可能な話なのである。

「――」

秒単位で、痛みが酷くなっていく。

閃光じみた光が眼を焦がし、視界が赤く塗り潰され感覚も少しずつ
薄れていく。

力の代償——先程からカイリはずっと未来を視る力を解放し続け、
どうにか互角の戦いを繰り広げているのだ。

しかし、1日に一回解放するだけでも疲労するような強大な力を使
い続けられようか、それは彼にすらわからない。

まず始めに全身に痛みが走り、続いて吐き気を催し思考が削られて
いった。

今だって意識しなければ自分を保ってられる保障はない。

それでも使わなくては、この戦いに勝利しなくては彼に未来はなく
……また後ろで自分の戦いを見つめているラティアスの未来すら消
えてしまう。

そんな事させない、そんな事許されない。

何もしていない彼女が、何も悪いことなんかしていないカノンがこ
んな目に遭っていいわけがない。

限界などとうに越えた、今彼を支えているのは守るという約束と気
力だけ。

だが——人間の身体はそこまで頑丈ではない。

再び力を使い、未来を視てから指示を出そうとした瞬間——終わりが訪れた。

「モウカ——ごぶっ……!？」

鉄錆の味が口内に広がり、地面に落ちるのは赤い液体。

血を吐き出した、それを理解するより前に中断された指示を告げた。

「——モウカザル、マッハパンチでハブネークを止めろ。

その間にツタージャはリーフストームでハブネークに攻撃して、すぐさまつるのムチで俺達に向かってくるゴルバットを拘束するんだ。

あとは——がつ、ぶっ!!」

また吐血。

意識が混濁し、おもわず膝をつく。

主人の異変を見て、モウカザル達の動きが止まってしまった。

「今よハブネーク、モウカザルにポイズンテール!!　そしてグラエナはツタージャにとっしん!!」

その絶対的な隙を逃さず、ハブネークのポイズンテールとグラエナのとっしんがともにモウカザル達に命中してしまう。

倒れ、かなりのダメージなのか立ち上がれないモウカザル達。

(く、そ……!!)

立ち上がろうとするが、手も震えてしまいそれすら叶わない。

視界が回り、自分が倒れているのか座っているのか。

それすらも、上手く理解できず、に……。

(あ、ヤベ……)

このまま目を閉じたら、二度と目を開ける事ができなくなる。

それがわかっているのに、意識がどんどん闇の中へと堕ちて……。

「も、もうやめてください!!」

カイリを守るかのように立つ1人の少女。

「カ、ノン……」

何やってんだ、さっさと逃げろ。

そう言いたいののに、口が動かない。

「——いい子ね。ならおとなしくこっちにいらっしゃい」

「……………」

一度カイリへと振り返り、悲痛な表情を浮かべるカノン。

それはこれから自分自身に待ち受ける運命に対してか、それとも助けてくれたのに何も返せなかったカイリに対してか。

そして、ゆっくりとカノンはカイリの元から離れ、男達へと歩み寄ろうとして。

——その間に、凄まじい威力の雷が落ちた

「っ！！？」

「っ、誰だ！！」

虚空に向かって叫ぶ男。

だがその答えは、上空から聞こえてきた。

「——ヒカリ、10万ボルト」

「グラエナ、まもるよ！！」

先程と変わらぬ威力の雷が男達のポケモンに襲いかかるが、グラエナのまもるによって相殺される。

次の瞬間、上空から落ちてきた1人の少年。

目も醒めるような青い髪と瞳、肩にはピカチュウを乗せている。

「レ、レイジ……」

薄れようとする意識の中、現れた親友の名を呟くカイリ。

「なんだお前は。また正義の味方気取りのガキが来た——」

「ヒカリ、かみなりだ」

男の言葉を最後まで聞く事なく、先手を取るレイジ。

ヒカリのかみなりは身構えていないゴルバットに命中し——ただの一撃で戦闘不能へと陥った。

「なっ——!?!」

（この子……強い!!）

いくらモウカザル達とのバトルでダメージを負っていたとはいえ、一撃で倒すなど信じられない。

「カイリ!!」

男達に背を向け、カイリを抱き起こすレイジ。

「——力を、使ったの？」

「あ、ああ……しかも連続でな。

けど、俺の実力じゃこれを使わねえとアイツを守れなかったんだ」

「……君は？」

カノンの存在に気づき、視線をそちらに向ける。

「お、驚くなよ……そいつ、人間の姿だけど……ラティアスっていうポケモンなんだぜ……」

「ラティアス!?!」

伝説のポケモンであるラティアス。

カイリの言葉に、レイジは正直驚きを隠せなかった。

だが、このカノンという少女から感じる強いオーラは、人間のものとまた違う。

こんな状況で彼が嘘をつく意味がない以上、その言葉は真実なのだろう。

正直信じられる内容ではなかったが、とりあえず今はそんな問答をしている暇はない。

「――つまり、あなたがこのラティアスを捕らえようとして、カイリとバトルになったわけですね?」

「ええ、そうよ。それにしても驚いた……マードラのゴルバットをダメージを受けていたとはいえ一撃で倒すなんて……」

ねえ坊や、そんなに強いならワタシ達と取引でもしない?」

「……取引?」

「カイリ!!!」

背後から、悲鳴にも似たヒメカの声が響く。

視線を向けると、気丈な彼女からは想像できないほど涙を流し、カ
イリを抱き留めている姿が映った。

「坊やがラティアスをおとなしくこちらに渡してくれるなら、後ろ
にいる子達の命は見逃してあげる。

それと坊やをボスに紹介してあげるわ、それだけの腕があるなら
すぐにロケット団の幹部にだってなれるわよ」

「――――」

「ふざけないで!! 許さない……絶対に許さないんだから!!」

怒りを露わにした表情で、すぐさまロールとハクを取り出すヒメカ。

既に彼女の瞳には冷静さなど微塵もなく、憎悪の炎を宿している。

「ヒメカ、待って」

「止めないで!! こいつらは……カイリをこんな目に遭わしたこ
いつらだけは絶対に……!!」

「わかってる、でも落ち着いて。冷静さを欠いたら負けるってわか
るはずだ!!」

「レイジくんの言う通りよヒメカ、気持ちはわかるけど落ち着きな
さい」

「っ、お前は……シンオウチャンピオンのシロナ!？」

「あら、私の事を知っているようね」

「計算違いね……まさかチャンピオンがこんな場所に居るなんて思わなかった。」

まあいいわ。それでどうなの坊や、ワタシ達との取引に応じてくれるわよね?」

「————」

レイジは応えない。

だが、すぐさまカイリの元に向かい、彼に問い掛ける。

「ねえカイリ、あいつらどうしたい?」

「——絶対に、ぶっ飛ばす!!」

「だよね……ならさ、まずは立たないと」

「ああ……!!」

歯を食いしばりながら、カイリはどうか立ち上がった。

心配そうに自分を見つめているモウカザル達に笑顔を見せ、頭を撫でてやった。

「モウカザル、ツタージャ、俺はあいつらを絶対に許さない。
だけど俺1人じゃ何もできない、でもレイジ達と……何よりお前

達が居ればきつと勝てる。

だから、俺にもう一度力を貸してくれ!!」

もちろんと言わんばかりの表情で、炎を立ち上らせるモウカザル。

そしてツタージャもやる気満々の表情で頷きを返し——いきなり身体が光り出していく。

「こ、こいつは……!」

「進化するんだ……ツタージャが!!」

おそらくあの男達との戦いでかなりの成長を遂げられたようだ、光が収まりツタージャがジャノビーへと進化を遂げた。

「——というわけで、申し訳ないけどあなたの提案は却下します」

「……そう。残念ね、坊やならきつと頷いてくれると思ったのに」

言葉とは裏腹に、女は肩を竦めるだけで既に明確な敵意をレイジへと向けている。

「見くびるなよ、僕はこう見えても道を踏み外したりなんかしない。
——それより、覚悟した方がいい」

『—————』

重く、そして冷たい声が場の空気を変えていく。

「今の僕は怒ってるんだ……親友を傷つけ、更に罪のないポケモン

を自分達の都合だけで捕らえようとして……。

——お前達、絶対に許さないぞ！！！」

普段の彼からは想像すらできない、怒りに満ち溢れた表情。

「ヒカリ、グラエナに10万ボルトだ！！」

「グラエナ、まもる！ ハブネーク、ピカチュウにポイズンテール
！！」

グラエナのまもるによってヒカリの攻撃は完全に防がれ、その隙を突いてハブネークのポイズンテールが迫るが。

「ジャノビー、リーフブレードだ！！」

横から現れたジャノビーのリーフブレードに押し返される。

マーダと呼ばれた男は、懷からモンスターボールを取り出し上空へ投げる。

中から出てきたのは……。

「ムウマ……」

ゴーストタイプのポケモンであるムウマだった。

だが、何故か様子がおかしい。

傷ついたわけではないのだが、どこか怯えているような……。

「ムウマ、ジャノビーにシャドーボール!!」

マードが命令を下すが、ムウマはチラチラと彼を見るだけで攻撃を仕掛けようとはしない。

「何やってやがる、さっさと攻撃しろ!!」

怒鳴られ、身体を縮こませながらもシャドーボールを撃ち出すムウマ。

(あのポケモン……)

もしかしたらと、一つの予測を立てたレイジは、すぐさま残り3つのモンスターボールを取り出しティナ達を出す。

時間など掛けられない、再び戦っているカイリの体力も気力も既に限界なのだ。

如何にツタージャがジャノビーに進化したとはいえ、両者共にダメージを負っている今では、悠長な事などしてはいられない。

「リオン、りゅうのいぶき、ヒカリ、でんじほう、アクセル、はどうだん、ティナ、チャージビームだ!!!!!!」

四体全員の技が、一斉にグラエナ達へと襲いかかる。

「グラエナ、まもる!!」

再びグラエナがまもるを使うが……それすらも打ち砕くティナ達の攻撃に、大爆発を起こしながらグラエナ達はまとめて戦闘不能へと陥った。

「そ、そんなバカな……フレアのポケモンがこうも簡単に!？」

「あのカイリとかいう坊やから受けたダメージもあるからね。でも、それを差し引いてもあの坊やは強い」

おそらく、本気で戦った自分と同等か、それ以上か。

「か、覚悟しやがーぐうっ!!」

「カイリ!!」

倒れそうになるカイリの身体を支えるヒメカ。

「もう終わりね。国際警察にはさっき連絡したから、おとなしく諦めなさい」

「なんだと!？」

「やめなさいマード、確かにチャンピオンの言う通りよ。

ワタシ達の手持ちはなし、こんな状況で粹がったところでどうしようもないでしょ？」

絶体絶命、そんな状況だというのに、フレアと呼ばれた女性の口元には余裕の色を孕んだ笑みが浮かべられている。

もう終わりのはずだ、だというのにあの笑みは一体なんだ……？

「たいしたものよ坊や達、そっちの弱い坊やはカイリといったようだけど……君の名前はなんていうのかしら？」

「レイジだ」

「レイジ……覚えておくわね。あなたの名前を」

「随分余裕ね。もう捕まるっていうのに」

「捕まる？ 誰が誰を捕まえるって言うの？」

「シロナさんが呼んでくれた国際警察の人達が、あなた達2人をに決まってるじゃない！」

「あら……フツ、アハハハッ！！！」

「な、何がおかしいのよ！？」

「いえ、ただ……面白い冗談を言うなと思って。

あなた達、ワタシ達が本当にもう打つ手無しだと思ってるの？」

「けど手持ちのポケモンは全て戦闘不能よ。それともあなた達2人が直接来るの？」

その瞬間にはティナのふぶきでカチコチに凍ってるわね」

シロナの言う通り、このまま逃げようとした瞬間に氷タイプのわざで凍らせるつもりだ。

それは連中とてわかっているだろう。

だがしかし、それでもフレアの口から不敵な笑みが消える事はなかった。

（何をする気だ……？）

相手の意図が掴めず、どうすればいいのかわからないでいると。

（っ、あれは……モンスターボール？）

フレアが懷から取り出したモンスターボール。

だが、その見た目は市販されているどのモンスターボールともデザインが異なる。

上が赤、下が白のモンスターボールに対し、このボールは全てに置いて漆黒で包まれた代物だ。

禍々しさすら感じるその見た目に、何故か頬に汗が伝った。

（なんだ……この威圧感）

あの中にポケモンが入っている。

それはいい、しかしこの背筋が凍るような悪寒と重圧は一体なんだというのか――

「さよならレイジ、このデッドポケモンであの世に行きなさい」

漆黒のボールが、空高く投げられる。

そして――中から出てきたのは。

「バンギラス……！」

「まだあるわよ」

もう一つ先程と同じボールを取り出し、再び投げるフレア。

「ハガネール!!」

そこから出てきたポケモンはハガネール、しかしバンギラスも含めどこか様子がおかしい。

瞳のハイライトは消え、全身が黒く塗り潰されている。

「まだ試作段階だけど、坊や達相手ならいいデータがとれそうね」

言いながら、その場から離脱しようとするフレアとマード。

「逃がすか!!」

すぐさま追い掛けようとするが――殺気を感じ慌てて後ろへと跳ぶ。

刹那、レイジが通ろうとした地面にクレーターが生まれ……全身が総毛立つような殺意をバンギラス達から向けられた。

「このバンギラスとハガネール……なんだか様子がおかしいわ!!」

「っ、ヒメカ、カイリを連れて下がれ!!」

そう指示を出し、ティナ達と臨戦態勢に入るレイジ。

「リオン、かえんほうしゃだ!」

リオンの口から放たれるかえんほうしゃ。

それを避けようともせず、ハガネールは弱点である炎を前にしてもなおその動きを鈍らせたりはしなかった。

「な、に——!?」

効いていない、わけではない。

かえんほうしゃによるダメージは確かにハガネールへと届いている。だというのに、まるで怯む様子を見せないのはどうして——

「ガブリアス、ドラゴンクロー!!」

レイジに向かっていくハガネールを、ガブリアスの攻撃で吹き飛ばすシロナ。

ガブリアスの攻撃をまともに受けた、これならば暫くは立ち上がれないはず——

「そんな!?!」

驚愕は、他ならぬシロナの口から放たれる。

まともに受けた、だというのにハガネールは再び立ち上がったのだ。普通ならば既に戦闘不能になっていたとしてもおかしくない。

（なんて頑丈な……いや、違う……）

ただ頑丈なだけならば、ここまで保つ事はできないはず。

それに、先程よりも増して相手のハガネールには理性というものが見えない。

「っ、ミロカロス、はかいこうせん!!」

横から殺気を感じ取り、ボールからミロカロスを取り出した瞬間指示を出す。

瞬間、バンギラスとミロカロスのはかいこうせんがぶつかり合い、鼓膜を刺激する爆音が響き渡った。

（強い……さっきのポケモン達とは比べものにならないくらい……）

これは本気の自分でも苦戦するかもしれない、シロナの頬に汗が伝う。

しかし、ここで疑問が浮かび上がった。

何故これほどまでの強さを誇るポケモンを始めから出さなかったのか。

そして、何故バンギラス達を場に出した瞬間に離脱したのか。

（父上、母上、このポケモン達の波導……凄まじく邪悪なものに染まっています!!）

（邪悪……？）

「……それは僕も感じたよアクセル、それに……変なんだ」

「変って何が？」

「さっきからバンギラス達の声が聞こえない……怒りに囚われてい
るならわかるけど、このポケモン達からは怒りは……むしろ、何の
感情も感じ取れない」

怒りも憎しみも、恐怖も痛みもなにもかもが。

いくらなんでも異常過ぎる、だとしたら何故ここまで暴れまわるの
か。

それに——このバンギラス達は自分達はおろか全てのポケモンを殺
すほどの殺気を放っている。

そんなもの、普通のポケモンが放てるわけがない。

（さっきのボール……あれが原因なのか？）

それ以外は考えられない、だが今は——

「危ない！！」

背後から聞こえる声に反応する。

視線を向けると、先程ティナ達の攻撃で戦闘不能に陥ったポケモン
達に、バンギラス達が攻撃を加えようとしていた。

（あいつら……ボールに戻さなかったのか！？）

「いけない!!」

すぐさまティナ達に指示を出そうとするレイジ。

だが、その前に彼の横から飛び出した一つの影が。

「カグヤ!？」

ベイリーフの背に乗り、まっすぐバンギラス達の元へと向かうカグヤ。

それに気づき、バンギラスの敵意の矛先が彼女へと向けられる。

「くっ……アクセル、はどうなんだ!!」

とにかく今は彼女のフォローに回るしかない、そう考バンギラス達の注意をこちらに引きつける。

「ガブリアス、はかいこうせん!!」

シロナもレイジの心中を理解したのか、ハガネールに向かって攻撃を仕掛けてくれた。

「くっ……!!」

爆風で視界が覆われながらも、どうにかグラエナ達の元へ辿り着いたカグヤ。

彼等を入れていたモンスターボールは幸い近くに転がっていたので、すぐさまボールの中に収納したのだが……。

「えっ……ムウマの分がない!?!」

グラエナ、ハブネーク、ゴルバットのモンスターボールは確かに存在していた。

だがムウマだけが……この子のモンスターボールだけが見つからない。

「っ」

3つのボールをリュックに押し込み、ムウマを抱きかかえる。

今はこうしてあげるしかない、そう思いカグヤは再びこの場から離脱しようとした瞬間。

「カグヤ、後ろ!!」

「え————」

後ろへ振り向く。

そこには、バンギラスがこちらへとはかいこうせんを放とうとしている光景が——

「ティナ、ふぶき!!」

間に割って入り、バンギラスにふぶきを仕掛けるレイジとティナ。

それにより多少ダメージを受けたのか、バンギラスの身体が少しだけバランスを崩す。

その隙に急ぎその場を離れるカグヤ達。

「くっ……」

強い、なんてものじゃない。

いくら攻撃を当てても倒れてはくれないのだから、質の悪い事この上なかった。

すると、ハブネークが雄叫びを上げ、地面へと潜っていく。

その尻尾に掴まり、バンギラスも穴の中へと消えた。

（仕掛けてくる……？）

——だが、敵の攻撃が一向にやってこない

「……………っ、まさか!!?」

相手は標的を自分達から変えたのかもしれない。

だとするならば……次に狙われる所は。

「っ、シロナさん!!」

「わかってる。みんな早く乗って!!」

「えっ、えっ？」

「ヤツらはクチバシティに向かったんだ、このままだと街がめちゃくちゃになる！！」

「ええっ！？」

「あ、あ……」

信じられないといったような表情で、カノンは身体を震わせていた。

「……カノン、お前のせいじゃねえよ」

「カイリ……」

「今は、あのバンギラス達を止めるのが先だ」

「……………」

そうだ、あの悪魔のようなポケモン達を止めなくては、沢山の犠牲者が出てしまう。

——初めから、迷いなど捨てればよかったのだ

戦いたくない、いくら自分を捕らえようとしたからといっても傷つけたくない、そんな甘さなど初めから持ち合わせていなければ、こんな事態に発展する事もなかった。

だが、今は後悔するよりも先にあれらを止めなくては。

贖いは、全てを終わらせてから果たす。

「ありがとうカイリ、私……戦うよ」

「えっ……?」

瞬間、カノンの姿が光に包まれていき……。

「…………カノン」

光が収まった時には、カノンは人間ではなくポケモンの姿——ラティアスへと戻っていた。

「行きましょう!!」

「わかった。シロナさん、お願いします!!」

「ええ。ガブリアス、すぐにクチバへ戻って!」

命に応えるように一声鳴き、ガブリアスが飛び立つ。

それに続くように、ラティアスも後へと続いた。

…………。

クチバシティが見えた瞬間、爆発音が響き建物から煙が舞った。

「くそ、あいつら……もう暴れて……」

「動かないで、まともに身体を動かさないんでしよう!？」

「ち、ちくしょう……」

ヒメカの言う通り、こうして寝そべっているだけでも辛いのだ。

情けない事この上ないが、もうモウカザル達に指示を出す事すらできない。

「————」

ギリと、歯を鳴らすレイジ。

痛いくらい拳を握りしめ、マグマのように煮えたぎる怒りを懸命に押し殺した。

あのポケモン達に罪はない、あの様子ではなんらかの方法——おそらくあのボールによって操られているのだろう。

だからこそ、罪のないポケモン達を道具にする事も、人や街を傷つける事も許せない。

爪が食い込み、手から血が出て怒りを抑える為に拳を握り続ける。

「……レイジ、自分を傷つけるような事はしないで」

そんな彼の手を、カグヤは優しく包み込んだ。

「カグヤ……」

「気持ちわかるよ、でも……それでレイジが傷ついたら……私、やだよ」

「……………」

泣きそうな表情のカグヤを見て、怒りが少しだけ収まった。

そうだ、今はこの怒りを鎮めてあのポケモン達を止めなくては。

「ヒカリ、10万ボルト!!」

射程内に入り、上空から攻撃を仕掛けるレイジとヒカリ。

10万ボルトはバンギラスの背中に当たり、動きが止まった。

その隙にガブリアスは地面へと降り、バンギラス達と対峙する。

「さあ……今度こそ君達を止めてやる!!」

第2ラウンドの死闘が、今幕を開いた――

第15話 くちバでの死闘、双竜の逆鱗！

「アクセル、はどうだんだ！！」

燃える大地、クチバシティで、レイジ達は死闘を繰り広げていた。

「ヒカリ、自分にかみなり！！」

「ミロカロス、れいとうビームよ！！」

ミロカロスのれいとうビームがバンギラスの身体を凍らせていく。

だが、すぐさまその氷にヒビが入っていくが。

「ハク、ドラゴンダイブ！！」

その隙を逃さぬとばかりに、ハクの攻撃がバンギラスを吹き飛ばす。

「ベイリーフ、ハガネールにタネマシンガン！」

暴れまわるハガネールを止める為、攻撃を仕掛けるカグヤとベイリーフ。

さしたるダメージを与える事はできないものの、街を破壊しているハガネールがこちらへと向いてくれた。

「エネコ、ふぶき！！」

正面からエネコが放ったふぶきを受けるハガネールだが……。

その身が凍るどころか、まったくダメージを受けた様子もなくカグヤ達に向かってくる。

「なっ、嘘……………！」

「ヒカリ、ハガネールにボルテッカー……！！」

だが、横からヒカリのボルテッカーがハガネールの身体に叩き込まれ、地面を削りながら吹き飛んでいった。

「ありがとう、レイジ、ヒカリ……！」

「構わない。……………けど、こいつは……………」

「強すぎるよ……………ベイリーフ達の攻撃が全然効いてない……………」

（——違う、効いてないわけじゃないんだ）

しっかりとベイリーフ達の攻撃は届いている、多少パワー不足なのは否めないが、それでもダメージはきちんと与えているはずなのだ。

しかし、それでもバンギラス達は倒れてくれない。

いくらダメージを叩き込もうとも、まるで痛みという概念が存在しないかのように、立ち上がって向かってくるのだ。

——そろそろティナ達も限界が近い

ここまで長いバトルは初めてなのだ、おまけに先程から全力で攻撃

を繰り出している事も拍車を掛けている。

シロナのポケモン達はまだ余裕があるものの、それでもそれがいつまで保つのか。

爆発音が響き、バンギラスの身体が倒れ込む。

「ラティアス………！」

背後からはかいこうせんを当てたのだろうか、彼女が参戦しているからこそ、レイジ達は互角に戦えている。

だが、ラティアスの方にも目に見えて疲れの色が顔に滲んでいた。

ヒメカはカイリを守る為に必要以上に攻撃を仕掛けられない、これではいつまで――

〈お父さん!!!〉

「っ、ティナ、サイコキネ――」

慌てて命令を出す、ハガネールのアイアンテールがレイジ達をまとめて吹き飛ばした。

「くっ………！」

吹き飛ばされながら、カグヤの腕を掴み抱き留める。

瞬間、背中に凄まじい衝撃を受け息が止まった。

「あ、が……………！」

喉元までせり上がった血を吐き出し、地面を赤く染め上げる。

拙い、今のはまともに受けてしまった。

見ると、ティナ達もかなりのダメージを受けたのか、動きを見せるものの誰も立ち上がる事ができないでいる。

「……レイジ」

「だい、じよ、ぶ……」

「大丈夫じゃないよ！　だってこんなに血が――」

ぬるりと、レイジの頬に触れた瞬間、生暖かい液体がカグヤの手に付着した。

「――――」

真っ赤に染まる自分の手。

それが、彼の血だと理解するのに数秒の時間を要した。

「……よかった、怪我……なくて」

「あ……………」

そこで、ようやく気が付いた。

彼は、自分を守るために自らクッションの役割を果たしたのだと……。

「ぐっ……げ、う……」

立ち上がり、血を吐き出しながらもレイジの戦意は衰えてはいなかった。

当たり前だ、ここで自分達があれば止めねば今よりも犠牲が増える事になる。

国際警察は人命救助や避難民の保護でこちらの助けに入れる者はいない。

この状況下では、自分達だけでなんとしてもあのポケモン達を正気に戻さなくてはならないのだ。

「くっ……リオン、みんな……まだ、戦える？」

——当たり前だ、そう言いてえけど……

——も、もうピカ限界だよ……

へくっ、な、なんて未熟なんだ僕は……

へお父さん……私達、まだ……

「はぁ……はぁ……はぁ……」

血が足りず、意識が上手く保ってられない。

シロナはバンギラスの足止めで精一杯、ラティアスもハガネールと戦っているが……このままでは。

（なにかないのか……打開策が、何か……）

震える足を気力だけで支えながら、血で視界が赤く染まる事も構わず、レイジはひたすらに勝機を掴むための策を考える。

だが、こんな状況では打開策など見つかるわけがなく。

「ミロカロス！！」

「あ、——」

シロナのミロカロスが、バンギラスに倒された……。

チャンピオンであり、シンオウ地方最強のトレーナーであるシロナのポケモン、が……。

……。

（……なんで、こんな）

正常な思考など、もはや彼の中には存在していなかった。

ただ——傷つき倒れていくポケモン達。

そして、悲鳴を上げながら逃げ惑う人達の光景が、彼に絶望と痛みを与えていくばかり。

「――もう、やめろ」

呟く声は、誰も聞き取れないほどに小さい。

――みんな、傷ついていく

――みんなが、悲しんでいる

――みんな、が……苦しんでいる

「やめてくれ……もう、これ以上は……」

もうこれ以上、誰も傷ついてほしくない。

ティナもリオンも、ヒカリもアクセルも。

ベイリーフもエネコも、ラティアスもジャノビーもモウカザルも。

ロールもハクも、ミロカロスもガブリアスもシロナもヒメカもカイリも。

敵であるバンギラスもハガネールも。

そして——カグヤも。

誰一人として、傷ついてほしくないのに……。

「こんなの、違う……こんなの、人とポケモンの姿じゃない……」

認めたくない現実、見たくもない光景。

どうしたらいい？ 何をすればいい？

どうしてみんなで、互いを傷つけ合うの？

どうして——戦いを止められないの？

（——力が）

力があれば、この悲しい戦いを止める事ができるのに。

（力が、ほしい……）

傷つける力でも、悲しませる力でもない。

守る力、味方も敵もそんなもの関係なく、守れる力があれば……。

「誰か……誰でもいい、誰でもいいから僕に——」

——僕に、力を貸してくれえええっ!!!!」悲痛な叫びが、戦場に木霊する。

この魂からの願いは。

——よく言った。ならお前が皆に力を与えろ

どこか、懐かしい響きのする声によって、聞き入れられる事になる。

「——」

身体が、熱い。

全身の血液が熱を持ったかのようで、右腕に至ってはまるで紅蓮だ。その右腕から、凄まじいという表現すら霞むほどのエネルギーが溢れている。

——恐れるな。それを受け入れろ

「くっ——!」

恐怖も湧き上がる疑問も、今はどうだってよかった。

これが何なのかは知らない、けれどこのエネルギーをみんなに与えればきつと――

自分でも理解できない状況の中、レイジは右腕を天高く突き出して――

「お願いだ……今一度、みんなに戦える力を与えてくれ!!!」

自らの願いを込め、その力を解放した。

刹那、右腕が光り輝き枝分かれをしながらレイジの腕から離れ――ティナ達へと向かっていく。

光が、それぞれの中へと入っていき……。

「こ、これは……!?!」

その現象に、シロナは戦いの最中だという事も忘れ、目を見開き驚きの表情を浮かべる。

――溢れていく、活力も気力も

まるで生まれ変わったかのように、身体に残っていた疲労感が消えた。

それだけではない――もはや戦う事すらできなかったはずのミロカ

ロスが、何事もなかったかのように起き上がったのだ。

その身に受けたダメージも、完全に回復して。

「ハク、ロール!!」

「……なんだこれ、なんか痛みが無くなった」

「カイリ!! よかった……目が醒めたのね!？」

「あ、ああ……けどなんだってんだ？ この光で、痛みも疲れも全部吹き飛んじまった」

「……レイジが、あの光を」

見ると、自分達だけでなくティナ達ポケモン組やカグヤの傷も完全に回復していた。

それにこの光、なんだか内側から力が湧き上がっていくような……。

「えっ!!?」

「うおっ、マ、マジかよ!？」

驚きの声を上げ、2人は目の前の光景にただポカンと口を開く事しかできなかった。

何故なら、ヒメカのポケモン達であるロールとハクの身体が光に包まれていったからだ。

（進化、するの……？　こんな状況下で？）

あの光を浴びたがらだろうか、しかしロール達以外のポケモンに進化の兆候は見られない。

状況についていけないまま、ロールはミミロップに、ハクはカイリユーへと進化を遂げていた。

「い、一体何が起こってんだ……お、俺は夢でも見てんのか？」

「……わたしも、同じ夢を見てるのかしらね」

もはやこれは奇跡としかいえないような光景だ。

「レイジ……」

目の前の幼なじみの身に起こった現象に、カグヤは彼の名前を呼ぶ事しかできない。

「みんな、反撃だ！！」

レイジの声により、全員我に帰る。

そうだ、まだ戦いが終わったわけではない。

「ジャノビー、リーフブレード、モウカザル、フルパワーでだいもんじだ！！」

ジャノビーとモウカザルの必殺の一撃が、動きを止めたハガネールの身体を吹き飛ばす。

「ベイリーフ、エナジーボール。エネコ、ふぶきよ!!」

更にベイリーフとエネコの攻撃が倒れたハガネールに追い討ちを掛け。

「リオン、フルパワーでかえんほうしゃ!!!」

リオンの炎が、今度こそハガネールを戦闘不能に追いやった。

ようやく自分の状況を理解したのか、はかいこうせんを放とうと構えるバンギラスだが。

「させない!!」

ラティアスのはがねのつばさが、バンギラスの身体を地面に叩きつけた。

「ガブリアス!!」

「ハク!!」

絶好のチャンス、シロナとヒメカはそれぞれのドラゴンに声を掛け。

『フルパワーでげきりんよ!!!』

まったくの同時に、最後の勝負を仕掛ける為に指示を下した。

裂帛の雄叫びを上げながら、ハクとガブリアスはその巨体をバンギラスへと叩きつける。

「くっ……！」

「そんな……！」

だが、それでもなおバンギラスは倒れない。

唇を噛み締める2人だが。

「ヒカリ、自分にかみなり！！ ティナ、ヒカリにでんげきはだ！！」

まだ、彼の攻撃が終わっていない。

特大のかみなりと、ティナのでんげきはがヒカリを包み込み……いまだかつてない程の電気エネルギーを身に纏う。

「これで最後だ。——ヒカリ、デュアルボルテッカーだあああつ！！」

「ピカピカピカピカピカピカ………チュウウウウウウツ！！」

通常のボルテッカーよりも更に巨大なエネルギーの塊と化したヒカリが、バンギラスへと神速の速さで走っていく。

そして——両者がぶつかり合い。

視界と耳を潰すかのような爆音を響かせ、ヒカリのボルテッカーがバンギラスの身体をまるで矢のように吹き飛ばした。

（立つな……もう、これ以上戦うな………！）

肉の焦げる嫌な音と匂いを充満させた空間の中、ただひたすら相手の戦闘不能を願うレイジ。

そして――不屈の生命力を誇っていたバンギラスも、ようやく動きを止めてくれた。

「……………」

誰もが、戦いが終わったのだと理解するのに数秒の時間を要し。

「やったあああっ！！」

ピョンピョンと飛び跳ねるカグヤの声で、場は歓喜の表情に包まれた。

「勝った、の……？」

いまだ自分達の勝利が信じられず、譫言のように口にするシロナ。

だが勝ったのだ、それは紛れもない事実。

ミロカロスもガブリアスも、笑顔でシロナを見つめている。

（……そう、勝てたのね私達……）

ガブリアス達を優しく撫でながら、ようやく勝利を噛み締める事が

できた。

「は、はは……すげえ、ホントにあんなポケモン達に勝っちゃった……」

「そうね……正直、私も信じられないわ」

勝利の事実だけでなく、目の前で自分達に起こった奇跡も。

夢を見ていたんだ、そう言われても納得してしまうほどの事があった。

けれど、この感覚は確かに現実のものだ。

それに——自分達の元に擦り寄ってくるロール達の進化した姿も、また現実なのだから。

「————」

手を空に突き上げたまま、レイジはそっと息を吐く。

もう、先程の声は聞こえなくなった。

もっと色々訊きたい事があったというのに、存外にせっかちな存在なのかもしれない。

そう思うと、自然と笑みを浮かべてしまい——そのまま地面に倒れ込んだ。

（あ、れ……？）

もう、痛みなど消え去っている。

傷が治ったわけではないし、今だって視界が真っ赤だが、それでも痛みを感じなくなったのに、どうして……。

（ね、む、い……）

必死に自分へと声を掛けているティナとカグヤの姿も、もうほとんど見えなくなっている。

（みんな、ありがとう……）

意識は混濁し、既に抗う気力をもなくなったレイジは、そっと瞳を閉じた。

眠りはすぐに訪れ、どこか心地よさすら感じながら。

この戦いに勝利をもたらした英雄の少年は、静かに意識を闇の底へと落としていった……。

第16話　くヒメカの涙

「――というわけで、私は暫くシンオウには帰れそうにないわ。悪いけど、暫くお願いね？」

テレビ電話越しに、そう口にするシロナ。

画面の先には、シンオウリーグの四天王であるリョウ、キクノ、オーバ、ゴヨウの姿が。

『事情はわかったけどよ……別にシロナがそこに居る必要なんかあるのか？』

そう呆れながら口にしたのは、アフロ男ことオーバ。

この間、シロナに余計な事を言って殴られた所謂「口で身を滅ぼす」タイプである。

「何言ってるの、国際警察の事情聴取を受けなきゃいけないのに、それがどれだけ掛かるかわかってるの？」

あの事件は、まさしく大事件と呼べるほどのものだった。

しかも伝説のポケモンであるラティアスが関わっている事を隠して説明しなくてはならないのだ、納得してくれるまで少なくとも数日は掛かる。

『けどよお……つまり、お前の仕事はオレ達がやらなきゃいけないわけ？』

「そつ、悪いけどお願いね？」

『仕方ありませんね』

『はぁ……まあ、しょうがねえか』

『わかったよシロナ、僕達に任せてくれ』

『こちらの事は心配しなくていいから』

「ありがとう」

『にしても……なんか信じらんねえな。』

伝説のポケモンラティアスに、シロナが体験した奇跡……。そのレイジってヤツ、何者なんだ？』

「……わからないわ。彼自身も自分の出生がわからないようだし……それに、今は眠っているから……」

あの戦いからもう丸一日が過ぎたが、レイジはまだ目を覚まさない。それにおそらく、目覚めたとしてもあの力を彼自身も説明する事ができないと思う。

それほどまでに人間にとって理解できない力だったからだ。

（レイジくんがいなかったら、私も……）

手持ちにミロカロスとガブリアスしかいなかったとはいえ、彼がい

なければ自分も敗北していただろう。

（また、彼に借りができちゃったな……）

『——それにしてもよ』

「……………」

『シロナ、お前……マジであのレイジってガキに惚れてんのか？』

「……………」

オーバの言葉に、シロナは暫しキョトンとした表情を浮かべるが。

「そうね……確かにレイジくんは魅力的な男の子よ。

惚れてるといえば惚れてるわね、チャンピオンという立場じゃない
きゃ彼と一緒に旅がしたいくらいだし」

あっけらかんと、恥ずかしげもなく自分の想いを口にした。

『あらあら』

『おやおや……言ってくれますね』

『……そのレイジってやつ、14だよな？』

「ええ。今年で15歳になるって言ってたわね」

『……お前、何歳だっけ？』

「女性に歳を訊くのは感心しないわね。24になるけど？」

『……10も歳が離れてんのかよ』

「何よ、シヨタコンとでも言いたいのか？」

いいじゃない、年下を好きになったらいけないなんて決まりはないし、犯罪を犯すつもりもないんだから」

『……………』

確かにシロナの言う通り、年下を好きになろうがその人の自由だ。

稀に危ない性癖の人間のように犯罪に走る輩もいるが、彼女ならばそのような心配はない。

そう、心配はないのだが……立場的にかなり不利だと言ってやりたい。

しかも彼の近くには同じ歳の幼なじみがいるというのだから、ますます不利だと言わざるおえない。

（せっかく遺跡漬けで男っ気がないシロナに春が来たと思ったんだけどな……）

「大丈夫よ。いざとなったら大人の魅力で迫ればいいし」

『……………』

ろくに男と交際した事ないの？

そんなツツコミが喉元まで上がってきたが、どうにか我慢する。

そんな事を言ったら後が恐い、きっとガブリアスのげきりんとりゅうせいぐんのコンボを放ってくるだろう。

「それじゃあ、そろそろ切るわね。オーバ、サボらないように」

何でオレだけ名指しで言うんだー、というオーバの文句は無視し、電話を切るシロナ。

（大人の魅力、ね……）

自分で言った言葉だが、笑いたくなった。

どうやってその大人の魅力とやらを出せばいいのかわからないくせに、よく言う。

……女性向けの雑誌でも読んでみようか。

そこまで考え、そういえばカグヤ達を待たせている事に気が付く。

いけないいけない、自身に苦笑を送りながら、シロナはカグヤ達の元へと戻ったのだった。

……。

先の戦いで損傷した公園には誰もおらず、ここならばゆっくりと話ができるカグヤ達はラティアスを連れてきた。

「さて……話して貰いましょうか、どうして伝説と謳われるあなたがこのカントーに居て、更に追われていたのかを」

無駄話など絶対にしないと言わんばかりの口調で、さっそく本題に入るヒメカ。

口調だけでなく、その表情にも有無を言わせない迫力が込められていた。

それに、どうしてなのかはわからないが彼女は今かなり機嫌が悪い。幼なじみであるカイリにはすぐにわかり、けれど理由がわからず困惑した。

一方、ラティアスはカノンと名乗った少女の姿でヒメカの言葉にゆっくりと頷きを返す。

ポケモンの姿のままでは周りに見られてまた騒動の原因になるからだ。

そして、ラティアスはすぐさま口を開く。

「私がカントーに居たのは……行方不明になった兄を捜す為です」

「兄……？」

「もしかして、ラテリオスの事かしら？」

シロナの問いに、ラティアスは頷く。

「ラティオスって……ラティアスと同じく伝説のポケモンの」

「ラティオス、ラティアスと同じむげんポケモンと呼ばれる伝説のポケモン。」

兄妹である可能性がある説があるけど、まさか本当に兄妹とはね……」

ラティアスとラティオスは今まで何度も目撃されているものの、その生態系に詳しい人物は存在しない。

しかし、他ならぬラティアス本人からそんな話が聞けるとは……ナカマド博士に伝えたら喜ばれるかもしれない。

「でも、行方不明ってどういうこと？」

「――元々私達は、ハウエン地方の人里離れた森の中で平和に暮らしていました。」

でも、ある日兄が突然姿を消し……私はすぐさまハウエン地方中を探し回ったのですが見つからず……そこで、カントー地方へと赴いたのです」

そして、あの二人組に襲われた……彼女の事情はよくわかった。

しかし、何故ラティオスはいきなり行方を眩ませたのだろうか？

「それは私にもわかりません、いなくなる前日も特に変わった様子もありませんでしたし……」

「なるほどなあ……」

「――そう。あなたの事情はわかったわ。

なら次の質問よ、あなたはどのようにカイリを巻き込んだりしたの？」

「え――」

「ちょ、ちょっと待てよヒメカ。別にカノンは俺を巻き込んだわけじゃなくて、俺が勝手に」

「それは訊いた。でもじゃあなんですかにカイリの元から離れなかったの？

そうしていれば、カイリが危険な目に遭うこともなかった」

「そ、それは……」

「おいヒメカ、今のは言い過ぎだぞ！！」

さすがのカイリも、今の言葉は無視できなかった。

しかし、何故彼女はラティアスに対してそんな言い方をしたのだろうか。

確かに彼女の言い分もわかるし、正論な部分も存在する。

だが、事情を聞いた今でもいつもの彼女ならそんな風に思ったりもしないはずだ。

「あんたは黙ってなさいよ、わたしはラティアスと話してるんだから」

「っ、お前なあ……カノンだって被害者なのにそんな——」

「——カイリを苦しめる原因になったじゃない、ラティアスは……！」

「え………?」

ヒメカの悲痛な叫びが、カイリから怒りを消し去った。

「わたしだってわかってるわよ、でも……ラティアスと関わったせいで、カイリが苦しんだのは事実じゃない!!」

「——」

普段の彼女からは想像もできないくらい、激情に満ちた声色。

そして——頬を伝う涙に言葉を失った。

「ラティアスを助けるために、自分の身がどうなるかわからないのに力を使って……死にそうなくらい顔を歪ませたあなたを見た時のわたしの気持ちがわかるの?」

——苦しかった、辛かった。冷静な考えなんてできなくて、カイリが死んだらどうしようって……そんな事ばかり考えた。その時のわたしの気持ちが、カイリにわかるの?」

ポロポロと涙を流しながら、心中を告白するヒメカを見て、胸が痛んだ。

そして、ここまで自分の事を心配してくれている彼女に対し、軽率な考えを持った自分を殴りたくなった。

「それだけじゃない、カイリは……ずっとわたしに隠し事をしてきた。」

どうして、自分の力の事をわたしに話してくれなかったの？」

「そ、それは……」

「そんなにわたしが信用できない？　カイリにとって、わたしの存在はその程度なの？」

「違う、そんな事——」

「ならどうしてよ！　どうして今までずっと黙ってきたのよ！？　わたしの事が信用できないからでしょ？　カイリにとってわたしなんて、自分の秘密を話すに値しない存在だからなんでしょ！？」

「違う！！！」

「違うない！！！」

「違うって！！！」

「違うないよ！！！」

「ヒメカ、俺は……」

「――いいよ、別に。わたしが……勝手にわたしがあれこれ考えてバカを見ただけ。」

結局、わたしがバカだっただけなのよ……」

「ヒメカ……」

「――嫌い。カイリなんて大嫌い、あなたなんて……もう」

「ヒメカ、カイリはヒメカを一番に信頼してるから、一番大切だと思っっているから、何も言えなかったんだよ」

涙を流すヒメカに、カグヤはゆっくりとそう口にした。

「一番大切に？　ならどうして言ってくれなかったの……？」

「……一番大切だからこそ、言えない事が一杯あるんだと思う。」

離れるのが恐いから、自分の事を話して拒絶されるのが嫌だから」

かつて、レイジもカグヤに対してそんな感情を抱いていたと告白された事があった。

自分の能力――人にはない普通ではない能力が持つが故に、正直に話して嫌われたくなかったと。

身近に居る存在だったからこそ、話すのに相当苦労したと話してくれた。

「カイリも、ヒメカに話したいってずっと苦しんできたんだと思う。身近に居る存在だから話したい、けれど拒絶されたくないから話

せない。

そんな葛藤の中で、カイリはずっと苦しんできたんだと思う。だから、ヒメカもそんな事言わないでちゃんとカイリの言葉を聞いてあげて？

そうしなきゃ、人の本当の感情なんて誰にもわかんないよ」

自分の頭だけで考えずに、相手の立場になったつもりで歩み寄っていかねければ、絆は生まれない。

かつて父に言われた言葉を、そっくりそのままヒメカへと告げた。

その言葉に効果があったのかは知らない、けれど頑だったヒメカの心が、ほんの少しだけほぐれてくれたようだ。

「……カイリ。わたしに拒絶されなくなかったから……ずっと話せなかったの？」

「——ああ。情けないけどよ……お前には、本当の意味で嫌われたり拒絶されたくないんだ。

でも、そのせいで苦しめちゃって……ごめん」

深々と頭を下げるカイリ。

「……バカ。カイリの……バカ。わたしが、わたしがそんな事くらいであなたを拒絶すると思ってるの？」

たとえばあなたが何者だろうとわたしには関係ない、ガサツでデリカシーに欠けてて、セクハラばかりするけど……わたしは、そんなあなたが……」

「えっ……？」

「な、なんでもないわよ！ このバカイリ！！」

赤い顔でそっぽを向くヒメカに、カイリは意味がわからず首を傾げるばかり。「でも、今回心配を掛けた事と黙っていた事に関しては、ちゃんとした罰を与えなきゃ気が済まないわ！！」

「えー……」

「当たり前でしょ。ほら、さっさと目を閉じて歯を食い縛りなさい」

「ちょっと待て。お前俺に何をする気だ！？」

「いいから、それともこのままでやられたいの？」

「わ、わかったよ……」

納得はできないものの、確かに今回は自分に非がある。

そう思い、カイリは目を閉じ歯を食い縛った。

瞬間——甲高い音がカイリの頬から響き渡った。

ヒメカがカイリの頬を叩いたのだ、それもおもいきり。

「~~~~つ、お前なあ……もうちょっと手加減しろよ……」

「ふん、これくらいで許してあげるんだから、感謝してほしいくらいよ」

「ひでえ……」

抗議の声にもどこ吹く風。

だが、ようやくヒメカの顔に笑顔が戻ったので、カイリもあまり深く考える事はやめにした。

「さてと……2人が仲直りしてひと段落といきたい所だけど……ラティアス、あなたこれからどうするの？」

「……この後も、カントー地方で兄を捜そうと思ってます」

元々その為に来たのだ、どうするもこうするもない。

すると、カイリはあっけらかんとある提案を口にした。

「ならさ、俺達と一緒に来ないか？」

「えっ!？」

「ちょっとカイリ、何言ってるの？」

「えっ、だって俺達色々な所を旅する予定だから、ラティオスの情報も入るかもしれないし。」

「なにより、またあいつらが現れた時に困るだろう？」

「まあ、それはそうだけど……」

「で、でも……私と一緒にいる事でカイリ達の迷惑に……」

「気にすんな。乗りかかった舟というか、このままじゃ目覚め悪い

し」

「……はあ。別に反対はしないけど、レイジに黙って勝手に決めていいの?」

「大丈夫だって。レイジだってすぐにわかってくれるさ。」

——カノン。お前が良ければ俺達はもちろん大歓迎だ、どうする?」

「……本当に、一緒にいていいんですか?」

「そうだよ。言ったら? 大歓迎だって」

ニカツと好感の持てる笑みを浮かべるカイリに、ラティアスは瞳を輝かせ満面の笑みを浮かべた。

「とっても嬉しいです、ありがとうございますマスター!!」

「マ、マスター?」

「はい。私のご主人様ですからマスターです! さあマスター、私をモンスターボールの中に入れてください」

「お、おう……」

面食らいながらも、ラティアスを空のモンスターボールの中に入れるカイリ。

「……俺の手持ちにしてよかったのかな?」

「いいんじゃない。別にわたし達にはこだわりなんてないんだし」

(……伝説のポケモンかぁ、レイジが知ったら驚くだろうなぁ……)

そんな事を考えていると、いきなりラティアスがボールから飛び出してきた。

「ど、どうした？」

「はい、マスターにお礼をするのを忘れていました！」

受け取ってください、そう言いながらラティアスは人間の姿となり。

「え——むう!!?」

瞳を閉じ、そのままカイリの唇に自分の唇を重ねてきた。

ほっぺにではない、唇にだ。

カイリは固まり、周りのギャラリーは空気と化す。

「……それではマスター、また後で」

楽しそうに笑い、再びモンスターボールの中へと入っていくラティアス改めカノン。

「……………」

突然の口づけに、カイリは何の反応も返せない。

だが、唇の暖かな感触だけは残っていた。

「わぁ……」

カグヤは少し顔を赤くしながらキスシーンを思い出し。

「なるほど……」

シロナは大胆なカノンの行動に感心している。

だが——ヒメカだけは。

「——カイリ」

低く冷たい声で、彼の前に立つ。

「ヒ、ヒメカ……な、なんでそんなに怒ってるんだ？」

「ベ・つ・に、怒ってなんかないから」

嘘だ、絶対に怒っている。というか完全にキレてる。

そして……。

「カイリの……バカアアアアッ！！！」

「ギャアアアアッ！！」

カイリの悲鳴が、クチバの街に響き渡る。

——今日も世界は平和だ
ったとさ

「お、俺は……全然平和じゃ……ねえ」

第17話　く束の間の休息く

「……………」

パイプ椅子に座りながら、少女――カグヤはじつと静かに眠る幼なじみを見つめていた。

傷は深く、巻かれた包帯はただ痛々しい。

しかし呼吸は静かで穏やかなので、いずれ目を覚ましてくれるだろう。

だが――そう思って既に4日という時間が流れた。

だというのに、レイジは目を覚まさず死んだように眠っている。

もしやこのまま目を覚まさないのではないか、ありえない不安ばかりが日に日に大きくなっていく。

「――っ」

気づけば、強く手の平を握りしめていた。

不安になる心に活を入れながら、彼がいつでも目を覚ましてもいいようにここで……。

「カグヤ、少し休んだらどう？」

背後から聞こえる声に、ゆっくりと振り返る。

そこには優しい笑みを浮かべた女性、シロナが立っていた。

「シロナさん……」

「もうずっとともに寝てないんでしょう？」

「気持ちはわかるけど、あなたがちゃんと休まないと元も子もないわ」

「……………はい」

わかってる、そんな事は言われなくてもわかっているのだ。

だが、レイジがこのような状態なのに、自分だけが悠長に休んでい
るわけにはいかない。

そんなカグヤの心中を感じ取ったのか、シロナはそっとため息をつ
きつつ彼女を無理矢理立たせた。

「シロナさん？」

「いいから休みなさい、あなたがそんなんじゃレイジくんが目覚
ました時、きっと自分を責めるわよ？」

「……………」

確かに彼の性格を考えるとそれも否定できない。

……仕方がない、眠る事はできなさうだけど、ちょっと外の空気を吸
ってくる事にしよう。

「それじゃあ……レイジの事、お願いします」

「ええ、任せて」

ぺこりと一礼し、カグヤは病室を後にする。

そして――彼女がいなくなってから、シロナはそつとため息をついた。

（もう……レイジくんの事になると、自分の身体なんて二次なのね。あの子は）

普通ならば睡眠不足などで倒れていてもおかしくはない。

けれど彼女は、レイジの身を案じる事により気力だけで自分を支えているのだ。

――彼女もまた、危うい面を持ち合わしている

無理矢理にも休ませなければ、今度は彼女が倒れてしまうだろう。

……それにしても、と。シロナは静かに眠るレイジへと視線を向ける。

（今、2人っきりのよね……）

不謹慎とは思いつつ、つつい口元が緩んでしまうのは仕方ないと自分に言い訳。

先程までカグヤが座っていたパイプ椅子に座り込み、そっと彼の頬に手を添えて撫でる。

顔色は良いし、とりあえずは安心だ。

（……起きていたら、いい雰囲気になったりする可能性もあるけど、それは贅沢ね）

今ここで、ちゃんと彼の体温を感じる事ができる。

彼が生きていると、実感できるだけで充分だ。

頬に添えていた手を移動させ、動かない彼の手を握りしめた。

「――早く起きてレイジくん、私も……みんなだって待ってるから」

この言葉が、彼に届きますようにと。

静かな願いを込めて、シロナはレイジの手を握り続けていた。

……………。

ポケモンセンターのソファーに座りながら、カグヤはボーっと景色を眺める。

何も予定はないし、何かをする気も起きない。

「……フニャー」

そんな主人を心配するように、エネコは彼女の足に擦り寄った。

「ありがとうエネコ、でも大丈夫だから」

抱きかかえ、エネコにそう告げる。

何を言っているのかはわからないが、きっと「ならいいけど……」
と言っているのだろう。

（こんな時、レイジならわかるのにな……）

いつも彼が隣に居てくれたから、ポケモン達の言葉を訳してもらっていた。

けれど、彼がいない今ではエネコの気持ちすらわからない。

「ニャ……ミイ」

チロチロと顔を舐められる。

「あはは、くすぐったいよエネコ」

……また、心配させてしまったのだろうか。

主人の自分がこんな事ではいけない、そう思いカグヤは気持ちを切り替える。

こうしてモヤモヤした感情を抱えたままでは何も変わらない、レイジならばいずれ目を覚まして自分を見てくれる。

ならば、不安に思う事など無意味でしかない。

「――よし。エネコ、今からジムに行くよ！」

「ニャー……？」

どうして？ そう言わんばかりに首を傾げるエネコ。

「レイジが目を覚ます前にバッジを手に入れて、驚かせるため!!」

そう答え、いざ出発と立ち上がった瞬間。

「んぶっ」

何かが顔に引っ付き、おもわず変な声を出してしまった。

確認しなくてもわかる、こんな事するのは……。

「――ムウマ。また私の所に来たの？」

引っ付いてきた物体を掴み、引き離すと。

そこにいたのは、予想通り無邪気な笑顔を浮かべたムウマだった。

――先の戦いで保護したポケモンの一匹であるこのムウマ

正気に戻った他のポケモンと同じく、野生へと帰したのだが……カグヤの何が気に入ったのか、少なくとも1日に一回は彼女の元へやってくるようになったのだ。

カグヤとしても別に嫌というわけではない、しかし……いずれクチバから旅立ってしまうのに、彼女と仲良くなり過ぎるというのは……。

へ一緒に連れてけって言うてるよ、そのムウマ

突然頭の中に響いた少女の声。

視線を下に向けると、そこには4日ぶりの再会となるティナが自分達を見上げていた。

「ティナ、外に出てきてもいいの？」

レイジのポケモン達は今まで主人を守るためか、モンスターボールから出てこようとはしてこなかった。

へ大丈夫。リオン達もいるしシロナもいる。
それに、お父さんもうすぐ起きるから

「それ、ホント!？」

へうん。間違いない、アクセルもそう言ってるから

「そ、そっか……よかったあ」

おもわずまた座り込んでしまい、ムウマはそんな彼女の反応に首を傾げている。

とりあえずこれで一安心だ、しかし……。

「ねえティナ、今の話ってホント？」

ムウマと一緒に連れて行ってくれって言ったの」

へ本当だよ。ムウマに直接訊いてみれば？

「私はレイジと違ってポケモンの言葉はわからないんだけど……ムウマ、私達と一緒に居たいの？」

訪ねると、ムウマはコクコクと何度も頷きを返す。

どうやら本当のようだ、さすがに今の態度なら言葉を理解できなくてもわかる。

それならば、別にこちらが断る理由はない、それに仲間が増えるのはカグヤとしても大歓迎なのだから。

「それじゃあよろしくね、ムウマ」

空のモンスターボールを取り出し、ムウマを中に入れた。

へカグヤ、よかったね

「うん！ ムウマっていう新しい仲間もできたしレイジも目を覚ますって聞いたし、いいことって続くんだね！」

ピョンピョンと飛び跳ねはしゃぐカグヤ、エネコも彼女の真似をして飛び跳ねている。

どうやら、ようやくいつもの彼女に戻ってくれたようだ。ティナは

心の中で安堵する。

やっぱり彼女はこんな風に能天気な彼女で居てほしいものだ。

「おい、カグヤー！」

「あ、カイリ、ヒメカ……と、誰？」

こちらにやってきたカイリとヒメカの後ろに立っている1人の男性。

はて、どこかで見た事があるような気が……。

「OH、忘れられてるとは悲しいデース」

「あ……マチスさん」

思い出した、大会の際にレイジを挑発した片言外国人。

そして、これは後からわかったのだがクチバジムのジムリーダーであるマチスだ。

「ごめんなさいマチスさん」

「イエ、謝らなくてもいいデース。それよりお礼をするのが遅れてしまっ……ちこそごめんなさいネ」

「お礼……？」

「ハイ。このクチバの街を救ってくださった英雄であるボーイ&ガール達にささやかながらもお礼がしたかったのデスが、復興作業な

どに追われて今まで顔を出せなかったんですよ」

「え、英雄って……私達はそんな凄いものじゃないですよ」

そもそもあの戦いだってレイジがいなければ負けていたのだ。

しかし、そんなカグヤの言葉にもマチスは首を振り否定する。

「そんな事ありません、実際にクチバの街を救ってくれたのは事実。だから、こんなお礼しかできませんが許してください」

そう言いながら、マチスはカグヤにあるものを手渡す。

すると、カグヤの表情が驚きのものに変わった。

「こ、これ……バッジじゃないですか!!」

そう、マチスが渡してきたものは、ジムリーダーに勝利した者の証であるジムバッジだった。

「戦わなくてもわかります、キミ達はバッジを受け取るに相応しい子ども達だと。」

ですからどうか、これを受け取ってください」

「カグヤ、くれるって言うんだから貰っておこうぜ?」

「……………」

まあ、確かにバッジを貰えるというのは素直に嬉しいが……まさかこんなゲットになるとは。

少し複雑な気分になりつつも、カグヤは素直に受け取りバッジフォルダにオレンジバッジを入れた。

「そしてまだ眠っているボーイにも渡しておいてください。」

ミーが直接渡したいのですが、それでも忙しい身の上ですのデ」

「わかりました。レイジにはちゃんと渡しておきます」

そう言うのと、ではマタと言いながらマチスはポケモンセンターを出て行った。

……これでバッジは3つになり、あと1つでポケモンリーグへの出場権を得る事ができる。

大会まであと7ヶ月近くもある、これならばきっと楽勝だろう。

「へへ……これであと2つになったな」

「この調子なら、きっと余裕を持ってリーグ戦に望めそうね」

「うん………」

不思議なもので、ついこの間死にそうな目に遭ったというのに、今でもその危険性はあるのに、胸を占めるのは早くポケモンリーグに出場して楽しいバトルがしたいという気持ちだけ。

（……そっか）

きっと、信じているから安心できるのだ。

みんなを信じ、そして他ならぬ自分自身を信じているからこそ、不安など抱かない。

（……来るなら来てみなさい、次は絶対に返り討ちにしてやるんだから）

内側で闘志を燃やしながら、カグヤは決意する。

次は絶対に負けない、と。

——沈んでいく

視界に広がるのは、蒼穹の空。

ぶくぶく、ぶくぶく。

空がだんだん遠ざかっていき、自分の身体が沈んでいくのが、わかる。

感覚は、ない。

生きている実感も、死んでいる実感も存在せず、ただ黙ってこの海に身を任せていた。

ここは何処だろう、僕は誰だろう。

何一つわからない真っ白な心は、この世界にとってどういった意味を持っているのか。

時も空間も、そして世界そのものも今この瞬間を生きている。

滅びの道、様々な未来を抱えながらも、危ういバランスの上に成り立ったこの世界は。

何故——こんなにも儚くも美しいのか。

生物が生まれ、育ち、そして死ぬ。

気が遠くなるほどの長い年月の中、そのサイクルだけはずっと守ら

れてきた。

生きとし生ける者達の定め、それを——ひたすらに尊いを感じた。

だが、それでもあの世界は不完全だ。

人という生き物と、人にポケモンと呼ばれる生き物。

互いに共存し合い、助け合っていく未来は……まだ遠い。

いつの世、いつの時代も人は過ちに気づかぬまま罪を犯す。

何千、何万という悲しみと未来が塗り潰され、その罪の積み重ねの上に今が在る。

——果たして、その今に価値があるのだろうか

果たして、“私”が生み出したこの世界に、価値があるのだろうか。

その答えは、まだ出せない。

答えを出すには、人間はまだ――「……………」

長い、夢を見ていたような気がする。

内容は思い出せず、そもそも本当に夢を見ていたのかすら疑わしい。
ここはどこだろう、そう思いレイジは上半身だけ起こすと。

「……………」

自分から見て左側にはシロナ、そして右側にはカグヤが、それぞれ自分の手を握りしめて眠っていた。

ちなみにこれでもかと力を入れられており、少し痛い。

外を見るとまだぼんやりと暗く、おそらく早朝といった時間帯だろう。

（……………生きてる）

何故自分は病院服で眠っているのかをすぐに理解し、あの戦いに勝ち残れた事も自覚する。

それにみんなも無事でいいことづくめ、文句の付けようのない結果になってくれたようだ。

2人を起こさないように手を離し、ベッドから降りる。

(身体、軽い……)

まだ思考はボンヤリしているものの、身体の調子はすこぶる良いようだ。

「……まったく」

ため息をつきながら、ベッドに身体を預けて眠っている2人にシヨールを掛けてあげた。

「ありがとう」

一言お礼を告げて、レイジは散歩でもしようと思い静かに病室を後にしたのだった。

……。

「――なるほどね。僕が寝てる間に色々あったんだ」

――数時間後

目が覚めた事に喜ぶ4人を尻目に、自分が寝てる間に何があったのか説明を求めたレイジ。

ちなみに現在は病院を出て、ポケモンセンターの談話室に移動している。

「ラティアス……カノンがカイリの、そしてあの時のムウマがカグヤの手持ちになって、おまけに街を救ったお礼としてジムバッジを貰って……」

「ちなみにジムバッジは返品不可だって」

「あ、そう……」

なかなか濃いイベントを終えたようだ。

「さて……そういう事ならそろそろ行くのでしょうか」

気力体力共に万全、おまけに旅の準備も終わってるのならば、これ以上ここに留まっている理由などない。

それに、カグヤ達から聞いたのだが街の人達は自分達の事を英雄扱いしているという話だ。

目立ちたくないレイジにとって、そんな事実は苦痛でしかない。

「そうだな。そんなじゃまあ……行くとしますか」

「レイジくん、次はどこに行くつもりなの？」

「そうですね……タمامシ辺りにでも」

タمامシシティはデパートがある大きな街だ、それに何よりジムがある。

「なるほど……タمامシね」

「言っておきますけどシロナさん、いい加減帰らないとチャンピオンなんですから怒られますよ?」

「わ、わかってる。ちゃんと帰るから……」

露骨に残念そうな表情を浮かべるシロナに、全員苦笑。

外に出て、ボールからガブリアスを出すシロナ。

「それじゃあレイジくん、カグヤ、カイリ、ヒメカ、道中気をつけてね?」

それとジム戦、頑張って」

「わかりました」

「うーっす」

「ありがとうございます」

「はい!」

「あ、そうだカグヤ」

「なんですか?」

「……レイジくんの事、お願いね?」

それと、抜け駆けするのはナシだからね」

「??:??:?」

彼女の言っている意味がわからず、頭の上に何個も？マークを浮かべるカグヤ。

しかし、カイリとヒメカはその言葉の意味を理解し、同情するようにレイジの肩を叩いた。

「お前も大変だよな」

「苦勞するわね……」

「は？」

当のレイジは、2人の言っている事がわからず混乱するばかり。

「じゃあね！」

ガブリアスの背中に乗り、あっという間に空へと消えていくシロナ。

「――よくわかんないけど任せちゃった」

「どちらかと言えば僕に言うべき台詞だと思うけどね」

「むっ、それって私の方がレイジより頼りないってこと？」

「さあ……どうだろうね？」

皮肉めいた口調に、頬を膨らませながらポカポカとレイジを攻撃するカグヤ。

それを軽くないしながら、前と同じような笑顔を浮かべるレイジ。

「やれやれ……あいつも鈍いよな」

「……あなたもね」

「何か言ったか？」

「べ、別に!!」

——こうして、再びカントー地方の旅を進めるレイジ達

だが、今回の事件で多くの謎が生まれてしまった。

——行方をくらませているラティオス

——ロケット団という組織

——そして、レイジが見せたあの力

物語は少しずつ、けれど確実に動きを見せていた。

彼等の知らぬ所で、ひっそりと……。

第18話　くカグヤの女の子計画！く

「ほえー……」

「でけえ……」

大きく口を開け、呆けた表情を見せるカグヤとカイリ。

後ろにいるレイジとヒメカは、そんな2人にため息をつく。

「ちょっと、田舎者丸出しだからやめてよ……」

「いいじゃねえか。実際田舎者だろ？」

「そういう問題じゃないの……」

「レイジ、やっぱりタمامシシティは大きいね。

さすがカントー地方一番の都市だよ！」

「正確には一番じゃないよ、ヤマブキシティがあるじゃないか」

「そうなの？　まあ細かい事は気にしない気にしない」

「よっしゃ、まずはデパートに行くぞー！！」

「おーっ！！」

言うやいなや、さっさと走ってってしまうカグヤとカイリ。

「……わたし、休みたいんだけど」

「僕もだよ。ったく……ここ数日疲れただの何だの言ってたくせに、街に着いたと思ったらこれだ」

クチバを出発して二週間、はじめは2人も持ち前の無駄な明るさで普通に進んでいたのだが……だんだんと飽きてきたのか、我が儘を言い出した時が一番堪えた。

まあカイリはヒメカにお仕置きされてどうにかなったし、カグヤの方も冷たい態度をとったら渋々ついてきたから、まだ良かった。

だが、それでもレイジ達にとって疲れた事には変わらない。

「仕方ない……ヒメカ、悪いけどセンターで部屋をとっておいてくれないか？」

僕はその間にアレを連れ戻してくるから」

「わかったわ。……けど、本当にお互い苦労するわね」

「昔からこうだから、もう慣れたよ」

「……わたしも」

互いに笑みを浮かべ、レイジはカグヤ達を追いかけて、ヒメカはポケモンセンターへと足を運んだのだった。

……………。

「でけえ……これがタママシデパートか」

「私、デパートなんて初めてだよ！」

「俺もだ。よーし、じゃあさっそく」

「ヒカリ、10万……だと危ないから、100ボルトくらいで」

「んにゃあっ!？」

「うやわあっ!？」

背後から容赦なく電撃を食らわせるヒカリ。

呻き声を上げながら、2人はその場で倒れてしまった。

「お、お前なあ……いきなり電撃をかます奴があるかよ……」

「うう……し、痺れる」

「勝手な行動をする2人が悪い、自業自得だ。」

それとも……10万ボルトの方がよかったのかな？」

低く冷たい声でそう告げるレイジの表情は、はっきり言って恐ろしい。

笑顔なのだ、しかも目がまったく笑っていない。

ヒカリもいつでも電撃を放てるようにスタンバイしている辺り、余

計な事を言ったら間違いなく10万ボルトどころかボルテッカーの刑になる。

「ご、ごめん……」

「わ、わりい……」

だから素直に謝った、さすがの2人もカイリの威圧感に反抗する力はない。

「ったく……こっちは疲れてるんだから、あまり苦労させないでよ」

「なんで疲れてるの？」

「――ヒカリ、自覚できてないカグヤにかみなりを落としてあげなさい」

「嘘です嘘!! 私の旅の道中にあーだこーだ文句を言ったからです。」

全部私が悪かったので許してくださいお願いします!!」

「わかればよろしい」

有無を言わせぬ笑みを見せられては、逆らうだけ寿命を減らすようなものだ。

(こういうヤツって、怒らせるとホントに怖いよな……)

「ほら、まずはポケモンセンターに行ってみんなの回復をしてあげなきゃダメじゃないか。」

デパートに行きたいのはわかったから、まずはそれをしなさい」

「はい」

「うーす」

（やれやれ……）

本当にわかっているのだろうか、この二人は。

相変わらず忙しいカグヤ達に、最近多くなったと思いながら、レイジはため息をついたのだった。

……。

「レイジ。ほら見て、すごい商品の数だね！」

「そうだね」

「見てみるよヒメカ、トレーナー専用の商品コーナーがあるぜ。さすがデパートだよな、フレンドリィショップとは規模が違うよ」

「わかったから大声出さないで、恥ずかしい」

結局、ポケモン達の回復が終わった後、レイジ達は揃ってデパートへと赴いていた。

というのも、カグヤとカイリが無理矢理2人を連れ出したのだ。

もちろん抵抗した2人だったが、長年の経験から抵抗しても無駄だと悟りもはや諦めモード。

しかし、2人なりに息抜きをしようとしているのがわかっているの
で、そこまで嫌というわけではない。

「……………」

無邪気にはしゃぐカグヤ達から離れ、ヒメカはとある売り場へと足を運ぶ。

そこには口紅やマスカラなどが並べられている、所謂化粧品コーナーだ。

ヒメカとて年頃の少女、旅をしているとはいえ人並みにお洒落を楽しみたいと思っている。

このタマムシデパートには、沢山の商品が売られており……ヒメカにとっても退屈する事はなさそうだ。

「へえー、化粧品にも色々あるんだね」

「……カグヤ。カイリとレイジは？」

「わかんない。でもきつとトレーナー専用売り場に居るんじゃない？
それより、これって何？」

商品の一つに手を取り、ヒメカに見せるカグヤ。

「それはマスカラよ」

「マスカラって、振るとシャカシャカって音がするアレ？」

「それはマラカス。……わざと言ってるの？」

だとしたら笑えない、これっぽっちも。

「そういうわけじゃないよ、でもこれって何に使うの？」

「えっ……知らないの？」

「知らないよー。そもそも化粧なんかした事ないもん」

そういえば、カグヤの顔は化粧っ気がない。

だが、これくらいの年頃なら自然と化粧に興味を持つと思うのだが……。

「で、マラカス……じゃなかった、マスカラって何？」

「まつげを濃くしたり長く見せたりする化粧品よ」

「なんでまつげを濃くしたり長く見せたりするの？」

「それもお洒落なの。目をパッチリ見せたりする為に使うのよ」

「ふーん……変なの」

「カグヤ、それ男が言うならわかるけど……女の子にしては珍しいわね」

15歳と言っていたが、精神年齢はもっと幼いかもしれない。
そんな事を考えていると、また違う商品を手に取り見せてきた。

「これは？」

「それはマニキュア……って、マニキュアも知らないの？」

「うん。あ……でもお母さんがよく爪に落書きしてる時に同じようなもの使ってたかな」

（落書き……）

どうやらマジのマジで化粧品知識は皆無のようだ、今の暴言ともとれる言葉でよくわかった。

しかし、そう思うとなんだか勿体ないと思ってしまう。

カグヤの顔立ちはかなり整っているし、ナチュラルメイクを施せばかなり綺麗になるだろう。

「ねえカグヤ、興味あるなら化粧してみない？」

「いいよー、私そんなの必要ないし」

「……カグヤは自分を可愛く見せたいとか思った事は無いの？」

「ないよ。だって必要あるとは思えないし」

（……この子、本当に女の子なのかしら）

かなり失礼な物言いだが、ついそう思ってしまうのも仕方ないかもしれない。

しかし、そんな事を言われると俄然化粧に興味を持ってもらいいたいと思ってしまう。

今まで男のカイリと旅をしてきたのだ、女の子特有の話題を共感できる仲間を増やしておくのも悪くない。

「……なんか、良い匂いするね」

「香水の匂いね。……行ってみる？」

「うん。良い匂いは好きだから」

（よし……）

ここで香水に興味を持たせ、いずれ化粧にも興味を持たせよう。

内なる野望を抱きつつ、ヒメカはカグヤを連れて香水コーナーへ。

「香水っていっぱい種類があるんだね」

「カグヤはどんなのが好み？」

「うーん……どんなのって言われても、よくわかんないよ」

「じゃあこれは？　メガニウムの花びらから採取した成分を使った香水ですって」

「へえ……ベイリーフの匂いとは違うね」

「ベイリーフは元氣が出る匂いを発するけど、メガニウムのは気持ちを穏やかにする匂いを発するみたいよ」

「良い匂い……」

どうやら氣に入ったようだ、計画は順調に進行している。

「他にはどんな香水があるのかな？」

「えっと——あつ」

「キャツ」

同じ話題を共有できた嬉しさからか、前を見ておらず人とぶつかってしまった。

「ごめんなさい。余所見をしていたから……」

「いえ。こちらこそ申し訳ありません、お怪我はありませんでしたでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

そう答えると、よかったとぶつかってしまった相手は安心したような表情を向ける。

自分達よりも少し年上くらいか、短く切りそろえた髪にカチューシ

ヤをして、花柄の着物がよく似合う美少女。

「はじめまして、わたくしはエリカと申します」

「わたしはヒメカ、そしてこちらは――」

「カグヤです、はじめまして」

「……見た所、香水に興味がお有りのようですね」

「うーん、良い匂いは好きですけど……香水自体には特に興味ないです」

「まあ……ですが自分を美しく見せたり殿方に好感を抱いてもらう為にも必要な事ですよ？」

カグヤさんにはそのような御方はいらっやらないのですか？」

「えっ、そんなの――」

言いかけて、何故かレイジの顔が思い浮かんだ。

（あれ……？）

どうして彼の顔が頭の中に浮かんだのだろう、それに……なんだか変だ。

自分が化粧をしたり香水を付けたりして、レイジが褒めてくれたら嬉しいとか、考えてしまった。

「……カグヤさん？」

「あ、いえ……そういう人はいないです」

「そうですか。ですが自分を美しく見せる事は大事だと思いますよ。ですから、ものは試しと経験してみてはいかがですか？」

「えっ、でも……無駄遣いするわけにはいかないし……」

「心配には及びません、わたくしのジムでは無料体験をっておりますので。」

それにカグヤさんのようなお綺麗な方がお洒落をしないのは勿体ないですわ」

「えっ……ジム？」

「はい。実はわたくしタمامシシティのジムリーダーなんですよ」

……………。

タمامシジムの内部は、草ポケモンを主体とするだけあって、緑に溢れた美しい所だった。

ジムリーダーに連れられてきたものの、なんだか目的が違うような気がしなくもない。

「そうでしたか。お二人はポケモントレーナーで、わたくしに挑戦したいと？」

「はい、そうです」

「もちろん挑戦は受けさせていただきます。ですが……その前にお洒落をしましょう」

楽しそうに笑みを浮かべるエリカに、カグヤの顔が少し引きつる。

別に自分はお洒落に興味はない、それよりもジムリーダーと戦ってバッジをゲットしたいのだが……。

ニコニコと笑顔を浮かべているエリカを見ると、何故か拒否できない。

チラリとヒメカへ視線を送るが、彼女は何も言わずに。

——何事も経験よ

そう言わんばかりの視線を送っていた。

（はぁ……化粧なんて別にいいのに……）

そう思いながらも、せっかくの厚意を無碍にするわけにはいかない
ので、とりあえずおとなしくする事に。

「カグヤさん、きっと今よりお綺麗になりますわ。あらゆる殿方を魅了するくらいに」

「はぁ……」

別に必要ない、そんな言葉が喉元まで出掛かって慌てて口を塞ぐ。

——でも

（あらゆる殿方……）

その中には、レイジも入っているのだろうか。

つまり……自分が化粧やお洒落をすれば、レイジは自分を褒めてくれるというのか……。

……そう思うと、不思議と嫌だという気持ちが薄れていった。

「……ふふっ」

「？」

「カグヤさん、気になる殿方がいらっしやるようですわね」

「えっ……」

どうして、そんな疑問を視線に乗せてエリカに向けると。

「だって、急に抵抗しなくなりましたから。

——好きな殿方に褒められる所でも想像しましたか？」

ニコニコ笑いながら、とんでもない事を口走ってくるエリカ。

しかも当たってる辺り、なんだか凄いを通り越して恐い。

「違いました？」

「別にレイジはそういう人じゃ……」

「レイジさんというのですね」

「いや、だからレイジはただの幼なじみですよ。
もちろん大好きな人ですけど……」

「大好きですが、異性としてではないんですの？」

「えっと……」

どうしてガールズトークをしなければならないのか。

それに……カグヤ自身レイジの事をどう思っているのかわからないのだ。

大好きなのは間違いない、それは絶対に確信を持った気持ちだ。

しかし、ずっと家族として一緒に居た相手だから、それが異性として想いなのかどうか……。

「――御自分の気持ちがわからなければ、今はそのままでもいいと思います」

「……エリカさん」

「カグヤさんは、わたくしと似ている所がありますから、なんとなく

くわかってしまうんです。

——ですから、今はただその「好き」という気持ちだけを大切にしていればいいと思いますよ」

ふわりと、柔らかな微笑みを見せてくれるエリカ。

……少しだけ、自分の中にある不思議な感情の正体が、わかったような気がした。

……。

「——おっせえなあ、あいつらいつまで買い物してんだよ」

ポケモンセンターの宿泊施設にあるベッドに座りながら、愚痴を零すカイリ。

「仕方ないよ。女の子って買い物が長いものなんですよ？」

あいにくとカグヤはそのタイプには当てはまらないが、女性というのはそういうものだという認識がある。

そう思いカイリを宥めるレイジだが、それでも文句を呟くカイリ。

（やれやれ……）

しかし、たしかに遅い。

女の子同士色々あるのだろうか、どちらにしろ男にはわからない事

もあると自分を納得させる。

と。ノックする音が扉から聞こえた。

「? どうぞ?」

承諾すると、部屋に入ってきたのは……。

「ヒメカ?」

「やっぱりセンターに戻ってたのね」

「どうしたの? それとカグヤは?」

訊くと、何故かヒメカはイタズラっぽい笑みを見せてきた。

「ちょっと来てくれないかしら? レイジに見せたいものがあるの」

「……僕に?」

首を傾げると、ヒメカはいいから来なさいと言いながら半強制的にレイジを部屋から連れ出した。

その迫力に圧され、レイジは困惑しながらも黙ってヒメカの後についていく。

そして案内された所は、タمامシシテイのジム。

「なんだよヒメカ、お前等俺達に黙ってジムに挑戦してたのか?」

「違うわよ。……せいぜい驚かないように気をつけなさい、レイジ」

「えっ……？」その言葉の意味を訊く前に、さっさと扉を開き中に入っていくヒメカ。

「……何なんだ？」

「……とりあえず、入ってみよう」

訝しげな表情のまま、カイリと共にジムへと入るレイジ。

入った瞬間、花の香りが鼻孔を刺激した。

「緑と花に溢れた綺麗な場所だな」

「ありがとうございます、レイジさん、カイリさん」

「へ……？」

真正面からこちらに歩いてくる1人の女性。

（——強い）

一見すると儂げな印象が強い女性だが、その内側から感じる力は並の者ではない。

この人がジムリーダーだ、レイジはすぐさま理解し身構える。

「えっと……どちらがレイジさんでしょうか？」

「……僕ですけど」

「貴方が……なるほど、カグヤさんが仰った通り優しい印象の方ですわね」

「はあ……どうも」

おもわず返事を返すが、こちらとしてはどういう事なのか説明してほしかった。

「あの……カグヤは？」

「あらあら、わたくしってば一方的にお話をしてしまっ……」。

実はカグヤさんとヒメカさんとはデパートでお会いしまして、とある理由でわたくしのジムに招いたのです」

「とある理由……？」

「はい。実はカグヤさんはお洒落に興味がないという事でしたので、わたくし達がカグヤさんをコーディネート致しまして」

「はあ……」

「先程遂にそれが完了しまして、今回はそんなカグヤさんを是非レイジさんにお見せしたいと思ったんです」

「……………」

とりあえず、ここに連れてこられた理由はわかった。

しかし……カグヤがお洒落とは、なんだか想像つかない。

「それでは……カグヤさん、レイジさんがいらっしやいましたよ？」

「ほ、本当に連れてきたんですか!？」

奥から聞こえる悲鳴じみたカグヤの声。

どうやら、自分をここに連れてくるという考えはヒメカとエリカの独断らしい。

「そんなに恥ずかしがらなくても……とっても綺麗なんだから」

「うう……でも、何かレイジに見せるのはちょっと……」

「はいはい。いいから出てきなさい」

問答無用とばかりに奥からカグヤを引っ張ってくるヒメカ。

「――――」

そして、出てきた彼女を見て、レイジは言葉を失ってしまった。

「うう……」

恥ずかしそうにしきりにこちらをちらちらと盗み見てくるカグヤ。

しかし彼女の服装は、いつもと違い――着物姿だった。

黄色の生地に、エリカと同じく花柄が彩られた美しい着物。

長い栗色の髪は結われ、翡翠色のかんざしが際立っている。

薄く化粧でもしたのか、とにかくいつもの彼女とはあきらかに違っていた。

普段の彼女とは違い、もう女の子としか見られない。

「――」

息が、できない。

心臓の音が響き、全身に熱を帯びていく。「っ、も、もうこれ以上は見えないで――！」

似合っていないってわかってるし……で、でも私が着たいって言うたわけじゃないよ？

ヒメカとエリカさんが「何事も経験」だなんて言ったから……」

「あ、いや、ちが――」

「ど、どうもお見苦しいものをお、お見せしました――！」

自分でも何を言っているのかわからず、カグヤはレイジから全速力で逃げようとし。

「待って――！」

とっさに彼はカグヤの手を掴み、自分の所へと引き寄せた。

「――」

「――」

両者の顔が、みるみる真っ赤に染まっていく。

けれど、どちらも互いから離れず、端から見ると抱き合っているようにしか見えない。

恥ずかしくて、死んでしまいそうだ。

心臓だって破裂しそうだと本気で思いながら、レイジは伝えたいと思った言葉を口にする。

「――似合ってる。綺麗だよ」

「えっ……」

おもわず、レイジの顔を見つめるカグヤ。

顔を真っ赤に染めながらも、彼は真剣な表情でそう口にする。

「びっくりして何も言えなかっただけで、本当に似合ってると思ってるから……」

「……………」

予想できなかった言葉、けれどカグヤが一番ほしかった言葉。

それを聞いて、彼女の中に嬉しいという気持ちが溢れる。

「――ありがとう、レイジ」

あなたに言われた言葉が、一番嬉しい。

声には出さず、そっと彼の背中に手を回す。

こんな事、慣れているはずなのに……なんだかいつもより嬉しかった。

「……うへえ、マジで驚いたなアレ。完全に別人みてえだ」

「化粧をすれば女はあそこまで変わるのよ。」

まあ、カグヤは今まで化粧なんかした事なかったから、余計にそう感じるんでしょうけど」

「……お前は着物着なかったのか？」

「わたしが着てもしょうがないじゃない」

「そうかなあ……俺はよく似合うと思うけどな」

「――――っ」

それは、カイリにとって何気ない一言だったのかもしれない。

だが、そんな彼に淡い想いを抱いているヒメカにとって、爆弾にも等しい衝撃だ。

一瞬で顔を真っ赤にし、直立不動になってしまう。

「う、あ、えつと……あ、あんた、それは」

つまり、自分の着物姿を見てみたいという事だろうか……？

もしそうなら――見てほしい。

そして、少しでも自分を女の子してもらいたい。

……のだが。

「あ、でもお前胸がデカイから着物を綺麗に着る事はできないか」

と、凄まじい暴言のせいですべて台無しになってしまった。

「……………」

ああ……千年の恋も冷めていくような。

だが仕方がない、このセクハラもカイリという少年の持ち味……みたいなものだ。

しかし敢えて言いたい、というかわせろ。

「この……バカイリイイイッ……！」

「んぎゃあああすっ……！！！」

酷い悲鳴がジム内に響き渡り、自業自得の男は地面に頭から埋まっていた。

「あらあらまあまあ」

そんな2人を見つめながら、楽しそうに笑うエリカ。

……彼女もなかなか食えない人物である。

ジム内に漂う和やかな雰囲気により、周りにいる人達も笑顔を浮かべていた。

――突然、ジム全体に響き渡る程の大きな音が聞こえるまでは

カイリのポケモン2

・ラティオス

ホウエン地方に伝わる伝説のポケモン。元々はホウエン地方で兄のラティオスと平和に暮らしていたのだが、突如ラティオスが行方不明となり、彼を捜す為に旅に出る事に。

カントー地方に赴いた所で、マードとフレアによって捕らわれそうになるが、カイリ達によって救われ彼の誘いもあり一行に加わる事になった。

伝説のポケモンらしくその力は絶大であり、よほどの事がない限りカイリもバトルに出そうとはしない。

また光の屈折を利用して人間の姿を見せる事ができ、人間の時の名前はカノン。

しかし皆その名前で定着したせいか、人間の時もポケモンの時も変わらず彼女をカノンと呼ぶ。

一人称は「私」普段から敬語を使いカイリの事は「マスター」で他の者は呼び捨て。

カグヤのポケモン2

・ムウマ

♀。元はマードカのポケモンであったが、クチバでの戦いで捨てられ怪我を治したあと野生に返したが、カグヤの事が気に入ったのかそのまま彼女の手持ちに。

無邪気で人懐っこい、少しイタズラ好きでその矛先は主にカグヤとカイリに向けられている。

またマードカに虐待に近い扱いを受けていたのか、バトルに対しては消極的。

バトルとしてではなく、あくまで一緒に居るためにカグヤの手持ちになったようだ。

一人称は自分の名前、全員呼び捨てで呼んでいる。

第19話　く冷たい闇を抱える者く

バンツと、乱暴に開かれるジムの入り口。

そのけたたましい音に、ジム内にいる全員の視線がそちらに向けられた。

もちろんそれはレイジ達にとっても例外ではなく、しかし――彼だけは違う反応を見せた。

「――っ」

半ば無意識のうちに、カグヤを自分の後ろへ。

（……なんだ。この冷たく禍々しい感じは）

ズシリと重圧のように纏わりつく何かに、不快感だけが増していく。

それを、入り口にいる人物が放っていると思うと信じられない。

自分とさほど変わらない、少年と言ってもいいくらいの年齢の子供が、こんなにも深く暗い闇をその身に宿して生きているなど、もはや正気の沙汰ではなかった。

知らず身体が震え、汗が頬を伝い地面に落ちる。

「あら、新しい挑戦者ですか？」

だがこの状況でも、目の前の男の闇に気づかないのか、それとも元

々こういった人物なのか、エリカは変わらぬ口調で少年に問いかける。

「——お前が、ジムリーダーか？」

問いかけながらこちらへと歩いてくる少年。

黒い髪に黒い瞳、そして黒を基調とした服装。

全てが黒に統一され、更にその黒はひたすらに禍々しい。

シロナも黒い服を着ていたが、あれとは違い黒というより漆黒に近いかもしれない。

「……………」

この男は危険だ。

初対面でまだろくに話し掛けていなくてもわかる、目の前の男と関わり合いになりたくないと思っている自分がいる。

震えてしまうのだ、自然とこの少年を見るだけで。

そんなレイジの心中をよそに、少年はエリカと対峙する。

その目つきは鋭く、睨んでいるようにしか見えない。

「はい。わたくしがこのタマムシジムのジムリーダーのエリカと申します。

ですが先に挑戦する方々がいらっしゃいますので、少し待ってい

ただけませんか？」

「……いや、必要ない」

「えっ？」

それは一体どういう意味なのか、エリカは少年の言葉が理解できず首を傾げるが。

「この程度の実力なら戦う意味はない、ジムリーダーだというからどんな手練れかと思いきや……とんだ期待外れだ」

本気の侮蔑を込め、見下すように笑いながら少年は言った。

「……………」

これにはさすがのエリカも驚き、彼女を師事している周りのトレーナーからは敵意が生まれる。

しかし少年は臆する事なく、更に彼女を見下すかのような言葉を吐き出した。

「期待外れに期待外れと言って何が悪い？」

少しはオレの暇潰しになるかと思ってきてみれば……こんな程度でジムリーダーとはな。

くだらない上にとんだお笑い草だ」

「何なんだお前は!!」

「そうよ。いきなり現れてエリカ様に対してそんな口の聞き方……」
「雑魚に敬語を使えっていうのか？　ハッ、笑わせるなよ三流風情が。」

「じゃあ訊くが、お前達は格下相手に敬語を使うほど酔狂なのか？
だとしたら笑えるな、新しいジョークにピッタリだよ！　ハハハ
ハハハハハハハッ!!!」

あまりの暴言に、敵意だけでなく殺気立っていくジム内。

そして、それはカイリにとっても例外ではなかった。

「デメエ、一体何様のつもりだ!!」

「あ?」

「戦いもしないくせに雑魚だ格下だと決めつけやがって、そんなに
お前は強いのかよ!!」

「ああ、強いぜ。少なくともここにいる全員よりは——」

そこまで言いかけ、気づいたように視線をレイジに向ける少年。

「——訂正だ。お前だけは多少違うようだな」

「……………」

まるで獲物を狩り取ろうとするハンターのような目だ。

「っ、なめやがって……なら俺と勝負しやがれ！」

モンスターボールを構えそう叫ぶカイリだが、少年は冷たい視線を変えぬまま口を開く。

「冗談だろ？ あいにく俺はお前みたいな三下を相手にしていられるほど暇じゃないんだ。

お前みたいなのは、そこにいる二流ジムリーダーでちょうどいいさ」

その言葉で、カイリの堪忍袋の尾が切れた。

「デメエ——！」

拳を握りしめ、少年に向かって殴りかかるカイリ。

それを小さく鼻で笑いながら、少年は拳を握りしめ。

「やめなよカイリ。怒りたい気持ちはわかるけど手を出すのはよくない」

カイリが突き出した拳と、少年が放った拳は。

それぞれ、割って入ったレイジの左手と右手によって完全に防がれていた。

（コイツ、オレの拳を止めた……？）

「なんで止めんだよレイジ！ こいつは一発殴らなきゃ気が済まねえ！」

「いいから落ち着いて、暴力に訴えても意味ないだろ？」

優しく落ち着かせるような口調で、カイリを宥めるレイジ。

「フン。少しはできると思ったんだが、とんだ甘ちゃんみたいだなお前は」

しかし、追い討ちをかけるように少年はレイジに対しても暴言を吐くが。

「エリカさん。ジム戦の準備をしてもらってもいいですか？」

彼には意味などなく、完全に無視しエリカへと話し掛けた。

（コイツ……）

「――何、まだいたの？ 挑発と暴言しか能のなくせにいつまでも居ないでよ鬱陶しい。」

戦う気がないなら消えてくれないか？ 正直目障りなんだ」

表情を変えず、ただ淡々と少年にそう告げるレイジ。

しかし、その声色には隠しきれない怒りが滲んでいた。

「……………」

それを感じ取り、おもわず押し黙る少年。

レイジはそんな少年の顔を見る事なく、カイリの腕を掴みながらエリカの元へ。

「ほらカイリ、せっかくだからジム戦でもしようよ」

「……………」

まだ納得できないといった表情だが、それ以上は何も言わずにおとなしくなるカイリ。

「エリカさん、お願いします」

「畏まりましたわ。皆さん、準備の方をお願い致します」

彼女の一声で、周りにいるトレーナー達が動き出す。

中にはカイリと同じく納得できないといった顔になっているが、その者達も準備をする為に動いていた。

「……………ありがとうございました、レイジさん」

「えっ？」

「あなたが事態を收拾してくれたおかげで、大きな騒ぎになりませんでしたから」

「いえ……………」

——まだ、あの少年はこちらを見ながら立ち尽くしている
すると、彼は懷からモンスターボールを取り出し。

「——ヘルガー、かえんほうしゃ」

レイジにとって、耳を疑うような命令が下された。それと同時に投げられるモンスターボール。

「っ、リオン、かえんほうしゃだ!!」

すぐさまこちらもボールを取り出し前方に投げる。

先に飛び出したヘルガーが、すぐさま大きく息を吸いかえんほうしゃを放つ。

その矛先は——ジムの中に咲いている花達。

「……………」

だが、間一髪の所でリオンのかえんほうしゃがヘルガーの炎を相殺させた。

「何をするのです!!」

「悪いな。うざったかったから燃やしたくなった」

「っ、この——！」

再び殴りかかろうとするカイリだが。

「カイリ」

レイジのその一言で、再び動きを止めた。

「レイジ、なんで止めんだよ！！ こいつが今何をしようとしたのかわかってんのか！？」

「わかってる、わかってるよ」

「わかってんなら——」

「けど、だからって暴力はやめてくれ。
君がそんな事する所を見るのは嫌だ」

「……………」

そう言われてしまうと、カイリとしては何も言えなくなる。

殺伐とした空気の中、レイジは少年の元へ歩み寄った。

ヘルガーはレイジに対し威嚇の態度を見せ、少年はそんな彼を心底見下しているかのような視線を向けてくる。

それには構わず、レイジは少年に対して問うた。

「どうして、こんな事をしたの？」

「どう答えてほしい？ 望み通りの答えをくれてやるよ」

「君自身の答えを訊きたい」

「ハッ、そんなもの決まってるだろ。」

一つ、この場所が気に入らない。

二つ、弱いくせに粹がるジムリーダーが気に入らない。

そして三つ目は――お前の目が心底気に入らない」

憎悪すら込めた瞳で、少年はレイジを睨む。

まるで長年の仇に会ったかのように、少年がレイジに抱く感情は――完全なる殺意だった。

「初対面なのに随分な言いようね、レイジの何が気に入らないっていうのかしら？」

「全部だ。だが敢えて理由を言うなら、ポケモンを心の底から信頼し愛情を抱いている所に、虫唾が走る。」

――こんな化け物を信頼するなんて、お前もコイツらと同じ化け物だな」

『――っ!!?』

誰もが、あまりの暴言に反論が返せない。

ポケモンを化け物と言う事も驚きだが、なにより人であるレイジを人ではないと罵ったのだ。

初対面の人間に対して、人はここまで残酷になれるのか。

「――酷い。そんなの酷すぎるよ」

「……レイジ、今度ばかりはお前でも止められそうにねえ。

俺は親友を侮辱されて黙っていられるほど、大人じゃねえからな」

「いいわよカイリ、おもいつきり殴り倒しちゃいなさい」

完全に殺気立った空間の中でも、少年の小馬鹿にした表情は消えたりしない。

「美しい友情というやつか？ 笑わせるなよ。たかが他人の為に怒りを抱くなんざ滑稽にも程がある。

どいつもこいつも甘ったるい世界で生きてきた分際で、オレに意見なんかするんじゃないよ」

「……………君は、どうしてポケモン達を憎んだりするの？」

「デメエには関係ない」

「関係ないよ。でも……君の心はひどく軋んで歪んでる。

自分でもどうしてこうなったのかわからないくらい、取り返しのつかない所にまで……」

「……何だと？」

ピクリと、今の言葉に反応を示す少年。

「見えるんだ、君の闇が僕には。」

底が見えない漆黒の中で、この世全てを憎んだ何かが蠢いてる」

「……………」

「ねえ、君はどうしてそこまでポケモンを……世界そのものを憎むの？」

一体その闇の中に、何が——」

そこで、レイジの言葉が途切れる。

……少年が、今度こそ本気の殺気をこちらに向けてきたからだ。

「——やっぱり、お前はここで殺す。今すぐにだ!!」

「……………」

本気だ。

どういうわけかは知らないが、彼は自分を本気で殺すつもりらしい。

一体彼は何者なのか、どうして自分に殺意を抱いたのか。

彼と自分は初対面、接点など今までなかった。

しかし……少年が自分を睨んだ時に感じた不快感とはまた別の感情。

どこか、レイジという存在を絶対に認めない、そんな感情が自分の内側に入ってきた。

それは限りなく暗く、そして――悲しい。

だから、レイジには目の前の少年に対して、先程までの怒りなど微塵も残っていなかった。

あるのは、悲しみか……それとも、痛みか……。

「ヘルガー、こいつを殺せ!!」

「……………」

向かってくるヘルガー。

けれど、レイジはその場から動かずにただ黙ってそれを見つめ――

「な、に――!？」

ヘルガーがレイジに襲いかかろうとした瞬間。

「――お父さんに、手を出さないで」

「――父上を傷つける者は、たとえ誰であっても許さない!!」

ティナのれいとうパンチと、アクセルのはっけいが同時に決まり……ヘルガーはその場で倒れ込んだ。

「……チッ、使えないヤツだ」

侮蔑を込めた言葉を放ちながら、ヘルガーをボールに戻す少年。

「ティナ、アクセル、ありがとう」

「へいえ……僕達は当然の事をしただけです」

相変わらず生真面目なアクセルの言葉に、苦笑混じりの笑みを浮かべた。

「……………」

そんな彼等を、少年は憎悪を込めた視線で睨んでくる。

一体何が気に入らないのか、もはや理解不能な領域だ。

「――興醒めだ。まさかヘルガーがここまで使えないヤツだとは思わなかった。

生かしておいてやるよ、今だけはな」

「何言ってるんだお前、負けたくせに」

「勘違いするなよ。オレの手持ちがヘルガーだけと思っているのか？
言っておくが、お前等が束になってかかってきてもオレには勝てねえよ」

「たいした自信ね。なら試してみる？」

そう言いながら、モンスターボールを構えるヒメカ。

隣にいるカイリもボールを構えるが、少年はそんな彼等を鼻で笑った。

「馬鹿か？ お前等みたいな三流を誰が相手にするかってんだ。それにな……少なくともコイツはオレの言っている事は間違いじゃないと気づいてるみたいだぜ」

「……………」

視線を向けられ、レイジは俯く。

——そう、この少年の言っている事は間違いなんかじゃない今の自分達では、彼に勝つ事はできないだろう。

彼から感じた凄まじいオーラ、それはシロナほどではないにしろ少なくとも自分達とは比べものにならないほど大きく強いものだ。

おそらくあのヘルガーも、彼にとっては一番弱い手持ちだと思われる。

そんな人物に勝てるとは、まだ思えない。

「じゃあな。次に会った時は今より強くなってる。

オレを楽しませるために生かしてやるんだからな」

そう吐き捨てるように言い、少年はさっさとジムから出ようとするが。

「——君の、名前は？」

そう問い掛けをしたレイジの声に反応し、立ち止まり、そして——

「――ケイジだ」

ぽつりと呟くように名乗り、今度こそジムから出て行ったのだった。

――運命は廻り始めた

――彼との出会いは、やがて激しい戦いの幕開けとなる

――だが、それに気づく者は誰一人として存在せず

――ただ一人、レイジだけは

――この出会いに、何か意味があるのだと感じていた

第20話　く戦う意義く

「……………」

ここはタママシシティのポケモンセンター。

そこでカイリは、ポケモン達が遊んでいる中庭の中で、1人静かに座り込んでいる少年を見かけ声を掛けた。

「レイジ、何1人で黄昏てんだ？」

「……………カイリ」

名を呼ばれた少年、レイジは一度カイリへと振り向くが、すぐさま視線を正面に向けてしまった。

そんな彼の様子に首を傾げながら、カイリは彼の隣へと座り込む。

「……………」

ティナ達が仲良く楽しそうなのに対し、そんな彼女達の主人であるレイジの表情は、ひどく曇っている。

沈黙にも耐えきれなくなり、カイリは再びレイジへと声を掛けた。

「なあ、お前昨日からなんか変だぞ？」

「変って、どこら辺が？」

「全部だよ全部。心ここにあらずって感じだし、話しかけても上の空で誰が見たって元気がねえのがすぐにわかる。」

——結局、ジム戦だってやらなかったしな」

そう、4人の中でレイジだけがジム戦を断り、その後はずっとこの調子。

幼なじみであるカグヤにもどうして彼がこんな風になったのかわからず、まさに八方塞がりだ。

ちなみに、ジム戦は3人共に勝利し、カグヤとヒメカはエリカと共にデパートに出掛けている。

2人もレイジの事を心配していたが、今はそっとしておこうと判断したのだろう。

無論カイリも初めはそうしていたのだが……正直彼がこんな様子ではそっとしてはおけなかった。

それで話し掛けたのだが……なんだか重い空気になってしまった。

「——心配かけてごめん」

カイリが心配している事がわかったのか、レイジは視線を向けないまま彼に謝罪の言葉を口にする。

「いや、別にいいけど……本当にどうした？」

——あのムカつく野郎に会ってから、様子がおかしいぞ」

「——」

その言葉に、レイジは僅かに反応を見せる。

やっぱりな、半分カマかけのつもりだったが……やはり彼は嘘をつく事ができない人間のようなのだ。

——あのケイジという少年がいなくなってから、彼の様子はおかしくなった

それはきつと、彼がレイジに放った暴言が原因だろう。

「レイジ、あんな野郎の言った事なんか気にするなよ。

あいつの言った事は間違ってる、ポケモンを化け物扱いする事も……お前を化け物呼ばわりした事も間違いだ。

だから、そんなに気にする事ないぜ？」

それは本心からの言葉であり、今でもケイジが口にした言葉を思い出すと怒りが湧き上がってくる。

当然だ。仲間であり親友であるケイジを侮辱されて、どうして怒りを抱かないというのだろうか。

「だからさ、お前もいつまでも気にする必要なんかないんだよ。

お前は人間だ、化け物なんかじゃない。もちろんポケモン達も」

「——僕は、違うよ」

「えっ……?」

何かを呟いて、レイジは立ち上がりティナ達の元へ。

すぐさまティナ達をボールに戻し、カイリへと振り向き口を開いた。

「ちょっと散歩に行ってくるよ。あまり遅くはならないから」

そう告げ、逃げるようにその場を後にするレイジ。

1人、その場に残されたカイリは。

「――何が違うっていうんだよ、レイジ」

そう呟き、苦々しそうに唇を噛みしめたのだった。【レイジside
e】

今日も、時間というのはこちらの都合など考えずに進んでいく。

当たり前だと思いながらも、今回ばかりはそれが憎たらしい。

……でも、そんな事を考えている自分自身が一番憎たらしかった。

昨日、ケイジに言われた言葉が何度も自分の中で繰り返し再生されていく。

――化け物

――ポケモンは化け物

——そんなものに信頼を抱いているお前も化け物だ

そんな言葉が、どうして人から放たれるのかが理解できない。

自分はいいい、けれどポケモン達にまでそんな言葉を投げかけるのは、どうしてなのか。

この世界は、人とポケモンがいて初めて成り立っているのに。

それなのに、そのポケモンを他ならぬ人間が憎むなど、悪い夢とは思えない。

そして——そんな彼を否定する自分が本当に正しいのかも、疑わしくなっていく。

正しい正しくないは別として、あのケイジという少年は自身の言葉と思いに確固たる自信がある。

対して自分には——そんなものは存在しない。

夢も、想いも、信念も何もかもが欠落している。

カグヤとカイリはポケモンマスター、そしてヒメカにはそんなカイリを見守り強くなるという夢がある。

では自分は？　そう問いかけても答えはない。

元々周りに流され、他にすることしなければならぬ事もなかったから旅に付き合っていただけ。

バトルをしているのも、シロナさんに言われた言葉を知りたいというだけで結局他人に言われて始めただけだ。

そんなものは夢でも信念でもない、ただ与えられた事をこなす機械のようなもの。

何の為に自分がここにいいのか、何の為にトレーナーとして戦うのか、その理由は——見えない。

自分は——何の為に生きているのか、それすらも曖昧で確立された理由がない。

自己が薄い、という次元の問題ではなく、自分には自己が“無い”のだ。

だから、どうしたらいいのかがわからなくなった。

考えれば考えるほど答えは見えなくなり、挙げ句カグヤ達に心配させてしまっている。

迷い苦しみ、その果てに人は何かを掴む。

けれど——自分にはそんなものすら。

「っと」

「あ……………」

俯いて歩き、更に考え事をしていたせいもあり、前方から走ってき

た誰かにぶつかってしまった。

……最悪だ。立ち上がりすぐさま頭を下げる。

「気にしないでいいよ、こっちこそ急いでいたから前方不注意だった」

人が良いのか、ぶつかったのはこっちなのに許してくれた。

（この、人……）

俯いた顔を上げ、男性だとわかった瞬間、あの感覚に襲われる。

赤い髪を逆立て黒いマントを付けた青年。

その瞳には形容できない力強さが宿り、おもわず身構えてしまうほどそのオーラは大きく強い。

けれどあのケイジという少年とは違い禍々しさなど微塵も感じられず、純粹で綺麗で……。

そう、まるであのシロナさんのような……。

「……辛そうな顔をしているね。一体何があったんだい？」

「えっ……？」

「今にも泣いてしまいそうだよ、君の今の表情は」

言われて、どきりとしてしまう。

「もし君に大切な友達がいるなら話した方がいいと思う。

たとえどんなに些細なものでも、どんなに人には話せないような内容だとしても、自分1人だけで抱え込むよりはずっといいからね」

「……………」

「けれど、どうしても話せないなら……ボクが聞いてあげるよ」

「えっ…………？」

「もちろん君が迷惑だと思わないなら、だけどね」

そう言って優しく笑みを浮かべる男性に、不思議な力が働いたのか。

「……聞いて、ください」

気が付いたら、そんな言葉を口に出している自分がいた。

……………。

「——なるほどね。でもそんな大事な事をボクに話してもよかったのかい？」

「はい……あなたなら、笑わずに聞いてくれると思いましたから」

結局、自分が悩んでいる事をすべて今出会ったばかりの男性にぶちまけてしまった。

普通なら迷惑としか思えない自分の行為を、男性は嫌な顔一つせず
に真剣に聞いてくれたのが嬉しかった。

「……じゃあ、君は確固たる信念や夢がほしいのかい？」

「……それも、よくわかりません」

「わからない？」

「自分の願いが、わからないから……何を望んでいるのかも、何を
したいのかも……わからないから」

だから、夢や信念を得たいのかと言われても、答えられない。

自分が何をしたいのかが何一つ自分で理解できないのだ、答えられ
るはずがなかった。

「——そうか。確かにそれでは困ってしまうね」

「あの……すみません、こんな話をいつまでも話してしまっ……」

「いいんだよ。ボクとしても興味深い悩みだと思うよ。レイジくん」

「えっ……」

この人、どうして僕の名前を……？

まだお互いに名乗ってないのに……。

「やっぱりね。ポケモンと話す力を持った少年がいるとシロナくんから聞いた事があったけど……まさか本人に会えるとは」

「シロナさんを知っているんですか？」

「もちろん。同じチャンピオンだからね、知らないわけがないさ」

「同じ……チャンピオン？」

その言葉に疑問を抱いていると、男性はようやく自分の名前を明かしてくれた。

「そういえばまだ名乗っていなかったね、ボクはワタル。」

このカントー地方のチャンピオンの肩書きを持つドラゴン使いさ」

尤も、その名は信じられるようなものではなかったが。

「チャンピオン……カントー地方最強のポケモントレーナー……」

「一応はね。……しかしシロナくんの言ったように、ポケモンを大事にしているトレーナーのようだ。目を見ればわかる」

「ど、どうも……」

シンオウだけでなくカントーのチャンピオンにも会えるとは……自分の遭遇率の高さに驚いてしまう。

「それでレイジくん、さっきの悩みだけどね……正直、それは君自身が見つける以外に解消させる方法はないんだ」

「……………」

それは、わかっている。

たとえば他人から答えを貰ったとしても、それは所詮「答え」でしかないのだ。

自分の求めるものは、自分自身で見つける以外術はない。

けれど、それでもワタルさんの言う通り、話しただけでもすつきりできた。

まだ答えは見いだせない、けれどいつまでも悩んでいても自身を追い詰めていくだけ。

ならば、この旅を続けて見つけるしかない。

そして、彼の言った事は間違いだと、胸を張って言えるくらいの答えを探し出してみせる。

「——うん。いい表情になったね、まだ迷いは見えるけど……今はそれでもいいと思う。」

人はいつだって迷い、その度に強くなっていくのだから」

「——ありがとうございます、ワタルさん」

精一杯の感謝を込めて、ワタルさんに頭を下げた。

けれど彼は、「気にしないで」と優しく笑うばかり。

「――さてと。それじゃあボクはそろそろ行くとするよ」

「あ、はい。本当にありがとうございました」

「どういたしまして」

「……そういえば、ワタルさんはどうしてタマムシシティにやって来たんですか？」

ふとした疑問、自分にとっては本当に何気ない問い掛けだった。

「――――」

けれど、僅かにワタルさんの表情が変わる。

それを疑問に思い、更に問い掛ける。

「あの……どうかしたんですか？」

「ああ、いや……ちょっとね」

それから、ワタルさんはそれ以上何も言わずに黙ってしまった。

ちょっと、などという様子ではないのはすぐにわかる。

けれど、それ以上追求する権利はないし彼にも迷惑になるだろう。

それでも――不思議と気になってしまった。

「――レイジくん」

「はい」

「シロナくんから聞いたのだけど、君はロケット団という組織の人間と戦った事があるんだって？」

「……………はい」

クチバシティで戦ったマードとフレア。

あの2人は口走っていた「ロケット団」という名前。

シロナさんと予想した通り、組織の名前だったようだ。

「けど、それがどうかしたんですか？」

「……本当はボク1人で行こうと思ったんだけど、優れたトレーナーである君に協力してもらいたいんだ」

「……………？」

協力、とは一体どういう事なのだろうか。

「実はね……」

「なあレイジ、本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよカイリ、心配掛けてごめん。

カグヤとヒメカもごめんね、あのケイジとかいう人に言われた事をあれこれ考えちゃったんだ。

でももうこれっぽっちも気にしてないし気にする必要もないから、大丈夫だよ」

「それはよかった。カグヤってわたし達と買い物してる時もいつも以上に落ち着きがなくて大変だったんだから」

「うう……ごめん。でもいつも以上って……私、そんなに落ち着きないかな？」

「もし自分が落ち着いた人間だと本気で思っているなら、わたしは全力であなを叱るわ」

「うう……」

うなだれるカグヤに、全員が笑みを浮かべる。

いつも通りの夕食風景に、4人は安堵していた。

「けどよ、もう気にしてないなら明日はジム戦に挑戦したらどうだ？」

「そうね。手に入れば3つ目になるんでしょ？」

「私はもう4つだから、ポケモンリーグに出場できるよー」

「別にそんな事誰も訊いてないわよ。それよりどうするの？」

軽く辛辣なツツコミをしつつ、再び問い掛けるヒメカ。

ちなみに、カグヤは今のツツコミによりヘコンでいた。

「そうだね。せっかくだから挑戦してみるよ」

「まあお前なら楽勝だろうな」

「それはわからないよ、相手はジムリーダーなんだから」

他愛のない話。

……だが、レイジの心中は穏やかではなかった。

――ワタルから言われた言葉を思い出す

「この街に、ロケット団という組織の基地があるんだ」

ワタルがタマムシシティに來た理由は、そのロケット団の基地を壊滅させる為だった。

ロケット団――ワタルの話によるとポケモンを使って金儲けをする犯罪組織らしい。

なんと、この街にあるカジノやゲームコーナーはロケット団が秘密

裏に経営しているらしく、更にその地下に基地があるというのだから二重に驚いた。

そして、ワタルがレイジに協力してもらいたいこと。

それは――レイジにもロケット団の基地を壊滅させる手助けをしてほしいとの事だった。

「レイジくん程の優秀なトレーナーならば、助っ人としてこれほど頼もしい存在はいない」

そう言ったワタルだったが、レイジとしては驚きを隠せなかった。

まさかそんな国際警察の真似事をしてくれなどと言われるとは……
よほど人手が足りないのだろうか。

本音を言えば断りたかった、優秀と言ってくれたのは嬉しいが、自分のような子供にそんな大役が務まるとは到底思えなかったからだ。
だが――それでもレイジはすぐに協力を申し出た。

確かに務まるとは思っていない、だがポケモン達を道具のように使うロケット団を許す事はできない。

そう告げると、ワタルは嬉しそうに笑みを浮かべてきた。

「ありがとう。やはりシロナくんの言った通りの子だよ、君は」

そうしてワタルと一度別れ、夜中に集合する事に決め現在に至る。

……もちろん、カイリ達には話していない。

彼等を自分の我が儘に付き合わせるわけにはいかないからだ。

だから、レイジは心の中で彼等に謝罪する。

勝手な事をする自分を許してほしい、と。

……。

人もポケモンもすっかり寝静まり、静寂が訪れるタマムシシティの夜。

レイジはカイリを起こさないように部屋を出て、集合場所へと急ぐ。

「やあ、レイジくん」

既にワタルは到着しており、これから犯罪組織と戦うとは思えない落ち着きようだ。

さすがチャンピオンというべきか、それとも自分が気を張りすぎているだけなのか。

「それじゃあ、さっそく行くのでしょうか。」

——でも、本当に彼等に言わなくてよかったのかい？」

「はい。……巻き込むわけにはいきませんから」

「……そうか、では行くよ」

歩き出すワタルの後ろについていくレイジ。

しかし、どうやって侵入するのだろうか。

タマムシのゲームコーナーの前に立ち尽くしながら、そんな事を考えていると、ワタルは何故か建物の裏側へ。

「ワタルさん？」

「こっちだよ」

言いながら、おもむろに壁に手を添えるワタル。

瞬間——まるで切り取られたかのように壁が動き、地下へと続く階段が現れた。

「予備の入口のようだね、さあ……準備はいいかい？」

最終確認の問いかけに頷きを返し、レイジはワタルと共に闇が広がる地下へと足を踏み入れた——

第21話 地下基地へ、狂気のモンスターボール

――階段を降りる音だけが鼓膜に響く

周りは電気がないため薄暗く、すぐ前を歩いているワタルの姿でさえよく見えない。

「……………」

一步一步進む度に、自分の鼓動が早くなっていくのがわかる。

緊張と恐れ、不安を隠しきれないのだ。

無理もない、レイジはまだ14歳の少年だ。

まだ子供と呼べるほどの彼が、こんな緊張感溢れる場所に赴いて平静を装えるはずがなかった。

それでも必死で声を押し殺し、ただ黙ってワタルの後ろを歩く。

（……強い子だ）

そんな彼の息遣いを耳に入れつつ、ワタルは思う。

自分の不安や緊張を自分に知らせない為に、精一杯我慢している。

迷惑を掛けるわけにはいかない、そう思っているのだろう。

（シロナくんが気にかけるわけだよ……）

この間、彼女の方から電話を掛けてきた事には驚いた。

一体何の用かと思えば、とても将来が有望で面白い男の子に会ったと言った後――延々と彼の事について聞かされたのは記憶に新しい話。

やれ優しいだの、やれ可愛らしいだの、やれ魅力的だの。

画面越しの彼女はただひたすらに嬉しそうで、彼の話をしている姿はまさしく恋する乙女のようにだったとワタルは記憶している。

半分は聞き流していたのだが、彼女にそこまで言わせるそのレイジという少年に会ってみたいと思った。

そして今日、偶然その少年に出会い――彼女の言葉は決して大袈裟なものではないと理解した。

まだ多少話した程度だが、彼の言葉の端々からポケモンに対する確かな信頼と愛情を感じ取る事ができたし。

今だって、自分の恐怖心よりもポケモンを助けるという想いを強くして自分の手助けをしようとしてくれている。

ポケモンを好きでいられる人間は、いずれ心も身体も強いトレーナーになれるものだ。

「――楽しみだ」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

そう、本当に楽しみだ。

半年後に開かれるポケモンリーグ、そこで自分と彼が戦えたら……
そう思うと楽しみで仕方ない。

もちろん彼が優勝するとは限らないが、それでも楽しみだと思って
しまふ辺り、自分も彼に対して並々ならぬ期待を抱いているという
ことか。

――階段が終わる

通路の少し先には扉があるが、近づいてみても物音は聞こえない。

「……誰か、いる？」

「……入ってみたいとわからないな」

しかし、入った瞬間襲われてしまえばたまったものではない。

「――アクセル」

ボールを取り出し、中からアクセルを出す。

〈父上、お呼びでしょうか？〉

「アクセル、奥の部屋に誰か居るか波導を感じ取ってくれないか？」

周りに聞こえぬよう、耳元で話し掛ける。

〈かしこまりました、少々お待ちを〉

「お願いね。……ところでアクセル」

〈なんでしょうか？〉

「どうしてボールから出す度に僕に向かって片膝を付くの？」

まるで主君に従う騎士のようなポーズをするアクセルに、前々から不思議に思っていた事を問い掛ける。

ちなみに、今も出した時はこちらに対して片膝を付いていた。

〈もちろん我が主人であり尊敬する父上の前に出たのですから、そうしなければ失礼にあたるではありませんか〉

「……君はいつの時代のポケモンなの……？」

おもわずそんなツツコミを口にしてしまったが、アクセルらしいといえばらしいのでそれ以上追求するのはやめた。

そんなレイジに首を傾げながらも、目を閉じ精神を集中させるアクセル。

（なるほど、波導を感じ取れるリオルを使って奥の部屋に人間がいるのかを確かめるのか……）

へ——お待たせ致しました父上、奥の部屋にはおよそではあります

が二十人ほどの人間がいます。

それと数匹のポケモンの波導も感じられました、あいにくと正体まではわかりませんが……

「充分だよアクセル、ありがとう」

目線を彼に合わせ、優しく頭を撫でてやる。

くすぐったそうにしながらも、アクセルは嬉しそうに笑みを零した。

（……とても信頼し合っている、お互い良いパートナーと巡り会えたみたいだね）

しかし、待ち伏せをされているという事は、初めから自分達が侵入されているのがバレていたということ。

侮っていたわけではないが、相手は予想以上に手強そうだ。

「……どうしますか？」

「そうだね。数の上ではこちらが不利だけど……待ち伏せしてくれたのは好都合かもしれない」

そう言いながら、懐から6つのモンスターボールを両手で取り出すワタル。

「ワタルさん？」

「レイジくん、これは正々堂々としたポケモンバトルじゃない。だから君の手持ちは初めから全て出しておいたほうがいいよ。」

それと……これは卑怯でもなんでもないので勘違いしないでほしい」

よくわからない事を言いながら、ワタルはおもむろにボールを全て奥の部屋へと投げ入れ。

「みんな、出てきた瞬間に手当たり次第にはかいこうせんだ」

これまたよくわからないというか……耳を疑うような命令をさらりと告げ扉を閉めた。「ちょ——」

レイジが何か言いかけた瞬間——奥の部屋から爆音が聞こえた。

……その中で悲鳴や阿鼻叫喚も聞こえたような気がしたが、気のせいだと思いたい。

ワタルはすぐさま扉を開けて中に入ったので、自分もその後が続いたのだが……。

「うわー……」

へこ、これは……凄まじいと言いますか、エグいと言いますか……

おもわず、げんなりとした声を出してしまった。

奥の部屋は広く、おそらく倉庫だったのだろう。

しかし、周りに倒れているのは黒い服を着た男女の群れ。

全員が同じような服装なので、これがロケット団の制服なのだろう。しかし……先程ワタルのポケモン達が一斉に放ったはかいこうせんにより、ポケモンを出す間もなく気絶させられている。

何体かは外に出ていたのだが、そちらも例に漏れず全員戦闘不能。

哀れというより、可哀想だと全力で同情したくなった。

「数ではこちらが不利だからね、こういった奇襲を用いらなきゃとてもじゃないけど勝てないよ」

あっけらかんとそう言い放つワタルだが……なんだか彼が破壊神のように見えてしまうのは、自分の心が廃れているせいなのだろうか。やっぱりチャンピオンという存在は、色々な意味でどこか普通ではないと思った瞬間だった。

それにしても――ワタルの連れているポケモンはどれも凄い。

ボーマンダにリザードン、ガブリアスにカイリユウ等、そうそうたるメンバーだ。

さすがチャンピオンは違うということか。

だが……人に向かってはかいこうせんを放つとは……ちょっと目の前の青年が恐くなった。

しかもどのポケモンもデカイから、たとえば部屋が広くても狭く感じ

てしまう。

それはワタルも同じ気持ちなのか、リザードン以外のポケモンを全て戻した。

「さあレイジくん、先を急ごう！」

「はい」

……正直、自分はいらないんじゃないかと思ったが、そういうツツコミは野暮だと思いやめた。

気絶している団員達を尻目に、部屋を出て先を急ぐ。

すると、あれで全てではなかったらしく、正面から数人の団員達はこちらに向かってモンスターボールを投げてきた。

出されたのは、ズバットとラッタとアーボ。

「リザードン、はかい——」

「ティナ、サイコキネシス!!」

ワタルの声を遮って、ティナを場に出すと同時に指示を出す。

ボールから飛び出すと同時に、ティナのサイコキネシスが展開され三匹が宙に浮く。

「そのままとめてでんげきは」

動けなくなった三匹にでんげきはが命中し、一撃で全てのポケモンが戦闘不能に陥った。

(……………速い)

指示の速さ、そしてポケモンの技の強さ、そのどちらも賞賛に値するものだ。

「な、なんだこのガキ……強すぎる!!」

予想外の強さに、団員達は驚愕に満ちた声を上げるが、レイジとしてみたらあなた達が弱いのだと言ってやりたかった。

ポケモンをまともに育てていないし、指示を出すのも遅すぎる。

おそらくバトルに慣れていないのだろう、付け焼き刃では彼に通用するはずがない。

「ありがとうティナ、じゃあ行くよ!」

〈ストップ!!〉

再び走り出そうとしたのだが、何故かティナによって止められる。

「ティナ?」

彼女を見ると、あからさまに不機嫌そうな表情を浮かべている。

一体どうしたというのか、首を傾げていると。

〈……アクセルには頭を撫でたのに、私にはしてくれないの?〉

なんとも可愛らしい不満の声が聞こえてきた。

「ティ、ティナ……」

今はそんな場合じゃないんだけど……そんな言葉が喉元まで上がってきたが、言ったらますます唇を尖らせるので仕方なくしゃがんで彼女の頭を撫でてあげた。

〈えへへ……〉

嬉しそうに笑みを浮かべるティナを見て、つつい口元が緩んでしまう。

「はい、おしまい」

〈やだ、もっと〉

「ティナ、今はそんな事をしてる場合じゃ」

〈じゃあもう戦ってあげない〉

「むっ……」

今日の彼女はなんだかワガママだ。

いつもはこんな風にならないというのに、一体どうしたというのか。

(しょうがないな……)

ボールの中からヒカリを取り出し、ティナを抱きかかえ頭を撫でながら走り出す。

〈わーい！〉

「もう……今回だからね？」

〈はーい！〉

本当にわかっているのだろうか、ニコニコと笑いながらなのでいまいち信用できない。

そう思っていると、いきなり頭部に重みを感じた。

「ちょ、ヒカリ？」

ヒカリがレイジの頭の上に乗ったのだ。

重くはないが、彼女の意図がわからず問い掛ける。

「ちょっとヒカリ、どうして僕の頭に乗るの？」

いつもの光景と言えばそこまでだが、今は状況が状況だ。

それはティナとヒカリとてわかっているはずなのに……。

——ティナばかりズルいよ！ ピカもレイジに甘えたい！！

ティナもヒカリも、レイジの思っている以上に子供だったようだ。

「いや、けどさ……」

——ティナは許してピカは許さないの？

「うっ……」

そう言われてしまえば、もはやレイジに反論の余地はなく。

「……わかったよ。でも向こうが襲いかかってきたらちゃんと戦ってね？」

呆気なく折れてしまった。

だが仕方がない、ポケモンという存在にはとことん甘いのがレイジという人物なのだから。

「一体どうしたんだい？そのキルリアとピカチュウは何て言っているんだ？」

「……いえ、なんでもありません」

さすがに今の会話を教えるのは恥ずかしいし、情けない。

適当に誤魔化しながら、レイジは先に急ぐ事にした。

両手でティナを抱え、頭にはヒカリを乗せながら……。

……。

「――大分進みましたけど、一体どれくらい居るんでしょうか？」

都合五十人は超える団員を倒してきたが、どれも下っ端ばかりで幹部クラスの人間が見当たらない。

ここには初めから居なかったのだろうか……そんな考えが頭をよぎる。

それに自分とはもなく、ティナ達には僅かながら疲れの色が。

当然だ。トレーナーである自分が指示を出すとはいえ、実際に戦うのは彼女達なのだから。

対するワタルのポケモンはまったく疲れの色を見せていない。

鍛え方が違うのか、そう思うと少し悔しいと感じてしまう。

「レイジくん」

立ち止まり声を掛けるワタルに、レイジも立ち止まった。

そして、彼はおもむろに目の前の扉を開く。

「――あら。さすが坊やとチャンピオンのコンビね。もうここまで来るとは思わなかったわ」

中から聞こえた女性の声を聞き、レイジはおもわず身体を強ばらせる。

——忘れるわけがない

この声は、かつてクチバでラティアス——カノンを捕らえようとしたロケット団である、フレアのものだ。

「——なるほど、君達は違うようだ」

先程とは違い、どこか余裕の色を見せなくなったワタル。

中に入ると、そこにはフレアだけでなく——同じくクチバで戦ったマードという名の青年の姿も。

「チッ、使えねえ部下達だな」

「そう言わないの。この2人が相手なら分が悪すぎるわ」

「……………」

視線を相手に向けながらも、自分達の状況を確認する。

部屋の中はさほど広くはなく、所々に物が置かれている為小柄なポケモンでないと素早く動く事はできないだろう。

だが——それよりもレイジは、フレア達の後ろにある大型の機械の方が気になった。

ゴチャゴチャとパイプや器具が所狭しと付けられた謎の機械。

だが――何だろうこれは。

ただの機械、目的やどういったものなのかはわからないが、酷く不快なものに見えた。

あれはあつてはならないもの、この世に存在してはならないものと、内なる自分は訴えかける。

だから、レイジはすぐさま自分のポケモン達に指示を出した。

「アクセル、はどうだんであの機械を壊すんだ！」

「なっ――！？」

「っ、チィ――！」

レイジの指示を聞き慌てて機械を守ろうとする2人だが、既にアクセルの攻撃は止められない。

放たれるはどうだんは、まっすぐ奥にある機械へと向かっていき――爆音を上げて粉々に碎け散った。

飛び散る破片、だがその中であるものがレイジの足元に落ちてきた。

それは、漆黒の禍々しいモンスターボール。

「これは……………！」

間違いない、あの時バンギラスとハガネールが入っていたモンスターボールだ。

それがあの破壊した機械から出てきたということは……。

「――やってくれるじゃない坊や。もしかしてそのデッドボールの存在を知っていたの？」

「デッドボール……このモンスターボールの名前か！」

「……もしかして、知らずに破壊したというの……？」

「そんな事はどうでもいいだろフレア、このガキ……ナメた真似を」

「待ちなさいマード、確かに破壊されたのは誤算だけど、別にこのデッドボール製造機はこれだけじゃないわ。

だからそんなに怒る必要はないわよ」

やはりこのモンスターボールはあの機械で造られていたようだ、不快感を感じた理由がこれで理解する。

「一体これは何だ？ 普通のモンスターボールじゃないようだが……」

「そうね。ここまで来た坊やとチャンピオンに敬意を証して特別におしえてあげる。

これはデッドボール、ロケット団が開発した特殊なモンスターボールよ」

「特殊な、モンスターボール……？」

「そう。このボールで捕らえたポケモンはデッドポケモンと化し、

理性を失い痛みも感情も失う狂戦士になるの。

死ぬまで戦う究極の兵器、それを作る事ができるのがこのデッドボールなの」

「なんてひどい事を……ポケモンを何だと思っているんだ!!」

あまりの発言に、ワタルは怒りを露わにするが、フレアはまったく悪びれた様子もなく言葉を続ける。

「我々にとってポケモンは道具よ。それ以上でもそれ以下でもない。だから罪悪感を抱く必要もないし、私達はこれが罪だとは思わない。」

道具だと思ってる存在に、どうしてそんな感情を抱かないといけないのかしら?」

「――――」

言葉が、出ない。

目の前の彼女の言っている事が、よく理解できない。

あまりにも酷すぎる言葉に、同じ人間なのかと本気で思ってしまった。

ポケモンは道具だと、自分達にとって苦しもうが傷つこうがそれこそ関係ないと。

そんな事を言う彼女が、本当に人間なのか疑わしくなった。

怒りよりも、憎しみよりも悲しみの感情がレイジの内側に溢れてい

く。

「――どうして、そんな顔をするの？」

「えっ……？」

「今にも泣きそうな顔になってるわよ、坊や」

「……………」

だって、仕方ないではないか。

確かに怒りはある、絶対に許さないという気持ちも存在する。

だがそれでも――彼女達が可哀想だと思ってしまったのだ。

ポケモンを愛せない事が、ポケモンを道具だと思ってしまう事が、レイジにとってこんなにも悲しい。

「……不思議な坊やね、あなたは今私達に同情してる。

ポケモンに対して深い愛情を抱いているあなたなら、私達を憎むかと思ったのに……」

そう呟きながら、フレアは懷からモンスターボールを取り出す。

だが、それはただのモンスターボールではなく、先程アクセルが破壊したデッドボール――！

「多分時間稼ぎにしかないけれど、私達は一応幹部だから捕まるわけにはいかないの」

「待て——！ リザードン、弱めのかえんほうしゃで彼女達を止めろ！」

指示を受け、かえんほうしゃをフレア達に放つリザードン。

だがそれを避け——デッドボールが投げられる。

「さよなら坊や。また会いましょう」

「逃がさない——！」

すぐさま追い掛けようと地を蹴り——悪寒を感じて飛び退いた。

瞬間、自分が通ろうとした地面に鋭利な刃物で斬りつけたかのような傷跡が生まれる。

急ぎそちらに視線を向けると……。 「——アブソル」

そこには、わざわざポケモンと呼ばれる存在であるアブソルが。

殺気立った瞳を、レイジ達へと向けていた——

第22話　く災厄のデッドポケモンく

殺気——ただそれだけしか目の前のポケモンから感じ取る事ができない。

殺すという明確な意志、口で直接告げられるよりも強い感情。

それを感じ取り、レイジはすぐにでもここから逃げ出したい衝動に駆られてしまった。

「——っ」

だが逃げない、逃げるわけにはいかないと歯を食いしぼる。

「アクセル、踏み込んでバレットパンチ!!」

へっ、は——!!」

一息で踏み込み、バレットパンチを叩き込むアクセル。

その隙にレイジは残り3つのモンスターボールを取り出し投げる。

「ガ——ッ!？」

「っ」

呻き声は、アクセルの口から。

身体をくの字に曲げ、周りの物を巻き込みながら壁に叩きつけられ

る。

（アクセルのバレットパンチを避けた——！？）

更にあまつさえ反撃をするなど、やはりデッドポケモンという存在は驚きばかり与えてくる。

「ガアアアッ！！」

雄叫びを上げ、大きく口を開くアブソル。

「リザードン、かえんほうしゃだ！！」

「リオン、かえんほうしゃ！！」

放たれるふぶきを、かえんほうしゃで迎撃する。

2対1ならば、相手のふぶきを押し戻す事が――

「な――」

「――に！！？」

驚愕は、レイジとワタルの口から放たれる。

ワタルのリザードンとレイジのリオンによるかえんほうしゃ。

それを――アブソルはたった一体で相殺したのだ。

自分だけならまだわかる、だがチャンピオンであるワタルのリザー

ドンの攻撃まで相殺させるなど正気の沙汰では。

「っ、レイジくん!!」

「ティナ、リフレクターだ!!」

ワタルの声と、レイジの指示が放たれたのはほぼ同時。

瞬間、アブソルの口から放たれるはかいこうせんは、レイジ達全員を巻き込みながら部屋を壁を破壊する。

〈いった……〉

「くっ……ティナ、大丈夫？」

後ろから聞こえるレイジの声に振り返り——ティナは言葉を失った。

〈お父さん!!?〉

壁に叩きつけられ、頭から血を流しているレイジ。

そこでようやく、ティナは自分の身体がレイジに庇われている事に気が付いた。

〈お父さん、私のせいで……〉

「違うよ。ティナのせいじゃないから。

それより——油断しないで」

頭から流れる血を乱暴に拭いながら、身構える。

土煙で見えないが、いつアブソルが襲いかかってくるかわからない以上、警戒を消すわけには。

「来るぞ!!」

ワタルの声に反応し、レイジは再び指示を出す。

「アクセル、はどうだん!!」

土煙から現れたアブソル目掛けて、はどうだんが放たれる。

それを避け、まっすぐレイジの喉元へと飛びかかるアブソルだが。

「リザードン、ほのおのうず!!」

横から現れたほのおのうずによって、アブソルの身体は壁へと叩きつけられた。

「ティナ、サイコキネシス!!」

すかさず攻撃を仕掛け、ティナのサイコキネシスがアブソルの身体を宙に浮かした。

「ヒカリ、自分にかみなりだ!!」

手は抜けない、そしてできるだけ傷ついてほしくない。

だから、なるべく少ない攻撃でアブソルを弱らせようと勝負に出た。

怒りに身を任せ、手当たり次第にはかいこうせんを放ち辺りを破壊していくアブソル。

（ごめんアブソル……でも、すぐにポケモンセンターに連れて行って治してあげるから……！）

自分のかみなりを受け、黄金色に輝くヒカリ。

「今だヒカリ、フルパワーでボルテッカー！！」

「リザードン、フレアドライブだ！！」

後ろからはリザードンのフレアドライブ。

そして正面からはヒカリのボルテッカー。

サイコキネシスで動きを止められたアブソルに回避する術はなく……
…凄まじい衝撃を受け壁に身体をめり込ませ、沈黙した。

……………。

「は、あ……」

大きく息を吐き、戦いが終わった事に安堵する。

みんなダメージを受けているようだが、無事のようだ。

「レイジくん、大丈夫かい？」

「はい……僕は大丈夫です」

だが……アブソルを傷つけてしまった。

戦わなければこちらが殺されていた、それはレイジとてわかっている。

しかしそれでも、罪のないアブソルと戦い傷つけてしまったという事実は、レイジの心に傷を残した。

「…………アブソル」

壁から地面に落ち、倒れているアブソルに近づく。

今は一刻も早くポケモンセンターに連れて行き、治療をしなくては。

自分の身体を省みず限界以上の力を使い続けたのだ、目に見えなくてもアブソルの身体はボロボロになっている。

だから、すぐさま運び出そうとアブソルに向かって手を伸ばし――

何か、強い衝撃が、肩から腰に向かって、響き渡った。

「――――」

赤い。

自分の視界が、赤く染まっている。

目の前には、返り血で赤く染まったアブソルの姿。

だが、自分の、今の、状態、は……。

〈お父さん!!!!〉

〈ち、父上!!!〉

後ろで、悲鳴じみたティナ達の声が聞こえた。

けれど、振り返る事などできずにその場に座り込んでしまう。

「あ、ぐ……………!!」

痛い、そんな感覚など消し飛んでしまうほどの痛みがレイジの右肩から腰にかけて走る。

——あの時、アブソルに近づいて

その鋭利な鎌のような角で、バツサリと斬り裂かれたのだ。

地面は鮮血で赤く染まり、傷口から頭が茹だるような熱が生まれる。

「アブ、ソル……」

だというのに——レイジは尚もアブソルに歩み寄ろうと手を伸ばした。

まるで自分の傷など知らぬと言わんばかりに。

「グッ……アアアアアアッ！！！！」

苦しげに叫び、真上に向かって口を開くアブソル。

瞬間、アブソルの口から放たれたはいこうせんが天井を突き破り――月の光が差し込んできた。

「っ、いけない――！！」

ワタルの声と同時に、アブソルの身体が消える。

跳躍し、自らが開けた穴から外へと飛び出したのだ。

「テイ、ナ……そ、外にテレポートだ」

へそんな事より、その傷をなんとかしないと！

この間にも失血は続き、このままでは命に関わりかねない。

だが、レイジは自分の怪我よりもアブソルの事を心配する。

「僕達が止めないと……アブソルが死んでしまうから……」

へでも……！！

「急いで！！」

ティナの言葉を遮り、レイジが叫ぶ。

……ダメだ、このままでは埒が明かない。

それに一度彼を外に出さなければならぬのは事実なのだ、そう思いティナはテレポートの準備を始め。

程なくして、その場にいる全員の姿が消えた。――外に出た瞬間、聞こえたのは爆発音と人々の悲鳴

「くっ、あ……」

痛みに耐えながら、ゆっくりとその場に向かおうとするレイジ。

それを、ワタルが無理矢理止めた。

「もうこれ以上は動くんじゃない!! 君は今自分の身体がどうなっているのかわかっているのか!？」

「――知らない。そんな事はどうでもいい」

肩を掴むワタルの手を払いのけ、レイジは進む。

「なん、だって……?」

「今、この瞬間にもあのアブソルは苦しんでいるんだ……傷つけたくない、苦しみたくないって悲鳴を上げてる。

だから、それを、止めて、あげない、と」

ふっと足から力が抜け、片膝をつく。

〈父上!!〉

「うつ、ぐ……」

荒くなる息を抑えきれず、脚に力が入らない。

「……行かないと。アブソルを、止めない、と……」

謔言のようにそれだけを繰り返すレイジに、ワタルは恐怖を感じた。

これだけの大怪我を負っているというのに、自分の事よりもポケモンの事を心配するなど……正気なのかと問いただしたくなる。

「は、あ、う……」

服は自らの血で真っ赤に染まり、意識が何度も断裂しかけるが、それでも彼の歩みは止まらない。

そして、ようやくアブソルの元へと辿り着いた。

暴れまわり、周りに被害をもたらすアブソル。

だが、そんなアブソルの周りにはトレーナーが立ち、ポケモンを出していた。

アブソルを止めるためだろう、だがそんな事はさせられない。

「アブソル!!」

レイジの声に、アブソルだけでなく周りにいた全員の視線が彼に向けられた。

「レ、レイジ!？」

「お、お前どうしたんだよその怪我は!？」

中にはカグヤ達の姿もあり、レイジのボロボロな姿を見て驚愕の声を上げていた。

それには構わず、脚を引きずりながらも少しずつアブソルに向かっていくレイジ。

近づくなど言わんばかりに、ふぶきを放つアブソル。

それは無防備なレイジへと向かっていき――リオンのかえんほうしやにより相殺された。

「……リオン」

――お前、死にたいのか？

怒りと困惑を混ぜたような表情で、リオンはレイジを睨む。

「そうじゃない。でもアブソルを止めないと……」

――馬鹿かお前は、アブソルの事より自分の心配をしやがれ!!

唸り、責め立てるような口調でリオンは言う。

……わかっている、けど同時にこれ以上アブソルを傷つけたくない
と思ってしまったのだ。

その瞬間から、レイジの中での優先順位は変わってしまった。

アブソルを助ける——今はそれしか考えられない。

だって、仕方ないではないか。

こうしている間にも、聞こえてしまうのだ。

苦しいと、痛いと訴えてくるアブソルの声が。

そんな事を聞いてしまった以上、自分の身体など二次だ。

だから、自分の馬鹿さ加減などとうに理解していながら、レイジは再びアブソルに歩み寄った。

「グガアッ!!」

「っ、ぐ——……!!」

肩に激痛が走る。

噛まれたのだ、それもそのまま食い千切らんとばかりの強さで。

「レイジ!!」

「来るな!!」

こちらに駆け寄ってくるカグヤ達を制し、痛みで薄れゆく意識をかき集めながら……レイジは、安心させるようにアブソルの頭を優しく撫でる。

「――お願いだ。もう……これ以上自分自身を傷つけないでくれ。君だって、本当はこんな事望んでいないんだろう……？だから――ぐっ、もう傷つくのはやめてくれ……」

話す度に、刺すような激痛でかき集めた意識が再び薄れていく。

だが負けない、ここでアブソルをあんなふざけたボールの呪縛から解放してあげなくては、彼はここで殺される。

そんな事は許されない、何の罪のないアブソルを死なせるわけにはいかない。

「負けないで……あんな心を踏みにじるような道具なんかで、自分を見失っちゃダメだ。」

お願いだ、自分自身の為にも……負けたらダメだ！！」

叫び、力いっぱいアブソルを抱きしめる。

痛みも頭を侵す熱も、今はどうでもいい。

頭に占めるのは、アブソルに対する深い願いだけ。

そして――

「在るべき姿に還るんだ、アブソル！！！！」

魂からの願い。

その瞬間、誰もが目を疑うような光景が現れ始めた。

——光が、広がっていく

レイジとアブソルを包み込むように、だんだんとけれど確実に大きくなっていく光。

「これは……!?!」

その光景に、ワタルを始め全員が驚く事しかできない。

「っ、レイジ!!」

だが、その中でただ1人だけ。

——カグヤだけが、自ら光の中に向かって走っていく

「カグヤ!?!」

カイリが気づき急いで手を伸ばすが、間に合わない。

そして、カグヤの手がレイジの身体に触れた瞬間。

（————え？）

彼女の中で、不思議な感覚が生まれた。

……。

白。

見渡す限りの白一色。

視界は全て白で塗り潰され、五感全てが彼方に消えていく。

時間も、空間も、全てを超越した“何か”

それが何なのか彼女にわかるわけもなく、否、人という存在では理解しようとする事すらおこがましい。

そして、そんな正体不明の感覚の果てにあったものは——彼の心、彼の内側。

今まで一番近くに居たはずの彼が持っていた心は、真っ白だった。

何人にも汚されていない、真っ白なキャンバスのような心。

（これは……何？）

時間にして既に数分は経っているのか、時間という概念を失った今ではそれすらわからない。

僕は／私はだあれ？

（えっ……？）

突然響いた声。

少年と、もう一つの声は低く暗い人間離れたもの。

僕は／私は生まれた。

僕の／私の周りには何もない。

僕は／私はだあれ？

僕は／私は全て。

あらゆる時空、あらゆるものを作り上げた絶対神。

僕の／私の息吹は世界を作った。

僕の／私の血は生き物を作り上げた。

僕の。

私の。

僕の。

私の。

(――――)

なんだ。

なんだ、これは。

なんなのだ、この声と言葉は。

意味が分からない、理由も分からない。

ここは彼の心、決して見る事ができない彼の内側のはずだ。

それなのに、どうしてこんなわけのわからない声が――

(…………あ、れ?)

ちょっと待て。

どうして、自分はこの状況をあっさりと受け入れただけでなく、そんな風に言い切れる?

およそ現実離れた体験だというのに、何故こうも簡単に――

「……………」

ふっと、唐突にカグヤは現実に戻った。

目の前には呆けた表情を浮かべたレイジと、そんな彼にうなだれるように倒れているアブソルの姿が。

(今のは…………?)

夢、ではない。

こうしている今だって先程の言葉が脳裏に焼き付いて離れない。

あまりにも現実離れしていると同時に、あまりにもリアル過ぎた光景。

自分は今、一体何を見ていた…………?

「レイジ!」

間の抜けた表情で向かい合っている彼等に、カイリは悲鳴に近い声を上げレイジに駆け寄る。

「い、一体何がどうしたっていうんだよ!？」

お前、その怪我っていうか……まずは病院に行かねえと!!
っていうか、なんでアブソルがここにいるんだ!？」

「落ち着きなさいバカ、とにかくレイジを病院に運ぶわよ。

カイリユ、あなたはアブソルをポケモンセンターに運びなさい」

カイリユをボールから取り出し、指示を出すヒメカ。

こくりと頷き、軽々とアブソルを抱えるカイリユ。

「アブソルの事はボクが見ておこう。とにかくレイジくんを病院へ
!」

「……………」

テキパキと周りから指示が飛び出す中、レイジとカグヤの2人だけが。

(今のは……)

(何だったんだ……?)

先程の感覚に、ただひたすら戸惑っていた。「——なるほど、事情はよくわかった」

身体中包帯だらけになったレイジを見下ろしながら、カイリは冷め

た視線でそう口にする。

その顔にはあきらかな不満が滲み出ており、それは隣に仁王立ちしているヒメカも同じだった。

だがそれも当然と言えよう、勝手に1人で危険な場所へと赴き、血だらけ傷だらけになったからだ。

「そんなに俺達が頼りないのか？」

「そ、そういうわけじゃないけど……」

「もし「危険な目に遭わせるわけには……」なんて思ってるならとんだお門違いよ。

わたし達はあなたを大事な仲間だと思ってる、だからそんな風に1人で抱え込んで嬉しいと思うの？」

「うっ……」

ズバズバと告げられ、もはやレイジに反論する力はない。

けれど——そう言ってくれるのは素直に嬉しかった。

自分を心配し、そして怒ってくれる。それが本当に嬉しい。

「……ごめん。もうこんな勝手な事はしないって約束するから、許してくれないか？」

だから、素直に頭を下げる。

「しょうがねえな。だけど次はねえぞ？」

「仕方ないわね。けど次はないわよ？」

同じ事を言われてしまった。

「話は終わったかい？」

見計らったかのようなタイミングで、ワタルが病室に入ってきた。

「ワタルさん……」

「ひどい格好だね……けど君が無事でよかったよ」

「ありがとうございます」

「うわぁ……本当にチャンピオンだ……」

「シロナさんといい、凄い遭遇率よね……」

たしかに、そう同意せざるおえない。

「君が協力してくれたおかげで奴らの基地を破壊する事ができた。
それに……実験台にされていたポケモン達も救出する事ができた
よ」

「……そうですか」

その言葉に、心の底から安堵する。

「しかし……ロケット団っていうのは本当にろくでもない連中だない!!」

カノンの時といい……絶対に許さねえ!!」

「それにデッドポケモン……ポケモンを兵器のようにするなんて……!!」

カイリもヒメカも、ロケット団の行いに怒りを隠す事ができない。

「レイジ、次にロケット団と戦う時は必ず1人で先走るなよ!!」
あいつらを許せねえのは俺だって同じなんだからな?」

「わかってるよ」

一応許してはくれたようだ、これにて一件落着……。

と、言いたい所だが。

「……あの、カグヤ?」

さっきから黙っているカグヤの事が気になってしょうがない。

「あっ……な、何?」

「どうしたの?」

「う、ん……なんでもない」

あきらかになんでもないわけがないのだが、詮索をしないでほしい
雰囲気を感じ取り、その場に居た誰もがこれ以上彼女に問いかける

事はやめた。

「――さてと。それじゃあボクは失礼させてもらうよ。」

レイジくん、本当にありがとう。次に会う時はセキエイリーグになりそうだね」

「はい」

「カイリくん、ヒメカくん、カグヤくん、君達のような素晴らしいトレーナーがセキエイリーグに来る事を楽しみにしているよ」

「は、はい!!」

「ありがとうございます」

「……………」

「…………カグヤくん？」

「ふえ…………あ、はい」

「…………ちよつと、本当に大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だよ」

あははー、と誤魔化しながら笑うカグヤ。

…………やはり先程から様子がおかしい。

だが、何度も大丈夫と連呼するカグヤに誰もそれ以上は何も言わな

かった。

.....。

「――どうしてこうなった？」

おもわずそう口に出してしまった。

時刻は夜、カイリもヒメカもポケモンセンターに戻り今頃は眠っているかゴロゴロしているか。

レイジも病室で眠りに就こうとしたのだが……仰向けになりながらおもわずツツコミを入れてしまう事態に陥っていた。

何故か？ それはまあ仕方ないかもしれない。

「――カグヤ。本気で一緒に寝るの？」

「うん」

そう、何故かレイジのベッドの中にはカグヤの姿が。

「罰ゲームだよ」

とは彼女の弁だが、まったくもって意味が分からない。

一体どこをどうしたらこれが罰ゲームになるのか、相変わらず彼女の考えている事はよくわからない。

「……だってこうしたら、レイジが勝手にいなくなったりしないでしょ？」

「……………」

ぽつりと呟かれたその言葉で、レイジは何も言えなくなってしまった。

……心配させてしまったのだ、その上での行動ならば咎める権利はレイジにはない。

だから、もうこれ以上は何も言わずに目を閉じる。

「……………ねえ、レイジ」

暫くして、カグヤはふと口を開いた。

「何……………」

「私、ね……………」

「……………うん」

……何を言うかくらい、レイジはわかっている。

あの現象——彼女が自分の心に直接触れたような感覚。

それが何なのか、カグヤはレイジに問い掛けようとしているのだろう。

だが——カグヤは口を開いたり閉じたりと繰り返し、一向に話を進めようとはせず。

「——ごめん。なんでもない」

それだけ言って、彼の胸に顔を埋めてしまった。「……………」

正直、問われなくて良かったと安堵する。

問われても答えられない、レイジとてあの現象がなんだったのかわからないからだ。

不可解な現象、ポケモンと話せるというおよそ普通ではない能力を
持っているながらも、理解できないものだった。

一体あれは何だったのだろうか。

不思議なもので、不快感はなかった。

——結局、そんな事を考えていたらすぐさま眠気が訪れ

怪我の事もあるのか、あつという間に意識がまどろみの中に消えていき。

無意識だったのか、カグヤの身体を抱きしめながら、レイジの意識は闇へと消えた——

第23話　くVSエリカ全力のジムリーダー戦！（前編）く（前書き）

今回は前後編になります。バトルオンリーって難しい！！

第23話 〽VSエリカ全力のジムリーダー戦! (前編) 〽

『たのもー』

「……あなた達はもう戦ったじゃない」

「通過儀礼みたいなもんだから気にするなよ、ヒメカ」

「気にするわよ……」

疲れたようなため息をつくヒメカだが、とりあえずそれをフォローする気分にはなれない。

——怪我が治り、今はタママシジムに居る

用件はもちろんジム戦を行うため、ポケモンリーグに出場する為に必要なバッジを手に入れるためだ。

「いらっしゃま……あら、皆さん」

相も変わらず穏やかで優しい笑みを浮かべながら、挑戦者であるレイジを迎え入れてくれたエリカ。

「こんにちは、エリカさん」

「こんにちは。……この間は大活躍だったそうですね、レイジさん」

「いえ、別に……」

「謙遜しなくても、あなたはこの街の人達を救ってくださったじゃないですか？」

「いえ、それはあくまで結果論ですから……」

「かてーなレイジ、もっと胸張ったっていいじゃねえか。まあヒメカほど胸を張るのは――ぐはっ!!」

「すみません。このスケベを拷問……いえ、教育してきますので失礼します」

（今、拷問って言ったよな……）

「はい。いつてらっしゃいませ」

（さらりと流した……）

一礼し、気絶しているカイリをズルズルと連れていくヒメカ。

哀れカイリ、だが自業自得なので助けてなどやらないぞ。

「さて……レイジさんがここに来たという事は、バッジを賭けたバトルですね？」

「はい。お願いできますか？」

「もちろんです。それにカグヤさん達が口を揃えて「強い」と評価していたレイジさんとバトルしてみたいと思っておりましたので」

（……そんな事を言ってたのか）

余計なプレッシャーを作るんじゃない、そう言わんばかりの視線を向けるが、よくわかっていないのかカグヤに首を傾げられてしまった。

……仕方ない、なんだか手加減してくれなさそうな感じがするが、諦めるとしよう。

それに——自分とて負けられない。

必ず勝つ、そう決めたのだから。

……。

「使用ポケモンは三体、交代は挑戦者のみ認められます」

草タイプらしく緑溢れたフィールドが現れ、所定位置に立つ。

「レイジー、頑張ってね!!」

「……あなた、まだその衣装持ってたの？」

そう言いながら、ヒメカはいつかの時のようなチアガール姿のカグヤを見つめる。

「応援といったらチアガールじゃない？」

「あながち間違っではないけど、周りの視線が微妙だから着替えて

くれない?」

「えー……やっぱりチアガールじゃなくて巫女服とかの方が良かったのかな……?」

「そういう意味じゃなくて……もういいわ、好きに応援してなさい」
もうツツコミを入れるのも疲れた。

それにレイジとエリカのバトルを見て参考にする事の方が重要だ。

「ところでカイリは?」

「二、三十発ほどボディーに叩き込んだから暫く目を覚まさないわよ」

……さすがに可哀想に思えた、もちろんフォローはしてやらないが。

「でもさヒメカ、どうしてカイリにはあんなに怒るの?」

「なんでって……セクハラされたら怒るに決まってるじゃない」

「でも男の子って女の子の身体に興味を持つちゃうものでしょ?」

「そういう問題じゃないの……」

ダメだこの娘御は、本当に自分と同じ歳なのかと疑いたくなる。

「でもヒメカのおっぱいってプリンのほったみたいに気持ちいいから、カイリも触りたいんじゃない?」

「これ以上言ったら本気で怒るわよ？」

マジな殺気を向けられ、カグヤはおとなしくレイジの応援に回った。

……どうしてカイリに対してはあんなにも怒るのか、そんなの決まっているではないか。

（カイリのバカ……）

「それでは参ります」

「はい。お願いします！」

両者共にモンスターボールを構える。

「ウツボット、行きなさい！！」

「ティナ、お願い！」

まったくの同時にフィールドに出されるポケモン達。

エリカはマダツボミの最終進化系であるウツボットを。

そしてレイジは——意外にもティナを場に出す。

「リオンじゃないね？」

てっきり炎タイプのリオンを出すと思ったので、少し驚いた。

「でもティナだって草タイプに有利な技をいくつか持ってるわよ」

ティナはエスパータイプのポケモンだが、大抵の相手には有利な技を持っている万能型だ。

「ティナ、最高のパワーで戦って」

へうん。わかったよお父さん、でも……本当にいいの？

「キルリアになった君なら耐えられるはずだよ、そのサイコパワーに」

へ……うん、頑張る

「……………」

レイジとティナのやりとりを聞き、眉を潜めるヒメカ。

（今の会話……なんかおかしいわね）

レイジはティナに本気で戦えと言った。

別に言葉の意味にはなんらおかしい所はない。

だが、レイジがティナにわざわざ「本気で戦え」などと言ったのは初めてだ。

それではまるで、今までティナは全力を出していないという事に――

「ウツボット、つるのムチ!!」

先手をとったのはエリカ、ウツボットのつるのムチがティナを捕らえようとして。

「え——」

瞬間、ウツボットの正面にいるはずのティナが、何故か背後に現れ。

「——れいとうパンチ」

無防備な背後から、ティナのれいとうパンチがウツボットを吹き飛ばし。

一撃。たった一撃でウツボットを戦闘不能に陥れた——

……。

その場にいる誰もが、今のバトルで何が起こったのか理解できない。

いや、ティナが何をしたのかはわかる。

まずテレポートでウツボットの背後に回り込み、れいとうパンチを叩き込んだ、ただそれだけ。

だが——その速さは並ではなかった。

今まで何度か道中でレイジとバトルした事があるカグヤとヒメカでさえ、ティナの速攻には目を見開く事しかできない。

ウツボットが弱いわけではない、ティナが強すぎるのだ。

「ティナ、身体の調子はどう？」

「へーうん。大丈夫、ようやく全力のサイコパワーに耐えられるようになったみたい」

「よかった……」

ティナの言葉を聞き、安堵のため息をつくレイジ。

「――ティナのサイコパワーは通常のキルリアよりも遥かに強大だ

故に今までは力をセーブしてバトルをしていたのだが、この旅で成長したおかげでようやく全力のサイコパワーをコントロールできるようになったようだ。

「……審判さん。わたくしのウツボットは戦闘不能ですわ」

「あ……ウ、ウツボット戦闘不能……！ キルリアの勝ち……！」

エリカの言葉にようやく我に帰った審判が、試合を続ける。

「……本当に驚きましたわ。わたくしの予想が如何に甘かったのか思い知りました」

ウツボットをボールに戻しながら、エリカはレイジに賞賛を送る。

――瞬間、ジム内の雰囲気が一変した

(これ、は……！)

「やはりわたくしが間違っておりました。あなたのような強きトレーナーに本気で戦わないのは失礼極まりないですね。

——ですから、わたくしも本気で戦わせていただきます。

ジムリーダーとしてではなく、1人のポケモントレーナーとして
「！！」

その言葉を受け、全身が総毛立つ。

——ジムリーダーは挑戦者に対して特例がない限り本気で戦ってはならない

これはポケモン連盟が定めたルールの一つ。

つまりジムリーダーは強すぎる為に、挑戦者に対しては挑戦者用に調整されたポケモン達で戦わなければならないのだ。

そうしなければ、一流以上の強さを持つトレーナー以外では到底勝つ事はできない、それほどまでにジムリーダーという存在は強いのである。

しかし、エリカは本気で戦わざるおえないと判断した。

(まいったな……)

カスミの時といい、どうして自分の時はこんなにもジム戦で苦労しなければならないのか。

だが、もちろんそこに不快感や理不尽さは感じていない。

むしろ全力で戦ってくれる彼女に対して、感謝を。

「ティナ、相手は相当手ごわくなっただけど……僕達だって負けないよね？」

へもちろん！ 私だけで残り二体も倒してやるんだから！！」

気合い充分のティナに頷きを返す。

「では参ります。——行きなさい、ジュカイン！」

そう告げられ、エリカ側からフィールドに出てきたのはジュカイン。

「ジュカインって……シンオウ地方のポケモンじゃない……」

「ちょっと待って、今ポケモン図鑑で調べるから。

えっと……ジュカインはキモリの最終進化系みたい、それにしてもキモリの面影が皆無だね……」

「二回も進化すればそうなるでしょ。ポッチャマとエンペルトだって同じようなものだし」

「どれどれ……あつ、本当だ。ポッチャマはこんなに可愛いのにエンペルトになるとカッコよくなるね」

「……お、おーい……試合はどうなってるんだ……？」

腹部を抑えながら、カイリがようやく観客席に戻ってきた。

「カイリ、おそいよー」

「まったく、どこで遊んでたの？」

「いや……お前のせいだろヒメカ」

「あなたが一言余計なのが悪いのよ。それより早く座りなさい、試合に集中できないじゃない」

「ひでえ……」

嘆きつつも、言われた通り席に座るカイリ。

するとそんな主人を心配してか、カノンがモンスターボールから出てきてしまった。

もちろん、周りを驚かせないように人間形態で。

しかし、人間がモンスターボールから出てきた時点でかなり注目されそうなものだが、幸いにもこちらに視線を送る者はいない。

「マスター、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ありがとなカノン」

「いえ、他ならぬマスターの為ですから」

可愛らしい笑みを向けられ、カイリの顔が赤く染まる。

当然ながら、ヒメカはそれを面白くなさそうに見つめていた。

（こういうの、ドロ沼現場っていうのかな？）

そしてカグヤは、三人の様子を興味深そうに見つめていたとかなんとか。

「ティナ、サイコネシス！！」

先手を取り、ジュカインに向けて両手を突き出すティナ。

「右へ。回避後すぐさまリーフブレード」

だが、サイコネシスの軌道を完全に読んだエリカの指示により、ジュカインは一息でティナとの間合いを詰める。

「リフレクター！！」

へっ、きゃーっ！！！

すぐさまリフレクターで防御するが、その防御が突き破られフィールドの端まで吹き飛ばされるティナ。

体制を立て直し、すぐさま前方に視線を向けるが。

「――タネマシガン」

既にジュカインはティナの視界から消え、無防備な横から攻撃を仕掛けていた。

〈きやあああつ!!!〉

防御も間に合わず、まともにタネマシンガンを受けてしまうティナ。

「ティナ!!」

〈う、く……〉

立ち上がるものの、やはりダメージが大きいのかその表情は苦しそうだ。

「は、はええ……なんだよあのジュカイン」

「あれが、エリカさんの本気……」

「なるほど……確かに本気なんか出されたら並のトレーナーなんてまるで歯が立たないわね」

観客席のカグヤ達も、エリカとジュカインのコンビネーションに目を見開く。

「ティナ、シャドーボールだ!!」

両手を構え、漆黒の光球を撃ち出すティナ。

「エナジーボールです」

しかし、ジュカインから放たれたエナジーボールがそれを相殺させ、爆発する。

「っ、ティナ、避ける！」

視界を遮る煙をかき分け、ティナの眼前に現れるジュカイン。

既に相手はリーフブレードの攻撃態勢に入っている――！！

全力で地を蹴り、紙一重で攻撃を回避する。

「追いなさい」

しかし、すぐさま間合いを詰められリーフブレードによる連続攻撃がティナを襲った。

へく――わっ、きゃあっ！！！

どうにか回避していくティナだが、ジュカインの速さに身体がついていけない。

これでは後何手保つか……。

「アイアンテールです」

「っ、れいとうパンチ！！」

自身の身体を回転させながら、その反動を利用してのアイアンテールと、ティナのれいとうパンチがぶつかり合い――

へくぐ――っ！？

押し負けたのは――ティナの方だった。

(強い……………！)

速さだけでなく、ジュカインはパワーも兼ね備えている。

そのどちらも負けているティナでは、もはや勝ち目はないかもしれない。

それはレイジだけではなく、カグヤ達とて同じ気持ちだった。

だがそれでも——レイジとティナは最後まで諦めたりなどしない。

へまだよっ！　まだ私は負けてない！！！<

「その意気だよティナ、こごえるかぜ！！！」

ティナが左手を前に突き出すと、ふぶき程ではないにしろ雪を孕んだ風がジュカインに襲いかかる。

たまらず両腕を前で交差させ、こごえるかぜに耐えるジュカイン。

「続けてきあいだま！」

立ち止まったジュカイン目掛けて放たれるきあいだまだが。

「ソーラービームです」

こごえるかぜをその身に受けながらも、ソーラービームを放ち迫り来るきあいだまを粉々に打ち碎いた

それだけでは飽きたらず、多少威力が弱まったソーラービームがテナナへと迫る——！

「チャージビームで撃ち消して!!」

すぐさまチャージビームを放ち、相殺させる。

しかし、その隙にジュカインはティナとの間合いを詰めていた。

「ドレインパンチ」

「かげぶんしんだ!!」

間一髪、ジュカインのドレイパンチは分身のティナに当たり、地面を破壊するだけに留まる。

だが——エリカとジュカインの攻撃はまだ終わらない。

「終わりです。リーフストーム!!」

「何——!？」

拙い、
 そう思い急ぎ指示を出そうとしたが既に遅すぎた。

ジュカインの周りに数え切れない葉を含んだ竜巻が現れ、分身を含め全てのティナを捕らえる。

〈きやああああつ！！！！！！〉

苦悶の悲鳴を上げ、苦しむティナ。

そして――傷だらけになった彼女は、力なくフィールドへと飛ばされ倒れ込んでしまった……。

「……どうやら、そこまでのようですね」

ジュカインのリーフストームをまともに受けたのだ、立ち上がれるわけがない。

審判もそう思い、ティナの戦闘不能のコールを告げようとしたのだが――

「キルリア、戦闘――」

へま、まだ、よ……」

「なっ――!?」

驚き、目を見開くエリカ。

当たり前だ、リーフストームをまとも受けたというのに……ティナは、頼りなさげながらも確かに立ち上がったのだから。

「た、立ちやがった……!」

同時に、カイリの口からも驚愕の声が。

「……やっぱりティナは凄い………!」

「凄いなんてものじゃないわ、あれを受けてまだ立ち上がれるなん

て……」

勝利への執念か、それとも父であるレイジの為か。

いずれにしても、ティナの実力はまさしく本物と言える事だけは間違いないかった。

「――驚きました。ですがそんな状態ではまともに動く事もできないでしょう。」

ジュカイン、トドメのエネルギーボールです！」

リーフストームの反動でジュカインのパワーが下がっているが、それでも今の相手には充分過ぎる技だ。

そう思い、エリカは勝利を確信しながらエネルギーボールがティナに向かっていく光景を視界に収めながら。

へ――私とお父さんの、勝ちよ

息も絶え絶えになっているティナから、己が敗北する言葉を告げられた。

「え――――」

おもわず、間の抜けた表情を浮かべてしまうが、時既に遅い。

――ティナの姿が消え、瞬時にジュカインの後ろへと現れた。

「っ、ジュカイン――！」

「ティナ、デュアルナツクルだ!!」

エリカがジュカインの名を呼ぶのと、レイジが指示を出す声は同時だった。

すぐさま後ろに振り向くジュカインだが、ティナ懷に飛び込み。

——右手はれいとうパンチ

——左手はかみなりパンチ

異なる属性、異なる技を同時に展開し——ジュカインに叩き込んだ
!!

たまらず叫び、倒れはしないものの大きく吹き飛ばされるジュカイン。

「シャドーボール!!」

それに追い討ちをかけるかのように、シャドーボールを発射するティナ。

「避けなさい!!」

だがジュカインとて意地がある、吹き飛ばされながらもその逞しい右腕を使いどうにかシャドーボールの軌道から逸れ——

瞬間、己の敗北を確信した。

——シャドーボールを無理矢理回避したと思った時には

既に、自分の眼前にはティナが両手を突き出し。

「――ふぶきだあっ!!」

特大のふぶきによって、ジュカインは断末魔の叫びを放ちながらフイールドへと倒れ込んだ。

…………。

「――ジュカイン」

ジュカインは動かない、それは即ち――負けたということ。

「ジュカイン、戦闘不能!! キルリアの勝ち!」

審判の声と共に、観客席からはエリカを師事するトレーナー達からどよめきが起こる。

ジュカインが負けた、その事実は充分に驚愕に値するものだ。

そして同じく観客席に居るカグヤ達も、ティナの勝利に驚きを隠せない。

「な、なんであんなボロボロの状態から勝てたんだ……?」

「……もしかしたら、レイジとティナは初めからこれを狙っていたのかもしれないわね」

力を温存し、相手の大技に耐えてから残るすべての力を解き放つ。
博打に近い、まさしく一か八かの戦い方。

レイジらしくないといえばそうだが、今回の相手はそうのように戦わなければ勝てないと思ったのだろう。

「凄い……やっぱり、レイジは凄すぎるよ……」

素直に尊敬すると同時に、カグヤの中で若干の悔しさと劣等感が生まれる。

自分とて自分にできる限りの努力はしている、だが……本気のエリカとまともに戦えるかと言われれば、答えはノーだ。

だから、あんな風に互角に戦えるレイジが、羨ましいと思ってしまった。

「ティナ、頑張ったね」

へう、うん……も、もうまともに戦えないけど」

「充分だよ。それじゃあ後はみんなに——」

そう言いかけた瞬間、ティナの身体が光に包まれる。

〈これ………！〉

「進化だ……」

一瞬視界を覆い尽くすような眩い光がフィールドを包み――収まった時にはティナの姿は大きく変わっていた。

「……………ティナ」

背は自分と同じくらいまで伸び、人間の女性と限りなく容姿が似通っている。

胸元には三角の赤い突起物があり……………豊かな膨らみも存在していたので、慌てて視線を逸らした。

へ……………お父様、どうかなされましたか？

声は前とは変わらない、しかし口調は随分と柔らかく大人びたものになったようだ。

音もなく近づき、美しい手で頬を触られた。

「あ、う……………」

ちよつと待て、少し落ち着くんだ。

ティナはポケモンだぞ、なのにどうしてこんなにも緊張する？

大体彼女は様子がおかしい（原因は彼女だが）自分を心配してくれているだけだ、ならこんな風に挙動不審ではますます心配を掛けてしまうではないか。

「だ、大丈夫……………心配しないで」

声が裏返ってしまった。

しかし素直な彼女はそれで納得したのか、「よかった…」と言って離れてくれた。

「お疲れ様ティナ、ゆっくり休んでて」

へはい。ありがとうございます」

ニコリと微笑まれ、また顔が熱くなっていく。

だから落ち着け、彼女は自分にとって娘や妹みたいな存在だ。

いきなり容姿が変わったからといって、何を考えている。

必死に頭を振りながら、ティナをボールに戻す。

……まだバトルは続くのに、なんだか疲れてしまった。

（そうだよ。まだバトルは続くんだから……）

いい加減気持ち切り替えろ、彼女がもたらした勝利を無駄にしない為にも。

そう自分に言い聞かせ、レイジは再び視線を戦いの場へと向けた。

――死闘はまだ続く――

第24話 〽VSエリカ全力のジムリーダー戦! (後編) 〽(前書き)

前回の続きです、ちょっと短めになっちゃいました。

第24話 〽VSエリカ全力のジムリーダー戦! (後編) 〽

「あなたで最後です……お行きなさい、ダーテング!」

エリカ最後のポケモンはダーテング。

「ダーテング……あれはハウエン地方に生息するポケモンみたいだね」

「うわ……なんか凶悪な顔だな」

「あれも例に漏れず強そうだけど……」

果たして、レイジは何を出すのか。

レイジにはまだ二体ポケモンが残っているが、選択を誤れば負ける可能性も充分に考えられる。

そんな中、レイジが出したポケモンは。

「アクセル!」

(……やっぱり)

カグヤの予想通り、かくとうタイプであるアクセルを出してきた。

エリカも予想していたのだろう、その顔には焦りなどの色は見えない。

「アクセル、きあいだまだ!!」

すぐさま指示を出し、ダーテングにきあいだまが向かっていく。

「ダーテング、ふきとばしなさい!」

それを軽々と、手に持つ葉で吹き飛ばし、きあいだまはフィールドの地面を破壊し消えた。

「間合いを詰めて!!」

地を蹴り、一息でダーテングとの間合いを詰めるアクセル。

「とびひざげり!!」

〈ハッ——!〉

裂帛の気合いを込め、放たれるアクセルのとびひざげり。

それを、ダーテングは無造作な動きで回避する。

「きあいパンチ!!」

〈ハアアアアッ!!!〉

凄まじい速度で放たれるきあいパンチ。

それは間違いなくダーテングに命中——するはずだった。

〈なっ——〉

ひょいっと、本当に何気ない動きだけで、アクセルの攻撃が簡単に回避される。

力を込めていた為、完全に隙ができるアクセル。

それを――エリカが見逃すはずがなかった。

「ダーテング、メガトンキック」

へがは――っ!??

メキッと嫌な音を響かせながら、ダーテングの足がアクセルの腹部に深々と突き刺さる。

たまらず、小柄な身体のアクセルが宙に浮き。

「つばめがえし」

風切り音を響かせ、アクセルの身体を横一文字に薙ぎ払った。

「アクセル!!」

うつ伏せで地面に倒れ、レイジの声にも反応しないアクセル。

弱点であるひこうタイプの技を受けたのだ、アクセルのダメージは甚大だろう。

戦闘不能か――誰もがそう思った瞬間。

〈ぐっ、あ……〉

よろよろとおぼつかないながらも、アクセルはどうか立ち上がった。

「アクセル……」

へち、父上……僕は、まだ……た、戦えます

「……………」

どう見ても、戦えるようには見えない。

だがそれでも、レイジはアクセルの気持ちを汲み取り頷きを返す。

「はどうだんだ!!」

近距離ではこちらが不利だ、そう判断し遠距離戦に持ち込むレイジとアクセル。

はどうだんが放たれ、それは真っ直ぐダーテングへと向かっていくが。

「ふきとばしなさい」

エリカのその一言で、はどうだんの軌道は大きく逸れ地面を削り消え去った。

「くっ……」

「まだまだそのリオルは未熟です、確かにパワーだけならばわたくしのダーテングと同等かもしれませんが……それ以外の能力はまだまだ発展途上ですね」

容赦のないエリカの言葉に、レイジは反論を返す事ができない。

そう――アクセルはレイジの手持ちの中ではまだ未熟だ。

彼が努力家で毎日鍛錬を続けているといっても、それだけで本当に強くなれるわけではない。

戦いの駆け引き、間合いの詰め方、自身の戦況と相手の力量。

それらを全ては度重なる戦闘によって培われ成長していくものだ、しかしまだ彼の経験数は少ない。

だが対するダーテングの力量は、完全にアクセルを上回っている。

「ダーテング、勝負を決めなさい」

命を受け、はっぱカッターを繰り出すダーテング

「避けるんだ!!」

〈くっ……く〉

足に力を込め、どうにか四方八方から襲いかかってくるはっぱカッターを回避するアクセル。

しかし、それも一体いつまで保つか……足は震え見るからに苦しそ

うだ。

「あなをほる」

フィールドに頭から突っ込み、地面に潜るダーテング。

「勝負を仕掛ける気だ………！」

〈ど、どこに……〉

「アクセル、全力のインファイトを地面に向かって放つんだ!!」

「なっ——」

〈えっ——!!?〉

「僕を信じてくれ。アクセル!!」

〈は、はい!!!〉

正直、レイジの意図がまったく理解できない。

だが彼が信じろと言ったのならば、あれこれ考えずに行動に移るのみ!

〈オオオオオッ!!!〉

雄叫びを上げ、地面に目にも止まらぬ速さの拳を叩き込んでいく。

それはフィールドを破壊し、まるで地震のように揺らす。

そして――アクセルの拳が地面とは違う何かを捉えた。

「ダーテング!!」

アクセルの目の前に現れるダーテング。

だが、なんだか様子がおかしい。

地面を潜っていただけだというのに、苦しそうな表情を浮かべていた。

「まさか……………!!」

様子のおかしいダーテングに、エリカはようやく理由を突き止める。

へくっ……………!!」

苦しげに放たれたダーテングの一撃を、紙一重で回避する事に成功するアクセル。

――ダーテングの奇襲は上手くいくはずだった

あれだけのダメージを受けた相手ならば、まともに回避する隙も与えぬまま勝負を終わらせられるはずだったのだ。

しかし、先程アクセルが地面に放ったインファイト。

その凄まじい破壊力によってフィールドが揺れ、背後から奇襲を仕掛けようとしたダーテングの思惑は外れ、アクセルの正面に移動さ

せられたのだ。

それだけではなく、彼のインファイトを地面の中で数発受けてしまった。

エリカの指示を聞き地面から出たものの……ダメージがあった為に紙一重で避けられた。

すぐさま体勢を立て直そうとするダーテングだが、既に眼前ではアクセルがはどうだんの構えをとっており。

〈はっ———！〉

迷う事なくアクセルのはどうだんがダーテングを捉え、地面を削りながら吹き飛ばしていった。

（今だ………！）

勝負をつけるにはこのタイミングでしかない。

これを逃せば最後、アクセルに勝ち目などないのだから。

「アクセル！ 『テトラコンビネーション』だ！」

〈はい！！〉

片膝と両手を地面に置き、力を溜め始めるアクセル。

「テトラコンビネーション………？」

聞いた事などまったくない技だ、そんなもののポケモンの技であったかとカイリは首を傾げる。

「……レイジ、あれを使うんだ」

しかし、3人の中でカグヤだけが彼の心中を理解していた。

「カグヤ、その技は一体……」

「見てればわかるよ。……あれがレイジとアクセルにしかできない必殺技」

↑ — — — は — — — つ ↓

充分に力を込め、まるで推進剤を使ったかのような速さで、アクセルはダーテングとの間合いを一息で詰めた。

「ダーテング、タネマシンガン!!」

さすがといふべきか、吹き飛ばされながらもダーテングはしっかりとアクセルに照準を合わせ、タネマシンガンを射出する。

真っ直ぐ向かっていったアクセルには、到底避けられる攻撃ではない。

ハアアアアア——デヤアツ!!!

だが――アクセルはそのすべてを神速の速さで繰り出された拳で叩き落とす。

ただの拳ではない、あれは――

（バレットパンチ――）

「まだだ!!」

今度こそダーテングを守るものではなく、アクセルは吹き飛んでいる彼の背中に蹴りを叩き込み宙へと飛ばす。

（とびひざげり――）

それを追い、続いて繰り出された攻撃は。

「スカイアッパー!?!」

凄まじい重みを誇るスカイアッパーをまともに受けたダーテングは、抵抗する事もできずに地面へと落下しフィールドを削りながらも尚止まらない。

そして――空中でアクセルは最後の一手の構えを見せていた。

「いっけええっ!!」

〈ダアアアアッ!!!!〉

放たれたのは――特大のはどうだん。

おそらくこれが全力の一撃だろう、それは吸い込まれるようにダーテングへと向かっていき。

爆音と共に煙が舞い上がり、ダーテングを包み込んだ――

……………。

「――僕達の勝ちだ」

「ダーテング、戦闘不能。リオルの勝ち！！
よってこの勝負、レイジ選手の勝利！！」

瞬間、周りからは拍手喝采の嵐が。

「アクセル、お疲れ様」

アクセルの元に向かい、労いながら頭を優しく撫でる。

〈父上、僕……強くなりましたか？〉

「もちろんだよ。強くなってアクセル」

〈は、はい！！〉

嬉しそうに笑うアクセルに笑みを返す。

「……レイジさん」

「エリカさん……」

「完敗ですわ。本当に全力で戦ったのですが……負けました」

「いえ、初めから全力で来られたらわかりませんでしたし……」

「それでも、レイジさんは今のわたくしよりも強いという何よりの証明にです。

——これを、わたくしに勝った証であるレインボーバッジですわ」

「……………はい」

エリカの手からレインボーバッジを受け取り、強く握りしめる。

相変わらず、このバッジは重い。

現実の重量ではなく、このバッジに込められた想いがだ。

「ですが、次に戦う時は負けませんわ」

「——僕だって、負けません」

笑みを浮かべ合い、固く握手を交わす2人。

こうして、レイジも無事レインボーバッジを手に入れる事ができた。

これで3つ、後一つでポケモンリーグへの挑戦権を得る事ができる。

果たして、次の冒険は彼等に何をもたらすのか。

更なる出会いを求め、彼等の旅は終わらない。

第25話　く迷子の迷子のイーブイさんく

タマムシシティのポケモンセンター。

その一角にあるソファで、レイジは読書にいそしんでいた。

そんな彼を見守るように隣で座っているのは、カグヤ……ではなく、彼の最大のパートナーであるサーナイトのティナ。

「レイジ、ティナ」

そんな彼に声を掛ける一人の少女カノン。

いや、正確には人ではなくポケモンなのだがそれはともかく、人間形態の彼女がこちらに近づいてきた。

「カノン、どうしたの？」

「別に特に用があったわけじゃありませんが、暇でしたので」

「カイリは？」

「部屋で眠ってます、マスターも暇なので」

「なるほど……」

だが仕方ない、今日1日は自由行動にしようと決めたのだ。

しかしカイリはカグヤ達のように買い物に行く理由もなく、レイジ

のように読書をするタイプでもない。

彼のポケモン達も今日は外で遊びたいと言っていたから、彼としてはもう寝る以外の選択肢はないのだろう。

「なら、僕が持つてる本でも貸そうか？」

「いえ、せっかくですが遠慮しておきます」

へしかし困りましたね、カノンはどうやって暇を潰すおつもりですか？

「うーん……」

そう言われても、それについて悩んでいるので答えられない。

……それはそれとして、だが。

へ？ わたくしの顔に何か付いていますか？

「そういうわけじゃないんですけど……ティナ、なんだか変わったなと思って」

へ進化しましたからね、外見が変わってしまうのは仕方ありませんよ。

でも、もうお父様の頭の上に乗れないと思うと……少し寂しいですね

本当に残念そうに愚痴を零すティナ。

勘弁してくれ、レイジは本に目を通しながらそう思った。

ただでさえキルリアの時でも割とキツイ時があったのだ、自分と同じくらいの背丈になった彼女に乗られたら首の骨が折れる。

「それはそうなんだけど……それだけじゃなくて、なんだか随分人間に近くなったというか……」

「へそですか？　ですがサーナイトというポケモンは皆外見が人間に近いですし、当たり前ではありませんか？」

「ううん。なんかティナは……普通のサーナイトよりも人間に近い気がして……」

「……………」

カノンの言葉を聞き、レイジはポケモン図鑑を取り出す。

そしてサーナイトの項目を選び、ティナと見比べてみると……。

「……本当に、どこか違うね」

「へえっ、本当ですかお父様？」

見てみなよ、そう言いながらティナ達にポケモン図鑑を渡す。

（やっぱり……ティナはどこか違う）

もちろんティナの外見が、図鑑に書かれたサーナイトとは似ても似つかないというわけではない。

しかし、よく見ると細部が色々と違う。

手と足の指は人間と同じく五本になっているし、胸部にはまるで人間の女性のような膨らみがある。

これはサーナイトにはない特徴だ。

サーナイト最大の特徴ともいえる胸元にある三角の赤い突起物がなければ、人間の女性と言っても通用するかもしれない。

〈……わたくし、なんだか本当に人間みたいですわね……〉

図鑑に書かれたサーナイトの外見を見ながら、ティナはおもわずその口に出す。

「別に関係ないよ。ティナはサーナイトだし、このポケモン図鑑の写真が100%サーナイト全ての外見ってわけじゃないんだ。

だから、別にそんなこと気にしない方がいいよ」

〈お父様……〉

「ティナはティナだ。それで充分だよ」

だから、そんな不安そうな顔になるのはやめてくれ。

口には出さず、視線でそう告げるレイジ。

〈——嬉しいですお父様、ありがとうございます！！〉

「わっ!!」

たまらず嬉しくなり、レイジに抱きつくティナ。

「ちょ、ちよつとティナ……く、苦し……」

今まで小柄だったのだが、サーナイトになった事で包み込まれるように抱きつかれ息苦しい。

しかしティナはそれに気づかず、ニコニコと笑みを浮かべながらラルトスやキルリア時代と同じような感覚で抱きついている。

「……………」

そんな2人の光景を見つつ、カノンは暫し思考に耽っていた。

……………。

へ——お父様、なんだか様子がおかしかったです……どうかしたんでしょうか……」

（……ティナのせいなんだけどね）

しかしそんな事は口にしない、言った所でティナには通じないからだ。

口調や雰囲気、そして外見も成長したのだが、レイジに甘えたりする所は変わっていないらしい。

ただでさえレイジは年頃の少年だというのに、人間の女性に限りなく近いティナに抱擁されれば、そりゃあ顔も赤くなったり様子がおかしくなったりもする。

おまけに彼女はそれがわかっていないのだから、タチが悪い。

まあそれはともかく、彼女達は現在タمامシシティの近くにある森の中を歩いていた。

レイジが「せっかくだから散歩でもしてきたらどう？」と提案してくれたからだ。

もちろん彼も誘ったのだが、読書をしたいので断られた。

というわけで、現在カノンとティナ、そして彼女達についてきたジャノビーとヒカリの四匹で仲良く歩いている。

——いい天気だね。

——光合成するにはちょうどいいわね

ヒカリもジャノビーも木漏れ日を浴びながら、機嫌が良さそうにニコニコと笑っている。

それを優しく見守るティナの表情は、サーナイトになったからか大人びていた。

「……ねえ、ティナ」

〈はい？〉

「ティナって、タマゴの中に居た頃からレイジと一緒にいたんですよね？」

〈そうですよ。お父様はわたくしをいつも大事に育ててくださいました……なんだか懐かしいですね〉

「……でも、どうしてレイジはタマゴのティナと出会ったの？」

〈それが、お父様とわたくしが昔暮らしていた自然の庭園で、お父様がわたくしが入ったタマゴを見つけたのがきっかけだったらしいんです。

ですから、わたくしはおろかお父様もどうしてわたくしがあそこに居たのかわからなくて……〉

「ふーん……」

つまり、ティナもレイジと同じく自分の出生がわからないという事か。

まあカノンとてわからないし、なにより殆どのポケモンは自分の出生がわからないし興味もないので、特別おかしいとは思っていない。

しかし――ティナの外見はあきらかに普通のサーナイトではない。

それに、通常の個体より遥かにサイコパワーも強大であり、その戦闘力も普通ではない。

彼女にもレイジや自分のマスターであるカイリと同じく、何か秘密

があるのかもしれない。

それがなんなのかわからないが、これ以上余計な詮索は彼女を傷つけるだけだと思いを中断させる。

先程レイジが言ったように彼女は彼女だ、それ以外の何者でもない、それでいいではないか。

そう自己完結させ、カノンは素直に散歩を楽しもうとしたのだが。

——やめなよ！ この子ケガしてるんだよ！？

——低俗な事をしないで、同じポケモンとして情けないわ！！

少し離れた場所から聞こえてきたヒカリとジャノビーの声に、カノンは揃ってそちらに向かう。

するとそこには、数匹のラッタやオニスズメを睨んでいるヒカリとジャノビーの姿が。

彼女達の傍には、意外なポケモンが怪我をしているのか倒れている。

ヘイブイ……珍しいですわね。このポケモンがこんな所にいるなんて……

——ティナ、カノン。こいつらこのヘイブイをいじめてたんだ！！

「何ですって！？ こらあなた達、この子が何したっていうのよ！
」

イーブイの前に立ちふさがり、オニスズメ達を睨むカノン。

当のオニスズメ達はカノンを人間だと思っているからか、自分達の言葉を話すカノンに驚愕の表情を浮かべていた。

「今すぐにここからいなくなさい！！　さもないとヒカリがボルトテッカーでお仕置きするわよ！！」

——ピカがやるの！？

——人任せ……いえ、肝心な所をポケモン任せにしないの

後ろで騒いでいるヒカリ達はとりあえず無視。

本気で睨むと、オニスズメ達は気迫に圧されたのかすすり森の中に消えていってしまった。

「……ふう、疲れた」

——疲れたって、何もしてないじゃん

——ヒカリ、そういう余計なツツコミは可哀想だからやめておきなさい

後ろで好き勝手喚いているヒカリ達をまたも無視し、怪我をしているイーブイの元に。

「大丈夫？」

身体を見るが、浅い傷ばかりなので命に別状はないようだ。

しかしかなり衰弱しているので、とりあえずポケモンセンターに連れて行く事にしよう。

こういう時、トレーナーであるカイリ達ならば上手く立ち回れるのだろうが、あいにくと自分にそんなスキルはない。

すると、突然イーブイの身体が宙に浮き始めた。

へわたくしがサイコネシスでセンターまで運びます◇

「あ、ありがとうティナ」

そうだった、そういえば最初からサイコネシスで運んであげればよかったのだ。

忘れていた自分が、なんだか恥ずかしく思えた。

——ボクを、どこに連れていくの？

気が付いたのか、弱々しい声でそう訪ねてきた。

自分の事は「ボク」と呼んでいるようだが……どうやら♀のようだ。

「ポケモンセンターよ、あなた随分怪我をしてるから……」

——ポケモンセンターって、人間の居る所？

一気にイーブイの表情が曇る。

それを見て、ティナ達は瞬時に悟った。

このイーブイ、人間が苦手なポケモンだ、と。

へ大丈夫です。危険な人間には近づかせませんし、それにお父様達がいらっしゃいますから

――お父様？

へはい。と言っても人間なのですが……わたくし達の言葉を理解する能力を持ち、そしてとてもお優しい方ですよ

――でも、きっとボクの事を見たら捕まえようとするよ

へそんな事はありません、万が一……いえ、億が一でもありえませんが、もしそんな事態になればわたくし達が守ってあげますから

話をしながら、ティナは内心でイーブイが人間を苦手な理由がわかった。

イーブイは現在七種類もの進化の選択肢がある貴重なポケモンだ。

故に、姿を見たら問答無用でゲットしようとするトレーナーがいてもおかしくはないだろう。

可哀想に、ティナ達の表情が曇る。

この子がどんな目に遭ってきたのかは、想像に難くない。

しかしそれだけではなく、人間を信じられないというのがなにより

可哀想に見える。

トレーナーが居るからというからではなく、ティナ達は全員人とポケモンは共存し合っている生き物だと思っているから、この子のように人間を信じられないポケモンが居るという事実は胸が痛む。

——大丈夫だよ。レイジは凄く優しいから

——それは、君達のトレーナーの名前？

——そうだよ。ピカも最初は人間なんて大嫌いだった……それは今でも正直そう思っちゃう時もある。

でもね、悪い人間もいれば良い人間も必ずいるんだ。

だってレイジは、ピカのこと一生懸命看病してくれた。ピカがどんなに暴れても傷つけても構わず、しかも治してくれただけじゃなくてゲットしようとしなかったんだ

ヒカリの言葉に、イーブイは驚く。

だってそうだろう、ゲットする目的がないのに無償で野生のポケモンを治すトレーナーがどこにいるというのか。

もちろん頭の隅ではそんな酔狂なトレーナーもいるとは思っていたが……実際に聞くと驚きを隠す事ができない。——だからさ。たとえ人間が嫌いでも……全ての人間が悪いと思ってほしくない。

それだけは、わかってほしいよ。

——うん。

ヒカリの言葉の真剣さを感じ取ったのか、小さく頷きを返すイーブ

イ。

これで完全に納得できたわけではない、それはティナ達とてわかっている。

だがそれでも、少しでもこの子が人間に対する苦手意識を無くしてくれればいい……ティナ達はそう思った。

…………。

ポケモンセンターに戻ると、レイジ達4人がちょうど集まっていたので、ティナ達は早速事情を説明しイーブイを治療してもらう事に。

「——なる程ね。事情はわかったよ」

へ申し訳ありませんお父様、勝手な事をしてしまつて……」

「そんな事ないよ、むしろイーブイを助けてくれてありがとう」

「レイジの言う通りだよティナ、すつごく良いことしたんだから謝る必要なんかないよ!」

へ……ありがとうございますお父様、カグヤ」

「しかしイーブイか……なんでそんな所に居たんだろうな?」

少なくとも、おいそれと姿を現すようなポケモンではない。

「さてね……とりあえず治療が終わったら、野生に帰してあげよう」

「えっ、いいのか？」

「人間が苦手なら仕方ないさ、みんながみんなヒカリのようになれるわけじゃないんだから」

「——でも、あのイーブイだってレイジ達と一緒に居たらピカミタいに人間嫌いを克服できると思うよ？」

「そうかもしれない。でも無理強いはよくないからね」

言いながら、ヒカリの頭を優しく撫でる。

すると、イーブイの治療が終わったアナウンスが流れた。

「終わったみたいだな」

「それじゃあ引き取りに行こうか」「……………可愛い」

「えっ？」

治療を終えたイーブイを見ながら、ヒメカが何か呟いたのでカグヤは視線を向ける。

「な、なんでもない」

慌てて誤魔化すヒメカだが、余計怪しく見えてしまうだけだと気づいていないのか。

首を傾げていると、カイリは様子のおかしいヒメカの理由を口にした。

「こいつ、イーブイが好きなんだよ。」

イーブイというか、イーブイ系全部が」

「へえ、そうなんだ」

確かにイーブイ系統のポケモンは、全て可愛らしい容姿をしているからトレーナーの中では人気が高い。

しかしそれが恥ずかしいと思っているのか、ヒメカは顔を赤くしながら抗議の声を口にする。

「べ、別にいいじゃない！ 悪いの？」

「別に悪いなんて言ってないだろ……」

「そうだよヒメカ、それに私もイーブイ好きだよ」

「……………」

ぷいっと顔を逸らされてしまった。

一体何がそんなに恥ずかしいのかわからず、カグヤは再び首を傾げるのだった。

「——ねえ。僕達は君にとって恐い存在に見える？」

しゃがみ、イーブイと目線を合わせながらそう問い掛ける。

——わからない

「でも、特に恐いとは思わないでしょ？」

そう問い掛けると、少しの間を開けながらもイーブイはこくりと頷いてくれた。

今は、たったそれだけでも充分だ。

イーブイが少しは人間という存在に対する恐怖心を取り除かれたのなら、嬉しい。

「——さてと。そろそろ行こうか？」

「だな。女性陣の長い買い物も終わった事だし」

「長くて悪かったわね」

「まあまあ、買い物が高かったねのは事実なんだからしょうがないよ」

「……長かった理由はカグヤがいつまでも香水選びに夢中になっていたからだ」と記憶してるんだけど？」

「あははー……そ、そうだったかな？」

ジト目で睨まれ、明後日の方向に視線を逸らすカグヤ。

そういうのに興味を持ってくれたのは嬉しいが、まさかあそこまで

熱中するとは……。

(やれやれ……)

——あ、あの。

「? どうしたの?」

——えっと、ボクを捕まえないの?

「どうして? 別に僕は君をゲットしたいから助けたわけじゃない。」

まあ助けたのはティナだけだね」

レイジの言葉に、イーブイはポカンとしてしまった。

「——だから言ったではありませんか。お父様達があなたをゲットするなんて億が一にもありえないと」

「ティナ、何の話?」

「へこちらの話ですよ、お父様」

悪戯っぽく笑うティナに、レイジは首を傾げる事しかできない。

「じゃあね。縁があったらまた会おう?」

イーブイの頭を優しく撫で、カグヤ達と共にタمامシシティを後にしようとしたレイジであったが。

——ま、待って!!

「ぐはっ!？」

突然背後からたいあたりをぶちかまされて、地面に倒れ込んでしまった。

「レイジ!？」

——ご、ごめんなさい

「いてて……い、いきなりどうしたのさ？」

腰にかなりの衝撃が走り、おもわず涙目になりながら視線をイーブイへと向けると。

——ボ、ボクを……仲間にしてくれませんか？

レイジにとって、あまりにも意外すぎるお願いが聞こえてきた。

「えっ!？」

「どうしたの？」

「いや……その、イーブイが僕達の仲間になりたいって言ってきて……」

「マジかよ!？」 ならゲットすればいいじゃん」

「でも………いや、そうだね」

否定しかけて、すぐさま首を振る。

ヒカリの時も否定したけど、相手の気持ちを尊重したいなら断るのは逆に失礼だ。

「いいよイーブイ、けどトレーナーは僕じゃなくてヒメカでもいい？」

——えっ？

「ちょ、レイジ何で」

「だって君はイーブイが好きなんでしょ？
なら少なくとも僕よりこの子を大事に育ててくれると思ったから」

「そ、それは……でも、いいの？」

「僕はもちろん。でもイーブイはどうかかな？」

——うん。ボクも構わない

「……構わないってさ、どうする？」

「……………」

どうしよう、凄く嬉しい。

ずっと手持ちになったらいいなあと思っていたイーブイが、自分から手持ちになっていいと言ってきたのだ。

嬉しさのあまり、頬が緩んでしまいそうになってしまう。

「ヒメカ、ニヤついてんぞ……」

「べ、別にニヤついてなんかいないわよ!!」

とは言いつつ、口元には隠しきれない笑みが浮かんでいる。

なんだかそれが可愛らしくて、レイジ達は揃って苦笑した。

「な、何笑ってるの。ま、まったくもう」

「はいはい。それでどうするのさ？」

「……………」

しゃがみ込み、イーブイを見つめるヒメカ。

「イーブイ、わたしなんか本当にいいの？」

——うん。とても優しそうだから、きっと大丈夫

「……………なんて言ってるの？」

「優しそうだから、きっと大丈夫だってさ」

「……………そう」

ありがとう、そう口にしながらイーブイの頭を撫でながら、ヒメカ

は空のモンスターボールを手を持ちイーブイの中に入れた。

「――よかったな。ヒメカ」

「ええ」

「それで何に進化させるんだ？ シャワーズかブースターかサンダーか……まてよ、エーフィやブラッキー。
はたまたリーフィアかグレイシアか……迷っちゃうな」

「別にあなたが進化させるわけじゃないでしょ。
――フィーの好きにさせるわ」

「フィー？」

「この子の名前よ。女の子だしね」

「なるほどなるほど」

「よし、それじゃあそろそろ――」

行くとしよう、改めてそう口にしようとしたレイジだったが。

「レイジさん!!」

「？」

慌てた様子でポケモンセンターからジョーイが飛び出してきた、声を掛けられ立ち止まってしまった。

「ジョーイさん、どうかしましたか？」

「す、すみません……実はレイジさん宛てに電話が来たものですから……間に合ってよかった」

「電話、ですか？」

一体誰誰だろう。

そう思いながらセンターへと戻り、電話を取ってみると……。

『——久しぶりじゃのうレイジ君』

そこに映ったのは、マサラタウンのオーキド博士だった。

「オーキド博士、どうしたんですか？」

『うむ。一つは君達が今タマムシに居るという話をシロナ君に聞いてな、調子はどうかと思ひ連絡したのだ』

（シロナさんから……）

はて、それはおかしな話だ。あれ以来自分達はシロナに会っていないというのに。

「こっちは全員元気ですよ。でも博士、一つはって今言いましたけど、もう一つの用事は何ですか？」

『うむ。今ジムバッジを集めている君達にこんな事を頼むのは申し訳ないと思うのじゃが……』

齒切れの悪いオーキドに、気にしないでくださいと告げ先を促す。
すると、オーキドは……。

『実はな……ちょっとジョウト地方に行ってほしいんじゃ』

申し訳なさそうに、レイジ達に向けそんな言葉を投げかけてきた――

第26話 ジョウト地方へ語り継がれる神話の始まり（前書き）

今回、ちょっと残酷な描写があります。それを踏まえてお読みください。

第26話 ジョウト地方へ語り継がれる神話の始まり

俺は／ワタシは誰だ？

俺は／ワタシは誰だ？

俺は／ワタシは——この世界で生まれた。

生きとし生ける者すべてが必要とする——時。

俺は／ワタシは、それを司る者……？

わからない。

わからナイ。

ワカラナイ。

俺にはない。

ワタシにはナイ。

俺を／ワタシを確立させるモノがない。

なぜ――？

何故――？

ナゼ――？

俺は／ワタシは、何故何もない？

身体がない。

力がない。

記憶がない。

在るはずのものが、世界から受け取ったはずの全てがない。

理解できない。

意味がわからない。

何故失った？

俺の／ワタシの力を。

思い出せ、思い出せ、思い出せ――――

何があった？ 遙か昔、俺達／ワタシ達に何があった？

探せ、探せ、探せ。

答えは近くに、自分の一番近くにある。

それを、早く――「――リ、ヒメ――」

「……んっ……」

声を掛けられ、カイリとヒメカは同時に目を開ける。

視界に広がるのは、旅の仲間であるレイジとカグヤの姿。

「……………あれ？」

自分は、眠っていたのだろうか。

だとしたら、あの欠けた光景は夢だった…………？

「どうしたの？　カイリはともかくヒメカまでなかなか起きないんだから」

「…………ごめんなさい、ちょっと変な夢を見てたせいでまだ寝ぼけてるみたい」

「変な夢？」

「…………気にしないで。それよりカイリ、いつまで寝ぼけるの？」

「お、おお…………わりい」

……どうやら本当に夢を見ていたようだ。

(けど、あの夢……)

一体何だったというのであろうか。

今では内容をほとんど思い出す事はできないが、それでも――夢とは思えない程に現実過ぎるものだったとこの身が記憶している。

「それよりもうジョウトに着いたんだから、早く降りないと怒られるよ?」

「……そうだな」

気にするだけ無駄だ、そう自分自身を納得させてカイリは席を立つ。
リニアの外から見える光景は――ジョウト地方のコガネシティ。

(着いたのか、ジョウト地方に……)

……。

――ジョウト地方に行ってほしい

そうオーキド博士から告げられたのが、今から四日程前の事だ。

なんでもオーキド博士の友人であるウツギ博士が、レイジ達に頼みたい事があるという話らしい。

詳細な内容は直接会って話をするとの事で、レイジ達はヤマブキシティからリニアでコガネシティへとやってきたというわけである。

「へえ……なんかタمامシシティみたいだな」

「だってタمامシデパートの姉妹店だよ、コガネデパートって」

「へえ……」

「それよりもウツギ博士との待ち合わせ場所に行きましょう」

ウツギ博士とはポケモンセンターで待ち合わせをしている。

きつともうセンターで自分達を待っているだろう、待たせては悪いと思い少し早足でセンターへと向かおうとして。

「……………」

「おっ……………」

突然同時に立ち止まるレイジとカイリ。

「レイジ？」

「ちょっと、いきなり立ち止まってどうしたのよカイリ？」

『……………』

2人の言葉には応えず、いきなりセンターとは反対方向へと走り出

すレイジとカイリ。

「ちょ、レイジ!？」

「い、いきなりどうしたのよ!？」

意味がわからないまま、2人を追いかけるカグヤとヒメカ。

「――レイジ、お前も感じたのか？」

「うん。――じゃあ、カイリも？」

「ああ。俺はお前と違ってなんとなくって感じだけどよ……ほんの少しだけ感じられた」

「――禍々しい力。それに威圧感」

それを感じ取った為に、レイジとカイリは走り出したのだ。その正体を見極めるために。

だが――レイジは半ば相手が何者なのかは予想できていた。

この威圧感、他人の空似ではなくそもそもこんな闇を抱えている存在など2人としていないはず。

「……あれは」

リニアの駅を抜け、街の外れまで走り――人だかりを視界に捉えた。

「ちょ、ちょっと……レイジってば」

「カ、カイリ……何がしたいの？」

やや遅れて、少し息を乱した2人がレイジ達に追いつく。

それには構わず、レイジとカイリは人だかりの中を進む。

その中心には――2人のトレーナーの姿が。

しかし片方の少女は、その場で膝を付き、もう一方の少年はそんな少女を見下すように眺めていた。

おそらくバトルをして少女が負けたのだろう、傍には傷つき倒れたミルタンクの姿が見える。

少女に面識はない、だが……あの少年は。

「アイツは………！」

カイリも気づき、みるみるうちに表情に怒りの色を滲ませていく。

「――ジョウトのジムリーダーも二流だな……いや、お前は三流以下だ」

冷たく言い放ち、心底馬鹿にしたような表情を浮かべるのは――あの時タマムシジムに現れた少年ケイジ。

「うっ……うっ……」

たまらず涙を見せる少女に、ケイジは更に追い討ちを掛けた。

「ハッ、負けたからって泣くのか？ 自分が弱いのが原因なのによ。仮にもジムリーダーだというのに……どうしようもないクズトレナーだなお前は」

「ぐすっ…ひ、ひどい……あんまりや」

「弱い分際でジムリーダーをやっているからだ、三流風情が……百年早い」

「——っ」

「デメエ——！」

人だかりをかき分け、ケイジの前に立つカイリ。

その顔は誰が見ても怒りに満ち溢れており、今にも殴りかかりそうな勢いだ。

「……お前」

「この野郎……なんて事言いやがる！！ 今すぐこの子に謝れ！！」

「何でオレがこんな弱い女に謝らないといけないんだ？

所詮クズはクズ、この程度の実力しか持っていないくせにいきがるからだよ」

「この野郎——！」

拳を握りしめ、ケイジに殴りかかるカイリ。

だが、レイジはそれを無理矢理止めた。

「放せレイジ！ やっぱりこの野郎は一発ぶん殴らねえと気が済まねえ！」

「落ち着いて。殴ったって仕方ないじゃないか」

「そういう問題じゃねえんだよ！！ コイツだけは……絶対に許すわけにはいかねえんだ！！」

暴れまわるカイリをどうにか押さえ込みながら、レイジはケイジへと視線を向ける。

——相も変わらず、その瞳はすべてを拒絶する程冷たい

「チッ、またお前か……相変わらずオレをイライラさせる目をしやがって……」

「……一体、君は何をしているの？」

「何をだど？ ただオレはこの街のジムリーダーがどの程度の実力か確かめようとしただけだ。

だが戦わなくても三流とわかったんでな、オレとしては戦いたくなかったんだが……この女が煩いから、実力を見せつけてやっただけだ」

「この子が。ジムリーダー……」

「ああ。尤もあのエリカとかいう女よりも弱い、クズ当然のジムリ

「ダーだったがな。」

「見る。勝負に負けたら泣く……今日日これほど情けないトレーナーを見た事はないぜ」

高らかに笑い声を飛ばすケイジ。

それを見て、コガネシティのジムリーダー——アカネの目には大粒の涙が溢れていく。

「——何様のつもりだ。テメエはそんなに偉いのかよ？」

もはや、我慢の限界などとうに超えていながらも、レイジに止められているお陰で懸命に怒りを抑えこんでいるカイリ。

「事実を言ったただけだ、この女はオレより遥かに弱い。弱者は強者に蹂躪されるのが定めだ。」

「ならどう言おうが、オレの勝手だろ？」

「—————」

底知れぬ闇、こうまで人を傷つける程に深い。

怒りよりも、恐怖の方が大きかった。

「————なら、俺がテメエをぶっ倒してやる！！勝負しやがれ！！」

「前にも言ったぞ。お前みたいない——」

「ゴチャゴチャ言ってねえで、さっさとポケモンを出しやがれこのクズ野郎が——！！」

「……………カイリ」

ダメだ、もうバトルを止められそうにはない。

そう判断したレイジはカイリを放し、アカネの元に。

「立てる？」

力なく頷くアカネの手を引っ張り、カグヤ達の元に。

「……………大丈夫、ですか？」

心配そうに声を掛けるカグヤだが、精神的に追い詰められたのかアカネは反応を見せない。

「あの男……………！」

「最低だよ、あんなヤツ……！」

「……………」

普段温厚なカグヤでさえ、ケイジの暴言には怒りの表情を浮かべている。

……………しかし、レイジは怒りよりも疑問の方が大きかった。

何故あそこまで人を傷つけるのか、それがわからない。

他人を辱める事に愉悦を感じる人間は居る、しかしケイジはそのよ

うな理由ではないような気がする。

自分以外の全て、生きとし生ける者そのものに対して憎悪を抱いているような気がしてならない。

「――仕方ねえ、必要ねえがうざったいからな……一体だけ相手をしてやる」

本当に面倒そうにモンスターボールを取り出すケイジ。

「上等だ。テメェのポケモン全部倒してあの子に土下座させてやる！！」

「たいした自信だな。さすが虚勢だけが取り得の二流トレーナーだ」

「っ、覚悟しやがれ！！」

完全に頭に血が昇ってしまったているカイリ、だが無理もあるまい。

（気をつけてカイリ……あいつ、強いよ）

更に、単純な強さだけではない。

あの男には、何か説明できない得体の知れない力を感じるのだ。

けれど――何故だろうか。

禍々しく、不快感しか感じないというのに……その力が、どこか懐かしいような気さえするのは。

「ジャノビー、行け!!」

カイリが出したポケモンはジャノビー。

対するケイジは……。

「潰せ、ケッキング」

「――ケッキング」

「えっと……たしかケッキングってものぐさポケモンって呼ばれてるんだよね？」

「そうね。一日中寝そべったまま暮らす程の怠け者らしいけど……」

「……あのケッキング、ただのケッキングじゃない」

図鑑で確認するが、ケッキングはかなりの怠け者で周りの餌を食べ尽くすまでその場から動かない事もあると書かれている。

しかし、あのケッキングはまるで進化前のヤルキモノのように力強く立っていた。

「ジャノビー、つるのムチだ!!」

先手はカイリ、つるのムチがケッキングへと向かっていく。

しかしケッキングは動かない、回避できないほど鈍重ではないはずだというのに。

だがケツキングは――迫り来るつるのムチを、軽々と“片手”で受け止めてしまった。

「なあ――っ!？」

これにはさすがのカイリも驚きを隠せない。

「ケツキング、引き寄せてれいとうパンチ」

「しま――っ」

遅い、指示を出そうとした瞬間ケツキングの腕がつるのムチを強引に引っ張りジャノビーの身体が引き寄せられていく。

空中へと放り投げられたジャノビーが回避行動をとれるわけもなく、ケツキングのれいとうパンチが叩き込まれる。

「――まだだ。徹底的に痛めつけろ」

攻撃を受け吹き飛ばされていくジャノビーだが、ケツキングは再びつるのムチを引っ張り自分の元へとジャノビーの引き寄せる。

――再びジャノビーに叩き込まれるれいとうパンチ

「くっ、ジャノビー！ リーフブレードだ――!」

このままでは一方的に攻撃させるだけだ、カイリはジャノビーに指示を出し、顔をしかめながらもリーフブレードを展開し繰り出す。

「かわらわり」

ジャノビーのリーフブレードを、かわらわりで真っ向から受け止めるケッキング。

「——どくどくだ」

「っ、ヤベ——！」

ケッキングから放たれたどくどくをまともに受け、苦しげな声を上げるジャノビー。

その隙を逃さず、ケッキングはその逞しい腕でジャノビーを地面に叩きつける——！

「ジャノビー——！」

カイリの声に反応し、どうにか立ち上がるジャノビー。

しかしどくどくによる猛毒をなんとかしなくては。

「ジャノビー、リフレッシュだ——！」

指示を受け、技を繰り出すジャノビー。

これで状態異常は消えてくれた、しかし……ジャノビーが受けたダメージは甚大だ。

「どうした。やっぱりいきがるだけしかできないのか？」

（っ、くそったれ……こうなりやアレを——！）

（――これは!?!）

時が、止まるような不思議な感覚。

カイリがあの手を使っているのだ。

「っ、こいつは……」

「……………」

僅かな驚きを含んだケイジの呟き。

（何を驚いているんだ……………?!）「ジャノビー、はっぱカッター!!」

十数枚のはっぱカッターが、四方八方からケッキングに襲いかかる。

「れいとうパンチで叩き落とせ、その後はかいこうせんだ」

両手のれいとうパンチで全てののはっぱカッターを叩き落とし、口から巨大なはいこうせんを発射するケッキング。

それを。

「右に二歩、前に三歩。通り抜けた瞬間に走りながらエナジーボール」

たったそれだけの指示で、誰が見ても完璧だと思える回避を成し遂げ、更に最高のタイミングで反撃を試みた。

「何……?」

初めてケイジの表情が変わる。

だが、ケツキングは向かってくるエナジーボールをアームハンマーで――

「――叩き落としている内に左わき腹に向かってグラスミキサー」

言われた通り、ケツキングの左わき腹にグラスミキサーを放つジャノビー。

しかし、ケツキングはアームハンマーを繰り出しているため回避も防御もできずに――まともに攻撃を受ける。

「なんだと……!!」

「左に二歩、前に四歩の後しゃがめ」

指示通りに動きしゃがんだ瞬間、ケツキングのシャドークロウが頭上を通り過ぎる。

「エナジーボール!!」

隙だらけになったケツキングの身体にエナジーボールを叩き込み、ようやくまともなダメージを与える事ができた。

「凄い凄い! カイリってば圧してるよ!!」

「……まさかアイツ、力を」

「使ってるね。間違いない」

「っ、あのバカ……使うなってあれだけ言ったのに……！」

「仕方ないよ。あれを使わないと勝てないだろうしね」

いや、よしんば使った所でどこまで通用するか。

「よしジャノビー、特訓の成果を見せるぞ！！」

——フルパワーで『リーフブレイカー』だ！！」

「リーフブレイカー……？」

聞いた事のない技名だ。

「あれは……ジャノビーと特訓してた技ね」

「ジャノビーと？」

「レイジとアクセルが使う『テトラコンビネーション』みたいなものだよ。カイリとジャノビーのオリジナル技！」

「……………」

リーフブレイカー、果たしてどんな技なのか。

そうこう考えていると、ジャノビーの周りには葉を大量に含んだ竜巻が生まれていく。

（リーフストーム？ いや、おそらくはあれだけじゃない……）

完成したリーフストームは発射――されずに、ジャノビーの身体を包み込むように展開していく。

「いけえええっ！！！」

まるで風の弾丸のように、ケッキングへと向かっていくジャノビー。

「リーフストームで身体を包み込んで、そのまま体当たりするなんて……」

これならば通常のリーフストームよりも突撃する分威力が増す。

それに、ジャノビーは前方に腕を交差させながらリーフブレードを展開している。

それにより攻撃力もプラスされれば、ヒカリのボルテッカーにも勝るとも劣らない破壊力を生み出すだろう。

（これを受ければ、いくらケッキングとはいえ……）

しかも今は未来を視ながら戦っている、おそらくカイリ自身限界を迎えているだろうが、これが最高のタイミングで放たれ――回避する事ができないのは目に見えている。

未来を視ているのだ、外れないという確証があるからこそ技を展開したのだから。

これで、ジャノビーの勝利に終わる、それは未来を視ていないレイ

ジにもわかった。

———だが

「なっ、え……………」

突然、カイリの驚愕に満ちた眩きと。

——彼のものとは違う、異質な違和感を感じ取った

（これ、は……………」

似ている。

カイリの『未来を視る』力が解放されている時に感じる、一種の電波のようなものがもう一つ、この場に生まれた。

それが、限りなくカイリのものと酷使しており。

「——未来が、変わる……………!？」

彼の、信じられないような一言と同時に。

「——クソが、お前も似たような力を持つてるとはな」

そう吐き捨てるような言葉を放つ、ケイジの声が聞こえた。

瞬間、ケッキングはまるで“初めからその場に居なかったかのように”姿を消す。

そして——

「のしかかりだ」

突然、何の脈絡もなくケッキングの姿がジャノビーの“上空”に現れ。

彼女を守っているリーフストームにダメージを受けながらも、ジャノビーへののしかかり地面へと叩き落とした。

……。

「ジャノビー!?!」

完全にケッキングにのしかかれ、身動きの取れないジャノビー。

それを見て——ケイジの口元が狂気の色に歪んだ。

「っ、やめろ!?!」

一瞬早くケイジの意図を理解したレイジだったが、それでも遅すぎた。

「ケツキング。――“死ぬまで” ジャノビーにれいとうパンチだ」

雄叫びを上げ、マウントポジションのまま連続でれいとうパンチを叩き込んでいくケツキング。

「なっ――！？」

「ククク……ハッハッハッハッハッ！！！」

いぞケツキング、そのまま息の根を止めてしまえ！！」

狂気の笑みを顔に貼り付かせ、ケイジは更にケツキングに狂った指示を出す。

それを受け、ケツキングは尚もジャノビーにれいとうパンチを叩き込み続けていく。

「――――」

思考が、焼ける。

視界に赤が混ざったのは、ジャノビーの鮮血が宙に舞っているから、か。

「やめろ――っ！！」

たまらずジャノビーを助けようとケツキングに向かっていくカイリだったが。

「ぐっ!!?」

「何をやってるんだ? 今はバトルの途中だぞ?」

邪魔するかにように立ちふさがったケイジが、カイリを蹴り飛ばす。

「どけよ!! このままじゃジャノビーが……やめさせろ!!!」

「何言ってるんだ。オレ達は今ポケモンバトルをしているんだぞ? 下手に攻撃を止めて反撃でもされたら、負けてしまうだろ?」

「ふざけんな。もうジャノビーに戦う力なんか……」

「それはお前が勝手にそう思ってるだけだろ? 念には念を入れて攻撃しないと、敗北しちまうからなあ。クハハハハハハハハハッ!!!!」

「やめろ、やめろ、やめろーっ!!!!」

カイリの悲痛な叫び声と、そんな彼を嘲笑うかのようなケイジの笑い声が響き渡る。

周りも、あまりの光景に誰もが震えている。

中にはジュンサーやジョーイを呼びに行く者も居るが、誰もがケイジの恐ろしさに助けに入ることができない。

「――――」

死ぬ、殺される。

このままいけば、間違いなくジャノビーは殺される。

既にポケモンバトルではなく、ただの殺戮だ。

（――どう、して？）

何故ここまでする？

何故ここまでの非道を行える？

何故――こんなにも平然に、生きる者の命を奪う事ができる？

（これが、人間？）

これが――この世に生きる人間の本質なのか？

（こんな存在を、僕は……僕は――）

――私は、生み出してしまったのか？

――違う

それは、違う。

これが、人間の本質なわけがない。

だってそうでなければ、何の為にこの世界を――

「頼む……もう、やめてくれええつ……！！！！」

「死ね……死ね、死ね……死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
死ね死ね死ねっ!!!!

さっさと——死んじまえよおっ!!!」

$$\left[\begin{array}{c} \text{---} \\ \cup \\ \cup \\ \cup \end{array} \right]$$

その声で、内側から爆発するかのようにあの時に力が溢れ――

「――在るべき姿に還るんだ！ ケツキング！！」

閃光が、辺りを包み込んでいく。

誰もが今の事態に理解できないまま、光から逃れるように目を閉じた。

⋮

——光が収まり、音が消えた

「……………」

皆が光により視界が遮られている中、レイジだけが足を動かして……ケッキングの元へ。

ケッキングは、ジャノビーから離れるように倒れ気絶していた。

ようやく地獄から解放されたジャノビーを抱きかかえる。

「——っ」

その傷は、目を逸らしたくなるほど酷いものだった。

身体のだの箇所にも無事な部分はなく、あちこち流血しており生きているのが不思議なくらいだ。

「……可哀想に」

優しく、壊れ物を扱うかのような丁寧さで、ジャノビーの傷口に手を添える。

すると——淡い光がジャノビーの傷口を包み、少しずつではあるが塞いでいった。

それだけではなく、生気もだんだんと戻っていつている。

（この、力は……）

またも理解できない力を手に入れた事に、恐怖と不安が大きくなっ

た。

触れただけで完全ではなくスピードも遅いとはいえ、傷を治している力などもはや夢を見てるとしか思えない。

「っ、お前……その力は」

いち早く視界が戻ったケイジが、射殺するような視線をレイジに向ける。

「……君は、一体何者なの？」

あの時感じた違和感、そしてケツキングの異常な動き。

凄まじいスピードで動いたわけではない、あれはまるで空間を――

「質問してるのはこっちだ！！ お前、その力を一体どこで――」

その時、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「チィ――！！」

素早く気絶しているケツキングを戻し、逆方向へと走っていくケイジ。

（……君は誰？　そして……僕は一体、どんな存在なんだ……？）

――歯車が噛み合っていく

彼を中心に、世界を包む輪廻が回る。

その果てに待つもの、最果ての先に在るものは。

――希望か、絶望か

第27話 衝突く甘過ぎる考えく

「――ご協力、ありがとうございました」

敬礼するジュンサーに、レイジは頷きを返す。

「それじゃあ、僕はこれで失礼します」

席から立ち、交番から出る。

すると、待っていてくれたカグヤと視線が合った。

「お疲れ様」

「ごめんね、お待たせ」

「ううん。それじゃあセンターに戻ろう？」

頷き、2人並んでポケモンセンターに向かって歩を進める。

しかし、周りの空気は決して明るいいえたものではなく……なん
となく気まずい。

しかし、それは2人が悪いわけではない。

「……ジャノビー、治療終わったって」

「そう……」

「命に別状がなくて良かったよね？」

「うん……」

「あ、えっと……えっと……」

暗くなった雰囲気はどうにか明るくしようとするカグヤだが、今日
はいつもと違って言葉が出てこない。

「……ごめんねカグヤ、ありがとう」

そんな彼女の心中を理解したレイジは、感謝の言葉を投げかける。

「…………レイジ」

「大丈夫。僕は、大丈夫だから」

そうだ、自分よりも問題なのはジャノビーの主人であるカイリの方
だ。

彼に比べれば、自分の痛みなどそれこそたいした事はないのだから。

…………。

ポケモンセンターに戻ると、ソファアに座り込んでいるカイリとヒ
メカ、そして……。

「ウツギ博士……」

「レイジくん、聴取は終わったのかい？」

「はい。お待たせしてすみません」

「いや、構わないよ。しかし大変だったね……」

「……いえ、僕は別に」

チラリと、カイリへ視線を向ける。

——必死で怒りに耐えている、そんな表情だ

「……………」

無理もない、自分の大切なポケモンが殺されかけて、どうして怒りを抱かないというのか。

だが、それでも……。

「——カイリ、気持ちはわかるけど……憎しみの感情は抱かないで」

彼には、そんな感情に囚われてほしくない。

「……悪いなレイジ、それはできない相談だ」

「……………」

「アイツのやった事は絶対に許さねえ、次に会ったらジャノビーが受けた痛みを味合わせなきゃ気が済まないんだ!!」

「でも、そんな事をしても意味ないよ……」

「意味ない？ 何が意味ないっていうんだ？」

何でお前、あんな野郎の肩を持つんだよ！？」

「別にそんなつもりはないよ、けど……憎しみは憎しみしか生まない、だから——」

「っ、お前に俺の気持ちがわかるのかよ！！」

センターに響き渡る程の大きな声。

周りの視線が彼等に集中するが、カイリは構わず声を荒げた。

「ジャノビーは殺されかけたんだぞ！？ あんな一方的に痛めつけられて、本当に死ぬ寸前だったんだ！！

なのに……自分の相棒をそんな目に遭わせたっていうのに、憎むなってお前は言うのか！？」

「それ、は……」

その言葉には、反論を返す事ができない。

確かに、もしティナ達があんな目に遭ったら……想像するだけでも気分が悪くなっていく。

だがカイリは想像ではなく現実ポケモンを傷つけられたのだ、自分の想像など超えた怒りが溢れかえっているに違いない。

だから彼の言葉は否定できない、できないが……。

「——それでも、憎しみに囚われるのは間違ってるよ」

自分の考えとて、否定する事はできなかった。

「お前——っ!!」

立ち上がり、レイジの胸ぐらを掴むカイリ。

「カイリ!？」

「やめなさい!!」

「お前は……お前は、何でそんな事が言える？」

ポケモンを傷つけられて、殺されかけて……それでも、相手を憎むなんてどうして言える!？」

「だって、彼にだって何か事情があるかもしれない。

普通ならあんな事はできない、なら彼は……ああせざるおえない理由があるんじゃない——」

「理由があるならポケモンを殺してもいいって言うのかよ!？」

「そういうわけじゃない、でも……」

「——甘いんだよ。お前の考え方は。

所詮、お前は自分のポケモンを傷つけられてないからそんな事が言えるんじゃないか!!」

「カイリ……」

違う、そんなわけじゃない。

だが、カイリの怒りを感じ取り何も言えなくなってしまった。

結局、自分の意見は意見でしかなく、価値観を押し付けているだけのお節介に過ぎない。

どんなに言葉を並べようとも、カイリの怒りの前では何の意味も成さないのか……。

「カイリの分からず屋！どうしてレイジの言ってる事がわからないの！？」

しかし、カグヤがカイリに向かってそう叫んでしまい……彼もそんなカグヤに視線を向けた。

「確かにあの人のやった事は許されないし、私だって許す事はできないって思ってる。」

でも、ジャノビーはカイリにそんな事望んだわけじゃないよ！！」

「お前に何がわかるっていうんだ！！　たとえばジャノビーが望んでなくても、俺はアイツに同じ痛みを与えてやりたい！！」

「そんなの、ただの自己満足だよ！！」

「何だと……！！！」

「レイジはカイリに人を傷つけるような事をしてほしくなくて言っ

てるのに……どうしてわかってあげられないの!?

レイジの気持ちも考えてあげてよ!!

「余計なお世話だ!! レイジには関係ないだろ!!」

「関係、ない……? 関係ないって……何よその言い方!!」

「関係ないから関係ないって言っただけだ!!」

所詮他人のお前達に、俺が受けた痛みなんざわかるもんか!!」

その言葉が、カグヤの堪忍袋の尾を切った。

「っ、そう……なら、勝手にすれば!？」

「勝手にするさ。もうウンザリだよお前達と一緒に居るのは!!」

「それはこっちのセリフだよ!!」

「ちよ、ちよっと2人とも落ち着きなさいよ!!」

「カイリ、カグヤ。君達が言い争ってもしょうがないじゃないか」

レイジとヒメカが仲裁に入るが、2人の睨み合いは止まらない。

「2人とも、一度冷静になりなさい。」

確かにカイリくん、君の気持ちもわかる。しかしレイジくんの言う通り憎しみを抱いて相手に同じ痛みを与えた所で意味なんかないよ。

それどころか、君は彼と同じになってしまっじゃないか」

冷静に、宥めるようにカイリを説得するウツギ。

それで多少は落ち着いたのか、カイリは静かになるが……。

「――それでも、俺は許せません」

やはり、怒りは思った以上に彼の奥底に根付いてしまっていたようだ。

「分らず屋!!」

「うるせえ、いい子ちゃんぶりやがって!!」

「なんですって!!」

「けっ……」

席を立ち上がり、宿泊室に向かうカイリ。

「もうこれ以上甘ちゃん達につきあってられるかよ!!」

――俺達の旅も、ここまでだ」

「ちよ、何言ってるのよカイリ!?!」

「……………」

それ以上は何も言わず、カイリは部屋へと戻っていつてしまった。

「……………はぁ」

「ごめん、ヒメカ……」

「別にレイジが謝る必要なんかないわよ、カイリだって頭ではわか
ってるんだから。」

ただ……ちよつと頭を冷やさなきゃダメね」

「……………」

「カイリの事はわたしに任せて」

そう言い残し、ヒメカも宿泊室に行ってしまった。

……………。

「——ウツギ博士、すみません」

「いや、ヒメカくんの言ったように君が悪いわけじゃないよ。
もちろんカグやくんもカイリくんも悪くない、だから気にしない
でくれ」

「……すみません」

「構わないよ。けど……僕はちよつと研究所に戻らなくちゃいけな
いからね。」

——仲直りをしたら、連絡してくれないか？」

これは研究所の電話番号だから、そう言ってメモをレイジに渡すウ
ツギ。

「わかりました」

「――レイジくん、あまり一人で気負いすぎない方がいい」

「……………」

それには応えず、頷きだけ返す。

それで一応の納得はしてくれたのか、ウツギは研究所に戻るためにポケモンセンターから出ていった。

（……………僕、は）

間違っていたのか？

自分のせいで、またカイリを傷つける事になってしまった。

そんなつもりじゃなかった、けれど結果は同じ。

「――私も、部屋に戻るね」

「カグヤ……………」

「……………レイジ、私……………間違った事は言っていないよ」

「……………」

カイリは傷ついた。

けれど、カグヤやヒメカも静かに傷ついている。

（こうやって、悲しみばかりが広がっていくのか？）

誰かに問いたい、果たしてどんな言葉なら良かったのか。

一体、どんな選択ならば誰も傷つかなかったのかを―――【カイリ
side】

「――いつまでふてくされてるの？」

「……………」

ベッドに座り込んだカイリに、少し呆れながら話しかけるヒメカ。

しかし返事を返さないカイリに、再びため息をついた。

「売り言葉に買い言葉、あなたとカグヤってそういう所は本当に似
てるわよね」

「…………うるせー」

悪態も小さく、弱々しいもの。

「わかってるよ。ジャノビーがそんな事望んでないことも、単なる
俺の自己満足だってことも。」

――ったく、核心めいた事をズバズバ言いやがって……」

「カグヤは自分の心に正直だから、それにレイジの事を心の底から信頼し尊敬しているから、ああやって彼が否定されるのが許せないのよ」

「ああそうだな、カグヤは筋金入りのレイジ大好き人間だよ」

「意外ね。もしかして気づいてた？」

「当たり前だろ。あんなあからさまな態度見せられたら、誰が見たってカグヤがレイジに惚れてることくらいわかる。

それなのに当のカグヤ本人が気づいてねえんだから……あいつの頭の中ってどうなってるんだ？」

（あなたも似たようなものよ）

自分が抱いている想いにちっとも気づいてくれないのだ、カグヤをどうこう言えるわけがないではないかこの朴念仁が。

「――怒ってるよな。あいつら」

「そうね」

おそろくレイジは初めから怒ってなどいなかったが、勝手な事を言った罰を与えてやらねば。

「はああ……そうだよな」

あからさまに落ち込むカイリ。

こんな風になるなら、あんな言い争いなどしなければいいのに。

そう思うが、カイリに言っても無駄なのでやめておく。

「わたしも一緒に謝るから、元気だしなさいよ」

「いいよ。だってヒメカは何も悪くないじゃねえか」

「あなたの失態はわたしの失態なの、わたしはあなたの幼なじみなんだから」

「うっ……いつもいつも面倒かけます」

「いいわよ、いつもの事だから」

それを聞いて更にうなだれるカイリに、ヒメカは苦笑しながら彼の隣に。

「忘れないでカイリ、あなたはわたしやみんながついてる」

「うん……」

「だから、その怒りも憎しみも自分に溜め込まないでわたしにぶちまけなさい。

わたしはあなたの幼なじみでパートナーなんだから」

「……あんがと、ヒメカ」

嬉しくなり、おもわずヒメカの手に分の手を重ねる。

「っ、ちょ、ちょっとカイリ……」

あっという間に頬を赤らめるヒメカだが、振り払ったりしない辺り満更でもないらしい。

……自分の鼓動がうるさい。

2人っきりの部屋で、彼等は手を握り互いの体温を感じ合う。

カイリは特に何とも思っていないようだが、ヒメカは赤くなった自分の顔を隠すのに必死だ。

（しっかりしなさい！　こ、このままじゃ前と何も変わらないじゃない）

何か進展を、少しでも進展しなければ自分は一生このままだ。

そう言い聞かせ、必死で行動に移ろうとするヒメカだったが。

（~~~~っ、わ、わたしのバカー！）

いつもはクールに容赦なくツツコミをするヒメカであっても、恋愛に関してはズブの素人、かなりのヘタレだ。

結局、ただ時だけが過ぎていき……

ヒメカは、心底自分の恋愛に対する奥手な部分が恨めしく思ったのだった。

【レイジ side】

〈……お父様〉

「……ティナ、急に出てくるとびっくりするからやめて」

何をするでもなく、ソファ―に身体を沈めていると、突然ボールからティナが飛び出してきた。

その表情は、心配の色がありありと現れている。

〈お父様、何故……あの男の事など考えているのですか？〉

「……………」

驚き、思わず視線をティナに向ける。

〈――わたくしはサーナイトです、お父様の表層意識を読む事など雑作ありません。

ラルトスやキルリアだった時も、何度かお見せしたはずですが？〉

そういえば、そうだった気がする。

だがそれ以前に、勝手に人の心を読むなよというツツコミを入れたいが、別に読まれて困る事など考えていないので気にしない事に。

〈お父様。お言葉ですがわたくしにはお父様の考えには賛同できません。

確かに憎しみは憎しみを呼び出し、新たな憎しみを生み出す可能性があります。

ですが、あのような非道な人間にすらお父様は何故その優しさを

向けようとするのですか？」

「別に僕は優しきなんか向けてないよ。ただ……ああする理由があるような気がするだけだ」

「それが優しいと言っているのです、あの人間の心情がどうあれ許されざる行いをしたのですから、お父様も少しは怒ってください」

「怒ってくださいって……まるで僕が彼に怒りを抱いていないみたいじゃないか」

そんな事はない、今だって彼のした事を思い出すと怒りが湧き上がってくる。

しかし、そんな自分を否定するかのように、ティナは首を横に振った。

「はいえ、お父様は怒っておりません。」

確かにお怒りを抱いているのはわかりますが、人間としての怒りを抱いてはいないのです。

わたくしも上手く説明できるわけではありませんが……お父様の場合、怒りよりも悲しみや失望感が際立って表に出ているような……」

自分でも上手く言葉が伝えられないのか、珍しく齒切れの悪い口調で話すティナ。

けれど、その言葉は充分当てはまっている。

たしかに自分は怒っている、きつとみんなが居なければ彼に殴りか

かっっていただろう。

でも……その怒りは、ポケモンや人間に非道な事をしたことに対してではなく。

まるで、人間そのものに失望感を抱いた事による怒りだったと記憶している。

自分でもわからない、この怒りの出所がなんなのか。

へ……申し訳ありません。出過ぎた事を口走ってしまいました

深々と頭を下げるティナに、気にしないでと一声掛ける。

——ダメだ、頭がゴチャゴチャして考えがまとまらない

けれど部屋に帰る気にもなれず、どうしたものかと再びソファーに沈み込んでいくと。

「レ、レイジ……」

「……………カイリ」

俯きながら小さく自分の名前を呼んだカイリの前に立つ。

「どうしたの？」

「あ、いや、その……」

「……」？

どうしたというのだろうか、今日の彼は歯切れが悪い。

何か告げようとしているのはわかるのだが、一体何を言うのか少し緊張したまま待つ。

すると、カイリは意を決したように顔を上げ。

「すまん!!」

馬鹿でかい声でいきなり謝ってきた。

……カイリ、唾が飛んできて汚いよ。

というより、どうして謝ってきたのか意味が分からない。

「どうしたの?」

「いや、どうしたのって……謝ってんだけど」

「? どうして謝るの?」

「どうしてって……さっきお前に……」

「……………ああ」

そういえば、さっき胸倉掴まれたり怒鳴られたりしたっけ……。

「いいよ別に、というか全然怒ってないから謝る必要ないし」

「えっ、マジで……?」

「マジで。何で怒る必要があるの?」

カイリの言っている事だって間違いではない、互いの言い分をぶつけ合ったただけだ。

ならば、どうして怒る必要があるというのか。

「……お前、本当に大人だな」

「そうかな? でも……カグヤは怒ってるかも」

「うっ……」

げんなりするカイリだが、仕方ないと思って諦めてもらいたい。

「……………」

「あ……………」

噂をすればなんとやら、ブスツとした表情を浮かべながら、カグヤがカイリの元へとやってきた。

それを見て、カイリの表情が少しだけ引きつってしまふ。

「え、えっと……あの、カグヤ……」

「私は、自分の言った事に後悔なんかしてない」

「……………」

「でも……さっきはごめん、言い過ぎた……」

「あ、いや……俺が悪いんだし」

互いにペコペコと謝る光景は、正直シユールだ。

……だが、仲直りできたようでよかった。

「それで、さ……勝手な事言ってるのはわかるんだけど、その……また、一緒に旅しても……いいか？」

「うん、いーよ」

「そっか……って、ええっ!!？」さすがカグヤ、すぐさま先程の事など気にしないような発言をするとは。

こういう時、彼女の性格はありがたいと思える。

「だって私達友達でしょ？ 本当の友達なら喧嘩だってするし、仲直りしたなら今まで通りにすればいいだけじゃない」

あっけらかんと言い放つカグヤだが、普通はそんな風に割り切れたりはしないので、カイリとヒメカは彼女を見ながら驚きの表情を浮かべている。

けれど、カグヤは自分の発言で何故2人が驚いているのかわからず首を傾げてしまった。

「ほらほら、カグヤもこう言ってるし、この話はもうおしまいにしよう?」

場の空気を元に戻すように大きく声を出し、2人の間に割って入る。

「……そうね。仲直りしたのだから、もう忘れましょう」

「お、おお……そうだな」

まだ少しぎこちないものの、ようやくいつもの空気に戻ってくれたようだ。

……さて、ではウツギ博士に連絡しなくては。

自分達のせいで、博士の頼みごとを保留にしまったのだから。

「——えっ、本当にいいんですか?」

「もちろんだよ。だからこそ無茶を言って君達にジョウトへ来てもらったんだから」

「まあ、それはそうなんですけど……」

——幸いにも、ウツギ博士はまだコガネシティを出ていなかったの
で、すぐに合流できた

そして改めて、ウツギ博士の頼みたい事とやらを尋ねてみたのだが
……。

その頼みというのは——ポケモンを連れて行ってほしいとの事だった。

「チコリータはカグやくんに、ワニノコはとあるトレーナーに譲ったんだけど、このヒノアラシだけ取り残されて可哀想だからね。

それに僕の研究を進める為にも、是非協力してほしいんだ」

そういえば、チコリータ……というか今はベイリーフだけど、ウツギ博士がオーキド博士に渡したポケモンだと思ひ出す。

「はいはい、じゃあ私が貰います」

「何言ってるんだ、勝手に決めんなよ!!」

「早い者勝ちだよー!」

「ずりいぞー!!」

わーわーぎゃーぎゃーと俺が私かとヒノアラシを取り合う2人。

「醜いわね」

「確かに……」

だが、このままでは煩くてかなわない。

「あのさ、ヒノアラシに決めてもらえばいいんじゃないか？」

それ以前に、ヒノアラシが自分達を選んでくれなくては意味がない。

というわけで、モンスターボールからヒノアラシを出す。

「…………可愛い」

「えっ？」

「あつ、な、なんでもないわ」

「ほーらヒノアラシ、新しいご主人様ですよ」

「すり込みさせようとすんな！！　ヒノアラシ、俺がお前の主人だ
そー」

「カイリだって人の事言えないじゃん！！」

（煩い……）

ヒノアラシの前で醜く争う2人に、揃って冷たい視線を送る。

と、ヒノアラシが突然チョコチョコと歩き出したと思ったら……。

「あら……？」

ヒメカの前で止まり、彼女の足に身体を擦り寄せてきた。

『あーっ！！？』

「決まりのようだね、ヒノアラシはヒメカくんを選んだようだ」

「……………いいの？」

しゃがみ込み、ヒノアラシに問い掛けるヒメカ。

すると、ヒノアラシはこくりと頷き手を上げる。

「レイジ、ヒノアラシは何て？」

「あの2人は嫌だ、お願いします。だってさ」

『――っ!!?!』

その言葉を聞き、ショックを受け倒れる2人。

まああれだけ据わった目で見つめられれば嫌になるよ。

「ヒメカくん、ヒノアラシの事頼んだよ？」

「わかりました。……そうね、あなたの名前はヒノにしましょう」

気に入ったようで、ピッと手を上げるヒノアラシ改め、ヒノ。

こうして、ヒメカに新しい仲間が加わったのだが。

……さつきから地面に突っ伏している2人を早く起こさなくては。

「ちくしょー……ひでえよヒノアラシ」

「いいなあ、いいなあ……羨ましいよお」

突っ伏しながら恨み言を呟き続ける2人。

その姿に、若干引いた。

そんなにショックだったのか……？

2人の姿にため息をつきつつ、周りの視線が痛々しいもの変わったので、さっさと起こそうとしたのだが……。

「あ、あの！」

声を掛けられ、振り向く。

そこには、数人の女性トレーナーの姿が。

「なんですか？」

「すみません、あの時アカネちゃんを助けてくださった方達ですよね？」

「アカネちゃん……？」

……ああ、そういえばケイジとバトルしてた女の子がいたな。

そんな事を考えていると。

「お願いします、アカネちゃんを助けてくださいますか!？」

「……………え？」

なんか、よくわからない頼み事をされてしまった。

第28話 ジムリーダーの意義と全力バトルでお祭り騒ぎ!!

「あの……助けてって、どういう意味ですか？」

意味がわからず、とりあえず事情を訊く事に。

「はい。アカネちゃん……あつ、その子ってコガネシティのジムリーダーなんですけど、今すぐ落ち込んで……」

「落ち込んでる？」

「それで、アカネちゃんを助けてくれたあなた達に力を貸してほしくて……」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。さっきから何がなんだかさっぱりわかんないから、きちんと説明してくれないか？」

「す、すみません……もうどうしたらいいのかわからなくて……」

すっかり頭が混乱しているようだ、カイリの一言で落ち着きを取り戻す少女達。

そうして、きちんと一から説明してもらうと。

まず彼女達——ミミとシズカが言ってるアカネちゃんという少女はコガネシティのジムリーダーで、自分達の師匠らしく前日ケイジと戦っていた子らしい。

しかし、あの時目にしたように彼女はケイジに完膚なきまでに負け

てしまった。

更にあの人を貶めるような暴言で心に傷を負い、ジムリーダーどころかポケモントレーナーとしても自信を無くしてしまったとのこと。自分達も手を尽くしたが意味はなく、そこでレイジ達に助けを求め現在に至る。

「なるほどなあ……」

「許せないわね……!」

「そうだよ。やっぱりあのケイジとかいうヤツ、今度会ったらボコボコにやっつけてやる!!」

「今はケイジなんかの事より、アカネさんの事を考えるのが先決だよ」

「そ、そうだな……けど、何かいい手とかあるのか?」

「こういう場合、言葉だけの励ましじゃ本当に立ち直る事は難しいわね。」

「だとすると、他に何かあるかしら……?」

「うーんと、その場で腕組みをしながら考えるレイジ達。」

しかし、そう簡単に良案が思い浮かぶはずもなく、普段頭を使わないせいかカイリの頭からは煙が立ち上り始めてしまった。

「カイリ、あなたは少し考えるのやめなさい」

「……………」

自分達だけでは思いつかない、だとすると先輩トレーナーから何か助言が貰えれば……。

「……………そうだ」

「レイジ、何か思いついたの？」

「良案になるかはわからないけど……先輩トレーナーからアドバイスを貰えたらと思って」

「けど先輩トレーナーに知り合いなんて——」

言いかけ、カイリもようやく気づく。

そう、知り合いはいる。それもとびきり凄まじい経歴のトレーナーが。

「今の僕達じゃこれ以上考えても答えは得られない。だからあの人に力を借りよう」

「あの……一体どんな人なんですか？」

疑問に思い、レイジに問い掛けるミミ。

すると、レイジはほんの少しだけ微妙な表情を浮かべながら、質問に答えた。

「……シンオウリーグチャンピオンの、シロナさん」

「……………え？」

そうと決まれば善は急げ

、ポケモンセンターに戻りテレビ電話に駆け込むレイジ。

「で、でも本当にリーグチャンピオンとお知り合いなんですか……」

目の前の彼が嘘をつくような人には見えないが、かといって信じられるような話でもない。

「まあ普通信じられねえよな、けどこれが本当なんだよ」

そうこう話しているうちに、テレビ電話が繋がったようだ。

『あら、レイジくん。どうしたの？』

黒の服で統一された金髪の美女が、画面に映りミミとシズカは目を見開いた。

「ほ、本当にリーグチャンピオン……」

『？ あら、暫く見ない内にまた女の子のメンバーが増えてるわね

……』

「違います。彼女達は少し事情があって一緒に居るだけです。それよりシロナさん、今時間ありますか？」

『ええ。というよりレイジくんとの時間なら何よりも最優先にしたいと』

「は、はあ……」

(むっ……)

なんだか面白くない、そう思ってしまうカグヤをよそに話は続く。

「実はですね——」

——先程聞いた話を、シロナに説明する

『……なる程。つまりその子はトレーナーとしての自信をすっかり無くしてしまっていると……』

「はい。でも僕達じゃ立ち直らせるいい方法が思いつかなくて……シロナさん、何かありませんか？」

レイジの言葉に、シロナは顎に手を添えて思考に耽る。

チャンピオン相手にこんな相談をするのは正直気が引けたが、背に腹は変えられない。

それに彼女なら、きちんと相談を聞いてくれると思えたからこそだ。

『そうね。そんな事があれば確かに自信を失ってしまったても仕方ないわ。』

それに、言葉だけの励ましじゃ効果はない』

「はい。僕達もそれがわかっているから、困ってて……」

『言葉だけじゃダメなら、それ以外の方法を用いればいいのよ』

「それ以外の方法？」

『レイジくん、あなたとそのアカネという女の子はポケモントレーナーよ。』

なら、トレーナーらしい励まし方がきつとあるはず』

「トレーナーらしい、励まし方……」

『そうよ。あなたならもう気づいているんじゃない？』

そして、後ろにいるみんなも』

「えっ……？」

「けど、トレーナーらしい励まし方って……」

急に振られ、考えるカイリ達だが、その答えがわからない。

しかし、レイジにはすぐにシロナの言葉の意味を理解する。

トレーナーらしい励まし方、それはきつと――

「――あつ、なる程」

『カグヤはわかったみたいね？』

「はい！ そっか……難しく考える必要なんかないんだ。

アカネちゃんもポケモンが大好きでトレーナーになって、ジムリーダーになったんだから、それを思い出させればいいんだよ！！」

「はあ？」

「思い出させるって……あ、もしかして……」

ヒメカが何かに気づき、その一瞬後にミミとシズカもシロナの言葉んとしている事に気が付いた。

「ええっ、わかんないの俺だけかよ！？」

「落ち着いて考えてみなさいカイリ、そうすればわかるはずよ」

「落ち着いて考えろって言われてもな……」

わからないものわからないんだー、と言ってやりたい気持ちを我慢して、精一杯思考を巡らす。

「……………あ」

そして、ようやく気が付いたのか顔を上げた。

「気づくのが遅いわよ、まったく……」

「しょ、しょうがねえだろ……」

「シロナさん、ありがとうございました」

頭を下げる。

『いいえ。私はただ助言をしただけ、この後上手くいくか失敗するかはあなた達にかかっているわ。頑張ってね』

「はい」

「よっしゃ、それじゃ早速ジムに殴り込みだあっ!!」

我先にとセンターを飛び出すカイリ。

「殴り込みなんて物騒な言い方しないでよ」

そんなカイリにツツコミを入れつつ、ヒメカも後を追う。

カグヤ達もそれに続き、レイジ1人になったところで——シロナへと口を開いた。

「シロナさん、これが終わったら……聞いてほしい事があるんです」

『えっ………』

真剣な表情でそう告げるレイジに、シロナはキョトンとしてから……僅かに頬を赤らめる。（聞いてほしい話？ それにレイジくんのこの真剣な表情……も、もしかして）

いや待て落ち着け、早とちりはよくない。

『レイジくん、その話って……大事な話？』

「はい。とても大事な話です、おいそれとは話せないくらいの。けど、シロナさんには聞いてほしいんです」

『—————』

まさか、まさかまさか？

レイジの言う「大事な話」とやは……。

（こ、告白……？ いやでもとても大事な話でおいそれとは言えな
いって言ってるし……。

ど、どうしよう。いきなり言われても心の準備が……）

「そういうわけなので、お願いします」

『え、ええ……私も、覚悟を決めておくわ』

「？ はあ……お願いします……」

一体何の覚悟を決めるというのか、シロナの意味不明な発言に首を傾げながら、レイジは電話を切ってカグヤ達の後を追ったのだった。

そして、電話を切られたシロナはというと……。

「ど、どうしよう……いきなりで心の準備もできてないのに……」

すっかりレイジが後で告白をするのだと勝手に決めつけ、頬に両手を置きながら首を左右に振っていた。

しかし幸か不幸か、そんな彼女にツツコミを入れる人間はいない。

「落ち着きなさいシロナ……わ、私の方が年上なんだから、大人の余裕というものを……」

結局、彼女のボケは流され続け、暫くあれやこれやと想像しては顔を赤らめたり怪しい動きをしているシロナであった。

まあしかし、チャンピオンである彼女がこんな奇怪な動きをしている姿を誰にも見られなかったのだから、幸運かもしれないが……。

「ちょ、ちよつとミミ、シズカ、一体何の騒ぎや？」

場所は変わってコガネジム。

リーダー専用の部屋に籠もっていたアカネだったが、突然ミミとシズカの2人に強引に連れ出され困惑気味。

「アカネちゃんがいつまでも塞ぎ込んでるから、私達助っ人を呼んだの！」

「きつとアカネちゃん、今まで通りのアカネちゃんに戻るよ」

「……………」

嬉しそうな2人の言葉を聞き、アカネはその場で立ち止まる。

「アカネちゃん？」

「……ごめんな2人とも、気持ちにはめっちゃ嬉しいんよ？
けど……うち、もうバトルはしたないんや……」

バトルをしようとすれば、あの男の言葉が否が応でも思い出される。

それが恐い、どうしようもないほどに。

「その助っ人さんにも悪いけど帰ってもらってくれへんか？
勝手な事言ってるのはわかってる、けど今はまだ……」

「そういうわけにはいかないよ！」

アカネの腕を掴み、再び歩を進めるミミとシズカ。

「ちょ、何すんねん!？」

「だってここで立ち直らなきゃ、アカネちゃんはもう二度とトレナーに戻れないよ!！」

「私達は友達としてアカネちゃんを助けたいと思ってる。

それに助っ人さん達もアカネちゃんがポケモンが大好きでトレナーになったって知って、助けたいって言ってくれた。

そんな人達の気持ちを無駄にはできない！」

「け、けど……」

反論しようとするアカネだが、既にバトルフィールドへと着いてしまいいきなり叶わない。

そして、相手側の所には既に1人の少女がアカネを待つかのように立ち構えていた。

「はじめましてアカネちゃん、私はカントーのマサラタウンから来

たカグヤっていうの、よろしくね!!」

「よ、よろしく……じゃなくて、悪いけどうちは今ジム戦はできへんの。」

勝手な事言っただけ悪いとは思いますが、帰ってくれへんか？」

「それならいいよ。私はジムリーダーとしてのアカネちゃんに挑戦したいと思ってるわけじゃないから」

「えっ？」

「私がバトルしたいって思っているのは、ただのポケモントレーナーとしてのアカネちゃんに挑戦したい。」

ポケモンが大好きでトレーナーになったアカネちゃんと」

「……………」

そこでようやく、アカネはカグヤ達を見てあの時自分を助けてくれた人達だと気が付いた。

……だが、それでも。

「……ごめんな。気持ちには本当に嬉しいんだよ。」

うちなんかの為にわざわざそんな事言ってくれて……けど、それでも恐いんだよ。

負けた事がやない、ああやって……自分のポケモンを傷つかれる光景を見るんわ恐いんだよ!!

だから、もう……うちはバトルできへん」

「アカネちゃん……」

彼女の気持ちがわかるからこそ、傍らに居る2人は何も言えなくなってしまう。ポケモンが大好きだから、ああやって死ぬ寸前まで痛めつけられた事がトラウマになりバトルに対しても恐怖心を抱いている。

カグヤもその言葉を聞き、一瞬躊躇いを見せるものの。

「――逃げて、後悔しか残らないよ」

それは本当の意味で彼女のためにならないとわかっているから、再び口を開いた。

「えっ……？」

「逃げて何も残らない、後悔ばかりが頭を占めて自分自身を苦しめる。」

そして、もう前の選択には戻れなくなるよ」

そう、逃げる事は誰だってできる。

逃げる事は間違いではない、罪でもない。

けれど、逃げた事で得られるものや生まれるものは――後悔だけ。

それをわかってほしい、それに気づいてほしい。

だからカグヤは口を開く、たとえ恨まれても構わない覚悟で。

(…………カグヤ)

「なんかあいつ、今日は雰囲気違うな……」

「自分に任せてほしい」って言った時も、有無を言わせない迫力があつたし……」

「……あの子だって、何不自由なく平和に過ごしてきたわけじゃないって事よ。

人は誰しも大なり小なりそういう所は持つてるわ。……あなただつてそうだったでしょ？」

「……………だな」

「アカネちゃん、ここでおもいつきりバトルしようよ。

ジムリーダーと挑戦者じゃなくて、お互いただのポケモントレーナーとして、正々堂々全力でぶつかり合ってみようよ。

それで何かが変わるかはわからない、それでも今のままならきつと後悔するから……」

「……………」

アカネの心が揺らぐ。

「私もね、前に何回も後悔した事があつたの。

それで自信なくしちゃって、トレーナーをやめようかななんて本気で思った時もあった。

でもね——そうしたら今までの自分は全部無くなっちゃうから、ポケモンが大好きでトレーナーになった自分も、バトルに勝って嬉しいって思った時の気持ちも、全部無くなっちゃうから。

——だから、私はどんな事があっても逃げないんだ」

それは誓い、誰に話したわけでもない、自分自身に捧げた誓いだっ
た。

人である以上後悔しない選択など選べない、ならばせめてこの誓い
だけは胸に刻む。

そして、今もまたその誓いを果たす時だ。

この少女を救いたい、自らが信じた道を自らが壊してほしくない。

だから戦う、もう一度取り戻す為にも。

戦う意志を見せなくても、その意志を見せるまで何度でも語りかけ
る。

「……アンタ、筋金入りのお人好しやな。普通、こないに他人の為
にできへんで？」

「そうかな？ でも私の幼なじみの方がよっぽどお人好しだよ？」

「なんやねんソレ、アンタ以上のお人好しなんて信じられへんわ」

そう言って笑うアカネの声は、明るい。

「……よし、ならおもいきりガチンコバトルと行こか！！」

まだちよつと恐いけど、こんなんでビビるなんて情けないもんな
！」

「アカネちゃん……！！」

「ミミ、シズカ。ホンマありがとう。うちのせいで迷惑かけてごめんな」

「私達の事は気にしないで、それより……頑張って!!」

「当然や!!　ほんならカグヤちゃん、1対1のバトルと行こか？」

「互いに切り札だけだね……いいよ!!」

互いに、自分の信じる最強の手持ちが入ったモンスターボールを構える。

「――どうやら、上手くいったみたいだな」

「あの子の明るさは本当に力になるからね、わたしも羨ましいと思っってしまうくらいに……」

「けど全力バトルか……くーっ、なんか観てるだけでもワクワクしてくるぜ!!」

（――さて、どこまでやれるか）

彼女、アカネは強い。

おそらくカグヤは勝てないだろう、彼女の頑張りを否定するわけではないが、それでも勝てるとは思えなかった。

しかし、彼女にとってはどうでもいい事だろう。

今はただ、アカネと全力でバトルをして彼女を立ち直らそうとしか

考えてないだろうから。

.....。

「ミルタンク、いくでえっ！！！」

「ベイリーフ、レディーゴー！！！！」

同時に出されるポケモン達。

「ベイリーフ、はっぱカッター！！」

「ミルタンク、まもるや！！」

先手をとったのはカグヤ、はっぱカッターを放つがミルタンクのまもるが全て弾く。

「それなら——たいあたり！！」

「ミルタンク、こっちもたいあたりや！！」

ぶつかり合うベイリーフとミルタンク。

だが——押し負けたのはベイリーフの方だった。

「続いてずつき！！」

吹き飛ばされるベイリーフがバランスを立て直す前に、ミルタンク

のずつきが再びベイリーフをフィールドに吹き飛ばした。

「あのミルタンク、すげえパワーとスピードだ」

「ええ、完璧にカグヤのベイリーフを上回っているわね」

「ベイリーフ、つるのムチ!!」

体勢を立て直したベイリーフがつるのムチを放ち、あっさりとミルタンクの両腕を拘束した。

「っ、拙い——!!」

「は？」

「ミルタンク、10万ボルトや!!」

レイジの声とアカネの指示はほぼ同時に放たれ、ミルタンクは自らの身体を発電させる。

そうなれば当然、つるのムチを経由して電撃はベイリーフに襲いかかる。

「次はシャドーボールや!!」

完全に怯んだベイリーフ目掛けて、ミルタンクはシャドーボールを撃ち出す。

「エナジーボール!!」

だがベイリーフとてまだ負けていない、エナジーボールを撃ち出しミルタンクのシャドーボールを相殺させた。

爆発音と共に、煙がフィールドを包む。

「ベイリーフ、マジカルリーフ！！！！」

煙で相手が見えない中、ミルタンクへと攻撃を仕掛けるベイリーフ。

「甘いでカグヤちゃん、その攻撃で居場所はバレた。

ミルタンク、攻撃を避けてその場所にれいとうビームや！！」

確実にマジカルリーフを避け、間髪入れずにそちらへれいとうビームを放つミルタンク。

「ヤベーーーー！！？」

「決まった……？」

「……………いや」

れいとうビームが命中する。

手応えを感じたのか、口元に笑みを浮かべるアカネとミルタンクだったが。

煙が晴れた先には——ベイリーフの姿はどこにもなかった。

「えっ！？」

「ずつき!!」

しまった、気づいた時にはもう遅い。

側面へと移動していたベイリーフのずつきがミルタンクに突き刺さり、フィールドを破壊しながら吹き飛ばしていく。

「あれ!? 攻撃が命中したと思ったのに……」

「いや、確かに命中はしたさ……」

「へ? それってどういう意味だ?」

「なるほど……みがわりね」

ご明察、ヒメカにそう告げ再びカグヤの試合に集中する。

――あの時

カグヤは相手にわざと居場所を教える為にマジカルリーフを放った。

もちろん当たればそれに越した事はなかったが、案の定アカネとミルタンクには通じず反撃を許したのだが……。

それは想定内、すぐさまみがわりをその場に置き煙が晴れていない箇所を走りながらミルタンクの視界から外れる。

そしてれいとうビームが放たれた位置を見て相手の場所を特定し、攻撃を仕掛けたのだ。

「エナジーボール!!」

倒れたミルタンクに追い討ちを掛けるカグヤとベイリーフ。

ずつきのダメージが大きかったのか、エナジーボールをまともに受けるミルタンク。

「っ、ミルタンク。ガッツや!!　ここで根性見せんとアカン!!」

全力で叫び、ミルタンクを激励するアカネ。

そこでふと――ある事に気づいた。

(……ああ、そうや。うち……こない楽しいバトル久しぶりやなあ……)

心の底から楽しめ、熱くなれるポケモンバトルなど、いつ以来か。

(アホやなあ、こない楽しい事を自分からやめようとするなんて……ホンマに、うちはアホや)

だが気づけた、気づかせてくれた。

ならば彼女に精一杯の感謝を込めて、まだまだこんなに楽しいバトルをやめるわけにはいかない。

「はっぱカッター!!」

「まもるや!!」

不利な体勢ながらもベイリーフのはっぱカッターを全て防ぐミルタ
ンク。

「凄い……………！」

「アカンでカグヤちゃん、うちはまだまだ負けへんよ!!」

「こっちだって、負けないんだから!!」

「よう言うたわ!! ならこっから本番や、バリバリいくで!!」

「望むところ!!」

「……………あいつら、本当に楽しそうだな」

「ええ。……………少し羨ましいわね、あんなに楽しそうなバトルが
でき
て」

「……………」

何も言わず、ただ黙ってカグヤのバトルを観戦するレイジ。

その視線はどこまでも優しく、そして暖かなものだった。

……………。

(……………くっ)

そろそろ限界だ。

ベイリーフは、あと大技が一度放てるかどうかといったところ。

対するミルタンクは、まだまだ余裕の色が見える。

「――よし。ベイリーフ、小細工なしで最後の攻撃を仕掛けるわよ!!」

ここまで来たなら後は真っ向勝負、単純なるごり押しで行く。

すぐさまベイリーフは、最後の勝負を仕掛けようと最強技のソーラービームの準備に入る。

「させへんで。ミルタンク、こるがるや!!」

身体を丸め、ベイリーフへと向かっていくミルタンク。

だが――見えない壁に阻まれ、弾き返されてしまった。

(っ、リフレクター!? いつの間に展開しとったんや……………!!)

だが、これでソーラービームを阻止する時間が無くなってしまった。

「しゃあない。ミルタンク、こっちも迎え撃つんや!!」

ベイリーフから離れ、力を込めるミルタンク。

「あれは……まさか、ソーラービーム!?」

「ソーラービームの撃ち合いか……これは単純な力勝負だね」

「まったく、あの2人って似てるわね」

呆れながらも、カグヤの表情は明るい。

「——お前、どっちが勝つと思う?」

「アカネだね」

「即答かよ……少しは幼なじみを信じるとかないのか?」

「もちろんカグヤには勝ってほしいさ、でも現実はそんなに甘くないよ」

「じゃあ俺はカグヤに賭けるぜ、負けたらサイコソーダ奢れよ?」

「いいよ。じゃあ僕が勝ったらハイパーボール1ダースね」

「全然賭けの規模が違うじゃねえか!!!」

カイリのツツコミがレイジの耳に届いた瞬間。

「ベイリーフ!!!」

「ミルタンク!!!」

準備を終えたカグヤ達の声が響き。

「フルパワーの――」

「全力ガッツの――」

『ソーラービーム!!』

互いにとっての必殺の一撃が、放たれた――
ぶつかり合う両者のソーラービーム。

「ベイリーフ、負けないで!!!」

「ミルタンク、ファイトや!!」

譲れない、互いに自分達の勝利だけを信じて戦い続ける。

「こ、これは……いつまで続くんだ!？」

「……………終わりだ」

「――」

ぽつりと、残念そうにレイジが呟いた瞬間。

フィールドは大爆発を起こし、再び煙が全てを包み込んでいく。

その煙は観客席に居るレイジ達の所にまで及び、視界が灰色に包まれてしまった。

「ケホッ、ゲホッ、バ、バトルは………!!」

「……………」

煙の中席を立ち、観客席からバトルフィールドへと移動するレイジ。そして――彼女に労いの言葉を掛けた。

「――惜しかったね。でもよく頑張ったよ、カグヤ」

――煙が晴れていく

ようやく視界が良好になり、ホッとするカイリだったが。

「あ……………!!」

「……………」

フィールドでは、カグヤの負けを意味するようにベイリーフが目を回し気絶している光景が映っていた。

「ベイリーフ、戦闘不能。ミルタンクの勝ち!!」

よって勝者、ジムリーダーのアカネ選手!!」

「あゝあ……あともう少しだったのに……」

「お疲れ様。でもいいバトルだったよ」

「本当？　そっか、レイジがそう言ってくれるならすごく嬉しいよ」
負けたのは悔しそうだが、カグヤはすぐさま笑顔を見せてくれた。

「――カグヤちゃん。ありがとう」

ベイリーフをボールに戻していると、アカネがこちらへとやってきた。

「アカネちゃん……」

「うち、こないに楽しいバトルは本当に久しぶりやったよ。
――うちなんかの為に色々してくれて、ホンマに感謝してる」

「ううん。私だけの力じゃないよ、レイジやみんながアカネちゃんの事を助けたいって思ったからだよ」

「……うん。嬉しいわ……ホンマに」

あまりの嬉しさに涙ぐむアカネ。

「あらあら」

「アカネちゃんってば、本当に泣き虫なんだから」

「しゃ、しゃあないやんこれは!!
それに嬉し涙やからええの!!」

涙目で起こるアカネを見て、ジム内で笑いが飛び交う。

バトルではカグヤの負けになってしまったが、きっと彼女の事だから何かを得る事ができただろう。

(これにて、一件落着かな……?)

……。

ポケモンセンターに戻り、現在レイジはテレビ電話の前に1人で居る。

そしてすぐさまある人物に電話を掛けると。

『や、やつほー……レイジくん……』

ワンコールでシロナが出てくれた。

「……シロナさん、どうかしましたか？」

なんだか彼女の様子がおかしく、レイジは尋ねる。

何せ今のシロナは顔を赤くして、なんだかもじもじと落ち着かない様子なのだ、気になってしまうのは仕方ない。

『だ、大丈夫……私は落ち着いてるから』

落ち着いてるとか言いながら、さっきより落ち着いていないではないかというツツコミが出そうになる。

『そ、それよりレイジくん……わ、私に話したい事って、何?』

「ええ、実は……」

『あつ、や、やっぱり少し待って! まだ心の準備ができてないから!』

「は………?」

なんだか今日の彼女は変だ。

『……ごめんなさい。いいわよ?』

「はあ……それじゃあ言いますけど」

『……………』

ゴクリと、おもわず喉を鳴らすシロナ。

しかし——当然といえば当然のごとく、彼女の考えている事とレイジが言おうとしている事はまったく違う内容なのだが……彼女はまだ気づかない。

そして――

「――シンオウに伝わる神話、そこに出てくるディアルガとパルキアの事を、教えてくださいませんか？」

レイジは、自らが考えた仮説が当たっているか確かめる為に、彼女にそんな問いを投げかけた。

第29話 シンオウ神話くディアルガとパルキアとギラティナく

『……………え?』

「……………えっ?」

何故か、ポカンとした表情を向けられてしまった。

……別に、今の自分の質問が変だったわけではないはず。

だというのに、シロナが浮かべている表情は、キョトンとしたものだった。

『……………えっと、大事な話って……………それ?』

「は、はい……………そうですけど」

『……………』

(えええ、何故ショックを受けたみたいな顔になるの?
一体どんなリアクションをすればいいんだろうか……………)

というか、何故今の会話でショックを受けているのかさっぱり理解できない。

「あ、あの……………シロナさん?」

『……………』

「えっと……」

一体どうすればいいというのか、すっかり困っているとシロナはようやく口を開いた。

『……いいのよレイジくん、あなたは何も悪くないの。
勝手に早とちりした私が馬鹿だったのよ』

「は、はあ……」

『とにかく気にしないで、というか今のやりとりは忘れてお願い』

「は、はい……わかりました」

なんだか有無を言わせない迫力なので、頷かざるおえない。

場を仕切り直す為に少し大袈裟にコホンと咳払いをして、シロナはいつも通りの表情をレイジに向けた。

『ディアルガとパルキアの事を知りたいのよね？』

けどどうして？ 考古学に興味を……持ったわけじゃなさそうね』

「はい、まあ……。けど確かめたいんです、ディアルガとパルキアがどういったポケモンなのかを」

『その理由は？ 詳しくとなるとそれなりの理由がなければ教えないわ』

「……実は僕達、今ジョウト地方のコガネシティに居るんですが、ここでカイリがあるトレーナーと戦ったんです」

『あるトレーナー？ それにどうしてジョウト地方に居るの？』

「ウツギ博士に頼みたい事があるからって言われまして。

それでそのトレーナーというのが……普通じゃない力を持っていたんです」

『普通ではない力……それは、レイジくんやカイリのような？』

こくんと頷き、レイジは話を続ける。

「僕はポケモンと会話をする能力、カイリは未来を視る能力をそれぞれ持っています。

そしてそのトレーナー、ケイジは……推測の域なんです、空間を渡る能力があるみたいなんです」

『空間を、渡る？』

「テレポートという技がありますよね？ 見た目はあれとまったく変わらないんですが……普通とは違う点は、ケッキングのようなレポートが使えないポケモンが、瞬間移動したかのように一瞬で移動したんです」

普通では考えられない現象だ、ケッキングが一瞬で移動する事などありえない。

それに、カイリが視た未来を変えるなんてそれこそ同じかそれ以上の力がなければ不可能だ。

『……そう。そんな事があったのね。』

けど、それがどうしてディアルガと――」

そこまで言いかけ、シロナはハツとしたように表情を変える。

「もし、ケイジの能力が『空間を渡る能力』だとして考えると……あるポケモンに行き着くんです」

『――ディアルガと、パルキア』

シロナの呟きに、頷きを返すレイジ。

そう、カイリの『未来を視る能力』

そして、ケイジの『空間を渡る能力』

「――時間を司るポケモン、ディアルガ。

空間を司るポケモン、パルキア。

その二体がそんな能力を持っているかはわかりませんが、どうしても頭から離れないんです」

だからこそ、ディアルガとパルキアの事をよく知る人物であるシロナに、話を聞いてもらおうと思ったのだ。

話を聞いたシロナは暫し思考に耽るが、少し待っててと言いつつ残しどこかへと行ってしまった。

暫し待つと、シロナは何か書類のようなものを持って戻ってきた。

「それは？」

『私とナナカマド博士が学会に提出したディアルガとパルキアに対する論文よ。』

——ああやっぱり、レイジくんの言っている事は正しかったわ』

「……………」

『古代遺跡に書かれていた文章によると、時間を司るディアルガには過去や未来を視たり渡れる力を持っているらしいの。』

そしてディアルガも、様々な空間を渡り同時に空間そのものを作る力を持っているの』

「……スケールが大きすぎですね」

さすが神と呼ばれるポケモンというべきか。

しかし、これで推測がただの推測ではなくなった。

だが——それと同時に、また新たな疑問も浮かび上がってくる。

たとえば2人の力がディアルガとパルキアの力と酷似しているとしても、それと同じという確固たる証拠がない。

結局、謎は謎のまままで終わってしまったが、それでも収穫はあったと思う。

『でもこれは凄い共通点よ、ここまで揃っているとレイジくんの推測が正しい可能性が高い。』

けど……そうなるちょっと待って』

「……………?」

『もしカイリがディアルガの、そのケイジという少年がパルキアの力を持っているとして……なら、レイジくんは？』

「――」

シロナの言葉に、そういえば自分が抜けていたなと思い出す。

「けど、シンオウ神話にはディアルガとパルキアしか存在しないんでしょう？」

なら、僕の事は2人以上にわからないってことじゃ……」

『確かに、シンオウ神話にはディアルガとパルキアしか知られていないわ。でもそれが神話の全てじゃない、まだ私達だって完全に理解したわけではないから』

「えっ？」

『シンオウ神話は一般的に伝わっているけど、それが全てではないの。』

ディアルガとパルキアだけでは矛盾する所もあるし、それに……
ギラティナの事もある』

「ギラティナ？」

聞いた事のない名前だ、それもポケモンなのだろうか……。

『ギラティナは私達が住んでいる世界とは違う世界――反転世界に居ると伝わっている伝説のポケモンよ』

「反転世界……?」

『私達の世界とは真逆の世界であり、その反転世界と私達の世界が互いに互いを支え合って存在しているの。』

ギラティナはその反転世界を守っている守護者らしいわ』

「ギラティナ……反転世界……ディアルガ、パルキア……」

『……レイジくん?』

「……………」

何故だろう。

その言葉が、妙に頭の隅で引っかかる。

自分は、どこかでその言葉を知っているような……。

いや、知っているのではなく、それは“私”が。

『レイジくん?』

「っ、あ———」

『どうしたの? 急に黙ったりして……』

「あ、いえ……」

今、自分は何を見ていたんだ?

欠けた光景、かみ合わないパズルのピースのように歪でグチャグチャな思考。

――忘れる

そんなもの自分は知らない、ならば考える理由など……覚えている理由などない。

そう自分に言い聞かせ、無理矢理自分の見たものを忘れた。

『――レイジくん、あなた達はこれからどこに行くの？』

「エンジュシティに向かおうと思ってます、そのままアサギシティまで行って……そこからカントーに戻るつもりです」

『そう……わかったわ』

「シロナさん、忙しいのにありがとうございます」

『気にしないで、私でよかったですでも相談に乗るから』

ありがとうございます、もう一度お礼を言ってレイジは電話を切る。

「……………」

一方、電話を切ったシロナはどこか胸騒ぎを感じ電話から離れた。

（ディアルガ、パルキア、ギラティナ……まさかレイジくん達に係してるの？

それに、もし推測が当たっているとしたら、レイジくんのあの力

は一体何?)

今でも鮮明に思い出せる、レイジの奇跡のような力。

カイリの力も普通ではないが、レイジのあの力はそれすら上回るほどの規格外なものだ。

そんな力を持つポケモンなど、シロナもナナカマドも知らない。

「……………」

部屋に戻り、旅行に使うようなバッグを取り出し洋服を中に詰めていく。

ダメだ、こんな所であれこれ考えても埒があかない。

確かめなくては、そして彼の傍に居てやらねばと思った。

ただ会いたい……そうではないと言えば嘘になるが、それ以前に彼の傍に居てやらねばならないという思いに駆られてしまったのだ。

そう思い、シロナはすぐさま旅の準備を始めたのだった。

「……ごちそうさま」

「あれ、レイジもう食べないの?」

まだ大分残っている、半分も食べていない。

「ちょっと食欲がなくて……でも具合が悪いとかそういうわけじゃないよ」

そう言い残し、席を立つレイジ。

「いないなら私にちょうだい？」

「……………どうぞ」

「意地汚いわよ、女の子なんだからそういうのはやめなさい」

「だって勿体ないし……………」

「そういう問題じゃ……………って、言ったそばから食べないの！！」

「あたっ！」

頭を叩かれるカグヤに、レイジは僅かに苦笑しながら食堂を後にする。

「……………なんか、帰ってきてから様子おかしいよな、レイジの奴何かあったのか？」

「つんぐ……………別に何もなかったと思うけど？」

「そうね。……………だから、勿体ないからってそういう事はしない！」

「いたっ！」

またも頭を叩かれるカグヤに、ヒメカは呆れたようにため息をつく。

「レイジの様子がおかしいのに、心配じゃないの？」

「いてて……心配だよ？」

「心配ならどうして追いかけないんだ？」

「だって今追いかけても意味ないもん、今のレイジは誰とも話したくないオーラが身体から滲み出てるし」

「ふうん……」

カグヤはカグヤなりにきちんと考えていたようだ。

「それに、まだレイジのごはんが残ってるし」

「……お前、もしかしてそれが本音か？」

それには答えず、カグヤはレイジが残した食事を口に運んでいく。

それを見て、カイリとヒメカはレイジへと同情を送ったのだった。

……。

「――さすが都会。夜なのにこんなに明るいよ」

へわたくしはあまり好きではありませんね、自然の美しさには到底及びません」

街の外に向かいながら歩を進めるレイジとティナ。

〈お父様、わたくし達周りからはどんな風に見られていると思います？〉

「どうって……トレーナーとポケモンじゃないの？」

〈むう……〉

睨まれた。

首を傾げながらも、そのまま気にせず街の外へ。

さすがに外は人工の明かりは少なく、前を向くと闇が広がっている。

レイジはコガネシティからそう遠くない芝生の上に寝転がり、空を見上げた。

隣にはティナが腰を下ろし、そんな彼を優しく見守っている。

「……綺麗な満月だ」

ぽつりと呟きながら、空に広がる満月と星達を見上げる。

せっかくこんなに綺麗な星空が見えるのだから、みんなも出してあげよう。

そう思い、レイジはモンスターボールを投げ自分のポケモン達を外に出してあげた。

〈父上、本日はどういったご用件ですか？〉

相も変わらず忠義の騎士のような立ち振る舞いのアクセルに苦笑しつつ、再び寝転がった。

〈あ、あの……〉

「別に用があつたからじゃないよ、けど今日は綺麗な夜空だから、みんなで見ようと思ったんだ」

——レイジ、綺麗な満月だね。

そう言いながら、ヒカリはレイジのお腹に座り込む。

〈ああ、ヒカリっては何て羨ましい……〉

「ティナ、言っておくけど今の君にやられたら大変だからやらないでね？」

〈……もちろん、です〉

「今の間は何？」

〈い、いえ……なんでもありません〉

誤魔化そうとするティナだが、バレバレだと気づいていないのだろうか。

いやよそう、余計なツツコミをしてややこしい事態にするのは得策

ではない。

「ニャー！」

「ピカ!？」

「わっ!!」

突然レイジの視界に現れるピンク色の物体が、ヒカりにたいあたりを仕掛ける。

身構えていなかったヒカりは、それにより芝生の上をピンク色の物体と一緒に転がっていく。

しかし、その物体には見覚えがあった。

「……何してるのさ、エネコ」

——カグヤちゃんと遊びに来たニャー。

そう言いながら笑顔……かどうかはわからない、何せ細目なので。

とにかくエネコはそう言いながら、レイジにじゃれついてきた。

——こらーエネコ、ぶつかっておいて謝らない挙げ句にレイジにじゃれるなー!!!!

ご立腹のヒカリがエネコに襲いかかるが……軽い身のこなしで避けられてしまった。

「エネコー、おイタしちやダメだよ」

「…………カグヤ」

ニコニコと微笑みながらレイジの隣に座り込むカグヤ。

「お隣いいですか？」

「もう座ってるのに？」

「あはは、それもそうだね」

「ったく…………」

相も変わらず、彼女は底抜けに元気だ。

だが、今はその元気には少しだけ救われる。

「——それで、シロナさんと何話してたの？」

「っ、見てたの？」

「うん、サングラスとマスクを付けて物陰から眺めてた」

「…………それはボケ？」

「当たり前でしょ。本当にやったら犯罪者の仲間入りだよ」

「わからないよ、本気なのかボケなのか…………」

そうかなあ、と本気で呟いている辺り、やはり彼女の思考回路は理解できないと思った。

「それで、何を話してたの？　もしかしてレイジの様子がおかしいのはシロナさんのせい？」

「違うよ。シロナさんのせいじゃない、ただ……ちょっとね」

「ちょっと、じゃわからないよ。レイジにはちゃんと説明する義務があります」

「……………」

拒否権は、ないようだ。

それに後ろにいるティナ達も「話せ」と目で訴えてきているので、レイジは観念してシロナとの会話の内容をカグヤへと話す。

「――へえ、よくそんな仮説が浮かぶね。

レイジ、将来博士になれば？」

「ならないよ。それでちょっと……自分自身が恐くなっただけ」

「恐い？」

「……自分の力が、恐くなったんだ。

もし僕の仮説が正しいとしたら……じゃあ、僕の力は一体何なんだと思って……」

「あ………」

そうだった、彼の言葉でようやく気づく。

カイリの能力はディアルガ、ケイジの能力はパルキアだとして……
ならばレイジは？

ポケモンと会話をし、その言葉を理解する能力。

そして——時折見せる理解不能な能力。

それがわからなくて、レイジは自身に恐怖を抱いている。

「でも、レイジの力は凄く素晴らしいと思える能力だよ？
なら、そんな風に気にしなくても……」

「わかってる。僕だってこの能力は素晴らしいと思ってるよ。
だけど、どんどん僕の意志には関係なしに力を得ていく……。
このままじゃ、いずれ誰かを傷つけるような力を得てしまうかも
しれない……。そうになったら、僕は一体どうなるのか……。それが、恐
い」

「……レイジ」

彼はどこか心の片隅で自分を知りたいと思っていた。

だが今では、自分を知る事が恐くなっている。

自分が何者なのか、それがわからなくて……。ただ怖い。

.....。

長い沈黙。

だがそれを破ったカグヤの言葉は、レイジにとって意外なものだった。

「うーん……レイジが自分自身の力に怖いと思ったのはわかったよ。けど、別に気にしなくてもいいんじゃない？」

なんとも軽い口調で、軽く返された。

「だって力を手に入れたってレイジはレイジだし、もしかしたら……なんて考えてもこの先どうなるかなんてわからないんだから」

「それはそうかもしれない、でも……もし本当に誰かを傷つけるような力が芽生えて、しかも僕が制御できずに暴走したらどうするの？」

「そんなの決まってるじゃない、暴走してるレイジを元の優しいレイジに戻す。」

たとえば何度暴走したとしても、私が何度だって止めてあげる」

変わらない軽めの口調。

しかしその瞳に宿す光は強く、彼女が本気で言っているのが理解できた。

「私にとってレイジはレイジだよ、どんな力を得ようとも自分の正

体がわかってもらってもそれは絶対に変わらない。

だから、そんな風に1人で悩むのはやめてほしい。もっと私やみんなにその弱音や悩みを言ってほしい。

だってみんなレイジが大好きだから、助けになりたいって思ってるから」

「カグヤ……」

「約束する。たとえこの先何が起こったとしても……私だけは最後までレイジの傍にいる。

レイジがどこにいても必ず見つけ出して、1人になんかせせない」

真っ直ぐに彼を見て、誓いを立てる。

この誓いは未来永劫破らない、たとえ何が待ち受けているとしても必ず果たす。

「……ありがとう」

彼女の暖かな心が、レイジの全身に広がっていく。

感謝の言葉を聞き、カグヤも笑顔を浮かべ彼の手を握った。

「――レイジ」

「何？」

「大好き」

「……………」

「あれ？ リアクションは無しなの？」

「……相変わらず、よくそんな言葉を臆面もなく言えるね」

「だって大好きなものは大好きなんだもん。嘘を付くのはよくないと思うよ？」

「はいはい、わかったよ」

そういう問題ではないのだが、カグヤに言っても無駄なので黙っておく。

「……ねえ」

「なに？」

「くつつきすぎ」

「だって寒いんだもん」

「ならセンターに戻ればいいじゃないか」

「やだ。だってレイジの傍に居たいもん」

「っ、……はあ」

顔が少し熱い。

彼女の何気ない発言で、すっかりペースを乱されてしまっている。

そしてそれは、レイジだけでなくポケモン達も同じだった。

——ピカ達、完全に空気だね。

——まったく、いちゃつくなら誰もいない所でやれよな。

——仲良しなのはいい事ニャー。

へむう……カグヤ、ずるい……

へぼ、僕も父上と……って何を考えているんだ！　そ、そんな破廉恥な事を考えるなんて……ま、まだまだ修練が足りない！！

若干名おかしな事を考えている輩が居るが、カグヤは気にせずレイジの肩に自分の頭を乗せすり寄る。

——満月が空に浮かぶ夜空の下

1人の少女は、嬉しそうに1人の少年の温もりを感じ続けていた――

レイジのポケモン4

・ティナ(3)

タマムシジムでのジムリーダー戦で、キルリアからサーナイトに進化した。

落ち着いた性格になり、一人称は「わたくし」でレイジの事を「お父様」と呼び敬語で話すなど大人になった。

サイコパワーも更に増大し、レイジの手持ちの中では間違いなく最強のポケモン。

しかし、彼女は普通のサーナイトよりも更に人間に近い容姿となっており、ポケモン図鑑の写真と比べても違うなど不自然な点も。

カノンと共にポケモン達のとめ役、温厚なのだが怒るとふぶきやらでんげきはやらを四方八方に撃ちまくるので注意。

ヒメカのポケモン2

・フィー

♀のイーブイ。タマムシの近くで怪我していたのをティナ達が保護し、自分をゲットしようとしないうレイジ達についていく事を決め、イーブイ系統が好きなヒメカの手持ちになった。

元々は別のトレーナーのポケモンだったらしいのだが、そのトレーナーとはぐれてしまいその期間が長かったためヒメカの手持ちになる事ができた。

一人称は「ボク」、やや気弱で周りに流されやすい。・ヒノ

♂のヒノアラシ。ウツギ博士から譲り受けた。

当初ヒメカはヒノアラシを手持ちに加えようとはしなかったが、カグヤとカイリの醜い争いを見て危険を感じ、ヒノアラシ自らヒメカを選んだ。

まだ育てが足りず、4人のポケモン達の中ではまだまだ未熟。

一人称は「俺」、可愛い外見にコンプレックスを抱いており、早く進化して男らしくなりたいらしい。

キャラクター紹介5

【名前】 ケイジ

【性別】 男

【年齢】 17歳

【一人称】 オレ

【身長】 176cm

【人物】

タマムシジムに挑戦しようと現れたが、ジムリーダーのエリカを見るなり「二流」呼ばわりし、結局戦わずに去った謎の少年。

理由は不明だがポケモンを強く憎み、化け物呼ばわりしている。

そしてレイジ達のようにポケモンに信用を抱く人間も同様に憎み、化け物と呼び蔑んでいるが、トレーナーとしての実力は一流以上であり、大口を叩く資格は充分にある。また、不明ではあるがレイジやカイリのように不思議な力があるようだが……？

【人物】

威圧的で他人を見下す傾向が強い。

傲慢で口が悪く、自分以外のトレーナーはすべて弱いと思っているのか、たとえどんな相手でも態度を変えず暴言を吐く性格破綻者。ポケモンの事は道具としてしか思っておらず、敗れたポケモンに対して敵味方関係なく暴言を吐く辺り、並々ならぬ憎しみを抱いているようだ。

また負けたトレーナーに追い討ちを掛け深い傷を負わせるなど、残虐性も強く人を滅多に嫌わないカグヤに「最低」といわしめた。

オリジナル技1

- ・デュアルボルテッカー

使用者はヒカリ、自分のかみなりだけでなく味方の電気技すら吸収し威力を高めたボルテッカー。

しかしダブルバトルなど複数のポケモンが出ている時しか使えず、更にボルテッカー以上に反動が大きい。

- ・テトラコンビネーション

使用者はアクセル。バレットパンチで相手の動きを止め、とびひざげりで空中に飛ばし、スカイアッパーで追撃後はどうだんでトドメをさす連続技。

バリエーションはいくつかあるらしく、初使用はクチバビーチでの初陣の際。

- ・リーフブレイカー

使用者はジャノビー。リーフストームで自分の身体を包み、前方にクロスさせたリーフブレードを展開させながら相手に突撃する技。突撃による威力向上だけでなく、リーフストームで身体を包んで

いるため防御力も上がっている攻防一体の必殺技。

・デュアルパンチ

使用者はティナ。両腕を使い異なるパンチ技を相手に与える技。
彼女専用ではなく、パンチ技を2つ以上持っているポケモンなら
誰でも使用できる。

第30話 共鳴？く焼けた塔での新たな出会い（前書き）

今回、爽蒼さんがわざわざ考えてくださったオリキャラが出てきます。

爽蒼さん、ありがとうございます!!

第30話 共鳴？く焼けた塔での新たな出会い

——エンジュシティへと向けて、旅を続けるレイジ達

彼等は今、エンジュシティに程近い草原で休憩をとりながら、トレーニングに励んでいた。

「ヒノ、えんまく！」

ヒメカのヒノアラシ——ヒノがえんまくを張り、辺りの視界が塞がれる。

「エネコ、その場から動かないで！！」

しかしカグヤは慌てず、左右へ視線を忙しく動かすエネコをその場で静止させ、相手の動きを待った。

瞬間——エネコの右横から飛び出してくるヒノ。

「ジャンプ！！」

尻尾を使い上へとジャンプするエネコ。

それと同時に、ヒノがエネコの下をくぐり抜けるように通っていた。

「エネコ、スピードスター！！」

「ニャー！！」

放たれるスピードスターは、攻撃を外し隙だらけになったヒノへと見事命中。

「くっ……………！」

「そこまで！」

反撃を試みようとするヒメカとヒノだったが、ここで試合終了の声を掛けられた。

「今回はカグヤの勝ちだな」

「やったー！」

「……………さすがね」

「ううん。えんまくで視界を遮られた時はちよつと焦っちゃった」

笑みを浮かべ、エネコを抱き抱える。

「でもみんないい調子だよな、この調子でエンジュのバッジゲットだぜ！」

「意気込むのはいいけど、空回りしないでよ」

いつものように熱くなりがちなカイリに釘を刺すヒメカ。

「……………あれ、レイジは？」

キヨロキヨロと視線を動かし……すぐに彼の姿が見つかった。

鍋の中をかき回してる、どうやら自分達がトレーニング中に昼食を作ってくれているようだ。

そして、そんな彼を手伝うようにティナと……何故かムウマも忙しく動いてる。

確かにムウマを外に出していたのだが……何やら楽しそうだ。

「……………」

なんだか、レイジ達を見ていると……。

「レイジがお父さん、ティナがお母さん、ムウマが2人の子供みたいだね」

「……いきなり何？」

突拍子のないカグヤの言葉に、調理を続けながらもツツコミを入れた。

へわ、わたくしとお父様が夫婦！？

「ツツコむ所はソコじゃないだろ」

——パパ？

「ムウマ、カグヤのボケに付き合わないでいいよ」

——今日も平和だ、呆れながらもそう思えた

「レイジもトレーニングしようぜ」

「それどころじゃないよ、それより終わったなら手伝って」

「うへえ……やぶ蛇」

そう言いながらも、きちんと手伝い始めるカイリ。

〈お父様と夫婦……お父様と夫婦……〉

「ティナ、トリップしてるとこ悪いけど、お皿を並べて」

〈け、結婚式は緑の丘の教会で……〉

「……………」

今の彼女に話しかけるのはやめよう、色々な意味で危ない。

仕方なくアクセル達をボールから出す。

「ごめんアクセル、リオン、ヒカリ。お皿を並べてくれないか？」

〈わかりました！〉

——ティナの奴、また妄想してんのか？

（……………また？）

——この間もレイジの顔を見ながらブツブツ呟いてたよね。

「……………そう」

一体何を考えていたのか気になるが、訊くのが恐いのでやめておく。

「あー、お腹すいた」

「悪いわねレイジ、全部任せちゃって」

「気にしないで、それより調子良さそうだね？」

「ええ。ヒノもフィーも精一杯頑張ってくれてるから」

そう言いながら、ポケモンフーズをちまちまと食べているヒノ達に視線を向けるヒメカ。

「ところでよ、エンジュまであとどれくらいだ？」

「もうすぐだよ。あと一時間くらいかな」

この食事を終えてすぐに出発すれば、昼間にはエンジュシティへ到着するだろう。

そんな他愛のない話をしながら食事続けるレイジ達。

「ところでさ、エンジュシティってどんな街なの？」

「昔建てられた建造物や古い歴史が今も根強く残ってる街だよ。たぶん見たことない建物や家屋を目にするとと思う」

「へえ……って、詳しいな」

「まあね。あの街には色々な伝説があった面白いから、前に色々調べた事があるんだ」

「伝説？」

「……ライコウ、エンテイ、スイクン。そしてホウオウ……エンジュシテイには様々な伝説のポケモンが存在すると言われてる。

しかもホウオウ以外は実際にエンジュで見たって人が沢山居るらしいんだ」

「そりゃ凄いな……俺達もそのポケモンの事くらいは知ってるぜ」

「伝説のポケモンって、ずいぶん沢山居るんだね……」

「色々な地域や色々な場所があるように、色々な伝説のポケモンがいたっておかしくないさ。

カントー地方だって伝説と呼ばれるポケモンがいるでしょ？」

「……そうだったけ？」

「……カグヤに訊いた僕がバカだった」

何よー、なんて反論が返ってきたが無視する。

（……ホウオウ、か）

前はホウオウに是非会ってみたいと思った時期があったけど……今

は。

今は、1人のトレーナーとして会ってみたいと思う、会うだけでいい。ゲットする気など微塵もない。

そんな事を考えながら、レイジは食事を進めるのだった。

……………。

「うっぷ……食い過ぎた……」

「く、苦しい……」

「当たり前よ。いい加減その食べ過ぎる傾向をやめなさい」

うーうーと唸りながら歩を進めるカイリとカグヤに、ヒメカは呆れるようにそう口にした。

苦しいと感じるのは当然だ、なにせこいつら四人前分はあろう量の食事を摂取したのだ。

「だ、だって……レイジのごはん美味しいんだもん」

「そういう問題じゃないでしょうが……」

「さて、先を急ぐか」

わざと早足で歩き出す。

「うゝ、待ってゝ……」

「く、苦しい……」

そんな声が聞こえたが、もちろん無視。

……エンジュシティまでもう少し。

このまま後ろで聞こえる呻き声を耳に入れながら、レイジは目的地へと目指そうとして――

「――」

ふと、突然足を止めてしまった。

「うー……って、レイジ？」

「……………」

何だ。

何だ、この感覚は。

凄まじいオーラ、チャンピオンであるシロナにも劣らない。

否、もしかしたらシロナですら上回る程の力強いオーラ。

けれど不快感はない、でも……。

「……真っ白？」

白、何もない色。

力強いのに、他には何も感じられない。

汚れなき色、代わりに何も“無い”

この力は、一体……。

「——っ」

瞬間、その正体を知る為に走り出す。

「ちょ、レイジ!？」

後ろから聞こえるカグヤの声にも反応せず、レイジは地を蹴った。

「は——あ、は、あ」

息をするのも苦しくなるほど走り——

——気が付いたら、そこはエンジュシティの街の中だった

呆れたものだ、自分は何十分の間走り続けたというのか。

それを自覚したせいかな、一気に疲れと足の痛みに襲われおもわずその場で座り込んでしまった。

「はあ：はあ：はあ：」

息を整えながら、自分の行動に疑問を覚える。

一体自分は何をやっているのだろう、カグヤ達を置き去りにしてまでどうしてこんなにも気になる？

理解不能、だが――内なる自分が訴え続けるのだ。

――捜せ、と

この力の持ち主は、必ずお前の助けになると、自分自身が訴えている。

何故？

どうして？

理由はわからず、ただその訴えだけが頭に入ってくる。

ただ感情の、本能の赴くままに。

やがて疲れもなくなり、再び立ち上がる。

カグヤ達の事も気になるが、今はこの感情に従う事が優先だ。

そう思い、レイジは再び歩を進める。

(…………こっちだ)

まるで初めから知っているかのように、街の中を歩くレイジ。

そして――暫く歩き続けた結果。

レイジは、とある建物で足を止めた。

「……………」

そこは、焼けただれ原形がわからない程に焦げた塔だった。

人の住みかではない、むしろ生き物が暮らせる場所ではない。

けれど確かに、ここからあの力の源を感じる。

おもいきって扉を開き、中に入る。

「……………」

瞬間、その場から動けなくなった。

「……………」

目の前には1人の男。

自分より年上だろうか、背も高く青年と呼べる歳かもしれない。

金糸の髪はただ美しく、ルビー色の瞳はただ恐ろしい。

けれどその瞳には、何も映っていない無機質なものに見える。

「……………」

「……………」

見つめ合う両者。

口を開きかけるも、恐怖からか緊張からか何も喋れない。

「——お前は、誰だ？」

静かで、感情が乗っていない声。

「……僕はレイジ、ポケモントレーナーです」

後ろに一步下がり、早鐘のように動く鼓動を抑えながら問いに答える。

「レイジ……か」

「……………？」

敵意は感じない、それに無機質ながら目の前の彼からはどこか暖かさを感じる。

相変わらず強いオーラを発しているので、レイジとしては息苦しい

事この上ない。

「……強いトレーナーだな、少なくともこの街にいるジムリーダーよりは上だ。」

それに、その瞳に映る光はとても綺麗で強い」

「は、はあ……」

褒めているのだろう、後半はいまいち理解できないが。

「——お前なら、おれに何かを与えてくれるかもしれない」

「えっ……？」

今のはどういう意味か、その理由を訊く前に……目の前の男はモンスターボールを投げる。

中から出てきたのは……バクフーン。

「な、何を……!？」

状況が理解できない中、男はゆっくりと口を開いた。

「……おれと、バトルをしてくれ。一体だけでいい」

「バトル……？」

「そうだ。お前が最強だと思う手持ちでおもいっかりぶつかってきてほしい。」

それによって、おれは得られるかもしれない」

「い、いきなりそんな事を言われても……」

「頼む」

短く告げ、男は頭を下げる。

「……………」

わけがわからない。

目の前の男性の意図も、そして彼から感じる凄まじい力の正体も。

「……頼む」

もう一度告げられ、もはやレイジに拒否権というものは得られそうもない。

「……………」

何故かはわからない、けれど男の願いはただ真摯だった。

「……わかりました」

だから、レイジも男性の願いを聞き入れる。

「すまない……」

「いえ。ですが1つだけ教えてください。
あなたの名前はなんていうんですか？」

名も知らぬ者とバトルする気にはならない。

すると男は、ほんの一瞬だけ眉を潜めてから。

「――ロスト、だ」

ぽつりと、先程よりも無機質な声で名を名乗った。

第31話 ロストの実力／紅蓮の最強者／

「ティナ、お願い!!」

まだ完全に状況を受け入れたわけではないが、バトルをすると決めた以上はそれだけを考える。

そう思い、レイジはしっかりと床に足をつけボールを投げる。

「サーナイト……」

へただのサーナイトだと思っていると、痛い目を見ますよ

「っ、この声……直接頭に話しかけているのか」

へその通り。それでは……参ります

ゆらりと、不規則な動きで相手を誘うティナ。

それを見て、青年——ロストは面白そうに笑みを浮かべる。

「楽しみだ……今までおれのポケモンに傷をつけたトレーナーはいなかった。

それにあのライコウとて、おれのレジェンドには届かなかった」

「ライコウ……!?!」

伝説のポケモンの名だ、火事によって死んだ名も無きポケモンがホウオウによって蘇らせたといわれるあのライコウの事だろう。

だが、それ以前にロストの言葉には確かな違和感が。

「届かなかったって……」

「……この焼けた塔で、おれはライコウと出会い戦った。
そして勝ち、今ではおれの手持ちだ」

「なっ——!?」

言いながら、別のモンスターボールをレイジに見せるロスト。

「見せてくれレイジ、お前とサーナイトの力がどれほどなのかを！」

「……………」

ハツタリ、ではない。

おそらくロストは本当にライコウと戦いゲットしたのだろう、あの
モンスターボールから発せられる力は普通のポケモンなど超えてい
る。

そして、このバクフーンからも……シロナの切り札であるガブリア
スと同じ力を感じた。

ティナも同じなのか、表情は変えないが冷や汗が頬を伝って落ちて
いる。

（それでも……………!）

それでも、負けない。

バトルをする以上最後まで諦めない、負けるなどという気持ちなど抱かない。

「ティナ、サイコキネシスだ!!」

指示を受けた瞬間、ティナのサイコキネシスがバクフーンーレジエンドを捕らえ身体を宙に浮かせる。

(速いな……)

「そのまま地面に――」

「レジエンド、サイコキネシスを破れ」

「え――」

ティナがレジエンドの身体を地面に叩きつける前に。

ガラスの割れた音が聞こえ、レジエンドの身体は自由を取り戻した。

「サイコキネシスを自力で……!?!」

悪い夢だ、本気でそう思えた。

今までこんな型破りな方法で、サイコキネシスを破ったポケモンなど見たことがない。

「レジエンド、かえんほうしゃ」

「っ、ティナ、ふぶきだ!!」

呆けている場合ではない、すぐさま迫り来るかえんほうしゃを迎え撃つ。

ぶつかり合うかえんほうしゃとふぶき。

(互角………!)

——ではない!!

へきやあああっ!!!?<

「ティナ!??」

かえんほうしゃがふぶきを押し返し、そのままティナへとダメージを与える。

致命傷ではないものの、ふぶきを破られたという精神的ダメージは大きい。

(ティナのふぶきが……)

確かに氷タイプの技は炎タイプの技には弱い。

だがそれを差し引いてもティナの技が敗れるなど、信じられなかった。

「どうしたレイジ、お前とお前のサーナイトの实力はこんなものな

のか？

違うはずだ。お前達の力はずっと強いはずだぞ」

「くっ……でんげきは！」

地面を這い進みながら、レジェンドを囲むように放たれるでんげきは。

「――まもる」

しかしそれは全て防がれてしまい――レイジは次の手を打つ。

「かげぶんしん！」

ティナの分身が次々に増えていき、しかしロスト達には通じない。

「レジェンド、右にほのおのパンチ」

右横に向き、炎を込めた拳を突き出すレジェンド。

それは真っ直ぐティナの身体を捉え――そのまま突き抜けた。

「何……？」

「デュアルパンチ！」

「レジェンド！！」

主人の声に反応し、後ろを向きながら再び炎の拳を突き出すレジェンド。

そして、ティナのデュアルパンチとぶつかり合う。

激しい熱を発しながら、両者共に弾かれ。

——ロストは、最後の一手を詰んだ

「レジェンド、かえんぐるま」

「なっ——」

そこからの動きは、レイジの思考を凍らせた。

デュアルパンチとのぶつかり合いで、レジェンドはティナと同じく大きく吹き飛ばされた。

だが——レジェンドはその腕と足を使い、焼けて半分ほどになった古い柱を掴み、それを軸にティナへと迎撃したのだ。

普通の動きではない、身軽なアクセルならばできるかもしれないが、それでも可能性は低い。

それを、アクセルより鈍重で巨体であるバクフーンがやってのけた、そんなものこの目で見ても信じられない。

しかし現実はこの目で見た通り、レジェンドが最後の一撃を与えようとティナに向かっている。

「ティナ!!」

彼女ははまだ倒れており、どうにか起き上がってもその瞬間にレジエンドの技を受ける。

避けられない敗北、それはティナとて向かってくるレジエンドを視界に捉え、認めざるおえない。

しかし、それでもティナは諦めたくなかった。

レイジが自分を最強だと信じてバトルに出してくれた、その期待を裏切るわけにはいかない。

（お願い……！ 一撃、一撃だけでいいから届いて………！！）

サイコキネシスやふぶきでは届かない、だからもっと強い攻撃を。

アレを妥当できる程の、強い一撃が欲しい。

しかし、レジエンドはもう眼前にまで迫ってきている。

止まる思考、けれどその中で。

無我夢中だったのか、ティナは最後の足掻きとばかりに右腕を前に突き出した――

……………。

煙がレイジ達を包み、視界を塞ぐ。

けれど、レイジは自分達の敗北を悟る。

あの攻撃は避ける事も防ぐ事もできない、否が応でも理解できた。

そして煙が晴れていき……見えたのは火傷を負いながら倒れている
ティナの姿。

「……………」

しかし、レジェンドの姿を見てレイジは首を傾げた。

——ダメージを負っている

それも小さなものではなく、致命傷には遠いもののそれなりのダメージだ。

何故？ あの時ティナは身構える事もできずに攻撃を受けたはずだ。

「——レイジ、お前最後にあのサーナイトに何を指示した？」

「え……………」

意味が分からず聞き返すと、ロストは少し驚いたように口を開いた。

「ではあのサーナイトが勝手にやったのか……………」

「……………どういう、ことですか？」

「……レジェンドのかえんぐるまが命中する瞬間、お前のサーナイ
トが右手を突き出した。

その瞬間、何かがかえんぐるまどぶつかりレジェンドはダメージ
を受けたんだ」

「……………」

では、ティナが何か技を出したというのか。

しかしそんな暇などなかったし、第一どんな技を出したと……。

へん、く……

「ティナ！」

起き上がるティナに駆け寄り、身体を支えてやる。

「よく頑張ったね、ありがとう」

へいえ……申し訳ございませんお父様、負けてしまいました

「気にしないでいい、精一杯頑張ったならそれでいいんだから」

へ……………はい

レイジの声に頷きを返し、ティナはしっかりと立ち上がった。

へ……完敗です。あなたのバクフーン、とてもお強いですね

「いや、お前も強かったよ。最後はレジェンドの“もうか”を使っ

たくらいだからな。

しかし、ポケモンと会話するというのも不思議なものだ」

「へそうかもしれないね、わたくしはこれが当たり前ですから不思議に思いませんが」

「――まあまあだったぜサーナイト、けどそんなもんじゃオレ様には勝てねえけどな

ニカッと笑いながら結構尊大な物言いのレジェンドに、レイジは苦笑しながらも言葉を返す。

「オレ様って……自分をそんな風に言うポケモンを見るのは初めてだ」

「――は？」

「？ レイジ、誰に話しかけているんだ？」

「あっ……」

しまった、つい普通に会話してしまった。

口を塞ぐが、今更である。

「お父様、この方なら話しても大丈夫だと思いますよ」

「むう……」

ティナに言われ、それもそうかと自分を納得させる。

「レイジ……?」

「……僕は、ポケモンの言葉を理解し会話する能力があるんです」

「何………?」

「信じなくてもいいです、到底信じられる話じゃないですから。
ちなみに、今レジェンドに話しかけたんですよ。まあまあだった
ゼサーナイト、けどそんなもんじゃオレ様には勝てねえけどな。
レジェンドがこう言ったものですから」

「——お前、マジでオレ様の言葉がわかるのか？」

「うん。少なくとも自分は嘘をついてないって自信を持って言える」

「………そうか」

それだけ呟き、ロストはレジェンドに視線を向ける。

「レジェンド、お前は自分を「オレ様」などと言っている尊大な奴
だったのか……驚きだな」

「……信じるんですか？」

「お前は嘘を言っていないと言っただろう?
ならばおれも信じる、それだけだ」

「……………」

簡単に言っただけのロスに、少し驚いた。

こうも簡単に信じてくれるとは……ある意味器が大きい人間なのかもしれない。

「ではそろそろここから出るか。お前のサーナイトとおれのレジエンド、そしてライコウをポケモンセンターで回復させてやらないとな」

「そうです……ね」

「レイジ、どうした？」

「……………いえ」

しまった……カイリ達の事を完全に忘れていた。

何も言わずに飛び出した挙げ句、呑気にバトルをしていたなどと知ったら怒られる。

（とりあえず……みんなが来たら謝ろう）

勝手な事をした自分が悪いのだ、謝るくらいで許してくれればいいが……。

そんな事を考えつつ、ロスと共にやけたとうを後にすると。

「あーっ、レイジー!!」

「うっ……」

早速見つかった、もちろん非常にご立腹である。

それに見慣れない男性まで一緒だ。

「お前なあ、いきなり走り出したと思ったら何してたんだよ！ 心配したじゃねえか」

「ごめん……」

「ごめんじゃないよ！ レイジのバカ！！」

珍しく不機嫌全開のカグヤに、レイジは謝る事しかできない。

「2人とも、レイジも反省してるし今回だけは許してあげましょう」

「そうだよ。こうして無事だったんだからいいじゃないか」

見かねたヒメカと青年が2人を宥めると、まだ納得していない様子だが静かになった。

「本当にごめん。もう勝手な行動はとらないから」

「だいいけどね」

「だいいけどな」

「2人は普段レイジに迷惑を掛けているんだからあまり強くは言えないわよ」

「うっ……」

「そ、それを言われるとな……」

どうやら自覚はしているらしい、ヒメカの言葉で小さくなってしまったカグヤとカイリ。

「……ところで、アナタは？」

ふと、レイジの隣に佇む青年に全員の視線が集まった。

「……とりあえず先にポケモンセンターに行ってもいいかな？
テ
イナを回復してやりたいから」

「回復って……本当に何してたんだ？」

「向こうで話すよ、それじゃあ行こう」

……。

「へえ、レイジが全然相手にならないくらい強いんだ……」

「過大評価しているだけだ、レジェンドを本気にさせたのはレイジが初めてだよ」

「そっちもまさかエンジュのジムリーダーと知り合いになってたな

んてね……」

ポケモンセンターに向かい、ティナ達を回復させている間に情報交換をするレイジ達。先程カグヤ達側にいた青年——マツバがジムリーダーだと知ってレイジは驚き。

逆にカグヤ達は、ロストがレイジを負かせた事に驚いていた。

「強いんですね。もしかしてジムリーダーとかですか？」

「ただのトレーナーだ。いや……おれの場合はそれも的確ではないか」

「……………」

含みのあるロストの言葉に、全員が首を傾げる。

「ああ、別にたいした事じゃない。ただ……おれには自分の記憶というものが存在しない、だから的確じゃないと言ったんだ」

瞬間、周りの空気が少し変わった。

「えっ……………」

「自分の記憶が……ない？」

「つまり、記憶喪失？」

「そうだ。自分の名すら思い出せない、ロストというのも自分で付けた名だ。

気が付いた時、おれにはレジェンド以外何もなかった、だから自

分を知る為に今まで色々な所を旅してきたが……まだ、自分の名前すら思い出せない」

「……………」

「そんな顔をするな。記憶喪失といっても悲観になる必要はないし、見るものの全てが新鮮に映るのも悪くない。

旅も楽しいしポケモン達もいる、だから今まで自分の境遇を悲しいと思った事はない」

だから気にするな、ロストはそう言って口を閉ざす。

確かに、今の彼の言葉は本当に心からそう思っている事だろう。

だが、近い境遇であるせいか……レイジには彼の心中はそれだけではないような気がしてならない。

——回復が終わったアナウンスが耳に入る

「レイジ、終わったようだぞ？」

「……………そうですね」

席を立ち、ロストと共にボールを取りに行く。

「——そんな顔をされても困る、おれはお前の優しさに応える事ができんからな」

「……………」

顔に出てしまっていたのか、ぽつりとロストにそう言われてしまった。

「……僕も、同じなんです」

「何？」

「僕も、自分の事が何一つわかりません。

育ての親はいるけど、僕も……自分自身がわからない」

「……………そうか」

それだけ呟き、ロストはこれ以上何も言っではこなかった。

けれど、レイジには確かに感じられたのだ。

彼の瞳の奥底に、寂しさと悲しみの色が渦巻いている事に…………。

——ロストと共に回復が済んだティナを引き取り皆の元に

「よしレイジ、早速マツバさんとジム戦やろうぜ!!」

「いきなり過ぎるからちゃんと説明して」

戻ってきて早々にそんな事を言われても困る。

まあ大体の状況は理解したが、説明してくれてもいいではないか。

「いや回復も済んだし、やっぱりジムがある以上ジム戦をしてバッジをゲットしないとさ。

もちろんマツバさんも許可してくれたぜ！」

「挑戦者の挑戦はできる限り受けるのがジムリーダーの役目だからね、君達がよければいつでも大丈夫だよ」

「そうですね……それじゃあお願いします」

それに自分はまだバッジを3つしかない。

後1つ集めなくては、ポケモンリーグに出場する事ができないのだから、ここは是が非でもバトルしてもらわなくては。

——だが、その前に

「ロストさん」

「何だ？」

「マツバさんとバトルをする前に、もう一度あなたにバトルしてほしいんです」

「何……？」

「えっ、何でだよ？」

負けたのが悔しいから……というわけではないだろう、レイジはそういうタイプではない。

だからこそ、カイリ達はレイジの言葉に疑問を抱いた。

「それは構わんが……」

「ありがとうございます、それじゃあ早速お願いします」

言うやいなや、さっさとセンターから出ていくレイジ。

ロストも静かに後を追った。

「……レイジ、どうしたのかな？」

「さあな。けど……レイジを負かせたロストさんの実力、俺も見てみたいからちょうどいいかも。」

マツバさん、すみませんけどジム戦はもう少し待っててもらってもいいですか？」

「もちろんだよ。それにぼくも2人の勝負を見たいと思っているしね」

……………。

センターの裏にあるバトルフィールドに移動したレイジ達、既に両者共にスタンバイを終えている。

「どうしようヒメカ、急なバトルだからポンポンも無いしチアガールに着替えてないよ！」

「……着替える必要はないから安心なさい」

「……彼女は彼がバトルをする際、いつもそんな格好をしてるのかい?」

「ええ、まあ……だいたいは」

「……………」

外野がうるさい。

やれやれとため息をつきながら、ロストへと声を掛ける。

「使用ポケモンは一体のみ、それと……勝手なお願いですけど、僕の指定したポケモンで戦ってくださいませんか?」

「構わない。だがお前はおれの手持ちを知らないだろう?」

すぐに教えようとレイジへ告げようとするが、彼にはそんなもの必要なかった。

何故なら、彼がバトルをしたいポケモンは……。

「——ライコウと、戦ってみたいんです」

「……………」

『……………は?』

外野にいるカグヤ達全員の声が、見事に重なる。

今、レイジは何と言った？

ライコウ……と、確かに言ったような……。

「つて、はぁあっ!？」

一番初めに新しい反応を見せたのはカイリ。

しかし、カグヤに至ってはいまだにポカンとしているし。

ヒメカも我に帰ったものの、自分の耳が信じられず言葉が出ないでいた。

「ちょ、ちょっと待ってくれレイジくん!!

い、今君はライコウと言ったのか!？」

「はい。……ロストさんはやけたとうでライコウをゲットしたそうなので、是非バトルしてみたいと思ったんです」

「や、やけたとうでライコウをゲットしたぁっ!？」

そんな話、信じられるわけがない。確かにライコウはエンテイとスイクンと共にあのやけたとうに居た時期があった、自分も目撃した事がある。

だがある日突然三体共にどこかへ消えてしまい、その後の消息はわからずじまいになっていたというのに……。

そのやけたとうでライコウをゲットしたなどと、マツバには信じら

れるはずもなかった。

「じよ、冗談だろ？ ライコウは伝説のポケモンなのに……」

「冗談かどうかは今にわかるよ。ロストさん、お願いできますか？」

「ああ。——来い、ライコウ。これがお前の初陣だ」

モンスターボールを上投げるロスト。

ボールが開き、中から出てきたのは……。

「うそっ!？」

「なあっ!？」

「えっ!？」

「そんな……!？」

カグヤ達全員が驚きの声を上げる中——

伝説のポケモン——ライコウは凄まじい電気エネルギーを発しながら、レイジ達の前に姿を表した。

「——っ」

威圧感、そして普通ではないプレッシャーに、おもわず後退る。

これが伝説と謳われるポケモンのオーラ、カノンとは違い荒々しいものだ。

「マ、マジかよ……本物の、ライコウ……?」

「ど、どうして君がライコウを……?」

「やけたとうに赴いた際に出会った、だからバトルをしてゲットしたんだ」

あっけらかんと、感情が乗せられていない声で質問に答えるロスト。それを聞いて、マツバは言葉を失った。

ライコウをゲットするなど、それこそ並大抵のトレーナーでは夢物語のようなものだ。

そんな事ができるなど、チャンピオンクラスの超一流でなければ不可能だろう。

計り知れない実力を秘めたロストに、マツバは恐怖すら覚えた。

「――ヒカリ、お願い!!」

対するレイジがフィールドに出したポケモンは、ヒカリだった。

「ピカチュウか……悪いが、それでは勝負にならないと思うぞ?」

「いえ、できる限り頑張ってみせます。ヒカリ、相手が何だろうと気持ちで負けたりしないで」

――当たり前だよレイジ、ピカは絶対に負けたりしない!!

——威勢のよいピカチュウじゃ、ならばその言葉を偽りにせぬよう頑張るがよい。

「っ」

少ししわがれたような老人の声。

なるほど、今のはライコウの声か。

（意外と年寄りくさいんだな……）

そんな事を考えつつ、バトルに意識を集中させるレイジ。

だが、まだ彼は気づかない。

一体のポケモンが、遙か上空から見つめている事を。

そして——少しずつ近づいてくる闇の事も。

彼は……彼等はまだ、気づいていなかった。

第32話 超絶電気対決！ヒカリVSライコウ

「でんこうせっか！」

先手を取り、ライコウに向かっていくヒカリ。

——なかなかのスピードじゃが。

「じんつうりき」

——まだまだ甘い。

「ピカッ!？」

ライコウの瞳が光った瞬間、ヒカリの身体が宙に浮く。

そして、まるでボールのように何度も地面に叩きつけられた。

「す、すげえ……まるでティナのサイコキネシスだぜ」

「けど、このままじゃ一方的にやられちゃうよ！」

「ヒカリ、10万ボルトだ!!」

地面に叩きつけられながらも、10万ボルトをライコウに撃ち込むヒカリ。

だが——まるで何事もなかったかのようにライコウの攻撃は止まらない。

「無駄だレイジ、ライコウに電気技は通じない」

「かみなりだ!!」

「無駄だというのが――」

しかし、ロストの言葉は最後まで続かなかった。

ライコウの周りにヒカリのかみなりが走り、地面を削っていく。

するとライコウの重みに耐えきれなくなったのか、フィールドの一部にライコウの脚がめり込んでしまった。

バランスを崩し、ライコウのじんつうりきが解かれる。

「ヒカリ、10万ボルト!!」

「何………?」

攻撃のチャンスだというのに、レイジが命じたのは先程と同じく10万ボルト。

当然ライコウには効かず、めり込んだ脚もすぐに元に戻した。

「おいおい、何やってんだよレイジは!」

「ライコウ相手に電気技を連発……確かにおかしいわね」

ヒカリはでんきタイプ以外の技とてちゃんと使える、だというのに

レイジは効果が薄いどころか効いていない電気技を使用している。

これでは勝機もへったくれもない、無意味な事を続けているだけだ。

「――ライコウ、でんじほうだ」

凄まじいエネルギーを這わした球状の電気がライコウから放たれ、ヒカリに命中する。

「ピ…カッ!!」

如何に効果が薄いとて威力そのものが違う、でんじほうの直撃を受け苦しそうな声を出すヒカリ。

「ヒカリ頑張れ、耐えてくれ!!」

（耐える……?）

「ヒカリ、アイアンテールだ!!」

「ピカ………!!」

でんじほうに耐えながら飛び上がり、強化した尻尾でライコウへと攻撃を仕掛ける。

「かみなりのキバ」

しかし、ライコウは慌てる事なく身構え……ヒカリのアイアンテールをかみなりのキバで文字通り受け止めた。

瞬間、かみなりのキバから発せられる電気エネルギーがヒカリを襲う。

「投げ飛ばせ、そのままかみなり」

軽々とヒカリを上空へ投げ飛ばし――身体に凄まじいまでの電気エネルギーを這わせるライコウ。

そして、眩いばかりのかみなりがヒカリへと襲い掛かる――！

「ピカ、チュ……」

先程よりも苦しげな声を漏らすヒカリ。

「だーっ、レイジは何やってんだよ！！」

一方的にやられちまってるじゃねえか！！」

「……………」

「……おかしいわね、いつものレイジらしくないわ。これは……もしかしてヒカリにわざと電気技を受けさせている……？」

だとしたらつじつまが合う、しかし……その理由は？

わざとヒカリにダメージを負わせて、一体何をしようというのか。

「ヒカリ、まだだ……まだ耐えてくれ！！」

自らの意志でヒカリに過酷な選択を選ばせた故に胸が痛むが、それでも今更やめるわけにはいかない。

それにヒカリもそれに応えようとしているのだ、ならば自分からやめるなどどうしてできようか。

「アイアンテール!!」

再びアイアンテールを仕掛けるレイジとヒカリ。

「かみなりのキバでもう一度投げ飛ばせ」

再びライコウのかみなりのキバがヒカリのアイアンテールを防ぎ、もう一度宙に投げ飛ばし——かみなりを落とす。

「チュウウウ……!!」

苦悶の声を上げながら、ヒカリが電撃を耐えている姿を見て、ロストは眉を潜めた。

（妙だな……レイジ、何を考えている……?）

避けきれないわけでも防げない攻撃でもないはずだ、彼とあのピカチュウならばいくらでも対処できるはずである。

だというのに、単調な攻撃を仕掛けるばかりか避けようともせず、ライコウの攻撃を受け続けているなど、理解できない。

如何に同じでんきタイプだろうと、ライコウの電撃を受けていつまで保つか……。

（もう少し……もう少しなんだ!）

（……これ以上細かい攻撃で痛めつけるのは酷だな）

このまま終わらせる、そう思いロストは勝負に出た。

「ライコウ、アイアンヘッド」

「ヒカリ、アイアンテール！！」

ライコウのアイアンヘッドと、ヒカリのアイアンテールが激しくぶつかり合う。

しかし、パワーでは遥かにライコウが勝っており、すぐさまヒカリはフィールドの端まで吹き飛ばされた。

空中でバランスをとり、着地するヒカリ。

「レイジ、お前の意図はわからんがこれ以上やっても無駄だ。次で終わりにしてやる」

「……………」

何も応えず、ただじっと何かを待っているかのような様子のレイジ。

（何だ？ 一体何を待っていると……）

「——よし、これなら！！」

「……………？」

「ヒカリ、どうかな？」

——うん。凄い電気だけどなんとかピカのにしたよ！！

「なら反撃だ！！」

「反撃って……あいつ、何をする気だ？」

「わからない、だけど……今までの一見無駄とも思える行動には何か理由があったみたいね」

「……………」

カイリとヒメカが話す中、カグヤはジッとレイジとヒカリの様子を眺めていた。

（あれ……？）

そこで、いつもとは違う点を見つける。

——ヒカリのパワーが、上がっている？

元々高い電気エネルギーを身体に宿していたが、今は前よりも強いエネルギーを感じる。

否、感じるというより……肉眼でははっきりと見えるくらいだ。

この短時間で、一体ヒカリは何をしたのか。

「ヒカリ、ボルテッカーだ！！」

「ピッカアッ！！！！」

ライコウに向かって駆けながら、自身の周りに黄金色に輝く電撃を這わせるヒカリ。

「ボルテッカー！？」

別に驚く事ではない、今まで何度もヒカリが使用してきた所を見てきたのだから。

しかし、カイリはその点に驚いたわけではなく。

「ヒカリの奴、チャージせずにボルテッカーを使えるようになったのか！？」

そう、今までは自分自身に電気技を使用する事によって初めてボルテッカーが使用可能となっていた。

しかし今、ヒカリはそのチャージの工程を飛ばしてボルテッカーを発動させたのだ。

だが、今までヒカリはそこまでの力はなかったはず。

この短時間で、どうしてここまで電気エネルギーを強化させる事ができたのか。

「ライコウ、迎え撃て」

今までの攻撃とは違う、受け流す事はできない威力だと瞬時に判断

したロストは、ライコウに指示を出す。

「かみなりだ」

雄叫びを上げ、先程よりも更に強化されたかみなりがヒカリを襲う。

しかし――ボルテッカー状態のヒカリは、ライコウのかみなりの中を失速する事なく走っていく。

「何………!?!」

このバトルが始まってはじめて見せる、ロストの驚愕の声。

「ヒカリ、頑張れ!!」

「ピカピカピカピカピカピカ………!!」

遂にライコウのかみなりの中から抜け出し――隙を見せたライコウにボルテッカーを叩き込む!!

さすがに効いたのか、僅かに呻き声を上げるライコウ。

――チャンスは今しかない

今のヒカリならば、アレができるはずだ!!

「ヒカリ、ここで決着をつけるよ!!」

――ライトニングだ!!」

「ピカアッ!!」

大きく後ろに跳び、自らライコウとの距離を開けるヒカリ。

「ライトニング……？」

聞いた事がない技だ、一体どういったものなのだろうか。

しかし、ロストは臆する事なくライコウに指示を告げた。

「チャージビーム」

ライコウの口から放たれるチャージビームが、真っ直ぐヒカリへと向かっていく。

そして、ライコウの攻撃がヒカリに命中する瞬間。

「なっ——」

ロストは見た。

命中する瞬間、ヒカリの姿が一瞬にして消えた光景を。

チャージビームは地面を砕き、爆発を引き起こす。

その音を聞いた瞬間——ロストはライコウの苦しそうな声をその耳で捉えていた。

「何だと……！？」

——な、何じゃ。今の攻撃は！？

攻撃を受けたライコウですら、今の一撃が何だったのか理解できない。

——ぐうつ!!?

今度は反対の右側から衝撃が走る。

すぐさまそちらに視線を向けるライコウだが、そこには誰もいるはずもなく。

「ライコウ、前だ!!」

ロストの声と、顔面に一撃目と二撃目に受けたのと同じ衝撃が走った。

「これは……!!」

間違いない、これはピカチュウ——ヒカリによる攻撃だ。

ボルテッカーを連続で受けたのだろう、それだけは理解できた。

しかし、問題のヒカリの姿が捉えられないという事実は理解できなかった。

「——これが、僕とヒカリの新技——ライトニングです」

「ライトニング……」

「ボルテッカーのパワーと、でんこうせっかのスピードを合わせた

新しい技です。

ボルテッカー単体より威力は下がってしまいますけど、連続で受ければいくらライコウとて……」

「……………」確かに、威力が下がったとはいえこのパワーはかなり
のものだ。

いかにライコウといえども、このまま攻撃を受け続ければ……結果
は見えている。

事実、既に二十手近い攻撃を受けても尚、ライコウはヒカリの姿を
捉えられないでいた。

瞳には明らかな困惑と、疲れの色が見える。

ヒカリは今、フィールド全体を縦横無尽に走りながら、ライコウの
死角だけを狙って攻撃を仕掛けている。

その姿はまさしく閃光、何者にも止められない神速の領域だ。

しかし、ここで疑問点も浮かび上がる。

ヒカリの攻撃の原理はわかった、しかしそれだけのパワーは先程の
ヒカリにはなかったはず。

（……………いや、今はそんな事を考えている場合ではなかったな）

今はヒカリを止め、このバトルを終わらせる。

（仕方ない……止められないのなら、無理矢理止めるか）

尤も、そんな事をしなくてもヒカリはもうすぐ自分から止まってしまうだろうが。

「――ライコウ、跳べ」

脚に力を込め、その場から真上に大きく跳躍するライコウ。

「そのまま地面にギガインパクトだ」

――ぬううんっ!!

裂帛の気合いを込め、ギガインパクトのパワーでフィールドに突撃するライコウ。

「ピカ!?!」

その衝撃はフィールド全体はおろか、周囲の空気すら揺らすほどの凄まじいものであり。

神速の速さを誇っていたヒカリも、おもわずその動きを止めてしまい――そのまま糸の切れた人形のように地面に倒れてしまった。

「ピ、カ……?」

自分でも何が起ったのかもわからず、すぐに起き上がろうと力を込めるヒカリだが……。

まるで金縛りに遭ったかのように、ピクリとも反応してはくれなかった。

「ヒカリ……………！」

「ここまでだレイジ、もうピカチュウは動けない。この勝負は……お前の負けだ」

「……………」

はつきりと告げられ、唇を噛み締めながらもヒカリの元に向かうレイジ。

——自分の敗北だというのは、わかっている

「……ヒカリ、よく頑張ったね」

——ごめんねレイジ、ピカ負けちゃった。

「そんな事ない、僕の方こそ無茶な指示を出して本当にごめん……」

——そんな事ないよ、レイジはピカの事信じてくれたからあんな指示を出したんでしょ？

なら、謝る必要なんかないよ。

無理して笑みを浮かべるヒカりに、レイジは優しく頭を撫でてあげた。

「はい、きずぐすり」

「ありがとう」

カグヤが予め用意してきたきずぐすりを手に取り、ヒカりに振りかける。

向こうではロストが自分と同じようにライコウにきずぐすりを振りかけている。

「凄い勝負だったよ、あのライコウを手持ちに加えていたのも驚きだったけど、そのライコウとあそこまで戦えるとはね」

やや興奮した面もちのマツバに苦笑を返しつつ、ロストがこちらに来るのを待つ。

「――まさかピカチュウがここまでライコウと戦えるとはな、驚いた」

その声には、本気の賞賛の色が見え隠れしている。

「ところでよレイジ、お前のヒカリ……いつの間にあんなにパワーアップしたんだ？」

「……………ああ」

確かに、カイリ達から見ればヒカリがいつの間にかパワーアップしているように感じるだろう。

ああ、いや……事実カイリの言っている事は間違いではない。

何故なら……。

「いつの間にかというより、ライコウの電気をヒカリのものにしたから、ボルテッカーを自由に使えるようになったんだ」

「……………は？」

「ライコウの電気を……？」

「バトルの最中に、ヒカリの電気を強化しようと思って、わざとライコウの電撃を受けてヒカリの電撃のパワーを上げたんだ。

ライコウ程の電気エネルギーを自分のものにできれば、パワーアップするんじゃないかって……ヒカリが」

今回のバトルの目的はそれだったのだ。

そして、レイジ……というよりヒカリの目論見は見事当たり……大幅なパワーアップを果たせた。

「うへえ……そんな無茶苦茶な事考えてたのかよ」

「まあね。僕も初めはあまり賛成しなかったんだけど……ヒカリが、ね」

しかしうまく行ってよかったと安堵する。

きずぐすりによって完全に元気になったヒカリを撫でながら、レイジは言葉を続けた。

「でもヒカリ、今回は許したけど次はこんな無茶な事はしないでね？」

——はい。

軽い返事のティナに、やれやれとため息を漏らす。

「――マツバさん、お待たせしました。
ジム戦の方をお願いできますか？」

「ああ、もちろんだとも。他のみんなも準備はいいかい？」

「うーっす」

「はい！」

「大丈夫です」

「……ロストさんはどうしますか？」

「せっかくだ。お前達のバトルを見させてもらいたい」

「わかりました。それじゃあ……」

行きましょう、そう口にしようとして。

「……………？」

ふと、林の先にそびえ立つ1つの建造物が目に入った。

「レイジ？」

「……あれ、は」

構造はやけたように似ている、けれどあちらと違って古いものちやんとした塔だ。

それに、どこか不思議な力を感じる。

小さな、それこそ意識を集中させねばわからない程の僅かなもの。

だが——この力、は。

「あれはスズのとうだ」

「スズの、とう……」

「伝説では選ばれしトレーナーがあのだに赴けば、ホウオウに会う事ができると言われているんだ」

「ホウオウ……」

「へえ、なんかちょっと行ってみたいな」

「残念だけど、観光目的ではあのだには入らせられないんだ。
あれは神聖なもの、できる限り人の手に届かない存在でないと」

「……………」

あのだに、ホウオウが降り立つという伝説が残されているなら、先程から感じるこの力は……。

「っ、ライコウ!？」

「え——」

驚いたような声を上げるロストの方へ振り向いた瞬間。

凄まじい速さで、ライコウがレイジの横を通り過ぎていった。

「一体どうしたんだ？」

「……なんだろう、あのライコウ……何か焦りというか……怒りみたいなものを感じた」

「……………」

カグヤの言葉に、思考を巡らす。

（焦り、怒り……？）

ライコウがそんな感情を抱く程の事が起こったというのか……？

だとするなら、それは普通では絶対に――

「――っ」

ぞくりと、全身が総毛立ちレイジもライコウと同じ方向に走り出す。

「おい、レイジ！！」

「ライコウを追わないと！！ 何か……嫌な予感がする！！」

それに、この街を覆うようなとんでもない力も感じた！ 多分ライコウはそれを追ったんだと思う！！」

「マジかよ……もしかしてデッドポケモンか！？」

「わからない、けれどそれに近い力だ」

「なるほど、ならこんな所でグダグダ言ってる場合じゃねえな！
」

カイリの言葉に頷きを返し、再び走り始めるレイジ。

「カグヤ、ハクに乗って。わたし達は空から行くわよ！！」

「うん！！」

ボールからハクを出し、その背中に飛び乗るカグヤとヒメカ。

「い、一体どうしたっていうんだい？」

「行けばわかる、追うぞ」

困惑するマツバを尻目に、ロストはレイジ達の後を追う。

「ちょっと待ってくれ、ちゃんと説明をしてくれないとわからない
！！」

——死闘の幕開けは近い

レイジ達は急ぎ元凶の元へと向かっている中。

エンジュシテイからさほど離れていない上空で、ガブリアスに乗って移動している1人の女性がいた。

「——っ、ガブリアス急いで!!」

一声鳴き、飛ぶスピードを速めるガブリアス。

女性——シロナは表情を強ばらせながら、嫌な予感を胸に抱かせていた。

(この感じ……胸騒ぎがする。

レイジくん、みんな、無事でいて!!)

——様々な思想を持つ者達が、エンジュシテイへと集まっていく

それを見て、今まで傍観者に徹していた存在も動き出す。

だがそれは――レイジ達にとって、一体何をもたらすのか……。

未来の結末は、まだ誰にもわからない。

第33話 揃う伝説達くエンジュでの死闘く

「――あら、坊や達また会ったわね」

「――っ」

ライコウを追うレイジ達。

ようやく追いついたと思った時――会いたくもない存在に出会ってしまった。

「お前等……………！」

「…………マード、フレア……………！！」

「…………知り合いか？」

「知り合いなんざ御免だけどな…………ロスト、ロケット団って知ってるか？」

「ロケット団…………確か国際警察とやりあっている組織だったな」

「そう、それだけじゃないですけどね…………。」

「――こんな所で、何をしている？」

身構え、いつでもティナ達を出せるようにする。

「…………坊や、まだ生きてたのね」

「……………?」

どこかホッとしているフレアの言葉に、違和感を覚えた。

「ここに来た理由はね、ホウオウを手に入れる為よ」

「ホウオウ……!」

やはり、心の中で悪態をつくレイジ。

「ホウオウを手に入れるだって!? そんな事できるわけないじゃないか!」

「それができるのよジムリーダーさん」

言いながら、フレアは懐から何かを取り出す。

それは——羽根だった。

虹色に輝く、美しい羽根。

「——」

感じる。

あの時、スズのとうを見た時に感じた力を。

「これはにじいろのはね、ホウオウの羽根の一部よ。
これがあればホウオウを呼び出せるの」

「なっ——!?!」

「ホウオウの羽根……」

やはり、スズのとうで感じた力は……。

「それに……ライコウだけでなく、ワタシ達には“コレ”がいるの」
再び懐から何かを取り出すフレア。

それは、忌まわしいデッドボール………!

「まだそんなものを作っているのか………!」

「当たり前でしょ、それに前に言ったはずよ坊や。ワタシ達にとってポケモンは道具でしかないの、たとえばそれが……」

投げられるデッドボール。

黒い光を放ち、中から出てきたのは……。

「——伝説と謳われる、ポケモンだとしてもね」

ボールから飛び出したポケモンを見て、レイジ達は息を飲んだ。

「な、んだと………!?!」

「う、嘘……」

水色の美しい身体、まるで澄んだ水のようにだ。

しかし、その瞳は漆黒に包まれた禍々しいもの。

「――スイクン」

そう――デッドボールから出てきたポケモンは、伝説と呼ばれるポケモンである、スイクンだった。「じ、冗談だろ……」

「冗談ならそう思ってくれても構わないわよ、けど……」

右手を突き出すフレア。

すると、スイクンがぐらりと動いた瞬間。

「あ」

高圧縮された水の槍が、カイリを貫こうと放たれ。

「っ、ぐ……っ!」

それを守るように、1人の少年が前に出て右腕を貫かれた。

「っ、レイジ!」

「づ……あ」

「あら、よく反応できたわね」

「くっ、この……………！」

立ち上がろうとするが、激痛が走り膝をつく。

「どうして…………どうしてこんな事を平然とやってのけるんだ……！」

ポケモンは道具じゃない、人間と共に生きていかなければならない存在なんだ……！」

それを…………それをこんな風に、誰かが操っていいものじゃない……！」

痛みに耐えながら、精一杯の声を張り上げて叫ぶレイジ。

「ガキの戯れ言だな、この世は強者と弱者の二つしかない。

そしてオレ達は強者であり、このスイクンもお前達も弱者なんだ。弱者は弱者らしく…………強者によって蹂躪されてればいいんだよ」

「この野郎……………！」

「お喋りはここまでにしましょうマード、早くあの塔に登ってハウオウを手に入れなくては」

「そうだな」

「そんな事させない」

「無駄だよ……！」

マードは一つ、フレアは二つデッドボールを取り出し投げる。

中から出てきたのは。

——ハッサム

——カメックス

——ドサイドンの三体

全員デッドボールの呪縛に捕らわれ、感じるのは敵意だけ。

「それじゃあね、坊や」

勝ち誇った笑みを浮かべ、マードとフレアの姿が消えた。

おそらくレポートでスズのとうへ向かったのだろう。

「っ、この野郎……人をコケにすんのもいい加減にしやがれーっ！
」

叫び、ボールからカノンを出し背に乗るカイリ。

「カノン、あいつら絶対に許せねえ。追ってくれー！！」

「わかりましたマスター、しっかり掴まっててくださいー！！」

逃がすまいとばかりにデッドポケモン達がカノンに攻撃を仕掛けるが、その全てを回避しフレア達の後を追った。

「カイリー！！」

「くっ…ヒメカ、ここは僕達に任せてカイリを追ってくれ!!」

「でもあなたは怪我を」

「僕の事よりカイリを心配するんだ! このポケモン達は僕達がなんとかするから!」

「……わかったわ」

再びハクに乗り、カイリの後を追うヒメカ。

「は、あ——く、っ」

「レイジ……」

「大丈夫。それより今はあれを止めないと」

右腕は動かせず、失血と激痛により意識が朦朧とするが、今はそれどころではない。

だが、突然デッドポケモン達が鳴き叫び始めた。

（何だ……?）

すると、いきなり暴れ始め四方八方へと散り散りになっていく。

「拙い、このままじゃ街が滅茶苦茶になる!!」

ここで全てのデッドポケモンを止めようと思っていたが、このまま

ではそれも叶わない。少々危険だが、ここは戦力を分散しなくては。

「カグヤ、君はカメックスを追ってくれ。僕はハッサムとドサイドンを追う!!」

マツバさんはエンジュの住民の皆さんを避難させてください!!」

「しかし君達だけに任せるわけには……」

「エンジュの地理に詳しいマツバさんじゃないと住民は避難させられないんです!!」

できる限り被害は食い止めたいけど、このままじゃ無理だ……だからお願いします!!」

「わ、わかった……だが気をつけてくれ!!」

「レイジ、悪いがスイクンの相手はおれとライコウでさせてもらうぞ。」

どうやらライコウはスイクンを自分の手で止めたいようだからな」

「わかってます。ライコウもそう言っていますから」

「……無茶はするな。お前が傷つけば悲しむ者がいるのだからな」

「……………はい」

無機質の中にも感じる、確かな暖かさを込めた声に頷きを返す。

そして、レイジ達は各々の役割を果たす為にその場から駆け出した

———【カグヤside】

「――待ちなさい、カメックス!!」

背中のキャノン砲で辺りを破壊するカメックスに立ちふさがるように、カグヤは身構えた。

邪魔だと思ったのか、それとも別の理由か、カメックスは動きを止めカグヤへと視線を向ける。

「――っ」

恐い。

あの時と同じく、ポケモンを見て恐いと思ってしまった。

しかし仕方ない、あのカメックスからは濃厚な殺気と敵意しか感じないのだ、どんなに鈍い者として感じてしまう程のものが。

むしろそれを前にして腰を抜かさないだけ、カグヤは強い心を持っているといえよう。

「ベイリーフ、エネコ、出てきて!!」

これはポケモンバトルではない、だから出し惜しみはなしだ。

しかし……。

(…………ムウマ)

カグヤの手持ちであるこの子だけは、出すことができなかった。

――ムウマは戦いを恐がっている

前の主人であるマードに散々バトルを強要されてきたのだ、故に今までだってバトルには出してこなかった。

もちろんそんな事を言っている場合ではないとわかっている、だが……ムウマの事を考えると出すわけにはいけないと思ってしまうのだ。

「――ベイリーフ、エネコ、ごめん……あなた達だけで頑張って！」

結局、ムウマを出す気にはなれずベイリーフ達にそう告げるカグヤ。

「ベイベイ!!」

「ニャー!!」

そんなカグヤとムウマの心中を理解しているのか、ベイリーフとエネコは一声鳴きカメックスの前に立ちふさがった。

（早く終わらせて、レイジの所に行かないと……!）

否、焦るな。

トレーナーは常に冷静であれば、必死に自分へ言い聞かせた。

「ベイリーフ、はっぱカッター!!」

エネコ、スピードスターよ!!」

そして――カグヤ達の戦いは幕を開いた。【ロストside】

「――スイクン」

睨み合うライコウとスイクンを見ながら、ロストは静かにスイクンの名を口にした。

明確な殺気をこちらに向けてくるスイクンに、ロストは唇を噛んだ。

「ライコウ、早くスイクンを楽にさせてやるんだ」

殺しはしない、そんな事は許されない。

しかし――本気で戦わなければこちらが殺される。

（いざとなれば……アレを使う）

レイジ達の事が心配だが、今は他人の心配をしていられる余裕などはない。

相手は伝説のポケモンであるスイクンだ。

如何にタイプで優勢なライコウとはいえ、スイクンから感じる力は凄まじいものだ。

これでは、どちらが勝てるかわからない。

「――ライコウ！」

雄叫びを上げ、スイクンに向かっていくライコウ。

スイクンもそんなライコウを迎え撃つかのように地を蹴り、激しくぶつかり合った――【レイジ side】

「――は、ぐ……」

痛い。

激痛はやがて熱となり、レイジの思考を確実に蝕んでいた。

しかし、目の前にはハッサムとドサイドンがレイジへと絶対的な殺意を抱き睨んでいる。

「くっ……リオン、お願い!!」

右腕は使えないので、左手でリオンをボールから出す。

だがリオンだけでは足りない、ティナ達も出さなくては……。

そう思った矢先、ハッサム達がリオンとレイジに襲いかかる――!!

「くっ……!!」

まだ自分はティナ達を場に出していない。

しかも、リオンだけではあのハッサム達を止める事などできない。

しまった、心の中でそう叫びつつ迫り来るハッサム達を見据えながら。

「――ガブリアス、りゅうせいぐん!!」

上空から聞こえた澄んだ女性の声と。

ハッサム達に襲いかかった隕石のような攻撃を、視界に捉えていた。

「――間に合ってよかったわ、レイジくん」

自分の横に降り立つのは、ガブリアス。

そして、その上に乗っていた女性は。

「シ、シロナさん……」

金糸の髪的美女、シロナだった。

「っ、レイジくん、その怪我は……!」

衣服と腕を真っ赤に染めたレイジの右腕を見て、シロナはすかさずレイジに近寄る。

既に下には小さな水溜まりができており、レイジの顔色も酷く悪い。

「レイジくん、こんな状態でバトルを……」

「シロナさん、どうしてここに……」

「今は説明してる時間はないわ、それよりレイジくんは下がって」
こんな怪我を負っている彼に、バトルをさせるわけにはいかない。
そう思い、シロナはレイジを後ろに下げさせようとしたのだが……
他ならぬレイジがそれを止めてしまった。

「レイジくん、そんな怪我じゃ……」

「今は、そんな事を考えてる場合じゃ……ないんです」

——ハッサムがレイジ達に迫る

「ガブリアス、ドラゴンクロー!!」

しかし、シロナが素早く指示を出しガブリアスがハッサムをドサイドンに向けて吹き飛ばした。

「りゅうのはどう!!」

続いてドサイドンにりゅうのはどうを放つが、さしたるダメージを与えられないのか腕を交差させてガードしながら、ドサイドンが少しずつこちらに近づいてくる。

(やっぱりデッドポケモンなのね……!)

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

リオンの口から放たれたかえんほうしゃがハッサムを包むが、こち

らも足止め程度にしかない。

「……シロナさん、今は怪我の事を考えてる場合じゃないんだ。止めないと……街のみんなだけじゃない、あのハッサム達だって……もっと苦しむ事になる……」

「……レイジくん」

「足手まといにはなりません、だから……2人で止めるんです、あれを」

「……………」

ずるい、とシロナは思う。

そんな真剣な瞳を向けられて、どうしてやめろなどと言えるというのか。

「――なら、最後までその意志、貫きなさい」

ため息をつきつつも、わざと突き放したような口調でそう告げるシロナ。

彼は守られるべき子供ではない、自分と同じ立派なポケモントレーナーなのだ。

「……ありがとうございます、シロナさん」

――大丈夫、痛みはあるが我慢できないものではない

「ふふっ……貴方とタッグバトルができるなんて、普通ならとても嬉しい事なんだけど」

だから惜しいと、こんな状況でもそう思ってしまう。

「……そうですね」

レイジも笑みを返し、再びしっかりと立ち上がった。

そして――

「リオン!!」

「ガブリアス!!」

「だもんじだ!!」

「はかいこうせん!!」

最強のタッグが、激闘を繰り広げ始めた……。

第34話 デッドポケモンを止める!! ～それぞれの戦い～（前編）

——スズのとうに急ぐカイリとカノン

「カイリ!!」

「ヒメカ……」

「まったく、気持ちはわかるけど勝手な真似はしないでよ。
あなただってレイジの事とやかく言えないわよ」

「わ、わりい……」

「それより、あいつらは？」

「地上に姿が見えないって事は、もう既にスズのとうに着いちまったってことだろうな」

「ならすぐに——とはいかないみたいね」

前方を睨みながら、ヒメカは呟く。

カイリも視線を前に向けると……。

ズバットにゴルバット、更にはピジョンやオニドリルが立ちふさが
るかのうにスズのとう周辺を飛んでいた。

「足止めかよ……用意周到な奴等だな」

「マスター、十秒ください」

「は？」

カノンがそう呟いた瞬間、ズバット達が不自然な格好で空中に止まった。

「邪魔です」

口から放たれる光球。

それは上空に展開し——幾重にも分裂し全てのポケモン達に命中した。

「りゅうせいぐん……」

しかし、都合三十はいた相手をこうも容易く片付けるとは……やはりカノンの実力には驚かされる。

「私とマスターの愛の力の前には、あんな雑兵なんて粉微塵です」

「……愛の力？」

「な、何言ってるんだよカノン！」

「えっ、私何か変な事言いました？」

キョトンとするカノンに、カイリは顔を引きつらせた。

「……………」

ヒメカの表情がどんどん険しくなっていく。

それに比例して殺気も濃くなっていき、彼女を乗せているハクは涙目だ。

「――カイリ」

「な、何だよヒメカ……何で怒ってんだ？」

「あら、カイリには私が怒ってるように見えるのかしら？」

当たり前だ、そう返してやりたい。

何故ならヒメカの表情が、俗に言う目が笑っていない笑顔になっているからだ。

身も蓋もない言い方をすれば単なるジェラシー、要するに嫉妬なのだが……バカイリにはどうして彼女が怒っているのか理解できるはずもなく。

「……後で、覚えておきなさいよ」

「何でだよ!？」

かといって本能的に反論してはいけなさと感じ取り、このようなツッコミしか返す事ができなかった。

「マスター、ヒメカ、見えました。あの2人は頂上に居ます!!」

「っ、カノン。急いでくれ!!」

更にスピードを上げるカノン。

そして、屋上に辿り着いた時、カイリとヒメカは同時にポケモン達から飛び降りた。

「あ?」

「あら……誰か来るとは思ってたけど、あなた達とはね」

「……ハウオウはお前等なんかに渡さねえ!!」

「さっさとこの街から消えなさい!!」

「チッ、調子に乗りやがって……おいフレア、こいつら殺してもいいよな?」

つまらさそうにそう吐き捨てるマードダだが、その瞳の奥には確かな殺意が見え隠れしている。

「そうね……あの坊やならともかく、この子達には用はないわ」

「随分レイジにご執心じゃねえか……もし惚れたんなら諦めた方がいいぜ? あいつの周りには既にライバルが2人もいるんだからよ」

「あら残念。けど……別にそういう意味で惚れているわけではないわ。」

ただ……坊やの考え方が面白いと思っただけ」

「考え方……？」

「そうよ、坊やはリアリストでありながらロマンチストでもある。要するに現実主義者でありながら理想主義者でもあるの。」

こんな生き方や考え方をする人間なんか普通はいないわ、だから興味が沸いたのよ。

——つまり、あの坊やは環境次第でどんな存在にでもなれるという事。

それにあの實力、デッドポケモンを何度も退けるあの力さえあれば、ロケット団にとってこの上ない戦力になるわ」

「ふざけんなよ。レイジをそんなバカみみたいな組織に本気で勧誘するつもりか？」

「ええ、そうよ」

カイリの問いに即答を返すフレア。

それを、マードは面白くなさそうな表情を浮かべて反論した。

「おいおいフレア、マジかよ……」

「ワタシは本気よ、それにボスの許可はちゃんと得てるから」

「っ、お前等のボスが……レイジを？」

「ワタシ達のボスは寛大な御方よ、だからたとえ今まで邪魔をしてきた存在でも味方にしようと思えるの。」

——そろそろ、お喋りはおしまいにしましょうか」

「……………」

身構える2人。

しかし、こちらが今場に出しているのはカノンとハクだ。

よほどの相手ではない限り、おいそれと遅れをとる心配など……。

「なんだと!?!」

しかし、そんなカイリの考えなどすぐに間違いだったと思い知らされる。

フレアが出したモンスターボールは——デッドボールだったからだ。

(こいつら、一体何体持ってやがるんだ!!)

「デッドポケモン……けどそれは理性を無くし見境なく破壊するのでしょうか？」

なら、このスズのとうだってただでは済まないはずよ」

そう、ヒメカの言う通りこんな所でデッドポケモンを出せばどうなるかなど目に見えている。

いくらそれなりに広いといっても、下を見れば地面が遠く、更に大型のポケモンでは空を飛ばない限り上手く戦えないはずだ。

だが、それでも相手の不敵な笑みは崩れたりはしない。

「良いことを教えてあげるわ、確かに普通のデッドボールで捕らえ

たポケモンは、こちらの命令すら利けない出来損ないだけどね……
これは我々幹部にしか持つ事の許されない、特別なデッドボールな
の!!」

「残念だなお前ら……これで死んだぜ？」

放たれるデッドボール。

開き、中から出てきたのは……。

「――フローゼル」

うみイタチポケモンのフローゼル、やはりデッド化しているのかその瞳は禍々しい漆黑になっている。

「……あなたは出さないの？」 「てめえら相手に二体もいらねえよ、それにお前の言ったようにデッドポケモンは強力なんぞでな、この塔が壊されちまったら元も子もねえ」

「なら、すぐに引きずり出してやる!!」

「――フローゼル、ふぶき」

「なっ――カノン、りゅうのはどうだ!!」

「ハク、りゅうのいぶき!!」

同時に放ち、迫り来るふぶきをどうにか相殺させる。

(くっ……カノンとハクの攻撃でようやく互角かよ!!)

それに――驚愕した事が一つ。

今フレアは、デッドポケモンになっているはずのフローゼルに指示を出したのだ。

「このデッドボールは改良型で、主人の命令に忠実になるデッドポケモンを作り上げる事ができるの。

まあ尤もまだ試作品だから、その絶対数は多くないけどね」

「ちっ……………」

厄介な事この上ない、ただでさえ手のつけられないデッドポケモンに自由に指示を出せるなど反則だ。

性格や考え方はともかくとして、目の前のフレアとマードはトレーナーとしての腕は一流である。

――勝てるのか、という不安な疑問が頭をよぎる

「――しっかりしなさいよバカイリ、いつもの能天気は一体どこにいったの？」

「ヒメカ……………」

「そうですねよマスター、私達はあるなおばさんと頭が可哀想な男には負けませんから」

「誰が頭が可哀想な男だコラアッ!!」

「おばさんだなんてひどいわね、まあ確かに坊や達より一回り近く

年上だけど」

「じゃあおばさんじゃないですか、それに可哀想なのに可哀想と言っ
てなにが悪いんですか？」

しれっと暴言を吐くカノンに、カイリとヒメカも苦笑を浮かべた。

「こ、このくされポケモンがあ……………！」

「はいはい、落ち着きなさいマード」

宥めながらも、フレアは余裕な態度を崩さない。

「じゃあいくわよ。フローゼル、あの子達を殺しなさい」

命令を受け、真っ直ぐカイリ達に向かっていくフローゼル。

「いくぜ、カノン！！」

「ハク、気をつけなさい！！」

それを真っ向から勝負を仕掛けるカイリとヒメカ。

こうして、スズのとうの死闘は幕を開いた——【レイジ・シロナ
side】

周りの地面や家屋が破壊される中、レイジとシロナは死闘を繰り広
げていた。

「リオン、ほのおのうずだ!!」

「ガブリアス、ドラゴンクロー!!」

それぞれレイジとリオンがハッサムを。

シロナとガブリアスがドサイドンを相手にしていた。

今の所はほぼ互角である、尤も——それはシロナとガブリアスだけののだが。

「リオン、かえん——ぐうつ!」

痛みが走り、おもわず呻き声を上げてしまうレイジ。

——レイジ!!

それを聞き、リオンはおもわずその場に立ち止まってしまい……。

——ぐわっ!!

ハッサムのシザークロスが、リオンを吹き飛ばした。

「くっ……リオン」

情けない、自分のせいでこうなってしまったなど。

——き、気にすんじゃないやねえよレイジ。
それよりお前、傷は大丈夫なのか?

「――大丈夫。だから次に僕が変な声を出しても無視していいから」
心配させないようにそう告げるレイジだが、リオンにとってそんな言葉など何の意味も成さない。

顔面は蒼白、息も荒く立っているのだって辛いはずだというのに、精一杯強がって自分に指示を出す彼を見て、どうして心配しないというのか。

（チッ――バカやろう。たまには自分の事だけを考えやがれ!!）

こんな状態だというのに他者の事を考えるレイジに腹が立つが、今はそんな怒りを抱いている場合ではない。

それに、なんだかんだ言いつつも、そんなレイジだからこそリオンは障害の主人だと決めて付き添っているのだから。

しかし――長い時間は掛けられない。

もちろんカグヤ達も心配だが、これ以上戦いが長引けば間違いなくレイジにとって致命的なものになるはずだ。

だから早くこんなヤツなど倒してしまいたい、しかし……目の前の敵は自分より強い。

今はどうにかレイジの指示で互角に渡り合っているものの、これでは倒すどころかいつまで保たせられるか――

「リオン、右に!!」

迫るハッサムの攻撃を右に避ける。

「かえんほうしゃだ!!」

すぐさま弱点であるかえんほうしゃを放つリオンだが。

なんと、ハッサムのシザークロスはリオンのかえんほうしゃを二つに分けながらリオンへと迫り。

そのハンマーのような腕で、リオンを殴り倒した。

「っ、リオン!!?」

——ぐっ、く、くそつたれ……。

効いた、今のはかなり効いてしまった。

「リオン、戻るんだ!!」

モンスターボールを構えるレイジ。

そこから放たれた赤い光が、リオンをボールの中に入れようとして。

——彼は、それを拒否するかのようにボールの光から逃れた

「リオン!?!」

——勝手にボールに戻そうとすんな!! 俺はまだ戦える!

「け、けど……」

——いいからお前は俺を信じて指示を出してくれ!! お前の期待を裏切るわけにはいかねえんだよ!!

たとえ叶わぬ相手とて、レイジが自分なら勝てると信じて出してくれたのだ。

ならば、最後の最後まで諦めずに戦い抜くのが礼儀だ。

「よし、なら——!?!」

指示を出そうとした瞬間。

レイジは身体に力が入らなくなり、その場で膝をついてしまった。

——レイジ!?!

「あ、え——!?!」

視界が回る。

思考は上手く働かず、意識だっただけであるのかわからない。

「レイジくん!?!」

すぐにシロナがレイジへ駆け寄ろうとするが、ドサイドンとガブリアスのバトルから目を背けるわけにはいかない。

〈お父様!?!〉

〈父上！！〉

しかし、ボールから出てきたティナとアクセルが倒れそうになるレイジを支えてくれた。

「はあ…はあ…はあ…」

〈血を流しすぎています…このままではお父様が〉

——なら、ピカのボルテッカーで！！

〈ダメだヒカリ、ハッサムにはでんき技は通じにくい。ここは僕が〉

——アクセル、ヒカリ、ティナ。お前達はレイジを守れ！！

〈ならばリオン、ここは僕と2人で〉

——何言ってやがる、レイジを守るのが最優先だろうが！！
それに…コイツは俺が必ず倒す！！

〈リオン、つまらない意地を張っている場合ではありません！
早くこの戦いを終わらせないとお父様が〉

——わかってる。けどよ…コイツだけは俺が戦って勝ちたいんだ！！

ティナの言う通り、つまらない意地だというのは理解している。

だがそれでも——レイジの期待を裏切りたくはないのだ。

（俺が勝つんだ……あいつの為にも、俺だけが戦って勝つんだ!!）
動きについていけないらついていく。

炎が届かないなら届かせる。

パワーもスピードも相手が上なら——何が何でも届かせるだけ!!

「グオオオオアアアアアアアッ!!!!」

リオンの尻尾に灯る炎が大きさを増す。

「リ、リオン……」

（あの炎は……リザードが放つ炎じゃない!?）

戦いながら、リオンの変化に驚愕の表情を浮かべるシロナ。

まさか……ある考えが頭に浮かぶ。

尚も燃え上がるリオンの炎。

しかし、そんな隙だらけのリオンを酔狂に待っているほどハッサムは甘くない。

「させるか。ヒカリ、ボルテッカーだ!!」

ティナとアクセルに支えられながら、リオンに迫るハッサムに攻撃の指示を出すレイジ。

「ピカピカピカピカピカピカ……!!」

黄金色に輝くヒカリがハッサムを吹き飛ばす。

だが、ボルテッカーの直撃を受けてもハッサムにさしたるダメージは与えられなかった。

「リオン!!」

——レイジ?

「頑張れ……君の力を、あいつらに見せてやるんだ!!」

精一杯叫び、再び身体から力が抜けるレイジ。

(レイジ……!!)

信じている。

彼は、自分の事を信じてくれている。

ならば——

この信頼に応える事が、彼に返せる一番の恩返しだ!!

「グガアアアアアアアアアッ!!!!!!」

凄まじい雄叫びを上げ、リオンの炎が蒼い色に変化する。

——瞬間

リオンの頭の中に、聞き慣れない声が響いた。

——信じる心、見せてもらったぞ。お前になれば私の炎を授ける価値がある

（——誰だ。一体お前は誰なんだ……？）

——直にわかる。さあ……受け取るがよい。

声が途切れる。

そして——リオンの身体が光に包まれていった。

「これは………！」

進化の光、すなわちリオンがこれから進化を遂げるという何よりの証だ。

——光が収まり、リオンは最終形態であるリザードンに変化していた

「リオン………」

前よりも更に遅しくなったりオンに、レイジは自然と笑みを浮かべた。

——レイジ、ありがとうよ。お前が俺を信じてくれて嬉しかった。さあて……さっさとぶちのめしてやるか!!

キツと、ハッサムを睨むリオン。

「——うん。一撃で決めてリオン」

——任せろ!!

力強く頷き、口を大きく開けるリオン。

ハッサムはその姿に確かな恐れを感じたものの、真っ直ぐリオンへと向かっていく。

しかし——それは今のリオンにとってあまりに愚かな行為だった。

そして、ハッサムがリオンに襲いかかろうとした瞬間。

——凄まじい炎がハッサムを包み、ガブリアスと戦っていたドサイドンすら巻き込んだ

へす、凄い……

ティナ達も、リオンの技に驚きを隠せなかった。

これこそ炎タイプ最強の技であるブラストバーン。

リザードンになった事により、リオンも使えるようになった技である。

ハッサムはブラストバーンの一撃により戦闘不能に陥り、ドサイドンにもかなりのダメージを与えた。

——これを逃すシロナではない

「ルカリオ、インファイト!!!!」

ドサイドンに向けてボールを投げ、中から飛び出してきたルカリオがすかさずドサイドンに凄まじい連撃を叩き込んでいく。

更に、後ろではガブリアスが詰めの一撃の準備を終えていた。

「りゅうせいぐん!!」

ガブリアスから放たれたりゅうせいぐんが、都合四十近い隕石と化して一斉にドサイドンへと降り注ぐ。

そして——ようやくドサイドンも、その巨体を支えきれずに地面へと倒れ込んだ。

.....。

「――勝つ、た」

そう自覚した瞬間、レイジは全ての力を使い果たし瞳を閉じた。

〈お父様!?!〉

「いけない、早くレイジくんを病院に連れて行かないと!!」

息も小さく、いつ途切れるかもわからない。最悪の未来を想像しそうになる頭を振り、すぐさまガブリアスに指示を出そうとするが……ティナによって止められてしまった。

〈待ってください。病院へはわたくし達が運びます。シロナはカグヤや他の皆さんの所に行ってください〉

「でも……」

〈母上、ホウオウを奴らに奪われる事だけは阻止せねばなりません!!

それに父上も母上にそれを望んでいるはずですから!!〉

「……………」

アクセルにも諭され、シロナは言葉を失った。

正直に言えばすぐにレイジを連れて行ってあげたい。

しかしティナとアクセルの言う通り、彼はそれを望まないだろう。
(――私情をなくしなさい。ティナ達がいればレイジくんは大丈夫。

だから……今は自分ができる事をしなさい、シロナ!!(

自分自身に言い聞かせ、拳を作りながら精一杯耐える。

「――わかったわ。ティナ、みんな、レイジくんをお願い」

〈当たり前です。わたくしの大切なお父様ですから〉

言いながら、アクセルと協力してリオンの背中にレイジを乗せる。

そして、すぐさまリオンは飛び立っていった。

「――ガブリアス、私達も行くわよ!!」

既に国際警察には連絡をした、ならばこのハッサム達はそのままにしておいて大丈夫だろう。

本来ならばポケモンセンターに連れて行ってあげたいが、状況が状況な為それはできない。

(ごめんなさい……)

倒れているハッサムもドサイドンに謝罪の言葉を告げ、同時にこのような非道な行いをするロケット団に怒りを抱きながら。

シロナは、いまだ激闘を続けている他のメンバーの元へと急いだのだった。

第35話 デッドポケモンを止める!! ～それぞれの戦い～（後編）

「――ライコウ、でんげきはだ！」

ライコウのでんげきはが、縦横無尽に駆け抜けるスイクンへと向かう。

しかし、まるで網の目を縫うかのように悉くを回避しライコウに向かって幾つもの水の槍を放つスイクン。

「避ける」

だがライコウとて負けじとスイクンの攻撃を全て回避していく。

「……………」

さすがライコウと同じく伝説と謳われるポケモンだ、今の所は完全に互角である。

（……レイジは大丈夫だろうか）

ふと考えたのは、今日出会ったばかりの少年の安否。

そこで、他人の心配をしている自分に驚いた。

（おれが他人の心配をするとはな……）

旅をしてきて、今まで沢山の人に出会ってきた。

様々な人と出会い、けれどただの一度として他人を心配した事がなかった。

その時、自分はずいぶんと冷めた人間なのだと思ったのだが……。

何故か、あの少年の事を他人だと思えない。

危うい道を歩み、いつ踏み外すかわからない生き方が、ひどく気になってしまう。

——生き急いでいると、思ってしまう

故に守らなくては、支えてやらなくては。

（——こんな所で、いつまでも無駄な時間を過ごしている場合じゃないんだ）

如何に伝説といえども、非道な行為で操られているとしても、敵である以上は容赦しない。

「ライコウ、手加減せずにさっさと倒すぞ」

そう告げ、ライコウに指示を出す。

「アイアンテール」

飛び上がり、回転しながらアイアンテールを叩き込むライコウ。

それを、まるで羽根のように軽い動きで避けるスイクン。

すかさず、反撃をしようと仕掛けるスイクンだが。

——ロストとライコウの攻撃は、まだ終わっていない

「でんじほう」

アイアンテールの反動を利用し、再びスイクンへと顔を向けた瞬間、でんじほうを放つ。

しかし、攻撃を仕掛けようとしていたというのに、スイクンは身体を捻りそれすら回避した。

「かみなりのキバ」

ようやく隙を見せたスイクンに、ライコウは無理な体勢ながら雷を這わせた牙をスイクンの身体に食い込ませる——！！

見事命中し、全身に走る雷におもわず悲鳴を上げるスイクン。

（——頃合いか）

一度ライコウをこちらに戻し、懷からモンスターボールを取り出そうとしたロストだが……。

ダメージを受けながらも着地したスイクンの様子がおかしい事に気づく。

「……………?」

苦しげに息を吐き、小さな唸り声を漏らすスイクン。

「グギャアアアッ！！！！！」

「——っ」

形容できない雄叫びを上げたと思った瞬間。

——まるで逃げ出すかのように、全力でその場から跳躍した

「何だと——！？」

さすがにこんな行動をするとは思えず、気づいた時には完全に姿を見失っていた。

「ライコウ、追うぞ！」

ライコウの背に乗り、すぐさまスイクンを追いかけるロスト。

急がなくては、スイクンが罪のない人々を傷つける事になる。

そんな事を、させるわけにはいかない。

間に合え、そう心の中で念じながらロストとライコウはスイクンを追った。

……………。

「――どういう事だ？」

おもわずそう呟かずにはいられない状況に、ロストは困惑する。

スイクンの姿を見つけようと高台から街を見下ろしているのだが――見つからないのだ。

デッドポケモンは見境なく周囲を破壊する凶暴な存在になると聞いた、しかしその姿が街のどこにも見つからないというのはどういうわけなのか。

（まさか、ロケット団の元へと戻ったのか？）

可能性としては十分に考えられる、それならば街にスイクンが居ない理由になるからだ。

しかし、その考えはすぐさま霧散する事になった。

「――っ」

街から離れた森の中で起こる爆音。

木々が倒れ、そこに住んでいたであろう鳥ポケモン達が一斉に逃げていく光景が視界に入った。

「ライコウ、あそこだ」

すぐさまそちらへと駆けるライコウ。

全速力で向かい、森の中へと入る。

すると……ロストはスイクンとその周囲を見て驚愕した。

（――これは）

無惨にもスイクンによって折られた木々。

傷ついたのか、弱々しい声を上げる野生のポケモン達。

しかし、その誰もが苦しむスイクンを心配するかのように……見つめていた。

いきなり襲われ、住処を破壊されても……周りのポケモン達はスイクンに怒りを抱くどころか、心配している。

わかっているのだ、スイクンが自分の意思でこんな行動をしていないことを。

苦しみ、助けてくれと悲鳴を上げている事に、気づいているのだ。

（……これが、ポケモンの姿なのか？）

他者を思い遣り、慈しみ助けようとするその姿は、あまりにも美しい。

だというのに、人間が彼等に行った行為は一体何だ？

道具として扱い、苦しみ傷つけ周りに悲しみを撒き散らす。

あまりにも身勝手、あまりにも醜いその行いは、愚かしいなどという言葉では足りない程のものだ。

――怒りが

――憎しみが、身体の内側から湧き上がってくる

人間なんぞ、この世界に生きている価値などまるでない。

ゴミにも劣る存在、それが人間だ。

(――殺してやる)

ならば、この世界に人間など存在する価値は――

「……………」

空から聞こえる声に、顔を上げる。

(…………リザードン?)

あれもこの辺に暮らしている野生のポケモンなのだろうか。

しかし、リザードンの背にはピカチュウやサーナイト、リオルが乗っており……。

「レイジ……」

下から見てもわかる程、顔を蒼白にさせたレイジの姿が映った。

翼を羽ばたかせながら着地するリザードン。

その背から、サーナイトとリオルに支えられながらレイジは降りた。

へお父様、見てくださいスイクンが……」

へ父上の読みは当たっていましたね。ですが何故スイクンがここに？

「――戦っていたのだが、突然苦しみ出してな……追いかけてきたらこんな状況になっていた」

へロスト……」

「だが何故お前達はここに来た？ それにレイジのその様子……早く病院に」

「いいんです、ロストさん……僕は、スイクンを……助ける為に、ここに……来たんですから」

もう話すのも辛いはずだというのに、レイジはロストに説明をしなからスイクンの元に。

「待てレイジ、今スイクンに近づくのは危険だ。何をしてくるかわからんぞ！」

「それ、でも……助けないと……スイクンが、苦しんでいる、から……」

「お前……自分の状況がわかっているのか……！」

つい声を張り上げてしまったロスト。

だが仕方ない、寡黙な男であるロストですら叫びたくなるほど、今のレイジの様子は異常だからだ。

目は虚ろ、足だって支えられなければ倒れてしまうほどに弱々しく、意識すらないのではないかと本気で思ってしまう。

しかしそれでも——レイジの足はスイクンへと向かって進んでいく。

——スイクンを傷つけられているのか、野生のポケモン達がレイジ達に立ちふさがる

「……大丈夫だよ。僕はスイクンを傷つけたり苦しめたりしない。ただ…助けたいんだ」

弱々しく、けれど澄んだ穏やかな声。

たったそれだけで、周りのポケモン達はレイジ達に道を開いた。

（……野生のポケモン達を、こうも簡単に説得したのか……!!?）

信じられない光景に、ロストは目を見開いて驚愕する。

そして——ようやくレイジはスイクンの元へと辿り着いた。

愛おしそうに、スイクンの身体を優しく撫でるレイジ。

「——可哀想に。こんなに苦しんで……痛かっただろうね」

普段とは違う雰囲気の声に、ティナ達は違和感を覚えた。

もちろん普段のレイジも優しげな声だが、今の彼はどこか違う。

全てを包み込んでしまうほど優しく、そしてどこか懐かしい……。

それはティナ達だけでなく、周りのポケモン達や……人であるロストにすら同じ気持ちを抱かせた。

（この感覚は、一体なんだ……？）

この身に纏っていた怒りや憎しみなどの負の感情が消えていく。

まるで、そのような感情を抱く事が愚かだとも言うように……。

「今助けてあげるよ…… “私の子達”」

〈え——〉

両手をスイクンの身体に添え、レイジはぼつりと呟いた。

「——在るべき姿に還りなさい、スイクン」

と。

すると、スイクンの周りが光に包まれ……やがてそれはどんどん大きくなっていった。

〈これは……!?!?〉

「一体……何だというんだ?」

ロスト達も光に包まれていくが、それに恐怖はまったく感じられない。

いや、むしろずっと包まれていたような……そんな気さえ思う。

……………。

光が収まり、瞑っていた目を開けると……。

「これ、は……!?!?」

周りの光景が、先程とはまるで違っていた。

——森が、元に戻っているのだ

まるで初めから何事もなかったかのように、全てが元に戻っていた。

花も草も、スイクンに破壊された自然が全て元に戻っている。

(おれは、夢でも見ているのか……?)

しかしこれは夢ではなく、全て現実だ。

その証拠に――その中心には安らかな笑みを浮かべながら静かに眠っているレイジの姿が。

重傷だった傷も治り、蒼白だった顔も元通りの健康的なものに戻っている。

(……レイジ)

そんな彼を、ティナ達を含めたポケモン達が優しく見守っていた。

そしてスイクンも、まるで呪縛から解き放たれたかのように、レイジにその身体を預けている。

(レイジ、お前は一体何者なんだ?)

眠っている彼に問いかけるが、もちろん返事など返ってくるはずがない。

――スイクンとの戦いは終わった

しかし、この戦いはティナ達とロストに解く事などできない謎を残す。

この謎が解ける事になるのは、まだずっと先の話だ――【カグヤ side】

「ベイリーフ、エナジーボール!!」

エナジーボールがカメックスに命中する。

しかし、多少怯んだだけですぐさま反撃のハイドロポンプを繰り出してきた。

「エネコ、10万ボルト!!」

続いてエネコの10万ボルトも、カメックスに命中する。

だが……それでも相手は倒れてはくれなかった。

「くっ……」

先程から、何度こんな事を繰り返したのかわからない。

ダメージは確実に与えているのだ、幸いにも相手の動きは速くない為ベイリーフ達もさしたるダメージを受けていない。

いない、が……決定打を与える事もできないでいた。

（このままじゃ……）

ベイリーフ達も疲れの色が見え始めている、いずれはカメックスの攻撃も当たってしまうだろう。

そして一度でもまともに当たってしまえば、それで終わりだ。

（……レイジ）

押し潰されそうな心を、彼の名を呼ぶ事で必死に誤魔化そうとする。

——自分では何一つできないのではないか？

——また彼を頼り、自分一人では何も果たせないのではないか？

自分が未熟で弱いとは思っていた、トレーナーとしても人間としても。

それでも、きっと大丈夫だと言い聞かせていた心に、ヒビが入り始めた。

（勝てない……？ 私なんかじゃ、全力にすらならないの？）

挫けそうになる心を奮い立たせようとするが、一度芽生えた不安という感情は消えてくれない。

（私、は……いつだってみんなに助けられてきたのに……）

それなのに、自分は何も返せないというのか。

——そんな事は、絶対に許されない

戦うと決めたのだ、それなのに途中で諦めるなど愚の骨頂だ。

それに——彼は自分を信じてくれた。

自身を信じられない自分を、大丈夫だと言ってくれたのだ。

彼の期待だけは、何があろうとも裏切るわけにはいかない――！

「ムウ……」

「ムウマ、大丈夫だよ。あなたの事は私達を守るから」

申し訳なさそうに小さな鳴き声を発するムウマ。

おそらく戦えない自分に自己嫌悪を抱いているのだろう、けれどカグヤはムウマの頭を撫でながら口を開く。

「気にしないで、戦う事が全てじゃない。こうやって私達の傍に居てくれるだけでも、凄く力になるから」

「……ムウ」

本心からそう言っているとわかり、ムウマは嬉しくなった。

しかし同時に……悲しくなった。

こんなにも優しい主人に何もできない自分が、何も返せない自分がとても悲しい。

前の主人は、自分を道具として扱う悪魔のような存在だった。

しかし彼女は違う、こんな何の役にも立たない、ただ居るだけの自分を必要だと言ってくれた。

それなのに、何故自分は彼女に何もしてやれないのか……。

「エネコ、スピードスター――！」

再び攻撃を仕掛けるエネコだが、やはりカメックスにダメージを与える事ができない。

「ニヤッ!!?」

「エネコ!?!」

突然、エネコがバランスを崩し倒れてしまう。

どうやら瓦礫に足を取られてしまったようだ、すぐさま起き上がるうとするエネコだが——既に、カメックスのキャノン砲が完全にエネコをロックオンしている——!!

「エネコ!!」

急いで駆け寄ろうとするが、間に合わない。

ベイリーフも、エネコフォローへと回るほどの余裕は無い。

そして、カメックスの一撃がエネコの身体を貫こうとした瞬間。

——上空から、カメックスの身体を連べ打ちにする光の雨が降り注いだ

「っ、シロナさん……」

「カグヤ、大丈夫!?!」

「……………」

どうしてここに？ そんな疑問を抱く前に、ある事実がカグヤの胸を突いた。

——また、助けられた？

ギリと、齒を鳴らす。

「ガブリアス、戦いの連続だけど大丈夫？」

力強く頷くガブリアスに、シロナは指示を出そうとして。

「——シロナさん、手を出さないでください」

横からいきなりカグヤがそんな事を告げてきた。

「カグヤ……？」

「お願いします……このカメックスは、私達が戦って勝ちたいです」

「……………」

決意を秘めた瞳。

それを見て、シロナから反論の言葉が失われた。

「我が儘なのはわかってます……でも、私達が戦って勝たないと……もう一歩も前に進めない」

トレーナーとしても、人間としても。

この戦いで誰かの助けを借りてしまえば、きっとトレーナーとして何か大切なものを失ってしまうと思ったのだ。

そんな事はできない、自分はポケモンマスターになるという夢を抱いて旅を続けてきた。

それを――こんな障害なんかで諦める事など絶対にできない――！

(…………カグヤ)

確かな決意の瞳を見せるカグヤを見て、シロナは昔の自分の姿を彼女に重ねていた。

自分も彼女と同じくらいの年齢の時、トレーナーとしての壁にぶち当たった時があった。

幸いにも自分は乗り切る事ができたが……もしできなければ今の自分はここにいないだろう。

そして――その壁が彼女にとって今立ちはだかっているのだ。

それを邪魔できる者は誰もいない、そんな権利など存在しない。

故に――

「――ガブリアス、戻りなさい」

シロナはガブリアスをモンスターボールの中に戻した。

「シロナさん……」

「やってみせなさい、そこまで言ったのだから……最後までやり遂げて。」

途中で逃げる事は、絶対に許さないわ」

「……………はい！」

シロナの言葉に力強く頷きを返し、視線をベイリーフ達へ。

「ベイリーフ、エネコ、頑張ろう！！」

カグヤの言葉に、ベイリーフ達も頷きを返した。

そして……ムウマも。

「ムウマ、何をしてるの！？」

ベイリーフ達と共にカメックスと対峙するムウマ。

その瞳には、確かな戦いの意志が見えていた。

「ムウマ……戦うの？ でも辛いなら」

「ムウ！！」

ふるふると首を振るムウマ。

その様子を見て、カグヤはそれ以上何も言えなくなっていました。

ムウマは戦おうとしてくれているのだ、恐いという感情を振り払い、トラウマすら払いのけて。

だというのに、どうして止められるというのであろうか。

「――よし、みんな頑張れ!!!」

一斉にカメックスへと向かっていくベイリーフ達。

蹴散らそうと、キャノン砲からハイドロポンプを発射するカメックスだが。

「ムウマ、エネコ、れいとうビーム!!!」

攻撃を避けながら、そのキャノン砲を封じ込める為にそれぞれムウマとエネコがれいとうビームを放つ。

それは見事に命中し、カメックスのキャノン砲は完全に凍らされた。

「ベイリーフ、すてみタックル!!!」

がら空きになったボディへとすてみタックルを叩き込むベイリーフ。

さすがに効いたのか、僅かに苦悶の声を出すカメックス。

（上手い！ カメックスのキャノン砲を封じ込めるなんて……）

やはり、カグヤという少女はまだ未熟ながらもこれから化ける可能性を秘めたトレーナーだったとシロナは口元に笑みを浮かべる。

「ムウマ、シャドーボール!!」

小さなムウマの身体から作られたシャドーボールが、カメックスへと命中しぐらりとその大きな身体が倒れ込んだ。

（えっ、ムウマってこんなに凄いパワーを秘めてたの!?!）

可愛らしい外見とは裏腹に、ムウマの技は強力だったようだ。

だが、それならば話は早い。

「ベイリーフ、つるのムチでカメックスを捕まえて!!」

すぐさまつるのムチでカメックスの両腕を掴むベイリーフ。

邪魔だと言わんばかりに、つるのムチを弾き返そうとするカメックスだが。

「タネマシンガン!!」

ベイリーフの口から放たれたタネマシンガンが、カメックスの動きを更に封じる。

「ムウマ、あくのはどう!!」

背後に回り、あくのはどうをカメックスの頭部に当てるムウマ。

「いける——!!」

このまま攻撃を繰り返せば、必ず勝てる。

そう思ったカグヤ達であったが……。

「っ、きゃ——!？」

いい加減腹が立ったのか、カメックスが怒りの形相で滅茶苦茶に暴れ始める。

無理矢理凍らせていたキャノン砲を使って氷を砕き、所狭しと撃ちまくりもはや標準など定まっていない。

「カグヤ、このままだと被害が——!」

彼女に任せるつもりだったが、この状況ではそんな事を言っている場合ではない。

——と、そこでカグヤはある事を思いついた

(あ、もしかして……)

ボロボロのカメックスを見て、カグヤは何故か空のモンスターボールを手にとった。

「カグヤ……?」

彼女の意図がわからず、シロナが首を傾げた瞬間。

彼女は暴れるカメックスへとモンスターボールを投げつけ——

ボールがカメックスに当たった瞬間、なんと中に入ってしまった。

「ええっ!？」

これにはシロナも驚きを隠せない。

通常モンスターボールに入ったポケモンは、他のモンスターボールに入れられないようになっていたのだが、どうやらデッドボールにはそれが当てはまらないらしい。

そして――モンスターボールの動きが止まる。

「……ゲットしちゃった」

「……もしかして、確信があってやったわけじゃなかったの？」

「あははー……もうあれだけダメージを与えたんだから、もしかしてゲットできるかなー、なんて思いました」

「……………」

まさかそんな軽いノリだったとは……ある意味目の前の少女を凄く思ってしまう。

「――みんな、よく頑張ったね」

ベイリーフ達に駆け寄り、バッグからきずぐすりを出し振りかけてやる。

「ムウマも、本当にありがとう!」

自分達を助けるためにトラウマを克服してくれたムウマ。

その気持ちは、本当に嬉しかった。

「シロナさんもありがとうございます、私の我が儘を聞いてくれて」

「……貴女は昔の私にどこか似ているから」

「えっ？」

「なんでもないわ、それよりまだ他のみんなは戦っているのでしょう？

ならこんな所でいつまでも話してる場合じゃないわ」

「そうですね。じゃあレイジの所に――」

「彼なら大丈夫よ。戦いは終わって今は病院に居るはずだから」

「ということは勝ったんですね、よかった……」

「……そこまで言って、ある事に気づく。」

「……シロナさん、どうしてそんなに詳しく知っているんですか？」

「さっきまでレイジさんと一緒に居たからよ」「……………」

なるほど、納得。

……しかし、何故だろうか。

よくわからないが、何か 気に入らない。

シロナからすればレイジを助けようとしてくれたのだろうが、さっきまで彼と2人つきりだったという事実が、とっても癪に障る。

「カグヤ？」

「……なんでもないです」

しかし彼女は何故そんな事を考えてしまうのかわからないので、これ以上考えるのはやめた。

——彼女は気づかない、それが嫉妬だという事に

こんな状況で考えるようなものではないが、そんな事カグヤにとっては関係ない。

「シロナさん、ならスズのとうに行きましょう。

あそこではカイリとヒメカが、ハウオウを奪われないように戦っているはずですから」

「わかったわ。ならカグヤもガブリアスに乗って！」

「はい！」

急ぎガブリアスに乗り、スズのとうに向かうカグヤとシロナ。

レイジの事はもちろん心配だ、しかし今はハウオウを奪われないようにしなくては。

内なる感情を必死に押し殺しながら、カグヤはシロナと共にスズの

とうへと向かった――

第36話 時戻しの力、怒りの蒼き炎

「くう……………！」

「カノン！？！」

苦悶の声を上げるカノンに、カイリが叫ぶ。

「ハク、ドラゴンダイブ！！！」

そんなカノンを守ろうと、ハクのドラゴンダイブがフローゼルへと向かっていくが……。

「アクアジェット」

水を纏ったフローゼルの突貫が、ハクをドラゴンダイブごと吹き飛ばし、更に瞬時にカノンにすらダメージを与えた。

（っ、速い——！！）

尋常ではない速さ、二対一という不利な状況であるのに関わらず——フローゼルは優勢に立っていた。

「カノン、サイコキネシス！！！」

サイコキネシスが縦横無尽に駆け抜けるフローゼルを捕らえる。

「はかいこうせん！！！」

その機は逃さない、ハクのはかいこうせんがフローゼルへと向けて放たれた。

「もらった——！」

「甘いわよ。フローゼル、うずしお」

サイコキネシスの呪縛から逃れ、自身の身体を回転させながらうずしおを発生させるフローゼル。

それがバリアの役割を果たし、ハクのはかいこうせんを防いでしまった。

「くそっ!!」

「れいとうパンチ」

「え——」

その指示が聞こえた瞬間。

カノンの身体が、柱に叩きつけられた。

「カノン!？」

「う、くっ……」

攻撃を受けたカノンも、一瞬何をされたのか理解できなかった。

フレアの指示通りフローゼルはれいとうパンチを自分に放った、し

かし……その一連の動きが見えなかったのだ。

「こおりのキバ」

尚もカノンに攻撃を仕掛けるフローゼル。

「っ、モウカザル、かえんぐるまだ!!」

モンスターボールをフローゼルの方向へ投げ、中から出てきたモウカザルがすぐさまかえんくるまでフローゼルを吹き飛ばす。

「あら、三対一なんてズルいわね」

そう口にするフレアだが、その口元には余裕の笑みが。

たとえ何体出てこようとも、変わらないとでも言うようだ。

「モウカザル、かえんほうしゃ!!」

「みずのはどう」

かえんほうしゃとみずのはどうがぶつかり合い……呆気なくかえんほうしゃを掻き消し、そしてそのままモウカザルに命中する。

「ハク、かみなり!!」

背後からフローゼルにかみなりを放つハク。

背後は完全にがら空きだ、その読みは正しく見事かみなりはフローゼルの身体を包み込んだ。

――が

「そのままアクアジェット、その後にれいとうパンチ」

「え――」

かみなりの直撃を受けているのにもかかわらず。

フローゼルは何事もないかのように、アクアジェットでハクに襲いかかる。

それを避ける事ができずに、アクアジェットの直撃を受けるハク。

そして――その隙にフローゼルのれいとうパンチがハクに突き刺さり。

――ハクの身体が、柵を突き破り地面へ、と

「ハク――!」

すぐさま身を乗り出し、落ちていくハクをモンスターボールの中に入れた。しかし、これでハクは戦闘不能だ。

「っ、ヒノ、フィー！」

一気にヒノとフィーを場に出す。

「無駄よ、その子達さっきのカイリユ―より弱いじゃない」

「煩い！！ ヒノ、かえんほうしゃ。フィーはシャドーボールよ！
」

同時に指示を出し、それぞれ技を放つヒノ達。

それを、フレアは嘲笑うかのように笑い。

「アクアジェット」

たった一言、そう指示しただけでヒノ達の技を打ち破った。

それだけでは飽きたらず、そのままの勢いでヒノとフィーをまとめて柱に叩きつける――！

「――」

それで、終わり。

ただの一撃で、同時にヒノ達は戦闘不能になった。

「アナタ達じゃ勝てないわよ、坊やならともかくアナタみたいな未熟者にフローゼルを止められると思って？」

淡々と、認めたくない現実を突きつけるフレア。

「っ、まだよ……！ ロール！！」

ヒノとフィーを戻し、最後の手持ちであるロールを出す。

「落ち着けヒメカ、焦ったって相手の思うつぼじゃねえか！！」

「わたしは焦ってなんかいない!!」

「それが焦ってるって言ってんだ!! いいから少し落ち着け!!」

「わかってるわよ、それくらいわかってる!!」

言葉とは裏腹に、ヒメカの表情には焦りの色がありありと出ている。だが仕方がない、この戦いは絶対に負けられないものなのだ、その事実がヒメカから冷静さを奪っていく。

更に自分のポケモン達が一方的に打ちのめされる光景を見て、平常心を保つなど困難だ。

「あらあら……仲間割れだなんて醜いわね」

「ロール、れいとうビーム!!」

「れいとうパンチ」

ロールのれいとうビームを、まるで軽く小突くかのような動作であつさりと軌道を逸らすフローゼル。

「――――」

「無駄だと言ったはずよ、わからない子ね」

「フレア、もうお遊びはそこまでにしようぜ？」

見てるだけのこっちの身にもなってくれよ、退屈でしょうがねえんだから」

「……そうね」

「お遊び、だと……！」

「お遊びよ。確かにアナタ達は普通のトレーナーよりは強い。でもそれだけ。突出した才能があるわけでも強力なポケモンを持つてゐるわけでもない。

それに——ラティアスの力を全然引き出せていないわね、アナタ」

「——っ」

キツとフレアを睨むが、カイリ自身それはよくわかっていた。

自分は、カノンの力を十二分に引き出せていない。

これでは彼女自身が自分で考えて戦った方がまだマシだ、けれどそれは彼女が悪いわけではなく、自分が未熟なだけ。

「これで終いだ、これで消えろ」

マードの手から投げられるデッドボール。

そこから現れたポケモンは、ジュプトル。

（っ、こうなりゃアレを使うしかねえ………！）

意識を頭の中に集中させ、カイリは『時の力』を解放させる。

——頭の中に浮かぶ未来の光景

「――」

それを見て、カイリの思考は凍りついた。

敗北する未来が見えたわけではない、いや……彼にとってはそんなものすらたいした事ではないと思えるほどの、信じられない未来、が……。

「っ、ヒメカ!!」

「えっ……?」

「逃げろ、今すぐにここから離れるんだ!!」

「な、何を……」

「いいから、ここからすぐに離れろ!!　　じゃないとお前は――」

カイリは気づかない、ヒメカをここから逃がす事だけに集中しているせいで。

ヒメカは気づかない、カイリの言葉に面食らっているせいで。

――マードとジュプトルが狙っている標的が、ポケモンではない事に

「――“トレーナー”にリーフブレードだ」

動くジュプトル。

それは、一息でポケモン 達ではなく――

トレーナーである、ヒメカへと向かい……。

カイリの視界が、真っ赤に染め上がった。

「――――」

ぬるりとした暖かな液体が、顔に付着する。

力なくこちらに倒れ込んできた彼女から、少しずつ熱が失われていく。

「……悪趣味ねマード、トレーナーを直接狙うなんて」

「いいじゃねえか。どの道始末するんだからよ。」

大体うざったいんだよこいつら、たいした力もないくせに正義の味方気取りでしゃしゃり出てきやがって。

おいクソガキ、お前も今すぐにあの世に送ってやるからよお」

「――――」

聞こえない。

耳に入っているはずのマーダの声が、聞こえない。

「な、なんて……なんて事を………！」

「待っていなさいラティアス、この子を処分したらすぐにアナタもデッドポケモンにしてあげるから」

「っ、この………！」

「―――」

――何故だ？

どうして、彼女がこんな目に遭わなくてはならないんだ。

何もしていないのに、悪い事なんか何一つしていないのに……。

未来を視ても変わらなかった、彼女がこのような運命になる事はわかっていたのに……どうして。

（俺、は……）

守りたかった、救いたかった。

こんなふざけた未来など、消し去りたかった。

それなのに、未来を変える事ができなかった。

（こんな力があっても、俺は………!!）

守れる力がほしい、助けられる力がほしい。

あのレイジのように、誰かを助けられるような力が。

（頼む、頼むよ………！ 俺の中でまだ眠ってる力があるなら、さっさと目覚めやがれ！！）

精一杯願い、そして懇願する。

——頼む

——頼む

——頼む！！

こいつを死なせるわけにはいかない、こいつは死んでいい命じゃない、だから助ける力があるなら目覚めてくれ、その為だったらなんだってしてやる、腕でも足でもくれてやる、だから———！

「だから――助けてくれよ――っ!!」――魂からの叫び
ホウオウの事も、マード達の怒りも全て取り払って、ただ1人の少女を救うために叫ぶ。

「――」

瞬間、カイリの世界が変わった。

――身体が熱い

思考すら奪われそうなほどの熱が、全身に行き渡る。

「――、あ」

自分の鼓動が、ありえない速さで加速していく。

けれど不快感はない、むしろ……ずっと自分に足りなかったものが戻ってきたような……。

静かに、ヒメカの背中に手を添える。

未だにそこからはおびただしいまでの血が流れ、瞬時にカイリの手を赤く染めた。

それすら構わず、カイリはぽつりと告げるべき言葉を口にする。

「――時よ、我が命に従え」

と。

ただそれだけ、特別など込めずに淡々とした口調で放つ。

すると――その場にいる誰もが目の前の光景に自身の目を疑った。

「なっ――！？」

「これは……！？」

――戻っていく

ヒメカの傷が、まるで録画の巻き戻しを見ているかのように、戻っていくのだ。

傷だけではない、破れた服さえも先程と同じように戻っていく。

ありえない光景、夢としか思えられない異常なもの。

しかしそれは夢ではなく現実で、今も尚ヒメカの傷が……。

「っ、ジュプトル、殺せ！！」

呆けている場合ではないと、マードはジュプトルに指示を出す。

目の前の子供は危険だ、およそ人間が……普通のポケモンが持たな

いような力を持つ者など、生かしておく必要などない。

むしろ、ここで確実に始末しておかねばならない類の存在だと、内なる自分が警鐘を鳴らしている。

隙だらけなカイリ達に迫るジュプトル。

先程と同じように、リーフブレードでカイリ達の息の根を止めようとして。

――横から放たれたマツハパンチにより、柱に叩きつけられた

「っ、モウカザル……」

主人を守るように立つモウカザル。

頭に宿る炎は、今までにない凄まじい輝きを見せていた。

「この、クソ猿……!!」

「ウキヤアアッ!!」

――モウカザルは怒りに満ち溢れていた

主人であるカイリ、そしてそんな彼が大事に想っているヒメカを傷つけた。

その事実、たとえば相手が誰であろうとも絶対に許さない。

怒りは炎に変換され、尚も勢いを強めていく。

(すげえ炎だ……っ、これならもしかして!)

モウカザルの炎を見て、ある事を思いつく。

「モウカザル、今のお前なら“あの技”ができるはずだ!!」

「ウキッ!？」

あの技——その言葉で反応を見せるモウカザル。

しかし、すぐさま不安げな表情を浮かべた。

だが仕方ない、カイリの言うあの技とは今まで一度も成功させた事のない必殺技だからだ。

努力はしてきた、しかし今の自分の炎では扱う事ができなかった技。

「自分と俺を信じるんだモウカザル!! 頼む……お前のその炎でみんなを守ってくれ!!」

「っ、キキッ!!!!」

カイリの声で、モウカザルの中から迷いが消えた。

——迷うな、解き放て

カイリは信じてくれた、ならば必ず成功させてみせる。

モウカザルの決意に反応するように、再び炎が勢いを増した。

「いくぞモウカザル――」

――オーバードライブだ!!!!」

「――ウキイイアアアッ!!!!」

凄まじい雄叫びを上げた瞬間、モウカザルの身体を蒼く変化した炎が包み込む。

「うおっ!?!」

そのあまりに凄まじいパワーに、指示を出したカイリですら驚きを隠せない。

（す、すげえ……まさかここまですげえ技になるなんて……!!）

――オーバードライブ

それはモウカザルの特性である“もうか”を利用した強化技だ。

全身を完全燃焼させた蒼い炎で包み、パワー、防御、スピード全てを大幅にパワーアップさせる。

だが、今までは炎の力が弱く何度練習してもできなかった。

しかし、レイジ達と出会い……そして今、モウカザルはその怒りを全て力に変えたおかげで、見事オーバードライブを使いこなす事に成功する。

「カ、カイリ……」

「ヒメカ……！　よかった、生きてる……！」

嬉しくなり、涙を滲ませながらヒメカをおもいきり抱きしめるカイリ。

「………バカ。あなたみたいに頼りない男を残して死ぬわけじゃない」

いつも通り、少し呆れながらそう呟くヒメカだが……柔らかな微笑を浮かべながらカイリを抱きしめ返した。

「フローゼル、アクアジェット！！」

もうこれ以上あの2人をのさばらせておくわけにはいかない、そう判断したフレアはフローゼルに指示を出す。

「負けるなモウカザル、お前の超パワーを見せてやれ！！」

カイリに言われ、真っ向からフローゼルと対峙するモウカザル。

そして――なんとフローゼルをアクアジェットごとその場で受け止

めてしまった。

「なっ——！？」

「嘘だろ！？ 炎タイプのポケモンが水タイプの技をまともに受け止めただと！？」

「今のモウカザルがすげえんだ！！ お前等なんかに負けるかよ。投げ飛ばせ、モウカザル！！」

ジュプトル目掛けてフローゼルを投げ飛ばすモウカザル。

そして——再び蒼い炎を膨れ上がらせた。

「もう一つ見せてやる、こいつがモウカザルの新必殺技だ！！！！」

口から凄まじいエネルギーを感じる。

しかしはかいこうせんの類ではなく、しかもそれよりも遥かに威力が高いものだと理解した。

「やれモウカザル！！」

——ブルーフレア・バーストだあっ！！！！」

指示を出した瞬間。

全てを呑み込む程の凄まじい熱線がモウカザルから放たれ、瞬時にフローゼル達を包み込んだ。

——耳を防ぎたくなる程の爆発

オーバードライブ時のみ使用可能となるモウカザル最強の必殺技、その名もブルーフレア・バースト。

その一撃を受け、立ち上がるポケモンなどこの世に存在しない。

本気でそう思えるほどの威力を誇り、そしてそれは真実となった……。

……。

「くっ……何だと!？」

「……………」

マーダは驚愕に満ちた表情を浮かべ、フレアもこの事態に何も言えなくなった。

「やったぜモウカザル!」

「ウキヤアツ!!」

モウカザルと共に喜ぶカイリ。

既にヒメカも立ち上がる程には回復しており、心配そうに自分を見つめるロールの頭を撫でていた。

と。

いきなりモウカザルの身体が光に包まれる。

「モウカザル………！」

進化が始まったのだ。

そして光が収まり、一段とたくましい顔つきになったモウカザル――ではなく、ゴウカザル。

「――凄かったぞゴウカザル、やっぱりお前は最高だ！」

肩を抱き寄せあい、満面の笑みを浮かべあうカイリとゴウカザル。

しかし、まだ全てが終わったわけではない、すぐさまゴウカザルから少し離れ視線をフレア達に。

「これで終わりだ、さっさとそのにじいろのはねとやらを置いて消え失せろ……！」

「このガキ、まぐれくらいで調子に――」

「まぐれじゃないわ、これがこの子の実力もマード、それを見極められなかったワタシ達の落ち度だわ」

「なら、おとなしくしてくれるのかしら？」

「ええ。尤も――フローゼル達の相手ができるのならね」

その言葉の意味を理解するより早く。

「な——」

ブルーフレア・バーストの直撃を受け、間違いなく戦闘不能に陥ったというのに。

フローゼルとジュピトルは、ゆっくりながらも立ち上がってきた。

しかし、その瞳に気はなく、まるで幽霊のようだ。

「忘れたの？ デッドポケモンは死ぬまで戦い続けるのよ？」

「ぐっ……お前等、自分達は何をやってんのかわかってんのか!？」

これ以上戦えばフローゼル達は間違いなく死ぬ。

故に攻撃などできず、かといってこのままでは。

「カイリ、ヒメカ。モンスターボールでゲットして!!!」

「っ、カグヤ!？」

ガブリアスに乗ったカグヤから、とんでもない提案が投げかけられた。

「いいから、今は私の事を信じて!!」

「お、おう!!」

意味不明な提案だが、迫力に圧されカイリはフロールに、そしてヒメカはジュピトルに空のモンスターボールを投げると。

『はあっ!!?』

その場にいるカグヤとシロナ以外の全員が、ボールの中に入ってしまったフロール達を見て驚きの声を上げた。

そうこうしている内に、ボールの動きが止まり……。

「……ゲット、しちまったな」

「え、ええ……」

少し間の抜けた声を出しながら、モンスターボールを手にとったカイリとヒメカだった。

「やったね、大成功!」

カグヤとシロナも、塔の屋上に降り立つ。

「な、何でこんな事できたんだ……?」

「さあ。デッドボールは普通のモンスターボールとは違うからじゃないかな?」

「だって私もカメックスゲットしたし」

ほらほらー、なんて言いながらカメックスの入ったボールを見せるカグヤ。

「――さて。これからどうするの？」

カイリ達の前に立ち、マード達を睨むシロナ。

「くっ……………！」

「その様子じゃデッドポケモンはこれ以上所持していないようだし、たとえ所持していたってこのメンバーには勝ち目なんかないわよ？」

「そうですね」

背後から聞こえる声に、シロナは振り向く。

「レイジくん！？」

そこに居たのは、スイクンに乗ったレイジとライコウに乗ったロストだった。

しかも驚く事に、あれだけの重傷を完治させている。

「おいレイジ、お前スイクンをゲットしたのか？」

それに、お前怪我はどうしたんだよ！？」

「後で説明するよ。……もうこれまでだ、あなた達の手駒は全て失った。」

これ以上は抵抗せずに、おとなしく国際警察に捕まってください」

そう告げるレイジの口調は、あくまでも冷静で柔らかいものだった。あれだけの目に遭い、そしてポケモン達を傷つけられているというのに、彼は自分の怒りを二の次にフレア達を説得しているのだ。

「…………坊や、どうやってスイクンを元に戻したの？」

「……………」

その問いには、答えられない。

自分でもわからないわけではなく、新たに自分の中に芽生えたこの力は極力他人に話してはいけないと思ったからだ。

「…………そう。教えてくれないのは残念ね」

「もう、これ以上悪い事をするのはやめてくれませんか？
もし少しでも、罪の意識があるのなら……」

「ごめんなさいね坊や、アナタの申し出は嬉しいけどそれはできないの。」

ワタシにも、譲れない気持ちというものは持ち合わせているから」

「……………」

わかってくれないというのは、やはり悲しい。

どんな答えが返ってくるかなどわかっていたが、それでも……。

「……………」

突然フレアから何かを投げられ、反射的にそれをキャッチすると……。

「これは……!?!」

レイジが手に取ったものの、それは――にじいろのはねだった。

「フレア!?!」

「予定変更よ」

短く返し、再び懐から何かを取り出し地面に投げつけるフレア。

瞬間、目が痛くなるほどの閃光が辺りを包み、反射的に全員が視線を逸らす。

そして、次に目を開けた時には……フレア達の姿はその場から消え去ってしまった。

「ちくしょー、また逃げられた!!」

「油断してたわ……まさか逃げる用意までしていたなんて……」

「言っても仕方ないよ、それより僕はみんなが無事でよかった……」

「けどよレイジ、そっちは一体何があったんだ?」

「そうね。病院に行ったはずなのに……」

「それじゃあ、お互いに情報交換しようか」

……。

「……マジで言ってるのかお前」

「そっちこそ、マジで言ってるの？」

「マジに決まってるんだろ、証拠見せてやろうか？」

「僕だって証拠見せられるけど？」

「はいはい、2人ともわかったから」

情報交換をしよう、との事でそれぞれ自分達は何をしていたのか話していたのだが。

レイジとカイリが芽生えた謎の力の話に差し掛かった際、互いに信じられずに疑惑の眼差しを向け合っていた。

「すげえな……クチバで見た力と同じだったりして」

「さてね。それよりカイリの力だって驚きだよ、時を戻すなんて……」

「だよなあ……自分でも驚いてるよ」

「時を戻す？」

「自分以外の対象の時間を戻せるんだよ、それを利用してヒメカの怪我を治療したってわけ。

しかも人間やポケモンだけじゃなくて、自分以外の存在の時なら何でも戻せるみたいだな。

まあ尤も、せいぜい1日が限度みたいだけど」

——今回は、レイジもカイリも力の使い方が頭の中に入っているすなわち、これから自分の意志でこの力が使えるという事だ。

「なんだかまた謎が増えちゃったね」

「まったくだぜ。一体何なんだろうなこの力は。

まあ俺としては助かるから別に何だろうがいいんだけど」

「相変わらずお気楽よねカイリは……」

しかし、それがカイリのいいところである。

「——話の最中に悪いが、その羽根は一体どうするんだ？」

ロストの言葉に、全員の視線がにじいろのはねに集中する。

「これがあればホウオウを呼び寄せられるんだよね……？」

「フレアはそう言っていたけど……」

「……………」

日の光に照らされ、美しく輝くにじいろのはね。

それを強く握りしめ、レイジは天を仰いだ。

すると。

「————来る」

「えっ？」

ぽつりとレイジが呟き、全員が空を見上げると。

——空が燃えている

否、空に赤い何かが飛んでおり、そしてゆっくりとこちらに降りてくる。

その姿は、全員の視線を釘付けにし……そして、思考を凍らせるほ

どの存在であつた。

それは、一体のポケモン。

かつて、火事によって死んでしまった名もなきポケモンを生き返らせ、スイクン、ライコウ、エンテイを生み出した幻のポケモン。

——ホウオウが、伝説の通りにスズのとうに降臨した

第37話 ホウオウ降臨く求められる問いく

――虹色の羽根

見る者を魅了し、同時に畏怖させるような顔立ち。

誰かが息を呑み、けれどそこから動く者は誰もいない。

「……………ホウオウ」

ぽつりと、レイジはホウオウの名を口にする。

それと同時に、ホウオウは羽根を収めスズのとうに降り立った。

「――人間の力、見せてもらった」

「喋った!?!」

低く重い声を放つホウオウに、カイリは驚く。

「人の言葉を使うのが、そんなに不思議か?」

「あつ、いや……………すみません」

何故か謝ってしまった。

……………後ろでヒメカがため息をついたような気がするが、無視する。

「――ホウオウ、ずっと見てたの?」

「そうだ。お前達がこの醜い争いを止められるか見せてもらった。尤も、我も多少の手助けをしてしまったがな」

「手助け……？」

「お前のリザードンが力を求めた、だから力を貸してやった。我が助けを与えてやるのは多少の躊躇いがあったが……」

（……なんかいちいち偉そうだよな）

ついついそう思ってしまうカイリだが、口に出すと面倒な事になりそうなので黙っておく。

「しかし、それを抜きにしてもお前達はこの戦いを止め、奴らのくだらぬ企みを潰した。大義であったぞ」

「でもそれはポケモン達が力を貸してくれたからだよ。人間だけじゃ止められなかった」

「そうだ。……不思議なものよな、争いを始めたのが人間なら止めたのも人間。」

——どちらが人間の本性なのか」

「そんなの、後者に決まってるだろ。そりゃあ人間にはこんな部分もあるけど……」

「そうかな？」

カイリの言葉を遮って、ハウオウが口を開く。

「人間は我等のような存在を道具のように扱い、自らの願いに叶わなければ容赦なく捨てる。

そんな事をしている人間が、果たして綺麗な存在だと言えるのか？」

「それは……」

「でも、それが人間の全てではないわ」

「それは表面上に出ていないだけではないのか？」

では問うが、今まで生を謳歌してきて一度たりともそう思った事はなかったと言えるか？」

「……………」

その問いかけに、シロナも反論を返せない。

自分とて、過去にゲットしたポケモンが自分の望んだ強さではないからといって逃がしたり、悪態を吐いた時だってあった。

しかしそれは仕方ない、彼女は神様でも聖人君子でもない、人間なのだ。

トレーナーとしての強さを求めるが故に、そのような行動に走る者がいないわけではないのだから。

「じゃあホウオウは、人間が嫌いなのか？」

「好きか嫌いか、そんな感情など一度たりとも抱いた事などない。

しかし……人間は醜い存在だという認識はある」

「……………」

はつきりと告げるホウオウに、全員が目を見開く。

醜い存在だと、ホウオウは言った。

その口調には、確かな怒りと侮蔑の感情が乗せられている。

「じゃあ、何でレイジに力を貸したんだよ？

人間が醜いと思ってるなら、力を貸す必要なんか……」

「勘違いするな。我が力を貸したのはあくまでお前達がポケモンと呼んでいる者達を助ける為だ。

それに……この子は、我等にとって特別な存在だからな」

「えっ……？」

特別な存在……？

ホウオウはレイジを見ながら、確かにそんな事を口にした。

「特別な存在って……レイジが？」

「……ホウオウ、君は……僕の事を知ってるの？」

「……………」

「知っているなら教えてほしい、僕は……一体何者なの？」

溢れる感情を抑えつけながら、ゆっくりと問いかけるレイジ。

だが……ホウオウは首を横に振りながら口を開いた。

「その答えはお前自身が見つけなくてはならない、我が話すわけにはいかないのだ」

「……どうして？」

「それが世の理、そしてお前自身に課せられた使命だからだ」

「使命……」

自身を見つけるのが使命とは、一体どういう事なのだろうか。

「その答えはいずれわかる、その使命は運命でもあり……そして、決して避けられぬものだからな」

「……………」

「——レイジといったな、お前に問いたい事がある。

お前は、人間に対して一体どんな感情を抱いている？」

静かに、けれど有無を言わせぬ迫力を込めて、ホウオウは問うた。

（人間……）

この世界に生き、ポケモン達と共に暮らす存在。

そんな人間に対して、自分は一体どんな感情を抱いているというのか。

「――憎いと、思った事はなかったのか？」

「――」

ホウオウの言葉に、レイジはピクリと身体を震わせる。

「お前には人にはない不思議な力がある、だがその力のせいで同じ人間達に化け物扱いされ蔑まれた。

その時お前は思わなかったのか？ 人間は醜いと」

「……………」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ レイジ、お前今の話……」

「……………」

レイジは答えない。

しかし、それが無言の肯定だと理解し、カイリは何も言えなくなつた。

――予想は、薄々していたのだ

周りにはない力、当たり前ではない存在に人は恐怖する。

ポケモントレーナーという存在が当たり前になっている今でさえ、ポケモンという存在に恐怖心を抱く人間がいる。

その理由は、人にはない力を持っているから。

故に、レイジの力を見て恐怖心を抱かない人間がいなかったかというと……答えはノーだ。

「人間を憎いと、くだらない存在だと思った事はなかったのか？」

「……………」

心の奥底にしまっていた感情が、少しずつ浮上していく。

子供の頃、この力が原因でカグヤ以外の子供に恐がられた。

その時に受けた仕打ちに対する怒り、憎しみ。

ずっと目を逸らし、蓋をしてきた感情が、ホウオウの言葉で……。

「——レイジの傷を、思い出させないで」

「——」

ふわりと、誰かに優しく抱きしめられた。

それがカグヤだと理解するのに数瞬、そして彼女がホウオウに向けて放った言葉を理解するのに、更に数瞬かった。

彼女に視線を向けると、カグヤはホウオウを睨みつけている。

珍しい、本気で怒った表情を浮かべながら。

「あなたは何がしたいの？ レイジの傷を思い出させる為に来たの？
なら帰って、そして二度とレイジの傍に現れないで。

レイジを傷つける存在は、たとえ誰であろうとも許さない」

「……カグヤ」

「——人間の娘。その子を守るのはお前の自己満足を満たす為か？」

「違う。私にとってレイジは一番大切な人だから守るの、ずっと助けてもらってきた……私は今までレイジに何も返せなかった。
だから守る、どんな存在だろうとも彼を傷つける全てから」

「……………」

僅かに、ホウオウの顔に驚愕の色が見えた。

カグヤの言葉が真実だと理解したからだ。

「——確かに、あなたの言う通り人間は醜い存在よ。もちろん私だ
って同じ。

でも、それが人間の全てじゃないと胸を張って言えるわ。
だって、人間である私は彼が何者であっても構わないと思ってる。
たとえ彼がどんな存在でも、今まで抱いてきた信頼と愛情が変わ
るわけじゃない」

シロナもレイジを守るように立ち、真っ直ぐホウオウと対峙しては
つきりと言い放つ。

「シロナさん……」

「——お前達は、本気で言っているのか？」

「当たり前」

「当たり前よ」

間髪入れずにそう返す。

しかし、そう返したのは2人だけではない。

「俺達だって同じ気持ちだ、レイジが何者だろうと関係ねえ。

こいつは何があっても俺の……俺達の親友だ」

「そうね。わたしもはっきりとそう言えるわ」

「……お前がレイジに何を言いたいかは知らんし興味もない。
だが、こいつを傷つけるならば許さん」

カイリも、ヒメカも、ロストも、レイジを守るようにホウオウと対峙する。

「みんな……」

嬉しかった。

こんな自分を、本気でそう思ってくれる事が本当に嬉しかった。

「――なるほど、それもまた人間の本質か」

そう呟き、ホウオウは羽根を広げ空を飛ぶ。

「ホウオウ……？」

「レイジ、そして人間達よ。お前達の答えを確かに見せてもらった。そこまで言い切ったのだ、選定の時までその答えを失うな」

「選定の時……？」

「おい、わけわかんない事言っつて勝手に消えようとすんな！
お前にはまだまだ訊きたい事があるんだよ！」

「我からはこれ以上の事は言えん、私の役目はあくまでも監視と問いかけだけだ」

「監視……？」

「問いかけ……？」

「答えはいずれわかる、それがこの世界の理だ」

「待てコラ！ 言い逃げすんじゃないぞ！！」

「レイジ、自分自身の事がわからず不安になっているようだが、その答えも選定の時になれば自ずとわかる。

だからそれまでに世界を知れ、そして人間という存在がこの世界に必要かどうかもな」

「えっ……?」

「——もう二度と会う事もあるまい。だが……：私の言葉を忘れるな」
そう一方的に言い残し、空へと消えていくホウオウ。

虹色の光も消え、辺りに静寂が訪れた。

「……………っ、何なんだよあれは!!!!」

かなりご立腹なカイリだが、まああれだけ一方的に言われれば怒りも抱いても仕方ないかもしれない。

他のメンバーも、カイリと同じように不満げな表情を浮かべている。

——しかし、レイジだけは違った

ホウオウの言葉が、何度も頭の中に繰り返し再生されていく。

世界を知れ、と。

人間という存在を知れ、と。

それがお前の使命だと言わんばかりに、ホウオウはそう告げてきた。
忘れてはならない、この旅でそれを見つけねばならないと、レイジはそう感じていた。

「まったく、わけわかんない事言いやがって……：同じ伝説のポケモンでもカノンとは大違いだぜ!」

「でも、ホウオウは結局何が言いたかったのかな？」

「さてな。それよかさつさと帰ろうぜ。」

街の様子も気になるし、マツバさんの所に戻らねえと」

「そうね。それじゃあ帰りましょう」

「……………」

ホウオウが消えていった空を見上げる。

「レイジー？」

「……今行くよ」

カグヤに呼ばれ、レイジも屋上を後にする。

頭の中で、何度もホウオウの言葉を思い出しながら……。

「——ええっ、ジム戦できないの!？」

エンジュシティで、カイリの大声が木霊する。

「当たり前じゃない、こっちの都合を押し付けたりしないの」

そんなカイリをたしなめるヒメカ。

——エンジュシティでの死闘の際、ジムが壊れてしまいジム戦ができないとマツバに告げられたのだ

それだけではなく、街の復興を優先しなくてはならず、少なくとも数日間は不可能とのこと。

「仕方ない。ジム戦は諦めてアサギシティに行こう」

「ええっ、マジかよ……」

ぼやくカイリだが、無理なものは無理なのだ。

なにせ色々ゴタゴタしていたせいで、カントーに帰らないとポケモンリーグに間に合わなくなる。

バッジを集めても間に合わなければ、それこそ笑い話にもならない。

「――レイジくん、皆さん、ありがとう。」

君達のおかげでこの街も救われた」

「いいえ。気にしないでください」

「それにスイクンにハウオウに出会えるなんて……ようやく夢が叶ったよ」

「あはは……」

ハウオウとの会話を聞かれなくてよかったと思う。

なにせ人間をボロクソ言っていたのだ、トラウマになってしまうかもしれない。

「――それじゃあ、また機会があれば会いましょう」

「ああ、またね」

マツバに一礼をして、アサギシティ方面の道へと歩を進める。

そして、出口へと向かうと……。

「あ」

そこには、何故かシロナとスイクンの姿が。

「……スイクン」

「……………」

ジッとレイジを見つめるスイクン。

口には出さないものの、その瞳の奥には感謝の意が感じ取れる。

「——またね」

掛ける言葉は、ただそれだけ。

本当は、スイクンにも来てもらえたら嬉しいと思う。

けれど、他ならぬスイクンがそれを望まない以上は仕方がない。

スイクンは顔をレイジに擦り寄せた後、あっという間に森の中へと消えてしまった。

また会いたいと思うが、それは難しいかもしれないと思うと残念だ。

「スイクン、綺麗だったなあ……」

「そう思うと、なんか少し勿体ないな」

「スイクンが望まないなら仕方ないさ。それよりも……シロナさんはどうしてここに？」

シロナへと視線を向けながら問いかけると、シロナは驚きの言葉を口にした。

「レイジくんについていこうと思って」

「は……？」

「ついてくって……旅にですか!？」

ええ、なんて即答をするシロナに、全員顔を引きつらせる。

「シロナさん、チャンピオンの仕事は……？」

「ああ……その点なら心配無用よ。実を言うと四天王やチャンピオンってポケモンリーグが終わると仕事ないの」

「仕事ないんですか？」

「ええ。だからみんな他にちゃんとした仕事を持っているのよ。私は考古学者といった風だね」

なるほど、それならば納得はできる。

別に断る理由がないレイジとしたら、その言葉だけで充分賛成する事ができる。

できる、が……。

「……………」

何故か、さっきからカグヤの機嫌があまりよくない。

「カグヤ、反対なの？」

「……………うん」

首を振るカグヤだが、その顔はあきらかに納得していないものだった。

しかし、一体どうしたというのだろうか、カグヤは他人を嫌うような子でないし、それ以前にシロナとは仲がいいはずだ。

「カグヤ、宜しくね？」

「あ、は、はい……………よろしくお願いします」

握手を求められたので、慌てて手を出す。

（……………変なの。どうして胸がモヤモヤするんだろう）

自分の感情がわからない、今までも何度もあったがこれは一体何だというのだろうか。

「――ではレイジ、おれはそろそろ行かせてもらおうぞ」

「えっ……」

「悪いがおれはおれの目的を果たしたい、だからお前達とは一緒に行けないんだ」

「……そうですか」

残念だが、ロストにも事情があるのでこれ以上は何も言わなかった。

「それじゃあ行きましょう、目指すはアサギシティよ！」

言いながら、さっさと走っていつてしまうシロナ。

「おっ、負けるか!!」

「ま、待ってよー!!」

別に勝負をしているわけでもないのに、慌ててシロナの後を追うカイリとカグヤ。

「まったく、子供なんだから……」

「仕方ないよ。――それじゃあロストさん、またいつか……」

「ああ。またどこかで会おう」

そう言葉を交わし、ロストはチョウジタウンへ、そしてレイジはアサギシティへの道を歩み始めた。

「レイジー、ヒメカー、はやくはやくー!!」

「はいはい……」

すっかりいつもの彼女に戻ってくれた事に安堵しつつ、レイジは再び旅路を進んでいく。

——ホウオウに告げられた言葉を、頭の隅に思い浮かべながら【? ? side】

「——失敗したか」

「申し訳ありません、この失態は必ず……」

「そう気負いする必要などはない、しかし……デッドボールにそのような弱点があるとは意外だった」

まさか、モンスターボールで捕まえる事ができるとは……まだまだ改良の余地があるようだな。

それに、ラティアスの事といい今回のホウオウの事といい……。

「レイジ、と言ったな？ お前が執着しているトレーナーは」

「執着というわけでは……ただ、彼の力は我々にとって有効かと思っただのです」

それを執着というのだから……そう言ってやろうかと思ったがやめておこう。

「フレア、マード、お前達は暫しホウエンに行け」

「ホウエンに、ですか？」

「そうだ。ホウエンにもホウオウやスイクンと同じく伝説と呼ばれるポケモンが存在する。それを調べてくるのだ」

「――畏まりました」

では行け、そう命じると2人はすぐさま姿を消した。

「――さて」

人間にはない不思議な力を持つ少年、レイジにカイリか……。

なる程、確かに興味が湧いてしまうのも仕方ないかもしれん。

ちょうどいい、今度は私自らがどれほどのものか見極めてみるか。

それに、あのポケモンを捕らえねばならんしな。

——ホウオウと対をなすポケモン

海の守り神である——

——ルギアをな。

キャラクター紹介6

【名前】 ロスト

【性別】 男

【年齢】 18歳

【一人称】 おれ

【身長】 181cm

【人物】

自分自身を知るために旅をしている少年、レイジとはやけたとうで出会った。

ロストという名も本名ではなく、自分で付けた名前であり本名は彼自身もわからないほどの深刻な記憶喪失に陥っている。記憶を失う前はトレーナーだったせいかな、その戦闘センスは凄まじくバクフーンのレジェンドとライコウを巧みに操り四天王クラスにも勝るとも劣らない実力を持つ。【性格】

寡黙で呼ばれば返事をするが、極力自分から話しかけたりなどはあまりしない。

しかし無愛想というわけではなく、声を張り上げる事があったりと普通の少年となんら変わりはない。

現在はジョウト地方のチョウジタウンで自分の記憶を探っているようだ。

オリジナル技2

・オーバードライブ

使用者はモウカザル及びゴウカザル。完全燃焼させた自身の炎を身に纏い、パワー、防御力、スピード全てを通常時とは比べものにならないほどに強化する技。

しかし、展開している間は常時反動ダメージを負い続け、更に時間制限があるまさに切り札である。

・ブルーフレア・バースト

使用者はモウカザル及びゴウカザル。

オーバードライブ時のみ使用可能な必殺技で、口から凄まじい熱線を放つ超パワーの最強の炎技である。

現段階では間違いなく最強の技であり、まともに受けて耐えきれぬポケモンは存在しない。

第38話 旅の途中へ穏やかな日常へ

――アサギシティを目指すレイジ達

迫るポケモンリーグに向けて、今日もトレーニングに勤しんでいた。

「エネコ、スピードスター!!」

「トゲキッス、サイコカッター」

エネコのスピードスターと、トゲキッスのサイコカッターがぶつかり合う。

しかし、サイコカッターによってスピードスターが押し負けエネコに向かっていく。

「あなをほる!!」

すぐさま地面に穴を掘って難を逃れるエネコ。

「いい手よカグヤ、でもまだまだね」

「え?」

「トゲキッス、地面にはどうだん」

「っ、エネコ出てきて!」

すぐさまそう指示を出すカグヤだが、少しばかり遅かった。

地面へと向かって放たれるトゲキッスのはどうだん。

それは見事中にいるエネコを捉え、地面へと叩き出す。

「そのままエアカッター」

そして、追撃のエアカッターをまともに受け。

「そこまで！」

審判をしていたヒメカの声により、バトルの幕が降りた。

……。

「――あーあ、また負けちゃった」

きずぐすりで治療した後、エネコをボールに戻しながらカグヤは愚痴を零す。

「仮にもチャンピオンだから、そう簡単に負けるわけにはいかないわ」

そんなカグヤをなだめるように、シロナは言った。

「よし、次は俺とお願いしますシロナさん！」

チャンピオンに特訓してもらうなど普通はありえないのだ、ここは是が非でも活用させてもらわねば。

そう思ったカイリだったが、背後から掛けられた声によって中断させられる事に。

「特訓するのは構わないけど、お昼ごはんができたから一旦終わりにしてこないか？」

エプロンを身につけ、右手におたまを持ちながらそう言ったのは、本日も食事当番のレイジ。

「やった、私もうお腹ペコペコだよ」

「それなら手伝ってくれないか？」

「えー……」

「……じゃあ、今日はカグやお昼ごはん無しだね」

「わーっ、それだけのご勘弁を!!」

なら早く手伝って、容赦のないレイジの言葉にカグヤも渋々従うしなく。

「――では、いただきます」

『いただきます!』

すぐさま準備を終え、昼食となった。

「……それにしても、レイジくんって料理上手なのね」

玉子焼きを口にしつつ、シロナは感心したように言った。

「そうですか？」

レイジとしては、別にたいしたものを作っているとは思っていないので、首を傾げるしかない。

「ええ、この歳でこんなに美味しいごはんが作れる男の子なんてそうはいないわよ。」

昔から料理をしてきたの？」

「はい。おじさんとお婆さんがよく研究所に泊まりがけで仕事なんてよくありましたから、自然とできるようになったんです」

「レイジ、よくお母さんのお手伝いとかしてたもんね」

「……そういうあなたはしてなかったの？」ジト目でそう告げるヒメカに、カグヤは「うっ」と声を漏らす。

やってなかったんだな、彼女のその態度で全員がそう思った。

「だ、だって……料理とか苦手なんだもん」

「そんなの単なる言い訳だよ、カグヤ」

「ううっ……！」

容赦なしのレイジのツツコミにより、カグヤ撃沈。

それを見て、全員苦笑混じりの笑みを浮かべるのだった。

「そういえば、シロナさんってたしか一人暮らしなんですよね？」

「ええ」

「なら、今度食事当番してくれませんか？　いつも僕ばかりで大変なんで」

最後の方は皮肉たっぷりに言い放つレイジ。

それを聞いて、カイリ達3人が小さくなった。

「……………」

「……シロナさん？」

一体どうしたというのだろう、いきなりシロナの動きが止まった。

心なしか、顔が引きつっているようにも見える。

「あの……どうかしましたか？」

「……いえ、そうね……近い内にでも」

「はあ……」

何だろう、今あまり触れてはいけない話題に触れてしまったような

気がする。

「――ごちそうさまー、それじゃあみんな、早速特訓よ！」

早々に席を立ち、自分のポケモンを連れて走っていくカグヤ。

「まったく、後片付けくらいしてよ……」

しかし、いつもの事なので諦める事にする。

「手伝うわ。さすがにこれくらいはしないと」

「いいよ。それよりヒメカはカグヤが騒動を起こさないか見張って
てくれないか？」

「……わたしはあの子のブレーキなの？」

「……宜しく」

答えをはぐらかし、ヒメカの肩に手を置く。

大袈裟にため息をつきつつも、ヒメカはカグヤの後を追ってくれた。

「カイリもトレーニングしてくれれば？」

「えっ、いいのか？」

「そんなにソワソワした態度を見せられたらそう言わざるおえない
よ」

「またも皮肉めいた口調でそう告げると、カイリは居心地悪そうに小さくなった。」

「そんな彼に苦笑しつつ、レイジは汚れた食器や調理器具を持ってその場から少し離れる。」

「アクセル」

「ボールからアクセルを出す。」

「いつもの、お願いできるかな？」

「はい、わかりました」

レイジにそう言われ、アクセルは地面に穴を掘り始めた。

「レイジくん、何してるの？」

「何をするのかわからないのか、シロナがレイジの元へとやってくる。」

「ちょうどアクセルの作業も終わったようだ、レイジはシロナへと視線を向けた。」

「シロナさん、ミロカロスを出してくれませんか？」

「それはいいけど……この穴は？」

「アクセルの開けた穴は、それなりに大きな穴で直径40センチはあるだろうか、しかし何をするのかさっぱりわからない。」

「洗い場です。近くに川はないしあったとしても川に油を流すわけにはいきませんから」

「なるほど……」

そういう事なら、とシロナはミロカロスボールから出す。

「ミロカロス、みずの……みずでっぼう」

（今みずのはどうって言おうとしたな……）

それは勘弁してもらいたい、ミロカロスのパワーでそんな事をされたら洗い場ができるどころかクリーターができてしまう。

かなり威力を弱めたみずでっぼうにより、穴に水が溜まり洗い場ができた。

「ミロカロス、ありがとう」

優しく頭を撫でてあげると、気持ちよさそうに目を細めすり寄ってきた。

「あはは、くすぐったいよミロカロス」

（……ミロカロス、羨ましい）

じゃれ合っているレイジとミロカロスを見ながら、羨ましそうな視線を送るシロナ。

しかし自分にはあんな事をする度胸はない、というかミロカロスだ

から違和感がないだけで、シロナがやると色々と問題があるだろう。こういう時、ポケモンになれたらと思ってしまふのは致し方ない……と思う。

「それじゃあ、さっさと終わらせましょう」

尚もじゃれてくるミロカロスを優しく引き離し、汚れた食器達を洗っていくレイジ。

それを見て、シロナも慌てて手伝い始める。

「父上、母上、僕も手伝いましょうか？」

「大丈夫だよアクセル、ありがとう」

手際よく食器を洗い終え、次々タオルで拭いていく。

しかし慣れていないのか、シロナはまだ終わっていない。

「シロナさん、慌てなくてもいいですから」

「え、ええ……」

自分よりかなり年下の男の子にフォローされるというのは、なかなか堪える。

——やがて、シロナも食器を洗い終えた

「アクセル、ご苦勞様。リオン、出てきて」

アクセルをボールに戻し、すぐさまリオンを出す。

「いつもの、お願い」

——任せろ。

そう返すと、リオンは即席の洗い場に溜まった水に炎を吐き出す。

（ああ、なるほど……）

汚れた水をそのままにするわけにはいかないので、リオンの炎で蒸発させているのだろう。

そして、すっかり乾いた穴を塞いで——これで完了だ。

「シロナさん、手伝ってくれてありがとうございます」

「気にしないで。それに私だって一緒に旅をしているのだから、手伝うのは当然でしょ？」

「……カイリとカグヤにシロナさんの爪の垢を飲ましてやりたい」

「あはは……」

本気の声色でそう呟くレイジに、シロナは苦笑を浮かべる。

と、シロナはレイジに頼んでみたい事を思い出した。

「ねえレイジくん、前からお願いしたい事があったんだけど……」

「なんですか？」

「私のポケモン達が私の事をどう思ってるのか通訳してほしいの」
簡単な意志疎通ならばできるが、深い所まではシロナでもわからない。

だからこそ、ポケモンと会話できるレイジに聞いてもらいたいのだ。

「いいですよ」

大好きな自分のポケモン達の事をもっとよく知りたい、そんなシロナの心中がよくわかるから快く承諾した。

「ありがとう。それじゃあ早速お願いね？」

言うやいなや、一気に自分の手持ち全てをボールから出すシロナ。

（これは……壮観だな）

ミカルゲにロズレイド、トゲキッスにルカリオにミロカロス、そして切り札であるガブリアス。

どのポケモンも凄まじいまでの強さを秘めており、立っているだけでその凄みというのが感じ取れる。

「それじゃあまずは……みんなが私の事どう思ってるか訊いてみて。あっ、私に気を使わなくていいから、はっきり言ってね？」

「——だそうですが、みんなはシロナさんをどう思ってるの？」

——シロナはとても優秀なトレーナーよ。

初めに答えを返したのはミロカロス。

——うん。ボク達の事大切にしてくれるし、ボク達全員大好きだよ。

続けて答えたのはトゲキッス。

彼の言葉に他のポケモン達がうんうんと頷きを見せた。

(……やっぱりね)

訊かなくてもわかっていた、ガブリアス達がシロナの事をどう思っているかなど。

だってこんなにも素晴らしいトレーナーなのだ、彼女が自分のポケモン達に嫌われているなどあり得ない。

——しかし

——あつ、でも待って。

「……………」

その旨を伝えようとしたレイジだったが、突然ミカルゲが口を開いた。

——トレーナーとしては文句なしなんだけど、女性としては……ね。

「……………は？」

——あつ、確かに。

——女性としてはちよつと……って思っちゃうよね。

口々にそう言い出すシロナのポケモン達。

（女性としてはちよつとって……何？）

ポケモン達は何を言っているのかわからず、首を傾げていると……

——シロナってば、家事が何もできないのよ。

まさかのカミングアウトに、レイジの思考が凍り付いた。

「え……？」

——家事ができないどころじゃないよな。

——そうそう、料理はできないわ洗濯もできないわ、おまけに一番酷いのは片づけよね。

——シロナって、部屋の片づけが全然できないのよ。この間なんか積み重なった本が雪崩になって落ちてくるし。

更に遺跡の資料を纏めたレポートを部屋の中で無くすし。

——あの時は探すのに1日掛かったよな？

「……………」

まるで井戸端会議のような事を始めるポケモン達。

そこから告げられる話は、レイジのキャパシティを完全に超えてしまった。

確かに、シロナは完璧な女性に見えてお茶目な所があったり子供っぽい所もある。

初めに抱いていたチャンピオンとしてのイメージなど、遥か宇宙の彼方にまで消し去ってしまうほどに。

しかし、しかしだ……その話は正直信じられるものではなかった。

というか信じたくない、シロナがそこまでだらしのない人だとは。

信じたくないが……紛れもない事実のようだ。

……また、レイジの中でシロナのイメージが崩れていく。

——それとね。

「まだあるの!？」

——もちろん。今日はとことん付き合ってもらおうからね。

こうやって誰かに愚痴を話せる機会なんてめったにないんだから。

などとぬかしやがるミカルゲに、レイジは拳を握りしめた。

「レイジくん、みんなは何て言ってるの？」

「えっ!？」

「……どうしたの？」

「あ、いえ……」

「それで、みんなは私の事をどう思ってるって？」

「えっと……自分達を大切にしてくれる優秀なトレーナーだと……」

嘘は言っていない、少なくとも自分は嘘をついているわけではないのだ。

「……本当に？」

「本当ですよ。ねえ、みんな？」

お願い、本当だと言ってくれ。

凄まじい気迫を乗せ、睨むようにシロナのポケモン達を見る。

それが通じたのか、それともそんなレイジが不憫に思ったのか、全員が息を揃えて首を縦に振った。

「ほら、だから本当なんですって」

だからお願い、これ以上詮索するのはやめてくれ。心の中でそう叫ぶレイジ。

「――よかった。みんなに嫌われてたらどうしようかと思ってたの。けど、みんな私の事をそんな風に思ってくれていたなんて……すごく嬉しい」

「そ、そうですか……」

よかった、とりあえず納得してくれたようだ。

――ほら、まだ私達の愚痴タイムは続くんだからちゃんと聞きなさい。

「……………」

尚も迫り来るシロナのポケモン達。

一体どれだけの不満が溜まっていたのだろうか、なんだかちよつと不憫に思えてしまった。

だが――これ以上向こうの愚痴を聞く義理はない、というかシロナの為にも聞くわけにはいかない。

「それじゃあシロナさん、みんなをボールに戻してください」

「そうね」

頷き、全員をボールに戻していくシロナ。

なんだか「おいコラ」とか「まだ話は終わってないのに」とか聞こえたような気がしたが、きっと気のせいだろう。

「レイジくん、どうもありがとう。貴方のおかげでまた自分のポケモン達と信頼関係が築けたと思うわ」

「そ、そうですか……それはよかったです」

言えない、あなたのポケモン達が衝撃カミングアウトをしてみましたなどと口が裂けても言えるわけがない。

（……便利すぎるのも、考えものだな）

今まで生きてきて初めて、自分の能力がちょっとやだなー、と思ってしまったレイジなのであった。

——アサギシティへの旅は、まだまだ続く

第39話 VSミカンく熱き炎のダブルバトルく

『たのもー!!!』

久しぶりに聞いたような声を耳に入れつつ、先行するカグヤとカイリに続いて、レイジはアサギジムへと入る。

「こんにちは。挑戦者の方達ですか？」

そんな彼等を迎えてくれたのは、このアサギジムのジムリーダーであるミカン。

栗色の長い髪と白いワンピースを翻しながら、レイジ達へと向けて歩いてくる。

「美人だな……」

「……………」

「いてっ!?!」

ぽつりと呟いたカイリの言葉に反応し、ヒメカはおもいきり彼の足を踏みつけた。

何すんだよ、そんな視線をヒメカに向けるが、当然ながら彼女は完全に見視する。

「あの……どうかなさいましたか？」

「あ、い、いえ……それあの、俺達挑戦者なんですけど……」

「やはりそうでしたか、私はこのアサギジムのジムリーダーのミカンといいます」

好感の持てる笑みを浮かべながら、柔らかな物腰で自己紹介をするミカン。

エリカと同じく、ずいぶんと清楚な女性のようなだ。

そういうタイプには弱いのか、カイリの表情がだらしく緩む。

それを見て、今度は腕をおもいつきり抓るヒメカ。

「……っ、さっきから何なんだよ!？」

「別に、なんでもないわよ」

「? あの……」

「すみません、あの2人の事は気にしないでください。いつもの事ですから」

「はあ……」

レイジにそう言われ、とりあえず納得するミカン。

「それでミカンさん。ダブルバトルでジム戦をしたいんですが……」

「もちろん構いません。それではどなたから挑戦しますか?」

「はいはい。俺達からやりまーす!！」

「ちょっと待ってよ、今回は私達から!！」

予想通り、カイリとカグヤがわーわーぎゃーぎゃーと騒ぎ出した。

「……ジム戦の時は、いつもこうなの？」

「ええ、まあ……」

シロナの問いに答えながら、ため息をつくレイジ。

「……ねえ、レイジ」

「何？」

「たまにはわたしとタッグを組んでみない？」

「えっ？」

突然のヒメカの提案に、レイジはおもわず聞き返してしまう。

「たまには違うメンバーとタッグを組んだ方が新鮮な感じになるでしょう？」

それにいつもと違う発見もするかもしれないじゃない」

なる程、とレイジも納得する。

確かにヒメカの言う通り、いつもとは違うメンバーでのダブルバト

ルも悪くないかもしれない。

なので、レイジも承諾しようとしたのだが。

『ちょっと待ったー!!!』

いきなり割り込んできたカイリとヒメカによって、レイジの言葉は完全に遮られる。

「耳元で大きな声出さないでよ、煩いわね」

「勝手に話を進めんなって！ それにそういう話ならレイジとは俺が組む!!!」

「あっ、じゃあヒメカは私と組もうよ」

「ちょっと、勝手に話を……はあ、もう好きにきなさい」

反論しようとしたヒメカであったが、この2人に言ったところで無駄な体力を消費するだけだと悟り、やめた。

それに、別にカグヤとタッグなものには反対する気などない。

「よし、てなわけですは俺とレイジから——」

「ダメ、まずは私とヒメカからだよ！」

「どっちからでもいいから、ジャンケンでもして決めろ!!! これ以上あーだこーだ言うならリオンで踏みつぶすぞ!!!」

いい加減キレたのか、マジでリオンを出しそう叫ぶレイジ。

『すみませんでした』

この人本気だ、瞬時にそう理解した2人は土下座でレイジに謝る。

（レイジくん、怒ると恐いのね……）

（ああいうタイプほど、怒らせてはいけないって聞いた事あるけど……本当みたい）

……。

そして、ジャンケンの結果はというと。

「それではこれより、レイジ選手、カイリ選手対ジムリーダーのミカン選手によるジム戦を開始します」

審判のこの言葉からでもわかるように、レイジとカイリのチームからの挑戦となった。

「レイジ、頑張れー。カイリもついでに頑張ってねー」

「レイジくん、落ち着いてねー！」

いつものように正装という名のコスプレをしているカグヤとシロナ

を無視しつつ、カイリはボールを取り出す。

（っていうか、俺はついでかよ……）

しかもシロナに至ってはレイジの応援しかしていない。

……なんだか無性に悲しくなった。

「カイリ、どうしたの？」

「いや……別に」

隣に立つ親友に羨ましくなりながらも、諦めようと自分に言い聞かせた。

「――試合、開始！！」

「いきなさい、メタグロス、ハガネール！！」

「リオン、お願い！！」

「出番だぜ、ジャノビー！！」

3人一斉にポケモンを取り出す。

「げっ、ハガネール……」

クチバの事を思い出したのか、まともに表情を変えるカイリ。

「メタグロスか……確か600族っていうんだっけ？」

「……なんだソレ？」

「さあ、でもメタグロスは600族だって聞いた事があるから……」

（意味わかんねえ……）

「先攻は挑戦者からとなります！！」

「よっしゃ、ジャノビー、メタグロスにはっばカッター！！」

「リオン、ハガネールにかえんほうしゃだ！！」

ジャノビーはメタグロスに、リオンはハガネールにそれぞれ狙いを定め攻撃を仕掛けた。

「ハガネール、あなをほる！！」

瞬時に地面へと潜るハガネール、当然ながらリオンの攻撃は空振りした。

「飛んで、リオン！！」

大きな翼を展開させ、リオンは地面から離れジャノビーの元へ。

すると、何故かりオンはジャノビーの身体を抱え空へ。

「おい——」

「メタグロス、はかいこうせん！！」 何すんだ、そうレイジに抗議

しようとした瞬間。

メタグロスのはかいこうせんが、はっぱカッターを易々と貫き先程までジャノビーの立っていた場所へと当たり爆発した。

「――わりい」

「気にしないで、それよりあのメタグロス……やっぱり強い」

生半可な攻撃は通用しないだろう、リオンのパワーでも届くかどうか分からない。

「ゴウカザルを出した方がよかったかな……」

ジャノビーではパワー不足だ、おまけにメタグロスとはタイプの不利でもある。

「そう思うなら、どうしてゴウカザルを出さなかったの？」

「いや、ジャノビーが出たそうだったから……」

「……………なる程ね」

エンジュでの戦いで役に立てなかった事を気にしているのか、そう思うとついつい苦笑を浮かべてしまう。

しかし、使用ポケモンが一体だけならば、今更変更などできない。

それに――いくらジャノビーがゴウカザルに比べてパワー不足だとしても、勝敗がそれで決まるわけではないのだ。

「ハガネール!!」

「っ!!」

地面から勢いよく飛び出すハガネール。

その長い身体を生かして、リオン達を拘束しようとするが。

「カイリ!!」

「おう! ジャノビー、ハガネールに飛び乗れ!」

「えっ——!?」

指示を受け、リオンはハガネールの背後に回りジャノビーを放す。

重力のままに落下し、そのままジャノビーはハガネールの背に。

「リーフブレード!!」

すぐさま、その無防備な背中にリーフブレードを叩き込む——!

だが——硬い音と共に弾かれてしまった。

「っ、硬すぎだろ!!」

「ほのおのパンチ!!」

急降下し、リーフブレードを受けた背に炎を纏った拳を叩き込むリオン。

効いたのか、ハガネールからくぐもった悲鳴が上がる。

「ジャノビー、リオンが攻撃した場所にエナジーボール!!」

再び攻撃を仕掛けると、ハガネールの硬い身体を貫きダメージを与える事ができた。

「上手い! 同じ箇所を集中攻撃させて届かせたんだ!!」

「あの2人、即席なのに随分息が合ってるわね」

「あれ、シロナさん知らなかったんですか?

レイジとカイリ、よく他のトレーナーとダブルバトルをしています。まだに負け知らずなんですよ?」

「……なる程ね」

「ハガネール、アイアンテール!!」

ダメージを負いながらも、ジャノビーへとアイアンテールを仕掛けるハガネール。

しかし――間一髪で再びリオンがジャノビーを抱きかかえ難を逃れた。

「メタグロス、はかいこうせん!!」

「っ!？」

それを見越していたのか、地上からリオン達へとメタグロスのはかいこうせんが放たれる——！

「避けて!!」

技を出す暇はない、レイジはすぐさまリオンへそんな指示を出す。

右の翼にはかいこうせんが命中し、きりもみしながら落下していくリオンとジャノビー。

「ハガネール、しめつけなさい!!」

「っ、リオン!!」

迫るハガネール。

避けきれないと悟ったのか、リオンはジャノビーを腕から放し——ハガネールの巨体に拘束される。

「やべえ!?!」

拘束され、苦しげな声を出すリオン。

「サイコキネシス!!」

「っ、しま——!?!」

気づいた時には遅く、サイコキネシスによってジャノビーの身体が宙に浮かんだ。

「トドメです。コメットパンチ!!」

動けないジャノビーに向かって、コメットパンチを放とうと向かっていくメタグロス。

「ジャノビー、どうにか抜け出してくれ!!」

そう叫ぶカイリだが、ジャノビーは少し身体を身じろがせるだけで、サイコキネシスの拘束からは逃れられない。

「っ、リオン!!!」

レイジの声を聞き、どうにかハガネールの身体から抜け出そうと力を込めるリオン。

しかし、全力でもビクともしない。

「無駄です。ハガネールからは逃れられません」

「……どうかな？」

不敵に笑うレイジ。

ミカンがその言葉を理解するより早く。

「リオン、特訓の成果を見せてやれ!!」

——フルパワーでフレアドライブだ!!!!」

——リオンの身体が激しい炎に包まれる

その勢いは止まらず、やがて赤い炎は蒼色へと変化した。

あまりの高熱に耐えきれなかったのか、自ら拘束を緩めるハガネール。

「今だ!! そのままちきゅうなげ!!」

その一瞬を逃さず、フレアドライブを展開したままハガネールの身体から脱出し、そのまま尻尾を掴み——なんと、あの巨体を空中へと持ち上げてしまう。

「なっ——!?!」

これには、さすがのミカンも驚きを隠せなかった。

「メタグロスに投げつけるんだ!!」

雄叫びを上げ、ジャノビーに迫るメタグロス目掛けてハガネールを投げつけるリオン。

動きが鈍重なメタグロスに避けられるはずもなく、ハガネールに身体を巻き込まれフィールドの端まで吹き飛ばされてしまった。

それと同時に、ジャノビーの拘束も解かれる。

「うはあ……リオン、すげえパワーだな……」

オーバードライブを使った時のゴウカザルといい勝負かもしれない。ゴウカザルがオーバードライブで自身を強化させたように、リオン

もフレアドライブを攻撃技としてではなく自身のパワーを上げる為に使ったのだろう。

「カイリ、リオンはもうあまり保たない！」

「わーってるよ！」

はかいこうせんにハガネールの締め付け、更にフレアドライブの反動ダメージを受けたのだ、もはやリオンに戦う力はあまり残されていない。

「レイジ、リオンはまだ飛ぶ力は残ってるか？」

「えっ……ま、まだ大丈夫みたいだけど」

「よし、ならジャノビーを掴んでおもしろいメタグロス達に投げしてくれ！！」

「はあっ!？」

おもわずバトルの最中なのにカイリの顔を見てしまうほど、彼の言っている事が理解できなくなったレイジ。

しかし、カイリはまるでふざけた様子もなく大真面目な表情で言葉を続けた。

「頼むぜレイジ、意味がわかんねえかもしれないが今は俺を信じろ
!!」

「……………」

正直、カイリの意図はわかりかねる。

しかし……彼が何の考えもなしにそのような事をするわけもない。

「——リオン、もう少し頑張って」

——当然だ。必ず勝つからお前は安心して指示を出してればいいさ。

ニヤリと笑うリオンに、レイジも笑みを返す。

「よっしゃ、頼むぜレイジ!!!」

「リオン、ジャノビーを掴んで飛んでくれ!!!」

苦悶の表情を浮かべながらも、リオンはジャノビーを抱きかかえメタグロス達の元へと向かっていく。

「メタグロス、サイコキネシス!!!」

「避けるんだ!!!」

メタグロスのサイコキネシスを回避しながら、リオンは少しずつ間合いを詰めていく。

そして——

「——今だ。上空に飛んでジャノビーをハガネールに向かって投げつけるんだ!!!」

天井ギリギリまで飛翔するリオン、そのまま指示通りにジャノビーをハガネール目掛けておもいきり投げつける——！

まるで弾丸のようなスピードで、ハガネールへと向かっていくジャノビー。

「アイアンヘッドで撃ち落とさない！！」

しかし真正面からならば好都合、ハガネールのパワーで撃ち破ろうと指示を出すミカン。

——だが、ジャノビーは両腕を前方に交差させた

（あの技は………！！）

それを見て、ヒメカは気づいた。

何故カイリはジャノビーをリオンに運ばせたのか、そしてハガネールへと向けて投げつけたのかを。

全ては、この技で勝利する為に——

「ジャノビー、リーフブレイカーだ……！！」

前方にリーフブレード、そして周りにリーフストームを展開させた

ジャノビーが、真っ向からハガネールとぶつかり合う。

通常ならば、如何にリーフブレイカーといえどもハガネールのパワーには適うわけがない。

ない、のだが……。

「そんな――!?」

驚愕の声は、ミカンから放たれた。

――ハガネールのアイアンヘッドが、ジャノビーのリーフブレイカーに圧されている

純粹なぶつかり合いで、ジャノビーがハガネールに勝っているのだ。

「――なる程。リオンのパワーでジャノビーを投げた勢いを利用しているのね」

そう、カイリが何故リオンにそのような事を頼んだのか。

ジャノビー最強の技であるリーフブレイカーでも、ハガネールやメタグロス相手にはどうしてもパワー不足で押し負けてしまう。

だからこそ、普通に向かっていくのではなく、上空からリオンに投げてもらいそのパワーを上乗せしたリーフブレイカーで勝負に出たのだ。

「っ、メタグロス――!」

「させないよ」

すぐさまメタグロスにフォローさせようとするミカンだが、それを読んでいたリオンがすぐさま間合いを詰めた。

それに気づいたミカンであったが、時既に遅く。

「ほのおのパンチ！！」

まるでスカイアッパーのように、ほのおのパンチを下段から上段に向けて打ち放つリオン。

重いメタグロスの身体が、宙に浮かぶ。

すぐさま跳躍し、あっという間にメタグロスを追い抜き。

「ブレイズキック！！」

踏みつけるかのように、メタグロスの頭にブレイズキックを叩き込み再び地上へと叩き落とす。

「トドメのちきゅうなげだ！！」

急降下し、メタグロスの脚を掴み上げ力任せに一回転させ、今度はそ地面へと叩き付けた――！！

凄まじい衝撃により、地面にクレーターができあがり――メタグロスは戦闘不能に陥りそして。

――レイジ、あっちも終わったみたいだぜ。

「そうみたいだね……」

リオンの言葉に頷きを返し、視線をある方向に向ける。

するとそこには……目を回し戦闘不能になったハガネールを勝ち誇った顔で見つめている、ジャノビーの姿があった。

……。

「やったー!!」

カグヤの歓喜の声と共に、バトルの終了を告げる審判の声が耳に入る。

「――負けて、しまいましたね」

そう告げるミカンだが、その表情はやりきったものが見える。

「やったぜレイジ!!」

「うん」

ハイテンションになっているカイリと、その場でハイタッチを交わす。

と——突然ジャノビーの身体が光に包まれていく。

「こいつはもしかして………!!」

そして、カイリの予想通り光が収まった後……。

進化を遂げ、ジャノビーがジャローダに変わっていた。

「やったぜジャノビー……じゃなかった、ジャローダ!!」

おもわずジャローダに抱きつくカイリ。

ジャローダは少々呆れたような顔をしているが、すぐさま顔をカイリへとすり寄せた。

「リオン、お疲れ様」

——おう。けどまあ……相手もなかなか強かったぜ。

まっ、俺の敵じゃなかったけどな。

自信満々なリオンの言葉に苦笑しつつ、きずぐすりて治療していくレイジ。

「とてもいいバトルでした、それではこれを受け取ってください」

そう言ってミカンが渡してきたのは、スチールバッジ。

「おしっ、これでポケモンリーグに出場できるようになったな!!」

「うん………!!」

とりあえず、出場権となるバッジは4つ集まった。

解決しなければならぬ問題もあるが、これでひと安心だ。

「カグヤさん、ヒメカさん。すぐにジム戦を始めますか？」

観客席にいるカグヤとヒメカにそう声を掛けるミカン。

「いいんですか？」

「もちろんです。尤もそちらがよろしければですけど……」

それは願ってもないチャンスである、2人は立ち上がりすぐさまバトルフィールドへと……。

「——カグヤ、ちょっと待ちなさい」

「……………？」

「……………お願いだから着替えてきて」

——かくして、ジム戦は後半へと続く

第40話 VSミカンく炎と水のダブルバトルく

「――それではこれより、カグヤ選手とヒメカ選手対、ジムリーダーのミカン選手によるジム戦を開始します」

着替えを終え、フィールドに立つカグヤ。

「よし、頑張ろうねヒメカ！」

「ええ。足を引っ張らないでよ！」

両者、ボールを構える。

「カメックス、レディーゴー！！！」

「ヒノ、行きなさい！」

カグヤはカメックスを、ヒメカはヒノをフィールドに出す。

「エンペルト、ジバコイル――」

ミカンもボールを2つ取り出し、フィールドに出そうとした瞬間。

いきなり別のボールからポケモンが飛び出してしまった。

「あ」

「は？」

「ええっ!？」

上からカグヤ、ヒメカ、ミカンの順番で声を上げた。

ミカンはエンペルトとジバコイルをフィールドに出そうとしたのだが……あるポケモンが勝手にフィールドへ出てしまう。

「わっ、凄いキバ……でも顔は結構可愛いね」

「あのポケモンは……」

「こらクチート、勝手に出てきたらダメじゃない!!」

別のボールから出てきたポケモン——クチートにボールを構えるミカン。

赤い光がクチートをボールの中へと戻そうとするが……ひょいと避けられてしまう。

「ちょ、この、このっ」

何度も放つが、その度にクチートは完全におちよくった動きで避け続ける。

「何だよ、あのポケモンは……」

「クチート、あざむきポケモンって呼ばれてるはがねタイプのポケモンだよ」

「そうじゃなくて、全然ミカンさんの言うこと聞いてねえじゃん……」

…」

「確かにね……」

しかし、クチートからすれば遊んでいるだけなのだろう、無邪気な笑顔を見ればすぐにわかる。

しかし今はジム戦をやっているのだ、状況が状況だけにこのままクチートを出したままにはしておけない。

ミカンもそう思っているからこそ、クチートをボールに戻そうと躍起になっているのだろう。

しかし、完全に読んでいるのかクチートは悉くボールから放たれる赤い光を避けていく。

「……何なのよ、あれ」

ミカンとクチートの茶番を見せられ、ヒメカは呆れたようにため息をつく。

「……あの子、もしかして私達とバトルしたいんじゃないかな？」

「えっ？」

「だから勝手に出てきたり、ボールに戻ろうとしないんじゃない？」

根拠はない、しかしなんとなく……本当になんとなくだがそう思えたのだ。

だから、いまだにピヨンピヨンと飛び回っているクチートに、カグヤは声を掛けた。

「ねえクチート、もしかして私達とバトルしたいの？」

「…………クウ？」

飛び回るのを止め、チョコチョコとカグヤの元に近寄るクチート。

「違うかな？　あなた、私達とバトルしたいんじゃないの？」

もう一度訪ねる。

すると、クチートはにぱつと笑みを浮かべ大きく頷いた。

「やっぱり……」

「…………あなたも、ポケモンの言葉がわかるの？」

「そんなんじゃないよ、ただレイジの傍に居たからなんとなくわかるようになっただけ。」

ミカンさん、そっちがよければこのクチートと戦わせてくれませんか？」

「えっ…………でも、そのクチートは私のポケモンではないんです」

「そうなんですか？」

「はい。あるトレーナーががねタイプのジムをやっている私なら上手く扱えるだろうって、半ば強制的に預かるようになってしまっ

たんです。

でもこの子、全然言うことをきいてくれなくて……」

「はー、なる程……」

それは困った、しかしこのままボールに無理矢理戻すのは可哀想だ。

「ねえクチート、このジム戦が終わってからならバトルできるよ？」

だから待っててくれないかな？ そう告げるカグヤだが、クチートはふるふると首を振って拒否してきた。

どうやら、今すぐにバトルをしたいらしい。

ワガママなクチートにカグヤも困り顔を浮かべていると。

「エンペルト」

突然、ミカンがエンペルトをフィールドに出す。

「ミカンさん？」

「――仕方ありません。無視してジム戦を邪魔されても困りますから、このままバトルと行きましょう」

しかし、とミカンは心の中で首を傾げた。

確かにクチートは自分の言うことはあまり聞こうとは思っていない、だが絶対にジム戦を邪魔するような事はしなかった。

……もしかしたら、カグヤかヒメカを気に入ったのかもしれない。

「よかったね、クチート」

「クウ!!」

嬉しそうに一声鳴き、カグヤの手にかぶりついた。

「いたたたたっ!!」

クチートからすれば甘噛み程度かもしれないが、マジで痛い。

「こ、こらクチート!」

ミカンに叱られ、渋々カグヤから離れエンペルトの隣へ。

「……大丈夫?」

「いたた……うん、大丈夫大丈夫」

ありがとう、と言ってくれたのか。やはりレイジでないとわからない。
い。

「で、では——試合、開始します。先攻は挑戦者から!!」

「ヒノ、クチートにかえんほうしゃ!!」

「カメックス、エンペルトにロケットずつき!」

それぞれ自分の戦い易い相手を選び、攻撃を仕掛ける。

「エンペルト、アクアジェットで迎え撃って。
クチート、まもる！」

指示を受け、エンペルトはカメックスと真つ向からぶつかり合う。

しかし、クチートはまもるではなく……ヒノと同じくかえんほうし
ゃを放ち相殺させた。

「おいおい、勝手に戦ってるぞあのクチート」

「ずいぶんと自己中心的というか……ちょっと無邪気すぎるね」

相殺させた後、クチートは標的をカメックスへと変え——勝手にア
イアンヘッドを仕掛けた。

「カメックス、こうそくスピン！！」

別の方向からの攻撃に対処するため、カメックスは手足と首を甲羅
の中に引っ込め、その場で回転する。

弾かれるクチート、その隙を逃さずヒノが迫った。

「かえんぐるま！！」

身体を丸め、炎に包まれながらクチートに体当たりするヒノ。

吹き飛ばされ、フィールドの端で倒れるクチート。

「カメックス、れいとうビーム！！」

「エンペルト、メタルクロー!!」

クチートに追い討ちを仕掛けようとしたカメックスだったが、その前にエンペルトの攻撃を受けてしまう。

エンペルトのパワーは凄まじく、巨体であるカメックスが倒れはしなかったもののフィールドの一番後ろまで吹き飛ばされてしまった。

「クチート、チャージビーム!!」

指示を出す、クチートはチャージビームを放たずに真っ直ぐヒノへと向かっていく。

そんなクチート目掛けて、かえんほうしゃを放つヒノ。

「クチート!!」

しかし、クチートは右足を使い横に跳びかえんほうしゃを避け、着地と同時に大きく踏み込む。

そして、頭にある大きなキバで文字通りヒノに噛みついた――!!

「ヒノ!？」

丸呑みしてしまうほどの勢いで、クチートはヒノを噛み続ける。

「カメックス――」

「エンペルト、はがねのつばさ!!」

フォローに回ろうとした瞬間、エンペルトの攻撃がカメックスを大きく吹き飛ばした。

「やべえな、アレ」

「あのクチート、自由に戦ってるけど随分バトル慣れしてるわね」

観客席にいるカイリもシロナも、知らず拳を握りしめながら観戦していた。

そんな中、レイジだけは静かにカグヤ達のバトルを眺めている。

（カグヤ、ヒメカ、これからどうする……？）

「カメックス、ヒノを助け出して！！」

「させません。エンペルト、シャドークロー！！」

どうにかクチートの元へと向かおうとするカメックスだが、そうはさせまいとエンペルトが立ちふさがる。

「カグヤ、こっちはこっちでなんとかするから、あなたはエンペルトを何とかしなさい！！」

「で、でも……」

なんとかする、そうは言ってもあの状況ではどうにもならないのではないか。

そんな視線を向けると、ヒメカは不敵な笑みを彼女に向けた。

「なんとかしてみせるわよ、気合いを入れればどうにでもなるわ！
」

「……………」

気合い、そんな言葉がまさかヒメカの口から飛び出すとは……。

……でも、そこまで言われたならこれ以上の問答は不要だ。

「——エンペルトを倒すまでになんとかしないと、私のカメックス
が二体とも倒しちゃうよ？」

「言ってなさいよ。——こっちの準備は終わってるんだから」

『えっ？』

ヒメカの言葉に、ミカンとカグヤは揃って声を出す。

その意味を理解する前に、ヒメカは勝負に出る。

「ヒノ、そのままフルパワーでだいもんじ！！」

「ええっ！？」

「っ、クチート!!」

ミカンがクチートを呼んだ瞬間。

爆発音と共に、クチートの頭にある大きなキバから煙が上がる。

その中から、所々火傷しているヒノが勢いよく飛び出してきた。

「うわっ……強引だなヒメカの奴」

「カイリみたいだね」

「ええっ、俺あんな無茶な事するか？」

「突撃思考だからね、君は」

「ひでえ……」

そうこう話しているうちに、ヒメカは次の指示を出す。

「かえんほうしゃ!!」

「エンペルト、ハイドロポ——」

「のしかかり!!」

ハイドロポンプを放とうとしたエンペルトの身体に、カメックスの巨体がのしかかる。

——放たれるヒノのかえんほうしゃ

だいもんじによるダメージが大きかったのか、避ける事ができずにダメージを受けるクチート。

「よし——っ!!?」

終わった、そう思ったヒメカであったが。

弱点であるだいもんじとかえんほうしゃをまともに受けながらも、クチートは立ち上がった。

その瞳には、先程よりも更に強い闘志が宿っている。

「す、すげえ根性だなあのクチート……」

「負けたくないんだ。それに……こんな楽しいバトルは初めてだから、終わらせたくないんだよ」

そんなクチートの感情が、ここまで伝わってくるのだ。

（さて……まだ勝負はわからないぞ）

「エンペルト、抜け出さない!!」

逃れようと暴れるエンペルトだが、逃がすまいと力を入れるカメックスからは逃げられない。

「なら、ギガインパクト!!」

「カメックス、掴んで上に放り投げて!!」

ギガインパクトが発動する瞬間、カメックスはエンペルトの身体を両腕で掴み、空高く放り投げた。

空中ではエンペルトも身動きがとれず、ギガインパクトも不発に終わる。

「今よカメックス、そのままげきりん!!」

全身で力を溜め、落ちてくるエンペルトを迎え撃つ。

そして——凄まじいまでの連打がエンペルトに襲いかかった——!!

一撃——

二撃——

三撃——

四撃——!!

エンペルトに反撃する余地はなく、げきりんの餌食になっていく。

「これで——ラスト!!」

五撃目が入り、エンペルトは地面へと倒れ込んだ。

動く気配を見せず、その様子は戦闘不能になった何よりの証。

「エンペルト、戦闘不能。ヒノアラシ、カメックスの勝ち!!!」

「よしっ!!」

これで残るはクチートのみ。

絶対的有利になったものの、まだまだ油断はできない。

カメックスもヒノもダメージを受けていないわけではなく、カメックスに至ってはげきりんの影響で今は混乱状態だ。

「カメックス、早く正気に戻って!!」

そう叫ぶカグヤだが、カメックスはふらふらとおぼつかない足取りでよくわからない動きをするのみ。

「ヒノ、もう一度かえんぐるまよ!!」

未だ動く事ができないクチートに向かって、かえんぐるまを放つヒメカとヒノ。

「クチート、避けて!」

そう指示を出すミカンだが、まともクチートは指示を利かずに真っ向からヒノを迎え撃った。

ぶつかり合う両者。

しかし……なんとクチートは、ヒノのかえんぐるまをその両手で完全に受け止めてしまっていた。

「うわぁ……凄いなあのクチート」

「感心してないで攻撃して」

「そだね。——カメックス、れいとうビーム!!」

ヒノに当たらないようにれいとうビームを放ち、クチートの脚を凍らせる。

その隙に、クチートから離れるヒノ。

——それで終わり

「ハイドロカノン!!」

カメックス最強の技であるハイドロカノンが見事クチートに命中し——そのまま倒れ込んだ。

「クチート、戦闘不能。ヒノアラシ、カメックスの勝利!!」

よってこの試合、挑戦者であるカグヤ選手とヒメカ選手の勝ち!!」

「ふう……」

安堵のため息を漏らすヒメカ。

カグヤはというと、いつものように嬉しさを表現するようにその場で飛び跳ねていた。

「——二連敗というのはやはり悔しいですね、ですがとても良いバ

トルでした。

それでは、スチールバッジを受け取ってください」

「あ、ありがとう——」

カグヤがミカンからスチールバッジを受け取ろうとした瞬間、横から誰かがバッジを奪ってしまった。

「あっ……」

「えっ!？」

すぐさま視線をそちらに向けると……。

クチートが、カグヤの分のバッジを手を持っていた。

「こら、クチート!!」

バッジを取り戻そうとミカンが近づくが、クチートは逃げるようにカグヤの後ろへ。

「クチート、いい加減にきなさい!」

ミカンが本気で怒ろうとするが、そんな彼女をカグヤは止める。

そしてしゃがみこみ、視線をクチートに合わせ口を開いた。

「ねえクチート、どうしてバッジを奪ったりしたの?もしかして負けて悔しいから?」

カグヤの問いに、クチートはふるふると首を横に振る。

「じゃあ、どうして？」

もう一度問いかけるが、今度は答えず俯いてしまった。

「レイジ、通訳よろしく」

「僕は翻訳家じゃないよ。まあいいけどね……。

クチートはカグヤと一緒に居たいみたいだよ、だから行ってほしくないんだって」

「えっ……」

再び、視線をクチートへと向ける。

自分の願いを理解してもらえたからか、笑みを浮かべ何度も頷くクチート。

「……クチート、カグヤさんと一緒に行きたいの？」

そんなクチートの態度を見て、ミカンがそう問いかけると……力強く頷かれてしまった。

「……カグヤさん、クチートもそう言っているみたいですし……この子を一緒に連れて行ってはくれませんか？」

「えっ……それはいいですけど、いいんですか？」

「この子、カグヤさんの事を気に入っているみたいですし……なら、

「ここにいるよりこの子の為になります」

「……………」

カグヤとしては反対する理由などない、むしろ自分の戦力が増えるのはありがたかった。

「……クチート、私と一緒に行く？」

「クウ!!」

満面の笑みを浮かべ、カグヤの手……というか腕に噛みつくクチート。

「いたたたっ!!?」

「うわっ、マジで痛そうだなあれ……」

「あれがクチートの愛情表現なんだよ、多分ね」

……………。

「——痛いよお」

「はいはい、わかったから。……これでポケモンリーグに出場できるね」

「そうだな。じゃあ早速カントーに帰るとするか」

「あつ、ここからじゃカントー地方へは行けませんよ」

「はあっ!?!」

突然のミカンの発言で、全員の視線が彼女に向けられる。

「実は定期船が故障してしましまして……ですから、海沿いに東へ行った場所にあるアーリアタウンに行かないと、カントーへは行けないんです」

「アーリアタウン?」

聞いた事がない街だ、ジョウト地方の街はあらかじめ覚えていたのだが……。

「元々は小さな港町だったんですけど、アサギシティが大きくなるにつれ今のアーリアタウンができあがったんです。

今の時期ならちょうど海の守り神様を祝福するお祭りが行われていますよ」

「海の守り神……?」

「はい。アーリアタウンは古くから海の守り神様を守る為に存在している場所らしくて……年に一度、その神様を崇める為のお祭りが開かれるそうなんです」

「お祭りかぁ……」

ミカンから話を聞き、カグヤとカイリの瞳が輝き出す。

「……………」

「レイジくん、どうかしたの？」

「あ、いえ……………」

シロナにそう返しながらも、レイジは思考に耽る。

（海の守り神…………どこかで聞いた事があるような気がする。

それに…………何だ、この禍々しい気配…………いや、そんな表現じゃ追いつけない、漆黒に満ちた何かを…………アーリアタウンの方角から感じる…………？）

しかし、それが何なのか今のレイジには理解できなかった。

「よし、それじゃ早速アーリアタウンに向かおうぜ！！！」

「その前にポケモンセンターでわたしとカグヤのポケモンを休ませてからよ」

「レイジ、行こっ？」

「……………うん」

カグヤ達と共に、ジムを後にするレイジ。

（…………この感覚は、一体なんだ？）

正体不明の感覚に戸惑いながら、彼は仲間達とともに次なる目的地を目指す。

——自分達の身に、何が起るかも知らずに

第41話 予兆く港町アーリアタウンへく

――無事に4つのバッジを手に入れ、ポケモンリーグ出場の為カントー地方を目指すレイジ達

アサギシティでは定期船が故障し運航していなかったため、港町アーリアタウンへと旅を続けていたのだが……。

「うひゃーっ!!」

走りながら奇声を上げるカグヤ。

しかし仕方ない、いきなりどしゃ降りの雨になってしまったのだから。

急ぎ木の下に向かうレイジ達。

「……うへえ、何なんだよ一体」

うんざりしたような口調のカイリだが、全員が同じ気持ちだった。

何せアサギシティを出発して今日で四日目なのだが、最近の天気は異常といえる程におかしなものになっているからだ。

いつものように快晴かと思いきや、何の脈絡もなく今みたいにどしゃ降りになったり、かと思ったら晴れたりまた雨が振ったり……。

ここ数日間の天候は、あまりにもおかしいものになっていた。

「うえ……びしょびしょになっちゃった」

言いながら、服を脱ごうとするカグヤ。

「おわあっ!？」

「ちょ、いきなり何してるのよ!!」

慌ててヒメカがカグヤを止め、事なきを得た。

「あなたねえ……もう少し女の子としての自覚を持ちなさいよ!」

「えー、だって下着が見せたって減るものじゃないし……」

「そういう問題じゃないでしょ!!」

「はぁ……」

雨の音に紛れて聞こえる2人の漫才に、レイジは付き合ってもらえないとばかりにため息を付く。

「……………」

「シロナさん、どうしましたか？」

と、先程から空を見上げながら真剣な表情を浮かべているシロナに気づき、声を掛けた。

「……いえ、なんでもないわ」

そう返すものの、あきらかに心ここにあらずといった様子で、レイジは首を傾げる。

一体どうしたというのだろう、最近シロナはこうやって1人で考え事をする様子が多く見られる。

……尤も、それはレイジも同じなのだが。

(……まただ)

僅かに感じる、声のようなもの。

この異常ともいえる天候になってから、少しずつ頭の中に響いてくる何かに、レイジはすっかり困惑していた。

初めは気のせいかと思っていたのだが、それは日に日に大きくなっていき、今では理解こそできないものの声だという事はわかった。

しかし、どんなに集中しても何を言っているのかはわからず、しかも定期的に聞こえるわけではなく忘れた頃にやってくるものだから、余計にわからない。

(誰なんだ……僕に、一体何を伝えようとしている……)

頭の中に響く声に問いかけるが、当然答えなど返っては来ない。

多少苛立ちを感じつつ、レイジは雨が止むのを待つ事にした。

…………。

数十分後、ようやく雨が上がり青空が見えた。

「ったく……何なんだよ最近の天気は」

「ホントだね……ジョウト地方ってこういう天候なのかな？」

「そんなわけじゃない……でも、確かにおかしい天候よね……」

『…………』

愚痴に近い会話を交わすカグヤ達だが、レイジとシロナは何か考え事をしているのか、黙りこくったままだ。

「……レイジ？」

「シロナさん、どうかしました？」

「えっ……？」

「あ、いえ……ごめんなさい、何の話だったかしら？」

「もう、2人とも最近考え事ばかりだよー」

「そうかな……？」

「そうかなって、自分で気づかないのか？」

急に黙ったなと思ったら今みたいに難しい顔してるし……どうしたんだよ？」

「……私は少し、最近の異常な天候について考えていたの。

いくら何でもこんな自然現象なんて存在しないから、その理由を推理して……」

「えっ、じゃあ……この天候は誰かが意図的にやっているって事ですか？」

「わからないわ。憶測でしかないし、たえそうだとしてもそんな事をする目的が理解できない。

けれど……私にはこれが自然の仕業だとは思えないの」

「……だとしても、一体誰がこんな……」

「天候を好きにできるなんて、神様じゃあるまいし……」

（………神様）

——何故だろうか

その単語が、妙に頭に引っ掛かる。

「——気にしないで。全部私の憶測に過ぎないから」

わざと明るい口調でそう口にするシロナ、するとカグヤ達も気にしない事にしたのか雰囲気は元に戻る。

しかし——レイジにはどうしてもシロナの言葉を頭から離す事がで

きない。

彼女の推理は確かに憶測だ、確たる証拠があるわけでもない。

だが、まったく的外れというわけでもないのだ。

このような異常な天候、しかもつい最近急にこうなったのだ、自然の仕業ではないと断言できる。

（一体、何が起ころうとしているんだ……？） 【??? side】

——陽の光が届かない深海

人間など存在していられるわけもなく、海に住むポケモン達だけの楽園で。

その聖域を汚そうとする存在が、降臨していた。

それは、深海の風景に溶け込むような漆黒の巨大な潜水艦。

その外観には、「R」という巨大なエンブレムが刻まれている。

「——ロキ様、目標は未だ逃亡中です」

コンソールを操作しながらそう話すのは——犯罪組織であるロケット団の団員の1人。

そして、ロキと呼ばれた男はゆっくりと席を立ち低い声で部下達に

指示を出す。

「このまま追いつける、肉眼で確認できる距離になったら砲撃を開始するんだ」

「砲撃を、ですか？」

「しかし、必要以上のダメージを与えればいかにルギアとて……」

「構わん。死ななければそれでいい」

感情や躊躇いなど一切見せず、ロキは言い放つ。

それを聞き、数人の団員が息を呑む。

このロキという男こそ、ロケット団のボスであり。

このような大掛かりな潜水艦を用いて、海の守り神であるルギアを捕らえようとしていた。

「――ルギアとの距離、およそ1500!」

「撃て」

短く告げ、同時に十数発も魚雷がルギアへと向かっていく。

しかし、その悉くを回避し潜水艦へと身体を向けるルギア。

「超音波装置を作動させろ」

瞬間、潜水艦から辺り一面を包み込む程の巨大な超音波が響き渡る。

これはズバットなどが使う「ちょうおんぱ」を単純に強力にしたもので、これの前ではたとえルギアであっても無事では済まない代物だ。

そして、その超音波をまともに受け苦しむルギア。

「――今だ。撃て」

「ロキ様、このままデッドボールを放てば……」

「無傷では改良型のデッドボールでも捕らえられんよ、ルギアはそれだけ強大な存在だ。」

“アレ”も捕らえる際に相当ダメージを与えただろう?」

「……………わかりました」

頷き、魚雷を発射させる団員。

二十発近い魚雷は、吸い込まれるようにルギアへと命中する。

（これだけ受ければ、充分か）

あまり痛めつけて殺してしまえば元も子もない。

そう思い、ロキはデッドボールを放とうと部下へ指示を出そうとし。

――凄まじい衝撃が、潜水艦に走った

「むっ——！？」

一体何が、そんな事考えずともわかる。

（ルギアめ……まともに受けたというのに、まだ抵抗する力が残っていたか……）

さすが伝説と謳われるポケモンだ、自分の認識が甘かった。

「ロキ様、ルギアの反応が！！」

「ふむ……逃げたか」

言葉とは裏腹に、ロキはまるで予期していたかのように素っ気なく
呟く。

「所詮手負いだ。そう遠くに逃げたわけではあるまい。
私は少し休む、何かあれば連絡しろ」

そう言い残し、ブリッジを出るロキ。

「……さてルギアよ、どうするつもりだ？」

まともに魚雷の洗礼を受けたのだ、次に遭遇すれば逃れる事などで
きないだろう。

（ホウオウの時は邪魔されたようだが……今回はそうはいかん。

——だが、あの少年達の力……気になるな）

どちらも人間ばかりか、ポケモンですら持たないような不思議な力。それを操る事ができるなど、一体どのような存在だというのか。

（——ルギアを捕らえた後に、接触してみるか。もしフレアの言った通り使えるなら部下にするとしよう）

しかし、もし邪魔な存在に成りうるなら……。

（その時は——始末すればいいだけだ）

【??? side out——「——ふへえ、ようやく着いたか」

港町アーリアタウンに着いた瞬間、うんざりしたような声を出すカイリ。

この異常な天候のせいで、アーリアタウンに着くまで一週間も掛かってしまったのだから無理もないが。

「レイジ、何だかみんな楽しそうだね」

「ミカンさんが言ってたお祭りが近いからじゃないかな、ほら」

指を指すと、ちょうど今日祭りが始まった事を知らせる看板が。

「なんかラッキーだな、なあレイジ、祭りを楽しんでからカントーに帰らないか？」

「そうだね……みんなはどうしたい？」

「もちろん私は賛成！」

「そうね。ポケモンリーグまでまだ時間はあるし、楽しむのも良いと思うわよ」

「……まあ、こうなるってわかってたから、わたしからは何も言わないわ」

どうやら決定のようだ、若干一名は諦めから来ているようだが……。

「ねえレイジくん、色々見て回って見ない？」

「えっ？」

言いながら、レイジの腕に自分の腕を絡めるシロナ。

「レイジくん、背が伸びたからちょうどいいわね」

前は自分の方が僅かに高かったが、今では彼が自分より高くなっている。

これならば、こうしていてもおかしくはない。

「……シロナさん、どうしてレイジと2人だけで行こうとするんですか？」

さっさと行こうとするシロナだったが、そうはさせまいとカグヤもレイジの腕に抱きつく。

右にシロナ、左にカグヤ。

（何か、居心地が悪い……）

なんともいえない微妙な空気に、胃が少しずつ痛くなっていくような気がした。

「ならカグヤも一緒に来る？」

「当たり前です。シロナさんと2人だけにしたらレイジがエッチな事しそうですから、私は監視役です」

「君は僕をなんだと思ってるんだ……？」

「私は、レイジくんにならいいけど」

『はぁ！？』

「……冗談よ。それじゃあレイジくん、行きましょう」

「ちょっと、勝手に行かないでくださいよー!!」

わーわーと騒ぎながら、さっさと町の中に入っていくレイジ達。

もはやカイリとヒメカは完全に忘れ去られており、そんな2人もあんなドロ沼現場に首を突っ込みたくないので黙っておく。

「――レイジ、大変だな」

人込みでレイジ達の姿が見えなくなってから、カイリは彼に同情の言葉を送ってあげた。

しかし助ける事はできない、下手に口出しすればこっちに飛び火するからだ。

「まったく、勝手な行動をして……」

いつものように呆れるヒメカだが――ここで、ようやくある事実に気づく。

（あれ……？　今、もしかしてカイリと2人っきり……）

瞬間、ヒメカの顔が真っ赤に染まる。

拙い、待った、えっ。

全然身構えていなかった、まさかここで彼と2人っきりになるなど想定外だ。

（お、落ち着きなさいヒメカ……こ、これは考えようによってはチャンスにならないかしら……）

邪魔者はいない、おまけに今は町中お祭り気分で雰囲気も悪くない。

こういった場所でデートをすれば、必ず思い出に残る。

カイリの性格からしてデートとは思わないかもしれないが、それでも互いの距離を縮める絶好のチャンスと言えるはず。

「あ、ああああの……カイリ」

恥ずかしい、おもいっきりでもってしまふなど普段の自分からは想像もつかない情けなさだ。

だが幸いにも、カイリはヒメカの様子に気づいた様子はない。

落ち着きなさい、ヒメカは精一杯自分に言い聞かせてから、勇気を出して声を出した瞬間。

「あの、わたしと――」

「こんにちは。カイリさん、ヒメカさん」

凄まじく間の悪いタイミングで、少女の声が耳に入ってきた。

「あれ……ミカン？」

声を掛けてきたのは、アサギシティにいるはずのミカンだった。

「どうしてミカンがこんな所に居るんだ？」

「はい、実はジムの皆さんから「たまには羽を伸ばしてきてください」と言われて……それでせっかくですから、アーリアのお祭りを見に行こうと思ったんです」

「なるほどなあ……」

「あの、レイジさん達の姿が見えませんが……」

「あいつらは先に行っちゃったんだ。……邪魔したら殺されそうだしな」

「？ はあ……」

ぽつりと呟いたカイリの言葉の意味がよくわからず、ミカンは首を傾げる。

「……………」

一方、ヒメカは拳を握りしめ震えていた。

わかってる、彼女に悪気が微塵もないとわかってはいるのだ。

しかし、それでも邪魔された事には変わりなく……。

「邪魔しないでよ!!」

と、叫んでやりたい衝動に駆られてしまった。

「そうだ！ もし宜しければ私がお祭りを案内してあげましょうか

「？」

「えっ、いいの？」

（ちょ——！？）

それは困る、そんな事されたら今までの計画が全て水の泡に……。

「はい。私何度かこのお祭りに来た事がありますので」

「じゃあ頼むよ」

「はい！」

（ああああ………！！）

バカイリのせいで、ヒメカの計画は粉々に碎け散ってしまった。

こうなってしまうては、もはや「いいです」なんて断る事などできない。

よしんば断ったとしても、理由を話す事ができない以上……もはや諦めるしかない。

「おーい、ヒメカ。行くぞー？」

「……………わかってるわよ」

後でバカイリはボコボコにしてやる。

密かにそう決心をしながら、ヒメカはカイリとミカンの後を追った。

第42話 両手に華々それぞれの悩み・出会うべきではない出会い

【ヒメカside】

「……………」

ヒメカは怒っていた。

それこそ、古い表現だが【ゴゴゴゴ……】みたいな感じである。

理由など説明するまでもないが、少し前に歩いているカイリとミカンのせいである。

（何よ……カイリってばだらしない顔して……）

彼の名誉のために言っておくが、断じて彼はだらしない顔などしていない。

ただヒメカがそう見えているだけで、特別変な事はしていないのだ。

——ミカンに変な意図などない

彼女は親切だから、こうやって自分達を案内してくれているだけだ。それはわかっている、だがそれでも……ああやって仲良さそうにさせるのは辛い。

(…………子供ね)

そして、そんな事を考えてしまう自分が嫌になる。

「ヒメカさん、どうかしましたか？」

「…………いえ、なんでもないわ」

ほら、案の定心配されてしまった。

「どうしたんだよ、さっきから元気ないぜ？」

(誰のせいだと思ってるのよ…………)

そう言えたらどんなに楽か。

…………いや、カイリだって悪くはないのだ。

自分とカイリは単なる幼なじみ、少なくとも彼の中ではそうだ。

だというのに、責め立てたり八つ当たりするのはそれこそお門違い
というもの。

「…………ごめんなさい、ちょっと1人にしてくれるかしら？」

言いながら、逃げるようにその場を後にしようとするヒメカ。

「お、おいヒメカ！」

そんな彼女の腕を、カイリは慌てて掴む。

「っ、カイリ……」

「お前マジでどうしたんだよ？ さっきから様子が変わだぞ」

「なんでもないから……」

「なんでもないように見えないから言ってるんだろうが、何年幼なじみやってると思ってるんだよ？」

「——っ」

幼なじみ。

そうだ、所詮彼は自分の事など幼なじみとしてしか……。

「……バカみたい」

「は……？」

「なんでもないわよバカイリ、ただ疲れただけだから気にしないで」

振り払うように、カイリから離れるヒメカ。

「なっ、人が心配してんのにバカはないだろ！」

「ふふっ、バカイリだからバカイリって言っただけよ」

「な、なにーっ！！」

ぎゃー、と騒ぎ立てるカイリに、ヒメカは精一杯の笑みを浮かべる。

——今は、こうやって誤魔化すしかない

軽く受け流せるほど自分は大人ではないし、かといって感情のままにカイリを責め立てる勇気もない。

なら——こうやって自分の感情を抑え込むしか道はないのだ。

「……………」

2人の様子を、ミカンはジッと見つめている。

（ヒメカさん、どうしたんでしょうか……）

カイリと同様に、彼女もヒメカの心中を理解できていない。

様子がおかしいというのはわかるが、それが自身に向けられた嫉妬だとは気づけなかった。

「——さあミカン、早く行きましょう？」

「は、はい……」

いきなり声を掛けられ少しもってしまいが、どうにか返事を返す。

その声色に、おかしい様子は見受けられない。

（気のせいだったのかしら……？）

——カイリもミカンも気づかない、彼女が自分の感情を精一杯抑え込んでいる事に

感情のままに口を開けば、2人を傷つけるからと自らを抑えている事に。

「ったく……よくわかんない所はカグヤに似てきたよな」

「カグヤが聞いたら怒るわよ？」

「大丈夫だよ。怒ったとしても、あいつすぐに忘れるから」

「あら、そんな事言ってもいいの？」

その事も全部話しちゃいましょうか……」

「おまつ、なんでバラす気満々なんだよ!？」

「口は災いの元、実際に痛い目に遭わないとわからないでしょ？」

「お前なあ……」

うなだれるカイリに、ヒメカはようやく自然な笑みを浮かべられた。

（うん……大丈夫）

現金なものだ、こうやって彼と会話できただけで先程まで内側にあった黒い感情が薄れていくのだから。

「ミカン、案内してくれるかしら？」

ようやく、彼女にも笑顔を浮かべられた。

「はい、行きましょう」

ミカンもヒメカが元に戻った事に安堵しつつ、笑みを返す。

（せっかくのお祭りだもの、2人つきりになれないのは残念だけど……）

それでも、素直に楽しまなければ損というものだ。

そう思い、ヒメカは一度自分の心に蓋をした。

【ヒメカ side】out——「……………」

レイジは困っていた。

周りの男達からしたら、困るところか羨ましいと思えるような状況だが、彼にとっては困り事だ。

「レイジ、次はあっちに行ってみようよ!」

「レイジくん、次はあそこに行ってみましょう」

右からはシロナ、左からはカグヤに引っ張られ、自分の足で歩けないのだ。

「……シロナさん、私とレイジはこっちに行くんですけど?」

「あら、私はレイジくんとこっちに行きたいのだけれど……」

「お一人で行ったらどうでしょうか？」

「レイジくんと一緒じゃなきゃ意味ないもの」

（僕の意志は？）

そう言いたいのが、どうせ無視されるに決まっているので黙っておく。

諦めというのも大事だと悟ったレイジ15歳。

だが、別に引っ張られるのが嫌というわけではない、2人が楽しんでくれるというのはレイジとしても嬉しいから。

でも……先程から密着しているせいで、あまり居心地が良くないのだ。

いや、居心地が良くないわけじゃなくて寧ろ心地良いと言えなくもないが、恥ずかしい事この上ないのも確かで。

何故か？ それは先程から女性の象徴が腕にあたっているからである。

（最低だ……）

そんな事を考えてしまう自分に、軽い自己嫌悪を覚えるレイジ。

しかし彼も立派な男、そんな事を考えてしまうのも致し方ない。

「レイジくん、どうかした？」

「えっ！？ あ、いや……なんでもないです」

シロナの端正な顔が眼前に迫り、おもわず頬を赤くして視線を逸らす。

（むっ……）

それを見て、カグヤはますます不機嫌になっていった。

（……どうしたのかな、なんでこんなにイライラするんだろ……）

シロナは自分にとって尊敬している先輩トレーナーであり、いつか越えなくてはならない壁でもある。

彼女の事は好きだ、飾らない人柄や親身になってくれる優しい性格などが。

でも……レイジが絡むとどうしても感情のコントロールが上手いかない。

初めは気のせいだと思っていた、けれどレイジとシロナが2人だけでいるのを見ると……イライラする。

（私、ヤキモチ妬いてるのかな……？）

カグヤとて、嫉妬の概念くらいはわかる。

故郷のマサラタウンに居た頃は、同年代の女友達とそういう話をした事があるからだ。

その時はまったくもってよくわからなかったし、今だってわかったわけじゃない。

けれど、前々から薄々思っていたのだが……やはりこの感情は、嫉妬なのだろうか。

それならば話は早い、レイジとシロナが仲良くしているのを見て機嫌が悪くなる理由になる。

しかし……カグヤがレイジに対して抱いているこの感情が、恋慕なのか分からない。

レイジは好きだ、大切な幼なじみで尊敬できる男の子でずっと一緒に居たいと思っている。

だがそれが恋なのか家族愛なのか、カグヤにはわからなかった。

ずっと傍に居るのが当たり前過ぎて、自分の想いがどちらに傾いているのか気づけない。

思い悩むカグヤの様子に、シロナが気づく。

（本当に顔に出やすいのね、カグヤは……）

こう言うっては彼女に失礼かもしれないが、今何を考えているのか手に取るようにわかってしまう。

根が純粹で素直だから、考えている事がすぐ顔に出てしまうのだらう。

しかし、こういう事に関してはレイジは一向に気づかないというのも、おかしい話である。

カグヤの事に関しては、驚くくらい鋭いというのに……。

（いえ……気づかない、というわけじゃないみたいね）

おそらく彼は気づいている、自分の意志でなのか無意識でなのかはわからないが。

だから、今思い悩んでいるカグヤに何も言わないのだろう。

……まあ、散々自分達があちこちに引っ張り回しているせいでもあるかもしれないが。

（……恋って、思ってた以上に難しいのね）

やはり、どんな物事も経験してみなければわからないと納得する。

——それはともかく

「レイジくん、行きましょう」

「あつ、ちょ、ちよつとシロナさん！」

今のうちに2人つきりになりましょう、そんな小狡い事を考えてしまおうシロナ。

「こらーっ、勝手にレイジを連れていかないでくださいよ!!」

そうは問屋がおろさないとはかりに、反対側へと引っ張るカグヤ。

「……………はぁ」

諦めたとはいえ、あまり良いものではない。

（僕は押しが弱いのだろうか、それとも周りに流されやすいのか…
…）

どちらにしても、男として情けない事には変わらないかもしれない。
そんな事を考えつつ、2人の引っ張り合いが終わるのを待つ事に
して。

「――相変わらずの馬鹿面だな、お前は」

あまり聞きたくない類の声が耳に響き、レイジは表情を強ばらせた。

「君は……………」

「……………」

口を開くなり、無言で睨んでくる少年。

——忘れるわけがない

彼は、あの時カイリのジャノビーの命を刈ろうとした……。

「——ケイジ」

隣に居るカグヤから、低く重い声が聞こえた。

「……あのザコはいないようだな」

「カイリのこと？」

「それ以外に誰がいるんだよ、オレに手も足も出なかったザコが」

「っ、相変わらず失礼な男ね!!」

食ってかかるカグヤだが、ケイジは気にした様子もなく鼻で笑う。

と、視線がシロナへと向けられた。

「……シンオウチャンピオン様がいるとはな」

「こんにちは」

向けられる敵意など無意味だと言わんばかりに、シロナは笑みを浮かべ挨拶する。

それが気に入らないのか、ケイジは視線を逸らした。

「君は、どうしてここに？」

「ああ？ 答えなきゃいけないのか？」

「いや別に、じゃあね」別段気になったわけではなく、ただなんとなく訊いただけだ。

半ば予想通りの返事が返ってきたので、レイジはすぐさま2人を連れてその場から離れようとするが。

「ちょっと待て」

「……何？ 別に君とこれ以上話す理由はないけど」

「お前、あの時見せた力はどこで手に入れた？」

「……………」

こちらの事情など構いなしのケイジにため息をついた。

「そんなのわからない、半ば予想通りの返事が返ってきたので、レイジはすぐさま2人を連れてその場から離れようとするが。」

「ちょっと待て」

「……何？ 別に君とこれ以上話す理由はないけど」

「お前、あの時見せた力はどこで手に入れた？」

「……………」

こちらの事情などお構いなしのケイジにため息をついた。

「そんなのわからない、僕だってどうして自分にこんな力があるのかわからないんだから」

「何だと……？」

「僕には幼少期の記憶が無い。どこで生まれたのかも親が誰なのかも知らないんだ。

だから、君の質問にはこう答える以外ないの」

「……………」

「これで満足？　ならもう行かせて——」

「親が、いないのか？」

「育ての親はいる、でも……本当の両親は知らない。ポケモンしか住んでいない人里離れた森の中に居たから、捨てられたんじゃないの？」

あっけらかんと、他人事のようにそう告げるレイジ。

今更、そんな事実になんかを感じるほど引きずっていない。

それに今の自分は1人じゃないのだ、振り返れば自分を知ってくれた家族や友達がいるなら、気にする必要など微塵もないはずだ。

「——」

「……………?」

急に押し黙るケイジに、レイジは首を傾げる。

「——お前は」

「何?」

「……………いや」

何か言いかけ、しかし勝手に中断するケイジ。

(はぁ……何なんだよまったく)

レイジとしては、もうこれ以上彼と関わり合いになりたくない。

いや、レイジ自身は別に構わないのだが……さっきから後ろで不機嫌全開の表情を浮かべているカグヤがいるのだ。

これ以上関わると、カグヤの堪忍袋の尾が切れかねない。

「おい、一つだけ教えろ」

「何……?」

「——お前、親を恨んでいたりするか?」

「——」

その声色は、今まで聞いたものとは違う、躊躇いがちなものだった。

——親を恨んでいるか

何故、彼はそんな事を訊いてきたのか……彼の心中がわからない。

けれど、有無を言わせない雰囲気を感じ取り、レイジは問いに答えた。

「恨んでないよ」

ただ一言、はっきりと告げる。

「……………何故だ？」

「何故って……恨む必要がないから」

「お前は親に捨てられたんじゃないのか？ それなのに何故……」

「憎しみは憎しみを呼ぶだけだ。僕だってもちろん気になったよ、どうして僕は捨てられたのか。

でもね……憎しみを抱いたとしても、今も過去も変わる訳じゃない。

なら——僕は今の自分がちゃんと在るならそれで構わない」

自分自身に言い聞かせるように、レイジははっきりとした口調で告げた。

——憎しみを、抱くわけにはいかない

あの感情は人を狂わせる、たとえどんな人間であったとしても、憎

しみに身を焦がしてしまつたらその末路は……悲しいものになってしまう。

だから、どんな事があつてもレイジは憎しみを抱かないように己を律しているのだ。

「……………」

レイジの答えを聞き、ケイジはまるで尊いものを見るかのように彼を見つめていた。

「……君は、誰かに恨みを抱いているの？」

「……お前に話す意味はない」

冷たく言い放ち、その場から立ち去ろうとするケイジ。

「ケイジ!!」

「——お前、セキエイリーグに出るんだろ？」

「えっ……そ、そうだけど」

「……………そうか」

一方的に質問され、困惑するレイジをよそに、今度こそケイジはその場から立ち去っていつてしまった。

「……何なの、あれ」

「……………」

あの質問の意図は、何だったのだろうか。

結局わからずじまいだったものの……。

ケイジという少年にとって、何か意味のあったものだったのだろう。

それだけは、理解できた。

「ていうか、ジュンサーさんに連絡しなくていいの？」

「……やめとこう。そんな事する必要はないよ」

「でも……」

「大丈夫だよ。きっと大丈夫」

あの時、彼がやった事は決して許されるものではない。

でも、きっと大丈夫だと思えたのだ。

「カグヤ、レイジくんもこう言っているし、これ以上考えてもしようがないわよ」

「むう……」

カグヤとしては納得できるものではなかったが、そこまで言われては引き下がるしかない。

「それより、祭りを楽しもうよ」

「……………そうだね」

ニコツと笑みを浮かべ、レイジに強く抱きつくカグヤ。

「ちょ、ちよっとカグヤ」

「えへへ……」

こうやって抱きついていていただけなのに、たまらなく嬉しくなる。

（家族、だから？）

——本当にそうなのだろうか？

（……まあ、いっか）

今は、この幸せを噛みしめていればいい。

（やるわね、カグヤ）

負けじと、シロナも抱きしめる力を強める。

「うっ……」

2人の行動と周りの視線で、顔が赤くなっていくレイジ。

端から見れば微笑ましく、幸せそうに見える光景であったが。

——終わりは、唐突に訪れる

「————」

どくりと、鼓動が響く。

（この、感覚は……）

ノイズのように頭の中に響き渡る何かの声。

今までよりも強いそれに、おもわず顔をしかめてしまう。

「レイジ？」

「どうしたの？ レイジくん」

（……誰だ、僕を呼ぶのは）

近くから感じる違和感。

それが、だんだんとこの町に近づいてくる。

「————っ」

たまらず2人の手から離れ、海辺へと向けて走り出すレイジ。

「レイジ!？」

「カグヤ、追いましょう!!」

すぐさまカグヤ達もレイジの後を追う。

(くっ………)

ノイズは痛みに変わり、海辺に近づく度に大きくなっていく。

確かめなければ、その感情のままに——海辺へと辿り着いた。
静かに波を作り、平穏そのものの青い海。

特におかしな点などは見受けられず、しかしレイジは感じていた。

そして——

「——来る!!」

その言葉を口にした瞬間。

突如として水柱が立ち上り、何かがレイジの前へと倒れ込んできた。

「——っ!!!!?」

声にならない驚愕の声を上げるレイジ。

「レイジ、どうし——って、ええっ!!!!?」

「こ、これは!?!」

追いついたカグヤ達も、海から飛び出してきた存在を見て、驚愕する。

――5メートルを超える巨体

透き通った白い身体は、見る者を魅了するほど美しいものだが……今はところどころを赤く染め上げている。

「どう、して……」

そう呟かずにはいられない。

何故なら、目の前で横たわっている存在は……。

海を守り神と謳われる、伝説のポケモン。

――ルギアだったからだ

第43話 ルギアとの出会い〜嵐の前の静けさ〜

目の前の光景が、信じられない。

何故、とか。

どうして、とか。

疑問ばかりが頭を占め、レイジは胸に痛みを伴う。

「ひどい怪我……」

「これは、急いで治療をしないと……!」

「……………」

後ろから聞こえているはずのカグヤとシロナの声が、よく聞こえない。

「ま、守り神様!?!」

「ほ、本物だ……本物の海の守り神様だ」

水柱で気づいたのか、町の住人達や祭りに参加していたトレーナー達も集まってくる。

「お願い、誰かきずぐすりを! このままじゃルギアが……………!」

「シロナさん、大丈夫ですよ」

「えっ……?」

眩き、傷だらけになったルギアへと近づくレイジ。

かろうじて息はしている、しかし……それはいつまで保つのか。

そっと身体に触れると、ぬちゃりという音と共に手が真っ赤に染まった。

「……可哀想に」

一体何があったのかは知らない。

しかし、これ以上ルギアを苦しめるわけにはいかない。

——意識を、自身の奥底へと沈ませる

音が消え、感じるのは自身の鼓動と手から伝わるルギアの温もりだけ。

そして——

「——あるべき姿に還るんだ、ルギア」

力ある言葉を放ち、レイジは『力』を解放させた。

瞬間、エメラルドグリーンの光がルギアの身体を包み込むように現れ——ゆっくりと、死に体であるその身体を治療していく。

否、既にこれは『治療』ではなく『復元』に近いレベルだ。

（この光は……！？）

見覚えがある、クチバで彼が見せた不可思議な力の源。

（自由に使えるようになったというの……？）

だとするならば、先程の彼の言葉にも頷ける。

しかし——驚くと同時に、彼の行動は軽率だとシロナは思った。

周りには彼の力を知っている自分達だけではなく、町の住人やトレーナーがいるのだ。

このような状況でこの力を使えば、色々と問題が発生するかもしれない。

事実、先程から一部のギャラリーがレイジを奇異の目で見ている姿が確認できる。

当然といえば当然かもしれないが、それを見てシロナの表情に怒りの色が浮かぶ。

——やがて、光が収まる

死に体であったルギアの身体からは傷が消え……ゆっくりと瞳が開かれた。

「……………」

助かった、その事実が確認でき安堵のため息を漏らすレイジ。

「…………お前は」

美しく、まるで女性のような透き通った声がルギアの口から放たれる。

「僕はレイジ、ポケモントレーナーだよ」

「レイジ…………」

「痛い所とかはない？　もしあるなら言って、治してあげるから」

その言葉で、ルギアはようやく自分の傷が完治している事に気が付く。

「これは…………まさか、お前が…………？」

「うん」

「…………お前は、一体」

「その質問には答えられない、自分でもどうしてこんな力があるのかわからないから」

「……………」

「けど、君が無事で本当によかった……」

(この子は……)

何故だろうか、この少年を見ているとどこか懐かしいと思うってしまう。

会った事などもちろんない、だというのに……ルギアは目の前の少年を知っているように思えたのだ。

「ねえルギア、どうしてあんな大怪我を負っていたの？」

「————」

瞬間、ルギアはまるで手のような大きな翼を羽ばたかせ飛翔する。

「ルギア……？」

「傷を癒やしてくれた事は感謝する。だが……これ以上私と関わってはいけない。

それが君の……君達のためになる」

「……どうして？」

「レイジ、できる事なら今日の事は忘れてほしい。私のような存在は……覚えている意味などないのだ」

「待っ————」

引き止めようとするレイジだったが、ルギアは一方的にそう言い放つと再び海へと飛び込んでいってしまった。

水しぶきがレイジの身体を濡らすが、今の彼にはそんな事どうでもいい。

「…………ルギア」

忘れろ、と彼は言った。

それは、人間達に自分の存在を知られたくない…………というわけではなさそうだ。

何か、もっと違う理由があってあのような事を言ったのだろうか……
……どういう意味だったのだろうか。

「レイジ！」

「レイジくん」

「…………カグヤ、シロナさん」

「髪とか濡れちゃってるよ、大丈夫？」

言いながら、ハンカチを取り出しレイジの髪を拭くカグヤ。

「…………ごめん」

「気にしないでいいよ」

「それよりレイジくん、貴方…………あの力を自由に使えるの？」

「えっ、あ、はい…………今までは使う機会なんてなかったから言っ

ませんでしたけど……」

「そう……………っ」

感じる、先程よりも多い奇異の視線を。

おもわず振り向きキッと睨みつけると、何人かの人間の視線が明後日の方向に逸れた。

「……いいんですシロナさん、気にしないでください」

「レイジくん……」

気づいていたのだ、彼は自分に向けられている視線に。

それをわかった上で、自分に迷惑を掛けないようにそう口にする彼の優しさに、シロナに唇を噛みしめた。

「レイジ!!」

人込みの中からカイリ達が現れ、レイジ達に近づいてくる。

「カイリ……」

「レイジ、今のは……」

「……ルギアだよ。伝説のポケモン……海の神様と呼ばれる、ね」

「マジかよ……初めて見た」

「――当たり前じゃ。守り神様と呼ばれる存在がそう簡単に俗世に現れるわけがなからうて」

「へ……?」

全員の視線が、声が聞こえた方向へと向けられる。

そこにいたのは、1人の老婆。

唄れた顔は年相応に感じられるが、瞳からはそれとは逆に力強さを感じる。

「トキヤ様……」

野次馬の1人が、ぽつりと呟く。「お主等、なんちゅう目であの少年を見ておるのじゃ。

あの子は守り神様を助けた恩人じゃ、それを奇異の目で見よって……少しは恥を知れ」

有無を言わさぬ迫力が込められた声で、何人かは気まずそうな表情を浮かべる。

「――誰だ?」

「あの人はこの町の町長であり、代々海の守り神であるルギアを祀っている家系のトキヤおばあちゃんよ。

そして――私の親戚でもあるの」

「ほっほっほ、久しぶりじゃのうシロナ。相変わらず男に縁がない

面構えをしておるな」

「どんな顔よそれ……相変わらず人の顔を見る度に失礼な事を言うのね、トキ婆は」

ジト目で睨むシロナだが、トキヤは気にした様子もなくカラカラと笑う。

「すまんすまん。……じゃが、そう言えるのも今回で終わりのようじゃな。年下好きとは意外であつたが……」

「えっ？」

何故か、視線を向けられるレイジ。

「なかなか将来有望ではないか？ 儂は良いと思うがのう」

「???」

一体何が言いたいのだろうか、さっぱり意味がわからない。

「まだレイジくんとはそういう関係になってないわ、残念だけど」

「なんじゃ意気地がないのう、お主の方が大分年上なのじゃから押し倒すくらいせんか」

「……大声でそんな事言わないで」

額に手を当て、呆れたようなため息を漏らすシロナだが、当のレイジはさっきから何を言っているのかさっぱり理解できないでいた。

「それよりトキ婆、ここじゃゆっくり話せないから……」

「そうじゃな。少年、名はなんという？」

「えっ……レイジですけど……」

「ではレイジ、今から儂の家に行くぞ。他の者達もついてこい」

一方的にそう告げると、さっさと歩き出してしまうトキヤ。

「……何なんだ、あの婆あさん」

「ごめんなさい、トキ婆は少し強引な所があるのよ……」

「いえ、別にそれは構いませんけど……シロナさん、さっきの会話
って……どういう意味だったんですか？」

「えっ、あー……それはその……」

若干顔を赤くしながらしどろもどろになるシロナに、レイジは首を
傾げる。

「な、なんでもないから……気にしないで」

「はあ……」

そう言われてしまえば、レイジとしてはこれ以上何も言えない。

(むー……)

そんな彼等を見て、カグヤは不機嫌そうに頬を膨らませていたのはまた別の話……。

……。

「わぁ……広ーい」

トキヤの家へと案内されたレイジ達。

さすが町長というべきか、中はかなり広くこれだけの人数でも余裕でくつろげる程だ。

「ほっほっほ、老いぼれ1人住むには広すぎるくらいじゃよ。今お茶を出そう、シロナ、手伝わんか」

「私もお客様なのには？」

「何がお客様じゃ、それくらいできんと嫁の貰い手もないぞ」

「むっ……」

そこまで言われては、シロナとしても無視できない。

「……なんか、すげえパワフルなばあさんだな」

あのシロナに対してあそこまで言える者などそうはいまい、さすが身内というべきか。

——数分後、人数分のお茶がテーブルに並べられた

「さて、改めて自己紹介をしよう。儂はこの町の町長であるトキヤじゃ。

そしてそこにいる婚期を逃したシロナの親戚じゃよ」

「……トキ婆、一度きちんと話し合った方がよさそうね」

笑みを浮かべているが、目がちっとも笑っていないシロナに、全員が震え上がる。

しかし、当のトキヤは平然としている、慣れているのだろうか……？

「え、えっと……僕はレイジです」

「私はカグヤです」

「俺はカイリだ」

「ヒメカです」

「私はミカンと申します」

「うむ。全員ポケモントレーナーのようじゃな。それになかなかよい目をしておる」

「はあ……」

「レイジ、守り神様を救ってくれて感謝しているぞ。

しかし……何故守り神様はあのような怪我を負っていたのか……」

「……………」

確かに、それは疑問に思ってしまう。

それに……ルギアは何故一方的に自分達から離れようとしたのか。

人間に捕らわれると思ったのか、それとも単に人間が嫌いだからか。

しかし、ルギアの瞳には人間に対する嫌悪感や警戒心は見受けられなかった。

すなわち、何かしらの理由が……？

「とにかく、儂としても何かお礼がしたい。

そこでじゃ、お主達はカントー地方を目指しておるようじゃから、次の定期船が来るまで儂の家に止まると良い」

「いいんですか？」

レイジ達としても、その申し出はありがたい。

「無論じゃ。それに賑やかになるのは悪くないからのう」

「ラッキー」

「ありがとうございます、トキヤさん」

「よいよい。……ところで、お主はどうするんじゃ？」

そう言いながら、トキヤは視線をミカンに向けながら問いかける。

「私は……」

「いいじゃねえか、ミカンも休暇貰ってるなら暫くここに居ろよ。祭りが終わるまで一緒に楽しもうぜ」

「カイリさん……」

「えっ!？」

「なんだよヒメカ、急に大声出したりして？」

「あつ、い、いえ……なんでもないわ」

慌てて取り繕うヒメカだが、心中は穏やかではない。

明日こそは2人で行動しようと思っていたのに、このままでは今日と同じような事態になりかねない。

「ばあさん、別に1人くらい増えても構わねえだろ？」

「もちろん構わん。じゃが……もう少し年上を敬わんか！」

ポカリと杖で叩かれてしまうカイリ、自業自得である。

「……カイリさん、ありがとうございます」

嬉しそうに、穏やかな笑みを浮かべるミカン。

「お、おう……」

それを見て、カイリは顔を赤らめてしまう。

「……………」

「いてっ！ー!？」

「ふん……」

そんなだらしない彼の足を、おもいきり踏みつけるヒメカ。

「おやおや……そちらも痴話喧嘩かね」

「そ、そんなんじゃないありません!!」

「どうかのう、儂にはそう見えるが？」

「……………」

ダメだ、このばあさんは。

顔が熱くなっているのを感じながら、それを誤魔化すようにお茶を口にするヒメカ。

「若いのう……」と呟くトキヤの言葉は完全に無視した。

「ところでレイジ、お主のあの力は……」

「それは自分でもわからないんです、僕は自分の出生がわからなくて……だから、どうして自分にあんな力が備わっているのかは……」

「そうか……それは軽率な事を訊いたな」

「いえ、お気になさらないでください。別に気にしてませんから」

「それはよかった。……シロナ、なかなか好青年ではないか？」

「トキ婆、少し黙ってて」

「そうはいかん、ようやく一生に一度あるかないかのチャンスじゃ、ここぞとばかりに攻め立てんと面白く……いや、心配じやろう？」

「今あきらかに面白いって言おうとしたでしょ？」

わざとらしく誤魔化すトキヤに、シロナは軽く殺意が湧いた。

「レイジ、お主は今特定の誰かと交際はしておるか？」

「えっ、いえ……別に」

「では、恋愛感情を抱いておる者はおるか？」

「そういうのも、別にいませんけど……」

「ほうほう……」

「トキ婆、いい加減にしないと私も怒るわよ？」

「かっかっか、その慌て振り……どうやら本気のようにやな」

「……あの、さっきから何の話を」

おおすまん、などと言いながら、トキヤは改めてレイジへと向き直り。

「どうじゃレイジ、シロナを貰ってくれんか？」

と、よく意味のわからない事を言ってきた。

『—————』

空気が凍る。

レイジだけでなく、周りの者もトキヤの言葉に固まってしまった。

『—————はあああっ!?!?』

たっぷり数十秒後、全員の叫び声が屋敷内に響き渡る。

「な、なななな……何を……!?!?」

頭がパンクしながらも、どうにか言葉を紡ぐレイジ。

「言葉通りの意味じゃ、シロナを貰ってくれんかのう？」

「な、ちょ、ばっ——何わけわかんない事言ってるんですか!？」

「シロナは身内鬣屑抜きにしても、容姿や性格面では良い部類なんじゃが……いかんせん遺跡探索ばかりやっておるから男との接点がない。

しかし、お主のようなしつかりした男ならシロナを任せられる。まあ年下なのは些かアレかと思うが——」

「————トキ婆」

ブチッ、と。

シロナの中で、切れてはいけないものが切れた音が聞こえた。

ゆらりと立ち上がり、両手には6つのモンスターボールが握られている。

(やばい——!?)

瞬時に危険を察知したレイジは、立ち上がり全員を呼びかけながらその場から逃げる。

「みんな、早くここから離れるんだ!！」

「お、おう!！」

「ひゃーっ!！」

他の者も事態を理解したのか、我先にと屋敷の外へと逃げ出した瞬間。

「――冥土に送ってあげるわ、トキ婆!!!!」

凄まじく物騒な単語を放つシロナの声が聞こえたと思った時には。

爆音と共に、屋敷が崩壊した……。

……。

「――はあ」

夜になり、1人砂浜へとやってきたレイジは、座り込むと同時に大きくため息をついた。

「トキヤさん、なんであんな事言ったんだ……」

――屋敷崩壊事件後

何故かあれだけの被害に遭ったというのに無事だったトキヤによって、別の屋敷に泊まる事になったレイジ達。

1人1人立派な個室を貸してもらい、夕食も豪華なものになった。

しかし――多分あの場にいた者は微妙な空気のせいでろくに味なんか覚えていないだろう、もちろんレイジとて例外ではない。

それはそうだ、トキヤの「シロナを貰ってくれんか」宣言のせいで、全員がパニックに陥ったのだから。

『言っておくが、僕は本気で言ったぞ』

そう告げたトキヤの言葉が頭の中で再生され、レイジは再び大きなため息をついた。

そんな事言われても困る、シロナや自分の都合など完全に無視されてまともに考える事などできるわけがないではないか。

(…………でも)

あんな事を言われると、否が応でもシロナの事を考えてしまう。

――初めて出会ったのはニビシティでだった

最初はチャンピオンとしての凄まじいオーラに警戒したが、蓋を開ければまったくもって普通の女性であった。

デザートを頼むのに一時間近く掛かったし、なんだか動作や行動がどこか子供っぽい。

けれど、それがシロナの魅力なのだろう。

（僕は……シロナさんの事を、どう思っているんだろうか……）

尊敬できる先輩トレーナー、姉のような存在、いつか全力で戦って勝ちたい目標。

どれも間違いではない、間違いではないのだが……。

「――っ」

右腕に痛みが走る。

思考を中断し、痛む右腕を左手で優しくさすった。

（まただ……どうしたんだろう）

――先程から、右腕に痛みが走る

初めは気のせいと思えるような小さなものだったが、徐々に大きくなっていき……カグヤ達にバレないようにするには苦労する程の痛みを伴った瞬間もあった。

（……あの力を、使った時から？）

クチバ、タマムシ、コガネ、エンジュ、そしてここアーリアで。

力を使う度に、それと比例して痛みが大きくなっていつている。

人には……否、この世界で生きる者にとって過ぎたる力だからか。

まだ無視できるが、もしこれ以上あの力を使えばどうなるか……想

像すると、寒気がする。

「――レイジくん」

「っ、シロナさん……」

先程まで考えていたせいか、シロナの声に身体が過剰に反応してしまった。

「隣、いい？」

「あ、はい……どうぞ」

ありがとう、そう言ってレイジの隣に座るシロナ。

「……………」

「……………」

気まずい。

完全にトキヤのせいなのだが、両者共に互いの顔が見れず何も話す事ができない。

先に口を開いたのは――シロナだった。

「……トキ婆の言った事は、気にしないで。

あの人も私を見ると一言目には「男はできたか？」って言うてくるの。

今回だって、たまたまレイジくんと一緒にいて勘違いしただけだ

から」

「あ、は、はい……」

「ごめんなさい、不快な思いをさせて」

「べ、別にそんな事ないですから。ちょっとびっくりしただけで……だから、シロナさんが謝る必要なんてないです」

「……ありがとう、そう言ってくれると嬉しいわ」

「は、はい……」

——ダメだ

シロナは「気にするな」と言ったが、どうしてもシロナの顔を見る事ができない。

「……ねえ、レイジくん」

「何ですか……?」

「……………」

「? シロナさん?」

「レイジくん、は……カグヤの事、どう思ってるの?」

「え——」

一瞬、質問の意味がわからず呆けてしまうが……。

「カグヤの事は、家族だと思ってます」

やや遅れて、そう返事を返した。

「……本当に？」

「本当ですよ。というより嘘を付く必要なんてありませんし」

カグヤは家族だ、自分にとって一番大切な存在でもある。

異性としては……傍に居るのが当たり前過ぎて、ドキッとする事はあるが見てはいない。

「……そう」

「あの……それがどうかしましたか？」

「い、いいえ……なんでもないの。気にしなくて大丈夫だから」

慌てて立ち上がり、何かを誤魔化すように手をパタパタと振るシロナ。

様子のおかしい彼女にレイジは首を傾げるが、それ以上は何も言わないでおいた。

「そ、それじゃあ……私は先に眠るわね、おやすみなさい」

「あ、はい。おやすみなさい」

逃げるようにその場を立ち去るシロナ。

それにはあまり気にした様子は見せず、レイジは再び海を眺める。

一方——そのやり取りを見ていたティナ達は、主人に聞こえないように会話を交わす。

へお父様、どうするのでしょうか……？

——どうするって？

へもちろん、わたくしかカグヤかシロナ、誰を選ぶのかです

——さりげなく自分を選択肢の中に入れるなよな。

へ何を言っているのですかリオン、わたくしにもチャンスがあります。

過去に人とポケモンが結婚した事例もありますし、可能性がないわけではないでしょう？

へ……僕は、父上と母上が幸せになってくれればそれで……

——誰か1人なんて、レイジが選べるとは思えねえけどな。

大体、あいつ絶対気づいてねえし。

——レイジ、鈍感さんだもんね。へまあ……わたくし達はお父様を守る事だけを考えましょう。

酷な言い方ではありますが、これはお父様自身が悩んだ末に見つけださねばならない問題ですから

だから、たとえどんな結末になろうとも口出ししてはならない。
ティナは自分に言い聞かせるようにそう告げ、レイジと同じく穏やかな海へと視線を向けた――

第44話 対峙く現れる驚異・有り得ぬ再会く

【ロキside】

「――まだ見つからんのか？」

ルギアに手傷を負わせて1日が過ぎた。

しかし、いまだルギアをいまだ見つける事ができないでいた。

「申し訳ありませんロキ様、こちらレーダーで探知しているのですが……」

「ふむ……」

途中で息絶えたとは考えにくい、だとすればどこかでチャンスを探っているか……それとも怪我の治療をしているのか。

どちらにしろ、厄介な事になりそうだ。

――けたたましい警鐘が鳴り響く

「ロキ様、ルギアの反応が!!」

「来たか……モニターに映せ」

巨大なスクリーンが現れ、前方からこちらに向かってくるルギアの姿を確認するロキだったが。

(……傷を負っていないだ?)

ルギアの身体には傷一つなく、まるで何事もなかったかのようだ。

仕損じたか、一瞬そう思ったがその可能性はありえない。

魚雷が命中した事は確認できたし、なにより本当に命中していないなら今の今まで隠れていた意味などないはずだ。

「高エネルギー反応、来ます!!」

「バリアを張れ」

冷静に指示を出し――そのすぐ後に船内で衝撃が走る。

(エアロブラスト……ルギアにしか使えぬ技か、なるほど……確かにたいした威力だ)

しかし、この艦のバリアを突破する事はできなかったようだ。

「バリア損傷率14%、問題ありません」

「――浮上しろ」

「は……?」

「ルギア相手に同じ手は通じん、浮上して迎え撃つ」

「し、しかし……並のデッドポケモンではルギアを捕らえる事など

……」

「その心配なら無用だ、私自らがルギアを捕らえる」

「ロ、ロキ様自らがですか……？」

「ルギアを甘く見ていた、二度も逃がすわけにはいかん。浮上しろ」

「は、はい!!」

指示を受け、潜水艦はゆっくりと浮上していく。

そして海の上に出て、艦上へと移動するロキ。

その時には既に、ルギアが睨むようにロキと対峙していた。

「さすがだなルギア、どうやって傷を癒やしたのだ？」

「……お前達は何者だ？私を捕らえて何をするつもりだ」

「質問を質問で返すのは感心せんな、なに……ただお前という存在は希少価値がある。」

だから捕らえる、それだけの話だ」

「バカな……ただそれだけの理由でだど？」

——今すぐ消えろ、もう二度と私の前に現れぬのならば今の言葉は忘れてやる」

「優しいなルギア、私のような救いようのない小物相手にそのような事を言うとは……。」

だが、我等とてお前を捕らえる為に色々と準備をしてきたのだ、
今更帰れなどと言われても素直に帰る事などできんよ」

「お前達は私達のような存在を何だと思っているのだ？
一方的に私達を蹂躪するなど、許される事ではない」

「それはお前が決める事ではないぞルギア、無駄な抵抗はやめた方が身のためだ」

「……それはこちらの台詞だ、まさか人間が私に適うとも思っているのか？

先程の兵器も、もはや私には通用しない！！」

だから去れ、そんな意思を込めロキを睨むルギア。

その迫力は常人など腰を抜かしてしまうほどであったが、ロキは不敵な笑みを消そうとしない。

「わかっているさ、だからこそ私が出てきたのだ」

懐から2つのデッドボールを取り出すロキ。

「無駄な殺生は好まぬ、早く去れ！！」

「フッ……たいした自信だな。しかしお前は忘れたのか？」

——伝説と呼ばれる存在は、お前だけではない

そう告げ、デッドボールを空へと投げる。

黒い光を放ちながら、中から出てきたポケモン達は……。

「殺すなよ。だが徹底的に痛めつけろ——」

——ラティオス、ゾロアーク」

【ロキside】out——「っ、は………！」

跳ねるように、ベッドから起き上がるレイジ。

「っ、っ、ぐっ……」

喉元までせり上がってくる不快感に、身体を震わせる。

（何、だ……！？）

感じた、確かに感じたのだ。

凄まじいまでの力と、気が遠くなるほどの闇を。

そして——その中心にルギアがいる事に。

〈お父様！！〉

〈父上！！〉

ボールから飛び出してくるティナとアクセル。

「……ティナ、アクセル、君達も……？」

〈はい、悪しき波導を……しかし、これだけ禍々しいものを感じたのは初めてです〉

〈禍々しさだけじゃない……こんなにも空っぽで、何もない心は……何なのでしょうか？〉

「わからない……とにかく、確かめないと」

頭を振って思考を戻し、急いで着替えて部屋を出る。

「いたたたっ！！」

出た瞬間、クチートに腕を噛まれたカグヤの姿が視界に入った。

「……クチート、やめてあげなさい」

そう言いながら、玄関へと向かう。

「助けてくれないの!？」

後ろからそんな声が聞こえたが、今はそれに構っている暇はない。

「――1人で行こうとするな」

「っ、ルカリオ……」

外に出ようとして、ルカリオに止められる。

「やはり気のせいではなかったようだな……」

レイジ、この波動は一体何だ?」

「わからない……でも、早くそれを確かめないと」

確かめなければ、手遅れになってしまう。

何故か、レイジにはそう思えたのだ。

「……わかった。だが1人で行こうとする事は許さん。」

シロナ達を呼んでくるから、ここで少し待っている」

そう言い残し、屋敷の奥へと消えるルカリオ。

「へお父様、確かにルカリオの言う通りお一人で行くのは危険です」

「わかってる、でも……」

「へ焦りは己の身を滅ぼすだけです、お気持ちはわかりますが落ち着いて」

「……………」

ティナに言われ、納得はできないがその場で待つ事に。

——程なくして、シロナ達がやってきた

「レイジくん、悪しき気配を感じたの？」

「はい……………それも、今まで以上に禍々しく不吉な闇を」

「……………あの、それは一体どういう事なのでしょう？」

「それは……」

「走りながら説明するよミカン、それよか急いだ方がいいんじゃないかな
いか？」

「レイジの第六感、外れた事ないだろ？」

「……………うん！」

……………。

海辺に赴く。

まだ朝のせいか周りに人はおらず、海も昨日と変わらず穏やかだ。

「……何もおかしい所はないね」

「レイジの第六感が、外れたって事か……？」

（それなら、いいんだけど……）

不快感は消えてくれない。

それに、ティナ達の表情も強張っている所を見ると、やはりこの感覚は外れてはいないようだ。

「――父上、海の間こうから感じられます」

「肉眼じゃ確認できないが、強い波導を持つ者達が戦っているようだぞ」

「海の間こう……」

「……もしかして、ルギアかしら？」

「わかりません。でも……その可能性は限りなく高いと思います」

「――どわっ!？」

いきなり素っ頓狂な叫び声を上げるカイリ。

一体何が、視線をそちらに向けると……。

「お、おい……カノン、どうした？」

カノンが勝手にボールから飛び出し、海の向こうに視線を向けていた。

しかし、その表情はなんだかおかしく、まるで信じられないものを見てしまったかのような……。

「そんな…でも、この感じは……」

「カノン？」

「————っ」

いきなり海に向かって飛んでいくカノン。

「あっ、お、おい!!」

「カイリ、追うよ!!」

ボールからリオンを取り出し、すぐさま背中に乗る。

慌ててカイリも背中に乗り、すぐさまカノンの後を追った。

「アクセル、ティナ。君達はボールの中に入っててくれ!!」

ティナ達をボールの中に入れた後、前方へと向き直る。

「カグヤ、ヒメカ、ミカン。私達も追いましよう」

「はい!!」

「ミカンは私のガブリアスに！」

「わ、わかりました。でも……カノンさん、一体どうしたのでしょうか……？」

「わからない。でも……なんだか様子がおかしかった」

「何か、確かめようとしてるような……」

「行けばわかるか。……それにしてもカノンもリオンも飛ばしすぎよ！」

こっちもかなりスピードを出しているが、ついていくのがやっとだ。

「……カノンの奴、どうしたってんだ……？」

「……カイリ、いつでもポケモン達を出せるようにしてて」

「へ？ な、なんでだよ？」

「いいから。……リオン、万が一に備えておいてね」

———わかった。

杞憂で終わってくれればいい、そう信じたものだが……。

——やがて、複数の影が見えてきた

「あれは……ルギアじゃねえか!？」

(やっぱり……!)

杞憂では終わってくれなかった、レイジの思った通りルギアは何かと戦っている。

数は二体、おそらくデッドポケモンだろう。

近くには巨大な潜水艦が浮かんでおり、艦上には1人の男が鑑賞するように戦いを眺めている。

彫りの深い顔立ちに、少し藍色がかった黒髪と黒い瞳。

しかしその瞳には……底知れぬ「何か」が孕んでいる。

狂気などの負の感情ではない、しかしあれは……。

「——おい、レイジ。あのポケモンは……」

「え———?」

掠れた声でデッドポケモンの一体を指差すカイリに、レイジも視線を向けて——固まってしまった。

「――ラティオス」

……待て。

では、カノンが急にあのような突飛な行動をとったのは……。

「ん……？　ほう……ラティオス、ゾロアーク、戻れ」

男の命を受け、ラティオスとゾロアークと呼ばれたポケモン達が素直に戻る。

（やはりラティオス……じゃああれは……）

予感的中した、そう思った時には。

「――兄、さん」

と。

カノンが、細く小さな声でラティオスを呼んでいた……。

「っ、やっぱりあのラティオスは……行方不明になってたカノンの兄貴だったのか」

「……レイジ、何故ここに」

「話は後だよルギア、それより……あの男は」

「……私を捕らえようとしている男だ」

「……リオン、あの潜水艦の上に降りて」

言われた通り、艦上へと降り立つリオン。

「……………」

「……………」

対峙する両者。

……間近で見ればわかる、この男こそ先程から……否、前々から感じていた闇の正体。

しかし、息が詰まるほどの闇だというのに……男から殺気や敵意などが感じられない。

「——お初にお目にかかる、レイジ、カイリ」

「っ」

「てめえ……なんで俺達の名前を」

「知っているさ。フレアから話は聞いている」

「……じゃあ、あなたが」

「私の名はロキ。ロケット団の総帥という立場に居る男だ」

「……兄を、兄さんを返して!!」

「ラティアス、お前もあの時おとなしく我等の所有物となっていれば、ラティオスと共に居られたというのに……」。

今からでも遅くはない、私達の物になれ」

「ふざけんな！ カノンの前から勝手な理由で兄貴を奪いやがって……」

「だから今からでも私達の物になれと言っているではないか。
ラティオスと共に居たいのなら、この上なく良い提案だと思うがね」

「てめえ………!!」

今にも殴りかかろうと拳を握りしめるカイリ。

「カイリ、落ち着きなさい」

そんな彼を宥めながら、ヒメカ達も艦上へと着地する。

「ほう……これはこれはシンオウチャンピオンのシロナ殿ではないか。

まさか君のような有名人に会えるとは、光栄だな」

「……今すぐにポケモン達を解放しなさい」

戯れ言には付き合わず、今まで見せた事がない程の厳しい目つきで

睨みながら、シロナはロキに告げる。

「それはできない相談だな、どうしてもというのならで……力づくで止めたらどうだ？」

「上等だ………！」

「――やれ」

一言ロキが呟くと、艦の中から数多くのデッドポケモン達が飛び出してくる。

レアコイルにドンガラス、ギャラドスにメタグロス等、どれも強力なポケモンばかり。

「ラティオス、お前はラティアスの相手をしてやれ」

「……兄さん」

ラティオスは何も言わず、虚ろな瞳でカノンを睨む。

「カノン、戦ってラティオスを元に戻すしかねえ」

「………」

しかし、カノンはカイリの言葉を否定するかのようになり、首を振る。

「カノン………？」

「で、できません………」

「できないって……何言ってるんだよカノン！
兄貴を……ラティオスを助けねえと！！」

「それはわかっています、でも……だからって兄と戦うなんて……」

「カノン……」

「ラティオス、はかいこうせん」

「っ、カノン！！」

「え——」

カイリの言葉に反応するカノンだったが……。

その時には既に遅く、ラティオスのはかいこうせんをまともに受けてしまった。

「カノン！！」

「うっ、く……」

凄まじいダメージに、カノンは苦しげに息を吐く。

「にぃ、さん……」

「カノン、戦うんだ！！それしかラティオスを救う事は——」

「……マスター、ごめんなさい……私、兄と戦うなんて」

「甘いラティオス、お前がどんなに呼びかけてもラティオスが応える事などない。

——ラティオス、後は自由に戦うがいい。殺しても構わんぞ」

非情な指示を出し、ロキはレイジと対峙する。

「あなたは………！」

「——ヒードラン」

デッドボールを取り出し、ヒードランを場に出すロキ。

「お前のリザードンと私のヒードラン、果たしてどちらの炎が勝っているかな？」

「……あなたは、どうしてこんな事をするんですか？

あなたの目的は——」

「言葉で語る必要など今はない、ただ勝者と敗者を決めればいい。そうではないか？」

「……………」

わかっていた、こんな男に何を話しても無意味な事くらい。

——シロナ達は、他のデッドポケモン達の相手をしている

つまり、今この男と戦えるのは自分だけだ。

「……………あなただけは、許さない」

「いいぞ……その怒り、お前の力を見せてみろレイジ」

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

特大のかえんほうしゃを放つリオン。

しかし、ロキは――

「――ヒードラン、“ひのこ”だ」

「――――」

――リオンのかえんほうしゃを呑み込み、更にダメージを与えたヒードランの攻撃

だが、その攻撃は……。

「かえんほうしゃを、ひのこで……?」

「そう驚く事ではあるまい、私のヒードランがお前のリザードンの炎に勝っていた。ただそれだけの話だ」

そう、ただそれだけの話である。

しかし、絶対的に威力で劣るひのこでかえんほうしゃを破りあまつさえダメージすら与えるなど、もはや正気の沙汰ではない――!!

「……この程度か？」

「っ、リオン、フルパワーでブラストバーン！！」

出し惜しみなどしてられない。

このような現実を突きつけられては、大技の連発で打倒するしか手は。

「ヒードラン、ブラストバーン」

——両者のブラストバーンがぶつかり合う

凄まじい爆音と熱風が辺りに巻き起こり……。

「——、あ」

煙の先では、全身に大火傷を負ったりオンが、ヒードランの前でなす術もなく倒れている光景が、目に入った。

「たいした炎だったが、それでもヒードランにはまだまだ及ばん」

「……………」

「——覇気がないな。しかしなまじ相手の強さを読めるからこそ……絶対的なまでの力を差を感じ取ってしまったか」

聞こえない。

ロキの言葉が、耳に入ってこない。

ただ——この男には勝てないと、他ならぬ自身が理解してしまった。

「カノン!!」

「……………」

カイリ達へと視線を向けると、彼等も敗北したのか艦上に倒れたカノンに駆け寄るカイリの姿が。

——絶望的な状況

何があっても、今の自分達に勝ち目はない。

そう理解した瞬間——レイジはリオンをボールに戻しながらティナを場に出す。

「むっ……………」

「みんな、ポケモン達をボールに戻して、早く!」

「えっ……………」

言いながら、ティナのテレポートを使い全員を一カ所に集めるレイジ。

——今は、逃げるしかない

悔しいが、この状況では自分達に勝機などは見受けられない。

今は逃げて、次のチャンスに繋げるしか――

「レイジ!!」

「え――」

ルギアの声が響き、レイジは無意識のうちに上を見上げた。

そこには、自分達に向かってギガインパクトを放つラティオスの姿が……。

「――」

凄まじい衝撃。

身体がバラバラになったかのような錯覚すら感じながら、宙に浮かぶ自分を他人事のように感じつつ……。

（みんな……ル、ギ、ア……逃げ、て……）

レイジは、意識を闇へと堕とした……。【ロキside】

「――良い判断だが、まだ甘いな」

煙が晴れ、気絶しているレイジを見下ろしながらそう告げるロキ。

「レイジ!!」

「ルギア、この少年達が心配か？」

「貴様——！」

殺気立つルギアだが、そこから動く事ができない。

その気になれば、あのような男など打倒できる。

しかし——レイジ達の命を握られている以上、ルギアに迂闊な行動など許されない。

故に、ルギアには己の敗北を認める以外の道は残されていなかった。それを満足そうに見つめながら、ロキは改めてレイジ達へと視線を向ける。

「むっ……？」

しかし、そこにいるはずの者達——

カイリとミカン、そしてラティアスの姿が見当たらない。

（あの状況で逃げたのか……？　しかし、そんな芸当ができるとは思えんが）

だが、いないものは仕方ない。

ロキはすぐさま部下を呼び出し、レイジ達を連れていくように指示を出す。

（さて……一応の成功はしたようだが）

今回は、完全なるこちらの勝利で終わった。

しかし——どこか腑に落ちない。

僅かな違和感を感じつつも、ロキは勝利に酔うかのように口元に歪んだ笑みを浮かべていた……。

第45話 カイリとミカンく2人だけの1日く

――波の音が聞こえる

静かな子守歌のように優しく鼓膜を刺激され、カイリはゆっくりと覚醒した。

「……うつ……」

初めに感じたのは砂が口に入った不快感。

すぐさま吐き出し、次に感じたのは身体の痛み。

しかしこちらは気にする程のものではなかったので、そのまま起き上がった。

「……ここは」

砂浜に倒れていた自分の状況を確認しつつ、カイリはすぐさま思い出す。

そうだ、ラティオスのギガインパクトを受けて、そのまま海に……。

「ヒメカ!!」

幼なじみの名を呼ぶ。

だが、周りにカイリ以外の人間はいない。

「レイジ、カグヤ、シロナさん、ミカン!!」

……彼の声に伝えてくれる仲間はいない。

「……まさ、か」

——自分だけ、生き残った？

そんな考えを頭に浮かべてしまい、カイリはすぐさま振り払う。

（そんなわけねえ……あいつらが、そう簡単にくたばるかよ!!）

自分とてこの小島に流れ着いたのだ、ならば同じように他のみんなもどこかに……。

そう思い、カイリはすぐさまその場を離れ仲間達を捜し始めた。

「はあ…はあ…はあ…」

走って走って、ただがむしゃらに走り続ける。

どれくらい走ったのか、肺は痛み喉が水分を欲しがってきた頃。

「っ、ミカン!!」

自分と同じように、砂浜で倒れている少女——ミカンの姿を視界に捉えた。

急いで駆け寄り、ミカンを抱き起こす。

「ミカン！　おい、しっかりしろ！！」

呼びかけるが、返事がない。

（こ、こういう時は……そうだ、人工呼吸！！）

思い出し、すぐさま実行に移そうとして……はたと気づく。

……人工呼吸、別の名はマウス・トゥー・マウス。

すなわち、それを行うには唇と唇を重ねなければいけない。

「……………」

ちょっと待て。

緊急事態なのはわかる、だが……本当にいいのだろうか？

もしかしたら相手はファーストキスかもしれない、ちなみに自分はバリバリのファーストである。

だというのに、いくら人工呼吸とはいえそのような行いは、ひどく罪悪感を抱いてしまうというか……。

（って、そんな事考えてる場合じゃねえ！！）

別に自分はやましい気持ちがあるわけじゃない、ただ純粋にミカンを助けなければと思っている。

そうとも、ならば何を躊躇う必要があるというのか。

……少し言い訳のような気がするが、とにかくカイリはゆっくりとミカンの唇に。

「んう……」

（えっ……？）

ミカンの口から放たれる僅かな声。

それと同時に、彼女の瞳も開かれ……。

『――』

唇が触れ合う数センチといった所で、互いの目が合ってしまった。

「……………」

「あ、いや……」

まだ状況がよくわかっていないミカンと違い、カイリは誤解を解こうとするのだが……言葉が出てこない。

そして――

「き――きやああああっ！！！！」

「おぶっ！！！！」

耳をつんざくような悲鳴と共に、とんでもなく気合いの入ったビン

タがカイリの頬に叩き込まれた。

その威力は凄まじく、ゴロゴロと砂浜を転がってしまうほど。

「な、何をしようとしていたんですか!？」

「待て待て! 誤解だよ誤解!!」

俺はただ人工呼吸しようとしただけで、無理矢理キスしようとしたわけじゃないんだ!!」

「えっ……人工呼吸……」

そこでようやく、ミカンは自分の身に何が起きたのかを思い出した。

「……………ここは?」

「わからねえ、たぶんアーリアからそう離れてない小島だろうけど……俺もさつき目が醒めたばかりだから……」

「じゃあ、ヒメカさん達は……?」

「……………まだ見つかってない。けどきつとみんななら大丈夫だ!!」

根拠はない、けれどそう信じるしか道はないのだ。

「……………そうですね。私達だって無事でしたし……きっと大丈夫ですよね?」

「ああ!!」

……カイリもミカンも、己の中にある不安から目を背けるように、わざと明るい口調でそう言い合った。

と、空が暗くなり程なくして雨が降り始めてきた。

「とりあえず、どこか休める場所を探そう。

レイジ達を見つけないきゃいけないけど、俺達が万全な状態じゃないからな」

「はい———いたっ」

立ち上がろうとしたミカンだが、突然うずくまり足を押さえた。

「どうした？」

「わ、わかりません……けど足が痛くて……」

「ちょっと見せてみる」

そう言いながら、ミカンの足に手を伸ばすカイリ。

「あっ……」

「……腫れてはないから捻挫の類じゃなさそうだな、ちょっと足を挫いただけか……」

「あ、あの……カイリさん」

「ん？」

顔を上げ、赤い顔になっているミカンを見て……自分の軽薄な行動に気が付いた。

いきなり足をベタベタと触っているのだ、彼女にとって恥ずかしいことこの上ないだろう。

「わ、わりい!!」

「い、いえ……」

熱い顔と早くなる鼓動に躊躇いを覚えつつも、ミカンは不思議な感覚に感じていた。

確かに恥ずかしかった、けれど……嫌悪感や不快感などはない。

むしろ、心配してくれて嬉しいとさえ思えた。

「た、立てないか？」

「はい……ちょっと厳しいです」

「……そっか。じゃあ俺に乗ってくれ」

「はい……?」

ミカンに背を向け、しゃがみ込むカイリ。

「おんぶだよ、おんぶ」

「ええっ!？」

「しょうがねえだろ、歩けねえんだから。
おんぶが嫌ならだっこにするか？」

「あう……じ、じゃあおんぶでお願いします」

おずおずとカイリの背中に乗る。

「しっかり掴まってるよ、行くぞ」

立ち上がり、砂浜から中央の森の中へと足を踏み入れるカイリ。

「……………」

逞しい身体、自分とはまるで違う“男”の彼に、胸が高まる。

（わ、私……どうしたのかしら）

こんな感情、今まで抱いた事がない。

顔は熱くなり、鼓動は高鳴り、けれど……暖かくて不思議な感覚。

彼と共に居られるのが、嬉しいと……そう思えたのだ。

「——おっ、あそこなんかよさそうだな」

歩き続けていると、洞窟を見つける。

中に入るとそこは狭く、けれど雨風は凌げそうだ。

「……くちゅん」

「大丈夫か？」

「は、はい……くちゅん」

くしゃみを連発するミカンだが、それは仕方ないかもしれない。

なにせ自分も彼女も服がびしょ濡れだ、早く乾かして身体を暖めなくては風邪を引いてしまう。

「ゴウカザル」

ボールからゴウカザルを取り出すと、洞窟の中がほのかに暖くなる。

「ミカンの傍に居てやってくれ」

「あ、あの……カイリさんはどこへ？」

「燃やせる木々を探してくるよ、服を乾かさないといけないしな」

言いながら、外に出るカイリ。

（雨が強くなってきた……）

これは急がないと、自分も危ないかもしれない。

そう思い、カイリは少し歩くスピードを速めながら燃料になる木の枝などを探す。

(こういう時、レイジならもっと上手く立ち回れるんだけどな……)

そう思うと、なんだか情けなくなってくる。

(……レイジ)

彼は無事だろうか、無茶ばかりするから心配だ。

それに――ヒメカも。

いつもは気丈な彼女だが、その実とても脆い所があるのをカイリは知っている。

(泣いてねえよな……)

彼女が泣いている姿を想像するだけで、胸が締め付けられるように痛くなる。

(っ、こんなネガティブな事考えてどうすんだよ俺は!!)

今は皆の無事を祈り、そして自分のできる事をすればいい。

そう自分に言い聞かせ、カイリは再び燃料探しをしていると……。

「マスター!!」

「え――」

前方からの声に顔を上げた瞬間、何かが抱きついてきた。

「カノン!!」

「マスター、よかった……無事だったんですね」

瞳に涙を滲ませるカノン。

「カノンも無事でよかった……」

「そうだ、他のみんなを見なかったか？」

「……いえ」

「そうか……」

どうやら、この島に居るのは自分とミカンだけのようだ。

しかし、カノンと再会できたのはとても嬉しい。

「カノン、ミカンも無事だったんだ。今は洞窟で休んでいるから一緒に行こう？」

「はい!!」

……。

「カノンさん!!」

「ミカン、無事でよかった……」

互いに再会した事を喜び合うミカン達を見つめながら、カイリはゴウカザルと協力して焚き火を作る。

「ゴウカザル、サンキューな」

「ウキッ！」

暖は採れた、しかし……まだ服は濡れたままだ。もちろん乾かしたい、しかし身体を隠すようなタオルも予備の着替えもない以上、このままにいるしかない。

「くちゅん！」

「ミカン、大丈夫か？」

「は、はい……」

そう答えるものの、比較的軽装な彼女ではあきらかに寒そうだ。

「ほら、これでも羽織ってろよ」

上着だけは完全に乾いてくれたので、それをミカンの身体に掛けてあげた。

「いえ、そんな……カイリさんが風邪を引いてしまいますから」

「大丈夫だ。ゴウカザルもいるし、頑丈だけが取り柄だから俺は」

とはいうものの、確かに寒い。

しかし、女の子であるミカンに風邪を引かれるよりはマシだと自らを奮い立たせる。

(……カイリさん)

彼の優しさ、彼の言葉が胸に染み込んでいく。

(嬉しい……)

彼に優しくしてもらう事が、こんなにも嬉しいと感じるなんて……。

——もっと、彼の傍にいたい

まるで当たり前のように、ミカンの中でそんな感情が芽生える。

けどそれがおかしな事だとは思えない、むしろその感情すら嬉しいと思えた。

それは芽生え始めた僅かな恋慕、ミカンという少女が生まれて初めて抱いた異性への感情。

慣れない感情は、おとなしい彼女を大胆な行動へと移らせた。

「あ、あの……カイリさん」

「ん?」

「さ、寒いでしょうから……そ、その、えっと……」

「……………?」

「く、くっ付いていれば……暖かいと思いませんか?」

「—————」

ポカンとした表情を浮かべてしまうカイリ。

一体、彼女は何を言っているのか。

「え、えっと……あう」

自分で言っただけで恥ずかしがるミカン。

「あ、えっと……冗談、じゃないみたいだな……」

「……………はい」

「いや……せっかくの提案だけどき、さすがにそれはマズいと思うんだよ」

混乱する頭のまま、どうにか言葉を紡いでいく。

というか、彼女は一体どうしてしまったのか。

「……嫌、ですか？」

「嫌とかじゃなくて、俺は男でミカンは女の子で」

「嫌じゃ、ないんですね？」

「えっと……まあ、そうだけど……」

「じゃあ……失礼します」

立ち上がり、おずおずとカイリの隣に座り込むミカン。

そして、そのまま頭を彼の肩に乗せ密着してきた。

「ミ、ミカンさん……？」

「……………」

ミカンは何も返さない、というより何か話す余裕など残されていなかった。

行動したのは自分だが、あまりにも大胆な行動に彼女の頭がパニックを引き起こしているのだ。

（わ、私ってばなんてはしたない……。

で、でも……カイリさんが風邪を引いてしまったら嫌だし……）

（い、一体どうしたんだよミカンの奴……。

お、俺は一体どうしたら……）

それぞれ顔を真っ赤にしながら、しかしその場から動く事はなく身体を寄せ合いながら時を過ごす。

（マスター……青春してますね）

完全に空気と化したカノンとゴウカザルは、邪魔をしないようにと2人から離れ、静かにそう光景を見つめていた……。

……。

「……んっ……」

目を開ける。

……知らぬ間に眠っていたのか、外からは朝日が差し込んでいた。

「……すー……すー……」

すぐ隣で聞こえる寝息にぎよつとする。

（おいおい、マジかよこれ……）

どうやらあのまま眠ってしまったようだ、すり寄るような姿勢のミカンを見てある意味寿命が縮まった。

そのすぐ近くにはゴウカザルが眠っており……。

(……カノン?)

外に出ていたはずのカノンの姿が見当たらない。

ミカンを起こさないように離れ、洞窟の外へ。

すると、カノンの姿はすぐに見つかった。

「カノ——」

彼女の名を呼ぼうとした瞬間。

彼女から感じる凄まじいオーラに、おもわず口を閉ざしてしまった。

——違う

いつもの明るく、優しい彼女とは。

今のカノンは、ラティアスと呼ばれる伝説のポケモンに相応しいまでの力強さを感じられる。

「……マスター、おはようございます」

「お、おう……」

いつもの笑顔を向けられ、先程とのギャップに面食らいながらも挨拶を返す。

「……マスター、もう少し休んだら行きましょう」

「えっ……」

一体どこに行こうというのか、そんな質問をする前にカノンは言葉を続ける。

「ルギアを助ける為に、ロケット団を止めなくては」

「……カノン」

それは、確かにそうだ。

あのような者達を、このままにしておくわけにはいかないという気持ちちは、カイリとて同じ。

しかし……もしもう一度戦う事になれば、カノンは否が応でも兄であるラティオスと……。

「――兄は私が止めます」

「……………」

「もう迷いません。他の誰でもない、私が兄を止めてみせます」

そこには、確かな決意が見て取れる。

カノンは、本気で自分がラティオスを止めると決意を固めたようだ。

「ですからマスター、兄と戦うのは……私にやらせてください。
ワガママなのはわかっています、でも……兄だけは」

「……わーってるよ。わかってるからそれ以上何も言うな」

「マスター……」

「でも、最後まで諦めたりすんなよ？」

俺はラティオスを救いたいと思ってる、お前と同じようにな。
だから……何があっても最後まで諦めたりするんじゃないぞ？」

「……ありがとうございます、マスター」

「よっしゃ、じゃあまずは腹ごしらえだな。

その後出発するとしてようぜ」

「わかりました。ああそういうえば、昨日きのみが沢山実っている場所を発見したんですよ」

「よし、じゃあそれを朝メシにするか。案内してくれ」「はい、こちらですマスター」

カノンに連れられ、食料調達へと向かうカイリ。

（レイジ、ヒメカ……そしてみんな、無事でいてくれよ………！）

友や仲間の無事を考えながら、少年は再び戦いへと赴く。

――胸に確かな決意と覚悟を抱きながら

第46話 ロキゝ人間ではない者達ゝ

「……………」

目が覚めた瞬間、レイジは己の状況を冷静に自覚した。

まず自分が居るのは牢屋の中、堅牢な扉によって閉じ込められた何の変哲もない小さな部屋の中に押し込まれている。

拘束はされていないが、ポケモン達は全員奪われていた。

さてどうするか、とりあえず暴れても仕方ないのでその場に寝転がる。

（……みんなは、無事だろうか）

自分もこうして拘束されているのだから、おそらく他の場所に居るのは間違いないだろう。

と、そんな事を考えていると、扉が開く音が響く。

「出る」

開かれた瞬間、短くそう告げられる。

（……まだ、逃げる時じゃないか）

目の前にはロケット団員が2人に、監視用のズバットやラッタなどがある。

正直、なんとか逃げられるレベルだがまだ情報が少なすぎるので、レイジはおとなしくついていく事に。

「……………」

さて……上手く行ってくればいいが。

……………。

連れていかれた場所は、ホールのような広い部屋。

団員達はレイジを部屋に入れた後、すぐさま出て行ってしまった。

「——手荒な真似をしてしまっただけで済まなかったな」

「……………」

奥から聞こえる、男の声。

レイジは顔を強ばらせながら、ゆっくりと歩いていく。

「気分はどうだ？ レイジ」

「……可もなく不可もなく、と言った所かな」

感情を込めず、レイジは淡々と目の前の男——ロキに告げる。

「ふっ……そうか」

「……みんなは、無事なのか？」

「気になるか？」

「……………」

「そう睨むな。——今見せてやる」

目の前に現れるモニター。

「っ、みんな——！」

そこに映されたのは、電磁バリアが施された檻に閉じ込めたルギアとカグヤ達の姿が。

「お前のポケモン達は別の場所に拘束している。
安心しろ、デッド化はしていない」

だが、お前の態度次第では状況は変わるぞ。

口には出さずとも、ロキがそう目で告げている事に気づき、ギリと歯を鳴らす。

「……あなたの目的は何だ？」

「目的、とは？」

「何故ルギアをはじめとする伝説と呼ばれるポケモンを捕らえようとする？ 世界を征服しようともいうのか？」

「世界征服、か……結果的にはそうなるかもしれんな」

「えっ……？」

「だがあいにくとそんな事は考えていない、それよりも……もつとバカバカしい事だよ」

「っ、じゃあ何だっていうんだ!!」

おもわず叫び、射殺す勢いでロキを睨むレイジ。

それには意を介さず、ロキは変わらぬ口調でレイジの問いに答える。

だが、それは――

「――“自分”が欲しいのだよ、私は」

レイジにとって、いやこの世に生きる者にとって理解できない内容だった。

「え……………」

おもわず、呆けた表情を浮かべてしまう。

だってそうだろう、今の言葉の意味をどう理解しろというのか。

「私には自己というものが無いのだ、生きる意味も生まれてきた意味も、明確な感情も夢も理想も決意も道徳も背徳も……………何もない。だからこそ、私は確固たる自己が欲しい。

そして見てみたいのだ、自己を得た自分がどういったものなのかを」

「何、を……………」

「そのために私はこの組織を作り上げた、そしてこの世の全てを手に入れた時……………私はどうなるのか、それを知りたい」

「—————」

まるで唄うように自身の目的を話すロキに、レイジは完全に凍りついていた。

……………異常、などという言葉では決して足りない。

この男は、人間ではないと確信めいた感情が頭を占めた。

本気なのだ、彼は。

本気で、そんな事の為に他者を……………世界を犠牲にしようとしている。

自己が欲しい、曖昧で限りなく小さな願いのために……全てを壊そうと言っている事が、レイジにとってなによりも恐ろしい。

「尤も、当然ながら部下達が私の真の目的を知るはずもなく好き勝手やってはいるが……私には関係のない事だ。

私は私を変えてくれる者、私に何かを与えてくれる者さえ手に入れられればそれでいいのだからな」

「あなた、は……そんな事で、世界のバランスを崩そうと……」

「それこそ私にとってはどうでもいいのだ、己の願いを叶える為に他者を踏みにじり利用する。それが生きとし生ける者が拭えない業だ」

「違う、あなたはそうやって己の行いを正当化しているだけだ!!」

「それこそ間違いだぞレイジ、私は自分の行いを正しいと思った事など一度もない」

「えっ………」

「ただ罪悪感を抱かないだけだ、私達のやっている事は確かに悪だろう。

だが……人の決めた善悪に従う理由などない以上、私は私の信じた道を歩むだけだ」

「……………」

悪魔だ、と。

レイジは、ロキを見てそう呟いた。

もはやあの男は人に在らず、この世界を墮落させる悪魔だ。

間違った道、それを間違いだと思わないこの男に、もはや救いの手など残されてはいない。

「さて……そろそろ本題に入るとするか。お前をここに連れてきたのは、このような問答をするためでないからな」

「————っ」

身構える。

ポケモン達がいらない今ではそんなものなど無意味かもしれないが、こんな所で倒れるわけにはいかない。

しかし、ロキが次に放った言葉は、レイジにとって意外すぎるものだった。

「——レイジよ。私の部下になれ」

「————えっ」

何を、言っているのだろうかこの男は。

聞き間違いと最初は思ったが、どうやらそうではないらしくロキは言葉を続けた。「私はお前が欲しい、トレーナーとしての確かな実力、子供とは思えぬその考え方と行動力。

そして——他の何者も真似できぬその力。

お前が私の傍にいれば、必ず私に何かを与えてくれると思ったのだ」

「っ、ふざけるな。誰があなたのような人の部下になんか………！」

「――私は、お前を否定したりはしない」

「――――」

その、言葉、で。

レイジの思考が、再び凍りついた。

「私は周りの人間達とは違う、絶対にお前を否定したりはせん。それとも、お前はまた苦しみたいのか？ 自分が持つ力によって、再び蔑まれる道を選びたいのか？」

「―――、あ」

ロキの声が、レイジの傷に突き刺さり切開していく。

やめろ――

やめろ――

やめろ———！

思い出したくもない、振り返りたくもない過去が浮かび上がっている。

「部下にお前の事を調べさしたが……ずいぶんと辛い過去を過ごしていたそうだな。

故郷では周りの子供や大人に蔑まれ、化け物扱いされてきたそうではないか。

友人もおらず、心のより所は偽りの家族だけ……ひどいものだ」

「う、あ———」

膝が折れ、地面に倒れ込みそうになるのをどうにか堪える。

——そう、ロキの言っている事はすべて事実だ

ポケモンと話す能力、それを持っていた自分は、ずっと人間の友達など存在していない。

子供の話は大人にまで感染し、殆どの者がレイジを恐がり蔑んだ。

痛くて、辛くて、死んでしまいたいと思った事だってあった。

それでも彼が生きていたのは、自分を助けてくれたカグヤの両親に対する恩があったから。

そうじゃなければ、とうの昔に自分は自ら命を断っていただろう。

幼い頃から、自分の周りに人間はおらず、ポケモン達だけが傍にいてくれた。

——そんな傷など、思い出したくもないのに

ロキの言葉は魔法のように、治せない内側の傷を突き外に出そうとする。

「もはや、治す事などできない傷だな。だというのに何故お前は自分を抑え込む？ 何故他者の為に自己を殺す？

——願うのだ。自分は幸福で在りたいと、内なる自己を表にさらけ出してしまえ」

優しく、慈しむようなロキの言葉。

しかし、それは確かな毒を孕んだ偽りの優しさ。

それでも、あの痛みを思い出してしまったレイジには、抗えない。

「僕、は……」

「誰もお前を咎める資格などない、ならば自分の好きなように生きて何が悪いというのだ？

さあ、自分を解き放つのだレイジ。お前の望むままに世界に侵食しろ」

「……………」

ロキの言葉が、蜜のように甘く甘美なものとなって、正常な思考を溶かしていく。

——あの時抱いた、憎しみや怒りが

自分を化け物扱いした人間達に対する、どうしようもない悲しみが、レイジの身体を支配していく。

(……もう一押しか)

その様子を見ながら、ロキは込み上げてくる笑みを抑えるのに必死だ。

ここで彼という存在が自分のものとなれば、必ず自分は変わる。

彼は自分を変えてくれる存在だと信じているからこそ、喜びの笑みを抑えきれない。

しかし、それを邪魔するかのように部下から通信が入る。

「……………何だ」

少し苛立ちを含んだ声で部下からの報告を聞く。

『た、大変です！ ポ、ポケモン達が急に暴れ始めて……脱走してしまいました！！』

「……………サーナイトだな」

『えっ？』

「レイジが持っているサーナイトが、ポケモン達を逃がす手引きを

したのだな、と訊いているのだよ」

『は、はい……その通りです』

「……お前達はすぐにポケモン達を捕らえろ、それと……そのサーナイトには気をつけろ」

そう言い放ち、一方的に通信を切るロキ。

（やはりあのサーナイトは……因果なものだ。よもや再び我等の元に戻るとはな……）

しかし、こうなってしまった以上は、一刻も早くレイジを己のものにしくはなくては。

「うぁ………！」

髪を掴み、無理矢理レイジを立たせる。

「レイジよ、私と共に来い！！　そしてお前の望むままに生きるのだ！」

「……………」

抗えない。

この男の言葉には、抵抗できない。

一種の諦めに似た考えが、ロキの言葉に肯定しようと口を開かせ――

〈お父様!!〉

背後から聞き慣れた声が響き、レイジの言葉を遮った。

「……………」

「ほう……思っていた以上に早かったな」

言いながら、ロキは素早くレイジの首筋に大振りのナイフを這わせた。

〈貴様——!〉

「動くなよりオル、そして他の者達もだ。」

言っておくが、お前達が動く前にお前達の主人の息の根を止める事など造作もない」

〈——やってみなさい、その瞬間に……あなたを肉片に変えます〉

赤い瞳が光り、凄まじい殺気がティナから放たれる。

おもわず、ロキの右足が一步退がった。

（恐ろしいものだ……レイジと共に生きていたからこそ成功するとは……やはりこいつには他にも力が眠っているのかもしれない……）

しかし——目の前に対峙しているのは、レイジのポケモン達というのには違和感を感じる。

この潜水艇には数多くのポケモン達を捕らえているというのに……。

へ捕らわれたポケモン達は外に逃がしました、そして……残りの皆さんはカグヤ達の救出に向かったのですよへ

「なるほど、説明感謝する」

へそれはどうも。……それより、早くお父様を放してください。

もはやあなたに逃げ場はありませんよ、もうすぐ国際警察がここに来ますからへ

「何………?」

へ……お父様が何の抵抗もなしにおとなしく捕まったと思っているのですか?

わたくしとお父様はどんなに離れていてもテレパシーで会話する事ができるんですへおそらく、ティナが生まれた頃から共に居るの彼女限定ではあるがレイジにもテレパシー能力が身についたのだろう。

へそれを使い、お父様はわたくしに外と連絡するように指示を出しました。幸いにも牢に入れられていただけで能力を封じられたわけではありませんでしたから。

そしてわたくしはトキヤに連絡をして……後は説明するまでもないでしょう?へ

「……なる程、本当にたいしたものだ」
とても15の子供とは思えぬ機転の良さ。

……ますます、この男が欲しくなった。

「――レイジ、邪魔が入ったがもう一度訊こう。
自身を解き放つのだ、そして私の部下となり己が願いを果たせ！」

「――――」

「苦しいのだろう？ 辛いのだろう？ ならばこれ以上苦しまなければいい、お前の心のままに……お前の望むままに、全てを手に入れろ！！」

そう叫ぶロキに、レイジは頷こうとする気持ちが強まる。

――そうだ、僕はこれ以上苦しみたくない

いつだって強がっていたけど、そうする度に傷ついていたのを覚えている。

自分をわかってくれる者など、誰もいないとさえ思った事があった。

その傷は、ロキの言う通り一生消える事のない傷になった。

――なら、いいじゃないか

こんなに苦しんだのならば、こんなに悲しんだのなら何を望んでもいいじゃないか。

ずっと背けてきた、負の感情を受け入れたって、誰も自分を責める者などどこにも――

「……………」

ティナの泣く一歩手前のような辛そうな顔が、視界に広がる。

——関係ない

そんなもの、自分には関係ないのだ。

自分を蔑んだ者達、そんな存在を許すこの世界がどうなろうとも、それこそレイジにとって知った事ではない。

その気持ちは本物だ。

そう、本物だ。

本物、なのに……。——僕は、あなたの部下にはならない。

そして、この世界をあなたから守る事が……。今の僕が叶えたい願いだ」

気がついたら——ロキにはつきりとそう告げていた。

第47話 変化く頬を伝うティナの涙く

――僕は、あなたの部下にはならない。

そして……あなたが壊そうとしているこの世界を守る事が、僕の願いなんだ

く…………く

それが、ティナのマスターが出した、涙ながらの答えだった。

く…………く

くらりと、身体が崩れそうになるのを必死で抑える。

息をするのも苦しくなり、ゴチャゴチャする頭によってどうにか納めてしまいたいそうだ。

――ティナは、レイジの過去を知っている

当然だ、彼女が生まれてから片時も離れた事がない彼女は、カグヤですら知らないレイジの過去すら所有している。

だから頷くと思った、頷かなければ嘘だと思った。

それだけの痛みを、苦しみを彼は味わってきたのだ。

だというのに、彼はそれを否定した。

自分の事だけを考える生き方はできない、と。

守りたいと、はっきりと告げたのだ。

それが、ティナにとって信じられなかった。

あんな男の戯れ言に惑わされてほしいわけではない、だが……もし彼が望むのならば、どんな道を歩んでも許されると思った。

たとえば、人にとって悪と断罪されるような道だとしても……沢山苦しんできたのだから、それでも構わないと思えたのだ。

しかし——彼の答えは違った。

あの苦しい過去も、胸を穿つ激しい痛みも、すべて受け入れながら。

それでも——今まで歩んできた道を、進もうと決意した。

へどう、して……

気がつく、そんな言葉を口にしていた。

何故、あなたは尚も誰かの為にあらうとするのですか？

何故、楽になろうとしないのですか？

言えるものなら、大きな声で問いかけたかった。

今だって、彼の心を占めるのは、直視できない程の悲しみと苦しみ

が溢れている。

それなのに、どうして彼は……。

「……自己の救いを、求めないというのか？」

静かに、若干の驚愕を含みながら、ロキが問いかける。

「……僕は、自分だけの救いなら……いらない」

「何故だ？ お前はあれだけの過去をその身に宿しておきながら……まだ他者の為に自己を押し殺すのか……？」

「……だって、仕方がないじゃないか」

——そう願ったのが、他ならぬ自分自身なんだから

（お父様……）

小さな声で、レイジは言った。

自分で選んだ道だと、その道から逃げるわけにはいかないと、そう言ったのだ。

「僕は、誰かの為に生きているだなんて思った事はない……。
確かに、あなたの言う通り僕は自分でも辛いと思える過去を生き

てきた事がある……。

だけど、それを理由に全部自分の為だけに生きてしまったら……
今までの自分も、嘘になってしまおうから……」

今までの自分を、全て切り捨てる事など許されない。

そして――そうしてしまえば嘘になる。

助けたいと思ったこの気持ちも。

守りたいと思ったこの願いも。

心からの叫びが、ティナの頭に響き渡る。

∧……………∨

――ティナの頬に、涙が伝う

悲しいまでの決意。

苦しみも、胸を穿つその痛みすら彼は受け入れて前へ進もうとして
いる。

（どうして……お父様ばかり、こんな……）

15年、たった15年しか生きていない少年が背負うには、あまり
にも大きすぎる道だ。

「――僕は、自分を曲げる事はできない。
だから……僕は、あなたを認めない」

完全なる決別。

たとえば何があっても、あなたの考えは認めない。

涙を孕んだ瞳で、レイジはロキにはっきりと告げた。

〈――――ああ〉

そうなのだ、彼はこういう人だった。

〈――お父様、それがあなたの信じた道なのですネ〉

いつだって、自分の事より他人ばかり考える優しすぎる人。

それが――ティナの愛したレイジという男性なのだ。

〈なら、わたくしは――〉

そんなあなたに、最後までついていきます。

たとえこの先に、何が待っているようでも。

どんなに絶望的なものだったとしても、その全てから彼を守ろう。

それが自分の使命、成すべき事。

「―――そうか」

失望と、羨望を含んだ声を発しながら、殺気立っていくロキ。

「よもや、お前のような存在が私を否定するとは思わなかった」

「……………」

「できる事ならば、お前を私の手元に置いておきたかったが……お前が私を否定するならば、生かしておくわけにはいかんな」

ナイフを持つ手に力を込めるロキ。

〈お父様!!〉

——間に合わない!!

対応が遅れ、最悪の未来が脳裏によぎった瞬間。

——天井から爆発音が響き、海の水と共に飛び込んできた一つの影

「何……!!?」

「っ、は——!!」

突然の事態に一瞬隙ができたロキから、レイジはすぐさま抜け出す。

「——汚え手で、俺の親友に触れてんじゃねえよ変態野郎が」

「お前は……」

「——カイリ、ミカンさん」

「よかった……ご無事だったんですね、レイジさん」

安堵のため息を漏らすミカンと、レイジ達を守るようにロキと対峙するカイリとカノン。

「生きていたか……」

「俺の悪運と、ミカンの日頃の行いの良さでな」

「兄を……返してもらいます!!」

「……………」

カイリ達が侵入した際に開けた穴によって、どんどん海水が侵入してくる。

（長くは——）

（——保たない!!）

同時に状況を理解したレイジとロキは、同時に動く。

「ティナ、サイコキネシス!!」

「——」

レイジはロキを拘束しようとティナに指示を出し。

——瞬間、ロキの姿が霞のように消えてしまった

「なに——っ!？」

そんな馬鹿な、おもわずそう呟いてしまう。

ロキはポケモンを出していない、だというのにどうやってこの場から姿を消したのか……。

「レイジ!!」

「っ、く……」

用意周到と言うべきか、いつの間にか目の前にはラティオスとゾロアークが身構えていた。

（ラティオス達を犠牲にしてまで、僕達をこのまま始末するつもりなのか……!!）

あの男は悪魔だ、ならばこのような事を平然とやってのけてもおかしくはない。

「レイジ、ここは俺達に任せろ。お前はヒメカ達を助けてロキを追ってくれ!!」

「カイリ……!？ だけどこのままじゃ艦が沈むよ!!」

少なくとも、あと10分以内に潜水艦は海底の奥底に沈むだろう、

ならばこんな所でラティオス達とバトルをしている場合は……。

「わりいな、こいつだけは……ラティオスだけは、カノンがどうしても止めたいみたいなんだ。」

俺はこいつのマスターだから、最後まで付き合わねえと」

「けど………」

「大丈夫だ。俺達を信じてお前はお前のすべき事をしろ！！
ルギアを救えるのは、お前しかないんだ！！」

「カイリ………」

「レイジさん、私もカイリさんについていますから、お願いします
！」

「……………」

2人の瞳は、もはや説得できないほどの力強さが宿っている。

「——信じてる」

ならば、レイジにはそれしか言えない。

「ありがとな。——俺もお前を信じてる。

お前なら、きっとルギアを助け出せるさ」

「……ありがとうカイリ、ミカンさん。後はお願い！！」

出口に向かって走るレイジ。

それを止めようと、ラティオス達が攻撃を仕掛けようとして。

「ドラゴンダイブ!!」

「ハガネール、アイアンテール!!」

カノンがラティオスを、ハガネールがゾロアークをそれぞれ止めた。

「お前等の相手は俺達だ、かかってきやがれ!!」

「……兄さん。必ず元に戻してあげるから!!」

（カイリ、ミカンさん……無理はしないで!!）

口には出さず、そう願いながら、レイジは部屋を出る。

——潜水艦の内部には人はおろかポケモンすら存在せず、既に脱出している事がわかった

「ティナ、みんなが捕らえられている場所は？」

「こちらです!!」

ティナを先頭に、カグヤ達の元へと急ぐレイジ。

〈父上、これを〉

アクセルから渡されたのは、レイジのモンスターボール。

「みんな、一旦戻っててくれ」

受け取り、すぐさまティナ以外のポケモン達をボールに戻す。
と。

「レイジ!!」

「っ、カグヤ。みんな!!」

既に脱出を済ましていたカグヤ達が、こちらへと走って……。

「レイジ!!」

「おわっ!!」

走ってきたと思っていたら、いきなりカグヤがレイジの胸に飛び込んできた。

どうにか反応し、カグヤを受け止める。

「よかった……無事でよかったよお」

「カグヤ……」

すすり泣く声が聞こえ、レイジは優しく彼女の頭を撫でてあげた。

（……カグヤ、なかなかやるわね）その光景を見て、僅かにシロナの表情に影が落ちるが。

「みんな、ルギアは？」

すぐさま状況を思い出し、カグヤを引き離す。

「わからないわ。ルギアとわたし達は別の部屋に隔離されていたから……」

「というか、なんで床が水浸しなの？」

「……もうすぐこの艦は沈む、だからすぐに外に行くんだ」

「わかったわ。……ところで、カイリとミカンは？」

「あの2人は無事だよ、でも……今はラティオス達と戦ってる」

「えっ!!!? でもこの艦はもうすぐ……」

「カノンがどうしてもラティオスを元に戻したいから……カイリ達はそれに付き合ってる」

「そんな……!　じゃあすぐに助けに――」

「僕達はルギアを救わないと、カイリ達なら絶対に大丈夫だよ」

あの瞳、そして「信じてほしい」と言ったカイリの言葉を無碍にするわけにはいかない。

「――レイジ、カイリ達はどこで戦ってるの？」

「ヒメカ……」

「わたしだってカイリが心配なの、それに……あの人の傍にいたい。支えたいのよ、カイリを……」

「……………」

一瞬迷い、しかしすぐさまレイジは自分が走ってきた方向を指さす。

「道なりに行けば辿り着くよ、でもどんどん水が入ってきてるから、気をつけて」

「……ごめんなさい、我が儘言っ」

「気にしないで。それとラティオスはカノンが止めたいみたいだから、手は出さないで」

こんな時に、そんな事を言っている場合ではない事はわかっている。

しかし、カイリとカノンの決意を見てしまった以上、レイジとしてはそれしか言えない。

「わかったわ」

「ヒメカ、水かさが増してるならカメックスを持っていって。泳ぎながら指示を出すのは辛いだろうから」

「ありがとう、カグヤ」

「ううん。——気をつけてね」

「ええ!!」

力強く頷き、カイリ達の元へと走るヒメカ。

「僕達も急ごう!!」

「でも、ルギアはどこに行ったのかな？」

「この潜水艦の中にいないとなると……おそらく脱出用の乗り物で連れて行ったのよね」

（脱出用……だとすると小型の潜水艇）

だが、それだけでルギアを遠くまで運ぶ事は難しいだろう。

（……なら、脱出してから別の乗り物に）

その可能性は高い。

「ティナ、ここから近くの島か何かにテレポートできる？」

「……はい。ですがこの人数ですとわたくしでは一回が限度です」

「それで構わない、どこでもいいからとにかく外に行こう」

「わかりました。それではわたくしに掴まっていってください」

言われた通り、ティナの手や肩に掴まるレイジ達。

「――行きます!!」

その声と共に、身体が浮き上がるような感覚に襲われ。

一瞬で、木々に囲まれた森の中に立っていた。

「ありがとうございます、少し休んでくれ」

へい、いえ……わたくしは外に出しておいてくださいお父様。
万が一の為にも、お願いします」

「わかった。——リオン出てきてくれ!!」

上空にボールを投げ、リオンを外に出す。

すぐさま脚に掴まり、上空へ飛ぶように指示を出す。

(見つかるはずだ……必ずどこかで……!!)

ルギアほどの巨大な生物を運ぶには、脱出用の乗り物では到底不可能だ。

ならば、脱出した後あらかじめ新たな乗り物に乗り換えれば……。

ロキほどの男だ、万が一に備えてそのような準備をしても不思議ではない。

——そして、レイジの予想は見事的中する

現在彼等がいる島からさほど離れていない無人島。

そこに、あの潜水艦と同タイプの艦が海辺に浮かんでいた。

「シロナさん、カグヤ、お願い!!」

「ガブリアス!!」

「クチート!!」

ほぼ同時にポケモン達を出す2人。

ガブリアスの背中に乗ったクチートは、リオンと同じく上空へ。

そして――

「フルパワーのりゅうせいぐんよ!!」

「ラスターカノン!!」

「リオン、ブラストバーンだ!!」

全パワーの込めた三体の攻撃が、潜水艦へと向かっていき――見事命中し、爆音が鳴り響いた。

「ガブリアス、戻ってきなさい」

地上に降りるガブリアス、すぐさまその背中に乗るシロナとカグヤ。

「クチート、ありがとう」

労いの言葉を掛けながら、クチートの頭を撫でるカグヤ。

すると、クチートは嬉しそうに鳴きながら――頭を撫でてくれてい

るカグヤの手に噛みついた。

「いたたたっ!!!」

「……カグヤ、クチートに懷かれてるのね」

（変わった懷かれ方だよな……）

「うう……クチート、私の事好きでいてくれるのは嬉しいけど……その噛みつき癖は直してよ」

「クウ!!」

「嫌、だってさ」

「うう……」

そうこうしている内に、潜水艦が止めてあつた島へと辿り着き、リオン達から降りる3人。

「――もう逃げられないわよ、覚悟しなさい」

ロキと十数人の団員達の後ろで燃え上がる潜水艦を見つつ、シロナは告げる。

先程の攻撃により、もはやあの潜水艦は航行不能に陥っただろう。

それに国際警察もいずれやってくる、もはやロキ達に逃げ場などは存在しない。

「――レイジ、お前がこの潜水艦を破壊する指示を出したのか？」

「そうだ。それが一体どうしたというんですか？」

レイジの答えを聞くと、何故かロキは口元に笑みを浮かべる。

「……やはり惜しいな、お前程の逸材はそうはいまい。

やはり――私の手元に置いておくか」

ぞくりと、全身が総毛立つ。

このような状況だというのに、まだロキからは余裕が消えない。

（まだ、何か企んでいるのか……？）

だとするなら、用心するに越した事はない。

しかし……どうもそうには見えなかった。

「お前達は後ろの小娘共の相手をしている。

――この少年は、私が直々に相手をする」

部下にそう言いながら、デッドボールを2つ場に投げるロキ。

出てきたのは、あの時リオンを完膚なきまでに倒したヒードランと。

「――エルレイド」

やいばポケモンと呼ばれる、エルレイドだった。

〈お父様、エルレイドの相手はわたくしが〉

「でも……」

ティナは拘束されていたポケモン達を逃がす手引きや、先程のテレポートによって力を消耗してしまっている。

そんな状態では、満足に戦えるとは……。

〈大丈夫です。わたくしを信じてください。〉

——お父様が自らの道を違えなかったように、わたくしも自らが信じた道を歩みたいのです〉

「ティナ……」

……こうまで言われては、ティナに任せる以外他はない。

（………ヒードラン）

あの炎は強大だ、おそらくラティオス達と同程度の实力はある。

だが——レイジは初めからヒードランと再び戦う時は、このポケモンを出すと決めていた。

「——リオン、お願い！」

（何………？）

僅かに眉を潜めるロキ。

前回、リザードンの炎はヒードランには通用しなかった事を忘れたわけではないはずだ。

だというのに、何故リザードンを出したのか……。

「――リオン、リベンジしたいよね？」

「――ああ。だが……俺じゃあいつには。」

「僕は信じてるよ。君がヒードランに勝つ事を」

「――レイジ。」

「自分を信じて、君なら絶対に勝てる。」

だって、君は僕の大切な仲間なんだから」

伝えるべき言葉はそれだけ。

しかし、リオンにとってはそれで充分だった。

「――ああ、任せろ！！」

力強く頷き、ヒードランと対峙するリオン。

……完膚なきまでに敗北した記憶が蘇り、少しだけ戦意を喪失する。

しかし、ここで退くわけにはいかない。

自分を信じてくれたレイジの為にも、そして彼の望みを叶える為にも。

そして――「ヒードラン、かえんほうしゃ。

エルレイド、リーフブレードだ」

「リオン、かえんほうしゃ！！

ティナ、れいとうパンチだ！！」

ヒードランとリオンが、そしてエルレイドとティナの技が激しくぶつかり合い。

――ルギアを賭けた死闘が、幕を開いた

第48話 幻影の舞くスターダスト・ミラージュ

「カノン、ドラゴンクロード!!」

刻一刻と水没していく艦内で、死闘は続いていた。

カノンとラティオスのドラゴンクロードが激しくぶつかり合い――両者共に大きく吹き飛ばされる。

（くそっ、時間が足りねえ………!!）

既に、水かさはカイリ達の身体を大きく越えており、カイリはフロ―ゼルに、ミカンはエンペルトに、そしてヒメカはカグヤから預かったカメックスに乗りながら指示を出していた。

このままでは保って五分で、部屋が海水で満たされてしまうだろう。

それがわかっているからこそ、カイリもカノンも先程から全力で戦っている。

出し惜しみや後の事など考えず、フルパワーで対峙しているカノンと。

時視の力を使い、最良の未来を導くカイリ。

だが――それでもラティオスとは互角だった。

元々カノンとラティオスの力は互角ないしラティオスの方が上だ。

更にデッド化によって大きくパワーを上げているラティオスに、互角の戦いを繰り広げているだけでも、驚異的と言えるかもしれない。しかし、このままでは勝ち負けなど関係なく自分達は死ぬ。

人間は水中では呼吸などできない、カノン達ならば可能かもしれないが……戦う事はできなくなる。

それに、早くラティオスを止めなくては——彼の身体が崩壊する。

デッド化によって秒単位でラティオスの身体は文字通り削られていく、異常なパワーを得る代償としてはあまりにも大きい。

——ラティオスから放たれるりゅうのはどう

「はかいこうせん!!」

反応し、辛うじてラティオスの攻撃を相殺するカノンだが……。

その時には既に、カノンの眼前にはラティオスが迫っており。

「ぐっ……!!?」

カノンの身体に、ラティオスのしねんのずつきがまともに命中し鋼鉄製の壁に叩きつけられる。

「カノン!!」

追い討ちを掛けるかのように放たれる、ラティオス専用技——ラストページ。

しかし、壁に叩きつけられたカノンが避けられるわけもなく、まともな攻撃を受けてしまった。

「う、くっ……」

傷だらけになりながらも、その瞳にはまだ戦意の色が残っている。

——自分の手で必ず兄を止める

あの時、自分の甘さによってマスターであるカイリやレイジ達の身を危険に晒してしまった。

その事実、カノンに大きな傷を残す。

だから、今度はその甘さを捨てなくては。

敬愛するカイリの為に、そして……昔の優しいラティオスに戻すためにも。

「絶対に……負けないんだからあっ……！」

こんな所で、諦める事などできない——！！

「ミストボール……！」

繰り出されるミストボール。

それを避け、反撃のりゅうのいぶきを放とうとするラティオスだが。

「ギガインパクト!!」

カノンの大技であるギガインパクトが放たれ、油断していたのかまともに攻撃を受けるラティオス。

——チャンスは今しかない

「れいとうビーム!!」

吹き飛ばされたラティオス目掛けて放たれたれいとうビームが、彼の身体を凍り付かせていく。

これでラティオスは動けない、たとえ数秒だとしてもそれで充分だ。

「はがねのつばさ!!」

最高速度で接近するのはがねのつばさ。

——だが、まだカノン達の攻撃は終わらない

「ドラゴンクロー!!」

続いてドラゴンクローが、凍り付いたラティオスの身体を再び吹き飛ばす。

再び攻撃を仕掛けようと旋回するカノンだが、それをマスターであるカイリが止める。

「カノン、その場で止まって右によけろ!!」

「————っ」

何故、という疑問が頭に浮かんだが、それより先に身体が動く。

刹那、先程までカノンが居た場所にラティオスのラスターパージが通り過ぎる。

「りゅうのはどう!!」

すかさず指示を出し、不意をついた一撃がラティオスに命中する。

(時視の力を……)

あの時、カイリは冷静に時視の力でラティオスの反撃を読み、カノンに指示を出したのだ。

攻撃を仕掛けた瞬間に反撃を受けたからか、はじめてラティオスから苦しい声が聞こえた。

(この一撃で、終わりにしてやる……!!)

最後の攻撃を仕掛けるため、カイリはカノンへと指示を出しそして。

「カノン、フルパワーでりゅうせいぐんだ!!」

カノンから放たれた、都合二十近いりゅうせいぐんが、一斉にラティオスへと向かっていく。

これまでの連続攻撃により、ダメージを負ったラティオスはりゅうせいぐんの攻撃をまともに受け、海水の中へと落ちていった——

「はあ…はあ…はあ…」

「や、やったな……カノン」

力の反動による頭痛に耐えながら、カノンに労いの言葉を投げかけるカイリ。

カノンも、肩で大きく息をしながらもカイリに笑みを返す。

（……後は、モンスターボールでラティオスをゲットすれば……）

それで、デッドボールの呪縛から逃れる事ができるはずだ。

しかしラティオスはカノンの攻撃によりダメージを負っている、早くゲットしてどこかで休ませてあげなくては。

そう思い、カイリはフローゼルに海中に沈んだラティオスの元へと向かうよう指示を出し。

——凄まじい衝撃が、カノンに襲いかかった光景を視界に捉えてしまった

「カ、カノン……?」

「う、あ……!?!?　そ、そんな……」

そんな馬鹿な、驚愕に満ちた表情を浮かべながらカノンは。

——何事もなかったかのように、自分へと攻撃を仕掛けてきたラティオスに視線を向けた

「じ、冗談じゃねえ……あ、あれだけの攻撃を受けて何で平然としていられるんだよ………！」

紙一重で避けられていたわけじゃない、ちゃんとこの目でカノンの攻撃が命中したのが見えた。

それなのに、ラティオスにはダメージらしいダメージが——

「——じこさいせい」

「——」

ぽつりと呟かれたカノンの言葉で、カイリの思考は凍りつく。

(ラティオスは、じこさいせいまで……)

「くっ、あ……」

「カノン、お前もじこさいせいで回復を——」

「——できません」

「えっ……」

「私は、じこさいせいは使えないんです……」

「――――」

絶望的な状況。

あれだけのダメージをすべて回復させたラティオスと、殆どの力を使い果たしたカノン。

勝敗は、既に目に見えている。

（―――いや、違う）

まだ勝敗は決まっていない、決めてはならない。

カノンは何が何でも自分が兄を止めると決意したのだ、ならばマスターである自分が最後の最後まで諦める事などできるわけがなかった。

――信じてると、レイジは言った

自分達なら必ずラティオスを助けられると、信じてくれた。

なら――どうして諦める事ができようか。

（まだ、手はある！！）

頭痛で痛む頭も、ラティオスに対する恐怖心も知らない。

今はただ……。

「カノン、早くこっちに来るんだ!!」

ただ、自分にできる事をするだけだ――!!

「は、はい!!」

ラティオスの攻撃を紙一重で避け、すぐさまカイリの元へ戻るカノン。

それと同時に、カイリの手がカノンの身体に触れる。

「えっ……?」

「――時よ。我が命に従え!!」

力ある言葉。

未来を視る『時視の力』とは違う、カイリが新たに目覚めた能力。

――『時戻しの力』が、カノンの身体を包み込んだ

カノンの周りの『時』が戻り――彼女の傷は跡形もなく消えてしまう。

「へ、へへ……数十分程度の時間しか戻せない欠点があるけど、こういう使い方、なら……」

「マスター!??」

「わ、わりい……この力って時視より体力を食うんだよ……だから、なるべく使うわけにはいなくてな。

だけど——今のお前を助けるには、これしかねえからな……」

「マスター……」

「——カノン、最後まで諦めるなよ。

俺は絶対に諦めねえぞ、お前もお前の兄貴も必ず助ける。

——その為に、俺はここにいるんだからよ」

「……………」

息をするのも苦しうだというのに、カイリの瞳には確かな決意の光が強く宿っている。

命を懸けて、彼は自分達を救おうとしてくれているのだ。

（……………なのに、私は）

——自分が恥ずかしくなった

けれど、そんな自分にもまだやれる事がある。

カノンは、ゆっくりとラティオスへと向き直り、口を開く。

「——兄さん、私はいつだって弱かったよね。

兄さんと2人で暮らしていた時も、いつも私は兄さんに助けてもらってばかりだった……。

今だって、決意したくせに心のどこかで兄さんと戦いたくない自分が、こうやって甘さを招いてしまった」

カイリと共に行動するようになって、自分の甘さだけは変わらなかった。

戦いたくない、できる事なら話し合いで。

そんな気持ちばかりが先行して、守りたいと思った人達も守れなかった。

今だってそうだ、この状況に自分は諦めかけていた。

でも——カイリは諦めていなかった。

本来ならば彼にとって関係ない、一方的に巻き込んでしまったというのに、我が事のように一生懸命になってくれる。

そんな彼を、自分は身勝手な理由で裏切ろうとしたのだ。

「——だから、もう逃げないよ兄さん。

私の力は、今この瞬間に使われる為に存在してるんだ。

——必ず、あなたを止めてみせる！！！」

溢れる決意

今度こそ、兄を、カイリを、そして自分を裏切らない為に。

——カノンは、ずっと目を背けてきた力に、初めて自らの意思で向き直った

「はああああ………！」

（なっ……何だよ、あのとんでもないパワーは……！？）

視覚でも確認できるほどの強大な力。

それが、カノンの身体から伝わってくる。

「……………」

それを目の当たりにしたせいかな、初めてラティオスから戸惑いの感情を感じ取れた。

——無闇に攻めれば、こちらがやられる

感情などないデッドポケモンと化したラティオスが、カノンを見て攻め倦ねているのだ。

「カ、カノン………」

「……マスター、あなたが私を信じてくれたように……私も、私自身を信じてみます」

「……………」

背を向けたまま、そう告げるカノン。

だがその背中、ただ一言「信じてほしい」と語っていた。

それを感じ取り、カイリの口元には笑みが浮かぶ。

「――よっしゃ、それじゃあお前の兄貴を黙らしちまえ」

「はい。キツイお灸を据えてやります!!」

冗談めかした声でそう叫び――カノンは勝負に出る。

溢れるパワーを自身に寄せ、小細工なしでラティオスへと突っ込んでいくカノン。

（ギガインパクト……？けど、それだけじゃラティオスには……）

通用しない、それはカノンとてわかっているはずだ。

だというのに、カノンが繰り出したのは単なるギガインパクト。

確かに大技ではあるものの、それだけではラティオスには通じないとわかっているのに何故――

「っ、くう………!!」

ラティオスもギガインパクトを繰り出し、激しくぶつかり合う両者。

だが――やはり押し負けたのはカノンであり、苦悶の声を上げながら吹き飛ばされる。

「カノ――っ!!?」

彼女の名を呼ぼうとしたカイリだったが。

驚愕が、それを途中で止めてしまった。

（――笑ってる？）

確かにカイリは見た。

吹き飛ばされながらも、カノンが確かに笑みを浮かべていたのを。

まるで、自分の勝利を確信したかのように……。

――そして、カイリの予想は現実のものとなる

「なっ――」

驚愕は、カイリの口から放たれる。

――アレは何だ？

まず初めに浮かんだのは疑問。

ラティオスの囲むように、光り輝くカノンが彼へと向かっていつて
いる。

それも――三体もだ。

もちろんそれはカノン自身ではない、あれは彼女の姿をした高エネ
ルギー体であり。

先程、カイリが感じ取ったカノンの凄まじいパワーの一部。

「――」

息が詰まる。

カノンは、確かにギガインパクトを放った。

しかし、彼女は同時に4発ものギガインパクトを一度に放ったのだ。

まず自身の攻撃、その後に高エネルギー体による波状攻撃。

一撃だけでも強大なギガインパクトを、同時に4発などもはや夢を見ているとしか思えなかった。

――ラティオスは避けない

ギガインパクトの反動により、向かってくる攻撃を回避する事など到底できずに……。

凄まじい爆音と共に、カノンの攻撃がラティオスを沈めた。

（今だ――！）

腰にある空のモンスターボールを手取る。

そして、煙の中から気絶したラティオスが落ちていく姿を視界に捉え、モンスターボールを投げつけた。

それは見事命中し、ラティオスがボールの中へと入った瞬間に、見事キャッチに成功する。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

薄れていく意識。

強すぎる力を一度に解き放った反動により、カノンの意識は殆ど薄れていっていく。

しかし、その表情はとても穏やかで安らいだものになっていた。

（よかつ、た……）

ぐらりと身体が揺れ、カノンは水中へと落ちていく。

自分の名を呼ぶカイリの声を聞きながら、カノンは今度こそ意識を闇へと堕としていった……。【ヒメカ・ミカnside】

——カイリ達が死闘を繰り広げている間

ヒメカとミカンも、ゾロアーク相手に死闘を演じていた。

「ハク、ストーンエッジ!!」

「ドータクン、ジャイロボール!!」

同時に放たれる攻撃。

しかしその瞬間、ゾロアークの姿が風切り音と共に消え——ハク達にダメージを与えていく。

（速すぎる——！！）

先程からヒメカのハクの攻撃も、ミカンのドータクンの攻撃も、ゾロアークには掠りもしていなかった。

ハク達が遅いわけではない、ゾロアークの動きが速すぎて攻撃が当たらないのだ。

おまけに向こうの攻撃も見切れず、先程から一方的な戦いを強いられていた。

幸いにも威力はそれほどではないものの……このままではハク達は保たない。

そして、ハクとドータクンが敗ればヒメカ達に戦う力を殆ど失ってしまう。

——現在、戦いの場は水中のフィールドのように水しか存在しない足場がない以上、ヒメカが戦えるのは空を飛べるハクしかおらず、ミカンもドータクンとジバコイル、そしてエンペルトだけだ。

しかしエンペルトはミカンを守る事に集中しなければならないし、こんな海水に浸かっている状態で、でんきタイプであるジバコイルを戦わせる事などできない。

ゾロアークはその凄まじい脚力を利用し、壁から壁へと移動しながら戦っているが……ヒメカ達のポケモンにそんな芸当など望めなかった。

故に、この戦いではハクとドータクンに全てを懸けるしかないのだ。

だが——このままではハク達もゾロアークに敗れ去る。

どうにかしてこの事態を変えなくてはならない、ヒメカとしてそれはわかってはいるのだ。

わかってはいるが——それを打開する手立てが見つからない。

（諦めたらダメよ!!　このまま諦めたら全部台無しになる!!）

考えろ……考えるのだ。

水中の為足場はない、かといって壁から壁に移動しながら戦うなどという規格外な戦法は不可能。

無闇に攻撃を仕掛けても避けられ、反撃されるだけ。

「くっ、足場さえあればまだ上手く戦えるのに……!!」

悔しそうなミカンの声がヒメカの耳に届く。

——それは彼女として同じ気持ちだ

足場があれば、まだゾロアークの動きを封じる手立てが——

(……………足場が、あれば?)

……………。

そうだ、足場があればゾロアークを打倒できるのだ。

しかし足場はない、ならば――

(足場を――“作ってしまえばいい”!!)

腰に装着しているモンスターボールを2つ取り出し、投げると同時にヒメカは指示を出す。

「フィー、自分の足元に」リフレクターを展開しなさい!!」

「えっ……!?!」

ヒメカの指示に、ミカンはおもわずそちらへと視線を向ける。

中から出てきたのは、フィーと――ヒノ。

フィーはすぐさま指示通り、自分の足元にリフレクターを展開する。

すると――フィーの身体が空中で静止した。

(違う……リフレクターの上に乗っているんだ……!!)

そう、防御技であるリフレクターを足場代わりにして、ファイーは何もない所に足場を作り出してしまったのだ。

その上にヒノも着地し、それと同時にヒメカは似体に指示を出す。

「ファイー、シャドーボール！！ ヒノはかえんほうしゃよ！！」

リフレクターの足場に乗りながら、ゾロアークに攻撃を仕掛けるファイー達。

しかし、その変則的な攻撃すらゾロアークは回避してしまう。

だが――そんな事は想定内だ。

「ドータクン、サイコキネシス！！」

回避したとはいえ、まともにバランスを崩し隙を見せたゾロアークに、ドータクンのサイコキネシスが命中し動きを止めた。

「ファイー、もう一度リフレクターよ！！」

指示を出しつつ、再び腰のモンスターボールに手を伸ばし投げつける。

「カイン、リーフブレード！！」

カイン――ジュプトルが場に出た瞬間、ファイーが展開したリフレクターがゾロアークへと向かって道を作っていく。

それを跳び進み、ゾロアークと間合いを詰めていくカイン。

そして、リーフブレードが見事ゾロアークを捉える。

命中すると同時に、素早くカインとヒノをボールに戻し、別のボールを取り投げつけるヒメカ。

「ロール、トドメのスカイアッパー!!!」

そして――

全ての力を込めたロールのスカイアッパーが叩き込まれ、ゾロアークは壁に叩きつけられた。

「今だ!!」

それを見届けた後、カイリは空のモンスターボールを投げゾロアークをボールの中へと入れる。

多少の抵抗はあったものの……すぐさまボールはおとなしくなり。

それが、この死闘の幕が降りた事を告げる合図となった。

「…………ふう」

おもわず安堵のため息をついてしまうカイリ。

「カイリ!!」

「早く脱出しましょう!」

「そうだな、頼むぜフローゼル!!」

ゾロアークの入ったボールを腰に取り付け、フローゼルの身体に抱きつくカイリ。

ヒメカとミカンも、それぞれカメックスとエンペルトの身体に抱まり息を止めた。

……………。

「……………ぷはっ!!」

間一髪、沈みゆく潜水艦から脱出したカイリ達は、近くの小島へと辿り着く。

「はぁ……………今回ばかりはマジで死ぬかと思ったぜ」

「まったく……………上手く行ったからよかったものの、どうしてあなたはいつもこうやって無茶な事をするのかしら？」

「うっ……………」

ヒメカにジト目で睨まれ、小さくなるカイリ。

「ま、まあまあ……………全員無事だったんですからいいじゃないですか」

苦笑しながらもミカンが間に割って入り、緩衝材の役割を果たそうとするのだが……。

「……ミカン、あなた随分カイリと親しくなったわね？」

今この瞬間も、ミカンはさりげなくカイリの手を握っていたりする。

「えっ、あ、そ、それはその……」

途端に恥ずかしそうに俯くミカン、その仕草は同性であるヒメカですら可愛いと思えるような女の子らしい仕草だった。

しかし、ちゃっかり彼の手は握ったままなので、ヒメカのこめかみに青筋が浮かぶ。

「——カイリ、わたしと離れ離れになってた間、一体何があったのか教えてもらいましょうか？」

「……ヒメカ、なんでそんなに怒ってんだ？」

「怒ってなんかいないわよ、いないから……さっさと言いなさい」

まるで獲物を狩るような目つきで、カイリを問いただすヒメカ。

（うっ……）

そんな彼女に、カイリなんかが太刀打ちできるわけもなく……。

この後、無人島で起きた事を説明した所。

――その事實にブチ切れたヒメカが、
暴れまわったのはまた別の話
である

第49話 激突する両者、譲れないものの為に

〈ぐっ………！〉

〈ヌツ………！〉

ティナとエルレイド、両者の死闘は続く。

「リーフブレード」

「れいとうパンチだ！」

〈セイ———！〉

〈ハア———！〉

互いの技は互角、威力もスピードも現時点ではまったくの互角だった。

〈お父様、わたくしよりリオンを！！

あちらはお父様の指示がなければきっと勝てません！！〉

「っ、でも………！」

〈わたくしなら心配しないでください、何年お父様と共に戦ってきたと思っていますのですか？

——この程度ならば、わたくしだけで充分ですよ〉

「大きく出たなサーナイト。——エルレイド、私の指示無しで戦え」

〈――御意に〉

短く返し、ティナとの間合いを詰めるエルレイド。

〈お父様、わたくしを信じてください!!〉

言いながら走り、エルレイドのリーフブレードをかみなりパンチで受け止めるティナ。

「――わかった。無茶だけはしないでくれ!!」

〈お父様の方こそ、無茶はなさらないでくださいね。

――さて、あなたにわたくしの相手が務まりますか?〉

〈……よく喋る獲物だ、さっさと消えろ〉

〈あいにくと、あなたなんかに負けるわけにはいきません!!〉

間合いを広げ、ふぶきを繰り出すティナ。

しかしエルレイドはそれを避け、すぐさまティナとの間合いを詰める。

〈と、やはり接近戦では不利ですか……!!〉

距離をとって戦わなければ自分に勝ち目はない、どうにか相手との間合いを広げなくては。

〈――解せんな〉

ぽつりと、エルレイドは呟く。

「貴様、何故あのような小僧を父と慕う？ 貴様達は主従関係ではないというのか？」

「当たり前です。お父様はわたくしにとって世界で一番大切に敬愛しているお方。」

「そしてお父様も、わたくしを本当の娘のように可愛がってくれているんです」

「まあ、最近はその扱いに不満がありますが……口には出さずに不満を漏らすティナ。」

「くだらん。そんな反吐が出るような関係で、俺に勝てると思っているのか？」

「……今、何と仰いましたか？」

「反吐が出る、と言ったのだ。そのような関係で俺とロキ様に勝とうなど愚の骨頂。笑うどころか呆れてくるわ」

「……………」

「ぽつりと、ティナの中で何かが切れた。」

「あなた……今お父様を馬鹿にしましたね？」

「事実を述べただけだ」

「……そうですか、少しは慈悲の気持ちを持って手加減してあげようかと思いましたが、お父様を馬鹿にされて黙っていられる程、わたくしは人間が……いえ、ポケモンができてませんから!!」

たとえば相手が神であろうとも、レイジを侮辱するものは許さない。

先程よりも大きな殺気を込めるティナだが、当のエルレイドは平然としていた。

「許さないのは勝手だが……お前に俺が倒せるのか?」

「その台詞、そっくりそのままお返しして差し上げましょうか?」

「強がりはやせ。お前自身がよくわかっているのではないか?」

「——今のままでは、俺には勝てないと」

「……………」

ティナの表情が固まる。

それを見たエルレイドは、口元に笑みを浮かべて言葉を続けた。

「たしかにお前は強い、おそらくあのリザードンよりも実力は上なのだろうさ。」

しかし、強いからこそお前は俺の力を冷静に理解し……勝てないという答えに辿り着いた。違うか?」

「……………」

エルレイドの問いには答えず、かといって否定もしないティナ。

——そう、今の自分では目の前の存在には適わない

ティナはレイジの手持ちの中で一番冷静であり、確実に相手の実力を読み取って勝機を掴もうと動く。

マスターであるレイジと共にそう戦ってきたから、バトルスタイルも彼によく似たものになっているのだ。

そして今回も、自身の戦闘経験や相手の能力を正確に分析した結果——適わないという答えに辿り着いてしまった。

へわかっただろう？ それとも敗北前提で俺と戦うのか？

無駄だ。間合いを広げれば貴様にも勝機はあるかもしれん。

しかし、そんなくだらん考えは持たん方がいいぞ。俺が絶対に許さんからな

そうだ、間合いを離そうとすれば闇雲に相手へ隙を見せるだけ。

それならば、まだ近距離で戦っていた方がいくらかはマシだ。

へ降伏しろ。ロキ様は寛大な御方だ、それにどういうわけか貴様の主人を気に入っている。

おとなしくしていれば、悪いようにはしない

最後通告とばかりに、エルレイドはティナにそう告げる。

……しかし、そんな言葉に彼女が頷くはずがなかった。

へ冗談も休み休み言ってくださいませんか？ わたくしがそんなく

だらない戯れ言に付き合うとでも？

〈……………〉

へわたくしはお父様の望む道を叶えるために存在しているのです。
お父様はロキを否定した、故にわたくしは絶対に降伏など致しません

〈……死んでも、か？〉

〈お父様が望まない限りは〉

はつきりと拒絶し、構え直すティナ。

へ——そうか。ならばその言葉に後悔しながら死んでいけ

絶殺の意志を込め、今度こそティナを始末しようとエルレイドは剣状の腕を彼女に向けた。

だが、彼女の口元には確かな笑みが。

諦めたか、そう考えるエルレイドだったが。

へ——あまり、わたくしを甘く見ない方がよろしいですよ？

そう言いながら、ティナは両手を天に掲げた。

（何を……………）

へわたくしの奥の手、見せて差し上げます

瞬間、ティナの両手から視覚できる程の力の渦を感じ取れた。

へっ、これは……!？　へお父様と考えた、わたくしの必殺技というものです。

本来ならばお父様の許可が必要ですが……状況が状況ですからね　お許しくださいと、リオンと共にロキと戦っているレイジへ静かに告げるティナ。

――力の渦はだんだんと形を帯びていき、光の粒子となってある形状に確立されていく

その形は、エルレイドにとっても馴染みのある。

へ剣、だと……?　へ

そう、それは光り輝く両刃の剣。

少し細身の、レイピアに近い形状の剣が、ティナの両手に握られていた。

へサイコセイバー、とても名付けましょうか。

サーナイト、という名前のわたくしにはやはり剣が似合いますね　へ

へ――貴様、一体何者だ?　へ

へ何者と申されましたも……ただのサーナイトです　へ

へ戯れ言を。ただのサーナイトがそのような力を持つものか　へ

へさあ、それはあなたの考え方であって絶対とは言い切れないのはありませんか？

それに、たとえわたくしが何者であったとしても関係ありません。わたくしの名前はティナ、愛すべきお父様が付けてくださったこの名前がある限り、わたくしはそれ以上でもそれ以下でもありません。〈

それで充分だ。

確かに、自分は通常のサーナイトとはどこか違うのだろう、それはティナ自身もはっきりと自覚している。

しかし、そんな事はどうでもいいのだ。

たとえば自分がどういった存在であろうとも、レイジが自分を必要としてくれる限りは……彼を守る力になる。

ただそれだけ、彼女には他に何もいらぬ。

へ………貴様〈

へさあ。ではさっさと再開しましょうか。

あなたを倒し、お父様のフォローに回りたいので〈

言うやいなや、すぐさまエルレイドとの間合いを詰め、右の剣を振るう。

へ——いいだろう。ならば貴様のそのくだらない戯れ言ごと叩き伏せてやる！！〉

「やれるものなら……やってみなさい!!」

激しく交差させながら、両者は再び戦いを繰り広げる。

互いに譲れないものを守る為に――

……。

「――リオン、だいもんじ!!」

「ヒードラン、かえんほうしゃだ」

一方、こちらも凄まじい炎の攻防戦が繰り広げられていた。

リオンのだいもんじと、ヒードランのかえんほうしゃ。

一見互角に見えるこの戦いも、やはり火力ではヒードランの方が上であった。

「ほう……. とも一方的な戦いになると思っていたが……. 存外に粘るではないか」

ロキの顔には余裕の色しか見受けられない。

当然だ、前回あれだけ圧倒的な勝利を収めたのだから、今回も心配する要素などあるはずがなかった。

「くっ……」

「諦めろレイジ、お前のリザードンではヒードランには勝てん」

「さーて……そいつはどうかかな？」

「……………」

解せんな、絶対的有利な立場でありながら、ロキは眉を潜める。レイジはバカではない、むしろ利口過ぎるくらいだ。

故に、前回の戦いでリオンとヒードランの実力差は思い知ったはず。

だというのに、レイジは不敵な笑みを崩さず戦意も失っていない。

（何か企んでいるのか……？）

だとしても、子供の浅知恵に過ぎないとロキは自己完結させる。

「リオン、ブラストバーン！！」

「ヒードラン、ブラストバーンだ」

リオンとヒードランの最大火力がぶつかり合う。

しかし——結果はあの時と同じだった。

「リオン！！」

攻撃が押し戻され、ヒードランのブラストバーンをまともに受けてしまうリオン。

だが、苦しそうな表情を浮かべながらも、リオンはまだ倒れてはいなかった。

「たいしたものだな……だが、所詮気力で立っているに過ぎん。どう足掻いてもお前達に勝ち目などないといい加減理解しろ」

「……………」

レイジは答えない。

しかし、その瞳がまだ諦めていないとロキに告げていた。

「——どうやら、徹底的に叩き潰さねば敗北を認めないようだな」

「————っ」

来る。

今まで繰り出す必要がなかった、ヒードランの本気の一撃が。

「耐えきれると思うな、このまま——灰と化すがいい、リザードン」

「——リオン!!」

合図が来た、そう判断した瞬間、リオンは翼を羽ばたかせ飛翔する。

「そんな程度で逃げたつもりなのか？」

——ヒードラン、殺せ」

凄まじい熱を孕ませたヒードランが、リオンへと標準を合わせた。

そして——

「——マグマストーム」

ブラストバーンすら上回る炎が、リオンを消し炭にしようと撃ち出される——！

「——」

刹那、レイジは瞬時に意識を内側へと落とす。

——できれば使いたくはなかった

この力は世界の摂理を破壊する神に等しい力だ。

故に、レイジもできる事なら使いたくない。

だが——それでも仲間の命には代えられない。

たとえば自分の力が世界にとってあつてはならない存在だとしても……。

誰かを助ける事ができるなら、この力は——きつと意味のあるものに変わるはずだ!!

——右手を突き出す

そして——レイジは力ある言葉を解き放った。

「——在るべき姿に還るんだ。ヒードラン!!」

——駆け抜ける光

それはレイジの右手から撃ち出され、包み込むようにヒードランを捉えた。

「何だと……!!?」

突然の事態に、ロキは驚愕と共に舌打ちをする。

「小僧……貴様、“力”を使えるようになっていたのか!!」

「リオン!!」

チャンスは今しかない、レイジの力によって動きを止めたヒードランへと突っ込んでいくリオン。

「リオン、『メテオフォール』だ!!」

指示を受け、固く握りしめた拳に炎を纏わせる。

そして、着地と同時にヒードランを上空へとほのおのパンチで殴り飛ばす。

瞬時に飛び上がり、ヒードランを追い越し――ブレイズキックで再び地面へと撃ち落とした。

しかし、まだリオンの攻撃は終わらない。

すぐさま翼を羽ばたかせ落ちていくヒードランの脚を掴みあげる。

雄叫びを上げながら、リオンはハンマー投げの要領でヒードランを振り回しながら地面へと向かい。

鼓膜が破れそうなほどの爆音を響かせながら、ヒードランを地面へと叩きつける――！

「……………」

耐えきれず、地面に沈んだままヒードランは動かない。

――これこそがメテオフォール

レイジとリオンが考えた必殺技は、見事ヒードランを打ち倒し。

――彼等の死闘は、ここで幕を降ろした

〈は、セイ――！〉

〈やっ、は——！〉

ティナとエルレイド、両者の刃が幾重にもぶつかり火花を散らす。

（コイツ………！）

ティナの剣戟を受けながら、エルレイドは内心舌打ちをする。

——侮っていた

あのような小さき少年に対し、敬愛と恋慕の感情などを抱くサーナイトなど、自分の敵ではない。

だからこそ、主人であるロキも戦いを自分だけに任せたのだと思っていた。

しかし——それは間違いだと否が応でも気づかされる事になる。

——彼女は強い、それこそ自分にも負けずとも劣らぬ程に

あの細腕からは考えられない程のパワーとスピードを込めて振るわれる剣戟は、一撃ごとに全身に衝撃を走らせる。

（おのれ………！）

このような事実など、認められるはずがない。

このようなサーナイト如きに、自分と互角の戦いを繰り広げるなど……彼のプライドが許さなかった。

〈っ、貴様——！〉

〈わたくしは貴様などという名前ではありませんよ！〉

双剣の十字に構え、一気に振り下ろすティナ。

それを受けようとするエルレイドだが……。

〈がっ——！？〉

その防御ごと、ティナの一撃は彼を吹き飛ばす。

〈バ、バカな……この俺が……！〉

〈自分の力にどれだけの自信があるのかは知りませんが、わたくしの力を侮っていたようですね〉

そう口にするティナだが、彼女の呼吸も荒く肩で大きく息をしていた。

（……もう、長くは保たない）

——サイコセイバーの具現化には、凄まじい精神力を有する

この剣は自らのサイコパワーをわかりやすく実体化したものであり、故に凄まじい破壊力を宿していた。

しかし、その実体化は容易に行う事はできず、現に彼女の額には大粒の汗が滲んでいる。

「――ここで、終わりにさせてもらいます」

時間は掛けられない、攻める時に攻めなくてはこちらがやられる。

そう思い、再びエルレイドとの間合いを詰め上段から剣を振るうティナ。

それを。

「――ふざけるなああああつ!!!!」

獣の雄叫びに等しい声を上げながら、エルレイドはティナの一撃を弾いてしまった。

それだけでは終わらない、今度はエルレイドの連撃がティナへと襲いかかる。

「くっ、きゃ――!!」

捌ききれず、どうにか回避していくが、この嵐のような剣戟をどうにかしなくてはやられてしまう。

「貴様なんぞに……貴様のようなポケモンに……俺が負けるはずがないんだあつ!!!!」

「……………」

尚も攻め続けるエルレイドを、ティナは憐れみを込めた瞳を送った。

「貴様……何故そんな目で俺を見る!!」

「――あなたが、可哀想だと思っただけです」

「何だと………！」

「くだらないプライド、くだらない自尊心……そんなものしか抱いて生きられないなんて……哀れです」

彼には、誰かを愛し支える喜びすら知らないのだ。

ただ主人の命を実行するだけの機械のような存在、それが今ティナの目の前にいるエルレイドの正体。

それを目の当たりにして、ティナの中から敵意と戦意が薄れていく。

「やめましょう。このまま戦っても虚しい結果を生み出すだけです」

「虚しい結果だと？　貴様……俺をバカにしているのか！？」

「そうではありません、ですが……もうわたくしはあなたと戦う意味などないと思いました。」

「ですから、あなたも戦うのは――」

「なら、貴様の大切なお父様とやらを殺されても同じセリフが吐けるのか？」

「――」

「無理だろうな。戦いたくないなどという綺麗事をほざく奴ほど――」

「――」

エルレイドの言葉が途切れる。

それは仕方ない、何故なら――

〈――もう一度、言ってみなさい〉

たった一瞬で自分の首に剣を這わせたティナが、絶殺の意志を込めて睨んでいたからだ。

〈――貴様〉

〈もう一度言ってみなさいとわたくしは言いました。ほら……もう一度先程の戯れ言を口にしてご覧なさい。

その瞬間に、あなたの首を斬り落とします〉

〈――――〉

それが本気だと本能が理解し、エルレイドの動きが止まった。

〈………〉

しかし、ティナは何故か自ら剣をエルレイドから離す。

〈バカが――！〉

どういふつもりかは知らないが、こちらにとっては好都合だ。

そう思い、エルレイドは再び攻撃を仕掛けようとして――

気がついたら、地面に倒れ込んでいた。

〈な、に……!？〉

身体に走る痛みにより、動けない。

眼前には、自分に向けて剣を突きつけるティナの姿が。

〈……お父様は、たとえ相手がどんな存在であろうが極力傷つけるなど仰っていました。

ですが……あなたのような救いような存在ならば、生かしておく道理はありませんね〉

冷たい声。

それは、否が応でもお前の命を奪うと告げられている事を理解できた。

しかし……。

〈――やめましょう。どうやら向こうも決着がついたようですし〉

ティナは両手に持った剣を消し、エルレイドに背を向ける。

〈……俺を、殺さないというのか?〉

〈殺したいですよ。お父様の命を奪おうとする者は誰であっても許しません。

でもお父様はそれをお望みになりません、ですから……あなたの命を奪うわけにはいかないのです〉

そんな事をすれば、レイジはきっと悲しむ。

たとえ敵とはいえ、生きとし生ける者の命が失われる事を。

そして、ティナが誰かの命を奪う事も望んでいない。

〈次からは、もっと相手を選んで喧嘩を売る事ですね〉

振り向き、エルレイドに向かってそう一言。

――その瞬間

ティナとエルレイドの死闘も、静かに幕を降ろしたのだった――

第50話 想いは力となりてく救済の手く

「――」

目の前の現実には、ロキは驚愕の表情を浮かべていた。

まさか、としか言いようのない勝敗。

ヒードランは、圧倒的な實力差があったはずのリオンに敗れ。

エルレイドもまた、ティナの力の前に敗れ去った。

「はあ…はあ…はあ…あなたの、負けだ」

息も絶え絶え、リオンに支えられていなければ満足に立つ事もできないというのに。

いまだ力強い光を瞳に宿しながら、レイジはロキにそう告げた。

〈お父様……〉

「大丈夫。それより警戒は怠らないで」

心配そうなティナにそう告げ、再び視線をロキへと向ける。

「――ここまでね」

横から聞こえた声に、全員が視線を向けた。

そこに立っていたのは、シロナと……疲れたようにうなだれているカグヤだった。

「も、もう暫くバトルはしたくない……」

「カグヤ、よく頑張ったわね」

劳いの言葉を掛けるシロナの後ろには、気絶している団員達の姿が。

……どうやら、向こうの戦いも終わってくれたようだ。

「部下も倒れあなたのポケモンも戦えない、これまでよロキ」

「……………」

「みんなー！！！」

今度は空から、聞き慣れた声が響く。

声の主はすぐさま地面に降り立ち、ロキを睨む。

「カイリ……」

「よっ、どうやらそっちも終わったみたいだな」

「……小僧、ラティオスとゾロアークを」

「ああ。しっかりゲットさせてもらったぜこの外道が」

言いながら、2つのボールを見せびらかすように掲げるカイリ。

「カグヤ、本当に助かったわ。ありがとう」

「お礼なら私よりカメックスに言ってあげて」

「――さーて、どうすんだよ親玉さん？」

全員でロキを囲む。

――もはや、勝敗は決した

ロキには戦えるポケモンはいない、捨て駒になる部下も全員倒れている。

ここまで追い詰められては、誰もが己の敗北を認めるだろう。

そう、認める“はず”だというのに……。

「――たいしたものだ、よもやこのような事態になるとは思わなかったぞ」

ロキは、その不敵な笑みと余裕の態度を崩そうとはしなかった。

「……………」

おかしい。

ロキという人間の全てを知っているわけではないが、惨めに敗北を認めないような男ではないはずだ。

それなのに、ロキが告げたのは賞賛の言葉のみ。

（何を考えている……？）

「一人一人が力を合わせれば、このような結末を引き寄せる事ができるのか……。

なるほど、なかなか興味深いものだった」

「わけのわからねえ事をベラベラとうるせえよ、いいからさっさとおとなしくしてやがれ！」

「しかし、お前達だけではこの結果を引き寄せる事はできなかった。――全てはレイジ、お前が中心となって皆を導いたからこそこの結果だ」

「……………」

「……まさか、本当にお前のような存在がいるとは思わなかったぞ」

「えっ……？」

その言葉に、違和感を感じた。

「――“選定者”か」

「選定、者……？」

「やはり知らないようだな、だが……それも当然か」

「……あなたは、僕の何を知っているというんですか？」

「知っているとも。お前の事も……そしてそこにいるサーナイトのこともな」

〈は………?〉

突然矛先を向けられ、ティナも困惑の表情を浮かべてしまう。

〈わたくしの事を、知っている……?〉

「よく知っているぞサーナイト、しかし……レイジと共に居ると気づいた時は、さすがに驚いたものだ」

〈何を……わたくしはあなたなんか〉

「お前が知らなくとも、私は知っている。

——知りたいとは思わんか? 自分がどういった存在なのかを」

〈………〉

ロキの言葉は、何の信憑性もないものだ。

一蹴して皮肉を返せばいい、そう思っているのに……。

ティナは、その言葉に揺さぶられていた。

——ずっとわからなかった自分の事

それを、この男は知っていると——

「ティナを惑わすな」

我に返る。

隣には、変わらずロキを睨むレイジの姿が。

「あなたが僕とティナの何を知っているのかは知らない。

でも、たとえばティナが何であろうと僕にとって大切な仲間に変わりはないんだ。

だから、そんな戯れ言で彼女を惑わす事は許さない」

↑
.....
お父様
↓

「……お前は、自分の事を知りたいとは思わんのか？」

「知りたいさ。それが僕の旅の目的の一つなんだから。」

でもそれはあなたみたいな存在に教わるわけにはいかない、人を惑わすあなたの言葉を真に受けるわけにはいかない」

だから、あなたの話に聞く価値はない。

そう告げて、ティナを守るように彼女の一步前へ進むレイジ。

(
⋮
お父様
)

そうだ、そんな事当たり前ではないか。

確かに自分の事を知りたい、その気持ちに偽りなどはなかった。

しかし、この男の話を真に受けてしまう事態は避けなくては。

「……………そうか。いや、だがいずれは気づく。自分達がどういった存在なのかをな」

「たとえどんな真実があったとしても、僕達は負けない!!」

「……………」

ロキの口元の笑みが深まる。

純粹に見えて、その実なによりも恐ろしい歪んだ笑み。

「——やはり、お前は私の手元に置いておくべきだな」

「——」

全身が総毛立つ。

ロキの瞳が、レイジだけを映しているからだ。

他の何者をも映さず、ただレイジだけを……獲物を刈り取ろうとするハンターのように。

「レイジ、次にあった時こそお前を手に入れる。たとえお前が拒絶しようとも、必ずだ!!」

「まるでここから逃げられるような言い方をするのね？」

「逃げれるとも。たとえば貴様達が束になって来ようとも私は逃げれる」

「――少しでも動いてみなさい。怪我だけでは済まないわよ」

静かに、けれど凄みのある殺気を放つシロナ。

それは味方であるカグヤ達ですら息苦しくなる程のものだが、それでもロキの態度は崩れない。

「目的は果たした。欲を言えばレイジとルギアを手元に置いておきたかったが……もはやアレも用済みだ」

（用済み……？）

アレとは、おそらくルギアの事だろう。

しかし、自らが出向いてまで捕らえようとしたルギアを「用済み」とはどういう……。

「――――」

全身が、脈打つ。

異質な感覚が、レイジの身体へと襲いかかり。

（これ、は………！）

その感覚に、彼は覚えがあった。

——空間が捻れるような不可思議な力のうねり

それが、ロキの周りから発せられている——！

「ティナ、でんじほうだ——！」

／＼／＼／＼／＼／

僅かに反応が遅れたものの、ロキへと攻撃を仕掛けるティナ。

——だが

『なっ——！？』

「くっ……」

レイジ以外の全員が、今起こった光景が信じられず驚愕の声を上げた。

——消えたのだ

ロキと、ロキのポケモン達が影も形もなく。

まるで初めから存在しなかったかのように、消えてしまった。

「テレポート……？」

「——違うよ」

カグヤの呟きに短くそう返し、レイジはふらつく足取りながらも歩き始める。

……今は、ロキの事よりルギアの方が気になる。

奪われずに済んだ、それは間違いないだろう。

しかし……あの時ロキが放ったあの言葉。

「用済み」という言葉の意味が、レイジに焦りを与える。

急がなくては、間に合わないかもしれない。

そう思い、レイジはルギアを捕らえている檻へと向かった。

……。

「——ルギア!!」

見つけた。

まだ潜水艦に入れられてはいなかったらしく、ルギアの姿はすぐに見つける事ができた。

「……………」

しかし——どこか様子がおかしい。

檻の中で、ルギアは苦しそうに呼吸を繰り返し、ひどく衰弱して…。

「ティナ、リオン、すぐに檻を壊して!!」

へはい!!!」

——おう!!!

頷き、すぐさまルギアを拘束している檻を破壊するティナとリオン。

「ルギア、大丈夫!」?

中に入り、ルギアへと声を掛けるレイジだが。

——返事が、返ってこない

「ルギア……?」

恐る恐る、身体に触れる。

だが、その身体はひどく冷たくて……暖かみを感じられない。

「ルギア!!」

「い、一体どうなってんだ……?」

レイジの後ろにいたカイリ達も、事の事態を理解できない。

「――ルギアの波導が、殆ど感じられない」

震える声でそう告げたのは、シロナのルカリオ。

「えっ……?」

「ルカリオ、それは一体どういう……」

「波導というのもその者の強さ、生命力の表れだと思ってくれない。いい。」

しかし……今のルギアからはそれを感じる事ができないんだ……

「それっ、て……」

その意味が、どういうものか理解できない程、彼等は愚かではない。

つまり、今のルギアは……命の灯火が尽きようとしているということ。

「ど、どうして……?」

「――っ」

そこでようやく、シロナは先程ロキの言っていた言葉の意味を理解できた。

「用済み」と言っていたのは、すなわちルギアの命がもうすぐ――

「カイリ、『時戻りの力』だ!」

「っ、わかった!!」

慌ててルギアに駆け寄るカイリ。

冷たくなった身体に手を添え、力ある言葉を放った。

「時よ、我が命に——っ!!!!?」

「カイリ!?!」

力を解放しようとした瞬間、カイリの身体が崩れ落ちる。

「あ、あれ……?」

身体が動かない。

全身に凄まじい倦怠感が押し寄せ、指一本動かせなくなっていた。

「マ、マジかよ……」

——先程の戦いによる消耗が激しすぎた

今の自分では——時戻りの力は使えない。

「くっ、なら僕が——」

力を発動させようとするレイジだったが……。

「っ、ぐあ——!?!」

その瞬間、凄まじい痛みが全身に走った。

まるで、自分自身がその力を使わせないようにしているかのように……。

「レイジ!!」

「レイジくん、これ以上その力を使えば君の身体が……」

「くっ、そ……」

カグヤとシロナに支えられながら、レイジは痛む身体を呪った。

こんな時に、使わなければいけない時に使えなければ……。

「――レイジ、か？」

「っ、ルギア!!」

うつすらと瞳を開いたルギアに駆け寄る。

「……無事だったか、よかった……」

「ルギア……」

「……見ての通りだ。私はもう……」

「嫌だ、そんなの絶対に認めない!!」

だって、こんな結末など誰が望むというのか。

何の罪もなく、ただ欲望のままに巻き込まれたルギアが、どうしてこのような終わり方を迎えなければいけないのか。

そんな事実など、絶対に認めるわけにはいかない。

「待ってて、今すぐに治してあげるから……」

「よせ……何をするかは知らんが、私のためにお前が苦しむ事はない……。私を助けてくれた、それだけで充分だ……」

「助けてない。僕は君を助けられなかった!!」

「いや……助けたとも、私をあの男から救ってくれた……。それだけで……私は、嬉しい……」

ルギアの呼吸が小さくなっていく。

「嫌だ……嫌だよ、こんなの……」

「……………」

大粒の涙を流すレイジに、ルギアは微笑みながらその翼で彼を優しく抱きしめる。

「レイジ……お前のような子に会えてよかった、今まで私は長い間誰とも干渉せずに生きてきたが……最後に、お前のような優しい子に会えたのは幸せだったのかもしれないな……」

「違う……違うよルギア、まだ死んじゃダメだ……まだ、生きてなきゃダメだ!!」

「——ありがとう、レイジ。できる事なら……お前の行く末を見てみたかったが……どうやら、ここまでのようだ……」

「嫌だ!!」

「……レイジ、私から最後の願いだ。聞いてくれないか？」

「最後じゃない、最後なんかじゃない!!!!」

「——人間を、憎まないでほしい」

「えっ……」

「確かに人間は愚かな行為に走る者もいる、だが……お前とお前の仲間達のように、無関係な私を命懸けで助けようとしてくれる者もいるのだ。」

だから……どうか、人間を憎まないでくれ。

私は人間達を愛している、この世界に生きる者達を愛している。でも、お前が人間を憎んでしまったら、私は悲しい……」

「……………」

「よいな？ 頼むぞ、レイ……………」

——閉じられる瞳

――止まる呼吸

「――――」

それが、何を意味するかなど説明するまでもなかった。

へ――ルギアの波導が、消えた

「そん、な……」

「嘘、だろ……？」

カイリ達も、その事実打ちのめされその場に崩れ落ちた。

へ………お父様

躊躇いがちに声を掛け、動かないレイジを後ろから抱きしめるティナ。

へお父様の責任でも、皆さんの責任でもありません。ですから……どうかご自分を責めないで

言いながら、ティナの瞳にも涙が溢れる。

――レイジの悲しみが、伝わってくるのだ

まるで剣のように鋭く痛々しい悲しみ。

彼が泣き叫ばないのが不思議なくらいの、苦しみだった。

「……………」

抱きしめる力を強くする。

そんな事をして、レイジの悲しみが癒されないとわかっていた。

だがそれでも——そうしなければならなかったのだ。

……………。

人を憎むなど、ルギアは言った。

では、この悲しみと怒りは、一体どこに行けばいいのだろうか。

「——ルギア、僕は……あなたにどう償えばいいのですか？」

人間の勝手な業で死んだあなたに、どう報いればいいのですか？

眠るルギアに、静かに語りかける。

「えっ……………？」

おもわず、ティナはレイジから離れた。

——心が視えない

サーナイトである自分は、他人の心を見る事ができる。

だというのに、先程まで視えていたはずのレイジの心が……。

へお父、様……？

違う。

今の彼は“レイジではない”

自分の知っている、彼ではなかった。

「あなたは世界に必要なだ、いずれ来るべき時の為に……ここで死すべき命ではない」

まるで唄のように、レイジは告げる。

その違和感に、ティナだけでなくカイリ達も気がついた。

「レイジ……？」

「……………」

彼は答えず、けれどゆっくりとカイリ達に身体を向ける。

「——まだ、終わるべき時ではない」

「は……………？」

「来たるべき選定の日まで、どうかこの子を守ってやってくれ。」

お前達がレイジと呼ぶ、この少年を」

レイジの声で、彼とは違う誰かの言葉が紡がれる。

「……あなたは、誰？」

「……………」

カグヤの問いに、優しい笑みを返すだけで、再びルギアへと向き直る誰か。

そして、そっとルギアの身体に手を添えた。

「――ルギア、私の力を以て再びお前を現世に戻す。

しかし私はまだ眠りに就く身、不完全な救済となるが……お前も、この子を守る剣となってほしい。来たるべき日のためにも」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ!! お前は一体何なんだ!!」

「いずれ判る。私の分身の力を秘めた子よ」

「えっ……………」

その言葉を理解しようとした瞬間。

辺りが、凄まじい光によって包まれていく。

「うわっ!!」

「きゃっ!!」

「こ、これは……!?!」

「よいな。選定の日までこの子を頼むぞ!」

「待って、あなたは――」

――光が、全てを奪っていく

視界も音も、なにもかも……。

「……………うっ……………」

少しだけ気だるさを感じながら、レイジは目を醒ました。

「……………」

視界に広がるのは、森の木々と太陽。

そして――何故自分に対して変な顔を浮かべている仲間達。

「……………みんな、どうかしたの?」

というか、何となく向けられている表情にムカツとする。

——しかし、そのような感情などすぐさま消え去ってしまった

「お、お前……何をしたんだ？」

「は？」

何をつてなにさ、そう疑問を返すと、全員がレイジの後ろを指差す。

一体何なんだ、そう思いながらレイジは後ろに振り向いて——固まった。

「……………は？」

口から出た言葉は、あまりに間の抜けたもの。

しかし、それも無理からぬ事だった。

何故なら、レイジの視界の先には……………。

——先程より半分程度にまで縮んでしまった幻のポケモン

——ルギアが、呑気に眠っていたからだ

「……………何、これ？」

第51話 平穏な1日／揺れる想い／

「……………」

朝の日差しを受け、レイジは目を醒ました。

「……………」

まだ眠気が取れないのか、しばらくそのまま動きを見せなかったが……。

「……………ああ、そうか」

現実に戻り、大きく伸びをしながらベッドから降りた。

——ここはアーリアタウンのトキヤの屋敷

ロケット団との戦いも一応の決着がつき、今はカントー行きの定期船を待っている状況だ。

改めて自分の現状を確認しながら、レイジは着替え始め。

「ようやく目が醒めたのかマスター、余は退屈だ」

いきなりボールから飛び出してきたポケモンに、そんな事を言われてしまった。

「……着替え中なんだけど」

「よいではないか、別に余は構わんが？」

「僕が構うの……」

ため息をつきつつ、とりあえずそのまま無視して着替えを進めるレイジ。

「マスター、着替えが終わったら遊びに行くぞ」

「その前に朝ごはん食べないとダメだよ」

「むう……余は空腹ではないのだが」

「君はよくても、僕が困るの」

そう告げると、彼女は不満そうに唇を尖らせる。

……どうしてこんな我が儘な性格になってしまったのだろうか。

そう思いながら、レイジは彼女――

――ルギアを見て、再びため息をついたのだった

……………。

さて、何故ルギアがレイジの傍に居るのか簡潔に説明すると……。

よくわからん力で復活したが、何故かルギアの身体が縮み性格も変わってしまった、そのままな崩し的にレイジの手持ちとなった、以上。

……身も蓋もないが、そう説明する以外ないのだから仕方ない。

「あつ、おはよー」

遊びたいと訴えてくるルギアを軽く受け流しながら、全員が集まっている居間へと移動する。

「おはようレイジくん、よく眠れた？」

「はい、大丈夫です」

「……ルギア、お前また勝手に出てきたのか？」

「なんだカイリ、いけないというのか？」

「いけなくはねえけど……お前一応は幻のポケモンなんて言われてんだから、もう少しこう……なんていうか」

「ふん、周りの者達には好きに言わせておけばよい。それより余はあんな狭いボールの中にずっと入っているなど窮屈でたまらん」

尊大な態度だが、端から見ると無理して背伸びしている子供にしか見えない。

だから、ルギアの態度にも腹が立つどころか全員が苦笑してしまった。

そうこうしているうちに、朝食の準備が終わったようだ。

ティナ達をボールから出してから、レイジは席に座る。

『いただきます』

そして、全員で合掌してから食事を開始した。

「……………それにしても」

朝食を食べ始めて数分、トキヤはルギアを見ながら口を開く。

「海の守り神様がこうして目の前に居る事も驚きじゃが……………お主達から聞いた話も、いまだに驚いてしまうような内容じゃな」

「……………そうね。私もあれが夢だったかもしれないと思う時があるわ」

「けど、夢じゃなかったんだよなあ……………」

——あの戦いから5日

国際警察へと聴取も終え、ようやく平穏な朝を迎える事ができた。

だが、それだけの日数が流れても、やはりあの光景を現実のものだと信じるには些か時間が足りなかった。

「なあレイジ、お前本当に覚えてないのか？」

「残念ながらね。それより逆に訊きたいよ、僕は本当にルギアの命を甦らせたの？」

……ルギアの命が喪われた瞬間は、今でも鮮明に思い出せる。

その後、深い悲しみと苦しみに苛まれて……急に意識が飛んだ。

ただそれも一瞬で、気がついたら……小さくなったルギアが眠っていたのだ。

「まあな。……俺達もいまいち信じられねえけど」

こんな不可思議な現象、夢だと思わない方がどうかしてる。

しかしあれは全て現実であり、傍でポケモンフーズをもっちゃもっちゃとリス食っているルギアもまた、現実の存在だ。

「でもさ、そんなに難しく考えなくてもいいんじゃないかな？」

全員が難しい顔になる中、カグヤの呑気な言葉が場に響く。

「ルギアが生き返って、ロケット団を撃退できて、おまけにみんな無事だった。

いいことづくめだし、気にする必要なんかないんじゃないかなあ？」

「おいおい……」

「カグヤ、それはちょっと楽観的過ぎるんじゃないの？」

「でもヒメカ、あの現象が何なのか説明できるの？」

「それは……」

そう言われてしまうと、何も言えない。

「別に何かが変わるわけじゃないし、考えてもわからないなら考える必要なんかない。

それより、今を楽しくしようって考える方がずっといいよ！」

「カグヤ……」

樂觀的な、けれど彼女らしい持論。

そこに、ルギアも同意するように口を開いた。

「マスター、カグヤの言う通りわからない事をいつまでも考えた所で埒などあかない。

ならば、もっと別の楽しい事を考えればいいだけの話だ。

というわけで、余と遊ぼう！！」

「……………」

途中までいい話だったのに、最後ので台無しになってしまった。

だが、まあ……今のルギアらしさが出ているのかもしれないが。

——あの力、あの言葉の意味は分からない

自分の正体も、ただの人間でないという点以外は手がかりはゼロ。

けれど、こうして歩みを止めなければいずれわかるだろう。

だから、レイジはこれ以上気にするのはやめにした。

……。

朝食を終え、一息つく。

ちなみに、ルギアは海の中へ散歩に行ってしまった。

途中までレイジも強引に連れて行かれそうになったが、当然ながら断固拒否した。

当たり前だ、自分がルギアと同じような事をしたら溺死してしまう。

(……何して過ごそうかな)

カントー行きの定期船は明後日、すなわちそれまではこの街に滞在しなくてはならない。

オーキド博士達にお土産でも買っておこうか、そんな事を考えていると。

「レイジくん、ちょっといいかしら？」

「シロナさん、どうかしました？」

声を掛けられ、シロナへと視線を向けるレイジ。

しかし……彼女の様子がちょっとおかしい。

ほのかに顔を赤らめ、どこか落ち着かない雰囲気で自分を見つめている。

なんだか、いつもの凜とした彼女とは違い……可愛らしいと思ってしまった。

「え、えっと……今日、時間あるかしら？」

「今日ですか？ ええ、大丈夫ですよ」

「そ、そう……な、なら……今日は、私と一緒に過ごさない？」

「一緒に、ですか？」

「ええ。色々ゴタゴタしてたから、これを機会にこの街を案内してあげようかなって……」

我ながら良案だ、シロナは内心そう思いながらも不安がっていた。

勇気を出して誘ってみたものの、もし断られたらどうしよう……などという彼女らしからぬ不安を抱えていた。

しかし、そんなものは彼女の杞憂だったようだ。

「いいですよ。お願いします」

「ほ、本当……?」

途端に明るさを取り戻すシロナ。

「はい。どうせ暇ですしお願いします」

ふわりと微笑むレイジ。

それを見て、嬉しさと気恥ずかしさでシロナの顔が赤く染まった。

「そ、それじゃあ……少しだけ待ってて!」

赤い顔を隠すようにそうまくし立て、自分の部屋へと向かう。

何せデートにこぎつけたのだ、レイジ本人はそう思っていないだろうが、シロナにとってはそうだ。

少しはお洒落をしようかしら、そんな事を考える彼女の口元には笑みが。

「カッカッカ、いい歳して随分乙女をやっておるのうシロナよ」

「……トキ婆、いい歳しては余計よ」

失礼な物言いに、楽しい感情が幾分冷めた。

「やはり本気で惚れておるようじゃな、レイジに」

「悪いの？ 年下を好きになっちゃいけない決まりも掟もないわよね？」

「もちろんだとも。むしろ僕は嬉しいよ、男っ気がまるでなく恋人は遺跡と言いきんなお前に、恋が訪れたのじゃからな」

「……………」

どうしてこの人は、いちいち余計な事を言ってくるのか。

……まあ、今までが今までなので否定などできないのだが。

「お前の方が大人なのじゃから、しっかりとリードしてやらんとな。下手をすると、レイジより子供っぽいからのうお前は」

「余計なお世話よ」

「なんじゃ、人がせっかく人生の先輩としてのアドバイスをしてやろうというのに」

「トキ婆の場合、面白がって言うから聞く耳持たないわ」

そう告げると、背後からつまらなそうにぼやくトキヤの声が。

（まったくもう……）

これ以上付き合ってはられない、彼を待たすわけにはいかないからだ。

そう思い、シロナは少しだけ急ぎ足で自室へと向かった。

……………。

「……………はあ」

さあ、楽しいデートの始まりだ。

だというのに、シロナは大きなため息をつき憂鬱そうな空気を纏っていた。

（せっかく、勇気を出して誘ったのに……）

「シロナさん、どうかしましたか？」

勇気を出して誘ったというのに、どうしてカグヤが自分達と一緒に街を歩いているのか。

答えは簡単だ、トキヤがカグヤに2人が街に出掛ける事を伝えたから、以上。

（あの老いぼれ……帰ったら覚えてなさい！！）

十中八九、トキヤは修羅場になる事を期待してカグヤにその事を伝えたのだろう。

もしくは、落胆する自分を想像したいが為か。

どちらにせよ、最悪である。

割と本気の殺意が芽生え、帰ったらどうしてくれようかあれこれ考えていると、不思議に思った2人から声を掛けられた。

「シロナさん？」

「もしかして、どこか具合が悪いんですか？
なら今日はやめにした方が……」

「……大丈夫よレイジくん、カグヤ。それじゃあ行きましょう」

「はあ……なら、いいですけど」

（……やめましょう、これ以上考えても無駄ね）

カグヤが悪いわけではない、なら彼女に心配を掛けるのは間違いだ。
それに……レイジと一緒に出掛けられるのは間違いないのだから、
高望みはしないでおう。

「レイジ、シロナさん、早く早くー!!」

「はいはい、わかったよ」

いつものようにさっさと先に行くカグヤと、そんな彼女に呆れながらもおとなしくついていくレイジ。

そして、今回はそんな2人に苦笑するシロナも加わり……。

少し不思議なデートは、こうして幕を開けたのだった。

「わぁ……お土産屋さんがたくさんある……」

「このアーリアは観光地だから、こうして土産物屋が多いのよ」

「へえ……」

説明半分のまま、あちこちに視線を向けては瞳を輝かせるカグヤ。

「買うのは構わないけど、無駄遣いするような余裕はないからね」

「むっ、そんな事しないもん」

（よく言うよ……）

そう言ってやりたかったが、意味ないのでやめた。

「見てレイジ、あの人形可愛いね！」

カグヤの指差す先には、サニ－ゴ人形が積まれている。

「……あれを持ちながら旅をするの？」

「えっ、あ、あはは……」

そこまで考えてはいなかったようだ、引きつった笑みを浮かべるカグヤにレイジはため息をつく。

「おじさんやおばさんにお土産を買った方がいいんじゃないか？」

「そうだね。じゃあ……どうしようか」

「……これはどうかしら？」

そう言って、シロナはカグヤにあるものを見せる。

それは黄金色の砂が入った小瓶。

「綺麗……」「これは『輝きの砂』っていうアーリア周辺でしか採れない名産品よ。

御守りにもなるし、敬愛する相手に送るとその人の安全を約束されるという言い伝えがあるの」

「へえ……」

「いいんじゃないか？ お土産としてピッタリだと思うけど」

「そうだね。……それじゃあこれを8つお願いします」

「えっ……？」

何故8つも買うのか。

自分の両親とオーキド博士になら多すぎるし、友達を含むと少なすぎる。

そんな事を考えていると、カグヤは輝きの砂が入った袋を抱えて戻

ってきた。

そして――8つの内の2つをそれぞれレイジとシロナに手渡す。

「えっ……？」

「これはレイジとシロナさんの分だよ。

大好きな2人がいつでも安全で居られますようにって」

「…………カグヤ」

不覚にも、少しだけ目頭が熱くなってしまった。

「ありがとうカグヤ、なら……私もあなたに渡さないかね」

「うん……僕もだ」

カグヤが自分達を好きなように、レイジ達も彼女が好きなのだ。

すぐさま輝きの砂を購入し、それぞれ手渡す。

結果、それぞれ三つずつ輝きの砂を持つという少々おかしな事になってしまったが、まあよしとしよう。

「えへへ、2人ともありがとう」

「僕の方こそありがとう、凄く嬉しいよ」

「私も。こんなに嬉しいプレゼントは初めてよカグヤ」

揃ってお礼を述べると、気恥ずかしそうに頬を赤らめるカグヤ。

——穏やかな雰囲気

皆が笑顔を浮かべ、幸せそうな雰囲気を纏っている。

確かな平和が、そこにあった。

…………。

「きゃははは、つめたーい！」

浜辺に移動し、足だけ海に浸かりながらカグヤはポケモン達とはしやぎ回っている。

その光景を、レイジとシロナは穏やかな視線で見つめていた。

「カグヤって、本当に純粋な子よね」

「……そうですね」

ああして裏表がないから、ポケモンにも好かれるのだろう。

「ところで、ラティオスは本当によかったんでしょうか？」

カグヤと共に遊んでいるラティオスを見ながら、ぼつりと呟く。

——ラティオスは、カグヤと共に戦う事を決めた
というのも、カグヤが。

「カイリばかり伝説ポケモン使うのズルい」

なんとも子供っぽい事を言ったのが事の始まり。

すると、ラティオスがカグヤの手持ちになる事を承諾したのだ。

「せっかくカノンと再会できたのに……片時も離れたくないとは思
わないんでしょうか？」

「確かにそうね。でも……ラティオスは気づいたのよ。

もう、自分がいなくてもカノンは大丈夫だと。

だからあえて彼女とは別の主人を選んだんじゃないかしら？」

「……………」

そういうものなのだろうか。

ずっと離れ離れになっていて、敵同士として戦っていたのに……こ
うも簡単に別の道を歩めるのだろうか。

「レイジくんが言いたい事もわかるわ、でも……これがラティオス
の選んだ道なのよ」

「……選んだ道」

自分の意志で、誰からも左右されずに歩もうと決めた。

……確かに、それならわかる気がする。

「僕も……ラティオスのように道を選んで歩けるのかな」

「歩いてるわよ、レイジくんはしっかりと」

「そうでしょうか？」

「……知らぬは本人ばかりなり、ね」

柔らかに微笑み、レイジに視線を向けるシロナ。

「こーら、2人だけで何話してるのー？」

いつの間に戻ってきたのか、目の前には少しだけ頬を膨らませたカグヤの姿が。

「いや、別に……」

「むー……シロナさんと2人だけの秘密なんか作ってズルいなあ」

「ズルって……」

そういうつもりではなかったのだが、どうやら誤解させてしまったらしい。

しかし、当のカグヤは別段気にしているわけではないようで、ぐさま満面の笑みをレイジへと向けた。

「あつ、そうだ！」

「……………」

「今、周りには私達3人しかないよね？」

「えっ、まあ……」

ポケモン達はあるものの、人間だけでいうなら確かに3人しかない。

「——よし、なら好都合だね」

ぶつぶつと呟くカグヤ。

そして——

「ねえ、レイジ」

「何？」

「レイジはさ、私とシロナさんどっちが好き？」

「……………は？」

それは、何の脈絡もない突然の問いかけ。

ニコニコと笑みを浮かべたまま、カグヤはそんな表情とは真逆の真剣な声色で……答えられない問いを告げた。

「カグヤ、いきなり何を」

「うん。幸いにもここには私達3人しかいないから訊いておこうと思っただの。」

レイジは私とシロナさんのどっちが好きなのかなあって、もちろん異性としてだよ?」

「そうじゃなくて、どうしてそんな事を訊こうとしたの?」

第一、選択肢がおかしい。

何故カグヤとシロナのどちらか、などという選択肢なのか。

しかしカグヤは、変わらぬ笑顔でレイジにとって予想外の言葉を放った。

「だって私、レイジの事が好きなんだもん」

「————」

息が止まる。

変わらぬ口調、まるで挨拶を交わすかのような気軽さで、カグヤは己の想いを打ち明けた。

「前はね、レイジの事は家族として好きだったと思ってた。でも、シロナさんが現れて……レイジと仲良くしてる所を見るとすごくイライラした。」

私も初めはそれが何なのかわからなかったけど……最近になって、レイジの事が好きだから嫉妬してたんだって気がついたの」

それに気づいたのは、彼女自身が告げたように本当に最近だった。

初めは驚き、次に恥ずかしがり……最後には開き直った。

裏表のない彼女だから、このようにあっけらかんという表情が似合っている告白をしたのだ。

だが……やはりそれはあまりに唐突で、レイジの思考を停止させるのに充分過ぎる破壊力を秘めていた。

「……唐突すぎたかな？」

「唐突過ぎだよ……い、いきなりそんな事を言われたって、僕は……」

答えを、出す事なんかできない。

口には出さずにそう告げると、それに気づいたのかカグヤは口を開く。

「あつ、別に今すぐ答えてほしいわけじゃないよ。まあ欲を言えば答えてほしいけど……レイジ、そういうの全然わからないでしょ」

まあ、私もあまり人の事は言えないけどね。そう言いながらカグヤ

は笑った。

——突然の告白に、頭の中がゴチャゴチャしてる

いやそもそも、どうしてカグヤはそんな事を言ってきたのか……。

「だって言いたくなっただもん、悪い？」

なんて、なんとも彼女らしい答えが返ってきて……なんだか力が抜けてしまった。

「……………はあ。君はいつも僕をある意味で驚かせてくれるよね」

「むっ、なんだか含みのある言い方だね」

「含みを持たせた言い方だからね」

そう切り返すと、何さーとカグヤは笑いながら攻撃してきた。

「…………カグヤ」

「何？」

「ありがとう、その気持ちは……凄く嬉しい。

でも……僕はまだ答えが出せない、だから……もう少しだけ」

「そんな深刻に考えなくていいよ、レイジが私を嫌わなくてくれるなら……今はそれでいいから」

「……………ありがとう」

必ず、答えは出す。

瞳でそう告げ、それを受け取ったカグヤも笑みを返した。

と。

「――カグヤ、抜け駆けするのはちょっとズルいと思うわよ、私は」
少しだけむくれたシロナが、不満げにそう口にする。

「あはは、ごめんなさいシロナさん。でもシロナさんも言ったらどうですか？」

「……もう、心の準備もさせてくれないのね」

恨むわよ、そう言いながらもその表情はどこか明るい。

しかし、レイジには何の事か理解できずに首を傾げていると。

「その……えっと……あー、うん……」

「……………」

何かを告げようとしているシロナだが、どうも歯切れが悪く何を言いたいのかさっぱりわからない。

なんだか彼女の頬が赤くなってきたり、ソワソワと落ち着きもなく。

しかし——次に告げられた言葉で、レイジは何度目になるかわからない思考停止状態に陥ってしまった。

「——私も、レイジくんの事が好きよ」

「……………」

おもわず、ポカンとしてしまった。

——ちよつと待て

カグヤの告白だけでも容量オーバーだというのに、まさかのカミン
グアウトによって完全にオーバーヒートだ。

「……レイジ、変な顔」

こっちの気持ちなどこれっぽっちも察しないカグヤの言葉に、軽く
殺意が湧いた。

「……シロナさん、あの」

「冗談じゃないわよ、もちろん」

「……………」

万が一でもありえないと思っていたが、そういうオチなら良かった
と思っていたので、軽くショックだ。

「どうしてですか？ カグヤもシロナさんも、どうして僕を……」

「私はいつだってレイジが私の傍に居てくれて、私の事を守ってくれたから。」

それに、なんだかんだ言いながら優しい所とかも大好き！」

「私は……そうね、きっかけはニビシティでの事かしら。」

あの時レイジくんは、私をチャンピオンとしてじゃなく1人のポケモントレーナーとして……シロナという個人として見てくれた、それが好きになったきっかけね」

「……………」

身近にいた2人からの、まさかの告白。

（だけど……僕は）

気持ちは嬉しい、というよりむしろ恐れ多いとすら思える。

けれど……レイジは2人に異性としての愛情を抱いてはいない。

だから、2人の気持ちには……。

「レイジは、私達の事嫌い？」

「そんな事あるもんか、2人の事は……好き、だよ」

少し気恥ずかしくて視線を逸らしながらそう告げると、2人は揃って満面の笑みを浮かべた。

「だったら、これから好きになってもらうように努力するよ」

「レイジくん、必ず貴方を振り向かせてみせるわ」

「うっ……………」

本気と書いてマジな視線に、おもわずたじろいだ。

『覚悟してね?』

まったく同時に、満面の笑みを向けられ宣戦布告を告げられるレイジ。

（僕は、一体どうしたらいいんだろう……）

なんだか、最近2人に振り回されているような気がしながら。

それも悪くないかなー、と思っている自分に気づき、レイジは盛大なため息をついたのだった。

第52話 カントー地方へ素直になるのは難しい

「――では、またいつでも遊びに来なさい」

カントー地方行きの定期船に乗ったレイジ達に、トキヤは優しくな
笑みを浮かべ見送る。

「はい。トキヤさん、色々ありがとうございました」

「よいよい。それよりレイジ、シロナの事を頼んだぞ？」

「あー……えっと、はい」

「レイジくん、どうしてすぐに頷かなかったのかしら？」

「いえ、特に深い意味はないです……」

詰め寄られ、視線を泳がせるレイジに、周りの者は苦笑を浮かべた。

「……でもさ、ミカンは本当にいいのか？」

ふとそう呟きながら、カイリは自分達と同じ船に乗っているミカン
へと視線を向ける。

――ミカンも、カイリ達についていくと言った時は、驚きが走った
彼女が言うには、ジムリーダーとして色々な場所に赴きもっと強く
ならなければいけないらしい。

もちろん彼女は嘘を言っているわけではない、それも理由の一つだ。理由の一つだが……それだけではないのも確かなわけで。

なんて事はない、ミカンは淡い恋慕の感情を抱いたカイリの傍に居たいだけなのだ。

ジムリーダーという立場なのがいいのか、という話ではあるが、ジムの運営は他の者にも任せられるし、何より強くなるという理由が嘘ではない以上問題は……ないはず。

ただ問題があるとするなら……それは、ヒメカだろうか。

(……なんか、めっちゃ睨まれてる……)

自分は何も悪い事などしていないはずだ、それなのに何故ヒメカは睨んでくるのか。

こちらもなんて事はない、ミカンの気持ちを理解しているヒメカが彼女の真意に気づき、半ば八つ当たり気味にカイリを睨んでいるだけだ。

——船が出航する汽笛が鳴る

「トキヤさん、さようなら！」

「またいつでも来るとよい、じゃが……次はシロナとの子供を見せてくれると助かるぞ」

「ふっ……」

「……あのばあさん、よくまあ臆面もなく言えるよな」

「確かに……」

手を振りながら、とんでもない事を口にするトキヤを見ながら、カイリとヒメカは呆れたような口調でそう呟いた。

……。

「――レイジ、口開けて」

「レイジくん、はい、あーん」

「……あの、1人で食べれますけど……」

時刻は昼時となり、船内の食堂で昼食を採っているレイジ達。

しかし、彼等の……正確には、レイジとカグヤとシロナの周りには甘ったるいオーラが漂っていた。

「……………」

カイリは食事の手を止めげんなりし。

ヒメカはなるべく気にしないようにしながら半ば機械的に食事を進

める。

そしてミカンは、そんな3人を見ながら頬を赤く染めながらもじつと見つめていた。

――何なんだ、この空気は

カグヤとシロナがレイジに対し、想いを伝えたという話は聞いていた。彼が2人の気持ちをとりあえず「保留」にした事も知っているし、きっと互いに牽制し合いながらレイジにアピールしているのだろう。

それはわかる、よくわかるが……。

（もしかして……これからずっと、こんなピンクオーラの隣で旅を続けないといけないのか？）

だと言うのなら、マジで勘弁してもらいたい。

今だって色々ヤバいというのに、これがずっと続くとなると間違いなく糖死する。

「……ごちそうさま」

呟くようにそう告げ、さっさと席を立ちその場から離れていくヒメカ。

（あいつ、耐えきれないからさっさと逃げたな……）

しかし、カイリも同じ気持ちなので一気に残りの食事を終わらせ、

席を立つ。

すると、ミカンも同時に席を立ったので、2人してそそくさとその場から逃げた。

その途中、レイジの視線が。

「助けて……」

そう告げていたが、2人は無視した。

薄情と言うなかれ、あれを邪魔したらどうなるのかわからない以上、自ら進んで危ない道を歩む必要はない。

すまんレイジ、心の中で謝罪の言葉を述べつつ、カイリはミカンと共に外へと出た。

「……やっぱり、カイリ達も耐えきれなかったのね」

先に来ていたヒメカにそう問われ、カイリは力なく頷きを返す。

「何なんだよあいつら……急にあんな空気を作りやがって……。近くにいる俺達の身にもなってほしいもんだぜ」

まだ胃が甘ったるいような気がする。

……夕食は、激辛料理でも食べようか。

「…………でも、カグヤさんもシロナさんも幸せそうでしたね」

羨ましそうな口調で、ミカンは口を開く。

「それは否定しねえけど……間に挟まれたレイジは少し可哀想だな」
男としてはこの上なく幸せな状況かもしれないが、彼の場合はそれに当てはまらない為苦痛でしかないかもしれない。

恋は人を変えると誰かが言っていたような気がしたが、カグヤ達を見てみると否が応でもそれが正しいと思えてしまう。

「……カイリさんは、ああいうのはお嫌いですか？」

「嫌いというか……同じ状況になったらまた大変そうだから……俺は正直御免だ」

「ということは、カイリさんは控えめな女の子が好みという事ですか？」

「そうだな……控えめ過ぎるのもあれだけど、どちらかといえばそうかもしれない」

「控えめ過ぎるのもダメ……なる程」

「……ところで、何メモしてんだ？」

「えっ!？」 あ、いえこれは……気にしないでください、ただの……勉強みたいなものです」

「勉強……?」

「はい。というか気にされたら私、死んじゃいます（恥ずかしくて）」

「死ぬの!？」

「……………」

頬をほのかに赤く染めながらカイリを誤魔化しているミカンを見て、ヒメカは彼女が少し羨ましいと思った。

彼女は素直で一途だ、おまけに清楚で甲斐甲斐しく同じ女としても魅力的に思える。

彼女は彼女なりに、恋慕の感情を抱くカイリに対しアプローチを試みているのだ。

けれど自分は……素直ではなく恥ずかしさを隠すようにすぐ手を出したりして、全然女の子らしくない。

（私も、ミカンやカグヤみたいに素直に……）

「ヒメカ、どうした？」

「……………」

心配そうな表情で自分に声を掛けるカイリ。

「……ごめんなさい、なんでもないの」

「なら、いいけどよ……なんか悩みがあるなら言ってくれよ？ 俺

はレイジみたいに頼りにならねえかもしれないけど……話せば楽になる事だってあるんだからな？」

「……………うん」

ぶっきらぼうな言い方だけど、その口調には確かな優しさがある。

……………こういう所が、カイリの魅力だと思う。

（——とられたくない）

たとえば彼に自分の想いを伝えられなくても、好きである以上誰にも奪われたくなかった。

その感情は——ヒメカを少しだけ素直にさせる。

「カイリ」

「ん？」

「ありがとう、あなたが心配してくれて凄く嬉しい」

微笑みながらの、感謝の言葉。

いつもの素直じゃない言い方とは違う、心からの優しい言葉。

そしてその笑みは、とても魅力的で可愛らしい微笑みだった。

「……………」

その破壊力は凄まじく、カイリの方が気恥ずかしくなって視線を逸らしてしまった。

「カイリ、せっかくだから船内を歩いて見てみましょうよ？」

言いながら、カイリの手を優しく握るヒメカ。

「お、おいヒメカ……」

恥ずかしいと、つつい思ってしまう。

なんというか、胸にドキドキしてきた……。

「むう……ズルいですよヒメカさん！」

「おわっ!!」

反対側からミカンに引っ張られ、つんのめってしまう。

「いいじゃないミカン、2人だけで行っても」

「ダメですよ、そんなの私が許しません」

「……………」

わーわーきゃーきゃーと自分を挟んで言い合うヒメカとミカン。

それをどこか他人事のように眺めながら……。

（レイジ……今ならお前の気持ちかわかるぜ）

そう思いながら、静かにため息をついたのだった。

……。

『はぁ……』

夜。

客室で、レイジとカイリは同時にため息をついた。

「……何かあったの？」

「まあな……」

疲れたように返事を返すカイリに、レイジは察してこれ以上は何も訊かない事にした。

「――なあ、レイジ」

「何？」

「お前、答えはもう出たのか？」

「答えて、何の？」

「……カグヤとシロナさん、どっちが好きかって答えだよ」

「……………」

カイリの問いに、レイジは表情を僅かに変える。

そして暫し経ってから、口を開いた。

「……答えは、まだ出てないよ」

「そっかぁ……やっぱり難しいか？」

「そうだね……そう簡単には出せないよ、こればかりは」

レイジにとって、2人の告白はまさしく青天の霹靂だった。

故に、簡単に導き出せる問題でもない。

「でも、2人は待つと言ってくれた。だから僕は僕なりにちゃんと考えているよ。」

後悔しないように、2人の想いを無駄にしないように」

「……………そっか、そうだよな」

「けどどうしたの？　いきなりそんな事訊いてきて……」

「んっ……ああ、ちょっとな。なんていうか……やっぱり参考が欲しいんじゃないかな、うん」

「……………?」

参考、とはどういう事なのだろうか。

煮え切らないカイリの物言いに、レイジは首を傾げていると。

「――俺、ヒメカかミカン、どっちかが好きなのかしんねえ」

少しでも躊躇いがちに、カイリは己の中に芽生えた感情をレイジへと告げた。

「……………カイリ」

「まだ断言はできねえんだけど……だから、その……………レイジの気持ちを読んで何か参考になればと思って……………」

「……………成る程ね」

多少驚きはしたが、すぐに納得できた。

男と女というのは互いに惹かれ合う存在だと、前に聞いた事がある。

カグヤとシロナが自分を好きになってくれたように。

自分が、2人を意識するようになったように。

カイリもまた、必然のようにヒメカとミカンに惹かれているのかも

しれない。

それは悪い事ではない、むしろ人として素晴らしい感情だと思う。

誰かを好きになる、その感情は人として必ず必要になるものなのだから。

「カイリ、その気持ちは大事にした方がいい。

まだ答えがわからなくても、ヒメカ達と一緒に居ればきっと見えてくるから。

人として、誰かを好きになるのは素晴らしい事だよ」

「……ああ、サンキュー」

笑みを浮かべるカイリに、レイジも笑みを返す。

「さて、寝るか」

「そうだね、明日の朝にはカントーに到着するから、早く寝た方がいい」

言いながら、布団に入る2人。

「……あつ、レイジ」

「ん？」

「あのよ……ちょっと勝手な頼みがあるんだが、いいか？」

「何？」

聞き返すと、カイリは少し驚くような事を言ってきた。

「――カントーに着いたら、別行動にしねえか？」

「えっ……？」

「セキエイリーグまであとだいたい三週間くらいだ。

俺はもちろん優勝してチャンピオンになりたいと思ってる、そして……お前を最大のライバルだとも思ってる」

「……………」

「だからセキエイリーグまで、お前達とは別れて特訓したい。

お前と一緒に特訓するのも悪くないが、それじゃあ決意が鈍っちゃうかもしれないしな……」

「……ヒメカとミカンさんは」

「承諾してくれたよ。今頃カグヤとシロナさんに言ってると思う」

「そう……………」

彼と出会い、共に旅をするようになってそれなりの月日が流れた。だからいつしか、彼が隣にいるのが当たり前のように思えていたから、少しだけ……寂しく思えた。

けれど、彼は自分をライバルと言ってくれた。

なら――彼の気持ちを汲み取る事が、大事だと思う。

自分をライバルだと認めてくれた、彼の為にも。

「――わかった。それじゃあ港に着いたら一時お別れだ」

「わりいな、勝手に決めちまって……」

「何言ってるのさ、むしろ僕は嬉しいよ。ライバルだと言ってくれて、嬉しかった」

「……おう」

互いに笑い合い、ベッドに潜り込む。

「………ありがとな」

「………うん」

掛け合うべき言葉はただそれだけ。

その後は何も語らず、そっと瞳を閉じた。

そして……どこか心地よい感覚に包まれながら。

レイジとカイリは、夢の中へと旅立っていった。

第53話 帰郷く新たなる仲間く

「――着いたー!!」

レイジ達の傍で、カグヤの嬉しそうな声が木霊する。

いつもなら「うるさい」と注意するレイジだが、今回だけはやめておいた。

なにせ約一年振りに故郷のマサラタウンに戻ってきたのだ、嬉しいのは彼も同じ。

「ここがマサラタウン……レイジさんとカグヤの故郷なのね……」

「そうですよ。ほら2人とも、早く行こうよ!」

嬉しさが隠しきれず、駆け足で街の中へと入っていくカグヤと。

「カグヤ、おかえり!!」

数人の男女が、カグヤに笑みを浮かべながらこちらに近づいてきた。おそらくマサラの住民でカグヤの友人なのだろう、彼女も嬉しそうに声を掛けている。

「――」

レイジの顔が強張る。

「……………」

それを、シロナは怪訝そうな表情を浮かべていると。

「——シロナさん、カグヤに先に行ってるって言っておいてください」

一気にそうまくし立て、駆け足でその場から走り去ってしまった。

「えっ、ちょ、ちょっとレイジくん!？」

「あっ!!」

「も、もしかして……シンオウチャンピオンのシロナさん!？」

慌てて追いかけようとしたシロナだったが、カグヤと同じくマサラの住民達によって囲まれてしまう。

「あ、えっと……」

「お会いできて光栄です!!」

「あ、あの……握手してくれませんか？」

「ポケモンを見せてください!!」

「……………」

すぐさま掻き分けて彼を追いたい。

けれど、せっかく自分にそう言ってくれる人達を邪険にする事などシロナにできるわけもなく。

（レイジくん、一体どうしたの……？）

彼の様子を気掛かりながらも、一人一人相手をする事にした。

……。

早足で歩き、ようやく周りに人がいなくなった事を確認してから、レイジは少しだけ歩くスピードを緩めた。

「――マスター、何故いきなり逃げたのだ？」

そんな彼が心配になったのか、彼のポケモン達が一斉にボールから飛び出す。

ルギアは不満げに唇を尖らせ、ティナは沈痛な表情を浮かべ、他の者は怪訝そうに首を傾げている。

「……逃げたわけじゃないよ、ただ先に行くって言っただけで」

「そんな苦しい言い訳が余に通用するとも思っているのか？
どう見てもマスターがあの人達から逃げたようにしか見えないが？」

「……………」

レイジは答えない。

けれど、ルギアを始めとした皆も大体の察しはついていた。

しかし、それがわかっているからこそ、ルギアは気に入らない。

「マスターはあの者達を恐れているのか？」

それに……そんな辛そうな顔をするのはやめてほしい。マスターが辛いと……余も辛い」

「ルギア……」

——ねえレイジ、どうして逃げたの？

へあの人達と、何かあったのですか？

「まあ、ね……」

——まさか、あいつらがお前を。

「いいんだリオン、別にいいから」

——よくない。もしあいつらが昔レイジをいじめてたなら……ピカは絶対に許さないよ。

「ヒカリ、気持ちは嬉しいけど僕は大丈夫だよ」

安心させるようにヒカ리를抱きかかえ、レイジは頭を撫でてやる。

「ほう……なる程、余のマスターにそのような仕打ちをしたのか……」

邪悪な笑みを浮かべ、殺気立っていくルギア。

それを、他ならぬレイジが静止の言葉を掛ける。

「ルギア、ダメだよ」

「っ、マスター……そなたは悔しくないのか？

虐げられ、仕打ちを受けたというのに何もやり返さないとは……」

「やり返せばいいって問題じゃないよ、それに……仕方ないんだ」

人は、自分がないもの、自分には理解できないもの、自分の常識外のものには恐怖するものだ。

小さい頃はどうしても疑問ばかりが浮かんだが、少しは大人になった今なら耐えられる。

……辛くない、そう言えば嘘になるが。

へルギア、お父様のいうことをきいてください

「ティナ、お前までそんな事を言うのか？

余にとってマスターは絶対の存在だ、そんなマスターを侮辱していたものを許容する心など余にはない」

へそれでもです。お父様がそれを望まない以上、あなたの考えは独りよがりでしかありませんよ」

「むう……」

そう言われてしまうと、ルギアとしても反論を返せない。

許す事はできない、しかしレイジが望まないのなら……確かに、自分の考えは独りよがりか。

「皆さんも、怒りを抱くのはわかりますが、勝手な行動をなさってはダメですよ？」

他の者にも釘を刺し、どうにか事態を収拾させるティナ。

納得できないものの、他の者達もこれ以上は何も言わなかった。

「ありがとうみんな、気持ちはずいぶん嬉しいから」

各々の頭を優しく撫で、軽いヒカリとアクセルは抱きかかえてやる。

「ああっ、ずるいぞヒカリにアクセル!!」

マスター、余もだっこしてくれ!!」

「無茶言わないで……」

いくら前より半分以下になったとはいえ、それでもルギアは巨体な部類に入るのだ、間違はなく圧死する。

そんなレイジ達をよそに、抱きかかえられたヒカリとアクセルは嬉

しそうだ。

そんな二体を見て、ますますルギアは不満そうな表情を浮かべるのだった。

……。

ルギアに文句を言われながら、オーキド研究所に到着。

「ほう、ここがオーキドの研究所か」

「ルギア、頼むから失礼な態度をとらないでね」

釘を刺し、扉を開く。

と。

「どわっ!？」

「わあっ!？」

「ピカッ!？」

いきなり何者かにタックルされ、抱きかかえていたヒカリ達ごと後ろに倒れ込んだ。

〈お父様!?!〉

「な、何だ!?!」

「いててて……」

一体何なんだ、そう思いながら痛む身体を押さえ顔を上げると。

「き、君は……」

自分のお腹の上に乗っているのは、一体のポケモン。

しかし、レイジにとって意外過ぎるポケモンだった。

〈あなたは――アブソル!?!〉

そう、レイジにタックルしてきたポケモンは、わざわざポケモンのアブソル。

それも――あの時、タマムシシティで彼に救われたアブソルだった。

「どうして君が……」

疑問を投げかけるが、アブソルは嬉しそうに笑みを浮かべレイジにすり寄ってくる。

「こ、こらーっ!! 誰だか知らんがマスターに馴れ馴れしくじゃれつくでない!!」

ピントのずれたルギアの怒りで、ますます事態が悪化していくが。

「こ、これは一体どうなっておるんじゃ……？」

「あっ……オ、オーキド博士」

騒ぎを聞きつけ、オーキドと……カグヤの両親であるゲンジとルリコが現場へとやってきた。

しかし、何が起きているのか理解できず、ポカンとした表情を浮かべており、どうやら期待できそうにない。

（やれやれ……）

そつとため息をつきつつ、誰からおとなしくさせればいいかなあと、レイジは困り果ててしまった。

——それから、暫くして

カグヤとシロナも合流し、ルギアも落ち着いてくれたので、ようやく落ち着いて話ができるようになった。

「ふむ、なるほどのお……随分と色々な事があったみたいじゃな」

「スイクンにホウオウにライコウ、ラティオスにラティアス……はたまたルギアにまで……」

「驚いたわ……凄い大冒険だったのね」

「うん。大変だったけど……今では凄く楽しかったかも」

「……そうだね」

確かに大変だったし、辛い事だったたくさんあった。

けれど、全体的に見れば……やはり楽しかったというのが正直な気持ちだ。

「でもカグヤ、あなたがロケット団と戦っていると聞いて、わたし達不安だったのよ？」

「ごめんなさい。でも……困ってるポケモン達を放っておけないから」

「やれやれ……誰に似たんだか」

呆れたような口調だが、ゲンジの口元には笑みが。

「ところで、バッジはきちんと集まったのか？」

「はい。私は5つで、レイジは4つです!!」

「そうかそうか、これで2人ともセキエイリーグに出場できるな」

「頑張ってるね」

「うん!! 絶対優勝してチャンピオンになってみせるから!!」

「さーて……そいつはどうかかな？」

「むっ……レイジ、どういう意味？」

「やってみなきゃわからないって事さ、僕だってチャンピオンになりたいっていう気持ちがあるからね」

「ふーんだ、私は絶対に負けないからね!!」

「僕もだ」

互に見つめ合い、戦意をぶつけるレイジとカグヤ。

「……………」

それを見て、シロナは少し羨ましそうな視線を送っていた。挑戦者としてバトルを楽しんでいた時、自分の傍には支えとなりライバルとなった人はいなかった。

けれど、カグヤにはレイジという支えがいる、だからこそトレーナーになって僅か一年足らずで、セキエイリーグに出場する程の実力を手に入れたのだ。

それが――シロナには少しだけ羨ましく思えた。

（まあ、今は支えが居てくれるからいいんだけどね……）

「それで、セキエイリーグまでここで過ごすのか？」

「うん。ここならゆっくり特訓できるし、それにたまにはマサラのみんなに会いたかったから」

「……………」

「そうかそうか。なら今日はみんなに会ってくるといい。

みんなカグヤに会いたがっておったからのう」

「そうさせてもらいますね」

久しぶりに友人に会えるからか、嬉しそうに頬を綻ばせるカグヤ。

——だから気づかない、レイジの表情が強張っている事に

カグヤを始めとして誰一人、気づく事はなかった。

……。

オーキド研究所の裏にあるポケモン達が住む中庭。

沢山のポケモン達と共に、レイジのポケモン達も楽しそうに遊んでいる。

それを優しく見つめながら……レイジは、瞳の奥に確かな寂しさを孕ませていた。

〈お父様……〉

そんな彼を、ティナと……アブソルは心配そうに見つめていた。

「ごめんねティナ、でも大丈夫だから」

へ……大丈夫な人は、そんなに心をざわつかせたりしませんよ

「はは……だよね」

このマサラは、故郷であると同時に……レイジにとって、辛い記憶の場所でもある。

この力——ポケモンと話す能力によって、彼はいつも1人だった。

畏怖の対象、化け物呼ばわりされた事だってあった。

だから、故郷に帰っても彼を迎えてくれる友人はいない。

もう慣れた事だ、その言葉に嘘はない。

けれど……辛くない、というのも嘘になる。

「おっ……？」

突然服の裾を引っ張られ、そちらに視線を向けると……。

「アブソル……」

ジッと自分へと視線を向けているアブソルが、口を開く。

——僕達がいるから、寂しくないでしょ？

「……………」

——君の傍にはいつだって僕達がいるから、そんな辛そうな顔をしないで。

「……………うん」

その優しさに、レイジは胸が暖かくなるのを感じた。

そうだ、今の自分は1人じゃない。

ティナやみんな、カグヤやシロナ、そしてカイリ達が自分の傍に居てくれる。

なら、寂しいと思う必要なんかない。

「ありがとうアブソル、本当に……………ありがとう」

頭を撫でながら、そっとアブソルの身体を抱きしめる。

少し恥ずかしそうにしながらも、アブソルは嬉しそうに一声鳴いた。

——ねえ、ボール出して。

「えっ……………ボールって、モンスターボールの事？」

訪ねると、アブソルはこくこくと頷いたので、首を傾げながらも空のモンスターボールを取り出す。

すると。

「あ———!？」

〈あぁっ!?!〉

なんと、アブソルは素早くボールの開閉スイッチを鼻で押し、自らボールの中に入ってしまった。

少し動いてから――ボールは動きを止める。

それはすなわち、アブソルをゲットしてしまったという意味で……。慌ててボールからアブソルを出す。

「アブソル、何で……」

――だって、僕も君の仲間になりたかったから

「えっ……」

――あの時助けてくれた恩返しがしたいんだ、だから僕はずっと君を捜してた。

でも見つからなくて……そんな時この街に辿り着いて、あの人達に君の事を聞いた。

それで、今まで待ってたアブソルは言う。

「アブソル……」

――君の力になりたい、助けられたからだけじゃない。
ただ単純に、僕が君と共に戦いたいと思ったからだ。

確かな決意、それがアブソルの瞳から感じられる。

……そこまで言われてしまっっては、レイジとしても断る理由はなかった。

というより、断るなんてできない。

「――わかったよアブソル、よろしくね？」

――うん!!

嬉しそうに笑みを浮かべ、レイジに飛び込むアブソル。

それを受け止めながら、レイジはアブソルの名前を考える。

「そうだな……ソウルっていうのはどう？」

――それ、僕の名前？

「うん、気に入らない？なら別の名前を考えるけど……」

――ううん、凄く嬉しいよ。ありがとう!!

どうやら気に入ってくれたようだ、アブソルの……ソウルの顔を見ればよくわかる。

という事で、新しい仲間であるソウルの事を教える為、レイジは全員を集める。

「みんな、この子はソウル。僕達の新しい仲間だよ」

——よろしく。

ぺこりと丁寧なお辞儀をするソウル。

デッド化していたとはいえ面識があるからか、全員が快くソウルを迎えてくれた。

特にソウルと死闘を演じたヒカリは、仲間になってくれた事が嬉しくて尻尾で握手までしている。

「むう……」

しかし、そんな中でルギアだけが微妙な表情を浮かべていた。

ソウルが仲間になる事が嫌なわけではなさそうだが……。

「ルギア、どうかした？」

「——マスター、仲間が増えた事は余も素直に嬉しいと思う。

しかし……その分、余を構う時間を少なくするのはやめてほしいぞ？」

子供っぽく唇を尖らせるルギアに、レイジは苦笑を浮かべた。

「な、何故笑う！？ 余にとっては死活問題だというのに、笑うなんて酷いぞマスター！！」

「ごめんごめん、別におかしくて笑ったわけじゃないよ。
ただ……君が可愛い事を言うから」

「かわっ!？ ふ、ふん……そのようなおべっかを使った所で、余が嬉しいと感じると思ったら大間違いだぞ!!」

へよく言いますね。心の中では感激のあまり今すぐ飛び跳ねたいと思っ
っているくせに」 「っ!!!？ ティ、ティナ貴様……心を読みお
ったな!!」

へわたくしだって読みたくて読んだわけではありませんよ、ですが
……そんなただ漏れの感情なら、否が応でも見えてしまいますか
ら」

そう言うものの、ティナの表情は明らかに楽しんでいるものだ。

すなわち、彼女はルギアをからかっているという事になるわけで……

「~~~~っ。も、もう許さんぞ!! 覚悟しろ!!」

羞恥により顔を真っ赤にさせながら、ティナに襲いかかるルギア。

しかし、ティナはテレポートを使い飄々とした態度でルギアから逃
げていく。

——ルギアって、単純だね。

——ああ。それとティナ……いい性格してるよな。

追いかけてっこを見ながら、勝手な感想を口にするヒカリとリオン。

このまま見ているのも面白いが、ルギアが本気になったらこの中庭

が崩壊するので、レイジはすぐさまボールに戻した。

中で尚もギャーギャーと喚いているルギアだったが、おとなしくなるまで無視する事に。

〈あら、残念〉

「ティナ、あまりルギアをからかわないの。今のこの子は子供なんだから」

わかりました、などと言っているが口元にはまだ笑みが残っている。やれやれとため息をつきながらも、彼も笑みを浮かべていた。

（これで6体……セキエイリーグでは、このメンバーで行こう）

新たな仲間であるソウルを迎え、レイジは来たるセキエイリーグへと向けて決意を抱く。

――激闘の大舞台まで、あと二週間。

第54話 開幕くカントーリーグ・セキエイ大会く

——カントー地方は今、熱気に包まれていた

ある者はテレビにかじりつき、またある者はとある場所へと向かう。

ポケモントレーナーにとって最高峰となる、大舞台。

カントー地方、セキエイリーグ。

その開幕日が、いよいよ今日になった。

「……………」

まだ陽が空に昇ったばかりの早朝。

そんな朝早い時刻だというのに、栗色の髪的美少女——カグヤはしっかりと目を覚まし、静かに自室で佇んでいた。

（いよいよ今日なんだ……セキエイリーグが、始まる）

故郷であるマサラタウンから旅立っておよそ丸一年。

新米トレーナーだった自分が、沢山の出会いと経験を経て——セキエイリーグに出場しようとしている。

自身の夢であるポケモンマスターになる為に、避けては通れない道。

「——頑張ろうね。みんな」

モンスターボールに入った、自分にとって最高のパートナーと呼べるポケモン達に優しく語りかけるカグヤ。

服を着替え、お気に入りの白いリボンを髪に結び準備完了。

あの日、旅立ちの朝と変わらぬ格好で、カグヤは部屋を出た。

「あ……………」

下に降りると、台所には見知った背中が朝食の準備を始めていた。

その背中に、カグヤはいつものように挨拶を告げる。

「レイジ、おはよう」

名を呼ばれ、レイジは振り向き挨拶を返した。

「おはようカグヤ、今日は早いね？」

「うん。目が冴えちゃってるのかな？ レイジこそ早いね」

「うん……僕も、早く目が覚めちゃったんだ。

やっぱり、緊張してるんだと思う」

少し不安げに、けれどそれ以上にどこか楽しげにレイジは言う。

それを見て、カグヤは笑みを浮かべた。

「私もすっごく緊張してるよ。でも…………それ以上にワクワクしてる

かな」

「僕もだよ。緊張してるけど……ワクワクする気持ちの方が大きい」

「えへへ……同じだね私達」

「うん、そうだね」

穏やかな笑みを見せるレイジに、カグヤはほんの少し気恥ずかしそうに笑う。

遂にきた大舞台の日。

しかし、2人にはいつも通り振る舞える事ができれ嬉しく思えた。

(……あつ、もしかしてこれってチャンス?)

今この場にいるのは自分達2人だけ。

邪魔者はおらず、周りに漂う雰囲気も悪くはない。

(……チュー、しちやおうか)

思い立ったらすぐ実行、カグヤはおもむろにレイジへと顔を近づかせる。

「えっ……………」

「……………」

——10センチ

——5センチ

——3センチ

近づく唇と唇。

互いの吐息が当たる距離まで近づいた時。

「はい、そこまで」

図ったかのようなタイミングで、シロナが2人を引き離した。

「あーっ!!」

「シロナさん……」

「おはようレイジくん、そしてカグヤ……抜け駆けはズルいわよ？」

「むーっ、あともう少しだったのに……」

「……………」

残念そうに呟くカグヤと、顔を赤らめるレイジ。

（カグヤって、意外と抜け目ないのね……）

そしてシロナは、カグヤを止める事ができて、ほっとするのだった。

……。

朝食を食べ終え、一足先にセキエイリーグ会場へと赴くレイジ達。

着いた時には、既に出店などが建ち並べられており、すっかりお祭り状態になっていた。

「——ここが、セキエイリーグ会場」

「……………」

緊張が増す。

しかし、高揚した気分のおかげでその緊張はいいものへと変わった。

「それじゃあ2人とも、また後でね」

「えっ？」

「シロナさんはどこに行くんですか？」

「私はまがりなりにもチャンピオンという立場だから、キミ達と一

緒に居たら色々とうるさくなってしまうでしょう？

それにちよつと行かなきゃいけない場所があるから、後で落ち合
いましょう？」

そう言つて、一足先に会場へと向かつていくシロナ。

「……チャンピオンって大変なんだね」

「シンオウ地方で一番強いトレーナーだから、やっぱり周りの注目を否が応でも集めちゃうものなんだよ」

「という事は、私もチャンピオンになったら変装して街を歩かなきゃダメって事だね！」

「……まあ、間違つてはいないけどね」

しかし、もうチャンピオンになった前提で話を進めるのはどうかと思う。

内心苦笑していると、後ろから軽く肩を叩かれ聞き慣れた声が自分の名を呼んだ。

「よっ、レイジ！」

「カイリ、それにヒメカにミカンさんも！！」

「久しぶりだね！」

「そうね。と言つても三週間程度だけ……相変わらず元気そうだよかったわ」

三週間振りに会う親友達は、相も変わらず元気そうだ。

その事実にも、レイジ達の表情も安心したものに変わる。

「ところで……この三週間、少しは強くなったか？ 俺達はすごい強くなったぜ」

「もっちゃん！！」

力強く頷くカグヤ。

それに満足したのか、カイリも満面の笑みを返す。

「ところでレイジ、お前ちゃんとフルメンバーを揃えたのか？ カグヤはともかく、お前は一体足りなかっただろ？」

「うん、それは大丈夫だよ。そういうカイリ達はどうなの？」

「当然、俺が最高だと思えるメンバーになったぜ」

「わたしも、自分の知識をフルに使って最高のメンバーを揃えたわ」

「カイリさんもヒメカさんも凄い気合いで、私も特訓に付き合ったんですが……凄かったですよ」

「へえ……」

それは期待できそうだが、早く戦いたいという衝動に駆られてしまう。

「とりあえず受付に行って選手登録しようぜ？」

「そうだね、行こう」

5人揃って会場の中へと入る。

そこには既に沢山のトレーナーが、思い思いに過ごしていた。

「……どの人も、強そうだね」

「そりゃあこの大会に出られるんだ、かなりの実力者なのは間違いないねえだろ」

「……………」

確かに、どのトレーナーからも強いオーラを感じ取れる。

さすがにワタルやシロナ程ではないにしろ、それでも充分過ぎる程に強い。

（これだけの人数から、たった1人だけが優勝できるのか……）

当たり前前の話ではあるが、それでもそう思うと少しだけ戦意が鈍ってしまいそうだ。

「……………」

ふと、人垣の一角へと視線を向けるレイジ。

「レイジ、どうかしたのか？」

「……………」

感じる。

周りのトレーナーを上回る強いオーラを。

それも――1人ではなく2人も。

（こっちに、来る……）

おもわず拳を握りしめ、その正体を見破ろうとその場で待っている
と。

「えっ……?」

「なっ――!?」

その正体は、レイジ達にとって意外な人物達だった。

「ん……? ああ、やはり来たかレイジ」

「フン……相変わらず緊張感の欠片もない顔だなレイジ」

対照的な言葉。

「な、なんでお前がここに居るんだよ!？」

1人に向かって、カイリが睨みながらそう叫ぶ。

しかしそれも無理からぬ事である。

レイジが感じた強きオーラの正体は……。

「――ロストさん、ケイジ」

とある事件で知り合った記憶喪失の青年ロストと。

冷たく鋭い目つきの少年ケイジだった。

ちなみに、カイリが叫んだ人物は当然ケイジである。

あの時の事は、やはり彼の中で拭えない確執を生んでいたようだ。

「……………」

睨み合う両者。

その間にレイジが割って入り、彼等に問いかけた。

「2人はどうしてここに？」

「おれ達も出場するためだ、セキエイリーグにな」

「ええっ!？」

「ロストさんも、ですか？」

「ああ。相変わらず自分の記憶は戻らないが……やはり根がトレーナーだからか、出場してみたいと思ったんだ。

——それに、またお前と戦ってみたいと思ってな」

「……………」

鋭い眼光。

言葉こそ柔らかいものの、その視線は強者のものだ。

「……ロストさん」

「お前の実力がどこまで上がっているのか、見せてもらうぞ」

「……レイジ、本戦で待つぞ」

それぞれ言い残し、人だかりの中に消えていくロストとレイジ。

「……………」

緊張で、身体が震えた。

「あいつ……まさかセキエイリーグに出てるなんて」

「レイジだけじゃない、ロストさんもよ……」

「うう……凄いトレーナーが来たね」

「……それでも、自分と自分のポケモン達を信じて勝つだけだ」

それだけを考え、ただ突き進むのみ。

「そうだね、自分と自分のポケモン達を信じれば、きっと勝てる！」

「おっしや、燃えてきたぜ!!」

「燃えるのはいいけど、まずは選手登録よ」

「そうだったな、早く行こうぜ!!」

「はいはい……」

焦るカイリを宥めつつ、レイジ達は受付へと向かった。

……。

「うへえー、広い部屋だな」

選手登録後、案内された部屋へと赴いたレイジとカイリ。

「これだけの部屋を各々に渡すなんて……凄いもんだな」

自分達2人共同の部屋とはいえ、明らかに普通の部屋に比べ豪華だ。

「なあレイジ、お前はどんなメンバーなんだ？」

「……そういうカイリは？」

「俺は秘密、ライバルに教えるわけにはいかねえからな」

「じゃあ、僕だって教えられないよ」

「そりゃそうだな、けど……絶対に前には負けないぜ」

「……………」

「確かにこの大会は強豪揃いだ、ロストさんもケイジも、カグヤもヒメカもすごい強いと認めてる。

でも……俺がこの大会で一番強いと思ってるのはレイジ、お前だ」

「カイリ……………」

「一番の親友だからこそ、俺にとって一番勝ちたい相手だ。だからレイジ、本戦まで負けんなよ？」

「……………うん。カイリもね」

当たり前だ、そう言ってニカッと笑うカイリに、レイジも笑みを返す。

「よし、開会式まで時間あるしメシでも食いに行こうぜ？」

「うん」

部屋を出て、選手用の食堂に向かう2人。

——食堂には既にトレーナー達が各々食事を楽しんでいた

「ん……？」

そんな中、とある一角に人だかりが。

何やら殺気立っているが……何だろうか。

気になり、近づいてみると……。

「あ……」

「っ、またあいつ……何かやったのかよ」

悪態をつくカイリ。

そこには、とあるトレーナーと……ケイジが睨み合っていた。

いや、睨み合っているというより……睨んでいるのはトレーナーだけで、ケイジは相手にすらしていないようだが。

「ケイジ」

「？ レイジか……何の用だ？」

「何の用というか、何をしたの？」

「別に、ただこいつが自分が優勝するといきまいていたから、現実

を教えようとしたただけだ」

「……どうやら、また暴言を吐いて騒動を起こしたらしい。」

前のような冷たさはなりを潜めたようだが、こういう余計な所は変わっていないようだ。

「おい、謝れよ」

「謝る必要などない、このトレーナーが優勝などできるものか」

「っ、そんなのやってみなきゃわかんねえじゃねえか!!」

「ハッ、敵を庇うなんざおめでたいヤツだな。」

少しは強くなったようだが、そういうバカな所は変わってない」

「この野郎……!」

殺気立つ両者。

今にもバトルが始まりそうな雰囲気になってきたので、レイジはため息をつきながら両者に割って入る。

「2人とも、決着は大会で着ければいいんじゃないか?」

「レイジ……」

「……フン、こんなヤツよりオレはお前と戦いたいんだがな」

「……カイリを甘く見ると、負けるよ?」

「……………」

ほんの少しだけ、ケイジはレイジを睨んだ後。

ケイジは、そのまま何も言わずに食堂を出て行った。

「っ、あの野郎……絶対ぶっ倒す!!」

「はいはい。わかったから落ち着いて。——大丈夫ですか？」

「あ、ああ……すまないな」

「いえ……」

「くっそー……レイジ、さっさとメシ食っちまおうぜ!!」

よほど腹が立ったのか、乱暴な物言いですっさと席に向かうカイリ。

（まったく、気持ちはわかるけど過剰に反応し過ぎだよ……）

しかし、裏を返せばそれだけケイジを意識している証拠だろう。

尤も、カイリは絶対に認めようとしないだろうが。

「レイジー」

と、カグヤ達も食堂へとやってきた。

5人で席に座り、各々注文を頼む。

「何かあったの？」

「……………別に」

ぶっきらぼうに言い返すカイリに、カグヤは首を傾げる。

「気にしないでいいよ、それより……………みんなセキエイ大会のバトルルール理解してる？」

「えっと……………最初はAからHの8グループに分かれて予選を行って……………各グループの一位と二位が本戦に行けるんだよね？」

「予選と本戦の一回戦までは3対3、準々決勝からはフルバトル……………」

「色々考えなきゃいけないよな……………」

「フルバトルはともかく、3対3はポケモンが限られるからね。よく考えて、メンバーを決めていかないと」

「うえー……………俺、そういうの苦手なんだよな」

「私も……………」

「やれやれ……………」

「カイリ、情けないこと言わないの」

「カイリさん、ファイトですよ」

「おー……サンキューなヒメカ、ミカン」

「……………」

まずは予選を勝ち抜かなければ、本戦には行けない。

いくら意気込んでも、予選で負けてしまえば無意味だ。

……今は、一つ一つできることを考えよう。

……………。

——喧騒が、フィールドを包み込む

周りのトレーナー達は全員真剣な表情で、フィールドの上を立っていた。

もちろん、レイジ達もその中に入っている。

(……始まる)

始まるのだ、セキエイリーグが。

開会式の言葉が述べられる中、レイジはただ空を見上げる。

——ここまで、長かったと思う

たった一年、けれどこの一年は……自分を変える大事な一年だった。
その集大成を、この大会で見せることができるだろうか。

「……………」

視線を感じ、そちらへ顔を向けると。

(シロナさん、ワタルさん……)

そこには、自分に手を振っているシロナと、静かに開会式を見つめているワタルの姿が。

どうやらチャンピオン用の特等席のようだ、彼女はあそこから観戦しなければいけないらしい。

(……見ててください、僕の戦いを……成長した僕の姿を)

決意を胸に宿し、黙ってシロナを見つめ返す。

——何故か頬を赤らめ視線を逸らされた

「————」

――遂に始まったセキエイ大会

予選を勝ち抜き、レイジ達は本戦を目指す。

戦いは、すぐそこまで迫っていた――

第55話 予選開幕〜ヒカリとゴウカザルの超パワー〜

『――さあ、カントーリーグ・セキエイ大会いよいよ開幕致しました。

予選を勝ち抜き、本戦に勝ち抜けるのはどのトレーナーなのか！』

実況の声と共に、会場の盛り上がりも加速していく。

「……………」

予選Aブロックでは、今まさにレイジが一回戦を行おうとしていた。

今頃カイリ達もバトルを行っているだろう、応援に行けないのは残念だが……今は自分のバトルに集中しなくては。

『対戦カードはこれだ、マサラタウンのレイジ選手対、コガネシティのケンスケ選手！！』

予選とはいえどんなバトルを見せてくれるのか、大いに期待できるぞー！！』

熱狂的な実況により、会場も更に盛り上がる。

それに対し苦笑を浮かべながらも……レイジは一度深呼吸をし――戦いの準備を完了させる。

『今回両選手が戦うフィールドはこれだ！！』

無骨な土のフィールドが機械音と共に下がっていき、現れたのは…

…。

（――草、か）

木々が生い茂り、地面にも所狭しと草が生えている草タイプのポケモンにとって己の力を最大限に発揮できるフィールドだ。

しかし、レイジには草タイプのポケモンはいない。

相手選手を見てみると、どこか安心したような表情を浮かべているあたり、おそらく草タイプのポケモンが手持ちに入っているのだろう。

でも、レイジにとっては関係ない。

有利だろうが不利だろうが、自分と自分のポケモンを信じればいいだけのだから。

そう思いながら、一体目のモンスターボールを取り出す。

そして――

「いけ、ウツボット！」

「ヒカリ、お願い！！」

同時に一体目のポケモンを出す。

『ケンスケ選手はウツボット、レイジ選手はピカチュウを出した！
これはピカチュウ、いきなり不利な状況でバトルが始まってしま

いました!!』

「さーて……そいつはどうかかな？」

実況にツツコミを返しつつ、視線をウツボットに向ける。

（そういえば、エリカさんと戦った時も初めはウツボットだったな）
ふとそんな事を思い出しながら、懐かしむ。

「先攻は、ケンスケ選手から。それでは――試合開始!!」

「ウツボット、はっばカッターだ!!」

早速攻撃を仕掛けるウツボット、はっばカッターがヒカリへと襲いかかる。

「ヒカリ、でんこうせっかだ!!」

しかし、でんこうせっかで素早く迫り来るはっばカッターを軽々と回避していくヒカリ。

『これは速い、ピカチュウ見る見るうちにウツボットとの距離を縮めていきます!!』

「ウツボット、ねむりごなだ!!」

「アイアンテール!!」

ねむりごなでヒカリを眠らせようとするウツボットだが、それを遥

かに上回るスピードでヒカリのアイアンテールが命中する。

「なに——！？」

『ピカチュウのアイアンテールが見事ウツボットにヒットー！！
しかしこれは何という速さか』

「ヒカリ、10万ボルトだ！！」

後ろに飛び上がりながら10万ボルトをウツボットに当てるヒカリ。

『更に10万ボルトがヒットしますが、これは効果が今ひとつ——
』

そう、草タイプのウツボットに電気技は効果が薄い。

——しかし

「ウツボット！？」

「ウツボット、戦闘不能！ ピカチュウの勝ち！」

10万ボルトを受けたウツボットは、そのまま後ろに倒れ——戦闘
不能に陥ってしまった。

『何とー！！ 効果が今ひとつであるはずの技だというのに、あつ
という間にウツボットを戦闘不能に陥れた！！
何というパワーでしょうか！！』

「ヒカリ、いい動きだよ」

——ありがとう、レイジ!!

ヒカリも笑顔を返し、すぐさま視線をフィールドへと移す。

『さあ、ケンスケ選手の次のポケモンは一体何なのか』

「ヌオー、頼む!!」

『ケンスケ選手の二体目はヌオーだ!!』

(なるほど……ヒカリの電気技を封じる為か)

ヌオーは電気タイプに弱い水タイプ、しかし同時に電気技が効かない地面タイプも兼ね備えている。

すなわち、この相手にはヒカリの電気技は一切通用しないということ。

「ヒカリ、どうする? このまま戦いたい?」

——もちろん、ピカだけで勝ってみせるよ!!

意気込むヒカリ、レイジは仕方ないとばかりに苦笑を浮かべる。

たとえ苦手なタイプだとしても、それを理由に戦う前から逃げたくないのだろう。

「いいよ。なら精一杯頑張って!」

——任せてレイジ、ピカ頑張るよ!!

『おっと、レイジ選手はこのままピカチュウで戦うつもりのようです!』

「なめやがって……ヌオー、じしんだ!!」

「ヒカリ、右横の木に飛び移って!!」

ヌオーのじしんが、フィールドを破壊しつつヒカリへと襲いかかる。しかし、ヒカリはフィールドにある木へと飛び移り難を逃れた。

「マッドショット!!」

「左に跳んで!!」

「じしんだ!!」

マッドショットを回避する為、再び地面へと降り立つヒカリ。

それを見計らい、ヌオーは再びじしんを繰り出す。

『ピカチュウにじしんが襲いかかる! これは避けられないかー!』
?』

「負けるもんか……ヒカリ、地面に特大のアイアンテールだ!!」
力を込め、渾身のアイアンテールを地面へと叩き込むヒカリ。

その威力は衝撃波を生み、なんとじしんを相殺してしまった。

「なっ——」

『これは凄い！ ピカチュウの放ったアイアンテールが、ヌオーのじしんをかき消してしまった!!』

「ヒカリ、でんこうせっかだ!!」

大技を使ったヌオーに向かい、でんこうせっかの速度でぶつかるヒカリ。

「右!!」

だがまだ終わらない、すぐさま右横へと移動し今度はヌオーの右わき腹へと攻撃。

「ヌオー、じしんだ!!」

「遅い!!」

じしんを仕掛ける前に、今度は左横からのでんこうせっか。

——ヌオーの身体が大きくぐらつく

「トドメだヒカリ、ツインアイアンテール!!」

「ピカッ!!」

正面に移動し、ジャンプしながら後ろ宙返りの要領で回転しながら、

ヌオーの顎にアイアンテールを叩き込む。

後ろへと倒れ込みそうになるヌオー、そこに飛び上がりながら今度は横に回転しながら再びアイアンテールを叩き込んだ。

その凄まじいパワーに、体格差があるヌオーがフィールドの端まで吹き飛ばされ。

「ヌオー、戦闘不能！ ピカチュウの勝ち！！」

審判の声により、戦闘不能に陥った合図が場に響いた。

『なんとなんとー！ 相性の不利をもともせず、ピカチュウが連勝を勝ち取ったー！！』

声援が響き、レイジは少々居心地の悪さを感じる。

しかし、まだ安心できるわけではない。

いくらこちらが有利だからといって、油断する理由にはならないし、なによりそんな感情は相手にとって失礼でしかない。

「ヒカリ、まだ行ける？」

——余裕。

「……わかった」

決して無理をしているわけではない、ならこのまま戦わせよう。

『さあ一気に追い込まれたケンスケ選手、ここから逆転なるか!』

「――ブーバー、行け!」

『ケンスケ選手最後のポケモンは、ブーバーだ!』

「ブーバー、か……」

相性でいえば可もなく不可もなく、すなわち純粋な実力で決まる。

「ヒカリ、10万ボルトだ!」

「ブーバー、かえんほうしゃ!」

ヒカリの10万ボルトとブーバーのかえんほうしゃがぶつかり合い、互いに相殺される。

「ほのおのパンチ!」

「アイアンテール!」

次は接近戦、ブーバーのほのおのパンチをヒカリのアイアンテールが真っ向から受け止めるが……。

「左でもほのおのパンチだ!」

「っ、ヒカリ避ける!」

声を掛けるが、右のほのおのパンチを受け止めているヒカリは動けず。

そのまま、左のほのおのパンチをまともに受け木々に叩きつけられてしまった。

『ブーバーの強烈な一撃がピカチュウにヒット！　これはかなり効いているようだぞー！！』

実況の言う通り、ヒカリのダメージは決して小さいものではない。

だが、もう戦えないわけではなく、すぐさまヒカリは立ち上がった。

「10万ボルト！！」

「かえんほうしゃ！！」

両者の技が再びぶつかり合い、またも相殺される。

「連続でほのおのパンチだ！！」

迫り来るブーバー。

仕方がない、そう呟きレイジは指示を出す。

「ヒカリ、後ろの木に飛び移って！！」

跳躍するヒカリ、それと同時にブーバーの攻撃も空振りに終わる。

しかしすぐさまヒカリの後を追う。

「ヒカリ、自分にかみなりだ！！」

木の上で自分自身にかみなりを当てるヒカリによって、攻撃を中断させられ大きく飛び退いた。

『なんとピカチュウ、自分自身にかみなりを当てたが、一体どんな意図があるというのか……？』

やがて噴煙が晴れていき、中から光り輝くヒカリの姿が現れる。

そして――

「ヒカリ、デュアルボルテッカー！！！！」

自分のかみなり、そして更にボルテッカーを発動させブーバーへと向かっていく――！！

「ピカピカピカピカピカピカ……！！」

「ブーバー、だいもんじだ！！」

迎撃しようと、ブーバーが向かってくるヒカリに特大のだいもんじを発射する。

――激しくぶつかり合う両者の技

しかし――ヒカリのボルテッカーがブーバーの技を破り、凄まじい

パワーでブーバーをフィールドを越え観客席の下にある壁にまで吹き飛ばした。

強固な壁に数メートルめり込ませるほどのパワーを受けたブーバーが、耐えられるはずもなく――

「ブーバー、戦闘不能！ピカチュウの勝ち！！」

よってこの勝負、マサラタウンのレイジ選手の勝利！！」

その声により、凄まじい拍手と歓声と共に、戦いの幕が閉じた事を告げていた――【カイリside】

一方、こちらは予選Cブロック。

こちらでも、カイリは激闘を繰り広げていた。

「ゴウカザル、マッハパンチだ！！」

一瞬で相手との間合いを詰め、マッハパンチを次々と叩き込んでいくゴウカザル。

十数発ものパンチを叩き込み、フィールドの外まで相手を吹き飛ばした。

「スターミー、戦闘不能！ゴウカザルの勝ち！」

『またもゴウカザルのマッハパンチがヨウタ選手のポケモンを倒してしまったー！！』

凄まじいパワーとスピードです!!」

これで二体目、僅か数分で相手のポケモンを戦闘不能に陥れた。

それもゴウカザル一体でだ。

(おっかしいな……)

圧倒的に有利だというのに、カイリの表情はどこか腑に落ちないものになっていた。

あまりにも相手が呆気なさすぎるのだ、現にゴウカザルはまだ一度も攻撃を受けていない。

しかし、それは相手が弱いわけではなく……カイリが強すぎるだけ。

今までの戦いで、カイリを初めとする皆を非凡なトレーナーへと成長させていた。

ただセキエイリーグに出場しただけのトレーナーでは、カイリ達には適うわけがないのだ。

「ヨルノズク、行け!!」

『ヨウタ選手最後のポケモンはヨルノズクだ!!』

(ヨルノズクか……ならカノンに……)

チェンジしようとしたカイリだったが、ゴウカザルが大声を張り上げたため動きを止める。

「ゴウカザル、もしかしてまだ戦いたいのか？」

そう訊くと、ゴウカザルは何度も頷きを返した。

「……よし、なら頼むぜゴウカザル!!」

「ウキヤアッ!!!」

固く拳を握りしめ、頭の炎を大きく燃え上がらせるゴウカザル。

「ヨルノズク、さいみんじゅつだ!!」

「っ、やべえ!!」

『あーっと、ヨルノズクのさいみんじゅつによってゴウカザルが眠ってしまったあっ!!!』

「ヨルノズク、ゴッドバード!!」

眠って隙だらけになっているゴウカザルは、まだ起きる気配を見せない。

『ゴウカザルピンチ、このままヨルノズクの攻撃が迫るー!!!』

「やらせるかよ、ゴウカザル、ねごとだ!!」

「――」

眠ったまま、自分の身体を炎に包み込んでいくゴウカザル。

そして、発動した技は――フレアドライブ!!

ゴッドバードを仕掛けるヨルノズクと、フレアドライブで突撃するゴウカザルがぶつかり合い、爆音が響き渡った。

『凄まじい技のぶつかり合いだー!! はたしてヨルノズクのゴウカザルはどうなったのか……』

「……………」

ねごととは間に合い、ランダムの中から見事フレアドライブを発動させる事ができた。

しかし、ヨルノズクのゴッドバードも充分大技だ。

はたして、ゴウカザルはどうなったのか……。

噴煙が晴れ、中から出てきたのは……まだ地面にしっかりと立っているゴウカザルとヨルノズクの姿が。

『素晴らしい戦いが繰り広げられています!!』

はたして、この戦いに勝利するのは一体どちらなのか!!』

「ゴウカザル、かえんほうしゃ!!」

「ヨルノズク、飛べ!」

先程のぶつかり合いで目を醒ましたゴウカザルに指示を出す、攻撃はヨルノズクが飛翔した事によって避けられてしまった。

「ヨルノズク、もう一度さいみんじゅつだ!!」

「何度も同じ手をくうかよっ! ゴウカザル、だいもんじ!!」

さいみんじゅつを受ける前に、だいもんじによってヨルノズクに攻撃を仕掛ける。

それは見事にヨルノズクへと命中し、空から地面に落ちていく。

「トドメだゴウカザル、フルパワーでフレアドライブ!!」

雄叫びを上げ、再びフレアドライブを展開しヨルノズクへと突進していくゴウカザル。

だいもんじの直撃を受けたヨルノズクに避けられるわけもなく――後ろの壁まで吹き飛ばされしまい。

「ヨルノズク、戦闘不能! ゴウカザルの勝ち。
よって勝者、フタバタウンのカイリ選手!!」

ゴウカザルだけで、カイリは完全勝利を勝ち取った。

「よっしやあ!!」

「ウキヤアツ!!」

右手を上げ、おもわずその場で飛び上がるカイリとゴウカザル。

すると、カイリのバトルで最後だったのか。

巨大なモニターに本日勝利したトレーナーの名前が映りだした。

そこには、当然ながらレイジ、カグヤ、ヒメカの名前があり……。

「――やっぱ、ロストさんとケイジの奴も勝ち残ったか」

2人の名前を見つけ、おもわずそう呟きを漏らした。

（けど……誰が相手だろうと俺は負けない!!）

予選ではレイジ達の誰とも当たらない、すなわち決着は本戦まで持ち越しとなる。

まずはこの予選を勝ち抜く事だけを考えよう。

そう思いながら、カイリは新たに勝利への決意を固めるのだった。

第56話 本戦へゝ間の一時ゝ

「アクセル、はどうだんだ!!」

アクセルのはどうだんが相手のプクリンを吹き飛ばし、戦闘不能へと陥らせる。

「プクリン、戦闘不能! リオルの勝ち!!」

よって勝者、マサラタウンのレイジ選手!!」

「…………ふう」

『決まったー!! レイジ選手、予選を全てストレート勝ちで本戦への切符を獲得いたしました!!』

〈父上!!〉

「おっと……」

アクセルが飛び込んできたので、慌てて受け止め頭を優しく撫でてやる。

「よく頑張ったねアクセル、ありがとう」

へいえ、父上のお役に立てて嬉しいです!!

相変わらずなアクセルに、レイジは苦笑を浮かべる。

『これで予選全ての戦いが終わりました。』

本戦の切符を手にした16人の強きトレーナー、一回戦の組み合わせは……これだ……!!」

モニターに、本戦に進んだ16人の写真が一斉に映る。

（……一回戦は、誰とも当たらなかったか）

運がいいのか悪いのか、カグヤ達全員が誰とも当たらずに済んだ。

『明日、いよいよ本戦が開始されます。』

選ばれし16人の誰が優勝し、チャンピオンリーグに進む事ができるのか……』

「……………」

実況の声が響く中、レイジはフィールドから離れその場から立ち去る。

「——お疲れ様、レイジくん」

通路に出ると、シロナが迎えてくれた。

「シロナさん……」

「さすがね。予選を全てストレート勝ちだなんて……」

「いえ、みんなが強くなったからですよ」

「それもあるけど、なによりポケモン達が貴方を心から信頼しているからこそよ。」

そして、貴方の指示が的確だから」

「あはは……ありがとうございます」

そう言われると、なんだか気恥ずかしくなってしまう。

「ところでレイジくん、貴方はこの後何か用事とかあるかしら？」

「用事、ですか？」

少し考えてみるが……本戦は明日だし、後は今日バトルしたアクセルをポケモンセンターで回復させる以外、用事などはない。

だから、レイジはすぐさまシロナの問いに答えを返す。

「特にありませんよ。けどそれがどうかしたんですか？」

「そう……なら、これから私と一緒に会場を見て回らない？」

「えっ？」

「今セキエイ大会は色々な出店が建ち並んでいるし、見て回るのも楽しいと思って」

「はあ……」

まあ確かに、気分転換にはなるかもしれない。

「いいですよ。それじゃあ行きましようか？」

特に断る理由がなかったので、レイジは承諾の返事を返す。

すると、シロナの表情が一気に嬉しそうなものへと変化した。

「ありがとうございます！　じゃあ早速行きましょー！！」

言いながら、レイジの右腕に自分の腕を絡ませるシロナ。

「シ、シロナさん……」

「ダメかしら……？」

「いえ、ダメとかじゃなくてですね……恥ずかしいというか、なんというか……」

シロナのような魅力的な女性にそんな事をされては、やはり刺激が強い。

しかし、シロナは嫌がられていない事を知ると、抱きついている腕の力を強くする。

（うう……）

どうやら、離れる気はないらしい。

こんな状態で人通りの多い所に行けば、間違いなく注目になり更には誤解を招いてしまうかもしれない。

シロナはそれでも一向に構わないが、レイジはあまり目立つ事はしたくないので、渋い表情を浮かべている。

(……まあ、シロナさんには適わないんだけど)

シロナだけでなく、どうやら自分は女性に対してかなり弱くなってしまうようだ。

最近気づいた事だが、あまり気づきたくない類の事実であった。

「レイジくん、だいぶ背が伸びたわね」

「そうでしょうか？」

「ええ。前までは私の方が高かったけど……今では私が顔を上げないといけなくなったから」

「まあ、まだ成長期ですからね……」

「ふふっ、でもレイジくんの背が伸びてくれてよかったわ。

だって、これなら周りから恋人同士のように見えるでしょう？」

「は、はあ……」

そんな事をはっきりと言われてしまうと、レイジも顔を赤くしてしまう。

そして、やはりシロナは自分に対して好意を抱いているという事実を再認識した。

(……でも、シロナさんみたいな綺麗な人が僕を好きだなんて……やっぱ信じられないな)

もちろん彼女の想いを疑っているわけではないが、どうしてもそう思ってしまうのもまた無理からぬこと。

それだけ、彼女が魅力的だと思っているからだ。

(……うつ)

出店が建ち並ぶエリアへと赴いた瞬間、レイジの表情が僅かに歪む。

やはりというか……周りからの視線が痛い。

それは当然だ、ここにいる人達の殆どはトレーナーやポケモンの知識に深い人達ばかり。

すなわち、シロナがこういった人物かを知っている。

シンオウ地方最強のトレーナーであるシロナが居るだけでも注目の的だというのに、男と一緒に居たら注目度は倍増だ。

しかしシロナはそんな視線に気づいていないのか、それとも見せつけたいのか、ますますレイジの身体へと密着してくる。

針の筵……と言うと聞こえが悪いが、今の心境はだいたいそれに近いかもしれない。

(……まあ、シロナさんが楽しそうだから、別にいいんだけどね)

楽しんでいる彼女を見ると、こちらもついつい顔を綻ばせてしまう。

せっかく楽しんでくれているのだ、こんな視線くらいで台無しにするのは忍びない。

だから、なるべく気にしないようにしながら歩く事にした。

「――ねえ、レイジくん」

「何ですか？」

「レイジくんは、優勝する自信はある？」

「ないですよ」

間髪入れずにそう答えるレイジに、シロナはおもわず彼の顔を見上げた。「あるわけないです、本戦まで勝ち進んだトレーナーはみんな凄く強いですから。」

特に……カイリとロストさんは」

あの2人には、勝てないとすら思っている。

カイリもロストも、超一流のトレーナーだからだ。

いずれぶつかるともしれない相手だけど……正直、当たりたいとは思っていない。

「恐いです、負けるのが。自分が信じたみんなが負ける姿を見るのが。」

でも……自信なんてないけど、僕は僕自身ができる事だけを考えて戦うだけです」

というより、自分にはそれしかないのだ。

余計な作戦や戦略を考えても、かえって自分らしさを失うだけ。

だから、レイジはただ自分の心のままに現在の心境をシロナへと告げた。

「……レイジくんらしいわね」

「難しく考えたくないだけです」

「いいえ。そうやってどんな状況でも自分自身を保つ事は、当たり前のように見えてとても難しいものよ。」

けれどレイジくんにはそれができる、すなわちレイジくんは凄いとレーナーだってこと」

「……シロナさんには適いませんよ」

「ううん。今の貴方は私を負かすほどの力を持つてると思う。それこそ——チャンピオンになれる程の力を」

「……チャンピオン」

鼻肩目で見ているだけではなく、本気で言ってくれているのだろう。

けれど……やはりレイジにはとてもそうは思えなかった。

考えもつかないのだ、チャンピオンになっている自分の姿が。

ただ彼は、ポケモンを慈しみ支え合って生きてきただけ。

だから……やはり自分には分不相応な立場だ。

……。

その後、レイジとシロナは様々な場所を歩き回った。

子供っぽいシロナに苦笑を浮かべたり。

シロナに憧れる子ども達に囲まれ、互いの関係をからかわれたり。

始終レイジにとって、精神上なかなかによろしくない状態ではあったものの……楽しかった。

そして今は、人通りの少ないベンチの上で休んでいる。

「……ごめんなさいレイジくん、私のせいで慌ただしくなってしまうって」

「いえ、気にしないでください。それに……結構楽しかったですし」

偽りではなく、本心からの言葉に、シロナも笑みを返す。

「やっぱり貴方は優しいのね」

「そうでしょうか？」

「ええ。そんな貴方だから私は――」

――好きになったのよ

優しい笑みで、レイジの顔を見ながらの告白。

「あ、えっと……」

面と向かって言われると、やはり照れてしまう。

「レイジくん、顔真っ赤よ？」

「それは……」

「ふふっ、こういう所は可愛いわね」

「……………」

ジト目で睨むが、赤い顔なのでシロナにはまったく通じずますます笑みを深めるばかり。

なので、レイジは諦めたようにため息を返した。

と。

「いたーっ！ー！！」

「えっ？」

「あら……」

反対側からとんでもないスピードで突撃してくる1人の少女。

そして、レイジの前で止まると頬を膨らませ声を荒げた。

「ちょっとレイジ、なんでシロナさんとデートしてるのよ!!
2人つきりになるなんてズルイ!!」

(どちらかと言えば、そういうのはシロナさんに言うべきじゃ……)

「シロナさんも、抜け駆けするなんてズルいですよ!!」

「ごめんなさいカグヤ、でも……早い者勝ちという言葉があるですよ?」

「むうー……じゃあこの後は、私とデートするよレイジ!!」

言いながら、レイジの腕を引っ張り無理矢理立たせるカグヤ。

しかし、そうはさせまいと反対側の腕を掴み引っ張るシロナ。

「ちょっとシロナさん、今まで散々レイジと一緒に居られたんですからいいじゃないですか!!」

「ダメ、私だってレイジくんと一緒に居たいんだから、そんな事許さないわよ」

がーっ、と怒るカグヤと、どこか楽しそうに笑うシロナの間に挟まれたレイジ。

（腕が痛い……それに、耳元で騒がないでほしい）

好意を抱いてくれるのは嬉しいが、ほどほどにしてほしいと思うのは我が儘……なのだろう。

元とはいえば、自分がさっさと答えを出さないのが悪いのだ。

だから2人だって、こうして甲斐甲斐しく自分にアピールしているのだから。

（ちゃんと考えるとは言っただけ……）

その答えのきっかけになるものすら、今の彼にはわかっていない。

自分の心、自分の気持ちがわからないというのは、存外に歯痒いものだと思い知った。

（僕の答えは、どこにあるんだろうか……）一方——カイリ達はどうと。

「ジャローダ、リーフブレード!!」

「ハガネール、アイアンヘッド!!」

ミカン、そしてヒメカと共に本戦へ向けてトレーニングに励んでいた。

ジャローダのリーフブレードを、ハガネールは真っ向からアイアンヘッドで迎え撃つ。

激しくぶつかり合う両者だが。

「ハガネール!？」

ジャローダの攻撃が、ハガネールの巨体を文字通り吹き飛ばした。

(……やっぱり、カイリは強い)

2人のトレーニングを傍らで見ながら、ヒメカは唇を噛みしめる。

この一年での彼の成長度は、凄まじいまでのスピードだった。

特に、セキエイリーグに向けての僅か三週間の特訓では、それに拍車を掛けている。

また、彼の手持ちもまた凄いメンバーだ。

伝説のポケモンと呼ばれるラティアス——カノンもそうだが、なにより凄いのは彼にとって初めてのポケモンとなるゴウカザル。

あの激闘の果てに手に入れた「オーバードライブ」に「ブルーフレア・バースト」の威力は、間近で見た事があるが凄まじいという表現しか浮かばないほどだった。

おそらく——彼が一番チャンピオンリーグに出場できる可能性が高いだろう。

最負目ではなく、本気でそう思えるほどに彼は強くなったのだから。

(……なんだか、カイリが遠く感じるようになってしまったわ……)

旅立ちの日は、あんなに頼りなくて自分が居なければまともな旅なんてできないと思っていたのに、レイジと出会い数多くの戦いを経験して……今では、あんなにも強いトレーナーになった。

それが、ヒメカにとって少しだけ寂しく感じてしまう。

あんなに近くに居たのに、いつの間にか自分よりずっと前を走って夢に向かっている。

その事実が、ヒメカにとって寂しく思えた。

「ヒメカ、どうかしたか？」

「……………」

顔を上げると、心配そうに視線を向けるカイリの顔が映った。

「……なんでもない、それより調子はいいいみたいね」

「まあな。明日からいよいよ本戦なんだ……」

自分のできる事はやっておかないと!!」

意気込むカイリに、ヒメカも柔らかな微笑を返す。

「お互い、頑張らないとね」

「ああ。ヒメカも明日絶対勝てよな、負けたら承知しねえぞ？」

「わかってるわよ。カイリこそ気合いが空回りしないでよ？」

わかってる、そう言いながら再びミカンの元へと戻りトレーニングに励むカイリ。

(……私も、頑張らないと)

自分とて、強いトレーナーになる為にこのセキエイ大会に出場したのだ、たとえ誰が相手であっても負けたくはない。

そう思いながら、ヒメカはボールからロールを取り出した。

「ロール、明日に向けて特訓よ！」

力強く頷き、気合いを入れるロール。

——いよいよ始まるセキエイ大会本戦

しかし——それは同時に宿命の対決が迫っているという意味になる。

果たして、優勝は誰の手に渡るのか——

第57話 ライバル対決！カイリ対ケイジ！！（前書き）

カントーリーグ・セキエイ大会。

それに出場したレイジ達は順調に勝利を重ね、無事本戦へと勝ち進む。

そして、現在一回戦が繰り広げられていた……。

第57話 ライバル対決！カイリ対ケイジ！！

「ジャローダ、トドメのリーフストーム！！」

ジャローダのリーフストームが、相手のポケモンを戦闘不能に追い込む。

「サイドン、戦闘不能！ジャローダの勝ち！！
よって勝者、フタバタウンのカイリ選手！！」

「っしゃあー！！」

ガッツポーズと共に、観客席からも惜しめない声援が響く。

「やった、カイリが勝ったよ！！」

「……これで、全員が一回戦を突破できたわね」

心配はしていなかったが、ヒメカの口からはおもわず安堵のため息が漏れた。

そして――次は準々決勝となり、すなわち6体によるフルバトルとなる。

『さあ、これで一回戦は全て終え、いよいよ準々決勝だ。
対戦カードは……これだあっ！！』

――モニターに映される対戦表

『————っ』

それを見て、レイジとカイリはおもわず目を見開いた。

彼等の対戦相手は……。

（ロストさんとか……）

（……ケイジとかよ）

そう、レイジの相手はロスト。

そして、カイリの相手はケイジとなった。

ちなみに、幸か不幸かカグヤとヒメカは互いにぶつからずそれぞれ別のトレーナーが相手となる。

（……あいつとか）

コガネでのバトルを思い出し、自然と顔が強張っていく。

その表情を変えることなく、カイリはそのままフィールドを後にした。

……………。

「――カイリさん、何をしているんですか？」

カイリと合流したヒメカとミカンだったが、彼がいきなりある場所に赴いたので、慌ててその後についていく事に。

そこは十数台ものパソコンが並べられた部屋。

その内の一つに座り、早速何かを調べ始めるカイリ。

するとモニターが現れ、とある人物のデータが浮かび上がった。

「これは……ケイジさんの」

ここは選手登録したトレーナーの過去の戦績などが見れる部屋であり、相手を知ったり戦略を練る為には必要不可欠な場所でもある。

カイリは調べるのが癪だと思っているものの、次の相手は今までとは次元が違う。

……あの時のような負け方を、繰り返すわけにはいかない。

「ケッキングにフライゴンにバシャーモ……どれも強力なポケモンね。

それにどれもかなり育てられてるみたいだし、あの人自身も性格はともかく指示は的確よ」

「わかってる。だから調べに来たんだ」

少しでも有利に戦えるように、きちんと戦略を練らなければこちらが負けるのは目に見えてる。

そう思っているので、カイリはひたすらにケイジのデータを眺めていた。

「——ご苦勞な事だな、そんなことをしても無意味だと思うが」

「——っ」

扉の外から聞こえる声に、3人の視線が一斉にそちらに向けられる。そこに立っていたのは、相も変わらず冷たい瞳を宿した少年……。

「…………ケイジ」

おもわず立ち上がり、おもいつきり睨んでしまう。

……やはり、この男だけは苦手だ。

レイジは既にケイジに対して警戒心を抱いてはいないが、カイリにとって目の前の相手は許せない類の人間でしかない。

「……憎むのは勝手だが、頭に血が上った状態じゃ実力なんぞ発揮できないぜ？」

「っ、そんな事お前に言われなくてもわかってる!!」

「そうかい、なら構わないがな。オレとしてはレイジと戦いたかったが……まあ、お前で我慢してやるか」

「上等だ……この間と同じだと思ったたら大間違いだ」

「……………」

「お前みたいな、ポケモンを大事にしない奴なんかには絶対負けねえ……！」

明日の試合で、それを証明してやる……！」

殺気立っていく両者。

ヒメカもミカンも、2人の間に漂う険悪な雰囲気近づけず、見守る事しかできないでいた。

「——気合い充分か。なら大丈夫そうだな」

「……………」

「前言撤回だ。お前とのバトル……楽しみにしている」

「なに……？」

「確かにお前の言う通り、この間とは各段にレベルが違うからな。まあ……それでもオレがお前に負けるなんざあり得ないが」

「言ってる。勝つのは俺だ……！」

「……………フン」

少し呆れたような表情を浮かべ、ケイジはその場を後にする。

（見てやがれケイジ……俺は必ずお前に勝ってやる……！）

強く拳を握りしめ、険しい表情を浮かべるカイリ。

必ず勝つ、その想いを胸に秘めながら――『――さあ、いよいよセキエイ大会準々決勝が始まります。』

今回の試合から6体によるフルバトル、果たしてどのような熱いバトルになるのでしょうか！』

太陽が真上に差し掛かる頃、スタジアムは冷めやらぬ熱気に包まれていた。

（今回からフルバトル……つまり、これでカイリの手持ちの全てがわかるのか……）

今までカイリは、その圧倒的な実力差から、ゴウカザルとジャローダ、そしてフローゼルの三体だけで準々決勝まで勝ち進んできた。

しかし今回からフルバトル、おまけに相手はあのケイジだ。

「どちらが勝ってもおかしくはない勝負だな、これは」

「ロストさん……」

軽く手を挙げ、空いている席に座るロスト。

「レイジ、お前は今回のバトルどちらが勝つと思っているんだ？」

「……わかりません。どっちが勝ってもおかしくありませんから」

「そうだな……おれもこの勝敗は読めん」

「勝つのはカイリさんに決まっています、だってあんなに頑張っていたんですから」

「わたしも、カイリが勝つと思うわ」

迷う事なく、カイリの勝利を信じているヒメカとミカンに、ついつい苦笑を浮かべてしまう。

……そんな事を言っているが、2人もこのバトルがどんな結末になるかわからないのだ。

だから、根拠がなくてもカイリの勝利を言葉にしたかった、不安を抱かないように。

(……カイリ、ケイジ、どちらも悔いのないバトルを)

「――――」

黙って一体目のボールを取り出すカイリ。

「――おい」

「……なんだよ？」

つい口調が刺々しいものになってしまうが、ケイジは気にせず言葉を続ける。

「バトルの前に、お前に言っておかなければならない事がある」

「だからなんだよ？ 嫌みや皮肉なら言っても無駄だぞ」

「そうじゃない。……コガネでの事は、悪かったと思っている」

「…………ケイジ」

「言いたかった事はそれだけだ、後は……全力でお前を倒す、それだけだ」

「…………ああ、けど負けないぜ!!」

「——シザリガー、出ろ!!」

「フローゼル、頼むぜ!」

「シザリガーにフローゼル……」

「一体目は、水対決になりましたね……」

皆が見守る中。

「先攻はカイリ選手からとなります。それでは……試合開始!!」

戦いの幕は、遂に切って落とされた——!

「フローゼル、アクアジェットだ!!」

先手を頂き、すぐさま攻撃を仕掛けるフローゼル。

「シザリガー、クラブハンマー!!」

それを、シザリガーは真っ向から迎え撃ち――両者共にフィールドの端まで吹き飛ばされる。

「うずしおだ!!」

「みずのはどう!!」

再びぶつかり合う両者の技。

互いに一步も退かず、またも相殺された。

『序盤から凄まじい攻防だ、どちらもレベルの高い戦いを繰り広げているぞー!!』

「やっぱり強い……」

「ああ、あのフローゼルも相当なパワーだが……シザリガーも負けていないな」

「ここえるかぜ!!」

「シザリガー、あなをほる!!」

『シザリガー、ここえるかぜを地面に穴を掘って難を逃れた!!』

「逃がすか。地面にれいとうパンチ!!」

裂帛の気合いを込め、両手を使ってのれいとうパンチがフィールド全体を揺らす。

瞬く間に氷付けになっていくフィールドに、シザリガーはたまらず外へと飛び出す。

「今だフローゼル、かみくだけ!!」

一息で間合いを詰め、おもいきりシザリガーへと牙を立てるフローゼル。

『フローゼルのかみくだがヒット、これはかなり効いたかー!?』

「シザリガー、シザークロス!!」

「っ、離れろフローゼル!!」

慌てて指示を出すカイリだが、僅かに遅くシザリガーの攻撃がまともにフローゼルへと命中する。

『なんとシザリガー、技を受けながらも見事に反撃を返しました!!
どちらも一歩も譲らない!!』

「ヘドロぼくだん!!」

「フローゼル、でんこうせっか!!」

迫り来る無数のヘドロぼくだんを、でんこうせっかが回避しながら間合いを詰めていくフローゼル。

「見え見えだ、あくのはどう!!」

「っ、みずのはどう!!」

フローゼルに襲いかかるあくのはどう。

それを間一髪で相殺させるが……やはりダメージは免れなかったのか、僅かに表情を曇らせるフローゼル。

「――フローゼル、戻るんだ!!」

『カイリ選手、フローゼルを戻しました!』

「いい判断だ、このままでは埒があかないと思ったのだろう」

「それに、フローゼルは水タイプ以外の技のバリエーションには乏しい、ケイジのシザリガー程の柔軟性はありませんからね」

「頼むぜ……いけ、エレキブル!!」

雄叫びを上げ、フィールドに登場したのはエレキブル。

「あれは……」

今までカイリの手持ちにはなかったポケモンだ、つまりあの三週間でゲットしたものなのか……。

「……あれは元々、カイリのお父さんのポケモンなの」

レイジの心中に答えるように、ヒメカが口を開く。

「カイリのお父さん?」

「ええ、あの人の父親……ゲンリさんも優秀なポケモントレーナーだったのよ。」

それでカイリは、このセキエイ大会の為にゲンリさんに頼み込んだの、そして今は認められて……彼の手持ちになった」

「……………」

凄まじい電気エネルギーだ、ヒカリやライコウにも引けを取らない。

「エレキブル、かみなりだ!!」

両手を上げ、フィールド全体を包み込むようなかみなりを放出させるエレキブル。

「かげぶんしん!!」

「甘いんだよ。エレキブル、じしんだ!!」

その巨体で凄まじいじしんを繰り出すエレキブル。

その威力は、ただの一撃で分身ごとシザリガーにダメージを与えるほど。

「凄い……電気タイプなのに地面タイプのじしんが使えるなんて……」

「あのエレキブルはマルチタイプなの、だから初見ではああいう戦法でやられるトレーナーも多かったらしいわ」

「かみなりパンチ!!」

「クラブハンマー!!」

かみなりパンチとクラブハンマー、両者の技がぶつかり合い火花が散る。

しかし――

「今だエレキブル、捕まえろ!!」

身体に生えた二本の尻尾を使い、シザリガーの腕を拘束する。

「くっ……!!」

『おーっと、シザリガーがエレキブルに捕らわれてしまった!!』

「ばくれつパンチだ!!」

シザリガーの身体に、凄まじい威力のばくれつパンチを連射していくエレキブル。

しかし、シザリガーはエレキブルの尻尾によって逃れる事ができない。

「かみなり!!」

そして――特大のかみなりがシザリガーを包み込む――!!

悲鳴が響き、かみなりが収まった時には。

「シザリガー、戦闘不能！ エレキブルの勝ち！」

シザリガーは戦闘不能に陥り、そのまま後ろへと倒れ込んだ。

『決まったー！！ まずは一勝目を勝ち取ったのは、カイリ選手のエレキブルだー！！』

「うわぁ……凄いパワーだね、あのエレキブル」

「パワーだけじゃない、あらゆる状況にも対処できるマルチスキル……さすが、カイリが選んだ最強メンバーの一角だ」

「確かに。あの戦い方は見事としかいいようがない」

しかし、まだ一体目を倒しただけ、勝負は始まったばかりだ。

「——たいしたパワーだな、そのエレキブル」

「まあな。もつとも……俺が初めから鍛えたわけじゃねえんだけど」

「パワーなら……こちらもこれを出すか。」

——ケッキング、出てこい！！」

『さあ、ケイジ選手二体目のポケモンはケッキングだー！！』

「っ」

ケッキングを見て、カイリを始めとする者達の表情が曇る。

当然だ、あのケツキングによってジャノビーは危うく殺され掛けたのだから。

（けど、今度はそんな事させねえぞ！！）

「ケツキング、ビルドアップだ」

「レイジ、ビルドアップって何？」

「自分の攻撃力を底上げする技だよ、ただでさえあのケツキングのパワーは凄まじいのに……このまま詰まれると手がつけられなくなるぞ」

「エレキブル、でんじほうだ！！」

「ビルドアップ」

「何……？」

エレキブルの攻撃を受けながらも、ケツキングは尚もビルドアップを重ねていく。

「ならこのまま一気に蹴散らしてやる。エレキブル、かみなり！！」

「――ビルドアップだ」

『おっと？ ケツキング尚もビルドアップを続けております。』

確かに攻撃力はかなり上昇したが、これでは先に体力が保たないぞー？』

実況の言う通り、あれだけの大技を受け続けられいかにケツキングとて戦闘不能になる。

現に、ケツキングの身体はふらついていた。

「トドメだエレキブル、ばくれつパンチ!!」

このまま勝負を決めようと、ケツキングに向かっていくエレキブル。

しかし……。

「――ねむるだ」

ケツキングはすぐさま身体を横にして、そのまま寝入ってしまった。

『ここでケツキング、ねむるを使ったー!!』

「たしかねむるって体力を回復させる技だね？」

「そうです。でも……そのまま寝入ってしまうので、いくら体力を回復させても――」

「っ、拙い――!!」

「なるほど、そういう使い方か」

「えっ……?」

カグヤ達3人の視線が、レイジとロストへと向けられる。

「カイリ、すぐさまエレキブルを下がらせるんだ!!」

聞こえないとわかっていても、おもわずそう叫んでしまった。

——眠っているケッキングに向かっていくエレキブル

その瞬間、ケイジはある指示を告げた。

「——ねごとだ」

そして、エレキブルの攻撃が見事に空振りする。

眠ったままのケッキングが、ねごとを発動させ攻撃を回避したのだ。

エレキブルは、大技の隙の為動けない。

そこに——強化されたアームハンマーが叩き込まれる——!!

「エレキブル!!」

そのパワーは凄まじく、巨体であるエレキブルが軽々とフィールドの後ろの壁まで叩き込まれるほど。

『ビルドアップにより大幅な強化が施されたアームハンマーが見事命中!』

体力を回復しながら反撃を繰り出した見事な攻撃だ——!!』

「エレキブル!!」

噴煙の中に消えたエレキブルに呼びかける。

すると……ふらつきながらも、エレキブルは壁から這い上がってきた。

『まだダウンしていないとは、かなりのタフネスのようです!!』

「——エレキブル、戻るんだ!!」

モンスターボールを掲げ、傷ついたエレキブルを戻す。

——既にケッキングは目を覚ましている

エレキブルから受けたダメージは完全に回復しており、結局無傷な状態にさせるのを許してしまった。

（やっぱりつええ……）

口だけでなく、ケイジの实力は確かに本物だ。

とにかく、あのケッキングをなんとかしなくてはただダラダラとやられていくだけだ。

しかし、パワーで押し切ろうとしても無駄だろう、今のケッキングは大幅にパワーアップを果たしている、下手に向かっても返り討ちに遭う。

ゴウカザルの「オーバードライブ」ならなんとかなるかもしれないが、あれは序盤で使うような代物ではない。

（なら……スピードで勝負するしかねえ）

三体目のボールを手に取り、フィールドに投げる。

「頼むぜ——ゾロアーク!!!」

「————っ」

『なんと、カイリ選手の三体目はゾロアークだ!』

「ほう……ゾロアークか、初めて見るな」

「カイリ……この大会で初めてゾロアークを使うのよね……」

「そういえばさ、ゾロアークって強いのか?」

「さてね……ゾロアークが戦う姿を見た事がないし、あのポケモンは凄く珍しいからデータも少ない。

でも……カイリが最高と信じて手持ちに加えたんだ、きっと強いよ」

「ゾロアーク、相手のパワーは桁違いにすげえから、スピードで攪乱するんだ!!!」

カイリの指示に、顔だけで向けて頷くゾロアーク。

「ケイジ、まだまだ負けたわけじゃねえぞ!!!」

「こっちもだ、行くぞカイリ!!!」

「おう、かかってきやがれ!!!」

第57話 ライバル対決！カイリ対ケイジ！！（後書き）

遂に始まった準々決勝。

はたして、勝利するのはカイリかケイジか……。

第58話 激闘バトル〜カイリ対ケイジ!〜 (前書き)

カントーリーグ・セキエイ大会、準々決勝一回戦、確執を持つカイリとケイジのバトルが始まった。

序盤から激しいバトルを繰り広げ、エレキブルが見事シザリガーを撃破。

しかしケッキングのパワーの前に、スピードで対抗する為にかいりはゾロアークを繰り出す……。

第58話 激闘バトル〜カイリ対ケイジ!!〜

「ケツキング、すてみタックル!!」

ビルドアップによりパワーアップしたケツキングが、ゾロアークへと向かっていく。

まともに受ければ、大抵のポケモンは一撃で戦闘不能にされる攻撃はしかし。

——ゾロアークに当たる事はなく、フィールドにある岩の塊を粉砕しただけだった

(速い——!!)

『ゾロアーク速い、ケツキングの一撃を避けるだけでなく、容易に後ろへと移動した!!』

「シャドークロー!!」

漆黒の爪を展開し、ケツキングへと向かうゾロアーク。

それを迎え撃とうと身構えるケツキングだが。

気がついた時には、ケツキングの身体にシャドークローによるダメージが刻まれていた。

「連続でシャドークローだ!!」

再び猛撃するゾロアーク。

「ケツキング、アームハンマー！」

姿を捉え、アームハンマーを叩き込むケツキング。

しかし——その攻撃は見事に空を切る。

その代わりと言わんばかりに、ゾロアークの攻撃は面白いくらい命中していく。

「あれ？ ケツキングって結構遅いのかな？」

「違うよ、ゾロアークが速すぎるんだ」

パワーでは劣っているが、スピードでは圧倒的にゾロアークが勝っている。

現に、ケツキングは先程から一度たりともゾロアークを完全に捉える事ができないでいた。

「ケツキング、ねむる！」

「させるかよ、はかいこうせん！！」

眠って回復しようとするケツキングを、ゾロアークが放ったのはかいこうせんが見事阻止する。

ダメージが大きかったのか、ケツキングの身体が大きくぐらついた。

「よしっ！ ゾロアーク、そのまま畳み掛けろ！」

「ケッキング、まもる！」

まもるが発動し、シャドークローを弾き返す。

「戻れ、ケッキング」

その隙に、ケイジはケッキングをボールへと戻した。

（ちっ……惜しいな）

このままダメージを与え続ければ、厄介なケッキングを戦闘不能にできたのだが……。

「――サンダース、出ろ」

『ケイジ選手、三体目のポケモンはサンダースだ！！』

「サンダース……イーブイの進化系だよね」

「かなり素早いわよ、それに電気技もかなり厄介だし……」

（さあカイリ、どう戦うんだ？）

「サンダース、でんこうせっか！」

「ゾロアーク、こっちもでんこうせっかだー！」

縦横無尽にフィールド中を駆け抜けながら、激しくぶつかり合うゾ

ロアークとサンダース。

『なんという素早い攻防でしょうか！ どちらも一步も譲らず激しい戦いを繰り広げています！』

「速い、ね……」

どうにか目で追っていきけるが、ちよつとでも見逃すとあつという間に姿が見えなくなってしまうほどだ。

「……今の所は、互角か」

「いや——僅かにサンダースが有利だな」

ぼつりと呟くロストに、全員が視線を向ける。「パワーはほぼ互角のようだが、スピードではサンダースが勝っている。

それに……どうやらサンダースの特性がゾロアークに及んでしまったようだ」

「特性……？」

「——せいでんき、ね」

「えっ、もうそんな季節だっけ？」

「……………」

決してボケたわけではない、彼女は本気で言っているのだ。

しかし、それでも……拳を握りしめられずにはいられない。

「直接攻撃をした相手を一定確率でまひ状態にする特性だよ。この攻防で、ゾロアークはその特性によってまひ状態になってる。

今は持ち前のスピードでなんとかなってるけど……」瞬間、サンダースにミサイルばりを撃たれ、ゾロアークが地面へと倒れ込んでしまった。

「ゾロアーク!!」

「サンダース、かみなりだ!」

「くっ……まもる!」

すぐさま指示を出すカイリ。

しかし、まひ状態になったゾロアークは技を繰り出す事ができない――!

サンダースのかみなりが、ゾロアークの身体を包み込む。

『まともに受けてしまったー!! はたしてゾロアークは無事なのか!?』

苦しげなうめき声を上げながらも、ゾロアークはどうにか立ち上がる。

『なんとゾロアーク、あれだけの攻撃を受けながらもまだ立ち上がりました。なんとというタフネスでしょうか!!』

しかし、かなり苦しそうです!』

（くそっ……！）

もう長くは保たない、ゾロアークの様子を見ればすぐにわかる。

しかし、そんなゾロアークに無慈悲にも攻撃を仕掛けるサンダース。

「トドメを刺せサンダース、チャージビーム！」

「頑張れゾロアーク、まもるだ……！」

苦しげに顔を歪ませながらも、ゾロアークはどうかまもるを発動させサンダースの攻撃を防ぐ。

だが——まだサンダースの攻撃は終わらない。

「ミサイルばり……！」

四方八方からゾロアークを連べ打ちにしようと発射されるミサイルばり。

「イチかバチかだ……ゾロアーク、ナイトバースト……！」

——暗黒が広がる

波紋状に広がる闇が、全てのミサイルばりを弾き飛ばしていく。

「シャドーボール……！」

「かわしてかみなりのキバ……！」

ゾロアークのシャドーボールを回避し、その隙を狙ってかみなりのキバを突き立てるサンダース。

決まった――サンダースは勝利を確信し笑みを浮かべるが。

――その慢心が、命取りとなる

掴まれる身体。

ゾロアークによって拘束されたと気づくのに数秒。

しかし、それはあまりにも遅すぎる反応だった。

サンダースに向かってニヤリと笑うゾロアーク、その表情にサンダースは言いようのない恐怖を感じた。

「ゾロアーク、そのまま飛び上がってギガインパクトだ!!」

推進剤を使ったかのような跳躍で、空高く飛び上がるゾロアーク。

必死でもがき脱出しようとするサンダースだが、がっちりと掴まれている為に抜け出せない。

「かみなり!!」

ケイジの声に反応し、特大のかみなりを放出するが……それでもゾ

ロアークの拘束は解かれずそして。

ギガインパクトによる衝撃、サンダーの全身へと襲いかかる。

『ゾロアーク、なんとサンダーを抱えたままギガインパクトで強引にダメージを与えた!!』

確かに効果はあったみたいだが、これではゾロアークにも相当なダメージが行き渡ったはずだ!』

「……ゾロアーク」

噴煙で、互いのポケモンの状態を確認する事はできない。

——そして、ようやく視界が晴れた時には

「ゾロアーク、サンダー、両者共に戦闘不能!」

『なんとこの事でしょうか、まさかのダブルノックアウトだあっ!!』

「……たいしたものだな、あのゾロアーク」

「ええ、まひ状態のままよく相打ちまで持っていましたよ」

これでカイリは一体、そしてケイジは二体のポケモンが戦闘不能になった。

数の上では今の所カイリが優勢だが、バトルの優劣を完全に決める要素にはなり得ない。

「――行け、グライオン」

「ゴウカザル、お前の出番だ!!」

グライオンとゴウカザルが、同時にフィールドに顔を出し睨み合う。

「れんぞくぎり！」

先に仕掛けたのはケイジ、グライオンの両腕が光りゴウカザルへと向かっていく。

「ゴウカザル、マッハパンチだ!!」

それを、スピードで勝るマッハパンチで迎え撃った。

（くっ……あのグライオン、はええっ!!）

スピードで勝るはずのマッハパンチでも、グライオンの攻撃のスピードと互角だった。

飛び上がり、グライオンと距離を離すゴウカザル。

「グライオン、ストーンエッジ!!」

「ゴウカザル、かえんほうしゃだ!!」

グライオンのストーンエッジを、ゴウカザルのかえんほうしゃが全て灰と化する。

「なっ――」

その瞬間——グライオンは既にゴウカザルの前にまで移動し。

「——どくづき」

毒を込めた腕を、ゴウカザルの腹部に叩き込む。

「ウツ、キィ……………！」

苦しいのか、ゴウカザルの声にも先程までの元気はなかった。

「……拙い、毒状態になってる」

「ああ。どくづきの追加効果が発生してしまったようだな」

「そんな……………！」

「ゴウカザル、戻れ！」

ボールにゴウカザルを戻すカイリ。

毒状態を治す事はできないものの、これでゴウカザルのダメージを極力減らす事ができる。

次にゴウカザルを出した時は……。

『さあ、カイリ選手のポケモンは——』

「フローゼル、頼む……！」

少し表情を強ばらせながらも、フローゼルはフィールドに出ながらグライオンを睨む。

「……カノンはまだ出さないのか」

グライオンは空中に浮いている、地上のフローゼルでは僅かに狙いづらい。

極力カノンは最後にしたいのか……それとも、何か別の理由があるのか。

「グライオン、シザークロス！」

フローゼルに突進していくグライオン。

「フローゼル、アクアジェット！！」

それをアクアジェットで迎え撃ち——両者共に大きく吹き飛ばされる。

「れいとうビーム！！」

「何——！！？」

しかし、吹き飛ばされながらも無理矢理れいとうビームを発射するフローゼル。

さすがに避けられず、グライオンはまともに受け地面へと落ちていく。

それと同時に、受け身ができないままフローゼルも地面に叩きつけられた。

『フローゼル、無理な体勢で見事反撃を果たしましたが、両者共にダメージが行き渡る!!』

「フローゼル、ふぶきだ!!」

素早く立ち上がり、地面に倒れているグライオンにふぶきを叩き込む。

れいとうビームのダメージが大きかったのか、グライオンは立ち上がれずふぶきによって壁際まで吹き飛ばされた。

(やったか……!?)

——だが

『おーっと、グライオンまだ立ち上がった!!』

「くっ……!!」

れいとうビーム、そしてふぶきの連続攻撃を受けたというのに、グライオンはまだ戦闘不能になっていなかった。

……フローゼルも、そろそろ限界だ。

「グライオン、ギガインパクトだ」

「なっ——!?!」

拙い、この状況でそんな大技を受ければ間違いなくやられる。

「フローゼル、グライオンを止める！ れいとうビームだ！！」

ギガインパクトを止めるため、再びれいとうビームを放つフローゼル。

しかし——紙一重で避けられてしまい。

「焦ったな。グライオン、ギガインパクト！！」

ギガインパクトが発動し、れいとうビームを放ったばかりで動けないフローゼルに向かっていく。

凄まじい衝撃音と共に、フローゼルの身体が地面に投げ出された。

「フローゼル、戦闘不能！ グライオンの勝ち！」

『グライオン、ギガインパクトで見事フローゼルを倒しました！！
しかし、グライオンの体力も残り僅かになってしまったようです
！！』

「……並ばれたな」

「カイリ……」

おもわず、唇を噛みしめるヒメカ。

「……フローゼル、ありがとう」

フローゼルをボールに戻し、次のポケモンを取り出すカイリ。

（……ジャローダやエレキブルじゃ不利だ、けどゴウカザルは毒状態……あと残っているのは）

ラティアス——カノンのみ。

（——仕方ねえ!!）

エレキブルが入ったボールを戻し、カノンが入ったボールを手にする。

「頼むぜ……カノン!!」

そして、遂にこの大会で初めてカノンを場に出した。

『カイリ選手、五体目はなんとラティアスだ!!』

一気に加速していく観客達。

ラティアスという伝説のポケモンが出てくるとは思わなかったのか、中にはどよめく者も。

「……ラティアス」

さすがのケイジも、カノンの存在には僅かな驚きを見せた。

「カノン、頼む!!」

「はい、マスター!!」

『ラティアス、グライオンと同じく空へと上がります。どうやら空中戦を行うようです!!』

「グライオン、シザークロス」

「カノン、ドラゴンダイブだ!!」

ほぼ同時に技を繰り出し、ぶつかり合うカノンとグライオン。

だが、圧倒的な威力でカノンはグライオンを地面へと叩きつけた。

「グライオン、戦闘不能! ラティアスの勝ち!」

『凄まじい威力だ!! なんと僅か一撃でグライオンを倒してしまっただぞ!!』

しかし、それはフローゼルがグライオンに対しダメージを与えていたからこそだ。

ボールに入ったフローゼルに、改めて感謝の言葉を口にするカイリ。

「――フライゴン」

「フライゴンか……」

「じめんとドラゴンタイプだね……」

「だとしたら、カイリさんのカノンが有利ですよ!」

「だが、それと同時にフライゴンも有利ということになる」

「カノン、ドラゴンクロー!!」

「フライゴン、こちらドラゴンクローだ!」

空中で、激しく交差しながら互いのドラゴンクローを叩き込んでいくカノンとフライゴン。

パワー、スピード、どちらをとっても互角だった。

(カノンと互角かよ……あのフライゴン、凄すぎだ……)

伝説のポケモンであるカノンと互角に戦うフライゴンは、やはり驚愕に値する。

でも——絶対に負けるわけにはいかない!!

「はがねのつばさ!!」

「まもる!」

カノンのはがねのつばさが、フライゴンのまもるによって弾き飛ばされる。

「ソーラービーム!」

すかさずソーラービームを発射するフライゴン。

はがねのつばさを弾かれバランスを崩したカノンは、まともに攻撃

を受けてしまった。

「カノン!!」

「だ、大丈夫です!!」

「よし、ミストボール!」

「りゅうのはどう!!」

ミストボールとりゅうのはどうがぶつかり合い、噴煙が巻き起こる。

『噴煙により、どちらも互いの姿が見えなくなりました』

「見えなくてちよいどいいさ」

「えっ……」

「フライゴン、すなあらし!!」

噴煙を消し飛ばし、フィールド中を包み込むような強大な砂嵐が巻き起こった。

「しまった——!」

「くっ……」

先程の噴煙と同じく、フライゴンの姿を捉える事ができない。

「れんぞくぎりだ」

「え——きゃあっ!?!」

背後からの奇襲。

慌てて後ろを向くが、既にフライゴンの姿はなく。

「うぐっ!?!?」

再び背中を攻撃され、苦しげな声を上げるカノン。

その後もフライゴンの姿を捉える事ができず、どんどんダメージだけが蓄積していく。

『ラティアス、フライゴンの攻撃を避けられずダメージを負い続けております!!--』

このまま勝負を決めてしまうのか!?!?

「カノン、すなあらしから脱出するんだ!!--」

「させるか。りゅうのいぶき!」

上空に飛んで脱出を試みるカノンだが、それが隙を生み出しフライゴンの攻撃をまともに受け地面へと落下していった。

「う、く………」

地面に倒れ、苦しげに息を吐くカノン。

「ラティアスといってもたいした事はないな。フライゴン、トドメ

のドラゴンクローだ!!」

砂嵐から飛び出し、倒れているカノンへと向かっていくフライゴン。

「カノーーーーン!!!!」

カノンの名を呼ぶカイリの声が、戦いの場に木霊した――

第58話 激闘バトル〜カイリ対ケイジ!〜(後書き)

絶体絶命の中、迫り来るフライゴン。

果たして、カイリとカノンはこのピンチを抜け出す事ができるのか
!!

第59話 決着の炎くカイリ対ケイジ!!く（前書き）

カンントリーリーグ・セキエイ大会、準々決勝一回戦。

激しいバトルを繰り広げる中、遂にカイリはカノンをバトルに投入。

圧倒的な強さでグライオンを撃破するものの、続くフライゴン戦にて窮地に立たされていた。

第59話 決着の炎くカイリ対ケイジ!!く

「カノーーン!!!」

「くっ……」

迫るフライゴンを睨むカノンだが、ダメージが大きいのか立ち上がれない。

そのまま、フライゴンのドラゴンクローがカノンを弾き飛ばす――
―!

「カノン、頑張れ!! りゅうせいぐん!!」

「っ、この――!!」

吹き飛ばされていく身体を止めると同時に、りゅうせいぐんを発射させるカノン。

「フライゴン、かわせ!」

十数個のりゅうせいぐんが迫る中、落ち着いた動きで回避していくフライゴンだったが……。

「サイコキネシス!!」

回避に専念し過ぎていたのか、カノンのサイコキネシスによって動きを封じられる――!!

「何——！！？」

『あーっと！！ ラティアスのサイコキネシスがフライゴンの動きを封じ、その身体に容赦なくりゅうせいぐんが叩き込まれる！！』

サイコキネシスの呪縛で回避できず、りゅうせいぐんの嵐をその身に受けていくフライゴン。

その隙に——カノンは最後の一撃を繰り出す準備を終えた。

「今だカノン、はかいこうせん！！」

——放出される特大のはかいこうせん

それと同時にサイコキネシスの呪縛から逃れるフライゴンだったが、既にはかいこうせんは眼前にまで迫っており——

爆音と共に、はかいこうせんがフライゴンを地面へと叩き落とした。

「フライゴン、戦闘不能！ ラティアスの勝ち！」

「はあ…はあ…はあ…」

無事勝利したカノンであったが、やはりダメージが大きく荒い息を繰り返す。

「カノン、戻るんだ」

これ以上は戦えない、そう判断したカイリはカノンをボールに戻し別のボールを手取る。

「ジャローダ、頼む!!」

『カイリ選手はジャローダを繰り出しました!』

「えっと……ケイジはシザリガーとサンダースとグライオン、そしてフライゴンが戦闘不能になったんだよね……」

「対するカイリは、戦闘不能になったのはゾロアークとフローゼルだけね」

「じゃあ、カイリさんの有利です!」

「——いや、そうも言えないよ」

レイジの呟きに、カグヤは首を傾げる。

「どうして?」

「確かにケイジは四体、カイリは二体と数の上では有利だ。

だけど、カノンもエレキブルもかなりのダメージを負ってる、特にカノンはたぶんもう戦えないと見ていい。

それにゴウカザルだって毒状態になっているから、無傷なのはあのジャローダだけなんだ」

対するケイジは、まだ場に出してもいないポケモンが一体残っている。

そう考えると、まだカイリが有利だとは言えない。

「じゃあ、ジャローダがこのままやられたら……」

「勝負は、どうなるかわからなくなる」

『さあ、ケイジ選手はどんなポケモンを繰り出すのか……』

「――まさか、ここまでレベルを上げてとは思わなかった」

「へっ、言っただろ。この間とは違うってな！」

「……そうだな。お前は確かに強くなったし変わった。

――そして、変わったのはオレ自身もだ」

「えっ………?」

「お前の力、あいつに見せてやれ。――出ろ、バシャーモ!!」

「――っ」

「バシャーモ……」

「どうやら、あれがケイジの切り札みたいだね……纏う雰囲気は他とは違う」

「ジャローダ、出したばっかでわりいけど、戻ってくれ!!」

言いながら、モンスターボールを構えるカイリだったが……ジャローダが一声鳴きそれを制する。

「ジャローダ……お前、まさかこのまま戦うつもりか?」

大きく頷くジャローダ。

「ダメだ、お前の方が不利なんだぞ？」

それはジャローダにもわかっているはずだ、だというのにどうして……。

ジャローダはそれ以上反応を返さず、黙ってバシャーモを睨みつける。

……決意は、変わらないらしい。

「……わかったよ。ならこのまま頑張ってくれ！」

「あれ？ カイリ、ジャローダに戦わせるつもりみたいだよ」

「どうして……草タイプのジャローダに炎タイプのバシャーモをぶつけるなんて……」

「……ジャローダは、自分が戦いたいと言ってたんだ。だからカイリも変えなかった」

「なんでかな？」

「……ジャローダは、自分がバシャーモに勝てない事がわかってる。だから、少しでもダメージを与えておこうと負ける覚悟で戦おうとしているんだ」

無傷なのは自分だけ、そしてバシャーモも無傷の状態。

しかし、他のメンバーは全員手負いの状態、だからジャローダは自分を犠牲にしてこんな提案をしてきたのだ。

全ては——カイリを勝たせる為に。

「ジャローダ、エナジーボールだ!!」

「バシャーモ、かえんほうしゃ」

ジャローダの放ったエナジーボールを、バシャーモのかえんほうしゃが粉碎する。

それだけでは飽きたらず、そのままジャローダにかえんほうしゃが向かっていく——!

「ジャローダ、まもる!」

しかし、ジャローダのまもるによりかえんほうしゃは防がれ。

——眼前には、既にバシャーモの姿が

「とびひざげり」

鈍い音と共に、ジャローダの身体に叩き込まれるバシャーモのとびひざげり。

「かわらわりだ」

流れるような連続攻撃。

かわらわりを受け、ジャローダの身体が吹き飛ばされ——岩に叩きつけられる。

「ジャローダ!!」

「これで最後だ、かえんほうしゃ!!」

動けないジャローダに、トドメとなるかえんほうしゃが放たれる。

このタイミングでは避けられない——!!

「ジャローダ、イチかバチかのギガインパクト!!」

避けられないなら迎え撃つのみ、苦しげな表情のままギガインパクトを解放するジャローダ。

「そう来ると思ったぞ」

「なんだと!?!」

「っ、拙いそれは——!!」

カイリの声と、ケイジの意図に気づいたレイジの声が放たれたのは、ほぼ同時。

そして——バシャーモは更なる一手を繰り出す。

「バシャーモ、フレアドライブだ!!」

裂帛の雄叫びを上げながら、全身を炎で包んだバシャーモがジャローダに向かっていく。

ジャローダはかえんほうしゃを切り裂きながら、バシャーモへと向かっていつているものの、先程よりギガインパクトの威力が弱まっている。

「ジャローダ!!」

おもわず叫ぶカイリだが、もう遅い。

ジャローダとバシャーモが激しくぶつかり合い。

爆音と共に、押し負けたジャローダが地面へと叩きつけられた……。

「ジャローダ、戦闘不能! バシャーモの勝ち!」

「……………」

『凄まじいバシャーモの連続攻撃により、たまらずジャローダがダウンしてしまったー!!』

「——これで、事実上数の上でも互角になったな」

「カイリ……」

「カイリさん……」

不安げな表情を浮かべるヒメカ。

ミカンに至っては、手を強く握りしめ今にも泣きそうだ。

(……カイリ、これからどうする?)

「……ジャローダ、ありがとな」

ジャローダを戻し、次のポケモンを取り出す。

「――主人想いのジャローダだな、負けるとわかってて少しでもバシャーモにダメージを与えておこうとするとは」

「……………」

そうだ、ジャローダは初めからそのつもりで戦っていた。

しかしそれでも……ジャローダの頑張りを踏みにじるように、バシャーモはさしたるダメージを負ってはいない。

だからこそ、ジャローダの想いを無駄にする事は許されないのだ。

「――エレキブル、行ってくれ!!」

『再びフィールドに現れたエレキブル。ですがやはり先程のダメージが大きいのか苦しそうです!』

「エレキブル、かみなりだ!!」

「バシャーモ、あなをほる!!」

真っ直ぐ向かってくるかみなりを、あなをほるで回避するバシャー

モ。

『バシャーモのあなをほるが炸裂ー！！　こうかはばつぐんだー！！』

凄まじいパワーで攻撃され、エレキブルの巨体が空中へと投げ出された。

「バシャーモ、つるぎのまいだ！！」

その隙に、攻撃力を更に上げるバシャーモ。

「くっ……負けるなエレキブル！！」

呻きながらも、どうにか立ち上がるエレキブル。

しかし、もはや限界だとカイリ以外の誰もが気づいた。

「ここまでだ……バシャーモ、ブレイブバード！」

攻撃力を大幅に上げたバシャーモのブレイブバードが、エレキブルへと向かっていく。

避けられる間合いではなく、エレキブルもそれがわかっているのか迎え撃つ。

「エレキブル、かみなりパンチ！！」

真っ正面から、両手によるかみなりパンチでブレイブバードとぶつかり合うエレキブル。

「……………互角」

「——じゃない!!」

レイジがおもわず叫んだ瞬間。

——ブレイブバードが、かみなりパンチごとエレキブルを打ち破った

「——エレキブル、戦闘不能! バシャーモの勝ち!!」

「————」

『な、なんという強さだバシャーモ!! ジャローダ、そしてエレキブルと立て続けに打ち破りました!!』

「そ、そんな……」

「——追い詰められたな」

「……………」

カノンは、もはや戦う事はできないだろう。

そうなる……もはや残されたのはゴウカザルのみ。

対するケイジは、バシャーモとケッキングも残っている。

ケッキングはともかく、バシャーモはまだ反動ダメージしか負ってはおらず余裕が残っている。

——絶体絶命だ

（カイリ、君はここで負けるの……？　僕との勝負をせずに、こんな所で終わるの？）

違う、彼はこんな所で負けるはずなどないはずだ。

ケイジは強い、けれどカイリだって同じくらい強いのだ。

だから——きつとこんな所で終わるはずがない！

「……………」

「カイリ、まさか勝負を捨てたわけじゃないだろうな？」

「……………」

「お前の力はそんな程度だったのか？　オレには負けないと、ああ言ったのは虚勢を張っただけに過ぎなかったのか？」

——見せてみる、お前とお前が信じたポケモン達の力を」

「……………ケイジ、やっぱりお前は凄いよ」

「……………？」

「俺はお前の事、ポケモンを大事にしない最低な奴だとばかり思ってたけど……本当はそうじゃないんだな。

お前は確かにポケモンという存在を憎んでいるけど、同時に……すごく大事にしてる。お前のポケモン達を見るとすごくわかるよ」

「……………」

「だから、お前とお前のポケモン達はすごく強いんだろうな。
俺、ガキだからさ……今の今まで、わかんなかった。
レイジは気づいていたから、お前に対して友好的になってたんだ
ろうな」

「……………フン」

「だからこそ、お前になら“コレ”を見せる価値がある」

言いながら、カイリはボールを投げる。

中から出てきたのは――

「…………ゴウカザル」

毒で苦しそうに顔をしかめながらも、その瞳には確かな闘志を宿しているゴウカザル。

「見せてやるよレイジ、俺のゴウカザルの…………真の力を!!」

「————」

空気が変わる。

ゴウカザルを中心に、フィールドに漂う空気に熱気が帯びていく。

そして――

「いくぜゴウカザル!!」

——オーバードライブだ!!」

「ウツキヤアアアアアアアッ!!!!」

凄まじい雄叫び。

——瞬間、スタジアム全てを包み込むような熱がゴウカザルから溢れ出した

「何——!!?」

『な、なんという凄まじい熱気でしょうか!!』

ゴウカザルのパワーが桁外れに上がっています!!』

「な、何あれ!?!」

熱風から顔を隠しながら、カグヤが叫ぶ。

「——凄い。あれがゴウカザルのオーバードライブ」

話には聞いていたが、見たのは初めてだ。

そしてそれは——レイジの想像など遥かに超えるほどの凄まじいものだった。

「おれのレジェンドと互角か、それ以上だな……」

寡黙なロストも、ゴウカザルのパワーに驚きを隠す事ができない。

「いくぜ、ケイジ!!」

ゴウカザル、ほのおのパンチだ!!」

「っ、気をつけるバシャーモ。ヤツのパワーは遥かにアップしてるぞ。ほのおのパンチ!!」

ゴウカザルとバシャーモのほのおのパンチがぶつかり合う。

しかし——ゴウカザルはあっさりとバシャーモを弾き飛ばす。

「なんだと——!?!」

つるぎのまいによる大幅な攻撃力上昇がまるで無意味なように、ゴウカザルはそれ以上のパワーを以てバシャーモを打ち負かした。

「マッハパンチ!!」

(っ、速——)

速い、などというスピードではない。

たった一瞬でバシャーモとの距離をゼロにしたゴウカザルのマツハパンチが、まともに命中し壁にめり込むほどの威力で叩きつけられた。

「――バシャーモ、戦闘不能！　ゴウカザルの勝ち！！」

『な、なんというパワーとスピード！！　瞬く間にバシャーモを打ち倒しました！！』

「す、凄い……凄すぎるよ」

観客席にいるカグヤ達は、もはや驚く事しかできないでいた。

「……………」

しかし、カイリが流れを掴んだというのに、レイジの表情はあまり浮かばれない。

（……このままじゃ、もう保たない）

――そう、レイジにはわかっていた

ゴウカザルのオーバードライブが、如何に強力過ぎる技なのかを。

展開している今も反動ダメージを受け続けているのだ、それに今のゴウカザルは毒状態。

……速く勝負を決めなくては、ゴウカザルは負ける。

『いよいよ追い込まれたケイジ選手、はたして逆転する事はできるのでしょうか!!』

「ケツキング、これで最後だ!!」

場に出すのは、ケイジ最後のポケモンであるケツキング。

「カイリ、悔いの残らないよう全力でお前を倒してやる」

「上等だ。かかってきやがれ!!」

「ケツキング、アームハンマー!!」

「ゴウカザル、ほのおのパンチ!!」

——激しくぶつかり合う両者の拳

オーバードライブによる劇的なパワーアップをはたしたゴウカザルにも、ケツキングは食らいついていた。

「インファイト!!」

「連続でアームハンマー!!」

——打撃音だけが、場を支配する

観客の誰もが声援を忘れ、黙って戦いを見守っていた。

「グッ……!!」

永遠に続くかと思われた拳戟も——ゴウカザルの呻き声により、終わりを迎えた。

「っ、ゴウカザル!!」

（オーバードライブの反動が限界を迎えたんだ……!!）

「ケツキング、かわらわり!!」

——迫るケツキングの一撃

——だが、ゴウカザルとカイリはそれを待っていたのだ

「——ブルーフレア・バーストだあっ!!!!」

至近距離からの最強技。

瞬間——耳をつんざくような爆撃音と共に。

会場全てが、噴煙によって覆い尽くされた——

——次第に晴れていく噴煙

観客達は、勝負の行方がどうなったのか、視線をフィールドに向けた。

そして……その場に立っていたのは。

「――ケツキング、戦闘不能！ ゴウカザルの勝ち！！
よって勝者、フタバタウンのカイリ選手！！」

青い炎を宿し、雄々しく立つゴウカザルの姿があった……。

……。

「――ケイジ！！」

――夕日が沈み始め、もうすぐ夜が訪れる中

ゆっくりと、セキエイ高原を後にしようとするケイジに、カイリは声を掛けた。

準々決勝一回戦を終え、あのバトルの興奮も冷めやらぬ中、ようやく静寂が訪れた頃。

ケイジは何も言わずに、カイリ達の前から姿を消そうとしたのだ。

「……どうした？」

「どうした、じゃねえよケイジ、何で黙っていなくなろうとしたんだ」

「……いちいちさよならを言う必要があったのか？」

「あのなあ……」

相変わらずなケイジに、カイリはうなだれ他は苦笑を浮かべる。

「――強くなったな、お前もお前のポケモンも」

「まあな。……ところで、これからどこに行くんだ？」

「さてな。特に決めてはいない、だが……また一からやり直す。お前達に、少しは教わった事があるからな」

そう言いながらケイジは僅かに笑みを浮かべる。

そこに今までの冷たさはなく、年相応の少年の笑みそのものだ。

「……なあ、ケイジ」

「何だ？」

「次はいつ会えるかわからねえから、レイジが訊きたい事があるんだってさ」

「レイジが……？」

「……………」

カイリの前に立ち、レイジは口を開く。

「ケイジ、君は……僕達と同じように人間にはない力を持ってるよね？」

前から気になっていたこと、確かめなくてはならない事を、訊くために。

「……やはりな。お前達もか」

「お前達もって……お前も何か、不可思議な力を持ってるのか？」

「ああ」

短く肯定するケイジに、カイリ達は全員驚愕の表情を浮かべる。

「僕はポケモンと話す能力、カイリは未来を視る力と……対象の時間そのものを巻き戻す力。そして君は――」

「――オレは、対象を別の空間へ移動させる力だ」

「別の、空間……」

「みんな覚えてる？　コガネでカイリと戦った時、ケッキングが一瞬でジャノビーの真上に現れた時のことを」

「あつ、じゃああれが……」

「そうだ。それがオレの力だ」

「なるほどなあ……けど、まさか俺やレイジみたいな力を持つ奴が他にいるなんてな……」

「ケイジ、君はその力は生まれた頃からあるの？」

「ああ。物心つく頃にはあった、尤も……オレ自身どうしてそんな力があるのかわからんがな」

「……………」

やはり、彼も自分の力を完全に理解しているわけではないようだ。

しかし、レイジの思った通りケイジの能力は空間を渡る能力だった。

（……ますます、ディアルガとパルキアの関係に近くなった）

この能力には、謎が多すぎる。

せめて、何か手がかりのようなものがあれば……。

「何を考えているのか知らないが、今は試合の事だけを考えていた方がいいんじゃないか？」

ケイジに言われ、レイジも我に返る。

そうだ、確かに気にはなるが今の自分には試合が待ち受けているの

だ。

「…………じゃあな」

「もう、行くの？」

「別にお前達の仲間になったわけじゃない、オレにとってお前達は倒すべき相手だ」

「ちえ……そういう所は変わんねえよな」

「——カイリ、せいぜい無様な負け方はするなよ」

「余計なお世話だよ！」

皮肉めいた笑みを浮かべながら、ケイジは再び歩き出す。

「ケイジ！！」

「……………？」

「元気でな！！」

「……………ああ」

短くそう返し、今度こそケイジは行ってしまった。

「さてと……後はお前達3人だな」

「でもカイリ、私とヒメカはレイジ達と当たらなかったから、きっ

と余裕だよ」

「あなたねえ、そんな楽観的な考え方じゃ負けるわよ？」

「大丈夫大丈夫、なんとかなる！！」

お気楽なカグヤに、全員が呆れたようにため息をつく。——そんな中、レイジは一人思考に耽た

(……ロストさんに、今の僕が勝てるのか？)

エンジュでは手も足も出なかった彼に、はたして自分の戦いは通用するのだろうか……。

不安だけが、彼の頭を占めていた——

第59話 決着の炎々カイリ対ケイジ!! (後書き)

激闘の果てに、準決勝へと駒を進めたカイリ。

そしてレイジは、強敵であるロストに勝つ事ができるのか……？

セキエイ大会の激闘は、まだまだ続く!!

第60話 挑む最強者！レイジ対ロスト！！（前書き）

カントーリーグ・セキエイ大会準々決勝。

カイリは見事ケイジに勝ち、準決勝へと進む事ができた。

そして……今日はいよいよレイジとロストの試合となる……。

第60話 挑む最強者！レイジ対ロスト！！

【ティナside】

〈……………んっ…………〉

気がつくとき、わたくしは外で立ち尽くしていた。

ベッドには、お父様とカイリが静かに眠っている。

いや…………カイリは大いびきを掻いているから、正確には静かにという表現は間違いだ。

〈……………まだ、こんな時間ですか〉

午前五時前、ようやく朝日が顔を出す時間帯だ。

だというのに、寝ぼけてボールから飛び出してしまったらしい。

恥ずかしくなり、誰も見ていないのに顔を赤くしてしまった。

〈……………お父様〉

規則正しい寝息を立てながら、夢の世界に漂っているお父様。

目も覚めるような美しい髪を、無意識のうちにこの手で触れていた。

〈……………〉

今日は、いよいよロストとのバトルだ。

カイリ、カグヤ、そしてヒメカは既に準決勝へと進んでいる。

まあカイリはケイジと当たったからともかく、お父様やロストと戦わなかったカグヤとヒメカは、割とあっさり準決勝に進めたのだが。

つまり、あと準決勝に進めるのは……お父様かロスト、どちらか1人だけ。

……勝てるのだろうか、そんな不安が頭によぎる。

彼は強敵だ、特にバクフーン——レジェンドの力は桁外れだと思う。

エンジュでは、わたくしは手も足も出ずに敗れてしまった。

わたくしは強くなった、もちろん他の皆さんも。

けれど……それでも、ロストに勝てるのかと問われれば、答えを出す事はできない。

戦う前から結果などわからないのは当然だが、勝てると思うという言葉すら出てこなかった。

……恐がっていないと言ったら、嘘になる。

負けるのがではなく……お父様を勝利させられないのが、だ。

きつと負けても、お父様は「よく頑張ったね」とわたくしを労って

くれる。

しかし……わたくしは絶対に納得できないだろう。

お父様の一番のパートナーという自負がある以上、わたくしは絶対に負けられない。

これは意地だ、全てはお父様を勝利へと導くための。

――両手から光り輝く剣を取り出す

サイコセイバー、わたくしとお父様が協力して生み出した新たな技。

この剣が、勝利を導く剣になりますようにと。

わたくしは掲げ、暫しそのまま立ち尽くしていた。

【ティナ side】out――『さあ、いよいよ準々決勝も最後の試合となりました。

はたして勝つのはレイジ選手か、それともロスト選手か！』

「……いよいよ、だね」

「ああ……」

「レイジさん、勝つ事ができるんでしょうか……？」

「わからない。ロストもかなりの強さを秘めたトレーナーだし……」

「けれど、レイジくんならきつと勝てるわよ」

背後から聞こえる声。

「シロナさん！」

振り向くと、そこには両手にアイスを持ったシロナの姿が。

「ってシロナさん……何ですかそのアイスは」

「欲しいの？」

「そういう意味じゃなくて……」

「ここに来る途中の売店で買ったの、結構美味しいからつい買いすぎちゃった」

確かに買いすぎである、なにせ両方ともにトリプルなのだから。

なんだか緊張感が一気に薄れてしまい、カイリ達は揃ってため息をついた。

「——レイジくん、調子はどうだった？」

「朝は特にいつもと変わらなかったと思いますけど……」

「……………そう」

「？ 何かありました？」

「いえ……きつと気のせいね」

何故か、彼が少し焦りのようなものを抱えている風に見えたのだが……カグヤがいつも通りと言うならそうなのだろう。

「ところでシロナさん、昨日までチャンピオン席で観てたのに、今日はどうしてここに？」

「こっちの方がよく見えるから、それにあっちだとワタルが色々うるさいのよ。」

実況顔負けにいちいち説明するから、反応するのも面倒だし……」

「な、なるほど……」

心底うんざりした表情を浮かべている辺り、よほど相手をするのが面倒だったのだろう。

そうこう話しているうちに、両者がフィールドまで移動する。

「始まるぜ」

「うん……」

再び、カグヤ達の周りに緊張が走る。

だというのに、相変わらずシロナは呑気にペロペロとアイスを食べていた。

しかし——その瞳の色は真剣そのもの、チャンピオンとして戦いを

見守る姿勢だ。

（頑張っ、レイジくん……）

『両者共に、一体目のボールを取り出しました!!』

「レイジ」

「なんですか？」

「あれから、お前は強くなれたか？」

「……強く、なれたと思います」

自信はない、たとえば自分が強くなれたと思っていても、結果がそれに繋がるわけではないのだから。

「お前らしいな……謙虚なものだ」

「……………」

「楽しみだ、お前とのバトルでおれはまた何かを得られるかもしれない。」

そしてそれ以前に……ずっとお前と本気で戦いたと思っていた」

「——僕もです。そして……今度こそ僕が勝ちます」

「よく言った。ならば……勝負だレイジ!!」

「——アクセル、お願い!!」

「――ルカリオ、出ろ」

「―――っ」

「ルカリオ……リオルの進化系」

「あのルカリオ……私のルカリオと同じくらい強いわね。よく育てられてるわ」

「えっ、シロナさんのルカリオと……!?!」

つまりそれは、凄まじい力を秘めているということ。

それでは、アクセルに勝ち目は……。

（さあレイジくん……どう戦うのかしら?）

交換するか、それともこのまま戦うか……。

「アクセル、相手はルカリオだけど……このまま戦うよ!」

へえっ……あ、はい父上!!!」

「……………」

僅かに眉を潜めるシロナ。

「……シロナさん、どうかしましたか?」

「……なんでもないわ」

「……………」

明らかになんでもないようには見えないが、試合に集中する為にカグヤは視線を向けた。

「先攻はロスト選手から、それでは……試合開始!!」

「ルカリオ、はどうだん」

「アクセル、こっちもはどうだんだ!!」

アクセルとルカリオ、両者のはどうだんがぶつかり合い――破られたのはアクセルのはどうだん。

「かわしてインファイト!!」

「こちらもインファイトだ」

はどうだんを避け、一気に踏み込み拳の連打を叩き込むアクセル。

しかし、それは吸い付くようにルカリオの拳に止められてしまう。

「くっ……はっけい!!」

「ボーンラッシュ」

はっけいを繰り出そうとした瞬間、ルカリオはボーンラッシュを展開しアクセルを殴り飛ばす。

〈がっ——！？〉

「そのまま追撃しろ」

間合いを詰めるルカリオ。

「バレットパンチで弾き飛ばして！！」

〈くっ——うおおっ！！〉

脚で吹き飛ばされる自分の身体を支えながら、振り下ろされるボンラッシュを弾くアクセル。

「とびひざげり！！」

すぐさま左の脚でとびひざげりを仕掛ける——！

が、それはルカリオの右手で受け止められ瞬時に投げ飛ばされた。

身体を回転させながら、フィールドに着地するアクセル。

『こちらもさすがと言った所でしょうか、序盤から激しい戦いを繰り広げています！！』

「くっ………」

やはり強い、こちらの攻撃を確実に止めるだけではなく、反撃すら行うとは……。

(……妙だな)

歯を食いしばるレイジとは違い、ロストは眉を潜めていた。

自分は有利な状況、それを疑っているわけではないが……アクセルに技のキレがないように見える。

予選を見てきた限りでは、レイジとアクセルのコンビネーションは見事だった、それは今も変わらないかもしれない。

だがしかし、それでも今までよりキレがなくどこか違和感を感じるのだ。

それに……レイジの様子もどこかおかしい。

この間戦った時とは違う、どこか焦りの色が見え隠れしているような……。

「アクセル、踏み込んでクロスチョップ!!」

「ルカリオ、両腕でメタルクロード」

繰り出されるアクセルのクロスチョップ。

それを、両腕によるメタルクロードで真っ向から受け止めるルカリオ。

「くそ……っ!!」

(レイジ、何を焦っている……?)

「アクセル、そのままとびひざげり!!」

「ルカリオ、受け止めろ」

鍔迫り合いになりながらのとびひざげりを、ルカリオは踏むように脚を動かしアクセルの攻撃を防ぐ。

「離れて!! その後に『テトラコンビネーション?だ!!』」

「っ、レイジくんまだそれは早い——!!」

おもわず口に出すシロナ。

アクセルは一度間合いを広め、すぐさまテトラコンビネーションの為に再び踏み込んだ。

——繰り出されるバレットパンチ

それを、ルカリオは全て弾いていく。

へっ、りゃあ——!!」

続いてとびひざげり。

しかし、それも片腕で防がれ——

「勝負を急ぎすぎだレイジ、ルカリオ——『フォースアサルト』!!」

「何——!!?」

〈ぐっ……！？〉

アクセルの脚を掴み拘束した状態で放ったのは……あくのはどう。

攻撃を与えると同時に、ルカリオはアクセルの脚を離し瞬時に別の攻撃を仕掛ける。

それは——りゅうのはどう。

〈がは——っ！？〉

受け身などできず、地面を削りながら吹き飛んでいくアクセル。

そこに、間合いを詰めたルカリオのかわらわりが炸裂——！

〈ぐ、あ………〉

身体は止まったものの、大きく地面にめり込みアクセルが動かなくなる。

そこへ——トドメとばかりにはどうだんが撃ち込まれた——！

「アクセル——！」

「——リオル、戦闘不能——！ ルカリオの勝ち——！」

『まず先に一体目を撃破したのは、ロスト選手のルカリオだ——！
流れるような連続攻撃は、もはや見事としか言いようがないぞ——
——！』

「そんな……レイジさんが先に負けた……」

「あのルカリオ、かなりつええ………」

「……………」

「……なんか、レイジおかしいよ」

「えっ？」

「おかしいって……何がだよカグヤ？」

「上手く説明できないけど……レイジ、どこか焦ってる……」

いつもの彼なら、もっと慎重にバトルをするはずだ。

だというのに、攻撃一辺倒になって……あんな戦い方をする彼を、カグヤは見た事がなかった。

「……カグヤも、気づいたみたいね」

「シロナさん……」

「貴女の言う通り、レイジくんはどこか焦ってる……早く有利な状況にしたくて、アクセルとのコンビネーションもどこかぎこちないものになっていたし……」

それにあんなに早い段階で『テトラコンビネーション』を使うなんて、普段の彼なら考えられないわ」

「け、けど……あいつ特に様子がおかしいわけじゃなかったし……」

そう、戦う前はいつもの彼と変わらない様子だったはずだ。

だというのに、もしカグヤとシロナの言っている事が正しいなら……
一体彼はどうしたというのだろうか。

「……レイジ、ロストさんに前は手も足も出なかったから……もしかしてそれが影響してるのかな……」

「あり得るわね。前はまったく適わなかったから、今回も……。そう思って自分を見失ってしまう事もあるわ、私もそういう時があったから……」

「そんな……」

「じゃあ、このままじゃレイジの奴……」

「——このまま自分を見失えば、間違いなく彼は負けるわ」

「っ、冗談じゃねえぞそんなの……レイジ、しっかりしやがれ……！」

「……………」

アクセルを戻すレイジ。

……どれも彼のポケモンは強すぎる、このままではどんどんやられてしまうだけだ。

そう思い、レイジはルギアが入ったボールを手に取り……。

「マスター、何を焦っているのだそなたは」

ボールの中から響くルギアの声に、レイジは動きを止めた。

「ルギア……？」

「自分は焦っていないと言っても言うつもりなのか？」

余の目は誤魔化されんぞ、そなた……前にあの男に手も足も出なかったからといって、気持ちが悪くしているのではないのか？」

「――」

心を見透かされたかのようなルギア言葉に、レイジは口を閉ざす。

すると、ボールの中でルギアがため息をついたような気がした。

「迷うな、自分を信じよ。今までマスターは自分と自分のポケモン達を信じて戦ってきた、たとえばそれがどんな相手であったとしてもだ。」

ならば、今回も同じように戦えばよい。

余も皆も、マスターを信じておる。だから……自分を失うな」

「……………」

「皆も同じ事を考えておる、そなたのそなたの戦いを……余も、信じているから」

暖かく、優しい信頼に満ち溢れたルギアの声。

それが、レイジの中にある焦りが少しずつ薄れていった。

「……みんな、ごめん」

「――フン、マスターも人の子。故に間違いを侵すのも致し方ないと思うが……余を従えているのなら、もう少ししっかりしてほしいものだな」

「……そうだね」

「しかし、余の言葉っ自らの過ちに気づけたのならよし。後で余を褒めちぎるのならば許してやるぞ」

「ふふっ……ルギア、ありがとう」

構わぬ、そう告げおとなしくなるルギア。

（……レイジの雰囲気は元に戻ったか）

ようやく全力で戦えそうだ、そう思いロストの口元に笑みが浮かんだ。

『さあ、レイジ選手の二体目はどのポケモンになるのか!』

「……………」

手に持っているルギアのボールを腰に戻す。

そして――代わりに手に取ったボールの中に入っているのは……。

「ティナ、お願い!!」

『レイジ選手、二体目のポケモンはサーナイトだ!!』

「おいおい、もうティナを出すのかよ!!」

「やっぱり、まだ焦りがあるんじゃない……」

「さあ……どうかしらね」

少なくとも、シロナには心配する必要はないと思った。

何故なら、レイジの表情には焦りの色は見受けられないからだ。

「ティナ、か……」

「でんじほうだ!!」

「ルカリオ、ボーンラッシュで弾け」

迫るでんじほうをボーンラッシュで弾き、その勢いのままティナとの間合いを詰めるルカリオ。

「れいとうパンチ!!」

ぶつかり合うれいとうパンチとボーンラッシュ。

（互角か………！）

「かみなりパンチ！！」

「インファイト！！」

打撃音が、フィールドを包み込む。

しかし——弾き返されるティナの身体。

やはり格闘戦ではルカリオに比があるようだ。

「はどうだん！」

必殺のはどうだんがティナへと迫る——！！

それに対し、ティナはあの剣を展開した。

「ティナ、サイコセイバーだ！！」

「何——！？」

驚愕の声が、ロストの口から放たれる。

——切り裂かれるはどうだん

それと同時に、ルカリオへと迫るティナの両手には、光り輝く剣が握られていた。

「ルカリオ、ボーンラッシュー!!」

すぐさまボーンラッシュを展開し、光り輝く剣に振り下ろすルカリオだったが……。

ガラスが碎けるような音と共に、ボーンラッシュが碎かれる。

ティナの右の剣一本によって……。

へーこれで、終わりにしましょう)

左の剣で、ルカリオの身体を一閃。

その一撃でルカリオは地面へと倒れそして……。

「ルカリオ、戦闘不能! サーナイトの勝ち!!」

『なんと、見た事がないサーナイトの攻撃でルカリオがあつという間に撃破されたー!!!』

「……あれが、サイコセイバーか」

凄まじい威力に、カイリ達は言葉を失った。

(……どうやら、立ち直ったみたいね)

先程とは違う彼の様子に、シロナも笑みを浮かべた。

「もどれルカリオ。……たいしたものだ、この間とはまるで桁違い

にパワーアップしたようだな」

「はい。ティナは強くなりましたよ」

「それでこそ、本気で戦う価値があるというものだ。

——出る、ゲンガー」

ボールから飛び出し、ふわふわと怪しく浮游するゲンガー。

「…………ティナ、戻ってくれ」

へえっ？

ティナが首を傾げるのと、レイジが彼女をボールに戻したのはほぼ同時。

その行動に、ティナだけではなくロストも眉を潜めた。

流れを掴んできたというのに、ここでティナを戻すとは……。

「……………」

ボールを腰に戻し、別のボールを手取る。

「——ほう。ようやく余を出すのか」

「うん。ここで一気に流れを掴むよ」

「良い判断だと思うぞマスター、それに……余も戦えないのは非常につまらぬ」

「……そうだね。そろそろ君の力を見せてやらないと」

「うむ！ マスターの言う通りだ！！」

「……………」

違和感と、プレッシャーがああボールから感じられた。

「――ゲンガー、気をつけろ」

あのボールの中に入っている存在は、今までとは明らかに違う。

そう感じ、ゲンガーに注意を呼びかけるロスト。

そして――レイジは天高くボールを投げ、名を呼んだ。

「――ルギア、お願い!!」

第60話 挑む最強者！レイジ対ロスト！！（後書き）

遂に始まったレイジとロストの試合。

そして……いよいよ海の守り神と謳われる幻のポケモン、ルギアがその姿を現す。

はたして、勝利を手にするのはどちらになるのであろうか……。

第61話 熱き炎の限界バトル！レイジ対ロスト！！（前書き）

カントーリーグ・セキエイ大会準々決勝。

レイジとロストはどちらも譲らぬ攻防を見せ、レイジはいよいよルギアを戦いの場へと出すのだった……。

第61話 熱き炎の限界バトル！レイジ対ロスト！！

——澄んだ雄叫びが、スタジアムに響き渡る

「なっ——」

ロストの口から放たれたのは、驚愕に満ち溢れた声。

それだけではなく、会場にいる誰もが……ルギアの登場に目を見開いていた。

『な、なんと……ルギアです！！ 幻のポケモンと呼ばれるルギアが、今この場に現れました！！』

予想通りの反応に、レイジは構わずルギアへと口を開く。

「ルギア、初陣がこんな強敵になってしまつてごめんね。
でも、極力君を出すわけにはいかなかったんだ」

あまり、ルギアを他人に見せて驚かせたくはなかった。

けれど、ロストを相手にするにはどうしても彼女の力が必要なのだ。

謝るレイジの前に降り立ち、ルギアは微笑みながら言葉を返す。

「わかつているよマスター、そなたは余の事を想つてこの瞬間まで
出さなかったのだろう？」

幻などと言われ、余に不快な思いをさせたくないが故の選択だ、
喜ぶことこそすれ何故怒る事があるというのだ？」

「……ありがとう、そう言ってくれると嬉しい」

「マスター、余はマスターが望む事ならなんでも叶えてやりたい。
だから、そなたはただ余に命令すればよい。

——目の前の敵を倒せと言うなら、余はたとえどんな存在が相手
だろうと戦いそなたに勝利を与えてやる」

「うん……」

「ではマスター、余の戦いをとくと見ておるがよい!!」

猛々しくそう言い放ち、ゲンガーへと雄叫びを上げるルギア。

そのプレッシャー、気迫は凄まじくゲンガーはおもわず後ろに退が
ってしまった。

「ゲンガー、たとえ相手が何であろうとも倒せないポケモンなどこ
の世には存在しない。

気持ちで負ければ、その時点で相手以前に己に負けてしまう」

「その男の言う通りだぞゲンガー、余とて幻などと言われておるが
無敵というわけではない。

故に——本気で貴様を打ち倒す!!」

「よく言った。ゲンガー、シャドーボール!!」

「ルギア、こちらもしゃドーボールだ!!」

ゲンガーとルギアのシャドーボールがぶつかり合い、噴煙が巻き起

こる。

「シャドーパンチ」

「ぬっ——！」

その隙にルギアの上に移動したゲンガーが、シャドーパンチを繰り出す。

まともに受けるルギアだったが……その顔には笑みが。

「つばめがえし!!」

「そこを動くなよ!!」

シャドーパンチなど無意味と言わんばかりに、ルギアはゲンガーへと攻撃を仕掛ける。

巨大な翼を叩きつけられ、地面へと落下していくゲンガー。

「まだ余の攻撃は終わってはおらんぞ!!」

地面に叩きつけられる前に、ルギアのアクアテールがゲンガーをスタジアムの壁まで吹き飛ばす。

鼓膜を刺激するような爆音が、その凄まじい威力を物語っており……。

「ゲンガー、戦闘不能！ルギアの勝ち!!」

圧倒的な実力で、あっという間にゲンガーを戦闘不能へと追い込んでしまった。

『な、なんという強さでしょうか！　ゲンガーの攻撃をもものともせず、凄まじい破壊力であっという間に撃破してしまったー！！』

「や、やっぱりすげえなルギア……小さくなくても幻のポケモンの名は伊達じゃねえって事か……」

「それだけじゃない、あのルギアの物言いは尊大だけど……自身には微塵も慢心というものが存在していない。だからこそ、強大な力を持ちながらその心は強く気高く……そして、あれほどまでの能力を発揮できるのよ」

ルギア自身も、自分が無敵ではないと言っていた、それは間違いではなくたとえ幻と謳われる彼女であっても、普通のポケモンでも戦略次第では充分打倒できる。

しかし、彼女の傍にはレイジがいる。

彼を信頼し、安心して背中を任せている彼女は、間違いなく今大会最強レベルのポケモンだ。

トレーナーとポケモンの信頼関係は、能力差を埋める要因となる。

元々高い能力を持つルギアが、レイジという絶対的に信頼できるトレーナーと共に戦えば、まさしく死角なしだ。

「ゲンガー、戻れ。……まさか、ルギアをこの目で見る事になると

は思わなかった。

それに、お前との信頼関係も素晴らしいと言えるくらいだ」

「当然だ。余とマスターは運命の赤い糸とやらの括り付けられているからな」

「それを言うなら結ばれてる、だよ……。

括り付けられているって何さ？」

「ち、ちょっと間違えてしまったただけだ！　あまり細かい事を言うのは感心せんぞマスター！」

そうまくし立てるルギアの頬が、赤く染まっている。

それを見て、レイジはつい苦笑を浮かべてしまうのだった。

「――相手がルギアならば、こちらも切り札を出すとするか」

そう呟き、ロストはボールを投げる。

ルギアが相手なのだ、おそらくライコウが……そう思っていたレイジであったが、実際に出てきたポケモンは違うものだった。

『ロスト選手、三体目はバクフーンです！！』

はたして、幻のポケモンであるルギアを打開する事ができるのでありましょうか！！』

「レジェンド……」

「――ほう、先程のゲンガーとはまた違う力強さを感じるな。

マスター、心してかかった方がよさそうだぞ」

口調は先程と同じく軽いものだが、その奥底に秘めるのは……僅かばかりの驚愕。

「――レジェンド、今こそお前の“全力”を見せる時だ。お前の力を、レイジ達に見せてやれ」

「――――」

ロストが、レジェンドへとそう指示を出した瞬間。

「これは……………」

凄まじい熱気と、ルギアと同等と言えるほどのプレッシャーが、辺りを包み込んだ。

「な、なんだよこれ……………すげえパワーだ」

観客席にいるカイリ達ですら、レジェンドから感じる力の波に驚きを隠せない。

「…………蒼い炎」

レジェンドの背中から燃え上がるのは――鮮やかな蒼い炎。

それがどれだけの熱を孕んでいるか、見るだけでもわかる。

「まさか…………“もうか”なの？」

「もうかつて……たしか炎タイプの技の威力が大幅に上がる特性の事ですよね？」

「で、でも……それは体力が著しく消耗しなければ発動できないはずじゃ……」

そう、“もうか”や“げきりゅう”などといった特性は、そのポケモンの体力が少なくならなければ発動はしないものだ。

しかし、レジェンドは確かに“もうか”を発動させている。

そうでなくては、あの炎の強さを説明する事ができない。

「――驚いたか？ おれのレジェンドは自らの意志で“もうか”を発動できるんだ」

「なん、だって……？」

「尤も、“もうか”を発動させる機会など今までなかったが……お前相手ではそうはいかん。

今こそ、初めてレジェンドを本気で戦わせる機会がやってきたということだ」

「……………」

「――恐れるな、立ち向かっていけばよい」

「ルギア……」

「余を信じよ、自分を信じよ。勝つためにここに居るのならば、恐

れる必要など何もないではないか？」

「……そうだね。君の言う通りだ!!」

「うむ。そなたに勝利を」

「では行くぞ。――レジェンド、かえんほうしゃだ!!」

凄まじいパワーのかえんほうしゃが、ルギアに向かって放たれる。

「ルギア、ハイドロポンプだ!!」

対するルギアも、それをハイドロポンプで迎え撃つ。

両者の技はぶつかり合い、水蒸気を発生しながらも――互角の戦いを見せていた。

「かえんぐるま!」

「アイアンヘッドだ!」

今度は接近戦でのぶつかり合い。

「っ、ぐ――!!」

「ルギア!!」

だが、押し負けたのはルギアの方だった。

「オーバーヒート!!」

「くっ……アクアテールで切り裂いて!!」

迫るオーバーヒートを、ルギアはアクアテールで真っ二つに切り裂く。

瞬間、眼前にはレジェンドが次の攻撃を――

「先程と同じようにはいかんな!!」

「アイアンヘッド!!」

至近距離からのほのおのパンチを、アイアンヘッドで弾くルギア。

見事レジェンドを押し返したルギアだったが、ダメージを負ったのか地上に着地する。

「……何というバカ力だあのバクフーンは。さすがの余もそれなりに効いたな……」

「ルギア、大丈夫？」

「無論。しかし……余ではあのバクフーン……レジェンドといったか。

あやつを打倒する事はできんな」

「えっ――」

思いがけないルギアの言葉に、レイジはおもわず目を見開き彼女に視線を向ける。

「もちろんマスターが望むなら全力で倒す。しかし……余の言葉をマスターならば充分理解できると思うが？」

「……………」そう——このままではレジェンドには勝てない。

ルギアでは適わないという意味ではない、しかし本気のレジェンドはレイジの予想を遥かに超えた力を秘めていた。

強大な力を持つルギアと同等か、もしくはそれ以上か……。

とにかく、まだこのような状況でルギアを失うわけにはいかない。

「——ルギア、今は戻ってくれる？」

「マスターの意向に余は逆らわん、勝利する為ならば余の不満などそれこそ小さきことだ」

「ありがとう。ルギア、戻って!!」

『なんとレイジ選手、ここでルギアを戻してしまいました!』

「何やってんだレイジの奴、ここでルギアを戻すなんて……」

「彼の事だから、何か考えがあつての事だとは思うけど……」

「……………レイジ」

はたして、この選択が吉と出るか凶とでるか……。

「ヒカリ、お願い!!」

『レイジ選手、四体目はピカチュウだ!!』

「ヒカリ、相手のパワーは今までとは比べものにならない。距離をとって戦うんだ!!」

「ピカッ!!」

「なるほど……確かに正しい判断だが、おれのレジエンドにそんな戦い方が通用するかな？」

「通用するかしないかじゃない、意地でも通用させるんです!!」
ヒカリ、10まんボルト!!」

放たれる10まんボルト。

「かえんぐるま!!」

それを、かえんぐるままで蹴散らせながらヒカリへと向かっていくレジエンド。

「アイアンテール!!」

「ピカ……ッ!!」

真っ向からアイアンテールをぶつけるヒカリ。

しかし……やはりパワーの差は歴然なのか、大きく空中へと投げ出されてしまう。

「かえんほうしゃ！」

そこに、レジェンドのかえんほうしゃが迫る。

ヒカリは空中に投げ出され、回避する事が。

「リフレクター！！」

「かえんほうしゃにリフレクターなど通用しないぞレイジ！！」

「リフレクターの使い方は防御だけじゃない！」

瞬間、ヒカリはリフレクターを自分の左横へと展開し——それを壁蹴りのように蹴り飛ばしかえんほうしゃを回避した。

「あれは……私達がゾロアークと戦った際にヒメカさんが使った……！！」

「……あんなにあっさり盗まれるとはね、恐れ入ったわ」

「ヒカリ、連続でリフレクターを出しながらボルテッカー！！」

「ピカッ！！　ピカピカピカピカピカピカ……！！」

リフレクターを展開しながら、その上を走り続けるヒカリ。

だが、何故かボルテッカーを発動させたというのにレジェンドへと向かっていかない。

『どうした事かピカチュウ、バクフーンに向かわずにただリフレクターの上を移動し続けているぞ？』

「何のつもりかは知らないが、来ないのならばこちらから行くぞ。
レジェンド、ふんえんだ!!」

「今だヒカリ、距離をとって!!」

広範囲に及ぶふんえんから逃れ、レジェンドとの間合いを広げるヒカリ。

フィールドの上に着地した瞬間――ヒカリの身体から凄まじい電気エネルギーが発生した。

「そうか……！ リフレクターの上で移動を続けていたのは、ボルテッカーの攻撃をチャージする為だったのね!!」

そして、レジェンドを攻撃させその場から動かさないようにする為でもある。

「ヒカリ、フルパワーでボルテッカーだ!!!!」

「ピカピカピカピカピカピカ……ピッカッ!!!!」

限界まで高めたヒカリのボルテッカーが、レジェンドへと向かっていく。

「――レジェンド」

「――――」

瞬間、レイジの全身に悪寒が走った。

——このままヒカリを向かわせてはならない

攻撃させてはならないと、自らが警鐘を鳴らしていた。

だがもう遅い、今更ボルテッカーを中断させる事はできず、ヒカリとレジェンドがぶつかり合う瞬間。

「——シャイニングフレア」

ロストが、短くそう指示を出し。

レジェンドの口から、白銀に輝く光が解き放たれ。

瞬く間に、ヒカリとスタジアムを白く染め上げた。

「くっ……………」

あまりの光量に、おもわず目を逸らすレイジ。

そして——光が収まった時には。

「……………ヒカリ」

レジェンドの傍で全身に火傷を負ったヒカリが倒れている光景が、広がっていた……。

「ピカチュウ、戦闘不能！ バクフーンの勝ち！」

『な、何だったのでしょうか今の光は！？』

おそらく炎タイプの技と思われますが、それにしても凄まじい威力です！！ ボルテッカー状態のピカチュウを一撃でダウンさせてしまいました！！』

「……………」

信じられない、という気持ちちが正直ある。

しかし事実としてヒカリは倒され、バクフーンはまだ健在だ。

今はその事実だけを理解し、次に何をすべきかを考えるのみ。

そう自分に言い聞かせ、ヒカリをボールの中へと戻した。

「――シャイニングフレア、これがレジェンドの最強技だ。

実戦で使ったのは初めてだったが……まさか、これだけの破壊力があるとはな……」

ロスト自身もあの技に驚いているのか、表情を見ればそれを物語っていた。

「……ヒカリが、負けちゃった」

何のダメージも与えられずに、ヒカリは戦闘不能に陥った。

その事実は、観客として見ていたカグヤ達にもショックを与えるのに充分過ぎる。

「……………」

その中で、シロナはレジェンドの様子を見ながら眉を潜めた。

（レジェンドの表情が辛そうね……もしかしたらあのシャイニングフレアという技、フレアドライブのように反動ダメージを受けるのかしら……）

それも、普通の技とは比べものにならないほどのダメージを受けるのかもしれない。

直接的なダメージを受けていないというのに、レジェンドの表情はあきらかに辛そうだ。

そして、その事実はレイジも気がついていた。

「――レジェンド、戻れ」

（やっぱり……）

思った通り、あの技はレジェンドにとってかなり負担になる技だったらしい、だから有利な状況だというのに戻したのだろう。

「ラプラス、行け!!」

『ロスト選手の四体目はラプラスだ!! 水のフィールドではない

ため不利ではあるが、どう対処するのか見ものであります!!』

「ならこっちは……ソウル、お願い!!」

——ふう、ようやく僕の出番か。

待ちくたびれたと言わんばかりに、その場で伸びをするソウル。

『レイジ選手はアブソルを繰り出してきました、はたして勝負はどちらに転ぶのでしょうか!!』

「あれがアブソル……なんか可愛いな」

「あれ？ 図鑑で出てくるアブソルと少し違うね」

なんというか、毛並みやしなやかさなどが違う気がする。

「カグヤ、それは♂のアブソルの写真よ。あの子は♀なんだから姿が違うのも仕方ないわ」

「えっ、あの子♀なんですか!？」

「そうだけど、どうしてそんなに驚くの？」

「だって、ラティオスの話だとソウルは自分の事を「僕」って言うてるらしいから……」

だから、まさかソウルが女の子だとは思わなかったのだ。

「ラプラス、ハイドロポンプ!!」

「かわして10まんボルトだ!!」

ハイドロポンプを右に跳んで回避し、同時に10まんボルトを放出するソウル。

『アブソル、見事回避して10まんボルトが命中しました！ 効果は抜群だ!!』

——しかし

「なっ——」

——そんな、僕の技が効かない!?

ソウルの放った10まんボルトを無理矢理弾いたラプラスには、ダメーじらしいものが見受けられない。

「ソウル、効いてないわけじゃないよ。ただ……あのラプラス、かなりの体力を持ってる」

——なら、倒れるまで攻撃すればいいだけだ!

「ラプラス、ここえるかぜ!!」

広範囲に渡って放出されるここえるかぜ。

さすがにこれは回避しきれず、ソウルは顔をしかめながらもその場に留まった。

「れいとうビーム!!」

「かえんほうしゃ!!」

続いて放たれるれいとうビームを、ソウルはかえんほうしゃで迎撃する。

両者の技は互角——ではなかった。

——うあっ!?

「ソウル!!」

押し負け、れいとうビームの直撃を受けるソウル。

すると——ソウルの脚がその場で凍り付いてしまった。

「っ、れいとうビームの追加効果だ……!!」

「みずのはどう!!」

「ソウル、逃げるんだ!!」

そう声を掛けるレイジだが、脚が凍らされソウルは身動きがとれない。

——あぐっ!!

そのままみずのはどうを受け、宙に浮くソウル。

しかし、まだラプラスの攻撃は終わっていない。

「サイコキネシス!!」

捕らわれ、ソウルの身体が空中で静止し――勢いよく地面へと叩きつけられた。

「ソウル!!」

『ラプラスのみずのはどうとサイコキネシスのコンボが見事決まった!!』

これはかなりのダメージになったぞ!! はたしてアブソルはどうなったのか……』

――うつ、く……。

噴煙が晴れ、顔をしかめながらどうにか立ち上がるソウルの姿を視界に捉える。

だが、ダメージは大きく脚がおぼつかない。

「よく耐えた……だが次で終わりだ! ラプラス、ふぶき!!」

「くっ……ソウル頑張るんだ!! そのままギガインパクト!!」

第61話 熱き炎の限界バトル！レイジ対ロスト！！（後書き）

激闘が続くフルバトル。

はたしてソウルのギガインパクトは、ラプラスを打倒する事はできるのか。

そして、勝負の行方は？

第62話 勝利の剣、到来！レイジ対ロスト！！（前書き）

激闘を続けるレイジとロスト。

レイジはアクセルとヒカリ、ロストはルカリオとゲンガーを失い、互角の戦いを繰り広げていた。

続いて、ソウルとラプラスの戦いとなり――ラプラスの攻撃によりピンチに陥るソウル。

この状況を打開するために、必殺のギガインパクトを発動させたソウルであったが……。

第62話 勝利の剣、到来！レイジ対ロスト！！

「ソウル、ギガインパクトだ！！」

迫り来るふぶきを、ギガインパクトで迎え撃つソウル。

爆発が起き、両者の視界が塞がれた。

「――今度こそ終わりにしてやるぞレイジ。ラプラス、れいとうビーム！」

噴煙の中からソウルの影が見え、トドメの攻撃を放つラプラス。

ソウルは避ける事ができずに、そのままれいとうビームを……。

「なっ――」

驚愕は、ロストの口から放たれた。

れいとうビームはそのまま影を貫き――

「ソウル、シャドークローだ！！」

背後から現れたソウルのシャドークローが、ラプラスへと直撃した。

（……あの影は、かげぶんしんだったのか）

「10まんボルト！！」

追い討ちをかけるかのような、ソウルの10まんボルト。

たまらず叫び声を上げ、ラプラスは首を下げた。

「ソウル、このまま一気に畳み掛けるんだ!!」

「させるか! ラプラスハイドロポンプ!!」

「かわして!!」

「——っ」

紙一重、まさしくギリギリの間合いでハイドロポンプを回避するソウル。

そのまま地を蹴り、ラプラスの背中に飛び込んだ。

「かみなりだ!!」

——ラプラスの身体がかみなりに包まれる

「ラプラス、あられ!」

一声鳴き、瞬く間にフィールドに現れる冷たい空気。

すぐさまそれはあられとなり、ソウルを横殴りと吹き飛ばした。

「ソウル、10まんボルトだ!!」

着地と同時に10まんボルトを放つソウル。

しかし——それは吹き荒れるあられによってラプラスまで届く事はなかった。

その間にも、あられは容赦なくソウルの身体を痛めつけていく。

（あのあられをどうにかしないと………！）

ソウルもそろそろ限界に近い、だがそれはラプラスも同じだ。

このあられを何とかすれば、きっと何か打開策が生まれるはず。

「ソウル、あまごい！」

「何——！？」

空へと向かって、ソウルの雄叫びが木霊する。

刹那——空に雨雲が現れ雨が降り注いだ。

「見て、あられが消えてくよ！！」

「あまごいやにほんばれのような天候を変える技は、最後に放った技が優先されるのよ。」

つまり、後に発動したあまごいが先に発動したあられを消したの

「なるほど……さすがレイジだね！！」

「……いえ、だけどレイジさんは自分を不利な状況にただけです」

「えっ？」

「あまごいが発動している間は、水タイプの技の威力が上がってしまっんです。

すなわち、ラプラスの攻撃力が大幅にアップしてしまったんです」

（……本当に、あられを無くす為だけにあまごいを発動させたの？）

そんな単純な手を、彼がするとは思えない。

だとしたら、他にどんな目的で……？

「あられの脅威を取り除く方法にしては、浅はかだったな」

「……………」

「——ラプラス、ハイドロポンプ！！」

先程よりも更に凄まじい威力のハイドロポンプが、今度こそソウルを倒そうと放たれた。

「————」

レイジは指示を出さない、ソウルもその場から動かない。

そして——レイジはぽつりとソウルへと告げた。

「——ごめんね、ソウル」

辛そうな声で、謝罪の声を。

瞬間――

「な、に――！？」

ロストの口からは、驚愕に満ちた声が。

――フィールドには、視界を遮るような黄金色の光が溢れた

「これは――！？」

知っている、この光は間違いなく“かみなり”の光だ。

雨雲から槍のように、ラプラスへとかみなりが貫いたのだ。

誰が放ったのかなど、言わなくてもわかる。

――だが

「アブソル、ラプラス、共に戦闘不能！！」

それでも、ソウルの勝ちにはなりえなかった。

『絶体絶命の中、なんとアブソルは己を犠牲にした攻撃でラプラスと相打ちましたー！！！！』

「い、今……何が起きたんだ？」

「……あまごいによって強化されたハイドロポンプが、ソウルを倒したっていうのはわかったんだけど……」

「——あまごいで雨を降らせている間は、かみなりの技が必ず当たるようになるのよ」

「えっ……それ、本当ですか!？」

「ええ、だけど……ソウルは特大のかみなりを当てるために、ラプラスの攻撃をわざと受けた。

すなわち、自分を犠牲にする道を選んだのよ」

「そんな……」

「……レイジを勝たせるために、あそこまでしたのか」

「レイジくんのポケモン達は、それだけ彼を大切に想っているのよ。だからこそ、あんな選択を迷わず実行したのでしょーうね」

「……………」

アブソルを戻したレイジの顔は、罪悪感と申し訳なさにより泣く一歩手前のようなものになっていた。

「——アブソルの想いを無駄にするな」

「……………」

「アブソルはお前を勝たせるために、この選択を選んだんだ。
ならば、お前にはまだやるべき事があるはずだぞ」

「……わかっています」

そうだ、ソウルは自分を勝たせるために自らを犠牲にしてラプラスを倒してくれたのだ。

ならば、今自分がやるべき事は彼女に対して申し訳なく思う事じゃない。

「――リオン、お願い!!」

『レイジ選手、6体目のポケモンはリザードンだ!!』

「――ボーマンダ、出番だ」

『対するロスト選手はボーマンダを繰り出してきました!!』

「ボーマンダ……ドラゴンタイプか」

その中でも能力はかなり高い、どちらにせよ厄介な事になりそうだ。

しかも、ロストはまだ無傷のポケモンが一体いる。

それに、おそらくそのポケモンは……。

「ボーマンダ、りゅうのいぶき」

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

ぶつかり合うりゅうのいぶきとかえんほうしゃ、威力だけならばどうやら互角のようだ。

「ほのおのパンチ!!」

「ドラゴンクロー」

炎の拳と竜の爪、鏝迫り合いになりながら睨む両者。

「かみなりのキバ!」

先に仕掛けたのはボーマンダ、かみなりのキバがリオンの肩口に食い込んだ。

「リオン、ブラストバーン!!!」

痛みに耐えながら、至近距離からのブラストバーンでボーマンダを吹き飛ばす。

「よっしゃ、まともに効いたぜ!!」

「うん、これなら——」

「いえ、このままじゃ拙い——!!」

シロナが叫んだ瞬間、ブラストバーンの炎からボーマンダが這い出してきた。

「なっ……………」

そのままリオンへと向かうボーマンダ。

しかし、ブラストバーンの反動でリオンは動けない。

「後ろに回り込んで身体を掴め！」

後ろから、ボーマンダはリオンを羽交い締めにしながらかげり上がる。

「そのままちきゅうなげだ！！」

「負けるなりオン、はがねのつばさ！！」

きりもみしながら落ちていくリオンだが、はがねのつばさをボーマンダの身体に打ちつける。

だが、それでもボーマンダは離れずそして……。

「リオン！！！」

凄まじい衝撃音と共に、リオンの身体は地面へと叩きつけられてしまった。

『ボーマンダのちきゅうなげがリザードンにヒット！！　これはかなり効いたようだぞー！？』

「――ボーマンダ、トドメを刺せ」

「っ、リオン立つんだ！」

叫ぶようにリオンを呼ぶレイジ。

彼の声に反応し、どうにか立ち上がろうとするリオンだったが……。

——既に、ボーマンダは攻撃の準備を終えていた

「りゅうせいぐん」

空高く放たれるりゅうせいぐん。

それは荒ぶる隕石のように落下していき、倒れているリオンを連べ打ちにする——！

「リオン！！！」

土煙が、リオンの身体を覆っていく。

——避けられる間合いではなかった

倒れたままのリオンは、ボーマンダのりゅうせいぐんをまともに受け、あれでは戦闘不能に——

「——」

土煙から、一つの影がゆっくりと立ち上がった。

「……………リオン」

『なんと、あれだけのりゅうせいぐんを受けながらも、リザードン立ち上がりました！！！！』

歓声が、スタジアムに響く。

「す、すげえ……ちきゅうなげにりゅうせいぐんをまともに受けたのに」

「でも、あのままじゃリオンは……」

ここから見てもわかるくらい、リオンの身体は疲弊しきっている。

おそらく立っているだけでも辛いのだろう、あと一撃でも受ければ今度こそ終わりだ。

「ボーマンダ、はねやすめ」

「させるか——リオン、かえんほうしゃ!!」

苦しげな表情ながら、かえんほうしゃを吐き出すリオン。

むろん、そのような攻撃など当たるはずもなく、はねやすめを中断しあっさりと回避するボーマンダ。

（く、そ……身体が、動いてくれねえ……!!）

ただかえんほうしゃを吐き出しただけ、それなのに全身が軋んだ。

それだけボーマンダのパワーが凄まじかった事を物語っているのだが、そんな事リオンにはどうだってよかった。

（俺の身体、せめてあいつを倒すまでは保ってくれよ……!!）

みんな必死に戦っているのだ。

倒されたアクセル達の為にも、そして主人であるレイジの為にも、絶対に負けられない。

——俺は……俺は、絶対に負けねえ!!
負けるわけには……いかなえんだ!!

「ボーマンダ、はかいこうせん」

「リオン、フレアドライブだ!!」

——うおおおおっ!!

真っ向からはかいこうせんに向かっていくリオン。

フレアドライブの炎が、少しずつはかいこうせんを圧していく。

「頑張れ、頑張ってくれリオン!!」

——ぐっ、レ、レイジ……!!

互角の威力により、一向に勝負がつかない。

しかし……その均衡は無情なほどあっさりと崩される事になる。

——がつ!?

急速に、リオンの身体から力が抜けていく。

それと比例し、フレアドライブの炎も――

「リオーーン!!」

はかいこうせんに呑み込まれるリオンの名を絶叫するレイジ。

そして――噴煙が晴れた時には……。

「――リザードン、戦闘不能!　ボーマンダの勝ち!!」

悔しそうに顔を歪ませたリオンが、ボーマンダの前倒れ込んでいた……。

「リオンまで……!!」

「これでレイジに残されたポケモンは、ティナとルギアの二体」

「対するロストは三体、しかもそのうちの一体はまだフィールドにすら出ていない……」

誰がどう考えても、レイジにとって不利以外の何者でもない。

しかも無傷の一体は、おそらくライコウで間違いない。

――絶望的な状況

カイリ達の中で、レイジの敗北という結末が頭に浮かんだ。

「――負けない。レイジは絶対に負けないよ」

言い聞かせるような小さな呟き。

けれど、はつきりとした口調でカグヤは言った。

「勝負は、最後の最後までわからないわ。たとえどんなに絶望的な状況だとしても、彼なら……絶対に諦めない」

だから、カグヤもシロナも彼が負けるなど微塵も思っていない。

彼は勝つ、きっと勝ってくれる。

ただそう信じて……2人はじっと戦いを見守っていた。

『さあレイジ選手、この不利な状況からどう覆すのか?』

「……………」

どうする?

ティナを出すか、それともルギアを出すか……。

……けれど、どちらを出しても打開策が浮かばない。

相手に小手先な手口など通用しないし、力押しをした所で……。

(どうする……どうすればいいんだ)

嫌な考えばかりが頭に浮かび、戦意が失われていく……。

「――ならば、わたくしがお父様の勝利の剣になります」

「え――」

ボールから、勝手に飛び出してきた一体のポケモン。

「…………ティナ」

「お父様、諦めないでください。みんな勝利を目指して戦ってきたのです。だというのに……お父様が諦めてしまつては、わたくし達は一切何の為に戦えばいいのですか？」

「……………」

「わたくしが、必ずお父様に勝利を導いてみせます。ですから……ただわたくしを信じていてください」

「信じる……………」

――その、言葉で

緩み掛けていた心が、戦意が蘇っていく。

そうだ、どうして自分は逃げ腰になっているのか。

一度負けた相手だからといって、何故臆する必要があるというのか。

自分は1人ではない、支えてくれる仲間達がいるではないか。

ならば――自分のやるべき事は一つだけ。

「――ティナ、サイコセイバーだ!!」

彼女達の主として、戦うのみ――!

へはい、お父様!!」

嬉しそうな声を上げ、両手にあの光り輝く剣を握りしめる。

「ボーマンダ、遠距離から攻めるぞ。りゅうのいぶき!!」

接近戦では分が悪いと悟ったのか、遠距離から攻撃を仕掛けるボーマンダ。

それは間違いではない、間違いではないが……。

へ――そんな程度で、わたくしから逃れるおつもりですか?」

妖しく笑い、瞬間――ティナの姿が消えた。

「っ、ボーマンダ。後ろだ!!」

それでも反応できたロストとボーマンダは、見事と言えるかもしれない。

だが――そんな程度ではダメなのだ。

反応しただけでは、彼女の剣からは逃れられない。

――ボーマンダの悲鳴が木霊する

たった一息、ボーマンダの背後に回ったティナの身体がぐらりと揺れたと思った瞬間――既に七発もの斬撃をボーマンダの身体に刻んでいた。

「ドラゴンクロー!!」

上段から振り下ろされるドラゴンクロー。

それを、ティナは剣を十字に構えそれを受け止める。

「りゅうの――」

「ティナ、マジカルリーフ!!」

反撃する隙など与えない、ボーマンダが攻撃を仕掛ける前にティナのマジカルリーフが先に命中した。

技を受け、ボーマンダの身体がぐらつく。

へ――終わりです

それに、ティナは短くそう呟き――上下からの一閃により、ボーマンダを沈黙させた。

「ボーマンダ、戦闘不能！ サーナイトの勝ち！」

『やはり、レイジ選手のサーナイト強し！！ リザードンとの戦いのダメージが残っているとはいえ、ただの一撃も攻撃を受けずに撃破してしまったー！！』

「……………」

〈いい加減、出し惜しみをするのはやめていただけませんか？
ライコウは出さない、今すぐに〉

「大きく出たなティナ、まさか……もう勝つ気でいると？」

〈当たり前です。勝つ気でいなければ勝負にすらなりませんから。
わたくしはお父様にとっての勝利の剣、故に……考える事はその
一点のみです〉

「……………いいだろう。ならばお望み通り相手をさせてやる」

〈……………〉

剣を握り直し、身構えるティナ。

しかし、この戦いは意外な存在によって止められてしまう事に。

「待てティナ、ライコウの相手は余がしよう」

〈えっ…………？〉

おもわず振り向くと、そこには勝手にボールから出たルギアの姿が。

レイジも突然のルギアの行動に、目を見開いて驚いていた……。

第62話 勝利の剣、到来！レイジ対ロスト！！（後書き）

激しさを増す激闘。

いよいよ伝説のポケモン、ライコウが姿を現そうとしていた。

しかし、突然現れるルギアの意図とは！？

そしてレイジ達は、見事勝利する事ができるのであるだろうか。

第63話 ルギアの意地、ティナの猛撃！レイジ対ロスト！！（前書き）

激闘続くフルバトル。

互いに二体となり、遂にロストはライコウを場に出す。

迎え撃とうとするティナであったが、突然ルギアがライコウを倒す
と言って飛び出してきた……。

第63話 ルギアの意地、ティナの猛撃！レイジ対ロスト！！

「ティナ、悪いがライコウの相手は余がする」

〈ルギア……？〉

「……ティナ、戻って」

〈お父様まで……何故ですか？〉

「いいから、今は戻るんだ」

〈………〉

『おっと、レイジ選手サーナイトを戻しました』

〈……ルギア、どういうつもりなのですか？〉

「お前はバクフーンと戦え、余はライコウを代わりに倒そう」

〈ですから、どうしてあなたが勝手に〉

「余ではあのバクフーンは倒せぬ」

〈………〉

「お前が倒せ。悔しいが余では勝てぬ、だから……ライコウは必ず倒してみせよう」

〈ルギア……〉

「……すまぬなマスター、勝手な事をした。許してほしい」

その言葉に、レイジは首を横に振って応える。

「ティナ、ここはルギアに任せてくれないか？

君は……レジェンドを倒してほしい」

ルギアは自分ではレジェンドには適わないと言った、おそらくそれは事実だろう。

そして、レジェンドを倒せるのはティナしかないというのも……
また事実だ。

〈……畏まりました〉

頷き、レイジの隣に移動するティナ。

〈ですが、これからの戦いはここで見させてもらいます。

ルギア、あれだけの大口を叩いたのですから、負けるなんて許しませんよ？〉

「変なプレッシャーを掛けるでない、まったく……余の力を甘く見
てもらっては困るな」

『レイジ選手、ここで再びルギアを繰り出しました』

ルギアの出現に、観客からは歓声が響き渡る。

やはり幻のポケモンであるせいか、これではまるで客寄せパンダではないかと、ルギアは静かにため息をついた。

「――ライコウ、出る」

『出ましたーっ！！ 伝説のポケモンのライコウです！！
ルギアとライコウ、夢の対決となりました！！』

「遂に出たな……」

「ルギアとライコウ……考えてみたら、すごい対決だね……」

実況や観客達が盛り上がるのも、無理からぬ事かもしれない。

「――ルギア」

「安心しろマスター、余は負けぬ」

「たいした自信だなルギア」

「当然だ。余は負けぬ……負けるわけには、いかぬ。

余を信じ、余の我が儘を聞き入れてくれたマスターの為にも、ここで必ずライコウを倒してみせる！！」

雄叫びを上げ、威嚇するルギア。

そのプレッシャーは先程よりも凄まじく、味方であるレイジとティナですらおもわず萎縮してしまうほど。

だが、ロストもライコウも微動だにせず……最強の相手を迎え入れ

た。

「ライコウ、ルギアならばお前のアレを使うに相応しい相手だ」

そう告げた瞬間——空気が震えた。

「えっ……？」

〈これは……？〉

変わる。

空気が、スタジアム中に漂う全てが変わっていく。

「天候が……変わる？」

キッと空を睨むルギア。

すると、先程まで晴天だったというのに……みるみるうちに黒い雲が集まっていく。

（あまごい……？ いや違う、あれは……自然の雷雲……）

何故いきなり自然の天候が変わったのか、まるで誰かが呼び寄せたかのように……。

「ライコウは、雷の化身と呼ばれているそうだ」

「えっ？」

「そしてライコウは、自由に雷を呼び寄せる力があるとも言われている。その意味がわかるか？ すなわち——こういう事だ」

ライコウに指示を出すロスト。

「ライコウ、『雷鳴招来』!!」

空に向かって雄叫びを上げるライコウ。

瞬間、黒い雲から耳をつんざくような爆音と共に雷が落ちる。

——ライコウとルギアを避雷針代わりにしたかのように

「ちっ!!」

ルギアは間一髪で雷を避けたが。

ライコウはその場から動く事もせず、雷をその身に受けていた。

「なんだと……?」

「っ、ルギア、ライコウの狙いは……!!」

「わかっておる。……しかし、このような強化の仕方があるとは……これだから人間というのは面白いものだ!!」

驚きながらも、その声色には歓喜の色が。

（くっ……凄い電気エネルギーだ……!!）

ヒカリとは比べものにならないパワーだ、ここにいながらもそれを感じ取れる。

「マスター、まさか臆したのか？」

「……………」

「余は楽しいぞ！！ このような敵と戦えるのは実に愉快だ！！
それに、マスターと共に戦うのならば、誰が相手だろうと臆する必要などない！！」

「……………わかってるよ。僕だって…………絶対には負けない！！」

「よく言った！！ ならばいくぞマスター！！」

「ライコウ、チャージビーム！！！！」

ヒカリのボルテッカーに匹敵するほどの威力のチャージビーム。

「ルギア、ハイドロポンプだ！！」

それを真っ向からハイドロポンプで迎え撃つ。

——威力は互角、互いに相殺される

「かみなりのキバ！！」

「ドラゴンダイブ！！」

「ぐううう……………！！」

ぶつかり合うルギアとライコウ。

弾かれ、互いにフィールドの先まで吹き飛ばされるが、再びかみなりのキバとドラゴンダイブでぶつかり合った。

「かみなり!!」

「ふぶきだあっ!!」

ライコウはルギアにかみなりを。

そしてルギアはライコウにふぶきを叩き込み、両者共に地面へと倒れ込んだ。

「ぐ………っ!!」

『凄まじい技のぶつかり合いだ!! どちらも一步も譲りません!!』

「はぁ…はぁ…はぁ…」

だが、ルギアの息は大きく上がっている。

「やっぱりレジェンドとの戦いで……」

「けど、まだ負けた訳じゃない………!!」

「ルギア、シャドーボール!!」

「ライコウ、10まんボルトだ!!」

シャドーボールが10まんボルトとぶつかり、噴煙が巻き起こり視界を閉ざす。

刹那、ルギアは右横から殺気を感じ身体を向けるが。

「アイアンテール!!」

その時には既に、ライコウのアイアンテールがルギアの身体を地面へと吹き飛ばしていた。

「ぐ、あ………!!」

「ルギア!!」

「じんつうりき!!」

「しま——っ」

ルギアの身体が宙に浮く。

ライコウのじんつうりきは見事ルギアを捕らえ、そして——

「フルパワーでかみなりだ!!!!」

雷鳴招来によって大幅に威力が上がったかみなりが、ルギアの身体を貫いた——!!

「ぐ——あああああああつ!!!!」

あまりの威力に、雄叫びを上げるルギア。

「――、あ」

力なくうなだれ、ルギアは地面へと倒れ込んだ。

「ルギア……………！」

「まともにくらっちまいやがった……………あれじゃあもう……………」

「……………」

まだ負けてない、そう自分に言い聞かせカグヤは視線を逸らす事なく戦いを見つめる。

そうだ、最後の最後まで彼が諦めないのなら、自分だって最後までこの戦いを見続ける。

「ルギア、立つんだ。立ってくれ！！」

「……………」

ルギアは応えない。

瞳を閉じ、ピクリとも動いてはくれなかった。

「ルギア！！」

（……………ここまでだな）

ライコウのかみなりをまともに受けたのだ、如何にルギアとてあれには耐えられまい。

審判もそう判断をしたのか、一度ルギアの姿を見てから旗を挙げた。

「ルギア、戦闘——」

「ま、だ……だ………！」

「っ！！？」

『な、なんと！？ ルギア立ち上がりました！！』

あれだけの攻撃を受けたというのに、なんという耐久力でしょう！！」

「す、すげえ……立ち上がりやがった」

「でも、もうルギアは限界を超えてる……これ以上は」

「ルギア……」

「まだ、だぞ……余は、まだ負けて………ない！」

「………たいしたものだなルギア、よもやここまでとは………」

「はあ……はあ……余は、負けられぬのだ………たとえ誰であっても、絶対に負けぬ——！」

「いいだろう。ライコウ、アイアンテール——！」

空中から迫るライコウ。

しかし、立ち上がりはしたもののルギアはまだ動けない。

「なめるなあーっ!!」

すると、なんとルギアはその翼で包み込むようにライコウのアイアンテールを掴み上げる――!

「なっ――!?!」

この行動に、さすがのロストの驚愕するが……すぐさま次の行動に移る。

「かみなりだ!!」

「ルギア、投げ飛ばして!!」

ライコウのかみなりがルギアに命中する瞬間、空高く放り投げる。

「アクアテール!!」

ライコウは空中では身動きがとれない、そのままルギアのアクアテールをまともに受けてしまった。

だがまだだ、この連撃を逃せばもう勝つ事はできない。

「アイアンヘッド!!」

続いてアイアンヘッドでライコウを地面へと叩き落とす。

そして、ルギアは必殺の一撃を解放した。

「エアロブラスト!!」

高圧縮されたエアロブラストが、ライコウを貫きながら地面を削っていく。

噴煙が晴れ、地面が見えるようになった時には。

既にライコウは、戦闘不能へと陥っていた。

「あ……………」

しかし、ルギアもそのまま地面へと落下して——今度こそ動かなくなった。

「ルギア、ライコウ、共に戦闘不能!!」

『凄まじい攻防の果てはなんと相討ち!!』

これで両選手残りポケモンは一体だけとなりました!!』

「ルギア、意地を見せたわね……」

「これで残るはティナとレジェンド……」

これで決まる、この戦いの結末が。

「……ティナ」

〈はい……〉

頷き、フィールドに移動するティナ。

すぐさまサイコセイバーを両手に握り、身構える。

「……レジェンド、頼むぞ」

静かに告げ、レジェンドを場に出すロスト。

『さあ、泣いても笑ってもこれが最後！！ はたして勝負の行方はどうなるのでしょうか！！』

「……………」

「レイジ、楽しいな」

「えっ？」

「おれは楽しい、心が弾み笑みが零れる。

お前とのバトルを、このままずっと続けていたと思えるくらいに」

「ロストさん……」

「だが、このバトルも直に終わる……名残惜しいが、これで最後だ。」

——お互いに、悔いのないバトルをしよう」

「……………はい!!」

「レジェンド、ほのおのパンチ!!」

「ティナ、迎え撃つんだ!!」

互いに踏み込み、ぶつかり合うティナとレジェンド。

「かわらわり!!」

上段から繰り出されるかわらわりを、右に移動し避け、一閃。

だが、その一撃はレジェンドの炎に包まれた腕で掴まれる。

「っ、ふ——!!」

右の剣の振り下ろし。

弾かれ、レジェンドの口が開かれた。

「ふぶき!!」

「オーバーヒート!!」

至近距離からのぶつかり合いで爆発が起き、互いにフィールドの端まで吹き飛ばされた。

「負けるなティナ!!」

「レジェンド、まだいけるはずだ!!」

へ——やあああっ!!」

雷光じみた速さで踏み込み、双剣を振り下ろす。

それをシャドークローで受け止めるレジェンド。

「ふんえん!!」

「——っ」

自ら剣を手放し、間一髪ふんえんを回避するティナ。

だが、これにより彼女は丸腰だ。

「レジェンド、すてみタツクル!!」

「リフレクター!!」

すてみタツクルをリフレクターで防御しようとするティナだが……。

へっ、きゃ——!!?」

レジェンドのパワーは凄まじく、リフレクターを貫通しティナを吹き飛ばした。

『これはかなり効いたようだぞー!!』

「ティナ、頑張れ!!」

〈くっ……!!〉

「レジェンド、かえんほうしゃ!!」

〈っ、やあ——!〉

迫るかえんほうしゃを、再び展開した剣で切り裂く。

「はあ…はあ…はあ…」

互いに荒い息を上げるティナとレジェンド。

——次の一撃で決まる

誰もが、そう感じていた。

「——レジェンド、いけるか？」

静かに頷くレジェンド。

「——シャイニングフレアだ」

「何——!!？」

再び集まっていく凄まじい炎のエネルギー。

（さっきのアレをまだ放てるのか……!）

「いくらレジェンドでもあの技は一回が限度だが……お前相手ではこれを使わねば勝てん」

「くっ……」

拙い、あの威力の技を防ぐ手立てはない。

いくらティナの技をぶつけても、あれを相殺する事は……。

「――受けて立ちます、来なさい!!」

「えっ!？」

双剣を合わせ、一本の長剣にし構えるティナ。

「ティナ!!」

「逃げる事も防ぐ事もできないのなら、この剣で斬り伏せます!!」

「でも……」

「倒します。必ず……わたくしの剣で、あなたに勝利を……」

「……………」

美しいルビーの瞳が、レイジを貫く。

優しく、暖かな眼差しはただ一言。

「――大丈夫です、と」

静かに、そう告げていた。

「……………ティナ」

〈はい〉

「……………頑張って」

告げる言葉は、ただそれだけ。

けれど、ティナには充分過ぎる言葉だった。

へ——はい、見ていてくださいお父様!!!〈

満面の笑みを返し、ティナはレジェンドへと向き直る。

——勝利の剣を、手に入れるためにも

「————」

「————」

交差する視線。

互いに準備を終え、そして——

「——シャイニングフレア!!!」

「切り裂けえっ!!」

煉獄と光の剣が、真っ向からぶつかり合う――!

〈あああああっ!!〉

白き炎を、真っ向から光の剣で切り裂いていくティナ。

〈く、あ……!!〉

少しでも力を抜けば、それで終わりだ。

だが、今にも膝が折れ押し負けてしまいそうになる。

(負け、ない……。絶対にい……!)

負けるわけにはいかないのだ、皆がここまで頑張ってくれた。

その道を、絶対に閉ざすわけにはいかない。

「よくやったぞ……だがこれで終わりだ!!」

更に威力が増す炎。

〈うく……!!〉

膝が折れ、その場に座り込む。

「ティナ！！！」

へくっ、あ……く

負けない。

絶対に、負けない。

この剣は勝利の剣になると誓った、なら絶対に負ける事など許されない。

「負けるな……」

へく

「負けるな……勝ってくれ、ティナ！！！！」

へくっ、あああああああっ！！！！く

瞬間、スタジアムが白い光に包まれた。

誰もがその光から視線を逸らし、数秒間の空白が生まれる。

……………。

光が収まり、再び視線はフィールドへと向けられた。

「……………」

立っているのは——ティナとレジェンド。

しかし互いに背中合わせになるように立っていた。

はたして、勝負はどうなったのか……誰もが結果を知りたいと思う中で。

——結末は、レジェンドが倒れた事で訪れた

「——バクフーン、戦闘不能！ サーナイトの勝ち！！
よって勝者、マサラタウンのレイジ選手！！」

『決まった——っ！！ 激闘のフルバトルの征したのは、マサラタウンのレイジ選手だ！！』

「……勝った……」

謔言のように呟きながら、レイジはティナの元へ。

「ティナ、大丈夫？」

「……はい、大丈夫ですよ」

疲労困憊といった様子だが、その表情は笑顔だ。

「――レジェンド、よく頑張ったな」

労いの言葉を掛けつつ、レジェンドをボールに戻すロスト。

「おめでとうレイジ、いいバトルだった……おれが今まで体験したどのバトルよりも、いいバトルだったぞ」

「………僕もです」

差し出された手に、握手を交わす。

『これで準々決勝は全て終わり、いよいよ明日は準決勝となります
！！』

対戦カードは……これだあっ！！！！』

「―――っ」

対戦相手が決まり、レイジは息を呑んだ。

その相手は……。

「…………カイリ」

準決勝の相手は、最大のライバルであるカイリ。

「…………レイジとか」

カイリも対戦相手が決まり、表情を強ばらせる。

（できれば、決勝で戦いたかったけどな……）

しかし、そうと決まればやる事は一つだ。

悔いの残らないようにバトルをし——そして、必ず勝つ。

「…………ヒメカとだね」

「ええ。そういえば…………1対1でバトルするのは初めてね」

対するカグヤとヒメカも、互いの次の対戦相手を見つめながら、闘志を燃やしていた。

第63話 ルギアの意地、ティナの猛撃！レイジ対ロスト！！（後書き）

激闘のフルバトルを征したレイジ。

しかし準決勝の相手は、カイリとなった。

そして、カグヤとヒメカという組み合わせ。

波乱が待ち受ける準決勝、はたして……勝負の行方は……！！

第64話 友情バトル〜カグヤ対ヒメカ!〜 (前編) (前書き)

カントーリーグ・セキエイ大会も、遂に準決勝。

第一試合はカグヤ対ヒメカのフルバトルとなった。

第64話 友情バトル〜カグヤ対ヒメカ!〜（前編）

『さあ、セキエイ大会準決勝第一試合。両選手の入場です!!』

「ヒメカ、頑張れよ!」

「ヒメカさん、頑張ってくださーい!!」

応援席でヒメカに声援を送るカイリ達。

ヒメカも気づき、振り向いて2人に手を振った。

「けどよお……レイジの奴、ここまでする事なかったんじゃないか？」

眩きながら、自分達の反対側の席に座るレイジとシロナに視線を送り、カイリはため息をついた。

——ここから先は、別々に応援しよう

そう言ったレイジは、カイリ達とは正反対——つまりカグヤ側の席に座っている。

確かにこれからカグヤとヒメカがバトルをする、だから彼の言い分もわからないわけではない。

しかし……それでもカイリには納得しきれない所もあった。

そう考えている間も、カグヤとヒメカは所定の位置に立ち準備を終

える。

「……始まりますね」

カグヤの後ろ姿に視線を送りつつ、レイジは呟いた。

「ええ……2人の真剣勝負、一体どちらが勝つのかしら……」

「……………」

カグヤに勝ってほしい、そんな願望がすぐに頭を占める。

……そんな感情を抱いてしまうから、カイリ達の傍で観戦する事ができないのだ。

彼に対して、自分の身勝手な感情を押し付けたくないからこそ、レイジは半ば強引ともいえる手段を用いた。

それが正しいのか間違っていたのかはわからないが……。

「ヒメカ、私絶対に負けないわよ!!」

「それはわたしも同じよカグヤ、でも……精一杯楽しみましょう!!」

「うん!!」

互いに笑みを浮かべ、一体目のボールをフィールドへと投げた。

「カイン、行きなさい!」

「エネコロロ、レディーゴー!!!」

『ヒメカ選手、一体目はジュカイン。そしてカグヤ選手はエネコロロだ!』

「ヒメカ、カインをジュカインに進化させていたのか……」

「カグヤの奴、エネコをエネコロロにしてたみたいだな……」

「先攻はヒメカ選手から、それでは——試合開始!」

「カイン、タネマシガン!」

「エネコロロ、右に跳んで!」

先制するカインのタネマシガンを、右に跳躍して避けるエネコロロ。

小手調べ——そう思った瞬間には、既にカインがエネコロロの間に詰め寄っていた。

(速い——!)

「リーフブレード!」

「れいとうビーム!」

繰り出されるリーフブレード。

しかし、命中する寸前エネコロロはリーフブレードごとカインの右腕を凍らせ、彼の身体を踏み台にて背後に回り込む。

「スピードスター!!」

背中からスピードスターを受け、地面に倒れるカイン。

『ジュカイン、素早い一撃でしたがエネコロロの華麗な連続技を受けてしまいました!!』

「カグヤのエネコロロ、よく育てられているわね」

「ええ。あの子頑張っていましたから……」

特訓の全容を見たわけではない、しかし努力家の彼女のことだ、きっと凄まじい特訓でレベルアップをしたのだろう。

でも——それはヒメカのポケモン達とて同じ。

何事もなかったかのように立ち上がり、氷を砕くカイン。

「さすがカイン、凄いね!!」

「ありがとう。あなたのエネコロロも凄いわよ、でも負けないわ……カイン、リーフブレード!!」

「そんな手通用しないよヒメカ、れいとうビーム!!」

「そのままでんこうせっか!!」

エネコロロの放ったれいとうビームを、必要最低限の動きであっさりと避けるカイン。

スピードは落ちず、むしろ上がっていき。

リーフブレードが、エネコロロに命中し後ろの壁まで吹き飛ばす。

「エネコロロ!!」

あわや壁に叩きつけられそうになったエネコロロだったが、吹き飛ばされながらも回転しながら受け身を取り、すぐさまフィールドへと舞い戻った。

「やるわね」

「私のエネコロロはパワーはともかくスピードなら天下一品よ!!
それに身のこなしだって凄いんだから!!」

「……………」

確かに、あの状況で受け身を取ってダメージを最小限に抑えるあの動きは厄介だ。

「——カイン、戻りなさい」

「あれ？」

『ヒメカ選手、ジュカインを戻しました!』

「ロール、行きなさい!」

『ヒメカ選手の二体目はミミロップです!!』

「ロール……ノーマルタイプ同士の戦いか」

「エネコロロ、ずつき!」

「ピョピョパンチ!!」

「えっ——」

一息でエネコロロとの間合いを詰めるロール。

大きな耳で連続のピョピョパンチを叩き込み、エネコロロの身体が宙に浮いていく。

「スカイアッパー!!」

ピョピョパンチを止め、重力に従い落ちてくるエネコロロに、今度は自分の腕でのスカイアッパー。

「エネコロロ!!」

頭から地面に落ち、カグヤの前まで転がっていくエネコロロ。

「エネコロロ戦闘不能! ミミロップの勝ち!!」

『先制はヒメカ選手、ミミロップの見事な連続攻撃にエネコロロた
まらずダウン!!』

「……あの動き、アクセルやシロナさんのルカリオの動きに似てる」

「おそらくアクセル達の動きをベースにしたのね、それにミミロップの強力な耳も見事に使った素晴らしい戦い方よ」

「エネコロロ、よく頑張ったね。」

「凄いねロール、格闘ポケモンみたいに凄いパンチだったよ!!」

賞賛の言葉を送るカグヤに、ミミロップは嬉しそうにその場で飛び上がった。

負けたというのに、カグヤの表情は笑顔。

楽しんでるのだ、このバトルを心の底から。

当たり前である、カグヤにとって一番の親友であるヒメカとのフルバトルなのだ、楽しくないわけがない。

（……本当に、カグヤは純粹ね）

彼女の心が伝わってくるから、ヒメカも自然と笑みを浮かべる。

カグヤとバトルをするのは楽しいと、本当にそう思った。

「じゃあ次は……ムウマージ、レディーゴー！」

『カグヤ選手、二体目はムウマージだ!!』

「ロール、戻りなさい。ムウマージなら……ヒノ、行きなさい!!」

『ミミロップを戻し、続いてはバクフーンを繰り出してきました！
』

「……退き際というのを心得ているわね、彼女」

「……………」

「心配？」

「いいえ、だってカグヤならきつと何とかしますよ。僕はただ……見守るだけです」

「……………」

少しだけ不機嫌そうに眉を潜め、レイジの頬を引っ張るシロナ。

「ヒ、ヒロナちゃん？」

「レイジくん、カグヤの事ばかり信じてるような言い方したら、私も拗ねるわよ？」

「うっ……」

別にそんなつもりはなかったのだが、シロナにそんな言葉は通用しない。

すみません、シロナさんの事もちゃんと信じていますから、そう告げるとシロナは笑みを浮かべ。

「ならよろしい」

そう言って、抱きしめられてしまった。

「ムウマージ、シャドーボール!!」

「ヒノ、かえんほうしゃよ!!」

押し合うシャドーボールとかえんほうしゃ。

「かえんぐるま!!」

身体を炎で包み込み、ムウマージへと向かっていくヒノ。

「ムウマージ、フレイムシールド!!」

「えっ……?」

指示を出すと、ムウマージの周りに現れたのは……おにび。

更にあくのはどうがおにびを包み込み、暗い藍色のリングがムウマージを囲む。

そして――両者がぶつかり合った。

「なっ!？」

しかし、ヒノのかえんぐるまはムウマージの放ったリングの前で防がれ。

「フルパワーでシャドーボール!!」

至近距離から、特大のシャドーボールをヒノに叩きつけた――！

「ヒノ！！」

「バクフーン戦闘不能！ムウマージの勝ち！！」

『ムウマージの攻撃が見事バクフーンを撃破、これで両者並びました！！』

「フレイムシールド……」

「おにびとあくのはどうを合わせたもののリング状に変形させて自分の盾にする。

なるほど、だからフレイムシールドね……」

しかし、ヒノのかえんぐるまとてかなりの威力だというのに、それを防ぐとは……。

更にヒノを一撃で倒したムウマージのパワーも、凄まじいものだ。

（やっぱり、たった三週間じゃ限界があるわね……）

ヒノアらしだったヒノは他のメンバーよりレベルが低い、バクフーンになったものの、やはりカグヤのようなトレーナーには通用しなかったようだ。

「ムウマージ、その調子だよ！！」

「ムウ！！」

嬉しそうに一声鳴き、ムウマージは再び視線をこちらに向ける。

「カイン、もう一度出てきなさい!!」

『ヒメカ選手、再びジュカインを出してきました!!』

「カイン、タネマシガン!!」

「ムウマージ、サイコウエーブ!!」

迫り来るタネマシガンを、サイコウエーブで全て砕くムウマージ。

「ドレインパンチ!!」

「フレイムシールド!!」

踏み込み、ドレインパンチを叩き込むカインだったが、再びフレイムシールドを発動させたムウマージによって、弾かれてしまう。

「もう一度ドレインパンチ!!」

「効かないよ!!」

右腕でのドレインパンチ、だがフレイムシールドの前では無力だ。

しかし――

「左腕でリーフブレード!!」

「えっ!?!」

右腕でのドレインパンチと、左腕でのリーフブレード。

まさかの連続攻撃を受け、ガラスが割れたような音と共にフレイムシールドが破壊される。

「エナジーボール!!」

そこへ、至近距離でのエナジーボールがムウマージへと叩き込まれた。

「ムウマージ!!」

「ム…ムウ…」

ダウンはしなかったものの、ダメージは大きい。

「ムウマージ、戻って」

すぐさまムウマージをボールに戻し、続いてカグヤが出したポケモンは。

「メガニウム、レディーゴー!!!」

『カグヤ選手、三体目はメガニウムだ!!!』

「メガニウム…今度は草対決か」

「カイン、このまま決めるわよ! でんこうせっか!!!」

先手必勝、凄まじいスピードでカインはメガニウムに向かっていく。だが、メガニウムはその場から動かずにじっとカインを見据えていた。

そして、カインの攻撃が命中する瞬間。

「リフレクター!!!」

薄い壁のようなものが、カインのでんこうせっかを防ぎきる。

「今よ、どくどく!!!」

「っ!!!」

紫色の粘膜がカインに付着する。

『あーっと、メガニウムのどくどくがジュカインを捉えた!!! これは拙い!!!』

「動かなかったのは、カインにどくどくを当てる為か……」

「リフレクターを使っていたとはいえ、カグヤのメガニウムは凄い防御力ね。私のガブリアスでも一撃じゃ届かないわ」

「続いてかげぶんしん!」

カインの周りを囲むように現れるメガニウムの分身達。

「カイン、リーフストームでまとめて薙ぎ払いなさい!!」

「そうくると思ったよ」

カインのリーフストームが、メガニウムの分身達を纏めて吹き飛ばす。

だが――その中に本物のメガニウムはいなかった。

「そんな……………!!」

愕然とするヒメカ。

なぜなら、すでに本物のメガニウムはカインの背後に…………。

「ずつき!!」

背中から凄まじい衝撃が走り、前から地面に倒れるジュカイン。

「ギガドレイン!!」

更にメガニウムはギガドレインで、カインのパワーを奪っていく。

「…………みがりりでリーフストームを回避したのか」

そう、先程メガニウムがカインの背後に回り込めたのも、かげぶんしんの中にみがりりを忍び込ませていたからだ。

更にみがりりによって減った体力を、ギガドレインで戻す…………見事
としかいいようがない。

それに、カインはどくどくにより強力な毒に侵されており……。

「ジュカイン戦闘不能！メガニウムの勝ち！！」

パワーを吸い取りきった時には、メガニウムは勝負を決めていた。

『なんという華麗な連続攻撃でありましょうか！

どくどくによる体力消耗に加え、みがわりとかげぶんしんによる防御、さらにはギガドレインによる体力回復。

どれを見ても素晴らしい戦い方です！！』

「よし、その調子だよメガニウム！！」

「カイン、ありがとう。やっぱり凄いわね」

「えへへ……でも、まだまだ勝負はここから、そうでしょ？」

「当たり前よ、こんなに楽しい勝負をこんな簡単に終わらせてたまるものですか……！！」

——ラニ、あなたの出番よ！！」

『ヒメカ選手の四体目はマニョーラです！！』

「氷タイプがあるんだよね……ならメガニウム、戻って！！
そんでもって……クチート、レディーゴー！」

メガニウムを戻し、カグヤはクチートを場に出すと……。

「いたたたたっ！！」

反転し、大きな口でカグヤに噛みつくクチート。

「うわぁ……クチートの奴、相変わらずなんだなあ……」

「あ、あれがクチートなりの愛情表現、なんでしょうね……」

その光景を目にしたカイリとミカンは、揃って顔を引きつらせていた。

「いたた……クチート、噛みつくのはいいけどもう少し手加減してくれないかな？」

「クウ？」

「……もういいや。それより早く戻って」

はいと手を挙げ、フィールドに戻るクチート。

「お待ちせ……」

「……大変ね、あなたも」

「まあね。でも私はそんなクチートが大好きだから大丈夫!!」

「ふふっ……」

本当に、彼女とバトルをするのは楽しい。

けど……だからといって負けを認める気などない。

「けどいいの？ クチート相手じゃ氷とあくタイプのマニョーラじゃ不利だよ？」

「そうね……けど、わたしのラニを甘く見ない方がいいわよ」

「もちろん、全力で相手するに決まってるじゃない！！ クチート、かえんほうしゃ！！」

ラニの弱点であるかえんほうしゃを放つクチート。

瞬間。

「こうそくいどう」

ヒメカがそう指示を出すと同時に、クチートがフィールドの端まで吹き飛ばされた。

「クチート！？」

「速い………！」

「よく育てられたマニョーラね、確かにタイプではクチートが有利だけど……」

「当たらなければ意味ないわよカグヤ。ラニ、連続でれいとうパンチ！！」

「クチート、動きを見切って！！」

クチートも懸命にラニの動きを追っていくが……ただいたずらにダメージを負うのみ。

「いくら効果が今ひとつだとしても、このまま受け続けられればクチートの負けよ!!」

「くっ……」

そうしている間も、れいとうパンチを受け続けるクチート。

——身体も、凍りついてきた

「つるぎのまい!!」

「えっ？」

『なんとクチート、攻撃を受けているというのにつるぎのまいで攻撃力を上げていく!!』

（どういうつもりなの……？　いくらつるぎのまいの攻撃力を上げたとしても、クチートのスピードじゃラニを捉える事なんて……）

「クチート、もう一度つるぎのまいよ!!」

尚も攻撃力の底上げを図るクチート。

これ以上、奇妙な行動はやらせられない。

「ラニ、トドメのかわらわり!!」

飛び上がり、渾身のかわらわりを叩き込もうとするラニ。

そこに、カグヤはある指示をクチートに告げた。

「今よクチート、バトンタッチ!!」

「なっ!？」

クチートの身体がボールへと入り、入れ替わるように出てきたのは……。

『ヒメカ選手、バトンタッチでクチートとカメックスを瞬時に入れ替えました!!』

「こうそくスピン!!」

すぐさま甲羅に潜り、その場でこうそくスピンを繰り出し向かってきたラニを吹き飛ばす。

しかし——そのパワーは通常のこうそくスピンを遥かに上回る程であり、なんと矢のようなスピードでマニニューラを壁に叩きつけてしまった。

（この威力は……!!）

「なるほど……つるぎのまいを連発したのはこの為か」

バトンタッチは追加効果を交代後のポケモンに付加させる能力がある。

それによりカメックスの攻撃力は大幅に上昇し、いくら素早いとはいえ接近戦のラニを捉える事ができるこうそくスピンを持っている彼に代わったのも、カグヤの作戦である。

そして、その作戦は見事成功した。

「マニユーラ戦闘不能！カメックスの勝ち！！」

『強い！！ カグヤ選手の見事な戦術でヒメカ選手のポケモン三体が倒されたー！！』

「凄いわ彼女、パラメータ上ではカイリやレイジくんに劣っていたとしても、それを補って余りあるほどの戦略でサポートしてる」

これには、シロナも驚く事しかできない。

突撃思考だったというのに、いつの間にこのような柔軟な対応ができるようになったのか……。

（これでカグヤは一体、そしてヒメカは三体のポケモンが戦闘不能……）

数の上では有利だ、しかしまだ………！！

「――ハク、あなたの出番よ！！」

『続いてはカイリユーを繰り出してきました！』

「よーしカメックス、この調子で一気に勝負を決めるよ！！」

「そう上手く行くかしらね……カグヤ、行くわよ!!」

「うん、どこからでもかかってこーい!!」

第64話 友情バトル〜カグヤ対ヒメカ!〜 (前編) (後書き)

見事な戦術で三体のポケモンを戦闘不能にしたカグヤ。

しかし、ヒメカが次に出てきたポケモンはカイリユー。

カイリユーのパワーの前に、はたしてカグヤはどう攻めていくのか。

そして、ヒメカはここから逆転する事はできるのだろうか!!

第65話 友情バトル〜カグヤ対ヒメカ!〜 (後編) (前書き)

激闘が続くカグヤとヒメカのバトル。

互いに一步も譲らず、遂にヒメカはハクを繰り出す。

はたして、勝負の行方は……。

第65話 友情バトル！カグヤ対ヒメカ！！（後編）

「ハク、ドラゴンダイブ！！」

「カメックス、受け止めて！！」

ドラゴンダイブで向かってくるハクを、真っ向から受け止めるカメックス。

つるぎのまいによる大幅なパワーアップが成せる技であるが……今回はそれが裏目に出てしまった。

「かみなり！！」

逆にカメックスの腕を掴み、かみなりを叩き込むハク。

さすがに呻き声を上げ、カメックスはハクから腕を放してしまう。

「りゅうのいぶき！！」

そこに追い討ちを掛けるかのように、りゅうのいぶきを叩き込みカメックスを吹き飛ばすハク。

「カメックス、ハイドロカノン！！」

だがカメックスとて負けていない、吹き飛ばされながらもハイドロカノンを放とうと――

「え――」

放とうとして――その時には既にハクがカメックスの身体を掴み上げていた。

「ちきゅうなげよ!!」

そのまま回転しつつ、カメックスを地面へと叩きつけるハク。

「カメックス戦闘不能!カイリユウの勝ち!!」

『カメックス敗れた!!怒涛の連続攻撃を繰り出したカイリユウ、凄まじいパワーです!!』

「カメックス、よく頑張ったね!

うーん、やっぱりハクは強いね!!」

「当たり前よ。それよりカグヤ、このまま一気に巻き返してあげるわ!」

「やれるものならやってみせなさい!! ムウマージ、レディーゴ
ー!!」

『ヒメカ選手、再びムウマージを繰り出しました』

「ムウマージ、シャドーボール!!」

「りゅうのはどう!!」

シャドーボールとりゅうのはどうがぶつかり合い、爆発が起きる。

「――接近戦になるってわかってるよヒメカ。
ムウマージ、右にれいとうビーム!!」

煙に紛れてムウマージへと間合いを詰めるハクを読んでいたのか、
弱点であるれいとうビームの指示を出すカグヤ。

それは見事ハクへと命中し……。

「えっ!?!」

そのまま、ハクは幻のように消えて――

「っ、ムウマージ左――」

「遅い!! アクアテール!!」

慌てて左に向き直るムウマージに、渾身のアクアテールが叩き込まれる。

その威力は凄まじく、ムウマージの身体は地面へとめり込んでしまった。

「ムウマージ、早く脱出して!!」

「だいまんじ!!」

脱出する前に、ハクが放っただいまんじが迫る。

「っ、ムウマージ、フレイムシールド!!」

咄嗟の判断でそう指示を出し、脱出を中断してフレイムシールドを展開するムウマージ。

だいもんじの炎を間一髪防ぎ。

「シャドーボール!!」

追撃を仕掛けてきたハクに反応し、シャドーボールを放った。

避けられてしまったものの、追撃を免れその間に地面から抜け出す事ができた。

(強い……とんでもなく強いよ!!)

警戒はしていた、ハクはヒメカの手持ちの中で最強のポケモンだと思っていたから。

その考えは正しい、だが……ハクの強さの予想は甘すぎた。

元々カイリユウというポケモンの能力は総じて高い、それを踏まえでも……ヒメカのハクの強さは尋常ではなかった。

もしフレイムシールドがなければ……もしムウマージを出していなければ、あの時点でハクに二体やられる所だった。

「……………」

強すぎる、本当にとんでもないくらいに。

だけど……だからこそカグヤは楽しい。

自然と笑みが零れ、ワクワクした気持ちが胸の中で溢れてしまいうだ。

「……カグヤ、楽しそうだ」

彼女の笑みを見て、レイジはぽつりと呟きながら優しい笑みを浮かべた。

……彼女は、いつだってトレーナーとのバトルを楽しんでいた。

勝っても負けても笑顔を浮かべ、「楽しかった」と言って笑うのだ。

それが、凄く眩しくて純粹で……間違いなく、彼女の強さとなった。

彼女は強い、力では劣っていても心では誰にも負けない。

たとえば実力があつたとしても、彼女のように心が強くなければ一流とは言えない。

けど、彼女にはその強さがある。

だから、流れがヒメカに向いているというのに、ああやって笑顔を浮かべ心からバトルを楽しんでいるのだ。

（頑張れ、カグヤ……）

「ムウマージ、相手は強いけど頑張るよ!!」

「ムウ!!」

ボロボロだというのに、ムウマージの闘志は少しも衰えてはいない。
後ろにカグヤがいる、だから負ける気などしない。

彼女のポケモン達は皆そう思っているから、こうやって彼女と同じ
ように楽しみながら戦うのだ。

「――ハク、楽しいわねこのバトル」

視線は向けず、けれど力強く頷くハク。

楽しいバトルというのを体験するのは、意外と難しいものだ。

ポケモンバトルは競争でもある、だから大抵のトレーナーは「負け
たくない」という一心でバトルしてくる。

けれど、彼女は違う。

勝つのはもちろん嬉しい、けれど精一杯楽しめればそれで充分。

そう思っているから、彼女とバトルすれば自然と楽しくなるのだ。

「ムウマージ、サイケこうせん!!」

「ハク、りゅうのいぶき!!」

サイケこうせんとりゅうのいぶき――威力はまったくの互角だ。

「おにび!!」

サイケこうせんを放ちながら、更にムウマージはおにびをハク目掛けて放つ。

「ハク、そのまま飛びなさい!!」

技の押し合いをしつつ、向かってくるおにびを飛んで回避するハク。

「引っ掛かった!!」

「えっ……」

背後から迫る攻撃。

避けられず、ダメージを負ってしまうハク。

(マジカルリーフ……いつの間に……!!)

「ムウマージ、れいとうビーム!!」

「っ、だいもんじ!!」

放たれるれいとうビームを、だいもんじで迎え撃つ。

互いの技は相殺し合い、その影響で凄まじい水蒸気が発生した。

「たつまき!!」

「かわして!!」

その中を確実に向かってくるたつまきを回避するムウマージ。

「引っ掛かったわね!!」

「っ、やば……っ!!」

気づいたカグヤだったが、時すでに遅し。

たつまきを回避したムウマージの背後に、攻撃の準備を終えたハクが現れ。

「ストーンエッジ!!」

背後から技を受け、ムウマージは地面へと叩きつけられてしまった。

「ムウマージ戦闘不能! カイリユウの勝ち!!」

『カメックスに続きムウマージまで撃破したカイリユウ、凄まじい強さとコンビネーションだ!!』

「あちゃー……並ばれちゃった」

「巻き返すって、言ったわよね?」

「むう……やっぱりハクは強いなあ」

「さあ、次は誰を出すの?」

「なら私は……クチート、レディーゴー!!」

『カグヤ選手、再びクチートを繰り出してきましたが……やはり先程のバトルでかなり体力を消耗しているようです!!』

(……ラティオスはまだ出さないの?)

どうやら、とっておきとして最後までとっておくつもりらしい。

ならば、とヒメカはハクをボールに戻し……再びロールを繰り出した。

「ロールか……クチート、めちゃくちゃ強いパンチ放ってくるから気をつけてね。」

素早さも向こうのが上だから」

「クウ……クチッ!」

あまりよくわかってないのか、ちょこんと首を傾げた後……とりあえず頷くクチート。

「ぷっ……」

「あーっ、なんで笑うのよヒメカ」

「ごめんなさい、だけどあなたのクチートが面白くて……」

「むう……クチート、面白いってさ」

「クウ!!」

誉められたと思っているのだろう、嬉しそうに笑顔を浮かべてクチ

ートはその場どピョンピョン飛び跳ねる。

『…………ふっ』

それを見て、今度はカグヤとヒメカ両者ともに吹き出してしまった。

「なんだよあいつら……なんか緊張感ねえバトルだな」

呆れた様子のカイリだが、ミカンの表情は微笑ましげだ。

（楽しそうだなあ……なんだか、見ていて参加したくなるようなバトルです）

「ロール、でんこうせっか!!」

一息でクチートとの間合いを詰めるロール。

既にピヨピヨパンチの準備は終えている。

「ピヨピヨパンチ!!」

「今だよクチート、ピヨピヨパンチに噛みついちゃえ!!」

「なっ!?!」

なんと、避けられないと理解するやクチートはその大きな口でピヨピヨパンチごとロールの耳に噛みついてしまった。

これにはさすがのロールも驚いたのか、痛みで顔をしかめながらも大慌てでクチートを引き剥がそうとする。

「クチートってなんでも噛みついちゃうからね、私がいつも噛みつかれてる痛みを思い知れー！」

「ロール、きあいだまで叩き落とさない！！」

「させないよ！ そのままかえんほうしゃ！！」

ロールの耳に噛みついた口から、かえんほうしゃが放たれ爆発が起きる。

その衝撃でクチートがロールから離れるが——まだ攻撃は終わらない。

「アイアンヘッド！！」

かえんほうしゃを受け怯んでいるロール目掛けて、特大のアイアンヘッドをぶつけるクチート。

だが……ロールは吹き飛ばされずにその場で踏みとどまった。

「嘘っ！？」

「スカイアッパー！！」

この至近距離なら外さない、スカイアッパーを叩き込みクチートを空中へと殴り飛ばすロール。

すると——それが最後の力だったのか。

クチートが地面に落ちると同時に、ロールの身体もぐらりと揺れて……地面に倒れ込んでしまった。

「クチート、ミミロップ、共に戦闘不能!!」

『なんと、両者共にダウンしてしまったー!!』

「惜しい、けどよく頑張ったよクチート!!」

「ロール、あなたもよく頑張ったわね」

互いに自分のポケモンに労いの言葉を送り、別のボールを取り出す。

「よし、それじゃあそろそろ私のとおきの出番だね!!」

（っ、来るのね……!）

「――ラティオス、レディーゴー!!!!」

勢いよく飛び出してくる一体のポケモン。

『カグヤ選手の6体目のポケモンは、なんとラティオスだ!!』

「でやがったなラティオス……!!」

「カノンのお兄さん……実力はカノンと同等かそれ以上……!!」

「さてな……勝負はやってみなきゃわかんねえぞ」

「――ハク、もう一度お願い!!」

(やっぱりハクで来るよね……)

後の一体が何なのかはわからないが、ラティオスを止めるにはハクしかないと思ったのだろう。

カグヤの予想通りとなったが……はたしてどうなるか。

「ラティオスー、相手はめっちゃ強いけど、負けたらカノンにボロクソ言われちゃうから、勝たないとヤバイよ？」

「……どうしてそういう嫌な事を言うんですか」

戦う前から戦意を喪失するような事を言わないでほしい。

こんな状況だというのに、相も変わらず彼女はマイペースだ。

(……でも)

彼女の言う通り、無様に負けたらカノンに……。

——兄さんってこんなに弱かったんだね。私知らなかったよ……。

とか言われそうで怖い。

本気で考えてしまい、慌てて嫌な想像を振り払った。

「ラティオス、どうしたの？」

「……………いえ」

あんたのせいだ、とは口にできない。

「ハク……気をつけなさい」

「ラティオス、りゅうのいぶき!!」

「ハク、こちらもりゅうのいぶきよ!!」

ラティオスとハク、互いのりゅうのいぶきがぶつかり合う。

威力は互角、ならば次は接近戦!!

「ギガインパクト!!」

「ドラゴンダイブ!!」

指示が出たのはまったくの同時、続いてギガインパクトとドラゴンダイブでのぶつかり合い。

激しい衝突音の末——両者共にきりもみ状態のまま吹き飛ばされた。

「ラティオス、りゅうせいぐん!!」

翼でバランスを取りながら、りゅうせいぐんを撃ち放つラティオス。

だが、ハクはまだバランスを崩したままで避けられない——!!

「はかいこうせんで薙ぎ払いなさい!!」

それでもさすがと言うべきか、迫り来るりゅうせいぐんをはかいこ
うせんで全て破壊するハク。

「ドラゴンクローー!!」

「っ、受け止めて!!」

噴煙を掻き分け、ラティオスはハクとの間合いを詰めてのドラゴン
クローー。

しかし、ハクはなんとかラティオスの身体を掴みドラゴンクローーを
防ぐ。

「くっ………!!」

「そのままちきゅうなげよ!!」

「ラティオス、しねんのずつき!!」

身体を掴まれたまま、ハクの頭にしねんのずつきを叩き込むラティ
オス。

たまらず放してしまい、地面へと落下していくハクに——ラティオ
スは最後の大技を放った。

「フルパワーでラスターページ!!!!」

「——くらえっ!!」

眩い光が、地面を削りながらハクを壁際まで吹き飛ばしていく。

そして――

「カイリユ―戦闘不能！ラティオスの勝ち！！」

『カイリユ―たまらずダウンだ！！　さすがラティオスといった所でしようか！！』

「ふう……お疲れ様ラティオス」

「はい。ですがまだ勝負はついていませんよマスター」

「そだね。とりあえず戻ってて。」

「そんでもって……メガニウム、レディーゴー！」

ラティオスをボールに戻し、メガニウムを再びフィールドに出すカグヤ。

「さあ、ヒメカ選手の残されたポケモンはいよいよ一体。はたして逆転する事はできるのでしようか！」

「……逆転するのよ、わたしは。」

――フィー、あなたの出番よ！！」

「あれは……」

『ヒメカ選手最後のポケモンはエーフィだ！！』

「あのイーブイが進化したのか……」

「可愛いなあ……でも、私のメガニウムの方がずっとずっと可愛いよ！」

「何を張り合ってるのよあなたは……フィー、トレーナーはあんなんだけど、油断したらダメよ」

「……メガニウム、私あんなんって呼ばれちゃった」

メガニウムはそんなカグヤに視線を送り、あきれたようにため息をついた。

そんなの当たり前じゃない、そう言わんばかりの表情で。

（あれー？　なんかメガニウムにもバカにされたような気が……）

そう思ったが、今はバトルに集中しなくてはと思考を戻した。

「フィー、でんこうせっか！！」

華麗に、しなやかな動きでメガニウムに向かっていくフィー。

ロールほどではないにしろ、メガニウムが捉えられるスピードじゃない。

「メガニウム、リフレクター！！」

「——同じ戦法は通じないわ！！　フィー、こちらもしフレクター！！！」

ヒメカもしフレクターの指示を出す、その目的は彼女とは違い防

御の為ではなかった。

『おおっと！？ ヒメカ選手、リフレクターを足場のように……レイジ選手と同じ戦法を用いてきました！！』

（初めに考えて実行したのはヒメカなんだけどね……）

「シャドーボール！！」

メガニウムの真上から、シャドーボールを放つフィー。

避けられず命中し、メガニウムはすぐさま真上に視線を向けるが、そこには既にフィーの姿はなく。

「リフレクターは自身を全て包み込んでくれるわけじゃない、つまり……どこかしらに必ず穴があるのよ！！」

「メガニウム、エナジーボール！！」

「サイケこうせん！！」

エナジーボールをすんなり避け、サイケこうせんを命中させるフィー。

更にでんこうせっかで、リフレクターの影響がない箇所を攻撃する。

『リフレクター戦法破られた！！ メガニウム、エーフィの動きについていけません！！』

（どうにかして止めないと……！！）

「シャドーボール!!」

そうしている間にも、フィーのシャドーボールは確実にメガニウムの体力を削っていく。

「メガニウム、はなびらのまい!!」

一声鳴くと、メガニウムを囲むようにはなびらのまいが舞い散る。

その範囲は広く、フィーも避けきれずに当たってしまった。

「今よメガニウム、のしかかり!!」

飛び上がり、自分の身体でエーフィを押し潰そうとするメガニウム。

「サイコキネシス!!」

それを、フィーのサイコキネシスが空中で止めてしまった。

そのまま、メガニウムを壁にめり込ませるフィー。

かなりのダメージを与えた、これならばさすがのメガニウムも――

「タネマシンガン!!」

「え――」

――攻撃は、完全に無防備になっていた右横から放たれた

タネマシンガンを放ったのは、今サイコキネシスで壁に叩きつけら

れたはずのメガニウム。

「――」

そこようやく、ヒメカは何が起こったのか理解できた。

（――みがわり）

一度ならず二度までも、同じ技にしてやられてしまった。

しかし、気づいた時には既に遅く。

「フルパワーでソーラービーム!!!!」

メガニウムの放ったソーラービームをまともに受けたフィーは、そのまま地面に倒れ込み。

「エーフィ戦闘不能！　メガニウムの勝ち!!!
よって勝者、マサラタウンのカグヤ選手!!!」

己の敗北を、思い知ったのだった。

.....。

「――惜しかったな」

「…………カイリ」

試合が終わったヒメカを、カイリは優しく迎え入れた。

「……強かったわ、カグヤ」

「ああ、そうだな」

「こっちも一生懸命特訓したけど、適わなかった」

「……………」

「——でも、凄く楽しかった。不思議と悔しいなんて思わなかったわ」

そう告げるヒメカの表情は、悔いなど微塵もない穏やかなものだった。

……悔いなど、あるわけがない。

あんなにも楽しいバトルだったのだ、負けてもよかったと思えるくらい楽しかった。

だから……悔いはない。

「そっか……そりゃそうだよな、全力でぶつかり合ったんだ。

悔いなんてあったら、それこそおかしい」

「ええ。……だから心配しなくても大丈夫よカイリ。それよりあなたは自分の事を心配しなさい」

「そう、だな……」

明日は、レイジとのバトルなのだ。

悔いの残らないように、しっかりとやっていかなければ。

自分がライバルと認める、自分を親友だと言ってくれた彼の為にも。

そしてなにより、自分自身の為にも……。

「……頑張らなきゃな」

第65話 友情バトル〜カグヤ対ヒメカ!〜 (後編) (後書き)

カグヤとヒメカのフルバトルは、見事カグヤの勝利に終わる。

そして明日は、いよいよレイジとカイリのバトルとなる。

必ず勝つ、その気持ちを胸に秘め……カイリは明日の戦いへと望むのだった。

第66話 史上最大のライバルバトル！～レイジ対カイリ！～（前書き）

カントーリーグ・セキエイ大会準決勝。

第一試合はカグヤの勝利と終わり、いよいよレイジとカイリのフルバトルが始まるうとしていた。

はたして、どのような勝負となるのであろうか……。

第66話 史上最大のライバルバトル！～レイジ対カイリ！～

『――さあ、準決勝第二試合が始まろうとしています。
はたして、勝者はどちらの選手になるのでしょうか』

熱い歓声に包まれたスタジアム内。

そこに現れたのは、準決勝で戦うライバル。

「あっ、出てきた！」

レイジ達の登場で、会場のボルテージはますます上がっていく。

「す、凄いですね……」

「2人とも準々決勝での戦いが凄すぎたから、否が応でも注目を浴びてしまうのでしょうかね」

「うーん……レイジ、そういうの苦手なんだけど大丈夫かな……？」

まあ彼の事だから大丈夫だと思うが、おそらくげんなりと肩を落としている事だろう。

「……すげえな」

「そうだね……」

そう相槌を打つレイジの表情は、カグヤの言う通りげんなりとしたものになっている。

「けどよ。俺達のバトルには関係ねえ、全力でぶつかるだけだ」

「……………」

「……やっと戦えるなレイジ、俺は嬉しいぜ。

お前とのバトルは、一番の楽しみにしていたんだ。まあ……決勝で戦えたらテンションは最高潮になったんだけどな」

「……かもね」

「絶対に負けねえぞ……お前と全力で戦って、必ず勝つ。

そして決勝でカグヤにも勝って、必ずチャンピオンリーグに行つてやる!!」

「……………」

強い意志、決意の光がカイリからひしひしと伝わってくる。

……彼はその為に、ここまで頑張ってきたのだ。

全ては夢のため、ただひたすらに突き進んでいる。

けれど——それは自分とて同じだ。

今ここにいるのは、自分もチャンピオンリーグに出場するため。

あの時シロナと交わした約束を果たすため、そしてなにより……自分自身の為に。

「――僕だって、絶対に負けないよカイリ。譲れないものがある以上……僕だって、全力で君を倒す!!」

「上等だ。かかってきやがれレイジ!!」

「――リオン、お願い!!」

「ゾロアーク、行け!!」

『レイジ選手の一体目はリザードン、そしてカイリ選手はゾロアークを繰り出しました』

（始まるのね……あの2人のバトルが）

もはや、あの2人の実力は四天王クラスだ。

そんな2人のぶつかり合いが何をもたらすのか、まったく予想がつかない。

一瞬たりとも見逃すわけにはいかない、シロナはそう思い自然と表情を強ばらせた。

「先攻はレイジ選手となります――」

「――――」

睨み合う両者。

互いに譲れないもののために、今戦いの幕が。

「――試合開始!!」

その声により、遂に開かれた――

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

初めから全力の攻撃を放つリオン。

「かわしてシャドークローだ!!」

それを瞬時に避け、一息で間合いを詰めるゾロアーク。

「ほのおのパンチ!!」

鈍い銀光を放つシャドークローを、ほのおのパンチで迎え撃つ。

防がれたと知るや、ゾロアークはリオンの顔に蹴りを放つ。

首を右に動かし、それを避けるリオン。

それと同時に、蹴りを放ってきたゾロアークの脚を掴み、地面へと叩きつけようとし。

身体を回転させリオンの腕から逃れ、ゾロアークは側転の要領で間合いを離れた。

『序盤から凄まじい攻防です!! どちらも一歩も譲らない!!』

「す、凄い戦いだね……」

「……さすがカイリとレイジといった所かしら」

「――まだ始まったばかりだったか」

「あつ、ロストさん」

「昨日から姿が見えなかったようですが、一体どこに行っていたんですか？」

「ちよつと気になる事があってトキワまで行ってきた。

それはともかく、2人の勝負はまだ始まったばかりだな？」

「はい。リオンとゾロアークの戦いですよ」

そうか、そう相槌を打ちながら席に座るロスト。

（トキワに何の用だったのかしら……）

気にはなったが、今はレイジ達の試合に集中しようと、シロナは再びフィールドに視線を向けた。

「リオン、飛んで！！」

翼を羽ばたかせ、空へと飛翔するリオン。

「逃がすなゾロアーク、あくのはどう！！」

そこに、ゾロアークのあくのはどうが迫る。

「ブラストバーン！！」

それをブラストバーンで碎き、ゾロアークごと反撃した。

炎に包まれるフィールド。

しかし——そこにゾロアークの姿はない。

「上!!」

レイジの声に反応し、リオンが顔を真上に上げた瞬間。

槍のようなゾロアークの蹴りが、リオンを地面へと叩き落としていく。

空中でバランスをとり、両手両脚を用いて着地するリオン。

その間にも、ゾロアークは次の攻撃を仕掛けようと迫る——!

「ナイトバースト!!」

——調子に乗ってんじゃねえぞコラアツ!!

ナイトバーストを放つ前に、リオンがそう叫びゾロアークの脚を再び掴み上げる。

そして、力任せに地面へと叩きつけた——!

そのパワーは凄まじく、フィールドに小さなクレーターができるほど。

二回、三回とフィールドに叩きつけ、雄叫びと共に力任せに投げつける。

爆音を響かせ、壁にめり込むゾロアーク。

「ゾロアーク!!」

かなりの衝撃だ、それなりにダメージを与えたとは思うが……。

——それでも、煙の中からゾロアークはしっかりと足取りでフィールドへと戻ってきた

(まともに受けたのに……なんて体力だ)

「——やるじゃねえか」

「そっちなね」

「ゾロアーク、シャドーブレイド!!」

シャドークローを展開し、遠く離れたその場で振り下ろす。

すると、爪から漆黒の刃が放たれリオンへと向かっていく。

「かえんほうしゃ!!」

それを全弾かえんほうしゃで蹴散らし、再び飛翔するリオン。

「リオン、フレアドライブだ!!」

全身を蒼い炎で包み、ゾロアークへと突撃する。

それを――「ゾロアーク、『ギガ・スパイラル・ブレイカー』だ！
！」

「なっ――！？」

飛び上がり、ゾロアークが仕掛けたのはギガインパクト。

しかしただのギガインパクトではなく、ゾロアークは凄まじい回転を施しながらリオンへと向かっていく。

そしてぶつかり合い――リオンの身体がフィールドの外まで吹き飛ばされた。

「リオン――！！」

叩きつけられた壁の瓦礫に埋まり、どうにか這い出してくるリオンだったが。

「リザードン戦闘不能！ゾロアークの勝ち――！！」

そのまま前のめりに倒れ込み、戦闘不能へと陥ってしまった。

『まず序盤を征したのはカイリ選手のゾロアークだ――！！』

「あのギガインパクト……普通のとは比べものにならない威力だね
……」

「自分の身体を高速回転させる事によって発生するエネルギーを上乗せさせる事によって、ギガインパクトの威力を底上げしたようね」

それを差し引いても、ゾロアークのパワーは凄まじいものだ。

しかし……反動ダメージもそれに比例して大きいらしい、肩で大きく息をしている様子を見ればわかった。

（レイジくん、二体目はどうするの？）

「――アクセル、お願い!!」

『レイジ選手、二体目のポケモンはリオルだ!』

「きゃっ!!」

アクセルが出た瞬間、可愛らしい悲鳴を上げたシロナ。

何事かとそちらに視線を向けてみると、何故か彼女の手持ちであるルカリオがボールから飛び出してきたのだ。

「ルカリオ、一体どうしたの？」

〈勝手に出た事は謝る、だが……アクセルの様子が少しな……〉

「……アクセルがどうかしたの？」

〈どこか様子がおかしいわけじゃない、だが……あいつの波導が凄まじいまでに静かなんだ〉

「波導が、静か？」

そう言われても、いまいちピンとこない。

〈簡単に言えば、ひどく落ち着いているんだ。

——落ち着きすぎてると言えるくらいにな〉

「……………」

ルカリオの言葉は、正直マスターであるシロナにも理解しがたい言葉だった。

しかし……その言葉は、きっと何かしら重要な意味を持つものなのだろう。

「アクセル、落ち着いてね？」

〈はい……父上〉

瞳を閉じ、手を前に出し円の形を動かしながらゆっくりと息を吐いた。

さながら精神統一をしているかのような動きに、ゾロアークも無意識のうちに警戒心を現す。

「ゾロアーク、大丈夫か？」

頷くゾロアークに、カイリは指示を告げた。

「よし、ならシャドークローだ!!」

再び間合いを詰め、シャドークローを繰り出すゾロアーク。

しかし、アクセルはその場から動かない。

瞳を閉じたまま、微動だにせず。

「―――」

パンッ、という乾いた音が響き……。

ゾロアークの攻撃が、当たり前のように弾かれてしまった。

弾かれた、そう理解したゾロアークだが、あまりにも呆気なく回避されてしまい、思考が追いつかず。

「――はっけい」

トント、軽く右手をゾロアークの身体に当て。

砲撃のような一撃が、ゾロアークを吹き飛ばした。

「ゾロアーク!!」

空中でバランスをとり、着地するゾロアークだったが、ダメージが大きいのか片膝をつく。

（今の動き、一体何だっただ……!!）

まるで引き寄せられたかのようにゾロアークの攻撃は外れ、代わりに吸い込まれるようにアクセルの攻撃は当たった。

「ゾロアーク、シャドーボールだ!!」

相手の攻撃が理解できない以上、近距離で攻めるのは得策ではない。そう思い、遠距離からのシャドーボールで攻撃を仕掛けるゾロアーク。

へーーーーふっ!」

向かってくるシャドーボールを、真っ向から迎え撃ったアクセルは。ふわりと、柔らかな動きであっさりと攻撃を避けてしまった。

「な——」

「アクセル、きあいパンチ!!」

へハッ——!」

一息で踏み込み、渾身の拳を叩き込むアクセル。

避けようとするゾロアークだが、先程のはっけいのダメージが大きいのかその場から動けず。

まともにきあいパンチを受け、地面に倒れ込んでしまった。

「ゾロアーク戦闘不能! リオルの勝ち!!」

『なんとリオル、不思議な動きでゾロアークを圧倒しました!!』

「えっ、えっ？」

「今の動きは……」

「……やはり、な」

混乱するカグヤ達の中で、ルカリオは納得したようにぼつりとそう呟いた。

「ルカリオ、何がやっぱりなの？」

「あいつの波導がやけに静かだと思ったのだが、攻撃を受け流し反撃する戦い方をする為に、ギリギリまで己の波導を小さくしたんだ」

「えっと……つまり、どういうこと？」

「つまりあいつは、波導を極限まで小さくする事で攻撃を確実に弾き、カウンターを繰り出したという事だ」

己の心を無とし、全ての攻撃をやさしく弾いてその力すら利用しての反撃。

ゾロアークの攻撃があつさりと弾かれたのも、アクセルが受け流す構えをとっていたから。

その後すぐに己の波導を極限まで上げ、ゾロアークのパワーすら利用して反撃した事により、こうも簡単に倒す事ができたのだ。

「へまだまだ未熟かと思ったが……なかなかやるじゃないか」

好敵手を見つけたような眼で、アクセルを睨むルカリオ。

「ルカリオ、解説ありがとう」

そう言いながら、シロナはルカリオをボールに戻す。

「いいんですか？」

「いいの。これ以上アクセルの活躍を生で見せたら乱入しそうになるから」

「乱入って……」

シロナのルカリオは、なかなか好戦的な性格のようだ。

「……あれ!？」

「カグヤ、どうかしたの？」

「見てあれ! アクセルが……」

「えっ？」

何事かとアクセルに視線を送ると。

——彼の身体が、光に包まれている

「これってもしかして……」

「進化、ね……」

シロナの言葉が放たれた時には、既に光は収まり。

『なんとリオル、ここでルカリオへと進化いたしました!!』

「――アクセル、おめでとう」

へありがとうございます、父上!」

身体は大きくなり、顔つきも逞しいものになったが、相変わらず無邪気な笑顔は健在のようだ。

「ゾロアーク、お疲れさん。……さて、まだまだこれからだぜ!!」

「……………」

「フローゼル、出てきてくれ!!」

『カイリ選手、二体目はフローゼルです!!』

へ何が来ようとも、僕には通用しない!!」

「どうかな? フローゼル、アクアジェット!」

水に包まれ、アクセルに向かって突撃するフローゼル。

それを注意を払いながら、アクセルは再びあの構えを。

そして、互いの身体がぶつかる瞬間――フローゼルの攻撃は、アクセルの前にあっさりと弾かれてしまった。

「はっけいだー!!」

先程と同じく、はっけいを叩き込もうとするアクセル。

「フローゼル、浮き袋を膨らませろ!!」

しかし、その瞬間フローゼルの身体にある大きな浮き袋が膨らみ、アクセルのはっけいを弾いてしまった。

へな、に——!?!>

これには驚き、驚愕の声を上げるアクセル。

「うわぁ、フローゼルの浮き袋って凄い膨らむんだね……」

「フローゼルの浮き袋は人間1人を乗せられるくらい大きくなるのよ。

でも……それにしたってアクセルのはっけいを防ぐなんて……」

しかもルカリオに進化してパワーも大幅に上がっているというのに、だ。

「たとえば攻撃を受け流したとしても、俺のフローゼルにアクセルの攻撃は通用しないぜ!!」

「……………」

たしかに、たいした防御力だとは思う。

しかし……完璧な防御などこの世には存在しない。

「アクセル、きあいだまだ!!」

〈ハッ——!!〉

渾身のきあいだま。

だが、フローゼルの浮き袋が再び膨らみきあいだまを弾いてしまう。

「無駄だぜレイジ!! フローゼル、アクアテール!!」

「アイアンテールだ!!」

アクアテールとアイアンテールのぶつかり合い。

互角だったのか、互いに吹き飛ばされた。

「れいとうビーム!!」

「かわして!!」

回避するよう指示を出すレイジだが。

〈ぐっ——!!〉

バランスを崩したままでは無理だったのか、右腕にれいとうビームを受けてしまったアクセル。

『あーっと、ルカリオの右腕がれいとうビームの追加効果で凍りつ

いってしまったー!!!』

「これで右腕は使えないな!」

「……さーて、そいつはどうかかな?」

「何……?」

「アクセル!!」

〈おああああっ!!!〉

凍った右腕に力を込め、裂帛の雄叫びを上げるアクセル。

すると……凍りついている右腕から煙が立ち上り始めた。

その数秒後、アクセルの右腕を凍らせていた氷が粉々に砕け散る。

〈ふう……〉

確認のため、右腕を数回開いたり閉じたりを繰り返すアクセル。

「……ほのおのパンチで氷を無理矢理砕いたのかよ」

「さあ、勝負はこれからだ!!」

「——上等!!」

「アクセル、はどうだんだ!!」

「フローゼル、みずのはどう!!」

はどうだんとみずのはどうがぶつかり合い、爆発が起きる。

その隙に、再び間合いを詰めるアクセルだが。

既にフローゼルは浮き袋を膨らませ、防御の体勢をとっていた。

「打ち砕くぞアクセル、『バニシングコンビネーション』だ!!」

〈くらえっ!!〉

フローゼルに向かって繰り出されたのは、あくのはどう。

だが、それはフローゼルの浮き袋の前に弾かれてしまい。

そう思った時には、りゅうのはどうがフローゼルに命中していた。

〈セイ——!!〉

続いて繰り出されたのはかわらわり。

「まさかレイジの奴……!!」

ロストの声と、フローゼルの苦しげな声が重なった。

視線を向けると、浮き袋を膨らませたまま吹き飛ぶフローゼルの姿が。

（はっけいか……! 間違いない、アクセルの攻撃は………!）

へだりゃあっ!!!」

弾丸のようにフローゼルに突き刺さるアクセルのとびひざげり。

怒濤の連続攻撃に、さすがのフローゼルにもダメージが行き渡る。

そんなフローゼルに追い討ちを掛けるかのように繰り出されたのは、スカイアッパー。

「フローゼル!!!」

――フローゼルの浮き袋が萎む

そして、アクセルは空中で最後の一撃を繰り出そうと構え。

「これで、最後だ!!!」

特大のはどうだが、フローゼルを地面へと叩きつけた……。

――ロストのルカリオの『フォースアサルト』

そして、自身の『テトラコンビネーション』

それを合わせたアクセルの新必殺技『バニシングコンビネーション』は。「フローゼル戦闘不能! ルカリオの勝ち!!!」

見事、絶大な防御力を誇るフローゼルを倒しきった――

第66話 史上最大のライバルバトル！～レイジ対カイリ！！～（後書き）

ルカリオに進化したアクセルが見事二体撃破し、リードするレイジ。
だがまだバトルは序盤、はたしてレイジはこのままの勢いを維持で
きるのか。

それともカイリが流れを取り戻すのだろうか！？

第67話 限界突破の超バトル！～レイジ対カイリ！！～（前書き）

遂に始まったレイジとカイリのフルバトル。

序盤はカイリ優勢だったものの、ルカリオに進化したアクセルの猛撃により、ゾロアーク、フローゼルと連続で撃破する。

はたして、カイリの次の手は……。

第67話 限界突破の超バトル！～レイジ対カイリ！～

「――フローゼル、サンキューな」

ボールにフローゼルを戻し、別のボールを取り出すカイリ。

「アクセル、君も戻るんだ」

『バニシングコンビネーション』によって、アクセルは著しく体力を消耗してしまっている。

このままの流れで彼に戦ってもらいたいが、無理は禁物だ。

「ティナ、お願い！！」

『レイジ選手、三体目はサーナイトだ！！』

今日もサイコセイバーの活躍が期待されそうです！！』

「意外だな、もうティナを出してきたのか。

――なら、俺もあいつを出すしかないな」

「――――」

空気が変わる。

カイリが手に持つボールに入ったポケモンは、おそらく……。

「ゴウカザル、頼んだぞ！！」

『出ましたー！！ カイリ選手ここであのゴウカザルを繰り出しました！』

「レイジ、初めから全力で行かせてもらう！！
ゴウカザル——オーバードライブだ！！」

「何——！！？」

刹那、スタジアムを包み込む灼熱の炎が、ゴウカザルから巻き起った。

『カイリ選手、いきなりオーバードライブを繰り出したー！！』

へなるほど……一気に勝負を決めるおつもりですかへ

熱気に顔をしかめながらも、ティナは両手を前に突き出す。

そうして出てきたのは……水の剣。

いつもサイコセイバーとは違う、水で作られた剣だった。

へアクアリウムセイバー……炎には、水で勝負しましょう！！へ

「上等だぜ、そんな剣なんぞ蒸発させてやる！！
ゴウカザル、かえんほうしゃ！！」

蒼白いかえんほうしゃ、もはやオーバーヒートに近い破壊力を秘めている。

それを、ティナは水の剣を十字に構え、真っ向から弾き飛ばす。

すぐさま踏み込み、横薙ぎに一閃。

避けられ、ゴウカザルのマッハパンチが迫る。

へくっ………!!」

右の剣で受け止めるものの、やはり威力では負けるのか完全に受け流せず後ろに退がった。

すかさずゴウカザルがティナとの間合いを詰め、ほのおのパンチ。

今度は左の剣で弾き、右の剣で突きを放つ。

「オーバーヒート!!」

「っ、ティナ、避けるんだ!!」

至近距離からのオーバーヒート。

それをまさしく間一髪で回避するティナだったが。

「う、く………!!」

右腕が、痛々しく焼かれていた……。

（回避が間に合わなかったのか………!!）

「いくら水の剣だからって、俺のゴウカザルを止められると思うなよ!!」

チャンスとばかりに尚も迫るゴウカザル。

痛みに耐えながら、再び水の剣を展開するティナ。

へーっ

しかし、右の剣をすぐさま落としてしまう。

やはり先程のオーバーヒートのダメージは想像以上だったらしく、左の剣だけでどうにか防御の構えをとるが。

へぐ、あ………！

それだけでは防御など間に合うはずもなく、マツハパンチをその身に受けてしまった。

『ゴウカザルのマツハパンチがサーナイトにクリティカルヒット！！これはかなりのダメージになったぞー！！』

「ティナ、戻って！！」

これ以上は被害を増やすだけだ、そう思いティナをボールに戻すレイジ。

「……拙いわね」

それを見ていたシロナは、おもわずそう呟いていた。

「拙いって……何がですか？」

「流れが完全にカイリへと向かってる、それにレイジくんにとって切り札であるティナも深刻なダメージを負った。

このままだと、レイジくんは間違いなく負けてしまうわ」

「そんな……!!」

そんな事シロナも思いたくはないが、このままでは確実にその言葉が真実となる。

（それにしても……カイリも凄いわ。流れを掴むためにオーバードライブを躊躇いなく使うなんて……）

今回は、彼の作戦勝ちだ。

「——ルギア、君の出番だ!!」

『ここでレイジ選手、ルギアを出しましたー!!』

「情けないぞマスター、まんまとカイリの策に乗せられおって!!」

「返す言葉もないよ、でも……今は君に頼るしかないんだ」

「わかっておる。余がティナの代わりに見事ゴウカザルを倒してみせようぞマスター!!」

「ゴウカザル、かえんほうしゃだ!!」

「ルギア、ハイドロポンプ!!」

ゴウカザルのかえんほうしゃと、ルギアのハイドロポンプ。

凄まじい両者のぶつかり合いは、辛うじて互角の戦いを繰り広げていた。

「ちっ……なんという馬鹿力だこのゴウカザルは!!」

「マッハパンチ!!」

「飛んで!!」

迫るマッハパンチを、飛翔する事によって回避するルギア。

「フレアドライブ!!」

「ルギア、エアロブラストだ!!」

フレアドライブを放つゴウカザルを、ルギアは真っ向からエアロブラストで迎え撃つ。

両者の技が激突した瞬間、凄まじい爆発が起きフィールドを包み込んだ。

「インファイト!!!」

「何——!!?」

気づいた時にはもう遅かった。

いつの間に移動していたのか、背中に立つゴウカザルのインファイト

トを受け、ルギアは地面へと叩きつけられる。

「フルパワーでオーバーヒート!!」

「ルギア!!」

「くっ……余を侮るでない!!」

顔だけゴウカザルに向け、特大のふぶきを放つルギア。

オーバーヒートとぶつかり合い、互角の勝負に持ち込む。

その時——ルギアの瞳が妖しく光った。

瞬間、ゴウカザルの身体が宙に浮き始めた。

「やべえ、サイコネシスか!？」

ゴウカザル、どうにか振り払え!!」

パワー全開でサイコネシスの呪縛から逃れようとするゴウカザルだが、ルギアの前ではそんなもの意味をなさない。

「よくも好き勝手やってくれたな!! 余の力を見せてやろう!!」

「ハイドロポンプ!!」

弱点であるハイドロポンプを、動けないゴウカザルへとおもいつきり叩き込む。

たまらず吹き飛ぶゴウカザルだが……ハイドロポンプの直撃を受け

ても、まだ健在だった。

「ちっ……なんちゅう身体をしているのだあやつは……」

「でも効いてないわけじゃない、このまま押し切るよルギア!!」

「わかっておる!!」

「——ゴウカザル、戻れ!!」

「——っ」

『カイリ選手、たまらずゴウカザルを戻してしまいました!!』

「ったく……このまま倒してしまいたかったのだがな」

「……………」

「カノン、頼むぜ!!」

『カイリ選手、続いてはラティースです!!』

「……余が相手だからといって、随分と濃いメンバーをぶつけてくるものだ」

軽口を叩くルギアだが、その表情には若干の焦りが見えた。

「大丈夫だよルギア、君と僕が力を合わせれば必ず勝てる!!」

「……そんなの当然だろうマスター、わざわざ言わなくともわかっ

ておる」

ぶつきらばうにそう言い放つルギアだが、口元には嬉しそうな笑みを隠し切れていない。

「カノン、ラスターカノン!!」

「ハイドロポンプ!!」

凄まじい技のぶつかり合い、しかしどちらも負けてはおらず、互いの技が相殺される。

「はかいこうせん!!」

「カノン、こっちもはかいこうせんだ!!」

渾身の力を込めたはかいこうせんがぶつかり、凄まじい爆風が巻き起こった。

「ぐっ……!!」

「きゃ……!!」

それはルギア達にまで及び、余波によって両者共にフィールドの外まで吹き飛ばされてしまう。

『す、凄まじいまでの技のぶつかり合いです!!
間違はなく今大会最高峰と言えるでしょう!!』

「りゅうせいぐん!!」

放たれた都合二十近いりゅうせいぐんが、ルギアを連べ打ちにしようにと迫る。

「ええいつ、鬱陶しい技だな!!」

「ルギア、ギガインパクト!!」

「任せいつ!!」

ギガインパクトを発動させ、迫り来るりゅうせいぐんを避け、あるいは蹴散らしながらカノンへと向かっていくルギア。

「こっちもギガインパクトだ!!」

「はいっ!!」

迫るルギアに、同じようにギガインパクトで迎え撃つカノン。

そして、両者がぶつかり合った瞬間。

——けたたましい爆音が響き、スタジアムが光に包まれた

「うっ……!!」

「くぁ……!!」

おもわずフィールドから目を背けるレイジとカイリ。

……やがて光が収まり、結果を知ろうと視線を向けると。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「ふう…ふう…ふう…」

『ラティアス、ルギア共に健在です!!　しかし両者共にかなり体力を消耗しています!!』

「はっ、余はまだまだいけるさ……体力がなくなったのは、カノンだけだ」

「つ、強がりもそこまでいくと立派です、ね。

あ、あなたの方こそ体力が尽きかけてるくせに……」

「ほ、ほう……存外に言いよるわ」

「な、なんでしたら、もっと言ってやりましょうか？」

「……………」

「……………」

「…………ふふっ」

「…………ははっ」

憎まれ口を叩き合ったと思ったら、今度はお互いに吹き出す両者。

「これだから強者とのバトルは面白い!! 余が本気で戦える相手など殆どいないからな。」

カノン、余は嬉しいぞ」

「それはどうも。……でも、勝つのは私です」

「たわけ。余に決まっているだろう!!」

お互いにボロボロだというのに、顔に浮かべている表情は笑顔。

お互いに嬉しいのだ、このように何の弊害もなく存分にバトルできるのが。

そして、それはもちろんマスターであるレイジ達も……。

「いくぜ、レイジ!!」

「来い、カイリ!!」

「カノン、りゅうのはどうだ!!」

「ルギア、ふぶき!!」

迫るりゅうのはどうを、ふぶきで押し返すルギア。

それを避け、再びりゅうのはどうを放とうとするカノンに、ルギアは素早く間合いを詰めた。

「はがねのつばさ!!」

カノンが技を放つより速く、ルギアの攻撃が命中する。

「負けるなカノン!!」

吹き飛ばされながらも、準備していたりゅうのはどうを解き放つかノン。

「ぐあっ——!!」

さすがに避けられず、まともに攻撃を受けてしまった。

「はぁ…はぁ…くっ…」

フラフラながらも、カノンは再び身構える。

——だが

「……マスター、すま…ぬ……」

「ルギア戦闘不能!! ラティアスの勝ち!」

『なんとおーっ!? ルギア、ラティアスに倒されましたー!!』

この事態に、周りからは大きなどよめきが。

「そんな、ルギアが負けるなんて……!?!」

「これで、流れは完全にカイリのものになったわね……」

「――ルギア、戻って」

ボールにルギアを戻し、唇を噛みしめるレイジ。

……彼女は悪くない、自分が未熟だったせいだ。

心の中でルギアに謝罪しつつ、別のボールを取り出す。

「カノン、まだ行けるか？」

「は、はい……大丈夫です!!」

限界まで頑張ってもらわねば勝てない、これはそういう勝負なのだ。

だから、カノンにはまだ戦ってもらわなくては……。

「――ヒカリ、お願い！」

『レイジ選手、ピカチュウを繰り出しました!』

「カノン、気をつけろよ!!」

「はい!!」

「ヒカリ、でんこうせっかだ!!」

「カノン、ラスターカノン!!」

でんこうせっかで向かってくるヒカリを、ラスターカノンで迎え撃つカノン。

それを避け、ヒカリはカノンとの間合いを詰め。

「アイアンテール!!」

「ドラゴンクロール!!」

真っ向から、おもいっきりぶつかり合う――!

弾かれたのは――ヒカリだ。

そのまま空中に投げ出され、カノンはチャンスとばかりに追撃を仕掛けた。

「カノン、はかいこうせん!!」

迫るはかいこうせん。

しかし、空中ではヒカリは避けられない――!

「今だヒカリ、ボルテッカー・アイアンテール!!」

「なにっ!?!」

ヒカリの尻尾が黄金色に輝き、カノンははかいこうせんを弾き飛ばす。

そして、そのまま落下しながらカノンに黄金色の尻尾を叩きつける
!!

「――、あ」

フィールドに落ち、動かなくなるカノン。

「ラティアス戦闘不能！ピカチュウの勝ち！！」

『ボルテッカーとアイアンテールの合体技で、見事ラティアスを撃破しましたー！！』

「ボルテッカー・アイアンテール……」

「ヒカリのパワー不足を補って余りある技ね。

――これで、勝負はまだわからなくなった」

「カノン、戻れ。……すげえなヒカリ、いつの間にそんな技を思いつuitんだ？」

カイリの問いに、ヒカリは得意げに胸を張った。

「けど、こいつ相手に勝てるかな……？」

――エレキブル、頼むぜ！！」

『カイリ選手ここでエレキブルを出しました！』

「エレキブル……！！」

「特性の電気エンジンでヒカリの電気技を封じる作戦ね……」

「負けるもんか……ヒカリ、でんこうせっか！」

「えっ……?」

圧倒的に不利なはずだ、だというのに何故ヒカリにそのまま戦わせるのか……。

「エレキブル、じしんだ!!」

「跳んで!!」

エレキブルが繰り出すじしんをジャンプで回避するヒカリ。

しかし、それでは次の攻撃の回避が……。

「でんこうせっか!!」

空中でのでんこうせっかの指示。

「げっ!!」

しかし、ヒカリはじしんによって舞い上がったフィールドの破片を器用に飛び移りながら移動を繰り返す。

「自分にかみなり!!」

更に移動しながら、自身にかみなりを繰り出すヒカリ。

（デュアルボルテッカーか……!!?）

だが、たとえ絶大なパワーを誇るデュアルボルテッカーとしても、エレキブルの特性の前では意味をなさない。

そればかりか、エレキブルがパワーアップするだけだ。

それはレイジとてわかっているはず、それなのに何故……。

後ろに跳び、エレキブルとの距離を離すヒカリ。

「今だヒカリ、デュアルボルテッカー!!」

「ピカピカピカピカピカ……ピッカッ!!」

デュアルボルテッカーでエレキブルに向かうヒカリ。

そして、攻撃が当たる瞬間。

「右!!」

レイジの指示で、ヒカリはエレキブルの右横を通り過ぎた。

「えっ!？」

慌ててそちらに身体を向けるエレキブル。

「左!!」

すぐさま移動し、再びエレキブルの背後へ。

エレキブルが身体を向けた瞬間――

「デュアルボルテッカー・アイアンテール!!」

飛び上がり、上空から特大のアイアンテールを振り下ろす——！

「無駄だレイジ——！」

いくらアイアンテールといえども、電気技である以上エレキブルの前では無意味——

…………。

「————」

ズドンッ、という凄まじい衝撃音がフィールドに響く。

それと共に、壁を粉碎する音が響き。

エレキブルが、壁に叩き込まれていた……。

『な、なんと！？ 電気技であるというのに、エレキブルにとってつもないダメージが行き渡ったー！？』

「な、何でだ！？」

「何でって、そんなの当たり前じゃないか。

“アイアンテール” ははがねタイプの技なんだよ？」

「そんなの知ってるに決まってるだろ——！ 俺が不思議に思ってるのはどうしてボルテッカーが付加された——」

そこまで言いかけ、カイリは気づく。

「……レイジ、お前やりやがったな？」

「まあね」

カイリの問いかけに、レイジはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

「ど、どうして攻撃が届いたの……？」

観客として試合を見ていたカグヤ達も、カラクリに気づかない。

「簡単な事よ。ヒカリはエレキブルにアイアンテールを当てたのだから、ダメージを負ったの」

ただ一人、シロナを除いては。

「で、でもデュアルボルテッカーが……」

「デュアルボルテッカーのパワー“だけ”をアイアンテールに込めたの。」

つまり——あの技は電気タイプとはがねタイプ両方の属性を持っているという事よ」

あの時、ヒカリは確かにデュアルボルテッカーを発動させた。

しかしアイアンテールをエレキブルに当てる瞬間にデュアルボルテッカーを解除し——加速エネルギーだけをアイアンテールに込めたのだ。

「言ったよねカイリ、僕は絶対に負けないって。
約束の為にも……なにより自分自身の為にも、絶対に負けられな
い!!!」

第67話 限界突破の超バトル！～レイジ対カイリ！～（後書き）

デュアルボルテッカー・アイアンテールの攻撃により、多大なダメージを受けたエレキブル。

激闘続くフルバトル、勝負の行方は……。

第68話 死闘の果てにレイジ対カイリ!! (前書き)

激闘が続くレイジとカイリのフルバトル。

ルギアが破れたものの、ヒカリの新技によりカノンを撃破。

そして、電気技対策の為にエレキブルを繰り出したカイリだったが
……またしてもヒカリの新技でダメージを受けてしまった……。

第68話 死闘の果てにレージ対カイリ!!

「エレキブル、メガトンパンチ!!」

「でんこうせっか!」

迫り来る拳の乱打を、でんこうせっかで回避する。

「アイアンテール!!」

「かみなりパンチ!!」

ヒカリのアイアンテールを受け止める、エレキブルのかみなりパンチ。

「エレキブル、左でかわらわりだ!!」

「っ、ヒカリ、逃げるんだ!!」

だが、アイアンテールがかみなりパンチで止められているヒカリでは回避できない。

エレキブルのかわらわりを受け、ボールのように大きくバウンドしながら地面に叩きつけられた。

「ヒカリ、大丈夫!？」

「ピ……カッ!!」

立ち上がるヒカリだが、やはりダメージが大きいのか身体がふらついている。

「ヒカリ、戻って!!」

するとレイジはヒカリを戻し、別のボールを投げつける。

「アクセル、お願い!」

『レイジ選手、ここでルカリオにチェンジ!!』

「エレキブル、かみなりパンチ!!」

「アクセル、きあいパンチ!!」

——激しい連打

どちらも一步も退かず、互いの技をぶつけようと拳を繰り出す。

「——今だエレキブル、捕まえろ!!」

エレキブルの尻尾が、アクセルの腕を掴み上げた。

「あくのはどう!!」

「かみなり!!」

すぐさまあくのはどうを放とうとしたアクセルだが、エレキブルの方が一瞬速い——!!

〈ぐあああああっ!!!〉

「アクセル!!」

「かわらわり!!」

かみなりを受け苦しむアクセルに、とどめのかわらわりを――

「とびひざげり!!」

しかし、かみなりの直撃を受けているというのに、かわらわりをとびひざげりで弾き――右手をエレキブルの頭に添えた。

「はっけいだ!!!!」

刹那、弾丸のように吹き飛ぶエレキブル。

壁に叩きつけられ、それがトドメとなったのか。

「エレキブル戦闘不能! ルカリオの勝ち!!」

〈ぐ、お………〉

審判がそう告げた瞬間。

アクセルも膝をつき、その場に倒れ込んだ。

「――エレキブル、ルカリオ、共に戦闘不能!」

『ルカリオ善戦しましたが、結果は相討ちとなとてしまった――!!』

「……これで、カイリの手持ちは残り二体」

「そして、レイジくんの手持ちは三体……」

数では有利、しかしダメージの大きさを考えると……レイジの有利とは言えない。

「……レイジ」

「何？」

「お前、今楽しいか？」

「——うん。少なくとも僕は凄く楽しいよ」

絶対に負けられない大事なバトル、けれど……今だって凄く胸が踊る。

「そうか……俺もよ、今すっげえ楽しいんだ。」

お前には絶対に負けたくねえって思ってるけど……こんなにワクワクした楽しい勝負を、ずっと終わらせたくないと思ってる」

「僕もだ………！」

叶うならば、もっともっと戦いたい。

けれど勝負は終盤、終わりは確実に近づいていた。

「この後、大どんでん返して逆転してやるぜ、レイジ——！」

「――やれるものなら、やってみろ!!」

「いくぜ! 来い、ジャローダ!!」

「ティナ、お願い!!」

『続いての対決はジャローダ対サーナイト、はたしてどのような勝負となるのでしょうか。目が離せません!!』

実況の言う通り、観客の誰もが2人の戦いを食い入るように見つめていた。

どちらが勝ってもおかしくはない、そして同時にこのバトルはこの大会最高峰の戦いだ。

見逃す事など、できるわけがなかった。

「ジャローダ、はっばカッター!!」

「ティナ、フレイムセイバーで間合いを詰めるんだ!!」

〈はいっ!!〉

走りながら、ティナは炎で作られた剣――フレイムセイバーを両手に握りしめる。

〈――っ〉

痛みで顔をしかめてしまうが、今度ばかりは先程のような失態は見

せられない。

相手はジャローダとゴウカザルのみ、ダメージが大きいとはいえここで確実にどちらかを倒さなくては……。

はっぱカッターを斬り裂きながら、あっという間にジャローダとの間合いを詰める。

――上段からの振り下ろし

「リーフブレード!!」

それを、両手で展開したリーフブレードで真っ向から受け止める。

すぐさま、左の剣による横薙ぎの一撃がジャローダを捉えた。

「つるのムチ!!」

しかし、迫る剣をティナの左手ごとつるのムチで捕らえるジャローダ。

「ふぶき!!」

「リーフストーム!!」

至近距離からのぶつかり合い、互角の威力を見せ両者共に弾き飛ばされ。

――てはいない!!

〈あっ………!〉

引っ張れる感覚に、ティナはおもわず両手の剣を落としてしまった。

——つるのムチが、まだティナの左手を拘束したままなのだ

対処が一瞬遅れてしまったため、空に放り投げられてしまう。

そして下では——ジャローダが必殺の一撃を放とうと身構えていた。

「リーフブレイカー!」

矢のようなスピードで、ティナへと迫るジャローダ。

「テレポートで逃げるんだ!!」

〈くっ………!〉

指示通り、テレポートでその場からいなくなるティナ。

しかし——カイリにそんな行動は通じない。

「読んでたぞその動き!」

「えっ………!?!」

「ジャローダ、そのまま下にリーフストーム!!」

リーフブレイカーを空中で解除し、一回転してから地面目掛けてリ

ーフストームを放つジャローダ。

そこには、ちょうどテレポートを終えたティナが現れ――

「ティナ、逃げるんだ！」

へえっ……？

レイジの声も虚しく、最高のタイミングでのリーフストームがティナに直撃した。

煙が巻き起こり、それはすぐさま晴れたものの。

「サーナイト戦闘不能！ジャローダの勝ち！！」

たまらず、ティナは戦闘不能に陥ってしまった。

『なんという事でしょうか！！ レイジ選手の切り札ともいえるべきサーナイトが、ここでダウンしてしまったー！！』

「す、凄い……！ ジャローダがティナを……」

「……………」

これで並んだ、しかし圧倒的にレイジの不利だ。

ティナという存在を失った、それにより動揺は計り知れない。

（レイジくん、ここまでなの……？）

ショックを受けた表情のレイジを見つめながら、シロナは唇を噛みながら心の中で彼に問う。

「……………」

黙ってティナを戻し、うなだれるレイジ。

……ティナが負けた。

今の今まで、自分と一番歩んできた彼女が、初めては負けた。

それは当然の理ではあるものの、いつからかレイジの中でのティナへのイメージはまさしく負け知らずといったものになっていたのだ。

そんな彼女が敗北したという事実を目の当たりにし、動揺しない方が無理な話だ。

……………。

——だが、それでも

彼は、自分を見失う事はなかった。

（……負けないと、誓ったんだ）

共に戦ってきてくれたみんなと、約束した。

たとえば何があろうとも、最後の最後まで諦めずに自分を見失わずに

戦う、と。

その約束は破れない、破るわけにはいかない。

だってそんな事をしたら、今まで戦ってくれたみんなの思いが全て無駄になる。

未熟な自分をただ信じてくれたみんなに、応える事ができなくなる。

そんな事は――絶対にしたくなかった。

「――ソウル、お願い！」

そして、何よりも……。

「カイリ、まだまだこれからだ!!」

自分との戦いを望んでくれた、カイリの為にも!

「かかってきやがれ、レイジ!!」

「ソウル、シャドークローだ!!」

「ジャローダ、はっぱカッター!!」

はっぱカッターを回避しつつ、シャドークローを繰り出すソウル。

――しかし

「つるのムチ!!」

レイジは、再び同じ過ちを繰り返していた。

『あーっと、ジャローダのつるのムチが再びレイジ選手のポケモンを捕らえた!!』

「レイジくん、どうして同じミスを……!!」

「そのままリーフストームだ!!」

「ソウル、今だ!!」

リーフストームが発動する瞬間、ソウルはつるのムチを絡んでいる右手で自分から掴み。

——立ち上がり、力任せに引っ張り上げた

「なっ——!?!」

明後日の方向に飛んでいくリーフストーム。

「四足歩行だからって、二足歩行できないなんて思わない事だ!!」

そのまま地面に叩きつけ、同時につるのムチがソウルから離れた。

だが、ソウルは尚もムチを掴みもう一度ジャローダを地面へと叩きつけた。

「ジャローダ、リーフブレードでつるのムチを斬るんだ!!」

このままではダメージを負い続けるだけだ、だからカイリはジャローダにそう指示を告げる。

言われた通り、つるのムチをリーフブレードで斬り難を逃れるジャローダ。

「逃がすなソウル、ふぶき!!」

「リーフストーム!!」

追い討ちを掛けようとふぶきを放つが、空中でバランスをとったジャローダがリーフストームを放つ。

互いの技がぶつかり合い、爆発が起こる。

「つるのムチ!!」

「っ、ソウル、気をつけて!!」

煙によってジャローダの姿が見えない、警戒を促すレイジだが……。

「……………」

衝撃が、ソウルの腹部に叩き込まれる。

警戒をしていなかったわけではない、しかし……。

（地面、から……）

真下からの襲撃には、対処できなかった。

一度地面につるのムチを埋め、死角になる足元から攻撃したのだ。

「ソウル!!」

つるのムチはソウルの腹部を殴った後、瞬く間に身体を拘束し宙に吹き飛ばす。

「ジャローダ、リーフブレイカー!!」

そこに、ジャローダ必殺の一撃が迫る――!

「ソウル、ギガインパクト!!」

回避する事はできない、瞬時にそう判断したレイジは、相殺する為にソウルに指示を出す。

ダメージにより顔をしかめながらも、空中でギガインパクトを発動させるソウル。

そして――ジャローダとソウルが空中で激しくぶつかり合う!!

爆発が起こり、煙の中から2つの影が凄まじいスピードで現れ地面を削りながら吹き飛んでいく。

「ジャローダ!!」

「ソウル!!」

互いに自身のポケモンを呼びかけるが、返事がない。

両者共に戦闘不能か、誰もがそう思った瞬間。

『アブソル、ジャローダ共に立ち上がりました!』

勝負は、未だ決着を見せてはいなかった。

互いに荒い息をしながらも、確かに立ち上がっていた。

『なんという凄まじい戦いでしょうか!! どちらが勝利するのか
まったく予想が付きません!』

(でも……まだカイリの方が優勢よ……!!)

「負けるなジャローダ、ドラゴンテール!!」

「ソウル、避けて!!」

相殺する力ははや残されていない、だからそんな指示しか出せないのが歯がゆかった。

ソウルも震える脚を叱咤し、ジャローダのドラゴンテールを回避する。

「逃がすなジャローダ、続いてはっぱカッター!!」

「ソウル!!」

ドラゴンテールは避けられたものの、やはりダメージが大きすぎたのか、はっぱカッターをまともに受けてしまう。

倒れ、動かなくなるソウル。

『アブソル、今度こそ戦闘不能か……!?!?』

倒れ込んだソウルに近づく審判。

——ソウルは動かない

審判がソウルの戦闘不能を告げようとした瞬間。

「アブソル戦闘——」

——やめなさい!!

「っ!?!?」

驚愕は、レイジとカイリ、そして審判の口から。

(今のは……)

なんと——ジャローダが審判を止めるように大声を上げたのだ。

そして、ソウルに視線を向けジャローダは更に口を開く。

——立ちなさい。あなたの力はそんなものだったの?

まだ終わってない、それなのにこんな結末を迎えるの?

あなたのマスターはまだ戦ってる、それなのにこんな所で終わる事は許されないはずよ!!

「――」

この言葉は、レイジにしか届いていない。

他の者が見れば、ジャローダが鳴き続けているようにしか見えな
だろう。

けれど……レイジには確かに聞こえた。

ジャローダが、ソウルに対してそう言っているのが。

――立ちなさい！！ 立ってわたくしと戦いなさい！！
限界を超えて、立ち向かってきなさい！！

「……ジャローダ」

彼女は、ソウルと戦う事を望んでいる。

彼女の力はまだこんなものではないと。

だからまだ立ち上がれると、必死に訴えている。

――その声が届いたのか

『な、なんと……アブソル、立ち上がりました！！！』

今にも再び倒れそうながらも、ソウルはジャローダの声に応えるよ
うに、再び立ち上がった。

――まったく……敵であるわたくしに激励を受けてどうするの？

——なら、黙っていればよかったんじゃないかな？

——馬鹿言わないで、こんな勝負をみすみす簡単に終わらせる方がおかしいのよ。

——君って面白いね。

——カイリが、まだあなたのマスターと戦いたがっているから、そうしただけよ。

少しだけ気恥ずかしそうに視線を逸らすジャローダに、ソウルはにっこりと笑みを浮かべる。

——こんな所で終われない、か……。

うん、そうだね……確かに、こんな所では終われないよ。

——当たり前よ。あなたの力……もっと見せてみなさい。

「……………」

不敵に笑うジャローダと、新たな闘志を燃やすソウル。

そう光景は、とても美しく……とても尊く映っていた。

「……レイジ、ジャローダはソウルを励ましてたのか？」

「うん……よくわかったね？」

「んー……ああ、なんとなくではあるけど……ジャローダがそう言

ってるのになってさ……。

けどジャローダ、敵であるソウルを助けるなよな、せっかくリードすると思ったのに」

——うるさいわね。もう一度倒すから文句を言わないでよ。

「……なんか、理不尽に怒られたような気がする」

「……当たり前だよ」

「ったく……まあいいけどな、もう一度倒せばいいんだし!!」

「さーて……そいつはどうかな？」

「——ジャローダ、リーフブレード!!」

「ソウル、シザークロスだ!!」

互いに踏み込み、同時に技を繰り出す。

弾かれ、再び向かうジャローダ。

それを受けながら、反撃のシザークロスを放つソウル。

互いに一步も譲らない、近接戦闘が続く。

「みずのはどう!!」

「グラスミキサー!!」

技がぶつかり合い、吹き飛ばされる両者。

しかし——そこでソウルが着地と同時に膝をついた。

「ソウル!？」

やはりダメージが深刻なせいなのか。

「今だジャローダ、リーフブレード!!」

そこに、ジャローダのリーフブレードが迫る!!

「ソウル、立つんだ。立ってくれ!!!」

第68話 死闘の果てにレイジ対カイリ!! (後書き)

不利な状況の中、更に絶体絶命のピンチに陥るソウル。

ジャローダのパワーに、なす術もなく倒されてしまうのであろうか
……！

第69話 決着の光〜レイジ対カイリ!〜 (前書き)

激闘が続くレイジとカイリのフルバトル。

カイリの見事な戦略によって、レイジは追い込まれていた。

そして、ソウルにジャローダのリーフブレードが……。

第69話 決着の光―レイジ対カイリ!!―

「ソウル!!」

ダメージが大きく、立ち上がれないソウル。

そこに、ジャローダの攻撃が……。

「まだだ……まだ諦めないで!!」

「これで終わりだ!!」

「ソウル!!!!」

――振り下ろされるリーフブレード

命中する、誰もがそう思った瞬間。

リーフブレードは空を切り、ソウルはフィールドの端に着地した。

（っ、まだそんな気力が残ってたのか……!!）

「ソウル……」

――まだ、諦められない。僕は……君の助けになるって誓ったんだ。

なら……まだ終われない!!

「……………」

——次で最後の攻撃になると思う。だから……全力の一撃で勝負を仕掛ける!!

「……わかったよ、ソウル」

彼女の気持ち、彼女の想いを無駄にしない。

そのためには——

「ソウル、ギガインパクトだ!!」

全力で、彼女の願いを聞き入れるのみ——!

「ジャローダ、全力で迎え撃つぞ!!」

——フルパワーでリーフブレイカーだ!!」

互いに信じるものの為に、最後の攻撃を仕掛けるソウルとジャローダ。

そして、両者はぶつかり合い——互いに弾き飛ばされる。

ジャローダは空中でバランスをとり着地するものの。

ソウルは、地面に叩きつけられてしまい……。

「アブソル戦闘不能! ジャローダの勝ち!!」

惜しくも、敗れ去ってしまった……。

『アブソル、素晴らしいガッツを見せてくれましたが、惜しくも敗れてしまいました!!』

しかしジャローダ、なんという強さでしょうか!!』

「……追い詰められた」

いくらダメージを負っているからとはいえ、レイジにはもうヒカリしか残されていない。

もはや、そうなればレイジに勝ち目は――

「まだです」

「カグヤ……」

「まだ、ヒカリが残っています。まだ……レイジは負けていません」

「……………」

自分が情けなくなった。

カグヤは信じているというのに、どうして自分は彼を信じてあげられないのだろう、と。

シロナは、ぐっと拳を固く握りしめていた。

「――ありがとう、ソウル。ゆっくり休んで」

ソウルをボールに戻し、最後の一体……ヒカリを取り出す。

——正直、勝てるとは思っていない

ジャローダを倒したところで、まだあのゴウカザルが残っている。

対するヒカリも、エレキブルとの戦いでのダメージがある。

だから——勝てる保証はゼロだ。

けれど、最後まで諦めないと誓ったのだから、ここで勝負を捨てるのは間違っている。

たとえ負けるとしても、後悔しない戦いができればそうでもいい。

だから——レイジはまだ闘志を失っていなかった。

「——ヒカリ、これで最後だ。悔いの残らない戦いを!!」『さあ、レイジ選手最後のポケモンになりますピカチュウが現れました。

はたして、カイリ選手がこのまま押し切るのか。それともレイジ選手が逆転するのか!!』

「勝つのは俺だ!!」

「さーて……そいつはどうかかな？」

「ジャローダ、はっぴカッター!!」

「ヒカリ、10まんボルトだ!!」

迫り来るはっぴカッターを、10まんボルトで全て叩き落とす。

「でんこうせっか!!」

「リーフストーム!!」

猛スピードで突撃するヒカリを、リーフストームで迎え撃つジャローダ。

嵐のようなリーフストームを避け、飛び上がるヒカリ。

「アイアンテール!!」

「リーフブレード!!」

渾身のアイアンテール。

しかし読んでいたのか、あっさりとリーフブレードで防がれてしまう。

「もう一度跳んで!!」

ぶつかり合う衝撃を借りて、再び跳躍するヒカリ。

「甘いぞレイジ!! ジャローダ、リーフストームだ!!」

「ヒカリ、落下しながらボルテッカー!!」

「ピカピカピカピカピカ……!!」

迫るリーフストームを、落下しながらのボルテッカーで迎え撃つ。

ぶつかり合い、周りに熱風が流れそれは観客席にまで及んでいった。
リーフストームとボルテッカー、そのぶつかり合いの果ては――相
殺。

互いの技は掻き消され、ヒカリはまっすぐジャローダに落ちていき。

「かみなりパンチ!!」

「なっ――!?!」

ヒカリの小さな拳が、ジャローダに触れた瞬間。

凄まじい電撃がジャローダを包み、そのまま後ろに倒れ込んだ。

「ジャローダ戦闘不能!ピカチュウの勝ち!!」

『まだまだ勝負はわかりません!!　これでカイリ選手のポケモン
も残り一体になりましたー!!』

「ジャローダ、サンキューな。」

――レイジ、これで最期だな」

「……………うん」

「本当に惜しいよ。もうすぐこのバトルが終わると思うと、残念だ。
けど……………これで白黒はつきり決まるぜ」

「僕が勝つか、それとも君が勝つか……」

「最後まで、すげえバトルにしようぜ!!」

「もちろんだ!!」

「ゴウカザル、お前で決めてやれ!!」

「ウツキヤアツ!!」

「ピカッ!!」

睨み合い、闘志を燃やすゴウカザルとヒカリ。

レイジ達と同じく、互いに自分の全てを懸けてぶつかり合おうとしている。

「ゴウカザル、かえんほうしゃだ!!」

「ヒカリ、10まんボルト!!」

全ては、己が主に勝利をもたらすため。

最後の戦いが、今幕を開いた——!!

かえんほうしゃと10まんボルト、どちらも一歩たりとも負けていない。

「マツハパンチ!!」

「アイアンテール!!」

一撃、二撃、三撃――！

パワーもスピードも、両者共に互角、あまりのパワーにぶつかり合う衝撃が観客席の方まで届いた。

「レイジ、頑張って！ 絶対に勝って！！」

「カイリ、負けないで！」

「レイジくん、お願い勝って！！」

「カイリさん、負けないでください！！」

カグヤもヒメカも、シロナもミカンも、おもわず立ち上がり気づけば大声を上げていた。

彼女達だけではない、周りの観客達もこの激闘に立ち上がって声援を送っていた。

『なんという素晴らしい戦いでしょうか！！ 観客の皆様が立ち上がり応援するほどの激闘！！』

まさしく歴史に残る名勝負です！！』

「フレアドライブ！！」

「ボルテッカード！！」

「ウキイイアアッ！！」

「ピカピカピカピカピカ……ピツカッ！！」

フレアドライブとボルテッカーがぶつかり、爆炎が舞う。

「マッハパンチ!!」

しかし、均衡を崩すかのようなゴウカザルのマッハパンチが、ヒカ
リを殴り飛ばす――!

「かみなりだ!!」

身体を吹き飛ばされても尚、かみなりを放つヒカリ。

だが――それはゴウカザルに向けてではない。

(自分に……………!)

黄金に輝くヒカリ。

「ゴウカザル、デュアルボルテッカーが来るぞ!!」

「……………っ」

拳を握りしめ、最高の力で相手をしようとゴウカザルは身構える。

――ブルーフレア・バースト

ゴウカザルの…………否、カイリのポケモン達の中で間違いなく最強の
必殺技が、繰り出されようとしていた。

壁を蹴り、どうにかフィールドに着地するヒカリ。

……しかし、デュアルボルテッカーでは届かないと理解したヒカリは。

「ピカーーーッ!!」

「なーーー」

「……に!？」

ヒカリは、もう一度自分にかみなりを落とした。

これにはレイジも驚く、自分の指示ではないからだ。

更に、もう一度自分にかみなりを落とすヒカリ。

「っ、ダメだヒカリ。これ以上はーーー!」

これ以上は、ヒカリの身体が保たない。

確かに、単純にかみなりを自分にぶつければパワーは増す。

しかし……それに比例してヒカリの身体に掛かる負担も大きくなる。

だからこそ、レイジは今まで二回以上のかみなりは指示しなかった。

だというのに——ヒカリは既に三回ものかみなりを自分に当てた。

いまだかつてないほどのパワーを秘めているが、今までの戦いでダメージを受けているヒカリでは、命に関わるほどの負担が……。

——絶対に勝つんだ、ピカは!!

「——」

——今まで戦ってきたみんなの為に、レイジの為に負けない!!

信じてレイジ、ピカは大丈夫。だから……指示を出して!!

「……………」

自分の為に、彼女はまさしく命を懸けている。

——本当なら、今すぐにでもやめさせたい

これはポケモンバトル、命を懸けた戦いじゃない。

ここで負けても、また来年頑張ればいいだけだ。

でも——そんな選択は選べない。

選んでしまえば、今まで皆と戦ってきたこのバトルで、意味を残せなくなる。

そして、ヒカリの想いを無駄にするわけにはいかない。

「——信じてる」

掛ける言葉は、ただそれだけ。

けれどそれに込められた感謝の意を汲み取り、ヒカリは満面の笑みを彼に向けた。

「――ゴウカザル、レイジ達と戦えて、本当によかったよな？」

頷くゴウカザル。

「レイジがヒカリを信じるように、俺もお前を信じてる。

だから――お前の思う通りに、おもいつきりやってこい――！」

「ウキヤア――！」

――互いの想いが交差する

信じる者の為に、決着をつけるために。

お互い、全力を出すためにも。

「――ヒカリ――！」

「――ゴウカザル――！」

まったく同時に、彼等はこのバトル最後の指示を告げた――

「フルパワーでボルテッカーだあっ！！！！」

「――ブルーフレア・バースト！！！！」

「ピカピカピカピカピカピカピカ……！！」

蒼き炎が、全てを包む。

そこへ、黄金の光が真っ向から立ち向かっていった――！！

「ピカ……ピカピカピカピカピカ！！」

歩みは遅く、しかし確実にカイリのブルーフレア・バーストの中を突き進んでいくヒカリ。

「ゴウカザル、負けるな！！」

「ヒカリ、そのまま突き進んで！！」

「ピカ…ピカ…ピカ…」

歩みを止め、その場に立ち止まるヒカリ。

「ヒカリ！！」

それでも負けじとその場に留まろうと踏ん張る彼女の気合は、素晴らしいものだ。

しかし……それも終わりが近い。

限界を超えた彼女に、もはや力などほとんど残されてはいなかった。

だが、それを責める事など誰にもできない、彼女はよくやった。

観客の誰もがそう思い、既に勝敗は決したと理解する。

——だが、それでも

「ピカ、ピカ…ピカ、ピカ、ピカ…」

荒れ狂う炎の中で、ヒカリは再びゆっくりと脚を動かし始めた。

「なに——!!?」

『ピカチュウ、再び動き始めました!!』

「ヒカリ、頑張れ……頑張るんだ!!」

止める事など許されない、真に彼女の事を想うなら止めるという選択は間違いでしかない。

レイジの声を聞き、ヒカリは瞳を見開き更に進む。

「くっ……ゴウカザル、あともう少しだ!!」

「負けるな、このまま撃ち貫け!!」

「ピカ…ピカ…ピカピカピカピカ…」

歩みは速くなり、加速していく。

黄金の光が、蒼い炎を超えていく。

——そして

「いっけえええっ!!」

「ピカピカピカピカピカピカ…ピッカアアアッ!!!!」

遂にブルーフレア・バーストを打ち破り、ヒカリの身体がゴウカザルとぶつかった瞬間——

「うあ——!!」

「くっ……!!」

視覚を狂わせるような白い閃光が、辺りを包み込んだ……。

……。

——光が収まり、静寂が訪れる

誰もが一時的な視覚障害に陥る中、レイジとカイリはいち早くフィールドの状況を確認しようと視線を向け……。

「——あ」

結末を見て、同時にそんな声を出してしまった。

『うつ、く……し、試合はどうなったのでしょうか……？』

「いたた……目がおかしくなりそうだよ」

「し、試合は……どうなったの！？」

「……………えっ？」

「こ、これって……」

カグヤ達も、目の前の結果に目を見開いて驚いた。

何故なら……。

「——ピカチュウ、ゴウカザル、共に戦闘不能。

よ、よって両者共に手持ち全てが戦闘不能により……ひ、引き分けとなります」

どよめきがスタジアムを包む。

『な、なんと……両者ダウンにより引き分け……こ、このような事は初めてです!!』

「マ、マジかよ……ひ、引き分けて……そんなのアリか!？」

「……これはまた」

なんとも、予想できない事態になってしまった。

しかし、そんな事今はどうでもいい。

レイジはすぐさまフィールドに走り、ヒカ리를抱きかかえる。

(よく頑張ったよ、本当に頑張った……)

傷だらけのヒカ리를優しく撫で、センターへと向かう為にフィールドを後にすると。

「おいおい、勝手に抜け出しているのかよ!？」

とは言いつつも、ゴウカザルを抱えてカイリも走ってやってきた。

「そういうカイリはどんなのさ？」

「それよかゴウカザルの方が大事だ!！」

「……試合放棄と見なされるかもしれないよ?」

「そんな時はそんな時さ、また来年頑張らなきゃいいだろ!!
そういうお前はどうかんだよ?」

「試合よりヒカリの方が大事」

はつきりと言い切る。

それを見て、カイリはニカツと笑みを返した。

「だよな?」

「まあね」

レイジも笑みを返し、2人揃って仲良くセンターへと向かったのだ
った。

.....。

「——もう、気持ちわかるけど勝手にいなくなっちゃダメじゃない
い」

「いや、けどさ……みんな怪我してるし、ゴウカザルとヒカリは特
にダメージがでかかったし……」

「そうだよ。試合よりティナ達の方が大事だから……」

「レイジ達らしいといえばらしいけど……勝手にいなくなったら心配するよ?」

「うっ……ごめん」

ヒメカとカグヤにたしなまれ、うなだれるレイジとカイリ。

——準決勝が終わり、今は夜

ティナ達も無事に回復し、今は仲良くポケモンフーズを食べ合っている。

「しかし……どうなんだこれから」

「準決勝、引き分けたからね……」

準決勝が引き分けに終わる事など前代未聞だ、なので今はどうするのか協議している。

なので、決まるまで決勝戦はお預けだ。

「リターンマッチすりゃあいいじゃねえか」

「そういうわけにはいかないから協議しているんでしょうが。」

——けど、本当にどうするのかしら?」

カイリに反論したものの、ヒメカも彼と同じ考えではある。

というより、他に方法はないと思うのだが。

「ところでロストさん」

「なんだ？」

「カグヤ達から聞いたんですけど、トキワに行っていたんですね。一体何の用があったんですか？」

「あつ、そういえばそうでしたね。何の用だったんですか？」

「そうか……お前達は知らなかったんだな」

「知らないって、何がですか？」

再び訊くと、ロストは少し驚くような事を口にする。

「トキワシテイにあるジムが、爆発事故を起こしたそうだな。気になって見に行っていたんだ」

「……爆発事故？」

「ああ。原因不明の事故らしい、閉鎖していたから怪我人は出なかったらしいが」

「なんか恐いね……」

「……………」

原因不明の爆発事故、それが妙に引っかかる。

そんな事がありえるのだろうか、それに……。

（初めてトキワシティに来た時、憎悪に満ちた声をジムの中から聞いたけど……それと何か関係しているんだろうか……）

あの声に込められた憎しみは、今でも思い出せば身体が震えるほど恐ろしいと思えるほどのものだ。

姿は見てない、けれどあの声の主は間違いなくトキワジムの中に居たはずだ。

……その人は、どうなったのだろうか。

「レイジ、どうしたの？」

「えっ……？」

「ボーっとしてるけど、やっぱり今日のバトルで疲れちゃった？」

「あ、いや……うん、そうかな」

「そっか、じゃあもう休んだ方がいいんじゃないかな？」

「うん……そうだね」

立ち上がり、部屋へと向かうレイジ。

（……レイジ、どうしちゃったのかな？）

そんな彼を見て、カグヤは首を傾げたのだった。

第69話 決着の光ゝレイジ対カイリ!!ゝ（後書き）

準決勝は引き分けという結果に終わり、結果が出るまで待たされる事になったレイジ達。

そんな中、ロストから聞いたトキワジムの事故。

皆が聞き流す中、レイジは何故かその事件に引っかかりを覚え……。

……それが、新たな戦いの序章となった事に、まだ誰も気づいてはいなかった。

第70話 復讐鬼く雪の世界へく（前書き）

準決勝が引き分けになってしまったレイジとカイリ。

結局、どうなるかは未定のまま夜が更けていったのだが……。

第70話 復讐鬼く雪の世界へく

——熱い

怒りが。

憎しみが。

悲しみが、熱となって身を焦がす。

「は、あ……」

なんだ。

なんだ、これは。

なんなんだ、この——例えようない殺意は。

この世の全てを蹂躪しても尚、収まらない程の憎しみと怒り。

それが、まるで津波のようにこの身に押し寄せる。

「は、ぐ、あ……」

不快、などという表現では計れない不快感。

痛くて苦しくて、脳がパンクしてしまいそうだ。

——自分は、一体何を見ているのか

目を開いても、そこに広がるのは漆黒のみ。

全てを塗り潰す、ただの黒。

「は、は、あ……」

息ができない。

目を開けていられない。

なんだ、なんなんだ。

一体、誰が自分にこんな光景を見せようとしているんだ……。

——目を背けるな。

今すぐにも逃げ出したい闇の中で。

その闇すら瞬時に消えてしまいそうな、澄んだ声が響き渡る。

——目を背けるな。

どうして？

自分はこんな闇を直視する事などできない。

こんなものを見たら、身体より先に心が死んでしまう。

——それがお前の使命だからだ、お前の身はこの世の全てを救う為

に在るのだから。

声は言う。

この世の全てを救う？

……馬鹿な、そんな事できるわけがない。

自分はただの人間だ、それこそちっぽけで何もないただの人間ではない。

そんな自分が、全てを救うなどできるわけがないじゃないか。

そもそも、全てを救うなどそれこそ神でしか――

――それに等しい力を私はお前に与えたのだぞ、選定者よ。

……思考が凍る。

選定者、その言葉を聞いた瞬間……あらゆる思考が消え失せた。

——この世の全てを救う為に、そして選定の為に私はお前は生み出した。ならば……その使命を果たさずにどうするのだろうか？

……待ってくれ。

そんな事を言われても、自分には何の事だか理解できない。

選定者って何？ それにあなたは何者なの？

——時がくれば自ずとわかる、わからざるおえなくなる。
それまでは、ただ自分の心のままに動くがよい。

声が遠ざかる。

待って、待ってくれ。

僕はまだ、あなたに訊きたい事が……。 「——レイジ！！」

「—————」

滲む視界の先に、見知った顔が心配そうな顔で自分を見つめている姿が入る。

「あ……え？」

「大丈夫か！？　どこか痛いのか？　病院に連れて行った方が……」

「……カイ……リ……？」

ゆっくりと、周りを見渡す。

……選手用として設けられた、自分とカイリの部屋だ。

「……夢」

「お前、凄くうなされてて……おもわず跳び起きちまったぜ」

「………」

身体中に衣服が貼りついて気持ち悪い。

まだ寒い季節だというのに、まるで真夏の中を走り回ったかのように汗だくになっていた。

「本当に大丈夫か？　何だったらジョーイさんを呼んで……」

「だ、大丈夫……変な夢を見ただけだから。
ごめん、起こしちゃって……」

「バーカ、気にする必要なんてねえよ。
それよか一回風呂に入って寝た方がいいぞ、顔も涙でぐちゃぐちゃだしな」

「涙……………」

そこでようやく、頬を伝う涙に気がついた。

……………どうして、泣いているのだろう。

悲しくなどないのに、どうして……………。

「それじゃ俺は先に寝るから、お前も早く寝た方がいいぞ？
もしかしたら明日はリターンマッチになるかもしれないからな」

「……………うん」

ふらふらと浴室へと向かっていく。

寝巻きどころか、下着にまで被害が及んでいた。

（……………あれは、夢？）

とてもそうは思えない、いや……………絶対に夢ではないだろう。

どうしてか、そう断言できる自分がいた。

……………。

昼間は活気に満ち溢れていたセキエイ高原も、夜中では静寂に包まれている。

（眠れない……）

シャワーを浴びて汗を取り、新しい寝巻きに着替えベッドに入ったのだが……どうしても眠れず、今はこうして外で散歩をしている状況だ。

そして隣には、心配してついてきたティナが空を見上げている。

「ごめんねティナ、疲れてるのに起こしちゃって……」

へそんな事お気になさらないくださいお父様、わたくしが勝手についてただけですから。

それに……お父様のお心がひどく乱れておりますし……

「……………」

さすがティナだ、すぐに見抜かれてしまった。

「でも大丈夫、また無駄に色々考え込んでるだけだからさ」

へ……それなら、いいのですが——っ

突然、ある方向に顔を上げ険しい表情を浮かべるティナ。

「……ティナ？」

どうしたというのだろうか、空を睨む彼女からは近寄りがたいオー

ラが滲み出ている。

「——お父様、あの方角からとてつもなく強いサイコパワーを感じます」

「えっ……？」

「それだけではありません、ひどく濃い憎しみと怒りも……」。

「一体何なのでしょう、そもそもこれだけの負の感情を生物が出す事ができるのでしょうか……」

「……………」

凄まじいまでの憎しみと怒り。

それはまるで……。

「レイジ、こんな夜中にどうしたんだ？」

後ろから掛けられる男性の声。

振り向くと……。

「ロストさん……レジェンドも」

そこには、ロストさんとレジェンドの姿が。

「明日はもしかしたらカイリと再試合をするのかもしれないのだぞ？
疲れているだろうし、早く休んだ方がいい」

「……はい。ところでロストさん達はこんな夜中に何をしていますか？」

「特に何をしているというわけではないが……何かが、おれとレジエンドを呼んでいるような気がしてな」

「……………」

「すまない。おれもレジエンドもよくはわからないのだが……声が聞こえたんだ」

「声、ですか……………」

「ああ。……それもシロガネ山の方からな」

「シロガネ山……………」

「お父様、シロガネ山とは……………」

——シロガネ山

その山は、カントー地方とジョウト地方の丁度境目に存在する聖なる山の名だ。

一年中氷と雪に閉ざされ、許可なく入る事は許されないほどの極寒の地。

優れた一流のトレーナーのみが入る事を許され、そこに住まう野生のポケモンや厳しい環境が、更なる高みへと導いてくれる最高峰の修行場でもあるらしい。

かつてシロナさんも、シロガネ山に登って修行をしたそうだ。

しかし……当然ながらそのような場所に住んでいる人間はいない、
そもそも住むのは禁止されている。

「ロストさん、声ってどんな声ですか……？」

「さてな……何を言っているかもわからんし、そもそも声なのか音
なのかもわからない。

だが——この声の主に会わなければならないと、自分自身が訴え
ているんだ」

レジェンドも同じ気持ちなのか、賛同するように頷く。

……謎の声。

そして、ティナが感じた形容できない負の塊。

両方とも、それを感じた先にあるのは……。

「……シロガネ山」

ただの偶然とは思えない。

その正体は何なのかは知らないし、もしかしたら気のせいではかな
いかもしれない。

でも……確かめなければならないと、この身も訴えかけていた。

「……ロストさん」

「……………」

「――行きましょう、シロガネ山に」

〈お父様!?!〉

「レイジ……………」

驚いた表情を向けるティナとロストさんには構わず、言葉を続ける。

「確かめなければならないと思います、その正体を……必ず」

「だがレイジ、おれはともかくお前にはポケモンリーグがあるんだぞ？」

〈そうですよお父様、それなのにどうして…………〉

「……行かなければいけないと思ったんだ、行かないと……きっと後悔すると」

〈で、ですが…………〉

「身勝手な事を言ってるのはわかってる、このままシロガネ山に行けば僕は間違いなく試合放棄と見なされて失格だ。

だけど……それでも僕は、シロガネ山に行かないと」

脅迫概念に近い何かが、自分を突き動かす。

そしてなにより、あの時の夢の声が言っていた言葉が……自分自身を動かしている。

「行きましょう、早く行かないと手遅れになる……そんな気がするんです」

「……………」

〈お父様……〉

「……おれは構わん、お前が決めた事にいちいち口出しするつもりはない」

「ロストさん……」

〈……もう、ルギア辺りが聞いたら怒りますよきっと〉

「なんとかなだめるよ、ありがとうティナ」

〈お父様の望みはわたくしの望みです、なら……反対する必要などありませんから〉

「五分後にもう一度ここに集合するぞ？」

「はい！」

善は急げ、早速自分の部屋に戻る。

もちろん周りの人達が起きないようにしながら。

……部屋に入ると、カイリは再び寝入っていた。

大いびきを掻き、寝相も悪いその姿におもわず苦笑を浮かべてしま
う。

へ……やはり、カグヤ達には言わないのですか？

「これは僕のわがままでしかない、それにカイリとカグヤはポケモ
ンリーグの為に今まで頑張ってきたんだ。

そんなみんなを、巻き込むわけにはいかないよ」

へでしたら、せめて置き手紙を残していった方がいいと思います。
黙って行けば、間違いなく心配するでしょうから

「そうだね」

すぐさま紙に、簡潔に事の次第を書き留める。

自分はシロガネ山にある事情で行く事にした、試合放棄ということ
にしているから心配しないで、と。

へ……間違いなく心配しますね

「仕方ないよ、みんな優しいから」

でも、何も言わずに行くよりはマシだと信じたい。

すぐさま私服に着替え、コートを羽織りボールを腰に装着する。

……みんなは、まだ眠っているようだ。

「ティナ、行こう」

〈はい〉

（……カイリ、もしリターンマッチになるとしたら、戦えなくてごめん）

寝ている彼に、心の中で謝罪をしつつ部屋を出た。

そしてすぐさま戻ると、既に準備を終えたロストさんがライコウと共に待っていた。

「……やはり、カグヤ達には何も言わなかったんだな」

「置き手紙はしましたから、大丈夫です」

「そういう問題ではないが……まあいい。それでは行くぞ？」

「はい。——リオン、出てきて!!」

ボールからリオンを出すと、半目の状態で大きな欠伸をした。

「リオン、こんな夜中に悪いんだけど、僕達を乗せてシログネ山に行ってくれないか？」

——それは別に構わねえけどよ、リーグ戦はどうすんだ？

「移動しながら話すよ、それより急いで」

——わかった。それじゃあ乗ってくれ。

乗りやすいように屈むリオンの背中に、ゆっくりと乗り込む。

——おいティナ、お前もかよ？

〈何か文句でも？〉

——まあいいけどよ。それじゃあレイジ、行くぜ？

お願い、そう言うとりオンは早速翼を羽ばたかせ空を飛ぶ。

その下で、ロストさんはライコウの背に乗り走り出した。

……。

——シロガネ山の気候は訪れる全ての者を拒絶する

屈強なポケモンですら生きるのに精一杯なこの地に、2人はただひたすらに山頂を目指していた。

（凄い、なんてものじゃない……なんなんだこの吹雪は）

大袈裟なくらいの厚着ですら、意味をなさないとばかりの吹雪に、心が折れそうになる。

幸いにもティナのバリアのおかげで、最悪の事態にはならないものの……ここは生き物が暮らせる世界ではなかった。

へ——酷い環境ですねこの山は。

ですが……先程感じた負の塊には、確実に近づいています

「……うん。僕にもそれがわかるよ」

ここに来て、レイジにもティナの言っていた憎しみと怒りを感じ取る事ができていた。

そして——彼はある確信をする。

(やっぱり、これはさっきの……)

へっ、お父様!!

「えっ……」

突然叫ぶティナの声に、レイジは顔を前に向ける。

瞬間、自分とロストに向かっていく幾つもの漆黒の球体が迫っている事に気づき。

「リオン、急降下をしながらかえんほうしゃ!!」

すぐさまリオンに指示を出し、その球体を迎え撃った。

レイジの指示通り、急降下をしながら球体を避け、回避できないものはかえんほうしゃで蹴散らしていく。

下でも、ロストはルカリオを繰り出しライコウと共に迫り来る球体を破壊しながら進んでいた。

「これは……シャドーボール!?」

——球体の数は、減るところかますます増えていく

「くっ……ルギア、エアロブラストだ!!」

ボールを投げると同時に指示を出す。

ルギアも場に出た瞬間、特大のエアロブラストで球体——シャドーボールの大群をまとめて薙ぎ払った。

「まったく、ずいぶんと非常識な事をする輩がいるようだな。しかし……余に対してこのような愚行を侵すとは愚かなり!!」

「……見えた。山頂だ!」

空中でリオンをボールに戻し、落下しながらルギアに掴まるレイジ。

ティナは先に地面へと着地し、彼等の後を追った。

「……随分と強い者がこの先にいるようだな。
マスター、努々油断するなよ?」

「わかってる。ルギアは戻ってて」

ルギアをボールに戻し、地面に着地すると同時に走り出す。

そして――山頂に辿り着いた瞬間。

――どくりと、鼓動が速まった

「――」

立っている。

吹き荒れる吹雪も、無意味だと言わんばかりに、そこには……一匹のポケモンが立っていた。

「……あいつは」

隣に立つロストとレジェンドの表情も、ひどく強張っている。

だがそれは、レイジとティナとて同じだ。

そして――そのポケモンはゆっくりと口を開く。

「貴様等……ワタシに何の用だ？」

威圧感溢れる、凄まじく低い声に身体が震える。

へお父様、わたくしが感じた憎しみの主は……このポケモンです

「……わかってる。僕にもわかるから……」

ありえない憎悪をその身に宿したポケモンに、レイジの頬に冷や汗が伝う。

「……お前だったのか、あの声の主は」

やはり、ロストとレジェンド、そしてティナを感じ取った存在は同じだったようだ。

「……貴様、人間か」

「僕はレイジ、君の名前は？」

逃げ出したい衝動を必死で抑えつけながら、問いかけるレイジ。

その問いに、ポケモンはゆっくりと答えた。

「……ミュウツー、そう呼ばれていた」

と。

「ミュウ、ツー……！？」

「……聞いた事のない名だ、ポケモンなのか？」

「そんなバカな……だって、あの計画は途中で消えたはずじゃ……」

「レイジ、一体何を言っているんだ？」

「……オーキド博士から聞いた事があるんです、かつて……幻のポケモンであるミュウの細胞を利用して、完全なる兵器としてのクローンポケモンを創り出す計画があったと」

「クローン、だと!?!」

「けれどその計画は事故により、初めから無かった事として処理された」と博士は言っていたのに……どうして」

そう、本来ならばミュウツーというポケモンはこの世に存在する事はないはずなのだ。

しかし、事実としてミュウツーは今日の前に存在している。

だからこそ、レイジは混乱していた。

へお父様、今はそのような事を言っている場合ではないようですよ

「えっ……」

殺気が膨れ上がる。

見ると、ミュウツーが自分達に対して臨戦態勢を……。

「待ってくれミュウツー、僕達は君と戦う為に来た訳じゃ——」

「黙れ!!」

迫るシャドーボール。

「レジェンド、かえんほうしゃ!!」

それを、レジェンドのかえんほうしゃが相殺する。

「貴様……!!」

「レイジ、戦うしかないようだぞ!」

「で、でも……」

「こちらに戦う意志がなくても、向こうはおれ達を殺す気だ!!」

「……………」

「人間は……この世界は、全て消し去る!!」

「っ、ティナ。サイコセイバーだ!!」

とにかく、今は戦うしかない。

たとえば、自分自身が望んでいないとしても……。

第70話 復讐鬼く雪の世界へく（後書き）

ありえない存在であるミュウツーとの戦いを強要されたレイジ達。

躊躇いながらも、レイジは戦う事になってしまう。

はたして、ミュウツーの目的とは一体……？

第71話 シロガネ山の死闘（VSミュウツー）（前書き）

シロガネ山から感じたこの世のものとは思えぬ憎悪を感じ取るレイジ。

すぐさまそこに向かうと、そこにいたのは怒りに支配されたポケモンーミュウツーだった。

吹雪に包まれた世界の中、憎しみを撒き散らそうと襲いかかるミュウツー。

慌てて臨戦態勢に入るレイジとロスト。

氷に閉ざされた死闘が、今始まる。

第71話 シロガネ山の死闘／VSミュウツー

「レジェンド、ほのおのパンチ!!」

既に「もうか」が発動したレジェンドが、炎に包まれた拳を繰り出す。

しかし……それを両手をかざして薄い壁を作り出し、攻撃を防ぐミュウツー。

その側面から、ティナが踏み込み一閃。

「チッ……」

軸は外されたものの、しっかりとダメージは与えられたのか、憎々しげに舌打ちをする。

「でんげきは!!」

「かえんほうしゃ!!」

まったく同時に、攻撃を仕掛けるティナとレジェンド。

「フン——」

それを、ミュウツーは片手で防いでしまった。

（っ、強い——!!）

ティナもレジェンドも手加減などしていない、既に「もうか」を発動しているのがなよりの証拠だ。

だというのに、ミュウツールの防御力は凄まじいものだった。

「――そんな程度か。無駄な時間を過ごすだけだな」

へっ、は――！

踏み込み、上段から双剣を振り下ろすティナ。

それをバリアで防ぎ、見下すように口元を歪ませるミュウツー。

「不思議な技だが、こんな程度の実力では無意味だな」

へっ、挑発がお上手ですね！！

「ぬっ……？」

バリアごとミュウツーを弾き飛ばし、再び踏み込み斬り上げる。

――凄まじい剣戟

交差する度に両者の間からは火花が散り、激突音が吹雪の中だというのによく聞こえる程に響き渡っていた。

へあなたは、何故そこまでの憎悪をその身に宿しているのですか！

「……………」

「あなたの心に全てを呑み込む程の闇を感じられます。あなたはこの世の全てを憎んでいる!!」

「――何故です!? 一体何故そこまでの――」

「黙れ!!」

怒りを込めたミュウツーの声。

それに反応するかのようにバリアが肥大化し、ティナを吹き飛ばした。

空中で一回転し、問題なく着地する。

「……焦りが見えましたね。わたくしの言葉で揺らいだのですか?」

「貴様……人間なんぞの下僕になっている分際で……!」

「わたくしはお父様の下僕ではなく娘です!!」

それに……わたくしのお父様を“なんぞ”扱いしないでください!!」

右の剣による薙ぎ払い。

それを右手で受け止め、左手を彼女に突き出す。

「同じ手には二度も通用しません!!」

顔を左に移動させながらしゃがみ込み、至近距離から放たれたシャドーボールを回避する。

「むっ!？」

それと同時に脚払いを仕掛け、ミュウツウのバランスが崩れた瞬間
右の剣を振り下ろし――

テレポートにより、逃げられてしまった。

へちよこまかと……面倒な相手ですね

しかし――やはりミュウツウの強さは自分より上だと理解する。

単純なサイコパワーでは自分より上である事はわかっていたが……
よもやここまでとは。

だが、自分の後ろには的確な指示を与えてくれる彼が居るのだ。

ならば、不安に思う必要などない。

「レジェンド、オーバーヒート!!」

左横からのレジェンドによるオーバーヒート。

同じように防御するミュウツウだが……さすがに先程よりパワーがあるのか、僅かに顔をしかませる。

「おのれ……邪魔をするなっ!!」

無理矢理オーバーヒートを吹き飛ばすミュウツウ。

しかしその時には、ティナが間合いを詰め必殺の一撃を……。

「愚か者が!!」

へぐ、あう——!?!?」

振り下ろした体勢のまま、ティナの身体が止まり宙に浮く。

「ティナ!!」

へくっ……なんてパワーを……」

「くだらぬ……実にくだらぬ存在が、いきがるな!!」

勢いよく地面に叩きつけられるティナの身体。

へが、ふ——っ!!」

「ティナ!!」

「レジェンド、かえんほうしゃ!!」

すぐさまティナを助けようと、かえんほうしゃを放つレジェンド。

しかし、右手でティナを拘束しながら左手でかえんほうしゃを受け止められてしまう。

「くっ……!!」

へふっ……ふふふっ」

「……何が可笑しい！」

へわ、わたくしの言葉に動揺するなんて……ち、ちゃんとした感情があるじゃないですか……」

「っ、貴様!!」

へあぐっ——!!」

「ティナ!!」

拙い、このままでは間違いなくティナは殺される。

(こうなったら……!)

——意識を、奥底に沈ませる

使いたくはないが、ティナの命には代えられない。

「——在るべき姿に還るんだ、ミュウツー!!」

光が、ミュウツーを包み込んでいく。

この力ならば、怒りに支配されたミュウツーも必ず——

「小僧、貴様ワタシに何をした!!」

「っ、そんな——!？」

力が――通じない。

確かにレイジから放たれた力はミュウツーを捉え、デッドポケモン達やスイクンの時のように、呪縛から解放されたはず。

それなのに……ミュウツーは苦しい表情と声を出すものの、その身に宿す怒りは少しも消えていなかった。

（そんな馬鹿な……この力はあらゆるポケモンに通用するはずなのに、どうして………！）

へっ、は――！

だがこれでティナの拘束が緩んだのか、どうにかミュウツーの呪縛から逃れレイジの隣に。

「ティナ、大丈夫！？」

へなんとか、と言いたい所ですが……凄まじいサイコパワーですね。わたくしでも脱出できませんでした。

――でも、どうしてお父様の力が

「……………」

この力は、異常な状態になったポケモンを正常に戻す力がある、デッド化の呪縛や今のミュウツーのように、怒りに我を忘れている者にも、通用するはずなのだ。

それなのに、まったくではないもののミュウツーの怒りが消えてはくれない。

それほどまでに深い怒りと憎しみなのか、それとも他に理由が……。

「……無駄な時間はこれで終わりだ。このまま死ね!!」

「――っ」

ミュウツールの周りに現れる、漆黒の球体。

「シャドーボールか……!!」

（けど――あの数は尋常じゃない……!!）

十や二十ではない、それこそ数え切れないほど沢山だ。

まるで、この世の終わりに降ってくる黒い禍凶星のようだ。

あれを受けるなど、できるわけがない。

「――レジェンド!!」

それぞれの主人を守るように、前に出るティナとレジェンド。

「ティナ!？」

「レジェンド!!」

「任せてください、全て消してみせます!!」

「……ティナ」

「死ねっ、人間共!!」

一斉に放たれるシャドーボール。

それに焦点を合わせ、ティナとレジェンドは身構えそして――

「薙ぎ払うんだ!!」

「レジェンド、シャイニングフレア!!!」

最強の技で、それに真っ向から向かっていった。

「ぐあ――!!」

「う、ぐ……!!」

眩い光がレイジ達から視覚を奪い、衝撃が彼等を後ろの岩場まで吹き飛ばす。

「っ、ぐ――!!」

後ろの頭に響く凄まじい衝撃と痛みで、一瞬意識が遠のいた。

「ぐ、あ……が」

――暖かい液体が、頬を伝い雪の上に落ちる。

それが血だと気づきつつも、光に包まれたティナ達の元へ。

「――」

そして……レイジの思考は停止した。

……。

パチパチという音は、この吹雪の世界でも燃えているからだろうか。
しかし、そんな事どうでもいい。

――レイジの足下で倒れているのは

「……ティ、ナ……」

敗れ、傷だらけになったティナとレジェンドの姿が……。

「ティ、ナ……?」

――彼女からの返事は返ってこない

ピクリともせず、端から見ているとまるで……。

「――死んだか」

「――」

つまらなげに、そう吐き捨てるミュウツー。

その身体には数多くの傷跡が見受けられるものの、ティナ達とは違い確かに立っていた。

「…………死んだ？」

そんなはずない、そういう風に見えるだけで、まだ生きている。

「無駄だ。たとえ生きているとしてもワタシに殺される、貴様等と一緒にな」

「……君は、何故そこまで生きとし生ける者を憎む？ 何が君をそうさせるの？」

「……気安いな小僧、貴様なんぞに教える義理があるとでも？」

「そうだね……だけど、君の瞳の中にある深い悲しみを、僕は知りたいと思ってる。」

——だから、君がどうしてこんな事をしているのか、教えてほしい」

「……………」

憎しみを込めた瞳で、レイジを睨むミュウツー。

その瞳に込められた感情は、それだけで人を射殺すほどのものだ。

それでも、レイジは臆する事なく近づいていく。

へお父、様……ダメ、です。近づいては……」

意識を取り戻し、手を伸ばすティナだが、身体が動かせずレイジを止める事ができない。

「……どうやら殺されたいらしいな」

互いの距離は一メートルも満たない、ミュウツーは自分から近づいてきた獲物に嘲笑を送りながら、右手を翳す。

——ミュウツーにとって、人間であるレイジを殺すなど造作もない少し力を込めれば、それこそ簡単に彼の顔など握り潰せるのだ。

「……………」

レイジは何も言わず、ミュウツーに手を差し伸べる。

「——っ」

レイジの頬から、鮮血が舞った。

見ると、決して浅くない切り傷が生まれている。

「——貴様、恐怖心はないのか？」

「あるよ。今だって恐くて足が震えてる。だけど……君の心が泣いているから」

「……ワタシの、心」

「だから、君の心を見せてほしい……」

「っ、ワタシに触れるな!!」

「ぐっ——!!」

吹き飛ばされるレイジ。

「レイジ!!——ぐ、あ!!」

「っ、ロストさん!？」

レイジを守るため、彼と岩の間に割って入りクッションになるロスト。

骨の軋む嫌な音を響かせながらも、ロストは立ち上がる。

「レイジ、あれは……ミュウツーは、ここで完全に倒しておかなければならない存在だ。

気持ち分かる、だが……今回ばかりは相手が悪すぎる」

「でも……」

「小うるさい人間が……これ以上ワタシの前に存在するな!!」

再び、先程と同じく数多くのシャドーボールがミュウツーの周りに現れる。

「くっ……………！」

ティナとレジエンドはダウン、しかし他のポケモンではあれだけの攻撃を防ぐ事はできない。

（ここまでか……………！）

しかし、そんな時レイジとロストのボールから勝手にポケモン達が姿を現した。

「みんな………」

「たわけが……！ さっさとティナを戻して余を出さぬか……！」

「ルギア………」

「それだけの力を持つ存在である貴様が、人間なんぞに力を貸すというのか……………！」

「貴様なんぞにとにかく言われる筋合いはないぞミュウツーとやら、余は余の意志でマスターに従っている。」

——貴様のように、頭ごなしに人間やポケモンを憎むような石頭では、一生理解できぬかもしれんがな」

「……………」

——ミュウツーの殺気が増す

「フン、このような小さき挑発に乗るとは……………存外に子供よな」

「黙れ………！ 貴様に何がわかる！！」

「わからぬさ。余は他者の心を読むなどという能力は持っておらぬ。しかし——今の貴様はただ愚かしいだけだ、目の前の現実から目を背けただ悲しみを紛らわすために周りを犠牲にしようとしている。——そんなもの、余からすれば無意味で無価値なものにしか思えぬわ」

「貴様 あああっ！！」

激昂するミュウツーに、ルギアの表情が僅かに歪み冷たいものになる。

まるで、今のミュウツーを本気で憐れむように。

「——誰かに愛されるというのは、素晴らしいものだぞ？」

余も、最近までそれを知らなかったが……それはとても尊くかけがえないものだ。

それが何故わからぬ？何故知ろうとしない？」

「っ、ワタシにはそんなものがない！！」

「必要ないのなら、何故そんなにも感情を露わにする必要がある？さっきまでの余裕は一体どこに行った？」

笑うルギアに、ミュウツーの怒りは加速度的に肥大していく。

「お前が何を恐れているのかは知らんが、自分自身を偽るな！！周りを巻き込む事などするでない！！」

「黙れえええっ！！！！」

一斉に撃ち出されるシャドーボール。

だが、その威力は先程のとは違い……ひどく不安定だ。

「——たわけが」

それを、エアロブラストで一掃した。

「なっ——！？」

「フン、そのように揺らいだ心で余に勝てると思っているのか？
くだらぬな、余を誰だと思っているのだ？」

「な、何故だ……何故ワタシの攻撃が」

「揺らいだ心で放った攻撃など、余には通じぬ。
——ミュウツィ、覚悟せい！！！」

「くっ……………！！！」

「待って、ルギア！！！」

完全に息の根を止めようとするルギアに、レイジの声が響く。

「っ、マスター、何故止める！！！」

「ミュウツィを殺したらダメだ、だって彼は身勝手な人間達の欲望で生まれたんだ。」

それなのに、このまま消えたりしたら……一体彼は何のために生まれてきたのかわからなくなる」

「た、たわけが！！ そのような事を言っている場合か！！」

こやつはマスター達を殺そうとしておる、その後は無関係な人間達も殺めようとしておるのだぞ！？　だというのに、何を世迷い言のような事を言っているのだ！！」

「――それでも、失っていい命なんかない。

命はこの世に代わりなんか存在しない、ミュウツ―は……ここにしか居ないんだから」

言いながら、ミュウツ―に近づいていくレイジ。

「マスター！！」

「っ、近づくな！！」

放たれるシャドーボール。

しかし――その軌道は大きく外れ、遙か後ろの岩にぶつかった。

「恐がらないで」

「っ、近づくなと言ったはずだ！！」

その後もシャドーボールを放ち続けるミュウツ―だが、その全てはレイジから外れる。

「……………」

「マスター……」

「ミュウツー、君の心を……僕に見せて」

恐がらせないように、優しい口調で言いながら、ミュウツーの身体に手を伸ばす。

尚も攻撃を仕掛けようとするミュウツーだが、何故か躊躇いの表情を見せたまま彼を見つめるのみ。

そして――レイジの手がミュウツーに触れた瞬間。

「――、あ」

短く声を漏らし。

レイジはミュウツーに寄りかかるように倒れ。

そのまま、眠ったように意識を失った――

第72話 心の試練（ミュウツールの過去）（前書き）

ミュウツールを救うため、力によって彼の心を覗き込むレイジ。

だが……彼の心は、レイジの想像を絶するおぞましいものだった……。

第72話 心の試練（ミュウツーの過去）

「……………」

視界がぼやける。

……欠けた夢を、見ているようだ。

（これが、ミュウツーの心……？）

周りに映るのは、1人の男性とその娘だろうか……小さな女の子の姿。

この人達が、ミュウツーにとってかけがえのない人達なのだろう。まるで写真のように切り取られた絵の中で、彼等は笑っていた。

とても幸せそうに、笑っていた……。

（…………ああ、なんだ）

ミュウツーも、本気で人間を憎んでいるわけではなかったようだ。だって、人間を憎んでいたら……こんな思い出を心に残しておくわけがないのだから。

（……フジ博士、そしてアイちゃん……）

知らない人の名が、頭に入ってくる。

ミウツーの心を見る度に、彼の記憶が知識となって頭に詰め込まれる。

こちらの意志など無関係に、だからだんだんと頭が痛くなっていた。

当然だ、容器に水を入れ続ければいつかは溢れるように。

容量がある頭に、どんどん記憶と知識を詰め込んでいけば……頭がパンクする。

「あ、ぐ、は……」

痛い。

痛くて、泣きそうだ。

ズキズキ、などという優しい表現などではない、まるで鈍器で殴られ続けているような鈍い痛みが走る。

——意識が断裂する

目を背けるな。

——逃げてしまいたい

目を背けるな。

——このまま、消えてしまいたい

目を背けるな。

内なる自分が、逃げるなど釘を刺す。

ミュウツーの心を救うまでは、逃げる事は許されない。

「ぐ、っ——」

もっと奥へ。

ミュウツーが、どうしてこうなった原因を探らないと。

手を伸ばす。

手を伸ばす。

手を伸ばす。

この先へ、綺麗な思い出を抜けておぞましい記憶へと……。

「——」

ブチッと、テレビの電源が切れるような音が耳に響いた。

——瞬間、世界が暗転する

「————」

思考が、身体が凍りつく。

——またも入ってくるミュウツーの記憶

だけど、これ、は……。

「ぎ————っ！！？」

奇声を上げる。

「ぎ——あああああああっ！！！！！？？」

流れてくる。

ミュウツーの記憶が、それと同時に彼の激情が。

けれど、それは自分が想像したものなどとは比べものにならない程、凄まじいものだった。——殺してやる。

あるのは、殺意のみ。

——殺してやる。

殺されたのだ、ある日……家族と暮っていたフジ博士とアイちゃん
が。

——殺してやる。

まるで花を摘むように、呆気なく。

——殺してやる。

殺したのは……ミウツーの力を自分のものにしようとした、ある
組織。

——殺してやる。

その時——彼の優しい心は砕け散った。

——殺してやる!!

「ぐ、が、あ……………！」

明確な殺意が、身体に流れ込んでくる。

信じられない、生き物とは……………こうも誰かにこれほどまでの殺意を抱けるものなのか……………。

身体も心も、バラバラに砕けてしまいそうだ。

許さない、その言葉がまるで自分を罪人だと告げているような気がして、死にたくなる。

否、今すぐにでもこの喉をかつ切って死んでやりたい。

耐えられない、こんな感情など人間が……………生き物が抱くべきものじゃない。

ミュウツーは、こんなものをずっと心の中に抱いて生きてきたのか……………。

ありえない、そんな事をすれば身体はおろか心が先に死ぬ。

——これが、ミュウツーを変えた記憶

自分を兵器として創り上げたが、家族としての愛情を注いでくれたフジ博士とアイちゃんを無慈悲に奪われた怒り、憎しみが……………。

「ぐ、あ、ぎい——」

意識が保てない。

自分が、この怒りの渦の中に溶けていく。

必死に抗っても、意味をなさない。

――消える

人間としての自分が、少しずつ削られていくかのように消えていく。

「は、あ、は――」

甘く見ていたわけではない。

けれど、彼の憎しみを心の底から理解する事ができなかったのも事実だ。

その結果が――このまま消えていくというものに繋がるのか……？

「――ぎ、ぐう」

嫌だ、そんなものは認めない。

まだ死ねない、死ぬ事など許さない。

まだやるべき事がある、明確な夢が……希望が自分にはある。

そして……自分を待っている人がいるのだから。

こんな所では……。

絶、対、に……。

「ミュウ、ツー……」

手を伸ばした。

必死にもがいて、惨めったらしく生に執着しようとして――

――何かが、自分の手を優しく握ってくれた

「――、あ」

確かな感触。

小さな感触だから、きっと自分よりずっと小さな子供の手。

その手が、自分をこの地獄から救おうと引っ張り上げてくれた。

「は、あ………」

痛みも、身体を消そうとする激情も無くなっていく。

「……………君、は？」

感触を頼りに、虚空に問うた。

返事はなく、けれど……暖かな感触はそのままだ。

「——ミュウツーを、助けてほしいの？」

なんとなく、本当になんとかそう言っているように思えて、おもわずそんな事を口走っていた。

「……………」

返事はない。

でも、それに答えるように暖かさが消えていく。

——そうだよ、と

自分に対して、そう答えてくれたような気がした。

「……ありがとう」

既に消えてしまった存在に、感謝の言葉を。

その後、暗闇の中ゆっくりと歩を進める。

そして——ようやく見つける事ができた。

「——ミュウツー」

暗闇の中で、必死に泣くのを我慢している子供のようにうずくまりながら。

ミュウツーは、声に反応して顔を上げた。

しかしこれは先程のミュウツーではなく、おそらく過去の姿。

それを証拠に、身体は小さく顔にもまだあどけなさが残っている。

「……君は、何を望んでいたの？」

恐がらせないように、目線は彼に合わせ、ゆっくりと問いかける。

すると、彼は……。

「——お父さんに、アイちゃんに会いたい」

と、泣き出す一歩手前のような声で、答えてくれた。

「……………」

寂しかった……辛かったのだ、彼は。

博士とアイちゃん、ミュウツーにとって家族だった人達を奪われ。

捕まり、兵器としての自分になるよう強要された。

何の罪もない彼が、罪人に仕立て上げられたのだ。

傷だらけで、悲しみに包まれた心は……もう、二度と治らない。

決して逃れる事などできない過去がある限り、彼はこれからも家族だと思っていた人達を思い出しては心を傷つける。

——だが、それでも

二度と治らない心でも、癒やす事だって……きつとできるはずだ。
小さな彼を抱き上げ、優しく抱きしめる。

「ミュウツー……君が天国に行くまで、博士とアイちゃんには会えないんだ……」

「やだ……会いたい、会いたいよ……」

「ダメだよ。君はまだ生きてる……君は自ら命を断ったら、きつと2人は悲しむよ？」

「でも……」

「君は、まだ生きてなくちゃダメだ。」

博士やアイちゃんは君に生きてほしいから、兵器としてじゃなく君を家族として受け入れた。

だから……そんな2人の想いを、無駄にしたらダメだ」

「けど、ボクは兵器だもん……いっぱい、いっぱい殺しちゃうよ！」

「そんな事させない。君は兵器じゃない、れっきとした今を生きている生き物だ。」

たとえ生まれが普通じゃないとしても、それが真実である事に変わりはない」

彼は兵器じゃない、そんな事は認めない。

たとえその為に生み出されたとしても、フジ博士やアイちゃんがそう願ったように……彼を兵器になどさせない。

「一人ぼっちじゃない……君は、一人ぼっちじゃないよ……」

頭を撫で、君は1人じゃないと繰り返して告げた。

「…………ボクは、生きていていいの？」

「それが君のお父さんとアイちゃんの願いだ。」

自分の思う通りに……誰かに強要されるわけじゃない、自分の意志で生きていくんだ。

——もちろん、僕だってそう願ってるよ」

「……………」

ミュウツーの身体から、力が抜けていく。

それと同時に、彼の身体も消えていく……。

「ミュウツー……」

「——ありがとう」

告げられた言葉は、ただ一言。

だけど、彼の心が少しだけ晴れてくれたと……信じたい。

「……………」

再び静寂が訪れる。

だけど、心は軽く穏やかだった。

——意識を内側に

紡ぐべき言葉は、既に決まっている。

右手を天に挙げ、力ある言葉を口にした。

「——在るべき姿に還るんだ、ミュウツ」

瞬間、周りの世界が明るさを取り戻していく。

どうやら、意識を現実へと帰す時が来たようだ。

漆黒から白一色になった世界で、最後に見た光景は……。

「……ありがとう、アイちゃん」

自分に向かって手を振っている、小さな少女の姿だった――

……。

「……………」

「マスター!!」

〈お父様!!〉

目を醒ますと同時に、泣きそうなティナとルギアの顔が視界に入る。

「……心配掛けてごめんね、でも大丈夫だから」

眠っている間、ずっと自分の身体を暖めてくれていたようだ、ルギアとティナの頭を撫でながら立ち上がる。

「レイジ……無事でなによりだ」

「心配掛けてすみませんロストさん、レジェンドもありがとう」

「――――」

「……………」

ミュウツーの方へ視線を送ると、彼からは戸惑いの色が感じ取れた。

「ミュウツー、君の憎しみと悲しみはわかった。

確かに、あんな目に遭えば全てを憎んでも仕方ないかもしれない……。

でも、こんな事フジ博士もアイちゃんも――」

「黙れ!!」

ミュウツーの声が、彼の周りの雪を吹き飛ばす。

「……………」

「貴様に……貴様に何がわかる!! 父を……そして姉と慕っていた彼女を失い、ずっと兵器として生きてきたワタシの気持ちが、貴様なんぞにわかってたまるか!!」

「……そうだね。結局自分の苦しみをわかるのは自分自身しかない。

だから、僕は君の気持ちを真にわかってはやれないと思う」

「ならば消えろ! 二度とワタシの前でそのような戯れ言を――」

「でも、博士とアイちゃんの気持ちは、君の心を見て理解できた」

「――――」

「2人共、君に生きていてほしいと願ってた。

それなのに、君は2人を愛していた心を捨てて憎しみを宿して生きる事を望むの?」

それが本当に正しい事だと、君は本気で思っているの？」

「黙れと言った!!」

「……………」

「ワタシは……この世の全てが憎い!!　ワタシから全てを奪ったこの世界が!!」

「……ミュウツ」

「ちっ……マスターの優しさを踏みにじる愚か者が、これ以上同情の余地はないな」

殺気立つルギア。

「……じゃあ、一つ賭けをしないか？」

「賭け、だと……？」

「今から1対1で勝負する、僕が勝ったら……君はもう誰も殺さないと誓ってほしい」

「……では、ワタシが勝った場合は？」

「僕の命をあげる、もちろん抵抗はしない」

へっ、お父様!??

「マスター、何を馬鹿な事を言っているのだ!!」

そのような事をせずとも、余がこやつを黙らせる!!」

「レイジ、お前はまだミュウツを……」

「救いたい。だって……アイちゃんが僕に望んだ事だから」

「アイちゃん、だと!？」

「こらマスター、そなた気絶している間に何をしておったのだ!!」

「へルギア、少し黙っててください」

「……………どうする?」

「ワタシがその賭けに乗る必要はない、今ここで……お前達を殺せばいいだけだ」

「――マスター、もう限界だ」

「えっ……?」

瞬間、ルギアの翼がミュウツを吹き飛ばした。

「ルギア!!」

「もうこれ以上マスターの優しさをこの者に向ける必要はない!!
そんなにこの世の全てを憎むなら、余は貴様を生かしてはおけぬ
!!」

「ルギア、ダメだ!!」

叫ぶが、聞く耳持たずにミュウツーへと向かっていくルギア。

「くっ………！」

無理矢理にも止めなくては、意識を集中させ手を突き出す。

「在るべき姿に還——っ！！？」

しかし、力を使おうとした瞬間膝が折れ雪の中に倒れ込んでしまった。

「そん、な………！？」

——力を使いすぎた

もう、あの力は使えない。

〈お父様！！〉

「あ、く……ルギアを、止めない、と………」

〈お父様……〉

ティナの中で、迷いが生まれる。

レイジの指示に従うか、それとも……このままミュウツーを倒すか。

レイジの指示に背く事はティナにとって許されない事だ、しかし……これ以上ミュウツーを野放しにしていたら、彼は間違いなく殺される。

それに、ティナもルギアと同じくレイジの優しさを踏みにじったミュウツーに、怒りを抱いている。

……このまま、止めない方がいいかもしれない。

そう思い、ティナは心の中でレイジに謝罪の言葉を告げつつ、ルギアの戦いを傍観する事にした。

「ミュウツー、貴様の悲しみがどんなものかは余も知らぬ!!」

だが、そんなお前の心を救おうとしたマスターの想いを踏みにじった事だけは、絶対に許すわけにはいかん!!」

「黙れ!! たかたが人間がワタシの心を救おうなどと、おこがましいにも程がある!!」

「我等と人間は同等の存在だ!! たとえ我等より力が弱くとも、劣っているわけではない!!」

ルギアのハイドロポンプが、ミュウツーを岩に叩きつけた。

「貴様あつ!!」

「今の貴様はただ泣きじゃくる子供と大差ない、いい加減……大人にならぬか馬鹿者が!!」

「黙れえつ!!」

シャドーボールを撃ち放つミュウツー。

それを、はかいこうせんで相殺する。爆発が起き、その余波で両者共に吹き飛ばされ岩に叩きつけられた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

連戦でさすがに疲れの色を見せ始めるミュウツー、肩で大きく息をしている。

「かあっ!!」

「チッ——!!」

その隙を逃さず、ミュウツーの足元を凍らせようとふぶきを放つルギア。

すぐさま回避しようとするミュウツーだが――

「ぐっ!!!?」

今まで蓄積されたダメージが身体を蝕み、回避を遅らせてしまう。

ふぶきによって、ミュウツーの足元が凍りつく。

すぐさま抜け出そうとするが、それより先にルギアの必殺の一撃が完成する方が速い――!!

「トドメだ。消えてしまえ!!」

「くっ…………!!」

ルギアのエアロブラストに、防御も回避も間に合わない。

死を覚悟しながらも、ミュウツーは最後までルギアを睨みつけ……。

「ルギア、やめて!!」

戦いの場に響く1人の少年の声が、ルギアの動きを止めていた。

「マスター……そなた、この期に及んでまだ」

ルギアの抗議の声には構わず、ミュウツーの元に。

「――何故だ」

「えっ……?」

「何故、そこまでしてワタシを救おうとする?

ワタシはお前を殺そうとしてるのに、何故……」

「だって、ミュウツーには生きていてほしいから」

「……たった、それだけの理由で、お前は命を懸けると……」

「それが僕の生き方だ、誰かに強要されたわけじゃない……自分で決めた道だから、たとえ変に思われたって、最後まで貫き通す」

「――」

その、真っ直ぐな瞳は。

ミュウツーの中にある、何かを……少しだけ、薄めてくれた。

「……ミュウツ―？」

顔を上げる。

そして――驚いた。

「ミュウツ―……」

彼の瞳から、涙が零れていく。

少しずつ、けれど確実に。

すると、彼はぽつりと呟いた。

「――ワタシの負けだ」

涙で瞳を濡らしながら、今までにない穏やかな声で。

彼は、そう告げ己の敗北を認めていた――

第73話 レイジを待つ者達へ再び始まるセキエイ大会へ（前書き）

ミュウツーとの戦いを終えたレイジとロスト。

しかし、セキエイ大会の試合はとうに始まっていた……。

第73話 レイジを待つ者達へ再び始まるセキエイ大会へ

「……さあ、そろそろ帰りましょうか？」

「そうだな……」

ルギアとティナとレジェンドをボールに戻し、リオンとライコウを場に出すレイジとロスト。

「ミュウツー、君はこれからどうする？」

「……行く当てはない、だが……これから自分は何の為に存在すればいいのか、考えながら生きていくつもりだ」

「……自分が何の為に、か」

「ロストさん……？」

「……ならばミュウツーよ、おれと一緒に来ないか？」

「えっ……？」

「何だと……？」

「おれには記憶がない、だから自分が何の為に存在しているのか……それを知るために世界中を旅している。

目的が一緒なら、共に行かないか？」

「……………」

暫し、考え込むような表情になるミュウツー。

「……いいだろう。ならば宜しく頼む」

そう言って、ロストの前に立った。

そんなミュウツーに頷きを返し、モンスターボールを掲げるロスト。
ミュウツーはボールの中に入り……少しだけ揺れはしたが、すぐさま収まった。

「……ロストさん」

「……こいつは、おれと同じなのかもしれないな」

「えっ？」

「自分には何もないと、思い込んでいる子供なんだ。
周りには自分を見ってくれる者がいるのにそれに気づかない、少し前のおれと……同じだった」

「……………」

「ミュウツーはおれが責任を持って優しいポケモンにしてみせるよ。
——さあ、セキエイ高原に帰ろう」

「……はい」

ロストに任せれば、きっと大丈夫だ。

お願いします、そう小さく告げてから、レイジはリオンの背中に乗った。

——なあ、レイジ。

「なに？」

——どうでもいいかもしれないけど、お前ちゃんとカグヤ達をなだめる方法とか考えてるか？

「……………」

リオンから顔を逸らすレイジ。

——考えてないみたいだな、やっぱ。

「そ、そんな事言われたって……仕方ないじゃないか。
そんな暇なんてなかったし……」

——そりゃあそうだけどよ、きっと今頃向こうでは大騒ぎだぞ？

「うっ……」

時計を見ると、既に時刻は午前9時を過ぎている。

どうするのか決まったにしろ決まらないにしろ、あんな書き置きし
か残していない自分を捜している所かもしれない。

大会運営委員も知らせにやってくるだろうし……今頃、会場は大パ

ニツクになっているかもしれない。

自分の事など気にせずに、カイリとカグヤで決勝戦をしてくれているのだから……。

——俺は助けないからな。

「リオン、それは薄情だと思うけど……」

——無理無理、カグヤは怒るとめっちゃくちゃ怖いんだから。
というわけで、自分でなんとかしろよ？

「……………」

無情なリオンに、つい拳を握りしめてしまうレイジ。

（……まあ、仕方ないよね）

勝手な行動をしたのは自分なのだ、ここはおとなしく怒られる事にしよう。

……しかし、やっぱり帰りたくなってしまうレイジなのであった。

……………。

「————あれ？」

シロガネ山からセキエイ高原へと戻ってきたレイジ達。

しかし、なにやら様子がおかしい。

時刻は既に11時、どう考えても決勝戦が始まる時間だ。

だというのに、歓声の類がまったく聞こえないのは何故だろうか。

——まだ試合が始まってねえんじゃねえか？

「そんなはずないよ、だっていくらギリギリまで僕を待っていてくれたとしても、この時間まで試合が始まるなんてありえないはずだし……」

だが、見た限りでは試合が始まっていないのもまた事実。

不思議に思いながら、地上に降り立つレイジ。

すると……。

「おかえりなさい、レイジくん」

「レイジ、おかえりー」

「え——」

スタジアムの入口に、2人の女性がレイジの帰りを待っていてくれた。

1人はシロナ、そしてもう1人は……。

「カ、カグヤ!?!」

そう、決勝戦をカイリと戦っているであろうと思われたカグヤだった。

これには、さすがのレイジも驚く。

「カグヤ、決勝戦はどうしたの!?!」

「決勝戦? ああ……やってないよ」

「やってないって……どういう——」

「それより、早くこっちに来て!」

「みんなレイジくんを待っているんだから」

言いながら、レイジの両腕を掴みぐいぐい引っ張っていくシロナとカグヤ。

抗議の声を出そうにも、2人は「まあまあ」とか言いながらまったく聞き入れてくれない。

「ち、ちょっと待ってよ2人とも! 一体どうしたって——」

「行けばわかるよ」

「そうそう、だから今はおとなしくついてきて」

「ついてきてって……」

一体何をしたいのだろうかこの2人は。

そんな事を考えつつ、レイジはおとなしく2人についていくと……。

「————えっ？」

辿り着いた先は——バトルフィールド。

『レイジ選手です！ レイジ選手がスタジアムに帰ってきました！
』

レイジの登場により、スタジアムからは惜しみない歓声が響き渡る。

だが、当のレイジは当然ながら何がなんだかわかっていない。

「これは……？」

「ようやく帰ってきたか、おせえぞレイジ」

「カイリ、それにヒメカとミカンさんまで……。

こ、これは一体どういう事なの？」

「それはボクから説明させてもらうよ」

そう言ってレイジの前に現れたのは、マントを翻した青年——リীগチャンピオンのワタルだった。

「……ワタルさん」

「久しぶりだねレイジくん、キミのバトルはいつも楽しんで見させてもらってたよ」

「ワタルさん、これは一体どういう事なんですか？　どうして決勝戦が始まってなくて……」

「――それがね、カイリくんもカグヤくんもレイジがいない状態じや決勝戦を行わないと言い出してね」

「はあっ!？」

おもわずカイリとカグヤに視線を向ける。

「そんなの当たり前だろうが、お前との決着をつけねえで決勝戦なんかできるかよ」

「私も。レイジがいない状態で決勝戦なんかできないよ」

「と、いうわけさ。だからボクとシロナで大会運営委員を脅……説得してね。」

観客のみんなも、キミが不戦敗になる事に納得できなかったから、快くキミの帰りを待っていてくれたんだ」

「そんな……でも、僕の我が儘で」

「キミはポケモンを救うためにシロガネ山に行ったんだろう？　ボクはキミの人となり完全に理解したわけではないけど、キミ

が理由もなく試合放棄するとは思えない。

みんなだってそう思ったからこそ、待っていていたんだから」

「……………」

信じられなかった。

こんな……身勝手な理由で棄権した自分を、待っていてくれたなんて……。

「キミのバトルは素晴らしいものだ、人々を魅了する力がある。みんな、そんなキミのバトルが観たいから、こうやって待っていてくれたんだよ？」

「——、あ」

頬を伝う、熱い液体。

「あらら……」

「おいおい、泣くことはねえだろ？」

「ご、ごめっ……でも、嬉しくて……」

自分を待ってくれた、この事実……たまらなく嬉しい。

だから、レイジは我慢できずに涙を流した。

「さあ、感動するのはまだ早いよレイジくん。

なんといっても進行が大幅にズレてしまったからね、すぐにカイ

リくんとのリターンマッチだ」

「リターンマッチ……」

「と言っても6体6のフルバトルじゃない、手持ちは一体だけのバトルになる。」

さあ、準備はできているかい？」

「は、はい!!」

「よっしゃ、絶対に負けないからなレイジ!!」

言いながら、自分のポジションへと移動していくカイリ。

レイジもすぐさまフィールドへと向かおうとして。

「レイジ!!」

「レイジくん!!」

まったくの同時に、カグヤとシロナに呼び止められた。

「何？」

「――頑張ってね!」

「いいバトルを。応援してるわ」

優しくそう告げ、カグヤとシロナは観客席へと戻っていく。

そして、残るヒメカ達もカグヤ達の後を追ってフィールドを後にした。

「レイジくん、キミが勝つかカイリくんが勝つか……それはわからないけれど、お互いに悔いのないバトルをやってくれ！」

「——はい!!」

『さあ、いよいよレイジ選手とカイリ選手のリターンマッチが開始されようとしています。』

スタジアムは凄まじい熱気に包まれ、この激闘を心待ちにしてきたという事がわかるくらいです!!』

「……………」

出せるポケモンは、たった一体だけ。

……これで今度こそ決勝戦に進めるトレーナーが決まる。

自分か、それともカイリか。

どちらになるかはわからない、けれど……みんなが自分のバトルを観たい為に待っていてくれた。

ならば、それに精一杯応えられるようなバトルをしてみせる。

「レイジ、今度こそ俺が勝つ!!」

「負けない……僕だって絶対に負けない!!」

『運命のリターンマッチ、はたして両者はどのポケモンを繰り出すのか!?!』

「カノン、行け!!」

『カイリ選手はラティアスです!!　そしてレイジ選手のポケモンは——』

「——ティナ、お願い!」

『出ましたー!!　レイジ選手の繰り出したポケモンはサーナイトだ!!』

「ティナとカノン……」

「1対1……どっちが勝つのかしら……」

「先攻はカイリ選手からとなります!!」

（レイジ……俺は必ずお前に勝つぜ!!）

（負けない……絶対に、勝ってみせる!!）

みなぎる闘志を拳に込めて、少年達は互いに相手を睨む。

そして——

「——試合、開始!!」

リターンマッチが、遂に幕を開いた——!

「カノン、れいとうビーム!!」

「サイコセイバーだ!」

指示は同時に。

れいとうビームを放つカノン、それをティナは右の剣で切り払い間合いを詰める。

すかさず左の剣での切り上げ。

「かわしてドラゴンクロー!!」

カイリの指示が飛び出すと同時に、ティナの剣が空を切りすかさずカノンのドラゴンクローが迫るが……。

すぐに戻しておいた右の剣で、完全に防ぎきる。

へ……さすがに、やりますねカノン

「ティナこそ……でも、絶対に負けない!!」

へそれはわたくしの台詞です!!

激しくぶつかり合うサイコセイバーとドラゴンクロー、どちらもパワー、スピード共に互角であり、互いに弾き飛ばされ距離が離れる。

「カノン、りゅうせいぐん!!」

しかし、カノンは空中でバランスをとりながらもりゅうせいぐんを放つ。

都合二十以上の攻撃が、一斉にティナへと迫っていく――！

「続いてりゅうのはどう!!」

りゅうせいぐんがティナに届く前に、次なる攻撃を仕掛けるカイリ。

――りゅうせいぐんだけではティナにダメージは与えられない

しかし、たとえりゅうせいぐんを防がれても、間髪入れずに放ったりゅうのはどうには対処しきれないはずだ。

それはカイリだけではなく、カノンとて同じ気持ちだった。

だが――ティナの剣戟は彼等の目論見を真っ向から叩き潰す。

「ティナ!!」

短くレイジが彼女の名を呼んだ瞬間。

へは――っ!!」

裂帛の気合いを込め、双剣を振り回すティナ。

その動きはただひたすらに速く、一振りで自分に襲いかかるりゅうせいぐん“だけ”を正確に叩き落としていく。

「なに――っ!？」

「そんな……まさかあそこまで!？」

りゅうせいぐんといっても、すべての攻撃が対象に当たるわけではない。

ティナはそれを見極め、必要最低限の動きだけで完全に防いでいるのだ。

まるで舞を踊るかのようなティナの動きは、普通なら不意打ちになったであろうりゅうのはどうを一太刀で斬り裂き、カノンとの間合いを詰めていく。

「ドラゴンクロードで迎え撃て!!」

さすがに驚愕に値するが、すぐさまカノンに指示を出すカイリ。

ドラゴンクロードを発動させ、カノンは迫り来るティナにその爪を振り下ろして……。

へわたくしの技は、剣だけではありませんよ?」

そう告げながら、ティナはカノンの攻撃を回避すると同時に両手の剣を消し、そのまま空手をカノンの身体に添えて。

「シャドーボール!!」

至近距離から、シャドーボールを叩き込んだ!!

「カノン!!」

壁にまで吹き飛ばされるカノン、土煙が舞い彼女の姿が見えなくなる。

だが——ダメージを受けたのは彼女だけではなかった。

へう、く……!??

「ティナ!？」

へくっ……や、やりますね。まさかあの状況で反撃ができるなんて……

——あの瞬間

シャドーボールが当たる寸前、カノンはティナの身体にみずのはどうを当てていたのだ。

カノンほどではないにしろ、ダメージによって顔をしかめるティナ。

「——カノン、大丈夫だよな？」

「ええ、もちろんですよマスター」

「……………」

土煙から出てきたカノンの表情は、まだまだ余裕の色が見受けられた。

（やっぱり強い……カイリもカノンも、単純な強さだけじゃなくて

コンビネーションも)

(くそっ、さすがレイジとティナのコンビだな、容易に攻撃を仕掛けたらこっちがやられちまう)

『どちらも一步も譲らない凄い戦いだ!!』

次にどんな攻防になるか、まったく予想がつきません!!』

「カノン、ミストボール!!」

「ティナ、エナジーボールだ!!」

長距離からの攻撃は、互いに相殺という形に終わってしまう。

「ギガインパクト!!」

「ティナ、こっちもギガインパクトだ!!」

『はああああっ!!!!』

互いのギガインパクトによる凄まじい衝撃と爆発音、そして煙がフイールド全体を包み、視界を塞いでいく。

しかし——今回は相殺という形では終わらなかった。

「ティナ!!」

へう、ぐ、あ……………!!」

破壊力で負け、カノンのギガインパクトを身体に受けてしまったテ

イナ。

フィールドに倒れ、傷だらけの身体は見ていて痛々しかった。

「はかいこうせん!!」

「っ、サイコセイバーで斬り裂いて!!」

「は、はい!!」

レイジの声にどうにか反応し、迫り来るはかいこうせんを上半身を起こしただけの無理な体勢のまま、サイコセイバーで2つに分けた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

（…もう、あまり長くは保たない）

カノンの姿は、煙のせいで見る事ができない。

気配は感じるものの、ティナでは煙の中にいるポケモンを完全に感知する事は不可能だ。

だが——煙が晴れた時には。

「なっ——」

「へこ、これは……!?!」

既にティナを囲むような構図で、カノンは必殺の一撃を繰り出す準備を終えていた。

（ギガインパクト……でも違う!! カノンの周りに浮かぶ生命体は、ギガインパクトと同じくらいのパワーを——）

「レイジ、これで俺達の勝ちだな!!」

「……………」

「四発分もギガインパクトを展開したら、さすがのお前とティナも——」

「さーて……そいつはどうか？」

——カイリが放とうとしているのは、スターダスト・ミラーージュだ
パワーの面では間違いなくティナを超えている、だというのに……
レイジもティナも少しも戦意を喪失していない。

「なら……これで決着をつけてやるぜ!!」

「——っ」

来る。

これを防がなければ、こちらの勝利は絶対にありえない。

「ティナ、フルパワーだ!!」

〈はい!!〉

左の剣を投げ捨て、右の剣を両手で握り全サイコパワーを込めていく。

（真っ向勝負するつもりか………!!）

やはり、レイジは普通の方法では決して対抗してはこない。

……それが、たまらなくカイリの闘争心を掻き立てるのだ。

「カノン、手加減なしの真っ向勝負だ!!」

「はい!! ティナ、勝負よ!!」

へ来なさいカノン、わたくしの剣で……あなたの技を薙ぎ払ってあげましょう!!」

「よっしゃ、カノン。行けーっ!!」

——スターダスト・ミラージュた!!」

刹那、エネルギー体を含めた四体のカノンが、囲むようにティナへと向かっていく。

「っ、は——!!」

その場で跳躍し、カノンの攻撃を回避する。

しかし、そんな程度では彼女の追撃を逃れた事にはならず、すぐさまティナへと向かっていくカノン。

「これで終わりよ!!」

へカノン、少し安易な追撃でしたね!!」

「え——」

剣を振りかざすティナ。

「今だティナ、スプレッドセイバー!!」

そして、剣を振り下ろした瞬間。

瞬く間に剣が光の粒子となり、りゅうせいぐんのようにカノンへと攻撃を仕掛けていく——!

「きゃあああっ!!」

「カノン!？」

エネルギー体が消え、カノン自身もフィールドへと落ちていく。

「ティナ、そのままシャドーボール!!」

「負けるなカノン!!」

空中から、トドメのシャドーボールを放つティナ。

だが、カノンとてまだ負けたわけではない。空中でバランスを戻し迫り来るシャドーボールをなんとかいこうせんで押し返す。

「何——!!？」

へくっ!?!?」

身体を捻って攻撃を避けようとするティナだが、紙一重で回避できず弾かれ地面に叩きつけられてしまった。

「ティナ!?!」

へだ、大丈夫です……しかし、本当にしぶといですねカノンは……」

「そ、それはこっちの台詞だよティナ……」

まさか、スターダスト・ミラージュを破られるなんて思わなかった……」

両者共に限界が近く、誰もがまもなく勝敗を決すると感じていた。

それはもちろん、レイジ達も例外ではなかった……」

「まだ負けたわけじゃねえぞレイジ!!」

カノン、ドラゴンクロード!!」

「負けるなティナ、もう一度サイコセイバー!!」

最後の接近戦、互いに一步も譲らない攻撃を繰り返していく。

『凄まじい接近戦だ!! はたしてこのバトルを征するのは一体どちらなのか!?!』

「そんなの——」

〈決まっています!!〉

『勝つのは——』

「マスターよ!!」

〈お父様です!!〉

バキンッ、という甲高い音が鳴り響く。

カノンのドラゴンクロウが、ティナの右の剣を砕いたのだ。

「貰った——!!」

再びドラゴンクロウを仕掛けるカノン。

それを——

〈——甘い!!〉

残る左の剣で弾き、この瞬間互いに打つ手が無くなる……。

——否、ティナにはまだ先の手が残されていた

「————」

カノンの視線が、ティナの右手に注がれる。

砕いたはずの剣。

しかし、カノンは失念していた。

彼女のサイコパワーの強大さを、そして……サイコセイバーの特性を。

——再生する剣

決着は刹那に、けれど永遠とも思える時間の中。

^————はっ!!!^

裂帛の気合いと共に、ティナは剣戟を放ち。

その太刀筋はカノンをしっかりと捉え——彼女を地面へと叩き込んでいた。

……………。

静寂に包まれるスタジアム。

しかし、膝をつくティナとは違い、完全に地面に倒れているカノンの姿を捉え。

「ラティアス戦闘不能！サーナイトの勝ち！！
よって勝者、マサラタウンのレイジ選手！！」

審判が決着の言葉を口にすると同時に――割れんばかりの拍手喝采が沸き起こった。

『決まったーっ！！ 激闘を勝ち進んだのは、レイジ選手です！！
よって決勝戦は、レイジ選手とカグヤ選手となります！！』

「……………はあ、負けちゃったな」

カノンをボールに戻しながら、ため息をつくカイリ。

そこには、確かな落胆の色が見受けられた。

「完敗だな。やっぱりすげえよお前は」

「…………そんな事ない、どっちが勝ってもおかしくなかった」

「まあ、な…………けど、やっぱりお前の方が強かったって事さ」

「…………ありがとう、カイリ」

「頑張れよ。カグヤとの決勝、すぐだからな」

「えっ……すぐって」

「なんでもスケジュールが立て込んでるらしくて、一時間後に決勝戦をするんだと。」

「まあ、普通なら今頃決勝戦を行ってるから、当然といえば当然なんだろうけど」

「……なる程、それは確かに」

「ほら、早くセンターに行った方がいいんじゃないか？」

「……そうだね」

鳴り止まぬ歓声に、ひとまず手を降って応えてから。

レイジは、カイリと共にフィールドを後にしてセンターへと向かったのだった。

第73話 レイジを待つ者達へ再び始まるセキエイ大会へ（後書き）

激戦のリターンマッチを勝ち抜いたレイジ。

次はいよいよ、カグヤとのフルバトル。

はたして、両者の戦いの行方は……！？

第74話 決勝戦〜幼なじみの限界バトル!!〜（前編）

「…………ふう」

控え室で、少女のため息が木霊する。

少女の名はカグヤ、これから幼なじみの少年レイジと決勝戦を戦うと控え室で待機していた。

そんな彼女の足下には、一番のパートナーであるエネコロロが心配そうに見上げている。

「ごめんねエネコロロ、ちょっと不安になってるだけだから……」

エネコロロを抱き上げ、優しく頭を撫でる。

……勝てるのか、そんな不安が先程から彼女の頭の中を占めていた。相手はレイジ、少なくともカグヤが適わないと思っているトレーナーの1人だ。

ポケモン達とはかく、トレーナーとしての腕は間違いなく向こうが上。

そんな相手に、戦って勝てるとは……。

気持ちで負けてはダメだ、そう思っているのだが……。

「ニャー……」

「……エネコロロ」

大丈夫、心配すると言わんばかりに、カグヤに頬擦りするエネコロロ。

レイジのようにポケモンの言葉がわかるわけではないが、彼女がそう言っているように思えたのだ。

「……不安なの？」

「っ、シロナさん……」

いつの間にいたのか、顔を上げると優しく微笑むシロナの姿が。

「カグヤはすぐ顔に出ちゃうから、端から見るとすぐにわかつちやうわよ？」

「あはは……」

「……自分を見失ったら、自分らしいバトルはできないわよ？」

「自分らしいバトル……」

「準決勝でのフルバトルは本当に凄かった。
見ていて、今すぐにでも参加したいくらい楽しそうなバトルだった。」

——あの時の気持ち、今も覚えてる？」

「……あの時の、気持ち」

忘れるわけがない、否、今までのどのバトルも忘れた事なんてなかった。

特に、ヒメカとのフルバトルは本当に楽しかった。

……あの時の気持ちは、今だって鮮明に思い出せる。

「――覚えてます。忘れる事なんてありません」

「なら、その気持ちのままにバトルすれば大丈夫よ。

それに、カグヤは一つ勘違いをしてるわ」

「勘違い……？」

「貴女は、レイジくん比べて自分はトレーナーとしての力量が劣ってると思ってるだろうけど、私からしたら貴女もレイジくんもトレーナーとしての実力は互角よ。

もちろん、ポケモン達も同じくらい強い。

だから後は……心の強さが、勝敗を決める」

「心の、強さ……」

「楽しくバトルをすればいいのよ貴女は、競争するんじゃない……貴女らしく楽しめばいいだけ。だって、それがカグヤらしいバトルだと思わない？」

「……………」

自分らしいバトル。

……そうだ、精一杯バトルすれば充分ではないか。

ポケモンマスターを目指す自分としては、確かに戦いに勝つ事も重要だ。

けれど、自分はまだまだ半人前のトレーナー、その道は遠い。

だから今は、楽しめるバトルをやっていこう。

「ありがとうございますシロナさん、私……頑張ってみますね！」

「……ええ。頑張ってねカグヤ」

いつも通りの笑顔を浮かべるカグヤに、シロナも笑みを返す。

これなら、レイジとのフルバトルも楽しめそうだ。

「でもシロナさん、私ばかり応援していいんですか？」

「ふふっ、確かにカグヤはトレーナーとしても恋敵としてもライバルではあるけど、大切な友達でもあるから応援するのは当然じゃない」

「えへへ……ありがとうございます」

「……フルバトル、頑張ってね？」

「はい!!」

……。

『――さあ、セキエイ大会もいよいよ決勝戦。』

数多くの強豪達を打ち破り、優勝するのはレイジ選手か、それともカグヤ選手か！！』

「うはぁ………すごい人だな。決勝戦だからっていうのはわかるけど、それ以上だ」

席はもちろん満席、立って観戦している人も沢山いる。

決勝戦だから当然かもしれないとはいえ、それでも凄まじいまでの観客だ。

「2人とも、準決勝でのバトルが凄かったから当然よ。」

あの2人は気づいてないかもしれないけど、憧れの存在としてファンができてるらしいわよ？」

「すごいな……俺にもファンとかいればいいのになぁ……」

「それはダメよ」

「それはダメです」

即座に入るヒメカとミカンのツツコミ。

当然だ、男はともかく女のファンができるなど彼に恋慕している自

分達が認める事などできるわけかない。

「……それより、あの2人のどちらが勝つと思っているんだ？」

「えっ？ うーん……どうなんだろうなあ」

「トレーナーとしてもポケモンの実力を見たとしても、レイジとカグヤは互角だから……」

「正直、わからないですね……」

「……だろうな」

「――ねえ、レイジ」

「何？」

「楽しいバトルにしようね？」

「……………」

「私、レイジには負けたくないと思ってるけど、やっぱり競争だけのバトルなんて性に合わないから、精一杯ぶつかり合うような楽しいバトルにしようよ!!」

「カグヤ……」

彼女らしい言葉に、レイジは頬を綻ばせる。

ああ、やっぱり彼女はどんな時でも彼女らしい。

楽しいバトルができればいい、その通りだ。

「——そうだね、僕も精一杯力を出し切って楽しいバトルにするよ
」

「うん!!」

互いに、一体目のボールを取り出す。

『さあ、一体目はどんなポケモンなのか?』

「……………」

本気で戦うと誓った。

たとえば相手が、大切な存在でも……。

「——ルギア、お願い!」

「————っ」

『おーっと、レイジ選手いきなりルギアを場に出してきました!!』

「げっ、いきなりルギアかよ……!!?」

「カグヤにプレッシャーを掛ける気なのね……」

「相手がルギアだとすると、やっぱりカグヤさんはラティオスを出すんでしょうか……?」

「……………」

確かに、ルギアの力は普通のポケモンを遥かに超える力を持っている。

通常のトレーナーならば、同じく強大な力を秘めているラティオスを出すだろうが……。

——彼女の選択は、普通ではなかった

「——ムウマージ、レディーゴー!!」

「えっ!?!」

「ムウマージ……か」

予想通り、カグヤはムウマージを出してきた。

(カグヤ、貴女の楽しいバトルを見せてみて)

「ムウマージ、相手はアホみたいに強いけど頑張ろうね!」

「ムウ、ムウマ!!」

「これカグヤ、強いという言葉には反論せぬが、アホみたいにとは一体どういう意味だ!!」

「だって、本当にアホみたいに強いから……」

「普通に強いと言えはいだけではないか!!」

がーっ、と怒るルギアに対しても、あははー、と笑って誤魔化すカグヤ。

……なんだか、戦う意欲が萎えてしまったような気がする。

「~~~~っ、マスター、絶対に倒すぞ!!」

「…………はいはい」

もしかして、これも彼女の作戦なのだろうか？

一瞬だけそう思ったが、すぐさまそれは間違いだと気づく。

だって、どうしてルギアが怒ってるのかわからずにポカンとしているから。

「…………はは」

「…………?」

「マ、マスター。なにを笑っているのだ!!」

「ごめんごめん。でも……やっぱりカグヤらしいと思ってね」

「ほへ…………?」

「むう…………よくわからんが、とにかく余は怒っておるのだ!! カグヤ、覚悟せい!!」

「あはは……でも、私もムウマージも絶対に負けないよ!!」

「僕もだ……!!」

「では、先攻はレイジ選手からとなります!!」

『……………』

闘志を燃やし合う両者。

「――試合、開始!!」

「カグヤ、行くよ!!」

「うん、どっからでもかかってこーい!!」

「ルギア、ハイドロポンプだ!!」

「ムウマージ、シャドーボール!!」

ルギアのハイドロポンプを、真っ向からシャドーボールで押し返すムウマージ。

パワーは互角、ルギアに少しも負けていない。

「サイケこうせん!!」

「そんなもの、避けるまでもないわ!!」

技も出さず、雄叫びを上げるルギア。

たったそれだけで、ムウマージの攻撃を防いでしまった。

「ムウ!？」

「うわぁ……凄いねルギア！」

「ふんっ、当然だ!!」

「でも負けないよ! ムウマージ、れいとうビーム!!」

「かわして!!」

直線上に発射されるれいとうビームを避け、すぐさま反撃しようとした瞬間。

「なっ——」

その時には既に、ルギアの眼前にはムウマージが迫っており。

「10まんボルト!!」

至近距離での特大の10まんボルトが、ルギアを包み込んだ——!

「ルギア!!」

「ぐ……っ、な、なんだと……!？」

幸いにも致命的なダメージにはならなかったが、決して小さくはな

い。

しかしそれ以前に、あのムウマージのスピードは異常ともいえる程だ。

「凄いでしょレイジ、私のポケモン達の素早さをできる限り高めておいたの。」

エネコロロやムウマージは、どうしてもパワー不足だからね」

「……なる程、ね」

それにしたって、ムウマージのあのスピードは驚愕に値する。

おそらく、努力家らしい凄い特訓を繰り返していたのだろう。

「くっ……見くびっていたわけではなかったが、存外にやるではないかカグヤ!!」

「まあね!!」

「——ルギア、まだいける?」

「無論だ! 余を見くびるでないわ!!」

「了解。ならこのまま行くよ!!」

「うむ!」

「ふふふき!!」

強烈なふぶきが、フィールドを凍らせながらムウマージへと向かっていく。

「フレイムシールド!!」

それを、ヒメカとのフルバトルでも使ったフレイムシールドで防ぎ、すぐさま反撃に移った。

「マジカルリーフ!!」

「エアロブラストで薙ぎ払って!!」

迫るマジカルリーフを、エアロブラストですべて薙ぎ払い、そのままムウマージに向かっていく。

それを回避し、次なる攻撃を仕掛けるムウマージ。

「サイコウエーブ!!」

「サイコキネシス!!」

互いのエスパー技をぶつけ合い、その余波でフィールドに亀裂が入っていく。

「パワーは——」

「——互角だね!!」

「ぐっ……なめるでないわ!!」

気合いを込めた声が、サイコキネシスのパワーを飛躍的に上げる。

それにより、サイコウェーブを弾かれフィールドに叩きつけられる
ムウマージ。

「ムウマージ！！」

「今だ、アクアテール！」

地面に埋まったムウマージに、渾身のアクアテールが叩きつけられる！！

（決まったか……………！！）

粉塵が舞い、ムウマージの姿は確認できないが、おそらくまともに
ダメージを与えられたはずだ。

ルギアもそう感じているのか、口元には笑みを浮かべている。

「……………」

「……………？」

しかし、カグヤの顔に不安の色はなく…………むしろ笑みさえ――

「っ、ルギア。すぐに離れるんだ！！」

「なっ――――」

「れいとうビーム!!」

レイジの声と、カグヤの指示はほぼ同時に飛び出した。

瞬間、粉塵の中かられいとうビームがルギアへと放たれ——彼女を包み込んだ!!

「ぐっ——うあああああっ!？」

「ルギア!!」

まともに受け、フィールドに倒れ込むルギア。

「くっ……すまぬ、調子が出ぬわけではないのだが……」

「——ルギア、戻って」

ダメージが大きいのか、顔をしかめながら起き上がるルギアを、ボールに戻す。

その光景を見て、カイリ達は驚愕の表情を浮かべていた。

「う、嘘だろ……? ルギアを圧倒しやがった……」

「で、でもどうしてムウマージは無事なんですか……? ルギアのアクアテールが命中したはずなのに……」

「——いいえ」

「ルギアのアクアテールはムウマージに命中していない」

「えっ……?」

「フィールドに叩きつけられた寸前、ムウマージは自分の背中にフレイムシールドを展開していた。」

多少は身体が地面にめり込んだが、最小限の被害で済んだからこそ、ルギアの一撃を回避する事ができたのだろうさ」

「……すげえ、カグヤあんなに強かったのか……」

悔っていたわけではないが、なまじルギアの力を知っていたからか、やはり心のどこかでカグヤが不利だと勝手に思っていたらしい。

しかし、そんな自分の軽率な考えが恥ずかしくなった。

カグヤは強い、それも凄まじいまでに。

たとえばパワーが及ばなくとも、戦いにおいて重要な「心」が強いのだ、決してレイジにも引けを取らない。

「――ヒカリ、お願い!」

『レイジ選手、二体目はピカチュウを繰り出してきました!』

「スピードにはスピードで対抗ね……」

「ムウマージ、ヒカリも強いから気をつけよう」

「ムウ!」

「ヒカリ、行くよ！」

「ピカッ！！」

「先手必勝、あくのはどう！！」

「でんこうせっか！！」

あくのはどうを回避し、一気に間合いを詰めるヒカリ。

「サイコウェーブ！！」

「アイアンテール！！」

サイコウェーブの见えない衝撃波にアイアンテールを当て、相殺させる。

「10まんボルト！！」

すかさず追撃したヒカリの10まんボルトが、ムウマージを捉えた。

——だが

「しっぺがえし！！」

「何——！！？」

電撃を受けながらも、ムウマージは攻撃を仕掛ける。

「ピカッ！？」

衝撃がヒカ리를襲い、フィールドを滑っていく。

(上手い……！ ヒカ리의攻撃を逆に利用するなんて………！)

「くっ………！！」

「ふふっ、やっぱりヒカ리는強いねレイジ！」

「えっ………？」

「だって、しっぺがえしでこれだけの攻撃ができるって事は、それだけヒカ리의パワーが凄いつてことでしょ？

だから、ヒカ리는凄いなあと思つて」

「……………」

ニコニコと笑みを浮かべるカグヤに、レイジも苦笑を返した。

(もう……なんて嬉しそうな顔をするんだか)

でも、自分の胸の中にもワクワクする感情がどんどん大きくなっていく。

やはり、自分も彼女とのバトルをただ楽しんでいるようだ。

「ヒカリ、戻つて」

「へ……………」

『おっと、レイジ選手ここでピカチュウを戻してしまいました!』

「……………」

(……レイジ、なんだか嬉しそう)

穏やかな笑み、そして隠せない楽しい感情。

それを感じ取り、カグヤはますます笑みを深めていく。

(やっぱり、大好きな人が嬉しそうだとこっちも嬉しくなるね) 「……カグヤ、次はこの子を出すよ。」

——ソウル、お願い!」

「ソウルか……よし、このままいくよムウマージ」

「ソウル、頑張って」

こくりと頷きを返し、ムウマージと対峙するソウル。

「シャドークロード!」

漆黒の爪を展開し、ムウマージに向かっていくソウル。

「ムウマージ、かわしておに——」

「ムウツ!?!」

「えっ?」

指示を出す前に、ムウマージの悲鳴が響く。

見ると、ソウルがムウマージに向かってシャドークローを叩き込んでいる光景が……。

「は、速い——!?!」

「れんぞくぎりだ!!」

今度は頭にある刃状の角で、ムウマージを連続で攻撃していく。

「ムウマージ、一度かわして距離をとって!!」

しかし、ムウマージは途中で攻撃をかわし、距離を離しながら空中でシャドーボールを作り出している。

「かえんほうしゃ!!」

ソウルの口から放たれたかえんほうしゃがムウマージを包み込んだ——!

（は、速すぎ……）

「僕のソウルも、君のムウマージに負けないくらいのスピード力は持っているんだ。

ソウル、ストーンエッジ!!」

自分の周りに岩を作り、それを一斉にムウマージへと放つ。

「サイコウェーブ!!」

それをサイコウェーブでまとめて破壊しながら、迫り来るソウルのシャドークローにもしつかりと反応し。

「読んでたよその動き。ソウル、着地する前にはかいこうせん!!」

顔だけ後ろに向き、ムウマージの背中へはかいこうせんを叩き込むソウル。

まともに受け、地面に倒れ込むムウマージは。

「ムウマージ戦闘不能! アブソルの勝ち!!」

ルギア、そしてヒカリとのバトルで受けたダメージもあり、戦闘不能へと陥ってしまった。

『決まったあっ!! まず先制をとったのはレイジ選手だ、しかしカグヤ選手のムウマージは素晴らしい連戦を見せてくれました!!』

「ムウマージ、本当にご苦労様」

気絶したムウマージをボールに戻し、すぐさま別のボールを手にする。

(……ソウルって色々なタイプの技を持ってるからなあ……誰を出そうか迷っちゃうよ)

(……あれ、誰を出そうか迷ってる顔だ)

あわあわと慌てているカグヤを見て、レイジはつい苦笑を浮かべた。

そんなに慌てなくてもいいのに……とは思いつつも、暫くそんな彼女を鑑賞する事に。

「よし、じゃあ……クチート、レディーゴー！」

「――クウツ!!」

「いだだだだっ!!」

ボールから出た瞬間、方向転換してカグヤの手に噛みつくクチート。

相変わらずの光景に見慣れたのか、観客席の一部からも笑い声が。

「もう……クチート、いつも言ってるけど噛みつくならもっと優しくしてよ……」

恨めしげにクチートを見るが、当の本人はわかっておらずニコニコと笑顔を見せるのみ。「はあ……毎度毎度の事だけでもいいや。それよりフィールドに行って」

「クチツ!!」

言われた通り、フィールドに戻るクチート。

（……妙ね、ソウルはクチートに有利な炎タイプの子技を持ってるのに）

シロナの考えているように、はがねタイプであるクチートに有利な技をソウルは覚えている。

予想ではエネコロロを出してくるかと思ったのだが……。

「先制は許しちゃったけど、ここから怒涛の巻き返しをするよ!!」

「さーて……そいつはどうかかな？」

「やってみせるよ。クチート、いっけー!!」

「ソウル、迎え撃つんだ!!」

第75話 決勝戦く幼なじみの限界バトル!!く (中編) (前書き)

互角の戦いを見せるレイジとカグヤ。

そして、クチートとソウルのバトルが間もなく始まろうとしていた……。

第75話 決勝戦〜幼なじみの限界バトル!!〜 (中編)

「かえんほうしゃ!!」

向かってくるクチートに、弱点であるかえんほうしゃを放つソウル。それを避け、大きな口を開きソウルに噛みつくようにする。

「跳んで!!」

クチートの牙がソウルを捉える寸前、その場で跳躍し回避するソウル。

「シザークロス!!」

「アイアンヘッド!!」

真っ向からぶつかり合う両者。

だが――

「ソウル!!」

押し負けたのはソウル、シザークロスごとクチートに吹き飛ばされ宙に浮く。

「かえんほうしゃ!!」

「まもる!!」

その隙にかえんほうしゃを放つクチートだが、どうにかまもるを發動させ難を逃れた。

無事着地するソウルだが、悔しそうに唇を噛みしめている。

（なんてパワーだ……シザークロスごと弾き返すなんて……!）

「クチート、その調子でガンガン攻めるよ!」

「クウツ!!」

「ソウル、上を向いてふぶきだ!!」

「えっ?」

指示通り、上空に向かってふぶきを放つソウル。

当然ながら、クチートに当たる事はなく……。

しかし、次の瞬間。

「っ、クチート。かわして!!」

危険を察知し、カグヤはクチートにそう指示を出す。

刹那、空中に残留したふぶきが一斉にクチート目掛けて落ちてきた――!

しかもただのふぶきではない、まるで雹のように大きくなった氷の

粒が、クチートに襲いかかる。

「な、なんだよあのふぶきは!？」

「……今日は雲が多い、レイジくんは空中の水蒸気をふぶきで集めて人工的な雹を降らせたのよ」

「ふぶきにそんな使い方が……」

「はがねタイプに氷タイプのふぶきは効果が今一つだけど、これなら衝撃によるダメージを充分に与えられる。」

——さすがと言うべきだな」

しかしクチートとて負けていない、降り注ぐ雹を軽々と避けていく。だが——レイジは攻撃する為にふぶきを当てたわけではなかった。

「今だソウル、かえんほうしゃ!!」

(っ、やっぱりそういう攻撃——!)

放たれるかえんほうしゃ。

しかし——カグヤはそれを完全に読んでいた。

「クチート、かわして!」

雹を避けながらも、しっかりとかえんほうしゃを回避しようとするクチート。

「…………えっ!？」

瞬間、響いたのはカグヤの驚きの声。

——白い煙が、フィールドを包む

「っ、そうか——！ レイジの本当の目的はこれだったのか!！」

「へ……?」

「本当の目的って……」

「つまり、ふぶきによる攻撃もかえんほうしゃによる追撃も、初めからフェイクだったんだ」

「ふぶきによって大気中の水蒸気を凍らせて雹を作り……クチートの周りに降った後かえんほうしゃで再び水蒸気に戻す。

高温で熱せられた事によって、視界を塞ぐのが本当の目的……」

そして、それは見事成功した。

普通の目くらましならば対処されても、このような方法では驚きが勝り動きが止まる。

その隙に、ソウルは最大パワーでシャドークローを放ち——

「——びっくりしたよ、だけど……クチートを甘く見てもらっちゃ困るなあ」

「――」

目を見開いて驚くのは、レイジの方だった。

完全なる奇襲になった、タイミングだってしっかりと合わせた。

だというのに……防がれた。

ソウルのシャドークローが、クチートの大きな牙にしっかりと捉えられてしまったのだ。

「なっ!？」

「嘘でしょう……視界なんて塞がれてたのに、クチートはソウルの攻撃を読んでいたの!？」

（凄……カグヤは気持ちが高ぶるとあそこまで化けるの……？）

人は、テンションの高低によって動きが変わる。

気持ち一つで、同じ人間でも比べものにならないほどに変わるのだ。

けれど――彼女の変わりようは別格だった。

浮き沈みが激しいという欠点があるものの、高まれば高まるほどにトレーナーとしての力量が向上するのだ。

今の彼女は、自分にすら肉迫するかもしれない。

「ソウル、あくの――」

「投げ飛ばして!!」

あくのはどうでの攻撃より速く、空中へとソウルを投げ飛ばすクチート。

「ギガインパクト!!」

だがまだ負けてない、空中での不安定な体勢からのギガインパクト。それを、クチートは。

「クチート、こっちもギガインパクト!!」

「なっ――」

同じく、ギガインパクトで真っ向からぶつかり合った――!!

爆音が響き、勢いよく地面に叩きつけられる両者。

「ソウル!!」

「クチート!!」

「ク……クチッ!!」

足元がおぼつかないものの、立ち上がるクチート。

しかし――ソウルはまだ立ち上がれない。

『ギガインパクト同士の激しいぶつかり合いで、アブソルはかなりのダメージを受けてしまったようです!!』

「クチート、トドメのほのおのキバ!!」

大きな牙を開き、ソウルに向かっていくクチート。

「負けるなソウル!!」

立ち上がろうとするソウルに呼びかけるレイジ。

だが、少しの差で間に合わず、ほのおのキバがソウルに食らいついた。

「ソウル!!」

「アブソル戦闘不能! クチートの勝ち!!」

『カグヤ選手、ここで反撃を果たしましたー!』

「――これで互角ね」

「カグヤの奴……あんなに強かったのか」

「彼女の伸びは凄まじいわ、努力の成果もあるけど……なにより、バトルを楽しくやっているから強いだよ」

「バトルを楽しく、か……」

「――ソウル、ありがとう」

「クチート、まだ大丈夫？」

「クウツ!!」

ギガインパクトによるダメージはあるものの、まだまだクチートには余裕がある。

「――凄いよカグヤ、まさかあの奇襲を見切られるなんて思わなかった」

「私が凄いんじゃないくてクチートが凄いんだよ」

「それでも、だよ」

本当に凄い、そう思いながら新たなボールを手を持った。

『さあ、レイジ選手の次のポケモンは!』

「――リオン、お願い!」

『レイジ選手、続いてはリザードンを繰り出してきました!!!』

「まあ、そうなるよな」

相手ははがねタイプ、炎タイプのリオンで攻めるのは当然と言える。

しかし、そう上手く行くのだろうか。

「クチート、ラスターカノン!!」

先手必勝、ラスターカノンがリオンを襲う。

それを——なんと殴りつけて地面へと無理矢理軌道を変えてしまった。

「うひゃあ……すごい力業……」

「——リオン、“アレ”を使うよ」

——ああ。レベルはどうする？

「レベル2だ」

——了解、任せろ。

「………?」

なにやらレイジとリオンが何かを話しているようだが、ここからは聞こえない。

——その刹那

「——っ!?!」

「クウツ!?!」

フィールドに、熱気が溢れていく。

『こ、これはどういう事でしようか！？ リザードンの炎がどんどん強化されていきます！！』

「あれは……ゴウカザルのオーバードライブ！？」

「違う、確かに似てるけど……オーバードライブほどの強さじゃない」

しかし、それでもあの炎の強さは普通ではない。

「凄い……もしかしてゴウカザルのオーバードライブをパクったの？」

「人聞きの悪い事を……まあ、似たようなものだけだね。」

——確かにオーバードライブに似てるけど、リオンの強さを調整できるんだ」

強力過ぎるパワーアップは、体力を著しく消耗させる。

それがオーバードライブ最大の欠点である、だからレイジはその欠点を克服する事を重点に置き、この強化技を完成させた。

オーバードライブほどのパワーアップはできないものの、自由にパワーを調整できる点は有効だ。

その分ポケモンの負担は減るし、なにより長い間展開できる。

「オーバードライブ・ブースター。」

これが僕とリオンの新必殺技だ」

「……………」

背中にゾクゾクとしたものが走る。

しかしそれは恐怖や悪寒からではなく、嬉しさと楽しさから。

「よし！！」

「……………？」

「どんなにパワーアップしたって、絶対に負けないって気持ちがあれば、勝てるって所を証明してあげる！！」

「……なら、証明してみせてよ！！」

彼女らしい言葉に、レイジも大声を張り上げて応える。

「クチート、シャドーボール！！」

「かえんほうしゃだ！！」

クチートが放ったシャドーボールを、リオンのかえんほうしゃが呆気なく押し返す。

どうにか避けるクチートだが、その表情はあきらかに驚愕している。

「ふへえ……想像以上だね」

「降参する？」

「そんなわけないでしょうが！ クチート、アイアンヘッド！！」

続いてはアイアンヘッドによる接近戦。

「ほのおのパンチ！！」

それを真っ向からほのおのパンチで迎え撃ち——クチートの身体を宙に吹き飛ばした。

「クチート！！」

「そのままフレアドライブ！！」

雄叫びを上げ、絶大なパワーを込めたフレアドライブを発動させるリオン。

空中に居るため、クチートは攻撃を避けられない。

だが——

「まもる！！」

「なっ！？」

空中で発動させたまもるは、リオンのフレアドライブを見事に弾き返す。

「今よクチート、ラスターカノン！！」

「甘いぞカグヤ!!」

「えっ……」

クチートのラスターカノンが放たれた瞬間。

リオンは身体を一回転させ、クチートに向かって必殺の一撃を繰り出していた。

「ブラストバーン!!」

ラスターカノンと交差するように、ブラストバーンがクチートに向かっていく。

そして、見事クチートの攻撃がリオンに命中すると同時に。

ブラストバーンの炎が、クチートを呑み込んだ。

「クチート!!」

地面に落ち、そのまま動かなくなるリオン。

「クチート戦闘不能! リザードンの勝ち!!」

「あれは効いたな……」

「それにしても、リオンのパワーも凄まじいものになってる……。あれをどうにかしないと、カグヤが不利になっていくだけだわ」

「……それはどうかしらね」

「えっ？」

「――リオン、戻って」

「あれ！？ レイジの奴リオンを戻しちまったぜ？」

「クチートとのバトルでダメージが蓄積しているし、なによりブラストバーンの反動で暫く動けなくなってしまうから……」

ブラストバーンは強力だが、反動で暫く動けなくなるという弱点がある。

だからこそ、レイジはリオンをボールに戻したのだ。

「ヒカリ、お願い！！」

代わりに出したのは、ヒカリだ。

「お疲れ様クチート、ゆっくり休んでね。」

――うーん、さすがに相性が悪かったかな」

「そんな事ない、クチートにもかなりのダメージを与えられちゃったし」

特に最後のラスターカノン、あれを受けたのは拙かったかもしれない。

「相手はヒカリか……じゃあ、メガニウム、レディーゴー！！」

「メガニウムか……スピード対防御力って所か？」

「ヒカリの電気技は効果が薄い、でもボルテッカー・アイアンテールがヒカリにはある」

（それを差し引いても、メガニウムの防御力は凄まじいものよ……。レイジくん、どうやって攻略する気？）

「ヒカリ、自分にかみなりだ!!」

「―――っ」

「いきなりデュアルボルテッカーかよ………!!」

「高威力の技で、一気にメガニウムにダメージを与えようという作戦なのだろうか……？」

「そんな短絡的な作戦とは思えないが……現状ではそれ以外では打開策はないな」

「ヒカリ、10まんボルト!!」

「えっ!？」

黄金色に輝きながらも、ヒカリが繰り出したのは10まんボルト、デュアルボルテッカーではない。

それは見事にメガニウムへと命中するが、当の彼女はケロリとしてダメージらしいダメージを負ってはいなかった。

「でんこうせっか!!」

(っ、まだ放たないの……?)

でんこうせっかで、縦横無尽に駆け抜けるヒカリ。

さすがにスピードでは負けているのか、メガニウムではヒカリの動きについていく事ができない。

「今だヒカリ、そのままデュアルボルテッカー・アイアンテール！」

「ピカピカピカピカピカ……!!」

素早くメガニウムの背後に回り込み、必殺の一撃を解き放つ。

「リフレクター!!」

しかし寸前でリフレクターを展開されてしまう。

「ピッカッ!!」

ズドンッ、とまるで大砲のような鈍く音が響き。

メガニウムは壁際まで吹き飛ばされるが、どうにか堪えきった。

『なんという凄まじい防御力か!! あのとてつもないアイアンテールを防ぎました!!』

「くっ……!!」

「す、すげえ……いくらリフレクターで威力を半減できるからって……」

「メガニウムはムウマージと違って、防御力を底上げしたようね。だからこそ、ヒカリの攻撃にも耐え切れた」

尤も——彼女がメガニウムの防御力を底上げしたのは、それだけではないようだが。

「…………ヒカリ？」

何やら、ヒカリの様子がおかしい。

先程の大技による反動ダメージがあるものの、あそこまで足元がふらつくほどでは——

「っ、まさか——!？」

「えへへ、気づいたみたいだねレイジ。

あの時——“やどりきのタネ”をヒカりに当てた事に」

——ヒカリの一撃がメガニウムを捉えた瞬間

攻撃に耐えながらも、しっかりとヒカりにやどりきのタネを展開していたのだ。

ヒカリの足元がおぼつかないのも、メガニウムに自分のパワーを吸い取られているため。

『あーっと、カグヤ選手ただやられるだけでなく、やどりきのタネを蒔いていました。』

なんという先読みでしょうか!!』

「やべえぞ、このままじゃヒカリのパワーが全部メガニウムに………!!」

せっかくの攻撃も、やどりきのタネで吸い取られ回復させられてしまえば意味を失う。

「ヒカリ、10まんボルトだ!!」

とにかく、早くメガニウムを倒さねばヒカリの体力が奪われ続けるだけだ。

そう思い、レイジはすぐさま攻撃を仕掛けるが。

「メガニウム、ソーラービーム!!」

いつの間にチャージを澄ませていたのか、ソーラービームが10まんボルトを薙ぎ払いヒカリへと向かっていく。

「ピカッ!？」

「ヒカリ!!」

まともに受け、吹き飛ぶヒカリ。

「はっばカッター!!」

更に追い討ちを掛けるかのような、メガニウムのはっぱカッター。

「10まんボルト!!」

それらを全て10まんボルトで破壊するヒカリ。

瞬間――メガニウムの放ったつるのムチがヒカリを拘束する。

「ギガドレイン!!」

そのまま、ギガドレインで彼女のパワーを奪っていく。

「くっ……!!」

『拘束されたままギガドレインでピカチュウの体力を奪っていくメガニウム。』

これはレイジ選手ピンチかー!?!?』

「かみなりだ!!」

自分ごと、メガニウムをかみなりで攻撃するヒカリ。

しかし、メガニウムにさしたるダメージは与えられない。

「エナジーボール!!」

そして、メガニウムのエナジーボールがヒカリへと命中し……地面に倒れ動かなくなった。

「ピカチュウ戦闘不能！メガニウムの勝ち！！」

『カグヤ選手の逆襲です！！ 見事な攻撃でピカチュウを撃破いたしましたー！！』

「あのメガニウム、すげえ防御力だ……！！」

「それだけじゃない、やどりきのタネやギガドレイン……自分の防御力を最大限有効活用した攻撃方法を使っているからあんなにも強いのよ」

「メガニウム、この調子で頑張って！！」

「――ヒカリ、戻って」

『これで互いに二体のポケモンが戦闘不能になりました。果たしてレイジ選手、次はどのポケモンを繰り出すのか！！』

「――ティナ、お願い！」

〈……………〉

『レイジ選手、続いてはサーナイトだ！！』

「ティナかぁ……」

ふぶきにれいとうパンチ、さらにはフレイムセイバー。

メガニウムの弱点になりうる攻撃方法を沢山持っている。

「メガニウム、戻って」

「……………」

「そんでもって……カメックス、レディーゴー！」

『カグヤ選手、メガニウムを戻しカメックスを繰り出してきました
！！』

「いくよティナ、カメックス、ハイドロポンプ！！」

背中のキャノン砲から、ハイドロポンプを放つカメックス。

——ティナは動かない

その場に立ち尽くしたまま、黙ってハイドロポンプが来るのを待ち。

「えっ……」

そう思った時には、ハイドロポンプは真っ二つに斬り裂かれていた。

へ……お父様、それでは参ります」

「——」

静かで、けれど背筋が凍るような声。

いつものティナとはあきらかに違う、優しい雰囲気など皆無だ。

「カグヤ……ここから、巻き返しをさせていただきます」

「……………」

そう言い放ち、ティナは両手に雷の剣を握りしめる。

「……弱点で攻めてくるんだね、やっぱり」

〈もちろんです。では……行きます！！〉

「よし、かかってきなさい！！」

カメックス、ラスターカノン！！」

ラスターカノンを放つカメックス。

しかし、その時には既にティナの姿はなく。

「カメックス、右！！」

カグヤの言葉で、カメックスはすぐさま右側に身体を向け手を上げる。

瞬間、上段から振り下ろされたティナの剣を握りしめ。

——凄まじい雷が、カメックスを包み込んだ

「カメックス！！」

『凄まじい電撃だ。効果は抜群のようだぞー！！』

〈ふっ——！！〉

ティナの攻撃は終わらない、身体を低くしてカメックスの腹部へと一閃。

苦しむカメックス、瞬時に剣を消し両手を彼に向かって突き出す。

「10まんボルト!!」

至近距離からの10まんボルト、電撃で苦しむカメックスに追い討ちを掛ける。

「っ、カメックス、戻って!!」

『カグヤ選手、たまらずカメックスをボールに戻しました!!』

しかしなんという速さでしょうか、あっという間に大ダメージを与えてしまいました!!』

(……やっぱりティナは強い、本気になったこの子がこんなにも強いなんて……!!)

カグヤの想像をはるかに超えた強さだ、しかし……まだ負けたわけではない。

「ちょっと早いかもしれないけど……ラティオス、レディーゴー!!」

『ここでカグヤ選手、ラティオスを繰り出してきました!!』

へ……来ましたねラティオス、わたくしにとっては好都合というものの

「何だって……？」

「へここであなたを倒せば、お父様は大きなアドバンテージを得られる。」

「だからこそ、ここで確実にあなたを倒してみせます！！」

「……そう簡単にはやられない！！」

「へもちろんわたくしもそう思っています……ここで倒すと決めた以上、必ず倒します！！」

第75話 決勝戦！幼なじみの限界バトル！！ (中編) (後書き)

容赦のないティナの剣戟により、遂に現れたラティオス。

果たして、ティナの剣はラティオスに届くのか。

そしてラティオスは、ティナを撃破する事ができるのか……！？

第76話 決勝戦〜幼なじみの限界バトル!!〜 (後編) (前書き)

激闘が続く決勝戦。

互いに一步も引かぬ中、レイジとカグヤのフルバトルは、確実に終わりへと近づいていた……。

第76話 決勝戦く幼なじみの限界バトル!! (後編)

「10まんボルト!!」

「上昇して!!」

迫る10まんボルトを、急上昇して回避するラティオス。

そのまま上昇を続け、太陽に隠れて見えなくなった。

「急降下しながらラスターページ!!」

へやはり、そう来ましたか……!!」

サイコセイバーを展開し、十字に構える。

——放たれるラスターページ

その凄まじい威力を、ティナは真っ向から受け止めた。

「ティナ、左の剣をシャドーブレイドに!!」

へはい!!」

サイコセイバーがティナの左手から消え、代わりに現れたのは——
暗い闇色の剣。

(っ、はぁっ!!)

それを力任せに振り下ろし、文字通りラスターページを斬り裂いた。

「ラティオス、ドラゴンクロー!!」

「ティナ、迎え撃つんだ!!」

迫るラティオスに、右の剣を振るう。

弾かれ、ティナの眼前に迫るドラゴンクロー。

左の剣で弾き、返す刀でラティオスの身体を。

「リフレクター!!」

へっ、ちっ——!!」

リフレクターによって防がれたと理解した瞬間、ティナは瞬時にその場から離れる。

その一瞬後に、ラティオスのドラゴンクローが虚しく虚空を切った。

『凄まじい攻防です! ラティオスもサーナイトも互いに一步も譲っておりません!!』

「ラティオス、ギガインパクト!!」

「ティナ、ギガインパクトごとラティオスに攻撃するんだ!!」

真っ直ぐこちらに向かってくるラティオスに、真っ向から双剣を振り下ろすティナ。

へくっ、あ……!?!?」

しかし、ラティオスのパワーは凄まじく弾き飛ばされてしまった。

「ティナのサイコセイバーを………!」

「さすがカノンの兄貴だぜ……パワーではラティオスが上か」

へたいしたものですね……ですが!!」

「ティナ、ふぶき!!」

「ラティオス、急上昇してギガインパクト!!」

ふぶきを回避し、再びギガインパクトで襲いかかるラティオス。

「今だティナ、ラティオスに飛び乗って!!」

「えっ!?!」

跳躍し、ギガインパクトの上部に剣を突き刺し穴を空ける。

そして——そのままラティオスの身体に飛び乗った。

「ラティオス、振り下ろして!!」

「っ、この——!!」

「ティナ、れいとうパンチ!!」

左手でラティオスの身体を掴みながら、右手で渾身のれいとうパンチを叩き込むティナ。

「ぐあ——！！！」

さすがに効いたのか、苦悶の声を上げるラティオスだったが。

「お返しだよティナ、10まんボルト！！！」

へっ、あぐっ！？

電撃に包まれるティナ、しかしまだ手は放さない。

「れいとうパンチ！！！」

「ぐうっ！！！」

「10まんボルト！！！」

へうあああっ！！

『意地と意地とのぶつかり合いだ——！！』

「頑張れティナ！！！」

「ラティオス、頑張って！！！」

高度はどんどん上昇していき、雲を突き抜けていく。

〈っ、くあ………!!〉

凄まじい重力がティナを襲い、つい力が緩んでしまった。

その瞬間、ラティオスは突然急降下を始め――

〈――、あ〉

ティナの身体は、空へと投げ出されてしまった。

「ここで決める!!」

空中で一度止まり、ティナが隣で落ちていくのを確認してから、ドラゴンクロウを叩き込む。

〈が、は――!!?〉

苦悶の声を上げ、きりもみしながら落ちていくティナ。

「――ラティオス、地上に戻ってフルパワーのラストページ!!」

ラティオス達の姿を視界に捉え、大声でそう指示を出すカグヤ。

指示を聞いたラティオスは、スピードを上げあつという間に地上へと辿り着く。

「ティナ!!」

だが、ティナは反応せずに落下を続けていき……下ではラティオスが攻撃の準備を終えていた。

「今だよラティオス、ラスターページ!!」

雄叫びを上げ、フルパワーのラスターページを放つラティオス。

「ティナーーツ!!」

へーーーーっ

全力の叫びに、ティナはようやく意識を取り戻した。

しかし、既にラスターページはティナの眼前にまで――

「フルパワーでシャドーブレイド!!」

へくっ――ああああああつ!!!!

裂帛の気合いと共に、漆黒の剣を両手に展開し、真っ向からラスターページを斬り裂いていく!!

――空中でぶつかり合う両者

（どっちが――）

（――勝つ!?!）

ラスターページもシャドーブレイドも、互いに一步も引かず鏖迫り合いが続いていく。

だが――終わりは唐突に訪れた。

「うわっ!!」

「きゃっ!!」

技のぶつかり合いにより発生した爆発が、フィールドを包み込む。

おもわず手で顔を防御し、煙から身を守った。

『す、凄まじい爆発です……はたして、両者はどうなったのか……』

——煙が晴れていく

そして、その結末は……意外なものへとっていた。

「——ラティオス、サーナイト共に戦闘不能!」

『なんと結果は相討ちに終わりましたー!!』

「相討ちか……!!」

「これで残ってるポケモンは互いに三体」

「レイジさんはリオンとルギア、そしてアクセル」

「そしてカグヤはメガニウム、カメックス、そしてエネコロロ」

「アクセルとエネコロロは無傷、カメックスとルギアはかなりのダメージを受けてる。」

そしてリオンとメガニウムは、殆どダメージを受けていない……」

「正真正銘の互角の勝負だな……………！」

まだ、どちらが勝ちどちらが負けるかは予想できない。

しかし——この均衡が崩れた時が、勝敗を決する時だ。

「お疲れ様ラティオス、ゆっくり休んでね。

——結構自信あったんだけどなあ、ところでシャドーブレイドつてもしかしてあくタイプの剣なの？」

「そうだよ。エスパークタイプのラスターページに対抗するには、あくタイプのシャドーブレイドが一番だと思ったんだけどね……………」

「これでお互いに三体同士、まだまだ負けないよ……！」

「僕もだ……………！」

「それじゃあ私は……………メガニウム、レディーゴー……！」

「リオン、お願い……！」

「メガニウムとリオン……………タイプのにはリオンが有利だけど……………」

タイプの優劣が、勝敗を決めるレベルではなくなっている以上、それだけでは決定打にはなりはしない。

「かげぶんしん……！」

メガニウムの分身が、リオンを囲むように出現していく。

「リオン、あなをほる！」

「あなをほる……？」

おかしい、メガニウム相手にあなをほるでは決定打になるはずがない。

レイジとてそれがわかっているはず、だというのに何故――

「メガニウム、ひかりのかべ！！」

相手が何をしてくるかわからない、しかし少なくともあなをほるでの攻撃ではないだろう。

だからこそ、カグヤはメガニウムにそう指示を出す。

瞬間。

「リオン、そのままフレアドライブだ！！」

「えっ――！？」

――フィールド全体にわ凄まじい炎が吹き荒れた

その炎に包まれ、メガニウムは苦悶の声を上げる。

『なんと、地面からのフレアドライブによってフィールド全体を攻撃しました！！』

なんという面白く素晴らしい攻撃か！！』

実況の声が終わると同時に、穴から出てくるリオン。

だが、フレアドライブの反動で苦しそうだ。

「リオン、そのままほのおのパンチ!!」

かえんほうしゃでは半減される、だから物理技のほのおのパンチで攻撃する事に。

「メガニウム、つるのムチ!!」

拘束して動きを止めようとつるのムチを放つメガニウム。

それを、リオンは自ら手を伸ばしつるのムチを掴み上げた。

「えっ!?!」

「リオン、叩きつけるんだ!!」

両手でつるのムチを掴み上げ、そのまま力任せに空中へと投げ飛ばし。

「ブラストバーン!!」

特大のブラストバーンを、メガニウムへと撃ち放った——!!

「メガニウム!!」

地面に落ち、全身に火傷を負って動かなくなるメガニウム。

「メガニウム戦闘不能！リザードンの勝ち！！」

『レイジ選手、トリッキーな戦い方のメガニウムを見事なコンビネーションで撃破しました！！』

「お疲れ様メガニウム、うーん……凄い戦い方だったね。びっくりしちゃったよ」

そう言うカグヤの顔は、案の定楽しげだ。

「さあ、次はどうするのカグヤ？」

「そうだね……じゃあ、エネコロロ、レディーゴー！！」

（……カメックスじゃない？）

いくら手負いとはいえ、有利なカメックスで来ると思ったのだが……。

……しかしカグヤの事だ、何の考えもなしにエネコロロを出したとは思えない。

「リオン、かえんほうしゃだ！！」

長引かせる意味はない、一気に勝負を仕掛けようと攻撃を繰り返す。それをひょいっと軽く避けるエネコロロだが……何故か反撃をしてこない。

「……………」

「——うん、よし。それじゃあエネコロロ、準備はいい？」

カグヤの声に鳴き声を返すエネコロロ。

一体何をする気なのか、警戒をしていると。

「エネコロロ、シャイニングダンス!!」

カグヤがそう指示を告げると同時に。

——顔面と右腕と腹部

計三カ所に、謎の衝撃がリオンを襲った。

「なっ——!?!」

一体何をされたのか、まったく理解できない。

しかし、エネコロロによって攻撃されたという事だけは理解でき…
…混乱した。

ありえない、エネコロロの動きがまるで読めなかったのだ。

もちろんそれはリオンも同じ、だから彼の顔には驚愕に満ち溢れた表情が浮かんでいた。

エネコロロは、初めに立っていた場所から動いていない。

「――ねえレイジ、こうそくいどうって技は知ってるよね？」

そんな技は知っている、ポケモンの素早さを上昇させる技だ。

「シャイニングダンスはかっこいい名前だけど、ただ単にこうそくいどうを強化した技なの。

でも……性能は全然違うって事は、わかってくれたよね？」

「……………」

わかったというより、思い知らされた気分だ。

冗談ではない、このような動きがこうそくいどうと比べる事ができるわけがなかった。

「エネコロロはどうしてもパワー不足だし、スピードだってヒカリとかに比べると遅い。

だからね、ならどちらかを限界まで引き上げればいいって思ったんだ」

その結果、短時間ながらも凄まじいスピードを手に入れる事ができた。

「それじゃあエネコロロ、踊っちゃえ!!」

再び消えるエネコロロの身体。

それと同時に、リオンの身体にはまた衝撃が走る。

「リオン、かえんほうしゃ!!」

反撃を試みるも、放つと同時にエネコロロの攻撃がリオンに命中してしまう。

「す、すげえ……なんだよあの動き」

「……あれは防ぎにくいわね」

「えっ、だけどロストさんのレジエンドみたいに広範囲の攻撃を出せば……」

「——無理だろうな。あれはヒカリのライティングとはまた違う」

「リオン、周りに向かってかえんほうしゃだ!!」

一点ではなく、広範囲にかえんほうしゃを吐き出すリオン。

これならば、多少は効くはず——

「かみなり!!」

しかし。

その攻撃すら避けられ、エネコロロはリオンの背中へと回り込み特大のかみなりを浴びせる。

たまらず絶叫し——そのまま倒れ込んでしまった。

「リザードン戦闘不能！エネコロロの勝ち!!」

『エネコロロの対応できない動きに、たまらずリザードンダウンだ
!!』

「な、なんで避けられたんだよ……!!?」

「簡単だ。攻撃を中断しすぐさま回避行動に移った。

だが普通ならばそれは不可能ではある、しかし今のエネコロロの動きならそれも可能だろう」

今のエネコロロは相手が1の動きをする間に2の動きができる、それほどもでのスピードになっているのだ。

「それじゃあ、無敵じゃんか……」

(ところが、そう上手くもいかないのだがな……)

ぼやくようなカイリの呟きに、心の中でそう返すロスト。

「エネコロロ、戻って。そんでもって……カメックス、レディーゴ
ー!」

「あれ?　なんでエネコロロをチェンジしたんだ?」

「……あれ以上は保たないからな、エネコロロの身体が」

「それはどういう……」

「あの動きは身体の負担が大きすぎる、エネコロロは別段丈夫というわけではないから、あれだけのスピードを出し続ければ自滅してしまうさ」

だからこそ、エネコロロを休ませる為にカメックスにチェンジしたのだから。

「――ルギア、お願い！」

ボールからルギアを取り出す。

だが、ルギアは飛翔せずに地を着けた。

……ムウマージとの戦いで、かなりのダメージを受けているようだ。だが無理もない、弱点のタイプの技を重点に受けてしまったのだ、戦闘力の低下は否めないが……なんとか頑張ってもらうしかない。

「カメックス、ハイドロカノン！！」

「ルギア、ハイドロポンプ！！」

凄まじい勢いで発射されたハイドロカノンを、ハイドロポンプで押し戻すルギア。

「くっ、あ……！！」

「ルギア！！」

「……すまぬ、なんだか調子が……」

「……………」

おかしい。

いくらなんでも、ルギアの様子はあきらかにおかしかった。

確かにダメージは大きいだろう、パワーのあるムウマージに弱点である大技を受けたのだから。

だがそれでも、いつものルギアならばあそこまで苦しげには……。

「れいとうビーム!!」

「っ、かわして!!」

「くっ……!!」

迫るれいとうビームに、ルギアは顔をしかめながらも羽ばたいて回避しようとするが。

「うああああっ!!」

「ルギア!!」

「えっ……?」

れいとうビームを受け苦悶の雄叫びを上げるルギアに、レイジではなくカグヤの方が驚いた。

（なんで……? ルギア、どうして避けられなかったの……?）

避けられると思っていた、しかし彼女は呆気なくカメックスの攻撃

を受け倒れてしまう。

いつもとは違うルギアの様子に、試合中だというのにカグヤの思考は彼女に向けられた。

けれどその疑問は、他ならぬルギア自身が一番感じていた事だった。

（ぐっ、な、何故だ……あの程度の攻撃が、何故避けられぬ……？）

身体はだるく、動きたくないという考えが全身を支配していく。

戦う意欲はあるのに、身体がそれを望んではおらず拒否しているようだ。

（お、おのれ……動かぬか、余の身体！！

このままでは、マスターに勝利を与える事ができなくな……る……）

ふっと、ルギアの全身から力が抜け——地面に伏してしまった。

「ルギア戦闘不能！ カメックスの勝ち！！」

『なんとルギア、反撃できずに倒れてしまった！

これでレイジ選手のポケモンは残り一体だ！！』

（……ルギア、一体どうしたんだ……？）

ボールの外から見てみても、彼女は苦しげな表情で顔をしかめている。

「おいおい、ルギアの奴簡単にやられちゃったぞ……！？」

「でも、なんだか様子がおかしかったような気がしませんか？」

「確かに……動きが鈍かった」

「ムウマージとの戦いでかなりダメージを受けちゃったからな」

（……本当に？ 本当にそれが原因なの？）

カイリ達はその理由で自己完結してしまったようだが、シロナにはそうは思えなかった。

あの鈍い動き、そして苦しげな表情。

もしかしたら……何か病気を抱えているのだろうか。

「……………」

シロナと同じく、レイジもそんな結論に達してしまったからか、ルギアのボールを握ったままその場で動かなくなる。

このまま試合を無駄に長引かせる事などは許されない、しかし……彼女の様子がおかしいままにしておくわけには。

「――マスター、余の事は構わぬ」

「っ、ルギア……」

「少し疲れてしまい失態を晒してしまったただけだ、すまぬ……余がふがないばかりにマスターには負荷を掛けた。」

——このような余が言うのは些かおかしいかもしれぬが、一応応援だけでもさせてくれ」

そう言って、試合に集中するように呼びかけるルギア。

……心配だ。

心配だけど……彼女の気持ちを無駄にするわけにもいかなかった。

「……苦しくなったら、すぐに言ってね？」

「ふん、余はそこまで軟弱ではない。いいからマスターは戦いに集中しておけ」

「………わかった」

相変わらずのルギアに苦笑しつつも、レイジは最後のポケモンが入ったボールを手取る。

「………」

これで最後だ。

長かったセキエイ大会最後のバトル。

——必ず勝つ

勝つと決めた以上——最後の最後まで諦めずに全力で戦う！！

「いくよカグヤー！！」

「うん!!」

「これで最後だ。――アクセル、お願い!!」

第76話 決勝戦〜幼なじみの限界バトル!!〜 (後編) (後書き)

追い詰められ、最後のポケモンであるアクセルを繰り出すレイジ。

はたして、この決勝戦を制するのは、一体どちらだろうか……!?

第77話 完全決着くチャンピオンリーグへの道く（前書き）

シャイニングダンスにより追い詰められてしまうレイジ。

残りはアクセルのみ、対するカグヤはまだ2体残っている。

起死回生となるか、それともこのままカグヤの勝利となるのか……。

第77話 完全決着！チャンピオンリーグへの道！

『レイジ選手、最後のポケモンであるルカリオを繰り出しました！！カグヤ選手このまま逃げられるか、それともレイジ選手が逆転するのでしょうか！？』

「このまま逃げ切るよ、絶対に！！」

「負けるもんか……僕は絶対に負けない！！」

へはいっ、父上。僕は絶対に負けません！！」

拳を固く握りしめ、闘志を露わにするアクセル。

「いくよカメックス、ハイドロポンプ！！」

「かわして！！」

地を蹴り、迫り来るハイドロポンプを回避すると同時に間合いを詰めるアクセル。

「はっけいだ！！」

「からにこもる！！」

渾身のはっけいも、甲羅の中に閉じこもったカメックスには通じず、弾かれてしまう。

しかし、まだアクセルの攻撃は終わらない。

「ボーンラッシュー!!」

骨状の棍を両手で握りしめ、下からすくい上げるように振り上げる。

――上空に飛ばされるカメックスの身体

それに追撃を仕掛けるアクセルだが、カメックスもただ攻撃を受けているわけではない。

「こうそくスピン!!」

迫るアクセルに、身体を高速回転させて迎え撃つカメックス。

へそんな攻撃、効きはしない!!」

棍でカメックスの身体を弾きながら、その衝撃を利用して更に上空へ。

そして、強烈な炎を纏った蹴りを槍のように繰り出し、カメックスを地面へと叩きつける。

『ルカリオの強烈なブレイズキックがカメックスにヒットー!!
これは効いたか!?!』

たとえばブレイズキック自体が効果が今一つでも、かなりの衝撃がカメックスに襲いかかったはずだ。

「カメックス、ハイドロカノン!!」

けれどカメックスはまだ健在、起き上がり空中にいるアクセルに渾身のハイドロカノンを撃ち込んでいく。

空中ではアクセルは回避行動をとれない、故に誰もが命中すると思っていた中で。

へっ、はぁ——っ!!」

裂帛の気合いを込め、なんとアクセルは持っていた棍でハイドロカノンを叩き割ってしまった。

それと同時に棍も砕け散るが、それには構わずアクセルは着地と共に素早くカメックスとの間合いを詰め。

「インファイトだ!!」

強力な拳の連打を叩き込み、カメックスを壁まで吹き飛ばした。

「カメックス戦闘不能! ルカリオの勝ち!!」

『レイジ選手のルカリオが見事逆襲を果たしましたー!!』

これでカグヤ選手のポケモンも残り一体、さあどうなるのか!?!』

「お疲れ様カメックス、ゆっくり休んでね。

——これで、私も残り一体」

「泣いても笑っても、これで最後だ」

「うん。……絶対優勝よ」

「……………」

両者共に笑みを返し、そして……カグヤは最後のポケモンを場に出した。

「エネコロロ、レディーゴー!!」

『……さあ、このバトルで雌雄を決します。

果たして、勝利するのはどちらなのか!!』

会場の盛り上がりは最高潮に達し、誰もが席を立ち彼等を応援していく。

その歓声を、2人はどこか遠くで聞きながら。

「アクセル!!」

「エネコロロ!!」

まったくの同時に指示を出し。

「はどうだんだ!!」

「ふぶき!!」

今ここに、最後のバトルの幕が開く——!!

激突するはどうだんとふぶき。

威力は互角、そう判断するやいなや両者はすぐさま次の行動へ。

「ボンラッシュー!!」

再びあの棍を手にし、エネコロロに振るっていくアクセル。

しかしエネコロロは、軽快な動きでその悉くを回避していった。

「とびひざげり!!」

風切り音を響かせ、アクセルのとびひざげりが空を切る。

↑———↓

避けられた、この至近距離での攻撃が。

そう思った時には、既にエネコロロの攻撃が——

「はかいこうせん!!」

「はどうだん!!」

↑くっ———!↓

レイジの声に反応し、まともな構えもせずはどうだんを放つアクセル。

↑ぐあ———っ!!!↓

どうにか相殺できたが、零距离で爆風を受け地面を転がっていく。

腕を使って体勢を立て直し、再び身構える。

「やっぱ無理か……ならエネコロロ!!」

(っ、来るか——!)

「シャイニングダンス!!」

——消えるエネコロロの身体

同時に、アクセルの背中に衝撃が走る。

へぐっ、この——!!

痛みに耐えながらの回し蹴りも、虚しく空を切るだけですぐさま別の箇所へ痛みが走った。

(やっぱりあれをどうにかしないと……!!)

しかし、アクセルですら今のエネコロロのスピードを捉えきる事はできない。

このままでは、ただ一方的にやられていくだけ。

へ父上!! 僕に任せてください!!

「……………アクセル」

へ必ず僕が父上に勝利をもたらしてみせます!!
ですから父上は僕を信じて、指示を出してください!!

「……………」

痛みに耐え、内側から湧き出る不安と恐怖すら打ち勝ち、ただ勝利する為にアクセルは言った。

——その決意、その意志を無駄にはできない

「——アクセル」

〈はい〉

「……信じてる」

紡ぐ言葉は、ただ一言。

けれど、彼に掛けるべき言葉はそれで充分だ。

レイジの想い、そして信頼に気がついたアクセルも、大きく頷きを返し……拳を握りしめ身構えた。

「エネコロロ、このまま一気に決めるよ!!」

〈やらせるか!!〉

地を蹴り、踏み込むアクセル。

しかし——先程のより更に速い!!

「マッハパンチ!!」

――それでも、エネコロロには届かない

凄まじい速さ、その上で放たれたマッハパンチですら、エネコロロには掠りもしなかった。

〈まだだ!!〉

それでも、アクセルはまだ諦めていない。

可能な限り目で追い、拳の連打を繰り返していく。

10発、20発、30発と放っても尚、エネコロロを捉えられない。

しかし、それとは逆にエネコロロの攻撃は確実にアクセルへとダメージを与えていく。

〈ぐっ、うおおおおおっ!!!!〉

それでも倒れない、アクセルは雄叫びを上げながらもエネコロロに攻撃を繰り返す。

『ルカリオ凄まじいラッシュですが、エネコロロにはダメージが行き渡らない!!』

このまま敗北してしまうのかー!?!?

へっ、やられてたまるかあああっ!!!!!〉

(嘘、まだ倒れないの……!?!?)

いくらパワー不足のエネコロロの攻撃だとしても、既に十数発も命中させたのだ。

だというのに、まるで何かに取り憑かれたかのように、アクセルは倒れずにエネコロロに立ち向かっていく。

そして――永遠に続くかと錯覚させられた激闘は、意外な展開で変化を見せた。

「えっ――！？」

「――っ」

驚愕の声は、カグヤの口から放たれる。

シャイニングダンスによる凄まじいスピードを維持してきたエネコロロの動きが、急に鈍り始めた。

「っ、カグヤすぐにエネコロロを下がらせて！」

おもわず身を乗りだし、カグヤに向かって叫ぶシロナ。

「おいおい、エネコロロの動きが急に遅くなっちゃったぞ！？」

「――限界が来たようだな」

「えっ……」

「アクセル、マッハパンチ！！」

この機は逃さない、アクセル渾身のマッハパンチが遂にエネコロロを捉え吹き飛ばす。

「見事なものだ。あれだけの攻撃を受けてもなお立ち向かい、最後まで諦めなかった。

だからこそ、エネコロロの身体に限界が訪れ、勝機を得る事ができたんだ」

もう、エネコロロに先程のようなスピードは維持できない。

しかし……アクセルも既に限界を超えているはずだ。

まだ勝負はわからない、けれど——確実に終わりを見せていた。

「——レイジ」

「……………」

「次の攻撃が、最後の一撃だよ」

「……ああ。きつと僕もだ」

「泣いても笑ってもコレが最後——」

「どちらが勝っても、恨みっこなし——」

「全身全霊——」

「本気と本気の——」

『真っ向勝負!!』

飛び上がるエネコロロ。

アクセルもその場で力を込め、真っ向から迎え撃つ準備を終える。

そして――

「エネコロロ、フルパワーでギガインパクト!!」

飛び上がり、エネコロロは最後の大技を繰り出した――!!

「アクセル!!」

へはい!!」

両手を前に突き出す。

そこに展開されるは――はどうだん。

しかし、普段は両手で繰り出すはどうだんを、アクセルは“片手”
ずつで2つ作り出す。

「アクセル、これで最後だ!!」

――天波双導拳!!」

へでいいやあぁっ!!」

両手に展開した2つのはどうだんを放たずに、向かってきたエネコロロに真っ向から突き出す。

——強力なエネルギーのぶつかり合いが、スタジアム全体に光と熱風をまき散らしていく

「ぐっ……!!」

「きゃ……!!」

爆風により、レイジもカグヤもフィールドに視線を向けられない。

その間にも、アクセルとエネコロロの激突は続いていた。

「ぐ、うぁ……」

顔をしかめながらも、両者共に一步も譲らない。

全ては、自分を信じてくれる主人の為に。

彼等は自身の持てる力全てを引き出し、技を出し合っていく。

「が、頑張ってエネコロロ!!」

「アクセル、あともう少しだ!!」

「——ニヤッ!!」

「っ、おとおおっ!!」

後ろから聞こえた声に、再び闘志を呼び覚ますエネコロロとアクセル。

まだ終わらない、終われないのだ。

もっと高みへ、誰もが行った事のない至高の世界へと登り詰める。

——しかし、それは

「っ、ニヤ、ア……!?!」

「エネコロロ!?!」

ガクンと、急激な勢いでギガインパクトが弱まっていく。

その瞬間、レイジとアクセルは最後の勝負に出た。

「今だアクセル、テトラコンビネーション!!」

「はい!!」

右手を強く握りしめ、ギガインパクトの弱まった部分へとマッハパンチを仕掛ける。

それは見事に貫通し——エネコロロを吹き飛ばした。

同時に地を蹴り、吹き飛んでいくエネコロロに追いつき——スカイ
アップー!!

身体を一回転させ、反動を利用してのアイアンテールでエネコロロ
を地面に叩きつけた後。

「いけえええっ!!」

〈これで……最後だあああっ!!〉

雄叫びを上げ、最後の一撃となるはどうだんを叩き込んだ——!

爆発が起き、フィールドが煙で包まれる。

……。

静寂が、スタジアムを包む。

試合の結末はどうなったのか、観客全員が固唾を吞んで見守る中。

ゆっくりと、フィールドを覆う煙が晴れ——

「——エネコロロ、戦闘不能!! ルカリオの勝ち!!
よって勝者、マサラタウンのレイジ選手!!」

地面に膝を突きながらも、いまだ健在であるアクセルと。

地面に倒れ、力尽きたエネコロロの姿が、視界に入った……。

『決まったあーっ！！ 長きに渡るフルバトルもここで決着を迎え、そして――激闘を制したのはレイジ選手だあぁっ！！』

「……………」

大声のあまり裏声になっている実況と、割れんばかりの歓声をどこか遠くで聞きながら、レイジはフィールドに入りアクセルの元へ。

「――頑張ったねアクセル、本当によく頑張ったよ」

へち、父上……」

レイジに力ない笑みを向けた瞬間、倒れそうになるアクセル。

それを、レイジはすぐさま抱きかかえてあげた。

「――エネコロロ、お疲れ様。アクセルと同じくらい凄く頑張ったよ」

笑顔を向け、エネコロロをボールに戻すカグヤ。

そしてレイジ達に向け、賞賛の言葉を贈る。

「おめでどうレイジ、本当におめでどう。
私、今まででやってきたどのバトルよりも、凄くワクワクしたよ
!!」

「ありがとうカグヤ、僕も楽しかった……本当に楽しかったよ」

その場で、固く握手を交わす2人。

会場の歓声も、更に大きさを増した。

「はは……すげえ、本当に凄かったな……」

「カグヤもレイジも、本当に頑張ったわ」

「……私、このバトルは忘れません、絶対に」

「忘れることなどできないさ……あの2人は、まだ強くなる。今よりも……更に」

(……レイジくん、おめでどう)

と、その時観客の一部からどよめきが聞こえ始める。

何事かと、視線をフィールドに向けると……2人の前に意外な人物が近づいていた。

「あれは………!!」

「……ワタル」

そう、カントーチャンピオンであるワタルが、2人に向かって歩いてきていたのだ。

「ワタルさん……」

「レイジくん、優勝おめでとう！　そしてカグヤくんも本当によく頑張ったね！！」

「あ、ありがとうございます……」

「キミ達のバトルは本当に凄かった、ボクも見ていただけでは抑えきれないくらいほかに。」

だから居ても経ってもいらなくて、2人にどうしてもおめでとうの言葉を送りたくなっただんだ」

「ワタルさん……」

「カグヤくんは惜しくも準優勝となってしまうけど……優勝したレイジくんには、チャンピオンリーグに出場する権利が与えられた。――その意味、ということかわかるね？」

「……………」

ワタルの問いに、レイジはおもわず口を閉ざす。

――チャンピオンリーグ

それはリーグ優勝を果たしたトレーナーだけが出場できるもう一つのリーグ大会。

ただ普通と違う所と言えば……チャンピオンや四天王に挑戦することができるところ。

ジムリーダーよりも強い四天王、更にその上にいくチャンピオンとのバトル。

それは――まさにトレーナー最高峰の大会。

「――挑戦、楽しみにしているよ」

そう言い残し、ワタルはフィールドを後にする。

「……………」

「――チャンピオンリーグかぁ……楽しみだね」

「……何でカグヤが楽しみなのさ？」

……………。

「はぁ……………疲れた」

ベッドに顔を沈めるレイジに、周りにいた全員が苦笑を浮かべる。

しかしそれも仕方ない、あの後表彰台で優勝者に送られるカップを受け取り……セキエイ大会は幕を閉じた。

そこまではよかったのだが、その後レイジを待っていたのは――インタビューの嵐。

さらには、レイジのファンになったトレーナーや一般人に詰め寄られ……気がついた時には夜になり、現在に至る。

「けど仕方ないわ。優勝者に押し寄せる宿命だもの、あれは」

「やっぱりシロナさんが優勝した時もあんな感じだったんですか？」

「そうね。だけど……あそこまで凄かったわけじゃないわ」

それに、レイジのファンの中にはカイリやカグヤ、ヒメカやロストのファンになった人達もいたから、一概に凄すぎるとは言えないが。

だが、それを差し引いてもレイジの人気は凄い。

「にしても……チャンピオンリーグ、か。俺も行きたかったなあ……」

「仕方ないわよ。今のあなたよりレイジが強いのだから」

「そんな事ない、どっちが勝ってもおかしくなかったよ。」

もちろんカイリの時だけじゃなく、今までの試合全部が」

「レイジらしいな……まあ、これがお前の強さなんだろうけど」

「それはそうと、レイジはやはりチャンピオンに挑戦するののか？」

ロストの問いに、レイジは頷きを返す。

初めから選択は一つしかない、必ずワタルと戦い……勝つ。

それを聞いて、ロストも笑みを返した。

「試合は3日後だよな？」

「うん」

「やっぱり特訓するのか？　もしそうなら付き合っぜー！」

「ありがとう。でも明日はゆっくりみんなを休ませるよ。」

特訓は2日目に、3日目も休んで……ワタルさんとのバトルに望むつもり」

「えっ……1日しか特訓しねえの？」

「うん、今はこれ以上特訓しても伸びないし身体の負担が増すだけだから」

レイジの言葉にカイリは「ふーん……」と返しつつ、椅子に背を預ける。

そんなに休んで大丈夫なのかとも思ったが、他ならぬレイジ自身が決めた事なのだ、いちいち口出しする権利はない。

「それじゃあ、明日は暇なんだよね？」

いきなりなカグヤの問いに、レイジも暇だと返事を返すと……。

「じゃあ、明日一緒に出かけようよ！　まだ出店とか一杯並んでるし、せっかくだから見に行かない？」

「えっ、あ、まあ……」

別に構わない、暇なのは確かだしい息抜きになるだろう。

しかし、レイジはふと気がつく。

あれ、もしかしてこれってデートになるんじゃないか、と……。

そんな疑問が頭に浮かぶと同時に、彼女からも声を掛けられた。

「レイジくん、私とも行きましようよ」

そう言いつつ、さりげなくレイジの手を握りしめるシロナ。

「むっ……シロナさん、私の方が早く言ったんですけど？」

「早い者勝ちという決まりはないでしょ？　それに抜け駆けするのはズルいと思うけど？」

「むう……」

そう言われると、カグヤとしては何も言い返せなくなる。

そして、その光景を見ていたとある2人も、静かに動き始めた。

「あ、あの……カイリ」

「ん？」

「え、えっと……よかったら、その、一緒に……」

「明日は一緒に出掛けませんか？」

「――」

完全に言葉を遮るようなミカンの声に、ピクリとヒメカの額に青筋が浮かぶ。

「……ちよつとミカン、抜け駆けするの？」

「そんなつもりはありませんけど……でも、いいじゃないですか？」

「よくないわよ」

静かに、けれど確実に2人の間に火花が散る。

「……何をしているのだこいつらは」

その光景を眺めながら、ミュウツーはボールの中からでもわかるくらいのため息と皮肉を吐き出す。

「そう言ってやるな、こういった一見無意味に見える時間でも、時間が過ぎればかけがえのない思い出に変わるものさ。

なんて事はないものでも、大事なものはあるんだぞ」

「――ワタシには理解できん」

「いずれ理解できるようになるさ、ゆっくり考えていけばいい」

「…………ふん、必要あるとは思えんがな」

と言いつつも、ミュウツの口調の中には確かな穏やかさも見え隠れしている。

その事実を感じ取り、ロストは優しい笑みを浮かべるのだった。

第78話 間章くティナ達の休日く（前書き）

※今回はティナ達メインなので、彼女達の台詞に「」が付きます。

第78話 間章くティナ達の休日く

「ティナー」

「……ヒカリ、どうかしましたか？」

読んでいた本から視線を逸らし、ティナはこちらに走ってきたヒカリに顔を向けた。

「何読んでるのー？」

「お父様の本ですよ。ヒカリも読んでみますか？」

うん、と頷きティナの膝に乗り彼女が読んでいた本に目を向ける。

「……………」

「どうですか？ わたくしは面白い本だと思いますけど……」

「……………難しい字がいっぱい」

唸るようにそう呟くヒカリ、今にも知恵熱が出てきそうだ。

そんな彼女に苦笑を送りつつ、本を閉じる。

「レイジもティナも、よくこんな難しい本読めるね？」

「わたくしはラルトスの時からよくお父様と本を読んでいたから」

「そっか……そういえばレイジもよく本を読んでもんね」

「ええ。最近は色々ゴタゴタしてましたし、せつかくの休日ですからまとめて読んでしまおうと思ひまして」

そう言うティナの横には、まだ読んでいない十数冊の本が積まれている。

それを見て、ヒカリはげんなりと表情を歪ませた。

「そういえば、リオン達はどうしてますか？」

「えっと……リオンは外に散歩、アクセルは鍛練、ソウルはお昼寝、ルギアは……わかんない」

「わからない？」

「うん。「余だけで行かねばならぬ所がある」とかで、レイジにも行き先告げずに飛んでっちゃった」

「……………」

おかしい、ヒカリにならともかくレイジに何も言わずに行くなんて、彼女らしくない。

それに、なんだか前のバトルから彼女の様子がおかしかった。

……それが何か関係しているのだろうか。

「……ティナ、どうしたの？」

「——いえ、なんでもありませんよ」

「もう……ルギア、どうしたのかな？」

「大丈夫ですよ。ルギアは子供……ですけど、お父様を困らせるような事はしない……と、思います」

言ってて、だんだんと不安になってきた。

彼女の事だ、ひょっこり帰ってくるだろう。

「ヒカリも遊びにいつてきたらどうですか？

せっかくの休日なのでから、自分の時間を過ごした方がいいですよ」

「うーん……でも、レイジがいないとつまんないよ。

——ねえティナ、レイジどこ行っちゃったの？」

「お父様でしたら、カグヤとシロナの2人に引っ張られて、今頃出店周りでもしてますよ」

行く前からげんなりした表情をしていたレイジを思い出し、苦笑を浮かべてしまった。

まあしかし、彼はあのような性格だから、2人に引っ張られてひいひい言っているだろう。

……羨ましい、実に羨ましいものだ。

「そっか、レイジ今日はデートだもんね」

「……………そう、ですね」

そうはつきりと言わないでほしい、ちょっとヘコんだぞ今。

「でもティナはよかったの？ レイジがデートに行ってるんだよ？」

「……………」

またもグサツとくるような言葉を吐き出すヒカリ、ちょっとマジでやめてください。

「ティナもレイジの事大好きなのに、一緒にデートしなくてよかったの？」

「…………ヒカリ、その…………色々と事情というものがありました」

こういう時、子供って残酷だなあと感じてしまうのは、ティナの心が荒んでいるからではない、決してない。

大事なので二回言ったが、とにかくティナは極力カグヤ達の邪魔をしないと誓ったのだ。

損をしていると自分でもわかっている、でも邪魔はできない。

サーナイト故に、カグヤとシロナが如何にレイジに恋慕の情を抱いているのかがわかるし、それに…………。

彼女自身は否定するものの、やはり人間とポケモンという種族の違いが、彼女にこのような行動をとらせていた。

たとえ恋い焦がれたとしても自分はサーナイト、人間である彼とは……。

人間とポケモンが結婚した事例もある、しかし……それで彼が幸せになるのかと言われれば……答えは出せない。

（言い訳ですね……こんなものは。ただ恐いだけなのに……）

彼に本気で想いを伝えて、拒絶されたくない。

そんな不安があるなら、初めから言わなければいい。

それは逃げ、傷つきたくない故に歩みを止める行為でしかない。

だが、それだけティナの中で彼の存在が大きいのもまた事実。

「もしかして、カグヤやシロナに遠慮してるの？
なら変だよティナ、どうして遠慮なんかする必要があるの？」

当たり前で、至極まともな質問。

ただ純粋に甘えを見せられるヒカリならではの言葉に、ティナは羨ましいと思った。

ラルトスやキルリアの時はよかった、ヒカリのように何も変な事を考えずに彼に甘えられた。

しかし、サーナイトになった今では……そのような行為ははばかられた。

自分の好意を一方的に押し付けるわけにはいかない、そんなものは迷惑でしかない。

悪い方へと考えてしまう癖は、いつの間にか出来上がっていた。

(…………でも)

このままでいいわけではないのも確かだ、こんな状態では彼が心配する。

「…………ヒカリ」

「何？」

「…………少し、お父様の所に行きましようか？」

「うん、そうだね!!」

ヒカリを頭に乗せ、椅子から立ち上がる。

……たまには、あの時のように遠慮なく甘えてしまおう。

カグヤやシロナには悪いとは思う、こんな考え方はポケモンとして間違っているのかもしれない。

だけど……自分だって、甘えたい時だってある。

だから、ティナはサイコパワーでレイジの居場所を確認すると、少しだけ早足で駆け出した。

「……あら、どこかに出掛けるの？」

そんな彼女達を呼び止める一体のポケモン。

「ジャローダ……」

「やつほー、ジャローダ」

「普通に挨拶しなさい、それより……どこかに行くの？」

「ええ。お父様の所に」

「……デート中なの？」

「はい。カグヤやシロナだけお父様を独占するのは許しませんから」

「あ、そう……」

しれっと言い放つティナに、ジャローダは皮肉めいたため息をつく。

「ジャローダはカイリと一緒にいなくていいの？」

「……別に、あなた達と違って年中一緒に居なくても大丈夫だから」

冷たく言い放つジャローダだが、それが本心ではないという事にティナはもちろんヒカリも気がついた。

素直じゃない、そんな言葉が喉元まで出掛かったが、言うのはやめておこう。

そう言ったら、絶対に怒り出すから。

「……何よ、なにか言いたげね？」

「いいえ、別に」

「……………フン」

そっぽを向くジャローダの顔は、僅かに赤みがかったている。

それを見て、ティナとヒカリは顔を見合わせ苦笑を浮かべたのだった。

……………。

セキエイ高原は、いまだ活気に満ちていた。

大会自体は終わったが、やはりチャンピオンリーグを観戦する為に残っているのだろう。

（……………みんな、楽しそうですね）

少しだけ心を覗くと、そこに浮かぶのは嬉しいや楽しいといった明

るい感情のみ。

平和で、穏やかな日常。

見ている、嬉しくなるような光景に、ティナの顔には自然と笑みが浮かんだ。

「……………」

ふと一角を見ると、凄い数の人ばかりができています。

首を傾げながらも、ティナとヒカリはその場所に近づいた。

「……………」

そこには、ある意味では予想できた光景が広がっている。

（…………お父様）

というか、少し考えればわかる事だった。

——人だかりの中心には、質問責めに遭っているレイジ達の姿が

それはそうだ、なにせレイジはリーグ優勝者。

カグヤは準優勝、それでもってシロナはシンオウチャンピオンだ。

この3人が仲良く腕を組んでいれば、否が応でも注目の的になる。

きつと長い間このような状況が続いていたのだろう、3人の表情は

あきらかな困り顔だ。

カグヤに至っては、デートを邪魔されているからか、僅かに怒りの色が見え隠れしている。

「……離れますか」

「助けないの？」

「仕方ないですよ。お父様達は有名になってしまいましたし……たまには、こういう意地悪をしてもいいと思いませんか？」

それに、こんな状況ではレイジとゆっくり過ごす事は叶わない。

「……ティナって、結構ひどいね」

「さあ。わたくしはそう思いませんがね」

ジト目で自分を見てくるヒカリにもそう返し、ティナはゆっくりとその場を後にする。

（さて……次はどこに行きましょうか）

「ティナ、ヒカリ」

「あ、ソウル！」

「お昼寝をしていたのではなかったのですか？」

「うん。そうだったんだけど……」

「……………」

何やら、ソウルの表情が優れない、なにかあったのだろうか。

「ねえティナ、ちょっと来てくれないかな？」

「えっ……………」 「——これは」

案内された場所は、セキエイ高原から少し離れた森の中。

けれど、周りには何故か傷ついたポケモン達の姿が。

「僕はここで寝てたんだけど……急に空からオニドリルとオニスズメの集団が襲いかかってきて……」

「……………ひどい!!」

怒りを露わにするヒカリ。

「……………どうしてオニドリル達があなた達を襲ったのか、わかりますか？」

詳しい事情を知るため、近くにいたコラッタ達に 問いかける。

するとコラッタ達は怯えながらも、ティナの問いに答えてくれた。

「あいつら、この辺一帯を縄張りにしようと時々やってくるんだ。ぼく達も抵抗してるんだけど……空から襲われたら太刀打ちできないよ」

「……………」

「ねえティナ、ピカ達がやっつけちゃおうよ！」

「うん。僕もそういう連中は許せない」

「や、やめた方がいいよ、あいつら凄く強いから」

「大丈夫、ピカ達だって凄く強いもん!!」

ドンと胸を叩くヒカリ、ソウルも同意するように力強く頷く。

「待ってくださいヒカリ、ソウル、まずは話し合いで解決できないか試しましょう」

「こんな事する奴らに話し合いなんか通用しないよティナ」

「そうかもしれませんが、ですが極力実力行使するのはお父様も望まない事ですから」

「……まあ、レイジならそうするだろうけど」

「まずわたくしがオニドリル達を説得してみます、ですがどうしても無理なようでしたら——」

「あっ、また来た!!」

木の枝に立っているホーホーの声に、全員が視線を空に向ける。

そこには、たくさんのオニスズメとビジョンにポッポ。

そしてそれらを引き連れているオニドリルとピジョットの姿が。

（どうやら、あのオニドリルとピジョットがそれぞれのリーダー格のようですね）

森のポケモン達は、再び現れたオニドリル達にすっかり怯えている。その子達を守るように木に飛び乗り、大声でオニドリル達に声を掛けた。

「あなた達、どうしてこのような事をするのですか!？」

この森に住むポケモン達が困っているではありませんか!！」

「なんだ貴様は？」

「わたくしはサーナイトのティナ、この森のポケモン達から話を聞きました。

何故森のポケモン達と共存する道を選ばないのですか!？」

「そうだよ。どうして無理矢理奪おうとするのさ!！」

「自分達の身勝手な理由で、誰かを傷つけるなんておかしいよ!！」

ヒカリもソウルも、オニドリル達を説得しようとして声を荒げる。

しかし……そんな彼女達の言葉を聞き、オニドリル達は一斉に笑い声を上げた。

「共存だあ？ どうしてそんな事をしなくちゃいけないんだ？
弱い奴は強い奴に従ってればいいだけじゃねえか！！」

「なんですって……！！」

「オレ達は強い、こいつらは弱い。
だったら、弱い奴等は強いオレ達に従えばいいんだよ！！」

「そんな……力で他者を押さえつけて、何になるというのですか！
？」

「ダメだよティナ、こんな奴等に何言ったってきかないよ！！」

「……僕もそう思う。このままじゃまたみんな傷ついちゃうよ！！」

「……………」

「邪魔するなら、無関係のお前達だって容赦しねえぞ！！」

「くっ……」

戦うしかない。

半ば予想できていた事態とはいえ、不本意だ。

けれど、関係ないポケモン達を傷つけるオニドリル達を許すわけにはいかない。

「かかれっ！！」

一斉に襲いかかってくるポップ、ビジョン、オニスズメ達。

「ヒカリ、ソウル、威力を弱めた10まんボルト!!」

すぐさまヒカリとソウルにそう指示を出し、同時に自身も10まんボルトを放つティナ。

向かってくるビジョン達をまとめて電撃で包み込む。

「なにいつ!?!」

「どうですか？ 今は威力を弱めましたが……まだやるというのでしたら次は容赦しません!!」

「——ティナは甘いなあ」

「と言いつつも、ちゃんと威力を弱めたじゃないか」

「だって……ねえ？」

「くっ……!!」

「さあ、どうするのですか!?!」

「この……調子に乗るなよ!!」

「——っ」

こちらに向かって、攻撃を仕掛けてくるオニドリルとピジョット。

「みんな、逃げて!!」

攻撃を仕掛ける事はできる、しかし今は周りのポケモン達を逃がすのが先だ。

オニドリルのドリルくちばし。

ピジョットのつばめがえし。

2つの技がティナ達を襲い、ポケモン達を吹き飛ばしていく。

「ぐっ……………!!」

予想以上のパワーだ、直撃を受けていないのにダメージを受けてしまった。

すぐさま追撃しようとするが、空中に逃げられ攻撃が届かない。

いかにサイコネシスだとしても、五十メートル以上離されてしまつては攻撃できない。

(このままじゃ……………!!)

「ひやはははっ、このままトドメだ!!」

再び攻撃しようと降下してくるオニドリルとピジョット。

(お父様なら、一体どうする……………?)

考えろ、考えるのだ。

レイジならどうするのか、最良の策を探らなくては――

「ぐおっ!？」

「うああっ!？」

「え――」

右横から直線に放たれる強力な炎が、オニドリルとピジョットをまとめて吹き飛ばす。

ティナ達が炎が放たれた方向へと視線を向けると。

「――ティナ、みんな、大丈夫か!？」

「リオン!!」

「ぐっ……な、なんだてめえは!!」

「うるせえよ。よく事情は知らねえけどな……俺の仲間を傷つける奴等は絶対に許さねえ!!」

「リオン、一度下に降りてわたくしを背中に乗せてください!!」

「おう!!」

「させるかよ!!」

「ヒカリはオニドリルに、ソウルはピジョットに10まんボルト!

「！」

リオンに狙おうとするオニドリル達に、攻撃を仕掛けるヒカリとソウル。

避けられてしまうが、その隙にティナはリオンの背中に乗り空へと飛び上がる。

「リオン、一気に勝負を決めますよ！」

「わかってらあっ!! 指示は頼むぜ!!」

「わかりました!!」

「くそっ……まだだ!!」

「っ、いい加減にきなさい!!」

「頭冷やしやがれ!!」

もう一度ドリルくちばしとつばめがえしを放つオニドリルとピジョット。

それに対し、ティナとリオンは――

「リオン、そのままフレアドライブ!!」

「うおおおおっ!!」

全身に炎を這わせ、突貫するリオン。

その炎の中で、ティナは両手にサイコセイバーを展開させる。

それを槍のように突き出し、フレアドライブのパワーを上乗せさせ。

向かってきたオニドリルとピジョットを、まとめて吹き飛ばした――

――！

きりもみしながら、地面に落ちていくオニドリルとピジョット。

「へっ、ざまあみやがれてんだ――！」

「……………」

勝敗は決まり、リオンは勝ち誇ったようにそう言い放つ。

一方……ティナの表情はなんともいえないものになっていた。

……………。

「――もう、このような事はやめてください」

うずくまっているオニドリル達に、ティナは静かにそう告げた。

「二度とこのような事をしないと誓えるなら、わたくし達もこれ以上の事は致しません。」

ですから、このまま帰ってください」

「……ティナは本当に甘いなあ」

後ろからヒカリのそんな言葉が聞こえたが、ティナは構わずオニドリル達の答えを待つ。

「……わかった。もうこんな事はしない」

「……………本当に？」

「ああ、本当だ」

——無論、嘘だ

こんな奴の言っている事など無視すればいい、このまま奴等が帰った後再びここを襲えば。

「わたくし、嘘は嫌いなんです」

「——」

たった一瞬で首筋に添えられた剣を見て、オニドリル達は言葉を失う。

「一応もう一度言っておきますが……もし、またこのような事したら……今度は、怪我だけでは済みませんよ？」

冷たい瞳が、オニドリル達を射殺するような勢いで睨む。

声も重く、形容できない恐怖が否が応でも湧き上がってくる。

それはオニドリル達だけではなく、味方であるヒカリ達ですら恐怖を感じるほどに……。

「う、あ——」

「ではもう一度訊きましょう。もう二度と……このような事は致しませんね？」

口調は柔らかく、いつもの彼女となんら変わらない。

けれど、その中に込められているのは……凄まじい殺気。

そんなものを見せられては、彼等にはもはや頷く以外の選択肢は選べなかった。

「わ、わかった。約束する！！ もう二度とこんな事はしない！！」

「……………本当に？」

「ほ、本当だ！！ もう二度と誰かを襲ったりはしない！！」

必死の懇願、もはやプライドや邪な感情など含む余裕などない。

それが通じたのか、それとも哀れに思ったのか、ティナはそっと剣を離す。

瞬間、恐怖に支配された叫び声を上げながら、オニドリル達は一斉に飛び立っていった。

「……………」

視線を皆に向けると、森のポケモン達は怯えた表情をティナに向けていた。

それを見て、ティナは一礼しその場を後にする。

「ちょ、ちよつとティナ!？」

「……………」

「ティナってば!!」

「……大丈夫ですよヒカリ、わたくしは大丈夫です」

「……………」

力なく微笑むティナに、ヒカリ達は何も言えず視線を逸らす。

（……………人間もポケモンも、同じ愚かな行為に走る存在なのですか？）

このような光景を見る度に、ティナの心は傷ついていく。

仕方ないと言えばそれまで、けれど……仕方ないという言葉では決して済まされない。

「……いちいち気にしてたら、お前の心が保たないぞ？」

「リオン……」

ティナの肩に手を置くリオン。

「気にすんなとは言えねえ、けどな……気にしすぎても、どうしようもねえんだ。」

お前は正しい事をした、もうあいつらもあんな事はしねえよ」

「……そう、ですね」

確かに彼の言う通り、気にした所でどうしようもない。

(でも……)

一体、どちらが正しいのか、答えは出なかった。

——人間とポケモン

この種族達は、果たして本当にこのまま生きていい存在なのか……。

(……忘れましょう)

浮かび上がった考えを振り払い、少しだけ歩くスピードを速める。

……この答えは、きっと一生出ないだろう。

人間とポケモンが存在する限り、きっと……。

第79話 挑戦、チャンピオンリーグ！～レイジVSワタル！！～（前書き）

数々の激闘の果てに、見事チャンピオンリーグに出場する事になったレイジ。

そして今日は、いよいよチャンピオンワタルとのフルバトルの日となっていた……。

第79話 挑戦、チャンピオンリーグ！～レイジVSワタル！！～

「――おせえっ！！」

セキエイ高原のスタジアム入口付近で、カイリの怒声が響き渡った。

「カイリ、そんな大声出さないでよ」

そんなカイリをなだめようとするレイジだが、そんなもので彼の怒りは収まらない。

「なんでお前はそんなに落ち着いてんだ！！」

「僕に八つ当たりされても困るんだけど……仕方ないじゃないか」

「仕方ないで済まされる問題じゃねえだろ！！」

がーっ、と怒るカイリ。

さて、何故彼がこんなにも怒っているのか説明しなくてはなるまい。

まあ尤も、説明した所でカイリが怒る道理には繋がらないのだが、ともかく説明すると……。

今日はいよいよチャンピオンリーグ、すなわちカントー最強のトレーナーであるワタルとのフルバトルを行う日だ。

レイジのポケモン達は全員コンディションはバッチリであり、レイジ自身も来るべき決戦に対して落ち着いている。

端からでは何の問題もない、ないのだが……。

「ちくしょー……ルギアの奴、何処で油売ってやがるんだ……」

そう、カイリの言葉通りルギアが決勝戦の次の日から何処かへ行っ
てしまったのだ。

行き先も告げずに、3日経った今でも帰ってこない。

もうすぐワタルとのバトルが始まるのに……それが原因で、カイリ
は怒っているのである。

……先程も言ったように、カイリが怒る道理はないのだが、そこは
気にしても無駄というものだ。

しかし、確かにこの事態は笑えるものではない。

このままではルギア抜きで五体でワタルと戦わなければならないの
だ。

もちろん説明すれば五体でも戦える、しかし……フルメンバーで望
まなくては、ワタルには到底太刀打ちできない。

「……だーっ、もう！！レイジ、あと10分しかねえぞ!？」

「……………」

「俺のポケモン、一体貸そうか!？」

「そんな事できるわけないじゃない」

「けどよ。五体じゃチャンピオンには勝てねえじゃねえか！」

「まあ、それは……」

「レイジなら俺のポケモンの実力を十二分に発揮してくれるし、このままじゃ……」

「————来た」

ぽつりと呟き、空を見上げるレイジ。

——大きな影が、こちらに向かってくる

まだシルエットだが、レイジにはそれが何なのかすぐにわかった。

やがて、その影はレイジの前に降り立ち一言。

「すまぬマスター、遅くなった」

と、あまり悪びれた様子もなく言い放った。

「おかえり、ルギア」

いつもの彼女らしい言葉に、レイジは特に突っ込みを入れずにそう返した。

しかし、先程からご立腹なカイリはそんな事で納得しない。

「ルギア、お前今まで何やってたんだよ！
レイジにも何も言わずにいなくなりやがって」

「だからすまぬと言っているではないか、だいたい何故カイリが怒る必要があるのだ？」

「あのなあ……」

「黙っていなくなったのは余も悪かったと思っている、しかし……あまり余裕がなかったのだ」

「？　ルギア、どういうこと？」

「うむ、これはマスターにも言っていなかった事なのだが……余は地上で活動する場合、一定の周期に銀の神殿で身体を清めねばならぬのだ」

「銀の神殿？」

「遙か深海にあるその名の通り銀色に輝く神殿の事だ、余も何故なのかはわからぬのだが……長い間地上で活動していると、身体に不調をきたしてしまつてな。」

——決勝でも動きが鈍かったのは、その為だ」

余も決勝が終わった後に思い出したのだが、そう言いながらルギアは言葉を続ける。

「しかもかなり危ない部類だったようだから、すぐさま行かねば間に合わなかったのだ」

「そうだったんだ……」

「でも、何でなのかな？」

「先程も言ったが余もわからぬ、海の神と呼ばれておるのも理由の中に入っているのかもしれない。」

しかしマスター、これで余は絶好調だ。チャンピオンだかなんだか知らぬが、余がまとめて薙ぎ払ってみせよう!!」

高らかにそう言い放つルギアからは、この前とは比べものにならない程の強いオーラが溢れている。

彼女が尊大なのはいつもの事だが、今回ばかりはそう言い放ってもおかしくないほどだ。

「……うん、頼りにしてるよルギア」

任せろ、そう返事を返しながらボールの中に入るルギア。

「さて、と……」

これで全員揃った。

ホルダーにボールをセットし、スタジアムの中に入っていく。

「レイジ!!」

「……いってきます」

今言うべき言葉は、ただそれだけ。

笑顔を浮かべて自分を送ってくれるカグヤ達を見て、レイジは頷きを返し決戦の場へと赴いた――

……。

『――天気は快晴、まさしく決戦日和と言えるでしょう。』

今日この場で、新たな歴史が刻まれるのか、それとも再びチャンピオンの強さが証明させるのでしょうか！？』

決勝戦の時と変わらぬ、否、それ以上の熱気に包まれたスタジアム。観客達は、この最高の舞台で最高の戦いを繰り広げてくれる強者を、待ち望んでいた。

『では選手の入場です、まずは挑戦者。初出場で見事優勝を果たした若き天才トレーナー。』

――マサラタウンの、レイジ選手！！！！』

実況、そしてレイジの登場により、観客席からは割れんばかりの拍手喝采が。

その中でも動じることなく、レイジはフィールドへと赴いた。

「レイジー、頑張って！」

「負けるんじゃないぞー!!」

大声を張り上げるカグヤ達に気づいたのか、レイジは振り向き彼女達に向かって手を振った。

瞬間、カグヤ達の周りにいる女性達から黄色い声が。

どうやら自分に向かってレイジが手を振ったと勘違いしたようだ。

それを見て、カグヤの顔が不機嫌そうに歪み、シロナも僅かに眉を潜める。

(うへえ……レイジの奴、自分の知らない間に地雷を踏んでやがる……)

彼は何も悪くない、だというのにどんどん立場が悪くなっていくのはいかなものか。

『そして、カントー最強のトレーナーにして、史上最高のドラゴン使いと呼ばれる、チャンピオンワタルの登場です!!』

「————」

歓声が、実況のその言葉でレイジの耳から消えた。

チャンピオンワタル——彼の登場により、レイジのあらゆる箇所から音という音が消え失せた。

——対峙する両者

ワタルはいつかのような穏やかな笑みを浮かべ、口を開いた。

「よく来たね、レイジ君」

「……ワタルさん」

「君の実力ならいつかここに来るとは思っていたけど……まさか今回の大会でボクと戦えるほどに成長するなんて、正直驚いたよ」

「……僕もです」

「はははっ、相変わらずなんだね君は。」

でも……そんな君だからこそ、この場所で戦いたいと思ったんだ」

「えっ……?」

「あのシロナ君が気に入ったトレーナー、そしてボクも……君の事が凄く気に入ってる。」

君の実力は、既にボクと変わらない高みへと登り詰めてる。

ポケモンに対する信頼と愛情、そしてどんな時でも自分を見失わない強い心。

それを愚直なまでに育ててきたから、君は今ここにいる」

「そんな……頑張ったのは僕じゃなくて」

「ポケモン達が、かい？確かに君のポケモン達の努力の賜物かもしれない。けれどポケモン達が頑張ったのは、君があの子達のトレーナーだからなんだよ?」

「……………」

「……さあ、そろそろお喋りはやめにしよう。

この時間も凄く魅力的ではあるけど、やはりボクは君と戦いたくてここにいるんだ!」

「——はい」

互いに、一体目のボールを手取る。

「出てくるんだ、ボーマンダ!!」

「ヒカリ、お願い!!」

「ピッカッ!!」

フィールドに出るヒカリとボーマンダ。

凄まじいオーラと迫力のボーマンダに、ヒカリはおもわず後退る。

「最初はボーマンダか……」

「……あのボーマンダ、おれのボーマンダよりも強いな」

「ええっ!? ロストさんのよりも……?」

冗談ではない、ロストのボーマンダもかなりの強さだというのに、ワタルのボーマンダはそれ以上だというのか……。

「どんな相手でも、レイジは負けないよ」

「今は彼を信じればいいだけ……」

「先攻はレイジ選手からとなります!!」

「…………ふう」

小さく、息を吐く。

……勝てるとは思っていない。

けれど精一杯戦う、それだけを考えて戦おう。

(いくよ、みんな)

心の中で、信じる仲間達にそう呼びかけ。

「——試合、開始!!」

「ヒカリ、10まんボルトだ!!」

審判の声と同時に、レイジは指示を告げた——
放たれる10まんボルト。

それは迷う事なくボーマンダへと向かい——見事命中する。

——だが、それだけ

「————っ」

ヒカリの10まんボルトは確かに命中した。

しかし、それでボーマンダに与えられたダメージは……無い。

「レイジ君、小手調べのような攻撃ではボクのポケモンにはダメージを与えられないよ？」

「……………」

ボーマンダは攻撃を仕掛けてこない。

……試しているのだ、ヒカリがどこまで通用するのかを。

「……………そうですね、確かにワタルさんの言う通りみたいです」

ならば、敢えてその誘いに乗ってやろう。

ギアはトップに、ブレーキなど取り払って全力で走り続ける。

「ヒカリ、アイアンテール!!」

「ボーマンダ、ドラゴンダイブ!!」

飛び上がり、上空からアイアンテールを放つヒカリに、ボーマンダは真っ向からドラゴンダイブで吹き飛ばす。

「10まんボルト!!」

「ドラゴンクロー!!」

空中に投げ出されながらも、特大の10まんボルトを放つヒカリ。

先程とは違うパワーに、さすがのボーマンダもダメージを受けたのか、苦しい声上げるものの。

「ピカツ!？」

10まんボルトを受けながらも、ドラゴンクロードでヒカリを地面へと叩きつけた――！

「ヒカリ!!」

「ピッ…カ……」

立ち上がるものの、かなりのダメージなのか苦しそうだ。

「ボーマンダ、ギガインパクト!!」

そんなヒカリにトドメの一撃を放つため、空中からギガインパクトで迫るボーマンダ。

そのパワーは恐ろしいまでに凄まじく、デュアルボルテッカーでなければ対処できない。

「ヒカリ、ギガインパクトの右端にアイアンテールだ!!」

しかしデュアルボルテッカーにするには、準備が足りない。

飛び上がり、ボーマンダではなくギガインパクトにアイアンテールを叩き込むヒカリ。

しかし吹き飛ばされ、再び地面に叩きつけられる。

（なる程、ギガインパクトを真っ向から防げないから、軸を逸らす為にアイアンテールを……）

悪くない手ではあるが、それでも軸を外しただけでヒカリには大きなダメージとなった。

ドラゴンクローにギガインパクトを受けたのだ、ピカチュウの防御力ではここまで――

「……ピ、カ……」

「何―――!？」

ここまでだ、ワタルはそう思っていた。

しかし、ヒカリは立ち上がりまだ消えぬ闘志を瞳に宿しボーマンダを睨んでいる。

（驚いた……不屈の闘志は、ここまでの事をやってのけるのか）

見事だ、そうとしか言いようがないものの、ヒカリは気力で立っているに過ぎない。

あと一撃、それだけで戦闘不能になるだろう。

「――ヒカリ、自分にフルパワーのかみなり!!」

（っ、来るか―――!）

デュアルボルテッカー、それも全力の。しかしそれは当然だ、ヒカリがボーマンダに勝つにはこの攻撃しかない。

けれど、如何にデュアルボルテッカーでも、ボーマンダのパワーには勝てないだろう。

「ボーマンダ、りゅうせいぐん!!」

「ヒカリ、デュアルボルテッカー!!」

空から落ちてくるりゅうせいぐんを、デュアルボルテッカーのスピードで回避しながら、ボーマンダとの距離を詰めていくヒカリ。

「無駄だよレイジ君、フルパワーのギガインパクト!!」

先程よりも更に強力なギガインパクトが、ヒカリに向かっていく。

いくらデュアルボルテッカーでも、これには勝つ事はできない。

——そう、ワタルの予想は見事当たっている

当たっている、が……。

「ヒカリ、回避だ!!」

「なっ——」

ワタルの声と、ヒカリがボーマンダの攻撃を回避するのは同時だった。

デュアルボルテッカーは攻撃ではなく、ボーマンダの攻撃を回避する為に使われたのだ。

「ライトニング!!」

すぐさま方向転換し、ギガインパクトの反動で動けないボーマンダに、渾身のライトニングを叩き込んでいく。

一撃、二撃、三撃、四撃、五撃――!!

素早く、それでいて重い一撃を既に五回。

「これで終わりだ、ボルテッカー・アイアンテール!!」

ぐらつくボーマンダの身体に、必殺のボルテッカー・アイアンテール!!

ライトニングとの連続攻撃により、壁にめり込むボーマンダ。

しかし……。

「ピ、カ……」

それが最後の力だったのか、ヒカリはそのまま前に倒れ込んでしまった。

そして、ボーマンダも。

「ピカチュウ、ボーマンダ共に戦闘不能!!」

『なんと、一体目でいきなり相討ち!!
序盤から凄まじいバトルになっております!!』

「……チャンピオンのポケモンを、倒しちまいがった」

相討ちとはいえ、確かに倒した。

その光景にカグヤ達は喜び、そして驚く。

「さすがねレイジくん……ワタル相手にも一歩も引いていないわ
しかしまだ勝負は始まったばかり、どちらがこの戦いの流れを掴む
かはわからない。」

「いいぞいいぞ、そうこなくっちゃ!!」

「ヒカリ、ありがとう。ゆっくり休んで」

「レイジ君、まだまだ序盤だけど凄く楽しいよボクは!!
さあ、次はどんなポケモンを出してくるんだい!？」

瞳を光らせるワタルは、まるで子供のようだ。

けれど、その瞳は見惚れるくらい澄んでいる。

「出てくるんだ、チルタリス!!」

「ティナ、お願い!!」

「——チルタリス」

「チルットの進化系ね……」

「あれ？ チルタリスもドラゴンポケモンなの？」

「そうじゃないけど、チルタリスはドラゴンタイプのポケモンだから、チャンピオンの手持ちに入ってるんじゃないの？」

「ふーん……それにしてもチルタリスって可愛いね、あの羽も綿あめみたいで美味しそう……」

「最初の感想はともかくとして、次の感想はおかしくねえか？」

「そうかなあ？ カイリは美味しそうに見えない？」

「俺はお前みたいに食い意地が張ってないから思わねえよ」

「むっ……」

（相手はチルタリス……氷タイプが弱点か）

〈お父様、アイシクルセイバーで戦います〉

指示を出す前に、氷の剣を両手に構えるティナ。

「お願い。他の技の指示は僕が出すから、剣戟はティナに任せるよ」

〈畏まりました〉

「氷タイプの剣か……本当に君のサーナイトは不思議な技を持って

いるね？」

「ええ。でも……威力はピカイチですよ!!」

ティナ、そのまま踏み込んで!!」

地を蹴り、チルタリスとの距離を詰めるティナ。

「チルタリス、はがねのつばさ!!」

上段から振るわれた右の剣を、はがねのつばさで強化された翼で受け止めるチルタリス。

すかさず左の剣を振るうが、それも強化された翼で弾かれてしまった。

「ふぶき!!」

「飛べ!!」

至近距離からのふぶきを羽ばたいて避け、ティナとの距離を広げ次なる攻撃を仕掛ける。

「ゴッドバード!!」

「っ、迎え撃って!!」

真っ向から、アイシクルセイバーで迎え撃つティナ。

両者が激突し——大爆発が起きた。

ティナは吹き飛ばされ、地面に剣を突き立て衝撃を殺す。

「ティナ、ダメージは？」

「大丈夫です。右の剣は砕けましたが……残る左の剣でしっかりとダメージを与えました」

そう告げるティナの両手には、柄の部分しか残されていない氷の剣が。

それを投げ捨て、すぐさま新しい剣を作り出す。

と、煙が晴れ中から傷ついたチルタリスが現れる。

ティナの言う通り、しっかりと弱点の一撃を叩き込んでくれたようだ。

――だが

「チルタリス、ねむる！」

「くっ……!!？」

目を閉じ、その場で寝入るチルタリス。

それと同時に、ねむるによる体力回復効果も現れ始めた。

「ティナ、すぐに叩くんだ!!！」

あれ以上ダメージを回復させるわけにはいかない、レイジはすぐさ

ま指示を出しティナもチルタリスの間合いを詰めるが。

「ねごとだ!!」

「なっ——」

ティナの剣が空を切る。

そして、完全に隙を見せた彼女に向かって、眠ったままのチルタリスからギガインパクトが発動された——!

へが、っ——!?!>

まともに受け、ボールのように地面をバウンドしながら壁に叩きつけられるティナ。

「ティナ!!」

へが、は——だ、大丈夫です!!>

すぐさま立ち上がるものの、決してダメージは小さいものではない。

「迂闊だよレイジ君、君だってねむるとねごとの特性くらい覚えて
いるだろう?」

そう告げるワタルのすぐ前には、既にダメージを完全に回復させた
チルタリスが……。

「な、に——!?!」

——起きている

ねむるは、体力回復の効果がある代わりにねむり状態になってしま
うという欠点がある。

だというのに、何故チルタリスはこうも早くねむりから醒めて――

「――カゴのみ」

「そうさ。チルタリスにカゴのみを持たせておいたんだ」

「くっ……」

「さあ、まだまだこれからだよレイジ君!!」

第80話 最強のドラゴン使い〜レイジVSワタル!!〜（前書き）

遂に始まったチャンピオンワタルとのフルバトル。

一体目は互いに相討ちで失い、続いてはティナとチルタリスのバトル。

しかし、流れは少しずつワタルへと傾いていた……。

第80話 最強のドラゴン使い〜レイジVSワタル!!〜

「――ティナ、まだ戦える？」

〈……ダメージはありますが、大丈夫です〉

「よし、ならこのまま戦うよ」

〈はい〉

「いいぞレイジ君、そうこなくっちゃ面白くないからね!!」

「ティナ、マジカルリーフ!!」

「……………」

放たれるマジカルリーフを、チルタリスは羽を使って防御する。

ひこうタイプを持つチルタリスに、草タイプのマジカルリーフなどあまり意味はない。

それに、ワタルほどのポケモンとなると、ダメージはゼロだ。

「続けてきあいだま！」

（……レイジ君、何を考えているんだ……？）

きあいだまはかくとうタイプ、同じくチルタリスには効果は今ひとつ……どころか、ゼロだ。

「チルタリス、りゅうのはどうだ!!」

相手の意図は不明だが、そろそろこちらから攻撃を仕掛ける。

「今だティナ、りゅうのはどうにサイコキネシス!!」

「なっ——!?」

放たれたりゅうのはどうがティナの真上に移動し、そのままチルタリスに向かっていく。

技を出した直後で、チルタリスは動けない。

そして、そのままりゅうのはどうを受けたチルタリスは地面へと落ちてしまった。

（っ、レイジ君はこちらが攻撃するのを誘っていたのか……!!）

わざと効果が今ひとつの技を放っていたのもその為だ、ダメージがゼロなら避ける必要などなくその代わりに位置が固定される。

おまけに、ドラゴンタイプの技は同じくドラゴンタイプのポケモンには効果は抜群だ。

「ティナ、シャドーボール!!」

「チルタリス、飛べ!!」

けれどチルタリスとてまだ戦える、素早く起き上がりシャドーボー

ルを回避する。

――が

「背中にふぶき!!」

「なに――っ!？」

その時には既に、ティナはチルタリスの真上へとテレポートで移動を完了しており。

特大のふぶきが、チルタリスの背中に叩き込まれそのまま地面へと落ちていった。

無事に着地するティナ。

しかし、攻撃を受けたチルタリスは……。

「チルタリス戦闘不能!サーナイトの勝ち!!」

『レイジ選手、なんとチャンピオンに逆転してしまいました!!』

「すげえ、これで二体目だ!!」

（けれどまだワタルの力はこんなものじゃない……レイジくん、油断しないで……!!）

「……さすがだねレイジくん、けれど……いくら君のサーナイトでも、コイツに勝てるかな？」

――出てくるんだ、ガブリアス!!」

「————っ」

雄叫びが、振動となって空気を揺らす。

違う、チルタリスとは遥かにパワーが。

もちろんチルタリスとて強い、けれど……このガブリアスはいつかシロナと戦った時と同等かそれ以上——！！

〈……………〉

ティナもガブリアスのパワーを感じ取り、無言で佇む。

「いくぞレイジ君。ガブリアス、ドラゴンダイブ——！」

「っ、ティナ。ふぶきだ——！」

向かってくるガブリアスを、真っ向からふぶきを放ち迎え撃つティナ。

——しかし

〈な——〉

「————に——！」

ふぶきを、防御もなく真っ向から受けているというのに。

弱点である、氷タイプの技を受けているというのに。

ガブリアスは、ドラゴンダイブの威力を弱める事なくティナへと向かっていき……。

へが、ふう——!?!?<

まともに受け、空へと吹き飛ばされてしまう。

「ドラゴンテール!!」

更に、追い討ちを掛けるガブリアスの攻撃がティナを吹き飛ばした瞬間。

「え——」

ティナが、こちらは何もしていないのにボールの中に入り。

それと入れ替わるかのように、ソウルがボールから飛び出していった。

「これ、は——!?!?」

「ドラゴンテールを受けたポケモンは、強制的に交代されてしまうんだ。」

ガブリアス、かわらわりだ!!」

「っ、しまった——!」

ソウルはこのような強制的な交換によって、まだ自分に起こった出来事を理解し切れていない。

更に、レイジも対処が遅れ――

ガブリアスのかわらわりが、まともにソウルを地面へと叩きつけてしまった。

「ソウル!!」

『ドラゴンテールからかわらわりの見事なコンボがアブソルに大ダメージを与えました!! 効果は抜群だー!!』

身構えてもいない、しかも弱点である技をまともに受け、ソウルは動かない。

戦闘不能か、誰もが――レイジですらそう思ったものの。

「っ、ソウル!!」

「…………へえ」

『な、なんとアブソル、ガブリアスの強烈な一撃を受けながらも、立ち上がりましたー!!』

「けど、もうソウルは保たねえぞ…………!!」

「あのガブリアス、強すぎるよ…………」

「……………」

無意識のうちに、シロナは拳を握りしめる。

あのガブリアスは強い、自分のガブリアスとも決して引けはとらないほどに。

しかもティナ、そしてソウルもガブリアスによって大ダメージを受けてしまった、これで流れは完全にワタルのものになってしまっただろう。

「ソウル、戻って」

『レイジ選手、たまらずアブソルをボールに戻してしまいました！』

「……ごめんねティナ、そしてソウル。

僕がふがないばかりに……君達にいらない怪我を負わせてしまった」

ギリと、齒を鳴らす。

謝っても無意味だ、けれど謝罪せずにはいられなかった。

（そして……こんなに早く君に頼る事になってしまった事も、謝らしてほしい……）

あるボールを取り出す。

手のひらから伝わる凄まじいオーラ、今にもボールの外から溢れ出してきそうだ。

『さあレイジ選手、続いてのポケモンは何を繰り出すのか……』

「ルギア、お願い!!」

「————っ」

ガブリアスに負けぬほどの強き雄叫びが、スタジアムを揺らした。

『ここでレイジ選手、ルギアを繰り出してきました!!』

「ルギア……なるほど、さすが幻のポケモンと呼ばれるだけはある……」

「……………」

「……ルギア？」

しっかりと地面に立つルギアだが、なんだかいつもと様子が違う。

何も言わず、何も語らずに、ただ黙って戦うべき相手を見据えていた。

「——マスター、今回ばかりは余も無駄口は叩かぬ。

マスターに勝利をもたらすために、ただ戦いだけに集中するぞ」

「……………」

いつもの彼女とは違う、重くそれでいて優しげな声。

まるで、初めて会った時の彼女を見ているようだ。

「――いつもの君も、いいと思うけどね」

「ふん。そんな事は余にもわかっておる。

だが……余とてプライドがある、あれだけの大口を叩いた以上……必ず相手は倒す。いや……倒さねばならない!!」

「面白い。ならやってみせてくれ!!」

ガブリアス、ドラゴンダイブ!!」

「ルギア、アイアンヘッドだ!!」

再びドラゴンダイブで向かってくるガブリアスに、ルギアは真っ向からアイアンヘッドでぶつかり合った。

すると、ガブリアスが単純な力比べで敗れ地面に叩きつけられる。

「ハイドロポンプ!!」

「げきりんだ!!」

迫り来るハイドロポンプを、げきりんで迎え撃つ。

「ぬっ――!!?」

さすがにパワーでは勝ったのか、ハイドロポンプを弾きガブリアスはルギア目掛けてその一撃を。

「はがねのつばさ!!」

しかし、げきりんがルギアを捉える前に、はがねのつばさにより阻

止される。

それでも、ガブリアスの攻撃は止まらない。

ルギアも両の翼を用いてガブリアスの攻撃を防ぐが、長く保たないのはあきらかだった。

「ルギア、そのままガブリアスから離れて!!
向かってきたら回避に専念!!」

「なにっ!？」

自身の主人の指示におもわず聞き返そうとしてしまうが、すぐさま従いガブリアスから離れる。

案の定追ってきたガブリアスの攻撃を、ただひたすら避けていく。

「マスター、反撃はせぬのか!？」

「いいから、まだ攻撃をする時じゃない!!」

「っ、ええい……! 余はこのようなまどろっこしい事は嫌いだ!
」

とは言いつつも、ガブリアスの攻撃にはしっかりと回避行動を続けていくルギア。

しかし、それも近い内に限界が来るだろう、ルギアの歪んだ表情を見ればそれがわかる。

だがそれでも、レイジは反撃の指示を出さない。

「マスター、そろそろ限界だぞ!!」

「……………」

「マスター!!」

「……っ、今だルギア、飛んで!!」

「く、ちい——!!」

間一髪、掠りはしたもののただの一撃も攻撃を受けないまま、ルギアはガブリアスとの距離をとる。

当然、ガブリアスは追おうとするのだが……。

「しまった!?!」

「むっ…………?」

なにやら、ガブリアスの様子がおかしい。

足元はおぼつかず、フラフラと危なっかしくまるであれば——

「ルギア、アクアテールだ!!」

「う、うむ!!」

よくわからないが、千載一遇のチャンスというのはわかった。

降下しながら、隙だらけのガブリアス目掛け、渾身のアクアテールを打ち放つ!!

防御もせず、地面を削りながら吹き飛んでいくガブリアス。

「エアロブラスト!!」

「これで終いだ。吹き飛ばガブリアス!!」

追いつちとなる特大のエアロブラスト。

もはや竜巻に近いそれはガブリアスを包み、風の摩擦と衝撃を与え続けていく。

「……どうなっているのだ、これは」

「げきりんの副作用かな……威力も高くて隙も少ない技だけど、代わりに使い続けるとこんらん状態になってしまふんだ」

「なる程……だからマスターは反撃せずに回避しろと……。だが、そうならそうと言ってくれてもよいではないか」

「そんな事を言ってる暇はなかったんだ、それより……まだ勝負はついてないよルギア」

「たわけ、あれだけの攻撃を無防備に受けてしまえば、如何にガブリアスといえども……」

「――ルギア、君はわかってないよ」

ガブリアスは、かなりの力を秘めたドラゴンタイプのポケモン達の中でも、トップクラスの強さだ。

それに――トレーナーがチャンピオンであるワタルならば。

「……………むう」

「ほら、ね？」

「――訂正だマスター、余が浅はかであった」

そう言い放ち、ルギアは再び臨戦態勢に。

――煙が晴れる

アクアテールとエアロブラスト、どちらも必殺の力で放った。

相手はまともに受けた、自分でも文句なしの攻撃だったと言える。

だが、それでも……。

『ガブリアス、立ち上がりましたー!!』

ワタルのガブリアスを打倒できるまでには、至らなかったようだ。

「まったく……どれだけ頑丈なんだあれは」

「けど効いてないわけじゃない、後少しだ」

レイジの言う通り、こんらん状態ではなくなったものの、ガブリアスの身体は大きくぐらついている。

「ガブリアス、戻るんだ」

「……………」

「戻すか。だが……誰が来ようとも余は負けぬ」

「それはどうかな？ 出てくるんだ、ギャラドス!!」

『チャンピオンワタル、続いてのポケモンはギャラドスだ!!』

（ギャラドス、か……）

本来ならばヒカリなどを投入したいが、あいにくとそれは叶わない。

「ルギア、このまま戦うよ!!」

「わかった。指示は任せるぞマスター!!」

「シャドーボール!!」

「ギャラドス、ストーンエッジ!!」

迫るシャドーボールを、ストーンエッジで破壊しながら、ルギアに向かっていくギャラドス。

「ルギア、アイアンヘッドだ!!」

「ギャラドス、こちらもアイアンヘッド!!」

ズドンッ、という重い音を響かせぶつかり合うルギアとギャラドス。

「……ぐ、あ……」

「なに——!？」

押し負けたのは——ルギアの方。

「こおりのキバ!!」

「避けるんだ!!」

指示を出すのが、アイアンヘッドの攻撃によりルギアは怯み……そのままこおりのキバをその身に受けてしまう。

「くっ、おのれ……!」

「ギャラドス、10まんボルトだ!!」

「っ、ルギア!!」

「ぐああああっ!!」

まともに受け、電撃に包まれたルギアの絶叫が響き渡る。

「アクアテール!!」

そして更に追い討ちとなるアクアテールが、ルギアを壁まで吹き飛

ばし叩きつけた。

「う、く……」

「ギャラドス、りゅうのまい!!」

「くっ……!!」

『おーっと、チャンピオンその隙にギャラドスの高い攻撃力を更に上げてしまった!!』

ルギアもかなりのダメージのようだが、はたしてどうするのか!』

「やべえぞ、完全にチャンピオンが流れを掴んでやがる……!!」

「それだけの強さを、持っているという事だな」

「……ルギア、一度戻すよ」

「待てマスター、余はまだ……」

「君じゃ、あのギャラドスには不利だ」

「……………」

少し強めの口調でルギアを黙らせ、ボールに戻すレイジ。

……まだ、ルギアを失うわけにはいかないのだ。

何故ならワタルは、まだあのポケモンを出してはいない。

どうにか引きずり出すまでは、ルギアの力を温存させなくては。

「ソウル、お願い!!」

『ここでレイジ選手アブソルにチェンジだ、しかしかなり辛そうな表情を浮かべているようだが……やはり先程の攻撃が効いてしまっているのか』

「まだソウルは戦える……完全にダウンするまでは、絶対に負けは認めません!!」

「その意気だよレイジ君、アブソルとのコンビネーションを見せてくれ!」

「ソウル、ストーンエッジだ!!」

十数個の石がソウルの周りに現れ、一斉にギャラドス目掛けて撃ち放たれる。

「ギャラドス、こちらもストーンエッジ!!」

それを、同じ技で全て粉碎するギャラドス。

それだけではない、ソウルの攻撃を全て破壊するだけでは飽きたらず、そのまま彼女へと向かっていってしまおう。

「かわして10まんボルト!!」

「りゅうのいかり!!」

ストーンエッジを回避すると同時に、10まんボルトを放つソウル。しかし、ギャラドスが放ったりゅうのいかりによって相殺され更に「こおりのキバ!!」

素早く間合いを詰め、ソウルに必殺の牙を突き立てる――！

「ソウル、跳んで!!」

しかし、ギャラドスの攻撃を受ける瞬間、ソウルはその場で跳躍しギャラドスの背に。

「今だソウル、フルパワーで10まんボルト!!」

そして、弱点である電撃がギャラドスを包み込んだ。

『ギャラドスに10まんボルトが命中――!! 効果は抜群だ!!』

けれど、ギャラドスはまだ倒れない。

「10まんボルト!!」

振り落とされないようにしっかりとしがみつकिながら、再び10まんボルトを放つ。

一撃で倒れないのなら、倒れるまで放つだけ。

「ギャラドス、振り落とすんだ!!」

対するギャラドスも、これ以上ダメージを受けるわけにはいかない
ので、必死にソウルを引き剥がそうと暴れまわる。

「10まんボルト!!」

『アブソル、ギャラドスの弱点である10まんボルトを連発して
きます!!　これはもはやどちらが先に倒れるかの勝負です!!』

「くっ……!!」

「ソウル、今度はかみなりだっ!!!!」

雄叫びを上げ、先程よりも更に強力な電撃を浴びせるソウル。

ギャラドスも、既に限界のはずだ。

あれだけの電撃を浴びているのだから、あともう少しで……。

「っ、ソウル!!」

あともう少しで勝てる、それは間違いではない。

しかし――肝心のソウルが、既に限界を迎えては……。

「ギャラドス、アクアテールで吹き飛ばせ!!」

力が抜けたソウルを無理矢理引き剥がし、アクアテールで壁に叩き
つけるギャラドス。

——それで終わり

限界を超えたソウルは、そこで力尽きてしまった。

「アブソル戦闘不能！　ギャラドスの勝ち！！」

『強い！　さすがチャンピオン強すぎるー！！』

「くそっ……！」

ダンッ、と拳を叩きつけるカイリ。

「あともう少しだったのに……」

「これで数の上では互角……だけど、流れは完全にチャンピオンのものね」

「……レイジ」

ギュッと手を握りしめ、戦いを観戦するカグヤ。

そんな彼女の手を、シロナは優しく握りしめてあげた。

『さあレイジ選手、次はどのポケモンを繰り出すのか！？』

「リオン、お願い！！」

「……………？」

『なんと、ここでリザードンを繰り出してきました！！』

ギャラドスは水タイプ、炎タイプのリオンでは不利だ。

そんな事はレイジとてわかっているだろう、ならば何故……？

「リオン、ブースターレベル3!!」

「――っ」

リオンの炎が、凄まじい勢いで大きくなっていく。

「ギャラドス、ハイドロポンプ!!」

「フレアドライブ!!」

その炎を這わせ、真っ向からハイドロポンプに向かっていくリオン。

そして――ハイドロポンプの水をフレアドライブで弾き飛ばしていく。

「何――!?!」

「リオン、そのまま行くんだ!!」

ギャラドスの技を完全に粉碎し、強化されたフレアドライブでギャラドスを吹き飛ばす。

苦しげな悲鳴を上げ、ギャラドスの身体は地響きを響かせながら地面に倒れ込んだ。

「ギャラドス戦闘不能！リザードンの勝ち！！」

『レイジ選手の逆襲！！リザードンの凄まじい炎が、ギャラドスを打ち砕きましたー！！』

「もうオーバードライブを使いやがった……」

いくらなんでも、まだ早すぎる気がするが……。

「……流れをこちらのものにするためよ」

「流れを？」

「確かに数の上では僅かにレイジくんの方が有利よ。だけどそれ以外は全てワタルの方が勝ってる。

だからレイジくんは、危険を承知で大技を使ってギャラドスを一撃で仕留めたの」

気持ちというものは、どんなものにも重要な役割を担っている。

気持ちで負けてしまえば勝てる戦いも勝つ事はできない。

だからレイジは、こうしてギャラドスを簡単に撃破し、流れを自分のものにしようとしたのだ。

——尤も

これだけでは、まだワタルの心は揺らがない。

「凄いよレイジ君、追いついたと思ったら逆転されちゃったね！」

「……このまま、勝たせてもらいます」

「その意気だよ。だけどね……ボクだってまがりなりにもチャンピオンという立場だ。このまま負けるわけにはいかない！」

——出てくるんだ、リザードン——！！」

『チャンピオン、続いてはリザードンです！！　リザードン同士の戦い、はたして軍配はどちらに挙がるのか——！！』

「君のリザードンは確かに凄いパワーだ、けどスピードならボクのリザードンだって負けてない」

「なら、パワーで押し切るまでです——！！」

「よし、なら勝負だよ、レイジ君——！！」

第80話 最強のドラゴン使い〜レイジVSワタル!〜 (後書き)

ブースターレベル3により、ギャラドスを倒し流れを掴み始めるレイジ。

しかし、ワタルの繰り出したのは同じくリザードン。

はたして、レイジとリオンはワタルのリザードンに勝つ事はできるのか!?

第81話 頂点を目指して〜レイジVSワタル!〜(前書き)

ソウルまで戦闘不能に陥り、ワタルに勢いを奪われぬよう、大技を繰り出し見事ギャラドスを撃破するリオン。

続いてワタルが繰り出してきたのは――同じくリザードン。

果たして、レイジとリオンはこのままワタルに勝利する事はできるのだろうか……!?

第81話 頂点を目指して～レイジVSワタル!!～

「リオン、かえんほうしゃだ!!」

「リザードン、だいまんじ!!」

同時に放つ炎。

それはぶつかり合い、綺麗に相殺される。

（やはりパワーではレイジ君のリザードンの方が上か……）

威力で勝るだいまんじがかえんほうしゃと互角なのだ、ワタルの思った通りパワーでは勝てない。

「リザードン、飛べ！」

「リオン、追って!!」

『どうやら空中戦になる模様です!!』

「リオン、だいまんじ!!」

「かわしてシャドークロー!!」

放たれただいまんじを回避し、同時に漆黒の爪をリオン目掛けて振り下ろすリザードン。

「ほのおのパンチ!!」

それを炎を這わせた拳で受け止め、左の拳でリザードンの顔面を殴り飛ばした。

しかし、同時にリオンも苦しげな表情を浮かべ腹部を押さえる。

殴り飛ばした瞬間、ブレイズキックがリオンに命中したようだ。

「シャドークロー!!」

「かわしてはがねのつばさ!!」

迫るシャドークローを避け、反撃のはがねのつばさを叩き込もうとするリオン。

しかし、顔面に衝撃が走りせつかくのチャンス逃してしまう。

「尻尾……!!?」

なんてことはない、ただリザードンがリオンの顔面に尻尾を当てただけ。

ただそれだけだが――隙を作るのに充分過ぎた。

「かえんほうしゃ!!」

至近距離からのかえんほうしゃを、リオンは腕を交差させ耐える。

――けれど、それは間違いだ

炎に紛れ、リザードンの巨体がリオンへ体当たりを仕掛ける。

怯むリオンに、追い討ちとなるシャドークロー。

「今だリザードン、そのまま投げ飛ばせ!!」

素早く後ろに回り込み、リザードンはリオンの尻尾を掴みハンマー投げのように回転を加え――地面に向かって投げ飛ばした!!

「リオン、地面に向かってかえんほうしゃ!!」

顔をしかめながらも、身体を地面に向けかえんほうしゃを放つリオン。

それにより、投げ飛ばされた勢いを殺す事ができたが……。

「良い手だ。けどまだ甘いよ!!」

「なっ――」

ワタルの声に気づいた時には、既に遅かった。

いつの間にか再びリオンの背後まで接近していたリザードンが、もう一度尻尾を掴み力任せに振り上げる。

「リオン、ブラスト――」

「遅い、ちきゅうなげだ!!」

ブラストバーンを発動させる瞬間。

一瞬速く、リザードンがリオンの身体を地面へと叩きつける――！
その凄まじい威力により、彼の身体は地面に沈みクレーターができあがった。

『チャンピオンのリザードンの強烈な一撃がレイジ選手のリザードンを地面に沈めましたー！！』

これはかなりのダメージとなりましたが、はたしてどうなったのでしょうか！？』

(……こんなものだったのかい？)

確かに自分のリザードンの攻撃は、見事に命中した。

並のポケモンなら、あれで終わりだ。

けれど――あのリザードンは違う。

ならば、こんな程度で終わるはずが――

「……………やっぱり、ね」

嬉しそうに、口元に笑みを浮かべるワタル。

彼のリザードンも、心なしか笑っているようにも見える。

――クレーターの岩が吹き飛ぶ

そして、内部から現れたのは……傷だらけになりながらも、しっか

りと地に足をつけ立ち上がるリオンの姿。

『レイジ選手のリザードンが立ち上がりました！

な、なんという根性でしょうか！！ 正直もう無理かと思いましたが……素晴らしい！！』

（当然だよ。なにせあのリザードンはレイジ君のポケモンだからね）

「……リオン、大丈夫？」

——大丈夫じゃねえ、痛いし苦しいし限界に決まってるだろ。

「……………」

——けどよ、まだ戦う力は残ってるぜ。だからお前は安心して俺に指示をしてればいい。

「……そうこなくっちゃね」

——おいおい、そこは「もう戦わなくていい」って言う所じゃねえのかよ？

「けど、リオンはそんな言葉望んでないでしょ？

望んでいる言葉は……」「このまま戦うよ」だよね？」

——ちっ、人使い……いや、ポケモン使いの荒いご主人様だぜ。

憎まれ口を叩きながらも、リオンはレイジの方へ振り向き笑みを浮かべる。

「……ははっ」

——へっ。

(……こんな時でも、笑える余裕があるなんて流石だね……)

決して諦めたが故の笑いではない。

平常心を失わず、あるがままの自分達を維持している証拠だ。

当たり前の事のように、その実それを行うのは難しい。

それができるのは、彼等の心が強いから。

だからこそ、ワタルは全力で戦う事ができるのだ。

「リオン!!」

——任せろレイジ!!

気合い充分、先程よりも更に闘志を燃やすリオン。

だが、次にワタルが行った行動は、レイジにとって意外過ぎるものだった。

「リザードン、戻るんだ」

「え———?」

レイジは呆け、リオンもおもわず全身の動きを止めた。

「……レイジ君、やはりこうやって君の力を試しながら戦うのはボクの性には合わない。

——だから、ここからは本当の意味で本気を出すよ」

「———」

身体が、固まる。

ワタルが放った言葉の意味、それを理解するよりも早く。

彼は、この戦いを終わらせる為の力を、場に出した。

「出てくるんだ、カイリュー!!」

「———っ!？」

ビリビリと、身体に衝撃が走る。

違う、今までの相手とはなにもかもが。

ワタルのポケモン、カイリューが出てきた瞬間、レイジはすぐさまそう感じた。

違うのだ、あのカイリューは。

強さだけではない、その身に宿す威圧感も凄みも。

そして、それを操るワタルの空気も変わった。

恐ろしいまでのプレッシャー、先程まで感じた友好的な雰囲気など露ほども感じられない。

——本気になったのだ、彼は

本当の意味で、彼等を倒すためだけの戦いに切り替えた。

レイジの限界を知るために、ワタルは今真正銘のチャンピオントレーナーになったのだ。

——うおっ、すげえ……さっきまでとはパワーが段違いだ。

正直、身体が震えてくるぜ。

「……………」

冗談ではない、身体どころか心まで震えている。

これが本気になったチャンピオンのオーラ、最強のトレーナーに相応しい強大な存在。

普通の人間より遥かに第六感が働くレイジにとって、ワタルのオーラは戦意を奪うほどに凄まじいものだった。

心が、砕かれそうだ。

今すぐにでも逃げ出したいという衝動が、彼の中に生まれていく。

「カイリユー、ドラゴンダイブ!!」

「っ、リオン、フレアドライブ!!」

一瞬反応が遅れたものの、どうにか指示を告げるレイジ。

フレアドライブの炎が、ドラゴンダイブとぶつかり合う――!

しかし……カイリユーはあっさりとリオンのフレアドライブを破り、彼を壁際まで叩きつけた。

「――――」

「リザードン戦闘不能!カイリユーの勝ち!!」

審判の声が、どこか遠くから聞こえたような気がした。

……今、何が起きたのか理解できない。

何故、リオンのフレアドライブがこうも簡単に破れたのだ……?

「――トレーナーの不安は、そのままポケモンの実力を妨げる要因に繋がる」

「えっ……?」

「君はあきらかにボクを恐がっている、そんな状態ではポケモン達も君が心配になり実力を出し切れない。

トレーナーは指示だけをしている存在だと思っているなら、君は

まだ半人前だ。

ポケモン達が戦えるのは、後ろに支えてくれるトレーナーがいるとわかっているからだ、自分の心を平静に保ちその上で指示するから、ポケモン達はその実力を十二分に発揮できる。

さっきまで君は一体どこに行った？ 君が何を感じ取ったかは知らないが、自分を見失ったから君のリザードンはこうもあっさり敗北したのだとわからないのか？」

「……………」

ワタルの言葉は、いちいちもつともなものだ。

——そう、今自分はワタルを恐がっている

なまじ相手のオーラが見えるが故に、先程までの自分を見失っているのだ。

そんな状態では、リオンも気になってバトルどころではない。

そんな事、言われなくたってわかっていたはずなのにどうして……。

「——適わないと思っているなら、尻尾を巻いて逃げるかい？」

「——っ」

拳を強く握りしめる。

けれど、まだ恐怖心が邪魔をして震えてしまう。

（く、そ……震えるな、震えるな——！）

「……………」

歯を食いしばり、必死で己の中に芽生えた恐怖心と戦うレイジを、ワタルは静かに待つ。

（ここで負けたら、君はそこまで……そんな事にはならないでくれ）『レイジ選手どうしたのか、次のポケモンを出そうとしません』

「くっ……う……」

「……………」

「レイジ選手、早く次のポケモンを出しなさい」

「……………」

審判の声にも、レイジは答えられない。

「レイジ選手、早く出さないと失格に——」

「待つんだ!!」

ワタルの怒声が、スタジアムに響く。

「し、しかし……」

「待つんだ」

それだけを告げ、ワタルはただ待ち続ける。

（震えるな……震えるんじゃない……！）

必死で自分にそう言い聞かせるが、それでも震えは止まらない。
と。

「——っ」

腰のボールが勝手に開き、中からティナが飛び出してきた。

「……………ティナ」

〈……………〉

ティナは何も言わず、黙ってレイジを見つめている。

まるで、レイジが己の恐怖心に打ち勝つのを待っているかのように。

「——」

ギリ、と歯を食いしばる。

両の手はとうに握り拳となり、足にも力を入れる。

そして——

「——うあああああああああああつ！！！！」

声が枯れるくらいの大声で、叫び声を上げた。

「……………」

その声は、ワタルだけでなく観客達も声を失った。

「……………ティナ、もう大丈夫」

〈……………〉

「ありがとう、それとごめん」

〈……………謝るなら、リオンに謝ってくださいね。

それに、恐怖で自分を見失ってしまうのは仕方ありません。

けれど、それを乗り越えれば……………また新しい力を得る事ができますよ〉

「……………うん」

——震えは、もうない

「ワタルさん、お待たせしました」

「……………尻尾を巻いて逃げないのかい？」

「逃げません。まだ……………逃げるわけにはいきませんから」

この戦いは、自分だけの戦いではない。

ティナ、ヒカリ、アクセル、リオン、ソウル、そしてルギア。

全員の戦いなのだ、皆の主人である自分が逃げる事など許されない。

「……そうこなくちゃね、ボクも本気を出す甲斐がある」

「……………」

まだ、ワタルを見て恐怖心が沸き上がりそうになるのを止められない。

しかし、自分は1人で戦っているわけではないのだ。

ならば——皆を信じて立ち向かえばいいだけだ。

「——さあ、いくよレイジ君!!」

「はい！ ティナ、お願い!!」

〈お任せください!!〉

瞬時にアイシクルセイバーを両手に出し、カイリ्यूへと走るティナ。

「ドラゴンクロー!!」

〈は——っ!!〉

幾重にもぶつかり合う竜の爪と氷の剣。

衝撃はレイジとワタルの身体を揺らし、その余波は観客席まで及ぶ。

「――っ」

碎かれる右の剣。

それには構わず、左の剣で突きを放つ。

受け止められ、上段からドラゴンクロウが。

へっ、く――！

間一髪、もう一度アイシクルセイバーを右手から作り出し、受け止める。

だが、やはりパワーの差か、片膝をつき必死に攻撃を行き届かないようにするのに精一杯だ。

――カイリユウの口から凄まじいエネルギーが溢れ始める

「ティナ、ふぶき!!」

「カイリユウ、はかいこうせん!!」

至近距離からの大技のぶつかり合い。

爆発が起き、ティナとカイリユウは互いに吹き飛ばされる。

「りゅうせいぐん!!」

上空に撃ち放たれる強大なエネルギー体。

それが分裂し――都合三十近いりゅうせいぐんがティナに襲いかかる。

「ティナ、サイコキネシス!!」

それを、ティナはサイコキネシスですべて止めてしまった――!

「なに――!!?」

「そのままカイリユーにぶつけるんだ!!」

サイコキネシスにより操られたりゅうせいぐんが、すべてカイリユーに降り注いでいく。

しかしカイリユーとて負けていない、迫るりゅうせいぐんすべてを撃ち落とす為に、再び特大のはかいこうせんを放った。

その隙に、間合いを詰め上段から双剣を振り下ろすティナ。

はかいこうせんの反動により、カイリユーは動けない。

渾身の一撃は、見事カイリユーを吹き飛ばしダメージを与えた。

だがまだ終わらない、更に踏み込み一閃。

へ――っ

手応えは——無い。

追い討ちを掛けるようなティナの一撃はしかし、カイリューに受け止められてしまう。

「負けるなティナ、10まんボルト!!」

鏑迫り合いになりながらも、カイリューに電撃を浴びせていくティナ。

少しずつ、けれど確実にダメージは与えている。

「いいぞレイジ君、カイリュー、こちらはかみなりだ!!」

へうつ、あ——!!

電撃を受けながらも、ティナの剣に力は失われない。

そして——

へこ、のお——!!

力任せに押し出し、後ろに跳躍しながら双剣をカイリュー目掛けて投げつける。

それをドラゴンクロードで弾くカイリューだが——既にティナは次の一手を決めていた。

「でんじほうだ!!」

胸元で作られたでんじろうが、カイリユーへと向かう。

「カイリユー、はかいこうせん!!」

それを、はかいこうせんで破壊するカイリユー。

でんじろうが破壊されると同時に着地し、地を蹴り一息で間合いを詰める。

「れいとうパンチ!!」

弱点である氷の拳を叩き込むティナ。

避けられない、間合いもタイミングも文句のつけようがないほどだ。そして、レイジの思った通りティナの攻撃はカイリユーへとヒットする。

——しかし

へな———

ティナの攻撃は、確かにカイリユーへと命中した。

弱点であるが故に、与えられたダメージも絶大だ。

だと、いうのに……。

攻撃を受けたカイリユーは、吹き飛ばされずにその場に留まり。

ティナの腕を、握りしめていた。

「っ、初めからこれが狙いか……!!」

「そうだよ。来るとわかっているなら、たとえどんな一撃でも一度は耐えきれものさ!!」

「アイシクルセイバー!」

だが対応は速い、すぐさま左手にアイシクルセイバーを作り上げ、振り下ろす。

対応は速い、が……。

〈きゃ——!!〉

振り下ろされる一瞬前に、ティナの身体はカイリユーによって宙へと持ち上げられていた。

虚しく空を切る剣。

それにより、ティナに絶対的な隙が生まれ――

「カイリユー、りゅうのはどう!!」

至近距離からのりゅうのはどうが、ティナの腹部に命中し彼女の身体が宙に弾き飛ばされた――

第81話 頂点を目指して〜レイジVSワタル!〜(後書き)

決定的な一撃が、ティナを捉える。

ティナの運命は、そしてレイジとワタルの勝敗は!?

第82話 災厄の烈空の覇者くチャンピオンリーグの終わりく（前書き）

死闘を続けるティナとカイリユー。

しかし、カイリユーの攻撃がティナへと命中してしまう。

はたして、ティナはそのまま倒れてしまうのであろうか……！？

第82話 災厄の烈空の覇者くチャンピオンリーグの終わりく

――地面に倒れるティナ

剣は消え、身体はピクリとも動かない。

「ティナ!!」

「……よくやったよ君のサーナイトは、ガブリアスとの戦いでダメージがありながら、ここまでカイリユーにダメージを与えてくるとは思わなかった」

肩で大きく息をしながらも、一步一步確実にティナへと向かっていくカイリユー。

そこでようやくティナも動きを見せ、起き上がろうとするが……。

顔を上げた時には既に、カイリユーが自分を見下ろしていた。

へくっ……くっ

力が入らない。

先程の一撃で、ティナのサイコパワーは尽きてしまった、もう戦う事はできない。

それでも、彼女はまだ諦めてはいなかった。

必死で自分に声を掛ける彼が居る限り、自分から諦めるという道は

選べなかった。

「頑張ったけど、ここまでだ!!」

「——っっっ!!」

歯を食いしばり、今自分が出せる限りの全力で跳躍する。

結果——カイリユーの攻撃は空を切った。

「なっ——」

「はぁ…はぁ…はぁ…」

最後の最後で、悪あがきともとれるテレポートでの回避。

『なんというタフネス、もはや絶望的かとも思われましたが、サードナイトはまだ諦めてはいらないようです!!』

「——ティナ、もう一度アイシクルセイバーだ!」

「おいおい、レイジはまだティナに戦わせるつもりかよ!?!」

既に彼女は限界を超えている、観客席から見てもわかるのだ、レイジとて気がついていないはず。

だというのに、彼はティナをボールを戻さずにまだ戦わせようとしているのは何故……。

「——ティナの気持ちを汲み取っているからよ」

「えっ……?」

「今ボールに入れられたら、自分はもう立てないとわかってる。
だから彼女は限界を超えても戦おうとしているの。レイジくんも
そんなティナの気持ちかわかるから、決して彼女を戻そうとはしな
い」

だって、そんな事をしたらティナの決意を踏みにじる事になる。

情けない自分の為に、彼女は戦ってくれている。

だから——レイジは決してティナをボールへ戻さない。

「頑張れティナ!!」

「カイリユー、全力で相手をするんだ!!」

——死闘は続く

……。

けれど、まだ誰も気づいていない。

遙か上空、生物が住めるような環境ではない天空から。

——ある脅威が、近づいている事に「ドラゴンクロー!!」

「アイシクルセイバー！」

踏み込み、幾重もの剣戟が響く度に両者から力が抜けていく。

ぶつかり合う衝撃が、身体中に響き確実にダメージになる中。

ティナもカイリユーも、半ば雄叫びのような声を上げ、戦い続けていた。

「もう、ティナもカイリユーも限界だ……!!」

傍目から見てもわかる、もう両者に余力など残されていない。

あるのは気力だけ、主人に勝利をもたらすという想いだけで戦っている。

故に、互いに一步も退かずに死闘を繰り広げていた。

「ティナ、頑張れ!!」

たまらずカグヤはそう叫ぶ。

聞こえるとは思えない、それでも——応援せずにはいられなかった。

だってそうだろう、あんなにも素晴らしい戦いを見せてくれて、どうして何もせずにいられるというのか。

へ——っ、はっ！

迫るドラゴンクローを弾き、渾身の一撃を叩き込む。

防御の構えをとるカイリユーだが、それより速くティナの剣が振り下ろされ、フィールドの端まで飛ばされた。

へし——！

更に踏み込み、横薙ぎの一撃。

しかし、それは弾かれ代わりにティナの肩口に衝撃が走る。

「っ、ぐ——！」

掠っただけだというのに、まるで大砲のような衝撃だ。

双剣を落としかけるが、すぐさま力を込め難を逃れる。

その間にも、カイリユーは次の一撃を繰り出していた。

「かみなりだ——！」

雷が、カイリユーの身体から放出される。

避けられる間合いではない、しかし。

「ライトニングセイバーだ!!」

氷の剣が消え、瞬時にティナの両手には違う剣が握られる。

それは鈍い光沢を見せる黄色い剣。

それを、ティナは防御するように自分の目の前で十字に構えると。

——かみなりが、吸い込まれるように双剣へと命中する

「なに——!?!」

「ティナ、今だ!!」

レイジの声を聞き、ティナはかみなりを吸収しプラズマを発する双剣を、カイリユーへと投げつける。

回転の込められたそれは、当たればただでは済まされないという事がわかる威力を秘めていた。

「避けるカイリユー!!」

受ける事はできない、だからワタルはカイリユーに回避の指示を告げる。

——間一髪

まさしく数瞬の差で、カイリユーは迫る雷の剣を回避した。

……それで、終わりだ。

ワタルとカイリユーは気づかない、ティナがまだ想像していた以上の動きが行える事に。

そして――気がついた時には。

「いけえええっ!!」

〈これで――〉

既に、カイリユーの眼前にはサイコセイバーを両手に持ち振り上げたティナの姿が。

「カイ――」

カイリユー、という言葉すら出てこない。

守るためには、時間が足りなかった。

「――最後です!!」

振り下ろされる双剣は、カイリユーの全身に甚大なダメージを与え。

「カイリユー戦闘不能!サーナイトの勝ち!!」

ワタル最強のポケモンは、ここで力尽きた――

『遂に、遂にチャンピオン最強のポケモンであるカイリユーが倒れた!!』

まったくもって、凄まじい戦いでした!!』

〈は、あ——う〉

剣を地面に突き立て、肩で大きく息をするティナ。

けれど、その瞳からはまだ闘志が消えていない。

〈ぐ……ま、だ……〉

まだ倒れていない、そう訴えるかのように彼女は再び立ち上がる。

『まだわかりません、この素晴らしい勝負の行方は、誰にも予測不可能です!!』

「——必ず勝つ。絶対に勝ちます!!」

〈そ、そうです……お父様の言う通り。勝つのは……わたくし達!!〉

気力だけで立っているというのに、ティナはまだ戦う事を諦めない。

彼等のそんな姿に、ワタルの身体が震えた。

素晴らしい、まったくもってその言葉しか浮かばなかった。

強い絆、何者にも負けぬ心が、人とポケモンをこうまで強くさせるものなのか。

しかし——それでもワタルは負けてなどやれない。

自分はチャンピオン、そして今は……ただのポケモントレーナー。

バトルをするなら、絶対に負けてなどやらない。

「レイジ君、勝つのはボクだよ!!」

「負けない! 絶対に負けるもんか!!」

「いいだろう。ならこれで決めてやる!!」

リザードンが入ったボールを手取るワタル。

――だが、しかし

この勝負は、誰もが予想せぬ事態へと変化した。

へ――っ!!!?

赤い瞳が、驚愕によって大きく開かれる。

それだけでなく、死闘の最中だというのに、ティナは空を見上げ始めた。

「ティナ、どうし――」

全身、が。

鋭い刃物で、幾重も貫かれる。

「——うあああつ!？」

おもわず叫び、その場で腰を抜かす。

「は、え——?」

無論、身体に刃物など刺さっていない。

気のせい、幻覚に過ぎないに決まっている。

だというのに——レイジの身体は震えていた。

それに立てない、信じられない事だが本当に腰が抜けてしまっていた。

(今の、は……)

ありえない、幻覚で済ませられないくらいの現実感があつた。

——何かが、来る

遙か上空から、災厄と呼べるべき存在がここにやってくる。

先程の幻覚は、その災厄が撒き散らす圧倒的な殺意を感じ取った証。

そして、おそらくティナもそれを感じ取ったからこそ、戦いも忘れ

空を見上げているのだ。

『？ なにやらレイジ選手とサーナイトの様子がおかしいようすが……？』

「レイジの奴、いきなり座り込んでどうしたんだ？」

「それに、叫び声を上げましたけど……」

「……………」

様子のおかしいレイジに、カグヤとシロナは同時に内側から湧き出る違和感を感じていた。

何かがおかしい、理由はわからないが……どこかが違うような気がした。

「おい」

そんな中で、ボールの中から低い声が響いた。

全員が視線を向けると、その先にはミュウツーが入ったボールが。

「――何かが近づいてきている、とてつもない力を秘めた何かが」

「なんだと……？」

訝しげな表情を浮かべるカイリ達、それだけミュウツーの言葉は理解に苦しむものだった。

しかし次の瞬間――彼が放った声に、カグヤ達は凍りつく。

「――逃げろ!!」

それは、観客全員に聞こえるくらいの、大きな声だった。

声というより、もはや雄叫びに近いくらいのもの。

逃げろ、その言葉の意味を誰もが理解できない。

当然だ、一体何に対して逃げろと言っているのか。

そもそも、何故逃げろなどという言葉がこんな所で放たれるというのか。

観客達は戸惑い、けれどカグヤ達は……。

レイジという少年を知っている彼女達は、その言葉がどれだけ必死なのか。

そして――想像もできない災厄が、すぐさま押し寄せるという事を、表していた……。

「早く、みんなここから逃げろんだ!!」

『は、あ、え……?』

「このままじゃ……このままじゃみんな………!!」

〈ダメ、もう間に合いません!!〉

悲鳴に似たようなティナの叫び。

——それが引き金になったかのように。

それは、空を切り裂いて現れた。

——空が、闇に包まれる

否、現れたのは——巨大なドラゴン。

全長は七メートルはあるだろうか、全身緑色の身体は凄まじいまでの殺気に満ちている。

そして、その正体は……決してありえぬ存在であった。

「——レックウザ」

ぽつりと、現れた災厄を見上げながら、レイジは呟く。

——レックウザ

ホウエン地方の伝わる神話の中に出てくる、幻のポケモン。

烈空の覇者と呼ばれるそれは、狂うほどの雄叫びを上げて、セキエイ高原に降臨した。

突然の登場に、その場にいた観客達は固まってしまう。

その中で——レックウザの危険を感じ取った少年だけは、動きを見せていた。

「カグヤ!!」

「——っ」

彼の声を聞き、ようやく目の前の光景を許容できたカグヤ。

すぐさまフィールドに顔を出すと、レイジは彼女に指示を出す。

「僕のカバンを早く投げて!!」

「う、うん!!」

まだ頭は混乱している、しかしカグヤはすぐさまレイジのカバンを手に取り、彼に投げ渡す。

瞬間——レックウザは信じられない行動に出る。

「ジグガアアッ!!」

形容できない叫び声を上げ、レックウザはその巨大な口を開く。

そして……その口から全てを呑み込むほど巨大なはいこうせんが
撃ち放たれた——！

それは全てを薙ぎ払い、容赦なく大地を砕いていく。

無論——スタジアムですら。

「うえわあっ!？」

「きゃあああっ!!!」

「こ、これは……!!」

何故、どうしてという疑問が頭を占める。

レックウザは人間の味方というわけではないが、特別人間の脅威に
なる事などなかった。

というより、レックウザは人間の世界に干渉した事などほとんどな
い。

それなのに、今のレックウザはただの破壊神、人間……否、生きと
し生ける者にとっては悪魔のような存在に成り下がっている。

「い、一体何がどうなってんだよ!!」

なんでレックウザがこんな所に……ていうか、どうして襲いかか
つてきてんだ!？」

「今はそんな事言ってる場合じゃないわ!! とにかくみんなを避
難させないと!!」

会場は当然ながらパニック状態、レックウザの攻撃によってあちこちに逃げまどっている。

このままでは、死者が出てもおかしくはない。

「待って、レックウザをこのままにしておくわけにはいかないわ！
！」

「けど、このままじゃ犠牲者が………！」

「なら、ヒメカとミカンさんとカイリはみんなを避難させて！！
私とシロナさんとロストさんでレックウザの相手をするよ！！」

「カグヤ……」

「急いで！！ 時間がない！！」

カグヤの迫力に圧され、全員が一斉に己の役割を果たすために動き始める。

一方、レイジもすぐさま動き始めていた。

まだ動けるティナとルギア、そしてアクセルをボールから出すと、傷ついているティナとルギアにきずぐすりをふりかける。

「マスター、一体なんだというのだあれは！？」

「……あれはたぶん」

「レイジ君、どうしてレックウザが……」

もはやバトルどころではない、ワタルは上空で暴れているレックウザを睨みながらレイジの元へ。

「ワタルさん、あなたは観客のみんなを避難させてください!!」

「君はどうするんだい!？」

「僕は……みんなでレックウザを止めます!!」

言うやいなや、全快したルギアの背に乗り込むレイジ達。

「ルギア、お願い!!」

「任せろマスター、振り落とされぬようしっかり掴まっていろ!!」

「レイジ君!!」

「急いでくださいワタルさん!! このままじゃ取り返しのかな
い事になります!!」

こうしている間にも、レックウザの口から放たれる光線で、スタジアムは崩壊していく。

瓦礫の山が生まれ、それに巻き込まれ傷ついていく人達。

「やめぬかレックウザ! 何をしているかわかっているのかお前は!!」

「無駄だよルギア、今のレックウザには何も通じない」

「何———？」

「父上、という事はやはり……」

アクセルの言葉に、レイジは拳を握りしめながら、静かに答えた。

「そうだよアクセル、今のレックウザは……デッド化してるんだ」

第83話 決戦、レックウザとセキエイ高原の死闘（前書き）

突如として現れたレックウザ。

デッド化し、全てを焼き尽くそうとするレックウザに挑むレイジ達。

はたして、レイジ達はレックウザを止める事ができるのか！？

第83話 決戦、レックウザとセキエイ高原の死闘

「ルギア、ハイドロポンプ!!」

アクセル、はどうだん!! ティナ、10まんボルトだ!!」

一斉に指示を出し、同時に大技を繰り出すティナ達。

水、電気、そして波導はレックウザに命中し――それだけ。

「っ、右!!」

「くっ――!!?」

煙を突き破り、はかいこうせんがレイジ達目掛けて放たれる。

いち早く察知したレイジの指示で、ルギアは無理矢理方向転換をし難を逃れるが……きりもみしながら地面に落ちていく。

「ちっ、この――」

空中でバランスをとり、どうにか地面との衝突を免れる。

「僕達の攻撃が効いてない!?!」

「違う……デッド化で痛みを感じていないだけだ」

しかし、よもやここまでとは思わなかった、レイジは唇を噛みしめる。

幻のポケモン、そう呼ばれるに相応しい強さを誇っており、デッド化によって更に強さを増している。

「ラティオス、ラスターページ!!」

「ガブリアス、はかいこうせん!!」

――光線が、レックウザの側面へと命中する

「カグヤ、シロナさん!!」

「レジェンド、ブラストバーン!!」

更に下からは、凄まじい炎が放たれレックウザを包み込む。

「ロストさん!!」

「レイジ、観客達はカイリ達が救助している！
おれ達はレックウザを止めるぞ!!」

「はい!!」

「来るわよ!!」

再び放たれる、レックウザのはかいこうせん。

地面を削り、その余波は熱風となってレイジ達を襲う。

「バカの一つ覚えのようにバカスカ撃ちおって！　もう少し加減と
いうものを知らんのか!!」

「このままでは、セキエイ高原が………!!」

「レイジ、あの力でなんとかならないの!?!」

「無理だ! あれだけ強大な存在だと、もっとダメージを与えて弱
らせないと効果はない!!」

「よし、だったらボコボコにしちゃえばいいんだね!!」

「……恐ろしい事を平然と言ったのけるな」

「けど、この場合カグヤの言う通りよ。力づくで止めないと被害が
広がるだけ!!」

「ティナ、サイコキネシスだ!!」

「はい!!」

手を翳し、サイコキネシスでレックウザの動きを封じようとするテ
ィナ。

しかし……彼女の顔からは苦悶の表情が。

「くっ……なんて力……みなさん、早く攻撃を!
あまり長くは保ちません!!」

「ルギア、エアロブラスト!! アクセル、はどうだん!!」

「ラティオス、ラスターパージ!!」

エネコロロ、ふぶき！」

「ガブリアス、りゅうのはどう！！」

「レジェンド、シャイニングフレア！！」

動けないレックウザに向かって、最大パワーで攻撃を仕掛ける面々。

その時、レックウザが再び動き始める！！

だが、その瞬間に皆の攻撃が命中し、耳を塞ぎたくなるような爆発が巻き起こった。

「やったか……！！？」

シャイニングフレアの反動により、肩で大きく息をするレジェンドを支えながら、ロストは空を睨む。

攻撃は命中した、それもあれだけの怒涛の連続攻撃を。

如何にレックウザとはいえ、あれだけの攻撃を受ければ――

「――――」

そんな、バカな。

その言葉は、誰が放ったものだったのか。

それはわからない、わからないが……。

「どう、して……？」

震える声は、カグヤの口から。

——レックウザは、まだ健在だった

ダメージは確かにあるだろう、ところどころ傷だらけだ。

だが、それだけ。

あれだけの攻撃、あれだけの威力を一身に受けてもなお動けるなど、悪い夢を見ているようだ。

「ジギユアアッ!!」

怒りか、はたまた狂った故の雄叫びか。

レックウザは再び激しい動きを繰り返し、それにより衝撃波が地上へと降り注いでいく。

「くぁ——!!」

「きゃっ!!」

まるで真空波のように容赦なくレイジ達を傷つけていくそれは、まるで鋭利な刃物だ。

人間などともに受ければ細切れにされるそれを、各々のポケモン達が身を挺して守っていく。

へくっ……このままじゃやられてしまう……！>

「ちい——！　こうなれば……！！」

降り注ぐ衝撃波を回避しながら、ルギアはレックウザへと向かっていく。

レックウザもそれに気づき、撃ち落とそうと二度はかいこうせんを放つ。

瞬間、ルギアは全神経を回避に専念しはかいこうせんの軌道から外れ。

「っ、ぐう——！！」

軌道から外れた、そう思ったのだが、左の翼が回避しきれずはかいこうせんの直撃を受け、焼けただれてしまう。

それでもルギアは羽ばたきを止めず、尚もレックウザに向かっていく。

「ルギア、アイアンヘッド！！」

レックウザの腹部に、渾身のアイアンヘッドが突き刺さる——！
さすがにダメージが蓄積したのか、僅かにレックウザから苦悶の声

が。

「いい加減目を覚まさぬかこの馬鹿者!!」

「エアロブラスト!!」

叫びながら、零距离からのエアロブラスト。

竜巻と化したそれは、レックウザの身体を削らんとばかりの勢いで放たれ、地面へと吹き飛ばしていく。

それと同時に、ティナとアクセルがルギアの背中から飛び降りた。

ティナの手にはサイコセイバー、そしてアクセルは両手にはどうだんを生み出している。

爆音と共に、レックウザがエアロブラストによって地面に叩きつけられる。

「ぐっ、あ——!!」

「うわっ!!」

そこで力を使い果たしたのか、ルギアの身体がぐらりと揺れ地面へと落ちていく。

もちろん、その背中に乗ったレイジも例外なく落ちていき。

「ラティオス!!」

「ガブリアス!!」

ラティオスとガブリアスが、ルギアを受け止めゆつくりと地面へと降ろしてくれた。

「……すまぬな。ラティオス、ガブリアス」

「構わない。それより大丈夫か？」

「余は大丈夫だ。それよりマスターは……」

「僕は大丈夫。……ありがとうルギア、ゆつくり休んでて」

ルギアをボールに戻し、レイジは再び戦場へ。

〈はあああああっ!!〉

その時には、上空からレックウザに向かって落ちているティナとアクセルの攻撃が、見事レックウザへと命中していた。

サイコセイバーとはどうだんの相乗攻撃。

その威力は凄まじく、レックウザを壁に叩きつけてしまうほど。

（今だ——!!）

左手で右腕を掴み、レックウザに向かって突き翳す。

——意識は内側に

溢れる力を形に変え、レイジは力ある言葉を口にした。

「――在るべき姿に還るんだ、レックウザ!!」

黄金の光が右手から撃ち出され、それは優しくレックウザを包み込む。

「やった!!」

命中した、これでレックウザも元に戻るだろう。

後は、カイリ達と共に一般人の救助を――

「ゴウカザル、フレアドライブ!!」

「え――」

その声は、レイジ達から少し離れた場所から聞こえた。

それと同時に、レックウザに向かってゴウカザルがフレアドライブで突撃している光景が視界に入る。

何を、そんな言葉が口から出かけるが、レイジはすぐにその行動の意味を理解する。

――レイジの力を受けたはずなのに

レックウザの口からは、殺気に満ちたはかいこうせんが……。

しかし、放たれる前にゴウカザルのフレアドライブにより再び壁に押し込まれた。

「カイリ！！」

「気をつけろレイジ、このレックウザ……お前の力が通じてないぞ！！」

「っ、そんなバカな……」

そんな事はいえない、だってこの力は全てのポケモンに有効な力のはずだ。

レックウザほど強大な力を秘めているポケモンには、弱らせなくては効果が薄いというのはわかっている、だから攻撃を加えてかなり弱らせたはずだというのに……。

まだ力が残っている？ そんなはずはない、あれだけの攻撃を受けたのだ、レックウザといえどもあれ以上は……。

「だったら、モンスターボールで捕まえればいいんだよ！」

言うやいなや、モンスターボールを手に取りレックウザへと投げつけるカグヤ。

放物線を描き、モンスターボールはレックウザへと当たり——突如として発生した黒いプラズマによって、粉々に砕け散った。

「えっ!？」

「モンスターボールでもダメなのか!？」

「で、でも……この間は確かに」

「……改良されているのよ、デッドボールも」

「そんな……じゃあ、打つ手がないじゃないですか!？」

「……本当に打つ手はないのか？」

レイジの力でも、モンスターボールでも効果はない。

だとすると、レックウザを止める方法は……。

「――殺すか」

「――――」

すぐ横で、そんな物騒な言葉が飛び出す。

視線を向けると――いつの間にボールから出ていたのか、ミュウツ
ーがレックウザを睨んでいた。

「ミュウツー……」

「甘いお前は、まだ助ける気にいるならばすぐにそんな考えなど
捨ててしまえ。」

——危険な芽は、すぐに刈ってしまわねばな」

そう言って、殺気を放ち始めるミュウツ―。

——本気だ

本気でミュウツ―は、レックウザを殺すつもりだ。

身体から湧き出る殺気を見ればわかる、ミュウツ―は容赦なくレックウザを……。

「ま、待ってくれミュウツ―!!」

「……お前は、どちらを救うつもりだ？」

「えっ……?」

「観客か? それともレックウザか？」

「そ、そんなの……」

「どっちも救う、などというくだらない考えを持つなら邪魔だ。下がっている、レックウザは……ワタシが始末する」

「……………」

「待て、ミュウツ―」

しかし、そんなミュウツ―を止めたのは、ロストの声。

「……貴様も、そのような考えを持っているのか？」

侮蔑したようなミュウツウの瞳にも、ロストは一步も退かない。

「……ここはレイジに任せろ、勝手な真似は……絶対に許さん」

「……………」

「ロストさん……」

「……救いたいという気持ちは、おれ達も一緒だからな」

「けど……」

自分の力では、レックウザを救えない。

救いたいと願っても、自分にはその力が……。

その時、レイジの肩をカイリは優しく叩く。

「自分の力を信じろよ、レイジ」

「カイリ……」

「レックウザを救えるのは、お前だけだ。

——俺達じゃ救えない、お前の……あの力が必要だ」

「……………」

へっ、お父様、レックウザが——！>

「…………っ」

再び暴れ始めるレックウザ。

……このままじゃ、また被害が。

「——チッ」

舌打ちをしながら、ミュウツーはレックウザに両手を翳す。

すると、レックウザの動きがピタリと止まってしまった。

「サイコキネシス……！」

「す、すげえパワーだ」

「……フン、この程度なら造作もない。

それよりどうする？ 本気でレックウザを救うのか？」

「……救うよ」

「……愚かだな。節操もなしに救いの手を差し伸べて、それが一体何になるというんだ？」

「……………」

「まあいい。お前が何をしようとワタシにとってはどうでもいい事だ。

さっさと救いたいなら救えばいい」

そう言って、ミュウツ―はレイジから視線を逸らす。

けれど、彼はサイコネシスでレックウザの動きを止めるだけで、それ以上の攻撃を加える事はしない。

(……ありがとう、ミュウツ―)

お礼の言葉は心の中で、レイジはゆつくりとレックウザに近づいていく。

「……………」

苦しい、痛い。

そんな感情が、今にも聞こえてきそうなほど、今のレックウザの姿は痛々しかった。

そんなレックウザに、レイジはそつと手を添え。

「っ、あ———！」

すぐさま、身体から離してしまった。

「……………」

添えた手のひらを見ると……焼けている。

まるでレックウザが拒むように、レイジの手が痛々しく傷ついていた。

「……これが、君の痛みなんだね、レックウザ」

なら——この痛みさえも受け入れよう。

レイジはそう呟き、今度は両手でレックウザの身体に触れた。

「っ、あ、ぐ——!?」

痛い。

肉の焼ける嫌な音と臭いが、レイジに襲いかかる。

秒単位で、彼の手が死んでいく。

「レイジ!!」

カグヤの声にも、反応を返せない。

それほどまでの痛みと苦しみが、レイジの手から全身に響き渡っていた。

(ま、だ………!!)

この手は放さない、放すわけにはいかない。

放せばもう無理だ、もう一度レックウザに触れる勇気は出せない。

だから放さない、この手は死んだって放すわけには——!!

「――、あ」

でも、限界だって近い。

既に手の感覚はなく、痛みを痛みとして許容できない。

思考は定かではなく、これでは力を使うどころか意識さえ……。

そんな、中で。

1人の少女が、少年を必死で呼びかける。

「レイジ!!」

「――――」

振り向くと、そこにはレイジの腕を握っているカグヤの姿が。

それだけではない。

「レイジくん!!」

反対側の腕をシロナが握り、必死にレイジの名を呼んでいる。

――挫けかけた心が、再び立ち上がる

痛みなど今は忘れる、この刹那の間だけ――あらゆる感覚を封じ込めた。

意識は内側へ、先程よりも更に力を込めて。

「――在るべき姿に還るんだ、レックウザ!!」

もう一度、レイジは力ある言葉を解き放つ――!

「ぐ、あ――!!」

しかしまだ届かない、闇がレックウザの奥底まで行かせまいと防いでいる。

それを、少しずつ確実に取り払っていくが……。

「は、あ……ぐ……っ!!」

止まる。

歩んでいた足が、闇に吞まれていく。

そんな事は許されない、ここで諦めたら、誰がレックウザを救うというのか。

自分は1人ではない、すぐ傍にはかけがえのない人が、仲間がいる。ならば、どうして諦める事ができようか。

(――――届け)

必死に前へ、それだけを考へて歩みを進める。

（―――）
届け

痛みも苦しみも、胸を穿つ全てを取り払って前へ。

――届け！――

何故なら、この身は。

「――届けええええええつ!!!!!!」

この身は、世界の理を守る為の身体だ――！

——光が、爆発したかのように溢れる

纏わりつく闇も、その光の前に消え去った。

「……は、あ」

ぺたりと、その場に座り込む。

両手は——人には見せられないようなものになってしまったが、一応はくっついていようだ。

その点には安堵し、目を覚ましたレックウザへと視線を送る。

「……レックウザ、大丈夫？」

声を掛けるが、レックウザは答えない。

そして――雄叫びを上げて空へと飛んでいってしまった。

「あつ、おい！！ 礼も言わずに帰るんじゃないよ！！」

「カイリ、レックウザは人間に酷い目に遭わされたんだ。礼なんか言うはずないよ」

「それは、まあ……そうかもしれないけどよ」

むしろ、怒りに身を任せて襲われなかったただけマシだ。

おそらく、許してくれたのだと信じたい。

「……しかし、凄い事になっちゃったね……」

周りを見ると、瓦礫の山だけが広がっている。

地面は削られ、もう少し暴れたら地形が変わってしまったかもしれない。

改めて幻のポケモンと呼ばれる存在が、凄まじい力を秘めていると気づかされ、身震いした。

「それよりレイジは大丈夫なの！？」

「あー、うん……まあ、あまり大丈夫じゃない」

と言いながら、大変な事になっている両手を皆に見せると。

『——っ！！！？？』

声にならない悲鳴を、上げられる羽目になってしまった。【ロキ side】

「——なる程、やはりこのような結末になったか」

自分の目の前で粉々になったデッドボールを眺めながら、ロキはたいてして気にした様子もなくそう呟く。

このボールこそ、改良し見事レックウザを捕らえたデッドボールなのだが……これは捕らえたポケモンがボールの呪縛から逃れた証。

へ……よろしかったのですか？ レックウザをみすみす手放すなど……
✓

無礼を承知で、エルレイドはロキに意見するが、それでも彼は気にした様子もなく言葉を返す。

「これでレイジ以外の奴等を始末できればよかったが、レックウザ程度ならば代わりはいくらでもいる。

それよりエルレイド、やはりあのサーナイトが死なずに済んでホッとしているようだな？」

へ……いえ、ただ……負けたままでいるのが嫌なだけです」

エルレイドの答えに、ロキは満足げに口元を歪ませながら、目を閉じる。

（レイジの力はますます大きくなっている……これならば、あの計画が達成される日も近いかな）

立ち上がり、コートを羽織るロキ。

「エルレイド、支度をしろ」

「どちらへ、行かれるのですか？」

エルレイドの問いに、ロキは寒気がするほど低い声で。

「――シンオウ地方へだ。そろそろ……動いてもいい頃なのでな」

そう言って、そのまま部屋を後にした――

第84話 レイジの決意く新たなる土地へく（前書き）

セキエイ高原で暴れ尽くしたレックウザだったが、レイジの力によりどうにか正気に戻り空へと帰っていった。

しかしレイジは傷つき、病院へと運ばれる事になる……。

第84話 レイジの決意く新たなる土地へく

セキエイ高原にある病院では、皆忙しそうに走り回っていた。

レックウザの登場により、多大な被害を受けた事による怪我人が一斉に運び込まれてきたからだ。

まさしく大災害と呼べる程の被害であったが、それでも死者が出なかったのは、レイジ達の迅速な救助活動の賜物である。

そのレイジ達というと……とある病室に集まっていた。

「……あのさ。僕は怪我したの両手だけなんだから、こうやってベツドに入る必要はないんじゃないかなあ？」

病院服に身を包み、動かない両手に視線を送りながら、レイジはやんわりと意見をしてみるが。

『ダメです!!』

仁王立ちしたカグヤ、シロナ、そしてティナによって却下される。

ちなみに、彼女達は揃ってご機嫌斜めである。

何故か？ それはもちろんレイジがあれだけの怪我を負いながらも、あまり気にした様子もないから。

両手は焼けただれ、感覚が無くなってしまった程だというのに、レイジときたら「大丈夫」と軽々しい口調で言うものだから、3人は

そりゃあもう怒った。

「で、でもさ……僕より酷い怪我の人もあるし」

「レイジだって充分重傷だよ!!」

「うっ……」

「そうよ。もっと自分を大事にしないで!!」

「ううっ……」

〈お父様は御自分を軽く考えすぎです!!〉

「……わかった。わかったから」

こうまで言われては、もはやこちらが折れるしかない。

四面楚歌な状況に、レイジは泣きたくなった。

「病室では静かにした方がいいと思うよ?」

そんな中、室内に入ってきた男性が一人。

「ワタルさん……」

「やあレイジ君、ちゃんと生きてるようだなによりだよ」

「……ワタル、それは冗談で言っているのよね?」

「冗談に決まってるじゃないか、だからそうやって睨むのはやめてくれないかシロナ君」

冷たい視線を向けられ、ワタルは冷や汗をかきながらレイジの元へ。

「……ひどいものだね、その腕」

痛々しく巻かれた包帯を見て、ワタルの表情が歪む。

——レイジの手は、治療できる

しかし、手の細胞組織の半分が死滅してしまい、元通りの綺麗な手には戻らないそうだ。

手という機能はきちんと取り戻せるが……。

「平気ですよ。もう二度と何も持てないわけじゃないし、それにレックウザを救う事ができたんですから、僕としては良かったと思ってます」

「……レイジ君」

今の言葉は、間違いなく彼の本心から出た言葉。

しかし、それがわかるから——恐ろしいと思えた。

僅か15歳の子供が、自分を犠牲にしてまで他者を助け、しかもそれを後悔しないなど、彼を侮辱するわけではないが正気の沙汰じゃない。

しかもそれが彼にとっての「当たり前」なのだから、驚きは増すばかり。

「ところでワタルさん、セキエイ高原の方は？」

「あ、ああ……相当の被害を受けてしまったよ、あれじゃ少なくとも来年のセキエイリーグは中止になるだろうね」

「そんなに酷かったんですか？」

「スタジアムは全壊、おまけに道路や地形もメチャクチャだ。

——暫く休む暇はないだろうね」

「じゃあ、レイジと再戦する事は……」

「残念ながら無理だよ、ボクも色々とあちこちに行かなくちゃいけなくなったしね。

だけど残念だ。君とは決着を着けたかったんだけど……」

「……僕もです」

「でも、もう二度とバトルできないわけじゃない。次に会った時が……決着の時だよ」

「はい、その時を楽しみに待っています!!」

「ありがとう。……ああ、そういえば忠告するのを忘れていたよ」

部屋から出ようとしたワタルだったが、急に何かを思い出したのか、再びレイジへと視線を向ける。

そして、先程の友好的な雰囲気を消し、はっきりと言い放った。

「レイジ君、君はもう二度とロケット団には関わってはいけないよ？」

「えっ………」

「今回のレックウザの件だけじゃない、今まで君はロケット団と関わりを持ったせいで何度も死にかけたんだ。

後の事はボク達国際警察に任せて、君は純粋にトレーナーとしての旅を続けるんだ。わかったかい？」

「だ、だけど………」

「君はまだ子供だ。こんな事に関わる必要なんかない！」

レイジの言葉を呑み込むような厳しい口調で、ワタルは告げた。

その迫力に圧され、おもわず押し黙ってしまう。

「……シロナ君、君からもよく言っておいてくれ。この子はもう……あんな連中と関わってはいけない」

「……………」

「シロナ君？」

「………わかったわ」

少し間を置き、ワタルの言葉に頷くシロナ。

頼んだよ、そう言い残しワタルは今度こそ部屋を後にした。

「……………」

俯き、先程告げられたワタルの言葉を思い返す。

君は子供、そんな事言われなくてもわかっている。

自分は何の力もないただの子供、ワタルやシロナのような大人じゃない。

確かに、そんな子供があんな悪魔のような連中に首を突っ込む事など、間違いどころか愚の骨頂なのかもしれない。

——だけど

あの男は——ロキだけは、絶対に許せない。

あの男とは、自分自身の手で決着をつけなくてはいけない気がする。

「——レイジくん、貴方はどうしたいの？」

「……シロナさん？」

「貴方は、このままワタルの言った通り、ロケット団と関わりを持たずに旅を続けたい？ それとも——」

「……………」

試すような、シロナの問い。

……答えなど、初めから決まっている。

レイジは顔を上げ、はっきりと自分の気持ちを口にした。

「――僕は、このまま逃げるわけにはいきません」

と。

「……………はぁ」

すると、シロナに呆れられたようなため息をつかれてしまう。

自分の言葉が予想通りだったのか、頭に手を置きなんだか悩んでいるようにも見える。

「……私としては、もう二度と貴方には危険な事をしてほしくないのだけれど」

「すみません、でも……僕はまだ」

「わかってる。レイジくんは一度言ったら曲げないのよね。」

はぁ……そういう所も好きだけど、今回ばかりは恨みたくなくなっちゃう」

とは言うものの、シロナはレイジの答えに反対する気はないようだ。自分が信じた道を歩んでくれればそれでいい、シロナのそんな優しさを感じ取り胸が暖かくなった。

「けどよレイジ、どうやってロケット団と戦うんだよ？
あいつらのアジトの場所とか、わからないだろ？」

「今すぐに争う気はないよ、それに……今の僕じゃロキには勝てない」

これは事実だ、現時点では決して覆せない実力の差。

だから——レイジは決心した。

「怪我が治り次第、僕はシンオウ地方に行くよ」

「シンオウ地方？」

「でも、どうしてシンオウに行くの？」

「……“始まりの地”に帰るためだ」

「始まりの、地？」

聞き慣れない単語に、カイリ達は揃って首を傾げる。

始まりの地と言うくらいなのだから、どこかの土地なのだろう。

しかしシンオウ出身のカイリとヒメカ、シロナですらそんな土地の名前は聞いた事がない。

その中で、ただ一人だけレイジの言葉を理解した少女が。

「あつ、もしかしてあそこのこと?」

「そうだよカグヤ、僕とティナにとって故郷と呼べるべき場所……始まりの地だ」

「故郷って……」

「みんなは僕がカグヤの両親によって保護されて、そのまま養子になった事は知ってるよね?」

「ああ。なんでもポケモンしか住んでない人里離れた秘境に居たって……」

「……まさか」

「そのまさかですよシロナさん、僕とティナにとって全ての始まりの地……それは、シンオウ地方にあるんです」

「なる程、だから始まりの地なのだな……」

「だがレイジ、何故急にそこへ行こうと思ったんだ?」

「……確証は、ないんですけど……そこに行けば、自分の力の事がわかるかもしれないと思って」

——今の自分の力は、まだ未完成だ

そんな確信めいた感情が、レイジの中に存在している。

そして同時に、この力を自分のものにしなくては……ロキを倒す事ができないとも思っている。

だから帰るのだ、ゲンジとルリコからレイジという名を貰ってから一度たりとも戻ろうとしなかった、第二の故郷へと。

「あの男は僕が止めてみせます、僕が止めないといけない気がするから……」

「……………」

レイジの強い決意の言葉に、シロナは再びため息をつきたくなった。

彼が自分で決めた道だ、とやかく言えるような事ではないが……。

本音を言えば、彼女もワタルと同じくレイジを止めたい。

こんな、彼の心を傷つけるだけの戦いになど、巻き込みたくない。

けれど、それは他ならぬレイジが認めないだろう。

たとえ無理矢理遠ざけたとしても、彼は納得しない。

なら、止めるなどという選択肢は無駄になるだけだ。

へ……お父様、本気で戦うおつもりですか？

「本気だよ。ティナはやっぱり反対？」

〈当たり前です〉

即答で返し、ため息をつくティナ。

「わたくしだけではありません、ここにいる皆さん全員反対しているに決まっていますではありませんか。」

「お父様はこれ以上戦わなくていいのです、ただのトレーナーとしてやっていけばいいではありませんか。」

それは、全員の言葉を代弁した願い。

もう危険な事はするな、もうこれ以上傷つく必要なんかない。

その願いを聞き入れてほしくて、ティナの口調にも熱が入る。

——尤も

「……ごめんねティナ、ごめんねみんな。」

それでも僕は、あいつを……ロキを止めたいんだ、自分の手で」

初めから、彼が素直に聞き入れてくれるとは、誰も思っていなかったのだが。

「……まあ、レイジならそう言うよな」

「もう……レイジってば頑固だよ、私そんな風に育てた覚えはないよ。」

「少なくとも君に育てられた覚えはないよ、カグヤ」

「――決まり、だな」

「しゃーねえ、最後の最後までとことん付き合ってやるか！」

「えっ……」

「なんだよそのえっ、てのは？ 言っておくがな、俺だってお前と同じくロケット団には借りがあるんだ。

このままおめおめと引き下がるかよ」

「カイリ……」

「それによ……お前は俺達にとって大切な仲間で友達だ。なら、協力するのは当然だろう？」

カイリの言葉に賛同するように、全員が力強く頷く。

……そんな中で、ティナはそっとため息をついていた。

（もう……お父様を止めてくださいよ）

止めるどころか背中を押すなど、呆れてしまう。

まあ、でも……。

（わたくしも、同じ気持ちなのですけどね……）

だから、否定する事など絶対にしないのだ。

……。

「シンオウ地方って、やっぱり寒いんですか？」

「そうね。特に今の季節は特に寒いかも、カントーの貴女達じゃ少し厳しいわよ？」

「うひゃあ……ちゃんとコートとかマフラーとか用意しないと」

カグヤとシロナの楽しそうな会話は続く。

——何故か、レイジの病室で

「……あのさ、どうしてここで会話するの？」

ちなみにカイリ達とはとくに帰った、つまり今は2人っきりならぬ3人つきり。

ポケモン達は気を利かせてボールの中に……入っていない。

ティナとルギアは、ボールから出てレイジを守るように警戒している。

「ねえ、ティナ、ルギア、別に襲われたりしないから大丈夫だよ。疲れてるだろうから、ボールに——」

「ダメだ」

〈ダメです〉

「何で？」

「決まっておろう。カグヤとシロナがマスターに変な事をせぬか見張るためだ!!」

「はぁ？」

一体何を言っているのだろう、この娘御は。

的外れなルギアの言葉に頭が痛くなる。

「ルギア、変な事って何？」

「なっ、そ、そのようなこと説明できるか!!
　　とかカグヤ、わかってるくせにそんな事を訊くでない!!」

何を想像しているのか、顔を赤くしてそんな事を言うルギア。

しかしカグヤは、首を傾げるばかりでまるでわかっていない。

「くう……こやつ、どこまで天然なんだ……」

へルギア、はしたない事を考えないでください、恥ずかしいですね〉

少し冷たい視線を送るティナに、ルギアはますます顔を赤くさせ反

論を返す。

「ばっ、べ、別に余はそこまで変な事は考えておらぬ!!」

でも変な事は考えていたんだな、そういうツツコミが喉元までせり上がってきたが、レイジは大人なので何も言わない。

なんだか変な空気になってしまったが、ここでまた場を混沌に陥れるような行動をとる女性が1人。

「ねえルギア、変な事って……もしかしてこういう事かしら？」

言いながら、レイジの顔に自らの顔を近づかせるシロナ。

レイジは動けず、少しずつけれど確実に彼と彼女の唇が近づき――

「ストップ!!」

グワシッ、という音が聞こえてきそうな勢いで、シロナの頭がおもいっきり掴まれた。

もちろん、彼女の邪魔をしたのはカグヤである、その表情はあきらかに不機嫌そうだ。

「ズルいですよシロナさん、ジャンケンに勝った方が先です!」

「そっちかよ!？」

おもわず、全力でツツコミを入れるレイジ。

てつきり止めてくれるかと思ったのに、まさかの参戦に頭が痛い。

しかし、ここで救世主が現れてくれた。

「待ってください！！」

「待たぬか！！」

「ティナ、ルギア……」

よかった、今度こそ大丈夫だろう。

そう思い安堵したレイジだったが、その希望はまたもへし折られる事になる。

「わたくしもジャンケンに参戦します！！」

「余はジャンケンができぬから、別の方法で決めるぞ！！」

「お前達もかよ！？」

見事でキレのあるツツコミだったが、今の状況では見事にスルーされるのみ。

（……何でこんな事に）

あーだこーだと言い争っている彼女達を尻目に、レイジは付き合ってられないとばかりに布団に潜る。

あと一言言っておきたい、病院内では静かにしてください。【カイ

りside】

「――なんだか、慌ただしい帰郷になりそうね」

「なーに、そんなに急ぐ旅にするつもりはないんだし、のんびりフタバタウンに帰っても問題ないだろ」

のほほんと言いつちながら、カイリはさっそく荷物をまとめ始めていた。

「ところでミカンはどうするんだ？ 俺もヒメカもレイジについていく事を決めたけど……ミカンまで付き合う必要は」

「いいえ、私もついていきます。カイリさんの傍に……いい、居たいですから」

「お、おう……そうか」

もじもじと赤い顔でそんな事を言われたものだから、カイリも顔を赤くして照れ隠しにぶっきらぼうな口調で返す。

端から見ると初々しいカップルのようで、ヒメカとしてはまったくもって面白くない。

無意識に握りしめていたモンスタールボールから、ミシミシと軋む音が聞こえてくるほどだ。

「あ、あの……カイリさんのお父様とお母様を、紹介してくれませ

んか？

あつ、でもまだそういう意味とかじゃないですからね？」

「あー、うん……わ、わかってる」

「……………」

ミシミシがピキピキという音に変わり、なんとも信じられないがモンスターボールにヒビが入っている。

ちなみに空のボールだから、ヒメカのポケモン達は揃って安堵のため息を吐いていたのだがそれはさておき。

「で、でも……カイリさんのお父様とお母様と仲良くできたら嬉しいです。そ、その……今後の為にも」

「えっ、こ、今後って……？」

仲むつまじいカイリとミカン、何気に大胆な発言を繰り返す彼女に、遂にヒメカの堪忍袋がブチ切れた。

「うがー！！！！」

バキッ、と空のモンスターボールを握り碎き、暴れ始めるヒメカ。

「ちよ、どうしたんだよヒメカ！？」

「あわわ、落ち着いてくださいヒメカさん！！」

お前が全ての元凶だろうがコラー！！

かくして、恋する乙女の我慢はすぐに切れ暫くガブリアスのげきりんの如く暴れまわった、もちろんこんらん状態にはなってないのであしからず。

……それにしても、ヒメカはあまり堪え性というものが無いのかもしれない。

だがしかし、妬きもちだから仕方ないといえればそれまでである。

第85話 シンオウ地方へ〜カイリとヒメカの故郷〜（前書き）

レックウザとの戦いの傷が癒えたレイジは、仲間と共にシンオウ地方を目指していた……。

第85話 シンオウ地方へくカイリとヒメカの故郷く

「――ぶえつくしよん！」

「汚っ！ くしゃみするなら口を押さえてやってくれよ！！」

「あははー、ごめんごめん」

「鼻水が出てんぞ！ 早くかめー！！」

「……うるさいな」

ぎゃーぎゃーと喚いているカグヤとカイリに視線を向け、レイジはため息をつく。

まあ、原因はカグヤにあるから、カイリに非はないのだが。

「仕方ないわ。カグヤはシンオウの気候に慣れてないのだから。それよりレイジくんは大丈夫なの？」

大丈夫です、そう答えるレイジの服装は、いつもの長ズボンに新調した赤色の長袖と、あまり厚着ではない。

カントーの人間であるレイジなら、こんな装備では寒いと思うのだが……。

「ほら、僕は元々こっちで生きていましたから、寒さには強いんです」

「あつ……そういえばそうだったわね」

「僕の事より……あの2人の方が大変だと思いますよ」

ちらりと視線を向けるレイジ。

そこには、相変わらずくしゃみを連発しているカグヤと。

あんまりにも寒いのか、しゃがみ込み身体を縮めているミカンの姿が。

寒いなら部屋に入ってればいいのに……ちなみにロストは慣れているのか平然としている。

「シロナさんこそ、端から見ると寒そうな恰好に見えますが……」

黒のコートは着ているものの、その下の服は胸元が開かれたものであり、寒そうに見える。

しかし、シロナはやはりシンオウ出身のせいかな平気そうだ。

「ところでレイジ、シンオウに着いたらすぐに始まりの地に向かうのか？」

「ううん。そんな急ぐ旅にするつもりはないし……カイリとヒメカはフタバタウンに帰りたいだろ？」

「まあ、親父と母さんに顔見せた方がいいとは思ってるけど……」

「急いで行って、この力が何なのかわかっててもロキの居場所がわか

らない以上動きようがないよ。

それに、ちゃんと両親に顔を見せておいた方がいいんじゃないかな？」

「まあ、そうしてくれるとありがたいけど……」

「ダメだよカイリ、ちゃんと両親がいるなら安心させないと」

「……………おう」

レイジのその言葉に、カイリは素直に頷く。

いや、頷かずにはいられなかった。

本当の両親がいないレイジにとって、今放った言葉の重みは……誰よりも重いものだからだ。

「——あつ、シンオウ地方が見えてきた……」

「だからカグヤ、鼻をかめよ！！　　ってか鼻水が凍り付いてんぞ！？」

「わー……凄い、初めて見たよ」

「感心してる場合か！」

「はあ……カグヤ、そろそろ部屋に戻って荷物を取りに行くよ」

「はーい！」

元氣よく手を上げ、鼻をかみながら、さっさと船の中に入っていくカグヤ。

「まったく……相変わらず呑気な奴だな」

「それがカグヤだからね、むしろああいう風じゃないとあの子らしくないよ」

「そうね。……ところでレイジくん」

「何ですか？」

「その手……カイリの時戻しの力で治す事はできないの？」

シロナの視線の先には、火傷の痕が痛々しく残ったレイジの手が。

今は肌にピッタリとフィットするタイプの手袋で隠れているが、その下の手は結局治す事ができなかった。

しかし、対象の時間を戻す事ができるカイリの力を用いれば……。

そう思ったシロナだったが、レイジはすぐにその問いに首を横に振った。

「僕もそう思っただけにカイリに頼んだんですが……治りませんでした」

「……治らない？」

そんなバカな、確かにカイリの力は数十分前の状態までしか戻せない

いといっても、すぐに力を使ったのなら治るはず。

だというのに、レイジは治らないと言った、それは一体どういう事なのだろうか。

「僕にもわかりません、でも……実際にカイリの力でも治らなかったんです」

（どういう事……？ どうしてレイジくんだけカイリの力が……）

やはり、彼はどこか違うのだろうか。

そんな疑問が頭を占めるが、レイジの「部屋に戻りましょう」という言葉で、彼女は考えを止め彼の後についていった。

……。

「ううー……寒いよ寒いよー……」

「……カグヤ、ちょっと離れてよ」

「だって寒いんだもん」

「でもくっ付き過ぎよカグヤ」

「……シロナさんもですよ」

現在カイリとヒメカの故郷であるフタバタウンに向けて、空で移動をしているレイジ達。

しかし、何故かりオンの背中にはレイジだけでなくカグヤとシロナも乗っていた。

しかもピッタリとくっ付いているから、色々と困ってしまう。

リオンも少し重そうにしているが、文句を言わない辺り主人思いである。

だが、そんなおかしい状況になっているのは、なにもレイジ達だけじゃない。

カイリ達もまた……カノンの背中で3人仲良く寄り添いながら、移動を続けている。

しかし、カノンはリオンより小さいので、正直見ていて危なっかしい。

「……お前の妹、大変そうだな」

そんな彼等に視線を送りつつ、ロストは自身が乗っているラティオスに声を掛けた。

「まあ、仕方ないんじゃないか？ それに、結構楽しそうだし」

「確かにな……それよりラティオス、重くないか？」

「大丈夫だ。それにこう見えてお前くらいなら10人は軽く乗せられるくらいの力はある、心配しなくてもいい」

「そうか……さすがだな」

「ところでレイジ、お前なんでそんな恰好なんだよ？」

そう告げるカイリ、しかし初めに言っておくが彼の姿は決しておかしなものではない。

髪を隠すように被ったモンスターボールのマークが入った帽子に……黒のカラーコンタクト。

端から見ると、レイジというのがわからなくなりそうだ。

まるで変装……というか変装以外のなにものでもない。

「これ？ シロナさんが付けた方がいいって言うから……」

「レイジくんは有名人だからね、初出場でカントーリーグ優勝者、おまけにチャンピオンとも互角に戦った程のトレーナーよ。目立ちたくないレイジくんには必要でしょ？」

いや、どっちかっていうとあなたに必要ですよシロナさん、そう言っ
てやりたいがカイリにそんな勇氣はない。

「——あつ、見えてきたよ！」

カグヤの声に、視線を前に向けると。

「……………なんか、久しぶりだな」

「……………そうね」

懐かしむような、カイリとヒメカの声。

——ワカバタウンに着いたようだ

「リオン、ありがとう」

——おう。次は勘弁してくれな、さすがに3人はキツイ。

「あはは……………ごめん」

やはり無理をしていたようだ、リオンの言葉に苦笑をしつつボールに戻す。

と、彼等に近づく人物が。

「なんだ、ようやく帰ったのかカイリ」

「……………よう、親父」

ニヤリと口元に笑みを浮かべながら、カイリは近づいてきた人物に話しかけた。

（この人が、カイリのお父さん…………）

決して若いとはいえない皺のある顔立ち。

けれどカイリは父親似なのか、彼をそのまま大きくしたような男性だ。

それに――

（この人……強い）

シロナやワタル、ロストなどといった人達にも決して負けないくらいの強いオーラ。

それが、全身から感じられる。

「よおヒメカちゃん、相変わらずでけえ胸だな」

「……………」

いきなりのセクハラ発言に、ヒメカだけでなく全員がジト目になり、彼を睨む。

「……このエロ親父が」

「なーに言ってやがる、でかい胸はそれだけで重要なステータスになるだろうが」

「そういう問題じゃねえだろうがアホー!!」

「それよか見慣れない顔が沢山いるな、まあ……チャンピオンまでいるとはちょっと驚いたがな」

とは言うものの、対して気にした様子もないカイリの父親――ゲン

リ。

と、ゲンリの視線がレイジを捉える。

「……………ほう」

「……………？」

「なるほどなるほど……お前がレイジだな？」

「えっ……はい、そうですけど……名前言いましたっけ？」

「いんや、けどカイリからよく聞いてたからな……不思議な力がある、バカみたいに優しくてお人好しな少年トレーナーがいるってな」

「……………」

「まあ立ち話もなんだ、さっさと家に行こうや」

言うやいなや、こちらに背を向けて歩き出してしまふゲンリ。

「……………わりいなレイジ、俺の親父ちょっと口が悪いんだ」

「いや、別にそれはいいけど……あの人、トレーナーなの？」

「ああ。一応俺の師匠だ」

「……強いね、凄く」

「まあな。下品で口悪いけど、俺が今まで一度も勝てねえ相手だ」

「……………そう」

……………。

「——なんだカイリ、おめえそんなくだらない事に巻き込まれたのか？」

「くだらないって……かなり危ない橋渡ってきたんだけど!？」

「危ない橋だったのは、おめえが弱いからだろうが」

「ぐっ……………!」

かなり腹が立つが、的を射ているので言い返せないのが悔しい。

「まあ、旅立った頃より少しはマシになったみたいだけどよ。

けど……まだまだ弱えよお前は」

「……………っ」

「セキエイ大会でベスト4、まあそれなりにはいい成績かもしれねえ。

けどよ、そんな程度じゃ誰も守れないし助けられねえ。

悪い事は言わねえ、もうくだらない事に首を突っ込むのはよせ」

「っ、いくらなんでも言い過ぎです!!」

我慢できず、おもわず立ち上がりゲンリを睨みながら大声を張り上げるミカン。

カイリの努力を知っている彼女には、彼の言葉は我慢できなかったようだ。

「オレは事実を口にしてるだけだぜ嬢ちゃん、こいつはまだまだ弱え……少なくともオレに勝てるまでは、認めねえぞ」

「っ、だったら……勝負してみるか？」

「へえ……いいぜ、そこまでかい口を叩けるんだ。よっぽどお前のポケモン達は強くなったんだろうな？」

ニヤニヤと笑うゲンリ、そこに自分の勝利以外の結末などありえないと言うように。

「手加減しねーぞ？」

「けっ、バトルになればいいがな」

一触即発の空気。

ヒメカは慣れているのか、ため息をつくだけで2人を止めようとはしない。

尤も、レイジ達も止める気など微塵もないようだが。

傍観に徹していたレイジだったが、ゲンリは視線をこちらに向けいきなりこんな事を言い放つ。

「どうだレイジ、お前とカイリでチームを組んでダブルバトルもやってみるか？」

と。

「えっ……」

「カイリとオレじゃ絶対にコイツが負けるからな、お前と組めば勝率も少しは上がるだろ？」

「の野郎……2対1でやろうってのかよ!!」

「それでもしなきゃ、勝てねえだろ？」

傲慢な口調のゲンリに、カイリは拳を握りしめるが……。

そんな彼を制するように、レイジは立ち上がりゲンリと対峙した。

「——いいですよ、ダブルバトルでも。」

でも……そちらも2体出してもらいます」

「……レイジ」

「へえ……お前さん、オレの力がわかってるくせに、敢えて戦うのか？」

「カイリは強いですよ、あなたに負けないくらい強くなった。」

だから、それを証明する為にも……本気のあなたと戦わないと意味ありませんから」

「……けっ、いっちょ前に言いやがる。だが面白い……そこまで言うなら、バトルといこうか」

……。

家の裏側に移動し、バトルフィールドに立つレイジとカイリ、そしてゲンリ。

「はぁ……こうなるとは思ってたけど、レイジまで巻き込まれるなんて……」

「でも、あんなひどい事を言うなんて……！」 「仕方ないわよ。あれがああ2人の親子の会話だから。」

お互いにああやって悪口を言い合って、いつもバトルになるのよ。――そして、いつもカイリが負けるの」

「……あの人、そんなに強いのか？」

「強いわ。だってあの方は……フロンティアブレーン候補に、シンオウリーグスズラン大会の優勝者でもあるの」

「えっ!？」

「……フロンティアブレーン？」

「バトルフロンティアと呼ばれる施設で、最強のトレーナーに与えられる二つ名よ。

なるほど、スズラン大会優勝者とはかくとして、フロンティアブレーン候補になれるくらいなのだから、とても強力なトレーナーね……」

「フロンティアブレーンになるのって、そんなに難しいんですか？」

「難しいわよ。バトルフロンティアのポケモンバトルは通常のバトルとは勝手が違うの。

制限を課せられたり、自分のポケモンではなくレンタルポケモンで戦わなければいけない場合もあるし、正直普通のバトルよりよっぽど難しいわ」

「へえ……」

だとすると、たとえレイジとカイリのコンビでも危ういかもしいい。

あの2人なら、大抵のトレーナー相手なら勝てるが……。

「さて、と……」

「……………」

軽い様子のレイジに、カグヤは首を傾げる。

間違いなく強敵だ、なのにレイジはおかしなくらい冷静だ。

「レイジ、勝てるか？」

「さあ、どうだろ？」

「どうだろって……なんか呑気だな」

「いいじゃん。楽しくバトルできればさ」

「楽しくバトルできればいいけどな？」

「……このクソ親父、いちいちうるせえんだよ」

「それじゃあ……いきなり全力で行かせてもらおうよ!!」

「へっ、かかってきやがれ！」

「ヒカリ、お願い!!」

「出番だぜゴウカザル、出てこい!!」

「……へえ、モウカザルが進化しやがったか。
だがなんだ、もう一匹はピカチュウかよ」

「ピカ、ピカツ、ピカチュウ!!」

「ゲンリさん、ヒカリが「ピカチュウだと思って甘く見てると、その髪パンチパーマにするぞセクハラ親父が!!」って言ってますよ」

「……ヒカリ、お前結構言うな……」

思わぬヒカリの暴言に、カイリはおもわず頬を引きつらせる。

「上等だこのピカチュウ……ムクホーク、ドラピオン、出てきやがれ!!」

「——ムクホークにドラピオン……」

「どっちもよく育てられてる……強いわよ、あのポケモン達」

「ピカチュ、ピカピカピカッ!!」

「……おい、今度は何言ってるんだ?」

「聞きたいですか?」

「……教えろ」

「えーと……「今夜は焼き鳥にサソリ焼きで決まりだね」ですって」

「……………」

(うわぁ……)

こいつマジだ、本気と書いてマジだ。

見ると、ムクホークとドラピオンが少し脅えている、ヒカリの言葉が真実だとわかってるのだろう。

あ、ゲンリの顔が少し引きつってる。

「ヒカリー、ダメだよ食べるのは」

——わかってる、それに不味そうだし。

「……そういう問題じゃないんだけどね」

「おらあ行くぞガキンチョ2人!! せいぜい気張りやがれ!!」

「けっ、そっちこそ気張れよクソ親父!!」

「ヒカリ、全力で飛ばすよ!!」

「ピッカツ!!」

「ではこれより、レイジ・カイリチーム対ゲンリのダブルバトルを始める。使用ポケモンは一体ずつだ。

先攻は、ゲンリからとなる」

審判はロスト、レイジ達に視線を送った後——すぐさま試合開始の合図を告げた。

「では——試合開始!」

「ムクホーク、ゴウカザルにつばめがえし。

ドラピオンはピカチュウにミサイルばり」

早速攻撃を仕掛けるゲンリ、それぞれの相手に向かっていくムクホークとドラピオン。

「ヒカリ、でんこうせっかで間合いを詰めて!」

「ゴウカザル、マツハパンチ！！」

迫るミサイルばりを、でんこうせっかのスピードで回避しながらドラピオンとの間合いを詰めていくヒカリ。

そしてゴウカザルは、マツハパンチを向かってくるムクホークに放つが。

マツハパンチが届く瞬間、突如としてムクホークが軌道を変え、ゴウカザルの後ろへ。

そのまま、無防備なゴウカザルへとつばめがえしを叩き込む――！！

「ヒカリ、アイアンテール！！」

飛び上がり、ドラピオンの頭めがけてアイアンテールを叩き込むヒカリ。

それは見事命中したが、ドラピオンにさしたるダメージを与えられた様子はない。

「ほう、さすがにやるじゃねえか！

だが、ゴウカザルの動きは――」

「ほのおのパンチ！！」

「ああ？」

つばめがえしによる衝撃にも構わず、ほのおのパンチをしっかりとムクホークに叩き込むゴウカザル。

「へっ、そんな程度で勝った気でいるんじゃないやねえぞ親父!!」

「……フン、少しは強くなったみてえだな」

「今日は勝つ! レイジと俺のコンビネーションを見せてやるぜ!
」

「おもしれえ、なら見せてみやがれ!!」

第86話 レイジとカイリのコンビチームVSゲンリク（前書き）

シンオウ地方に辿り着いたレイジ達は、まずカイリとヒメカネ故郷であるフタバタウンへ。

そこで、何故かカイリの父親とダブルバトルをする羽目になってしまった……。

第86話 レイジとカイリのコンビチームVSゲンリ

「ドラピオン、クロスポイズン。」

ムクホーク、ブレイブバード!!」

ドラピオンはヒカリに、ムクホークはゴウカザルにそれぞれ攻撃を仕掛けていく。

「ヒカリ、10まんボルトを拡散させるんだ!」

指示を受け、ヒカリは10まんボルトを撃ち放つ。

それはまるで蔦のように広がり、ドラピオンのクロスポイズンだけでなく、ムクホークの身体すら巻き込もうとする。

（へえ、同時に2体の動きを止めようってか……やるじゃねえか）

「ゴウカザル、ムクホークにかえんほうしゃ!」

攻撃する余裕ができたゴウカザルは、隙を見せたムクホークに特大のかえんほうしゃを放つ。

だが読んでいたのか、ゲンリの指示なしでもムクホークはゴウカザルの攻撃を回避し上昇。

「10まんボルト!!」

逃がさぬとばかりに、今度はヒカリの10まんボルトがムクホークを襲う。

「かみなりのキバ!!」

しかし——ドラピオンのかみなりのキバが10まんボルトを粉碎した。

「くっ……!」

「なかなかのコンビネーションじゃねえか、けどそんな程度じゃ届かねえぞ!!」

「だったら届かせてやるぜ! ゴウカザル、オーバー——」

「カイリ、まだそれは解放するな!!」

カイリの声を制するようなレイジの大声が、フィールドに響く。

あまりに大きかったからか、おもわず言葉を呑み込み指示を中断させるカイリ。

「レイジ、いきなり大声出すなよ!!」

「でも、まだそれは使う時じゃない!! まだ待つんだ!!」

「……わかった!」

(へえ……あの突撃思考のカイリを宥められるとはな。即席なんかじゃねえ、いいコンビだ)

「ゴウカザル、かえんほうしゃ!!」

「ヒカリ、10まんボルトだ!!」

今度はドラピオンへと攻撃を集中させる2人。

しかしそれを邪魔するかのように、ムクホークがドラピオンの前に。

「ムクホーク、まもる。」

ドラピオンはそのままクロスポイズン!!」

ヒカリとゴウカザルの攻撃を一身に受け、完全に防ぎきるムクホーク。

間髪入れずにドラピオンが前に行き、クロスポイズンを放つ。

攻撃の直後で動く事はできず、まともにクロスポイズンの攻撃を受けてしまった。

「ゴウカザル!!」

「……………」

立ち上がれるものの、ダメージは決して小さくない。

「どうしたカイリ、レイジ、お前達の力はそんなもんか!？」

「っ、強い……………」

「カイリさんとレイジさんのチームが圧されるなんて……」

「さすがはフロンティアブレーン候補……といった所かしら」

だが、まだ勝負が決まった訳じゃない。

それに、レイジとカイリの力はまだまだこんなものじゃないはずだ。

「ちくしょう……やっぱりアホみたいに強いぜ、親父は……」

「……………」

「レイジ、お前何か良い作戦とかないか？」

「なんだカイリ、お前はレイジにお守りされないとバトルできないのか？」

「何だと………！」

「悔しかったら、さっさとかかってきやがれ」

「上等だ。なら今すぐに倒して——」

「カイリ、挑発に乗る必要なんかないよ」

「っ、レイジ………！」

「僕はチームなんだ、なら君が僕に作戦を考えてほしいと願っても何もおかしい事はない。

君のゴウカザルのパワーは、あの人に勝つためには必要だ。だから、君は僕を信じて自分のバトルをしてくれればいい」

「……………だな。わりいレイジ、また頭に血が上っちゃった」

「構わないよ。カイリのその思い切りの良さは充分戦力になる。

——さあ、勝負はここからだよ!!」

「おう、任せろ!!」

（——いいチームだ）

レイジは、人を動かす能力に長けている。

カイリらしさを失わずに、十二分に実力を発揮させている、普通はなかなかできない事だ。

ポケモンバトルは、ただ純粋に実力が高いだけでは決してダメだ。

ダブルバトルにトリプルバトル、他のトレーナーと協力してバトルしなければならぬ時だってある。

そんな時、シングルの時と同じように動いた所で勝利はない。

それに引き換え、レイジは誰かと協力して戦うという能力が特別秀でている。

この2人がこれからも協力してバトルを続けていけば、きっとどこまでも高みへと登り詰める事ができるかもしれない。

尤も、まだまだ荒削りな部分もあるが。

「ヒカリ、ドラピオンにボルテッカー!!」

「ピカッ！！　ピカピカピカピカ……！！」

「そんな単純な攻撃くらうかよ。ムクホーク、まも——」

「マッハパンチ！！」

「何——！？」

まもるを発動させるよりも速く、ゴウカザルのマッハパンチがムクホークに放たれる。

ヒカリのボルテッカーは囧、真の狙いはムクホーク——！

「——甘えよ。ドラピオン、ゴウカザルにどくどくのキバ——！！」

しかしまだゲンリの裏を搔く事はできない、ゴウカザルに向かってどくどくのキバを放とうとするドラピオン。

——しかし

「甘えのは親父の方だぜ——！！」

「なに————！？」

その言葉の意味を理解するより早く、ゴウカザルはマッハパンチを止めドラピオンの攻撃を回避した。

「こいつ——っ——！！」

気づいたようだが、もう遅い。

——真の囹は、ゴウカザルの方だ

ムクホークはまもるを発動させておらず、隙を見せている。

「ボルテッカー・アイアンテール!!」

「ピッカッ!!」

そこに、渾身の一撃が深々と叩き込まれる——!

吹き飛ばされ、フィールドの外の木に叩きつけられるムクホーク。

「今だゴウカザル、オーバードライブ!!」

「ウツキイヤアアアアッ!!!!」

——吹き荒れる炎

自身の何倍もの蒼き炎に身を纏い、ゴウカザルは必殺の一撃の為に準備に入る。

「やるじゃねえかガキ共、だがまだだぜ……!!」

ムクホーク、ブレイブバード!! ドラピオン、ギガインパクト
「!!」

ゲンリも、ムクホーク達に必殺の一撃の指示を下した。

「ヒカリ、自分にかみなり!!」

そして——こちらの準備も整った。

「いくぜ、レイジ!!」

「タイミングはこちらに合わせて!!」

「おう!!」

迫り来るムクホークとドラピオン、生半可な一撃では決して対抗などできない。

だから——こちらも最高の一撃を以て、敵を迎え撃つ——!!

「ヒカリ!!」

「ゴウカザル!!」

掛けるべき言葉は、まったくの同時。

今この瞬間、刹那の時のみ互いの心は一つとなる。

「——デュアルボルテッカーだあっ!!」

「——ブルーフレア・バースト!!」

黄金の光と、蒼き炎。

「ピカピカピカピカピカピカ……!!」

それは互いに溶け合い、一つとなりまっすぐ向かっていく。

『いけええっ！！！』

「ピカピカピカピカピカ——ピッカッ！！」

ぶつかり合う互いの必殺の一撃。

それは爆発を引き起こし、レイジもカイリもおもわず手で顔を覆う。

耳をつんざくような爆音は、フタバタウン全体を包み込むように響き渡り。

ヒカリ達の身体は、煙によって包まれてしまった。

……。

「くっ……し、勝負はどうなった！？」

視線をフィールドに向けるが、煙に包まれているため姿は見えない。

凄まじいパワーのぶつかり合いだった、遠距離から攻撃したゴウカザルはまだ大丈夫だが、デュアルボルテッカーを放ったヒカリは……。

——煙が、少しずつ晴れていく

影は3つ、ヒカリとムクホークとドラピオンのものだ。

立っているのは……。

「――」

おもわず、息を呑んだ。

立っているのは……誰もいない。

ヒカリもムクホークもドラピオンも、揃って地面に倒れ込んでいた。

「ピカチュウ、ムクホーク、ドラピオン戦闘不能。ゲンリのポケモンが2体共に戦闘不能になった事により、勝者はレイジ・カイリチーム」

「……………」

この結果に、誰よりも驚いたのは――ゲンリだった。

確かにカイリは強くなった、旅に出た頃とは比べものにならないくらいに。

だがそれでも、まだ自分に適うとは思っていなかった。

（……レイジとのコンビネーションが、あいつを強くしたのか……）

彼が、カイリのトレーナーとしての力量を飛躍的に向上させた。

そしてこの2人が組んだからこそ、このバトルの勝利を導く事ができたのだろう。

(……たいしたもんだ)

「やったなレイジ!!」

「ヒカリは戦闘不能になっちゃったけどね」

そう返しながら、倒れているヒカリを抱きかかえる。

「ヒカリ、よく頑張ったね。偉かったよ」

——ごめんねレイジ、バトルには勝てたけどピカは負けちゃった。

「気にする事はないよ、よく頑張った、本当に」

慈しむように優しく撫でてあげると、ヒカリは嬉しそうに目を細めた。

「——やりやがったな、まさか本当に勝つとは思わなかったぜ」

「へっ、これで俺の方が親父より強いって証明できたな!」 「気にする事はないよ、よく頑張った、本当に」

慈しむように優しく撫でてあげると、ヒカリは嬉しそうに目を細めた。

「——やりやがったな、まさか本当に勝つとは思わなかったぜ」

「へっ、これで俺の方が親父より強いって証明できたな!」

「ボケ、レイジが居たから勝てたくせに天狗になってんじゃねえよ。お前1人じゃ、まだオレには勝てねえよ」

「んだと……!？　ならもう一度勝負するか？」

「いいぜ、ハナタレのガキ1人ならどうとでもならあな」

「っ、このクソ親父……だったら、次は完膚なきまでにぶっ倒す！
」

「やれるもんならやってみろガキ！」

「……………はあ」

わーわーぎゃーぎゃーと言い争いを続ける2人に、これ以上付き合
ってなんかいられない。

ため息をつき、レイジはその場から離れる。

「あの2人って、仲がいいのか悪いのかわかんないね」

「仲はいいわよ、ただ……似た者同士だから、すぐ喧嘩するの」

「ケンカするほど仲がいいって、あの2人にぴったり当てはまるね」

「かもね」

カグヤの言葉に、苦笑混じりにそう返しながら、その場を後にしよ
うとして。

「……………?」

レイジは立ち止まり、右手に視線を向けた。

――痛い

顔をしかめる程ではないが、僅かに痛みを伴っている。

どこかにぶつけた覚えなどないが……。

「レイジ、どうかしたの？」

「……いや」

この程度なら問題ない、そう自己完結させて視線を右手から逸らす。

「あの2人は暫く放っておきましょう、その間はわたしの家にも行ってましょうか」

「賛成ー！」

「……………」

若干の違和感。

小さく、けれど決して無視できない何かを抱えながら。

レイジは、その違和感から目を逸らしていた。

.....。

夜、レイジとロストはカイリの家に。

カグヤとミカンとシロナはヒメカの家に泊まる事になった。

時刻は夜中、既に日付は変わり全員が寝静まった頃。

——レイジは、1人眠れずに僅かな呻き声を上げていた

「は、あ——！」

右腕を左手で押さえ、布団の中で蠢く。

声を押し殺しながら、必死で右腕から発せられる痛みを抑えようとしていた。

「ぐ、な、んで……」

あの時、僅かに感じた痛みが、この時間になって増してしまった。

ズキズキと、まるで焼けた鉄の棒を押し付けられているような痛みと熱にうなされ、意識が混濁する。

無論、今までこんな事など一度もなかった。

右腕はまったく動かさなくせに、感覚だけはしっかりと残っており、このままでは発狂してしまいそうだ。

「っ、あ、ぐ——！」

歯を食いしばり、声が漏れないよう枕に顔を埋める。

幸いにもカイリ達とは違う部屋とはいえ、こんな声を聞かれでもしたら間違いなく心配される。

それは避けなくては、もうこれ以上みんなの負担を増やしたくない。その一心で、レイジはただひたすらに痛みと戦っていた。

「……身体、熱、い…」

譫言のような口調で呟き、レイジは荒い息のまま布団から這い出し外へ。

夜中のシンオウは涼しいどころか寒い、場所によっては氷点下になるくらいだ。

ここフタバタウンでも、現在の気温は1度未満。

だというのに、レイジは半袖のまま外に出た。

「あつ、い……」

冷たい空気と風がレイジの身体に直撃するが、それでも熱が冷める事はなくむしろ上がっていているような気さえた。

ありえない状況、だが熱にうなされた今の思考では冷静に理解する

事はできない。

「あ、は、あ、う——」

熱くて熱くて、思考どころか脳まで浸食されてしまいそうだ。

「はあ…はあ…はあ…」

膝をつき、芝生の上に転がる。

草のひんやりとした感触が、心地よい。

ただ、それでも身体を支配するような熱は収まってくれない。

（一体、何が……）

起きているというのか、幾分正常化してきた頭で必死に考える。

思えば、レックウザの時からどこかおかしかったかもしれない。

殆ど気にする程の事でもなかったし、実際忘れてしまう程度のものだった。

だから、誰にも話さず自身も気にする事もなかったのだが……今の状態はともじゃないが、無視できるものじゃない。

我慢ができないのだ、この状態で居続けるのが。

身体がどうにかなる前に自分自身がどうにかなってしまうのが、何よりも恐い。

「う、ぐ、あ……」

——また、右腕が痛み始める

左手で押さえないと、あまりの痛みで泣き叫んでしまいそうだ。

「っ、——っっ！」

歯を噛み砕かんとばかりの勢いで力を込め、身体を丸めてうずくまるレイジ。

彼は知らないが、これだけの痛みを発してから僅か10分足らずしか経っていない。

たったそれだけの短い時間でも、レイジは気が狂いそうになっていた。

それほどの痛みと熱が、彼のすべてを消そうとしていく。

「ぎ、が、あ———！」

消えたくない。

消えたくない。

消えたくない———！

必死で自分にそう言い聞かせながら、この地獄のような時間を耐えようと痛みから抗い続ける。

……。

どれくらい、そうしていたのか。

「――は、あ」

いつの間にか痛みは消え、熱も収まった。

今度はちゃんと冷たい風を感じる事ができ、つい身体を震わせてしまう。

（――何だったんだ、あれは）

あの痛みを思い出すだけで、身体が凍り付きそうになる。

それだけの苦しみがレイジに襲いかかったのだ、疑問より恐怖心の方が増してしまう。

「……………はあ」

芝生に寝転がり、空を見上げる。

遮るものがないからか、星空が良く見えいくらか気分が優れる。

（…………あの場所に戻れば、僕は自分の事がわかるんだろうか…………）

疑問は心の中で膨らみ、けれど解消される事はない。

――選定の時まで、あともう少し

運命が、レイジの前に現れるまで、あまり時間は残されていない……。

第87話 拒絶の結界く始まりの地へく（前書き）

フタバタウンにて、カイリとヒメカは久しぶりの帰郷を果たす。

そして、いよいよ始まりの地へ向かう為にレイジ達は空を飛んでいた……。

第87話 拒絶の結界く始まりの地へく

「――レイジ、始まりの地まであとどれくらいなんだ？」

カノンにしっかりと掴まりながら、隣でルギアに乗って飛んでいるレイジに声を掛けるカイリ。

しかし、レイジからの返事はなく、訝しげな表情を浮かべながら、もう一度声を掛けた。

「おい、レイジ！」

「……あつ、何？」

「何、じゃねえよ。始まりの地まであとどれくらいか訊いてんのに無視すんな」

「ごめん……えっと、あともう少しかな」

「もう少しって……結構飛んできたよな」

フタバタウンから飛び立って今日で6日目。

途中で野宿などを繰り返しながら移動し、今では人里から遠く離れた森の中をかれこれ三時間近く飛んでいる。

見渡す限り同じ景色が広がっており、いい加減うんざりしてきた所だ。

「大体、こんな中で見つけられるのか？」

「大丈夫だよ。いざとなったらティナもいるから迷ったりはしない」

「ね？」と自分の後ろに座るティナに声を掛けるレイジ。

〈はい。お任せくださいお父様〉

「だがレイジ、始まりの地はこんな秘境に存在するのか？」

「ええ。人が近寄る事ができないポケモン達だけの国……それが始まりの地です。」

何百年も人間に見つからなかった奇跡の土地ですから、世界中のポケモンが生活しているんですよ」

「世界中のポケモンかあ……もしかして、伝説のポケモンとかも暮らしてるの？」

「いや……でも、時々ミュウやユクシー達が遊びに来たりしてたよ」

「ミュウに……ユクシー!？」

「あれ……ユクシーって確か……」

「……知識の神と呼ばれる伝説のポケモン。」

ユクシーが飛び回った事で、知恵が生まれたと呼ばれる存在よ」

「で、伝説のポケモン!？」

「レイジくん、それは本当なの？」

「はい。ユクシーだけじゃなくて、エムリットにアグノムも来た事がありますよ」

「うへえ……ミュウだけでも驚きなのに、シンオウに伝わる伝説三
体も見た事あるのかよ……」

その時は、ユクシー達が珍しい存在だとは知らなかったけどね、苦笑混じりにそう言いながらレイジは言葉を続ける。

「じゃあ、ディアルガとかパルキアも始まりの地に来たことあるの？」

「……あのねえカグヤ、さすがにディアルガとパルキアは来た事ないよ」

「――皆さん、そろそろ降りますよ」

「あつ、そうだね。ルギア、降りてくれる？」

「わかった。このまま真下でいいのか？」

「そうだよ、お願い」

ゆっくりと下降し、地面付近まで降りていたら、各々乗ってきたポケモン達をボールに戻す。

「ここが、始まりの地なの？」

「違うよ。ここからは歩いていけないと」

「何だよ？」

「始まりの地には結界が張られているんだ、空から行ったら場所がわからないようにしている結界がね」

「結界って……」

「誰がどうやってやったかはわからない、けどその結界のおかげでここは人間達に干渉されずに済んだんだ。」

まあ、おじさんとおばさんが調査していた時は何故か結界が弱まっていたせいで、始まりの地の存在を知られてしまったんだけど」

さあ行くよ、そう言って先頭を歩くレイジ。

その後を、カグヤ達は慌てて追いかける。

――日の光が僅かしか差し込まない森の中を歩く

すると、カイリは僅かに顔をしかめ喉元に手を置く。

「あれ……？　なんか息苦しくねえか？」

「そういえば……」

「この森の中は高山のように酸素濃度が低いんだ、地上の六割くらいしかないらしいよ」

「どうして？　ここは標高が高いわけでもないしこれだけの木々があるなら光合成で酸素が余るくらいなのに……」

「僕も理由はわからないんですが、おそらく人払いの結界の影響か
と思います。」

この結界は人間にのみ働く結界みたいで……ほら、ティナは平気
そうでしょ？」

視線を送ると、確かにティナに変わった様子はなく、むしろここに
来ていつもより元気そうにも見える。

「ポケモンにとってはこの上なく快適な空間なんです……人間に
とっては、厳しい環境に調整されてるみたいです。」

僕は物心つく前からここに居るみたいですから、慣れてますけど」

「……なるほど、レイジの肉体が普通の人間より強靱な理由がこれ
でわかった」

このような環境で育てば、自然と鍛えられる。

しかし……その結界とやらは人間にとってマイナスでしかなく、ポ
ケモンにとってはプラスでしかないなど……人間を嫌っている者が
作り出したとは思えない。

「みんな、道のりは結構長いから油断しないで」

「お、おう……」

フタバタウンを出る前、レイジに「充分過ぎるくらいに準備してお
いて」と言われた時は、おもわず首を傾げたが……これでようやく
彼の言葉の意味を理解できた。

「……ミカン、大丈夫？」

「はいヒメカさん、私は大丈夫です」

「ならいいけど……もし辛くなったら、わたしなりカイリなりにちやんと言ってね？」

「ありがとうございます、そうさせてもらいますね」

「よし、それじゃあレッツゴー!!」

「……カグヤ、なんでお前はそんなに元気なんだよ」

……。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

歩き始めて二時間半、まったく景色が変わらない森の中を、レイジ達はひたすら歩き続けていた。

だが、ただ平地を歩いているだけだというのに体力を消費してしまうのはどういう事か。

旅でこのような道など、いくらでも歩いているというのに……。

「酸素濃度が低いから、すぐに息が上がってしまうのよ」

カイリの心を読んだかのように、シロナがそう口にする。

「さっきよりも薄いわ……多分地上の50%程度しかないでしょうね。」

まるで標高5000メートルの山を歩かされてる気分だわ……」

そう告げるシロナも、息が上がっている。

……それに、なんだか余計に肌寒くなってきた。

否、肌寒いというより痛いくらいに寒い。

前もってレイジに言われた通り、防寒具を身に着けているが……なんだか吐き出す息が凍りついてしまうのではないかと思えてしまう。

「うっ……はあ、はあ」

「ミカン!？」

うずくまるミカンに駆け寄るヒメカ、表情を見ると辛そうだ。

「……少し休もう。その方がいい」

「い、いえ……大丈夫ですレイジさん。ちょっと疲れただけで……」

「ダメですよミカンさん、休める時に休まないと取り返しのつかない事になりますから」

そう言いながら、レイジはすぐさまお湯を沸かす為の準備に取りか

かる。

「……ごめんなさい、足手まといですね……」

「何言っただよミカン、誰一人としてそんな事思ってる奴なんかいないって。」

それに俺もそろそろ休みたかったから、ちょうどいいさ」

明るい口調でそう言うと、ミカンも納得してくれたのか笑みを返してくれた。

「……それにしても、ここまで厳しい環境なのにポケモン達だけは何ともないなんて……一体どういう原理なのかしら」

「わかりませんけど……多分、相当な力を持った誰かだと思いますよ。」

ほらカグヤ、ちゃんと水分補給しないと」

「ありがとう。でもそういえばさっきからこまめに水分補給してっ
て言うけど、どうして？」

「ここは平地だけど、高所の空気と一緒にんだ。」

高所の空気は水蒸気の量が減って乾燥するから、脱水症状になる
のは防がないと」

「へえ……そうなんだ」

「そうだよ。だからカイリ達もちゃんと水を飲んでおくんだ」

へでも……本当に不思議な結界ですね。わたくしは何ともないどこ

ろか身体が軽いくらいなのに……人間であるお父様達だけがそのような厳しい環境に立たされる……。

そんなとんでもない結界を作るなんて、できるんでしょうか？

「さてね。でも実際こんなおかしい結界があるんだから、神様みたいな存在が作ったんじゃないかな？」

「……神様」

「？ シロナさん、どうかしましたか？」

何やら考え事をしているシロナにヒメカは声を掛けるが、返事が返ってこない。

彼女の様子に、全員が首を傾げる中、シロナは思い出したかのように顔を上げレイジに問うた。

「ねえレイジくん、貴方……アルセウスというポケモンを知ってる？」

「アルセウス……？」

聞いた事がない名前のポケモンだ、それがどうかしたの……。

（……アル、セウス？）

——待て

聞いた事などない、それは間違いないはずなのに。

どうしてか、その名前にどこか聞き覚えが――

「シロナさん、何ですかアルセウスって？」

「アルセウスは全てを創造したポケモンと呼ばれている存在よ」

「全てを、創造？」

いまいちピンと来ず、カグヤは首を傾げる。

「言葉通りの意味よ、この世界も……私達人間もポケモンと呼ばれる生物も、見る事ができない時や時空も全てアルセウスという存在が創り上げた。まさしく神様のように……」

「せ、世界を創り上げたポケモン!？」

「ディアルガとパルキアも、元々はアルセウスの分身だった。

時空や空間を管理する為にその2体を創り、そしてこの世の生物に知恵と感情と意志を持たせる為に、ユクシー、エムリット、アグノムの創り上げたとも言われてる」

「……………」

あまりにもスケールの大きな話に、レイジ達は何も言えずに固まってしまう。

だってそうだろう、全てを創り上げたポケモンが存在するなどと言われても、あっさり納得も理解もできるわけがない。

「レイジくん達と別れていた時に、アルセウスに関する記述が描か

れた石板を見つけたの。

残念ながら殆ど解読はできなかったけど……今話した内容は、全てその石板に書かれてあった内容よ」

「……ディアルガもパルキアも、そのアルセウスっていうポケモンが生み出して……。

なんか、頭が痛くなってきたな……」

頭を抱えるカイリだが、彼以外も同じ気持ちだった。

——ただ1人、レイジを除いては

「じゃあ、この結界はアルセウスが作ったのかもしれないですね。全てを創造する程の力があるなら、こんな結界を作れてもおかしくないでしょうし」

「そうね……けど、私が言いたかった事は別にあるの」

「えっ……?」

おもわずシロナに視線を向ける。

すると彼女は、ジッとレイジの顔を見ながら——こんな言葉を口にした。

「レイジくん、もしかしたら貴方の力は……アルセウスに関係しているんじゃないかしら」

と。

「……………は？」

間の抜けた声が、口から漏れる。

ちょっと待ってくれ、いきなり何を言っているんだ彼女は。

「ポケモンと会話をする能力、そしてあらゆるポケモンを文字通り元に戻す能力。」

それはまさしく、神と呼べるアルセウスに匹敵する程の力よ」

「……………」

「だがシロナ、その推測には無理がある。」

もしお前の言う通りレイジの力がアルセウスのものだとして、何故それがレイジに宿っているのか説明がつかない」

「確かに私の推測には無理があるし、的外れと言われてもおかしくないかもしれない。」

でも、そうじゃなきゃ説明が——」

「シロナさん」

彼女の言葉を遮るような大声で、レイジはシロナの名を呼んだ。

「レイジくん……」

「……大声を出してすみません、でも……今はゆっくり休んで始まりの地に向かう事だけを考えましょう」

そう告げ、レイジは道具を片付け始める。

まるで、それ以上シロナの話を聞きたくないかのように。

……。

——気温は、更に下がる

酸素濃度もそれに比例して低くなり、カグヤ達は用意した酸素スプレーで酸素を供給する。

その中で、レイジは何も喋らずに黙々と歩を進めていた。

「……おい、レイジ」

「何……?」

「少しペースを落としてくれ、ミカンやカグヤが置いてきぼりにされちまう」

「……………」

カイリに言われ、ようやく自分の歩くスピードが速過ぎる事に気づ

いた。

「……大丈夫か？」

「……うん、ごめん」

「気にすんな。……混乱しちまうのは、仕方ねえさ」

「……………」

「けどよ、さっきお前の言ったように今は始まりの地に行く事だけを考えようぜ？」

「うん……そうだね」

カイリの言葉に頷きを返し、レイジは少しだけ歩くスピードを緩める。

と。

「あっ………」

突然、レイジの前にポケモンが現れた。

ライチュウに、ピチューが2体。

ピチュー達はキョトンとした表情を浮かべ、ライチュウは何故か驚愕に満ちた表情になっている。

「わぁ、ピチューだ……可愛い」

「……あの子は」

ぽつりと呟きながら、レイジは少しずつライチュウ達に近づいていく。

すると、ピチュー達は脅えたように身体を縮こませるが……。

ライチュウがピチュー達の頭を撫で、安心させるように微笑んでいた。

「……空気が」

突然の登場に面食らっていたが、ここでようやくシロナはある事に気づいた。

——空気が変わった

あんなに寒かったのに、今は暖かくまるで春のようだ。

酸素濃度も元に戻り、むしろ地上よりも濃く美味しい空気となっている。

「……始まりの地に着いた証拠ですよ」

シロナの疑問に答えるようにレイジは告げ、自分を見上げているライチュウを抱きかかえた。

野生であるはずなのに、このライチュウは微塵もレイジを警戒してはいない。

むしろ嬉しそうに、自分からレイジの胸にすり寄っている。

「……やっぱり、君だったんだ」

「レイジ、そのライチュウ知り合いなのか？」

「うん。というより……この地で暮らしてるポケモンは、全員僕とティナの家族だよ。」

——ただいまライチュウ、前はピチューだったのに……遅しく成長したんだね」

頭を撫でると、ライチュウは嬉しそうに頬を綻ばせた。

すると、先程まで警戒していたピチュー達も、少しずつレイジ達に近づいていく。

「ライライ、ライツ！」

ライチュウがピチュー達に何かを伝えると、おずおずとレイジに手を伸ばしたので、彼は微笑みながらピチュー達を抱きかかえてあげた。

びっくりした表情を浮かべるものの、すぐに笑顔を浮かべるピチュー達。

と、周りの木々から次々とポケモン達が飛び出してくる。

キノココにワタッコ、ムクバードにコラッタにマメパト。

カントー、ハウエンだけでなく、遠く離れたイッシュ地方のポケモンまでもが、レイジ達の前に現れ始めた。

しかし、その殆どがレイジを除く人間——カグヤ達に警戒心と敵意の眼差しを向けている。

「みんな、彼女達は君達の敵じゃない。僕の大切な仲間なんだ」

「ライツ！ ライライライライ！！」

レイジとライチュウの声を聞き、一応理解してくれたようだが、やはりまだ完全に警戒を解いてはくれないようだ。

その時——空から翼を羽ばたかせる音と共に、新たなポケモンが地上に降りてきた。

「ホッホッホー、久しぶりに人間が来たと思ったら、まさかお主とは思わなかったぞレイジ」

嬉しそうにそう言ってきたのは、ふくろうポケモンのヨルノズク。

「つて、ヨルノズクが喋った！？」

それだけではない、こんなにも巨大なヨルノズクは初めて見た。

図鑑では大体1・5メートル程と説明されているのに対し、レイジ達の前にいるヨルノズクは体長が3メートルを優に越えている。

「このヨルノズクは百年以上前からこの森に暮らしてるんだ。

沢山の知識を持ってるし人間の言葉も喋れる、僕も色々な事を教

えてもらったんだ」

「そういえば、きのみから薬を作る知識はヨルノズクから教わったって言ってたよね？」

「そうだよ。人の言葉もヨルノズクから教わったんだ」

「大きくなったのうレイジ、それにしてもまた随分と人間を連れてきたものじゃな。」

それに……もしやお前はあのラルトスか？」

へはい。お久しぶりですね、ヨルノズク」

「ホッホー、お主も随分と成長したものじゃ」

「ヨルノズク、この人達は信頼できる僕の大切な仲間達だよ。」

あの時と同じように、誰にもここを言いふらしたりはしないから」

「ホッホッホ、わかっておるわかっておる。お主が連れてきたのならば信頼できるじゃろう。」

それに……その娘御の匂いは前に嗅いだ匂いとそっくりじゃ」

そう言いながら、ヨルノズクはカグヤに視線を向ける。

「えっ、私？」

「娘、お主……レイジを引き取った人間達の子供じゃな？」

「えっ……お父さんとお母さんを知ってるの？」

「もちろん知っておるとも、僕はレイジの親代わりをしておった。じゃからあの者達を試したのじゃよ、本当にレイジを真っ直ぐな子に育てる事ができるのかどうかをな」

「……………」

「しかし……あの結界を越えてくるとは、お主も随分逞しくなった。して、一体何用でここに戻ってきたんじゃ？」

「……とりあえず、レジギガス達に入っていいか訊いてくれな
いかな？」

「もちろんいいに決まっておろう、あやつらも久しぶりにレイジに会えるとわかったら喜ぶ」

「ううん。カグヤ達も……中に入りたいんだ」

「……なる程、確かにそれならばきちんと説明せねば納得はしない
か。」

あやつら、存外に石頭じゃからな」

ちよっと待っておれ、そう言うのと再び飛び立っていくヨルノズク。

「……………」

目の前の現実には、カグヤ達は目を丸くして驚く事しかできない。

喋る巨大なヨルノズクもそうだが、先程レイジが言ったとある名前
……………。

——レジギガス

シンオウに伝わる伝説のポケモンの名前だ、まさかそんな存在までもがこの始まりの地にいるなど信じられない。

「な、なあレイジ……レジギガスって、あのレジギガスだよな？」

「そうだよ。他にもレジロックにレジスチルにレジアイスもいる。この始まりの地を守る守護者なんだ、もし説明もせずにカイリ達を中に入れたら、間違いなく攻撃してくるからね」

「……お父さんとお母さんの時は大丈夫だったの？」

「危なかったらしいよ、入る前にヨルノズクが気がついたみたいで、レジギガス達をどうにか説得してくれたから良かったけど……下手すると、本当に殺されてたかも」

「うわぁ……」

レジギガス達は、かなり凶暴のようだ。

いや、自分達の楽園を守る為なのだから、仕方ないのかもしれないが。

「おぉーい、話はつけたぞー!!」

「早っ」

「ヨルノズクはこの地の長だからね、レジギガス達も大抵の事は許容してくれるから」

さあ入ろう、そう言ってさっさと森の奥に向かうレイジとティナ。

しかし……カイリ達は少しだけ躊躇ってしまう。

何せレジガス達の話聞いた直後なのだ、レイジとヨルノズクの事を信じていないわけではないが……やはりちよつと恐い。

とは思いつつも、レイジに再び呼ばれカイリ達もおっかなびっくり
彼等の後を追ったのだった。

第88話 帰郷く平和な国く（前書き）

厳しい環境を乗り越え、レイジ達は始まりの地へと辿り着く。

久しぶりの再会に懐かしむレイジであったが、すぐさま本題に入るためにこの地を守るレジガス達の元へ……。

第88話 帰郷（平和な国）

「うはぁ……」

「ふへえ……」

変な声を出しながら、カイリとカグヤは口を開けて驚いた。

——まるで、自然の楽園だ

おとなしくレイジ達についていくと、途中で洞窟の中に入り……その先には文字通り楽園が広がっていた。

草木と花に囲まれ、真ん中にはどうやって湧き出たのかとてつもない透明感の澄んだ湖。

空気も、どこか甘美な香りを含ませており、吸い込むだけで心が洗われるようだ。

それに広い、街三つ分以上の面積はありそうだ。

「……この世に、こんな所があるとはな」

さすがのロストも、この楽園を見て驚きを隠す事ができない。

……それにしても、この地に暮らすポケモンの何と多いことか。

カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、更にイッシュ地方まで。

世界中のポケモンがここに集まっており、ここに存在しないポケモンなど居ないと本気で思えるほどだ。

「マナー!!」

「フィーー!!」

そんな鳴き声と共に、湖からレイジに向かって飛び込んでくるポケモン達。

「あつ、こいつ……マナフィじゃねえか!?!」

「それにフィオネまで……!!」

「あつちにはシェイミがいますよ!!」

「あれは……ミュウ」

見渡すと、伝説や幻と謳われるポケモン達が自由気ままに遊んでいる姿が視界に入る。

「マジかよ……セレビィまでいるぜ」

「おい、セレビィ!」

「ビィ……?」

レイジに呼ばれ、顔を向けた瞬間——セレビィは一目散に彼の顔に飛びついた。

「ぶわっ、あはは……相変わらずだねセレビィ」

「ビィ!!」

久しぶりにレイジに会えてよほど嬉しいのか、満面の笑みのままクルクルと彼の周りを回り続けるセレビィ。

「……すげえ、もうすげえとしか言いようがねえよ」

「そうね……わたしも正直同じ気持ち」

「あっ、あのポケモン可愛い」

そう言うカグヤの視線の先にいるのは……チラーミィとチラチーノ。

どちらもイッシュ地方にしか生息しないはずのポケモンだ、カグヤは瞳を輝かせながらチラーミィ達に向かっていくが……。

「グオガアッ!!」

「ひゃあ!?!」

雄叫びを上げ、チラーミィ達を守るようにカグヤを威嚇するポケモンが。

「ウォーグル、この子はチラーミィ達に危害を加えたりしないよ」

苦笑しながらウォーグルにそう告げるレイジ。

ウォーグルもレイジがそう言うなら……とばかりに威嚇を止めてくれ

た。

「び…びびびっくりしたあ…」

「このウォーグルは凄く仲間思いなんだ、きっとカグヤの事をチラーミー達に危害を加える存在だと思っちゃったんだよ」

「そっか…驚かせてごめんねウォーグル」

しっかりと頭を下げて謝罪すると、ウォーグルは何も言わずにカグヤから離れていった。

口には出さなかったが、許してはくれたらしい。

それでは改めて…チラーミー達に近づこうとするカグヤだったが。

「後でね」

レイジに手を掴まれ、ズルズルと引っ張られてしまう。

「ああゝ！ おもいきり抱きしめて頼ずりとかしたかったのにゝ
！！」

「今はレジガス達に会いに行くのが先だよ。

——そうだ。みんな、話が終わるまで僕達のポケモンをここで遊ばせておくのはどうかな？」

「おっ、いいなそれ！」

このような快適な場所ならば、ポケモン達も喜んでくれるだろう。

カイリ達はすぐさまレイジの提案に乗り、手持ちのポケモンを全員場に出した。

「…………ミュウ、か」

「ミュウツー、あのミュウは君の元になった個体のミュウじゃないよ」

「そんな事はわかっている、だが…………ミュウを見てしまうと、な……」

「アクセル、ルギア、みんなをちゃんと見てあげてね？」

「お待たせください、父上の願いは必ず遂行してみせます！」

「それはいいが、ティナはどうする？」

「わたくしはお父様と一緒にレジギガス達に会いに行きます」

「あーっ、ずるいぞティナ。余も行く！！」

「ダメです。わたくしはちゃんと帰ってきた際の挨拶をしなくてはならないのですから、ちゃんとお父様の言ったようにしててくださいね？」

「むう…………」

ぷくーっ頬を膨らませ怒ってますという態度を見せるルギアだったが、ティナは気にせずに踵を返す。

そんな姿に苦笑しながらも、レイジはカグヤ達と共にヨルノズクの案内で更に奥へと進む。

「しかしまあ……すげえもんだな」

「そうだね。ここに居た頃はマナフィ達が珍しいポケモンとは知らなかったから、気にもしてなかったけど……」。

改めて帰ってくると、ここにはどれだけ凄いポケモンがいるのか再認識できた」

「ホッホッホー、それは無理からぬ事じゃよレイジ。」

この地は儂達ポケモンと呼ばれる存在にとって一番過ごしやすい環境じゃからな、様々なポケモンがこの地にやってきてても不思議じゃなからうて」

「ところで、どうやって人間の言葉を覚えたんだ？ いや、覚えたんですか？」

「ホッホー、無理して敬語など使わなくてもよいぞ坊や。」

なに、ただ今まで無駄に長く生きてきただけじゃ、人間の言葉など儂の生きてきた年月があれば充分覚えられるわい」

それに何といっても暇じゃからな、そう言ってカラカラと笑うヨルノズク。

「この地は、一体誰の手によって作られたのですか？」

「それはわからぬ。儂が小さかった時から既にこの地は存在しておった。」

——誰にもわからぬのじゃよ、この地を作り上げた者以外は」

——そうこうしているうちに辿り着いたようだ、ヨルノズクは突然立ち止まる

「この奥じゃ。まあ奴等は石頭じゃが儂とレイジがおるから大丈夫じゃろう、多分」

（多分って……）

なんだかまた行きたくなってきた。

そうは思っても、入るしかないのでカイリ達は少し警戒しながら部屋に入った。

……部屋といっても、岩をくり抜いて作られた無骨なものだ。

その奥に……レジギガス達は居た。

「うっ……」

おもわず、そんな呻き声を出してしまうカイリ。

だがしかし、勇気を出して奥へ。

「レジギガス、レジスチル、レジロック、レジアイス、久しぶり」

へお久しぶりです」

友達のように、レジギガス達に話し掛けるレイジ達。

すると、レジギガス達の顔……と思われる部分にある点字が、点滅し始めた。

「あやつらは言葉を発する事ができんが、ああやって意志の疎通くらいはできる。

レジギガス達も、久しぶりにレイジとティナに出会えた事が、嬉しいのじゃろう」

「へえ……」

「今回ここに戻ってきたのは、訊きたい事があるからなんだ。君達は僕の力の事を知ってるよね？」

頷くレジギガス達。

そしてレイジは、カイリに手を向ける。

「彼の名前はカイリ、僕と同じく不思議な力を持つてる。レジギガス、僕達の力について何か知らないかな？」

問いかけるレイジだが、レジギガス達は反応を返さない。

すると、代わりとばかりにヨルノズクが口を開いた。

「ホッホー、なるほど……今回お前が戻ってきたのはそのような理由があったのか。

レジギガス、どうやらレイジにアレを返す時が来たようだぞ」

「えっ……」

のそのそと移動し、奥へと入っていくレジギガス。

程なくして戻ってきたが……なにやら、見慣れないものを持ってきた。

手に持ったものを、レジギガスはレイジに手渡す。

よく見てみると……それは笛だった。

無骨で、何の飾り気もない白銀の横笛。

けれど――何故だろう。

この笛を、自分はどこかで見た事があるような……。

「これはお前がここで拾われた際に持っていたものじゃよ」

「僕が……？」

「テンガン山に行け。そうすれば全てわかるじやろう」

「テンガン山……」

「この笛を授けた者のメッセージじゃ、それ以上の事は儂にもわからん」

「……………」

澄んだ光沢が、まるで心を清らかにさせていくようだ。

無意識の内に、レイジはそれを強く握りしめていた。

「おそらく、その笛を持ってテンガン山に行けば全てがわかるかもしれない」

「……ありがとう、ヨルノズク」

「……綺麗な笛だね、ちょっと見せて？」

「いいけど、落したりしないでね？」

「むっ……失礼だねレイジ、私そんなにおっちょこちよいじゃないもん！」

よく言うよ、とは言わないでおく。

レイジから笛を受け取り、瞳を輝かせるカグヤ。

まるで新しいオモチャを買って貰った子供のようにはしゃいでいる。

「ホッホー、これから帰るとちと辛いだろうから、今夜はここに泊まっていくとよい」

「えっ、いいのか!？」

「ホッホッホー、もちろんじゃよ」

ヨルノズクの言葉に、カイリはキャッホーと飛び上がりながら喜んだ。

それを見て、ヒメカが恥ずかしそうに顔を手で押さえていたのはまた別の話。

……。

「――しかしまあ、すげえ人気だなレイジの奴」

携帯食料を口にしつつ、カイリは少し離れた所で数多くのポケモン達に抱きつかれたり乗っかられたりしているレイジに視線を向けた。小さなポケモンならともかくとして、リングマやサイドンなどに迫られたらかなり恐いだろう、というか身の危険を感じてしまう。

「ホッホッホ、レイジが帰ってきたのは実に九年振りじゃからな。嬉しくて嬉しくて仕方ないんじゃない」

「レイジくんはポケモンを本当に大事にしているから、自然と慕われるのよ」

「じゃが、お主達も農達のような存在を心から大事にしてくれているではないか。

見るだけでわかるぞ、優しい子達じゃな」

「へへ……なんか照れちゃうな」

「特にあの子なんか特にその気持ち強い」

そう告げるヨルノズクの視線の先には……チラーミィ達と一緒に
って走り回っているカグヤの姿が。

チラーミィ達だけではない、ヒマナツツやパチリスといった小さな
ポケモン達とも一緒に遊んでいる。

端から見ていて、本当に楽しそうに遊んでいるようにしか見えない。

いや、実際は楽しく遊んでいるのだろう。

「レイジは良い友達を持ったものじゃな……」

感慨深げに頷くヨルノズク、その顔はまるで父親のように優しく穏
やかなものだ。

実際、ゲンジ達に引き取られるまでは、このヨルノズクが育ててい
たのだから、レイジを息子のように思っているのかもしれない。

「ホッホー、ところでその青年」

「……おれか？」

「うむ、そうじゃ。珍しいの、炎の民が外界に出ているとは」

「……炎の、民？」

「ヨルノズクのじいちゃん、炎の民って何だ？」

「炎の民とは、炎と生き炎と共に生涯を終える、特別な炎ポケモンを操る者達の事じゃ」

「―――」

息が止まる。

ヨルノズクの言葉を理解するのに、数秒を要した。

「……ねえ、ロスト。もしかして……」

「ん？ 何じゃ、何かあるのか？」

「……実は彼、記憶喪失なのよ」

「なんと、そうじゃったのか……」

「けどよヨルノズクのじいちゃん、ロストさんがその炎の民っていうのは本当なのか？」

「間違いないだろう、あのバクフーンがなによりの証拠じゃ。

炎の民はまじないとして、己のポケモンに特別な紋章を刻む。

ほれ、左足にあるのが見えるじゃろう？」

ヨルノズクの言われ、確かに何かがレジェンドの身体に彫られている事に気づいた。

「そういえばロストさん、記憶喪失だと自覚した時にはレジェンドだけが傍に居たんですよね？」

「あ、ああ……それに、あいつの名前だけは何故か覚えてた」

「だとすると、ロストさんは……」

「間違いなく炎の民じゃよお主は、あのバクフーンが何よりの証拠じゃ」

「……………」

ずっとわからなかった自分の出生、それがこんな形で手がかりを得られるとは……。

「……炎の民は、どこに居るんだ？」

震える声で、どうにかそう問いかける。

「炎の民は総じて気温の高い厳しい環境の中で暮らしておる。

シンオウならば……ハードマウンテン辺りか」

「ハードマウンテン……」

「そこに、ロストさんの家族が……」

「家族がいるかどうかはわからん、じゃが……お主を知っておる者が居るかもしれんな」

「……………」

「やったわねロスト、これであなたの家族が見つかるかもしれない」

「あ、ああ……そうだな」

シロナの言葉にも、あまり反応を返せない。

自分の手ががり、ずっと探しても見つけれなかったものを、こんな所で見つかるなど思わなかった。

嬉しいという気持ちは確かにある、だが……今は驚きの方が大きい。

「ホッホッホー、喜びのあまり上手く言葉が出ないようじゃな。

まあ……無理もないかもしれんが」

「……感謝する。本当に……ありがとう」

地面についてしまうくらい頭を下げ、感謝の言葉を告げるロスト。

しかしヨルノズクは、ニコニコと笑みを浮かべるだけで、何も言うとはしなかった。

「ロストさん、よかったですね！」

カグヤも自分の事のように喜ぶが、両手いっぱいにはチラーミィ達を乗せ、更に頭にはチラチーノを乗せているので、いまいちその事で喜んでいるのかわからない。

「お前、なんだよそのチラーミィ達は……」

「えへへ、だって可愛いんだもんチラーミィもチラチーノも」

チラーミィ達もすっかりカグヤに慣れたのか、もっと遊んでとせが

んできている。

「ホッホッホー、カグヤはポケモンに好かれる才能があるようじゃ」

「えへへ……」

「やれやれ……」

カグヤの様子に呆れたような表情を浮かべるカイリ。

そんな彼に、マナフィはいたずらっぽい笑みを浮かべ……。

「マナッ!!」

おもいつきりカイリの顔面にみずてっぼうをぶちかました。

「ぶふっ!?!」

「マナッ、マナマナ!」

みずてっぼうの直撃を受けたカイリの顔が面白かったのか、手をパチパチと叩き喜ぶマナフィ。

「~~~~っ、何しやがるマナフィ!!」

がーっ、と怒りながらマナフィを追いかけるカイリ。

しかしマナフィはすぐさまオオスバメの背に乗り逃げ出し始める。

「逃がすかー!!」

「マナマナッ!」

遊んでもらえて嬉しいのか、マナフィは始終ニコニコと笑みを浮かべ、追いかけてっこを興じていた。

「まったくもう……」

「ふふっ……」

呆れ顔のヒメカと、楽しそうに笑うミカン。

のんびりとした平和を、皆充分過ぎる程に楽しんでいた……。

……。

――翌日

「もう行くのか。残念じゃのう」

「また来るよ。……色々と問題を片づけたら、必ず」

「チラーミィ、チラチーノ、別れるの辛いけど……また会おうね」

何やら今生の別れみたいな事をしているカグヤとチラーミィ達は、

とりあえず無視。

「マナフィ、次は負けないからな？」

「マナツ!!」

カイリとマナフィは、拳を握りしめ合い闘志を燃やしている。

「それじゃあ……またねヨルノズク」

ボールからリオンを出し背中に乗る。

行きは徒歩で行かなければならなかったが、帰りは飛んで帰れるので楽だ。

「では、また会おう」

ヨルノズクだけでなく、沢山のポケモン達がレイジ達を見送ってくれた。

その全員に手を振り返しながら、レイジ達は上空へ。

「あれ？ 上から見ると入口がまったく見えなくなるんだな……」

下に見えるのは木々だけで、入口などは影も形も見えない。

「それで、これからすぐにテングガン山に行くの？」

「そのつもりだけど……今日1日で行くのは無理だね……」

少なくとも、どこか途中で休まなくてはテンガン山には登れない。

あの山はシロナの話によると年中吹雪いている場所で、始まりの地へと向かう道と同じくらい厳しい環境らしい。

しっかりと準備を整えなくては、間違いなく途中で挫折する事になるだろう。

「なら、カンナギに行きましょう。あそこならテンガン山からも近いし……たまには、実家にも顔を出したいから」

「シロナさんってカンナギの生まれなんですか？」

「ええ。そうよ」

「……決まりだなレイジ、次はカンナギタウンか」

「……そうですね。みんなもいいかな？」

「意義なーし」

「右に同じ」

「そっちは左よカイリ、わたしもミカンも意見はないわでは決まりだ。」

「シロナさん、案内お願いします」

わかったわ、そう返して先頭を飛ぶシロナ。

その後ろについていきながら……レイジはバックにしまった白銀の笛を手取る。

(……この笛、一体何なんだろう)

疑問に思っても、答えがわかるわけでも返ってくるわけでもなく。

レイジは再びバックの中にしまい込み、前方に視線を戻した。

第89話 暗躍する影く集う三種の力く（前書き）

始まりの地にて、ここで拾われた際に持っていたという笛を手に、レイジ達はテンガン山を目指す。

途中で休憩をしようと、一度シロナの故郷であるカンナギタウンへと向かったのだが……。

第89話 暗躍する影く集う三種の力く

「――もうすぐカンナギに着くわよみんな」

「シロナさん、カンナギってどんな街なんですか？」

「そうね……都会と比べて何もないけど……古い歴史がある、私にとっては素敵な場所よ」

「シロナさんはそこで暮らしているんですか？」

「いいえ。いつもは一人暮らししてるの、けどそこにはお婆あちやんと妹が暮らしてる」

「へえ……シロナさんの妹か……きっと美人なんだろうなあ」

「……ちよつと」

「カイリさん？」

ジト目で睨み、カイリの頬を左右から引つ張り上げるヒメカとミカ
ン。

「いだだだだっ!？」

「まったくもう……」

「カイリさん、デレデレしないでください!」

「……はい、すみませんでした」

「ふふっ……大丈夫よヒメカ、ミカン。

妹のイリナはまだ9歳だから、手を出したら犯罪になるわ」

「……なんだ、9歳か」

「なにガッカリしてるのよ！」

「カイリさくん？」

「いででででっ!？」

ぎゃーぎゃーと喚くカイリ達を見ながら、他のメンバーは笑みを浮かべている。

その中で――レイジは、1人静かに自分の手を見つめていた。

「……………」

何度も手を握ったり開いたりを繰り返す。

まるで、自分の身体に異常がないか調べるかのように……。

「レイジ、どうかしたの？」

ルギアに乗りながら、レイジに話しかけるカグヤ。

ちなみに何故ラティオスに乗らないかというと、ロストが乗って移動しているからであるがそれはさておき。

「……いや、別になんでもない」

「何でもないようには見えないから訊いてるの。」

「——どこか身体の調子でも悪いの？」

「……本当に、なんでもないから」

これ以上話しかけないでくれ、そう言わんばかりの素っ気ない口調。それを感じ取り、カグヤも内心首を傾げながらもこれ以上は何も訊かなかった。

（……何だろう、この違和感は）

身体の内側から、何かが壊れていくような不思議な感覚。

気にする必要のない小さな変化、けれどその変化が何より恐ろしく思えた。

一体自分の身体に何が起きているのかわからないという現実は、少しずつレイジの心を蝕んでいった。

「——見えた。あれがカンナギタウンよ」

シロナの声で、思考を中断させる。

前方に視線を向けると、歴史を感じさせるような古い建物が視界の中に入った。

（あれが……カンナギタウン）

シロナの故郷であり、歴史を今に伝える――

「――――」

息が、止まった。

息だけではない、思考も感情も凍り付いていく。

なんだ。

なんだ、これは。

なんだ、この圧倒的なまでの虚無感は。

カンナギ全体を覆うような、虚無の意識。

しかしその中で――何度も感じた事がある、あの力の片鱗、が。

その時、いきなりレイジのボールからアクセルとティナが飛び出してきた。

彼女達だけではない、シロナとロストのボールからもルカリオが飛び出してきた。

「アクセル、ティナ？」

へ……父上、あの街……何かおかしいですへ

へこの不思議な感覚は、危険です……へ

「……ルカリオ、あなたもアクセルと同じものを感じたの？」

シロナの問いに、それぞれ大きく頷きを返すルカリオ達。

しかし、アクセル達もそれが何なのかはわからないようだ。

尤も——危険なものだという認識は、誰もが感じているようだが。

「——急ぎましょう」

言うやいなや、カンナギへ向けて飛ぶスピードを速めるようリオンに指示を出すレイジ。

他の面々もすぐさま同じ指示を告げ、急ぎカンナギへと向かった。

……。

街に降り立つレイジ達であったが、周りを眺めても特別おかしな所は見受けられない。

住民は普通に周りを歩いているし、雰囲気を見てもごく平凡な日常にしか見えない。

しかし……先程から感じる虚無感は、増していくばかりだ。

「――とりあえず、私の家に行きましょう」

頷き、シロナの後に続くレイジ達。

程なくして、一行はシロナの実家へと辿り着いたのだが……。

「……………」

おかしい、レイジはすぐさまこの家から感じる異常を察知した。

まず第一に、ドアが開けっ放しになっている事自体が不自然だ、それに中から人の気配がしないとはどういう……。

「アクセル、先行して家の中へ」

〈はい！〉

臨戦態勢になりながら、アクセルは素早くシロナの家の中へ。

暫し待つと、すぐさまアクセルがレイジの元に戻ってきた。

〈父上、この家……中に誰もいません〉

「えっ……?」

「……………」

アクセルの言葉を聞き、レイジはすぐさま家の中に入る。

そして——目の前の現実を見て唇を噛みしめた。

——誰もいない

アクセルの言った通り、中には誰一人として存在していなかった。

しかし生活感はそのままなので、まるで人間だけが忽然と姿を消したようで寒気さえする。

否——まるで、などでは決してない。

いなくなったのだ、この場から。

「おばあちゃん、イリナ!？」

シロナの叫ぶような声が、後ろから聞こえる。

「なんだ、留守なのか……? だとしたら不用心だな……」

「——いや、どうやらそうじゃないらしい」

カイリの呟きにそう返しながら、レイジはテーブルの上に置かれた

一枚の紙を手に取り、シロナ達に見せた。

「っ！！？」

それを見て、シロナは目を見開いてその場で膝をつく。

「シロナさん！？」

「お、おい……これってまさか………！」

「……そのまさかだ。こんな事までするなんて……よほど性根が腐ってしまってるらしい……！」

怒りを含ませた声でそう吐き捨てながら、レイジはもう一度紙に書かれた文面に目を通す。

——それは、脅迫状

内容は、シロナの祖母と妹であるイリナの身はこちらで預かっている、つまり誘拐した事が綴られていた。

そして、返してほしくば手持ちポケモン達を置きシロナとレイジの2人でエイチ湖まで来いと……。

「何なんだよこれ……ふざけんな！！」

「い、一体誰がこんな事を……」

「決まってるさ。……ロケット団だよ」

自分達の事を知っており、尚且つこのような事をする者などロケット団以外には有り得ない。

「あいつら………!!」

怒りからか、拳を握りしめ飛び出そうとするカイリ。

だが、それをレイジが引き止める。

「カイリ、ダメだよ行ったりしたら」

「何だよ!？」

「あいつらは僕とシロナさんの2人だけで来いと言った。

それなのにカイリが行ったら、人質の安全は保証できない」

「うっ………!!」

「けど、おとなしく行ったところで、あの人達が素直に人質を返すとは思えないわよ?」

ヒメカの言葉に、レイジとシロナ以外の全員が頷きを返す。

確かにそうだ、あの非道な連中がおとなしく人質を返すとは思えない。

「だけど、だからって向こうの要求を無視するわけにはいかないよ。こちらの選択肢は限られてる、それはみんなだってわかってるんじゃないか?」

「それ、は……」

そう言われてしまうと、何も言い返せない。

レイジの言う通り選択肢は限られている、無事に人質となった2人を取り返す可能性がある唯一の方法は――相手の要求を呑む事だ。

「……みんなはここに居るんだ、絶対に来たらダメだよ？」

「だけど………！」

「ダメだ!!」

「っ」

声を張り上げるレイジに、カグヤはびくりと反応し身体を縮こませた。

それには構わず、レイジは両膝を地面につき両手でどうにか自分を支えているシロナの肩に手を置く。

「……シロナさん、行きましょう。2人を取り戻さない」と

「……………」

「あまり時間はありません、こうしている間にも妹さんは恐がってるかもしれないですよ？」

「だ、だけど……レイジくんが」

「僕の事なら気にしないでください、それより今は2人を助ける事だけを考えましょう」

優しく告げ、シロナを立たせる。

まだショックから抜けきれていないのか少しふらついているが、これならば大丈夫そうだ。

腰に装着したホルスターごと、ティナ達が入ったボールをテーブルに置く。

シロナもまた、同じくホルスターをテーブルに置いた。

「いいね？ 絶対に来たらダメだから」

釘をさし、レイジはシロナを連れて外へ。

(…………さて、と)

こっちの立場は圧倒的に不利だ、このままバカ正直に行けば間違いなく人質どころか自分達の身を守る事はできない。

(向こうが小細工を仕掛けたのなら……)

こちらの一つ、小細工を仕掛けるとしよう……。

…………。

——エイチ湖

シンオウ地方に存在する湖の一つであり、雪が降り積もるその光景はただひたすらに美しい。

その景観を壊すように、居てはならぬ存在が待ち人を待ち続けた。

組織名はロケット団、そして中には——かつてレイジ達と死闘を繰り広げたフレアとマードの姿が。

「おいフレア、なんでこんな回りくどい事をしたんだよ？」

人質なんて使わなくても、奇襲を仕掛ければ簡単じゃねえのか？」

ちらりと両手両足を縛られ動けない人質——シロナの祖母であるカラシナとシロナの妹であるイリナに視線を送りながら、マードは面倒そうに訪ねる。

「何を言ってるの、たとえ今持っているデッドポケモンを用いても坊や達には勝てない。」

それだけの強さになってるのよ、向こうは」

「チッ……面白くねえ」

「……一体、何が目的なんじゃ？」

拘束されながらも少しも怯えず、威圧的に問いかけるカラシナ。

それを見て内心感心しながら、フレアはその問いに答えた。

「そうね、目的は2つあるわ。

1つはレイジという少年を、こちら側の人間にすること。

そしてもう1つは――」

「そんな事どうでもいいよ！ あんた達なんかもうすぐお姉ちゃんがやってきてやっつけてやるんだから！！」

「……このガキ、少し黙らせるか」

拳を握りしめるマード、それを手で制しながらフレアはイリナの元へ。

「フフッ、さすがシンオウチャンピオンの妹と言った所かしら……でもねお嬢ちゃん、たとえトレーナーとしてどんなに強くても、ポケモンがなければ何もできないのよ、あなたのお姉ちゃんは」

「そんな事ない！ お姉ちゃんは絶対にあんた達なんかには負けないんだから！！」

それに……お姉ちゃんの王子様が一緒だもん！」

「王子様……？ ああ……坊やの事ね」

「――おい」

短いマードの言葉に、フレアは後ろに振り向く。

「……もう少しお嬢ちゃんをからかって遊びたかったけど……どうやら、来たみたいね」

——前方から、まっすぐこちらに近づいてくる2つの影

確認しなくてもわかる、あれは……こちらが待ち続けていた彼等だ。

「お姉ちゃん!!」

「シロナ……」

「っ、おばあちゃん……イリナ!!」

駆け寄ろうとするシロナ、しかしそれを阻むかのように下っ端達が移動する。

「どきなさい!!」

「チャンピオン、それ以上近づいてはダメよ。

この2人の身の安全は保証できなくなるわ」

「くっ……!!」

射殺するような殺気を込めてフレアを睨むが、立場が圧倒的に有利な彼女には通用しない。

そして視線をレイジに向け、どこか嬉しそうに語りかけた。

「久しぶりね坊や、まさかシンオウに来てるなんて……また会えて嬉しいわ」

「……2人を離せ」

軽口につき合う暇はない、レイジの口調にはそんな言葉が込められている。それを感じ取り、フレアは残念と呟き肩を竦めた。

「それはできない相談よ坊や、あなただってワタシ達がすぐに人質を解放すると思う？」

「なら、さっさとそちらの用件を言え！！」

「……言わないと、わからないの？」

「……僕が、そっちに行けばいいのか？」

「そうよ。さすが坊やは恐いくらいに物分かりがいいわね」

「………わかった、だが先に2人を離せ！！」

「ダメよ。それに、ワタシ達に要求できる立場じゃないとわからないのかしら？」

「———っ」

ギリと歯を鳴らし、レイジは少しずつフレア達の元へ。

「レイジくん！！」

「チャンピオンはその場から動かないで、動けば人質を殺すわよ？」

「くっ……！！」

「シロナさん、大丈夫です。2人は……必ず助けますから」

「でも、レイジくんが……!!」

「大丈夫です。僕は大丈夫ですか——ぐあっ!？」

そこまで言いかけ、腹部に鈍痛が走りおもわず膝をつく。

胃の内容物が喉元までせり上がり、涙目になりながらもレイジは顔を上げた。

「ラブロマンスでもやってんのか？ クソガキ」

そこには、ニタニタと腹が立つ笑みを浮かべたマードラの姿が。

確認しなくてもわかる、マードラがいきなりレイジの腹部を蹴り飛ばしたのだ。

「マードラ、何をしているの!!」

「いいじゃねえか、どうせこのままコイツをボスに届けて人質はあ
のガキ共ごと始末するだけなんだ。」

なら……今までの鬱憤を払っても罰は当たらねえだろ?」

「くっ……やっぱり、初めから人質を返すつもりは……!!」

「あるわけねえだろうがバーカ!!」

「が、は——!？」

顔を蹴られ、痛みと共に赤い液体が視界を汚す。

その後も、マードは容赦なくレイジの身体を痛めつける。

殴り、蹴り、踏みにじる、まるで殺さんばかりの勢いだ。

「オラァッ、悔しいかガキが！！ ポケモンが居なきゃ何もできないクソガキのくせに、よくもオレ様をコケにしてきやがったな！！」

「ぐ、あ、はぐー！！」

「やめてえ！！」

レイジを助けようと駆け寄るシロナを、周りの団員が彼女の両腕を掴み阻止する。

「くっ、放して、放しなさい！！」

「クカカカツ、テメエは黙ってそこで見てやがれチャンピオン！！ この生意気なガキが、ボロ雑巾みたいになる様をなあっ！！」

完全に正気を失ったマードは、尚もレイジを殴り続けた。

飛び散る血にも構わず、むしろそれすらも楽しそうに殴り続ける。

やがて疲れたのか、息を上げながらレイジから一步離れる。

「はぁ…はぁ…ど、どうだクソガキ。

ここで土下座して謝るなら、許してやってもいいんだぜ？」

「……………」

レイジは答えない。

しかし口元は動いているので、何か喋っているのはわかるが、聞き取れなかった。

「ああ？」

「……………か？」

まだ聞こえない、だからもっと近くまで寄ってみると。

レイジは痣と血でまみれた顔を上げ、はっきりと言い放った。

「これで、満足か？」

と。

あれだけ痛めつけられたというのに、少しも恐怖の色を感じさせずに、小馬鹿にしたような口調でそう口にした。

「テ——」

「僕を殴りたいならいくらでも殴ればいい、だけど……もしシロナさんの大切な家族に手を出してみろ。

——少しずつバラバラに切り刻んで、死ぬよりも苦しい体験をさせてやる」

冷たく、殺意に満ちた瞳は決して脅してではない。

否が応でもそう理解させられるほど、彼の瞳は凄まじかった。

おもわず、マードは一步後退る。

この状況でも尚、こんな瞳を宿す少年に対して、マードは恐怖だけでなくある義務感すら湧き上がってくる。

——コイツを、今この場で確実に殺しておかねばならない、という義務感が

「マード、それ以上はやめなさい!!」

「……………」

「……マード？」

「……………フレア、このガキはこの場で始末する」

「なっ——何を言っているのマード、この坊やはボスに」

「コイツは、確実に殺しておかねえといけない類の人間だ!!
飼い慣らす前に、オレ達を噛み殺すぞ!!」

レイジから離れ、デッドボールからクロバットを取り出す。

「クロバット、コイツを噛み殺せ!!」

加減などしない、否、できない。

すぐさま指示を出し、クロバットはレイジの喉元目掛けて己の牙を突き立てようと迫る。

「レイジくん!!」

「坊や、逃げなさい!!」

「……………」

レイジは、ただ黙ってクロバットを見つめている。

そして、クロバットの牙がレイジに深々と突き刺さろうとした時。

「——サンダース、10まんボルト」

そんな声が、エイチ湖へと響き渡った。——電撃が、クロバットを包み込む

その場に居る誰もが、目の前の光景を理解できない中。

レイジだけは、動きを見せた。

「し——!!」

マーダの顔面に突き刺さる右ストレート。

完全に無防備となっていた彼は、悲鳴を上げぬまま数メートル吹き飛ぶ。

それを見届ける間もなく、捕らわれているカラシナとイリナの元へ地を蹴った。

「っ、止まりなさい坊や!!」

ようやく我に返るフレアだったが、気づくには少しだけ時間が足りない。

「バシャーモ、かえんほうしゃ。

ドダイトス、リーフストーム」

まとも森の影から繰り出される攻撃。

かえんほうしゃがシロナの周りに居る団員を蹴散らし。

リーフストームが、レイジの道を助ける標となる。

「だぁ——っ!」

カラシナ達の近くにいる団員達を、次々と気絶させていく。

それと同時に、彼女を掴み上げシロナの元へ。

「おばあちゃん、イリナ!!」

すぐさま2人を縛っている縄を解く。

イリナは泣く一歩手前の顔になり、シロナに抱きついた。

「お姉ちゃん……恐かったよお……」

「よかった……本当によかった」

「……………」

感動の場面を見る間もなく、視線をフレアへと向けるレイジ。

その瞳には、凄まじいまでの怒りと……憐れみの色が混じっていた。

「……おかしいわね、坊やの仲間達は来てないはずなのに」

「……仲間を1人忘れてるよ」

「誰が仲間だ。勝手な解釈をするな」

レイジの言葉にそう返しながら、森の中から現れたのは……意外な人物だった。

「君は……」

「——ありがとうレイジ、助かったよ」

「フン、相変わらず甘い奴だなお前は。なんだその無様な姿は？」

「それは言わないでほしいかな……」

苦笑するレイジに、フンと鼻を鳴らすケイジ。

——エイチ湖に向かう途中、レイジは密かにケイジへと連絡をしていたのだ

彼がシンオウに居たのは知っていたから、伏兵として呼び寄せたのだが……作戦は見事に成功したらしい。

そして——他のメンバーも全員集合した。

「レイジ!!」

後ろから掛けられた声に振り向き、こちらに向かって投げられたものを受け取る。

それはボールホルスター、レイジの大切な仲間達が入った力の源。

「シロナさん、はい!」

シロナのボールホルスターを渡すカグヤ。

「カグヤ、みんな……」

「レイジ、遅くなってすまない。意地でも行かせないように邪魔をした連中がいたようだな……」

「って、お前すげえ怪我じゃねえか!？」

てか、なんでケイジがここに居るんだ!？」

「相変わらず騒がしい奴だな、カイリ」

「んだとおっ!？」

「ははは……」

あれだけ来るなど言ったのに……そう思ったが、よくよく考えたら彼等にそんな事を言っても素直に利くはずがないと理解する。

気が緩みそうになるが、まだすべてが終わったわけではない。

「……さあ、形勢逆転だ」

「レイジ、そんな事より怪我が……」

「大丈夫。……このままおとなしく負けを認めるんだ、いくらデッドポケモンを所有していたって、この人数相手なら勝てないとわかっているはずだぞ」

「……………」

「ち、調子に乗りやがって……」

殴られたダメージから回復したのか、マードが起き上がりこちらに近づいてくるが……。

それを制するように、フレアは彼に手を翳す。

「やめなさいマード、確かに坊やの言う通り……デッドポケモンだけでは相手はできないわ」

「っ、じゃあこのまま負けを——」

「忘れたの？　ボスから万が一にと渡されたアレがあるでしょ？」

その言葉に、マードはニヤリと口元を歪ませる。

すると、フレアは後ろに振り向き——不思議な名を口にした。

「——出てきなさい、アス」

彼女に呼ばれ、レイジ達の前に現れたのは……理解できない格好の、人間だった。

全身を、黒く分厚い鎧のようなもので包み、顔にもフルフェイスの黒い兜を身につけ顔は見えない。

鎧姿でも線が細いので、おそらく女性……それも少女と呼べるほどの年頃だろうか。

「坊や達、死にたくなければ全力で戦った方がいいわよ。

——アス、あの帽子を被った坊や以外はすべて始末しなさい。もちろんポケモンもよ」

こくりと頷き、少しだけ身体を屈めるアスと呼ばれた人物。

「まさか、生身でポケモンと戦うつもりなのか？」

「そのまさかよ。けど……この子をただの人間だと思ってもらったら困るわね

さあアス、やってしまいなさい」

「……………」

（生身の人間が、ポケモンと戦う……？）

それは不可能だ、いかに身体を鍛えた人間だったとしても、手加減しているならともかく、本気を出したポケモンには勝てるわけがない。

——そう、勝てるわけがないのに

レイジは気がつく、ホルスターに手を伸ばし瞬時にアクセルの入ったボールを投げつけた。

解放され、場に出てくるアクセル。

——刹那

風切り音を響かせながら、黒い悪魔は一瞬で間合いを詰め……。

その拳を、出てきたばかりのアクセルに叩き込んでいた――

第90話 魔の波導遣いゝ消えていく心ゝ（前書き）

ケイジの登場により、危機一髪の状況を覆したレイジ達。

しかし、そんな彼等の前に現れたのは……1人の人間。

その人間が、レイジ達と死闘を繰り広げようなど……まだ誰も気づかなかった。

第90話 魔の波導遣いゝ消えていく心ゝ

へが、は——！？

何の変哲もない、単なる右ストレート。

拳も鎧に覆われているから、人間同士ならば痛いかもしれない。

だが相手はポケモン、それもルカリオという強力なポケモンだ。

だというのに——何故アクセルはまるで弾丸のように吹き飛ばされ大木をなぎ倒しながら、森の奥に消えていったのか。

人間の、一撃で——

「バシャーモ、ブレイズキック！！」

皆が目の前の光景に目を奪われる中、いち早く我に返ったケイジがバシャーモに指示を出す。

普通の人間に行えば、間違いなく死に至らしめるバシャーモの本気。

それを、目の前の黒い悪魔に叩き込んだ。

だが——またしても認められない現実が彼等を襲う。

——ブレイズキックが、止められた

バシャーモの逞しい脚から繰り出された炎の蹴りが、呆気ないまで

に受け止められたのだ。

それも、片手で。

間髪入れず、アスはバシャーモを掴んだ腕を振り上げ――地面へと叩きつける。

その衝撃は凄まじく、バシャーモの身体全てが地面に沈んでしまうほど。

「バシャーモ!!」

「っ、ティナ、サイコセイバーだ!!」

もはや、アスと呼ばれたあの人間は普通ではないと認めるしかない。ポケモンの力を借りねば、あっという間に全滅するという事実も、認めなくてはならない。

ボールから飛び出すと同時に、ティナは両手に握った双剣を十字に振り下ろす。

それを――同じく十字に構え真っ向から受け止められてしまった。

へっ!!?」

「なっ――!!?」

「な、なんでだよ……俺は夢でも見てんのか!」

カイリの叫びは、自分達の気持ちを代弁したものだった。

いかに強固そうな鎧で身を包んでいたとしても、本気になったテナのサイコセイバーをまともに受け止めるなど、もはや正気の沙汰ではない。

考えられる理由としては、あの鎧に何か秘密があるとしたか……。

「坊や、アナタは波導遣いというのを知っているかしら？」

「波導、遣い……」

——波導遣い

それは文字通り、波導という目に見えない力を操る特別な存在。

ルカリオなどがそれに該当し……ごく稀にだが、人間も波導を操る事ができるらしい。

その力は凄まじく、話によれば生身でポケモンと戦う事ができるほどの力が——

「……………まさか」

「そう、そのまさかよ坊や。このアスは貴重な波導遣い。

それも……薬によって極限まで強化された、最強の波導遣いよ」

「薬、だって……!？」

「元々は強化人間プロジェクトの一環で作られていたのだけど……」

偶然実験台になる波導遣いが手に入ってね。
限界ギリギリまで薬漬けにしたら、こんなにも強くなっちゃった
の」

「―――」

フレアの言葉に、レイジは思考を凍らせる。

薬漬け、何故そんな非道な事を平然と……。

〈きゃあ!?!〉

押し負け、空中に投げ出されるティナ。

それを追撃する為、アスは跳躍しようと足に力を込めた瞬間。

「ドダイトス、リーフストーム!!」

ケイジのドダイトスのリーフストームが、アスの身体に直撃した。

まともに受け、煙が視界を塞ぐ中。

「っ、避けて!!」

ぞくりと、全身が総毛立ちそう叫んだレイジの声と同時に。

煙から勢いよく飛び出したアスの蹴りが、ドダイトスの巨体を吹き
飛ばし木に叩きつけた。

「ドダイトス!!」

バシャーモとは違い、一撃で倒れはしなかったものの、ドダイトスのダメージは甚大だ。

——異常、などという言葉では片付かない

それ程までに、目の前の存在はただ圧巻だった。

「……………」

再び動き、今度はドダイトスへ視線を向けるケイジの首を跳ねようと腕を伸ばし――

「ぐあ――っ!?!」

間一髪、彼の身体を押しつけたレイジによって虚しく空を切る事に。

しかし、掠っただけでレイジの肩からは血が滲み出た。

「レイジくん!!」

「ゴウカザル、マッハパンチ!!」

「レジェンド、ほのおのパンチ!!」

同時にゴウカザルとレジェンドを繰り出し、挟み込むように必殺の一撃を繰り出す。

それをしゃがんで避け、アスはカウンターの一撃を同時に叩き込んだ。

吹き飛ばされるゴウカザル達だったが、どうにか踏みとどまり――あの力を解放させる。

「ゴウカザル、オーバードライブ!!」

「レジェンド、もうかを発動しろ!!」

両者、凄まじい炎をその身に宿し、今度こそ決める為に全力で対峙する。

「ブルーフレア・バースト!!」

「シャイニングフレア!」

蒼き炎と白き炎が混ざり合い、アスに直撃。

凄まじい爆音と熱風を巻き起こし、空気中の水蒸気が蒸発して視界が白く染まってしまう。

「やったか――!?」

今の一撃は確かに届いたはず、むしろあの一撃をまともに受けて原型を留めていたとしたら……あれは人間ではない。

「――凄いわね。これだけの炎を繰り出す事ができるとは思わなかった。

でも――それだけじゃまだ足りないわ」

「――――」

煙が、少しずつ晴れていく中。

ガシャンと、金属音が中から響き渡ってくる。

そして――レイジ達の表情が固まった。

「……嘘、だ、ろ……？」

震える声で、カイリはどうかそれだけを口にする事しかできない。

――生きている

黒い鎧は原型を留めないまでに破損しているが、アスはまだ……生きていた。

「……………」

無言で、ボロボロになった鎧をパージする。

黒い兜も脱ぎ捨てられ、ここでようやくアスの顔を見る事ができた。

一番初めに驚いたのは、まずアスが年端もいかぬ少女だということ。

亜麻色の髪に、無機質な青の瞳は完全にハイライトを失っている。

線は細く、本当に目の前の少女がアスなのかと疑いたくなった。

「あら凄い、あの鎧はポケモンの攻撃に耐えられるほどの強固なものだったのに。」

しかも波導の力で更に硬さを増していた状態で、よく破壊できたわね」

「女の子……？」

「波導遣いだから、いかつい男だと思ったの？」

「……………どうして」

「……………？」

「どうして、こんな事を平然とやってのける！？
まだ子供なのに、どうしてこんな——」

「仕方ないのよ坊や、ボスの命令だから」

「ふざけるな！！ 仕方ないなんて理由で許される事なんかじゃない！！！」

こんな事をするなど、悪魔としか言いようがない。

だから許せない、許すわけにはいかない。

「……………坊やは本当にまっすぐなのね。羨ましいと思えるくらい……………」

「えっ……………」

「けどね坊や、この世の人間全てが坊やのような優しい人間というわけじゃないの。

それに……誰もが坊やのように他人の為に生きられるほど強くはないのよ」

それは、一体誰に向けられた言葉だったのか。

後悔するような、どこか寂しげな瞳を宿し……フレアは言った。

「ラティオス、ラスターページ!!」

「カイリユー、はかいこうせん!!」

「っ、待つ——」

後ろから放たれる攻撃。

それはまっすぐアスへと向かい……彼女は腕を交差させて真っ向から受け止めた。

地面を削りながら、少しずつ後ろに下がっていくアス。

しかし——すぐにアスはラスターページとはかいこうせんの同時攻撃を完全に防ぎきった。

「そんなバカな、こんな事が……!!」

「ガブリアス、ドラゴンダイブ!!」

「エンペルト、ドリルくちばしです!!」

今度はシロナとミカンが攻撃を仕掛ける。

ガブリアスのドラゴンダイブと、エンペルトのドリルくちばし。

それを、アスはカグヤ達の時のように再び真っ向から受け止める。

「っ、そんな……まだ届かないなんて」

「ならカノン、お前も手伝うんだ!! はかいこうせん!!」

「サンダース、かみなり!!」

更にカノンとサンダースの攻撃も加わり——あまりの威力に再び大爆発が起きた。

あれだけの同時攻撃を受けたのだ、もう自分を守る黒い鎧はない、だから今度こそアスは……。

「————」

再び、レイジ達の表情が凍りつく。

——まだ、生きている

全身から血を流し、自分の周りの地面を赤く染めながらも……アスは未だに健在だった。

「……不死身か、奴は」

「…………なるほど、これは予想外にいいデータが取れたわ」

（——データ？）

「アス、もう遊びは終わりにしましょう。

——はどうだんで決めてしまいなさい」

フレアを指示を受け、アスは足に力を込めながら両手をレイジ達に向けて突き翳す。

すると——彼女の周りには複数のはどうだんが現れる、その数たるや十や二十ではきかない。

更に、その大きさはアクセル達のそれより大きく上回っている——
！

「みんな、早く逃げるんだ！！」

「遅いわよ、坊や」

——放たれるはどうだん

レイジの声は撃ち出された音にかき消され、都合四十近い巨大なはどうだんが、雨のようにカイリ達へと降り注ぐ。

爆音が、衝撃が全てを呑み込んでいく。

自分は夢を見ているのだろうか、そんな現実逃避のような考えを思考に張り巡らしながら。

レイジは、迫り来るはどうだんの雨を、見つめる事しかできなかった。

……………。

パチパチと、何かが爆ぜる音で、レイジは目を醒ます。

どうやら気絶していたらしい、全身に激しい痛みが走るが、どうにか生きているし動けるようだ。

のろろと起き上がり、現状を確認しようとして……レイジの思考は凍り付いた。

「————」

声が、出ない。

レイジの後ろ、すなわちカグヤ達が居た場所はただの地獄と変わっていた。

まず第一に、誰も立っておらず地面に沈んでいる。

その地面もまるで隕石が落ちてきたかのように、幾つものクレーターができあがりあのはどうだんがどれだけの威力があったのかを物語っていた。

ポケモン達もまた、誰もが倒れ……生きているのか確認できない。

「――まだ全員生きているようね。はどうだんが命中する直前にポケモン達が盾になった……なるほど、素晴らしい友情なこと」

「チッ、悪運だけは強いみたいだな」

対するフレア達は勝利を確信したのか、いつもの調子を崩さない。

――絶望的な状況

完全に、こちらの敗北だと認めなくてはならなかった。

「さてと……坊や、これでわかったでしょ？ アナタはワタシ達についていくしかないの。」

坊やがこれ以上抵抗せずに来てくれるのなら、トドメはささない
で置いてあげるわ」

「……………」

それは、とてつもなく甘い誘惑だった。

おそらくフレアの言葉に嘘偽りはない。

自分がおとなしくついていけば……カグヤ達の命は助かる。

そう――自分が犠牲になれば彼女達は。

「……そんな、事……絶対に、させない……！」

「レイジくん、は……つれていかせない、わ」

「―――っ」

「あら……まだ意識があったの？」

つまらなげにそう吐き捨てるフレアの視線の先には、傷だらけになりながらも立ち上がるカグヤとシロナの姿が。

息も絶え絶え、意識を保っているだけで精一杯のはずなのに、彼女達はレイジを助ける為に立ち上がった。

「ケッ、そんなボロボロの状態で一体何ができるんだよ!!」

「絶対に、行かせないわよレイジくん……!!」

貴方は、私達の傍に居てくれなきゃ……ダメなんだから!!」

「そう、だよ……レイジが居なかったら、私……泣いちゃうんだから!」

「……………」

自分を犠牲にするな、と。

そんな悲しい選択をするなど、彼女達は必死に訴えている。

「―――」

その気持ちは――踏みにじれないと思った。

彼女達が望まないのならば、そんな決意は無駄でしかない。

——だから、レイジは緩みかけた自身をしっかりと正す

「——ああ、そうだね」

「……………」

「君達が望まないなら僕は……最後まで諦めないよ」

そう告げて、レイジは真っ向からフレア達と対峙する。

「……テメエ、ここまで痛めつけられてまだわからねえのか？
お前達は負けたんだよ、ならこのままおとなしく」

「まだ、手はある」

左手で右腕を掴み、アスに向けて翳した。

それを見て、マードは小馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「ハッ、何をするかと思えば……テメエの力なんぞ通用しねえよ。
大体それはポケモンにしか効果は」

「そんなもの、やってみなければわからない。
それに……最後まで、諦めたくなんかないから」

彼女達は、最後まで諦めない選択をした。

ならば、自分も同じ道を歩まなくては嘘になる。

だから……試せるものはなんだって試さなくては。

（……遠くからじゃダメだ、避けられる可能性がある。

なら——直接この力を叩き込むしかない!!）

地を蹴り、真っ直ぐアスへと向かっていく。

その動きはいつもの彼とは違い遅く、けれど迷いなどないものだった。

そんな彼にも、アスは容赦しない。拳を握りしめ、彼の頭蓋を碎こうと突き出し。

「——っ」

紙一重で避け、瞼の上が切れ鮮血が舞う。

それには構わず、隙を見せたアスに、自分の手を置くレイジ。

（届け——!!）

そして——願いを込め、力ある言葉を解き放つ。

「——在るべき姿に還るんだ!!」

瞬間、眩い光がアスとレイジを包み込む。

「うおっ!？」

「くっ!？」

おもわず目を逸らすフレアとマーダ、しかし光は収まるどころかその勢いを増していく。

「こ、これは……!？」

違う、この間見た光とは規模も輝きも。

前よりも、遥かに凄まじい。

(届け、届け……!)

手を押し出し、力を解放し続ける。

——その度に、自分が消えていくのが実感できた

まるで力の代償だと言わんばかりに、“レイジ”という個人が消えていく。

だが、それでも構わなかった。

目の前の何の罪もない少女を救えるのなら、自分という存在が削られても問題は……ない。

だけど、一つだけ問題があるとするならば。

——色々な名称が、自分の頭の中から無くなってしまいう事くらいか

「——、あ」

心が、砕けそうだ。

もう保たないと、身体が訴えている。

(もう少し……もう少しで……)

消えていく心にも関心はなく、ただ目の前の少女を救う事だけを考
えて。

レイジは、己が力の全てを解き放った——

……。

光は眼球を焼き、暫し視界を奪っていく。

けれど現状を知るために、フレアとマーダはレイジ達へと視線を向
け。

「なん、だと……！？」

驚愕の現実を、目の当たりにした。

「……………ふう」

ほっとしたような息を吐くレイジ。

——傍らには、彼に寄りかかり目を閉じているアスの姿が

そう、届いたのだ。

誰もが、レイジ自身ですら届かないと思っていた力がアスに届き、呪縛から解き放たれた。

尤も、これから少しずつ体内に残った薬を除去していかなければならないが……最悪の結果にはならないだろう。

（何てこと……！ 坊やの力はここまで強大だなんて……！？）

予期せぬ結果に、フレアも焦りの色を隠せない。

しかし、マードアの口元には邪悪な笑みが。

「小僧、確かにお前はよくやったよ。だがな……もう力なんて使えないだろう？」

頼みのポケモン達も全員戦えない、後ろの2人は動く事すらできない。

——どの道、オレ達の勝ち揺るがねえんだよ」

「くっ………！」

身体に力を込めるシロナだったが、どんなに頑張っても動いてはく
れず、それはカグヤも同じだった。

ポケモン達も、先程の攻撃で自分達の盾になってくれたので、もう
戦う力は残されていない。

——ここまでか、そう諦め掛けたその時

「……僕には頼れる友達が居るから、絶対に負けたりしないよ」

穏やかで、それでいて力強い口調でレイジはそう言った。

瞬間——それらは湖から現れた。

「ぐは———！？」

くぐもった悲鳴は、マードカの口から放たれる。

彼だけではない、他の団員やポケモン達からも悲鳴が上がる。

「これは………！？」

見覚えがある、あれはサイコウェーブだ。

しかし、レイジ達のポケモンは全員戦闘不能になっているはず、だ

というのにこれは……。

「――――」

レイジを守るように、三体のポケモンが彼の周りに浮いている。

それは――伝説のポケモンであるアグノム、ユクシー、エムリット。

その三体が、このエイチ湖に集結していた。

「……ありがとうみんな、本当にありがとう」

慈しむように、アグノム達を優しく撫でる。

気にしなくていいよ、アグノム達はニコツと笑みを浮かべながらそう返してくれた。

「……わかっただろフレア、こいつは……確実に始末しなきゃいけない人間だ。」

こいつを野放しにしていたら、いつかオレ達の方が足元を掬われる羽目になるぞ――！」

「……………」

「……もう、やめにしませんか？」

これ以上、自分達が争う必要はない。

戦わずに、分かり合おうとレイジは歩み寄る為に言葉を紡ぐ。

(…………綺麗ね、坊やは本当に…………)

眩しくて、直視できない程に、彼の心は澄んだ美しいものだ。

だから、そんな彼の言葉は確実にフレアの心を揺さぶっていく。

頷けと、彼の言葉を肯定してしまえと、内なる自分が訴えかけるが…………。

——それでも、もう戻れないところにまで来てしまったのだ

「…………ごめんなさい坊や、残念だけど…………坊やの言葉には頷けないわ」

「……………」

「だけど、ワタシのような救いようなない人間にまでそう言うてくれたのは…………嬉しかった」

ごめんなさい、もう一度謝罪の言葉を口にしてフレアは自分の懷から何かを取り出す。

それは球状の物体、小さなボールのようなものを手に取り、おもいつきり地面に叩きつける。

瞬間、網膜が焼けてしまいそうな閃光が走り、おもわず顔を隠す。

そして暫くして、視力が回復した時には…………フレア達の姿は、虚空へと消えていた。

「……………」

逃げられた。

いや……逃げがしてしまったと言った方が正しいかもしれない。

「あ——っ」

頭にノイズが走る。

自分自身を維持するために、座り込んだ。

「レ、レイジくん……」

「……ユクシー、アグノム、エムリット。

悪いけど、力を貸してくれないか？」

情けない話だが、もうまともに動けないのだ。

それどころか、このままでは自分の心が……。

「——っ」

余計な事は考えるな、自分をしっかり保て。

必死で自分に言い聞かせる、何故ならそうしなければ自分が消えてしまうから。

そうこうしている間に、アグノム達がサイコキネシスで全員をぷかぷかと宙に浮かせている、これだけの数を難なく運べるのは流石と

言うべきか。

「それじゃあ、カンナギタウンのシロナさんの家までテレポートをしてくれ。場所はわかるね？」

こくりと頷き、テレポートの準備に入るアグノム達。

そして、テレポートによって移動する瞬間。

(……………人は、生きていべき存在なの？)

レイジは、人の存在価値について一人自問していた。

第91話 休養く束の間の日常く（前書き）

ロケット団との戦いも、ユクシー、エムリット、アグノムの助力もあり勝利するレイジ達。

しかし傷は深く、休息をとるため一行はカンナギタウンへと赴いた。

第91話 休養く束の間の日常く

カンナギタウンにある、シロナの実家。

そこで、1人の少女が楽しそうにニコニコしながらある部屋に向かっていた。

その手には、朝食と思われる食事が置かれたトレイを持っている。

彼女の名はイリナ、チャンピオンシロナの実の妹である。

シロナをそのまま幼くそして小さくした容姿は、将来性を充分に感じさせるほど整ったものだ。

金糸の髪もシロナによく似ており、特徴的………というか、はっきり言って変わった髪飾りも姉と同じもの。

目的の場所に辿り着き、ドアを数回ノック。

「お兄ちゃん、入るね？」

訊いておきながら、許可を貰わずに部屋へと入るイリナ。

そして部屋の中には、痛々しく頭や身体に包帯を巻きベッドの中で上半身だけを起こして窓の外を見ているレイジが、来訪者を迎え入れてあげた。

「おはよう、イリナちゃん」

「おはようお兄ちゃん、朝ごはん持ってきたよ」

言いながら、トレーをレイジに渡すイリナ、受け取りながらも彼は苦笑を浮かべ口を開く。

「自分で取りに行ったのに……」

「ダメだよ。お兄ちゃんは重病人なんだから」

「そうかな？ そんな事ないと思うけど……」

「そんな事あるから言ってるの！ まったくもう……しょうがないお兄ちゃんだなあ」

頬を膨らませるイリナに、レイジはつつい苦笑を浮かべてしまう。こういう所は、姉妹共々変わらないらしい、シロナもこうやって拗ねた事があるのだ。

「むっ、何笑ってるのお兄ちゃん？」

「何でもないよ。それじゃあいいただきます」

「はい、召し上がれ」

早速持ってきてもらった朝食を口に運ぶレイジだが……。

……何故か、先程からイリナが自分が食事をしている所をジッと見てくるので、正直食べづらい。

「あの…イリナちゃん、そんな風に見られてると食べづらいんだけど……」

「イリナの事は気にしないでいいよ？」

（気にするから言ってるんだけど……）

だがしかし、ニコニコと笑みを浮かべているイリナにこれ以上強く言うのは可哀想だと思い、気にしない事にした。

そんな彼を、イリナはただジッと見つめ続ける。

（お姉ちゃんの王子様……うん、顔よし性格よしで文句ないね）

勝手に心の中でレイジに対する査定を行うイリナ。

と、外からイリナにとってすっかり聞き慣れた声が聞こえてきた。

「ピカピー！」

〈お父様ー！〉

「ん……？」

視線を窓の外に向けるレイジとイリナ、すると自分達に向かって手を振っているヒカリとティナの姿が。

しかし、ヒカリはともかくティナはいつもと違う格好をしている。

首にはマフラーを巻き、頭には白いニット帽を被り、そして足には

……。

「……スケート靴？」

そう、靴底にブレードが装着された所謂スケート靴を履いているのだ。

よく見ると、彼女達が立っている場所は氷の上。

どうやらスケートを楽しんでいるようだ、少し離れた場所ではカイリ達も滑っている。

みんな怪我が治ったばかりだというのに、元気なものだ。

〈きゅん!!〉

いきなり可愛らしい悲鳴を上げ、見事にすっ転びお尻を強打するティナ。

どうやらスケートは苦手なようだ、なんでもそつなくこなす彼女にしては珍しい。

「楽しむのはいいけど、はしゃぎすぎて怪我しないようにねー？
それと、ルギア達が変な事しないように見張っておいてよ？」

へ大丈夫ですよ。ルギアはかまくらを作って縮こまっていますからー

「…………なるほど」

それならば大丈夫そうだが、しかしルギアは意外と寒さに弱いのだろ

うか、海の神様なのに。

楽しんでねー、そう言う顔を引っ込め再び食事を開始する。

参加したいのは山々だが、あいにくとまだ怪我が治っていないので諦めるしかない。

——エイチ湖の事件から既に4日

他のメンバーは1日で治る程度の軽い怪我だったのだが、レイジだけはそうはいかず、2日間眠り続けた。

更に怪我也重く、今もまだ傷口が塞がっていない。

しかし、その殆どはあの波導遣い——アスとの戦いによって生まれた傷ではない。

（……力の反動が、大きくなってる）

そう、これはあの力を使った代償によるもの。

今まではそんな事などなかった、頭痛などの後遺症はあったものの、このように身体が傷つくなどという事は……。

それに——これはもちろんみんなに話してはいないのだが。

レイジ自身の記憶が、曖昧になっている。

少しずつ、けれど確実に過去の記憶が文字通り消えているのだ。

どんなに思いたそうと記憶の引き出しを探っても、その引き出し自体が消えている。

こんな現象、話せるはずがなかった。

「——ちゃん、お兄ちゃん!!」

「っ、あ……何？」

イリナの声で我に返る、情けない……こんな小さな子に心配そうに見つめられている事に気づき、レイジは内心己を罵倒した。

そんな彼の心中に気づかないイリナは、ようやく返事を返してくれたレイジに頬を膨らませながらも、気になっていた事を口にした。

「お兄ちゃんって、お姉ちゃんとキスした？」

「ぶっ——!!?」

おもわず、口の中に入っていた食べ物を盛大に吹き出しそうになってしまった。しかしどうにか耐えた事にレイジは自分へ賞賛を送ってやりたい。

と、どうでもいい事を考えながら視線をイリナへと向ける。

「イ、イリナちゃん……何をいきなり……」

「だって、お兄ちゃんとお姉ちゃんって恋人同士なんですよ？」

「そんなの、誰から聞いたのさ……」

「聞いたわけじゃないけど、お姉ちゃん前に「王子様が現れた」とかメルヘンチックな事を言ってたから……」

何を言ってるんですかシロナさん、レイジはこの場にいない彼女に問いかけたくなる。

しかし、シロナの中ではレイジと恋人同士……になる未来しかないので、少なくとも彼女の中では嘘にはならない。甚だ迷惑な話である。

「イリナちゃん、僕とシロナさんは恋人同士じゃないよ……」

「えー……違うの？」

「違うよ。っていうか何でそんなに残念そうなのさ？」

「だって、ようやくお姉ちゃんに春が来たのかと思ったのに……」

さりげなく暴言を吐くイリナだが、幸いにもここにはレイジしか……。

……レイジしか、いない“わけ”ではなかったようだ。

「……………」

レイジの顔が固まった事に、イリナは訝しげに首を傾げる。

一体彼は何を見ているのか、視線の先はこの部屋の入口の方だが……。

イリナもそちらに視線を向けて……固まった。

「……イリナ、誰がいつまで経っても寂しい青春しか送ってない年増ですって？」

誰もそんな事は言っていないし思ってもいないが、シロナの中ではイリナの発言がそう聞こえたようだ。あんたどんな耳してるの？

明らかに私怒ってます、そりゃあもうハードマウンテンの噴火のよう怒ってますといわんばかりの表情を浮かべ、シロナは素早くイリナの身体を腰から抱きかかえる。

「レイジくん、ゆっくり休んでね？」

——イリナは、少しお姉ちゃんとお話しましょうか？」

レイジには満面の笑み、イリナには悪魔の笑みを浮かべるシロナ、まるで百面相だ。

「ま、待ってよお姉ちゃん！！ 確かにイリナはお姉ちゃんがあまりにも男が寄り付かないから大丈夫かなー、とか。このままじゃ変に暴走して女の子が好きになっちゃったりしないかなーとか思っ

たけど、別にお姉ちゃんを年増とかそんな風に思っていないよ!？」

……口は災いの元、とはよく言ったもので。

イリナは今、自分がどれだけ失礼な事を口走ったのか自覚していないらしい。

そしてシロナは、額に青筋を浮かべながらイリナと共に部屋から出て行った。

——数分後、イリナの悲鳴がカンナギタウン全体に響き渡ったのはまた別の話一方、カイリ達は久しぶりにスケートを楽しんでいた。

なにせレイジが治るまでこのカンナギで足止めなのだ、彼には悪いがゆっくりさせてもらおう。

と、少し離れた場所から情けない声が聞こえてきた。

「カ、カイリさ〜ん」

声の主はミカン、いつものワンピース姿ではなく白いコートとマフラーを身につけ、足には当然ながらスケート靴を履いている。

しかし、その格好はまるで生まれたての動物のようにプルプルとしていて危なっかしい、今にも転んでしまいそうだ。

だがそれも無理はない、ミカンは今回初めてのスケート体験なのだ、むしろこんな格好ながらまだ一度も転んでいないのは褒められるべ

きである。

そんなミカンに苦笑しつつ、慣れた動きであっという間に彼女の元へ。

そして転ばないようにしっかりとミカンの手を握るカイリ、当のミカンは彼の行動に僅かながら頬を赤く染め上げる。

「転んでも構わねえから少しずつ慣れていこうな？」

「は、はい……」

おもわぬ役得に、ミカンは内心ガッツポーズをする中、そんな彼等を面白くなさそうに見つめるヒメカ。

ようするに嫉妬、自分以外の女の子に優しくするのが気に入らないだけなのだが、ヒメカはいつものようにカイリへと八つ当たりはせず、ただ黙って彼等を見つめていた。

今回ばかりは仕方がない、ミカンはスケートが初めてだし、カイリもなんだかねで面倒見がいいから、自然とああなるのはわかった。た。

……面白くないが、ここは我慢しよう。それに後で甘えればいい……そこまで考えて、ヒメカは顔を赤くさせる。何を考えているのか……。

「ヒメカ、何顔を赤くしてるの？」

久しぶりに人間形態になり、スケートを楽しんでいるカノンがヒメ

カの様子がおかしいと話しかけたが、トリップしている彼女には届かない。

どうでもいいがカノン、いくら人間より遥かに身体が屈強とはいえ、半袖にスカートで雪が降る中スケートをするのはどうかと思う。

「――みんな楽しんでるね」

彼等から少し離れたリンクの外で、カグヤはのほほんとカマクラの中で様子を見ながらお茶を啜る。

ちなみに、ちゃんと餅も用意してみた。もうすぐ焼けそうだ。

「カグヤ、お前は楽しまなくていいのか？」

カマクラの中には入らずに、カイリ達を見守っているロストはそう問うが、カグヤは首を横に振って言葉を返す。

「だって、レイジがいないのに遊んでもつまらないよ」

「はっ、お前あいつに依存しないと生きていけないのか？」

小馬鹿にしたようなケイジの言葉にも、カグヤはうん、とすぐさま頷く。

依存しているという自覚はあるし、そんな事でいちいち目くじらを立ててはケイジと会話するのは不可能だ。

「ところでケイジ、何で居るの？」身も蓋もないような物言い、彼女にしては素朴な疑問だったのだが、言い方がいまいちアレなので、

さすがのケイジも顔を引きつらせる。

「……居たら悪いのか？」

「もう、すぐそうやってひねくれた言い方するんだから……」

「……いや、今回ばかりはお前が悪いぞ、カグヤ」

何で居るの、なんて言い方をされれば誰だってそう思う。

先程も言ったが彼女に他意はない、しかし……もう少し言い方を考えた方がいいとロストは思った。

「それで、何で居るの？」

「……カリを返したいからだ、あのロケット団とかいう奴等にな。

お前達の近くに居ればあいつらはまた現れるだろう？　なら……

暫くは行動を共にさせてもらおうぞ」

「ふーん……」

なんだかんだで、ケイジも結構根に持つタイプらしい、ちょっとズレた感想を抱くカグヤ。

――スケートを楽しむポケモン達

早くも慣れてきたのか、既にスイスイと滑っている。その姿は美しく周りからの視線を集めていた。

と、彼女のお尻に何かがぶつかってくる。

何事かと振り向いてみると……そこにはプルプルと顔を横に振っているソウルの姿が。

〈ソウル、大丈夫ですか?〉

——う、うん……ごめんねティナ、急に止まらないんだ。

〈仕方ありませんよ。それよりルギアはおとなしくしていますか?〉

——さっきくしゃみを連発しながら寒い寒いって言ってたよ。

それとね、リオンは散歩に言っちゃった。

〈なるほど……〉

リオンもルギアも、どうやら問題を起こす事はなさそうだ。ならもう少し遊んでいても大丈夫だろう。

そう思い、ティナはもう少しスケートを楽しもうとしたところで……動きを止める。

彼女の視線の先には……ミュウツーが腕を組みながら、静かに空を見上げていた。

〈ミュウツー、どうかなさいましたか?〉

「……………」

ティナの言葉にミュウツ―は答えず、僅かにムツとなったが気にせず横に立つ。

そこであろうやく彼女の存在に気づいたのか、ミュウツ―が口を開いた。

「……………何だ？」

へもう…………無視するのはよくないですよ。
それより、何を黄昏ているのですか？

「……………」

（また無視ですか…………）

聞こえないようにため息をつきつつ、ティナはミュウツ―から離れようとして…………彼から、問いかけられた。

「――おい」

へはい？

「…………お前、もしレイジが殺されそうになったら…………そいつを殺すか？」

なんとも物騒で、唐突もない質問。

突然の問いかけに訝しげな表情を浮かべるティナだったが…………律儀にその問いの答えを口にする。

〈殺しますよ〉

はっきりと、迷いのない声で。

「……………意外だな。あのレイジのパートナーだから、甘い答えが返ってくると思ったが……………」

〈……………確かに、お父様は誰かを殺めるなどという事は、たとえどんなに救いようのない者でも望んではいません。

ですが……………わたくしにとってお父様は全て、だからそんなお父様を奪おうとする者は……………たとえ誰であっても、許すわけにはいきません〉

こんな考えは、間違いでしかない。

なによりレイジがそれを望まない、しかし……………ティナは彼ほどに善を貫き通す事はできない。

他者の命を奪う、それはこの世界において許されない最大の業。それを犯してしまえば……………彼は絶対に悲しむ。

そんな事はしたくない、したくないが……………彼を守る為ならば、そのような業など簡単に背負える。

「……………お前は、レイジを守るためならば誰かを殺める事ができるのだな」

〈正しい事ではないという自覚はありますが。
しかし、何故そのような質問を?〉

そう問いかけると、ミュウツーはいつもの無表情の中にも……僅かな躊躇いと迷いを見せ、口を開いた。

「……………ワタシは、次に奴等と出会ってしまったら、己を抑える事ができなくなるかもしれない」

〈……………〉

奴等、という言葉にティナの表情も強張る。奴等とは言わずもがな、ロケット団の事だ。

……家族であったフジ博士とその娘であるアイを奪われ殺された過去は、ミュウツーによって堪え難い苦痛と怒りと憎しみをその身に植え付けた。

それを簡単に割り切れ、などという事は絶対に不可能だ。憎しみという感情はそれ程までに心に根付いてしまうものだから。

「今とて奴等が憎い、許されるなら今すぐに探し出し根絶やしにしてやりたいという思いがある。

だが……ロストやレイジがそれを望まない以上そんな事は許されない。

それでも、この憎しみが消えず……いつ暴走するかわからないのだ」

〈……………ミュウツー〉

思いがけない告白に、ティナは何も言えず彼の言葉を待つ。

ミュウツーは、無表情の中に宿す苛立ちとも悲しみとも取れる色を

隠そうとせず、ティナにある願いを託した。

「ティナ、もし……もしもだ。ワタシが憎しみに囚われ暴走してしまった時は……お前が、ワタシを殺してくれ」

頼む、そう言ってミュウツーは頭を下げた。今までに見せた事などもちろん一度としてない。

^……………^

ティナは答えない、否、答える事ができない。

そんな事などもちろんしたくはない、けれど……このような彼女を見たのは初めてだったから……断る言葉を出す事ができなかった。

——しかし、それでも

へ——わかりました、もしそうなった時は……あなたは、わたくしが殺してあげます^

ティナは、ミュウツーの決意を否定する事はできず、はつきりとそう言い放った。

「……………すまないな」

それは、何に対する謝罪だったのか。ミュウツーはそう言い残すと、音もなくその場を去っていく。

その後ろ姿を見て、ティナは悲痛な表情を浮かべていた。

へミユウツー……もしそんな未来がやってきたとしても……最後まで、諦めてはいけませんよ◇

第92話 テンガン山へく降臨せし神話の神く（前書き）

エイチ湖の戦いから一週間が過ぎ……レイジ達はいよいよテンガン山に向けて出発しようとしていた。

第92話 テンガン山へく降臨せし神話の神く

「――それじゃあカラシナ博士、イリナちゃん、失礼します」

「うむ、道中気を付けてな。シロナの事をよろしく頼む」

「はい。といっても……僕の方が頼りにしてるんですけど……」

「ふふっ、そんな事ないんだけどね」

「お兄ちゃん、お姉ちゃんと仲良くしてね？」

「う、うん……」

イリナの言葉に苦笑しか返せない。

傍らでは、カグヤが少し面白くなさそうな視線を送っている。

少し居心地の悪さを感じながら、レイジはボールからリオンを出した。

他の者達も、移動する為にポケモンを出す。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、それとみんな、気を付けてね。」

――また遊びに来てね――」

「ありがとうイリナちゃん、色々な問題が片付いたらまた遊びに来るよ」

絶対だよ、イリナの言葉に頷きを返しリオンの背中に乗る。

すぐさま上昇し、あっという間にカンナギタウンが小さくなっていく。

「よし、いよいよテンガン山だな！」

「ううゝ……寒いのは苦手だよ……」

各々、テンガン山に向けて感想を口にする中、レイジはそんな彼等のやる気がある意味折るような事を口走る。

「……みんな、少し待っててくれないかな？」

「えっ？」

言うやいなや、レイジはリオンに指示しテンガン山とは別の場所へと向かって飛び立ってしまう。

これには、カグヤ達も驚きの事を上げてしまった。

「ちょ、ちょっとレイジ!!」

「すぐ戻るから、そこで待ってて!!」

叫ぶような大声で、追いかけようとするカグヤ達をその場に留め、レイジは行ってしまった。

一体どうしたというのだろうか、彼には考えられない強引さだ。

しかし、彼の迫力に圧されてしまい、仕方なくその場に留まる事に。
と、カグヤとシロナはじっとレイジの向かった方向を見つめながら
……ある事に気がついた。

（あの方角は……）

「なんだよレイジの奴、いきなり何処に行ったんだ？」

呆れを含んだ口調のカイリ、他の面々も同じような気持ちなのは言うまでもない。

しかし、彼が何の意味もなくこんな事をするとは思っていないので、本気で怒ったり呆れたりしているわけではないが……理由くらいは言ってくれてもいいのではないか。

そんな事を考えるカイリ達だが……カグヤとシロナの言葉で、彼の真意を理解した。

「……アスに、会いに行ったんだよ」

「—————」

アス——エイチ湖で死闘を繰り広げ、レイジの力によって最悪の事態から救われた波導遣いの少女。

しかし、レイジの力でも完全な浄化には至らなかったようで、今ではシンオウ最大の都市であるコトブキシティの大病院で治療を受けている。

聞いた話では、あれから一週間経っても意識が戻らないと言っていたが……レイジは、そんな彼女の様子が心配なのだろう。

もちろん見舞いをした所で彼女の容態が回復するわけではない、単なる自己満足だと彼も理解している。

だが、それでも彼はテンガン山に行く前に彼女の姿を見ておこうと思ったのだろう。

——救った者として、最低限の事をするために

「……ホントに真面目だよな、アイツ。っていうかそんなんなら別に俺達を連れて行っても……」

「誰にも見られたくないのよ、今の自分を」

「えっ……?」

シロナのその言葉に、カグヤを除く全員が首を傾げるが、彼女は何も言わずに沈黙を貫く。

——今の彼は、不安定な状態だ

少しずつ、けれど確実に心の闇を大きく広げている。

怒り、憎しみ、悲しみといった負の感情が、彼の中に生まれてしまった。

こんな状態で、もしロケット団——ロキに出会ってしまったら……彼がどうなるか、わからなくなる。

（その時は……私達みんなで止めないと……！）

甘いと言えるくらいの優しさを持つレイジは、それ故に予想もできない危険さも宿している。

そんな彼だからこそ、1つの感情に支配された時には……。

（大丈夫……彼は1人じゃないのだから……）

胸の内に宿った僅かな不安を拭うように、必死で自分にそう言い聞かせるシロナ。

そんな彼女を見ながら、カグヤはただジッとレイジの向かったコトブキシティの方向を見つめ続けていた。

……………。

——コトブキシティは、シンオウ最大の都市である

テレビコトブキやポケッチカンパニーなど、数多くの高層ビル群が建ち並ぶ都会の街。

もちろん、そこにある病院も他の追隨を許さない大病院だ、その中をレイジは歩いていく。

程なくして辿り着いた先は……集中治療室。

その中では、痛々しい姿でベッドに横たわる少女が居る。

波導遣いアス——尤も、このアスという名が本名かどうかはわからないが、彼女は未だ眠りの世界から抜け出してはいなかった。

「……………」

彼女を見ながら、医師の話を思い出す。

——彼女は、常人ではとうに死亡している程の薬物を投与されていたらしい

どれも劇薬などに分類される、まさしく悪魔の薬と呼べるようなものを。

波導遣いとしての優秀な肉体と、無意識下で本能が発動していた波導の力により、どうにか生き長らえていたが……既に廃人に等しい状況になっており、完治する可能性は低く……仮に完治するのにも数年という長い年月が必要となるらしい。

それを聞いた時、レイジはロケット団——ロキ達に対する怒りや憎しみよりも、悲しみの感情が大きくなった。

——どうして、こんな事を平然とやってのけるの？

——どうして、人間はこんなに醜いの？

どうして、どうして、どうして、ドウシテ――

疑問ばかりが頭を占め、それはまるで呪いのようにレイジを襲う。

人間など、生きている価値などないのではないか？

ホウオウの言った事は、正しかったのではないか？

人間など、この世に必要とする存在では――

「――っ」

そこまで考えて、レイジは振り払うように頭を振る。

ふざけるな、そんなものは極論でしかない、人間全てがこの世に必要としない存在というわけではないのだから。

……けれど、じゃあ必要とされる人間って、どんなものなのか。

こんな事しかできない、こんな事をしかす人間の何処に、必要とされる部分が――

〈お父様〉

厳しい口調の声が、レイジの思考を無理矢理中断させる。

我に返り、視線を向けると……そこには先程の口調と同じくらい厳

しい表情を浮かべたティナが、ボールから飛び出していた。

「……お父様、1つの感情に囚われる事などないようにお願い致します」

「ティナ……」

「お父様のお気持ちはわたくしとて……いえ、誰もが理解できます。しかし、その問いは人では永遠に探す事ができないものです。ですから……あまり、1人で抱え込まぬように」

優しく、安心させるようにレイジを抱きしめるティナ。

暖かな彼女の体温が伝わり、レイジの中に芽生えていた闇が、少しだけ形を潜める。

ありがとう、そう言って静かにティナから離れたレイジの表情は、ようやくいつもの彼のものに戻っていた。

これで安心できたわけではない、しかしひとまず大丈夫だろう、ティナはそう判断し勝手にボールから出た事に謝罪しながら、再びボールの中に戻っていった。

そして、レイジは再びアスへと視線を向け、聞こえているとは思っていないが……彼女に声を掛ける。

「……目が覚めたら、君の名前を覚えてくれ。

そして……僕と友達になってね」

それはささやかな願い、ほんのちっぽけな……彼らしい願い。

眠る彼女に届きますようにと願いながら、彼は病院を後にする。

——テンガン山へ、行かなければ

全ての謎、自分の出生がそこでわかるかもしれないのだから。

…………。

——テンガン山

シンオウ地方を真つ二つに分断している、巨大な山。

上を目指すと、そこには強力な吹雪と野生のポケモン達が、容赦なく侵入者を始末するために牙を向く。

「ゴウカザル、かえんほうしゃ!!」

「ヒノ、かえんほうしゃ!!」

迫る野生のポケモン——チャームやドータクンを蹴散らしていく。

先頭を歩くティナも、なるべく被害を最小限にする為に、サイコキネシスで動きを止めていく。

「くっそ……ここの野生のポケモン達、結構強いな……」

この面子、そして自分達のポケモンならばさしたる苦戦はしないものの、こうも連続で現れるといい加減嫌になってくるものだ。

それに、この山の厳しい環境もカイリを苛立たせる要因となる。

幸いにも山道はあるので断崖絶壁を登っていくなどという事はないが、吹雪のせいで視界はかなり悪く、なにより空気が薄く冷たい。これは始まりの地の環境といい勝負かもしれない。

シンオウ地方で寒さに慣れている自分でも正直に言って「寒い」と感じているのだ、男性陣はともかくとして……ヒメカ達にとってかなり厳しいようで、ミカンに至っては途中でダウン寸前となり今はゴウカザルが背負っている状態だ。

ヒメカやシロナはまだ余裕があるようだが、カグヤもかなり辛そうに表情を歪ませている。

「――リオン、カグヤを背負ってあげて」

それにいち早く気づいたレイジが、ボールからリオンを取り出しそう指示を告げる。

リオンもすぐさま状況を理解し、カグヤを自身の背中に。

「……リオン、ごめん」

暖かな身体にその身を寄せながら、カグヤは謝罪の言葉を口にするが、リオンはすぐさま首を横に振り安心させるような笑みを浮かべた。

「ストップ、ちょっと待って」

突如、ティナと共に先頭を歩いていたレイジは立ち止まる。

「どうした？」

「……どうやら、ここを登っていかないといけないらしい」

舌打ちを混ぜながら、レイジは顔を上げる。

その先には――吹雪で上が見えない急な崖が。

「お、おい……普通の道はないのかよ？」

「あるにはあったみたいだけど……ほら見て、どうやら崩れてしまったらしい」

レイジ達のすぐ前は、初めから無かったかのように道が断たれている。おそらく雪崩や野生のポケモン達によって山道が崩れてしまったのだろう。

飛んでいけるのならばそうしたいが、この吹雪では墜落する可能性がある以上そんな危険な真似はできない。

明らかに正規のルートではないが……ここから先はこの崖を垂直に登って山頂を目指していかないといけないようだ。

「マジかよ……こんな所、人間が登れるものじゃねえぞ」

手の掴まるような凹凸は見つからない、あるにはあるだろうがこの吹雪では見えないし、なによりロッククライムの経験などない自分達には不可能だ。

「だからこそ、こういう時はみんなの力を借りるんだよ。

——アクセル、出てきて!!」

「ガブリアス、出てきなさい!!」

「な、なる程……じゃあゾロアーク、出てきてくれ!!」

レイジ達を見習うように、カイリもボールからゾロアークを出す。

「——バシャーモ、オレを背中に乗せて登ってくれ」

「レジェンド、おれも頼むぞ」

「リオンありがとう、降ろして」

声を掛けながら、カグヤはリオンの背から降りボールを取り出す。

中から出てきたのはラティオス、早速カグヤはラティオスの背に乗り換えた。

「ラティオスごめん、このまま登ってくれる？」

「わかりました」

「カグヤ、リオンのままでも……」

「大丈夫。それよりリオンは休ませてあげて？」

「……わかった。それじゃありオン、ゆっくり休むんだ」

彼女の厚意を受け取り、リオンをボールに戻す。

「出てこい、カノン！」

カノンが入ったボールを取り出し投げる。

「カノン、ミカンをおぶってくれ。さすがのゴウカザルでも両腕でミカンを抱えながらこの断崖絶壁を登るのは無理だからよ」

「わかりました。ゴウカザル、ミカンを私の背に乗せてください」

「す、すみません……」

「気にしないでくださいミカン、この環境は寒さに慣れた人間でも厳しいですから」

「よし、それじゃあ行くよみんな」

それぞれポケモンの背に乗り、ほぼ垂直な崖を登っていく。

……言うまでもなく、ここから落ちれば間違いなく死ぬ。だから誰も下を見ようとはしない。

しかし、これならば比較的簡単に山頂へと辿り着けそうだ。安堵感を含めた息を吐き出すレイジ。

そう——このままならば楽に行けるはずだったのだが。

へっ、父上!!!」

登りながら、レイジに対し大声で呼びかけるアクセル。

どうしたのか、一瞬だけそう思った瞬間——レイジは異変に気がついた。

「みんな、野生のポケモン達が来るよ!!!」

「ええっ!?!」

「げっ、マジかよこんな状況で!?!」

——吹雪の中から現れる野生のポケモン達

空からはズバットやゴルバット、さらにはドータクンまで。

崖の周りにある穴からはユキカブリやユキノオー達が。

「やべえぞこれ!!!」

「チッ——フライゴン、りゅうのいぶき!!!」

バシャーモに掴まりながら、ボールからフライゴンを出すと同時に指示を出すケイジ。

場に出たフライゴンは、ズバット達を確実にりゅうのいぶきで落としていく。

――迫るユキノオー達のふぶき

「っ、ラティオス、ラスターページ!!」

「カノン、りゅうのはどうだ!!」

いち早くそれに気づいたカグヤとカイリ、ラティ兄妹の同時攻撃でふぶきごとユキノオー達を攻撃する。

それにより爆発が起き、レイジはすぐに全員へ声を掛けた。

「みんな、大技は控えるんだ!! このままじゃ雪崩が起きる!!」

「け、けどよ……ちまちま撃破してたらキリがねえぞ!!」

「それでもよ! ハク、かみなり!!」

ボールからハクを取り出すヒメカ、すぐさまかみなりを仕掛け残りのゴルバット達を撃破していく。

しかし、ドータクンから高エネルギーが発射されようと……。

(ラスターカノン!?)

「やべーっ!?!」

「リオン、ブラストバーン!!」

ラスターカノンが発射されると同時に、ボールからリオンを出す。

そして、迫るラスターカノンに真っ向からリオンはブラストバーンを撃ち放った――！

――少しずつ押されていくラスターカノン

そこに、追い討ちとばかりに攻撃を繰り出した。

「ラティオス、はかいこうせん！！」

ブラストバーン、さらにはかいこうせんによって、ラスターカノンを粉碎しドータクンを撃ち落とした。

これで空からの脅威は消えたものの、まだユキノオー達が残っている。

攻撃を仕掛けるのは簡単だが、ユキノオー達の居る場所に下手な技を仕掛ければ、間違いなく雪崩が起きてしまうだろう。だが、かといってこのままでは……。

「くっそー、足場さえありゃあこんなに苦戦しねえのによ！！」

おいケイジ、お前空間を渡る力があるなら山頂まで俺達全員を転移させろよ！！」

「無茶を言うな。自分の頭の中にイメージできる場所しか転移はできんし、第一長い距離を転移できるか」

「なんだよ、使えないなその能力！！」

「なんだと！？ お前が言うな！！」

「んだとおっ!？」

「お前達、喧嘩してる場合か!!」

ぎゃーぎゃーわーわーと騒ぐカイリとケイジ。

しかし、彼のある言葉にレイジとヒメカは反応を示す。

「足場……………っ、そうか!!」

「フィー、リフレクターよ!!」

レイジがある事に気づくと同時に、いち早くヒメカはフィーを場に出し指示をする。

そして――フィーは“自分の足元にリフレクターを展開する”

これはゾロアークとの戦い、さらにはロストとのフルバトル時に使った戦法、リフレクターやひかりのかべで空中に足場を作る戦法だ。

「ヒカリ、君はひかりのかべだ!!」

ヒメカの一瞬後にヒカリをボールから出し、同じように空中に足場を作っていく。

「フィー、サイコキネシス!!」

フィーの瞳が光り、ユキノオー達の動きを封じ込めた。

それと同時に、レイジとカイリは別のボールを手に取り最後の勝負を仕掛ける。

「ソウル、足場を渡ってかえんほうしゃ!!」

「エレキブル、10まんボルト!!」

最大パワーで放たれた炎と雷は、一体も逃す事なくユキノオー達を捉えていく。

耐えきれず倒れる者、そのまま逃げ出す者、違いはあれど……ようやく不安定な場所でのバトルは終わったようだ。

「——ふう、あぶねえあぶねえ」

「みんな、ご苦労様」

ボールにポケモン達を戻し、すぐさま移動を再会させる。

またいつ野生のポケモン達が現れるかわからない以上、いつまでものんびりとはしていられないからだ。

……。

「つ、着いた……」

山頂に到着すると同時に、カイリは長いため息を吐き出しながらその場に座り込んだ。

しかし無理もない、ここに来るまでに更に二回、野生のポケモンに襲われれば誰だってこうなる。

「……ここが、テンガン山の山頂」

「そう、そして山頂はやりのはしらと呼ばれているの」

「やりのはしら……」

なる程、確かに槍のような尖った岩がいくつも連なっている。それに……中央には一枚の壁画が。

「こいつは……ディアルガとパルキア」

「それだけじゃない、ギラティナもの壁画もあるよ」

「ギラティナ？」

「……ディアルガとパルキアと同じく、幻のポケモンであるギラティナ。

この世界を安定させる為に、裏の世界に存在する……アルセウスの分身の一つ」

「アルセウスの……」

「……………」

更に奥へと進み、すぐさま行き止まりである崖に辿り着く。

「……………?」

しゃがみ込み、その場に積もった雪を払いのけると……………そこには、何か文字が書かれていた。

「なんだこれ?」

「古代文字のようだが…………シロナ、読めないか?」

「…………ダメね。こんなの見た事ないわ」

考古学者であるシロナですら、こんな文字は見たのは初めてだった。

しかし…………この文字を見て、レイジはどこか遠い声で呟く。

「…………天界の笛を持つ選定者、この地において世界の行く末を決める選定を行う為に、この場所に立ち天界へと響く音色を奏でよ」

「えっ……………!?!」

「お、おい…………レイジ、もしかしてお前…………これが読めるのか?」

「……………」

カイリの問いに、どうにか頷きを返しながら、レイジは自分自身に對し驚いていた。

何故、自分はこのような文字が読めるのか、シロナですら解読がで

きない古代文字を、何故……。

それに——選定者という言葉は、ひどく自分を混乱させる。

あの時、エンジュにてホウオウが、そしてロキが自分に対して告げた言葉も……。

「——、あ」

手が、震える。

行ってはならない、行かない方がいいと、内なる自分が訴えている。

ここから先に行けば、お前は間違いなく人として生きる事は——

「——」

バッグから、レジギガス達に渡された笛を取り出す。

——立ち止まってなど、いられない

自分は遊びに来たわけではないのだ、たとえこの先に何が待っていたとしても……全てを受け入れるだけだ。

もう一度自分にそう言い聞かせ……レイジは、笛を口に含み音色を奏で始めた。

♪

わかる。

このような楽器、今まで使用した事などないのに、まるで身体が覚えてるように音を出せる。

美しく、儚く、それでいて尊く力強いその音色は、瞬く間にカグヤ達を魅了し息をする事すらも忘れさせた。

それだけでは飽きたらず、あれだけ吹雪いていた気候も……まるでレイジの奏でる音色に圧されてしまったかのように、雲ごと消え去ってしまう。

そして——“それ”は唐突に現れた。

「……………」

笛から口を放し、前を見る。

——見渡す限りの、崖

しかし、先程とは違う点が一つある、それは……。

「これは……!?!」

「な、何これ……階段?」

そう、崖の前に現れたのは――黄金の階段。それが遥か上空にまで続いている。

「――行こう」

笛をバッグに戻し、レイジは躊躇う事なく階段を登っていく。

その光景に、暫し放心していたカグヤ達だったが……すぐさま慌てて彼の後を追う。

「な、何なんだよ……これ」

宙に浮かぶ階段など見た事はない、自分達は夢を見ているのではないか、そう思えてしまう。

そんな中で、レイジは何も言わず何も考えずただひたすらに階段を登っていく。

と、ボールからティナが飛び出してきた。

「お父様、申し訳ありませんが……何が待っているかわかりませんので、念の為外に出ておきますね」

「……………うん。お願いねティナ」

「……………お父様？」

「……………」

（――違う。いつものお父様と）

何故か、近づきにくい雰囲気纏っているのだ、今の彼は。

まるで自分達などこの場に居ないかのように、彼は階段を登っている。

その疑問を彼自身に告げる事ができず……やがて、唐突に階段は終わりを迎えた。

辿り着いた先は――白い世界、音も何もないまっさらな空間。

「ここは……!?!」

辺りを見回しても、白い景色しかなく現在地を把握できない。それどころか自分達は何故こんな所に居るのかも……。

――長かった。私にとって刹那の時だとしても……やはり、この時間には永遠と思える程に長かったな。

『――っ!?!?』

この白い世界全体から響くような声に、全員が身構える。

「だ、誰だ！？ 出てきやがれ！！」

「大丈夫だよカイリ、大丈夫だから」

「えっ………」

そう告げるレイジは、ひどく落ち着いていて……皆から少し離れてから、“神”の名を呼んだ。

「出てきて——」

——アルセウス」『——』

その場に居る誰もが、レイジの言葉を聞き思考を凍らせる。

そして——“ソレ”は彼の声を応じ、姿を現した。

——白い身体の四足歩行の巨大な生物

腹部だとおもわれる場所には、黄金に輝く輪っかのようなものがあり……その身から感じる力は、ただ圧倒的だった。

それは本能に近い、絶対的な覇者と呼べるべき存在、この世のどんな摂理にも適わない——唯一無二の存在。

シロナから聞いた、この世の全てを創り上げた神と呼ばれしポケモン。

——アルセウスが、この世界に降臨した

第93話 始まりの間〜レイジの出生、悪魔の再来〜（前書き）

自分を知るため、テンガン山に向かうレイジと仲間達。

そして山頂で天界の笛を吹き――現れたのは始まりの間。

その先に待っていたのは……この世界を創造したポケモン――アルセウスだった。

第93話 始まりの間、レイジの出生、悪魔の再来

誰もが、声を出す事ができない。

目の前の光景がただ信じられず、けれど……夢でも何でもない、現実だと理解をするのには、そう時間はかからなかった。

「——よく来たレイジ、そして……この世界に生きる私の子達」

まるで鏡のように澄んだ綺麗な、けれど現実味が薄い声で、アルセウスはレイジ達を歓迎した。

「え、あ、う……？」

「……アルセウス、ここは？」

「ここは始まりの間、この地を中心として世界は創られていった……故に始まりの間と私は呼んでいる。

それより……よくここまで来たな、レイジ」

その声には、若干の喜びの色と……言いようのない厳格さを持ち合わせていた。

と、アルセウスの視線がカイリとケイジに向けられる。

「……お前達、名は……確かカイリと……ケイジだったな」

「うえ！？ あ、はい、まあ……」

「……それがどうした？」

カイリは何を緊張しているのか、変な声を出しているがケイジは相も変わらず目つきが悪く、まるでアルセウスを睨んでいるようにも見えた。

すると、アルセウスは2人に対しある事実を口にした。

「……ディアルガとパルキアの力、歪んだ使い方はなかったようだな」

と。

「何……………？」

「……………は？」

一体何を言っているのだろう、初めに浮かんだ感情は疑問。

ディアルガとパルキアの力、それは一体……。

「それって……じゃあ、レイジくんの推測は当たってたのね」

「えっと……よく、わかんねえんだけど」

「お前馬鹿か？ どうしてわからないんだ」

「んだとおっ！？ わかんねえもんはわかんねえんだよ！！」

「2人とも、喧嘩しないの！」

「……はーい」

「フン……」

ヒメカに怒鳴られ、一応おとなしくなる2人。

しかし、アルセウスの言葉が理解できない……もとい信じられないのは、なにもカイリだけではなかった。

「で、ですけど……それって本当なんですか？

その……カイリさんとケイジさんの力が」

「事実だ。私は偽りは告げない、彼等は……ディアルガとパルキアの力をその身に宿している」

淡々と、ただ真実のみを口にするアルセウス、しかし……やはり信じられるような内容ではなかった。

だってそうだろう、ずっと謎だったこの力の正体は、神と呼ばれしポケモンであるディアルガとパルキアのものだと言われても、すぐさま納得するのは難しい。

第一、納得した所で新たな疑問も生まれてくる。

「アルセウス、どうして2人はディアルガとパルキアの力を持って

いるの？」

「そうだよ！ 俺はディアルガやパルキアともちろん会った事はねえし、意味分かんねえよ！！」

「落ち着け、ちゃんと説明はする。

——全ては、選定のためだ」

「選定……？」

その言葉には、ケイジ以外は聞き覚えがあった。

選定——ホウオウやロキが、レイジに対して告げた単語。

それがアルセウスの口からも飛び出し、レイジ達は混乱した。

「アルセウス、選定って何のこと？ ロキやホウオウも言っていたけど……」

「ホウオウは知っていて当然だ、お前にそれを伝えるよう私が指示した」

「えっ……」

「そしてロキ……あの者も知っていて当然だ、何故ならあの者は——」

「——お喋りが過ぎるなアルセウス、まだ神気取りでいるのか」

『————っ！！？！』

その場にいた全員が、後ろに振り返る。

確認しなくてもわかる、けれど……そうせざるおえなかった。

そして、そこにいたのは予想通り——悪魔のような男。

——ロキが、この上なく不気味で嬉しそうな笑みを浮かべ、この始まりの間に立っていた。

「ロキ！？」

「な、なんでお前がここに居るんだよ！？」

「そんな事はどうでもいいだろう、しかし……アルセウスよ、私のレイジを自分の思い通りの役目を与えないでほしいものだな」

「貴様……自分の役割を忘れた挙げ句、この世界にあってはならぬ力を振りかざすとは何事か！？」

先程までの落ち着いた口調など消え、アルセウスはロキをその鋭い眼光で睨みつける。

しかしロキは気にした様子もなく、アルセウスを小馬鹿にしたように口元を歪ませ言葉を返す。

「何を言っている。この世界を選定しようなどとおこがましい事を考える貴様に言われたくはないものだな。」

アルセウス、この世界は確かにお前が創り上げたものかもしれないが……既に貴様の手から離れているのだよ。古き神は……さっさと消えてしまえ」

（何だ……一体何を言っているんだ……!?!）

こちらの事など完全に忘れた様子で、アルセウスとロキが意味がわからない会話を繰り返している。

それに気づいたのか、それとも思い出したのか、ロキはレイジへと視線を向け……彼等が抱いている疑問を解き放った。

「そうだった……きちんと説明しなくては、わからぬか。」

——全ては、この傲慢な神が世界を選定するなどというくだらぬ考えを持った事から始まる」

「世界を、選定……?」

「レイジ、お前は……この世界に生きる生物達が完全な存在だと思っているか?」

「えっ……」

「カイリ、お前は这个世界に生きる者達は、このまま生を謳歌して

いいと思っているか？」

「なっ——そ、そんなの当たり前だろ——！」

「当たり前……では訊くが、何故当たり前だと思う？　そこに至る絶対的な理由は何だ？」

「そ、それは——」

そう言われてしまうと、答えられない。

人間は——いや、この世界に生きる者達は、何故生きていていいのか。そんな疑問など……今まで1度たりとも考えた事などない。

理由を話せ、そう言われても答えられるはずなどなかった。

「——そう、この世に生きる者達は自分達が生きているのは当たり前だと思っている。

そしてそれはいつしか「自分達が世界を動かしている」などという理解できぬ極論に達し……この世界そのものを、自分達の道具か何かと勘違いする者まで現れた」

自分達が世界の覇者であると、そう考えた者達によって戦争が起こり、長い年月を経て創られていった自然は、消えていった。

傲慢で、身勝手な人間達によって。

「人は過ちを繰り返し、それを見ていたアルセウスはこう思ったそうだ」

——人は、生きている価値があるのか、と

「しかしそう一概に決めつける事もできない、そう思ったアルセウスは次の行動に移った」

——人間が、生きるべき存在かどうかを確かめよう、と

「アルセウスはすぐさま自分の力の一部を与えた人間を創り上げた。もちろん自分の出生など全ての記憶を継げずにだ。

何故ベースを人間にしたのか？ それはその人間すら選定の対象とする為。自分の力に溺れるか、それとも正しい使い方ができるのかを、見定めるためだ」

「—————」

「ここまで言えばわかるだろうレイジ？ お前が一体何者であるかを」

「……………あ」

楽しそうに、そう告げるロキに、レイジは何も答えられない。

——待て

それはつまり、自分はアルセウスに——

「ふざけた事ぬかしてんじゃねえ!!」

「―――っ」

カイリの怒声が、レイジの思考を中断させる。

視線を向けると、怒りに満ち溢れた表情で彼はロストを睨みつけていた。

「そんなデタラメ並べやがって……!!　んなこと信じられるはずがねえだろうが!!」

「信じられないのなら、何故そこまで必死に声を荒げるのだ？」

――理解したのだろうか？　その話が真実であり……そして、レイジの正体は何であるのかを」

「っ、そ、それは……」

「……まあいい、レイジも私の口から直接言わねば納得できないようだからな」

そう言うと、ロキはレイジへと改めて視線を向け。

――信じられぬ事実を、口にした

「――レイジ、お前はアルセウスによって創られた人間だ。

この世界に生きとし生ける者が存在する価値があるかどうか、そ

れを選定する為に力を得た存在なのだよ」

と。

「……………」

笑いたくなった。

但し、それはあまりに突拍子のない事を口にしたロキではなく。

——ある意味で、自分の予想通りであった真実に対してだが

「なっ——」

「ア、アルセウスが……創り上げた人間!？」

カグヤ達全員の視線が、レイジへと注がれる。

「——『……天界の笛を持つ選定者、この地において世界の行く末を決める選定を行う為に、この場所に立ち天界へと響く音色を奏でよ』」

あの文字で、ある程度の予想はできてた……」

「ほう……さすがだな、頭の回転の良さは賞賛に値するものだ」

「……………アルセウス、けど僕はもう一度確認がしたい。」

——ロキの言っている事は、全て真実なの？」

アルセウスへと視線を向け、抑揚のない声で問うレイジ。

するとアルセウスは、そんな彼に対してはつきりとした口調で、真実を告げる。

「——そうだ。お前は……私が創り上げた選定者の1人。私の力の一部をその身に宿した……私の分身と呼べるべき存在だ」

「……………」

わかりきっていた。わざわざアルセウスに訊かなくても……わかっていたのに。

まだ、心のどこかでは認められないと思っているのだろうか。

「う、嘘だろ……」

「レイジが、アルセウスに創られた……人間？」

「身勝手なものだろうレイジ？ アルセウスは自らが世界を創ったからといって、それを自らが好きにしているなどという考えを持っているのだ。」

人間の傲慢さを責める前に、まず自分の傲慢さを償ってほしいものだ」

どこか、怒りすら抱いているようなロキの声。

しかし——レイジはそんなロキの言葉を、真っ向から否定した。

「――そんな事、どうだっていいよ」

本当にどうでもいいように、彼は言った。

その言葉は、カグヤ達だけでなくロキすら驚愕するようなものだった。

「何……………」

「確かに、自分の出生には少なからずショックを受けてる。

どうして、とか、なんで、とか……考えてないと言えば嘘になる。だけど……たとえ僕が何であったとしても僕は僕だ、『マサラタウンのレイジ』という自分は、決して揺るがない!!」

自分が何者であろうと構わないと言ってくれた人達が居た。

そして今も――自分を見守ってくれている仲間達が、居てくれているのだ。

ならばどうして、そんな言葉で自分を見失わなければいけないというのか。

「…………うへえ、お前切り替えはええな」

「そういうカイリは、自分の力がディアルガのものだって知って、

ショックだった？」

「んなわけねえだろ。でもお前のは内容の大きさが違うじゃねえか」

「フン、お前とレイジを一緒にする時点で間違いなんだ」

「んだとおっ！？　そういうお前だって内心ではショックを受けてんじゃねえのか！？」

「そんなわけないだろう、確かに驚きはした。

だが……レイジの言ったように自分は自分だ。それだけで充分だろう？」

つまらなげに言うケイジに、カイリはまあな、と笑みを返す。

——そう、ただそれだけの話なのだ

そんな事実自身を乱す程、少年達の心は弱くない。

「……………」

レイジ達のやりとりを見て、ロキの顔には驚きの色が。それは当然だ、この言葉でレイジの心に揺さぶりを掛け、一気に自分のペースに持ち込もうと思っていたのに、まったくの効果なしだったからだ。

そして、カグヤ達もロキと同じくレイジ達の心の強さに驚きを隠せなかった。

でも——彼らしいと、カグヤは自然と笑みを浮かべていた。

(……やっぱり、レイジは強いね)

迷いのない彼の言葉に、カグヤは素直に感嘆する。

——しかし彼女は気づかない

彼が己を保ったまま真実だけを受け入れる事ができたのが、自分と……シロナ達の言葉によるものが大きい事に。

「それに今はどうだっていい、今は……この場であなたを止める事だけを考える。」

これ以上、あなたのせいで悲しみを増やさないために!!」

——全ては、これが終わってからの話だ

内に宿った疑問は、今は奥底に追いやって——レイジは、レイジ達はロキと対峙した。

……………。

「——よもや、ここまで強いものになっていたのか、お前の心は」

「僕の心は強くなんかない、支えてくれる仲間達が居るなら、どんな事だって立ち向かっていけるんだ」

「お前みたいに、1人じゃないからいくらでも強くなれるんだよ！」

！
」

「……………」

へおかしな真似はしないように、もし少しでも動いたら……一刀の元に斬り捨てます」

既に、ティナの両手にはサイコセイバーが握りしめられており、脅しではない本気の殺気をその身に宿していた。

と、その時——ロストが持つモンスターボールから、あるポケモンが姿を現す。

「——ミュウツー」

「……………」

ロストの声にも反応を返さず、ミュウツーはロキをその鋭い眼光で睨みつける。

その顔は怒りに満ち溢れ、その身に纏うのは……殺意のみ。

へ……ミュウツー、お気持ちわかりますが、勝手な行動をなさってはいませんか？」

彼の心中を知っているティナは、その身に宿す激情を肯定しつつも、彼を優しく落ち着かせようと言葉を紡ぐ。

けれど、彼からの反応はなく——緊張が深まる中、ミュウツーは己が怒りを懸命に抑えながら、ロキに対し口を開く。

「――何故だ。何故貴様は博士とアイを殺した？彼等が一体貴様に何をしたというのだ？」

(…………ミウツ―)

悲しみに満ちた、痛々しい口調は、聞くだけでレイジの心に鈍い痛みを發した。

しかし――それを嘲笑うかのように、ロキは言葉を返す。

「――驚いた。何を言うかと思えば…………まだそんなくだらない問いかけをしてくるとは思わなかったぞ、ミウツ―」

「くだらない、だと…………!？」

「くだらないさ。兵器として生み出された存在だというのに、感情に振り回されるとは…………貴様は所詮、失敗作だな」

本気の侮蔑と嘲りを含んだ言葉。

彼は、一欠片もミウツ―の大切な存在を無慈悲に奪った罪悪感を、抱いてはいない。

「き…………」

そして、それは。

ミウツ―にとって、何よりも許せない言葉であり。

「貴様 あああっ!!」

「ミュウツー!!」

へミュウツー、やめなさい!!」

レイジとティナの制止の声すら届かないまでの怒りを、与えるものだった。

鬼のような形相で、右手に凄まじいサイコパワーを宿しながら、ロキへと向かっていくミュウツー。

それはまともに受ければ、人間の身体など粉々に粉碎してしまう威力を持っている。

しかし——ロキはその場で動く事はなく、不適な笑みを浮かべるのみ。

——そして、ミュウツーの手がロキに触れる瞬間

彼は、悪夢を呼び寄せる言葉を、紡いだ。

「——因子、解放」

第94話 堕ちたミュウツー〜現れる最悪の兵器〜（前書き）

現れたロキ。

復讐に燃えるミュウツーが、ロキへと迫る中。

悪魔は、ミュウツーを最悪の兵器に変える言葉を呟いた……。

第94話 堕ちたミュウツー現れる最悪の兵器

「グ、ガ——ッ!!?」

「——っ!!?」

身体をくの字に曲げ、突如として苦しみの声を上げるミュウツー。

その様子は普通ではなく、更にレイジを見た。

苦しむミュウツーを見て、この上なく楽しそうに笑うロキを——

「貴様は失敗作だが……失敗作なりに利用価値が残っているのではな

「ギ——キサ、マ……」

「何故お前がああも簡単に逃げられたのか、考えた事はなかったのか?

——つまりは、こういう事なのだよ」

「ガ、グ、ウ——!」

消える。

内側から発芽した何かが、ミュウツー自身の意志を消していく。

どんなにもがいても抵抗しても、それを止められない。

「感謝してもらいたいなミュウツー、私はお前の怒りや憎しみを消

してやっているのだ。

——馬鹿な博士とその娘の記憶すら、もうすぐお前の中から消えてくれるのだぞ？」

だから、楽になれ、と。

歪んだ笑みを浮かべたまま、ロキは非情に言い放ち。

「ガ——アアアアアアアアッ！！！」

瞬間、加速度的にミュウツールの意志が消えていった。

「っ、させるか！！」

しかしそれをただ黙って見ているレイジではない、左手を右腕に添えミュウツールに突き翳す。

意識は内側に、そして力ある言葉を解き放つ。

「——在るべき姿に還るんだ、ミュウツール！！」

手から放たれる白い光。それは迷う事なくミュウツールへと当たり……。

——何も、変化がなかった

「なっ——!!?」

「無駄だレイジ、もはやお前の力は届かない。

——人の身では、その力を完全に使う事はできないからな」

「くっ——!! アルセウス!!」

自分の力が届かない、驚愕よりも理解の方が早かったレイジは、アルセウスに叫ぶ。

自分では無理でも、アルセウスならば——

「お願いだアルセウス、ミュウツ―を元に戻して!!」

「——わかった」

大きく頷きを返し、アルセウスはミュウツ―に向かってレイジと同じ、けれど彼よりも更に大きな浄化の力を解き放とうとして。

「——待っていたぞ、その時を」

そんな、ロキの言葉を耳にしつつ。

レイジ達は、突然現れた黒い雷に包まれるアルセウスを、見た。

「ぐああああっ!!?」

「アルセウス!?!」

「ぐ、あ——こ、これ、は……!?!」

黒い雷を浴びながら、アルセウスはその声に驚愕の色を宿す。

「——やはり、雷の属性を守る事はできないか」

「っ、貴様——まさか!?!」

苦痛に耐えるアルセウスに、ロキはますます歪んだ笑みを浮かべ——まるで預言者のように両手を天に掲げた。

「見よ!　これが私の最高傑作、空中要塞『ヴァルハラ』だ!?!」

——白い世界が、砕け散る

元の世界に戻り、雲と青い空が見える中。

「…………おい、なんだよ“アレ”は……」

震えた声で、カイリは空を覆い尽くす存在を、指差していた。

……………。

——それは、まさしく要塞だった

黒一色で統一された禍々しいデザイン、王冠のような形でそのあちこちには砲身が飛び出している。

重量感溢れるその見た目は、見るだけで畏怖の対象となりえた。

その要塞——ヴァルハラの下には巨大な剣のような物体があり、そこからアルセウスを攻撃している黒い雷が発射されている。

「グ——貴様、私の一部を」

「ああ。お前の『いかずちプレート』は有効活用させてもらっているよ」

「いかずちプレート……？」

「アルセウスには自分の命の一部であり、各々の属性を無効化する16のプレートを所持している。アルセウスが絶対的な力を持つ由縁だ。

尤も……今は16のうち5つのプレートを失っているがな」

「ぐ、が、は……」

数十秒もの雷がようやく止み、アルセウスの身体が重い音を響かせ地面に倒れる。

そして——ミュウツーもまた。

「グ、ウ……ガ」

「——どうやら、終わったようだな」

「ミュウツー……」

——違っていた

もう、レイジ達の知るミュウツーではなく……ただの兵器としてのポケモンに、形果てていた。

腕や足は不自然に膨れ上がり、顔には既に生氣はない。

しかし、レイジ達に向けられている感情は……殺意だけ。

何の躊躇いもなく、ミュウツーはロキの命令を受ければレイジ達を殺すだろう。

もう——誰の声も届かない。

ただの兵器と化した彼には、もう……意志というものは失われている。

「デメエ……一体何をしやがった!!」

「ミュウツーの身体の中に埋め込んだプログラムを発動させるチップを呼び起こしたただけだ。

自我を失い、私の意のままに操れる兵器にする為の、な」

「酷い……!!」

「私の所有物だ。私がどうしようと勝手ではないのか? それにミュウツーも辛い記憶を忘れて、ただの道具になる方が幸せだろうさ」

淡々と言い放つロキ、その口調に微塵の罪悪感など見られない。

「それが……それが人間のする事か!!」

「私に人間らしさを求めても無駄だぞレイジ、尤も……お前も同じような存在だが」

「元に戻せ! 今すぐにだ!!」

「それは無理な相談だ、こうなってしまえばもう二度とミュウツ―は元に戻る事はない。

――このまま、兵器として生きる以外に選択肢はないのだよ」

「――――」

怒りが、憎しみが。

この世全ての憎悪が、レイジに集まっていくようだ。

それほどまでに、目の前の男のやった事は許せない。

血が滲み出る程に手を握りしめ、射殺す気でロキを睨む。

しかし、それを前にしても彼は余裕を崩さない。

「さて……これでようやく整った。

レイジ、これが最後になるだろうが……私と共に来る気はないか？」

「……………」

「来る気はないか……だが、もし断れば仲間の命はない、と言える
どうする？」

「——っ」

あまりにも卑怯な物言いに、レイジの中にも迷いが生まれる。

——ここから逃げ出す事は不可能に近い

でも、このような存在に従うくらいなら……レイジはそう思っている。

しかし……仲間の命を盾にされたら………！

「俺達の事なら気にすんなよ、レイジ」

「……………カイリ」

「俺達だってお前と同じ気持ちなんだ、こんなヤツに従う理由なん
かないぜ」

「カイリさんの言う通りです、ですから気にしないでください！」

「お前の望む通りにしろレイジ、おれ達はお前の選択を信じている」

誰もが、レイジの背中を押してくれている。

それが——彼にとってなによりも嬉しい事だった。

「……みんな、ありがとう」

迷いは、もうない。

感謝の意を示しつつ、レイジはもう一度真っ向からロキと対峙した。

「——そうか」

どこか、遠くから聞こえる声でロキは呟く。

「……つまらんな、お前は」

「——」

心さえも凍ってしまうほどの、冷たい声。おもわず後ろに後退ってしまいそうになる。

「残念だ……この無意味な世界が壊れる様を、見せてやろうと思ったのだが」

「無意味……?」

「無意味だと思わないのか? 人間は自らを絶対者だと決めつけ、欲望のままに他者を喰らい、寄生し、肥え、増えていく存在だ。

——そんなものが、この世に存在しているのか?」

「そ、それ、は……」

その問いには、答えられなかった。

認めたくない、けど……否定する事だってできない。

人は過ちを繰り返し、その度に世界を壊し続けてきたのだ。

そんな人間が必要か、などと言われて……答えられるはずなどなかった。

「……まだ、人を信じる心があるのか？」

無駄だ。人はいつだって生き方を変えられないものだ、お前とてその力で身勝手な暴力を振るわれてきたのではなかったのか？」

「————っ」

びくりと、レイジの身体が震え上がる。

——決して消えない、過去の傷

それが音を立てて、再び表に出ようと傷口を開いていく。

「私達は選ばれたのだ、この世界を……人間という愚かな存在を、消し去る役目を持って生まれた神なのだ！」

他の者にはないが、私達には資格がある！！

レイジよ、選定者であるお前の力で、この世界を変えてみせろ！

「！」

「————」

葛藤が、レイジの頭の中を渦巻いていく。

あの男の言っている事は危険だ、従う理由も意味もない。

内なる自分は必死にそう言い聞かせている、レイジとしてその言葉が正しいと理解している。

なのに――どうして、否定の言葉が口から出てこないのか。

「――あくまでも、くだらぬ世界に加担するか」

それは、落胆だったのだろうか。

つまらなげに、憎々しげにそう吐き捨て――ロキはヴァルハラに指示を出す。

「もういい。アルセウスごとここで消え去れ。」

――さらばだレイジ、あの世で後悔するのだな」

――放たれる黒い雷

アルセウスですらこんなにもダメージを受けた雷など、人間が受ければひとたまりもないだろう。

明確な死、それを前にしても、誰1人として目を逸らす事なく真っ向から立ち向かって――

――瞬間、黒い雷は虚しく地面を抉り

レイジ達の姿は、霞へと消えていった——【ロキside】

「……………」

逃げたか……。

無駄な足掻きをするものだな、神という存在は。

「さて……」

踵を返し、ヴァルハラの下に移動する。

すると、私の身体が宙に浮き、ヴァルハラの内側まで移動した。

「おかえりなさいませ、ロキ様」

頭を垂れるフレアに視線を送りつつ、私は計画を開始する言葉を告げた。

「フレア、進行を開始するぞ」

「……………本当に、世界を壊すのですね？」

「不満か？」

「いえ……ワタシはロキ様の命令には従います。

——その為に、ここに居るのですから」

「……………」

よく言う、という言葉は放たなかった。

フレアが私の計画に反対なのは、よくわかっている。しかし、使える駒は手元に置いておいた方がいい。

さすがに使えないからといって、この女を他の部下と同じように“処分してしまうのは勿体ない”

(……………長かった)

思えば、僅か15年という月日だったが……私にとって永遠とも思える時間だった。

だが、これようやくこのくだらなく無意味な世界を消す事ができる。

——15年前、私はアルセウスの力によってこの世に生まれた

私は——初めてアルセウスによって生み出された選定者。

だが1人目という事でレイジとは違い、選定者としての役割や目的は知らされていたし、肉体も初めから成人したものであったし、与えられた力もレイジとは違い……アルセウスの知識だったが。

しかし……私にはそれが許せなかった。

与えられた目的を果たすために生み出された人形のような存在、空っぽの傀儡そのものだ。

だから私は憎んだ、身勝手な理由で私を生み出したアルセウスを。

そして——くだらぬこの世界を、憎んだ。

しかし、それも今日で終わりだ。

伝説のポケモンの強大な力のデータ、そしてアルセウスの一部である5つのプレートを用いて造り上げたこの『ヴァルハラ』さえあれば、このような世界など簡単に滅ぼす事ができるのだから。

「ロキ様、アルセウス達の処分は……」

「放っておけ。アルセウスはもはや殆ど力を使う事はできんし、傷を癒やした頃には全てが手遅れになっているだろう。」

ディアルガ達如きに落とされるヴァルハラでもない、あの小僧達も……ゴミにも劣る存在だ。捨て置いても構わん」

「……………」

「どうしたフレア、まさか不服か？」

「……はつきりと申し上げてても宜しいのでしたら」

「……ほう」

その言葉に、少なからず驚いた。

意見をした事ではなく、まだ油断ならないと思っている事にだ。

「あの坊やは、何度も奇跡を起こしてきた存在です。たとえどんなに状況が有利だとしても、坊やはそれを覆す可能性があると――」

「くだらん。もはやレイジの事などどうでもいい存在だ。」

フレアよ、まだあの純粋な瞳を忘れる事ができるのか？ もう二度と取り戻せない光の世界に恋い焦がれているのか？」

「……………」

フレアは答えない、それをつまらなげに見ながら、私は歩を進める。

「準備をしろ。目指すはシンオウのリーグ本部……スズラン島だ」

まずは各地方のリーグ本部を潰す、そうすれば煩いゴミ達の抵抗も弱まるだろう。

（……終わるのだ。これで全てが……私と共に消え失せる）

それを邪魔する者は、たとえ誰であつても許さない。

そう——たとえ神であったとしても、だ。

【ロキside】out——「……うつ、あ……」

背中に軽い痛みを感じながら、レイジは目を覚ますと同時に起き上がる。

周りを見回すと、全員軽い怪我があるものの無事のようにだ。

「ヒ、ヒメカ…ミカン、どいてくれ……」

カイリだけは、ヒメカとミカンに乗られているようだが、怪我はな
いらしい。

「あつ、ご、ごめん！」

「す、すみません！」

「ふう……圧死する所だった」

「……ちよつと、それどういう意味？」

「私達が重いって事ですかそれ……？」

「あ、いや、そんな事はない……」

失言した気づいた時にはもう遅い、慌てて弁明をしようとするカイ
リだが、2人の迫力に圧され言葉が出ないようだ。

……打撃音と彼の悲鳴を後ろで聞きつつ、レイジはすぐさま苦しげに横たわるアルセウスの元へ。

——傷は深く、普通のポケモンならおそらく死に至る程の傷だ

「ホッホー、突然なにが現れたのかと思ったら……お主だったのか、レイジ」

「っ、ヨルノズク!?!」

「という事は……ここは始まりの地ね」

改めて見回してみると、沢山のポケモン達が心配そうにアルセウスを見つめている。

「……おい、ヨルノズクが喋ったぞ」

「そういえばケイジはここに来るのは初めてだったな」

「今はそんな細かい事を気にしてる場合じゃないよ。ヨルノズク、アルセウスの傷を治してくれないか?」

「ふむう……そうしたいのは山々じゃが、これだけの傷を治すには——」

「……構わぬ。心配しなくても大丈夫だぞ、レイジ……」

「っ、アルセウス!?!」

血だらけの身体を起こすアルセウスに、レイジはすぐさま制止の言葉を掛ける。

「ダメだよアルセウス、今自分がどんな状況になってるのかわかってるの!?!」

「大丈夫だ……今はあやつらもいる」

「えっ……?」

その言葉の意味を理解するよりも早く……それらは姿を現した。

「うおっ!!?!」

ヒメカ達に叩かれながらも、カイリは悲鳴に近い驚きの声を上げた。

……………。

——時空が歪み、現れる三体のポケモン

それは、シンオウに住む者ならば誰もが知っている、神と呼ばれしポケモン。

ディアルガとパルキア。

そして——存在が殆ど伝わる事が無かった、アルセウスの分身の一

つ——ギラティナの姿が。

この始まりの地に、集結していた。

「……………嘘」

その呟きは、誰のものだったのか。

その場に居る全員がディアルガ達の登場に目を見開き驚く中。

「…………君達が、僕達をここに移動してくれたんだね」

レイジだけは、ディアルガ達に助けられた事を自覚し、感謝の言葉を述べていた。

それと同時に、アルセウスの傷が少しずつではあるが、治っていく。

「これは…………」

「ディアルガ達は私の一部でもあった、故に彼らの傍に居ればある程度は回復できる」

「なる程なあ……………便利なもんだ」

これならば、アルセウスの身体についての不安は消えた。

ならば…………と、レイジはすぐさま気になっていた疑問を口にする。

「アルセウス、そのままでもいいから説明してくれないか？

——ロキの事、そして僕達の事を」

「……………」

「確かに。このまま何も聞かないままにはできないか……」

「……わかっている。今こそ全てを話そう」

……。

……………。

——アルセウスから聞いた話は、常人には理解できない内容のものだった

ロキがレイジより前に創られた選定者であり、反旗を翻したので新たにレイジを創った事も。

更に敢えて未熟な状態で創った彼を守るべく、彼と時を同じくして生まれた普通の人間に、ディアルガとパルキアの力の一部を与え、彼と巡り会えるように細工した事も。

全て、とてもじゃないが信じられるような話ではなかった。

「じゃあ、俺やケイジは力こそあるけど……」

「そう。力こそあるが普通の人間の家系に生まれた人間だ」

「……最初から、レイジと出会うように仕組まれてたのかよ。

ポケモントレーナーになりたいって思った事も、初めからプログラムされてたのか……？」

「それは違う。あくまでレイジと出会えるようにしただけだ。

——お前の感情や夢は、お前だけのものだ」

「フン——随分と傲慢な計画を立てるんだな、お前は。ロキが反旗を翻しても仕方がない」

身も蓋もないケイジの言葉、しかし誰も彼の言葉を否定できる者はいなかった。

アルセウスの気持ちも確かにわかる、だがだからといってこの選択が正しいとは……。

「——とりあえずこの疑問は置いておきましょう、どの道どんな方法を用いても明確な答えなんて出せないのだから」

パンパンと手を叩き、場の雰囲気を変えるシロナ。確かに彼女の言う通りだと、カイリ達は1度思考を別のものに切り替えた。

「とにかく今は、ロキを止めんとな」

「……あれを、か」

今思い出すだけでも、寒気がする。あの巨大な要塞ヴァルハラを打倒する手段などあるのだろうか。

「とりあえず、私は全国のポケモン連盟と国際警察にコンタクトを

取って戦力を集めるわ」

「お願いします、シロナさん」

「さて……後はヴァルハラが今どこにいるかだが……」

「っていうか、ロキは何処に向かってんだ？」

「おそらく各地方のリーグ本部だろうな」

「へ、何で？」

「お前馬鹿が？ 各地方のリーグ本部を潰せば、その地方のトレーナーに対して混乱を招く事ができる。」

それに、自分達の絶対的な力を世界に見せつける事ができるだろうが」

「な、なる程……ってかケイジ、馬鹿は余計だぞ馬鹿は」

「フン」

いつも通りの口調にカイリは怒鳴り散らしてやりたかったが、状況なので我慢する。

「だとすると……一番近いスズラン島に」

「おそらくは、な」

「――ロストの言う通りだ。ロキは今スズラン島に向かって進行している」

「えっ、どうしてそんな事がわかるの？」

「私の瞳は世界中の物事が見える千里眼だ。ロキの行動くらいならわかる」

「うはぁ……さすが神様だなぁ」

「……何が神様なものか、私は過ちを繰り返す人間と……いや、人間とは比べものにならない程の愚か者だ」

悲しげに自嘲するようなアルセウス。

それでも——彼が放つ言葉は、嘲りでも罵倒でもなかった。

「……後悔は何も生み出さない、大切なのは反省して今の自分に何ができるかだよ、アルセウス」

「レイジ……」

「まあ、この言葉は僕のものじゃないけどね……」

そう呟きつつ、レイジの視線はカグヤへと向けられる。

——これは、いつか彼女が言っていた言葉

この言葉で、レイジがどれだけ救われたか……おそらく彼女はわかっていないだろう。

案の定、視線を向けられたカグヤはちょこんと首を傾げるだけ。

「今の自分に、か……そうだったな、今の私にはそのような後悔をしている場合ではなかった。」

——ディアルガ、パルキア、ギラティナ、お前達はレイジ達に協力してやってくれ。

私も行きたいが、はつきり言って足手まとい以外だからな」

アルセウスの言葉に、大きく頷くディアルガ達。

「ふへえ……シンオウ神話に伝わる神様達が味方かよ……ゴージャスどころじゃねえな」

「各地方への移動手段としても戦力としても申し分はないだろう、だが……それだけではまだ届かない」

「えっ……」

「届かないって、ロキには勝てないって事か!？」

「あやつには私の一部である5つのプレートが備わっている、それにあの要塞の戦力も考えると……まだ足りない」

「そんな……!!」

アルセウスがそう言うのだ、間違いなくそれは真実なのだろう。

だとすると、もう打つ手が……。

しかし、アルセウスにも手がないわけではなく、彼の瞳は——レイジを捉えていた。

「レイジ」

「えっ……」

そして――

「今から、お前の力を完全に解放する。それならば……ロキを打倒できるかもしれん」

希望の光になるような言葉を、告げた。

「僕の、力を……？」

「そうだ。もう方法はそれしかない。
だからお前は暫しここに残り、力を解放してから合流しろ」

「……………わかったよ、アルセウス」

戦いの場に遅れる、それに対し一抹の不安はあるが、そう言われてしまえばそこまでだ。

「みんな、どうにか僕が行くまで――」

「お前が来るまでに、ロキをぶっ倒してもいいんだよね？」

「――――」

ニヤリと、意地の悪そうな笑みを浮かべ、カイリはレイジの言葉を遮ってそう言い放つ。

それには、さすがのレイジもキョトンとした表情を浮かべるが。

「……そうだね。僕も楽がしたいからそれをお願い」

すぐさま、笑みを浮かべて減らず口を言い返した。

「よっしゃ、そんなじゃあ行くとするか!!」

「パルキア、転移の方はお願いね？」

うなり声のような鳴き声を上げつつ、全員を背中に乗せるパルキア。質量の都合上ディアルガとギラティナと一緒に空間転移は不可能なので、先に行ってもらった。

「みんな、僕のポケモン達を先に連れて行ってくれ。少しでも戦力は多い方がいいだろうから」

言いながら、ボールホルスターごと手持ちポケモンをシロナに手渡す。

「ありがとう。レイジくん、貴方が来るのを待ってるわ」

「できれば私がピンチになった時をお願いね、王子様に助けられるお姫様な気分を味わいたいから」

「はいはい……」

大事な戦いの前だというのに……そんな事を思いつつも、いつもの彼女らしくて安心した。

そして――パルキアの雄叫びと共に、彼等の姿が消えた。

（みんな……頑張って）

「さて……では早速始めるとするか」

「うん」

「ホッホッホー、これお前達、レイジ達の邪魔になるからあっちに行っておれ」

気を利かせてくれたのか、周りに居るポケモン達と共に、ヨルノズクのレイジ達から離れてくれた。

「――リラックスしていればいい、苦痛や痛みは発しないからな」

「うん」

「………しかしレイジよ、お前は本当にいいのか？」

「えっ……？」

「ロキから言われた言葉を、まだ心のどこかで引きずっているようだが」

「……………」

『無意味だと思わないのか？ 人間は自らを絶対者だと決めつけ、欲望のままに他者を喰らい、寄生し、肥え、増えていく存在だ。』

——そんなものが、この世に存在していると思っっているのか？』

『……まだ、人を信じる心があるのか？』

無駄だ。人はいつだって生き方を変えられないものだ、お前とてその力で身勝手な暴力を振るわれてきたのではなかったのか？』

アルセウスの言葉で、あの時ロキに対して告げられた言葉を思い出す。

——人間は、愚か者でしかない

自分を含めて、救いようのない愚かな存在だ。

それを否定する事は、レイジにはできなかった。

けれど——

「——それでも、僕はこの世界と……この世界に生きる人達が大好きだから、信じる心は捨てられない」

この長い旅で見つけた答えを、今ここではっきりとアルセウスに告げた。

「―――」

「僕はそう信じてる、だから……もう迷わないよ」

世界を選定するつもりなどない、でも……自分の目と心で見えてきたこの世界を、無くしたいとは思えなかった。

「………そうか」

呟く言葉はたった一言、けれどそれでレイジにはアルセウスの心を理解する事ができた。

「――では、今から私の力をお前に流す。

さすれば、ロキも打倒できる力を持つ事ができるだろう」

――しかし、とアルセウスは言葉を一度切る

そして、レイジに対しあまりにも非情な事実を口にした。

「レイジ、完全に解放した力を全て解き放った時には―――」

――残念だが、お前の身体は力に耐えきれず、消滅するだろう。
すなわち――力を使えば、お前は“死ぬ”事になる」

第95話 最終決戦〜スズラン島での大決戦〜（前書き）

ミュウツーがロキの手に堕ち、ディアルガ達によってどうにか難を逃れたレイジ達。

全ての決着をつけるために、レイジを除いた一同はスズラン島へと赴いた。

第95話 最終決戦〜スズラン島での大決戦〜

——シンオウ地方、スズラン島

ポケモンリーグが開幕されるこの島は、現在——戦場にする為の準備が行われていた。

「オーバ、住民の避難は？」

「終わったぜ、シロナ」

チャンピオンシロナの声に應えるのは、シンオウ四天王のオーバ。

それを聞き、おもわず安堵のため息を漏らす。どうやら間に合ったようだ。

「くそっ……まさかこんなにも早いなんて、卑怯だぜ……」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！」

……。

——敵の進行は、思っていた以上に早かった

スズラン島に転移し、予め集合させていた四天王の面々に状況を説

明した時には……ヴァルハラが肉眼で確認できる程にまで近づいていたのだ。

しかも既に砲撃は開始されており、ディアルガ達が防いでくれているおかげで住民達の避難は無事終わったのだが、協力してくれるジムリーダーや他地方の四天王やチャンピオンを迎えに行く事ができない。

状況は知らせたものの……これではせいぜいシンオウサイドの面々しか協力を仰ぐ事しかできないし、しばらくはこのメンバーだけで戦うしかない。

(っ、弱気になんかなっちゃダメ………!)

自分にそう言い聞かせ、萎縮する心に渴を入れるカグヤ。

と、ここで突然砲撃が止んだ。

「……………」

不思議に思い、全員が視線を上げると、ヴァルハラはスズラン島の少し手前の海上で動きを止めていた。

(何だ……? 急に止まって……)

『――くだらぬ世界に生きる人間達よ』

『――っ!!?』

ヴァルハラから響く男の声、もちろん声の主はロキのものだ。

『その様子では、まだ無駄な抵抗を続けるつもりのようなだ』

「当たり前だろうが!! 世界をテメエの思い通りになんかさせねえ!!」

「この世界はあなた1人のものじゃない、身勝手な理由で世界をめちゃくちゃにする権利なんかないわ!!」

カイリとヒメカの言葉に同意するように、他のメンバーも大きく頷きを返す。

――すると、返ってきたのは本当につまらなげで一番腹立たしい言葉

『――生きる価値も意味もないような存在がよく言えたものだ。どうせ何もできないのだから……おとなしく死んでいけばいいものを』

――その言葉と同時に、スズラン島に落ちてくるのは……無数のデッドボール

ドサイドンやケンタロス、ラグラージやライボルト、レントラーといったポケモン達が、一斉に島へと進行を開始した。

「ちっ、敵さん早速おっ始めたようだぜ!!」

「どうにかボク達で迎え撃つしかないようだね!」

こちらへと向かってくるデッドポケモン達を迎え撃つため、全員が自分のモンスターボールを手を取った。

しかし、その中でカイリだけが……俯き、拳を握りしめている。

「……………カイリ?」

彼の様子に気づき、ヒメカが声を掛けた瞬間。

「————けんな」

「えっ……?」

「——ふざけんなあああっ!!!!」

叫び、ボールからカノンとゴウカザルを取り出し、素早く背に乗ってヴァルハラへと単身向かっていってしまった。

「くっ——ハク!!」

すぐさまボールからハクを取り出し、カイリの後を追うヒメカ。

「カイリさん、ヒメカさん!!」

「カイリの事はわたしに任せて、みんなは陸地の方をお願い!!」

そう言い残し、最大スピードでカイリの隣にまで追いつく。

「落ち着きなさいカイリ、頭に血が昇ったままで勝てる相手じゃないでしょう!!」

「わかってる!! わかってるけど……アイツだけは、絶対に許せねえんだ……!!」

俺達人間が価値や意味がない存在じゃないって所を、絶対に思い知らせてやる!!」

「はい、マスター。頑張らしましょう!!」

「……まったく、しょうがないわね」

呆れたようなため息をつきつつも、カイリと共にヴァルハラに向かうヒメカ。

しかし——それを許すロキではない。

「煩いハエだな……さっさと消えろ」

——2人に向かって放たれる砲撃

「カノン、真上まで飛ぶんだ!!」

それを回避しながら、ヴァルハラの上へ。

「ゴウカザル、かえんほうしゃ!!」

「ハク、りゅうのはどうよ!!」

真上からの同時攻撃。

それは真っ直ぐヴァルハラの上部へと向かっていき。

——薄い膜のようなものの前に、霧散した

「えっ——!?!」

「あれは……バリアか!?!」

「っ、マスター、掴まっててください!!」

「えっ——どわぁっ!?!」

急旋回するカノンの背から落ちそうになるが、どうにか堪える。

再び砲撃が開始され、凄まじい弾幕の中から——クロバットの群れが。

「っ、避けるんだ。カノン!!」

そう指示を出した瞬間、クロバット達から放たれたのは——ちようおんぱ。

「じよ、冗談じゃねえぞ!!」

こんな場所でこんな攻撃などに当たるわけにはいかない。

「戻れゴウカザル！ エレキブル、10まんボルトだ！！」

「ハク、かみなり！！」

ゴウカザルをボールに戻し、代わりにエレキブルを場に出して、ハクと共に特大の電撃でクロバット達をまとめて戦闘不能に。

「あれ……？ たった一撃で……？」

デッドポケモンの強さは何度も戦っているからわかっている。だというのに、いくら弱点とはいえただの一撃で倒せるなど、少々信じられない。

——が、その理由をすぐに理解する事ができた

「ディアルガ！！」

エレキブル達の攻撃と共に、ディアルガの攻撃も放たれていたらしい。

見ると、地上ではカグヤ達と共にパルキアが、そして海から島を攻撃しようとしているデッドポケモン達は、ギラティナが対応していた。

「ディアルガ、あのバリアをなんとかできないか！？」

「——ギガギャツ！！」

カイリが言うやいなや、ディアルガは雄叫びを上げ身体を発光させ

ていく。

そのただならぬ雰囲気とパワーに、カイリは背筋を凍らせながら急いでヒメカとその場を離れる。

そして――

「――ディガアアアアッ!!!!」

絶叫ともとれる大音量な声と共に、ディアルガの巨大な口からオーロラのような光線が撃ち放たれる――!

ディアルガの技――ときのほうこうは、ヴァルハラของバリアとぶつかり合い、激しい火花と閃光を辺りに撒き散らしていく。

と、ガラスが碎けるような音が響き。

ヴァルハラของバリアは、ディアルガの技の前に粉々に碎け散った。

――その瞬間、カイリ達は一斉に攻撃を仕掛ける

「エレキブル、フルパワーでかみなり!!」

ゴウカザル、オーバーヒート!!

カノン、りゅうせいぐんだ!!」

「ハク、フルパワーではかいこうせん!!」

カイン、ソーラービーム!!

ヒノ、ブラストバーン!!」

各々特大の大技で次々と砲台を破壊していく。

技を繰り出した後、カノンとハク以外はすぐさま全員ボールの中へ。さすがに、カノンとハクにあれだけのポケモンを乗せる事はできないからだ。

しかし、一斉攻撃によって都合八十近い数があった砲台も、その殆どを破壊する事に成功した。

「よっしゃー!!」

「ディアルガ、ありがとう!!」

「よし、このまま――」

このまま一気に叩く、そう思い残りのメンバーでもう一度総攻撃を仕掛けようとするカイリであったが。

「待ってください、マスター!!」

慌ててカノンがカイリに制止を呼びかけた。

「どうしたカノン――って!?!」

「そんな……!!?!」

おもわず、その場で固まってしまうカイリ達。

何故なら、ディアルガのときのほうこうによって破壊されたはずの

バリアが、みるみるうちに修復されていくからだ。

「マジかよ……くっ、ディアルガ！ もう一回さっきのやつをやってくれないか！？」

ときのほうこうのような強大なパワーを誇る攻撃でしか、あのバリアを突破する事はできない。

そう思いカイリはディアルガに声を掛けるが、首を横に振られてしまう。

「マスター、先程の技を再び使用するには、少し時間が掛かると……！」

「くっ………！」

「カイリ、またデッドポケモン達が来るわ……！」

「くそっ……！」

とにかく今は、次の攻撃までどうにか堪え忍ぶしか手はない。

歯がゆいと思いながら、カイリとヒメカは再び死闘を開始した――

……………。

一方、地上でも激闘が繰り広げられていた。

ドサイドンのとっしんがガブリアスに迫る！！

「メガニウム、ガブリアスの前に立ってリフレクター！！！」

しかし、メガニウムが庇うようにガブリアスの前に立ち、真っ向からリフレクターでドサイドンの攻撃を防ぎきる。

だがやはり辛いのか、メガニウムの表情は辛そうだ。

「ガブリアス、ドラゴンクロー！！！」

メガニウムの真上を飛び越え、両腕でのドラゴンクローをドサイドンに叩き込むガブリアス。

更に、メガニウムの口からは巨大なソーラービームを撃ち放たれた。

「カグヤ、ありがとう！！！」

「お礼ならメガニウムに行ってください！」

メガニウム、ゴウカザルの前にハードプラント！！！」

オーバのゴウカザルに迫るラグラージを、ハードプラントで連べ打ちにする。

その威力は凄まじく、ラグラージの巨大が地面に埋まりきってしまった。

「嬢ちゃん、サンキューな！！！」

「お礼を言うのはまだ早いですよ!!」　メガニウム戻って!　クチート、レントラーにアイアンヘッド!!」

右手のボールでメガニウムを戻すと同時に、左手でクチートの入ったボールを投げる。

場に出たクチートは、アイアンヘッドでレントラーを吹き飛ばし――後ろからやってきた他のデッドポケモン達をも巻き込んでいく。

「ヒュー、あの嬢ちゃんすげえ強いな」

「ああ、本当に頼りになる戦力だよ!!」

「しかし、私達も負けてはいられませんね」

「おうよ。四天王の力見せてやるぜ!!」
ゴウカザル、フレアドライブ!!」

「ドラピオン、クロスポイズンだ!!」

「ガバルドン、ストーンエッジ!!」

「フリーディン、エナジーボールです!!」

「ガブリアス、ギガインパクト!!」

シンオウチャンピオン、更に四天王の一斉攻撃により、凄まじい爆発と共に大量のデッドポケモン達が宙を舞う。

そこに、最後の追い討ちを掛ける攻撃が。

「ドダイトス、リーフストーム!!」

「ハガネール、アイアンテール!!」

ケイジのドダイトスのリーフストーム、そしてミカンのハガネールのアイアンテールが、周囲のデッドポケモン達全てを一カ所に吹き飛ばし。

「レジェンド、シャイニングフレア!!」

「ラティオス、フルパワーでラスターパージ!!」

そこに、カグヤとロストのポケモン達の最強技が炸裂する――!!

爆音を響かせ、視界を覆ってしまう噴煙が辺りに立ち込める。

周りの民家や地面が見るも無惨な姿になってしまうものの、今はそんな事を気にしている場合ではない。

しかし、その甲斐あって煙が晴れた頃には。

周囲のデッドポケモン達は、全て沈黙していた。

「ふう……なんて強さなんだ、あのデッドポケモンってのは」

額に滲んだ汗を拭き取りながら、オーバは呆れたようにため息をつく中。

「――まだ、終わりじゃない」

カグヤは、地面に倒れたポケモン達を踏み台にしながら近づいてくる、新たなデッドポケモン達を迎え撃とうと身構えていた。

「いつ!?!」

「そんな……まだこんなに……!?!」

数はおよそ五十、それも中にはメタグロスやガブリアス、ボーマンダなど伝説のポケモンに劣らぬ強さを持つポケモン達の姿が。

「くそっ……まだ来るのかよ……」

おもわず、弱気になるような言葉を漏らすオーバ。

しかし、その場に居た誰もがオーバの言葉に反論を返せない。

大技の連発でポケモン達は疲れている、まだ余裕はあるが……あれだけのデッドポケモン達を相手にできるのかと言われれば、答えはノーだ。

だがやらなくてはならない、そうしなければこちらがやられるだけだ。

それはわかってはいるが、こんな状態では――

「――ライチュウ、かみなりだ!!」

「えっ———?」

——凄まじい電撃が、数体のデッドポケモン達を包み込む

「どうしたオーバ、四天王のくせにそんな弱気でどうするんだ?」

「———」

全員が後ろを振り向く。

そこには、8人の男女が。

そして中心には、金髪的美青年がライチュウを連れオーバの元へ。

「——へっ、遅いんだよデンジ」

「超特急で来た友人に対してそれはあんまりしないのかオーバ。

——これが終わったら、メシでも奢って貰おうか」

「す、凄いです……シンオウのジムリーダーが全員集合だなんて……」

「よし、じゃあみんなここから一気に反撃するよ!!」

「お前が仕切るな」

「何言ってるのケイジ、レイジが居ない今は私がみんなのリーダー

なんだから!!」

(そんなのいつ決めたのかしら……?)

おそらく、いや間違いなく今決めたのだろう、カグヤの性格を考えればすぐにわかる。

しかし、この状況でも自分を見失わずに味方を鼓舞できる彼女の心は、やはり強い。

「行くわよ、カグヤ!」

「はい、シロナさん!!」

隣り合わせに立ち、笑みを見せつつ——先手必勝となる先制攻撃を仕掛ける!!

「ガブリアス!!」

「ラティオス!!」

『フルパワーで——りゅうせいぐん!!』

カグヤとシロナ、2人の声が見事に重なり、ガブリアスとラティオスによるダブルりゅうせいぐんが、迫るデッドポケモン達に放たれる。

爆撃じみたこの攻撃に、残るメンバー達の士気も飛躍的に上がっていく。

「よっしゃ、みんなシロナと嬢ちゃんに負けるなよ!!
このシンオウは、オレ達で守るんだ!!」

『オーツ!!!』

……。

「ほう……存外にしぶものだな」

ヴァルハラ内部でゆっくりと観戦を決め込んでいたロキだったが、自分の予想を越えた粘りを見せるカグヤ達に、軽く感嘆の言葉を漏らす。

と、ここで隣に居るフレアが少し遠慮がちに意見を口にした。

「ロキ様、ディアルガ達によってヴァルハラにもダメージが」

「——そうか。そういえばハエ共はまだ落とせていなかったのだな」

既に三度、ディアルガのときのほうこうによってバリアは碎かれ、その隙を狙ってのカイリとヒメカの総攻撃により、既にヴァルハラにある砲台の全ては破壊された。

バリアの方はまだ復元できるし、ディアルガもときのほうこうという絶大な技の連続使用により、もうあれを放つ事はできないとはいえ……ロキにとって、とるに足らない相手の予想外な抵抗は気に入らなかった。

少々遊びすぎたか、そう思いロキは——遂に魔に堕ちた兵器を投入する。

「フレア、ミュウツーを出せ」

「っ、しかしあれはまだ完全な制御が……」

「構わぬ。ミュウツーであのゴミ共を始末できさえすれば良し。

たとえできなくても、もうすぐ『神の雷』による殲滅攻撃が開始されるのだから、時間稼ぎになればいいだけだ」

「……ミュウツーを、捨て駒にするのですか？」

「そうだ。——兵器というのはたとえどんなに優秀でも、いや優秀なだけ“使い捨て”になりやすい。

所詮はミュウツーなど使い捨ての駒だ、それにあの程度ならいくらでも造り出せる。

——あれを本当の子だと思った馬鹿な博士から奪ったデータが手元にあるからな」

「—————」

その言葉は、味方であるフレアですら戦慄してしまうほど、冷たく恐ろしいものだった。

自分以外の存在は自分の目的を果たすための駒、使い捨ての消耗品でしかないと本気で思っている。

そして自分も……ロキからしたら、消耗品の駒でしかないのだろう。

——だが、彼女にとってそんな事はどうだってよかった

もう疲れたのだ、考える事に。だったら道具のまま動いて道具のまま死ねばいい。

「——ミュウツーを、出します」

「任せる」

ならば、意見する必要などない。

恭しく一礼し、フレアは部屋から出て行った。

……もう戻れない、もう全てが遅すぎたのだから。

「——ん？」

デッドポケモン達と戦いながら、カイリは違和感を覚えヴァルハラに視線を向ける。

（何だ……？ バリアの一部が消えて——）

瞬間、何か黒い影が揺らめいたと思った瞬間。

「が、は——！？」

血を吐くカノンと共に、きりもみしながら地上へと落ちていった。

「カイリ！？」

一体何が起きたのか、まったく理解できない。

しかし、あのまま地上に落ちれば無事では済まないという理解が頭を占め、ヒメカはすぐさまハクに命じてカイリ達の元に向かおうとして。

「きゃああああっ！！」

黒い球体——都合三十近いシャドーボールにハクが連べ打ちにされ、ヒメカ達もカイリ達と同じく地上へと落ちていく。

それに気づいたディアルガが、敵の攻撃にも構わずに2人を助けようとするが。

「——余所見トハ、イイ度胸ダナ」

どこか、現実離れた声が聞こえ……。

何者かが、ディアルガの巨体を文字通り“殴り飛ばしてしまった”

「ギガアッ！！？」

全身に走る痛みと衝撃に、ディアルガは混乱する。

ありえない、なんだこの攻撃は、自分に対して一撃でここまでのダメージを与えるなど、もはや普通ではない。

しかしさすがはディアルガ、痛みと衝撃に耐え矢のようなスピードで落下する自分の身体の衝撃を無理矢理殺し、落ちていく2人を背中に乗せる。

だが――まだ正体不明の攻撃は終わらない。

「――死ネ」

ズドンッ、という大砲のような音が響く。

それはディアルガの横腹を大きく凹ませる程の衝撃を誇り、地に落ち更に数十数百メートルという距離を地面を削りながら吹き飛んでも尚止まらない。

それでもディアルガは、2人とポケモン達にこれ以上ダメージが行き渡らないように庇いながら吹き飛んでいく。

そして、ようやく止まった時には――島の反対側にディアルガは倒れていた。

――数キロの距離を、巨体であるディアルガすら吹き飛ばす破壊力それは異常を通り越してもはや識別不能だ。如何なる奇跡、いかなる悪魔の所業か。

その一撃は神と呼ばれしディアルガの意識を奪い、更にカイリ達も同様に意識を手放している。

「……………」

自分の一撃が届いたと理解し、満足げに邪悪な笑みを浮かべながら……それは次なる標的を始末するために場所を移動する。

——新たな脅威が、カグヤ達に迫っていた

第96話 黒き殺戮兵器くミュウツ一の暴走く（前書き）

スズラン島での死闘。

奮戦する中、カグヤ達は気づいていなかった。

――黒き悪魔が、近づいている事に

第96話 黒き殺戮兵器〜ミュウツウの暴走〜

——死闘は、まだ続いていた

「みんな、大丈夫!？」

「こっちは大丈夫……とは言いたいが、大半のポケモンがやられちゃったぜ」

「————っ」

オーバの言葉に、カグヤは下唇を噛み締める。

戦況は一応互角だが、こちらの戦力は既に半分以下にまでなっていた。

カグヤも既にメガニウムとクチート、更にはカメックスまで戦闘不能だ。

対するデッドポケモン達は、まだ20体以上残っている。

第二陣として現れた敵の能力は、第一陣よりも強力だったからだ。

（まだ、終わった訳じゃないんだから………!）

絶対に諦めない、最後の最後まで。

約束したのだ、レイジが来るまで持ちこたえてみせると。

普通に考えれば、彼1人がここに来たとしても、戦況は変わらないだろう。

しかし、彼ならば必ずこの戦いに勝利をもたらしてくれると信じている。

ならば、そんな彼が来るまでどうして諦められるというのか。

「カグヤ!!」

「えっ———?」

シロナの声に、我に返った瞬間。

カグヤの身体を貫こうと、ニドキングの角が眼前まで迫り——

「チッ———!」

ふわりと、身体が浮くような感覚と共に——いつの間にかケイジの隣に移動していた。

「ケイジ……」

「グライオン、ギガインパクト!!」

標的を見失い隙を見せたニドキングの背中に、グライオンのギガインパクトが見事命中し瓦礫の中に吹き飛ばす。

「ぼさっとしてるな! 邪魔をするならここから消えろ!!」

「ご、ごめん……」

言い方は乱暴だが、彼の転移能力に助けられたのは事実なので、素直にお礼の言葉を口にする。

と、レイジから預かっているボールホルスターから、聞き慣れた声
が。

「カグヤ、どうしてわたくし達を出さないのですか？」

声の主はティナからだ、どうやらボールから出てはダメだというカグヤの指示に不満があるらしい。

「ティナ、あなた達はレイジが来るまで体力を温存してて」

「しかしこの状況では少しでも戦力を……」

「ダメだよ。レイジもティナと同じ考えだったからあなた達を預けたんだけど、ロキとの戦いの時まで万全の状態を維持しないと」

あの悪魔と戦えるのは、レイジだけだ。

ならば、彼のパートナーである彼女達に無駄な戦いはさせられない。

「……………」

自分のポケモン達に指示を出しながら、カグヤはふと上を見上げた。

——カイリ達の姿がない

ディアルガと共に、ヴァルハラに攻撃を仕掛けていたはずのカイリ達が……見当たらない。

落とされた？ 否、そんな事あるはずがない。

では何故――

そこまで考え、カグヤはティナの声によって現実へと戻る。

へっ、カグヤ、伏せてください！！！

「えっ――」

悲鳴にも似た、ティナの声。それに反応し、顔を上げた時には。眼前に、何か、黒い悪魔が、自分の首を砕こうと、拳を振り上げていた。

「――」

死ぬ。

明確な死、逃れられない未来を理解して、カグヤの思考は停止した。一瞬先に自分の頭蓋は跡形もなく砕かれて、痛みもなくこの世に別れを告げる事になるだろう。

それに対する恐怖などない、というより恐怖を抱いている時など彼女に与えられてはおらず……。

しかし、まだ彼女が死ぬ運命ではなかったようだ。

へっ、く——！！

「——、あ」

自分を守るように現れた一体のポケモン。

人間の女性とほぼ同じ体つきながら、両手に持つのは人間には成し得ない力を秘めた光り輝く双剣。

——その名はティナ、レイジの一番のパートナーポケモンである

へカグヤ、早くこの場から離れてください！！

「っ、う、うん！！」

急ぎ、言われた通りその場から離れるティナ。

他の面々も、いきなり現れた存在におもわず言葉を失っていた。

——黒き悪魔

全身は重厚な鎧に包まれ、波導遣いアスが装着していた鎧とまったく同じだ。

しかし、アスと違う点は……鎧の間から見える、見覚えのある白い

尻尾。

「――」

それを見て、カグヤ達の表情が固まった。

あれでわかる、あの存在は――

「ティナ、下がれ!!」

ボールから飛び出し、ティナにそう叫ぶのは――既に必殺の一撃を叩き込もうとするルギア。

それに反応し、無理矢理間合いから離れるティナ。

黒き悪魔も、そんなティナを追おうと足を動かそうとして。

「くらええっ!!」

全力で放たれたルギアのエアロブラストを受け、他のデッドポケモンを巻き込みながら、瓦礫の山へと吹き飛んでいった。

「フン、これでおとなしくなったか？」

へ……ルギアは、そう思っていますか？

吹き飛んでいった場所を睨みながら、ティナは静かに問いかける。

しかし、ルギアから返ってきた答えは……。

「……たわけが。思っているわけなからう」

ティナの予想通りの、答えだった。

——瓦礫の山が吹き飛ぶ

中から現れたのは、ルギアのエアロブラストをまともに受けたはずの、黒き悪魔。

「な、なんだアイツは……あれもデッドポケモンなのか？」

「……正確には違うわオーバ、だけど……あのポケモンはデッドポケモンなんかよりよっぽど厄介な存在よ」

「——ミュウツー」

「……………」

もはや、ロストの声にすら反応しない黒き悪魔——ミュウツーは。

「——目障りだ」

鎧の隙間から僅かに見える口元を醜く歪ませ、宙に浮き——攻撃を開始した。

へみなさん、一度この場から逃げて!!！<

ティナの声と同時に、ミュウツーは七十近いシャドーボールを一斉に撃ち放つ。

まるでりゅうせいぐん、否、それを遙かに上回ったそれはまさしく暴力の塊だ。

軌道はめちゃくちゃ、カグヤ達でなく味方であるはずのデッドポケモン達にすら降り注いでいく。

「お、おいおいなんだよアイツは……！ 敵味方関係なしかよ……？」

「ライチュウ、ボルテッカー……！」

「ライライライライライ……！！」

デンジの指示を受け、フルパワーのボルテッカーを叩き込もうとミユウツーに突撃していくライチュウ。

それを、ミユウツーは左手を前に掲げ――それだけでボルテッカー状態のライチュウを弾丸のように吹き飛ばした。

「ライチュウ……！！」

瓦礫の山の中に消えたライチュウ、そこから起き上がってくる気配はない。

「っ、ガブリアス。ドラゴンダイブ……！」

続いてはシロナがガブリアスに攻撃を命じる。

強力なガブリアスのドラゴンダイブ、これならさしものミユウツーもダメージを受ける。

そう、誰もがそう信じていたのに。

「――邪魔ダ」

一言、たった一言そう呟いたと思った瞬間。

ミュウツ―は、一瞬でガブリアスの真上に移動し、その身体を地面へと叩きつける――！

「ガブリアス！！」

たった一撃、たった一撃でシロナの切り札であるガブリアスが、戦闘不能になった。

それを見て、全員が戦慄する。

これは夢だと、たちの悪い夢だと思いたくなくなった。

だが――その隙が仇となる。

――シロナの眼前に、一瞬で移動するミュウツ―

その口元には、これからとるに足らない獲物を蹂躪する喜びに満ちた、狂った笑みが浮かべられている。

「シ――」

声を出す余裕もない。

誰も彼女を助けに入る事ができず、そのまま最悪の未来を迎える事

に――

「――」

その瞬間、何か巨大な腕がミュウツーを吹き飛ばした。

「――――パルキア」

「グオアアッ！！」

雄叫びを上げながら、瓦礫の中に消えたミュウツーに追撃を仕掛けるパルキア。

その巨大な右腕には、凄まじいエネルギーが込められている。

それをいち早く察知したシロナは、全員に聞こえるよう声を振り絞って叫ぶ。

「みんな、散って！！」

叫ぶと同時に地面に倒れているガブリアスをボールに戻し、パルキアから離れる。

他の面々も、シロナの声を聞き急ぎこの場から全力で離脱する。

そして――――

「ギイガギアッ！！」

パルキアの究極技――あくうせつだんが、辺り一面をまとめて吹き

飛ばした。

「うおわあっ!？」

「きゃあああっ!！」

その威力はただ凄まじいの一言であり、避難したはずのカグヤ達すらも吹き飛ばすほど。

しかし、ティナ達ポケモンの力で、全員に怪我はなかった。

「す、すげえ……なんてパワーだ……」

パルキアの超パワーに、全員が驚きほんの僅かに恐怖した。

「……………」

「……ティナ、倒したと思う？」

「…………カグヤは、どう思っていますか？」

「…………倒してないに、今日の夕食全部」

「へじゃあ、賭けになんかありませんね」

つまらなげにティナがそう呟いた瞬間。

瓦礫の山が吹き飛び、ミュウツーが再びカグヤ達の前に姿を現した。

だがさすがにパルキアのあくうせつだんをまともに受けたせいか、

黒い鎧は殆ど原形を残してはおらず、ミュウツールの身体の至る所に痛々しい傷が生まれている。

「う、嘘だろ……化け物か、ヤツは」

「――バシャーモ、ブレイズキック!!」

相手が立ち上がった以上容赦などする必要はない、ケイジはすぐさまバシャーモに指示を出す。

踏み込み、炎を込めた脚をミュウツールに繰り出すバシャーモ。

だが――その一撃はミュウツールの左手一本で止められてしまう。

「シャモ!?!」

「何――!!?!」

そして、軽々とバシャーモを投げ飛ばし瓦礫の中に。

へっ、まだこんな力が残って……!!」

「……ヤツテクレタナ」

憎悪に満ちた声で、再び周りへ特大のシャドーボールを生み出すミュウツール。

「フローゼル、アクアジェットだ!!」

しかし、真横から現れたフローゼルによってその技は中断された。

——マキシのフローゼルではない

「ど、どうだミュウツー……ちつとは効いたろ！」

そこに現れたのは——ヒメカに肩を貸してもらっている、傷だらけのカイリ。

「カイリさん!!」

すぐさまミカンがカイリの元に向かう、既にその瞳にはうっすらと涙が滲んでいた。

「よ、よおミカン……まだ大丈夫だったか」

「カイリさん、どうしてこんな怪我を……!!」

「ち、ちよっとミュウツーにやられてな……ディアルガのヤツはまだダウンしてやがる……」

俺達を庇うために、自分を犠牲にしゃがんだから……」

息をするのも苦しそうだ、しかしここで疑問が浮かぶ。

ミュウツーにやられたのなら、ヒメカとてタダでは済まなかったはずだ、だというのに……彼女には傷一つ見当たらない。

どうして……そんな疑問が浮かぶと同時に——その理由を理解する。

「……まさか、カイリさん『時戻しの力』でヒメカさんの傷を……」

「ア、アハハ……ま、まあな」

「わたしは大丈夫って言ったのに、傷だらけの身体で『力』を使つて……しかも、ディアルガに使う余裕を残さなかったのよ……」

呆れと申し訳なさを混ぜたような彼女の口調に、カイリはますます居心地が悪くなる。

が、ケイジの言葉ですぐさま現状を再認識した。

「何をやっているんだカイリ!! ミュウツーはまだ倒れてないぞ!!」

「わ、わかってる……フローゼ——ぐっ!？」

フローゼルに指示を出そうとして、苦しそうな呻き声を上げ膝を折るカイリ。

「っ、エンペルト、ハイドロカノン!!」

これ以上カイリを戦わせるわけにはいかない、そう判断したミカンはカイリのフローゼルの代わりに自分のエンペルトでミュウツーに追撃を仕掛ける。

「——邪魔ダ」

しかし、ハイドロカノンはミュウツーに当たる寸前で霧散してしま——い——

「メタグロス、だいはくはつ!!」

その隙にミュウツーの眼前にメタグロスを出し、至近距離でのだいはくはつ——!

爆撃じみた音を響かせ、爆発でミュウツーの身体が消えてしまうが——ミカンの攻撃は終わらない。

「エンペルト、ふぶき!」

メタグロスをボールに戻しながら、エンペルトに指示を出すミカン。ふぶきを放ち、煙を吹き飛ばしながら見事ミュウツーを追撃する。

だいはくはつが効いたのか、ハイドロカノンのように払わず両腕を交差しふぶきを防ぐミュウツー。

「ジバコイル、でんじほう!!」

更にジバコイルを出し、でんじほうでミュウツーの身体を電撃で包み込んだ。

「グ、オ——!」

僅かに聞こえた、ミュウツーの呻き声。

(これで決めないと……後がない——!)

これだけの化け物相手にチャンスがやってくるなど皆無だ。

だから、何がなんでもこのチャンスに逃すわけにはいかない――！

「エアームド、エラスラッシュー！！

ドータクン、ジャイロボールですー！！」

今度は両手でエアームドとドータクンを同時に出し、未だ続くエンペルトのふぶきと共に攻撃を仕掛ける。

（次で決める！！）

この連続攻撃の後に、切り札であるハガネールのフルパワーアイアンテールで攻撃すれば、いかにミュウツーとて大ダメージは避けられないはず。

そう思い、ミカンはハガネールを出そうとボールを手にした瞬間。

「――ナメルナアアアアッ！！！！」

怒りに満ち溢れたミュウツーの怒声がそのまま衝撃波となり、ミカンを達をまとめて吹き飛ばしてしまった。

「きゃああああっ！！」

「ぐ、おおああっ！！」

瓦礫にぶつかる者、地面を転がっていく者。

それは平等に暴力となって……収まった時には、ミュウツー以外立っている者はいなかった。

「ぐ、あ……」

痛みに耐え、立ち上がろうとするカイリ。しかし身体が鉛のように重くなり、動いてはくれなかった。

そこに、ミュウツーはゆっくりと近づいてくる。

（……殺され、る）

死の恐怖と、勝てない悔しさがごちゃ混ぜになった思考は、カイリに諦めという逃げ道を作り出す。

みんな倒れた、自分のポケモン達だって殆ど戦えない。

なら……もうこれ以上戦った所で。

「――待、て。ミュウ、ツー」

「――――」

立ち止まり、その場で後ろに振り向くミュウツー。

そこには、先程の声の主である――ロストが、レジェンドと共にミュウツーと対峙していた。

「まだだ……まだおれ達は、負けてない」

「――邪魔ダ、先ニ殺サレタイヨウダナ」

満身創痍になっている相手にも、ミュウツーは微塵の情も見せる事はない。

左手をロストに向けて翳し、その命を狩ろうと力を込める。

だが、それでもロストとレジェンドは一步も譲らずに、ミュウツーを睨みつけていた。

「――おれはお前の主人だ、絶対に……お前を止めてみせるぞ」

「……………」

（ロスト、さん……）

彼は、ミュウツーを倒すのではなく……助けようとしている。

自分のポケモンとして、過ちを繰り返させないために……命を懸けて。

（……………俺、は）

なんて弱いのか。

こんなに簡単に諦め、戦意を喪失するなど……ディアルガの力をこの身に宿しているのに、そんな事は許されない。

この力は、レイジを——そして大切な仲間を守るために存在しているのだ。

ならば——こんな所で諦める事など許されない。

「ぐ……あ、おおおああああ………！」

バラバラになってしまおうと思える程の痛みも苦しみも関係ない、己の身体に渴を入れる為に叫びながら——立ち上がった。

「はあ……はあ……はあ……ミウツー、これ以上は……やらせねえ！」

「……………」

「……そうだな。やられっぱなしというのは、癪でしかない……」

「……………ケイジ」

「ミウツー……俺達人間は、お前達ポケモンと比べて何の力もない弱い存在だ。

でもな……心の強さだけは、ポケモンにだって負けなくらい強いんだぜ……！」

諦めない心、それだけで戦いに勝利する事などできるわけがない。

それでも——負けないと誓った心は時に、何者にも勝る力を生み出す事だっているのだ。

「……………」

暫し、無表情でカイリを見つめていたミュウツーであったが。

「――クダラナイ、ナ」

そう呟き、笑いながら。

――足元に倒れているカグヤの髪を掴み上げ、その華奢な首を締め上げ始めた

「なっ―――！」

「くっ、レジェンド、かえんほうしゃ――！」

すぐさまカグヤを解放しようと、レジェンドがかえんほうしゃを放つが、ミュウツーの周りに現れたバリアによって霧散してしまう。

「やめろおおおっ――！」

「かっ……は……！」

息ができない。

ミシミシという音に比例して、カグヤの意識が薄れていく。

もちろん抵抗しようともがくものの、まったく意味をなさず視界も霞がかった。

「う、あ………」

だらんと力なく手を下げ、カグヤの意識はもう殆ど残されてはいない。

「……レ、イ、ジ……」

死を自覚し、最後に思い浮かべたのは……最愛の少年の顔。

（ごめん、ね……）

それは、何に對しての謝罪だったのか。

人生最後の涙を流し、カグヤは意識を手放す。

……。

——しかし

カグヤはまだ、この世の別れをする事は、なかったようだ。

——鈍い音と共に、ミュウツーが吹き飛ばされる

「えっ………」

もちろん、カイリ達でもポケモン達が行った事でもない。

しかし、ミュウツーの強固なバリアを砕きあまつさえその顔面に“蹴り”を叩き込んだのは……カイリ達のよく知る人物だった。

「っ、ゲホッ、ケホッ！」

急に呼吸が行え、激しく咳き込むカグヤ。

一体何故自分はまだ生きているのか、その疑問は苦しみによってあやふやなものになるが——聞き慣れた声によって、その意識は瞬時に覚醒した。

「——間に合ってよかった、カグヤ……大丈夫かい？」

「——」

ここでもうやく、カグヤは自分が誰かに抱きかかえられている事に気づく。

しかし、この声は……。

すぐさま顔を上げると、そこには——自分の大好きな優しい笑みを浮かべた“彼”が居た。

「――レイジ」

「さあ、最後の決着をつけるよカグヤ。僕達がまた楽しい旅を続けられるようにする為に！」

第97話 突入くヴァルハラへ、勝敗のない死闘く（前書き）

止まらないミュウツールの暴走。

全員を絶望の淵へと叩き落とそうとする中、一条の光が戦場に降り立つ。

——非情な自分の結末すら受け入れた少年が

第97話 突入くヴァルハラへ、勝敗のない死闘く

「レイジ！！」

「つと……」

いきなり抱きついてくるカグヤにバランスを崩しそうになるが、どうにか堪える。

見ると、カグヤの瞳には大粒の涙が滲んでいる。

「……恐かったんだね」

当然だ、あんな目に遭って恐くないはずがない。

しかし、レイジの言葉にカグヤは首を横に振った。

「違うの……もう一度、レイジに会えて……嬉しかったの……」

「……カグヤ」

「よかった……レイジにまた会えて、本当に……」

「……………」

その言葉に、レイジは優しく彼女を抱きしめ返す。

「レイジ！！」

「……みんな、どうにか無事だったね」

「まあな……それにしても、お前がミュウツーを蹴り飛ばしたのか？」

「まあね」

「まあねって……」

あっけらかんとそう言い放つレイジに、カイリは頬を引きつらせた。

「レイジくん!!」

「おわっ!?!」

後ろからの衝撃。

慌てて振り向こうにも、抱きしめられているためにそれも叶わない。

だが、こんな事をする人など確認しなくても誰だかわかる。

「……シロナさん、ご無事でなによりです」

「レイジくんもよく来てくれたわ……やっぱり貴方は私の」

「シロナさん、今はそれどころじゃないみたいですよ」

カグヤを腕の中から降ろし、シロナを優しく引き離しながら……ミユウツーを吹き飛ばした場所を睨みつける。

刹那、瓦礫の山が吹き飛ばされ――ミュウツ―が憎悪に満ちた表情をこちらに向けてきた。

「くっ………！」

身構えるカイリ達だが、レイジはそんな彼等を手で制しながら一歩前へ。

そして、暫しミュウツ―を見つめてから………こう呟いた。

「………やはりか」

と。

「えっ………？」

「――邪魔ヲスルナラ殺ス――！」

まるで爆発したようなスピードで、ミュウツ―がレイジとの間合いを一瞬で詰める。

右手を振り上げ、レイジの華奢な身体を真っ二つにしようとして。

――瞬時に、レイジはミュウツ―の真横に移動し、右手を添え力ある言葉を解き放った

「――在るべき世界に還るんだ、ミュウツ―――！」

瞬間、今までとは比べものにならない強い光がレイジの手から放たれ、ミュウツーを包み込む。

「グ、オ、ガ……………！」

「よし!!！」

「これでミュウツーも元に戻るね！」

何せアルセウスに力を完全解放してもらったのだ、きっとミュウツーだって元に戻してくれただろう。

そう、その場に居た誰もがそう信じていた。

——レイジ以外は

「————やっぱり、もうダメだったか」

「えっ…………？」

「ダメって…………何がだよ？」

首を傾げながら聞き返すと、レイジは信じられない事実を口にする。

「——もうミュウツーは元には戻らない、アルセウスに力を解放した僕でさえ。」

だから、もう…………これ以上ミュウツーが苦しまないように——楽にしてあげるしかないんだ」

「なっ——!!?」

「そんな……!!」

「……もって五分か。みんな、すぐに倒れている人達をここから避難させるんだ、このままだと戦闘になった時巻き添えを食らってしまうから。」

起こせる者は自力で避難してもらって、ポケモン達にも協力をしてもらうんだ!!」

言うやいなや、倒れている者達に向かって走るレイジ。

しかし、一方的にそう言われてカイリは納得できなかった。

「待てよレイジ!! そんな簡単に諦めるなんてお前らしく——」

「それでも、君はそう言えるの?」

そう言ってレイジがカイリに見せたのは、先程ミュウツーの身体に浄化の力を流し込むために添えた右手。

「——っ!!?」

それを見て、カイリだけでなくその場に居た全員が息を呑んだ。

——“溶けている”

ミュウツーの身体に触れたレイジの右手の皮が、ものの見事に溶けていた。

幸いにも薄皮一枚なので痛々しくは映らないものの……それが何を意味するかは、誰もが理解できた。

「……元々ミュウツーは普通の生まれのポケモンじゃない。
それにロキによって散々身体を弄くられた彼はもう……アルセウス
の力ですら戻せないまでに、進んでしまっているんだ」

「……………」

「助けたいたのは僕だって同じだ。でも……何もかもが手遅れなんだよ」

あの時——自分の力が完全に通らなかった。

その結果、反動として右手が傷ついたのだ。

もちろん本当の意味での“全力”を出せば、あるいは届くかもしれない。

だが……ロキとの戦いがある以上、力の使用は望めない。

「——本当に、それしかないんだな？」

「……………」

ロストのどこか懇願するような問いかけにも、レイジは無情な頷きを返す事しかできない。

それを見て、ロストは寂しげに呟きを漏らす。

「――全てを、救う事はできないのだな」

「カイリ、さっさと気絶してるヤツらを叩き起こして避難させるぞ。まともにヤツと戦えるのは、どうやらオレ達だけみたいだからな」

「――っ」

悔しそうに、唇を噛み締め拳を握りしめるカイリは、まるで泣くのを精一杯我慢している子供のようだ。

何故助けられないのか、何故救う事ができないのか。

自問は無情な現実を突きつけるだけ、導き出される答えは。

――ミュウツ―を救う方法はない

ただ、それだけ。

「――わかったよ、レイジ」

内なる怒りも、現実に対して何もできない己の不甲斐なさも、全て蓋をして。

カイリは、ミュウツ―を倒すために動き出す。

そして、レイジもまた――全ての決着をつける為に動き出した。

「カグヤ、シロナさん」

「どうしたの？」

「――君達2人は、僕と一緒に来てほしい」

「え――」

「ミュウツ―の事はカイリ達に任せて、僕は――ロキを討つ」

ヴァルハラに視線を向けるレイジ。

――全ての元凶を倒さねば、戦いは終わらない

自らがしてきた事を償わせる為にも、レイジは元凶を討つ決意を固めた。

しかし、自分1人ではあの悪魔には届かない。

だから――彼にとって最も大切な存在である2人に、傍に居てほしいと願ったのだ。

「僕達3人で、あのヴァルハラを落とす。

――だから、力を貸してほしい」

「――うん。わかったよレイジ」

「――わかったわ。レイジくん」

彼の心中を理解し、二つ返事で頷きを返すカグヤとシロナ。

それに――嬉しかった。

そんな大切な戦いに、自分達の力を貸りたいと言ってくれたのが。心の底から信頼してくれているのがわかったから、嬉しかった。

「はい、レイジ」

「……………」

カグヤの手には、6つのモンスターボールが装着されたボールホルスターが。

「ティナはミュウツールの攻撃を受けてダメージを受けたけど、他のみんなは大丈夫だよ」

――あの時

カグヤは、ミュウツールの衝撃波が来る前にティナとルギアをボールに戻す事に成功した。

だから、レイジのポケモン達はほぼフルメンバーで戦える。

「――カグヤ達のポケモンは？」

「私は……ラティオスとエネコロロ、ムウマージが戦えるよ」

「私はミロカロスとルカリオだけね」

「……薬は？」

「全部切れちゃった」

「そうか……わかった、とにかくどうかそれで頑張るしかないな」
ボールからルギアを取り出し、場に出す。

「…………マスター」

「遅くなってごめんね、ルギア」

「本当だぞまったく……だが、ちゃんと間に合ったから許してやる」
いつも通りの彼女にほっとしつつ、レイジはカグヤ達と共にルギアの背に。

そして、すぐさま最高スピードで大空へと飛翔した。

「しかしマスター、あの鬱陶しいバリアはどうする？」

そうだ、ディアルガの技でも一時的でしか破る事はできなかったバリアをどう突破するとかいうのか。

「ティナ」

その質問には答えず、ボールからティナを出す。

「――ティナ、サイコセイバー」

〈はい〉

指示を受け、光の剣をその手に生み出すティナ。

と、レイジはティナからその内の一対を手に取りルギアに指示を出した。

「ルギア、ヴァルハラの上まで飛んで」

「むっ……わかった」

すぐさまヴァルハラの上まで飛び上がるルギア。

「来たぞマスター、それでどうする？」

「そのまま突っ込んで」

『はあっ!!!?!?』

一体何を言ってくるのだろう彼は、レイジの言葉に全員が素っ頓狂な声を上げた。

しかし、レイジは決して冗談を言っているわけではなかった。

「僕の力でバリアを破るから、ルギアはそのまま突っ込んで内部に侵入するんだ」

「……本当に大丈夫なのか？」

突っ込んだ方がいいが、バリアに弾かれた……なんて結末は御免こう

むる。

だが、レイジは不敵な笑みを浮かべはつきりと言い放つ。

「あんな程度、簡単にぶち壊してやるさ」

と。

「わぁ……………」

「言うわね……………」

「——自信満々なお父様も、素敵です……………」

「わかったわかった、突っ込めばいいのだな？」

「お願いね、ルギア」

「わかっておる。…………しかし、本当に大丈夫なのか…………？」

ぶつくさと文句を言いながらも、律儀にヴァルハラに向かって真っ直ぐ飛んでいく。

「みんなはルギアの身体に掴まって!!」

言うやいなや、ルギアの背に立ちサイコセイバーをバリアに向けて突き出した。

「光の剣よ…………我が力、我が命に従い、今ここに浄化の力を!!」

力ある言葉、けれどそれはいつもとは違うものだった。

瞬間、サイコセイバーの光は広がり——ルギアの身体を包み込む。

そして、真っ向からバリアとぶつかり合った!!

「ぐ、ぬ、あ——!!」

プラズマと閃光を撒き散らし、侵入しようとする者を排除しようとする力が、ルギアに襲いかかった。

それは、如何に幻のポケモンと呼ばれる彼女でも消し炭にしてしまう程、強力な熱を孕んでいるが……彼の守護の前では、そんなものはまったく意味のないものだった。

「ぐううう……!!」

「頑張れルギア!!」

痛みはないが、押し出そうとするバリアを突破するのは骨が折れる。

レイジの応援を聞きながら、ルギアは少しずつバリアを抜けていく……。

「もう少しだ!!」

「ぬ、ぐ、ううう……だあああっ!!!!!!」

裂帛の気合いを込め、遂にルギアはヴァルハラของバリアを突き抜け——渾身の一撃を繰り出した。

「消えよ!!」

逞しい両の翼から放たれたエアロブラストは、ヴァルハラに分厚い外装を易々と撃ち貫き、内部へと道を作り出す。

間髪入れずにその中へ入り込み――レイジ達はヴァルハラへの侵入を成功させた。

「――ここが、ヴァルハラ内部」

機会仕掛けの壁や地面、近未来的な造りは珍しいのか、カグヤはキョロキョロと忙しなく辺りを見回していた。

「この中に、ロキが居るのね……」

「ルギアありがとう、今はゆっくり休んでいて」

ルギアをボールに戻し、それと同時にサイコセイバーも消し去る。

意識は内側に、このヴァルハラの中に居る人間がどれくらいかを調べようとして……レイジは、ある事実気がついた。

「…………えっ？」

「レイジくん、どうしたの？」

「……人が、殆ど存在していない？」

それだけではなく、ポケモンの気配もこのヴァルハラには存在して

いない。

この中に居る人間は、レイジ達を除いて……たった2人だけだ。

おまけにポケモンの数はゼロである。

その人間が持っているであろうボールの中には入っていると思われるが……見張りのポケモンまで居ないとは、一体どういう事なのか。

「えっと……ロキが用意した罠、とか？」

「だとしても、見張りを用意しないのはあまりにおかしい」

狡猾なロキの事だ、このヴァルハラに侵入してくるという事はわかっていただろう。

だというのに、どうしてヤツは自分達をすぐに始末しないのか。

それに――どうしてロキは“彼女”だけを残して誰もこの要塞に……。

そこまで考え、レイジは一度思考を中断させる。

「とにかく、今は中央のエリアに急ごう。そこに……ヤツが居る」

「でもレイジ、こういう時はまずエンジンとかぶっ壊して使い物にしない方がいいんじゃないかな？」

「確かに……動力源を破壊してしまえば、これ以上の進行は」

「僕も初めはそのつもりだった、けど……これを今この場所で落とすわけにはいかない。」

どこか誰の邪魔にもならない所まで移動させないと、二次災害が起きてしまうからね」

「あ、そっか」

「だから狙うはただ1人……ロキだけだ」

言うやいなや、金属音を響かせながら走り出すレイジ。

慌ててカグヤ達もその後を追った。

「でもレイジ、ミュウツーをカイリ達だけに任せても大丈夫なの！？」

あの常識外な力を見せつけられた以上、カグヤの問いは当然ともいえるもの。

しかし——レイジは何故か悲しげな表情で彼女の問いに答えた。

「——ミュウツーはもう勝てないよ、並の相手ならともかく……カイリ達には絶対に勝てない」

「えっ……？」

「さっきミュウツーの力の殆どは封印した、浄化の力で元に戻せない時を考えて、ね」

……。

一方、地上では。

「ゴウカザル、マツハパンチ!!」

「バシャーモ、ブレイズキック!!」

「レジェンド、ほのおのパンチだ!!」

レイジの呪縛を解いたミュウツーを、カイリとケイジ、そしてロストの3人で抑え込んでいた。

先程の一撃により、殆どの者は戦う事ができなくなってしまったのだ。

幸いにもデッドポケモン達も全滅してくれたのだが……それでも事態は良くなったどころか悪くなっている。

まず第一にそれぞれゴウカザル、バシャーモ、そしてレジェンドしかまともに戦えるポケモンがいない事。

もちろんカイリ達の手持ちのいくつかは戦える者が残っているが、皆の避難や傷の当てなどに当てられて戦いどころではない。

それにいつまたデッドポケモン達が現れるかわからない以上、守りに戦力を割くしかなく……この三体で化け物と化したミュウツーを

倒さなくてはならないのだ。

三体同時、それもあらゆる方向からの拳と蹴りの連打にも、ミュウツ―は全てを見切り回避していく。

「地面にマツハパンチ！」

ゴウカザルの拳が地面を貫く。

すると削れた地面がミュウツ―へと降り注いだ。

しかしそんなものでは止められない、気にした様子もなくミュウツ―はゴウカザルへと手を翳し。

後ろから、頭部に強力なブレイズキックを叩き込まれてしまった。

「グッ……！？」

先程のマツハパンチは単なる囷、わざと隙を見せるための行動だ。

顔から地面を滑りながらも、右手で跳び上がり標的を視界に捉えようとして。

「ブレイブバード……！」

いつの間にか移動していたバシャーモのブレイブバードを、背中からまともに受けてしまった。

「ガ、ア……！？」

呻き声を上げながら、どうにか空中でバランスを直すミュウツー。

だが、それは圧倒的なまでの隙を生んだ。

「レジェンド、ブラストバーン!!」

融解してしまう程の激しい火柱が、ミュウツーを包み込んだ。

「グ、オー―ガッ」

（効いている、が……まだ決定打には遠いか）

しかし、とロストは疑問を頭に浮かべる。

確かに今のミュウツーは強い、強いというより規格外と言ってもいい。

ゴウカザル、バシャーモ、そしてレジェンドを同時に相手にしてもまだ余力があるのだから、悪い夢だと思いたいくらいだ。

だが……先程に比べると、明らかに弱体化しているのはどういうわけか。

ディアルガを倒し、パルキアの全力の一撃を受けても尚、生きていた時の破天荒さはなりを潜めている。

もちろんダメージが蓄積しているからという理由もあるかもしれないが……それでも、正直肉迫できる相手と思ってはあなかったため、首を傾げてしまう。

「――時よ、我が命に従え!!」

カイリの力ある言葉が解き放たれ、レジェンド達の傷と疲れが瞬時に消え去った。

「よ、よし……このまま一気に……」

「カイリ、無理をするな」

彼はヒメカの傷を治すために、そして今回も力を使い大幅に体力を消耗している。

おそらくこれ以上の使用はできないだろう、すなわち……これが最後の治療となる。

――ブラストバーンの火柱が破られる

全身に火傷、更に左足と尻尾は完全に融解しており、グロテスクな光景が広がっていた。

「く、くそ……なんてしぶといヤツなんだ、コイツは……」

「チッ――バシャーモ、かえんほうしゃ!!」

「ゴウカザル、オーバーヒート!!」

かえんほうしゃとオーバーヒート、2つの炎技がミュウツーに迫る。

これでは簡単に避けられるだろう、軌道は単調だしスピードだって決して速くはない。

だがそんな事は百も承知だ、この技で隙を作るのが目的なのだから。どちらに回避するか、それとも反撃をしてくるのか、どこから来てもいいように全員が警戒し身構えるが。

——しかし、結果は回避されるわけでも、反撃されるわけでもなかった

「え——」

「何——？」

「これ、は……」

3人して、間の抜けた声を出してしまう。

何故なら——あんな単調な攻撃に、ミュウツーが呆気なく受けてしまったからだ。

回避もせず、反撃もせずに、炎に焼かれている。

効かないから避けなかったわけではない、明らかに苦しんでいる声を上げていることから、それを理解した。

一体どうしたのか、そんな疑問を抱く中で。

「——レジェンド、最後の攻撃だ」

ロストは、レジェンドに静かに指示を出す。

「ロストさん……」

「……2人共、勝手な願いですまないが……ミュウツーは、おれとレジェンドが楽にする」

「……………」

「一時的とはいえ、アイツはおれのパートナーだった、だから……もう戻れなくなったアイツは、主人であるおれの手で……楽にしてやりたい」

——声が震える

一度決めた決意が、音を立てて崩れていっていきそうだ。

殺したくない、救いたい。

その想いが、ロストに逃げ道を作っていく。

——まだ救う方法があるんじゃないか？

——殺さなくてもいいのではないか？

——自分が楽にする必要があるのか？

内なる自分が、甘い蜜のような甘美さを孕んだ毒の誘いを囁き続ける。

「……ロストさん、俺がやりましょうか？」

「——カイリ」

「もし辛いなら、俺がミュウツ―を——」

カイリがそこまで言いかけ、彼の肩に手を置いてケイジは制した。

「これはお前が出る幕じゃない」

「ケイジ……だけど」

「手を出してはダメだ、これは他の誰でもない……ロストがやらねばならない事だ」

「……………」

俯き、身体を震わせ拳を痛いくらいに握りしめるカイリ。

そんな彼を、ケイジは黙って見つめていた。

「——すまないな。カイリ、ケイジ」

彼等の心中、そして優しさが身に染みり、謝罪の言葉を口にするロスト。

——覚悟は、できた

「……レジェンド、すまない。お前にこんな事をさせたいわけじゃないが……」

ロストの言葉に、気にするなとレジェンドは彼の身体に自らの顔を擦り寄せた。

「――ありがとう」

再び、ミュウツーに対し視線を向ける。

炎は消えたが、ミュウツーが立ち上がる様子はない。

しかし……その瞳に宿るのは、憎悪だけだった。

「……兵器として生み出され、せっかく普通の生き方ができるはずだったというのに……また、身勝手な理由で兵器に仕立て上げられた。」

――お前の存在は、一体何だったのだろうか」

呟く言葉は、ミュウツーに対する同情か、それとも……。

「――今、楽にしてやるぞ。ミュウツー」

すまない、そう謝罪の言葉を呟いてから。

ロストは――彼との別れになる指示を、レジェンドに告げた。

「――シャイニングフレアだ」

……。

……。

——荒野に、風が吹いた優しく、僅かに森の息吹を感じさせるような風は、灰となったミウツーを空へと運んでくれる。
それを、ロスト達はこの目に焼き付けようと眺めながら……。

そっと、涙を流した。

第98話 最後の対峙〜悪魔との戦い〜（前書き）

ヴァルハラに侵入したレイジ達。

今まさに、最後の戦いが始まろうとしていた……。

第98話 最後の対峙―悪魔との戦い―

――走る、走る、走る

金属で作られた床を鳴らしながら、レイジ達はただひたすらに走っていた。

「……本当に見張りがいないのね」

「今このヴァルハラに居るのは、僕達を除いてはロキと……あのフレアという女性しか居ませんからね」

「あれ……？ 確か幹部ってもう1人居なかったっけ？」

「たしかマードラという男の幹部だったわね……」

「……どうしてかはわからないけど、あの男の気配は感じられないよ」

「……それにしても、不用心だね。

これじゃあ『どうぞお入りください』って言ってるようなものじゃない」

「あのバリアがあったから、見張りなんか配置する必要なんかないと考えたのでしょうね、きつと」

「……………」

本当にそうだろうか、シロナの言葉に耳を傾けながら、レイジは思

考に耽る。

——あの男は、とうに正気ではない

いや、同じくアルセウスから創り出された自分も初めから正気ではなかったかもしれない。

とにかく、もうロキに人間の……世界の理が通用するわけがないのだ。

一体何を考えているのか、その目的すら既に不透明になっている以上、この議論もまったくの無意味でしかない。

しかし、今自分達にできる事は一つしかない以上、何も考えずに前を向いて歩むのみ。

——やがて、レイジは足を止めた

彼の目の前には、何の変哲もない機会仕掛けの扉が。

だが、彼が足を止めたという事はすなわち——

「——この先に、居るのね？」

シロナの声に、黙って頷きを返す。

——この先に、あの悪魔が居る

「……………」

扉を開けようとして、ほんの少しだけレイジの中に迷いが生まれる。

ここに入れば——もう後戻りはできない。

この戦いに勝利しようが敗北しようが、自分に待っている結末は——死。

既にアルセウスから解放された力の反動は、レイジの身体を取り返しのつかない所まで蝕んでいる。

しかしそれは仕方のない事なのだ、元からアルセウスはレイジを脆弱な創り方で生み出したのだから。

それに——この力がなければ、ヴァルハラに侵入する事も叶わなかったのだから、今更というものである。

そう、彼の結末は仕方のないものなのだ。

——だが、それでも

根本が人間である以上、死にたくないと思ってしまうのもまた——仕方のない事だと思った。

まだやりたいことがあるし、生きていたいと思う。

大切な仲間や……かけがえのない存在だってできたのだ。

それなのに、どうして死に行く運命を受け入れなければならない

というのか。

——逃げてしまえ、と

お前なら、それが許されると、内なる自分が訴えかける。

そんな決意も覚悟も必要ない、全て忘れてここから逃げてしまえば

——

「——レイジ？」

「レイジくん、どうしたの？」

「————」

2人の声で、我に返る。

……そして、自分の弱い心に本気の嘲りと罵倒を送りたくなった。

——もう、遅いのだ

何もかも全てが手遅れになったのに、まだ逃げようという心があった事に恥ずかしくなる。

何の為にここまで来たのかを、レイジはもう一度思い出して。

「……………なんでもない、行こう」

そっと、二度と迷える心が出ないように、固く蓋をした。

「……………」

レイジの反応に疑問を抱く2人だが、すぐさま思考を切り替え身構える。

——彼女達は知らない

自分達の言葉で、彼が二度と戻れない道を再び歩んだ事に。

ガスの抜けたような音を立てながら、扉は呆気なく開かれる。

そして——彼等を迎え入れたのは、1人の悪魔。

「——来たか。待ちわびたぞ、レイジ」

この上なく嬉しそうに、片手を上げて言葉を紡いだ。

ロキの傍らには、レイジを見つめるフレアの姿が。俯いているせいで、表情は伺えない。

「……………」

既にロキに対して掛ける言葉などない、黙って歩を進めていくレイジ。

しかしそれでも、ロキの表情は嬉しそうだ。

「さて……無駄話をする必要はないか、それでどうする？ お前は私に何を望んでいるのだ？」

「……この世界から、消えてほしい」

叶いもしない願いを口にするが、返ってきたのは冷酷な言葉だけ。

「それは無理な願いだなレイジ、私の目的は世界の崩壊だ。

——お前とて、わかっているのではないか？」

「……………」

「しかし、よもやここまで抵抗されるとは思わなかったぞ。

——ミュウツーも、どうやら敗北したようだ」

「——カイリ達が勝ったんだ！」

「だが使えぬヤツだ、人間如き始末できんとは……ゴミにも劣る道具だった」

「っ、この——！！」

「シロナさん、怒る必要なんかないですよ」

踏み込もうとするシロナを、驚くくらい静かな声でレイジは制した。

そんな彼に、シロナだけでなくカグヤも驚きを隠せない。

彼からは、ロキに対する怒りも憎しみも感じられないからだ。

あるのは――どうしようもないくらいにまで大きくなってしまった
悲しみと。

――これは、“憐れみ”だろうか

今確かに、レイジはロキに対して憐れみの感情を見せている。

それに気づいたのか、ロキは忌々しげに表情を歪ませた。

「気に入らんな、その瞳……私を憐れんでいるのか？」

「そうだよ。あなたが、あまりに可哀想だから……僕は憐れんでい
る」

「――っ」

その言葉に、ますますロキの表情が険しくなっていく。

殺気立ち、場の空気が重くなる中で。

「――消えるべきなんだ、あなたは。この世には存在してはいけな
い」

「ほう……私が存在してはいけないのならば、お前はどうかのだ？」

「……………」

「わかっているようだなレイジ、私もお前も……この世に存在すべ
きではない事に」

「あなたとレイジくんを一緒にしないでもらえるかしら？」

レイジくんはあなたのように、この世界を身勝手な理由で傷つけたりしないわ！」

「そうだよ。レイジをあなたみたいな悪者と一緒にしないで!!」

「悪者……つまり私は悪という事か、しかし何故お前達は私を悪だと決めつけるのだ？」

「そんなの当たり前じゃない!!」

「何故当たり前だと？ まさか人やポケモンを無慈悲に傷つけるかなどというつもりか？」

「……それが悪に該当する事ではないと？」

シロナの言葉に、先程まで不機嫌そうだったロキの表情が、愉快げに歪んだ。

まるで、その問いこそ待ちわびたものだったというように。

「では訊くが、お前にとっての悪とは何だ？」

——人やポケモンを傷つけ、殺める事か？

何故それを、絶対的な悪だと決めつけるのだ？」

「そんな事——」

決まっているのではないか、そう言いかけてシロナは言葉を切った。

根本的な理由、何故他者を傷つけるのが悪になるのか。

そんな事は当たり前だ、この世界における生きとし生ける者にとってそれが悪だと誰もが知っている。

けれど――何故“悪なのか”と言われてしまったら……答えは出ない。

「――そうだ。この世に明確な善や悪など存在しない。人は人が定めた善悪に従って行動する。

すなわち――私は善でも悪でもないのだよチャンピオン。

そのような不透明な存在に縋らなければ人は生きていけない、ならば……この世界に価値などない」

「――――」

言い切った。

ロキは、本気で……心の底からこの世界は無意味なものだと、言い切ったのだ。

たとえ世界中の誰もが否定しても、決して曲げない強い意志を感じ

――身体が凍った。

――否定できない

ロキの言葉を否定しなければならぬのに、それができない。

いやむしろ、この男の言っている事こそ――

「——もういい」

「……………」

澄んだ力強い声が、場に木霊した。

声の主——レイジは、そう告げてモンスターボールを握りしめる。

「この世に明確な善悪がなくても、あなたの存在そのものが人を不幸にするんだ。」

なら——ここであなたを倒す」

「……ふん、あくまでもこのような無意味な世界を守るか」

「無意味かどうかはあなたが決める事じゃない。未来に生きる人達が決める事だ。」

ここで消えるべきなんだ、あなたも僕も……この世界には必要ない——！！」

「教えてやろう、甘い戯れ言しかほざけぬ貴様と貴様のポケモン達では……何もできんということとな」

睨み合う両者。

——もはや、そこに介入できる者はいない

カグヤもシロナも、手助けをしようという選択肢を選ぶ事ができなかった。

そして——フレアもまた。

(……………坊や)

「——あなた、これが本当に正しい事だと信じているの?」

「——」

「フレアさん、あなた本当は……自分のやっている事が、間違いだって気づいているんじゃないですか?」

「……………今更、生き方を変える事はできないのよお嬢さん。ワタシは、坊ややお嬢さんのように強く生きる事はできない」

「そうやって諦めたら何も——」

「人はね、誰もが強く生きれるわけではないのよ」

「……………」

その言葉で、カグヤは何も言えなくなる。

フレアにはフレアにしかわからない苦しみや悲しみがある、それをむやみやたらとわかった気ているのは……傲慢でしかない。

——だが、それでも

「それでも……諦めたらそれで終わりです。
自分にはできないと、できるわけがないと諦めたら……もう、何
もできないんです」

カグヤは、この言葉を信じたかった。

「ヒカリ、お願い!!」

「――出ろ、テッカニン」

（――始まるのね）

世界の命運を決めるバトルなど、なんと無意味なものか。

トレーナーはそんなものの為に存在しているわけではない、しかし
……もうレイジに任せるしかないのだ。

「――さあ、精々楽しませろ!!」

「――っ」

テッカニンの身体に、禍々しい紫色のオーラが立ち上る。

それと同時に、テッカニンのパワーが先程とは比べものにならない
ほどアップした。

「ロキ……またこんな非道な“薬”を………！」

「私のポケモンだ、どう扱おうが勝手ではないのか？」

「くっ………！」

「ピカピッ！！」

「えっ………？」

——レイジ。レイジの力でピカをパワーアップさせられないの？

「それは………」

方法なら、ある。

アルセウスの力を用いれば、可能だ。

しかし……それを使えば身体にかなりの負担がかかってしまう、そんな事をするわけには……。

——ピカ達なら大丈夫だよ！ だから信じて力を使って！！

「——ヒカリ」

「どうした？ 来ないのならこちらから行くぞ。

——テッカニン、れんぞくぎり」

羽音を響かせながら、両腕でヒカリに攻撃を仕掛けるテッカニン。

そのスピードは速く、通常の速さではない――！

だが――

「内なる力よ、我が命に従い――その力を解き放て！！」

レイジがその言葉を紡いだ瞬間――ヒカリの姿がその場から消える。

「ぬっ――テツカニン、後ろだ！！」

すぐさま後ろに振り向き、両腕を振り上げるテツカニン。

それと同時に、ヒカリのアイアンテールと真っ向からぶつかりあった。

「ピカッ！？」

「くっ！！」

全身を優しく淡い青色のオーラで包んだヒカリの口から、驚愕の声
が。

今の自分のスピードに反応できるとは思わなかったのだろう、だが
すぐさま表情を引き締めテツカニンから離れる。

「10まんボルト!!」

「ピーカチュウッ!!」

「かわしてれんぞくぎりだ」

三つ又の槍のような10万ボルトを回避し、テッカニンは右腕でヒカンを吹き飛ばす。

「ピ……カッ!!」

空中で後ろ宙返りをしながら着地し、更に踏み込んできたテッカニンの攻撃を左に跳んで避ける。

着地と同時に跳び上がり、反撃に移った。

「アイアンテール!!」

「ピーイカッ!!」

一回転し勢いをつけたアイアンテール。

それを、テッカニンは両腕を交差させ完全に受け止めてしまう。

「かみなりだ!!」

「ピーイイカ…チュウウウッ!!!」

アイアンテールを繰り出した格好のまま、特大のかみなりでテッカニンを包み込むヒカリ。

それを防げるわけもなく、まともに受けて地面に落ちるテッカニン。

——だが

「シャドーボール」

落ちながら、同じく落下していくヒカリの腹部にシャドーボールを叩き込んだ。

「ピカアッ!!」

空中で回転しながら、勢いよく地面に転がっていくヒカリ。

「ヒカリ!!」

「ピ……カ……」

かなりのダメージを受けたのか、なかなか立ち上がれない。

そこへ、テッカニンの追撃が迫る——!!

「テッカニン、はかいこうせん!!」

「ヒカリ、立って!!」

「ピ、カ……」

もう遅い、テッカニンのはかいこうせんは発射され、凶悪な光線がヒカリを包もうとして……。

間一髪、両手両足に力を込めて跳び上がり、はかいこうせんを回避した。

「10まんボルト!!」

「ピーカチュウッ!!」

回避と同時に放たれる10まんボルト。

直線上に走り、はかいこうせんの反動で動けぬテッカニンを包み込む!!

「今だヒカリ!! ボルテッカー!!」

「ピカピカピカピカピカピカピカ……!!」

黄金の光に包まれ、突撃していくヒカリ。

そして――ボルテッカーの衝撃がテッカニンを弾丸のようなスピードで吹き飛ばす!!

「……………」

無言でテッカニンをボールに戻すロキ。

「ピカ…ピカ……」

「――ヒカリ、戻って」

肩で大きく息をするヒカリを、ボールに戻す。

やはり疲れは大きいのか、暫くはまともに戦えないだろう。

しかし――それはレイジの力も起因している。

ロキのポケモンは全員非道な薬で限界以上の力を引き出されている、
まともに戦えばティナ達に勝ち目はない。

だから、レイジもアルセウスの力でティナ達を限界以上までパワー
アップさせている。

もちろんロキに比べれば負担はないが……決して小さいわけではな
い。

すなわち、今のティナ達は通常よりも戦える時間が少ないという事
だ。

「――出る。メタグロス」

「リオン、お願い!!」

「……相手はメタグロスか、炎タイプのリオンなら有利だけど……」

「……………」

「? シロナさん、どうかしましたか?」

「……ううん、なんでもないわ」

「メタグロス、コメットパンチ」

「リオン、ほのおのパンチだ!!」

踏み込み、メタグロスのコメットパンチを真っ向から炎の拳でぶつかり合う。

だが――リオンの拳は身体ごと大きく後ろに吹き飛ばされた。

「かえんほうしゃ!!」

地面を削りながら炎を吐き出すが。

「ラスターカノン」

その場でラスターカノンを放ち、かえんほうしゃが相殺された。

「ゲオアツ!!?」

更にラスターカノンはかえんほうしゃを放ったリオンにまで届き、壁に叩きつける。

「リオン!!」

「グ、ア……」

「コメットパンチ」

膝をつくりオンに、跳び上がりながらコメットパンチを繰り出すメタグロス。

そして、リオンの腹部にコメットパンチが深々と突き刺さった。

「リオン！！」

「グーーーーガ、アアアアッ！！！」

このままでは壁に激突する、だというのにリオンは口を開きブラストバーンを放つ。

技を繰り出した直後のメタグロスに回避できるわけもなく、まともに炎を浴び地面に倒れた。

それと同時に、勢いよく壁に叩きつけられ――リオンは動かなくなる。

「――リオン、戻って」

「……………」

互いに戦えなくなったポケモンを戻し、次のボールを。

「……なんか、あつという間にバトルが終わっちゃうな……」

「それだけ互いの一撃一撃が凄まじいのよ、神々の力をその身に宿しているから、きっと私のポケモンじゃ一撃も保たないわね」

「ソウル、お願いー！！」

「――グウウウウ」

「……………」

威嚇するソウルに、ロキは冷たい瞳を向けるだけで、ポケモンを出そうとしない。

「どうした？ まさかもう終わりか!!」

「……………遊びは終わりにしようか」

「え——」

ボールを手に取り、投げつけるロキ。

開かれ、中から出てきたのは——

「——エルレイド」

かつてティナと死闘を繰り広げたエルレイドが、場に出現した。

……しかし、とレイジは疑問を浮かべる。

確かにエルレイドは強いポケモンだ、おまけにロキの力で大幅なパワーアップを果たしているだろう。

だが……パワーアップしてるのはこちらも同じ、圧倒的な戦力差になるとは思えない。

そう——“普通”ならばだ。

「エルレイド、“アイシクルセイバー”だ」

「なっ——！？」

エルレイドの右腕——刃になっている腕が氷に包まれる。

あれはまさしく、ティナのアイシクルセイバーだ。

「ティナと“同類”のエルレイドが、アイシクルセイバーを使えないとでも思ったのか？」

「同類……？」

「エルレイド、倒せ」

短くそう指示を出し、瞬時にソウルの間合いに入るエルレイド。

「ソウル、後ろに跳ぶんだ！！」

「——っ」

首の皮一枚で攻撃を避けるソウルだが、額から僅かに血が流れ顔をしかめる。

「シャドークローー！！」

着地と同時に踏み込み、漆黒の爪を振り上げる。

それを、氷の刃で軽々と受け止めるエルレイド。

「くっ……！」

「フレイムセイバー」

「何……！？」

氷の刃でソウルの攻撃を受け止めながら、同時に左手に炎の剣を生み出し上段から振り下ろす。

このままでは攻撃を受ける、そう判断したレイジはすぐさま次の指示を出した。

「あくのはどう！！」

至近距離でのあくのはどうが、エルレイドのフレイムセイバーとぶつかり合い爆発を引き起こす。

噴煙の中から飛び出してくるソウル、無事着地はするが所々痛々しい傷が彼女に確実なダメージを与えている事を知らしめていた。

（凄いパワーだ……！）

だが、このバトルだけは負けるわけにはいかない。

ソウルにもレイジの心中を理解したのか、再び闘志を瞳に宿す。

しかし——エルレイドは予想外の言葉を放ってきた。

「——サーナイトを出せ!!」

「何………?」

「……エルレイド、どういふつもりだ?」

ロキにも予想外だったようだ、訝しげな表情を見ればすぐにわかった。

どうやらエルレイドは命令違反を犯しているらしい、ロキに対して忠実心の塊のような彼が、だ。

「エルレイド、私はサーナイトと戦えと命令したわけではない、だというのに勝手な真似は」

「俺はあのサーナイトを倒さねばならないのですロキ様、そうではなくては俺はずっと“失敗作”のままだ!!」

「………」

（失敗作………?）

一体エルレイドは何を言っているのか、並々ならぬ闘志を宿しているの、彼がティナとの一騎打ちを望んでいるのは理解できたが…

…。

〈どうしたサーナイト、あの時の決着を今つけてやる!!〉

俺は、貴様だけには絶対に負けられない!!〉

焦燥感や不安すら感じさせる、エルレイドの必死な叫び。

それを理解できない中、ティナはボールから勝手に場に出現した。

「――ティナ」

〈お父様、勝手なお願いだとは重々承知しております。〉

ですが……わたくしにはエルレイドの願いを叶える事が正しいと思えました。

ですからどうかお願いします、彼の相手は……わたくしに〉

口ではそう言いつつも、既にティナの瞳にはエルレイドしか映っていない。

たとえレイジがダメだと言ったとしても、ティナはエルレイドと戦うつもりだろう。

――しかし、レイジは初めからティナの願いを聞き入れるつもりだった

「――ティナ、君の望むままに」

〈お父様……〉

「君がそう願ったのなら、僕から言うことは何もないよ。」

——ソウル、よく頑張ったね。戻るんだ」

〈——ありがとうございます、お父様〉

彼の優しさに感謝しながら、ティナは再びエルレイドと対峙する。

〈あなたは何故そこまでわたくしを敵視するのかは知りませんが、わたくしは負けるわけにはいきません!!〉

〈それはこちらと同じ事だ、貴様だけは……生かしてはおけない!!〉

(……この殺意は)

わからない、何故ここまでエルレイドは自分に殺意を抱くのが、ティナには理解できなかった。

しかし、エルレイドは自分を本気で殺したいと思っている、まるで彼女自身の存在自体を許さないかのように。

「……………」

一触即発の空気の中、レイジは違和感を感じていた。

(おかしい……何故ロキはエルレイドを戒めないんだ……?)

あの男の性格からして、このような勝手な真似をしたエルレイドを止めるはずだ。

しかし、止めるどころか好都合だと言わんばかりの表情を浮かべて

「——っ!!」

ぞくりと背筋に悪寒が走り、レイジは地を蹴ってロキへと向かう。

拙い、このままあの男を野放しにしては……。

「——さすがだな。その鋭い勘は賞賛に値するぞ」

「し——!!」

充分に勢いと足の力を込めて、回し蹴りを放つ。

避けられない最適の間合い、人間の骨など容易に碎けるレイジのそれを。

ふわりと、まるで羽根のように軽やかな流れでロキは回避し。

がら空きとなったレイジの腹部に、掌底を叩き込んだ——!!

「が——!!?」

メキッ、という嫌な音を腹部から響かせながら、冗談みたいなスピードで後ろに吹き飛んでいくレイジ。

「きゃっ!!」

それはカグヤ達すら巻き込み、その隙にロキは部屋から出て行く。

すぐさま起き上がり、後を追おうと立ち上がるうとしたレイジだったが。

「ぐ、が——!?!」

激しい痛みが腹部を襲い、その場にうずくまってしまった。

「レイジ——!」

「ぐ——は、早く追わないと」

「——っ、ダメ。扉が開かなくなってる——!」

「ええっ!?!」

「くっ、なら僕の力で扉を……」

「待ってレイジ、ここは私達に任せて——!」

「——ラティオス、ラスターページ——!」

「ミロカロス、ハイドロポンプ——!」

ボールからそれぞれラティオスとミロカロスを場に出し、扉を破壊しようと攻撃を仕掛ける。

しかし——扉は破壊どころか傷一つ付かなかった。

「そんな——!?!」

「——この扉は特殊な材質で作られているの、その程度じゃビクと

もしないわ」

「っ、何自慢げに言ってるのよフレアさん!!」

「だから、もしもの時はこのカードキーを使うのよ」

「えっ………?」

言うやいなや、扉のすぐ脇にある差込口にカードを入れるフレア。すると、ガスの抜けたような音と共に、扉が呆気なく開かれる。

「……フレアさん」

「——止めないの? ロキ様はおそらく神の雷を発動させるつもりよ」

「神の雷……っ、アルセウスを傷つけたあれか!」

拙い、あんなものを放たればひとたまりもない。

アルセウスでもあれだけのダメージを受けたのだ、戦いで傷ついたディアルガ達でも止める事はできない。

へお父様、エルレイドはわたくしに任せて早く行ってください!!」

「わかった!!」

「制御室はこっちよ。ついてきて」

「……罨じゃないの？」

「……………」

フレアは否定しない。

警戒するカグヤとシロナだったが、レイジは違った。

「フレアさん、急いで案内して!!」

「坊や……」

「レイジくん、彼女はロケット団の幹部なのよ？」

「僕にはこの人が根本からの悪だとは思えません。フレアさん、お願いします!!」

こくりと頷き、戦闘を走るフレア。

それを見て、カグヤ達は慌てて後を追ったのだった。

第99話 最後の剣戟〜己の出生の果てに掴んだ答え〜（前書き）

レイジ達はロキの後を追ひ、テイナはエルレイドと対峙する。

今ここに、最後の剣戟が始まろうとしていた。

第99話 最後の剣戟く己の出生の果てに掴んだ答えく

――剣戟は、激しさを増していく

エルレイドとティナ、互いに展開するはサイコセイバー。

単純に、どちらが上かの剣戟が繰り広げられていた。

火花と閃光、更にはぶつかり合う度に響き渡る音はまさしく爆音。

不用意に近づけば瞬時に細切れにされるであろうそれは、開始して僅か数分で百手以上の斬り合いを見せていた。

へ――ハアアアアアアアッ！！！！

殺気と憎しみ、ほんの僅かな焦燥感を剣に込めながら、エルレイドは一片の油断も情けもない剣戟を放つ。

まさしく神速の域、神と呼ばれしポケモンとも充分過ぎる程肉迫できる力ではあるが。

へっ、くっ！！

ティナは、両の手で持つ剣でその悉くを防ぎきっていた。

へっ、どうしたサーナイト！！ 守るばかりで勝つ気がないのか！！

スカートのようなティナの下半身に切り傷が生まれ、鮮血が舞う。

〈うるさいです、ね！〉

痛みで顔をしかめながら、左の剣でエルレイドの剣戟を弾き、右の剣を地面に突き刺しそれを軸にしての後ろ回し蹴りをエルレイドの顔面に叩き込む。

〈ご——っ！？〉

大きく仰け反るエルレイド、その隙を逃さずティナは突き刺していた右の剣をそのまま振り上げる。

左右真っ二つに裂けるはずであったそれは、エルレイドが後ろに跳んだ事によって虚しく空を切った。

〈——女性の身体に傷を付けるなんて、紳士ではありませんね〉

深くはないが、決して浅くもない傷を眺めつつ、軽口を叩くティナ。

口調こそ余裕そうだが、肩で大きく息をしている彼女を見て、誰も余裕があるようには見ないだろう。

全力で戦っているのは彼女も同じ、休む暇も手加減する事もできない剣戟を繰り返して、疲れない者などいない。

〈——安心しろ、そんなくだらない事を考えられないようにしてやるさ〉

〈………何故です？ 何故あなたはこうまでわたくしを憎むのですか？

この間わたくしに敗れたから、それだけには見えません。
あなたのその怒りと憎しみ……まるで親の仇だと言わんばかりの
それですよ

――

へ一体あなたは、わたくしの何を憎んでいるのですか？

訊く必要など、本来ならばない。

彼は敵、彼女が愛する主人の敵である以上、斬るべき敵でしかない。

だがしかし、気になってしまったのだから仕方がなかった。

ここまでの憎しみや怒りを向けられた事などなかったから、どうし
てもその理由を知りたくなった。

一体何故ですか、もう一度ティナは問いかける。

すると――エルレイドから返ってきたのは、意外な反応だった。

へ――そうだな。逃がされたお前が知るわけもなかったか

へえっ……………？

逃がされた……………？

皮肉めいた口調でそう告げるエルレイドに、ティナはおもわず構えを解いてしまう。

しかしエルレイドは隙だらけのティナには構わずに――彼女自身も知らない事実を口にした。

「――お前は俺と同じくこのロケット団で創られた、人とサーナイトの融合体から生まれた特殊なポケモンなんだよ」

と。

↑――↓

時が止まる。

エルレイドの言葉を理解するのに数秒、そしてそれに対しての疑問が生まれるまで、およそ数十秒。

↑……………は？↓

しかし、初めに出てきた言葉はそんな間の抜けたものだけ。

当たり前だ、あまりにも現実離れも甚だしい事を言われて、思考が正常に働くわけがない。むしろそんな事を言ってきたエルレイドを、笑い飛ばしてやりたいくらいだ。

あなたは何を言っているのですか？

あまりにも馬鹿馬鹿しすぎますよ、とうとう脳がやられてしまったのですか？

罵詈雑言を並べて、おもいきり笑ってやりたかった。

――なのに

ティナは何故かそれができずに、気がいたらエルレイドの言葉に耳を傾けていた。

へ――それは、一体どういう意味ですか？

へ言葉通りの意味さ、お前と俺は人間とサーナイトの融合体から生まれたポケモンだ

へ人とポケモンの、融合体？

まったくもって意味が分からない、エルレイドの言っている言葉の意味が理解できない。

へかつてロケット団では、人とポケモンを融合させ新たな生命体を創り上げる研究が行われていた。人にもポケモンにも負けない新たな生命体、それを兵器として活用しようとしていた

へっ、なんて非道な……あなた方はどこまでこの世界の理を反すれば気が済むのですか！！

そんな研究、生命の尊厳など一欠片も考えていないような非道なものだ。

新たなロケット団の事実を知り、ティナの表情は怒りに満ち溢れる。

しかしエルレイドはそれには構わず、言葉を続けた。

〈だが、実験は悉く失敗に終わった。

自我を失った者、急激に身体を崩壊させていった者。――研究はすぐに止まってしまった〉

へっ、あなたは……わたくしを怒らせる為にそんなくだらない事を言っているのですか!!〉

今すぐにでも、エルレイドの身体を粉微塵に切り刻んでやりたい。

その非道な研究で、一体どれだけの人間とポケモンが犠牲になったのか、それを考えるだけではわたが煮え繰り返そうだ。

だが――エルレイドはその口を閉じたりはしない。

〈気にならないのか？ 自分の出生を、自分が何の為に生まれたのかを〉

〈……………〉

〈いや……聡明なお前なら、もうわかっているのかな？〉

〈……………わかりたくもありません。第一あなたの言っている事に根拠などあるわけが〉 〈では訊くが、何故お前は普通のサーナイトと

は姿形が違う？

人間と同じ五本指の足と手、人間の女と同じような胸部の膨らみ。自分が普通とは思った事が、ただの一度もなかったと言えるのかな？

――――

否定してやりたい。

でも……エルレイドの言葉に否定をする事はできなかった。

――普通のサーナイトとは違う自分の姿形

――普通のサーナイトには違う、強大なサイコパワー

そのどちらも普通とは明らかに違う、更に不明である自分の出生。

それを――エルレイドは知っていると聞いた。

だがそれは当たり前かもしれない、何故なら彼の主人であるロキも彼女の事を知っていたから。

でも……その先は知りたくない。

虚言だろうが真実であろうが、もし知ってしまえば……今までの自分の存在意義が。

へ実験のほぼ全てが失敗に終わる中、唯一……成功した個体があった。

それは人間の女とサーナイトの融合体、後にも先にもそれだけだった

〈それが、わたくしだとも——〉

へいや違う。その話には続きがあつてな、そのサーナイトは普通のサーナイトどころか他のポケモンすら凌駕する凄まじいサイコパワーをその身に宿していた。

しかしそのサーナイトはあろうことかロケット団の兵器としての立場を拒んだ、それだけならば洗脳なり薬漬けするなりすればよかったのだが……ヤツは、自分の力の殆どを“タマゴ”に宿したのだ

↑—————↓

〈ここまで言えばわかるな？　つまりお前は……ロケット団によって創り上げられた人間とポケモンの融合体——そのサーナイトから生まれたポケモンだ〉

……………。

衝撃が、ティナの全身に響き渡る。

あまりにも突拍子のない真実、嘘としか思えない作り話。

なのに、どうして——

——どうして、それを否定する言葉が頭に浮かばない？

〈お前の姿形が人間に似ているのはそのせいだ〉

〈……で、では何故わたくしは〉

〈始まりの地にいたか、か？

簡単な話だ、母であるサーナイトが最後の力を振り絞り、お前を転移させた。

尤も無我夢中だったようだから、お前とあの小僧が出会ったのはまったくの偶然だがな〉

〈――、あ〉

ぐらりと、身体が揺れた。

その反応を見て、エルレイドはこの上なく楽しそうな笑みを浮かべる。

〈――やはりショックだったようだな、しかしまだ話には続きがある。

サーナイトはお前を逃がした後死に、ロキ様はその死体を用いて新たに生命体を創り上げようとした。

しかし成功体であるサーナイトの肉体を使っても、できたのは出来損ないの“失敗作”だけ〉

〈失敗、作………？〉

そういえば、と、ティナはある事に気づいた。

そうだ、そういえばエルレイドは自分を――

そのティナの表情を見て気づいたのか、エルレイドは笑みを浮かべ。

へそうだサーナイト、俺はお前の母であるサーナイトの身体を元に創られながら、お前程の力を得られなかった出来損ないの失敗作。

――つまり、お前とは姉弟のようなものだよ

彼女の思考を完全に停止されるような事実を、口にした。

へ俺も初めは知らなかった、だが偶然その事実を知った時……俺は愕然としたよ。

失敗作だと、出来損ないだと思い知らされた時の俺の気持ちがお前にわかるか!?

だから俺は貴様を許さない、たとえ薬によって俺の命が尽きようとも、貴様だけは絶対に殺してやる!!

叫び、その念を込めた剣をティナに向かって振り下ろす。

避けなくてはならないのに、動けない。

二重の事実、それを前にしてティナの思考は完全に停止した。

へ――――つ、あ

そして。

エルレイドの剣が、ティナの左肩から右わき腹までバツサリと斬り裂いた。

へっ、ぐ、う……

頭が茹だってしまうほどの熱も痛みも、今の彼女には関係ない。

ただ、告げられた言葉で思考は止まったまま。

へお父、様……

自らが流した血の海に沈み、意識を手放した――「こっちよ!!」

フレアの後を追い、ヴァルハラ内部を駆け抜けていくレイジ達。

しかし……カグヤはまだフレアを信用する事はできなかった。

「大丈夫よ、カグヤ」

隣に移動しながら、安心させるようにシロナは言った。

「でも……」

「レイジくんは人を変えるのが上手いから、もう大丈夫。貴女だって、内心ではそう思っているんじゃないの？」

「……………」

そう言われてしまうと、返す言葉がない。

「――後はこの道をまっすぐ行けば、制御室に辿り着くわ!!」

「よし、ならこのまま一気に――」

更にスピードを上げようとして――レイジは突如立ち止まる。

急に立ち止まった事により、カグヤとシロナはレイジの背中に顔をぶつけてしまった。

「いたた……急に止まらないでよレイジ」

「どうしたの？」

「……どうやら、あれを倒さなきゃ先に進めないらしい」

そう呟くレイジの視線の先。そこには……道を塞ぐかのように立ちふさがる、ポケモン達が。

ヒードランにプテラ、更にはボーマンダの姿が。

「ロキめ……時間を稼ぐつもりか!!」

すぐさまボールから現在戦えるルギアとアクセルを場に出す。

こんな所で時間を無駄にしている暇などない、ここは一気に……。

「待ってレイジ、ここは私達に任せて先に行って」

「えっ……カグヤ？」

「時間がないのはわかってるから、こんな所で足止めされるくらいならレイジだけでも先に行って」

「だけど、あれは……」

ロキによって限界以上の力を秘めたポケモン達だ、カグヤ達だけでは分が悪い。

「マスター、余とアクセルもここに残ろう。」

ロキはもう手元にポケモンを残してはおらぬ、後はマスターが……全ての決着を」

「ルギア……」

「父上、母上とカグヤは僕達を守ります……！
ですから父上は早くロキの元へ……！」

「アクセル……」

「レイジくん、今は私達を信じて。必ず勝つてもう一度貴方の元に戻るから」

「ロキを倒せるのはレイジだけ、なら私達はその手助けをする事しかできないから……だからお願い、行って……！」

「カグヤ、シロナさん……」

「っ、ちっ——！」

舌打ちをしながら、ルギアは前方にハイドロポンプを撃ち放つ。

それはヒードランから放たれたブラストバーンとぶつかり合い、視界を奪う水蒸気を生み出した。

「行け、マスター！！ このようなくだらぬ戦いに、終止符を打つてくれ——！」

〈父上の道は、僕達が切り開きます——！〉

「……………」

正直言って、心配ではある。皆をここに残す事に、不安がないわけではなかった。

でも——自分を信じてくれる皆の為に。

何より、全ての決着をつけるためにも……立ち止まる事は許されない。

「——っっっ」

歯を食いしばり、全速力で走る。

何も考えず、ヒードラン達の所へ向かって真っ直ぐに。

恰好の的を見て、プテラとボーマンダは揃って口からはかいこうせんと放とうとして——

「ミロカロス、ハイドロポンプ!!」

「エネコロロ、ギガインパクト!!」

プテラをミロカロスが、ボーマンダをエネコロロがそれぞれ壁際まで吹き飛ばし。

「邪魔だ、この木偶の坊が!!」

レイジの前に立ちふさがったヒードランを、アクセルが渾身のとびひざげりで壁にめり込ませた。

「みんな、無茶だけはしないで!!」

そう言い残し、レイジは奥へと消えていく。

「……無茶だけはしないで、か」

「この場合、無茶をしないようにするのが無茶なんだよね……」

大技をまともに受けたというのに、ヒードラン達はすぐさま立ち上がった。

「……おい、そこのフレアとかいう女」

「何かしら？」

「お前はポケモンを持ってないのか？」

「生憎とね……」

「ちっ、使えぬヤツだ……仕方ない。アクセル、お前はその女の指示で戦え」

「えっ？」

「気に入らぬがそやつのトレーナーとしての実力は高い、余はともかくお前はどちらかという指示があった方が戦いやすいだろう？」

「そ、それはそうだけど……」

「グダグダ言うたらんでさっさと構えろ!!」

「————来るぞ!!」

ルギアの声を皮切りに、一斉に攻撃を仕掛けてくるヒードラン達。

「ミロカロス、みずのはどう!!」

「エネコロロ、ふぶき!」

「くらえっ!!」

「アクセル、はどうだんよ!!」

「わ、わかった!!」

それを真っ向から迎え撃つカグヤ達。

爆音が響き、それが死闘の開始となる合図となった……。

……。

……。

「――」

暫く走り続け……レイジはふと足を止める。

急がなくてはならない、それはわかっている。

みんなが自分の為に命を懸けて戦っている、それもわかっている。

だけど……最後に、少しだけ。

少しだけでもいいから、この世の別れを惜しみたいと思ったのだ。

――後悔は、もうしない

（みんな、今までありがとう……）

自分を仲間だと言ってくれた人が居た。

自分を愛してくれた人が居た。

その全てに頭を下げて、レイジは再び歩を進める。

——さあ、最後の戦いへ

未来を守るために、もう戻れない死地へと……彼はもう二度と歩みを止める事はなかった。

↑——、う↓

痛みと熱が、ティナの意識を無理矢理覚醒させる。

しかし、すぐさま薄れていく意識……それをどうにか繋ぎ止めながら、起き上がろうとして。

へっ、あ、ごぶ……！↓

激しい痛みと共に、吐血してしまった。

——彼女の身体は、既に死に体だ

エルレイドの一撃はそれほどまでに深く、むしろ生きている方が不思議だと言えるくらいだ。

やはり普通のポケモンではないからか、それが幸福なのか不幸なの

かはわからないが……。

〈——いいザマだな、サーナイト〉

そんな彼女を、勝ち誇った顔で見下すエルレイド。

ティナもどうにか睨み返すが、痛みにより苦しんでいるようにしか見えない。

〈どうだ？ 失敗作である俺に殺される気分は。〉

しかしこうもあっさり勝負がつくとは思わなかった……所詮成功作といっても、あんな主人の元では生温い力しか手に入らんか〉

〈っ、訂正、しな、さい……お父様を、侮辱、するのは……〉

〈やめておけ。動くどころか喋る事すらともにできんくせに。〉

——だが少々呆気なかったな、もう少し手こずるかと思ったが〉

そう口にしつつ、エルレイドはティナの右足を掴み逆さに持ち上げる。

〈くっ………！〉

〈どうだサーナイト、同じ肉体を元に生まれた俺達だが……真に勝っていたのは俺の方だったようだ〉

〈……わたくしは、そんな事どうだっていい。〉

確かに、ショックではないと言えは嘘になりますが……わたくしは、お父様の娘である事は変わらない……〉

「ハッ、娘だと？ 笑わせるなよサーナイト、いくら言葉で強がりを見せようが、その荒れた心は隠せていないぞ？」

「——お前は、自分が兵器である事にショックを受けている。認めたくないからそうやって自分自身を誤魔化している。」

「まったくもって笑える話だなサーナイト、いくらお前が否定しようが事実是不変ならないというのに」

「……………」

エルレイドの声は、ティナに現実だけを突きつける。

「——お前は兵器だ、と」

「——他者を蹂躪する為だけに生まれてきたのだ、と」

「今までの自分、ティナとしてレイジと共に過ごしてきた自分の全てを、否定されるような真実が、確実に彼女の心を砕いていく。」

「だがそんな苦しみなどすぐに無くなる、貴様はここで俺に殺されるのだからな。」

「——その後は、お前が父と慕うあの人間を始末してやるさ」

「揺るがない勝利に、エルレイドの気分は高揚するばかり、だからティナに対して暴言を吐き続ける。」

「こんな死にかけの存在、もはや気にする必要などないと思っているからだ。」

「……………」

だが。

それが間違いだと、エルレイドはまだ気づかない。

彼女にとって、レイジという少年がどれだけ大きな存在なのかを、まるでわかっていなかった。へ———そうか。あなたはそんなにわたくしを怒らせたんですね

へな———ぐおっ!?

ティナの呟きに耳を傾けた瞬間、エルレイドは右の頬に蹴りを入れられたたらを踏んだ。

その隙にティナはエルレイドの手から脱出し、静かに言葉を紡ぐ。

へ全てあなたの言う通りですエルレイド、わたくしは……自分自身を否定したい。できる事なら、聞かなかった事にしたいくらいのショックを受けています

ですが、と。彼女は今までよりも遥かに凜とした表情で言い放った。

へたとえわたくしが兵器だろうとも、今のわたくしはお父様の娘であるティナです!!

この身体も、この力も全てお父様の為に存在しているのです!!
たとえお父様自身に兵器である自分を否定されたとしても、わたくしは自らの意志でこの道を歩んでいる、それは……誰にも文句は言わせません!!>

難しく考える事など、なかったのだ。

自分を育ててくれた人がいた、自分を強くしてくれた人が居た。

全てはその人の為に、全身全霊を以てこの力で支えるだけ。

ならば——こんな事実に関心を揺さぶられる必要はないし、何よりも。

へ——わたくしのお父様を馬鹿にしたのは、これで二度目ですね。

エルレイド、あなたは学習するという事を知らないのですか?>

何よりも彼女にとって、その事実は絶対に許さない。

へき、貴様——まだ抗うか!!>

へ煩いですよ。悔しいのでしたらさっさとかかってきなさい>

へっ、この死に損ないがあああっ!!!!>

怒りに満ち溢れた表情のまま、サイコセイバーを展開したエルレイドが突撃する。

互いの距離は僅かに十メートル、これでは二秒と待たずに踏み込まれてしまうだろう。

——だから

この二秒間が、最後の勝負となる。

〈————〉

両手を前に突き出し、剣を握る構えを取る。

展開されるはサイコセイバー、しかしいつもの双剣ではなく………
一本の大剣と化したもの。

それを上段に上げたまま構え、静かに息を吐く。

刹那——サイコセイバーの光が加速度的に増していき、更には大き
さまで変わっていく。

それは大剣から槍並の長さとなり、尚も伸びていき——彼女の三倍
はあろうかという大きさにまで膨れ上がった。

〈なっ————〉

それに気づいたエルレイドだったが、既に遅く今更自分の攻撃を止
める事はできない。

——拙い、あれに触ればそれで終わりだ

絶対的な破壊力を持っていると理解しているのに、エルレイドは止
まらない。

そんな彼に気づき、ティナはただ一言。

〈――さようなら〉

そう告げて、地を蹴り踏み込んだ。

そして、必殺の間合いに入った瞬間、天井を破壊しながらエルレイドへと光の剣を叩き込む！！

〈ぐ、あ……………！〉

ぶつかり合う両者の剣。

しかし、破壊力の差は明らかだった。

どうにかエルレイドが防いでいるだけで、いずれティナの剣は彼の身体ごと一刀両断にする事だろう。

それほどまでの、圧倒的な破壊力。

〈――あなたは、ロキと共に互いを高めてはこなかったのですか？〉

〈な、に――！？〉

へわたくしのこの力は、お父様との絆と努力の果てに得る事ができた力。

互いに助け合い、互いを高めながら歩んできたわたくし達とあなた達では……そもそも勝敗など決まっていたのですよ〉

ティナの剣が、エルレイドの剣を押し潰していく。

「さようならエルレイド、あなたの過去は同情できるものでしたが……全てを救う事はできませんので、あなたはここで……楽になってください」

「……な、何故だ……何故俺は失敗作でお前は成功作なんだ……」

「成功も失敗も関係ありません、今この瞬間を生きているなら……それに捕らわれずに高みを目指せばよかったのです。」

「——では、そろそろ終わりにしましょうか」

ヒビはどんどん大きくなり増し、今にもエルレイドを押しつぶしそうだ。

そして——

ティナの剣は、エルレイドの剣を砕き。

その剣の持ち主ごと、光に包み込んでしまった。

……。



終わった。

膝をつき、ほっと一息つく。

〈……勝てましたよ、お父様〉

今回は本当に危なかった、後もう少しで完全に心が砕けそうだったが……。

彼女の脳裏に、彼との旅の思い出が思い浮かび、もう一度生きる気が蘇ってくれた。

へ——さようならエルレイド、この事実は信じますが……わたくしには関係のない事です。

わたくしの名前はティナ、レイジという父を持つ……ただのサーナイトです〉

信じられぬ過去の果てに掴んだ答えを口にする。

しかし、既に彼女の言葉にエルレイドは応える事はできない。

——さあ、戦いはまだ終わっていない

傷は癒えず、死に体である事には変わらないが、行かなくてはならない。

己の身体に渴を入れながらティナは立ち上がり、静かに部屋を出て行く。

――倒した者の、想いを宿しながら

第100話 最後の選択／最後の時／（前書き）

――最後の時が迫る

果たして、世界が選ぶのはレイジかロキか……。

選定の時まで、あと僅かとなった。

第100話 最後の選択／最後の時

――歩く

誰もいない、金属質の床を鳴らしながら目的地に向けて歩を進む。
阻む者は誰もおらず、やがて問題なくとある部屋に辿り着いた。

「……………」

扉の前に立つと、抵抗なく開き。

――1人の男が、ゆっくりと自分を迎え入れた

「――ようこそレイジ、待ちわびたぞ」

「……………よく言う。あの場から逃げたくせに」

互いの間合いは八メートル、僕もロキも一息で踏み込める距離だ。
拳を握りしめ、いつでも踏み込めるように準備と警戒は怠らない。

……しかし、と。部屋を見回した。

ドーム状の部屋は広く、天井に至っては十メートル以上はありそう

だ。

中央には何かの機械、そしてその傍にはロキの姿。おそらくあの機械が神の雷を制御するものなのだろう。

「逃げたわけではないさ、お前と私、2人だけになる為にあの場を離れたのだよ」

「それを逃げたと言うんだ。――今すぐ神の雷を止めろ」

「それはできない相談だな、お前とて私が素直に従うとは思っていないだろう？」

余裕綽々な態度に、心底腹が立つ。

ロキの言う通り、言って素直に従うなど微塵も思っていない。

……やはり、無理矢理黙らせるしかないようだ。

「――レイジ、お前は何故そこまで人間の味方をする？」

身勝手な理由で創り上げられ、人の醜さをあれだけ見てきたお前が、何故最後まで人の味方であろうと思うのだ？」

「それは僕だって同じだ、どうしてあなたは人間の敵であろうとする？」

確かに身勝手な理由で創られた人間ではない紛い物、それは間違いない。でも……自分自身を決めるのはあくまでも自分だ。

――あなたは逃げてるだけなんだ、自分が空っぽの人形である事を受け入れて、八つ当たりのように世界を破壊しようとしているだけだ――！」

それが許せない、あまりにも身勝手な行いは絶対に。

人としても、なにより同じくアルセウスに創られた存在としても、この男を許すわけにはいかない。

しかし、それでもロキの笑みは崩れなかった。

「それがどうした？ 私はこの世界が憎い、だから滅ぼす。

——その為なら、私はどんな事だってやってやるさ」

「……………」

わかっていた。

もはやこの男に、何を言っても無駄だという事は。

だがそれでも……できる事ならこれ以上罪を重ねてほしくはなかった。

「レイジ、お前はまだ私を憐れむのか？

優しいものだな、私のような“殺人鬼”にもまだ同情の意を向けられるのか」

「え——」

殺人鬼……？

ロキの言葉に、首を傾げた。

この男は、一体何を言っているのか……。

「——おかしいと思わなかったのか？ 何故このヴァルハラに私とフレア以外の人間が居ないのかを」

「……………」

確かに、疑問には思っていた。このヴァルハラはロケット団にとって最高の要塞だ、それなのに監視と警備の役割になるであろう部下が居ないというのは異常とも言える。

……けれど、この男がこういった存在なのか理解できていれば、すぐにわかる事だ。

「——始末したんだろう、お前が全て」

吐き捨てるように言い放つと、ロキの口元の歪みが大きくなった。

「さすがだなレイジ、その物分かりの良さは恐ろしいとさえ思える」

「——どうしてだ。殺す必要なんかなかったはずなのに、どうして切り捨てるような真似を」

限りある命なのに、この男はいとも簡単に奪い去ってしまった。

内側から溢れ出そうになる怒りを必死に抑えつけながら、その理由を問いかける。

——けれど

もう既に、この男が正気でない事に僕は気づいていなかった。

「――いらない道具は、捨てるのが普通ではないのか？」

「――――」

――言い切った

何の罪悪感も躊躇いもなく、この男は言い切ってしまった。

自分の部下達を、いらない“道具”だと吐き捨てて、殺したと……。

「このヴァルハラは実際に私1人でも動かせるようにできている、
ならばいらぬ道具など所持している必要などない」

一体何を訊いているのだお前は、そう言わんばかりの口調でそう告げるロキ。

それを見て、おもわず後ろに後退った。

――この男は、とうに人間ではなかった

わかっていたはずなのに、改めてこの男が異常さを見て……寒気がした。

人を人とも思わぬ狂った化け物、それがロキという男の正体。

「――ああ、そうか」

初めから、わかっていたのに。どうして僕は……こんな意味もない問いをしたのか。

この男は悪だ、この世界にとって……人間達にとって紛れもない悪でしかないのだ。

なら……もう、これ以上この男を生かしておく理由も意味もない。

「――五分だ」

「……………」

「あと五分で自動的に神の雷が放出される、そうなればスズラン島がどうなるか……お前にはわかるだろう？」

「……………」

すなわち、五分以内にロキを殺しこの装置を破壊しなくてはならない。

「――ああ。それでも構わないさ」

互いに正気ではなく、互いに1つの目的の為だけにここに居る。

――ヤツは世界を滅ぼす為に存在し

——僕は世界を守る為に存在する

賭けるのは互いの身体、これはポケモンバトルではなく——純粹なる殺し合いだ。

「っ、は——！」

右足で四メートル、左足で四メートル踏み込み、一秒も満たない時間でロキとの間合いを詰める。

狙うは必殺のみ、一切の情も油断もなく右の拳を突き出す。

避けられない間合い、まともに受ければ骨すら砕ける。

——パンツと、乾いた音が響いた

「————っ」

それと同時に左わき腹に衝撃。

掌底を叩き込まれた、それを理解するよりも早く折り曲げた膝が胸部に突き刺さり宙に浮かぶ。

「が、あ——」

息が詰まり、思考が停止する中。

首が飛びそうな衝撃が襲いかかり、受け身もできずに地面を転がっ

ていく。

「ぎ、が、あ——！」

肺が潰れる、チカチカとする視界が思考を奪う。

今の、は……！？

「——ほう、頭を砕いたつもりだったが」

「ぐ、あ……」

今の一撃は……。

外側ではなく内側を破壊する拳、拳法家の中では禁忌とされる技。

「殺人、拳………！」

それも、一朝一夕で身につけたものじゃない！！

「——どうした？　よもやそんな警戒をしていなかったわけではないだろう？」

ヤツが近づく。

このままでは頭蓋は碎かれ、僕の命はそこで尽きるだろう。

冗談ではない、こんな所でやられるか………！

立ち上がり、拳を構え対峙する。

するとヤツはニヤリと笑みを浮かべ、口を開いた。

「そうではなくては面白くない、最後の最後まで足掻いてもらわねばな。

——しかし、命を懸けねば私には届かんぞ？」

ヤツが笑う、そんな事はわかっている。

命を懸けても届くかわからないのだ、初めから生き残ろうなどと考えてはいない。

「行くぞレイジ、最後の殺し合いだ！！」

歓喜の声を上げながら、ヤツは大きく踏み込んでいく。

しかし僕からは踏み込めない、先程のダメージが抜け切れてない状態で立ち上がったのだ、未だに膝が笑っている。

それでも負けないとばかりに、拳を突き出した。

——最後の五分

僅かな時間での負けられないこの死闘こそ、僕に残された最後の時だった。

「ミロカロス、ハイドロポンプ!!」

「エネコロロ、れいとうビーム!!」

ミロカロスとエネコロロの大技が、ヒードランとプテラの攻撃を相殺し、爆発が起こる。

煙に紛れ、アクセルが踏み込んだ。

「きあいパンチ!!」

右腕にパワーを溜め、渾身の一撃を叩き込むアクセル。

しかし、その一撃はボーマンダによって真っ向から受け止められてしまった。

「アクセル、下がれ!」

↑———っ↓

ルギアの声が響き、アクセルはすぐさまその場を離脱しようと地を蹴り。

瞬間、ボーマンダの両腕がしっかりとアクセルを拘束してしまった。

へなっ——ぐああああっ!!?>

驚く暇など与えない、至近距離からのかえんほうしゃを受け、アクセルは悲鳴を上げる。

「アクセル!!」

すぐさま助けに行きたい、しかしアクセルが拘束されたままでは彼も巻き込んでしまう。

だが、アクセルはボーマンダの炎に焼かれながらも攻撃を仕掛けていた。

へっ、こ、のおっ!!>

至近距離からのりゅうのはどう、口から放たれたそれはボーマンダの顔面に当たり、拘束が緩んだ。

その隙を逃さずアクセルは両腕から離れ、右手をボーマンダのわき腹に添え。

「はっけい!!」

ズドンッ、と弾丸じみた衝撃を叩き込む!!

ボーマンダの巨体は吹き飛ばされ、脇で戦うヒードランを巻き込んだ。

「今よ!! ミロカロス、アクアテール!!」

「エネコロロ、ギガインパント!!」

「ルギア、エアロブラスト!!」

「命令するでないわ!!」

全員による一斉攻撃、それは見事にヒードラン達を包み込み大爆発を引き起こした。

……。

それが最後の力だったのか、ミロカロスとエネコロロは倒れ、アクセルも膝をつく。

「ミロカロス、戻りなさい」

「エネコロロ、ありがとう」

無理もない、既に戦闘不能になっているはずだというのに、気力だけで立っていたのだから。

本当によく頑張ってくれた二匹に、カグヤとシロナは感謝の言葉を口にした。

「……おい女、アクセルをボールに戻せ」

へルギア、僕はまだ」

「たわけが、そんな身体で何ができる。お前は余に「アクセルは限界まで戦って散った」などという戯けた事を言わせる気か？

マスターは必ず生きて帰るように願っているのだ、たとえどのような理由があろうとも……その誓いを破る事は絶対に許さぬ」

たとえ仲間でもだ、鋭い眼光を向けながらルギアはアクセルにそう告げる。

そう言われてしまうと、アクセルはもう何も言えなかった。

フレアも彼の心中を察したのか、アクセルをボールに戻す。

「――さあ、カグヤにシロナ。まだ敵は残っているぞ!!」

煙が晴れていく中、ルギアは鼓舞するようにそう叫ぶ。

瞬間、煙を吹き飛ばすような炎がカグヤ達に向かっていく。

しかし、ルギアはハイドロポンプでその炎を相殺する。

「ちっ……まったくしぶとい奴らだ」

「仕方ないさ、こんな程度でやられるとは思ってなかっただろう？」

悪態を吐くルギアに、ボールから出たラティオスはそう返しながら、身構える。

——ダメージは小さい

殆ど、と言えば語弊があるものの、それでも致命傷には程遠い。

こちらの技を殆ど相殺されたのだ、ダメージが小さくても仕方がないだろう。

(……………あまり、長くは保たぬか)

今の現状では——こちらが負ける、ルギアは冷静に認めたくない未来を肯定した。

ヒードラン達はロキによって異常なパワーアップを遂げた、本来ならばこれらに対抗できるのはレイジの手持ちのみ。

カグヤとシロナのポケモン達は充分に強い、しかし規格外の存在を倒すには至らないのだ。

おまけに、パワーアップしたルギア自身も……………あまり長くは保つ事ができないのが現状だ。

——それでも、勝つしかないのだ

そんな未来など認めない、みんなで帰り……………またあの騒がしくも楽しい旅に戻るのだ。

自分を叱咤し、ルギアはもう一度全身に力を込めてヒードラン達を睨み。

「―――ときなさい」

後ろから、全身が凍り付くような低く冷たい声が、聞こえた。

「―――」

振り向けない。

聞き慣れた声、味方である彼女だとわかっているのに、ルギアだけでなく誰もが振り向き彼女の姿を見る事ができなかった。

やがて、彼女達の横をゆっくりと通り抜ける一匹のポケモン。

――ティナが、血だらけの身体を隠す事なく現れた

「―――ティナ」

声が掠れる。

違うのだ、目の前の彼女はいつものティナではないとわかってしまう。

カグヤ達も同じ事を考えているのだろう、誰も彼女に近づけない。

――今の彼女は、あのロキよりも恐ろしいと思った

へ……カグヤ、怪我はありませんか？

「えっ、あ、う、うん……」

〈他の者達も、命に関わるような傷は負っていませんね?〉

「あ、ああ……」

そうですか、安堵の息を吐きながら僅かに空気が緩めるが――すぐさま刺すような殺気と威圧感が再び彼女の内側から溢れていく。

一体何があったのか、理由はわからないが……今の彼女は怒りに満ち溢れている。

下手をすると、敵と認識した者全てを無慈悲に殺戮してしまうかもしれない。

〈――お父様は、ロキの所へ?〉

「そ、そうだ……」

〈……では早く行きましょう、お父様の戦いを見届けなくては〉

言いながら、ティナは自らの身体から流れる血も気にせず、歩を進めていく。

あまりにも無防備なその立ち振る舞いは、どうぞ襲いかかってくださいと言っているようなものだ。

しかし――ヒードラン達はその場から一步も動けなかった。

ティナの全身から湧き出る覇気に、デッドポケモンが完全に萎縮してしまっているのだ。

だが、それでもプライド故か、ティナに攻撃を仕掛けようとヒードラン達が動こうとして。

「――消えなさい、今すぐに」

ティナではないティナの声が、一瞬でヒードラン達の動きを凍らせた。

「――――」

もう、ヒードラン達に戦う意志はない。

いや――ないというよりも理解したのだ。

アレに手を出してはならないと、生物の誰もが持っている本能に従っただけ。

絶対的な格の違い、それを見せられてどうして戦うという選択を選べようか。

〈行きますよ〉

こちらに顔は向けず、ただ一言そう告げてティナは歩みを進める。

「……………」

そんな彼女に、言葉を掛けれる者などいるはずもなく、黙って後をついていくカグヤ達。

けれど、わかった事が1つある。

——彼女は、このまま行けば戻れなくなる、と

何に、とか、何処へ、とか具体的な事はわからない。

だが全員が悟った、いつも優しく母性溢れるティナが、まるで怪物のように見えてしまうからだ。

怒りに身を委ね、それをある者にぶちまけようとしている。

ティナという存在が消えて、何か得体の知れないモノになってしま
う気さえた。

「……ティナ」

だから、行かせないように震える身体を抑えながら、カグヤはティ
ナに声を掛ける。

↑—————↓

彼女からの返事はなく、代わりに向けられたのは——拒絶の意識。

「……………」

これ以上話しかけるな、口には出さずとも彼女の心中が伝わり……
今度こそカグヤは口を閉じてしまった。

「—————」

掌底が叩き込まれる。

鈍い音が腹部に響き、意識が刈り取られそうになる。

それを我慢し、拳を突き出した。

——弾かれる

それを理解すると同時に、左足に突き刺すような痛みが走った。

「—————」

頭を砕こうとする蹴りを防ぐ。

頭蓋を砕かれれば終わりだ、腕や足が折れてでも頭は守らねば。

……ロキの格闘技術は、僕なんかとは比べものにならない。

このままでは全身の骨は砕かれ、死ぬ。

しかし……僕の拳は悉く弾かれ、代わりにヤツの拳は吸い込まれるように僕の身体を砕いていく。

「――――」

意識が、力が、確実に身体から消えていく。

これでは、一体どれだけ保たせられるか、もう。

「――――、あ」

刺さった。

ロキの足が、比喻でも何でもなく腹部に突き刺さった。

冗談ではない、ヤツの蹴りはまるで鋭利な刃物のようだ。

しかし、その痛みには構わず左の拳でロキの顎を砕こうと放つ。

――弾かれ、今度は頭部を鈍器のような衝撃を生み出す拳を打たれた炸裂する閃光が、眼を焦がす。

視界はまるで血のように赤く、自分自身を維持できる意識もごっそ

りと持っていかれた。

それすら噛み殺し、もう一度拳を……。

もう無理だ、これ以上攻撃を受けたら絶対に――

「――あ」

ダンッと、背中から地面に落ちた。

何が起きたのか理解する前に、脳が衝撃と痛みでおかしくなりかける。

「――、――」

声が、出ない。

身体のうちこちらの機能が、既に再起不能だと訴えかけている。

……ああ、そうか。

また拳が弾かれて、左肩を掌底で砕かれた後。

膝蹴りを叩き込まれて、地面を転がったのか。

今更ながらに自分の現状を理解して、可笑しくなった。

拙い――今のは効いた、効きすぎだ。

左肩は完全に碎かれ、無事な箇所などただの一つとしてない。

息をする機能すら上手く使えず、まるで陸地に上げられた魚のように無様だ。

「――終わりだな。所詮はそんな程度か」

勝ち誇ったロキの言葉にも、何も返せない。

死に体なのは、ヤツとて同じだった。

どうしてなのかわからない、けれどヤツはこの戦いで加速度的に生命力を低下している。

ダメージを受けていないくせに、もうあと数分で死ぬ身体だところらですらわかるくらい、ヤツの身体は限界だった。

でも――たとえ相手が死に体だとしても、こちらは指一本動かせないのだから、無意味なものだ。

――立ち上がれない

――立ち上がれない

——立ち上がれない

もしかしたら本当は既に死んでいて、意識だけがしぶとくこの世をさまよっているのかもしれない。

……だけど、それでも。

立ち上がらなければ、全部嘘になる。

守るという約束も、倒すという誓いも。

全部が全部嘘になって、無くなってしまふ。

そんな事は認めない、認められない。

だから……早く、立って、アイツを、倒さな、いと……。

「レイジ!!」

「——」

聞き慣れた声が響く、けれど耳は殆ど機能していないので、何を言っているのか理解できない。

「——無粋なものだな、邪魔をしに来たか」

若干の怒りを含んだ言葉を吐き捨てながら、ロキは現れた者達に視線を向ける。

そこには……カグヤにシロナさん、更にはフレアさんにルギア、そして。

↑……………↓

「――」

待て。

あれは……“誰だ”？

カグヤ達と共に居るサーナイト、もちろんあれが誰かなど答えは一つしかない。

それなのに、本気であれが誰かがわからなくなった。

あの柔らかな物腰や、慈愛に満ちた雰囲気すら微塵も感じさせず。

目の前の存在を殺すためだけに存在する、そんな空気を内側出す彼女が……本当にティナだというのか？

「使えん奴等だ、足止めにすらならなかったか」

「これで終わりよロキ、あなたを守るものはもう何もない」

「……………」

「おとなしく投降しなさい、今までの過ちを身をもって――」

「――償う必要などありません。この男は……今この場で、殺します」

「――――」

「え……………」

誰もが、耳を疑った。

シロナさんの言葉を遮ったティナが発したものは、到底信じられるような内容ではなかった。

……どうしてだ、今のティナからはロキからの憎悪しか感じられない。

この男を憎むのはわかる、でも……彼女の憎しみは周りの比ではなかった。

「――エルレイドを殺したのかサーナイト、さすが成功作だ。失敗作とは出来が違う」

「気安く話しかけるな、貴様なんぞに声を掛けられたら虫唾が走る」

抑揚のない声で、無表情のままティナはロキを睨みつけた。

「――ロキ、わたくしはあなたを許さない……エルレイドを、彼を失敗作だと決めつけ彼の苦しみや憎しみすら道具にしたあなたを……」

…絶対に許さない」

「えっ………?」

失敗作? 成功作?

聞き慣れない単語が飛び出し、ロキとティナ以外の全員が首を傾げる。

「……わたくしは、かつてロケット団が行っていた実験——人間とポケモンの融合体の唯一の成功作であるサーナイトから生まれたポケモンです」

「なっ——!?!」

「人間と、ポケモンの融合体……!?!」

「そしてあのエルレイドは、わたくしの母であるサーナイトの肉体を用いて創られたポケモン。」

「——すなわち、わたくしと彼は姉弟と呼べるような間柄でした」

『——!?!?』

衝撃が、場を支配する。

正直、ティナが告げた内容はあまりに信じられないようなものだ。けれどこの状況で与太話などする理由も意味もなく、更に……ロキがティナの話を聞き、楽しそうに顔を歪めたのを見て……その話が真実だと認めざるおえなかった。

「その通りだよサーナイト、しかし……お前が再び私の前に現れるとは思わなかった。あの時ばかりはさすがの私も運命というものを信じたよ」

へ——何故だ。あなたはエルレイドの苦しみを知っていたはず。

己を失敗作だと思い悩み苦しんでいた時の絶望感を、あなたはわかっていたはずだ。

なのに——なのにどうして、あなたはエルレイドを肯定しなかった……！！

お前は失敗作などではないと、何故救いの手を差し伸べなかったのだ……！！

魂からの叫びが、ティナから放たれる。

自分を劣悪な存在だと決めつけていた彼を、何故救わなかったのだと、ロキを責め立てた。

——それを、アイツは

「——失敗作で敗者でもあるエルレイドを、何故救わなくてはならないのだ？」

つまらなげに。

本当につまらなげに、冷たく言い放った

「……………は？」

その言葉に、ティナは間の抜けた声しか返せない。

本気で、心の底からロキの言葉がわからないかのように……。

「何故救わねばならないのかと言ったのだよ。

いいかサーナイト、この世には不完全なものが満ち溢れている。

——不完全な人間、不完全なポケモン、不完全な心、不完全な善悪。

それらはこの先何があるとも変わらず、むしろ酷くなっていくばかりだ。そんな存在に、何故救いの手を差し伸べなくてはならないのだ？」

「へっ、あなたという者はどこまで……………！」

確かに不完全な存在かもしれない、だがエルレイドは自分を劣悪だと思いつつも己の心のままに生きた……！！

それを侮辱する事などこの世の誰にもできないはず……！！

「それは強者の綺麗事に過ぎない、お前とてエルレイドを敗者にし自身が勝者になったが故に、そのような戯れ言をほざく事ができるのだ。

サーナイト、欠陥品は欠陥品。何の価値も意味もない存在であり、その者が生きている道理には繋がらない」

「そんな事ない！！ そんな事なんてないよ！！」

〈……………カグヤ〉

「私、難しい事はよくわからないけど…………エルレイドは凄く強かった!!」

本気でそう思えるくらい、エルレイドは強かったよ!!」

「……………」

たとえ敵同士だったとしても、彼は強かった。

戦ったのはティナだったけど、彼を見るだけでもその内側に宿る強さはわかる。

だから、ティナの言う通り…………彼を侮辱する事はこの世の誰にもできはしない。

だがそれでも——ロキの心は変わらなかった。

「——くだらないな」

〈なっ——〉

「どんな言葉で取り繕うとも、現実を決して変わらない。

ではお前達に訊くが、エルレイドのように自分に対し劣等感を抱いている存在を、全て救う事ができるのか？」

「————」

——嫌い

「その綺麗事で、この世界を変えられるのか？」

——黙れ

「世界は変わらない、善悪の区別もない人間の前では、お前達の言う善意とやらは食いつぶされるだけ」

——もう、これ以上

「欠陥品を救う術は、永遠にない」

——その口から、言葉を出すな！！

「——、あ」

立ち上がれ。

これ以上、あの存在をこの世に存在させておくな。

「あ、あああ——」

壊れたっていい、消えたっていい。

元よりこの身体は死に行くもの、ならばどうして躊躇う必要があるのか。

「あ、ああああ……！」

——お前は何を守ると誓った？

何を救い、何を助けると誓ったのだ？

約束を果たす為にも、こんな所で……。

「——あ、あああ」

——こんな所で、終われるわけがない！！「——あああああああ
ああっ！！！！！」

立ち上がる。

ビキビキという何かが欠けるような音も、全身を動かさせまいと襲う痛みすら振り払って。

地を蹴り、真っ直ぐロキの元に拳を叩き込む！！

「ぬっ——ぐっ！？」

〈お父様！？〉

「おおおおあああああああつ！！！！」

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。

ここで少しでも止まればそれで終わりだとわかったから、自分の身体を誤魔化す為に叫び続ける。

「貴様、まだ――」

「あああああつ！！」

ロキが立ち上がる前に、もう一度拳を叩き込んだ。

――その衝撃で、右手の指が折れた

それには構わず、折れた左腕でヤツの顎を砕く。

「ぐっ――！！？」

一撃、二撃、三撃！！

殴って殴って殴り倒してまた殴る。

両腕の感覚はなく、自分が何をしているのか曖昧になりながらも更に殴る。

「い、が――！！？」

だが、ヤツの拳が僕を軽々とカグヤ達の元まで吹き飛ばしてしまっ

た。

「ぐ、が、あ……………！」

ああそうだ、今は偶然奇襲が上手くいっただけに過ぎない事くらいわかってるさ……………！

だけど効いてないわけじゃない、もともとと殴ればいつかは倒れる、なら立ち上がれ、こんな所で倒れてなんかいられない、アイツだけは許せない、許すわけにはいかないのだから立て。報いを受けさせなくてはならない、償いをさせなくてはならない、その為にはまだ足りない。こんな程度じゃ足りるわけがない、だから立て、全身が碎ける痛みも苦しみも何もかも忘れてさっさと立ち上がれ——！

「あ、ぐ……………」

「——しぶといな。まだ死なないか」

「……………まだ、死ねない。お前を……………この世から消すまでは、まだ！」

走る。

ヒョロヒョロとした情けない走り、子供だって追い抜けるくらいの早さだけど確かに走る。

感覚のない右腕に力を込めて、拳を作り振り上げる。

——ヤツも、真っ向から僕を迎え撃ってきた

互いの一撃が最後になると、どちらからともなく理解しながら。

——僕とヤツの拳が、交差した

第101話 終わる戦いゝ傷ついた少年に神の祝福をゝ（前書き）

――戦いが終わる

譲れぬものの為に少年は命を懸け、立ち向かっていく。

その果てに待っているのは、ほんの小さく囁かな奇跡。

第101話 終わる戦い、傷ついた少年に神の祝福を

「……………」

「————」

互いに眼前で睨み合う。

最後の一撃、それは同時に放たれ。

——僕の拳は、ヤツに届く事はなかった

けれど……同時に、ヤツの拳も僕には届かず。

互いの一撃は不発に終わったというのに——ロキは地面に倒れ込んだ。

「——時間切れか。なんともお粗末な結末になったものだ」

自身の敗北を悟ったというのに、ロキはいつもと変わらない口調で
呟きを漏らす。

口元には笑みを浮かべているが、それは誰に向けられたものなのか
……。

「……アルセウスは、私が謀反を起こした時に、ある呪いを残した。
それは肉体の老化を促進するというものでな、まだもう少しは保
つと思ったが……どうやら当てが外れたようだ」

そう告げるロキの身体は、端から見ればあまり変わっていないように見える。

しかし、内部は既に穴だらけのボロボロ、普通の人間ならばとうに生き絶えているだろう。

「……どうして、そこまでして」

「何故も何もない、私は自分自身が許せなかったのだよ。」

身勝手なアルセウスによって創られ、役目を終えれば消える……人間ではない自分が、堪らなく嫌だった」

だから、そんな自分が存在するこの世界を憎んだのだ、と。ロキは、死に行く身体を誤魔化しながら、最後の告白を続ける。

……彼は悪だ、どうしようもないくらいの悪だ。

それは絶対に変わらない、変わらないけど……。

真に彼を責め立てる人も、存在しないと思った。

前に僕は彼を可哀想な人だと言った、それは皮肉ではなく……心の底からそう思ったこと。

自分は何もないと、人間に劣る存在だと決めつけて、耐え難い苦しみを味わい続けた。

……それは間違いだ。

だって、自分がどんなものなのか決めるのは自分自身。どんな事実

があらうとも……「これが自分なのだ」という確固たる意志があれば、何にだってなれる。

他人も立場も出生も関係ない、たとえ世界中の人が否定しても……自分を持っていれば、いくらでも変えられるのだ。

口で言うのは簡単かもしれない、けれど自分で変わろうと思えばなんでもできる。

人間はそこまで弱い存在だとは、思っていないから。

「――お前は何故人を信じる？ あんな不確かなものを、どうして何も考えずに心を開けるのだ？」

「……僕だって、無条件で人を信じているわけじゃないよ。

誰だってそうだ、他人の心は読めないから自分にとって得な事じゃなくては人を信じることなんてできない」

悲しい事かもしれない、しかしそれが現実なのだ。

自分にとって何か得になるから、損になる事はないから、そうでなくては人など信じられるはずがない。

これを否定する人は、どこか人間として欠落しているだろう。人という生き物は総じてそんなものだ。

だから僕は否定しない、僕が人を信じるのは自分にとって得になるから。

でも……それでいいのかもしれない。

そもそも人間は不完全な生き物だ、そんなものが完璧に振る舞おうとするのが間違いなのだ。

それ故に人は過ちを繰り返す、それは未来永劫変わらないと断言できる。

けれど、その過ちを止めるのもまた人間であり、不完全な故に無限の可能性を秘めていると信じているから……僕は今ここに居る。

未来は、誰かが決める事ではない、この世界に生きる全ての生き物が決める事だ。

「あなたは傲慢なんだ、自分1人が辛い目に遭っているのだと思って世界を憎んだだけ。

——可哀想なのは、あなただけじゃない」

「……………」

「でも——僕にはあなたを完全に否定する事はできない。

もし僕もあなたと同じ立場だったら……あなたと同じ事をしていたかもしれないから」

所詮、僕も弱く脆い人間でしかない。

仲間が居たからこそまで来れた、支えられてきたからこそに居る。

だから……僕には彼を否定する権利はない。

「——まったく、こうまで違うと……もはや笑い話だ。

さあ、お前の勝ちだぞレイジ。勝者となったのだから早く装置を切るがいい。

——敗者は、このまま消えるでしょう」

そう言って、ロキは笑いながら目を閉じ——二度と動かなくなった。

この男らしい、皮肉めいた最期。

けど、生涯忘れないであろう彼の最期。

それをしっかりと目に焼き付けながら……。

「…………ふう」

そつと、全てが終わった事に対する安堵のため息を吐き出した。

…………。

「——止めたわ」

制御装置から離れながら、フレアさんはそう告げる。

これで神の雷は放たれる事はなく、カイリ達も今頃は戦いを終えている事だろう。

「レイジ、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。っていうかこのやり取り何回目？」

カグヤとシロナさん、そしてティナに支えられながら、座り込んで
いる僕の身体は……正直直視したくないくらい酷い状態だ。

両腕は折れてるし、所々裂けていて血も足りない。

どうしてこんな状態で生きているのか、自分の身体に問いただして
やりたいくらいだ。

〈……………〉

「——ティナ、戦いはもう終わったんだ。だからそんな顔をしない
で」

〈……………お父様、わたくしはどんな事があってもあの男を生涯許す事
はできません。

わたくしの母や弟を道具として利用し侮辱したあの男だけは……〉

「それでもいい、それでもいいからそんな憎しみに満ちた顔はやめ
てほしい。

ティナは笑った顔の方が断然綺麗なんだから」

〈……………お父様は、本当に優しすぎますね〉

皮肉めいた口調でそう反論するティナだが、表情はいつもの柔らか
いものに戻っていた。

……………さあ、もうすぐ終わりだ。

全てが終わった今、これ以上僕が生きている事はできないだろう。

アルセウスは全てが終われば、僕は死ぬと言っていたのだから。

……心残りが無いと言えは嘘になる、まだ死にたくないと思ってる。

でも、全て承知の上で力を解放したのだ、悔いがあるわけがない。

——ああ、なんだか眠くなってきた

きつとみんなは僕を怒るだろう、身勝手な事をしたのだから当然だ。

あと……カグヤとシロナさんの想いに答えられなかったのも、謝らないと。

だけでもう限界だ、意識は今か今かと眠りの世界を待ちわびている。

(……ごめん、みんな。ありがとう)

謝罪と感謝の言葉を述べて、僕は目を閉じる。

すると意識は急激に薄れていき……ぷつりと、闇の中へと落ちていった。

……。

.....。

.....。

.....あれ？

おかしいな、どうしてまた意識が戻ってるんだ？

僕は死んだはずだ、アルセウスに力を解放してもらって、ロキとの戦いを終えた後に……。

それなのに、どうしてまた意識が……？

……とりあえず、一度目を開けてみる事にする。

「あ、起きた」

すると、そこには普段通りの彼女と……仲間達の姿が。

「……………あれ？」

僕は夢でも見ているのだろうか、とりあえず頬を抓ってみる。うん、凄く痛い。

「えっ、えっ？」

驚く事はそれだけではなく、見ると身体もすっかり元通り。痛々し

い傷など初めから無かったかのような状態に戻っていた。

更には、ぐしゃぐしゃのボロボロになっていたスズラン島も、戦闘前に戻っているがそれはさておき……。

――僕は、どうして生きているのか

「気がついたか」

「……アルセウス」

宙に浮かぶアルセウスに声を掛けられ、少しふらつきながらも立ち上がる。

と、頭の中に直接響くような声が聞こえ始めた。

〈どうやら上手くいったようだ、これでお前の命は救われた〉

「は………?」

「? レイジ、どうかしたの?」

どうやらこの声はみんなには聞こえていないようだ。

しかし……一体アルセウスは何を言っているのか理解できない。

いやそもそも……どうして僕が生きているのも理解できない。

すると、アルセウスはみんなと僕とで分けて会話を始めた。

「カイリ、ケイジ、お前達の力は返してもらったぞ。全てが終わった今……この力は過ぎたものだ」

（ディアルガとパルキアの力を一部、それを純粋な生命エネルギーに変換してお前に与えた）

「そしてティナ、すまないがお前のサイコパワーも頂いたぞ。

皆の傷や建物の修復の為に私の力を使ったのだが……少し足りなくてな」

（ティナのサイコパワーも上乘せをしたから、これでお前も普通の人間として生きる事ができる。

尤も、代償としてお前の能力は全て無くなってしまったが）

「……………」

「あつ、じゃあこの喪失感みたいのは……力が無くなったからか」

「フン、別にあっても無くても構わない力だ、消えた所で支障はないさ」

「ティナはどう？　なんか変な感じはない？」

「大丈夫ですよカグヤ、違和感はありません」

皆が話し合う中、僕とアルセウスだけの会話は続く。

（確かにお前は当初死すべき運命だった、だが……お前はまだこの世界に生きているべきだと思ったのだ。

私の傲慢で身勝手な考えで生み出されたというのに、お前は自ら

の意志で戦い私達を救ってくれた。

——お前は、幸せになるべきだ」

「……アルセウス」

気づけば、涙を流していた。

それを見てみんなが軽くパニック状態になっていたけど、今はフォーローに回る余裕はない。

……ああ、僕はまだ生きる事ができるのか。その事実が凄く嬉しい。

そして、みんなに悟られないようにしてくれたアルセウスの優しさも、嬉しかった。

「お、おい。どうしたんだよ!？」

「……なんでもない、なんでもないよ」

「なんでもないって……とてもそうは見えないけど」

「大丈夫だから。……それよりアルセウス、ロキは……」

「——ロキは消えた。元より短き命……もう二度と、目覚める事はないだろう」

「……………」

当たり前の問いをしてしまった。

でも……彼だって、もしカグヤ達のような人が傍に居たら……こんな事をしなかったかもしれない。

そう思うと、少しだけ胸が痛んだ。

「まあ、でも……これでロケット団も終わりだな」

「だが、まだ多くの支部が残っている、完全に壊滅するまではまだ時間が掛かりそうだ」

「それなら大丈夫よ。ワタシが既に国際警察に情報を流したから」

「フレアさん……」

「……ワタシにもね坊や、ロキ様と同じく自分には何もなかったの。

泥をすするような生き方をできて……気がいたらロケット団という犯罪組織に身を寄せていた。

何が正しくて、何が間違っていたのかはまだわからない……けど、ワタシにはこうした方がいいと思ったの。

今までの過ちを償う為にも、ね」

そう告げるフレアさんの表情は、今まで見た事がない憑き物が晴れたような顔だ。

……これで彼女の全てが許されたわけじゃない、でも変わろうと努力している姿は美しかった。

——雄叫びを上げ、ディアルガ達が空へと昇っていく

やがて不思議な空間が現れ、それぞれ違う場所へと帰って行った。

「おいしい、随分せっかちなディアルガ達」

「ホントだよ、しっかりお礼したかったのに」

「ディアルガ達に礼は不要だ、お前達の優しさで充分だったからこそ、立ち去ったのだから」

「……アルセウスも、行くの？」

「ああ。おそらく二度と会う事もあるまい。

レイジ、そしてこの世界に生きる沢山の子も達、私の身勝手な行いでこの世界に悲しみを増やしてしまった事を、どうか許してほしい」

頭を下げ、謝罪の言葉を口にするアルセウス。

この世界を創造した神の真摯なる謝罪。

「気にすんなよアルセウス、終わりよければ全てよしだ!!」

「カイリほど単純にはいかないけど、あなただってこの世界を想って故の行動なのだから、誰も責める事はできないわよ」

それを聞いて、みんな口々にアルセウスを許してくれた。

……ああ、やっぱり人はまだまだ捨てたものじゃないかもしれない。

「――レイジ」

「……………」

「お前は、この世界に生まれてきて……よかったと思っているか？」

「もちろん。思ってるに決まってるじゃないか」

迷いもなく、はっきりとアルセウスに返す。

選定者として生まれ、そして今は人としての生を手に入れた。

なのにどうして、幸せではないと思えるというのか。

僕の答えに満足したのか、アルセウスは大きく頷きを返した。

「では最後に、お前に問いたい事がある」

「えっ……？」

真剣な瞳を向けられ、おもわず身体が強張った。

一体何を言われるのだろう、そう思っていると。

「レイジ、選定者のお前は……人間が、そしてこの世に生きる者達が、これ以上生きている価値があると思うか？」

あくまで選定者としての自分に、最後の問いを投げかけてきた。

「……………」

人間、そしてこの世に生きる者達。

それが果たして、本当にこの世界で生きていくべき存在なのか否か。

アルセウスは、ちゃんとした答えを望んでいる。

「……………そうだなあ」

みんなも、僕の答えがどんなものか気になるのか、固唾を吞んで見守っている。

……今までの旅、今までの思い出が、蘇っていく。

沢山の出会いと別れ、増えていった仲間と——失った仲間。

その全てがあるから、今の僕は在る。

だから——僕の答えはこれしかない。

「——正直、人間は生きていてもしょうがない存在だと思う」

「えっ!？」

「レ、レイジ!？」

「……………」

「だけど、不完全な存在だからこそ未来がわからなくて面白いとも思ってる。

アルセウス、選定なんか初めからできなかったんだよ僕達には、だって未来なんかそれこそ神様にだってわからないんだから。

その上で、僕が答えを出すとするなら……やっぱり“わからない”って答えしか出せないよ」

なんとも曖昧で、中途半端な答え。

だけどそれでいいのだ、誰にも答えを出す事ができないのなら、ずっとわからないままでも構わない。

「——そうか。それがお前の答えか」

満足したのか、穏やかな声でアルセウスはそう呟き——飛翔した。

「アルセウス……?」

「ありがとうレイジ、ありがとう……この世界に生きる者達。

私は静かにこの世界を見守る事にしよう、彼が見つけた答えに従って」

——アルセウスの身体が消えていく

帰るのだ、決して何者も入れない空間へと。

もう二度と会えない、そう思うと少しだけ寂しくはあるけど……。

僕は、僕達は何も言わずに手を振ってさよならをした。

そして――アルセウスは最後に大きな頷きを返しながら。

今度こそ、この世界から消えていった。

……。

「――行っちゃった」

「うん……」

「はぁー……ようやく終わったな」

「何言ってるのよ。あなた1人が苦勞したわけじゃないんだから」

座り込むカイリにツツコミを入れるヒメカ、すると周りからは笑い声が木霊する。

それを少し離れて見てから、僕はもう一度空を見上げる。

――人間ってなんだろう

――世界ってなんだろう

——善悪ってなんだろう

それらは全て、人の一生では決して辿り着けない難問だ。

でも……いつかは、少しでもいいから近づいてみたい。

その為にも、今を一生懸命に生きていかないと。

そんな誓いを、そっと胸の中に宿しながら。

僕は暫し、空を眺めていた——

第102話　また会う日までく別れと旅立ちく（前書き）

――戦いは終わり、少年達は羽を休める

これは、仲間達の一旦のお別れの話……。。

第102話 また会う日までく別れと旅立ちく

「ちょっとカグヤ、いい加減起きなさい！」

「……………うー……………」

少し乱暴に身体を揺さぶられる。

もう……………うるさいなあ、私の身体を揺さぶっている人物に背を向けて拒絶の意を示す。

「ニヤ、ミヤー」

むう、エネコロロもうるさいよ……………もう少し寝かせて。

「ほらカグヤ、朝ごはんできるわよ！」

「お願い……………後五時間でいいから」

「普通そういう時は後五分とかでしょ！！　　そういう問題じゃないけど」

「じゃあ十時間でいいから……………」

「何で増えるの！！　仕方ない……………エネコロロ、10まんボルト」

「……………えっ?」

10まんボルトって……………ヤバッ！！

慌てて起きようとするが時既に遅し。

「ニャー……ミャアアアッ！！！」

「きゃあああっ！！？」

エネコロロの10まんボルトが、私の身体を包み込んだ。

「起きたわね」

「うう……ひどいよヒメカ、エネコロロ」

「起きないのが悪いんですよ、それより早く着替えて下に来なさい。
朝ごはんできるから」

「ニャー」

「ちょっと待って、まだ痺れが……」

知らないわよ、そう冷たく言い放ちヒメカとエネコロロは部屋から
出て行く。

ひどい……。

「……………はあ」

痺れもとれ、ようやく着替え始める。外を見ると確かにすっかり朝
になっていた。

……今日も平和な1日が始まりそうだ。

ただでさえバタバタしてたから、そんな何気ない事が凄く嬉しく思える。

「いけないいけない……早く行かなきゃ」

また10まんボルトを受けるのは御免だ。

というかエネコロロ、何でも当たり前のようにヒメカのことを利いてたんだろ。

……主人は私なのになあ。

……。

『いただきます』

全員で手を合わせて、朝ごはんを食べる。

「沢山あるから、どんどん食べてね」

そう言ってくれたのは、ヒメカのお母さんであるキヨコさんだ。

うーん、さすがヒメカのお母さん……大きいな。

「あてっ」

「あなた、今また失礼な事考えてたでしょ？」

「凄いヒメカ、心が読めるの？」

「……………」

そう訊いたら、また頭を叩かれた。

ちよつとしょんぼりしながら朝ごはんを食べていると……。

「だぁーっ、表出るこのクソ親父!!」

「親に向かってクソとはなんだこのバカイリ!!」

フタバタウンの名物らしいカイリとゲンリさんの親子喧嘩が始まった。

というか、あんな怒鳴り合いを前まで毎日やっていたというのだから、ちよつと呆れてしまう。

それに、街のみんなはすっかり慣れてしまったから誰も気に留めないというのも、また凄い。

私やシロナさんも4日連続で聞いたから慣れたけど、やっぱりミカンみたいな子はなかなか慣れないのか、今の声でびくりと身体を震わせた。

「……レイジくんも大変ね」

私達女性陣はヒメカの家に、そしてレイジ達男性陣はカイリの家で

寝泊まりしてる。

男性陣といっても、ケイジとロストさんは二日前にフタバタウンを後にしてしまった。

「レイジ、またいつかどこかで会おう」

そう言って、ロストさんはあの物知りヨルノズクから聞いた故郷へと旅立ち。

「次は、そのやかましさを少しは直せよカイリ」

ケイジは相変わらぬ事を言った後、また当てのない旅を始めた。

もう少しゆっくりしていけばいいのに……とは思ったものの、向こうには向こうの事情があるし、何よりまた会えるだろうから、そんなに寂しくはない。

「そういえば……定期船は明日出発するんでしたっけ？」

「そうよ。……ミカンはジョウトへ、そしてカグヤとレイジはカントーへ戻るのね」

「はい。……なんだか寂しいです」

——あの戦いから、もう4日が過ぎた

そして明日には、私達はそれぞれの故郷に帰る。

「今までずっと一緒だったから、いつしかそれが当たり前になって

たわね」

そう言うヒメカも、どことなく寂しげだ。

だけど仕方ない、いつまでも厄介になるわけにはいかないし……。

何より、私達はまだそれぞれやりたい事が残っているのだから。

「そういえば、ヒメカはこれからどうするの？」

またカイリと一緒に旅をするのか？」

せっかくだから、みんなのこれからを訊いてみる事に。

「そうね……正直まだ決めてないわ、カイリは落ち着いたらまた旅をするだろうけど……わたしは一緒に行くかわからない」

「えっ……でも、ヒメカはカイリが好きなんですよ？」

なら、ずっと傍に居たいと思うはずなのに……。

「確かにカイリの事は好きよ、でも……ずっと傍に居るだけが大切な事とは限らないの」

「……………」

ずっと傍に居るだけが大切とは限らない、何故かその言葉が私の中で反復する。

「それにね、カイリはわたしにとって大切な人だけどライバルでもある。

わたしだってトレーナーとしてもっと高みに登り詰めたい、だからカイリはわたしの障害でもあるわ」

「……そうね、ヒメカの言っている事は正しい」

「シロナさん……」

「私もレイジくんの事が一番大事よ、だけど彼は私にとって一番のライバルでもある。

チャンピオンという立場だけど、私だってポケモンの全てがわかってるわけじゃないから。

だから……ヒメカがもしカイリと行動を別にするなら、私は応援する」

「ありがとうございます、シロナさん」

「……………」

ライバル、か……。

そうだよね、私だってポケモンマスターになりたいって夢がある、決して諦めたくない夢が。

なら、レイジは私にとっても一番のライバルになるの、かな……？

今まで一度もそんな事考えてなかったから、よくわかんないや。

「そういうカグヤはどうするの？　まああなたの事だから、また旅に出るのしょうけど」

ヒメカに聞き返され、我に返った。

「うん……私、次はハウエン地方に行こうと思ってるんだ」

「ハウエンに、ですか」

「ハウエンリーグに出るためね、頑張りなさい。」

もしかしたら私やカイリもハウエンに行くかもしれないわ」

「レイジくんにはその事を言ったの？」

「……いえ、実はまだなんです。それに……今話を聞いて、1人で行こうか迷ってます」

初めは、レイジと一緒にハウエン地方に行ければいいなとは思ってた。

でも……ヒメカの言葉を聞いて、当たり前事に気づかされた今は……迷いが生まれてる。

「……沢山迷いなさい、その迷いの果てに掴んだ答えなら、きっとカグヤにとってプラスになるはずだから」

そう言って、シロナさんは優しく私の頭を撫でてくれた。

……そう言われると、少しだけ安心できた。

「シロナさんはこれからどうするんですか？」

チャンピオンですから旅に出るとかはできなそうですけど……」

「とりあえず考古学者としてシンオウを飛び回るつもり、あとジョウトでまだ調べてない遺跡があるから、ジョウトにも行こうと思ってるわ」

「ミカンは？」

「私はもちろんアサギシティに帰ります、ジムを長い間空けてしまっていますし、ちゃんと皆さんに顔を見せて安心させてあげたいですし……」

「そっか。……じゃあみんなバラバラだね」

「仕方ないわよ。始まりがあれば終わりだってある、それに永遠にお別れてわけじゃないんだから」

「うん……」

ヒメカはそう言ってくれたけど、やっぱり寂しいものは寂しい。

「――でも、ジョウトに帰る前に確かめたい事があります」

「……………？」

そう言うと、ミカンは。

「――カイリさんに、私とヒメカさんどちらが好きなのか……ちゃんと確かめないと、帰れませんから」

部屋の空気を変えるような事を、口にした。

「……………」

だけど、驚くと思っていたヒメカの表情は不思議と冷静なものだ。もしかしたら、ミカンがそう言うてくるってわかってたとか？

「……そうね。わたしも気になるわ、それ」

「別に明日までに答えを出してほしいわけじゃないんです、けれど今の段階でどちらが好きなのかを……はつきりさせたいんです」

控え目な彼女らしからぬ言葉に、私とシロナさんは少しだけ驚いた。

でも……ミカンの気持ちはよく理解できる。

私も、私達も同じようなものだから……。

「——朝食を食べたら、カイリの所に行きましようか」

「は、はいっ」

そんな短いやりとりの後、ヒメカとミカンはそれ以上何も話す事はなく食事を再開する。

……なんだか、少しだけ居心地が悪くなった。

だけど、カイリはどうするのかな？

2人に迫られても、タジタジになるだけだと思うけどなあ。時は少々遡り……カイリ宅では。

「だあーっ、表出ろこのクソ親父!!」

「親に向かってクソとはなんだこのバカイリ!!」

「……………はあ」

今日も今日とて、カイリとゲンリさんのくだらない喧嘩が始まった。

確か今日の原因は目玉焼きに何を掛けるのかについて……激しくどうでもいい。

ポケモン達は当然の如くあのアホ親子の事など無視し、ポケモンフーズを食べている。

「まったく……毎朝毎朝やかましい、エアロブラストで黙らせるか」

「家が壊れるのでやめてください」

「だがなカノン、お前はあんなくだらない子供の喧嘩を鬱陶しいとは思わないのか？」

ルギアの問いに、カノンは視線を逸らす。

どうやら彼女も内心ではルギアとそう変わらない心境らしい、当然だが。

〈おっとつと……わっ、きゃっ〉

「……………」

足に軽い衝撃、何事かと視線を下げてみると。

「ティナ、どうかしたの？」

へも、申し訳ありませんお父様。まだこの身体に慣れなくて

「仕方ないさ、ラルトスだったのは随分前なんだから」

そう言いながら、ティナを抱きかかえる。

——彼女は今、ラルトスに退化している

一体何故か、それは……はっきり言ってしまうと僕のせいだ。

僕が人間として生きる為に、アルセウスはディアルガとパルキアの力の一部、そしてティナの強大なサイコパワーを用いた。

つまり、今までコツコツと頑張ってきたサイコパワーの殆どを奪われてしまい——ラルトスになってしまったというわけである。

そりゃあもう初めはかなり驚いた、ティナなんか顔面蒼白になったくらいだ。まあ元々色白過ぎる顔だけだ。

しかし、慣れとは恐ろしいもので今では一刻も早くサーナイトに戻る為に彼女なりの努力を続けている。

だけど……まともに歩けないしサイコパワーも殆どない今では、おとなしくしてくれてくれた方が僕も嬉しいのだが……。

「おーい、レイジ」

よちよちと危なっかしい歩行を続けているティナを見ていたら、カグヤとシロナさんがいきなり入ってきた。

どうでもいいけど、2人とも人様の家にさも当たり前前みたいに入るのはどうかと思うよ。

それはさておき、何しに來たのだろう。

「ほら、行くよ」

そう言うやいなや、僕の腕を掴み引っ張っていくカグヤ。

「ちょ、カグヤ!？」

「いいから、黙ってついてくる!!」

抗議の声も彼女のの前では虚しく消え、ルギア達のぎゃーぎゃー喚く声を背中越しに聞きながら、ひたすら引っ張られていく。

一体何なんだー、という叫びでも出してみようかと思っていると……カグヤは急に立ち止まり近くの民家の壁に身を寄せまるで探偵の

ような行動に出た。

……あの、さっきからずっと置いてきぼりな僕はどうすれば？

「レイジくん、見つからないようにね」

僕達に追いついたシロナさんも、カグヤと同じように壁にへばりつき身を隠す。

……端から見ると、怪しくて仕方がない。

「あのー……」

「しっ！ 静かにして」

怒られた……。

文句の一つや二つや三つくらい言ってやろうか、割と本気でそんな事を考えつつ、彼女達のように身を隠して顔だけ出してみると……。

「あっ……」

僕達の視線の先には、カイリとヒメカとミカンの姿がある。

何をしているのだろう、なんだか雰囲気が少し変だ。

距離はさほど離れてはいないから、カイリ達の声はよく聞こえる。

「――それで、話って何だ？」

「大事な話なの。きつと驚くけど……ちゃんと聞いてね？」

「お、おお……」

ヒメカの言葉に含まれた重みに気づいたのか、少しだけ浮つきながらも頷きを返すカイリ。

すると、ミカンはさっそくカイリに話を切り出したのだが……。

「——カイリさんは、私とヒメカさんどちらが好きですか？」

はっきり言って、覗き見てる僕にとっても驚くような内容だった。

「えっ……」

「は……？」

「ちょっとレイジ、静かにしてってば」

「いやいやいや、何当たり前のように覗いてるのさ、こんな事ダメだよ」

「何言ってるの、友達の恋がどうなるのか気になるでしょ!？」

「……楽しみたいだけじゃないの？」

「ほらほら、わかったら静かにしててよ」

誤魔化したな、この子。

これじゃあデバガメじゃないか……というか、シロナさんまで何してるんですか。

「私、カグヤさんみたいにいつまでも待つなんてできない我が儘な女の子です。」

だから……聞かせてほしいんです、カイリさんの気持ちを。私とヒメカさん……どちらが大切かを」

「い、いや……その」

有無を言わせないミカンの迫力にすっかり吞まれてしまい、カイリはあからさまに困っている。

けれど、彼に逃げ道は存在しない、ここで答えを出すしかないようだ。

「今のカイリさんの気持ちでいいんです、私の事が好きでもなんでもないならはつきり仰ってくれても結構です。」

——お願いします。カイリさんと暫く会えなくなるから……どうしても知りたいんです」

「…………ミカン」

「……………」

やっぱり、こういうのはよくないんじゃないかな？

とは思うけど、いつの間にかカグヤとシロナさんに腕を掴まれてしまつてそれも叶わない。

……でも、カイリの答えはどうなんだろう。

なんだかんだ言いながらも、少しずつ僕も気になり始めていた。

当のカイリはというと、ミカンの言葉にすっかり混乱しており、言葉を発せないでいた。

しかし……その表情は真剣そのもの。

彼なりに、ミカンの問いに真剣に考えてあげている何よりの証拠だ。

ヒメカもミカンもカイリのそんな心中を理解しているから、何も言わずに彼の言葉を待っている。

そして僕達は……相も変わらず覗き見をしてる。

——どれだけの沈黙が流れただろうか

「……言うけど、怒らないか？」

少し遠慮がちに、カイリは口を開いた。

だが、なんとも首を捻るような発言である。

「えっ？」

「それ、どういう意味？」

「いや、その……言ったら2人とも怒る……というか、呆れるかもしれないから」

もごもごと小さな声で呟くカイリに、ヒメカ達だけでなく覗き見をしている僕達も首を傾げた。

一体何を言うつもりなのだろうか……？

「……怒りも呆れもしないから、言ってみなさいよ」

「お、おう……」

ヒメカにそう言われ安心したのか、カイリはようやく言葉を続ける。

だが……彼の言葉は、またも予想外なものだった。

「――2人とも、同じくらい、好きなんだ」

『えっ？』

2人の言葉が重なる。

だがそれも当然だ、僕達だって言葉の意味を理解できない――

「……なるほど」

「いいわね、その考え」

「……………」

——訂正、カグヤとシロナさんはわかったようです

いやもちろん僕だって意味を理解してないわけじゃないけど……。

カイリの答えは、ちよつと意外だった。

「ヒメカもミカンも……同じくらい好きだから、同じくらい大切だから……どちらかなんて、今は選べない。

——呆れるよな？ 2人は真剣に俺を想ってくれてんの……俺がこんなんでさ」

気まずそうに、すまなそうに、カイリは呟く。

……けれど、これがカイリの答えなのだから、恥じる必要などない
と思った。

答えを曖昧にせず、2人の想いを真剣に受け止めたが故の返事。

それをどうして、恥じる必要があるというのか。

だから——彼女達の出した答えは、僕の予想通りのものとなった。

「——じゃあ、仕方ないですね」

「そうね。仕方ないわ」

「えっ？」

「カイリさんが私とヒメカさん両方が好きなら……私達、3人でお付き合いをしましょう！」

「は………はあっ!？」

素っ頓狂な声を上げ、芸人顔負けの仰け反りリアクションを見せるカイリ。

うん、まあ……たしかに驚くよね、それは。

けど、結構理にかなっていたりするのだ、これが。

周りからすればちょっと特殊な関係になる、けれど……本人達がそれで幸せなら、別に構わないではないか。

「あら、わたし達みたいな美少女2人と付き合えるのよ? まさか……不満だなんて言うつもりじゃないでしょうね……?」

「そ、そんな事はねえけど……2人はそれでもいいのかよ?」

「わたし達から提案してるのよ? それなのに嫌なわけないじゃない?」

「カイリさんと交際できて、ヒメカさんとの友情もこのまま。良いこと尽くめじゃないですか」

「あー、まあ、うん……」

あ、カイリが懐柔されかけてる。彼は単純だからミカンとヒメカの話術の前では逆らう事はできないだろう。

そして、数分後……。

「――よし。じゃあ付き合うか」

単純カイリ、すっかり洗脳されてしまいました。

(いいのかな、こんなんで……)

とは思ったものの、3人の笑顔を見たらどうでもよくなった。

みんなが幸せならそれでいい、難しく考えるからダメなのだ。

――とまあ、カイリ達の方は上手く行ったみたいだけど

「……2人とも、その期待に満ち溢れた視線は何なのかな？」

どうやら、こちらも決めなくてはいけないみたいだ。

「いつまでも待つとは言ったけど、あんなの見せられたら……ねえ？」

「そうね。やっぱり答えを聞きたいというか……」

見せられたじゃなくて勝手に君達が覗いてただけじゃないか、とは雰囲気的に言えない。

……どうやら、言うまでここから逃がしてはくれないらしい。

はあ、仕方ない……言うしかないか。

「……僕もカイリと同じく、2人とも大事な人だ。だから……今はどちらかを選ぶ事はできない」

我ながらなんとも情けない答えだが、カグヤとシロナさんには予想できていたのか、特に変わった様子はなく。

「よし、じゃあこっちも3人で恋人同士になっちゃおう!!」

予想通りの展開が、待ち受けていた。

「シロナさんも、いいですね?」

「ええ。これが一番良い選択だと思うわ」

「……やれやれ」

「むっ、レイジは私達と恋人同士になるのは嫌なの?」

「そういうわけじゃないさ、だけど……これから大変そうだと思うて、ね」

「あら、言うじゃないレイジくん」

「言いますよ。だけど……楽しみでもあるから」

口元に笑みを浮かべつつ、そっと2人を自分の所に抱き寄せて。

——2人とも、僕を幸せにしてね。僕も2人を幸せにするから

耳元で、誓いの言葉を口にした。

「わぁ……」

「うっ……」

僕から離れた2人は、顔をほんのりと赤く染め、驚いた表情をこちらに向けていた。

「……レイジって、こんなキャラだったっけ？」

「さてね……色々あったから」

——そう、本当に色々あった

死すべき運命が変わり、生きる道を選ぶ事ができた。

だったら、この人生を悔いの残らないよう、自分に正直に生きよう
と思ったただけだ。

「それじゃあ2人とも、これからも宜しくね？」

「——うん!!」

「こちらこそ、宜しくねレイジくん!」

飛び込んでくる2人をしっかりと抱き留め、温もりを楽しむ。

と、視線を上げると、その先には呆れたような表情のカイリ達の姿が。

どうやら先程のやりとりで見つかってしまったらしい。

「お前等、覗き見した挙げ句に何ラブコメみたいな事やってんだよ……」

「いいじゃないか、そっちだって人の事言えないだろ?」

軽く言い返し、意識を2人に向ける。

……ああ、僕は今本当に幸せを感じられてる。

二度と得られないと思っていた幸せを掴む事ができて、涙が出そうになる。

しかしここで泣いたらまた心配を掛ける、それは止めておこう。

何せこの時間は、僕達の関係が新しいものに変わった瞬間なのだから。

……。

……………。

「それじゃあヒメカさん、抜け駆けはしないようにしてください。
それとカイリさん、毎日電話くださいね？」

「カグヤ、抜け駆けなんかしないようにね？
それとレイジくんは、毎日電話をするように」

「お、おう……」

「はいはい……」

まったく同じような事を言うミカンとシロナさんに、全員が苦笑。

だが仕方ない、今日はミカンはジョウトに、そして僕とカグヤはカントーに帰る日なのだから。

もうすぐ船が出る、すぐに行かなくては。

「それじゃあみんな、元気でね」

「お前もなレイジ、次に会ったらバトルしようぜ！！」

「もちろん、次は負けないよ」

固い握手をカイリと交わし、互いに笑みを浮かべ合う。

——船の汽笛が鳴った

「もう行くよ。……さよならは言わないから」

「当たり前だ。また近い内に会おうぜ!!」

「またね!!」

もう急がないと拙い、すぐさま全速力でカントー行きの船に乗る。

乗り込んで数秒後、船は少しずつ港から離れていくので、カグヤと2人、急いで甲板へ。

そこには、まだ手を振っているカイリ達の姿が。

「カイリ、ヒメカ、シロナさん、また会いましょう!!」

「じゃあねー!!」

だからこっちも負けじと手を振り返す。

……やがて船は加速していき、カイリ達の姿も見えなくなった。

「……………」

少しだけ、ほんの少しだけ寂しくなったけど……大丈夫だ。

きっとまた会える、そう約束したのだから。

「……………」

隣に立つカグヤも寂しそうに俯いているが、やがてパツと顔を上げたかと思えば――そこにはいつも通りの彼女が。

「レイジ、お腹空いたから早くごはんを食べに行こうよ!!」

「……………はいはい」

無理して明るく振る舞っているけど、彼女が凄く寂しがっている事くらいすぐにわかった。

けれど僕は何も言わない、だって言えば彼女は絶対に泣いてしまうから。

必死に我慢している彼女に余計な事は、絶対に言えない。

だから……僕はおとなしく彼女についていくだけにした。――旅は終わり、僕達は故郷に帰る

けれど、これで旅の何もかもが終わったわけではなく、きっといつまでも故郷でのんびりと暮らす事はできないだろう、主にカグヤが。

だから、そう遠くない未来で僕達は再び旅に出る。

でもそれまでは……ほんの少し、足を止めていよう。

——次は、どんな旅になるのだろう

未来は誰にもわからない、だからこそ生きるのが楽しい。

選定者としての僕はこの世から消え、人間の僕はこの世界に残る事は許された。

これからも僕は、沢山の仲間達と共に歩み続けるだろう。

——この、夢くも楽しい世界の中を

挨拶と連絡

えー、まずはここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。マイマイです。

これで処女作であるこの作品は終わり……にする予定だったのですが。

最終話にしなかったのでお気づきかもしれませんが、まだ続きます。

と言っても別の作品もやりたいので、やや不定期更新になります……バトルフロンティア編とかホウエン、シンオウ、イツシュとかやりたいなあと思ひまして……。

もちろんそれもまだ未定で、次はどんな作品にするかも決めてません、まあ間違いないくポケモン関係になるとは思いますが。

こんな作品を読んでくださった方々、感想を書いて応援してください。くださった方々、本当に感謝しております。

これから私の作品で少しでも楽しんでいただければ幸いです。ありがとうございます。

それでは、またいずれ。

2
0
1
1.
2.
1
2

バトルフロンティア編第1話　くフロンティアブレーンからの挑戦状！く（前書き）

今回から、バトルフロンティア編を始めます。

といってもあまり長くはしないつもりです、一話一話のページも少なくなると思います。

それでは、少しでも楽しんでいただけると幸いです。

バトルフロンティア編第1話　くフロンティアブレーンからの挑戦状！く

「……………平和だね」

〈そうですね…………〉

マサラタウンにあるオーキド研究所。

その中にあるポケモン達を放し飼いにしている裏庭で、僕とティナはのんびりと空を眺めていた。

〈ときにお父様〉

僕のお腹の上に寝転がったまま、ティナは口を開く。

「何？」

〈あの戦いから3ヶ月が経ちますが…………いつまでニートのままで居るんですか？〉

「ちょっと待て。僕はオーキド博士の研究を手伝ってるのにどうしてニート扱いなんだ？」

〈すみません、言い間違えました〉

嘘だ、絶対わざとだ。

ティナの奴…………だんだん口が悪くなってきたような気がする。お父さんは心配だよ…………。

へカグヤはハウエンリーグに出場する為に旅立ち、今ではもうバツジを5つも集めてますし、ヒメカもハウエンリーグに出るらしいですし、カイリもシンオウリーグに出場する事を決めました。

それなのにお父様はマサラタウンから出ようとせず、ニートに成り下がって……

「ティナ、もし本気で言ってるなら叩くよ?」

へ冗談です。ですが……旅はもうしないのですか?」

「……………」

ティナの言葉に、僕は思考に耽る。

……もちろん、旅に出ようと思わなかったわけじゃない。

でも、なんていうか……おかしい話ではあるが、どうも明確な目的が無い今では、やる気が出ないというか……。

へシロナとの約束を果たすというのでは、理由になりませんか?」

「……シロナさん」

いつか、大舞台で雌雄を決しよう。シロナさんと交わした約束。

確かに、それを果たすためにシンオウリーグ出場を目指すのも理由の一つになる。

けど……それも何かしつくり来ないというか……。

「まあ、お父様の望むままに行動すればいいと思いますよ。わたくしもみんなも、お父様の好きなようにしてほしいと願っていますから」

「ん、ありがとう」

「ですが！」

「……………」

「へい加減サーナイトに戻りたいです、こんなちんちりんボディのままでは我慢できません。それに不便です」

「あはは……」

「まあ、この3ヶ月トレーナーとバトルをしてないからなあ……」。

「おい、レイジ君！」

「オーキド博士……」

「起き上がると、手紙を持ったオーキド博士が近づいてきた。」

「どうしたんですか？」

「いや、実は君宛に手紙が届いてな」

「言いながら、僕に手紙を手渡すオーキド博士。」

誰からだろう、と思いつつ中身を開く。

『拝啓、レイジ様。』

こんにちはレイジさん、突然ですがわたしは誰でしょう？』

「……………」

なんだこれ？

手紙……というか、人をおちよくった文章じゃないのか？

速攻で破り捨ててやりたいと思ったが、我慢して続きを読む。

『ブブー、時間切れですネ！！　こんな簡単な問題もわからないなんてまだまだですネ』

「……………」

「レイジ君！？　まだ全部読んでおらんのに破るのはダメじゃ！！」

ちっ……オーキド博士、邪魔しないでくださいよ。

仕方なく、続きを読む事に。

『正解はフロンティアブレーンであり、ルーレットゴッドスのダリアでした。はじめまして！！』

「フロンティアブレーン！？」

な、なんでフロンティアブレーンから僕宛に手紙が……？

『お噂はかねがね聞いてますよレイジサン、とても優秀なトレーナーだということで、突然ですがアナタに挑戦したいと思って手紙を送りました。』

ちなみに、アナタの家はゲンリさんから聞きましたネ』

ゲンリさん……人の住所を他人にホイホイ教えないでくださいよ！！

『もしアナタがこの挑戦を受けてくれるのであれば、手紙と一緒に入ってるフロンティアパスを持って、ジョウトのバトルフロンティアに来てくださいネ。』

——ダリアより、愛を込めて（笑）』

「……フロンティアブレーンって、普通じゃない人しかいないのかな？」

「レイジ君、それは失礼じゃよ……しかし、このフロンティアパスは本物じゃな。すなわちこの手紙は間違いなくフロンティアブレーンからのものじゃ」

「このフロンティアパスって何なんですか？」

形はバトルフロンティアの建物が描かれた長方形の小さなカード状の物体、トレーナーカードによく似ている。

「これはいつでもフロンティアブレーンに挑戦する権利を持つトレーナーに与えられるパスじゃ、これを持っているトレーナーは少な

いんじゃないよ」

「へえ……」

オーキド博士の説明に、つい感嘆の声を出してしまう。

つまり、このフロンティアパスをもらえるという事は、トレーナーにとってかなり名誉な事なのだろう。

「いい機会じゃ、行ってきたらどうか？ それに……ティナは行きたがっておるしな」

「……………」

瞳を輝かせているティナ、口には出さないが「連れてけ」オーラが身体中から発せられている。

……でも、オーキド博士の言う通りバトルフロンティアに挑戦するのも良いかもしれない。

旅の目的が見つけれられない今の僕にとって、この挑戦は何かのきっかけを与えてくれるかもしれないし。

「——わかりました。それじゃあバトルフロンティアに行ってきたま
す」

「うむ。レイジ君達のポケモン達のコンディションは絶好調じゃ、
今研究所から連れてきてやるぞ」

言うやいなや、オーキド博士は研究所へと向かって走っていったし

まった。

……元氣だな。

へお父様、ルギアはどうするのですか？

「あー……」

そういえば忘れてた、ルギアは今ここには居ないんだった。

というのも、ルギアは今帰郷中なのだ。研究所生活に飽き飽きしてしまっただけ、今頃は海を呑気に泳いでいる事だろう。

「……ルギアには悪いけど、今回はしょうがないね」

へそうですね。もしこれを知ったら怒り狂うかもしれません

「あはは……」

どうかバトルフロンティアの挑戦が終わるまで、ルギアが帰ってきませんように。

乾いた笑みを浮かべながら、僕は心の中でそう願ったのだった。

……。

「それじゃあオーキド博士、おじさん、おばさん、行ってきます」

リオンの背中に乗りながら、見送りをしてくれる博士達に声を掛けた。

「うむ、頑張ってな」

「お土産よろしくね？」

「どうせなら、バトルフロンティアを制覇してくるといい」

「あはは……まあ、考えときます」

おじさんってば、簡単に言ってくれるよなあ。

フロンティアブレーンはある意味四天王やチャンピオンに負けないくらい強いって話なのに、そう簡単に制覇なんかできるわけじゃないか。

けど、それもなんだか面白そうだなと思いつつ、僕はポケモン達と共に旅立つ。

旅と言える程のものじゃないけど、バトルフロンティア……楽しみだ。

ダリアさんって、どんな人なんだろう……あの手紙で愉快な人だという認識はあるが。

バトルフロンティアで何が待っているのか、少しだけワクワクしながら僕はマサラタウンを離れていく。

よし、頑張るぞ!!

バトルフロンティア編第2話 ㄱルーレットゴッデス、ダリア登場! ㄱ(前妻

バトルフロンティアに向かう僕達。

さてと、ルーレットゴッデスのダリアさんはどこに居るのかな……。

バトルフロンティア編第2話　くルールットゴッデス、ダリア登場!!く

へ——お父様、バトルフロンティアが見えてきましたよ!く

「やっとか……」

出発して数時間、やっぱり休みなしで行くのはなかなか大変だ。

「リオン、もう少し頑張って」

こくりと頷き、少しだけ高度を下げるリオン。

そして、バトルフロンティアの入り口に降り立った。

「お疲れ様リオン、ゆっくり休んでね」

リオンをボールに戻し、中に入る。

へわぁ……く

「へえ……」

すると、僕もティナも中を見ておもわずそんな声を漏らした。

——中は僕達が予想していたより広かった

周りを囲むように五つのバトル施設が建てられ、中心付近はまるで
お祭りのように人で賑わっている。

もつと殺風景なものを予想していたけど、これじゃあまるで街だな。

「へここにはトレーナーはもちろん、観戦するために毎日凄い数の一般人が来るみたいです。」

「ですから、飲食店などの商業施設も多く一種のテーマパークになっているみたいです。」

「どこに持っていたのか、バトルフロンティアのガイドブックを読みながら、ティナが説明をしてくれた。」

「なる程、つまりここは毎日ポケモンリーグが開かれてるようなものなのか。」

「へそれで、まずはどうするのですか？ このまま真っ直ぐフロンティアブレインの所に行くのもいいですが……せっかくですし、まずはこのガイドブックに従って美味しいものでも食べていきませんか？」

「そうだね……」

「いつ来いという指定もないし、ティナの言う通りにするのもいいかもしれない。小腹も空いてきたし。」

「……うん。それじゃあ案内してくれる？」

「へお任せください！！ とりあえず甘いものを……いやいや、ガッツリと行くのも悪くありませんね……」

「はは……」

肩の上であーだこーだと忙しなく表情を変えるティナに苦笑する。

活き活きしてるなあ……これだけでも、来て良かったかも。

「こんにちはー」

「わっ……」

いきなり後ろから肩を叩かれ挨拶された。

何事かと思い、後ろへと振り向くと……。

「ハ―イ、本日はお日柄も良くですね！」

にこやかな笑顔で、よくわからん事を言われてしまった。

……この人、誰だ？

挨拶、になるのか微妙な事を言ってきたのは、長身の女性。

浅黒い肌に、長く綺麗な黒髪には球状の髪飾りが沢山付いている。

スレンダーな体型の美女だ、きっと普通の男性なら見とれてしまうだろう。

「アナタ、バトルフロンティアに来たのは初めてですか？」

「え、ええ……そうですね」

「そーですか、ではダ……わ、わたしが案内してあげるネ」

「えっ、いや、別にいいで——」

「では、早速行きましょうネ!」

「うわっ!?!」

いいです、そう言う前に女性は強引に僕の腕を掴みズンズンと進んでいく。

へな、なんて強引な女なのでしょう……

たしかに……。

「さあ、どうぞ」

「はあ……」

謎の女性に無理矢理連れてこられたのは、お洒落な雰囲気の小料理屋。

ウェイトレスさんに案内され、外のテラスにある席へと座らされた。

「何を食べる? このオススメは……」

「あの……僕、用事があるんですけど」

別に急ぐ必要はない、しかし……この人から逃げたいが故にそう告

げた。

嘘は言っていない、だから僕は何も悪い事はしてないしね。

「あら……そう」

よし、あとは急いでこの場を……。

「でも、待ち人もそんな急いでないから大丈夫。だから気にしなくてもいいネ」

と思ったら、見事に切り返され作戦は失敗に終わる。

この人は……どこまで強引なんだ。

「……………あれ？」

しかし、女性の言葉にある違和感がある事に気が付いた。

……何で、僕が人を待たせてる事を知ってるんだ？

そんな僕を見ながら、女性はにこやかな笑みを浮かべ。

「ようこそバトルフロンティアへ、レイジさん」

「えっ……？」

へ何故、お父様の名前を知っているのですか？

警戒心を剥き出しにしたティナの声が響く。

しかし、女性はそんなティナを安心させるように両手を振った。

「知ってて当然ヨ、だってレイジさんに手紙を出したのはダリアだから」

「……………えっ？」

今、ダリアって……。

僕の顔を見て、彼女は満足そうに笑い。

「バトルルーレットを管理するルーレットゴッデス、ダリアといいます。よろしくネ」

爽やかな口調で、そういえばしてなかった自己紹介をしてきたのだった。

「あなたが……フロンティアブレーン……」

「ハイ、ダリアですネ」

へ……そうならそうと早く言ってくださいよ、おもわずかみなりパンチで殴ろうとしてしまいましたよ」

「ホワット!?!」

「ティナ、さりとて恐い事を言わないで……」

へすみません、ですがあなたも人が悪いような行動をするのにも原

因がありますからね」

「そうネ……ごめんなさい、レイジさん」

「いえ、別に謝る事じゃないですよ」

まあ、ちょっと驚いただけで怒ったわけでもないから当たり前だが。

「でもダリアさん、どうしていきなり僕に挑戦状なんか……」

そこまで言い掛け、ダリアさんに手で言葉を制されてしまった。

「まあまあ、それより先に何か頼まない？」

実はダリア、お腹が空いてしまってるのネ」

「は、はあ……」

……。

で。

とりあえず注文をして、料理が運ばれてきてから話を続ける事に。

ティナにはポケモンフーズを、僕はコーヒーとフレンチトースト。

そしてダリアさんは……ナポリタンにマルゲリータにティラミス。

……凄い細身なのに、意外と食べる人だとわかり少し驚いた。

「それで、どうしてレイジさんにいきなり挑戦状を叩きつけたのか
というと、ゲンリさんとの会話でレイジさんに興味を持ったからネ」

「ゲンリさんと？」

「ゲンリさんはフロンティアブレンになれる程の実力者だから、
ダリア達フロンティアブレンと交流があるの。」

それでこの間、ゲンリさんとは愛ない会話をしていた時に、レイ
ジさんの事を聞いて興味が湧いたというわけネ」

「……ちなみに、ゲンリさんは僕の事をなんて言っていました？」

「そうですね……」「一番チャンピオンに近いトレーナー」だと」

「……………」

ゲンリさん、僕の事を大袈裟に言わないでください……。

「そんな事ない、そう言いたげネ？」

「ええ、まあ……………」

「ふうん……………」

「……………?」

何か言いたげな、不思議な表情。

すると——ダリアさんは急に先程までの人懐っこい雰囲気を消し、口を開いた。

「ゲンリさんは強い、そんな彼が強いと言ったあなたはきっと強いでしょう。」

でも……ダリアは言葉だけでは信用できない、だから——本当にあなたが強いのか、お試しバトルをしてほしいネ」

有無を言わせない口調に、おもわず背筋が震えてしまった。

……つまり、まだ僕とは本気でバトルする器かどうか決めあぐねているということか。

〈挑戦状を叩きつけておきながら、随分と勝手な物言いですね〉

「ダリアにも、フロンティアブレインとしての意地やプライドがあるネ。

勝手な物言いだとは充分に把握してるけど、これは譲れないヨ」

皮肉めいたティナの言葉にも、真っ向から反論するダリアさん。

……なる程、気に入った。

「いいですよダリアさん、やりましょう」

〈お父様……〉

「ダリアさんの気持ちはなんとなくわかるよ、僕だって今まで歩ん

できた道に対して意地やプライドを持ってる。

——なら、バトルして僕と僕のポケモン達の実力を、見せつけられ
ばいいだけだ」

だから、ダリアさんの提案は僕としても非常に好ましい。

「……そっか、うん。ならすぐバトルしよっ！」

にこやかに笑い、席を立つダリアさん。

が、すぐさま座り込んでしまった。

そして、ぼつが悪そうに苦笑しながら。

「——その前に、ごはん食べてもいい？」

そう言って、おずおずと食事を再開した。

へ……かつこ悪い

ティナ、そういう事は思っても言うものじゃないの。

………やれやれだ。

バトルフロンティア編第3話　　くフロンティアバトル、3対3!!く　　(前書き)

フロンティアブレーンのダリアさんと出会う事ができた僕達、けれど彼女は僕が本気で戦えるトレーナーかどうか疑わしいらしい。

まあ、それも当然かな。

だから、実力を見せる為にお試しバトルをする事になった。

バトルフロンティア編第3話　　フロンティアバトル、3対3!!　　

「――それじゃあレイジさん、早速始めるネ!」

バトルフロンティアとアサギシティを繋ぐ40番水道。

そこにある砂浜の上で、僕とダリアさんは対峙していた。

「使用ポケモンは三体、どちらかのポケモンが全て戦闘不能になった時点で終了。」

交代は、レイジさんのみOKネ!!」

「わかりました!!」

へまったく……なめられたものですね

「――さて、ね」

お試しバトル、ダリアさんはそう言った。

けれど彼女の瞳は、あきらかにお試しなどというものではない。

あれは――そんな手軽なものじゃないんだ。

「ではダリアから出させてもらうネ

――GO、ルンパッパ!!」

「ルンパルンパ♪」

踊りながら登場するのは、ルンパッパ。

……なら、こっちはこの子を出す!!

「ソウル、お願い!!」

「……………」

ルンパッパとは対照的に、静かに現れるソウル。

彼女はバトルに関しては生真面目だから、自分の役割を果たす事しか考えてないのだ。

「アブソル……なるほどなるほど、やはりポケモンリーグでのメンバーですネ」

「ええ。今の僕が最高だと思えるメンバーですから」

「OK OK、ポケモンを心から信頼しているのがよくわかるネ。
——先攻は、そちらからでいいヨ」

「————」

バトルに集中しろ。

相手はフロンティアブレーン、あのワタルさんやシロナさんにだってひけはとらない実力者だ。

一度深呼吸をし、精神を集中させる。

そして――バトルは開始された。「ソウル、10まんボルトだ!!」

「――っ」

キツとルンパッパを睨み上げながら、黄色い電撃をルンパッパに向けて放つソウル。

「ルンパッパ、かわしてハイドロポンプ!!」

「ルンパッ!」

10まんボルトはルンパッパに回避され、地面の砂を僅かに舞い上がらせるのみ。

それと同時に、ルンパッパの口から勢いよくハイドロポンプが撃ち放たれた。

「シ――!!」

しかしそんなものは当たらない、すぐさまハイドロポンプを回避してルンパッパとの間合いを詰める。

「シャドークロー!!」

「――っ!!」

「ルンパー!?!」

黒く変化した爪で吹き飛ばし、ルンパッパは地面を滑っていく。

「かえんほうしゃ!!」

そこに、追撃のかえんほうしゃを浴びせ、ルンパッパに確実にダメージを与えていった。

「ルンパッ……」

致命傷、にはまだ遠いものの、決して少くないダメージはルンパッパの様子を見ればすぐにわかる。

「なかなか……そうでなくっちゃ面白くないネ!

ルンパッパ、つるぎのまい!!」

「ルンパッ♪」

楽しそうに舞を踊るルンパッパ、攻撃力を上げるつもりか……!!

「ソウル、ふぶき!!」

そうはさせまいと、特大のふぶきをルンパッパに放つ。

だが——その指示は軽率だった。

「かわしてドレインパンチ!!」

「えっ!?!」

「——ルンパッ!!」

間一髪でふぶきを回避するルンパッパ、しかしソウルは技を放った

ばかりで動けない。

「ルンルン〜パッ!」

「ガッ——!?!」

つるぎのまいによって大幅に攻撃力を上げたドレインパンチが、ソウルの身体に深々と突き刺さった。

柔らかい砂の上を転がっていくソウル。

「グ、ウ……」

立ち上がるが、弱点を突かれたせいかわりに苦しそうに息をしている。

まさかドレインパンチを使えるなんて……やっぱり強い!!

「ルンパルンパ〜♪」

ドレインパンチによって体力を回復したルンパッパは、再び楽しそうに踊り出した。

「おちよくってますねあの態度……!! お父様、こうなったらわたくしが——」

「ソウル、続けるよ」

こくりと頷くソウル、まだ彼女の戦意は少しも衰えてはいない。

「お父様……」

「ソウルはまだ戦えるんだ、なら……諦めるわけにはいかないよ」

「その意気ネ、もっともっとダリアを楽しませてヨ!!」

「楽しむだけで済めばいいですけどね。」

「ソウル、あくのはどう!!」

ルンパッパを睨むソウル、その瞬間黒い波紋が彼女の周りから発生する。

「ジャンプしてから、もう一度ドレインパンチ」

「ルンパッ!」

正面から向かってくるあくのはどうを跳んで回避し、右手を握り締めソウルに向かっていくルンパッパ。

ダリアさん、今度はそっちが軽率な事をしましたね。

「ソウル、ルンパッパより高く跳び上がるんだ!!」

「——っ」

脚に充分過ぎる程の力を込め、全力で跳び上がるソウル。

「ホワット!?!」

「ルンパ!?!」

それは軽々とルンパッパを飛び越え、そして――

「今だソウル、ギガインパクト!!」

「――ゾルウウアアアッ!!!」

雄叫びを上げ、全身を強大なエネルギーで包み込み、ルンパッパに突撃するソウル。

「ルンパ―ッ!!?」

空中ではルンパッパも避ける事などできず、まともにギガインパクトの一撃を受け、砂の中に埋もれてしまった。

「……ルンパ……」

ルンパッパは動かない、すなわち戦闘不能だ。

「……ルンパッパ、いいバトルだったネ」

「ソウルお疲れ様、一度戻るんだ」

ギガインパクトの反動もある、そう思いソウルをボールに戻した。

「さすがレイジさん、いいバトルをしてくれるネ」

「このまま、倒させてもらいます!!」

「フフッ――GO、チャーム!!」

「――チャー、レム」

二体目はチャーレム……ならこっちは!!

「リオン、お願い!!」

「グオオオンッ!!」

登場と同時に口から炎を吐くりオン、どうやらやる気充分のようだ。

「リオン、かえんほうしゃ!!」

「チャーレム、ねこだまし!!」

「チャッ!!」

炎を吐く前に、チャーレムはリオンの眼前に現れ、両手をパンツと勢いよく合わせる。

「グウッ!?!」

それに驚き、リオンは攻撃を中断させてしまった。

「しねんのずつき!!」

「チャー…レムッ!!」

「グオアッ!?!」

白く淡い光に包まれた頭部を、リオンにぶつけるチャーレム。

しかし、まだ相手の攻撃は終わらない――！

「とびひざげり！！」

「チャッ！！ チャーレムウ！！！！」

すかさずリオンの頭を両手で掴み、そのまま顔面にとびひざげりを叩き込むチャーレム。

「かみなりパンチ！！」

「チャーレムウッ！！」

「グアアアッ！！？」

全身を雷で包みながら、雄叫びを上げるリオン。

どうにか耐えたものの、全身から巻き上がる煙が痛々しかった。

「チャーレム、続けてきあいパンチ！！」

「チャーッ！！」

チャーレムが迫る！！

――こうなったら、一か八かだ！！

「リオン、ドラゴンクロードで受け止めるんだ！！」

「――グルウアッ！」

エメラルド色に輝く爪で、リオンはチャーレムのきあいパンチを真っ向から受け止める。

寸分の狂いもない、見事なタイミングだ。

「チャッ!？」

「チャーレム――」

ダリアさんがすぐに指示を出そうとするが、もう遅い!!

「リオン、そのままチャーレムをほのおのパンチで上に殴り上げて
!!」

「グオオアッ!!」

左手を握り締め、スカイアッパーのようにほのおのパンチを振り上げ、チャーレムを上空に吹き飛ばす。

「今だリオン、『メテオドライブ!!』」

僕の指示と同時に、翼を羽ばたかせ上空へと飛翔するリオン。

「チャーレム、かわらわり!!」

「チャーッ!!」

しかしダリアさんとチャーレムだつて負けた訳じゃない、空中でバランスを戻し両腕を振り上げかわらわりの体勢に入る。

だが――その動きは想定内だ。

「ねっぷう!!」

「グオアアアッ!!」

熱エネルギーを翼に込めて、チャーレムに向けて大きく羽ばたかせる。

すると、炎の風が落ちてくるチャーレムを更に上空へ投げ出した。

「チャアアアッ!!」

再びバランスを崩され、チャーレムはすっかり混乱している。

そのチャーレムの上を取り、リオンは次の攻撃へと移っていた。

「グオアッ!!」

「チャーッ!!」

踏みつけるようなブレイズキックが、チャーレムを再び地面に落とすしていく。

すかさず自身も落下し、瞬時に追いついたチャーレムの脚を掴み一回転してからその勢いもプラスして地面に叩きつける!

ここまでは『メテオフォール』、でもまだ攻撃は終わらない。

「グオオオオツ！！！」

雄叫びを上げ、リオンの身体に凄まじい勢いの炎が纏わりついていく。

そう——『メテオドライブ』は、『メテオフォール』の後にフレアドライブを叩き込むリオンの新必殺技だ——！

爆音が響き、砂が空高く舞い散っていく。

フレアドライブのパワーを物語るものであり、また同時に——

「……チャ……」

同時に、チャーレムとのバトルが終わった証にもなった。

「……チャーレム」

「リオン、その調子だよ」

得意げに頷くリオン、けれど少しだけ苦しそうだ。

無理もない、『メテオフォール』だけでなくフレアドライブまで使ったのだ、疲労が無いと言えば嘘になる。

でも、リオンはまだ戦いたがっているので、交代はしない事にした。

「……よもや、ここまでとは思わなかったヨ」

「……………」

「――GO、ヨノワール!!」

最後はヨノワール……。

……ヨノワール？

「ヨノワール、トリックルーム――」

「リオン、ねっぷう！」

「グオオッ!!」

ヨノワールが技を繰り出す前に、広範囲に展開したねっぷうが動きを中断させる。

「トリックルームなら使わせませんよ。リオン、りゅうのいぶき!!」

「グオオアアッ!!」

「ヨノーツ!!?」

ねっぷうにより怯んでいるうちに、りゅうのいぶきを叩き込む。

――ヨノワールは動きが遅いポケモンだ

だから、トリックルームで素早くする戦法があると聞いたことがあ

ったけど……どうやら、ダリアさんも同じ戦法を使う人だったみたいだ。

「……なる程、ヨノワールの弱点とその対策法もきちんと持ち合わせているというわけネ。

ヨノワール、シャドーパンチ!!」

「ヨノワーツ!!」

両腕をリオンに向けるヨノワール、すると暗い灰色の拳が飛んでくる。

だが、慌てて指示を出す事はしない。何故ならこれはフェイクだからだ。

シャドーパンチを囷にして、トリックルームを使用する気だ。そうでもしなければリオンのスピードにヨノワールが追いつく事はできない。

——だから、最大パワーで技ごとヨノワールを倒す

「リオン、ブースターレベル3だ!!」

「——グオオオアアアアアッ!!!!」

このバトルで一番大きな雄叫び。

それに呼応するように、リオンの身体がマグマのように赤く染め上がっていく。

「ホワット!?!」

「ヨノッ!?!」

ダリアさんもヨノワールも異変に気づいた、けどもう遅い――!

「リオン、フルパワーでブラストバーン!?!」

「――グワアアアオオオンッ!?!」

灼熱のマグマすら霞む、本気でそう思えるような炎が放たれ――ヨノワールを瞬時に包み込む。

「ヨノオオオッ!?!」

「ヨノワール!?!」

――ほのおタイプの究極技、ブラストバーン

更にオーバードライブ・ブースターも最大出力で展開した、それをまともに受けて……立てるポケモンは存在しない。

「……ヨノ……」

ヨノワールは倒れ、これでダリアさんのポケモンは全て戦闘不能だ。

それはすなわち、このバトルが終わった事を意味している、なによりの証だった……。

……。

静寂が、辺りを包む。

ダリアさんは、信じられないような表情でただ僕を見つめるばかり。

へ——お父様とわたくし達の実力、ようやくわかったようですね

妙にすっきりした表情でティナはそう言い放つ、なんだかどんどん性格が悪くなっていったような……。

「——そうですネ、ダリアは勘違いをしていたようです」

ティナの将来を心配していると、フツと笑いながらダリアさんはそう呟いた。

「レイジさん、ダリアが愚かでした。

あなたの力量を読めなかった、侮辱するような態度をとってゴメンナサイ……」

深々と頭を下げるダリアさん。

まいったな……別に僕はちっとも気にしてないのに。

「ダリアさん、気にしないでください。

それより、僕ならダリアさんを本気にさせる事ができますか？」

「それはもちろん。あなたならダリアに最高でハッピーなバトルをしてくれるネ!!!」

満面の笑みでそう言われ、僕も自然と笑みを返す。

「ではレイジさん、二時間後にバトルルーレットに来てください!」

「えっ、二時間後に?」

「ダリアにも色々と準備があるから、必ず二時間後に来てネ!!!」

約束ヨ、そう言うやいなやさっさとバトルフロンティアに向かって走り去っていくダリアさん。

……何なんだ?

へ……本当に強引な女ですね

さすがのティナも、呆れしか見せられない。

「でもちようどいいさ、ソウル達を回復してやりたいし、メンバーも決めなきゃいけないしね」

へ……お父様は、今回わたくし以外のメンバーで戦うおつもりですか?」

「——いや。次のバトルは正真正銘の本気だ。
だったら、君を出さないわけにはいかないよ」

サーナイトの時のようなサイコパワーはさすがにない、しかしサイコセイバーが使えるまでの力を取り戻している。

彼女は僕にとって最大のパートナーだ、ならばバトルで入れない道理はない。

へ……お父様、必ず勝ちましょうね」

「ああ、もちろんさ」

ダリアさん相手に、恥ずかしくないバトルをする。

その胸の内で決意を固めながら、僕はティナを連れてバトルフロンティアへと戻っていった。

バトルフロンティア編第4話　くバトルルーレット、死闘の始まり!!　く（前巻

お試しバトルで、ダリアさんに認められた。

次はいよいよ、バトルルーレットでの全力バトルだ。

負けないぞ、ポケモン達と一緒に必ず勝利してみせる!!

バトルフロンティア編第4話　バトルルーレット、死闘の始まり!!

「――二時間経ったけど、そろそろいいかな？」

ポケモンセンターで回復を終え、特にする事もないのでみんなのコンディションを整えていると、あっという間に二時間という時間が過ぎた。

へお父様、それでダリアとバトルするメンバーは決めたのですか？

「決めたよ、まず一体目はティナ。君だ」

へわたくしですか……しかし、パワーを考えるとリオン達の方が優れているのでは？

「いや、ティナはパワーよりテクニックで戦ってくれればいいよ。そして二体目は……ヒカリ、君だ」

「ピカピカーッ!!」

「そして最後は……アクセル、君だ」

へぼ、僕ですか？

「？　アクセル、どうかした？」

へいえ……リオンの方が適任かと思いましたから

「そんな事ないよ。アクセルのパワーとスピードを、ダリアさんに

見せつけないとね」

それに、リオンとソウルの手の内は先程のバトルで見切られてる、なるべく違うポケモンで戦う事にしよう。

へでは、わたくしとヒカリ、そしてアクセルの三体でバトルですね」

「うん。リオン、ソウル、悪いけど今回は我慢してくれる？」

僕の言葉に、気にするなと頷くリオンとソウル。

「よし、みんな。バトルルーレットに行こう！」

みんなをボールに戻し、ティナを肩に乗せて僕はポケモンセンターを後にした。

さて……どこまで戦えるかな。

……。

「――待ってたヨ、レイジさん！」

バトルルーレットの建物に入ると、周りの人に注目されながら、ダリアさんが仁王立ちで僕を待っていた。

って、もしかしてずっとその格好で待っていたんですか？

「お待たせしてごめんなさい、準備に時間が掛かりまして」

「準備って、何をしてたんですか？」

「フツ……ダリア達のバトルを最高に盛り上げる為の準備ネ。
とりあえず、ついてきてヨ」

「はあ……」

なんだかよくわからないが、おとなしくダリアさんについていく事に。

……しかし、周りの視線が。

へお父様、いい加減注目される事に慣れた方がいいですよ

「けどさあ……」

へお父様を慕うトレーナーは多いのです、御自分が有名人だという自覚を持たなくては、お父様に憧れている人達に失礼ですよ

「むう……」

「ティナの言う通りネ、謙遜も大事だけど今まで培ってきた自分とポケモン達の道のりは決して平坦ではなかったはず。

なら、その道に誇りがあるなら謙遜する必要は決していないネ。も
っと自信を持って、胸を張らないとカッコ悪いヨ」

「誇り、か……」

確かに、僕と僕のポケモン達の道は平坦なんかじゃなかった。

その道に、誇りが無いと言えば嘘になる。

……胸を張れ、か。

「――わかりました。僕もダリアさんを見習って少し自信を持って振る舞います」

「そうそう。それに……そうやって自信を持った顔立ちは、とても素敵だよレイジさん！」

「あはは……」

「……お父様、カグヤとシロナが居るんですから、浮気はダメですよ」

「ちよ、ばっ、何言ってるのさ!!」

別に、そういうわけじゃないんだけど……!!

「フッフ、さあ行きましょう!!」

「は、はい……」

でも……入口とは違う通路を歩くのは何故？

そんな事を考えながらついていくと、そこはチャレンジャーではなくフロンティアブレーン専用の入口。

「レイジさんは、ここからフィールドに入ってネ」

「どうしてですか？」

「舞台を盛り上げる為に決まってるヨ、それじゃあダリアの合図で入ってきてネ！！」

言うやいなや、入口を通りバトルフィールドへと向かっていくダリアさん。

そして、中からは物凄い歓声が巻き起こって……って、歓声！？

「まさか……」

恐る恐る、中を覗き込んでみると……。

「うわ……」

バトルルーレットの中は、数え切れない程の観客で賑わっていた。

……ダリアさんが言っていた「準備」とは、お客を集める事だったらしい。

「ダリアは一流のエンターテイナーですから、お父様との本気のバトルを沢山の人に見てもらいたいと思っているようですね」

「これじゃあまるでチャンピオンリーグの時みたいだ……」

嫌だなあ、これじゃあまた目立つちゃうよ……。

『その道に誇りがあるなら謙遜する必要は決してないネ。もっと自信を持って、胸を張らないとカッコ悪いヨ』

「……………」

そうだった、こんなんじゃカッコ悪いよな。

「皆さーん、今回はこのバトルルーレットにお集まりいただき、本当にありがとうネ!!」

マイクを片手に、観客席に向かって挨拶するダリアさん。

そんな彼女に、観客の方からは凄まじいまでの拍手喝采が響き渡る。

「今日は、フロンティアブレーンのダリア自らが挑戦を望んだチャレンジとの特別バトルになるヨ!!」

みなも前回開催されたセキエイ大会のチャンピオンリーグは観てたよネ? そこでチャンピオンワタルと互角以上に戦ったトレーナー、それがダリアが挑戦状を送った人だヨ!!」

ダリアさんの言葉に、周りからはどよめきと更に歓声が大きくなる。

……ダリアさん、本当に場を盛り上げるのが上手いですね。

へおや? もっとげんなりした顔になると思いましたが、妙にす

つきりしてるというか……いい顔ですね」

「……どんなに否定しても、僕は有名人として見られてしまうみたいだからね。」

それに、僕だってダリアさんと同じくらい自分のトレーナーとしての力にプライドと自身があるから、そう言われて誇りに思う事はあっても、迷惑に思うことは間違いだってようやく気づいた」

「……お父様、前より凛々しくなりましたよ」

ありがと、そう返しながら暫し歓声に耳に傾けた。

「さあ、それでは登場して貰いましょう!!」

本日のチャレンジャー、マサラタウンのレイジさんネ!!」

〈お父様〉

「ああ、それじゃあいくよティナ!!」

静かに、けれどしっかりとした足取りで、僕とティナはバトルフィールドへと向かう。

——響く歓声

観客の誰もが、僕達の登場を歓迎しているというのがわかり……恥ずかしいと思う反面、胸に嬉しさが溢れていく。

ああ、そうだ……自分の歩んできた努力が認められているような。

この舞台に立つに相応しいと言ってくれているような気がして、僕

は嬉しいのだ。

「——いい顔。本当にいい顔ネ」

「だとすると、それはダリアさんのおかげです」

「ホワイ？」

「わからなくてもいいんです、今は……誰もが羨ましがるような、最高にハッピーなバトルをやりましょう！！」

ただのポケモントレーナーとして、史上最高と呼べるようなバトルをする事だけ。

相手はルーレットゴッデス、不足なんかあるわけがない。

僕の言葉に、ダリアさんは一瞬ポカンとした表情を浮かべたが。

「——はい。このフロンティアブレーン、ルーレットゴッデスであるダリアが、最高にハッピーなバトルを約束しましょう！！」

満面の笑みを浮かべ、バトルフィールドへと降り立った。

——僕も、対峙するように反対側へと立った

「それでは、フロンティアブレーンであるルーレットゴッデス、ダリアとチャレンジャーのレイジによるポケモンバトルを始める！！
使用ポケモンは三体、ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ認められます！！

それでは、ルーレットを——」

「今回はルーレットは回さないヨ!!」

「えっ……?」

「今回のバトルは特別、ただのトレーナーとしてのバトルだから、ルーレットは回さないネ。

レイジさん、あなたもいいでショ?」

「もちろんです!!」

互いに一体目のポケモンが入ったボールを取り出す。

「ダリアのポケモンはこの子ネ。

——GO、バシャーモ!!」

「——バシャーモ!!」

力強く登場したのは、バシャーモ。

っ、さっきのポケモンも凄かったけど……このバシャーモの迫力はそれ以上だ……!!

これが、ダリアさんの本気か……。

けど僕だって、負けるつもりは毛頭ない!!

「ティナ、お願い!!」

へはい、お父様!!」

肩からジャンプし、フィールドに降り立つティナ。

バシャーモとティナ、端から見ると体格差がありすぎるけど……バトルはそれだけで決まる訳じゃない。

「なる程……レイジさんにとって、そのラルトスが一番のパートナーというわけネ！」

「小さいからと思って油断していると、倒しちゃいますよ？」

「――シャモー！」

「全力で叩く、ですか……そうでなくては、戦う意味がありませんからね！！」
「そ、それでは先攻はレイジ選手からです。」

バトルスタート！！」

「ダリアさん、全力で戦います！！」

「もちろんネ、レイジさん！！」

「ティナ、サイコセイバーだ！！」

「はいっ！！」

「バシャーモ、ブレイズキック！！」

「シャモーツ！！」

光の剣と炎の蹴り、どちらも一步も譲らない一撃がぶつかり合う。

負けるもんか……絶対に負けないぞ!!

バトルフロンティア編第5話 全力全開のルーレットゴッデス、VSダリアー

遂に始まった、本気状態のルーレットゴッデスのバトル。

僕はティナを、そしてダリアさんはバシヤーモを繰り出し、互いに最初の一撃を放った。

この勝負……負けられない！！

バトルフロンティア編第5話 全力全開のルーレットゴッデス、VSダリアー

「ティナ、サイコセイバーだ!!」

「バシャーモ、ブレイズキック!!」

指示は同時に。

そして、ティナ達が動き出したのも、また同時だった。

〈ふっ——!!〉

「シャーモッ!!」

両手に生み出した光の剣を振り上げるティナ、バシャーモも炎に包まれた蹴りを真っ向から叩き込む。

両者の技はぶつかり合い、互角なのか鏖迫り合いになった。

「かえんほうしゃ!!」

「かわして!!」

「バシャーモ!!」

〈甘い!!〉

至近距離からのかえんほうしゃ。

だが、ティナに当たる瞬間——彼女の姿がその場から消えた。

「シャモッ!？」

「バシャーモ、後ろにブレイズキック!！」

「なっ——」

ダリアさんの指示で、すかさずバシャーモはブレイズキックによる後ろ回し蹴りを繰り出す。

〈きゃ——っ!?!〉

それは、テレポートでバシャーモの後ろに回ったティナへと襲いかかり。

すんでのところで、その一撃を剣で受けきっていた。

……ティナのテレポート先を読むなんて、並大抵の事じゃない。

やはりダリアさんは、先程とはまるで違う。

衝撃を殺しながら、地面を滑っていくティナ。

そんな彼女との間合いを詰めるために、地を蹴るバシャーモ。

「スカイアッパー!！」

「シャモシャモシャモ………!！」

「ティナ、サイコセイバーで受け止めて!!」

〈くっ……!!〉

剣を十字に構え、防御の体勢に入るティナだが。

「シャ、モーツ!!」

〈くあ……!!〉

バシャーモのスカイアッパーの一撃は重く、ティナの小さな身体は軽々と宙を舞った。

ダメージはない、だが代わりとばかりにサイコセイバーが音を立てて砕け散る。

「オーバーヒート!!」

「っ、レポートで回避するんだ!!」

「シャモオオオツ!!」

全身を赤く発光させ、先程のかえんほうしゃよりも更に大きな炎が、バシャーモの口から放たれる。

空中では回避できない、けどティナにはレポートがある。

――しかし

「バシャーモ、右斜め前方にブレイズキック!」

ダリアさんには、小手先の回避など通用しない。

ティナの身体が消える、それと同時にバシャーモの炎が止み、動きを見せた。

放たれるブレイズキック。

それは、誰もいない場所へと放たれるが――

へっ、きゃああああああっ！！！？

テレポートで現れたティナの身体に、深々と突き刺さった。

「ティナ！！」

へあ、ぐう……………！！

地面を転がっていくティナ、フィールドの端でようやく止まるが……起き上がれない。

「なかなかいい回避だけど、そんなんじゃダリアのバシャーモから逃げられないネ！！」

バシャーモ、スカイアッパー！！」

「シャモシャモシャモオオッ！！！！」

バシャーモが迫る、

だが、ティナはまだ起き上がれない――！！「だったら――ティナ、

自分にサイコキネシス！」

「えっ!？」

へく——っ!!」

ティナの全身が青白い光に包まれる。

すると、普通では有り得ない不規則な動きを見せ始めた。

その動きで、バシャーモのスカイアッパーが空振りする。

「サイコセイバー!!」

へっ、はあああああっ!!!!」

サイコキネシスを解き、再び生み出した光の剣をバシャーモに叩き込んだ。

「シャモオオオツ!？」

「バシャーモ!!」

へくっ、はあ…はあ…」

見事に反撃できたが、ティナの顔には疲労の色が。

それだけ、バシャーモの一撃が重かったという何よりの証だ。

「……なる程、自分自身にサイコキネシスを使って回避するなんて

……ダリアには想像もできないものだったネ」

そう言うダリアさんの口調は、とてつもなく嬉しそうで楽しそうだ。

彼女は、今このバトルを心から楽しんでいる。

そして――それは彼女のポケモンも同じ。

「シャモ……」

起き上がり、ニヤリと笑いながら拳を構え始めるバシャーモ。

「シャモ、バシャーモ」

へ……ふふつ、面白いバシャーモですね」

「？ ティナ、バシャーモは何て？」

訊くと、ティナは振り向き苦笑しながら。

へ――久しぶりに、全力で殴りあえる相手を見つけられた、ですって。

仮にも女性に対して言う言葉ではないですよね？」

失礼しちゃいます、そう言いながらも口元には確かな笑みを浮かべるティナ。

「……ははっ、だったら精一杯殴り合ってやろうじゃないか!!」

へお父様までそんな事言わないでくださいよ!!

まったく……女性に対する配慮が足りませんねお父様も

「ごめんごめん、それじゃあ……続けようか、ティナ！」

へええ、ラルトスみたいな小さなポケモンでも、強いという事を教えてあげましょう！！

高らかに言い放ち、再びサイコセイバーを両手に握りしめるティナ。

「OK OK。バシャーモ、まだいけますネ？」

「シャーモッ！！」

力強く頷き、再びティナに向かって地を蹴るバシャーモ。

「ほのおのパンチ！！」

「シャモーツ！！」

「受け止める！！」

へは——っ！！

ぶつかり合う炎の拳と光の剣。

パワーは互角、互いに一步も譲らないが……。

へく、は……

体力では、ティナの方が不利だ……！！

「かえんほうしゃ!!」

「――っ」

拙い、テレポートで逃げたらまたバシャーモの的になるだけだ!!

だったら……!!

「左の剣をアクアリウムセイバーに!!」

へっ、し――!!

左の剣が一瞬で消え、入れ替わるように現れるのは、水の剣。

それで、迫り来るかえんほうしゃを真一文字に切り裂き距離を取る。

「……………素晴らしい」

ぽつりと呟いたのは、ダリアさんの方。

しかし、今のティナではアクアリウムセイバーを完全に使用する事はできない。

あの一件で、サーナイトであったティナはラルトスに戻ったものの、一度覚えた技を忘れたわけではなかった。

故に、ある程度サイコパワーを取り戻した今の彼女は、再びサイコセイバーを使えるようになったのだ。

しかし、同じエスパークタイプだからこそできただけなのか、他の剣は長い間展開させる事ができない。

今のアクアリウムセイバーだって、かえんほうしゃを斬る一瞬の間しか出せず、今は粉々に砕け散ってしまった。

もしまともに使えるのであれば、初めから水の剣で戦っている。

「ホントに素晴らしいネレイジさん!!
バシャーモ、スカイアッパー!!」

「シャモ!!」

くっ、もう一撃だって受けられない、こうなったらヒカリかアクセルに交代を……。

そう考えた刹那、ティナが剣を握りしめ自らバシャーモに向かっていく。

「ティナ!!」

へお父様、わたくしを信じてください!!」

掛けた言葉はただそれだけ、こちらに見向きもせずにティナは立ち向かっていく。

……そうだ、ティナを信じろ。

信じているから、自分はこのバトルの一番手を任せたのだから!!

「シャモーツ!!」

〈くう……!〉

スカイアッパーを剣で受け、ティナの身体が宙に浮く。

「ブレイズキック!!」

「シャモツ!!」

脚に力を込め、瞬時にティナよりも高く跳び上がり……跳び蹴りの要領で彼女を仕留めに掛かるバシャーモ。

「ティナ!!」

〈———っ〉

ティナの身体が消える、テレポートで回避したのだ。

「またテレポート……けど、ダリアには通用しないヨ!!」
バシャーモ、後ろにブレイズキック!!」

「———シャモ!!」

さすがというべきか、空中でありながら充分過ぎる程の力を込め、自分の後ろにブレイズキックを放つバシャーモ。

瞬間、テレポートを終えたティナが現れ——

——バシャーモの攻撃が、空振りした

「ホワット!?!」

「シャモ!?!」

驚きの声は同時に、けど今更驚いた所で遅い!!

「そのままフルパワーで攻撃だ!!」

へはあああああっ!!!」

バシャーモの更に上、天井付近にまでレポートしたティナ、両手には振り上げたサイコセイバーが。

そして——それをバシャーモに勢いよく振り下ろした!!!

「シャモオオオッ!!!?!」

爆撃めいた音と共に、フィールドへと沈むバシャーモ。

「……シャモ……」

「バシャーモ戦闘不能、ラルトスの勝ち!!」

審判の宣言と共に、会場からは凄まじい歓声が響き渡る。

「バシャーモ、戻って。……レイジさん、今のはかげぶんしんですネ？」

「はい」

「でも、レイジさんはかげぶんしんの指示は出していないはず……」

「ティナと僕は互いにテレパシーができるんです、尤も僕はティナ限定ですけどね」

あの時、一撃目のブレイズキックの際に、僕はティナの名を呼んだ。それと同時に、レポートで回避しろ、そして……その後にかげぶんしんを使えという指示を彼女に送った。

だからダリアさんにもバシャーモにも気づかれずに、攻撃は見事に命中したというわけだ。

「なる程……とても素晴らしい連携でした。
では次は――GO、トゲキッス!!」

「――トゲ、キッス」

ダリアさんの二体目はトゲキッス……。

「ティナ、このまま迎え撃つよ!!」

へ……娘使いが荒いお父様ですね」

「10まんボルト!!」

〈はっ!!!〉

黄色い電撃が、トゲキッスに向かう。

「まもる!!!」

「キイツス」

しかし、10まんボルトはトゲキッスの前に現れたエメラルド色の壁の前に霧散してしまう。

「サイコセイバー!!」

〈し——!〉

一息で踏み込み、上段からの一撃。

「キイツス……!!?」

その一撃はトゲキッスを吹き飛ばし、追撃を仕掛けようと更に踏み込んだティナだったが。

「ギガインパクト!!」

「キィィィッス!!」

〈えっ——?〉

迫り来るトゲキッス、周りに凄まじいエネルギーを纏いながら。

ティナは防御も回避もできない、もう既に攻撃の体勢に入っているから。

へ——きゃあああああつ!!?>

そして、サイコセイバーを砕かれギインパクトの一撃をまともに受けてしまったティナは、受け身も取れずに地面を滑っていき——壁に叩きつけられた。

「ティナ!!」

急ぎ、彼女へと駆け寄る。

へうう……も、もう動けません……>

「ラルトス戦闘不能、トゲキッスの勝ち!!」

割れんばかりの拍手喝采が響き、ダリアさんとトゲキッスはその声援に応えるように周りに視線を向けた。

「ティナ、お疲れ様。本当によく頑張ったね」

へうう……サーナイトになっていれば、トゲキッスごとき瞬殺なのに>

「……口が悪いよ」

本当にこの子はしょうがない、そう苦笑しながら僕はティナを地面に寝かせ、ボールを手取る。

「ヒカリ、お願い!!」

「――ピッカ!」

「二体目はピカチュウですか、キュートなポケモンですネ!」

「だけど、その力とはとても強くですよ!」

「ピカピカーツ!!」

「わかってるヨ。レイジさん、その力を早く見せてみるネ!!」

「もちろんです。ヒカリ、でんこうせっかで間合いを詰めて!!」

「ピッカ!!」

地を蹴り、でんこうせっかでトゲキッスの間合いを詰めるヒカリ。

「キィィィッス!!?」

そのスピードについていけないのか、驚きながら突き飛ばされるトゲキッス。

「アイアンテール!!」

「チュウウウウ……ピッカアツ!!」

尻尾を光沢ある鉄色に変え、怯むトゲキッスの頭部に叩きつける。

「トゲ、キィ……!!」

効いたのか、トゲキッスは苦しそうな声を上げその場でフラフラしてしまっているが。

「トゲキッス、はどうだん!!!!」

「キィッス!!」

すぐさま体勢を立て直して、アクセルのにもまったく引けを取らない威力のはどうだんが撃ち出された。

「ピカッ!？」

至近距離なので、ヒカリには避ける余裕などはない。

——だったら!!

「ヒカリ、宙返りのアイアンテール!!」

「ピカアアッ!!」

アイアンテールを展開して、その場で宙返りを始めるヒカリ。

すると、その際に尻尾がはどうだんに当たり、弾かれ天井に飛んでいく。

「でんこうせっか!!」

「ピ——ッ!!」

天井から聞こえる爆発音をよそに、再びトゲキッスの間合いを詰めるヒカリ。

「サイコキネシス!!」

「キィッス……」

「右にジャンプ!!」

「ピカッ!」

トゲキッスの瞳が青白い光を放つと同時に、素早く右に跳躍するヒカリ。

「アイアンテール!!」

「チュウウウ……ピッカアッ!!」

「キィィィッス!!?」

そして、渾身のアイアンテールがトゲキッスを吹き飛ばす!!

———今だ!!

「ヒカリ、自分にかみなりだ!!」

「ピカアアア……チュウウウ!!」

黄色い電撃が、小さなヒカリの身体を包み込む。

準備は整った、このままあの技を使う——！

「ヒカリ、デュアルボルテッカー——！」

「ピカピカピカピカピカピカ………！」

黄金の光を放ちながら、凄まじいパワーを込めてトゲキッスに突貫していくヒカリ。

トゲキッスはアイアンテールの一撃で動けない。

もらった———！

「ギガインパクト——！」

「何———っ！？」

まだそんな力が……。

「トゲ……キイイッス——！」

凄まじいエネルギーを身に纏い、向かってくるヒカリに真っ向から突撃するトゲキッス。

そして――両者はぶつかり合い、凄まじい爆発音と共にフィールドは煙に包まれてしまった。

「ヒカリーッ!!」

「トゲキッス!!」

両者の姿は、煙に紛れて見えない。

……頼む、勝っていてくれ!!

バトルフロンティア編第6話　　く決着く（前書き）

フロンティアブレーンのダリアさんとのバトルは続く。

ヒカリとトゲキツスの大技がぶつかり合い、バトルの状況がわからなくなってしまう。

ヒカリ、どうか勝っていてくれ……………！

バトルフロンティア編第6話　　～決着～

——煙が、少しずつ晴れていく

勝ったのはヒカリか、それとも……。

「……ピカ……」

「……キィッス……」

「ピカチュウ、トゲキッス、共に戦闘不能!!」

「相討ち……!!」

「ですネ……」

共に残りポケモンは一体ずつ……か。

「……レイジさん、ここまでダリアを追い詰めたトレーナーは、久しぶりヨ!!」

「ダリアさん……」

「このポケモンでバトルするのは本当に久しぶりネ……」

——GO、サンダー」

「なっ——」

ダリアさんのボールがフィールドに放たれる。

——瞬間、会場全体を包み込むとてつもない電撃が現れた

「ギャアアス!!」

雄叫びとも、叫び声ともとれる声を上げ——伝説と呼ばれるポケモンが姿を見せる。

「……サンダー」

ファイヤー、フリーザーと共にカントー地方に伝わる伝説のポケモン。

「これがダリアの切り札。さあレイジさん、このサンダーに勝つ事ができるかな？」

「……………」

凄まじいまでのプレッシャー、相手はただ僕を見ているだけなのに、おもわず後ろに下がってしまう。

ルギアとはまた違う、力強い闘志、戦意が喪失してしまうような錯覚さえ感じた。

……でも、恐いと同時にワクワクする!!

「必ず勝ちます!! 伝説だろうが何だろうが、僕のポケモンを信じてダリアさんに勝ってみせます!!」

「よく言ったネ!! なら、その力を見せてヨ!」

「――アクセル、これで最後だよ。

最後に相応しい、悔いのない戦いを――！」

空高く投げるモンスターボール。

そして、ボールが開かれアクセルが飛び出した。

瞬間――

『――っ』

僕とダリアさんは、同時に後ろに後退る。

あのサンダーですら、表情を歪ませる。

それ程までに、アクセルが放つ闘気――いや、これは波導だ。

「――必ず、必ず悔いのない戦いをしてみせます、父上――！」

「……うん、信じてる」

「はい――！」

「なる程……なら全力全開で勝負ヨ――！」

サンダー、ねっぷう――！」

「ギャアアス――！」

雷の翼を羽ばたかせ、熱が籠もった風が撒き散らすサンダー。

〈くっ………！〉

左腕で顔を隠しつつ、ねっぷうを防ぐアクセル。

はがねタイプを持つアクセルには、ほのおタイプのねっぷうは弱点になる。

これ以上、技を受けるわけには………！

「アクセル、踏み込んでとびひざげり！！」

〈っ、ハア———！〉

ねっぷうを右に跳んで抜け出し、跳び上がってとびひざげりを繰り返すアクセル。

「かわしてねっぷう！」

「ギャアアス！！」

「はどうだん！！」

〈ハアアアア———！〉

とびひざげりを回避され再びねっぷうが迫るが、すかさず体勢を立て直し左手ではどうだんを出して相殺する。

「ドリルくちばし！！」

「ギャオオツ!!」

アクセルに着地する間も与えないまま、サンダーは追撃を仕掛けてきた。

……充分な力はないけど、回避できないなら!

「はっけいだ!!」

へく、は——っ!!」

迫るサンダーに狙いを定め、右手を突き出すアクセル。

ドリルくちばしとはっけいがぶつかり合う、その瞬間力の衝撃が爆発を引き起こした。

へぐあ——!!」

「ギヤス……」

着地し、片膝を突くアクセル。

しかし、サンダーは多少のダメージはあったものの、まだまだ余裕が見られる。

くっ……さすがサンダーだ、伝説のポケモンは伊達ではないという事か!

「……………」

「……？」

急にダリアさんの口元に笑みが浮かんでいるのが見え、首を傾げる。
すると、ダリアさんは口を開いた。

「……レイジさん」

「……………」

「レイジさんは、今楽しいですか？」

「えっ……………」

「……今更白状するけど、ダリアは最初レイジさんを過小評価してたネ」

「……………」

「ゲンリさんはレイジさんを強いトレーナーと言っていたけど、ダリアには信じられなかった。

でも……それは間違いだったヨ、レイジさんとバトルができて、ダリア本当にハッピーネ！！」

「ダリアさん……」

「フロンティアブレーンとしての誇り、そしてポケモン達と頑張ってきた道。その全てをアナタにならぶつけられるネ！」

満面の笑み、サンダーも心なしか笑っているような気がした。

……フロンティアブレインの誇り、ポケモン達と頑張ってきた道、か。

その全てをぶつけてくるというなら、真っ向から受けて立つ!!

「アクセル、僕達も今までの誇りと道をダリアさんにぶつけるよ!!」

へはい、父上!!!<

「そうこなくっちゃ面白くないヨ!!」
サンダー、ねっぷう!!」

「ギャオオスツ!!!」

再びアクセルの弱点であるねっぷうを繰り返すサンダー。

でも、その対処方法は考えてあるんだ!!!

「ボーンラッシュ!!!」

へはあああ……りやりやりやりやり!!!<

蒼く輝く骨状の棍を生み出し、自身の前で回転させながらねっぷうを防ぐアクセル。

「かみなり!!!」

「ギャアアスツ!!!」

凄まじいまでの電撃、あれはヒカリのボルテッカーすら上回る程だ。
でも———！

「アクセル、ボーンラッシュを目の前の地面に突き立てるんだ！！」

「ホワット！？」

指示通り、棍を自分の少し前の地面に突き立てるアクセル。

すると、かみなりは突如進路を変えボーンラッシュへと落ちていった。

サンダーのかみなりの範囲は広い、避けきる事はできないだろう。

だから、この棍を避雷針代わりにしたのだ。

「連続ではどうだん！」

へハアアアッ！！

通常より小さく威力も低いが、両手で次々とはどうだんを撃ち放つていくアクセル。

それは一つも外れる事なく、サンダーへと当たっていった。

「ギウウウ……！！！」

「りゅうのはどう！！！」

「かわしてドリルくちばし!!」

指示は同時に、アクセルの放ったりゅうのはどうを回避し、再び突撃するサンダー。

——ここが、勝負どころだ!!

「アクセル、ギリギリまで引きつけて!!」

(っ、何を……)

迫るサンダー、けれどアクセルはまだ動かない。

そして、サンダーの技がアクセルに命中する瞬間。

「今だアクセル、サンダーに飛び移るんだ!!」

「ホワット!?!」

へは——っ!!」

当たるか当たらないの距離で跳躍し、サンダーの背中に飛び乗るアクセル。

(最初からこれが狙いで……!!?)

「きあいパンチ!!」

へたりゃあーっ!!」

ズドンという鈍い音が、サンダーの背中から聞こえた。

「かみなり!!」

「ギャオオスッ!!」

へう、ぐーうおおおっ!!!??

ダメージを受けながらも、サンダーは自慢のかみなりで容赦なくアクセルの身体を痛めつけていく。

へぐ、あ……

あまりの衝撃に、おもわずアクセルの手が離れてしまいそうになるが。

「負けるなアクセル!! 君の力はまだこんなものじゃないはずだ!!」

へーっ!!

僕の言葉が届いたのか、再びくらいついてくれた。

「もう一度かみなり!!」

「ギャオオスッ!!」

へぐあああっ!!!?

「頑張れアクセル、もう少しだ!! 自分自身の誇りを……今まで僕達が歩んできた道を思い出して!!」

へぐっ……父、上……

「君はどんな相手でも立ち向かってきた、その誇りを……今こそ見せる時だ!!」

叫ぶ事しかできない自分が腹立たしい。

だがそれでも、今の僕にはそんな事しかできないのだ。

へうぐ、あ……

かみなりに撃たれながら、アクセルは決してサンダーの身体から手を放したりはしない。

「そんな、まだ……!」

「アクセル、インファイトだ!!」

へだりゃあ——! りやりやりやり!!

かみなりに耐えながら、ありったけの力を込めて拳を連打していく。

だがまだ届かない、もっとだ!!

「はっけい!!」

へし——!!

「ギャオスッ!!?」

爆撃めいた打撃音が響き、サンダーが地面へと墜落した。

へはあ…はあ…はあ…

「……………」

立つな……立つんじゃない。

アクセルは限界だ、これ以上は……。

↑———↓

「くっ……!?!」

しかし、僕達の願いも虚しくサンダーは立ち上がった。

へだ、だったら……倒れるまで攻撃するだけだ!!!<

崩れそうになる身体に渴を入れ、構えるアクセル。

「……………」

何かの決意を決めたような表情を浮かべるダリアさん。

……次で決める気だ。

「アクセル、僕達も次で決めるよ!!」

〈はいっ!!!〉

「……レイジさん、悪いけど……このバトル、ダリアが勝つ!!」

「望むところです、全力で迎え撃つ!!」

「……………」

「……………」

睨み合う両者。

この瞬間、全ての音が消えそして――

「サンダー、ドリルくちばし!!」

「ギャオオスッ!!」

最後の指示を、サンダーに下す――!

「アクセル、フルパワーではどうなんだ!!」

〈かああああ……!!!〉

アクセルの身体に溢れる波導が、右腕を包みやがて右手に集中していく。

〈――だりゃあ!!!〉

大砲を撃ったかのような音を出し、放たれるはどうだん。

それは、低空飛行で向かってくるサンダーに、寸分の狂いなく――

「サンダー、かわしなさい!!」

「――」

――風切り音が響く

アクセルの放ったはどうだんは、凄まじいスピードでサンダーに迫り。

それすらも上回る凄まじいスピードで、回避された……。

「レイジさん、このバトル……ダリア達の勝ちネ!!」

勝利を確信した言葉を放つダリア、おそらくサンダーも同じ気持ちだろう。

……そう、この瞬間勝敗は決した。

――はどうだんが、両手で放たれていたら、だが

「アクセル!!」

名を呼ぶ。

それよりも早く、アクセルは行動に移っていた。

へは——っ!!!」

裂帛の声と共に、アクセルの周りの地面から土煙が舞う。

「ギャアスッ!!!」

完全に予期していなかった状況に、サンダーは何もできず煙の中に入ってしまった。

それと同時に——上空から飛び出てきたのは、もちろんアクセルだ。

「ホワット!!!」

さすがのダリアさんも、どうしてアクセルが跳躍できたのか理解できないのだろう。

はどうだんを撃った瞬間では、いくらアクセルの身体能力でもあのような跳躍はできない、力を溜めていたのなら尚更だ。

では何故あのような事ができたのか、答えは至極簡単。アクセルはもう一度はどうだんを放ったのだ。

しかし、今度は右手ではなく空いていた左手で。

——あの時、サンダーに放ったはどうだんは両手ではなく片手で放

った

サンダーに避けられると思っていたし、避けられれば回避できない事もわかっていたから。

だから、アクセルは右手のみのはどうだんでサンダーに回避させ、向かってきたタイミングを見計らって地面に左手のはどうだんを放ったのだ。

その結果、地面は爆発し土煙が舞い、サンダーの視界が塞がれると同時に、アクセルは安全圏の上空へと避難できた。

そして――これで今度こそ終わりだ。

「アクセル、そのままとびひざげりだ!!」

へはああああ――!!」

膝を折り曲げ、いまだ煙の中でもがくサンダーに向かっていく。

「サンダー、上!!」

ダリアさんの声で上を見上げたが、もうその時には眼前にまで迫っており。

アクセルのとびひざげりが、サンダーを捉え地面を削っていく。

「ガガガ……ッ!!?」

へこのまま……落ちてしまえーっ!!」

フィールドを飛び出し、尚も止まらない。

止まらないまま――壁を粉碎し、ようやく音は止んでくれた。

「サンダー!!」

「アクセル!!」

ダリアさんと2人、アクセル達の元へ駆け寄る。

ダメージは与えた、だけどあの衝撃はアクセルにまで届いたはずだ。

……果たして、立ち上がるのはどっちだ？

会場に居る全員が、固唾を吞んで見守る中。

ゆっくりと、アクセル達の姿が見えていき……。

へ――僕の、勝ちだ

そんな声が、僕とダリアさんの耳に入ってきた。

「サンダー戦闘不能、ルカリオの勝ち!!」

よって勝者、チャレンジャーレイジ!!」

審判の判定が響き、途端に割れんばかりの拍手が巻き起こった。

「……………勝った」

ぽつりと事実を口にしながら、アクセルの元へ。

「アクセル」

〈はあ…はあ…はあ…〉

サンダーに脚をめり込ましたまま、アクセルは動かない。

そんな彼の頭を、優しく撫でてあげた。

「大丈夫だよアクセル、もう終わったよ。

だから、もういいんだ」

〈……………〉

僕の声が届いたのか、意気を切らしながらゆっくりとサンダーから離れるアクセル。

それと同時に、休ませるためにボールに戻してあげた。

「サンダー、お疲れさまでした。

——レイジさん、どうもありがとう。こんなに楽しいバトルは、ダリア初めてだったネ」

「いえ、僕も本当に楽しかったです。本当に……楽しかった」

固く握手を交わす。

瞬間、僕達のバトルを楽しんでくれた観客の人達から、惜しみない歓声が響き渡った。

「また、ダリアとバトルしてくれる？」

「ええ、もちろんです」

「……ありがとう、レイジさん」

「え——」

目を閉じたダリアさんの顔が近づいてくる。

そして、頬に柔らかい感触が……。

「…………フフツ」

「あはは……」

何をしたんですか、などという野暮な質問はできない。

からかうような声が、辺りから響く。

「お父様、浮気したら殺されますよ？」

「しないよー!!」

でも……今の出来事は2人には内緒にしておこう。

いや、だって……ねえ？

……。

「――よろしいのですか？ 他のフロンティアブレーンとバトルしなくても」

「無理だよ……」

ダリアさんとのバトルが終わり、さて帰ろうとしたのだが……。

僕達のバトルを他のフロンティアブレーンが見ていたらしく、是非バトルをしてほしいを言われたのだ。

しかし僕は遠慮した、フロンティアブレーン全員と戦える元気はない、バトルはまたの機会という事にした。

「でも……来てよかったみたいですネ。」

今のお父様のお顔、とても晴れやかないい顔になってますよ」

「そう、かな？」

……うん、そうかもしれない。

ダリアさんとのバトルは、僕にとってとても意味のあるものになってくれた。

「……僕は、人間として生きる事ができるようになったけど、自分の存在意義を見失ってたのかもしれない。

けど、今日ダリアさんとおもいきりバトルをしてわかったんだ、僕はもっと色んな人とバトルがしたい。トレーナーとしてどこまでも高みを目指していきたい」

それが今日、はっきりと気づく事ができた。

不透明でわからなかった道が、わかるようになった。

へ……そうですか」

そう呟き、嬉しそうに笑うティナ。

へそれでは、また旅に出るのですか？」

「さてね……まずは帰って休むさ」

その後に、ゆっくり考える事にしよう。

へ……またニートに逆戻りですか、嘆かわしいものです」

「だからニートじゃないっての!!」

やたらとニートニートと喚いてくるティナと、暫しリオンの背中の上でわーわーぎゃーぎゃーと言い争う。

それを黙って耐えていたリオンに、マサラタウンに着いた瞬間めちやくちや怒られたのは言うまでもない。

第103話 新たな地での冒険〜新人トレーナー、トウコ〜!〜（前書き）

『イツシュ編』スタートします。

幾つか注意事項を。

- ・オリキャラは増やしません
- ・前回のキャラはレイジ以外ゲストです

それでは、少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

第103話 新たな地での冒険く新人トレーナー、トウコ!!く

それは、本当に……本当に唐突だった。

へーそうだ、イッシュに行きましょうく

僕の膝の上に乗っていたラルトスのティナが、急にそんな事を言い出してきたのだ。

「そうだ、京都に行こうみたいな言い方しないでくれる?」

へお父様、京都ってどこですか?く

「さあ……ってそんな事はどうでもいいよ、それより何で急にイッシュに行こうと思ったの?」

へそれはもちろん、あと一年でイッシュリーグが開催されるからです。

娘としては、これ以上お父様をニートにしたままというのは心苦しいものですからく

「……だから、僕はオーキド博士の研究の手伝いをしてるんだから、ニートじゃないって何回言えば……」

へしかし、イッシュリーグまであと一年と迫り、お父様の脱ニートができる機会も揃いましたからねく

話聞けよ。

けど……イツシュリーグもあと一年か。

へどうですか？ 久しぶりに旅に出るというのもいいと思いますが、それに、わたくしもいい加減サーナイトに戻ってあのムチムチなワガママボディに戻りたいんです！！」

「後者が本音か」

だがしかし、いい加減このマサラでのんびり暮らす生活にも飽きが来ていた所だ。

ロケット団も今では完全に壊滅したという話を聞いたし、今度はのんびりイツシュを旅できそうかも。

「よし、じゃあイツシュリーグに出場してみる？」

へはい。それでこそお父様です！！」

「じゃあまずは……おじさん達に報告と」

〈準備、ですね〉

互いに顔を見合わせ、笑みを見せ合う。

さーて、新しい旅立ちは一体どんなものになるのかな。

――そして、数日後

へ着きましたねお父様、カノコタウンですよ

カントーから船に乗り、僕とティナはイッシュにやってきた。

オーキド博士の勧めで、まずはイッシュ地方のポケモンに詳しいアラギ博士を訪ねるといい、と言われ研究所があるカノコタウンへと赴いたわけで。

へところでお父様、本当にリオン達を置いてきてよかったんですか？

「まあ、ね……」

——リオン達は、今マサラのオーキド研究所でのんびりしてる

というのも、僕自身トレーナーとして1から始めたいと思ったのだ。

だから、一番のパートナーであるティナ以外は預ける事にしたんだけど……最初にそう言ったら、全員の大ブーイングを受けた。

特にルギアなんか。

『マスター、余が嫌いになったのか！？　そうなのか！？』

と言って、大声で泣き出すわ所構わずエアロブラストを吐き出すわで大変だった。

なんとかリオン達の協力もあっておとなしくなったけど……ああやって泣かれたのは、かなりまいった。

ちゃんと定期的に連絡するという約束で、どうにか納得してくれたんだけど……海の神様の威厳なんて微塵も感じられなかったのは、ちよつと残念に思えた。

それはともかくとして、早速アララギ研究所へと足を運ぶ。

「――あら？」

「……………」

中に入ると、こちらに視線を向ける人物が2人。

1人はアララギ博士、そしてもう1人は……。

「……あの、失礼ですがどなたですか？」

訝しげな視線を向けてくる少女。

ふわふわのポニーテールに白い帽子を被り、ノースリーブのシャツにかなり短く切り揃えたジーンズと、活発な服装の女の子だ。

「トウコちゃん、彼は怪しい人じゃないわよ」

苦笑しながら、アララギ博士が助け舟を出してくれた。

「彼はレイジ君、マサラタウンのトレーナーで、一年後に開かれるイッシュリーグに出場するためにここへ来たのよ」

「レイジ……………」

僕の名前を聞いて、はてと首を傾げるトウコと呼ばれた少女。

数秒経ち――彼女は僕を指差して、大声を上げた。

「も、もしかして前回のセキエイリーグの優勝者ですか!？」

「あ、うん、まあ……」

「ご、ごめんなさい!! あたしレイジさんとも知らないで……」

「別にいいよ、気にしないで。それより君は……」

「あ、えっと、あ、あたしは、ト、トウコって言いましゅ!!」

噛んだ、それも盛大に。

顔を真っ赤にして、俯いてしまうトウコさん。後ろではアララギ博士が楽しそうに笑っている。

「トウコちゃんは今日から旅に出るの、初心者用のポケモンを貰ってね」

「は、はい。そうなんです!!」

「へえ……たしかツタージャとポカブとミジュマルでしたよね?」

「ええ、そうよ」

「……でも、どの子を選ぶのか迷ってるんです、どの子も結構可愛

いし強そうだし……」

〈確かに悩みますよね、新人トレーナーなら尚更です〉

「えっ？ 今の声……」

〈初めましてトウコ、わたくしはラルトスのティナと申します〉

僕の頭に乗ったまま、ぺこりと頭を下げるティナ。

トウコさんは暫しティナをマジマジと見た後。

「し、喋った!？」

なんだか懐かしいリアクションを返してくれた。

〈正確にはテレパシーです、わたくしは普通のラルトスとは少々生まれが違うものでして、こうしてテレパシーで意志の疎通ができるんです〉

「……へえ、ポケモンと会話ができるなんて、なんだか変な感じ」

〈慣れれば案外楽しいですよ〉

「それはそうとして、どの子を選ぶのかはゆっくり考えればいいさ。他でもない君自身が選べばいい、君のパートナーになるポケモンなんだから」

「パートナー……」

ちらりと、三匹に視線を向けるトウコさん。

ツタージャはジト目で腕を組みながら見つめ返し、ポカブはとりあえずニコリと笑みを返し、ミジュマルは「自分を選べ」とばかりに胸を張ってアピールしてる。

うーん、と再び悩み顔になるトウコさん、これは暫く掛かりそうだ。

「それじゃあアララギ博士、挨拶も済みましたし僕はそろそろ出発します」

僕としては挨拶をする為に訪ねたので、これ以上長居するつもりはない。

そう思い、その旨をアララギ博士に伝えたのだが。

「レイジ君、せっかくだから貴方もこの三匹の内の誰か一匹を連れて行ったら？」

と、そんな提案を僕に対して言ってきた。

「えっ？」

「レイジ君は初心者じゃないけど、きっと役に立つんじゃないかしら？」

「……………はあ」

その申し出は嬉しいが、いいのだろうか。

へせっかくのご厚意ですし、素直に甘えた方がよいのでは？

「うん……」

というわけで、僕もトウコさんと同じく悩む事になった。

ツタージャはくさ、ポカブはほのお、ミジュマルはみず。

どのタイプも必要だし、これは新人じゃなくても悩むなあ……。

「——決めた!!」

「わっ!」

隣で僕と一緒に悩んでいたトウコさんが大声を上げ、一匹のポケモンを抱き上げる。

「…………ポカ?」

「ポカブ、今日からあなたはあたしのパートナーよ!!」

「…………ポカ♪」

なんだかよくわからないけど、とりあえず頷いところみたいな感じで頷きを返すポカブ。

トウコさんはポカブにしたのか……。

「タージャ」

「ん？」

僕のズボンの裾を引っ張るのは……ツタージャだ。

「タジャ、タージャ」

「ティナ、ツタージャはなんて言ってるの？」

へあんな子豚より、私を選んだ方が絶対に得よ、貴方みたいなベテランならわかるわよね？　と言ってます

「ポカ！？」

「ちょ、ちょっと失礼じゃないの！？」

へわたくしに言わないでください、あくまでツタージャが言ったんですから

「あはは……」

しかし、随分と口が悪いというか……ツタージャというポケモンは、総じてこういう性格らしい。

……けど、なんだか気に入っちゃったな。

「ならツタージャ、僕と一緒に来る？」

「……………タージャ」

へ向こうのド素人ならお断りだけど、貴方なら大丈夫そうね。です

って」

「い、いちいち通訳しなくてもいいわよ!!
そこまでいうなら、バトルよ!!」

「えっ……」

「レイジさん、バトルしてくれますよね？」

「あー……」

なんだかおかしい展開になってきたな。

睨み合うツタージャとトウコさんを見て、僕とティナ、そしてアラ
ラギ博士は顔を見合わせ苦笑するのだった。

「――それじゃあ2人とも、頑張ってね！」

研究所の裏庭で、睨み合うツタージャとポカブ。

ポカブはバトルにやる気満々だけど、ツタージャは渋々……という
か、面倒そうに見える。

「ツタージャ、バトルをする以上はどんな相手でも全力で戦う。
それが自分の為でもあり、相手の為にもなるんだから」

「……………タジャ」

「僕の言ってる事、わかるよね？」

「……………」

身構えるツタージャ、どうやら僕の言った事をわかってくれたようだ。

それに、ポケモン同士の強さはおそらく互角、いくらトレーナー経験の違いがあるからとはいえ、どちらが勝ってもおかしくはないのだ、故に油断する道理はない。

「先攻はトウコちゃんからよ、それじゃあ試合開始！！」

「えっと…ポカブ、たいあたり！！」

「ポッカー！！」

ややぎこちないながらも、ポカブに指示を出すトウコさん。

ポカブも頷きを返し、まっすぐツタージャへと向かってきた。

「ツタージャ、かわしてつるのムチ！」

「タジャ」

ギリギリまで引きつけ……ポカブの攻撃を回避するツタージャ。

間髪入れずに首の近くから二本のつるのムチを放ち、ポカブを拘束する。

「そのまま引きつけてたいあたり！」

「タジャー！！」

「ポカー！？」

拘束したポカブを自らの間に詰めながら、渾身のたいあたりでポカブを吹き飛ばすツタージャ。

コロコロと転がっていくポカブだが、どうにか立ち上がる。

「なら、ひのこ！！」

「ポッ、カー！！」

勢いよく鼻を噴くと、そこから小さな火球が飛び出しツタージャを襲う。

「右にジャンプ、着地と同時にたいあたり！」

「タジャー！」

迫るひのこを冷静に回避し、そのまま再びたいあたりを仕掛けるツタージャ。

「ポカーッ！！？」

「ポカブ！！」

またもコロコロと転がっていくポカブだが……今度は立ち上がる事

はなく。

「ポカブ戦闘不能、ターゲットジャの勝ち！！　よって勝者、レイジ君
！！」

アララギ博士のジャッジによって、このバトルは幕を閉じた。

「…………ポカブ」

「ポカゝ……」

しょんぼりとへこんでしまうポカブ、しかし…………トウコさんはそんなポカブの頭を優しく撫でてあげた。

「ありがとうポカブ、よく頑張ってくれたわね」

「ポカ…………」

「あたし、まだまだ半人前だけど…………一緒に強くなっていくこうね？」

ニコリと、トウコさんはポカブに微笑みを見せる。

するとポカブも、トウコさんに応えるようにニコリと微笑みを返した。

へ…………お父様、彼女…………強くなりますよ」

「そうだね。僕達もうかうかしてはいられないね」

将来、彼女は僕にとって強力なライバルとなるだろう。

それが楽しみであり、同時に不安でもある。

（さーて、いきなり将来のライバルが現れたのかな……？）

——イッシュでの旅が、いよいよ始まる

どんなポケモンに出会い、どんな旅路になっていくのだろう。

期待半分、不安半分を胸に抱きつつ。

僕らは暫し、笑い合うトウコさん達を見つめていたのだった。僕らは暫し、笑い合うトウコさん達を見つめていたのだった。

第104話 カラクサタウンへNとの出会い（前書き）

イツシュリーグを目指し旅を決意したレイジ。

新たなる旅が、今始まろうとしていた……。

第104話 カラクサタウンへNとの出会い

「ポカブ、あなたに決めた!!」

「――ポカッ!!」

モンスターボールから、元気よく飛び出すポカブ。

目の前には、野生のマメパトが。

「いくわよ、ポカブ!」

「ポカッ!!」

頷き、臨戦態勢に入るポカブ。

――こんにちは、あたしトウコ

今日故郷のカノコタウンから旅立った、新人トレーナーだ。

現在、あたしはアララギ博士から貰ったポカブと一緒に、ポケモンゲットの為にマメパトと対峙してる。

初めてのポケモンゲットで緊張してるけど、落ち着いてやれば大丈夫よね。

それに、あたしの後ろには頼もしい先輩もいるし。

「パトオオオッ!!」

たいあたりを仕掛けるマメパト。

「ポカブ、かわしてひのこ!!」

「ポカツ!」

脚に力を込め、迫るマメパトの攻撃を回避して、鼻から火球を発射するポカブ。

「パトオツ!?!」

よし、命中!!

あたしは腰のホルダーに差してある空のモンスターボールを手にとった。

「あ……」

「いっけえ、モンスターボール!!」

ボールをおもいっきり投げ、それは怯んだマメパトに当たりボールの中に取り込まれた。

やった、初ゲット……。

「あれえっ!?!」

初ゲット、そう思ったのにマメパトはボールから飛び出してしまった。

な、何で!?　ちゃんとダメージを与えたのに。

「トウコ、マメパトへのダメージが少なすぎたんだ。もう少しダメージを与えないとゲットできないよ」

後ろからあたしにアドバイスをくれたのは、大先輩であり……ひょんな事から一緒に旅をすることになったレイジさん。

そ、そっか……まだダメージが少ないのか。

「ならポカブ、たいあたり!!」

「ポカーッ!!」

地を蹴り、マメパトに向かうポカブ。

「パトオオオッ!!」

むっとした表情を見せながら、マメパトは小さな翼を羽ばたかせる。

すると風が巻き起こり、ポカブはその場で立ち止まり飛ばされないように歯を食いしばっている。

こ、これってマメパトのかぜおこし!?

「パトーッ!!」

「ポカーッ!？」

動きを止めたポカブを、マメパトがたいあたりで吹き飛ばす。

コロコロと転がるポカブ、けどダメージは小さかったのかすぐに立ち上がってくれた。

「よくもやってくれたわね、ポカブ、もう一度たいあたり!!」

「ポカーッ!!」

再び地を蹴り、一気にマメパトへと迫る。

そして、ポカブのたいあたりがマメパトに突き刺さり、吹き飛ばされた。

まだ早い、もう一撃!!

「ひのこ!!」

「ポッカー!!」

火球を発射するポカブ、それはマメパトへと命中して……。

「……パト……」

「あーっ!!?」

ダメージが大きすぎたのか、マメパトは戦闘不能に……。

や、やりすぎた……。

「あらら……」

苦笑を浮かべつつ、倒れたマメパトにレイジさんは黄色いひし形の薬を口に含ませる。

あれ、確かポケモンを戦闘不能から解除させるアイテム「げんきのかけら」よね……。

結構高級品で、少なくとも新人トレーナーのあたしじゃ買えない代物だ。

げんきのかけらを口に含むとマメパトはすぐさま起き上がり、そのまま飛び立っていった。しまった。

「……………はあ」

あたしは大きなため息をついてしまう。

あゝあ、失敗かあ……。

〈今度は与えるダメージが多すぎましたね〉

そう言うのは、レイジさんの頭に乗ってるラルトスのティナ。

なんでも、この子は特別なラルトスらしくテレパシーを用いて人間と会話できる能力があるらしい。

すぐに慣れるとは言ってたけど、やっぱりまだ慣れない……。

「ポカ……………」

「……ポカブ、あなたのせいじゃないわよ。あたしの指示ミスだから」

しょんぼりするポカブの頭を撫で、お疲れ様と言いながらボールに戻す。

「初めの内はこういう事もあるさ、あまり気にしないで次に繋げていこう？」

「……………はい」

うう、レイジさんにカッコ悪い所見せちゃった……恥ずかしいなあ。

あたしのせいで寄り道してるのに、レイジさんは文句一つ言わない、さすが大先輩だ。

……レイジさんもああ言ってくれてるし、次は絶対にゲットしよう！！

——日が沈み始めた夕方

ようやく、隣街のカラクサタウンへと辿り着いた。

普通に行けばお昼過ぎくらいには着けたんだけど、あたしが野生のポケモンを追いかけて回してたせいで、こんな時間になってしまった。

「とりあえず、ポケモンセンターに行こう。ポカブもだいたい疲れて

るみたいだしね」

「そうですね」

ポカブも頑張ってくれたし、ゆっくり休ませてあげないと。

そう思い、少し駆け足でポケモンセンターへ向かおうとして。

「きゃっ」

「……………」

少し余所見をしていたせいで、誰かとぶつかってしまった。

幸いどちらとも倒れるなんてしなかったけど、あたしはすぐさまその人に向けて頭を下げる。

「ご、ごめんなさい。余所見してて……」

「……大丈夫だよ。ボクは平気さ」

よかった、ほっとしつつあたしは顔を上げて。

ぶつかった相手が、まだ少年と呼べるような人だと気がついた。

黒い帽子に、長い黄緑に近い緑の髪。

華奢で儚く、なんだか不思議な雰囲気纏っていて……ちよつと、恐いと思ってしまった。

「トウコ大丈夫？　すみません、連れが失礼をしまして」

「大丈夫。それより……キミ達はポケモントレーナーなのかい？」

「え、ええ……そうですけど」

「……じゃあ、君達もポケモンを戦わせて満足するような人達なんだね」

「えっ……？」

何を言っているのだろうこの人は。

なんだかちょっと危ない人に出会ってしまったようで、あたしはおもわずレイジさんの後ろに隠れてしまった。

へいきなり何を言っているのですかあなたは？

わたくしには、あなたが何を言いたいのか理解できませんね」

敵意剥き出しの口調でティナは口を開く、どうやら彼女もこの少年は得体の知れないものという認識であるらしい。

ティナの声を聞き、少年は驚いたような表情を浮かべる、まあ当たり前だけど。

「キミは……人と会話ができるのか」

へええ、わたくしは生まれが少々特殊なものでして。そんな事より……特に用がないなら消えていただけませんか？

わたくし達はこう見えて忙しいんです」

行きましょう、レイジさんにそう告げるティナ。

レイジさんも頷き、一礼してからあたしの手を掴んでポケモンセン
ターへと向かった。

……あの人、何者なんだろう。

なんか気になる……というか、変な感じだ。

また会うような、そんな予感めいた何かがあたしの胸に渦巻いてい
る。

……それはそうとして、レイジさん。

いきなり手を握らないでください、びっくりするし……ちょっと恥
ずかしいですから。

「——とりあえず、まずはサンヨウシティに行ってみましょう」

ポケモンを預け、待ってる間に次の目的地を決めようとレイジさん
と話を進める。

イッシュリーグに出るためには、8つのジムを回りジムバッジを集
めなくてはならない。

他の地方はバッジ4つでいいみたいだけど……イッシュでは8つ集

めなくてはならず、正直大変だと思う。

まずは確実に、近場から回っていこうとあたしは意見したら、レイジさんは頷きを返しあたしの案に賛成してくれた。

「でもレイジさん、本当にいいんですか？」

「何が？」

「その……あたしと一緒に旅する事になって」

元々、あたしとレイジさんが一緒に居るのは、アララギ博士があたし1人の旅では不安ということでレイジさんが一緒に旅をしてくれるようになったんだけど……。

はつきり言って、あたしはレイジさんにとって足手まといになっているのではないか、そう思っている。

あたしは新人、レイジさんはポケモンリーグに出られるくらいのベテラントレーナー。

あまりにもアンバランスなパーティーだ、けど……。

「僕は、別に君と旅するのは楽しそうだと思うよ。それに旅は多い方が楽しいさ」

レイジさんは、優しく微笑んでそう言ってくれた。

だから気にしないでいいよ、レイジさんは言葉を続けあたしの頭を優しく撫でる。

「―――っ」

は、恥ずかしい……確かにあたしの方が年下だけど、子供扱いしないでくださいよ……。

あたしがそう言うのと、ごめんねと謝りながらあたしの頭から手を離すレイジさん。

……残念だと思ってしまったあたしは、やっぱり子供なのかも。

〈ところでお父様、トウコ〉

「ティナ、どうかしたの？」

へいえ。その……先程の少年ですが、もしかた出会う事があれば……極力関わり合いにならない方がいいと思います」

「えっ……」

さっきのって、あの不思議な感じの男の子のことかな？

へあの少年、得体の知れない何かを感じました、危険………というのは早計な考え方ですが、あまり関わり合いにならない方がいい類の人間なのは確かですから」

「………そうだね、ティナの言う通りかもしれない」

「レイジさん？」

レイジさんまでそんな事を言うなんて、少し驚いた。

「トウコ、あなたもわかりましたね?」

「え、あ、うん……」

強い口調でそう言われてしまい、あたしはおもわず頷きを返す。

まあ、また会うかはわからないけど……とりあえず、レイジさんも
そう言ってるし言う通りにしておこう。

「——とりあえず、こんなものだね」

ポケモンを回復してもらってから、あたしはレイジさんと一緒に買
い物に勤しむ。

買い物、と言っても勿論旅に必要な物を買うためだ。

でも、あたしには何を買えばいいのかわからないから、レイジさん
について回る事しかできない。

新人だから仕方ないんだけど……何だかなあ。

「よし、じゃあそろそろポケモンセンターに戻って休もう。朝早く
に出発すれば二、三日でサンヨウシティには着けるだろうし」

「はい、わかりました」

レイジさんと一緒に外へ出る。

と。

「やあ」

「……………」

あたし達の前に現れたのは、先程の少年。

レイジさんとティナの表情が僅かに険しくなり、あたしも先程の言葉もあって少年に対して警戒心を抱いた。

「…………何か用ですか？」

最低限の礼儀として敬語を使うが、レイジさんの瞳にはありありと警戒の色が見えている。

しかし、そんな瞳も気にせずに…………少年は自己紹介を始めた。

「ボクの名前はN、ポケモンを解放する為に各地を回っているんだ」

「……………」

ポカんと、口を開けてしまった。

ポケモンを解放って…………意味不明なんだけど。

もしかして、新手の宗教団体とか？

「……それは、どういう意味だ？」

「ポケモンは人間と共に居るような存在じゃない、人間に道具のように使われるなんて間違ってる、だからボクはポケモンを解放する。ポケモン達だって、人間に使われるのは耐えられないだろうしね」

「何故そんな事が判るのですか？　まるでポケモンから話を聞いたかのような口振りですね」

「……でもだからこそわかるはずだ、人間はポケモンに対して主従関係を強要しようとする。」

「そんな事、許されるような事じゃない」

「……………」

ティナも、レイジさんも否定の言葉を返さない。

けど、あたしはこのNとかいうヤツに食ってかかった。

「ちょっとアンタ、さっきから聞いてれば好き勝手言っちゃって！！」

あたしはポケモンを道具のように使っていないし、主従関係を強要してもいいわ。

勝手に傍迷惑な事しないでくれる！？」

「……………」

がーっ、と怒鳴りつけるが、Nはまったく動じずに言葉を返した。

「それはキミのエゴだよ、キミが勝手にそう思っているだけさ。」

——それを、証明できるのかい？」

「————っ」

あったまきた！！

確かに、あたしはまだポケモン達と出会って日は浅いし、本当の意味で信頼関係はないかもしれない。

でも、だからって全てのトレーナーを否定するような言い方は、絶対に許せない！！

「だったら、あたしがポケモン達と主従関係じゃないって所を……絆を、見せてあげるわよ！！」

モンスターボールを構える、するとNも不思議な笑みを見せ。

「なら、見せてごらん？」

なんて、どこか遊んでるような口調で、あたしの挑戦を受けたのだった。

第105話 Nとのバトル〜トウコ初めての挫折〜(前書き)

突如として現れた謎の青年N。

彼の言葉にトウコは怒りを覚え、バトルをする事になったのだが…
…。

第105話 Nとのバトル〜トウコ初めての挫折〜

「……………」

「……………」

睨み合う少女と青年。

否、この表現には誤りがあり、睨んでいるのは少女——トウコのみ。

青年——Nと名乗った青年は、今にも噛みつかんとしているトウコの睨みにも、まるで意を介していない。

〈…………あの青年、何だか不思議と言いますか…………やはりいけ好かないですね〉

今にもバトルが始まる2人を見守りながら、ティナは少々嫌悪感を含んだ口調でレイジへとそう告げる。

「……………」

それには応えず、レイジは自らをNと名乗る青年をじっと見つめていた。

ハイライトが消えた、少し無機質な瞳。

穏やかそうな表情を浮かべているが、まるでよくできた細工を見ているかのようだ。

自己がない人形ではないだろうが、どうにもレイジにはNが普通の人間としての認識を抱けない。

一体、彼は何者なのだろうか。

得体が知れない、危険な人物には見えないが……関わり合いにならない方がいい類の存在だと、レイジは思う。

「ポカブ、あなたに決めた!!」

「――ポカツ!!」

「……………」

静かにボールを投げ、Nはポケモンを出す。

出てきたのは――チヨロネコ。

「……ボクのトモダチ、好きに戦うといい」

優しくそう告げるN、チヨロネコもこくりと頷きポカブと対峙した。

「好きに戦えって……指示を出さないつもり？」

「必要ないよ、トモダチに命令する意味なんかどこにもない。

偉そうに命令するトレーナーとは違うんだ」

「っ、だ、誰が偉そうなの!!」

「キミ達トレーナーが、だよ。ポケモンを戦う道具にするトレーナ

ーを、ボクは許さない」

「だから、あたし達はポケモンを道具になんかしてない!!
一緒に強くなって、苦しい時も嬉しい時も共に分かち合って――」

「キミの独り善がりな意見はいらない、それよりも……先程言った
絆を見せてくれないか？」

「っ、いいわよ。見せてやろうじゃない!!」

本当に腹が立つ、トウコは苛立ちを隠さぬままそう言い放ち――バ
トルを開始させた。

「ポカブ、たいあたり!!」

「ポカーッ!!」

地を蹴り、チヨロネコに向かっていくポカブ。

……Nは指示を出さない。

しかし、チヨロネコは迫るポカブを見据え、寸前で攻撃を回避する。

「ひのこ!!」

「ポッカー!!」

今度は鼻から小さな火球を撃ち出す。

「――ニャッ!!」

一声鳴き、ひのこを回避しながらポカブとの間合いを詰め……右の爪でポカブに攻撃する——！

「ポカアッ!？」

「ポカブ!!」

「……………」

クスリとも笑わず、ただ黙ってバトルを眺めるN。

その態度が、トウコには馬鹿にされているように見え、ますます顔を強ばらせる。

——そんな中、バトルを観戦していたティナが、ぽつりと言葉を漏らす

「…………あの男」

「ティナ、どうかしたの？」

「いえ……ちよつとまだ自分の中で確証が持てないので、その問いは今度答えます」

「……………」

歯切れの悪いティナの言葉に、レイジは首を傾げた。

「たいあたり!!」

「ポカーッ!!」

再び、接近戦を仕掛けるポカブ。

しかし、チヨロネコはその度にまるで遊ぶかのように、ひよいひよいとポカブの攻撃を回避していく。

「っ……ポカブ、ひのこよ!!」

トウコの中で芽生えていく、焦りという感情。

それが口調にも現れ始め、しかし彼女はそれに気づかない。

（どうして……？ どうして攻撃が当たらないのよ!!）

たいあたりもひのこも、いくら出してもチヨロネコには当たらず、逆に反撃は避ける事すらできない。

トレーナーの経験の差ならわかる、けれどNは何の指示も出していない。

——もしかしたら、自分とポカブに絆がないから弱いのか？

（っ、そ、そんな事あるわけない!!）

芽生えた疑問を振り払うようにトウコはバトルに集中しようとするが、一度考えてしまったその疑問は消えてくれず、結果的にトウコがますます焦り出す要因を作り出してしまう。

「ポカブ当ててよ!! たいあたり!!」

「ポ、ポカーッ!!」

主人の苛立ちを含んだ声に少し驚きながらも、ダメージが溜まった脚を懸命に動かし、ポカブは攻撃を仕掛けるものの。

「ニャニャーッ!!」

「ポカアッ!？」

その前に、チヨロネコの爪がポカブを襲った。

トウコの前まで吹き飛ばされ、倒れるポカブ。

それを見て、Nは静かにバトルの終わりを告げた。

「——ここまでにしよう。これ以上はポケモンが可哀想だ」

チヨロネコをボールに戻し、立ち去ろうとするN。

「ち、ちよつと待ちなさいよ!! まだ勝負はついてない!!」

「……キミは、傷ついたこの子をまだ戦わせるつもりなのかい?」

静かに、けれど確かな怒りをその瞳と口調に織り交ぜ、Nは言い放

っ。

その瞳を見て、トウコは何も言い返せなくなり俯いてしまった。

そんな彼女から視線を外し、Nの視線はレイジへと注がれる。

「……綺麗で、力強い瞳だね。キミは……ポケモンを心から大切に
してる」

「……………」

「……できる事なら、キミのような人からポケモンを解放したくはないけど……仕方ないよね」

〈勝手な事をほざかないでもらえますか？ たとえ天地がひっくり返ったとしても、わたくし達がお父様から離れる事など有り得ません〉

もうこれ以上、お前と話す必要などない。

完全にNを敵と認識したティナは、殺気すら込めた瞳で彼を睨む。

だがそれでも、Nは動じた様子もなくレイジ達に背中を見せ。

「キミとは、またどこかで会ってみたいね」

トウコには目もくれず、Nはその場から去っていった……。

「……………」

ポケモンセンターにあるトレーナー用の宿泊部屋で、あたしは体育座りのまま顔を埋めていた。

――負けた

あれだけ啖呵を切っておいて、まるで歯が立たなかった。

ううん、そんな事はどうだっていい。

……ポカブを、不用意に傷つけた。

攻撃が当たらなくて焦って、負けそうになったからポカブに無理をさせてしまった。

挙げ句の果てには、あのNとかいう奴に。

『……キミは、傷ついたこの子をまだ戦わせるつもりなのかい?』

憐れみと、怒りを含んだ声で、そう言われた。

その瞬間、あたしは自分が何をしようとしていたのかを思い知らされ……情けなくなって、泣きたくなった。

負けた事よりも、何より自分がポカブを無理矢理戦わせようとした事が、情けない。

……何が、絆よ。

無理矢理戦わせようとして、挙げ句にあんな奴にあんな事を言われるまで気づかないくせに、絆が結ばれてるなんて思い上がってる。

アイツの言う通り、独り善がりでしかないのかな？

「……ポカブの治療、終わったよ」

「レイジさん……」

モンスターボールを手にしたレイジさんが、部屋に入ってきた。

泣いてる所を見られたくなくて、私は視線を逸らす。

「……………悔しかった？」

「……………」

「それとも……自分のせいで、ポカブを不用意に傷つけたと思って、落ち込んでる？」

「っ、レイジさん……もしかしてエスパー？」

「違うよ。でもトウコはポケモンを大事にしてるから、自分を責めてるんじゃないかと思って。」

——僕の幼なじみも、君によく似てるから」

「……………」

はい、とポカブの入ったモンスタールボールを手渡してくるレイジさん。

……でも、あたしはポカブに合わせる顔が。

へトウコ、あなたはポカブが信じられませんか？

「えっ……？」

へあなたとポカブは、確かにまだ真に絆を結んでいるとは思えません。

しかしそれは仕方ないこと、まだポカブと知り合って日も浅い。ですが、少なくともポカブはあなたの事を好いています。そんなポカブを、あなたが信じてあげなくてどうするのですか？

「……………」

ポカブを、信じる……。

ティナに言われ、あたしは少し躊躇いながらもボールからポカブを出した。

「ポカ………」

「ポカブ………」

ポカブを抱きかかえる、怒ってない……？

「ポカッ!!」

ニッコリと、いつもの笑顔をあたしに向けてくれるポカブ。

へほら、全然怒ってもいないしあなたを見限ってもいないじゃないですか

「ポケモンはね、優しい人間にしか懐かないんだ。そして懐いた人間を見限ったりしない。」

トウコ、ポケモンと仲良くなるには何よりポケモンを信じてあげないとダメなんだ」

「……ポケモンを、信じる」

ポカブに視線を向ける、ニッコリと微笑みを返された。

……嬉しいな、こんなあたしでもポカブはまだ信じてくれるんだ。

「ありがとうポカブ、あたしとまた頑張ってくれる？」

「ポカッ!!」

大きく頷きを返してくれるポカブ。

へもちろん、そう言っていますよ

「……よし、なんだかやる気出てきた!!」

さっきまでの暗い雰囲気なんて吹き飛ばして、あたしの中でトレー

ナーの情熱が湧き上がってきた。

ポカブの為にも、自分の為にも頑張らなきゃ！！

「レイジさん、早く出発しましょう！！」

「はいはい……」

へやれやれ、トウコは意外と単純ですね

呆れたようなティナの声も、今は気にしない。

こうなったら、さっさと強くなってNのヤツをぶっ飛ばす！！

ぐっと拳を握りしめ、あたしは決意を新たに抱く。

見てなさいよN、次に会ったら……絶対に勝つからね！！

第106話 トウコとシママ〜初ゲットとバトルクラブ!〜（前書き）

イッシュリーグを目指すレイジとトウコ。

最初のジムがあるサンヨウシティに向けて、旅を続けていた。

第106話 トウコとシママ、初ゲットとバトルクラブ！

「――トウコ、起きて」

「……う、にゅ……」

身体を揺すられる。

もう……何よママ、まだ朝早いよ。

「ほらトウコ、そろそろ起きて」

「……ママ、もう少し眠らせてよ」

〈何バカな事を言ってるんですか〉

「あいたっ」

頭を叩かれ、文句を言いながら起き上がると。

「おはよう、トウコ」

「あっ、ひゃあ!？」

慌てて寝袋から抜け出しレイジさんから離れる。

って髪!! 髪がボサボサになってる!!

「レ、レイジさん見ないでください!!」

ううゝ、こんなにボサボサに……恥ずかしい。

それに、寝言でママなんて言っちゃったし……。

「……朝食はもうできてるから、髪を直したらこっちに来てね？」

そう言って、レイジさんはその場から離れていく。

あんなに失礼な態度だったのに……やっぱりレイジさん、優しいな。

へ女の子なんですから、もう少し身嗜みに気をつけた方がいいですよ」

「むっ……わかってるわよ」

へまあ、お父様の幼なじみのカグヤは全然身嗜みに気をつけない野生児でしたが……」

「へ、へえ……」

レイジさんに幼なじみの女の子が居るのは聞いたけど、野生児って……。

ちょっと気になって、そのカグヤさんという人の事を訊いてみた。

へお父様の一つ上の17歳ですが、全然女性らしくないですし、平気で男の人の前で下着姿になろうとしますよ。

おまけに「減るものじゃないし」とか言ってくる始末ですから」

顔や性格は文句なしなんですけどね、何かを思い出したのかため息をつくティナ。

「……………」

その人、本当に女の子？

いや、子供ならまだわかるけど……17歳なんだよね？

〈野生児ですから〉

えっ、そんな理由？

……なんか、ちょっと会いたくなつたような、会いたくないような。

髪を直しながら、あたしは見た事がないレイジさんの幼なじみってどんな人なんだろう、と思ってたわけで。

——髪を直し、既に用意された折り畳み式の椅子に座る

「いただきます」

今日の朝食はパンにスープにサラダ、みんなレイジさんが用意してくれた。

「ごめんなさいレイジさん……」

あたしの方が後輩なのに、何の用意も手伝わなくて……情けない。

へ気にしないでいいですよトウコ、だってあなた家庭的な事何一つ

できないじゃないですか」

「うっ……」

グサリと、ティナの言葉が胸に突き刺さる。

だ、だってしょうがないじゃない、あたし不器用なんだから。

「女性なのに家庭的な事ができなければ、伴侶を見つける事はできませんよ？」

「余計なお世話よ」

まったくもう、ティナってば小姑みたい。

まだ13だから、彼氏とか結婚とか……少し興味あるけどさ。

「ところでトウコ、サンヨウシティにはまだ時間が掛かるけど、ジムに挑む前にポカブ以外のポケモンをゲットしておいた方がいいよ」

「そうなんですよね……」

まずはサンヨウシティジムに挑もう、そう思ったのはいいんだけど……あたしはまだポカブ以外のポケモンを持っていない。

ゲットしようとは思ってるんだけど、つい力加減を間違えちゃってゲットし損ねてるし……。

「へお父様、トウコ、後ろに何か居ますよ」

「えっ？」

「わかってる」

素早く立ち上がり、後ろの茂みを睨むレイジさん。

あたしも立ち上がり、身構えると茂みの中から何か出てきた。

「シマ」

「あれは……」

お尻のポケットからポケモン図鑑を取り出し、茂みの中から出てきたポケモンを調べてみる。

「シママ、か……」

こちらをジッと見てるけど、逃げようとはしない。

……よし、こいつゲットしよう!!

「シママ、あたしとポケモンバトルをしてもらおうよ!!」

「シマ？」

「ポカブ、あなたに決めた!!」

「ポッカー!!」

「——シマ！」

ポカブの登場で、シママの顔つきが変わった。

どうやら向こうもやる気満々らしい、こっちも好都合！

「ポカブ、たいあたり！」

「ポカー！！」

地を蹴り、シママに向かっていくポカブ。

「シマー！！」

前脚を上げるシママ、そのまま向かってきたポカブに叩きつける――！

「あつ、シママのふみつけ！？」

「ポ、ポカ……」

踏みつけられもがくポカブだが、シママの脚からは抜け出せない。

ど、どうすれば！？

「そ、そうだ。ポカブ、そのままひのこ！！」

「ポ、ポカーッ！！」

地面に鼻を押し付けたまま、火球を発射するポカブ。

それにより地面で小さな爆発が起き、その衝撃でポカブがシママの脚から抜け出す事ができた。

「ニトロチャージ!!」

「ポカッ! ポカポカポカポカポカ……!」

地を蹴るポカブ、しかし先程とは違い身体に炎を纏っている。

やった、ニトロチャージ成功!!

「ポカーッ!!」

「シマーッ!？」

シママの身体に、ポカブの身体が突き刺さる。

「ひのこ!!」

「ポッ、カー!!」

「シ、シマ……」

よし、今だ。あたしは空のモンスターボールを手に取りそして……。

「いっけえ、モンスターボール!!」

シママに投げつけ見事命中、そのままシママはボールの中に。

「……………」

ユラユラと揺れるモンスターボール、この揺れが終わらないとゲットした事にならない。

お願い、あたしは握り拳を知らぬ間に作りジッとボールを見つめ続ける。

暫しの時間が流れ――揺れが、収まった。

「あ……」

……ゲット、した？

「やったね、トウコ」

〈なかなかよかったですよ、お父様には適いませんけど〉

「……………」

地面に落ちたモンスターボールを手取る。

……あたしが、ゲットしたんだ。初めて……ポカブと力を合わせて。

「――やったー！！」

おもわず、その場でピョンピョンと跳ねてしまう。

だってしょうがない、それくらい嬉しかったのだから。

「えへへ……」

「ポカ♪」

ニコニコするポカブを抱きかかえ、労う意味を込めて頭を撫でる。

「よし、この調子でガンガンポケモンをゲットするぞー!!」

「ポカーッ!!」

「……感動するのは結構ですが、食事に戻りますよ」

少し呆れたようなティナの声で、我に返る。

うつ……レイジさんも笑ってる、恥ずかしい。

で、でもでも、嬉しかったんだからしょうがないじゃない!!

シママをゲットして、あたしは暫く口元を緩めながら歩いていると……街に辿り着いた。

この街の次がサンヨウシティだ、今日はここで泊まって……明日中にはサンヨウシティに到着する予定だ。

「そうだレイジさん、今日はこの街のポケモンセンターで一泊するんですよね?」

「そうだけど、それがどうかした?」

「もしよかったら、バトルクラブに行きませんか？」

「……バトルクラブ？」

首を傾げるレイジさん、あれ……もしかしてバトルクラブを知らない？

そう訊くと、頷きを返された。

ちょっと意外……レイジさんにも知らない事とかあるんだ。

いや、なんとなくレイジさんってなんでも知ってる感じがしたから。

「バトルクラブっていうのはですね、簡単に言えば色々なトレーナーとバトルできる施設の事なんですよ。

バトルクラブに登録したトレーナーと連絡を合って、バトルしたり情報を交換したり……トレーナー同士の親睦と能力向上の為に最近できた視線なんです」

「へえ……イッシュは進んでるね、カントーにはそんな施設なかったよ」

感心したようなレイジさん、ふふっ……なんだかちょっと優越感。

だって、あたしがレイジさんに説明する事なんてまずありえないから、ちよつと、ね。

「それですね、ゲットしたばかりのシママにバトルを経験させてあげたいから……」

「わかった。それじゃあまずはバトルクラブに行こうか？」

「はいっ」

やった、遂にバトルクラブに行ける！

前から行ってみたかったんだあ、ポケモンバトルクラブに。

——というわけで、バトルクラブにやってきたあたし達

えっと……まずは受付で登録だね、予習はしてきたけど来たのは初めてだから緊張しちゃうな。

少し上擦った声で、受付のお姉さんに話し掛けた。

「すみません、トレーナー登録をしたいんですけど……」

「はい。ではトレーナーカードを見せてもらえますか？」

そう言われ、あたしとレイジさんは早速トレーナーカードをお姉さんに渡す。

すると、すぐ傍にある機械の中にトレーナーカードを差し込んで、なにやら操作を始めた。

「カノコタウンのトウコさんに、あら……カントーのマサラタウンから来たの？」

「はい」

「マサラタウンのレイジさんですね。はい、登録完了しました」

トレーナーカードを返してもらった、登録も完了したし……早速バトルの相手を探してみよう。

「あの、今バトルできる人は居ますか？」

「えっと……ごめんなさいね、今バトルできるトレーナーさんは居ないみたい」

「そうですか……」

残念、今日の所は諦めよう……。

「なら、今日は僕とバトルしてみる？」

「えっ、いいんですか？」

「もちろん。トウコもシママにバトルを経験させてあげたいんですよ？」

ほら行こう、そう言ってバトルフィールドへと向かうレイジさん。

うう……レイジさん、手を握らないでください、恥ずかしいです……。

「あらあら、仲が良いカップルね」

「そ、そんなんじゃないありません!!」

慌ててお姉さんのからかうような言葉を否定する。

レ、レイジさんは……別に、そういうんじゃないくて……先輩ただけなんだから!!

「トウコ、顔が赤いけど大丈夫?」

「だ、大丈夫です!!」

誰のせいだと思ってるんですか!!

レイジさんが、その……不用意に手とか、繋ぐから……。

へトウコ、気持ちはわからないわけではありませんが、早く準備してください

「わ、わかってるわよ!」

うう、ティナのバカ……急かさなくてもいいじゃない、あたしはこういう事に慣れてるわけじゃないんだから。

……でも、レイジさんはどうなのかな?

なんか、女の子の扱いに慣れてるというか……あたしの事、子供扱

いしてない？

「……………」

なんか……ムカつく。

よくわかんないけど、ムカついた。

「シママ、あなたに決めた!!」

「シマ」

「レイジさん、お願いします!!」

「う、うん……ツタージャ、お願い!!」

「——タージャ」

あたしの態度に驚きながら、ボールからツタージャを出すレイジさん。

「スパーク!!」

「シマー!!」

先攻後攻を決める間もなく、あたしはシママに指示を出す。

雷を身に纏いながら、ツタージャに突進していくシママ。

「ツタージャ、かわすんだ!!」

「タジャー!!」

左に跳ぶツタージャ、でもシママは左側の脚を強く蹴り回避したツタージャを逃がす事なく突進した。

「タジャー!？」

「っ」

「続いてふみつける攻撃よ!!」

「シ、マー!!」

跳躍し、倒れているツタージャに向かって落ちていくシママ。

「グラスミキサー!!」

「タジャアアッ!!」

シママに向かって尻尾を回転させるツタージャ、すると葉っぱを含んだ突風が発生する。

「シマッ!？」

シママは避けられない、今空中に居るのだから当たり前だ。

そのままグラスミキサーの突風に巻き込まれ、地面に叩きつけられた。

「シママ、大丈夫!？」

「シ、シマ……」

ダメージは大きいけど、まだ戦えるとアピールするように立ち上がるシママ。

「やどりぎのタネ!!」

「タジャ!!」

ツタージャの身体から発射される、3つの小さな種。

それがシママの身体に触れた瞬間——瞬時に種から蔦のようなものが現れシママを拘束してしまった。

「シママ!!」

拙い、このままじゃシママのパワーが全部吸い取られちゃう!!

どうすれば……どうすればいいの!？

「————っ」

焦っちゃダメだ、あたしが焦ってどうするの!!

考えて、どうすればあの状態から——

「————そうだ!!」

ポケモン図鑑を取り出し、シママの頁を開く。

……よし、これだ！

「シママ、ニトロチャージ！！」

「——っ」

「シ、シマアアッ！！」

全身に炎を纏うシママ、それにより身体を拘束していたやどりぎのタネが燃え尽きた。

やった、成功！！

「タジャ！？」

「……なる程、シママもニトロチャージが使えるのか」

確かな驚きを声に含むレイジさん。

「シママ、今度はツタージャに向かってニトロチャージ！！」

「シマシマシマ……！！」

再び全身を炎に包み込みながら、ツタージャに向かって突撃するシママ。

ニトロチャージはほのおタイプ、当たればツタージャに大ダメージよー！！

——でも、それは当たればの話なわけで

「ツタージャ、つるのムチで上空に!!」

「えっ!？」

レイジさんの指示で、ツタージャはつるのムチのまるでバネのように使って空高く飛び上がる。

天井すれすれの高さまでは、いくらシママでも届かない。

目標を見失い、炎を消し立ち止まってしまうシママ。

その隙は逃さず——ツタージャはシママの背中に狙いを定め。

「グラスミキサー!!」

「タジャアアッ!!」

突風を、シママの背中へと叩き込む——!

「シママ!!」

倒れるシママ、あたしは呼びかけるけど……。

「……シマ……」

シママは情けない声を出しながら、動かない。

……負けちゃった。

「ツタージャ、お疲れ様、いいバトルだったよ」

「タージャ」

華麗に着地、手を腰に当て胸を張るツタージャ、そんな彼女にレイジさんは苦笑しながら頭を撫でてあげた。

「シママ、あなたもいいバトルだったわよ」

シママの頭を撫でてからボールの中に入れてあげた、ゆっくり休んでね。

「さっきのニトロチャージはよかったと思う、その場で思いついたの？」

「はい、なんとか上手く行きましたけど……やっぱりまだレイジさんには適いませんね」

へですがトウコ、あなたのトレーナーとしての才能はあると思いますよ、わたくしが保証してあげます」

「はいはい、どうもありがとう」

ティナってば、偉そうなんだから。

……でも、今日のバトルは自分でもなかなかよかったと思う。

よし、サンヨウシテイのジムでも今の調子を忘れないようにしよう

！！

グツと握り拳を作り、あたしは来るべきジム戦に思いを馳せるのだ
った。

キャラクター紹介

【名前】 レイジ

【性別】 男

【年齢】 16歳

【一人称】 僕

【身長】 173cm

【人物】

『イツシュ編』の主人公の1人。

ティナの提案で一年後に迫るイツシュリーグに出場する為、イツシュ地方を旅する事に決め、現在はカノコタウンで知り合った新人トレーナー、トウコと旅をしている。

前回の事件の影響でポケモンと会話する力等は失われたが、ティナ達ポケモンとの絆は深い。

先輩トレーナーとして、トウコにトレーナーとしての知識を教え、また自らを鍛え直している。

キャラクター紹介2

【名前】 トウコ

【性別】 女

【年齢】 13歳

【一人称】 あたし

【身長】 153cm

【人物】

『イツシュ編』のもう1人の主人公。

カノコタウン出身の新人トレーナーで、レイジと出会い共にイツシュリーグを目指し旅立った。

ポケモンの事に対しては素直だが、勝ち気で男勝りな性格でもあり、怒ると怖い。

レイジの事は頼りになる先輩トレーナーとして尊敬しているが、彼のパートナーであるティナの事は「小姑みたい」と思っており、よつと苦手。

最初のパートナーはポカブ、まだ新米だが才能の片鱗を見せる事もある。

第107話 サンヨウシティへ小さな異変（前書き）

イツシュリーグに向けて、旅を続けるレイジ達。

最初のジムがあるサンヨウシティに、ようやく辿り着いたようだが……。

第107話 サンヨウシティへ小さな異変

――街の灯りが、僕達を迎え入れてくれた

「着いた……サンヨウシティだよ、トウコ」

「つ、着きましたね……」

少し疲れたような表情を見せながらも、旅の仲間であるトウコは嬉しそうに返事を返す。

最初のジムがある街に辿り着いたのだ、嬉しいのも無理はない。

さて早速ジムに挑戦……と言いたい所ではあるものの、今は夜も遅い時間なので挑戦はできないだろう。

それに僕達のポケモンも休ませてあげなきゃならないだろうし、今日はポケモンセンターで泊まる事にしよう。

その事をトウコに告げ、頷きを返す彼女と共にポケモンセンターへ。

……そうだ、たまにはこっちから連絡をするのもいいかもしれない。

「ティナ、モンスターボールをジョーイさんに預けてきてくれないか？」

それと、ついでに君も休ませてもらうといい」

へそれは構いませんが、何か用事でも？」

「まあね」

「それじゃあ、ティナ達はあたしが預かっておきます。それと部屋も確保しておきますね」

お願いね、言いながら僕が向かったのは……ポケモンセンターにあるテレビ電話。

そこにライブキャスターを繋ぎ、ある人に連絡を掛けた。

コール音が暫く響き——彼は僕の電話に出てくれた。

『よお、レイジじゃねえか。久しぶりだな』

「うん。本当に久しぶりだね……カイリ」

僕が電話を掛けた相手、それはかつて共に旅をしてきた親友でありライバルでもあるカイリだ。

相変わらず人懐っこい笑みはそのままに、けれど前よりもずっと大人っぽくなってる。

『お前、全然連絡してくれねえんだもんな、この間から何ヶ月経ってたっけ?』

「そんなにじゃないよ、4ヶ月くらいかな」

『そんなに、だよ。まあいいけど……それよか、これ見ろよ!』

「じゃーん!」なんて口にしつつ、カイリが見せてきたのはシンオ

ウのバッジケース。

「へえ、もう8つのバッジを集めたんだ」

『まあな、後はシンオウリーグに向けて特訓あるのみだ!!』

ぐっと拳を握りしめるカイリ、こういう熱い所は変わってない。

「ちゃんとヒメカ達に連絡してる？ ほったらかしにしてると……捨てられるよ？」

『恐ろしい事をさらっと言うなよ!! ただでさえ不安なんだから!!』

身震いするカイリ、安心しろ、ヒメカとミカンさんがカイリを見限るとかありえないから。

『そ、そういうお前はどうかんだよ。ちゃんとカグヤとシロナさんに連絡してるのか?』

反撃を受けた、むう……返答に困る。

『ほったらかしにしてると捨てられるぞ?』

ニヤニヤとからかう気全開のカイリだが……あいにくと僕には通用しない。

「2人はそんな事で僕を捨てるような人達じゃないよ、信じてるから」

『ぐっ……余裕発言』

勝った、いや別に勝負をしていたわけじゃないけど。

『ま、まあそれよりもだ』

あ、誤魔化した。

『お前、ポケモンセンターから連絡してるみたいだけど……マサラから離れてるのか？』

「うん、今はイッシュのサンヨウシティに居るんだ」

『は？ 何でイッシュになんか……』

「イッシュリーグに出場する為だよ」

『……………』

さらりと答えると、何故かカイリの顔がポカンとしたものになった。

はて、何か変な事を言った覚えはないんだが……そう思っていたら。

『——なんでイッシュリーグなんだよ!!!!』

凄まじく周りに迷惑を掛けるであろう音量で、叫び出した。

「……カイリ、うるさいんだけど」

『やかましい！　ってか何でイッシュリーグに出場しようとしたんだよ！』

「初めはティナが提案してきたんだ、僕自身マサラでのんびりする生活にも飽きが来たからさ」

『シンオウリーグに出場しろよ！！』

「無茶言わないでよ、シンオウリーグまであと3ヶ月もないのに、今から8つのジムを回るなんてできるわけないだろ？」

まあできなくもないが、僕は忙しくなく旅するのは嫌いなので、どの道却下なのだが。

『……お前、俺とシロナさんの約束………忘れたのかよ』

「もちろん覚えてるさ」

いつか、自分達の全てを出し切るようなバトルをしよう。

カイリ、そしてシロナさんと誓ったこの約束を、忘れたわけではない。

『じゃあ何で……』

「1つはさっきも言ったように時間がないこの状態で旅をする事に決めたから。」

もう1つは……僕はまだ未熟だからね、今よりもっともっと強くなってからじゃないと、自分が納得できない」

『むう……』

不満を隠そうともしないが、一応の納得したらしくカイリはこれ以上は何も言っていない。

「ごめんねカイリ、でも君ならわかってくれると思ってる」

『……そういう言い方は卑怯だよなあ』

やれやれ、と肩を竦めるカイリだが、その表情は笑顔だ。

『……でも、お前がまた旅をする気になってくれたのは、やっぱり嬉しいな』

「どうして？」

『だってよ、ロケット団との戦いが終わって……お前、何だかやりきったみたいなの顔してたから、なんか……空っぽになっちゃったみたいで、さ』

「……………」

精一杯言葉を選びながら、けれど隠さずに言ってくれるのは、彼の美徳だ。

……確かに、彼の言う通りあの時は僕の心は真っ白だった。

選定者としての役目を終え消える、そう思っていたら――僕はアルセウスに生かされた。

だから、生かされた分だけ好きに生きる。選定者としてではなく……ただの人間として。

「……ありがとうカイリ、やっぱり……君は僕にとって一番の親友だ」

『よ、よせよ……照れちまうだろ』

鼻の頭を掻きながら、赤い顔を隠すようにそっぽを向くカイリ。

「……また、君やみんなと旅がしたくなってきたな」

カントーやジョウト、シンオウで旅をしていた思い出が、カイリと話す事で鮮明に頭の中に浮かんできた。

そんな、僕のぽつりと呟いた言葉に……カイリは、何か閃いたようにぽんと手を叩いた。

「……どうしたの？」

『お前さ、また俺と旅したいって言ったよな？』

「言ったけど……それがどうかしたの？」

『いやいや、我ながらいいいアイデアを思い浮かんだというか……。お前、今サンヨウシティに居るんだよな？ 暫くはその街に滞在するのか？』

「どうだろう……明日にはジムに挑戦するつもりだから……まだわからないよ」

『そうか……うん、でもまあいいか。急いで行けばいいだけだもんな』

「……………」

なにやらブツブツと呟いているカイリ、「二、三日くらいで……」とか言ってるけど、何のことなんだろう？

僕が首を傾げていると、カイリはニヤリと面白い事を思いついたような笑みを見せながら。

『わりいレイジ、ちょっと急用を思い出したから、またな！』

「え、ちょ……」

僕が何か言う前に、カイリとの電話を切られてしまう。

……何なんだ？

「レイジさん、どうかしました？」

僕を見て、首を傾げるトウコ。

なんでもない、と返事を返しながらも……カイリのおかしな様子に、僕は始終首を傾げていたのだった。

「ところでレイジさん、明日はジムに挑戦するんですね？」

「そのつもりだよ、トウコもでしょ？」

「あ、はい。でも……なんかちょっと緊張するというか……それとポカブとシママ、どちらを出そうか迷ってて」

「なるほどね……」

悩むのは当たり前だ、初めてのジム戦なのだから悩むだろう。

「ジムのタイプは、どうなの？」

「それが……手持ちポケモンによって、変わるらしいんです」

「と、いうと？」

「私、ほのおタイプのポカブを手持ちに加えてるじゃないですか。だとすると、相手はみずタイプを出してくるみたいなんです。」

「……なんか、不思議なジムだね」

「三つ子が経営してるジムですから、みず、ほのお、くさタイプを挑戦者によって分けるんですって」

「ふうん……」

特殊なジムのようだ、少なくとも聞いた事がない。

どうやら、挑戦者にとって有利なタイプで戦うらしい。

だとすると……ツタージャを手持ちに加えてる僕は、ほのおタイプのジムリーダーとバトルする事になるわけか。

「うーん……ポカブもシママもコンディションバッチリだし、どっちを出そう……」

うんうんと悩むトウコ、でも僕からアドバイスをする事はできない。ちょっと薄情かもしれないけど、なんでもかんでも僕が彼女にアドバイスしても、成長しなくなる。

負けて終わりなわけではないし、自分の思った通りにバトルする事だって大事なのだから。「とりあえず、部屋に行こう？　なんだったら明日1日考えて答えを出せばいいんだから、焦らずゆっくりと、ね？」

「………はい、わかりました」

少しは落ち着いたのか、とりあえず思案顔をやめてくれた。

「そういえば、今誰と話してたんですか？」

「友達とだよ、この世で一番大事な友達で……最大のライバルだね」

「ライバル……」

「今はシンオウリーグに向けて旅をしてるんだ、たまにはこっちら連絡しようと思ってね」

「……ライバル、か」

少し羨ましそうに、ぽつりとそう呟くトウコ。

ライバルという存在は、互いに自身を高め合う事ができるから……
もしトウコにできれば、きっと彼女は今よりもっと成長するだろう。

まあ、できればの話ではあるが。

「さてと、僕はそろそろ休むけど……トウコはどうする？」

「あたしも休みます、明日……よく考えてみる事にしましたから」

「ん……そっか」

どうやら、僕の意見を尊重してくれたようだ。

さて休もう……そう思ったのだが。

「そういえばトウコ、部屋の鍵はある？」

「あ……」

「？　　どうかした？」

ばつが悪そうに、トウコは視線を逸らす。

それに、何だか顔が赤いような……。

「トウコ……？」

「あ、その……えっと、ごめんなさい……」

「……………」

なんでいきなり謝ってるんだ？

首を傾げていると、トウコは躊躇いがちに口を開いた。

「その……部屋が、1つしか空いてなくて……」

「……………ああ」

つまり、相部屋になってしまったというわけか、彼女が顔を赤くした理由がわかり納得する。

「……僕は外で寝るよ、部屋はトウコが使うといい」

「いえ、そんな……」

「野宿は慣れてるから大丈夫だよ、ティナはどうする？」

へわたくしはお父様の傍に居ます、野宿でも一向に構いませんよ

決まりだね、そう思い外に出ようとする……。

「あ、あの……」

「ん？」

「えっと……あたしは別に、一緒の部屋でも……いいですから」

「むっ……」

恥ずかしそうに、トウコはそう提案してくるが、やはり女の子と一緒の部屋というのには抵抗があるというか……。

まあ、カグヤやシロナさんは全然気にしないで僕と一緒に寝ようとするけど、あの人は特殊なので話は別だ。

「ベッドなら2人分ありますし、レイジさんがよければ……ですけど」

「……むう」

「お父様、トウコもそう言っていますし……一緒でも良いではありませんか」

トウコに助け舟を出すように、ティナもそう言う。

「……まあ、いいか。」

別にトウコに対してやましい事を考えているわけではないし、彼女がいいと言うのならわざわざ断る必要はない。

そう結論を出し、僕はトウコと一緒に部屋へと向かう。

「ティナ、明日はイッシュ地方最初のジムだ、だからまずは君でバトルをしようと思う。」

「——でも、極力“あの技”は使わないでよ?」

「わかりました、お父様の指示ならば」

少し不満そうだが、僕の言葉に頷きを返すティナ。

あの技は強力だけど、ティナの身体にかかる負担も大きいからな……
：せめてキルリアに進化するまでは、極力使わせないようにしないと。

――さて、僕達がサンヨウシティに着いて3日

予定では、バッジをゲットして次のジムがあるシッポウシティを目指しているはずなのだが……。

「……………」

「トウコ、お気持ちはわかりますが露骨に苛立った顔を見せるのはやめていただけますか？」

「だって……もう3日目なんだよ!？」

「だからといって、わたくしに当たるのはおかしいのでは？」

「がーっ、と怒るトウコに少々むっとしながらも、ティナは冷静に彼女を諭す。」

さて、何故トウコがイライラしているのかというところ……。

「こっちの準備は万端なのに……どうして、ジムが休みなのよ!!」

そう、肝心のジムがもう3日も休みで挑戦できないのだ。

僕達が到着した日に丁度休みになったらしく、運がないと思ったものだ。

後回しにしてシッポウシティに行くのも考えたのだが、結局ズルズルと滞在する事に。

僕のはんびり屋だからいいけど、トウコとしては早く挑戦がしたいらしいので、こうしてイライラしてるわけで。

……しかし、どうも引つかかる。

ジムリーダーが所要でジムの留守にする事は珍しいことじゃない、それだけが仕事ではないのだから。

でも……3日も誰にも何も言わずに居なくなるというのは、明らかにおかしい。

しかも、ジムリーダーをやってる三つ子はレストランを経営してるのだ、店を放っておくのは余計におかしい。

そう思い、僕は昨日街の人達に色々と話を聞いたのだが……ある情報、耳に入った。

なんでも、この街に暮らしてるマコモ博士というポケモン博士と、ジムリーダー達が夢の跡地と呼ばれる場所に行くのを、見た人が居るそうだ。

しかも、マコモ博士は今から4日前、つまり三つ子が居なくなった前日に行ったというのだから、妙に引かかる。

——何かあったのではないか、そんな考えが僕の中で生まれた

確認する意味はあるかもしれない、そう思い僕は立ち上がる。

「レイジさん？」

「……ちょっと、出掛けてくるよ」

「出掛けるって……どこにですか？」

「ん……夢の跡地って場所に」

「夢の跡地ですが……あの、あたしも一緒に行ってもいいですか？
そこには、ムンナってポケモンが出るらしいから……ちょっと見てみたいなって」

「うん……いいよ」

一瞬迷ったが、ここで下手に自分の考えを告げてトウコを不安がらせる必要もないだろう。

きっと大丈夫だ、自分に言い聞かせて僕は頷きを返す。

……さて、と。

僕の当たってほしくない時の勘は、的中率が高いけど……どうかな。

少し不安を抱きつつ、僕はトウコと一緒にポケモンセンターを後にする。

目指すは夢の跡地、このサンヨウシティの東にある古ぼけた工場跡。どうか自分の考えが当たっていませんように、そう思いながら僕達は夢の跡地へと向かったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6367o/>

ポケットモンスター ～The Legend of Master～

2011年10月8日04時44分発行